

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第608集

お ろ せ お ろ せ
下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊)

2013

国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡 発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊)



遺跡遠景 (1)



遺跡遠景 (2)



旧石器時代石器出土状況



縄文時代竪穴住居・近世掘立柱建物



石刃石器群Ⅰ群



石刃石器群Ⅱ群

单体石器 (1)



尖頭器石器群Ⅰ群



尖頭器石器群Ⅲ群

単体石器 (2)



細石刃石器群Ⅰ群



細石刃石器群Ⅱ群

単体石器 (3)



sh28



sh29

接合石器 (1)



sh35



sh49

接合石器 (2)



rsh1



sh18a

接合石器 (3)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、胆沢ダム建設事業に関連して、平成19～21年度に発掘調査を実施した下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡の成果をまとめたものです。調査の結果、後期旧石器時代の石器製作跡と近世の集落跡が複合する遺跡であることが確認され、往時の様々な環境を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

1. 本報告書は、奥州市胆沢区若柳字東下嵐江11ほかに所在する下嵐江Ⅰ遺跡、同区若柳字東下嵐江35ほかに所在する下嵐江Ⅱ遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
下嵐江Ⅰ遺跡 遺跡番号：NE31-0084 遺跡略号：OSⅠ
下嵐江Ⅱ遺跡 遺跡番号：NE31-0096 遺跡略号：OSⅡ
3. 調査は、胆沢ダム建設事業に伴う緊急発掘調査である。国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(当時)が委託を受け、受託事業として実施した。
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
＜平成19年度調査＞ 面積：100㎡ 期間：平成19年8月24日～11月15日
担当者：文化財専門員 濱田 宏 文化財調査員 木戸口俊子
＜平成20年度調査＞ 面積：3,574㎡ 期間：平成20年4月11日～9月25日
担当者：文化財調査員 村木 敬 期限付調査員 藤田 祐
＜平成21年度調査＞ 面積：5,690㎡ 期間：平成21年4月10日～10月30日
担当者：文化財調査員 村木 敬 期限付調査員 藤田 祐
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。
＜平成19年度調査＞ 期間：平成19年11月1日～平成19年11月30日 担当者：濱田 宏
＜平成20年度調査＞ 期間：平成20年11月1日～平成21年3月31日 担当者：村木 敬
藤田 祐
＜平成21年度調査＞ 期間：平成21年11月1日～平成22年3月31日 担当者：村木 敬
藤田 祐
＜平成22年度調査＞ 期間：平成22年4月1日～平成23年3月31日 担当者：村木 敬
＜平成23年度調査＞ 期間：平成23年4月1日～平成24年3月30日 担当者：村木 敬
6. 本報告書は、第Ⅰ章は国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所に依頼している。
第Ⅱ～Ⅴ・Ⅶ章の執筆及び全体の編集は村木が行っている。
7. 各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。下記の分析結果は第2分冊の附編に収録している。
石材鑑定：花崗岩研究会
テフラ・花粉・植物珪酸体分析：株式会社 火山灰考古学研究所
C14年代測定：株式会社 加速器分析研究所
石器実測：株式会社 ラング
遺構デジタル図化・遺物実測図編集：株式会社 セビアス
鉄滓成分分析・鉄製品保存処理：JFEテクノリサーチ株式会社
黒曜石産地同定：株式会社 第四紀地質研究所
8. 基準杭は、平成19年度調査の際に株式会社中央測量設計に委託している。翌年度以降もそれを使用し、震災後も継続して用いている。
9. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った(順不同、敬称略)。
佐藤嘉広、吉田 充、菊池強一、佐々木いく子、朴沢志津江、阿部朝衛、坂本尚史、直江康雄、

鈴木宏行、武田良夫、鹿又喜隆、宇井義典、山崎芳春、西田昌弘、森先一貴、山田和史、佐藤宏之、岩瀬 彬、加藤博文、長沼 正樹、山田しょう、鈴木建治、熊谷仁志、伊藤みどり、夏木大吾

10. 野外調査では奥州市胆沢区の方々にご協力いただいた。
11. 本遺跡の調査成果は、当センター主催の遺跡報告会、奥州市遺跡報告会、東北日本の旧石器文化を語る会、考古学ジャーナルなどで公表しているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
13. 本報告書の遺構番号は、調査時と異なる番号を付与している。変更点は以下の通りであるが、これに伴い注記等に変更していない。

遺構名新旧対応表

新	旧	新	旧	新	旧
SK 1	SK04	SK10	SK14	SK21	SK25
SK 2	SK06	SK11	SK15	SK22	SK27
SK 3	SK06	SK12	SK16	SK23	SX11
SE 1	SK09	SK13	SK17	SX 1	SX02
SE 2	SK10	SK14	SK18	SX 2	SX03
SK 4	SK01	SK15	SK19	SX 3	SX04
SK 5	SK03	SK16	SK20	SX 4	SX05
SK 6	SK08	SK17	SK21	SX 5	SX06
SK 7	SK11	SK18	SK22	SX 6	SX07
SK 8	SK12	SK19	SK23	SX 7	SX10
SK 9	SK13	SK20	SK24		

目 次

第 1 分 冊

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の概要	2
1 遺跡の位置・立地	2
2 地理的環境	2
3 歴史的環境	4
4 周辺の遺跡	6
III 野外調査・室内整理	8
1 野外調査	8
2 室内整理	9
3 調査経過	9
4 啓蒙普及活動	9
5 凡 例	9
IV 基本層序	11
V 検出された遺構と遺物	16
1 概 要	16
2 旧石器時代	16
3 縄文時代	411
4 近世以降	421
5 自然科学分析成果	493
VI 総 括	494
1 旧石器時代の遺構・遺物	494
2 縄文時代の遺構・遺物	515
3 近世の遺構・遺物	516
4 ま と め	518

第 2 分 冊

観 察 表 一 覧

附 編 自 然 科 学 分 析 成 果

写 真 図 版

報 告 書 抄 録

図 版 目 次

第 1 図	遺跡位置図……………	3	第33図	石器集中区 7 母岩別出土状況図 (2)……………	52
第 2 図	調査区内層序……………	5	第34図	石器集中区 7 母岩別出土状況図 (3)……………	53
第 3 図	周辺の遺跡……………	7	第35図	石器集中区 7 出土遺物 (1)……………	54
第 4 図	グリッド配置図……………	8	第36図	石器集中区 7 出土遺物 (2)……………	55
第 5 図	凡例……………	10	第37図	石器集中区 7 出土遺物 (3)……………	56
第 6 図	旧石器時代～近世遺構配置図……………	13	第38図	石器集中区 7 出土遺物 (4)……………	57
第 7 図	旧石器時代遺物分布図……………	14	第39図	石器集中区 7 出土遺物 (5)……………	58
第 8 図	縄文～近世遺構配置図……………	15	第40図	石器集中区 7 出土遺物 (6)……………	59
第 9 図	旧石器時代調査試掘坑配置図……………	16	第41図	石器集中区 7 出土遺物 (7)……………	60
第10図	石器集中区 1 石器・器種別出土状況図……………	26	第42図	石器集中区 7 出土遺物 (8)……………	61
第11図	石器集中区 1 母岩別出土状況図……………	27	第43図	石器集中区 7 出土遺物 (9)……………	62
第12図	石器集中区 1 出土遺物 (1)……………	28	第44図	石器集中区 7 出土遺物 (10)……………	63
第13図	石器集中区 1 出土遺物 (2)……………	29	第45図	石器集中区 7 出土遺物 (11)……………	64
第14図	石器集中区 1 出土遺物 (3)……………	30	第46図	石器集中区 7 出土遺物 (12)……………	65
第15図	石器集中区 1 出土遺物 (4)……………	31	第47図	石器集中区 7 出土遺物 (13)……………	66
第16図	石器集中区 1 出土遺物 (5)……………	32	第48図	石器集中区 7 出土遺物 (14)……………	67
第17図	石器集中区 2 石器出土状況図……………	34	第49図	石器集中区 7 出土遺物 (15)……………	68
第18図	石器集中区 2 器種・母岩別出土状況図……………	35	第50図	石器集中区 7 出土遺物 (16)……………	69
第19図	石器集中区 2 出土遺物 (1)……………	36	第51図	石器集中区 7 出土遺物 (17)……………	70
第20図	石器集中区 2 出土遺物 (2)……………	37	第52図	石器集中区 7 出土遺物 (18)……………	71
第21図	石器集中区 3 石器出土状況図……………	38	第53図	石器集中区 8 石器出土状況図……………	73
第22図	石器集中区 3 器種・母岩別出土状況図……………	39	第54図	石器集中区 8 器種別出土状況図……………	74
第23図	石器集中区 4 石器・器種・母岩別 出土状況図……………	40	第55図	石器集中区 8 母岩別出土状況図 (1)……………	75
第24図	石器集中区 4 出土遺物……………	41	第56図	石器集中区 8 母岩別出土状況図 (2)……………	76
第25図	石器集中区 5 石器出土状況図……………	43	第57図	石器集中区 8 出土遺物 (1)……………	78
第26図	石器集中区 5 器種・母岩別出土状況図……………	44	第58図	石器集中区 8 出土遺物 (2)……………	79
第27図	石器集中区 6 石器出土状況図……………	45	第59図	石器集中区 8 出土遺物 (3)……………	80
第28図	石器集中区 6 器種・母岩別出土状況図……………	46	第60図	石器集中区 8 出土遺物 (4)……………	81
第29図	石器集中区 5・6 出土遺物……………	47	第61図	石器集中区 8 出土遺物 (5)……………	82
第30図	石器集中区 7 石器出土状況図……………	49	第62図	石器集中区 8 出土遺物 (6)……………	83
第31図	石器集中区 7 器種別出土状況図……………	50	第63図	石器集中区 8 出土遺物 (7)……………	84
第32図	石器集中区 7 母岩別出土状況図 (1)……………	51	第64図	石器集中区 8 出土遺物 (8)……………	85
			第65図	石器集中区 8 出土遺物 (9)……………	86

第66図	石器集中区8出土遺物(10)……………87	第105図	石器集中区12出土遺物(23)……………132
第67図	石器集中区8出土遺物(11)……………88	第106図	石器集中区12出土遺物(24)……………133
第68図	石器集中区9石器出土状況図……………90	第107図	石器集中区12出土遺物(25)……………134
第69図	石器集中区9器種・母岩別出土状況図…91	第108図	石器集中区12出土遺物(26)……………135
第70図	石器集中区10石器・器種・母岩別 出土別状況図……………93	第109図	石器集中区12出土遺物(27)……………136
第71図	石器集中区9・10出土遺物……………94	第110図	石器集中区12出土遺物(28)……………137
第72図	石器集中区11石器出土状況図……………96	第111図	石器集中区12出土遺物(29)……………138
第73図	石器集中区11器種別出土状況図……………97	第112図	石器集中区12出土遺物(30)……………139
第74図	石器集中区11母岩別出土状況図……………98	第113図	石器集中区12出土遺物(31)……………140
第75図	石器集中区11出土遺物(1)……………99	第114図	石器集中区13石器出土状況図・ 出土遺物……………142
第76図	石器集中区11出土遺物(2)……………100	第115図	石器集中区13器種・母岩別 出土状況図……………143
第77図	石器集中区11出土遺物(3)……………101	第116図	石器集中区14石器出土状況図……………145
第78図	石器集中区11出土遺物(4)……………102	第117図	石器集中区14器種別出土状況図(1)…146
第79図	石器集中区11出土遺物(5)……………103	第118図	石器集中区14器種別出土状況図(2)…147
第80図	石器集中区12石器・器種別 出土状況図……………105	第119図	石器集中区14母岩別出土状況図(1)…148
第81図	石器集中区12母岩別出土状況図 (1-1)……………106	第120図	石器集中区14母岩別出土状況図 (2-1)……………149
第82図	石器集中区12母岩別出土状況図 (1-2)……………107	第121図	石器集中区14母岩別出土状況図 (2-2)……………150
第83図	石器集中区12出土遺物(1)……………108	第122図	石器集中区14母岩別出土状況図 (2-3)……………151
第84図	石器集中区12出土遺物(2)……………109	第123図	石器集中区14母岩別出土状況図 (3-1)……………152
第85図	石器集中区12出土遺物(3)……………110	第124図	石器集中区14母岩別出土状況図 (3-2)……………153
第86図	石器集中区12出土遺物(4)……………111	第125図	石器集中区14出土遺物(1)……………154
第87図	石器集中区12出土遺物(5)……………112	第126図	石器集中区14出土遺物(2)……………155
第88図	石器集中区12出土遺物(6)……………113	第127図	石器集中区14出土遺物(3)……………156
第89図	石器集中区12出土遺物(7)……………114	第128図	石器集中区14出土遺物(4)……………157
第90図	石器集中区12出土遺物(8)……………115	第129図	石器集中区14出土遺物(5)……………158
第91図	石器集中区12出土遺物(9)……………116	第130図	石器集中区14出土遺物(6)……………159
第92図	石器集中区12出土遺物(10)……………117	第131図	石器集中区14出土遺物(7)……………160
第93図	石器集中区12出土遺物(11)……………118	第132図	石器集中区14出土遺物(8)……………162
第94図	石器集中区12出土遺物(12)……………119	第133図	石器集中区14出土遺物(9)……………163
第95図	石器集中区12出土遺物(13)……………120	第134図	石器集中区14出土遺物(10)……………164
第96図	石器集中区12出土遺物(14)……………121	第135図	石器集中区14出土遺物(11)……………165
第97図	石器集中区12出土遺物(15)……………122	第136図	石器集中区14出土遺物(12)……………166
第98図	石器集中区12出土遺物(16)……………124	第137図	石器集中区14出土遺物(13)……………168
第99図	石器集中区12出土遺物(17)……………125	第138図	石器集中区14出土遺物(14)……………169
第100図	石器集中区12出土遺物(18)……………126	第139図	石器集中区14出土遺物(15)……………171
第101図	石器集中区12出土遺物(19)……………127	第140図	石器集中区14出土遺物(16)……………173
第102図	石器集中区12出土遺物(20)……………128		
第103図	石器集中区12出土遺物(21)……………129		
第104図	石器集中区12出土遺物(22)……………130		

第141図	石器集中区14出土遺物 (17)……………	174	第180図	石器集中区17出土遺物 (24)……………	216
第142図	石器集中区14出土遺物 (18)……………	176	第181図	石器集中区17出土遺物 (25)……………	218
第143図	石器集中区14出土遺物 (19)……………	177	第182図	石器集中区17出土遺物 (26)……………	219
第144図	石器集中区15石器出土状況図 ……	179	第183図	石器集中区17出土遺物 (27)……………	220
第145図	石器集中区15器種・母岩別 出土状況図 ……	180	第184図	石器集中区17出土遺物 (28)……………	221
第146図	石器集中区16石器出土状況図 ……	181	第185図	石器集中区17出土遺物 (29)……………	222
第147図	石器集中区16器種別出土状況図 ……	182	第186図	石器集中区17出土遺物 (30)……………	223
第148図	石器集中区16母岩別出土状況図 ……	183	第187図	石器集中区17出土遺物 (31)……………	224
第149図	石器集中区16出土遺物 ……	184	第188図	石器集中区17出土遺物 (32)……………	225
第150図	石器集中区17石器出土状況 ……	185	第189図	石器集中区17出土遺物 (33)……………	226
第151図	石器集中区17器種別出土状況図 ……	186	第190図	石器集中区17出土遺物 (34)……………	227
第152図	石器集中区17母岩別出土状況図(1)…	187	第191図	石器集中区18石器出土状況図 ……	229
第153図	石器集中区17母岩別出土状況図 (2-1) ……	188	第192図	石器集中区18器種別出土状況図(1)…	230
第154図	石器集中区17母岩別出土状況図 (2-2) ……	189	第193図	石器集中区18器種別出土状況図(2)…	231
第155図	石器集中区17母岩別出土状況図 (2-3) ……	190	第194図	石器集中区18母岩別出土状況図(1)…	232
第156図	石器集中区17母岩別出土状況図(3)…	191	第195図	石器集中区18母岩別出土状況図(2)…	233
第157図	石器集中区17出土遺物 (1) ……	193	第196図	石器集中区18母岩別出土状況図 (3-1) ……	234
第158図	石器集中区17出土遺物 (2) ……	194	第197図	石器集中区18母岩別出土状況図 (3-2) ……	235
第159図	石器集中区17出土遺物 (3) ……	195	第198図	石器集中区18母岩別出土状況図 (3-3) ……	236
第160図	石器集中区17出土遺物 (4) ……	196	第199図	石器集中区18母岩別出土状況図 (4-1) ……	237
第161図	石器集中区17出土遺物 (5) ……	197	第200図	石器集中区18母岩別出土状況図 (4-2) ……	238
第162図	石器集中区17出土遺物 (6) ……	198	第201図	石器集中区18母岩別出土状況図 (5-1) ……	239
第163図	石器集中区17出土遺物 (7) ……	199	第202図	石器集中区18母岩別出土状況図 (5-2) ……	240
第164図	石器集中区17出土遺物 (8) ……	200	第203図	石器集中区18母岩別出土状況図 (5-3) ……	241
第165図	石器集中区17出土遺物 (9) ……	201	第204図	石器集中区18母岩別出土状況図(6) …	242
第166図	石器集中区17出土遺物 (10)……………	202	第205図	石器集中区18母岩別出土状況図(7) …	243
第167図	石器集中区17出土遺物 (11)……………	203	第206図	石器集中区18母岩別出土状況図(8) …	244
第168図	石器集中区17出土遺物 (12)……………	204	第207図	石器集中区18母岩別出土状況図(9) …	245
第169図	石器集中区17出土遺物 (13)……………	205	第208図	石器集中区18母岩別出土状況図(10)…	246
第170図	石器集中区17出土遺物 (14)……………	206	第209図	石器集中区18母岩別出土状況図(11)…	247
第171図	石器集中区17出土遺物 (15)……………	207	第210図	石器集中区18母岩別出土状況図(12)…	248
第172図	石器集中区17出土遺物 (16)……………	208	第211図	石器集中区18出土遺物 (1) ……	250
第173図	石器集中区17出土遺物 (17)……………	209	第212図	石器集中区18出土遺物 (2) ……	251
第174図	石器集中区17出土遺物 (18)……………	210	第213図	石器集中区18出土遺物 (3) ……	252
第175図	石器集中区17出土遺物 (19)……………	211	第214図	石器集中区18出土遺物 (4) ……	253
第176図	石器集中区17出土遺物 (20)……………	212			
第177図	石器集中区17出土遺物 (21)……………	213			
第178図	石器集中区17出土遺物 (22)……………	214			
第179図	石器集中区17出土遺物 (23)……………	215			

第297図	石器集中区20出土遺物 (5) ……………	358	第334図	石器集中区外出土遺物 (3) ……………	401
第298図	石器集中区20出土遺物 (6) ……………	359	第335図	石器集中区外出土遺物 (4) ……………	402
第299図	石器集中区20出土遺物 (7) ……………	360	第336図	石器集中区外出土遺物 (5) ……………	403
第300図	石器集中区20出土遺物 (8) ……………	361	第337図	石器集中区外出土遺物 (6) ……………	404
第301図	石器集中区20出土遺物 (9) ……………	362	第338図	石器集中区外出土遺物 (7) ……………	405
第302図	石器集中区20出土遺物 (10)……………	364	第339図	石器集中区外出土遺物 (8) ……………	406
第303図	石器集中区20出土遺物 (11)……………	365	第340図	石器集中区外出土遺物 (9) ……………	407
第304図	石器集中区20出土遺物 (12)……………	366	第341図	石器集中区外出土遺物 (10)……………	408
第305図	石器集中区20出土遺物 (13)……………	367	第342図	石器集中区外出土遺物 (11)……………	409
第306図	石器集中区20出土遺物 (14)……………	368	第343図	石器集中区外出土遺物 (12)……………	410
第307図	石器集中区20出土遺物 (15)……………	369	第344図	SI 1・出土遺物 (1) ……………	412
第308図	石器集中区20出土遺物 (16)……………	370	第345図	SI 1・出土遺物 (2) ……………	413
第309図	石器集中区20出土遺物 (17)……………	371	第346図	SI 2・出土遺物 (1) ……………	415
第310図	石器集中区20出土遺物 (18)……………	372	第347図	SB 1、SK 1・2・3 ……………	417
第311図	石器集中区20出土遺物 (19)……………	373	第348図	遺構内出土遺物・ 遺構外出土遺物 (1) ……………	418
第312図	石器集中区20出土遺物 (20)……………	374	第349図	遺構外出土遺物 (2) ……………	419
第313図	石器集中区20出土遺物 (21)……………	375	第350図	遺構外出土遺物 (3) ……………	420
第314図	石器集中区20出土遺物 (22)……………	376	第351図	掘立柱建物跡エリア配置図 ……………	421
第315図	石器集中区20出土遺物 (23)……………	377	第352図	SB 2・3 ……………	424
第316図	石器集中区21石器出土状況図 ………	379	第353図	SB 4 ……………	425
第317図	石器集中区21器種別出土状況図 ………	380	第354図	SB 5・7 ……………	426
第318図	石器集中区21母岩別出土状況図 ………	381	第355図	SB 6・8・9 ……………	427
第319図	石器集中区21出土遺物 ……………	383	第356図	SB10 ……………	428
第320図	石器集中区22石器出土状況図 ………	384	第357図	SB11 ……………	429
第321図	石器集中区22器種・母岩別 出土状況図 ……………	385	第358図	SB12 ……………	430
第322図	石器集中区23石器出土状況図 ………	387	第359図	SB13 ……………	431
第323図	石器集中区23器種別出土状況図 ………	388	第360図	SB14・18 ……………	432
第324図	石器集中区23母岩別出土状況図 ………	389	第361図	SB15 ……………	433
第325図	石器集中区24石器・器種別 出土状況図 ……………	391	第362図	SB16・19 ……………	434
第326図	石器集中区24母岩別出土状況図・ 石器集中区23・24出土遺物 ……………	392	第363図	SB17・20 ……………	435
第327図	石器集中区25石器出土状況図 ………	393	第364図	SB21・23 ……………	436
第328図	石器集中区25器種・母岩別 出土状況図 ……………	394	第365図	SB22 ……………	437
第329図	石器集中区25出土遺物 ……………	395	第366図	SB24・25 ……………	438
第330図	石器集中区26石器・器種別 出土状況図 ……………	396	第367図	SB27 ……………	439
第331図	石器集中区26母岩別出土状況図・ 出土遺物 ……………	397	第368図	SB28 ……………	440
第332図	石器集中区外出土遺物 (1) ……………	399	第369図	SB26・29 ……………	441
第333図	石器集中区外出土遺物 (2) ……………	400	第370図	SB30・31 ……………	442
			第371図	SE 1・2、SK 4～7 ……………	445
			第372図	SK 8～15 ……………	447
			第373図	SK16～23 ……………	451
			第374図	SX 1～4 ……………	453
			第375図	SX 5、SN 1～5 ……………	455

第376図	SD 1	457	第397図	出土遺物 (11)	481
第377図	SD 2・3	458	第398図	出土遺物 (12)	482
第378図	柱穴分割設定図	459	第399図	出土遺物 (13)	483
第379図	柱穴分割図 (1)	460	第400図	出土遺物 (14)	484
第380図	柱穴分割図 (2)	461	第401図	出土遺物 (15)	485
第381図	柱穴分割図 (3)	462	第402図	出土遺物 (16)	486
第382図	柱穴分割図 (4)	463	第403図	出土遺物 (17)	487
第383図	柱穴分割図 (5)	464	第404図	出土遺物 (18)	488
第384図	柱穴分割図 (6)	465	第405図	出土遺物 (19)	489
第385図	柱穴分割図 (7)	466	第406図	出土遺物 (20)	490
第386図	柱穴分割図 (8)	467	第407図	出土遺物 (21)	491
第387図	出土遺物 (1)	471	第408図	出土遺物 (22)	492
第388図	出土遺物 (2)	472	第409図	産状計測分布図	494
第389図	出土遺物 (3)	473	第410図	スクレイパー刃部変形過程	503
第390図	出土遺物 (4)	474	第411図	荒川台技法に伴う剥離工程	507
第391図	出土遺物 (5)	475	第412図	石器群変遷図	510
第392図	出土遺物 (6)	476	第413図	石器材料産地分布図	512
第393図	出土遺物 (7)	477	第414図	段丘変遷図	514
第394図	出土遺物 (8)	478	第415図	近世陶磁器変遷図	516
第395図	出土遺物 (9)	479	第416図	近世下嵐江村復元図	517
第396図	出土遺物 (10)	480			

表 目 次

第1表	層位別石器組成表	17	第6表	掘立建物跡一覧表	422
第2表	石器集中区別石器組成表	18	第7表	黒曜石産地同定結果一覧	500
第3表	石器集中区別石器材料組成表	18	第8表	石器群別石器材料産地表	512
第4表	石器集中区別石器・石器材料組成表	19	第9表	岩手県における石器群編年表	515
第5表	母岩別資料石器組成表	22			

写真図版目次

巻頭図版1	遺跡遠景 (1)	巻頭図版6	単体石器 (2)
巻頭図版2	遺跡遠景 (2)	巻頭図版7	単体石器 (3)
巻頭図版3	旧石器時代石器出土状況	巻頭図版8	接合石器 (1)
巻頭図版4	縄文時代竪穴住居・近世掘立柱建物	巻頭図版9	接合石器 (2)
巻頭図版5	単体石器 (1)	巻頭図版10	接合石器 (3)

I 調査に至る経過

下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡は、「胆沢ダム建設事業」に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

胆沢ダムは、北上川右支川胆沢川に建設中の堤体高132m、堤頂長723m、総貯水容量1億4,300万 m^3 の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的には洪水調節・河川環境保全等のための流水確保・かんがい用水・水道用水・水力発電を有する多目的ダムである。

胆沢ダム建設事業は、平成2年5月11日に「胆沢ダムの建設に関する基本計画」が官報告示されて建設着手し、その後、平成12年6月14日に基本計画変更が官報告示され、事業費及び工期改定を行い現在に至っている（当初工期：平成11年度→変更工期：平成25年度）。

埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省（現国土交通省）新石淵ダム調査事務所（昭和63年4月に胆沢ダム工事事務所に組織改正）から、ダム事業区域内における埋蔵文化財の有無を岩手県教育委員会に照会し、周知地区864,000 m^2 、可能性有地区490,000 m^2 を確認した。その後は、水没面積4,400,000 m^2 を含む事業区域内における埋蔵文化財の包蔵地について、毎年度、各工事の実施に先立って岩手県教育委員会と協議を行いながら、計画的に調査を実施してきているところである。

胆沢ダム建設事業に関する下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡の埋蔵文化財調査は、ダム建設に伴う発生土仮置き場、付替市道尿前槻木平線の道路工事及び貯水池となり水没する区域について、事業の進捗にあわせて順次平成14年度より試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財は確認されず順調に工事を実施してきたところである。

平成19年度以降も平成19年3月22日付け国東整胆調設第29号（下嵐江Ⅰ・Ⅱ）及び平成20年4月17日付け国東整胆調設第8号（下嵐江Ⅰ）により、胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼を行い、岩手県教育委員会が下嵐江Ⅰを平成19年4月23日～4月24日及び平成20年4月30日、下嵐江Ⅱを平成19年7月23日にかけて試掘調査を実施した結果、近世の下嵐江番所に伴う掘立柱建物を構成する柱穴が複数基確認されたため、平成19年5月7日付け教生第191号、平成19年5月7日付け教生第191号及び平成20年5月16日付け教生第240号にて「発掘調査が必要」である旨、胆沢ダム工事事務所長に回答があった。

この回答に基づき岩手県教育委員会と協議し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託して発掘調査を実施することとなったものである。

（国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所）

Ⅱ 遺跡の概要

1 遺跡の位置・立地

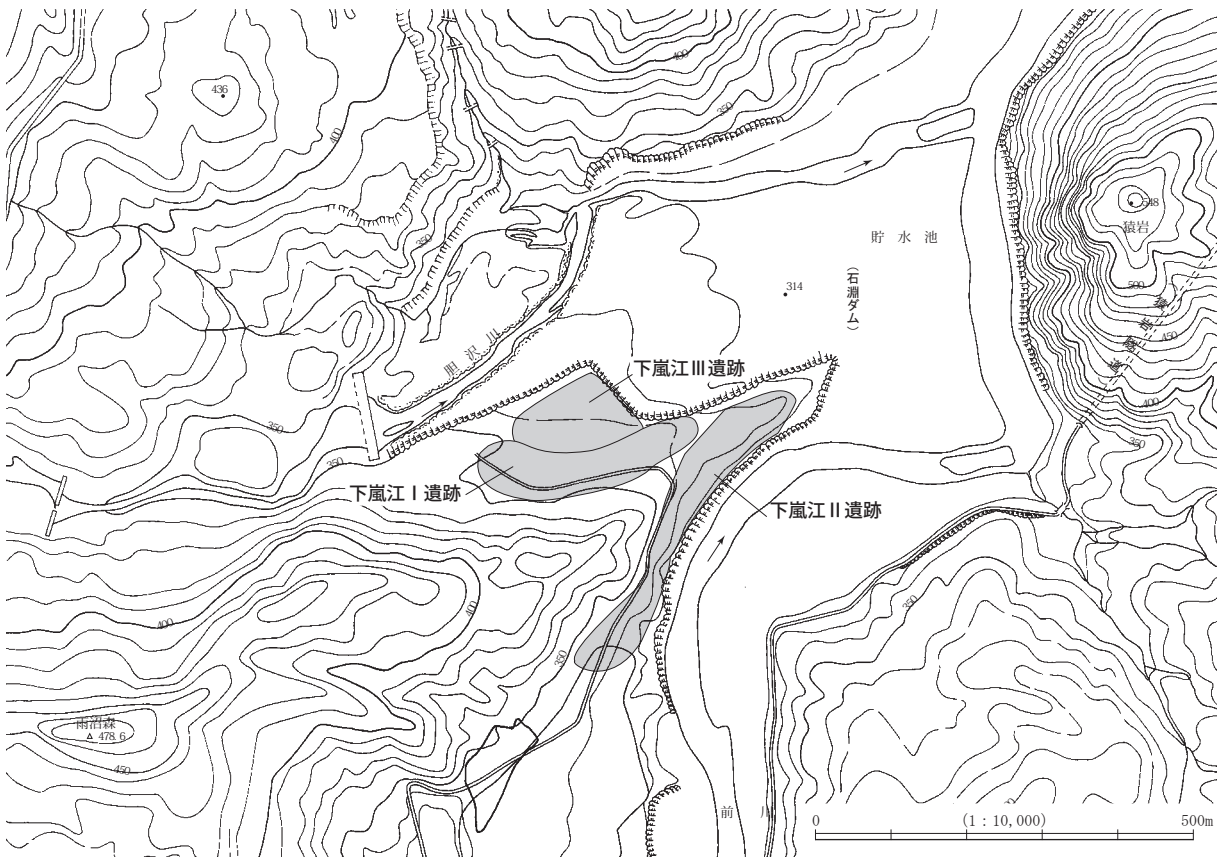
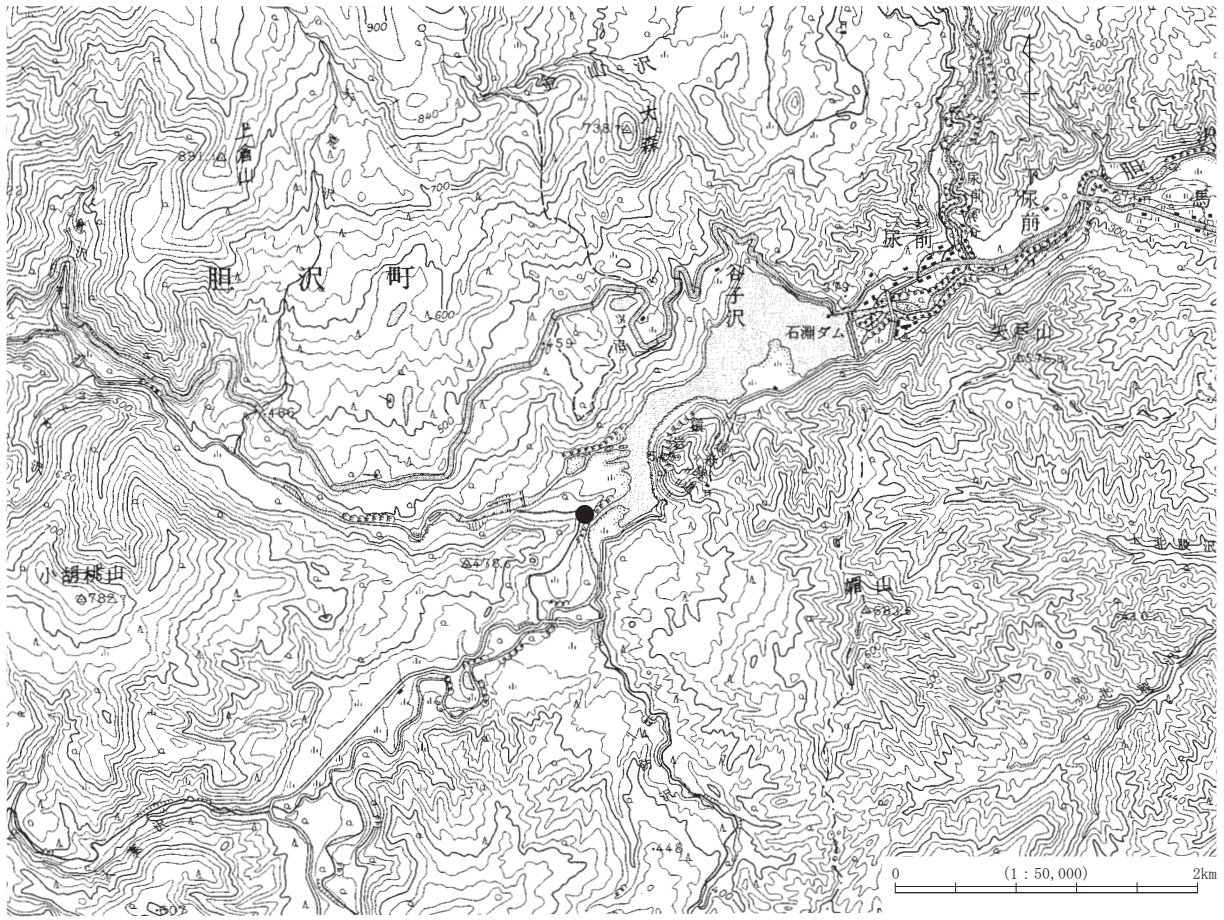
下嵐江Ⅰ遺跡、下嵐江Ⅱ遺跡は、奥州市胆沢区若柳字東下嵐江地区に所在しており、石淵ダムの上流2kmに位置している。北側には胆沢川、南側には前川が流れ、遺跡は両河川の合流付近へと張り出した標高約345mの段丘上に形成されている。この対岸には名勝猿岩を望む。現河床との比高は30m前後である。段丘の先端部には下嵐江Ⅱ遺跡、その内陸部には下嵐江Ⅰ遺跡が位置し、互いに隣接している。両遺跡は、国土地理院発行の1:50,000「焼石岳」(NJ-54-20-2)の図幅に含まれ、北緯39度6分11秒、東経140度52分55秒付近にある。

本遺跡は胆沢ダム建設事業に伴う発掘調査であるが、当該事業は平成5年より開始され、現在まで12遺跡の調査が行われている。これらの調査履歴については、『坪測Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(木戸口ほか2010)にまとめられているので参照願いたい。本調査は、胆沢ダム建設事業の終盤に行われたものである。

2 地理的環境

遺跡が所在する奥州市には、市野々付近を扇頂とした胆沢扇状地が広がっている。胆沢扇状地は、最上位にある一首坂段丘から河岸低地へと、複数の段丘が南から北へ向かって標高を減じながら階段状に形成されている。これらの段丘は、中川久夫(中川ほか1963)をはじめとする多くの研究者によって、テフラとの関係が捉えられた結果、段丘発達や扇状地形成の解明が進められている。そのなかでも渡辺が胆沢段丘とテフラの堆積関係を把握したことにより、胆沢扇状地の形成過程及び各段丘面の年代において一定の基準が得られている(渡辺1991)。このように胆沢扇状地については理解が進む中、胆沢扇状地の付け根に当たる石淵ダム付近から南西方向は依然として解明されていない。地理的環境や段丘形成を扱う論考は極めて少なく、胆沢扇状地とダムより南西方向に形成された段丘との対比については殆ど行われていないのが現状である。唯一、斎藤享治(1978)によってまとめられており、胆沢扇状地との対比を可能としている。胆沢ダムより南東方向の段丘を高位よりⅠ～Ⅲ面・下嵐江段丘面と4区分し、下嵐江段丘面に限っては水沢高位段丘に連続すると捉えている。この論考における下嵐江段丘面の定義は、前川の左岸に形成されている段丘面であり、テフラを載せないものとしている。掲載されている図から判断すると、遺跡は下嵐江段丘に相当するようである。しかし、発掘調査の結果、上記の定義とは異なり本段丘面には複数のテフラが降下していることが明らかとなった。このように本段丘の解釈にあたり改めて検討が必要となったことから、遺跡周辺の踏査を複数回を行い地理的環境の把握を試みている。以下には、踏査結果である本段丘面の形成過程についてまとめておく。

遺跡は、小胡桃山から北東方向に走る舌状を呈した河岸段丘の突端部に位置している。この河岸段丘は南西部の丘陵部から段丘縁辺部へと徐々に標高を下げていく。調査区内においては南西から北東方向へと下っており、その比高は5m前後である。また、この段丘上には胆沢川とほぼ平行して自然堤防が形成され、調査区内ではBⅡ・Ⅲグリッドの境まで確認できている。さらに、それは調査区外の西方向へと伸びていくことが地形図から読み取れる。この自然堤防は、基本的には突端部へと下る緩斜面とその頭頂部から南側に形成される緩斜面からなり、これらの中には比較的小範囲の平坦面が



第1図 遺跡位置図

認められている。

ここでは土層堆積と段丘形成との関係を捉えられたことからまとめておきたい。一見すると、段丘の地形は同一地形のようにも見受けられるが、第2図に示しているように地点毎で堆積層序が異なることを確認している。基本的な傾向として、頭頂部とそれ以外では堆積の様相が大きく異なる。頭頂部付近では表土除去後には礫面が露出するか、上層に堆積するⅡ層とⅢ層の堆積は極めて薄い。またその南側では、粘土層が連続して堆積する範囲と各粘土層に洪水堆積層を介在する範囲が存在している。この洪水堆積層は堆積過程中において軽微な不整合を示しており、それより上位の堆積層序に違いが認められる。この洪水堆積層が段丘形成要因となることから、その軽微な不整合を確認できる箇所を段丘区分を捉えておく。その結果、段丘面は4面によって形成されており、それぞれの面の基盤を成す層序が明らかとなった。これらの段丘面は、下位から1～4面と呼称している。それぞれ、1面はⅡ層、2面はⅢ層、3面はⅣ層、4面はⅤ層堆積以前の基盤を成している。各段丘の形成時期については、1面は詳細不明だが、2面はAs-YP降灰以前、3面はAT降灰以前、4面はTo-Of降灰以前であることが捉えられた。これを胆沢扇状地の段丘面に対比させると、1面はL2面、2面はL1l面、3面はL1m面、4面はL1h面に相当することになる。この本段丘面と胆沢扇状地の対比については、菊池強一氏と現地において度重なる協議を踏まえた結果である。詳細な記載に関しては第2分冊附編に記載している。

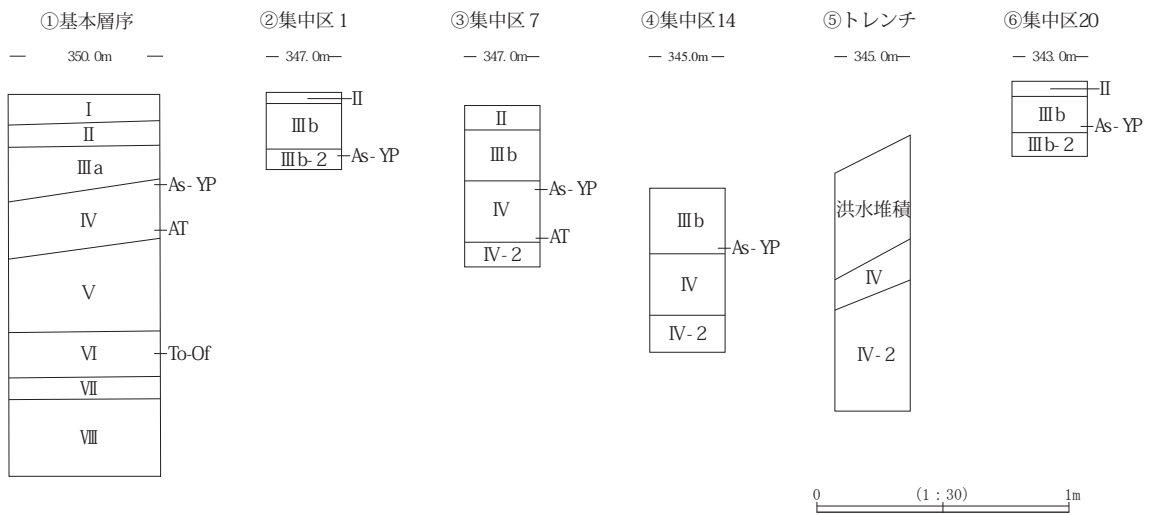
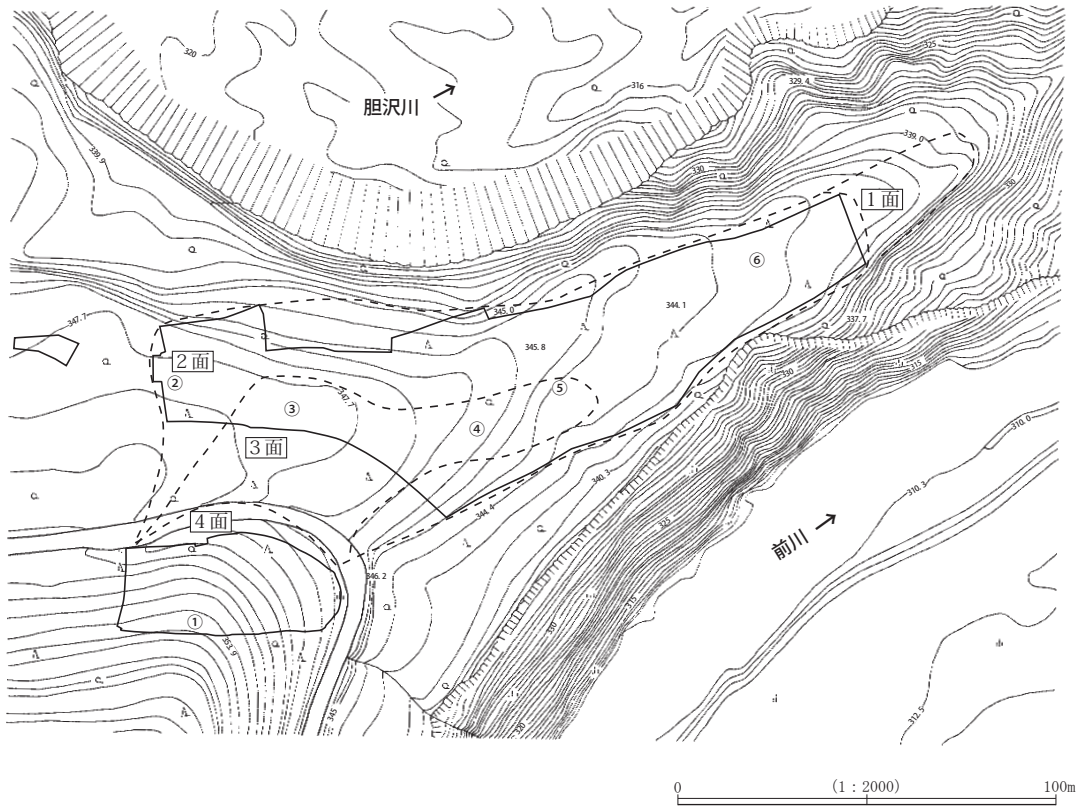
このようにⅤ層堆積以降、洪水堆積層が各層の基盤を形成していることが把握できた。さらに、この段丘構成する礫層は、礫層の産状計測により、胆沢川から前川へ古流向を示していることが判明した。このことは河床高が胆沢川の方が前川より高いことから裏付けられる。本段丘は胆沢川の氾濫の度に、自然堤防を形成しながら北東方向へと発達し、現況に近づいていったと考えられる。

3 歴史的環境

遺跡が所在する下嵐江地区は、『風土記御用書出』などに「嵐江」という地名でみることができる。そこには下嵐江屋敷と言われる複数の建物と問屋(トヤ)が建ち並び、街道筋の宿駅として栄えていたようである。

当該地区には、岩手県と秋田県を結ぶ主要な交通路である旧仙北街道が通り、古代以降の人々によってそれは利用されている。特に、江戸時代には仙台藩と秋田藩を結ぶ街道として、人のみならず各特産品が行き来していた。この地は仙台藩の北端に位置し、旧仙北街道における山際の最後の集落であることから、御境番所が置かれていた。しかし、御境番所の存続期間は短く、寛文3年(1663)には正式に市野々へと移転している。創設時期については定かではないが、短期間置かれていたことは確かなことから、当該地区が重要な役割を担っていたといえよう。

当該地区一帯は、交通の要衝としてだけでなく、産業や宗教面からも歴史的背景を窺える。産業面では仙台藩の鉾山として操業されていたことである。この仙台藩の鉾山は、江戸時代前半に金もしくは銀山、さらに中期には鉛鉾山化などの操業が挙げられる。前半期は繁栄していたものの、中期以降には衰退の一途を辿っていく。この鉾山において、採掘していた鉾物については諸説あるようだが、少なからず鉛鉾山として操業されていた時期が存在していたことは、今回の調査成果からも裏付けられている。このように江戸時代前半から中期にかけて藩鉾山地帯であったことから、操業時には賑わいを見せていたことは容易に想像がつこう。また、宗教面ではキリシタン禁制に伴う神父カルバリオの捕縛行為が挙げられる。江戸時代前半、神父カルバリオは後藤寿庵の居館からオロシヨウ(下嵐江)



第2図 調査区内層序

の谷に逃避している。その後、キリシタンにより隠匿されつつ布教活動を行っていたものの、伊達政宗の命により捕縛される。神父カルバリオが潜伏した村の位置については特定できないが、鉾山地帯の下嵐江村と伝えられていることから、本地域を含めた一帯が概ね相当するものと思われる。このように当該地区一帯は社会的かつ宗教的側面からも少なからず激動の歴史の流れのなかで集落を形成していたことが捉えられる。

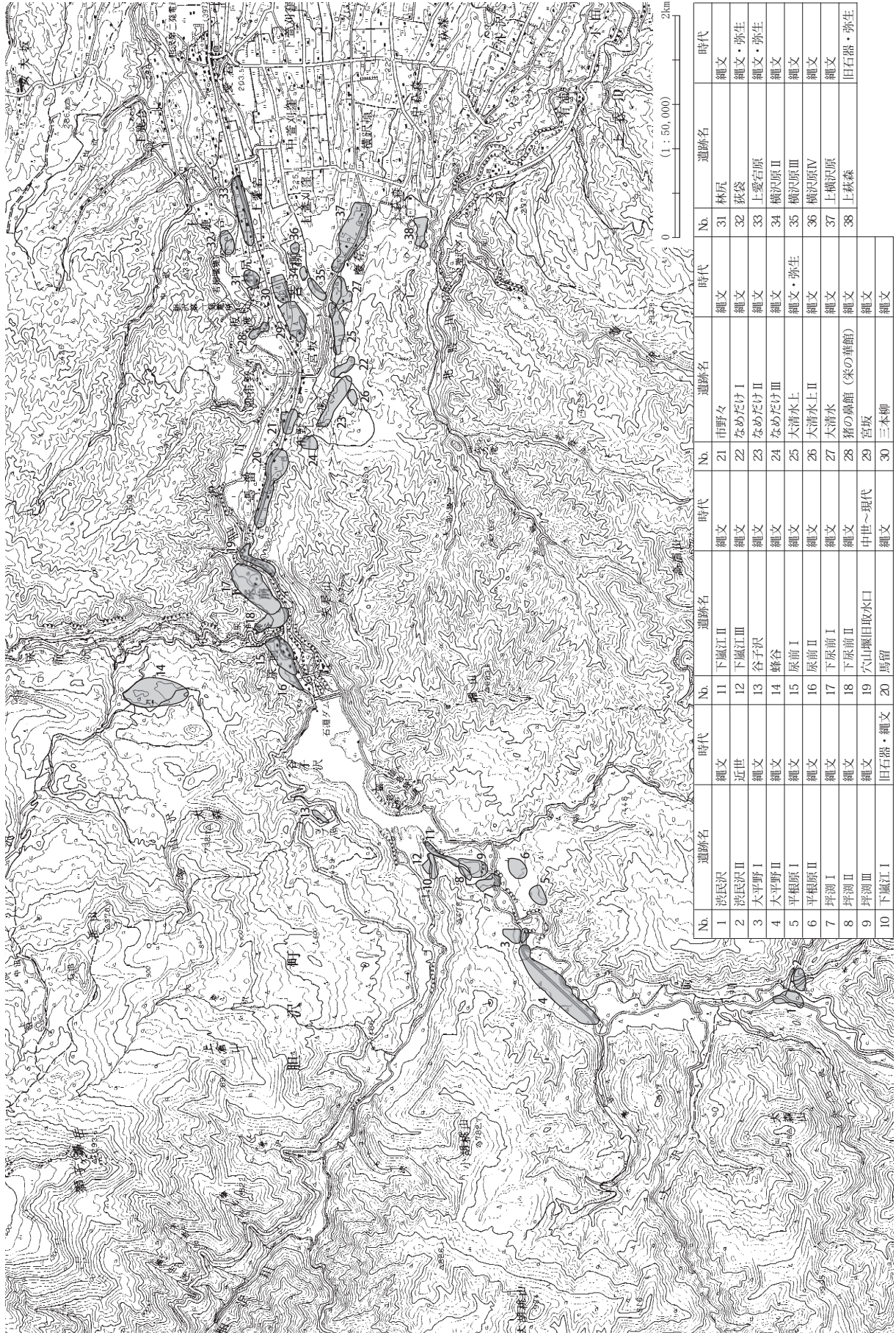
上述したような歴史的環境において、この地の中心的な役割を担っていたのが問屋(トヤ)の高橋家である。代々、人馬の継立及び物資の管理などを行い、一時的に番所が隣接されていた屋敷である。また、於呂閉志神社の別当を務めていた。江戸時代以降、この問屋を中心に形成された集落は、昭和の中頃まで営まれ続けたが、石淵ダム建設に伴い失われていく。

この「嵐江」という地名は、江戸時代以降には存在しており上記で述べたような資料などでその名を見ることができるが、地名の由来は不明である。由来は諸説あり、そのなかに、焼石連峰から吹き下ろす「嵐」に由来し、その文字が「下・嵐」に分かれて地名になったとの言われがある。

4 周辺の遺跡

奥州市胆沢区には185遺跡が登録されており、旧石器時代から近世までの遺跡が存在している。その概要は、『宮沢原下遺跡発掘調査報告書』(戸根ほか2008)、『坪淵Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(木戸口ほか2010)、『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』(濱田ほか2011)にまとめられているので、それらを参照願いたい。胆沢扇状地に分布する遺跡は、時代が下るにつれ高位から低位の段丘面へと生産活動の場を広げていくことが、基本的な傾向として捉えられている(村木2009)。また、胆沢扇状地より西側は不明な点が多いものの、その成果が徐々に明らかにされている(濱田ほか2011)。ここでは、当該調査事業に関わる遺跡の成果に限ってまとめておく。

周辺に位置する遺跡の多くは、旧石器時代、縄文時代及び近世に属する。旧石器時代は後期旧石器時代後半期以降を中心とした成果は本遺跡から得られている。その最終末になると本遺跡以外では大平野Ⅱ遺跡でも確認されるようになる。縄文時代は早期、前期、中期末～晩期に分けられる。早期にかけての遺物は下尿前Ⅱ遺跡、尿前Ⅱ遺跡、大平野Ⅱ遺跡、坪淵Ⅱ遺跡で散見されている。住居跡などは下尿前Ⅱ遺跡で確認されている。前期の代表的な例としては国指定史跡である大清水上遺跡があり、大形住居の環状集落が確認されている。中期末～晩期には大平野Ⅱ遺跡、尿前Ⅱ遺跡、下尿前Ⅱ遺跡等があり、小規模な集落が捉えられている。その他に、これ以降の古代から中世の遺跡は殆ど認められない。近世は本遺跡以外に穴山堰遺跡がある。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	渡民沢	縄文	11	下嵐江Ⅱ	縄文	21	巾野々	縄文	31	林尻	縄文
2	渡民沢Ⅱ	近世	12	下嵐江Ⅲ	縄文	22	なめだけⅠ	縄文	32	荻袋	縄文・弥生
3	大平野Ⅰ	縄文	13	谷子沢	縄文	23	なめだけⅡ	縄文	33	上愛右原	縄文・弥生
4	大平野Ⅱ	縄文	14	峰谷	縄文	24	なめだけⅢ	縄文	34	横沢原Ⅱ	縄文
5	平根原Ⅰ	縄文	15	尿前Ⅰ	縄文	25	大清水上	縄文・弥生	35	横沢原Ⅲ	縄文
6	平根原Ⅱ	縄文	16	尿前Ⅱ	縄文	26	大清水上Ⅱ	縄文	36	横沢原Ⅳ	縄文
7	坪瀬Ⅰ	縄文	17	下尿前Ⅰ	縄文	27	大清水	縄文	37	上横沢原	縄文
8	坪瀬Ⅱ	縄文	18	下尿前Ⅱ	縄文	28	猪の鼻館(栄の華館)	縄文	38	上萩森	旧石器・弥生
9	坪瀬Ⅲ	縄文	19	穴山堰旧取水口	中世～現代	29	宮坂	縄文			
10	下嵐江Ⅰ	旧石器・縄文	20	馬留	縄文	30	三本柳	縄文			

第3図 周辺の遺跡

Ⅲ 野外調査・室内整理

1 野外調査

調査区は下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡を網羅するように、平面直角座標第Ⅹ系(世界測地系)を用いて設定した。大グリッドは西から東に向かってⅠ～Ⅴ、北から南に向かってⅠ～Ⅳとした。大グリッドは1辺が50m、小グリッドは各辺を10等分して1辺が5mになるように設定している。小グリッドは北西隅を1、北東隅10、南東隅を100としている。各グリッドは北西隅の杭名称による。

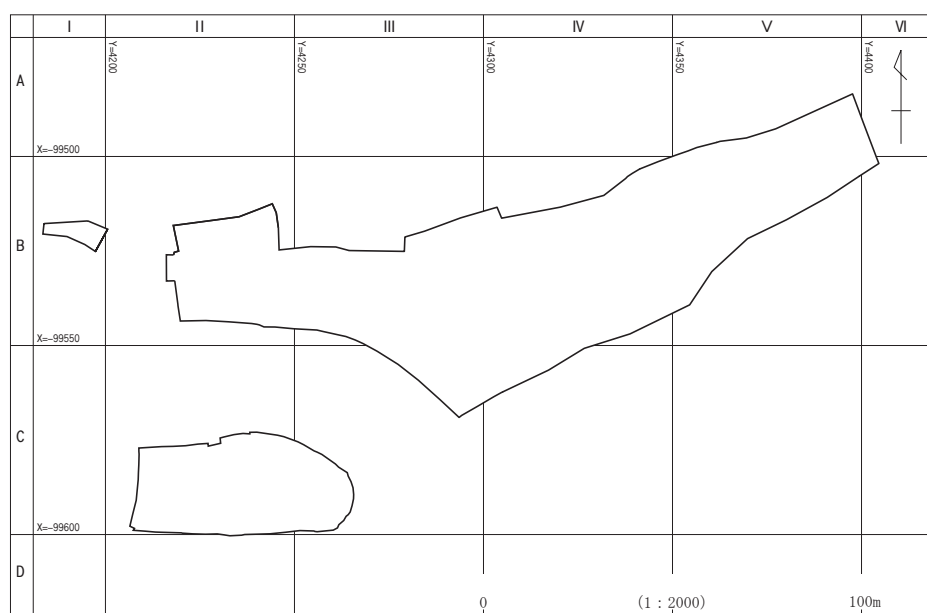
基準点要項	X	Y	Z		X	Y	Z
基 1	-99520.0	4350.0	344.170	補 2	-99540.0	4284.0	346.470
基 2	-99540.0	4240.0	347.640	補 3	-99590.0	4240.0	347.930
補 1	-99520.0	4350.0	344.170	補 4	-99590.0	4220.0	348.280

野外調査は、任意にトレンチを複数箇所を設定して、遺構検出面の確認を行った後、重機で検出面まで掘り下げた。遺構確認は鋤簾と両刃鎌を用いプランを把握し、検出遺構は通常の精査を行っている。それらの記録は台帳や野帳に記録している。

旧石器時代の調査は、検出作業中に確認できた範囲を中心に、グリッドを4分割した2.5mの区画を設定し、掘り下げている。遺物については、全点に番号を付与した後、「遺構くん」(CUBIC社製電子平板)を用い記録をしている。

縄文次時代以降の調査は、平面は「遺構くん」、断面及び微細図はデジタルカメラで撮影して図化している。また08年度分の柱穴と遺跡全体の地形測量については航空測量により図化している。

写真撮影は一眼レフデジタルカメラ、6×4.5cmを1台ずつ用い、遺構と遺物の検出状況に応じて撮影している。



第4図 グリッド配置図

2 室内整理

室内整理は、平成19年度から開始しているが、本格的な整理作業は平成20年度からである。作業工程と掲載基準は以下の通りである。出土遺物は注記・接合復元を行った後、掲載するための遺物を登録している。

遺構図版作成は、電子平板「遺構くん」で取得したデータを、委託業務において図版を作成している。複数回の校正を重ね、版下への工程を経ている。

遺構・遺物写真図版は共に、デジタルカメラで撮影したものをそのまま入校している。

旧石器以外の遺物は出土量が少ないことから、積極的に掲載している。土器は文様を確認できるもの、陶磁器は復元可能なものを中心に図化している。ただし、旧石器はtool類と接合資料の図化を優先している。特に、接合資料は時間内で可能な限り図化しているが、図化できなかった資料は写真掲載をしている。また、中国産磁器に関しては破片でも積極的に図化している。これら以外に確認されている近現代の資料については写真掲載をしている。

これらの縮尺は剥片石器・接合資料は1/2・2/3、礫石器は1/3・1/4、陶磁器・縄文土器は1/3、鉄製品・土製品・石製品・銭貨は1/2・1/3で掲載している。

3 調査経過

平成19年10月29日から下嵐江Ⅰ遺跡の調査開始。11月7日に委託者・県教育委員会・当センターにより終了確認を行い、100㎡を引き渡す。11月15日に撤収。

平成20年4月11日から下嵐江Ⅰ遺跡の調査開始。5月28日に部分終了確認を行い、74㎡を引き渡す。6月14日に岩手・宮城内陸地震が起り、発掘調査中断。6月18日にプレハブから器材を撤収する。7月29日より調査再開。8月8日に部分終了確認を行い、2,200㎡を引き渡す。10月3日に終了確認を行い、1,300㎡を引き渡す。本年度で下嵐江Ⅰ遺跡の調査が概ね終了している。

平成21年4月10日から下嵐江Ⅱ遺跡の調査開始。胆沢川の増水及び市道復旧に伴い発掘調査を中断。5月13日から作業再開している。9月15日に理事長視察。9月28日に現地協議を行い、遺跡の中の水没区域外に当たる範囲が現状保存へと変更される。10月22日に終了確認を行い、5,690㎡を引き渡す。10月30日に撤収し、全ての調査を終了している。

4 啓蒙普及活動

野外調査・室内整理期間中において本遺跡を以下の通りに紹介している。

平成21年1月24日：当センター主催第11回埋蔵文化財公開講座・遺跡報告会。

平成21年3月8日：(財)奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター主催
平成20年度奥州市遺跡発掘調査報告会。

平成21年12月27日：第23回東北日本の旧石器文化を語る会

平成22年9月30日：考古学ジャーナル604号掲載

5 凡 例

観察表中の表記は以下の通りである。

計測：第5図の通りである。打面を水平に据え末端まで垂直に下ろした線を長さとする。ただし製品についてはこの通りではない。欠損しているものについては、カッコで括っている。

器種：各器種の名称について略号を用いている。

ナイフ形石器：Kn 彫刻刀形石器：Gr 尖頭器：Po 両面調整石器：Bif スクレイパー：Scr 石錐：Dr
 楔形石器：Pi 石刃：Bl 二次加工を有する剥片：Rf 剥片：Fl 彫刻刀形石器削片：Grs チップ：ch
 石核：Co 細石刃：Mb 細石刃核：Mco 船底形石器：Bt 削片：Sp 石斧：Ax 敲石・くぼみ：Hs
 台石：As 磔：Re 磔片：Ref 原石：Sm 石鏃：Sa 石匙：Is 籠状石器：Ib 石皿・磨石・砥石：Gs
 *チップは便宜的に1cm以下のものとしている。

石器材料：各石器材料の名称について略号を用いている。

頁岩：sh 珪質頁岩：ssh 玉髓質頁岩sshc 赤色頁岩：rsh 安山岩：an 凝灰岩：tu デイサイト：dac
 斑岩：por ホルンフェルス：hor 砂岩：san 玄武岩：bas 黒曜石：ob 片岩：ch 石英：qt 瑪瑙：ag
 細粒内緑岩：gr 花崗閃緑岩：grano

*ここで玉髓質頁岩と呼称しているものは一般的に用いられている玉髓や半透明頁岩(阿部2010)である。石材は花崗岩研究会に鑑定を受けているが、玉髓は認められないことから、このような名称を採用している。

打面：打面部の形状により分類している。

単一：1 複数：2 調整：3 点：4 線：5 自然面：6 摂理面：7 欠損・不明：-

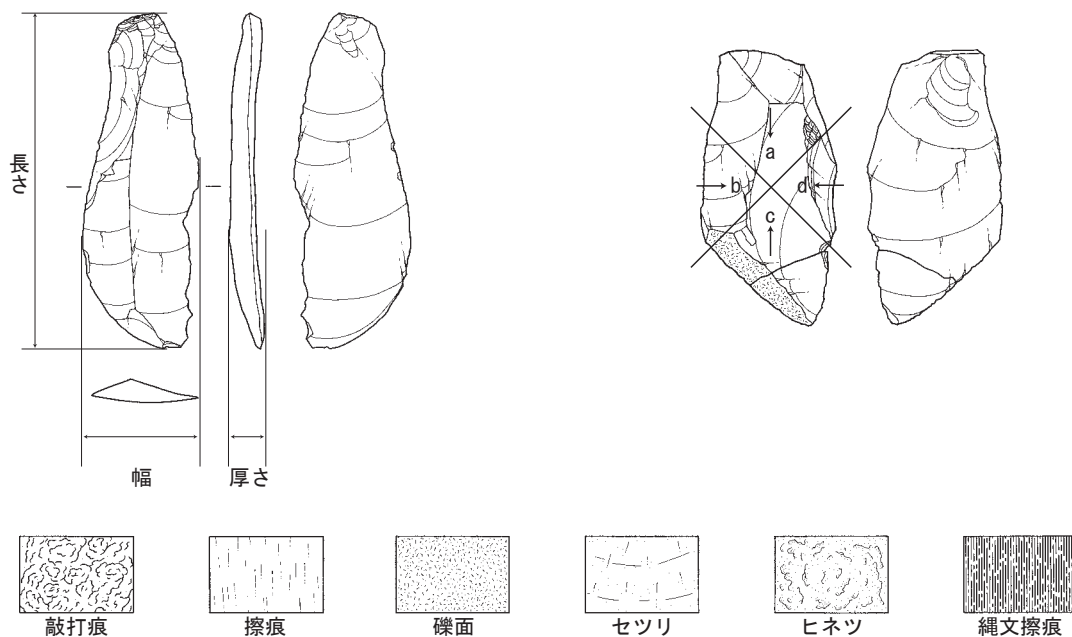
末端：剥離の末端部の形状により分類している。

フェザーエンド：F ステップフラクチャー：S ヒンジフラクチャー：H ウートラパッセ：O 欠損：-

規模：文章中では規模を表す際に小～大型の記載を用いている。

小型 ~5cm 中型 5.1~15cm 大型 15.1cm~

実測：図中に認められる黒ずんだ範囲は全て細かな剥離である。図の縮尺に耐えうる剥離を捉えずに図化してしまったことが原因であり、担当者の責任である。



第5図 凡例

IV 基本層序

基本層序は遺跡の中でも標高が高く、土層が最も厚く堆積するII C 96グリッドにおいて観察している。地形の項でも述べた通り段丘形成に伴い、各地点で堆積状況は異なる(第2図参照)。旧石器時代の石器包含層はⅢb層、Ⅲb-2層、IV層である。

I層：黒褐色土(10YR3/2)表土。粘性・しまり共に弱い。II層との層界はインボリューションが発達している。

II層：灰黄褐色土層(10YR4/2)漸移層。粘性、しまり共に並。

Ⅲ層：本層は取得した段丘面により、若干の違いが認められたためⅢa・bに分けて記載する。Ⅲa層は基本層序の取得地点である段丘面4面で確認している。また、Ⅲb層は段丘面2・3面を中心に確認できた層であり、その下位にはⅢb-2～5層が堆積している。

Ⅲa層：にぶい黄褐色粘土層(10YR4/3)ソフトローム。粘性、しまり共にやや強い。上層との層界の黄色のブロック多く含む。この黄色のブロックは部分的に認められている。本層を基準とすれば上下に分けられるが、場所により存在の有無が認められることから、ここでは一括して扱う。

Ⅲb層：にぶい黄褐色粘土層(10YR4/3)ソフトローム。粘性、しまり共にやや強い～並。Ⅲa層と色調は類似するが、質感が若干異なる。また、本層は西側の石器集中区1周辺でもやや異なり、灰黄褐色粘土層(10YR4/2)のソフトロームで、粘性、しまり共にやや強くなる。このように場所により質感が異なるものの、ここでは一括して扱う。

Ⅲb層以下で確認できた洪水堆積(Ⅲb-3～5層)を中心とした層は以下の通りである。地点ごとで確認できる層は異なり、一様ではない。段丘東側の頭頂部付近ではⅢb-2・3層の層厚は薄く、先端部へ向かい厚くなる。

Ⅲb-2層：褐色土層(10YR4/6)粘性並、しまり強い。シルト質が強い。特に段丘西側の集中区1・2付近ではにぶい黄褐色土層(10YR4/3)で粘性並、しまりはやや強くなる傾向がある。直径1～3cmの礫を少量含む。Ⅲb-3層との層界に多くの礫が認められる。調査当初は分離して捉えていたが、同一なものとして判断をしている。しかし、テフラ分析の結果、堆積するテフラが異なることから、時間的前後関係があり両者は異なる層と捉えた方が良いと思われる。よって本層は東側→西側の順に堆積したと考えられる。

Ⅲb-3層：礫層。Ⅲ層の基盤を成しており、自然堤防上では露出している。直径5～50cmの亜円礫を多く含む。本層から下位の堆積状況は地点毎により大きく異なる。

Ⅲb-4層：灰黄褐色砂層(10YR4/2)

Ⅲb-5層：にぶい黄褐色砂質シルト層(10YR5/3)粘性、しまり共に弱い。

IV層：自然堤防南側の斜面においては、本層以下には洪水堆積層を厚く挟む。

IV層：褐色粘土層(10YR4/4)ハードローム層。粘性、しまり共に強い。白色スコリアを少量、炭化粒を微量含む。

IV層以下で確認できた洪水堆積層については層名を付し記載しておく。IV-2層より下位は自然堤防の南側の斜面上に形成されており、層厚は厚いところで1.5～2mを測る。

IV-2層：褐色土層(10YR4/4～4/6)粘性、しまり共に強い。青灰色スコリアを少量含む。

- IV-3層：にぶい黄褐色砂質シルト層(10YR4/3)粘性、しまり共にやや強い。
- IV-4層：灰黄褐色砂層(10YR4/2)
- IV-5層：褐色粘土質シルト層(10YR4/4)粘性、しまり共にやや強い。
- IV-6層：にぶい黄褐色砂質シルト層(10YR4/3)粘性、しまり共に弱い。
- IV-7層：灰黄褐色砂層(10YR4/2)～オリーブ褐色砂層(2.5Y4/4)
- IV-8層：礫層。上下で礫の粒径が異なり、上部では大型の亜角～亜円礫、下部では小型の亜角～亜円礫が認められる。
- IV-9層：オリーブ褐色砂層(2.5Y4/4)
- IV-10層：褐色砂質シルト層(10YR4/4)粘性やや弱く、しまり弱い。
- IV-11層：褐色砂質シルト層(10YR4/4)
- IV-12層：にぶい黄褐色砂層(10YR4/3)
- IV-13層：礫層。粒径の小さい礫が認められる。
- IV-14層：褐色砂質シルト層(10YR4/4)粘性やや弱く、しまり弱い。
- IV-15層：礫層。段丘面2面の基盤を成す礫層である。
- V層：褐色粘土層(10YR4/4)ハードローム層。粘性、しまり共に強い。白色スコリアを僅かに含む。
- VI層：褐色粘土層(10YR4/6)ハードローム層。粘性、しまり共に強い。軽石を少量含む。
- VII層：黄褐色粘土層(10YR5/6)VI・Ⅷの中間層。粘性、しまり共にやや強い。
- VIII層：黄褐色粘土層(10YR5/8)シルト質が極めて強い。粘性、しまり共にやや強い。
- IX層：段丘先端部の北側の崖付近にのみ形成されている堆積層で、II層とIII層の間に堆積する。

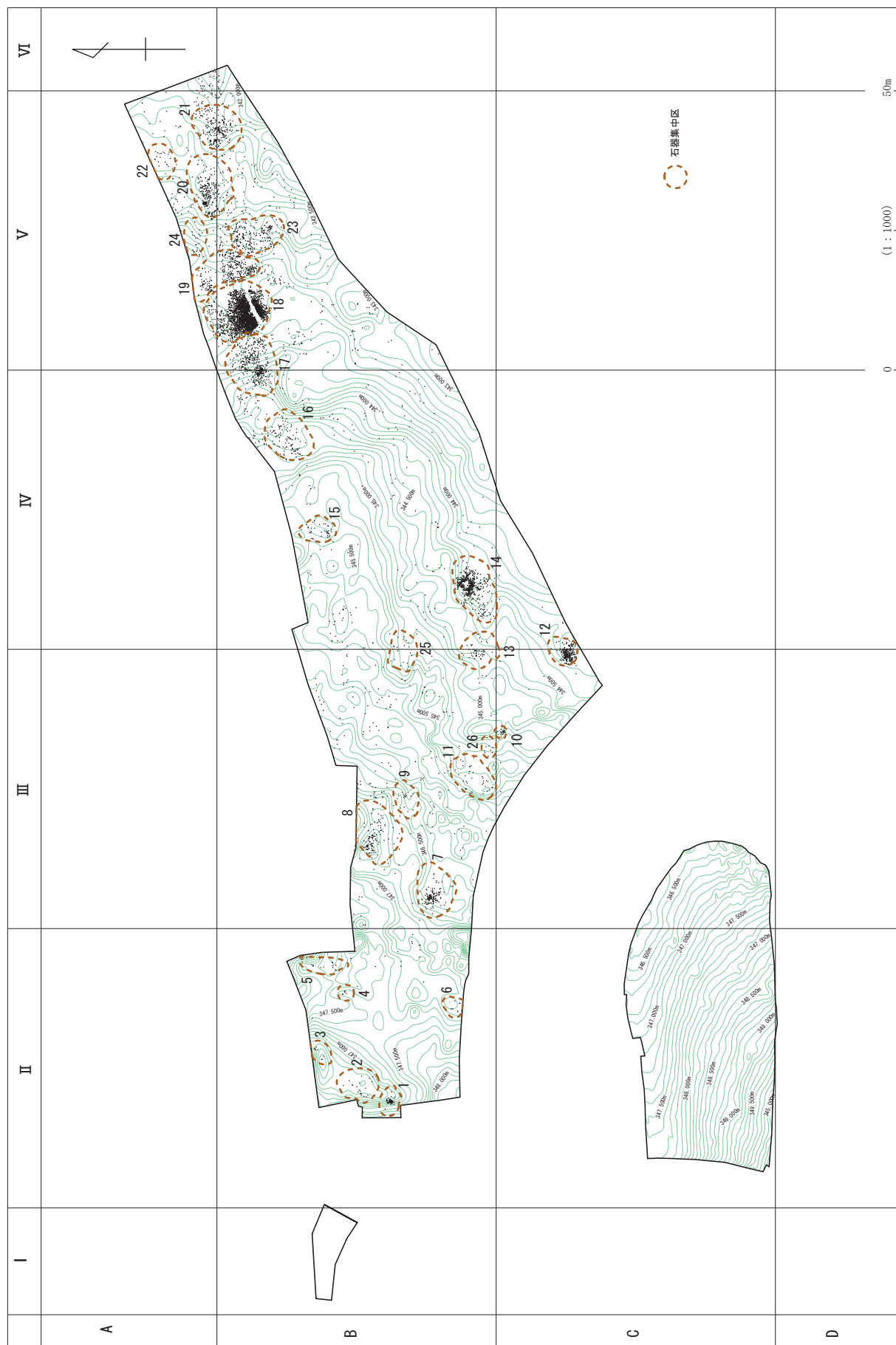
以上、本遺跡を形成している段丘面の堆積状況である。また、基本層序以外にも段丘面の各地点ごとに堆積状況を把握している(第2図)。これを見ていくとⅢb層は段丘内に高低差を有しながら段丘全域に広く分布していることが窺える。また、Ⅲ層とⅣ層、Ⅳ層とⅤ層の間に洪水堆積層を厚く挟み、各層の関係が軽微な不整合にあることを確認している。この洪水堆積層は、地理的環境でも述べた通り、段丘・自然堤防形成の要因となった層である。

このような堆積状況を得られているが、地形面と石器集中区との関係性を把握するために、基本層序及び複数の石器集中区の壁面においてテフラ分析を行っている。この結果、Ⅵ層中位からはTo-Of、Ⅳ層下位からはAT、段丘中央から東側のⅢb層下部、Ⅲb層とⅣ層の層界、段丘西側のⅢb-2層からはAs-YPが確認できている。ただし、段丘先端部へ向かうにつれてテフラの堆積状況は悪く、段丘内陸部のような成果は得られていない。

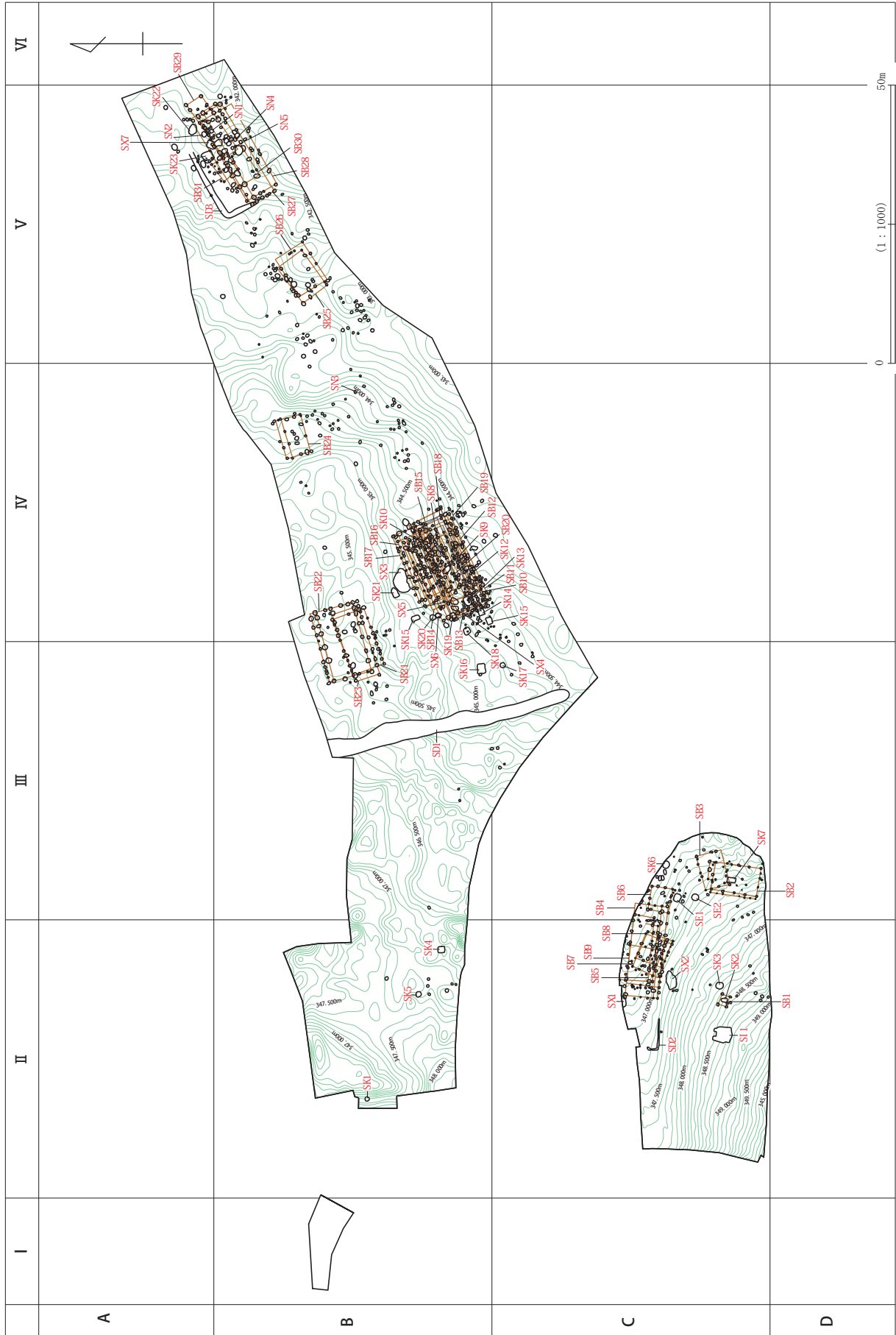
この結果、Ⅲ層はAs-YP降灰以降、Ⅳ層はAT降灰以降、Ⅵ層はTo-Of降灰以降に堆積したものと捉えられる。分析結果は第2分冊の附編に記載している。



第6図 旧石器時代～近世遺構配置図



第7図 旧石器時代遺物分布図



第8図 縄文～近世遺構配置図

V 検出された遺構と遺物

1 概 略

下嵐江 I・II 遺跡は 3 カ年の調査により、旧石器時代から近世までの遺構と遺物を確認しており、それに伴い多くの遺物が出土している。各時代の成果については、以下の通りである。

旧石器時代：石器集中区 26 箇所、石器 9057 点 (取上げ点数 7722 点、攪乱出土点数 1335 点) 出土。

縄文時代：竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑 3 基、柱穴 13 個。

近世：掘立柱建物 30 棟、井戸 2 基、土坑 20 基、性格不明遺構 7 基、焼土 5 基、柱穴 1113 個 (建物跡を構成するものも含む)。

2 旧石器時代

(1) 概 略

遺跡は、小胡桃山から北東方向に延びる尾根の突端部に形成された段丘上にある。この段丘は軽微な不整合による堆積状況から 1～4 面に区分でき、1 面は L2 面、2～4 面は L1 面に相当する。石器集中区は 2～3 面に分布しており、主に 3 面上に形成されている。

平成 19 年度調査において II～III b 層中から石器が出土したため、平成 20 年度から本格的な調査を実施している。まず、下嵐江 I・II 遺跡共に調査区内において石器が出土する範囲を把握するために、全調査区で任意に試掘坑を設定しており、おおよその範囲を確定した後に調査を開始している。調査区に設定した試掘坑の位置については第 9 図の通りである。



第 9 図 旧石器時代調査試掘坑配置図

当該期の石器は7722点を取上げており、それらからなる石器集中区が26箇所ある。石器集中区の検出層位はⅣ層中、Ⅲb-2層上面、Ⅲb層中、Ⅲb層上面と異なる。各層における石器集中区数であるが、Ⅳ層中は1箇所(石器集中区7)、Ⅲb-2層上面は4箇所(石器集中区12・17・18・20)、Ⅲb層中は12箇所(石器集中区1・4・5・8・9・11・14・19・23~26)、Ⅲb層上面は9箇所(石器集中区2・3・6・10・13・15・16・21・22)である。これらは段丘北側の縁辺部に形成された自然堤防付近を中心として広範囲に分布している。その多くは段丘面3面に形成されているが、段丘面2面上(石器集中区7・10・11・13・14・26)にも少なからず存在している。

この層位の違いは主体となる石器群の内容に反映されており、Ⅳ層及びⅢb-2層では石刃石器群、尖頭器石器群Ⅰ群、Ⅲb層中では神子柴・長者久保系である尖頭器石器群Ⅲ群を含めた尖頭器石器群、荒川台技法を伴う細石刃石器群Ⅰ群、北方系である細石刃石器群Ⅱ群、さらにⅢb層上面では有茎尖頭器を含む尖頭器石器群Ⅳ・Ⅴ群などを確認している。

このように複数の石器群が認められているが、それらの石器材料の主体は頁岩や珪質頁岩である。この他には玉髓質頁岩や黒曜石など県内において使用頻度の低い石器材料も用いられており、それらは尖頭器石器Ⅰ・Ⅲ群などの石器群に多く組成している。

各石器群は、定型的な単体資料と母岩別資料の接合個体を中心に報告している。母岩別資料については石器材料の色調や構造物など外観的判断及びその接合状況などを基に分類している。ただし、外観の特徴を捉えにくい灰色の珪質頁岩については、母岩別資料への分類が困難であったため、今回提示した母岩別資料数よりは当然多くなるものと思われる。ちなみに、この分類作業は、石器群が類似する場合に限ってのみ石器集中区間の接合を試みている。これらの母岩別資料の接合個体は、各母岩別出土状況図に表記し、実測もしくは写真によって全点を掲載している。石器材料ごとに母岩別資料を設定し、頁岩はsh、珪質頁岩はssh、玉髓質頁岩はsshc、凝灰岩はtu、黒曜石はobと略号を用いている。

また、多くの石器集中区においてその全体を掘りきるような形で調査を終えているが、幾つかの集中区では、近世に大きく削平を受けている。攪乱から出土した石器は1333点あり、今回提示しているものはその一部に過ぎないことも付記しておく。

層位別石器組成表、石器集中区別石器組成表、石器集中区別石器材料組成表、石器集中区別石器・石器材料組成表、母岩別資料石器組成表は第1～5表の通りである。

第1表 層位別石器組成表

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Dr	Pi	RF	Bl	Fl	Ch	Sp	Mb	Co	Mco	Bt	Hs	Gs	As	Ax	Ref	Re	Sm	計
I	2		3		9		14	12	1	185	93	4	1	3				1			16	1		345
I～II										1														1
II	3	1	5	3	21		16	36	10	469	215	3	9	3			4	1	1	2	19	9	1	831
II～Ⅲb	5	7	12	1	14		14	39	14	446	237	3	4	8			2		1		15	3		825
Ⅲb	43	27	35	3	86	1	9	144	59	2017	1118	11	15	43	2		40	1	7	1	87	35	1	3785
Ⅲb～Ⅲb-2	7	3	3		7			15	13	153	84	3	1	3	1		3				8	2		306
Ⅲb-2	10	3	3		11		2	13	3	305	248	3	1	2			1				10			615
Ⅲb-2～4										3														3
Ⅲb-3	1									10	1			1										13
Ⅲb-4										15	9													24
Ⅲb～Ⅳ	1		7		7		3	2	65	18			1								3	1		108
Ⅳ			6		6		4	9	180	81				2							6	1		295
Ⅳ～Ⅳ-2							1		9	11														21
Ⅳ-2									7	2														9
その他(取得)	10	1	3	1	12		7	25	5	295	167	2	2	2	1	1		3			4			541
その他(未取得)	13	2	10	1	32		22	51	5	814	273	2	7	51	2		7	2	1		26	4	8	1333
計	95	43	88	9	205	1	84	343	121	4974	2557	31	41	117	7	1	57	8	10	3	194	55	11	9055

2 旧石器時代

第2表 石器集中区別石器組成表

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Dr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Sp	Mb	Co	Mco	Bt	Hs	Gs	As	Ax	Ref	Re	Sm	計	
石器集中区1								1		76	19										6			102	
石器集中区2			1		3			1		10				1			2					2			20
石器集中区3								1		9	1													11	
石器集中区4										4	1				1									6	
石器集中区5				1						7	2		2									2		14	
石器集中区6								1	4	3														8	
石器集中区7	1	2			1			5	12	114	12			2								4		153	
石器集中区8				1	1			4	1	66	10		9		1		2		2		17	8		122	
石器集中区9		1	1	1						16	1													20	
石器集中区10		1						2		17	2								1					23	
石器集中区11		1			4			4	7	18	1											5	2	42	
石器集中区12	8	4	1		5		1	21	7	179	19	1		5			3				5	4		263	
石器集中区13								2		34	7		1				2						2	48	
石器集中区14		1	18		16		1	9	2	347	184		5				5	1	1	1	8	1		600	
石器集中区15			1					2		24	4													31	
石器集中区16					1		3	5		42	50											2		103	
石器集中区17		11	1	2	11		1	21	17	263	91	2		6			3				3	1		433	
石器集中区18	48	3	29	1	71		6	119	8	1646	1242	4		35			29		3		52	24		3320	
石器集中区19	4		1		7		1	10	4	115	62			1			1					5		211	
石器集中区20	5	12			4		3	10	32	141	48	15		2							8	1		281	
石器集中区21			6		3		5	6		133	66		7	1			1	1			10	1		240	
石器集中区22					1		1	1		11	13											1		28	
石器集中区23		1	1		2		3	4	2	81	73			2					1		3			173	
石器集中区24	1							1	13	7												1		23	
石器集中区25		2	1		4			2		9			1											19	
石器集中区26								1		6	1		1											9	
石器集中区外(包含層)	3	2	10	1	18	1	16	23	13	295	108	1	5	7	1		2		1	2	14	7	2	532	
その他(取得)	12	1	6	1	21		21	37	6	481	260	6	3	5	1	1			4		20		1	887	
その他(未取得)	13	2	10	1	32		22	51	5	814	273	2	7	51	2		7	2	1		26	4	8	1333	
計	95	43	88	9	205	1	84	343	121	4974	2557	31	41	118	6	1	57	8	10	3	194	55	11	9055	

第3表 石器集中区別石器材料組成表

	sh	ssh	sshc	rsh	ob	tu	ag	dac	an	grano	rhy	hor	san	gr	qt	計
石器集中区1	36	66														102
石器集中区2	12	3				5										20
石器集中区3	7	4														11
石器集中区4	3	3														6
石器集中区5	9	3				2										14
石器集中区6	8															8
石器集中区7	142	7				4										153
石器集中区8	88	5				15	1	4	6			2	1			122
石器集中区9	16	2				2										20
石器集中区10	6	16							1							23
石器集中区11	27	8				5			2							42
石器集中区12	241	10	3	2	1	3		1	1				1			263
石器集中区13	37	4	3			2			2							48
石器集中区14	306	147	136	1		4		1	3				1	1		600
石器集中区15	26	5														31
石器集中区16	51	48		2			2									103
石器集中区17	281	97	25	4	10	6	9	1								433
石器集中区18	1403	220	1089	4	486	39	29	17	21	3	3	5			1	3320
石器集中区19	113	51	28	3	9	1	6									211
石器集中区20	143	88	8	31	1	2	6	1	1							281
石器集中区21	160	53	7	7	2		8		1			2				240
石器集中区22	14	7	3				3								1	28
石器集中区23	95	50	18	1	2	1	3	1							2	173
石器集中区24	9	6	8													23
石器集中区25	5	14														19
石器集中区26	6	3														9
石器集中区外(包含層)	269	145	45	19	9	4	30	3	4		1	1	1	1		532
その他(取得)	406	182	177	26	41	11	37	3							4	887
その他(未取得)	508	295	239	103	45	14	116	1	3			3	1	1	4	1333
計	4427	1541	1790	203	606	120	250	33	44	4	4	13	5	2	13	9055

第4表 石器集中区別石器・石器材料組成表

石器集中区1

	Rf	Fl	ch	Ref	計
sh	1	24	5	6	36
ssh		52	14		66
計	1	76	19	6	102

石器集中区2

	Po	Scr	Rf	Fl	Co	Hs	Ref	計
sh	1	2	1	6	1		1	12
ssh		1		2				3
tu				2		2	1	5
計	1	3	1	10	1	2	2	20

石器集中区3

	Rf	Fl	ch	計
sh	1	6		7
ssh		3	1	4
計	1	9	1	11

石器集中区4

	Fl	ch	Mco	計
sh	2	1		3
ssh	2		1	3
計	4	1	1	6

石器集中区5

	Bif	Fl	ch	Mb	Ref	計
sh		6	2	1		9
ssh	1	1		1		3
tu					2	2
計	1	7	2	2	2	14

石器集中区6

	Rf	Bl	Fl	計
sh	1	4	3	8

石器集中区7

	Kn	Gr	Scr	Rf	Bl	Fl	ch	Co	Ref	計
sh			1	4	11	110	12	2	2	142
ssh	1	2		1	1	2				7
tu						2			2	4
計	1	2	1	5	12	114	12	2	4	153

石器集中区8

	Bif	Scr	Rf	Bl	Fl	ch	Mb	Mco	Hs	As	Ref	Re	計
sh	1	1	3	1	55	9	9				9		88
ssh			1		4								5
tu					6	1		1			6	1	15
ag				1									1
dac									1			3	4
an									1	2		3	6
hor										2			2
san												1	1
計	1	1	4	1	66	10	9	1	2	2	17	8	122

石器集中区9

	Gr	Po	Bif	Fl	ch	計
sh			1	14	1	16
ssh	1			1		2
tu		1		1		2
計	1	1	1	16	1	20

石器集中区10

	Gr	Rf	Fl	ch	As	計
sh			6			6
ssh	1	2	11	2		16
an					1	1
計	1	2	17	2	1	23

石器集中区11

	Gr	Scr	Rf	Bl	Fl	ch	Re	Ref	計
sh		3	4	5	14			1	27
ssh	1	1		1	4	1			8
tu				1				4	5
an							2		2
計	1	4	4	7	18	1	2	5	42

石器集中区12

	Kn	Gr	Po	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Sp	Co	Hs	Re	Ref	計
sh	8	2		3		20	7	173	19		4		1	4	241
ssh		2		2	1	1		2		1	1				10
sshc								3							3
rsh								1					1		2
tu											2			1	3
ob			1												1
dac													1		1
an											1				1
san													1		1
計	8	4	1	5	1	21	7	179	19	1	5	3	4	5	263

2 旧石器時代

石器集中区13

	Rf	Fl	ch	Mb	Hs	Re	計
sh	2	29	6				37
ssh		2	1	1			4
sshc		3					3
tu					2		2
an						2	2
計	2	34	7	1	2	2	48

石器集中区14

	Po	Scr	Gr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Mb	Hs	Gs	AS	Ax	Re	Ref	計
sh	11	6			4	1	202	74					1		7	306
ssh	4	6	1		3	1	63	64	5							147
sshc	3	4			2		82	45								136
rsh								1								1
tu										3					1	4
qt			1													1
dac										1						1
an										1	1			1		3
san												1				1
計	18	16	1	1	9	2	347	184	5	5	1	1	1	1	8	600

石器集中区15

	Po	Rf	Fl	ch	計
sh	1	2	21	2	26
ssh			3	2	5
計	1	2	24	4	31

石器集中区16

	Scr	Pi	Rf	Fl	ch	Ref	計
sh	1		3	26	19	2	51
ssh		1	2	16	29		48
rsh		1			1		2
ag		1			1		2
計	1	3	5	42	50	2	103

石器集中区17

	Gr	Po	Bif	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Sp	Co	Hs	Re	Ref	計
sh	7	1		7		13	15	206	27		4			1	281
ssh	4		2	3		7	2	38	38	2	1				97
sshc				1				12	12						25
rsh						1		3							4
tu									1			3		2	6
ob								3	7						10
ag					1			1	6		1				9
dac													1		1
計	11	1	2	11	1	21	17	263	91	2	6	3	1	3	433

石器集中区18

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Sp	Co	Hs	As	Re	Ref	計
sh	9	2	9	1	39		63	6	866	358		16	2			32	1403
ssh	5		1		5	1	6	1	95	101	3	2					220
sshc	18		9		19	1	39	1	526	462	1	13					1089
rsh									3	1							4
ob	16	1	10		8	3	11		140	296		1					486
tu									11	1		2	7	1	5	12	39
ag						1			5	23							29
rhy															2	1	3
qt												1					1
dac													9	1	7		17
an													9	1	10	1	21
hor													1				5
grano													1				3
計	48	3	29	1	71	6	119	8	1646	1242	4	35	29	3	24	52	3320

石器集中区19

	Kn	Po	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Co	Hs	Ref	計
sh			4		5	2	75	22		1	4	113
ssh	4		1		2	2	21	21				51
sshc			1		2		14	10	1			28
rsh								2			1	3
ob		1	1	1	1		3	2				9
tu							1					1
ag							1	5				6
計	4	1	7	1	10	4	115	62	1	1	5	211

石器集中区20

	Kn	Gr	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Sp	Co	Re	Ref	計
sh		2	1		5	14	92	21	1	2		5	143
ssh	5	10	2		4	14	23	16	14				88
sshc							7	1					8
rsh					1	4	19	7					31
ob			1										1
tu												2	2
ag				3				3					6
dac												1	1
gano											1		1
計	5	12	4	3	10	32	141	48	15	2	1	8	281

石器集中区21

	Po	Scr	Pi	Rf	Fl	ch	Mb	Co	Hs	Gs	Re	Ref	計
sh	4			3	105	37	1	1		1	1	7	160
ssh	2	3	1		21	22	4						53
sshc				1	3	3							7
rsh			1	1	3	1						1	7
ob							2						2
ag			3	1	1	3							8
hor												2	2
an									1				1
計	6	3	5	6	133	66	7	1	1	1	1	10	240

石器集中区22

	Scr	Pi	Rf	Fl	ch	Ref	計
sh	1			8	4	1	14
ssh				2	5		7
sshc			1		2		3
ag		1			2		3
qt				1			1
計	1	1	1	11	13	1	28

石器集中区23

	Gr	Po	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Co	As	Ref	計
sh	1	1	1		3	1	56	29	1		2	95
ssh			1	1	1	1	16	30				50
sshc				1			9	7	1			18
rsh								1				1
ob								2				2
ag				1				2				3
tu											1	1
qt								2				2
dac										1		1
計	1	1	2	3	4	2	81	73	2	1	3	173

石器集中区24

	Kn	Bl	Fl	ch	Ref	計
sh			4	4	1	9
ssh	1	1	1	3		6
sshc			8			8
計	1	1	13	7	1	23

石器集中区25

	Gr	Po	Scr	Rf	Fl	Mb	計
sh				2	3		5
ssh	2	1	4		6	1	14
計	2	1	4	2	9	1	19

石器集中区26

	Rf	Fl	ch	Mb	計
sh	1	4	1		6
ssh		2		1	3
計	1	6	1	1	9

2 旧石器時代

第5表 母岩別資料石器組成表

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	Ch	Sp	Mb	Co	Mco	点数	計
sh 1							1		15						16	98.02
sh 2									8	1					9	8.28
sh 3							4		15	2					21	152.59
sh 4					2				1						3	52.88
sh 5								1	1						2	32.68
sh 6									2						2	59.79
sh 7								1	1						2	49.66
sh 8								3							3	50.94
sh 9							3	5	20						28	313.25
sh10								2	52	6					60	501.34
sh11							1		4				2		7	834.32
sh12							2		18	1			1		22	1046.42
sh13									2						2	21.97
sh14									1	1					2	0.9
sh15					1				1						2	23.53
sh16									2						2	8.89
sh17				1			1	1	13						16	321.08
sh18							1		18	1		6		1	27	373.67
sh19									2						2	55.45
sh20												2			2	0.6
sh21							2		26						28	577.22
sh22			1						3						4	20.14
sh23									2						2	11.66
sh24					2										2	9.54
sh25									2						2	2.29
sh26							1		1						2	90.34
sh27									2						2	4.6
sh28		1			2		9	1	97	1			1		112	3699.31
sh29	2				1		5	3	66	1			1		79	2274.17
sh30								1	6						7	58.91
sh31									6						6	122.77
sh32								1	2						3	4.14
sh33		1			2				1						4	38.26
sh34					1		3		13						17	1143.47
sh35		2					2	2	37				2		45	828.18
sh36		1						1	4						6	99.35
sh37								5	2						7	91.56
sh38									3						3	16.19
sh39									3						3	3
sh40					1		2		2						5	134.37
sh41		2													2	22.95
sh42							1	4	5						10	145.58
sh43		2			2			6	12	2			1		25	424.17
sh44									3						3	29.34
sh45		1							4						5	153.77
sh46									6						6	255.81
sh47							1		1				1		3	125.48
sh48							1	4	29						34	411.95
sh49	3				1		9	2	43	4					62	698.25
sh50									8				1		9	145.46
sh51									4				1		5	127.08
sh52									4				1		5	188.11
sh53					2				5	1					8	253.37
sh54									4						4	85.17
sh55									3						3	91.91
sh56					1		1		14						16	448.81
sh57			1		4		3		60	10			1		79	459.04
sh58									3						3	4.3
sh59			1		1				1						3	31.78
sh60									5						5	35.33
sh61							2		1						3	55.17
sh62									5				1		6	122.63
sh63					1				13				1		15	108.53
sh64							2		18	9					29	207.69
sh65	3				1		2		36	16			2		60	265.11
sh66							1		20				1		22	467.59
sh67							2		7						9	415.8
sh68					2										2	21.1
sh69							1		2						3	62.8
sh70					1				1						2	20.79
sh71									12				1		13	273.23
sh72									2						2	38.36
sh73					1		1		3						5	189.67
sh74							1		3						4	46.61
sh75					1				10				1		12	612.46
sh76	1						1		3						5	63.37
sh77							1		10						11	144.58
sh78					1		6		13				1		21	331.02
sh79		1			3		2		28	3					37	398.32
sh80							5		10						15	365.96
sh81									8						8	69.94

V 検出された遺構と遺物

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	Ch	Sp	Mb	Co	Mco	点数	計
sh82									3				1		4	220.09
sh83							1	1	9				1		12	119.28
sh84							1		11						12	100.36
sh85									9				1		10	158.88
sh86							1	1	7				1		10	130.41
sh87									8						8	145.1
sh88							6	1	45						52	322.79
sh89					1				3						4	112.95
sh90	1								1						2	4.7
sh91									4						4	25.5
sh92									4						4	9.22
sh93							1		11						12	37.51
sh94									5						5	9.03
sh95									4				1		5	136.93
sh96					1				3						4	14.92
sh97							1		1						2	21.55
sh98									2						2	6.64
sh99			1						1						2	31.99
sh100									2	1					3	19.84
sh101									4						4	17.36
sh102			1		3				6						10	189.39
sh103									6						6	97.85
sh104									3				1		4	143.24
sh105							1		2						3	9.47
sh106			1										1		2	104.82
sh107							1		1						2	42.86
sh108									3						3	19.24
sh109									3						3	10.77
sh110			1						16	6					23	50.72
sh111									21	1					22	223.24
sh112			1		3		2		66	32					104	315.92
sh113									9						9	160.54
sh114			1						35	11					47	143.87
sh115									11						11	69.37
sh116									7						7	5.83
sh117									3						3	12.77
sh118									3						3	4.16
sh119					1				3	1					5	7.16
sh120									2						2	1.57
sh121					1				2						3	22.82
sh122					2										2	31.82
sh123							1		10						11	226.17
sh124									18						18	301.26
sh125									7	1					8	63.2
sh126								1	1						2	41.34
sh127									4	1					5	52.77
sh128							1		3						4	63.57
sh129									2						2	3.96
sh130									2						2	10.84
sh131									3	1					4	28.48
sh132					1				2						3	115.95
sh133									4	1					5	6.39
sh134									3						3	12.11
sh135									8						8	18.83
sh136			1						3						4	13.11
sh137									5						5	57.41
sh138				1					6						7	19.15
sh139									8	1					9	9.5
sh140									2						2	12.15
sh141									3						3	12.83
sh142									6						6	21.25
sh143									3						3	16.55
sh144									5						5	5.16
sh145									2						2	11.91
sh146									2						2	3.04
sh147							1		1						2	9.72
sh148									2						2	7.22
sh149									2						2	19.21
sh150									2						2	13.55
sh151									2						2	6.02
sh152									2						2	5.97
sh153									3						3	6.02
sh154									2						2	0.9
sh155									1	1					2	2.43
sh156									2						2	0.84
sh157									2						2	1.77
sh158									4						4	4.76
sh159				2											2	72.76
ssh1									52	17					69	74.44
ssh2									2	1					3	36.26
ssh3			1		2										3	41.3
ssh4									2						2	2.9
ssh5									1				1		2	43.8

2 旧石器時代

	Kn	Gr	Po	Bif	Scr	Pi	Rf	Bl	Fl	Ch	Sp	Mb	Co	Mco	点数	計
ssh6							2		1						3	24.38
ssh7		1			1				1				1		4	70.2
ssh8		1					5		18				1		25	368.65
ssh9	2	1						7	5		1				16	52.6
ssh10			2						9	14					25	19.72
ssh11			1						4	8					13	13.43
ssh12			1				1		10						12	44.7
ssh13					2				4	3					9	33.31
ssh14					1				3						4	30.7
ssh15					2			1	4						7	73.39
ssh16								2							2	17.76
ssh17								1	1						2	8.16
ssh18									5	1					6	4.11
ssh19									2						2	3.03
ssh20									2						2	21.22
ssh21									3						3	2.64
ssh22									2						2	0.93
ssh23									2						2	3.09
ssh24							1			1					2	1.43
ssh25									2						2	12.62
ssh26		1									2				3	6.32
sshc1							2		18				2		22	341.29
sshc2					2				21	5					28	123.69
sshc3					2	1	1		3	2			1		10	83.44
sshc4					1		1		11	9					22	44.04
sshc5					1				13	2					16	55.29
sshc6	1						4		9	2					16	44.29
sshc7							1		6				1		8	95.96
sshc8	1				1	1	1		4						8	64.23
sshc9	1				1		1		10	5					18	40.48
sshc10									2						2	1.65
sshc11						1			1						2	5.31
sshc12							2		8	6					16	13.88
sshc13									1				1		2	319.5
sshc14					1		1		7	5	1				15	29.07
sshc15			1				1		12	4					18	33.06
sshc16									20	14					34	22.23
sshc17									3						3	6.77
sshc18									2						2	1.44
sshc19	1						1		54	25			2		83	211.11
sshc20	1		1		4		5	1	66	20					98	225.96
sshc21									4				1		5	58.14
sshc22	1								4	1					6	11.44
sshc23					1		3		13	3			1		21	84.84
sshc24	6		4		4		7		50	20					91	227.86
sshc25							1		1	3					5	1.93
sshc26									2	4					6	5.07
sshc27	1								11	1			1		14	52.98
sshc28					1					1			2		4	12.95
sshc29							1						1		2	18.53
sshc30	1								2						3	25.12
sshc31					2				1						3	26.4
sshc32	1						1		24	6					32	31.72
sshc33									4	2					6	5.25
sshc34	1		1						6						8	7.48
sshc35							2		42	4			1		49	225.83
sshc36	1		1		5	1	7		81	7			2		105	576.62
sshc37	1								33	13					47	94.72
sshc38							1		7	1					9	19.67
sshc39									14	2					16	13.24
sshc40	1				4		2		50	20					77	359.79
sshc41							1		15						16	51.2
sshc42									6	1					7	12.28
sshc43									2						2	6.97
sshc44									1				1		2	12.48
sshc45									2	4			1		7	53.21
sshc46			2												2	61.77
rsh1							3	4	18	7					32	174.19
tu1									3						3	19.64
tu2									6	1					7	52.01
tu3									7				2		9	456.18
tu4									2						2	46.37
ob1	4		2				2		14	31					53	32.31
ob2	3		4				2		12	11					32	78.19
ob3	2	1							10	21					34	16.03
ob4	4		3			1	3		61	110					182	85.03
ob5	3		4		4	1	4		46	110					172	103.67
ob6	5		1		1		4		20	18					49	47.24
ob7									2	1					3	1.19
ob8									1	3			1		5	9.83
ob9									2	4					6	2.81

(2) 石器集中区

石器集中区 1

[位置・出土状況] II B64・65グリッドに位置しており、2.5×2mの範囲に収まる。段丘縁辺部へ向かって緩やかに下る標高約347.0～347.3mの斜面上で検出している。遺跡の中で最も西側に位置する。

[分布状況] II B64グリッド北東部の狭い範囲を中心に南北方向へ広がる。グリッドの南西隅1.5×1mの範囲内に分布している。

[出土層位] II層からIIIb-2層で出土しており、IIIb層中部(標高約346.5m)に出土ピークがある。最大で約40cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は102点である。

石器組成は二次加工を有する剥片1点、剥片76点、チップ19点、礫片6点からなる。

石器材料組成は珪質頁岩を主体に、頁岩からなる。

[出土遺物] 石器組成に記載したように、本集中区ではtool類が確認されていない。上記の石器から4母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめておく。

sh 1 : 総点数16点、総重量98.02g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。いずれも尖頭器の調整剥片である。剥離面は灰黄色を基調とし、礫面付近と礫面はにぶい黄橙から黄褐色を呈する。石質は緻密だが、部分的にやや粗粒で僅かにざらつく。

接合点数は11点あり、3個体(a・b・c)に分かれる。個体aは7点、個体cは2点あり、剥片からなる。個体bは2点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。

個体aの剥離工程は1→3→4→2→5→6→7である。

個体bの剥離工程は8→9である。

個体cの剥離工程は10→11である。

これらの個体は尖頭器製作に伴う資料である。個体a・bは一方向から剥離しており、器体長軸を越えるような大きな剥離をしながら、器体の厚みを減じている。個体cは多方向から剥離をしている。各個体の背面剥離方向は上下方向からの剥離が認められ、打面部には細かい調整が施されている。個体aの調整剥片は礫面を有することから製作の初期段階に伴うものと考えられる。また、個体a・bの規模から中～大型の尖頭器製作に伴うものと考えられる。

本母岩は大型の母型で搬入、調整後に本体を搬出している。

sh 2 : 総点数9点、総重量8.28g。剥片とチップで構成される非接合資料である。いずれも尖頭器の調整剥片である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐色や灰色が斑に入る。石質は緻密だが、やや粗粒で僅かにざらつくものの、部分的になめらかである。

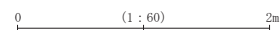
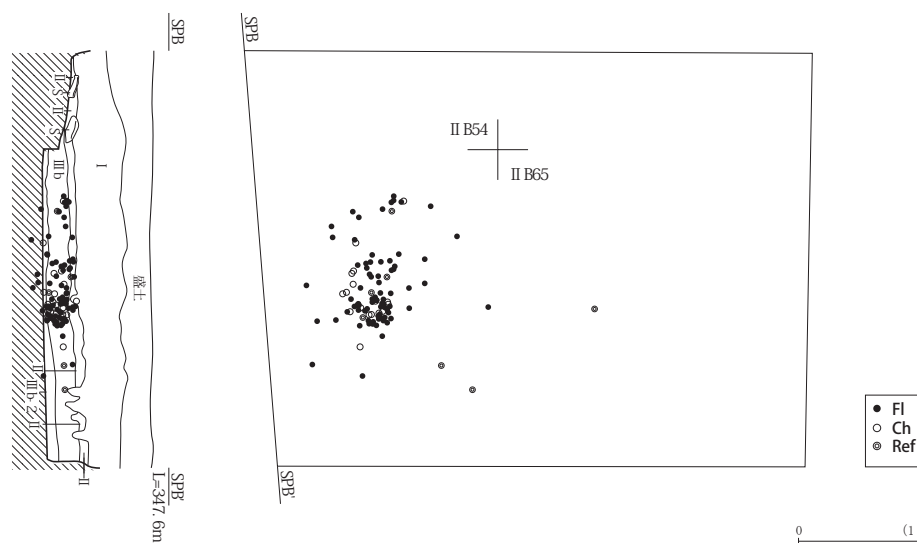
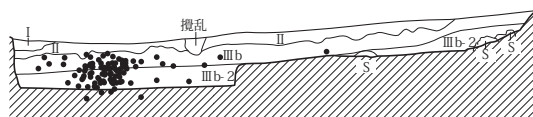
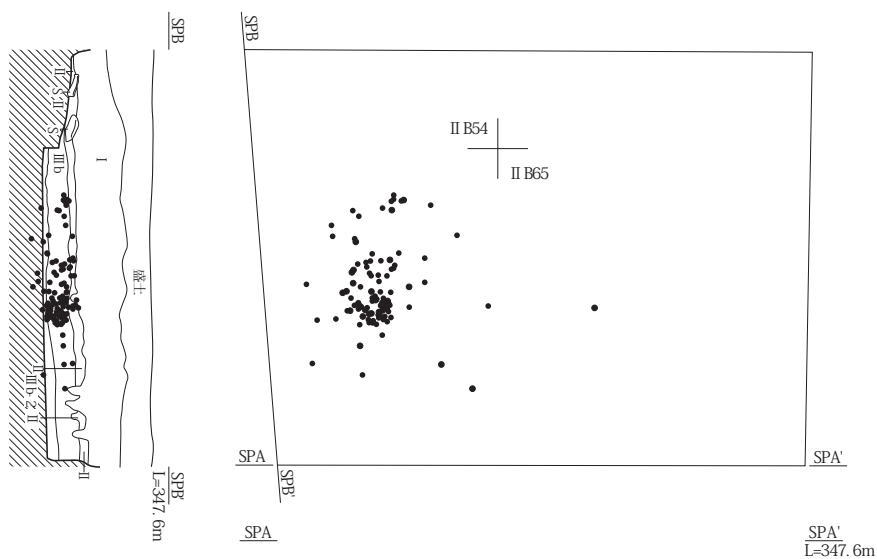
本母岩は中型の母型で搬入、調整後に本体を搬出している。

ssh 1 : 総点数69点、総重量74.44g。剥片とチップで構成される資料である。いずれも尖頭器の調整剥片である。剥離面は黒褐色と暗褐色を基調としている。礫面付近では黄褐色、礫面は黄褐色を呈する。石質は緻密で光沢を有し、なめらかである。本母岩は集中区の半数以上を占めており、本集中区を形成する要因となっている。

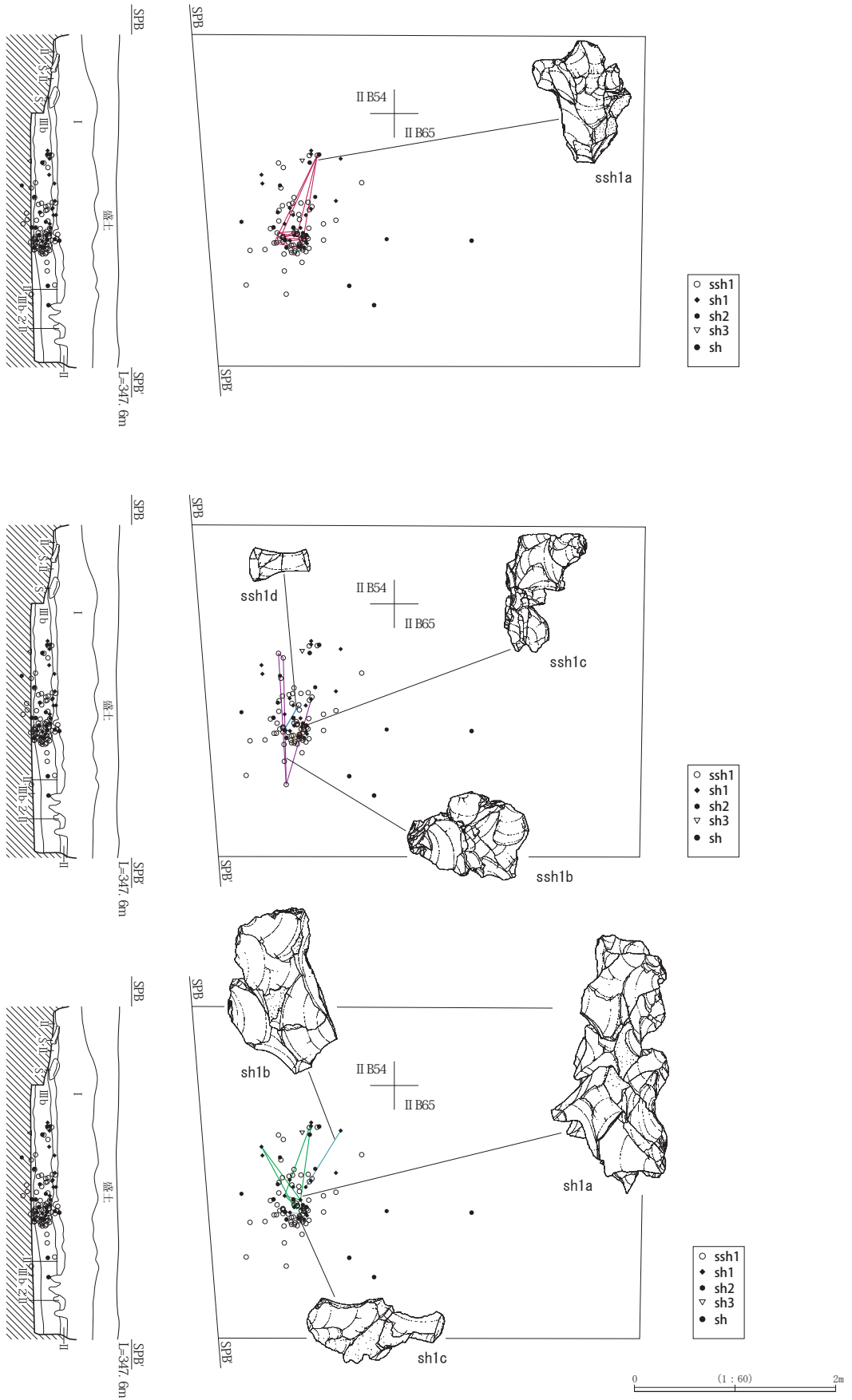
接合点数は18点あり、3個体(a・b・c)に分かれる。個体aは8点、個体b・cは4点、個体dは2点あり、各個体は尖頭器の調整剥片からなる。

個体aの剥離工程は12→14→<13><15→16→17>→18→19である(<○>の前後関係は不明)。

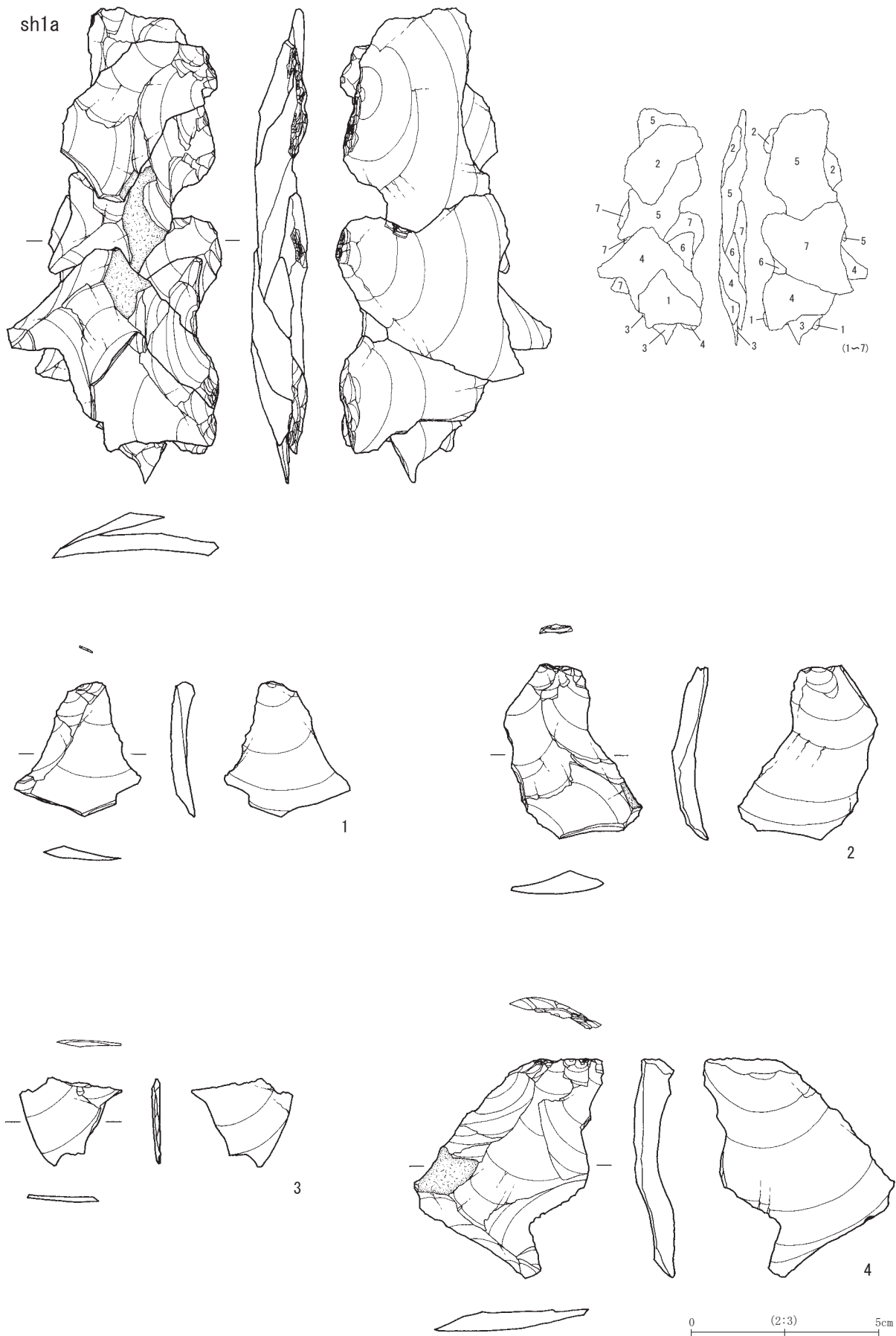
個体bの剥離工程は<20><22→21>→23である(<○>の前後関係は不明)。



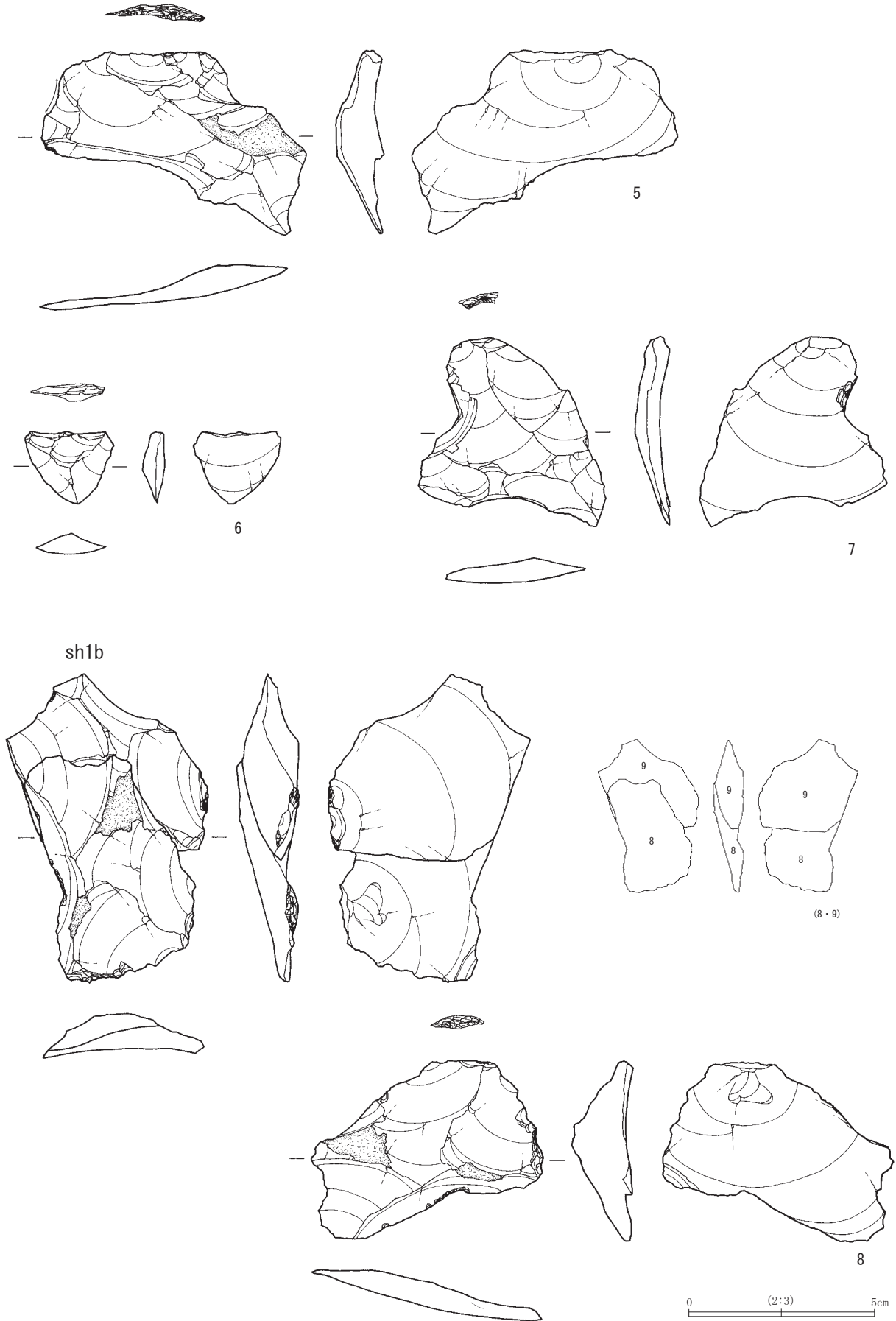
第10図 石器集中区1 石器・器種別出土状況図



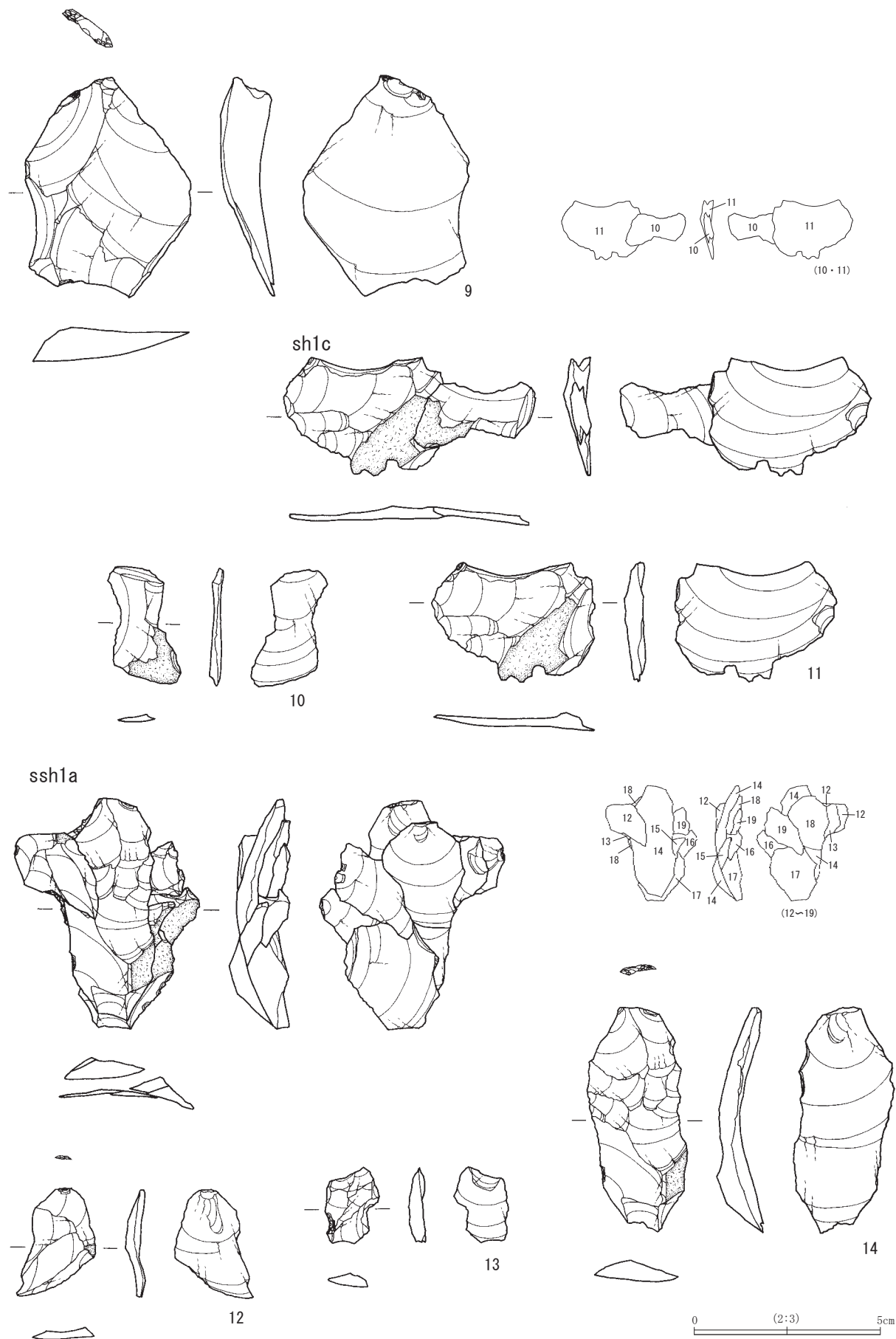
第11図 石器集中区1 母岩別出土状況図



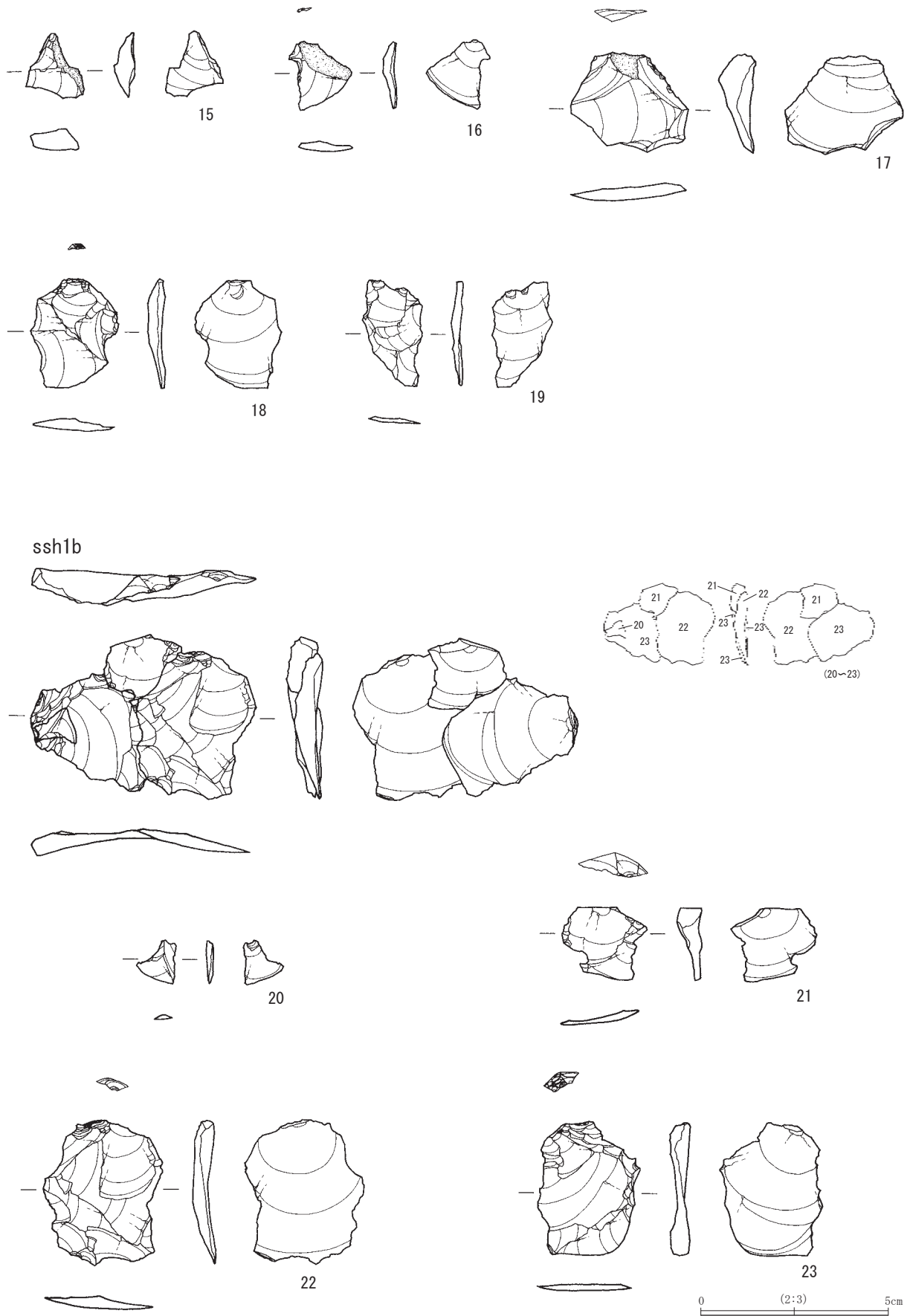
第12図 石器集中区1出土遺物(1)



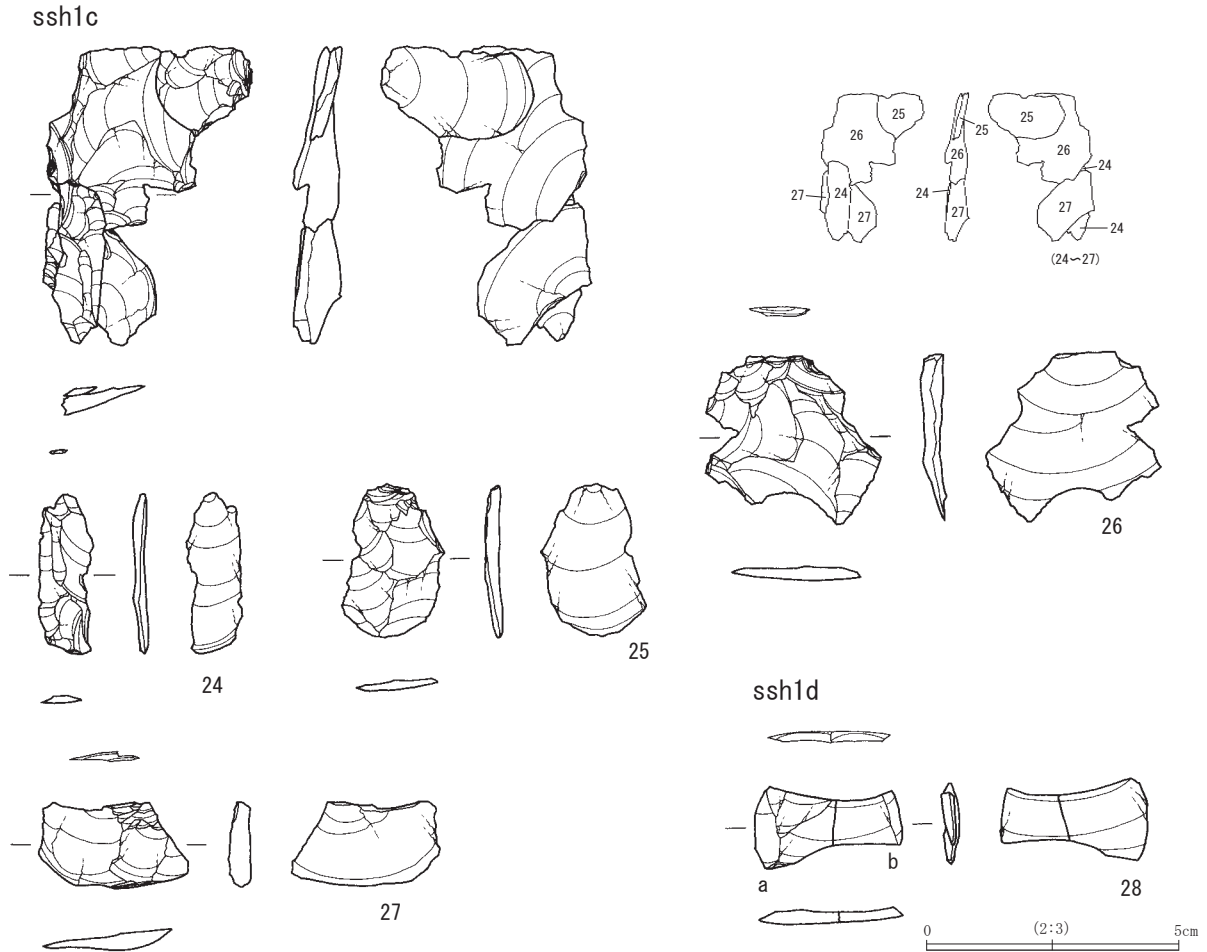
第13図 石器集中区1出土遺物(2)



第14図 石器集中区1出土遺物 (3)



第15図 石器集中区1出土遺物(4)



第16図 石器集中区1出土遺物(5)

個体cの剥離工程は24→27→26→25である。

個体dの28は剥片が2つに折れたものが接合した資料で、背面から切断されている。

これらの個体は尖頭器製作に伴う資料である。個体a・b・cは多方向から剥離されている。各接合個体の背面剥離面構成は、剥離工程と同様、多方向の剥離面からなる。剥片の規模は小さく、自然面は僅かに認められる程度であり、器体中央を越えるような剥離は少ない。また、非接合資料も同様の剥離面構成を有する剥片が多数確認できている。このことから尖頭器製作の終盤段階であった可能性が高い。

本母岩は中型の母型で搬入、調整後に本体を搬出している。

[備考] 本集中区と同じ石器群の集中区が約100m東に形成されているが、その内容は大きく異なり多くの尖頭器が出土している。

西壁面においてテフラ分析を行っており、Ⅲb-2層からはAs-YPが検出されている。また、出土炭化材の年代測定を行っているが、帰属年代を示すような結果は得られていない。これらの詳細は第2分冊附編に記載している。

石器集中区 2

[位置・出土状況] II B44・45・54・55グリッドに位置しており、6×4mの範囲に収まる。集中区1と同様、段丘縁辺部へ向かって緩やかに下る標高約346.6～347.0mの斜面上で検出している。

[分布状況] II B64グリッド付近を中心に散漫的に分布しており、北西方向へ広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層上面(標高346.6m)に出土ピークがある。最大で約30cmの高低差を有する。IIIb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は20点である。

石器組成は槍先形尖頭器1点、石核1点、スクレイパー3点、二次加工を有する剥片1点、剥片10点、敲石2点、礫片2点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩と凝灰岩からなる。

[出土遺物] 29は尖頭器。加工が全体に及ばず剥離も粗いことから、製作段階で先端部が欠損したものであると思われる。30・31はスクレイパー。30は背面を中心として縁辺に細かい加工を施している。裏面には素材腹面が残されており、素材は大型の横長剥片であったと考えられる。筧状石器に類似しているが、本遺跡から出土している縄文時代の筧状石器とは形状が異なることからスクレイパーとして扱っている。31は縦長剥片の両側縁に加工が施されている。32は二次加工を有する剥片。33は石核。剥片を素材とし、縁辺に調整を施してから素材打面を打面に据え剥離を行っている。目的剥片は不明であるが、細石刃や小型剥片などの剥離をしたものと考えられる。34は剥片。縁辺部に二次加工が認められていることから、剥離される以前はスクレイパーであったと思われる。石器材料は29・31～36が頁岩、30が珪質頁岩である。

上記の石器から5母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめておく。しかし、下記以外の3母岩の主体は石器集中区1にある。

sh4：総点数3点、総重量52.88g。スクレイパーと剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面付近では灰黄色、礫面は浅黄色を呈する。石質はやや粗粒でざらつく。

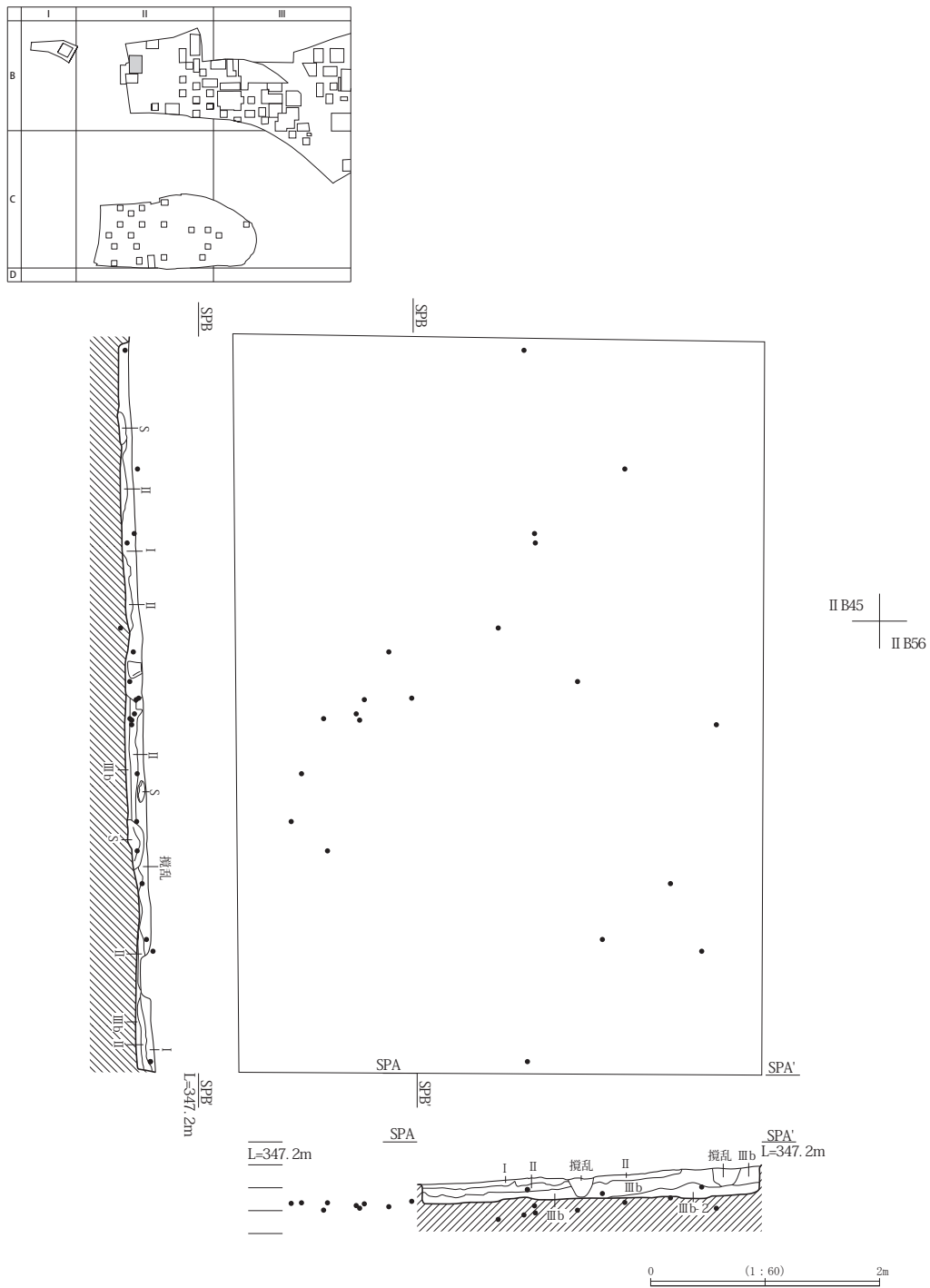
接合個体は点数が2点あり、スクレイパーと剥片からなる。剥離行程は35→36である。個体は礫面除去から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。背面に礫面を有する縦長剥片を連続的に剥離し、礫面除去もしくは石核整形をしている。また、非接合資料にはスクレイパー(31)の素材となる縦長剥片が認められており、目的剥片剥離が行われたと考えられる。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

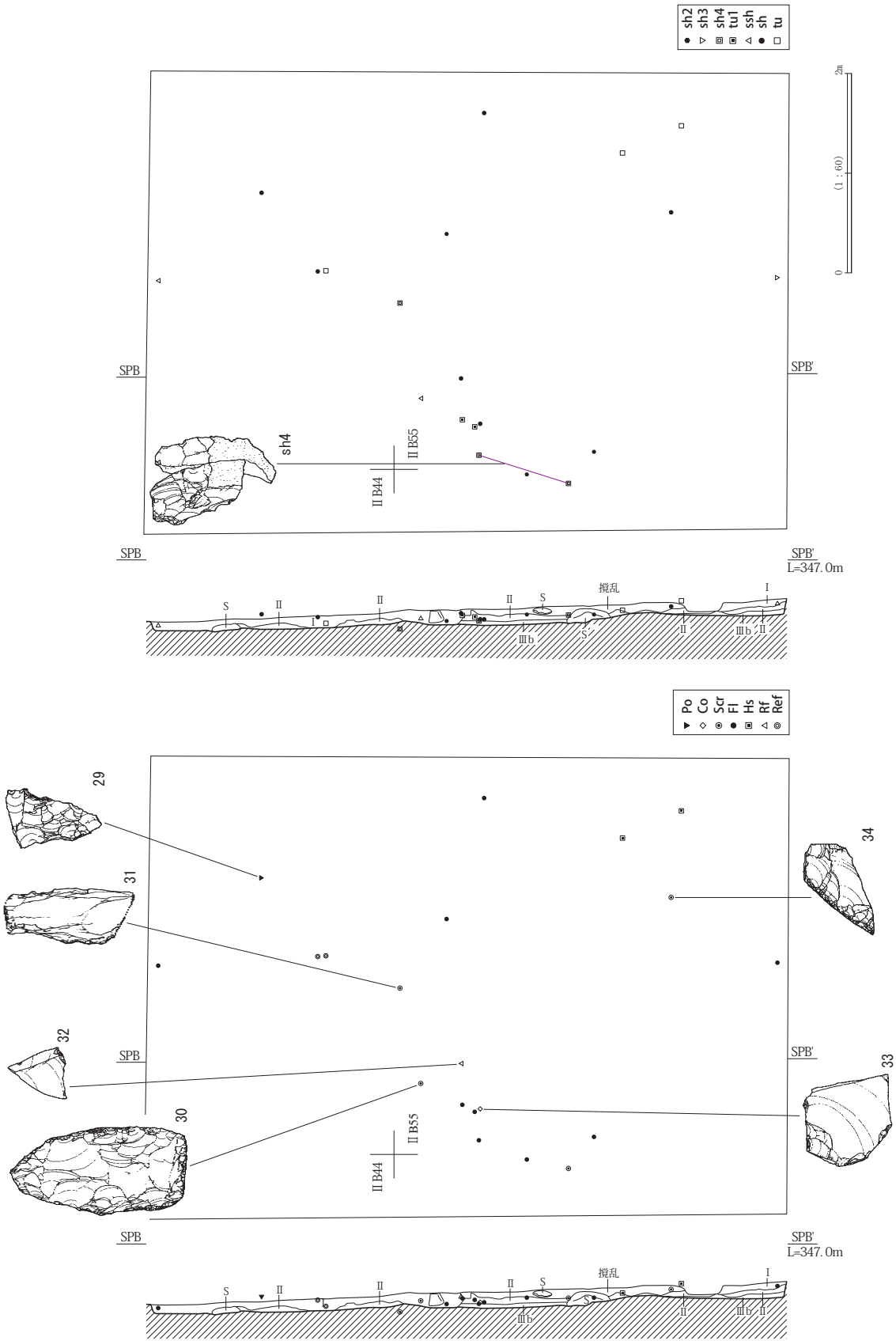
tu1：総点数3点、総重量19.64g。尖頭器の調整剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、灰白色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は母型で搬入、調整後に本体を搬出している。

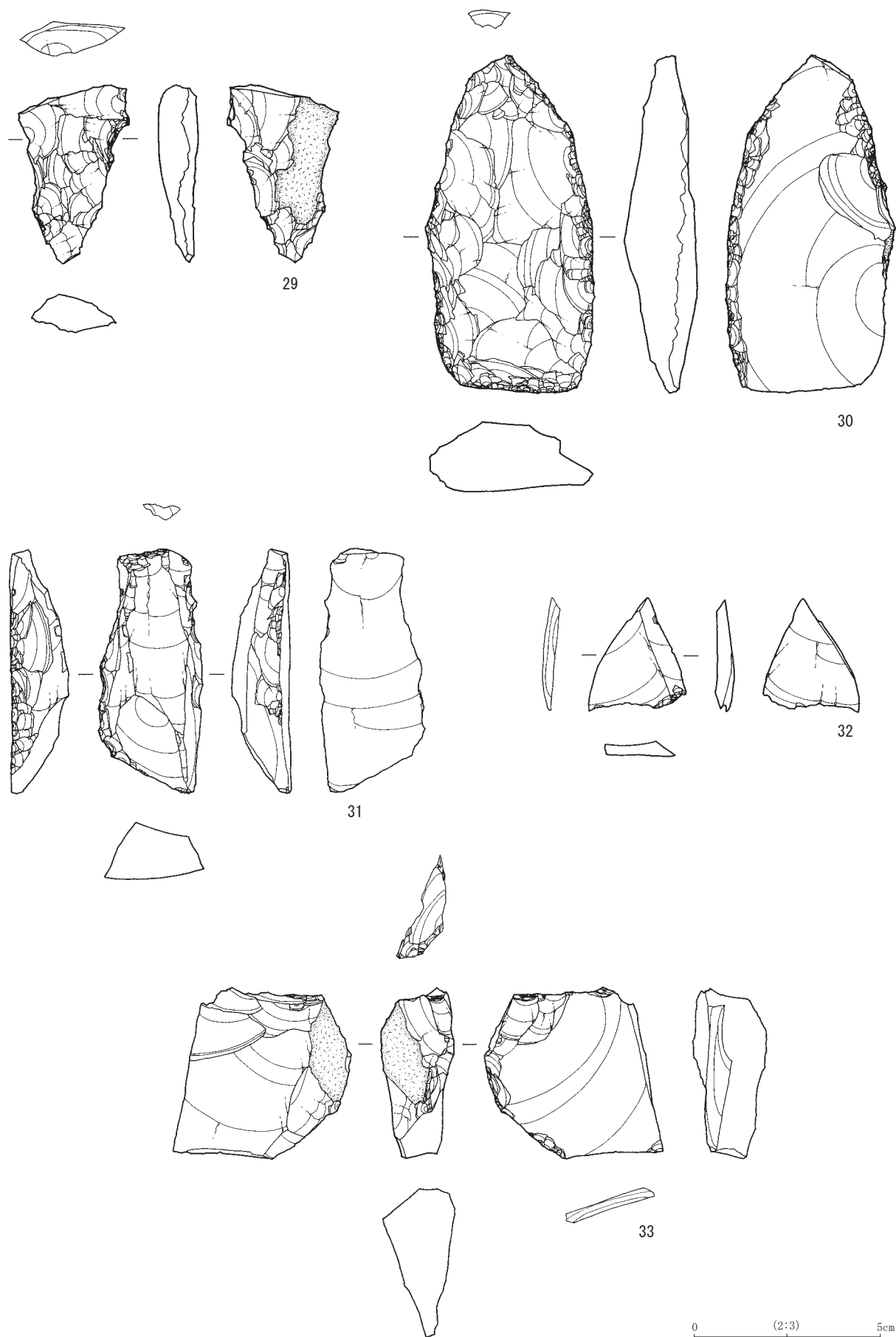
[備考] 本集中区は隣接する石器集中区1に含まれる石器が認められるが、形成層位が異なるためそれよりは新しい時期に属するものと考えられる。



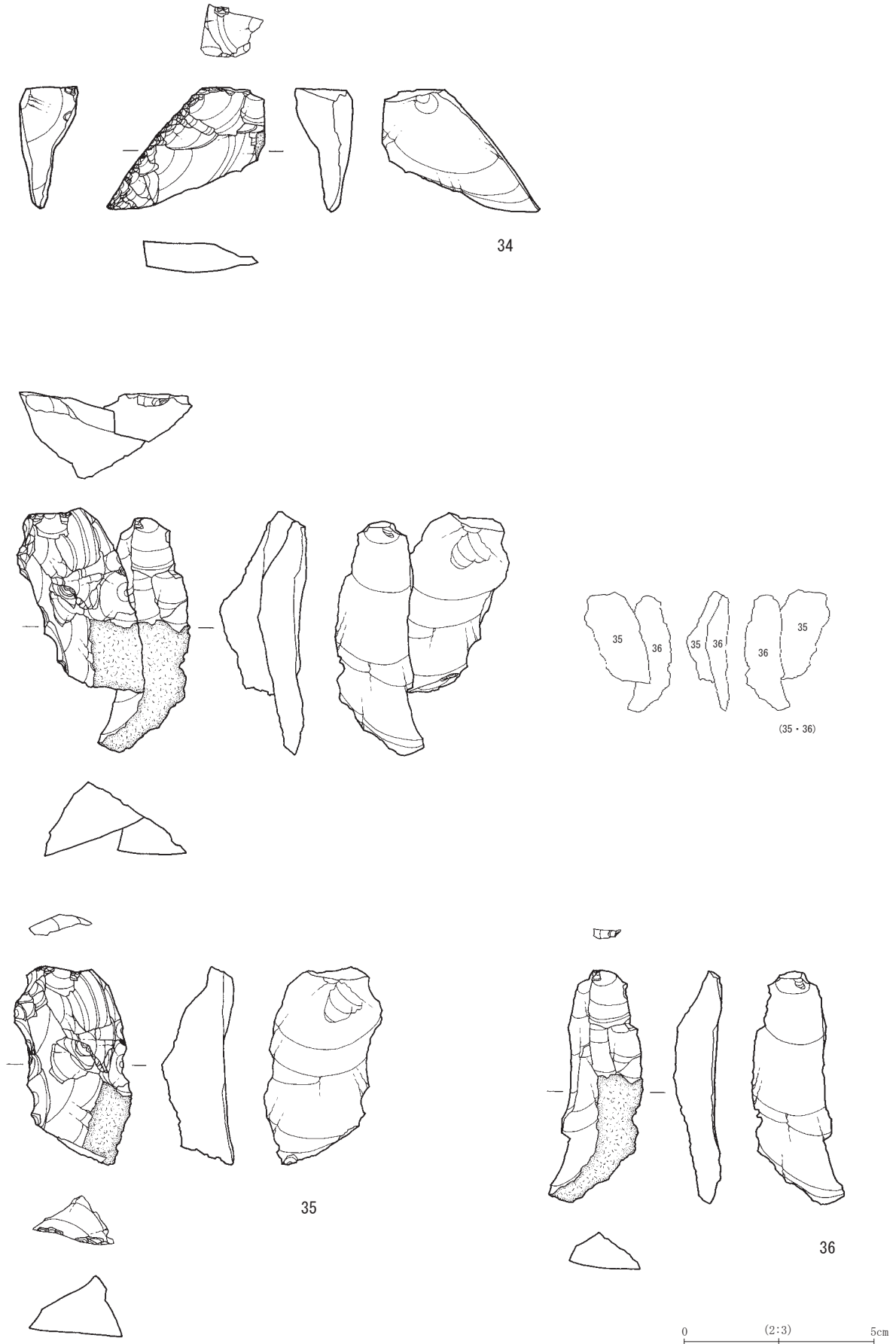
第17図 石器集中区2 石器出土状況図



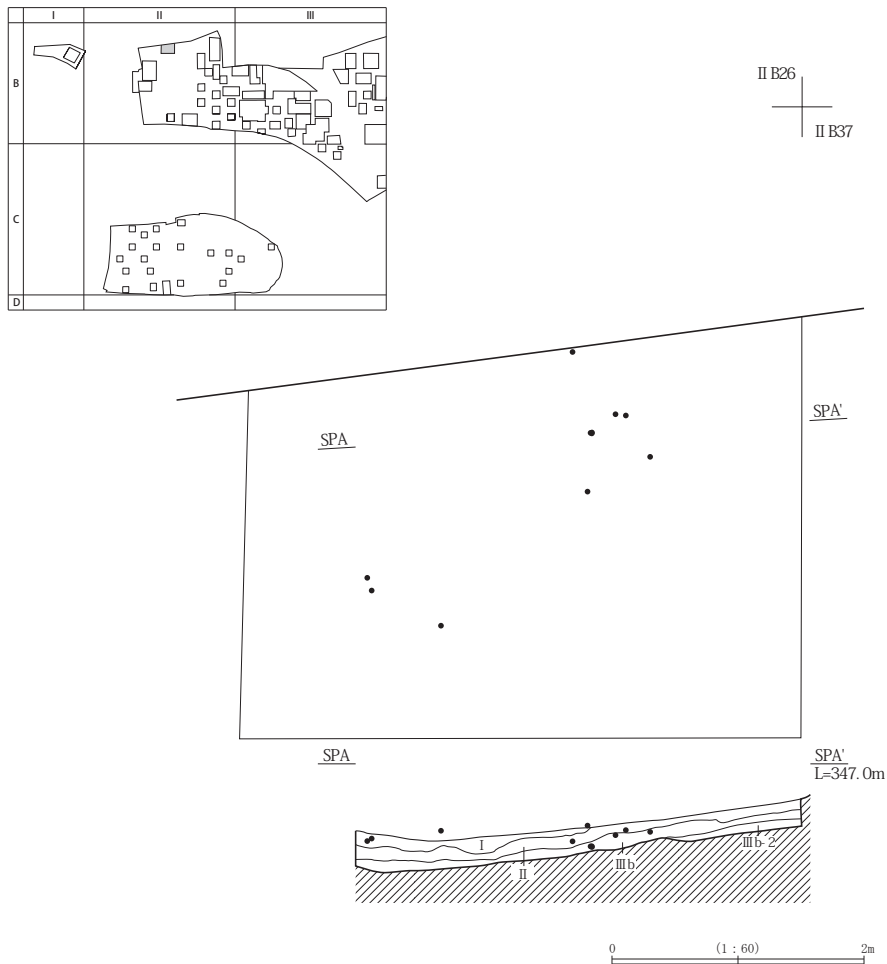
第18図 石器集中区2器種・母岩別出土状況図



第19図 石器集中区2出土遺物(1)



第20図 石器集中区2出土遺物(2)



第21図 石器集中区3 石器出土状況図

石器集中区3

[位置・出土状況] II B36グリッドに位置しており、2.5×2mの範囲に収まる。段丘縁辺部へ向かって緩やかに下る標高約346.5～346.8mの斜面上で検出している。

[分布状況] II B36グリッドにおいて散漫的に分布しており、東西方向へ広がる。約1.5mほどの無遺物空間を挟んで2箇所のまとまりが認められるが、ここでは一括りにして扱っている。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層上面(標高約346.5m)に出土ピークがある。最大で約20cmの高低差を有する。IIIb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

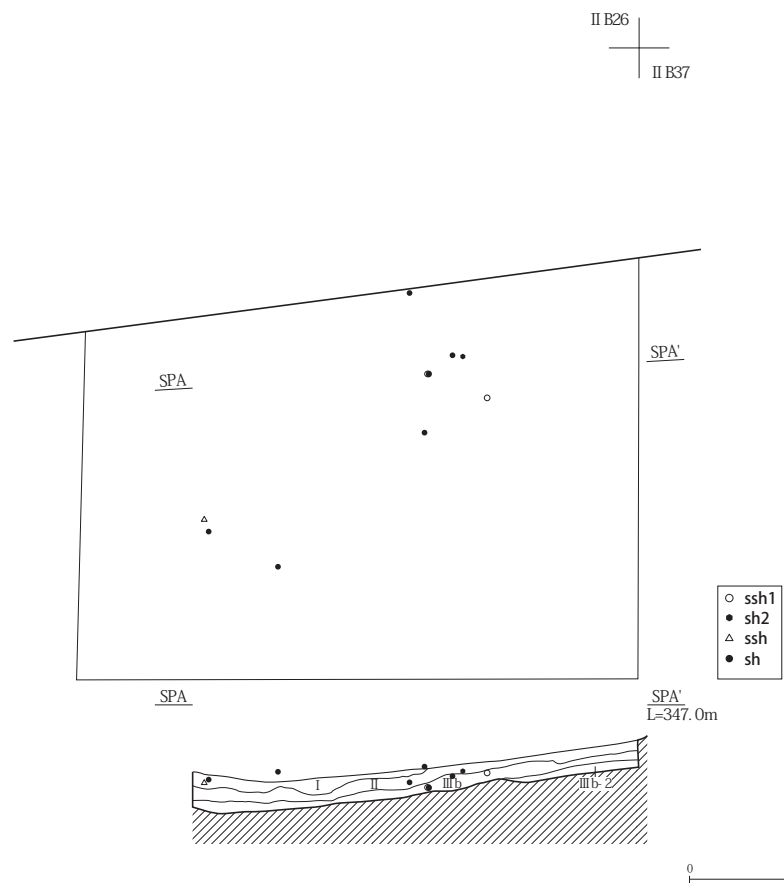
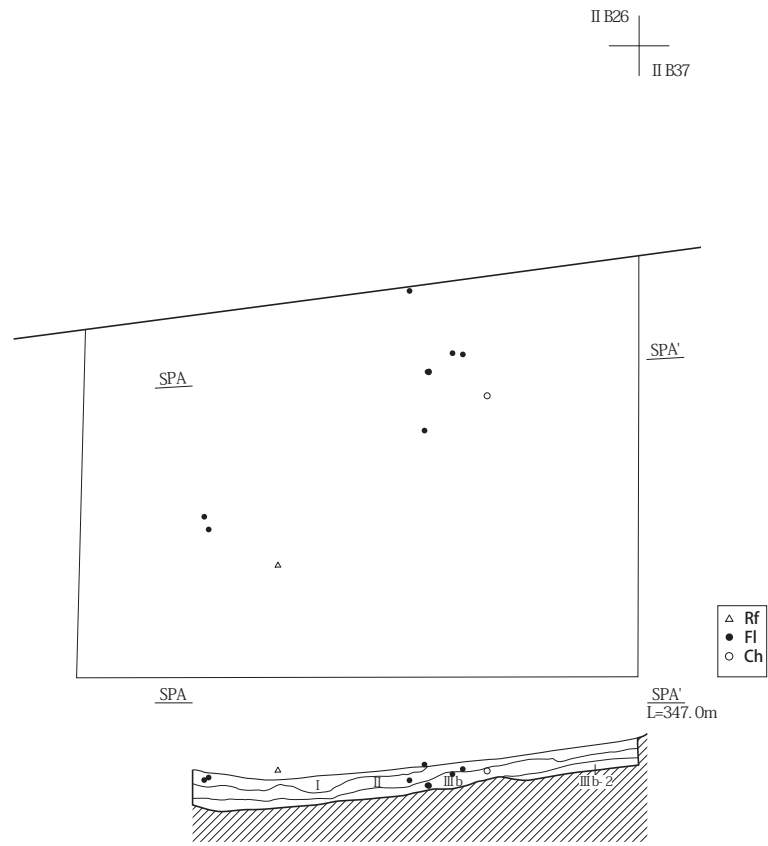
[石器組成・石器材料組成] 総点数は11点である。

石器組成は二次加工を有する剥片1点、剥片9点、チップ1点からなる。

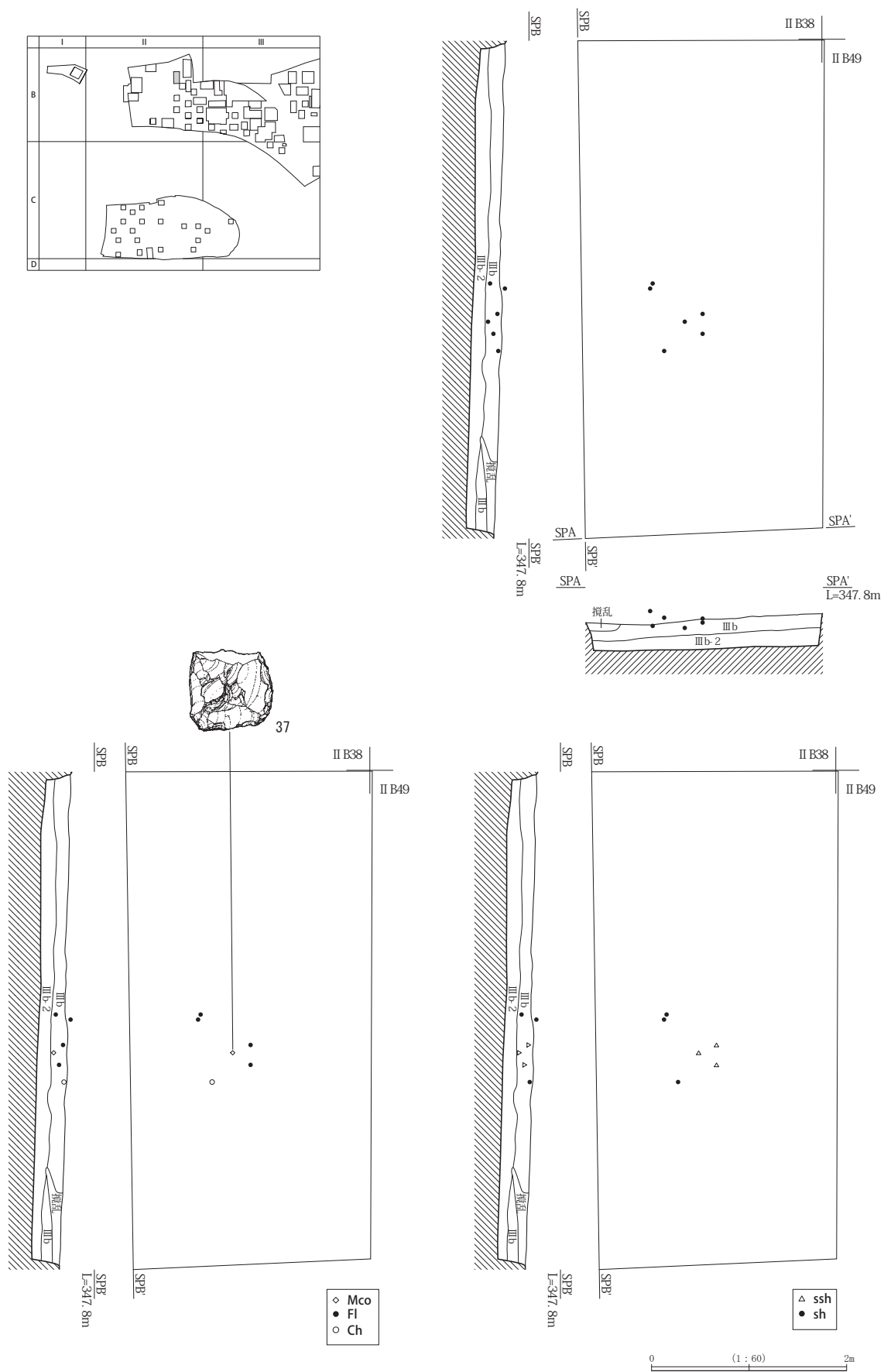
石器材料組成は珪質頁岩と頁岩からなる。

本集中区では母岩別資料は確認されていない。

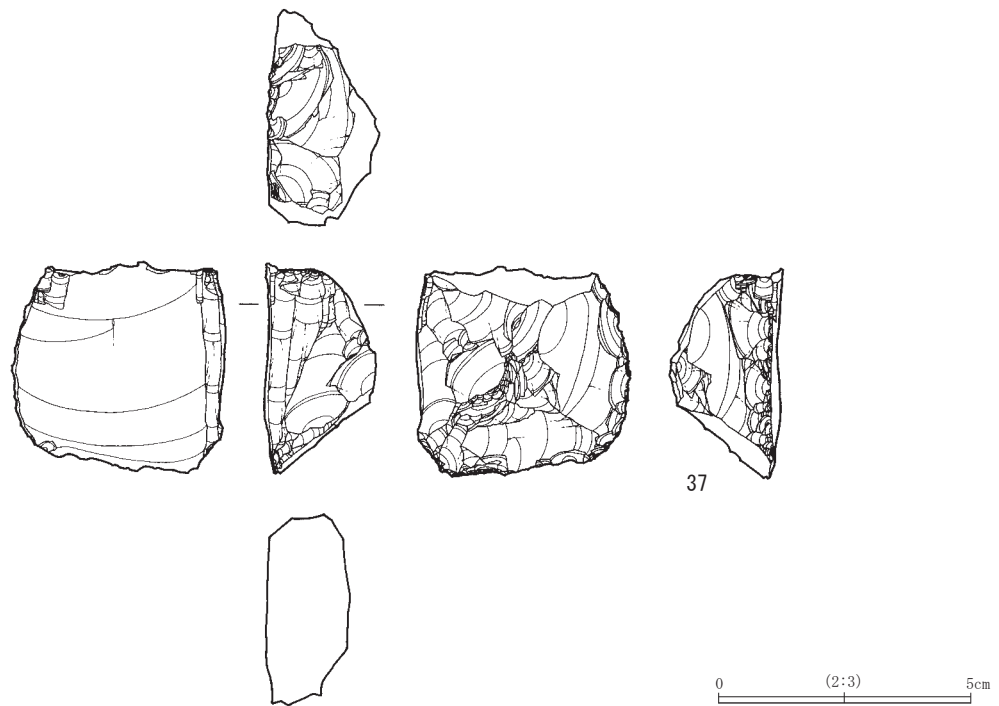
[備考] 本集中区には同一の母岩別資料がなく石器製作の痕跡が認められないことから、斜面上位に形成された集中区から流出して形成された可能性がある。



第22図 石器集中区3器種・母岩別出土状況図



第23図 石器集中区 4 石器・器種・母岩別出土状況図



第24図 石器集中区4出土遺物

石器集中区4

[位置・出土状況] II B48グリッドに位置しており、1.5×1mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部に形成された標高約347.5～347.6mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] II B48グリッド南東部の比較的狭い範囲に分布している。

[出土層位] IIIb層からIIIb-2層で出土しており、IIIb層中部から下部(標高約347.5m)にかけて出土ピークがある。最大で約20cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は6点である。

石器組成は細石刃核1点、剥片4点、チップ1点からなる。

石器材料組成は珪質頁岩と頁岩からなる。

[出土遺物] 37は「荒川台技法」を伴う細石刃核である。厚手の剥片を素材としており、側縁と下縁部に素材腹面側から細かな調整を施し、U字形に整形している。打面が形成された後、両側縁側から細石刃を剥離している。右側縁では細石刃剥離が素材の末端部にまで及んでいるのに対し、右側縁では殆ど剥離できていない。それらの剥離はいずれも背面と腹面側へは展開できずに停止している。石器材料は珪質頁岩である。

本集中区では母岩別資料は確認されていない。

[備考] 本集中区では母岩別資料が存在しないことから、細石刃剥離及び石器製作が行われずに廃棄されたと考えられる。また、本集中区と同じ荒川台技法を確認できる石器集中区8が東に約25m離れた位置にある。

石器集中区 5

[位置・出土状況] II B39・49グリッドに位置しており、6.5×2.5mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部に形成された標高約347.7～347.9mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] II B39グリッド付近を中心に南北方向へ散漫的に広がる。

[出土層位] II層からIIIb-2層で出土しており、IIIb層中部(標高約347.8m)に出土ピークがある。最大で約25cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は14点である。

石器組成は両面調整石器1点、細石刃2点、剥片7点、チップ2点、礫片2点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、凝灰岩からなる。

[出土遺物] 38は両面調整石器。39・40は細石刃。39は、背面の縁辺には細かな剥離、裏面には素材腹面が認められる。また、背面には細石刃を剥離したと思われる剥離面が認められている。このことから細石刃剥離後に再度調整が施されたものと考えられる。このような側縁部調整や素材腹面、背面における細石刃剥離などが認められる点から、「荒川台技法」により剥離された可能性がある。石器材料は全て珪質頁岩である。

本集中区では母岩別資料は確認されていない。

[備考] 細石刃の存在から本集中区は、石器集中区4や8と同一石器群の可能性はある。

石器集中区 6

[位置・出土状況] II B88グリッドに位置しており、2.5×2mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部へと緩やかに上る標高約347.1～347.4mの斜面上で検出している。

[分布状況] II B88グリッド付近を中心に散漫的に広がる。

[出土層位] IIIb層主体に出土しており、IIIb層上面付近(標高約347.2m)に出土ピークがある。最大で約20cmの高低差を有する。IIIb層堆積以降に形成されたものと現時点では捉えているが、全体を把握できていないことから形成時期については不明である。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は8点である。

石器組成は二次加工を有する剥片1点、石刃4点、剥片3点からなる。

石器材料組成は頁岩からなる。

[出土遺物] 41は二次加工を有する剥片。42～45は石刃。打面付近には頭部調整が認められ、背面と腹面の剥離方向は基本的に同じである。44の右側縁末端部には作業面稜調整が認められる。石器材料はすべて頁岩である。

上記の石器から4母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

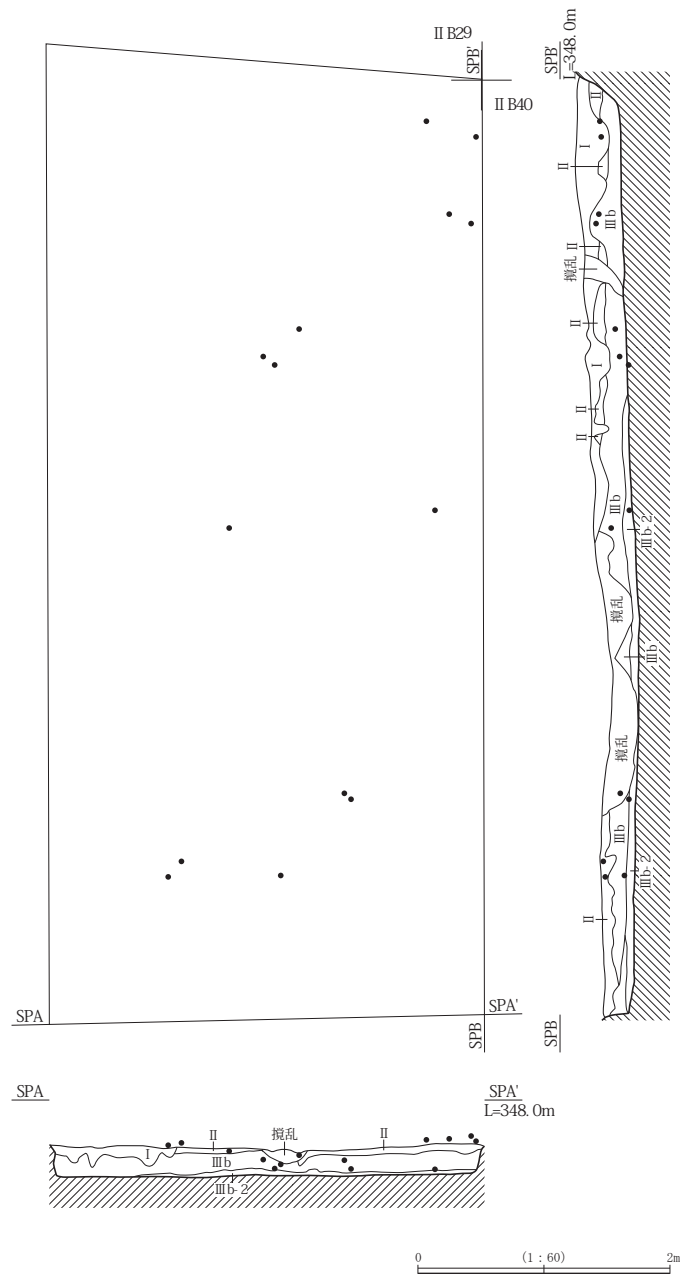
sh5：総点数2点、総重量32.68g。石刃と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐色が斑に入る。石質はやや粗粒であるため僅かにざらつく。

石刃(43)は出土遺物に記載している。石器集中区11と共有しているが、その形成時期が異なることから本母岩の石器が入り込んだ可能性がある。

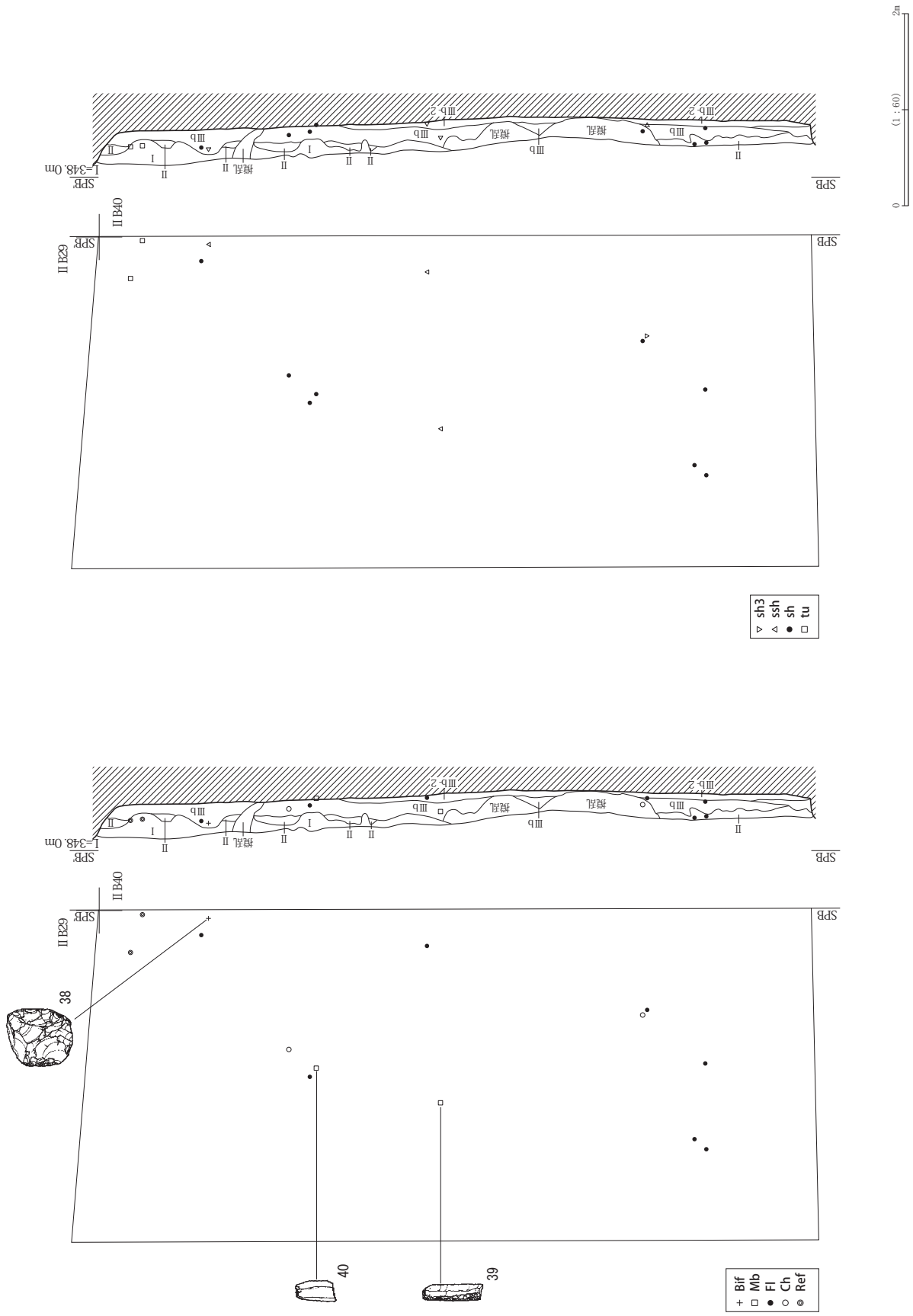
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh6：総点数2点、総重量59.79g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白色が斑に、灰黄褐色が層状に入る。石質は緻密でなめらかである。外観等から分類したが、sh7と同一母岩の可能性はある。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

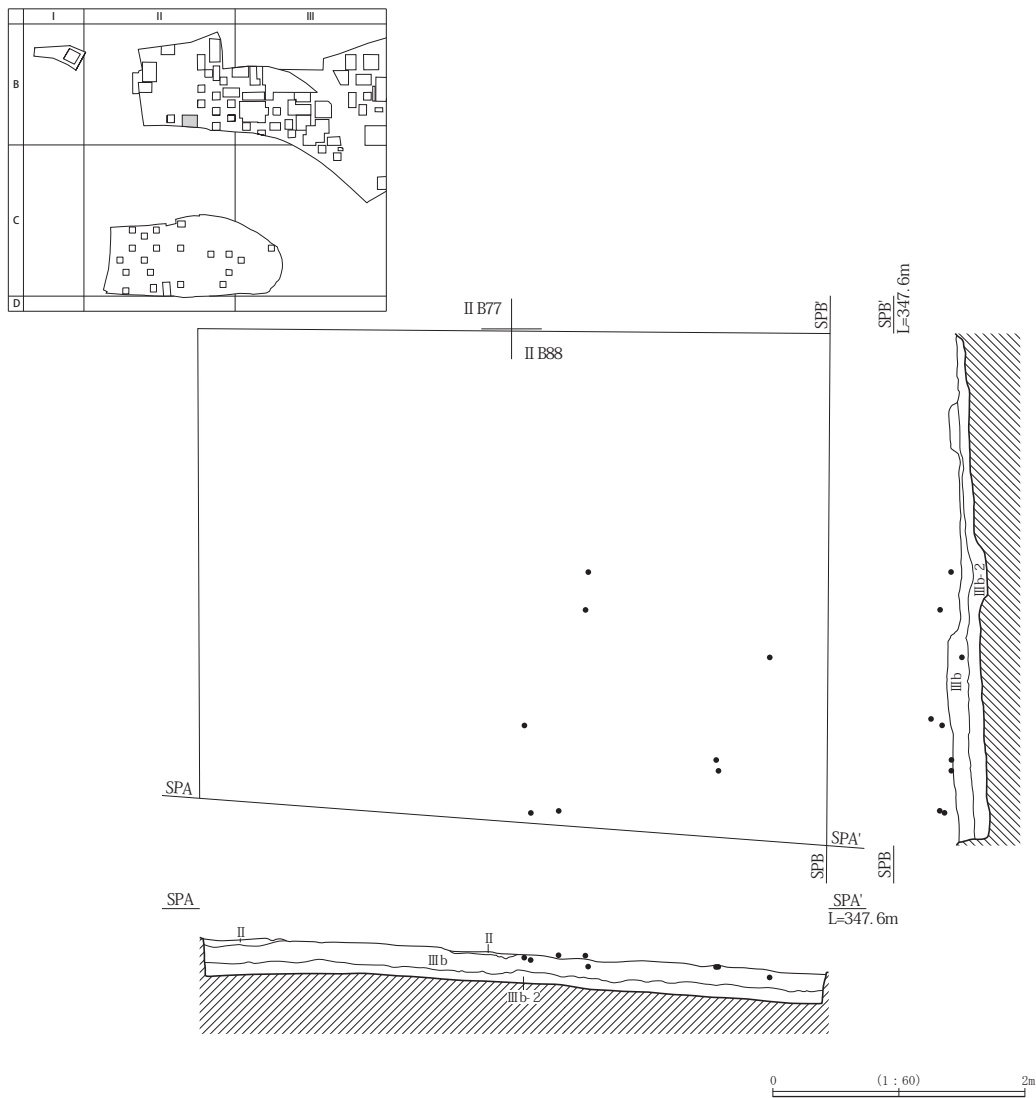
sh7：総点数2点、総重量49.66g。石刃と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基



第25図 石器集中区5 石器出土状況図



第26図 石器集中区5器種・母岩別出土状況図



第27図 石器集中区6石器出土状況図

調とし、浅黄橙色が層状に入る。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。sh6と同一母岩の可能性はある。

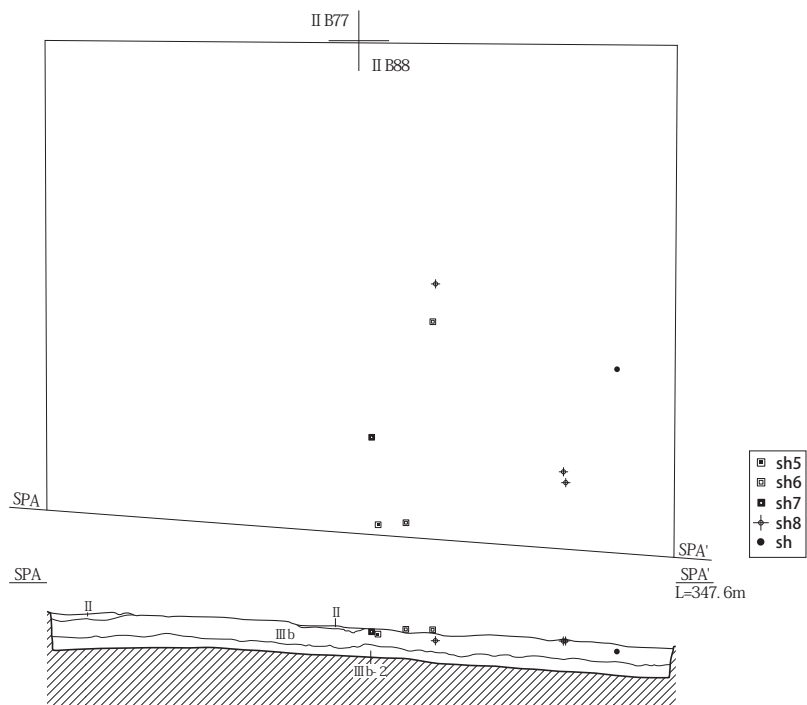
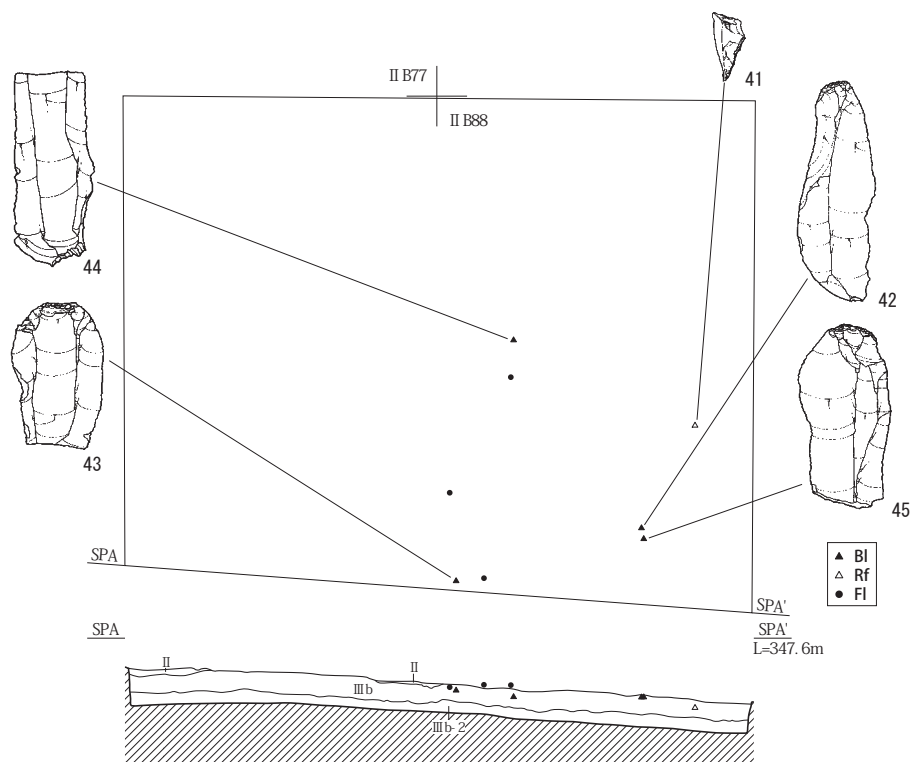
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh8：総点数3点、総重量50.94g。石刃で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐色が斑に入る。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

石刃(42、44、45)は出土遺物に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

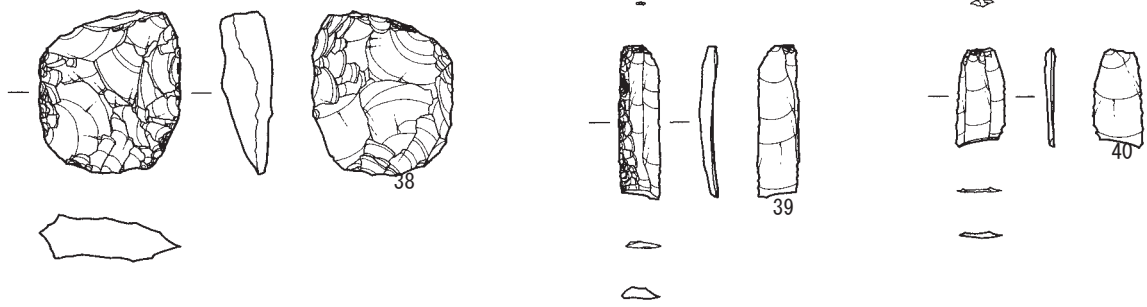
[備考] 本集中区と同様の内容は遺跡には認められない。保存区域となった南側に石器集中区は広がることが想定されることから全容は不明である。



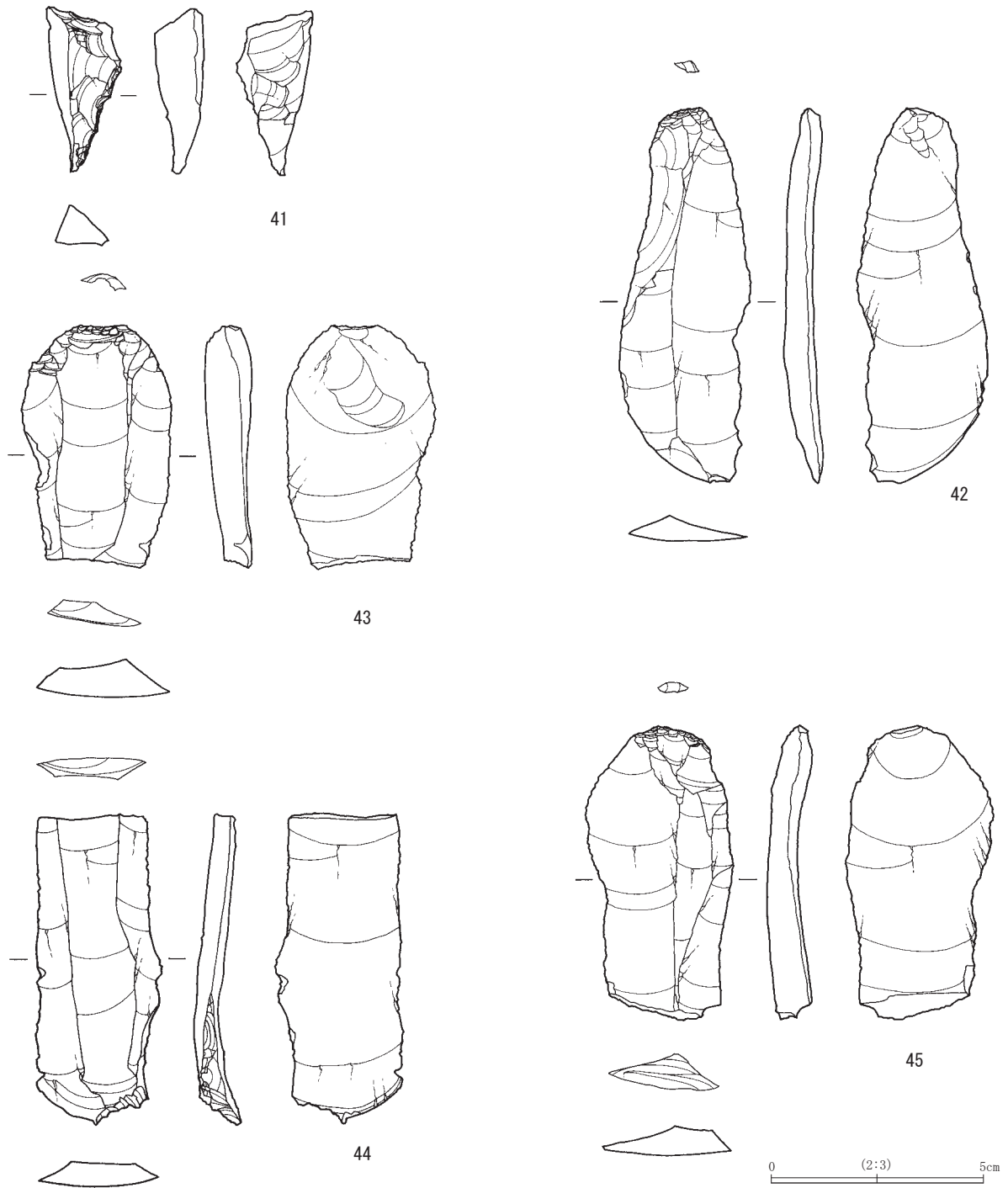
0 (1 : 60) 2m

第28図 石器集中区 6 器種・母岩別出土状況図

石器集中区 5



石器集中区 6



第29図 石器集中区 5・6 出土遺物

石器集中区 7

[位置・出土状況] Ⅲ B71・72・81・82グリッドに位置しており、7.5×6 mの範囲に収まる。段丘内陸部から縁辺部へと緩やかに上る標高約346.6～347.0mの斜面上で検出している。

[分布状況] Ⅲ B72グリッド西側を中心に分布しており、東西方向に広がる。

[出土層位] Ⅱ層からⅣ-2層で出土しており、Ⅳ層下部(標高約346.3m)に出土ピークがある。最大で約75cmの高低差を有する。Ⅳ層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は153点である。

石器組成はナイフ形石器1点、彫刻刀形石器2点、スクレイパー1点、二次加工を有する剥片5点、石刃12点、剥片114点、チップ12点、石核2点、礫片4点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、赤色頁岩、凝灰岩からなる。

[出土遺物] 46は二側縁加工ナイフ形石器。石刃を素材とし、素材打面を基部側に据えている。素材縁辺を右側縁に残しており、左側縁を中心に素材打面を含めて素材を大きく断ち切っている。加工は基部裏面にまで及び斜行した剥離が認められる。47と48は神山型彫刻刀形石器。両者は石刃を素材とし、素材打面を基部側に据え、左肩に彫刻刀面を作出している。基部加工は認められないことから、素材形状は大きく変形していない。49は二次加工を有する剥片、50・51は石刃である。これらの背面と腹面の剥離方向は概ね同じである。石器材料は46～48が珪質頁岩、それ以外は頁岩である。

上記の石器から5母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめておく。

sh 9 : 総点数28点、総重量313.25g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片などで構成される資料である。剥離面は、灰黄色～褐灰色を基調とし、黒褐色が点状に入る。礫面付近ではにぶい黄橙色、礫面はにぶい褐色を呈する。石質は緻密でなめらかである。礫面付近はやや粗粒であるため僅かにざらつく。

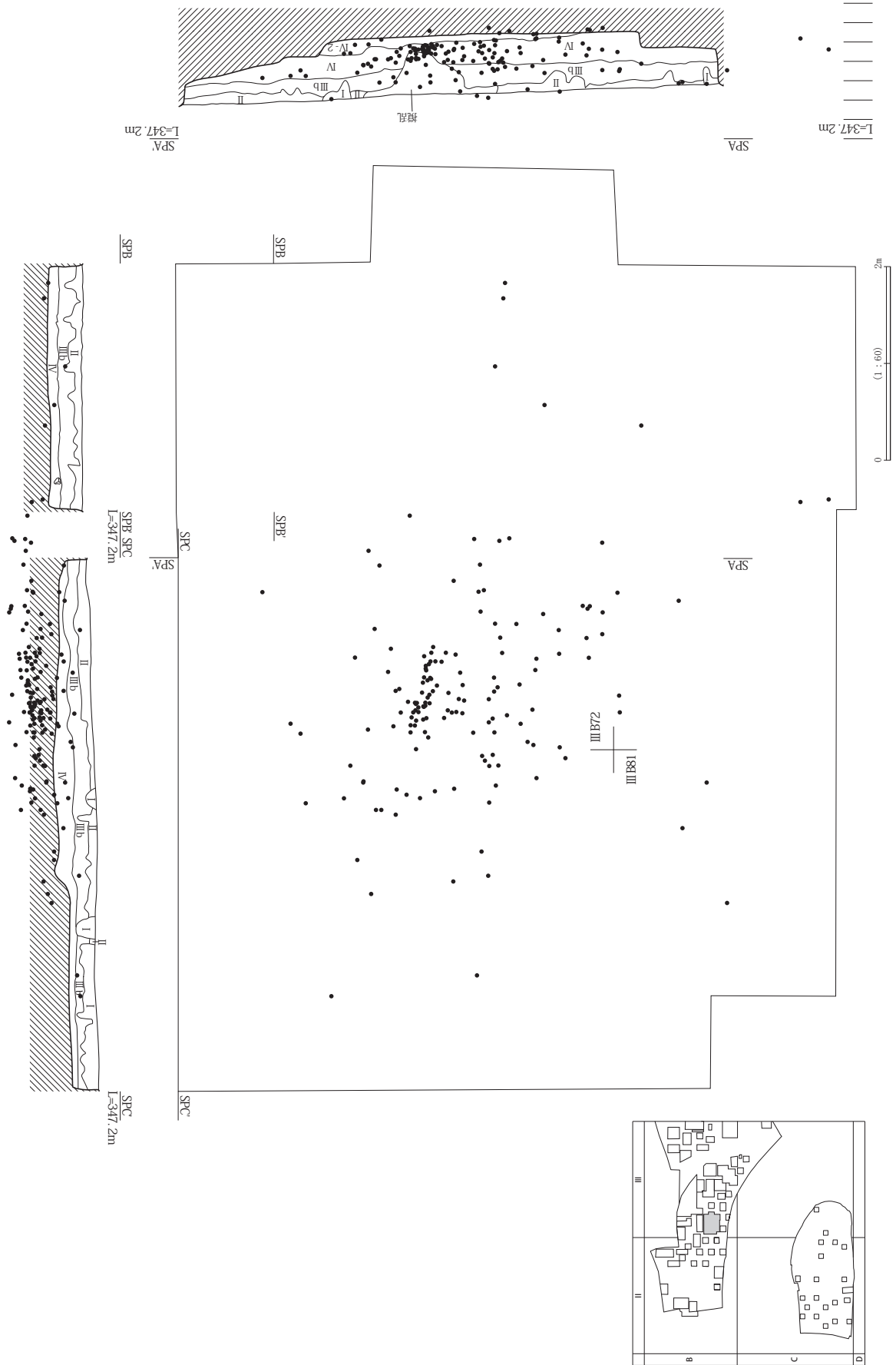
接合点数は25点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは14点で、石刃と剥片からなる。個体bは11点で、剥片からなる。

個体aの剥離工程は52→55→53→54→56→58→57→59→(60+61a+b)→62→63→64である。本個体は作業面稜調整から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。右側面において作業面稜調整を施した後、上設打面から剥離している。作業面稜調整剥片はウートラパッセの剥離となり、作業面下半を大きく変形させている。この剥離以降は、作業面を正面側に据えて、目的剥片である石刃及び縦長剥片を連続的に剥離している。これらの剥離に伴い打面再生が行われているため、打面の位置が徐々に低くなり作業面高が減少している。また工程の終盤には下設打面からの剥離も認められており、180度打面転位を繰り返している。

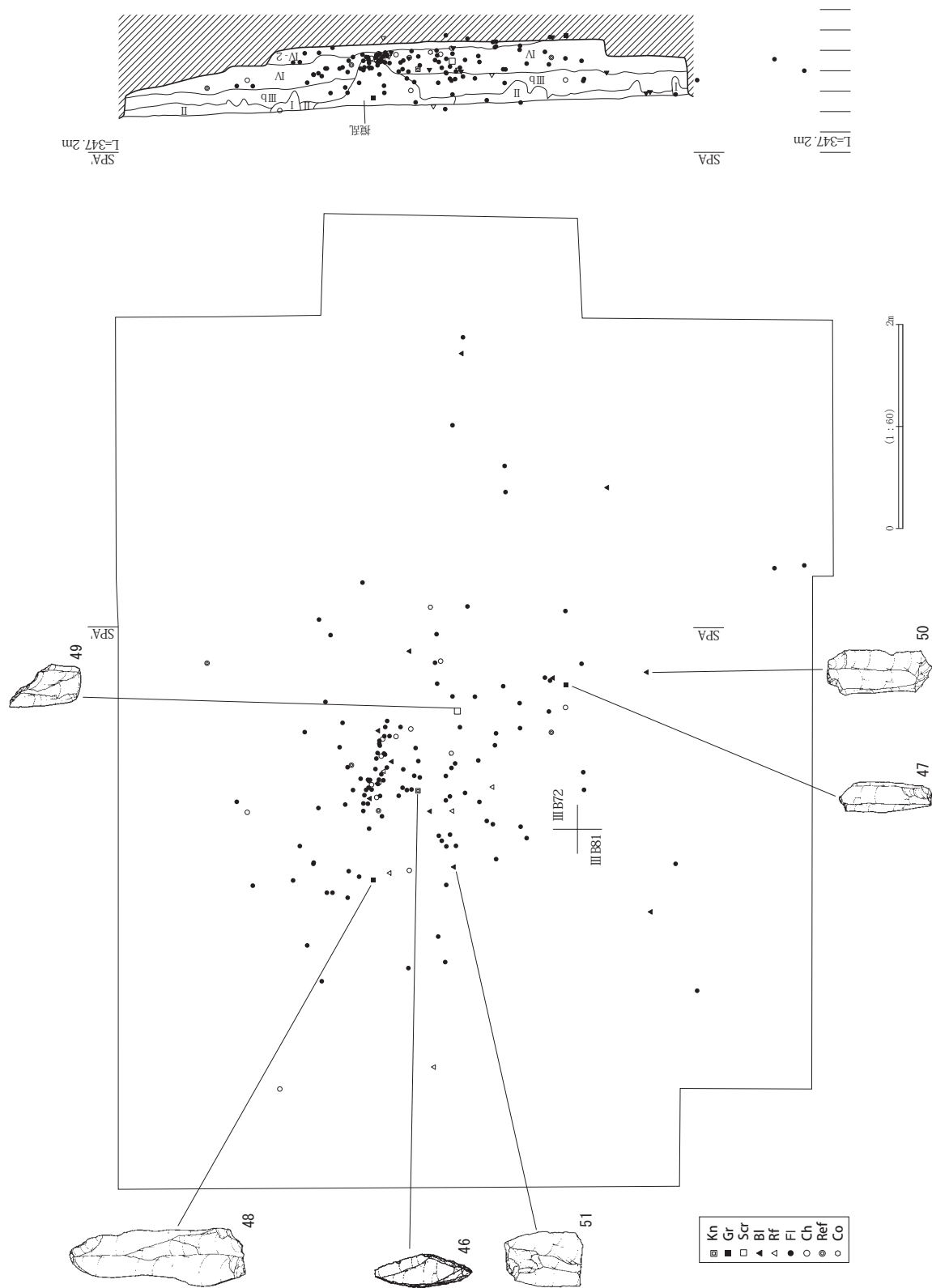
個体bの剥離工程は67→68→69→70→71→(72a+b)→73→74→76→75である。本個体は打面再生から目的剥片剥離過程に伴う資料である。打面再生に伴う横長剥片を連続的に剥離した後、90度打面転位して上設打面から縦長剥片を剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは、この縦長剥片を剥離する以前にも上設打面から剥離が捉えられる。計3回の打面再生の間に目的剥片となる石刃や縦長剥片を剥離しているが、それらは本母岩に認められないことから搬出されたものと考えられる。

この両者は接合関係にはない。個体の規模は個体aの方が大きく、背面側に自然面が多く残されている。また、個体bから剥離される縦長剥片の規模は、個体aの打面転位が行われた後に剥離された剥片の規模に近い。このことから個体a→bへの剥離工程が想定される。

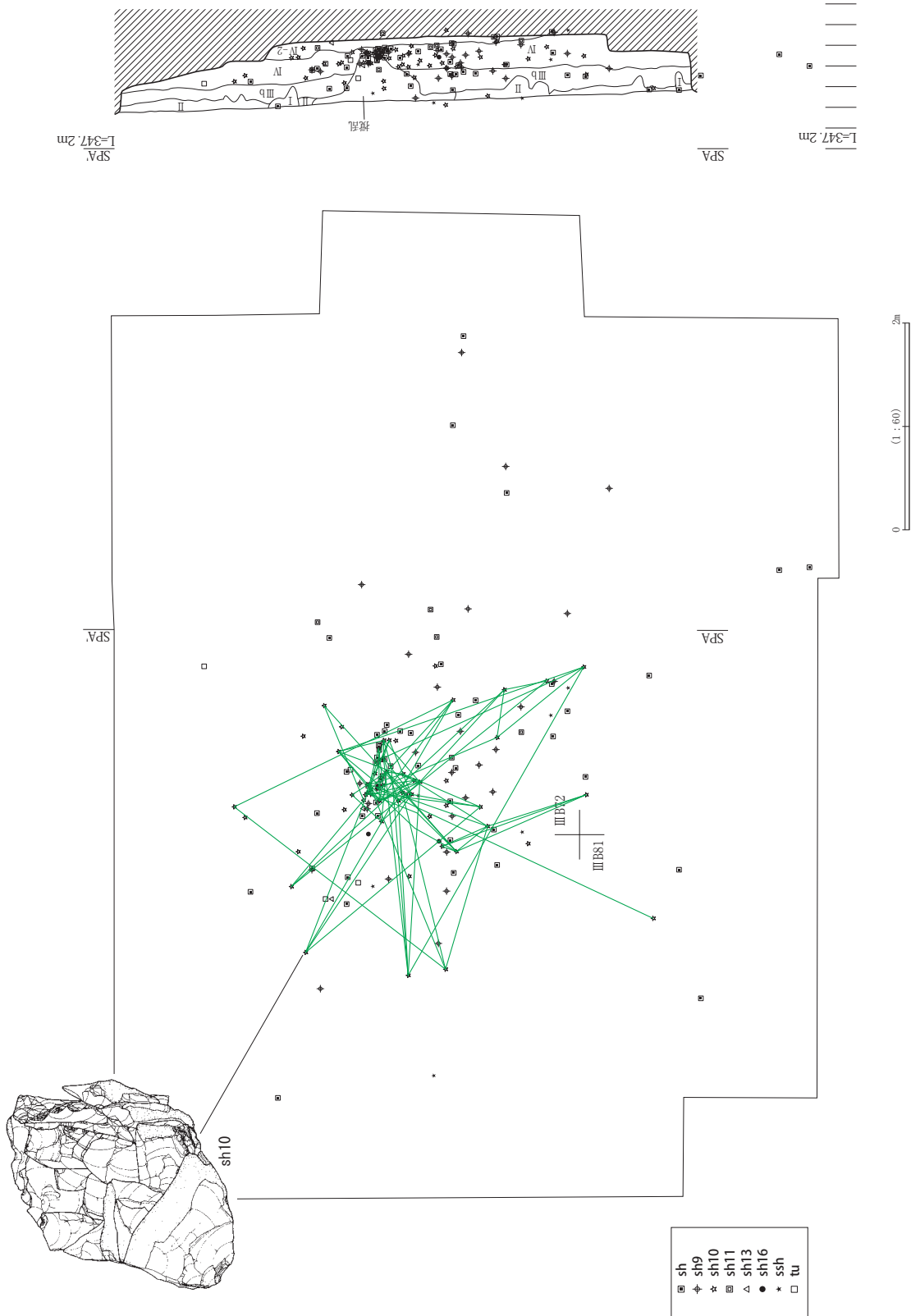
本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。



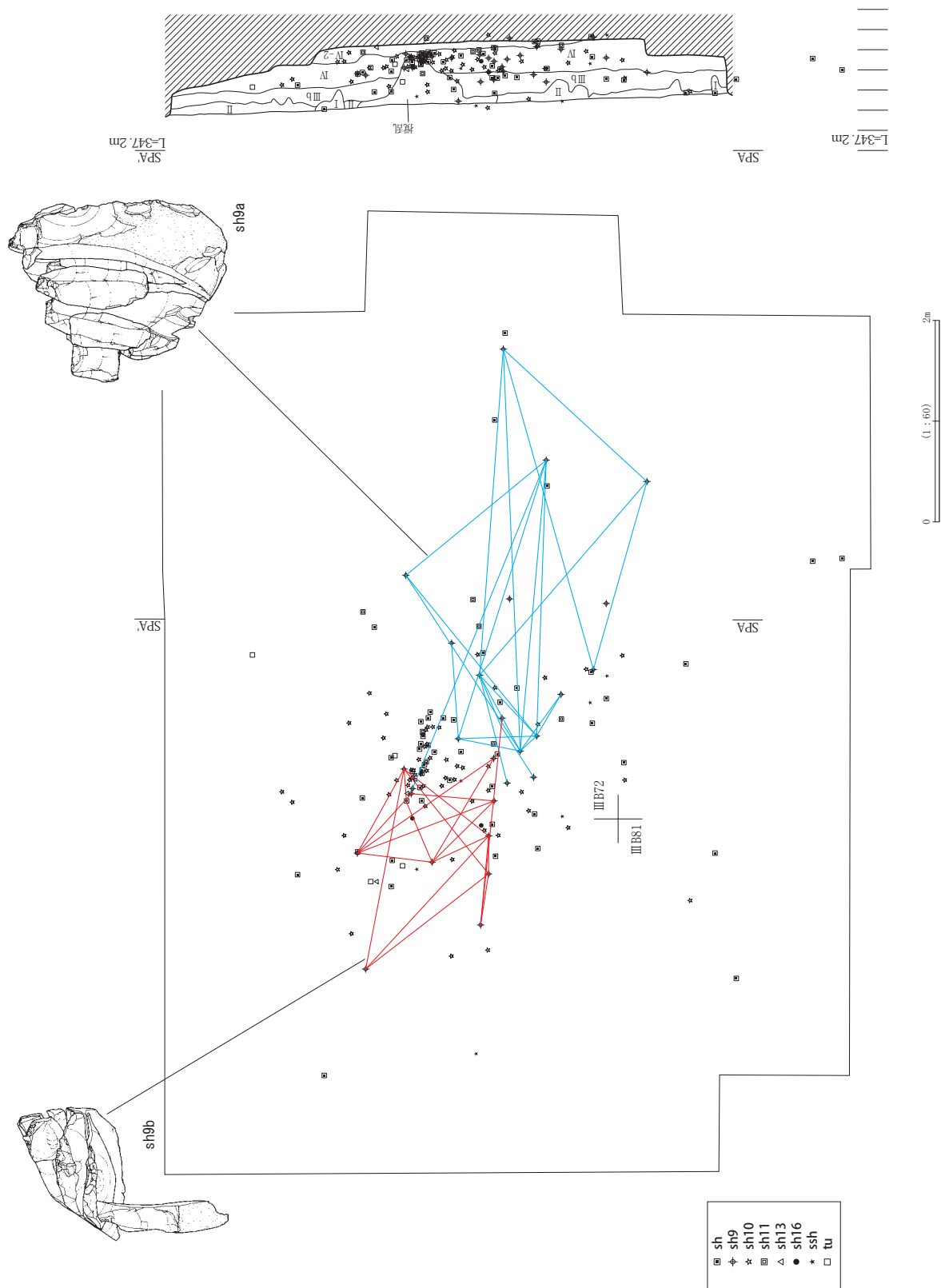
第30図 石器集中区7 石器出土状況図



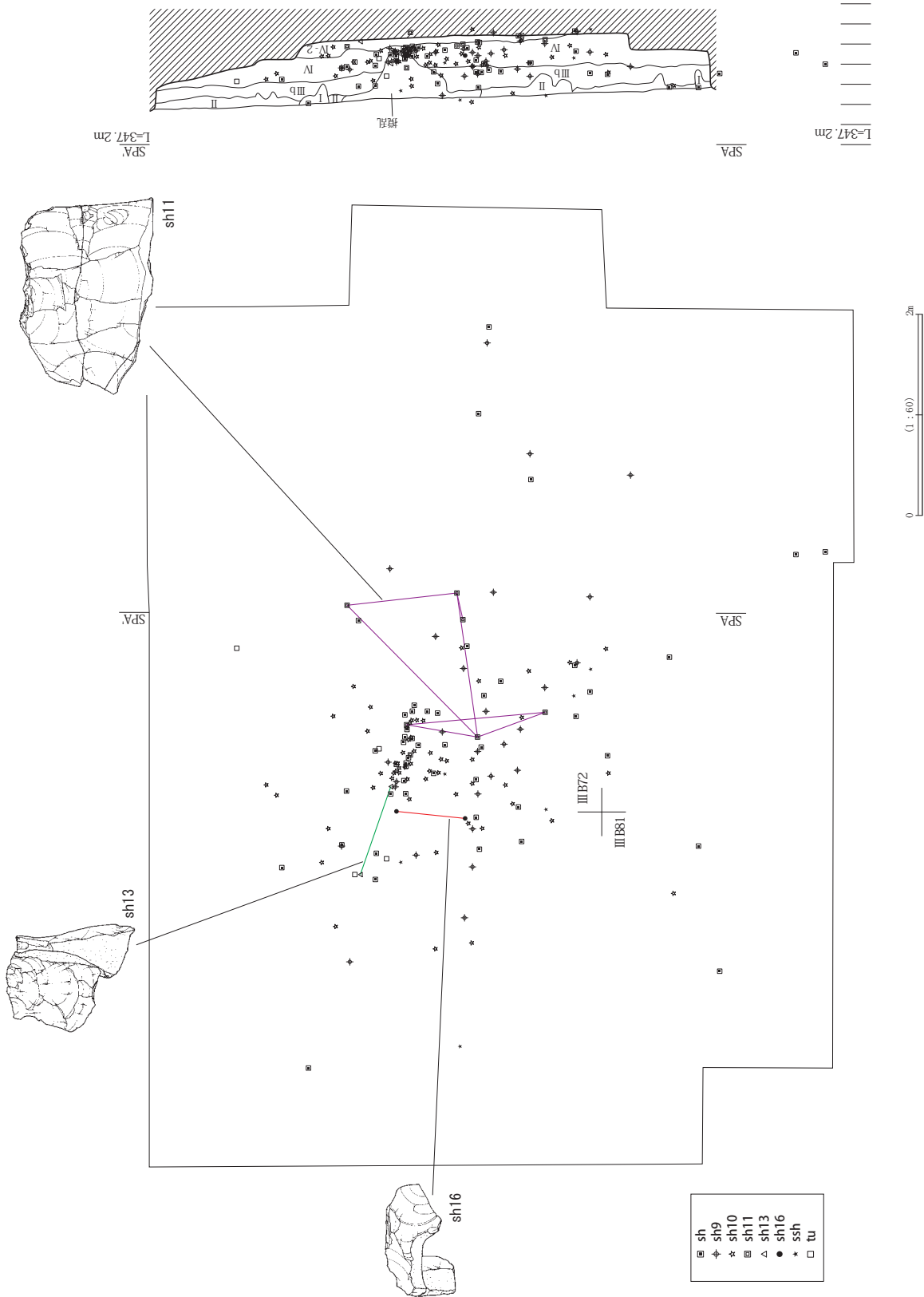
第31図 石器集中区7器種別出土状況図



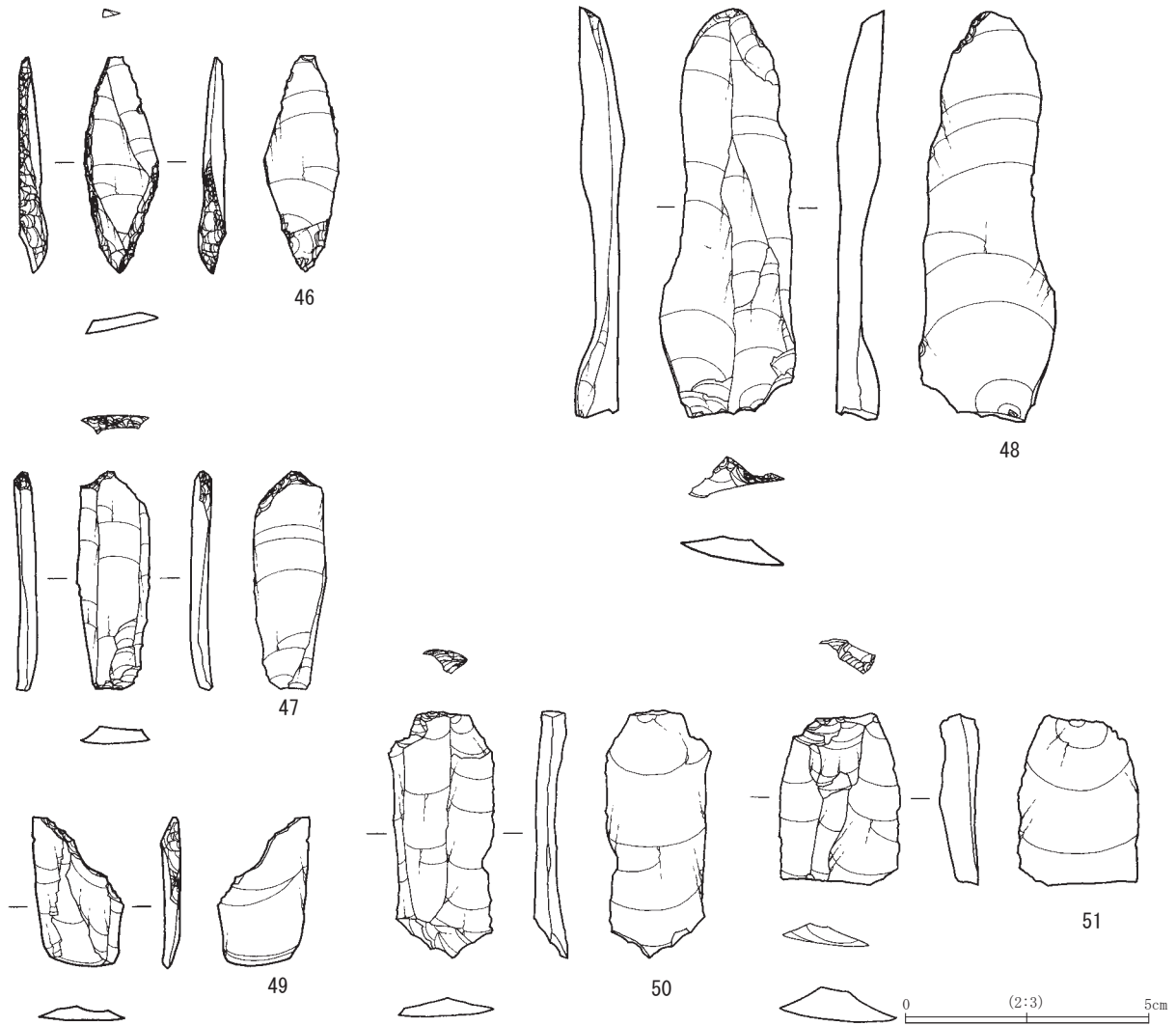
第32図 石器集中区7 母岩別出土状況図 (1)



第33図 石器集中区7 母岩別出土状況図 (2)



第34図 石器集中区7 母岩別出土状況図 (3)

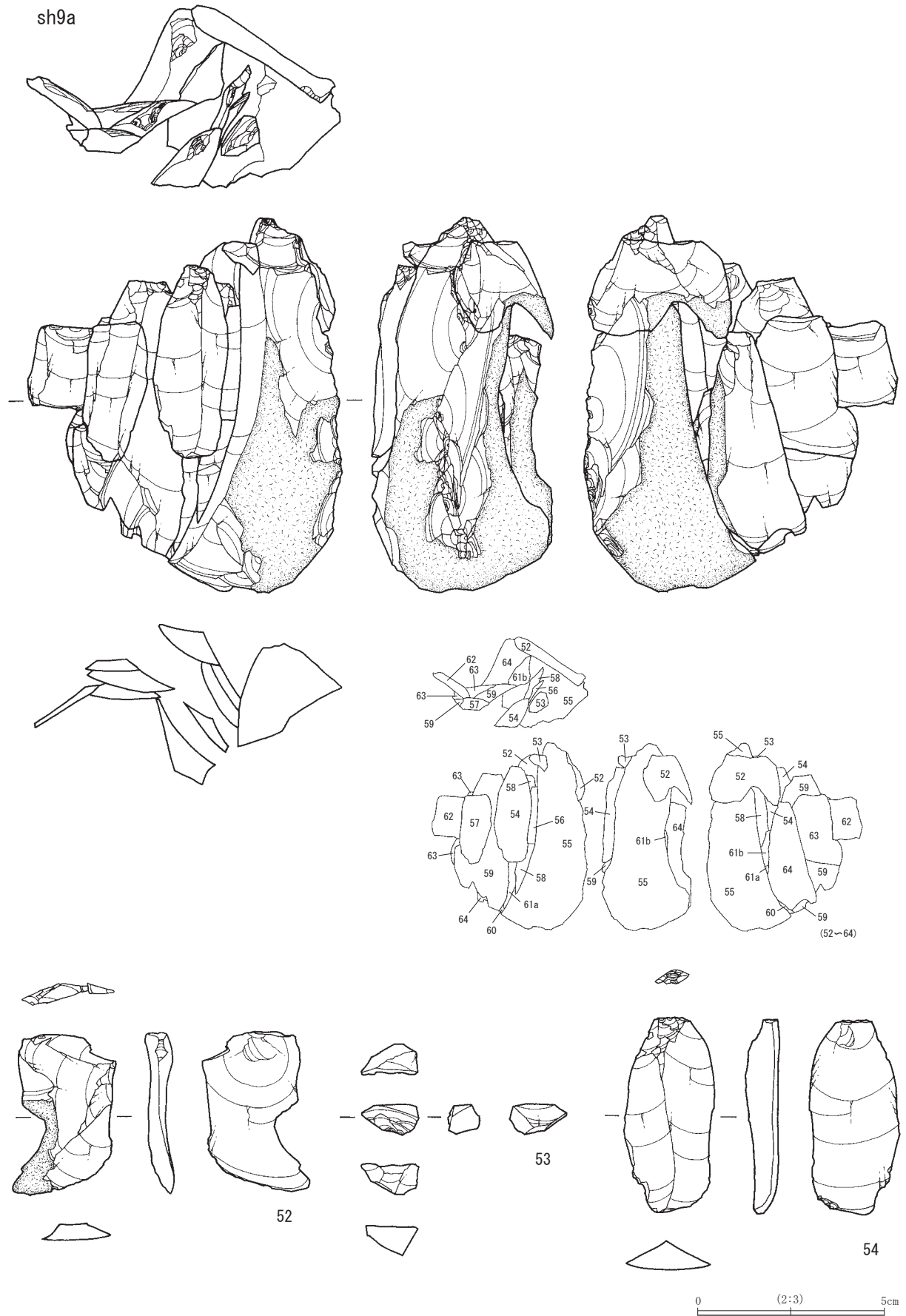


第35図 石器集中区7出土遺物(1)

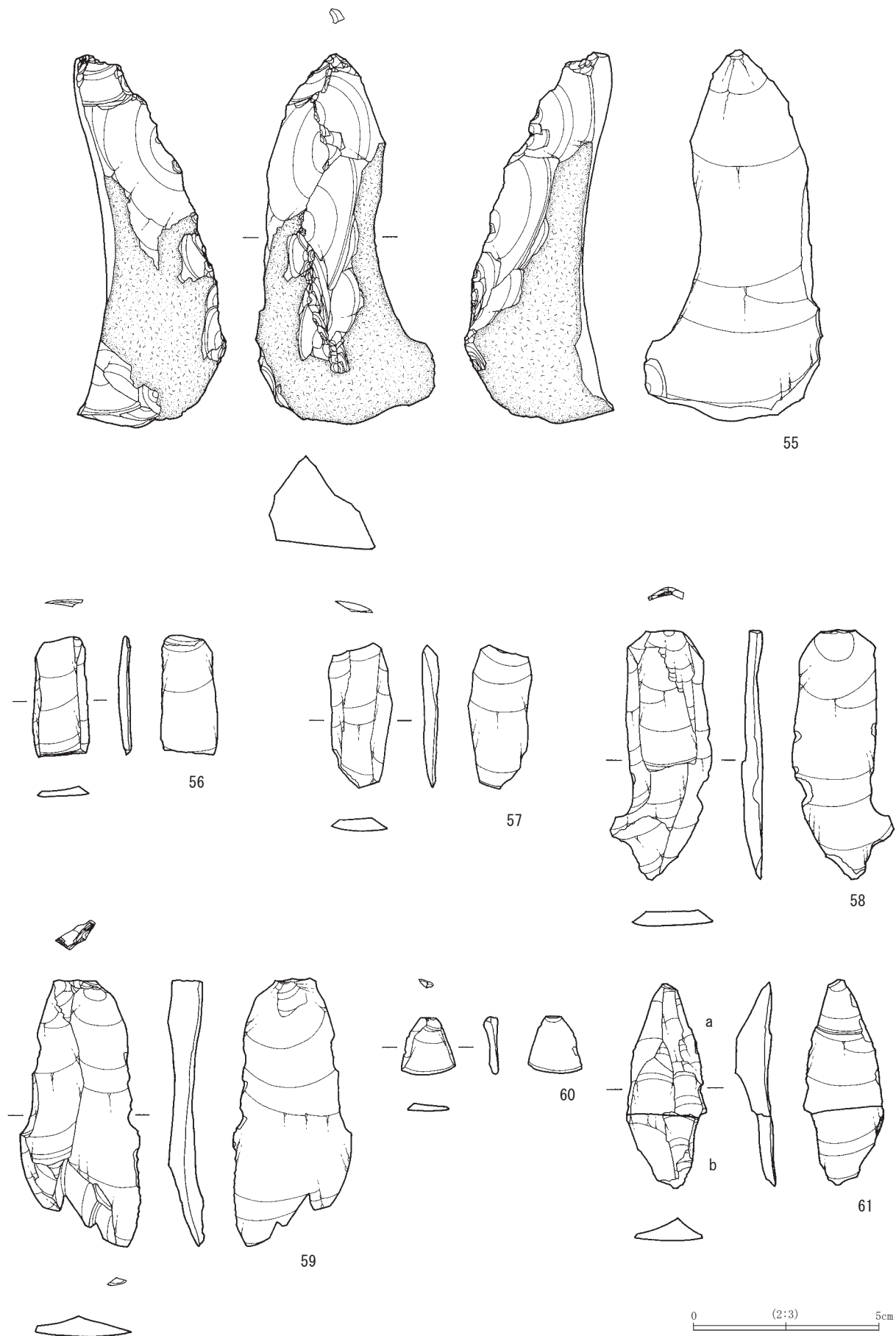
sh10：総点数60点、総重量501.34g。石刃、剥片、チップなどで構成される資料である。剥離面は、暗灰色～灰を基調とし、部分的に灰白色がみられる。自然面は淡黄色や黄灰色を呈する。石質は緻密だが、やや粗粒で僅かにざらつく。本集中区の中心部から出土している。

接合個体は点数が43点、石刃と剥片からなる。剥離工程は(79a+b)→80→<81><82>→①・②→<84>→83><85+86>→87→<90>(88a+b+89)><91>→92→(93a+b+c)→<94>→95><(96+97)→(98+99)→100→101>→102→103→<(104+105)→106><108→107③>、①→<109→110><111>、②→112→<<113>><<114→115→116><117>>→<108→107③>である(<○>、<<○>>や・同志の前後関係は不明。また①②以降は接合関係にないことから、このような記載をしている。この工程の中で②は、最終段階の剥離工程に再度組み込まれている)。本個体は礫面除去・石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面下半や右側面において礫面除去及び石核整形を行う。打面が上面に設定された後、作業面をほぼ正面側に据え、目的剥片である縦長剥片や石刃を剥離している。この剥離に伴い正面右側において作業面稜調整を施しているが、それ以降も同一箇所でも2回の調整が認められている。また、これに伴い打面再生が繰り返されている。本母岩の接合状況は中は空洞である。

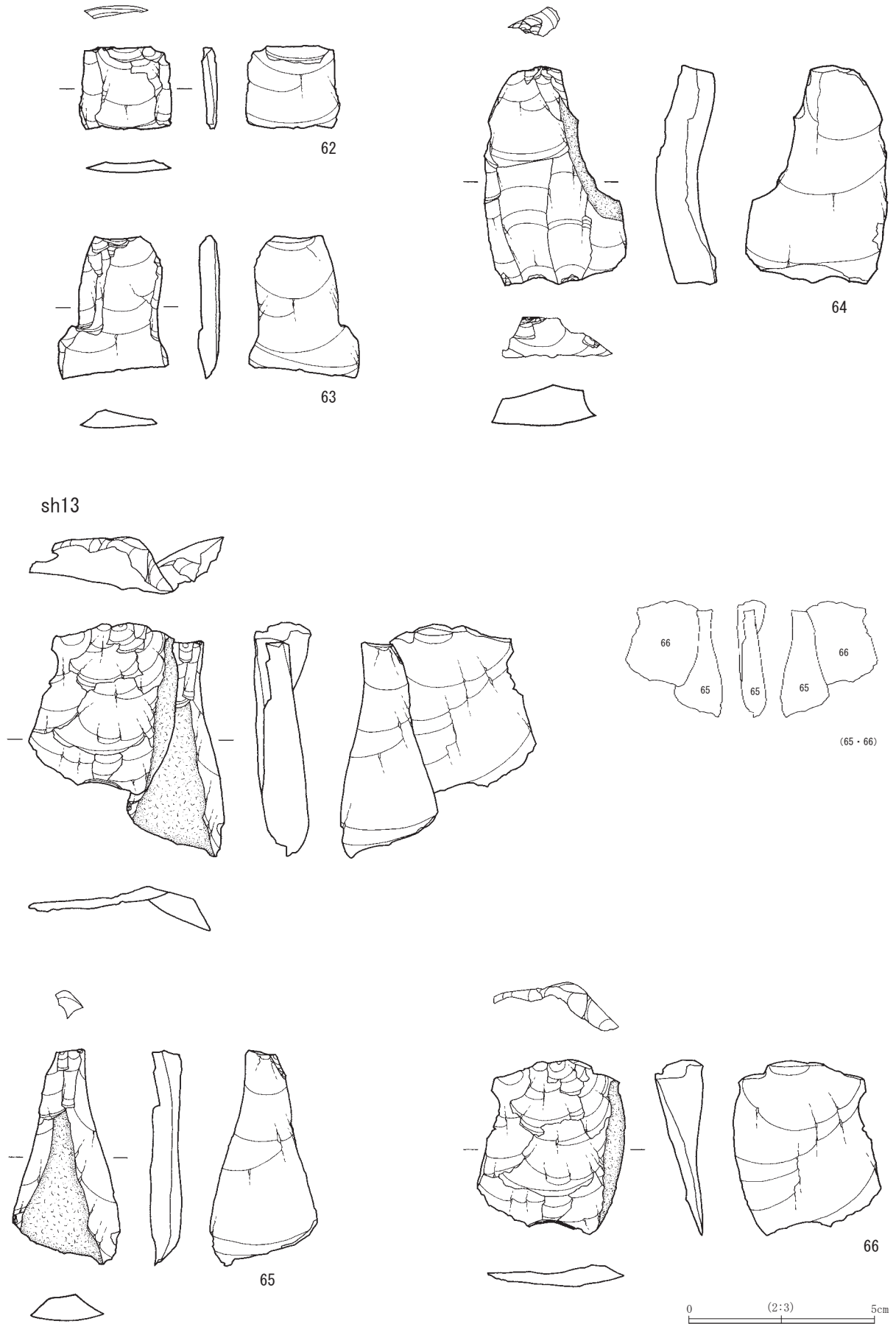
本母岩は中型の垂角～垂円形状の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。



第36図 石器集中区7出土遺物(2)

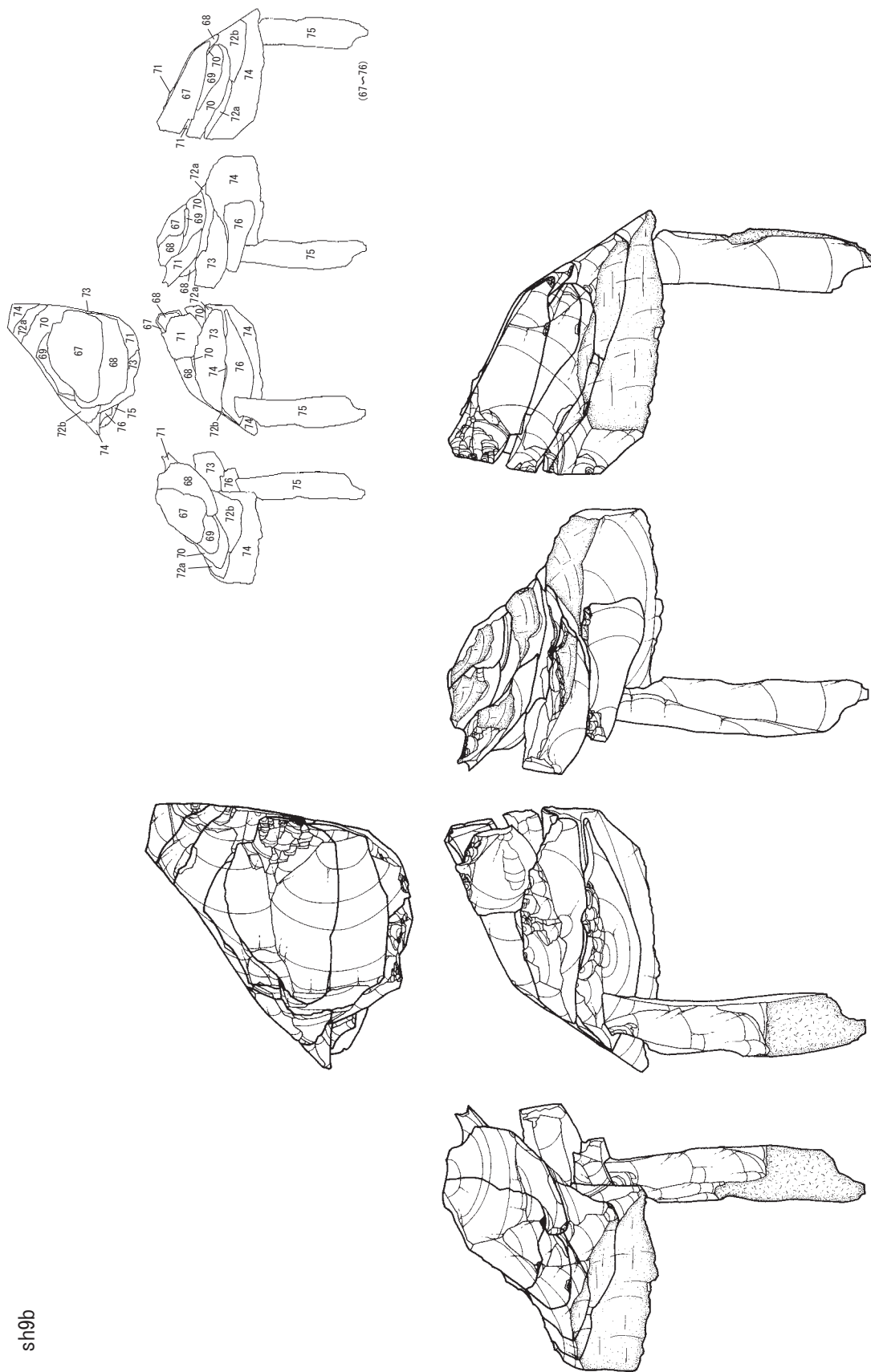


第37図 石器集中区7出土遺物(3)

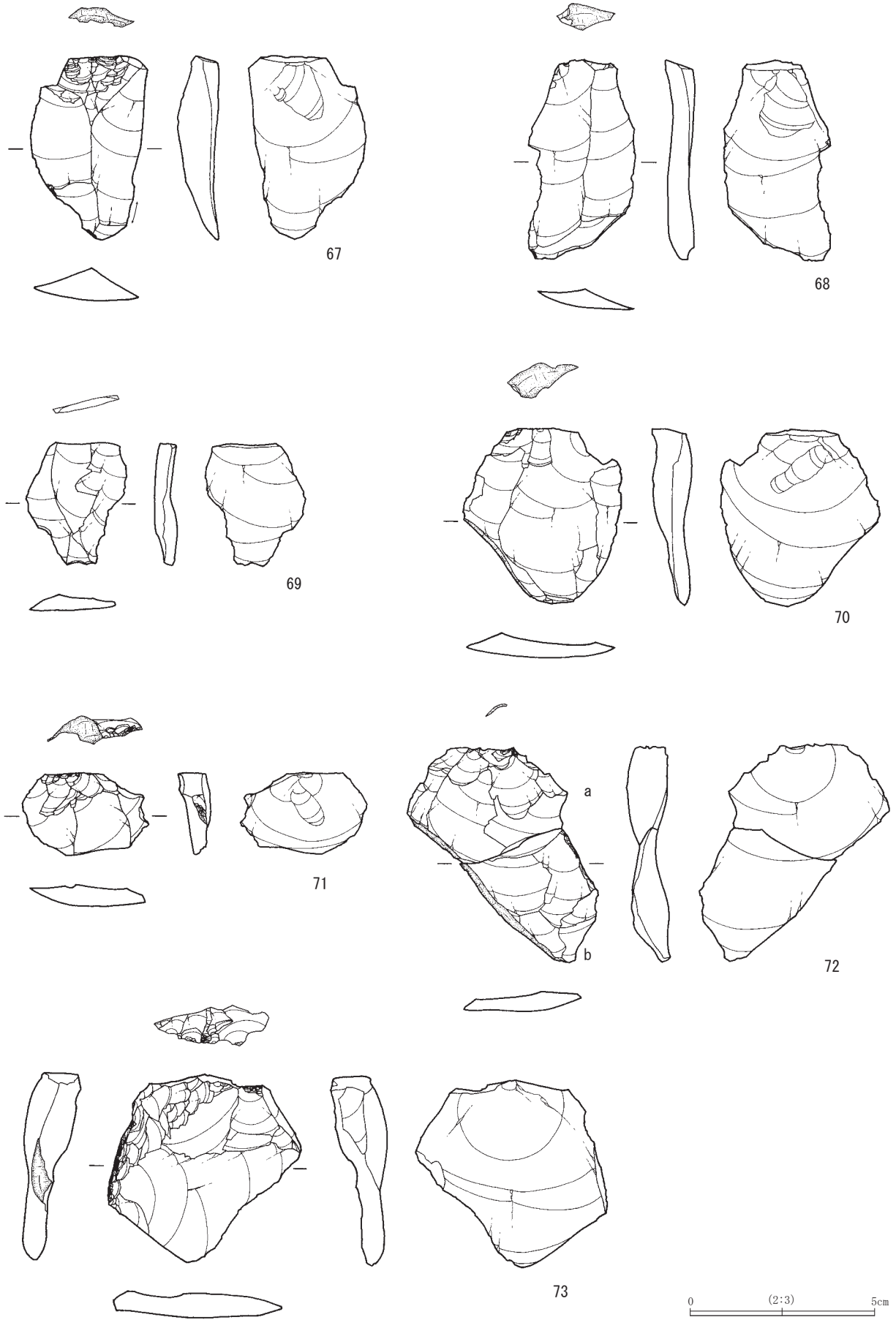


第38図 石器集中区7出土遺物(4)

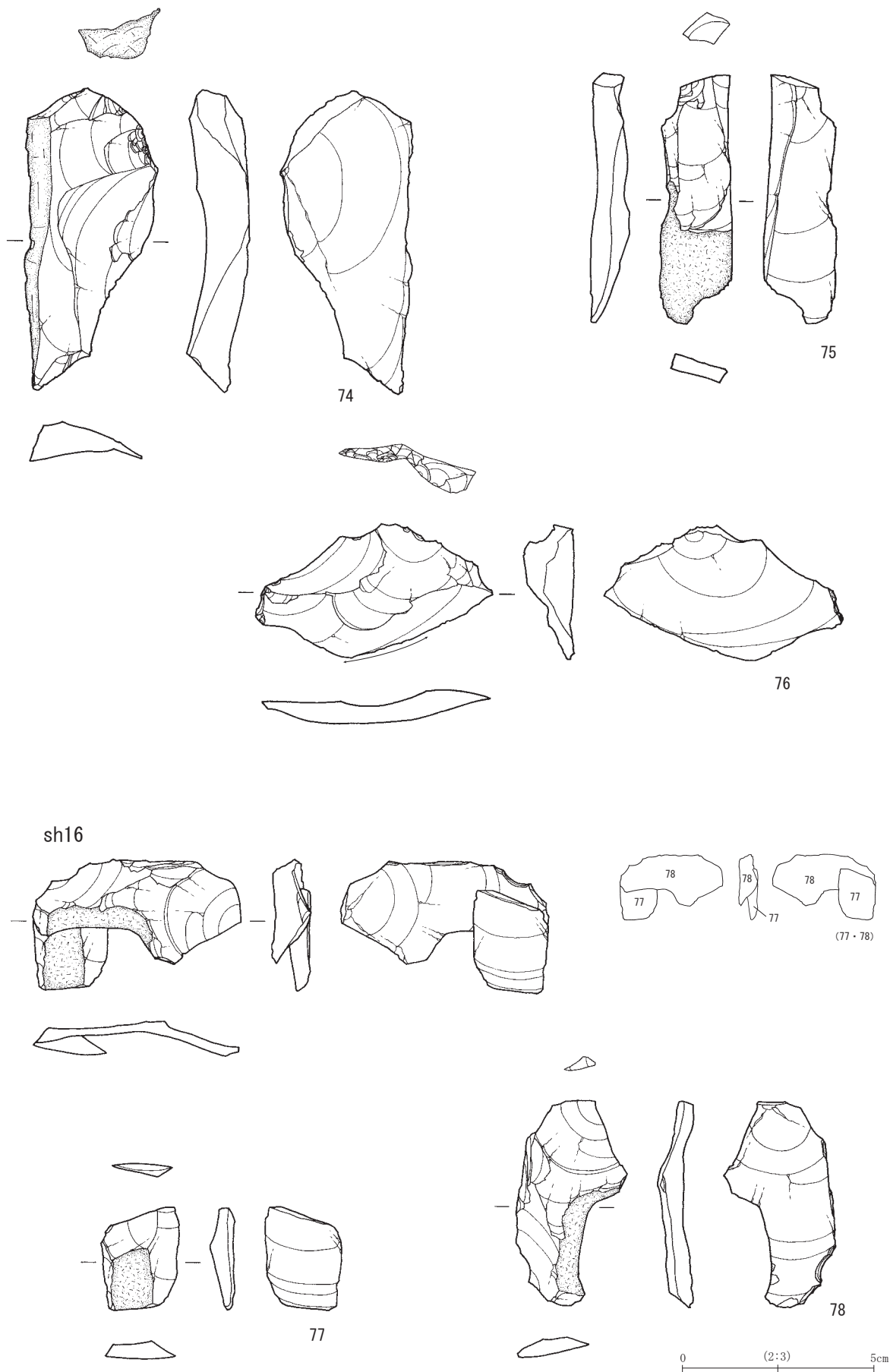
sh9b



第39図 石器集中区7出土遺物 (5)

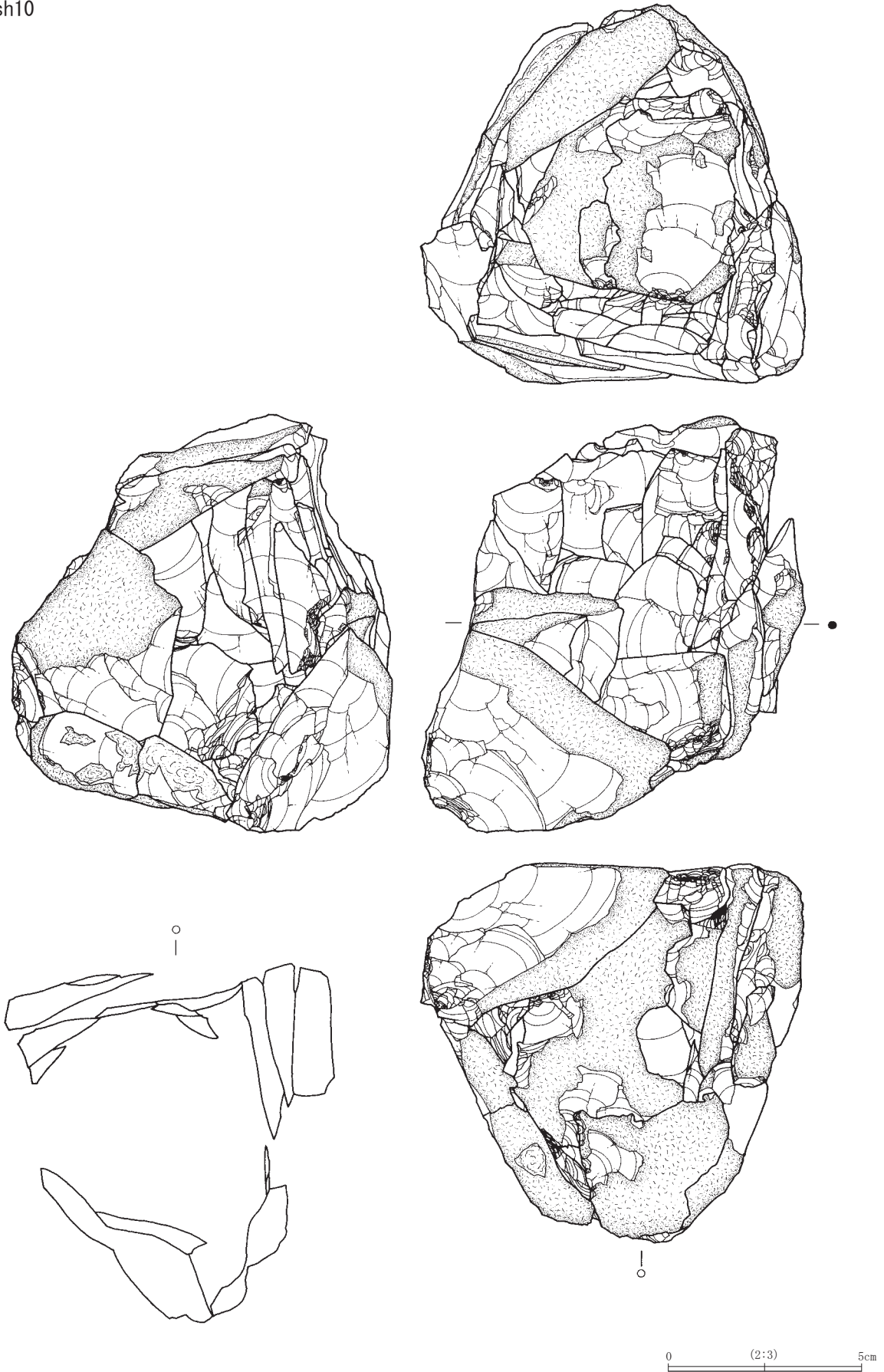


第40図 石器集中区7出土遺物(6)



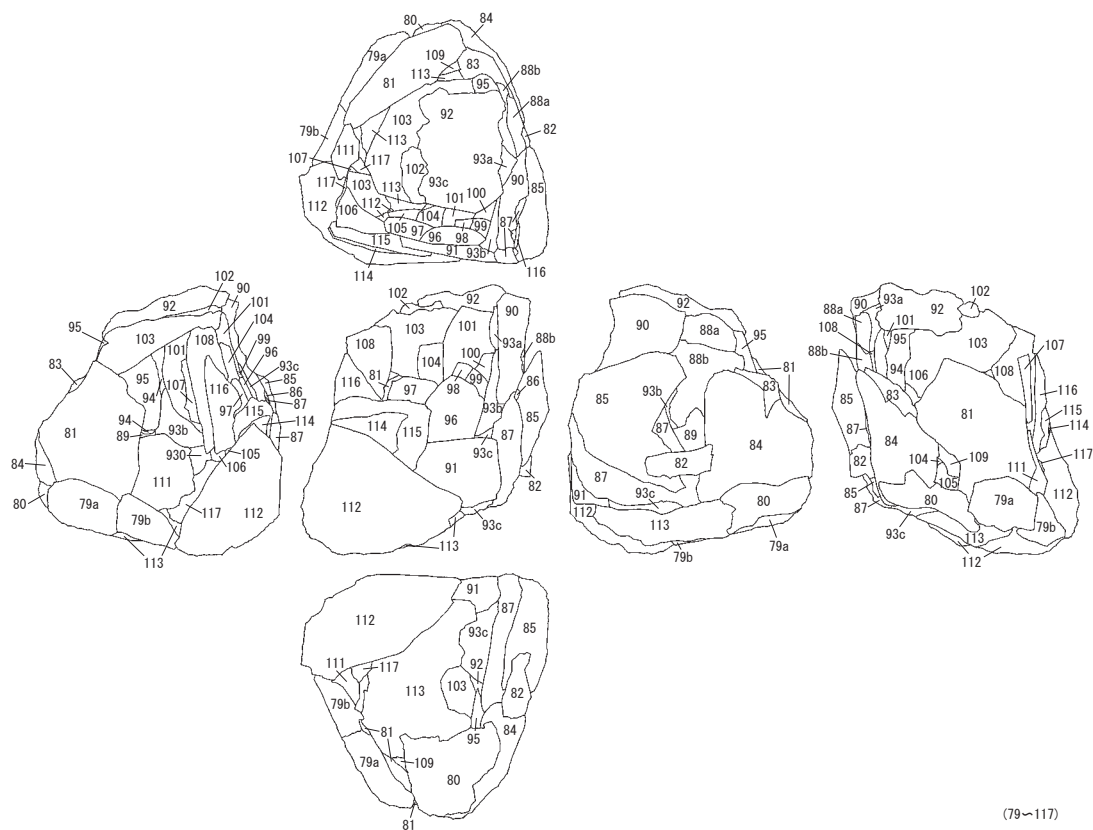
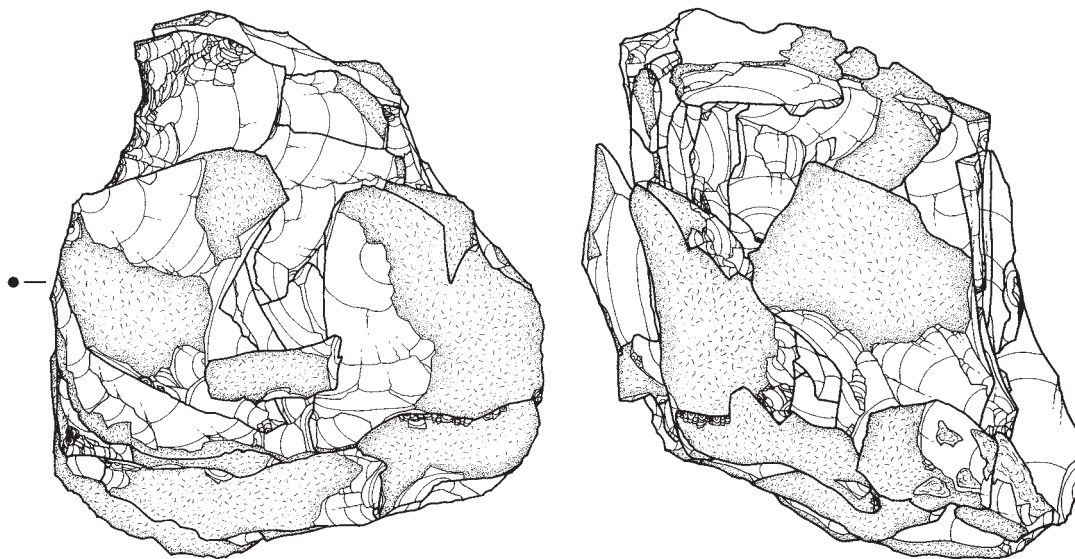
第41図 石器集中区7出土遺物(7)

sh10



第42図 石器集中区7出土遺物(8)

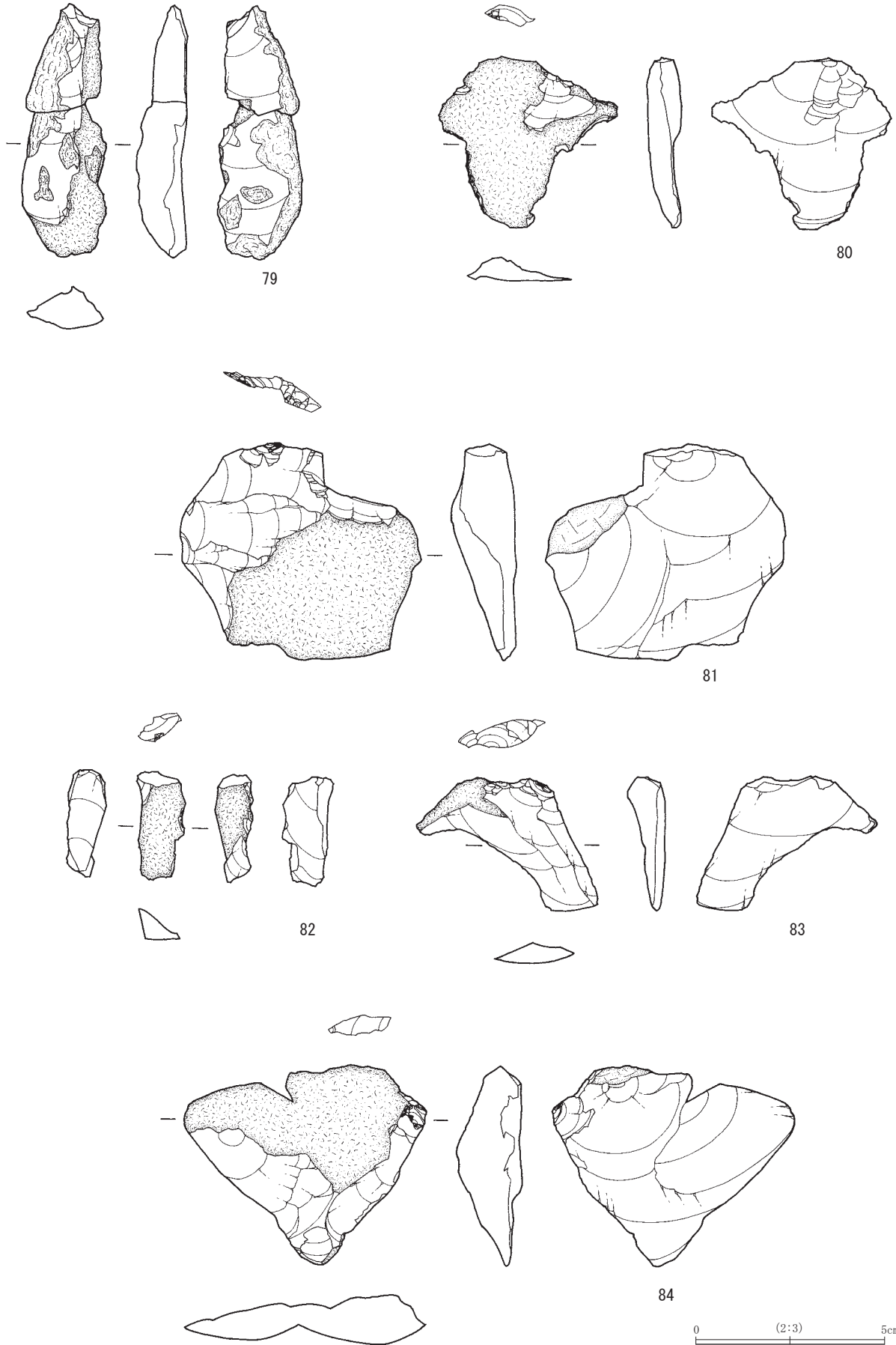
(sh10)



(79~117)

0 (2:3) 5cm

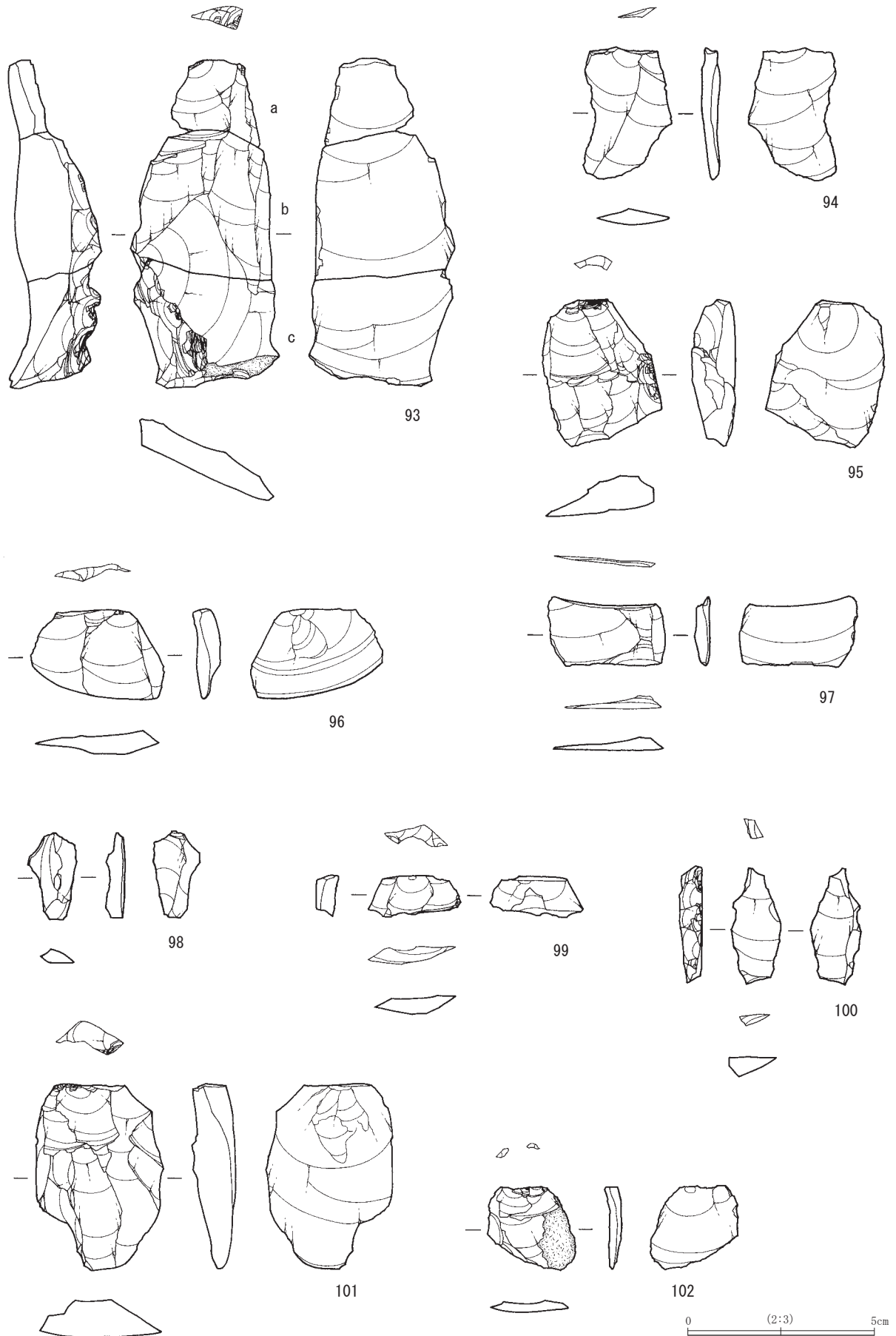
第43図 石器集中区7出土遺物(9)



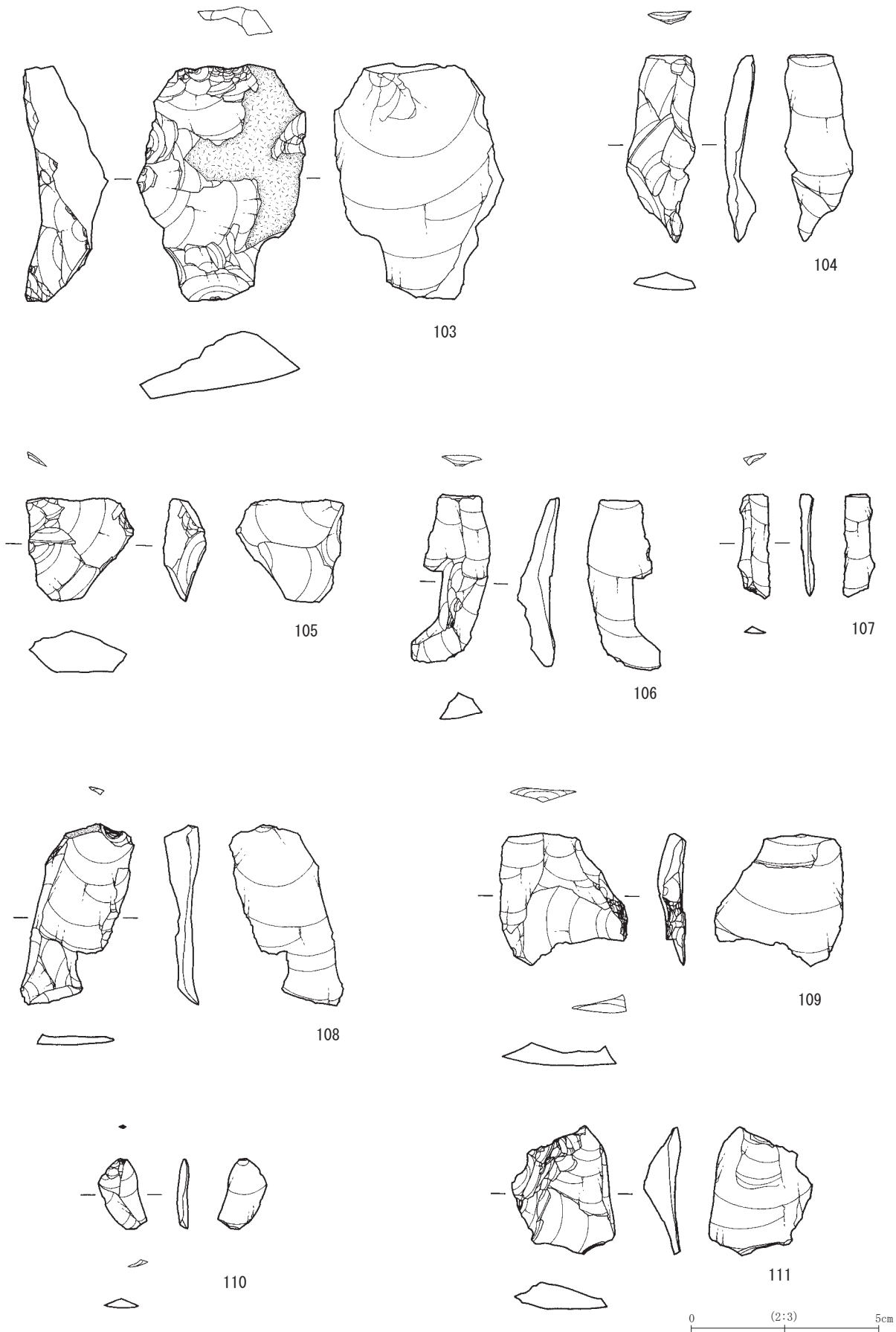
第44図 石器集中区7出土遺物 (10)



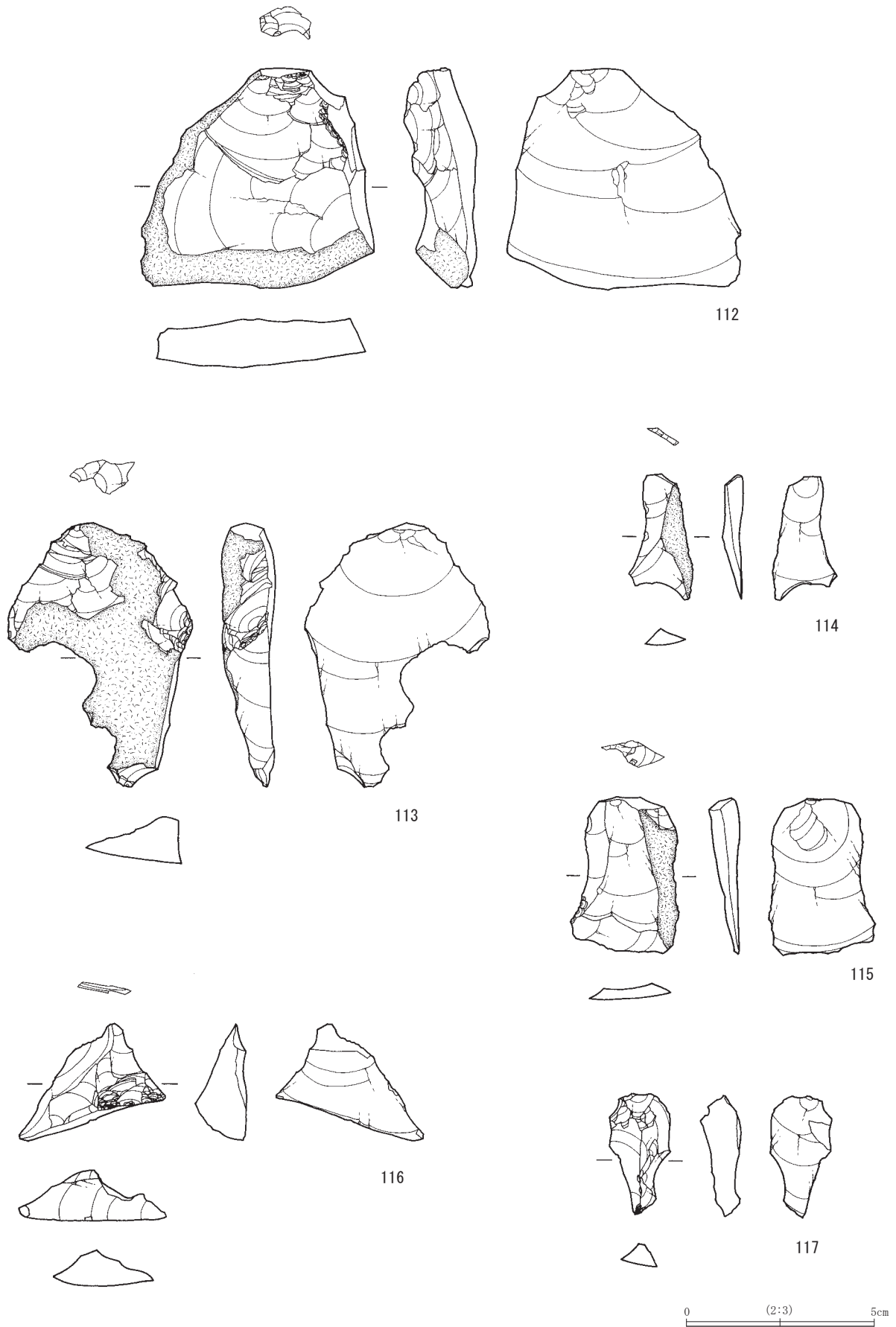
第45図 石器集中区7出土遺物 (11)



第46図 石器集中区7出土遺物 (12)

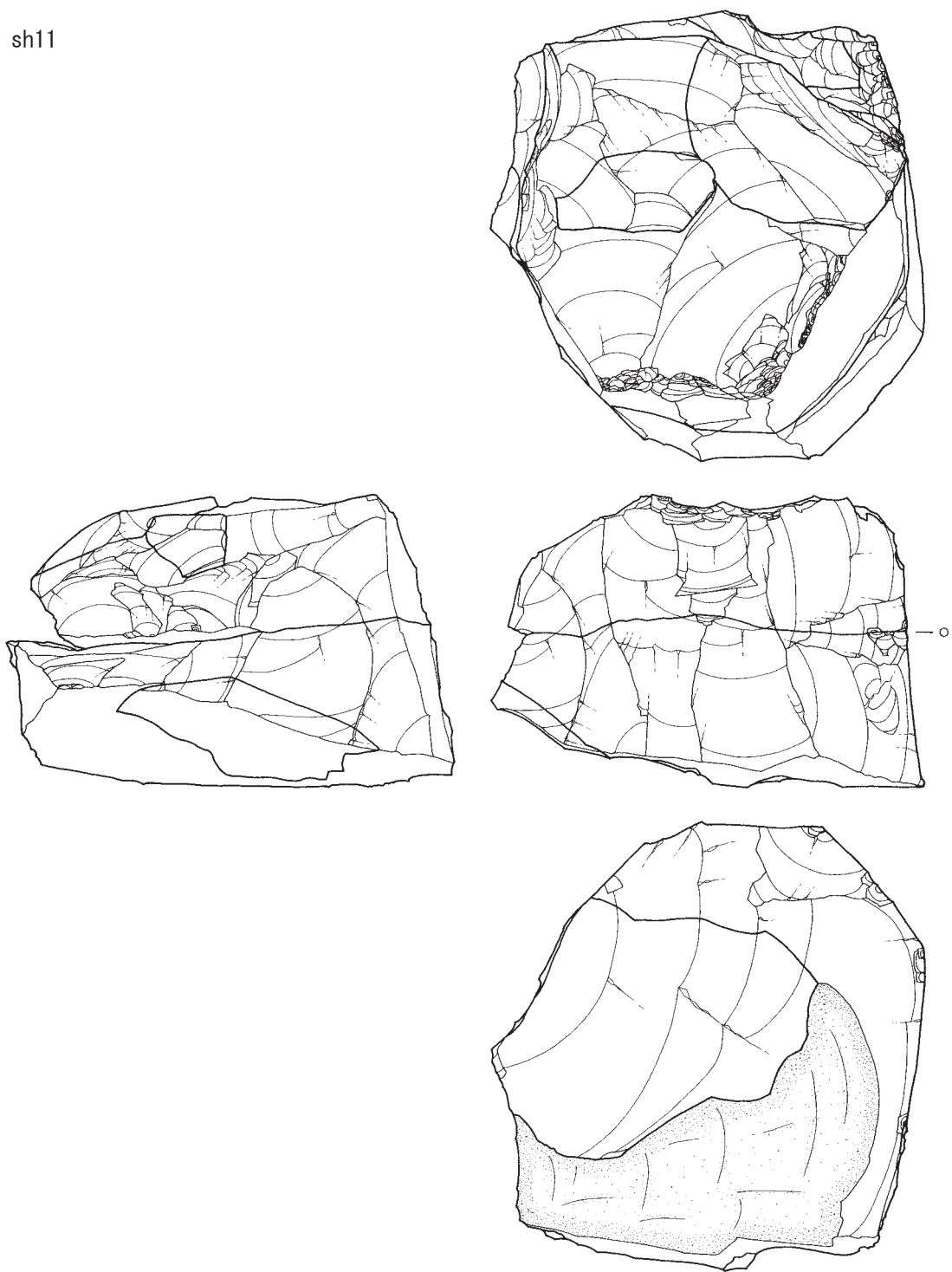


第47図 石器集中区7出土遺物 (13)



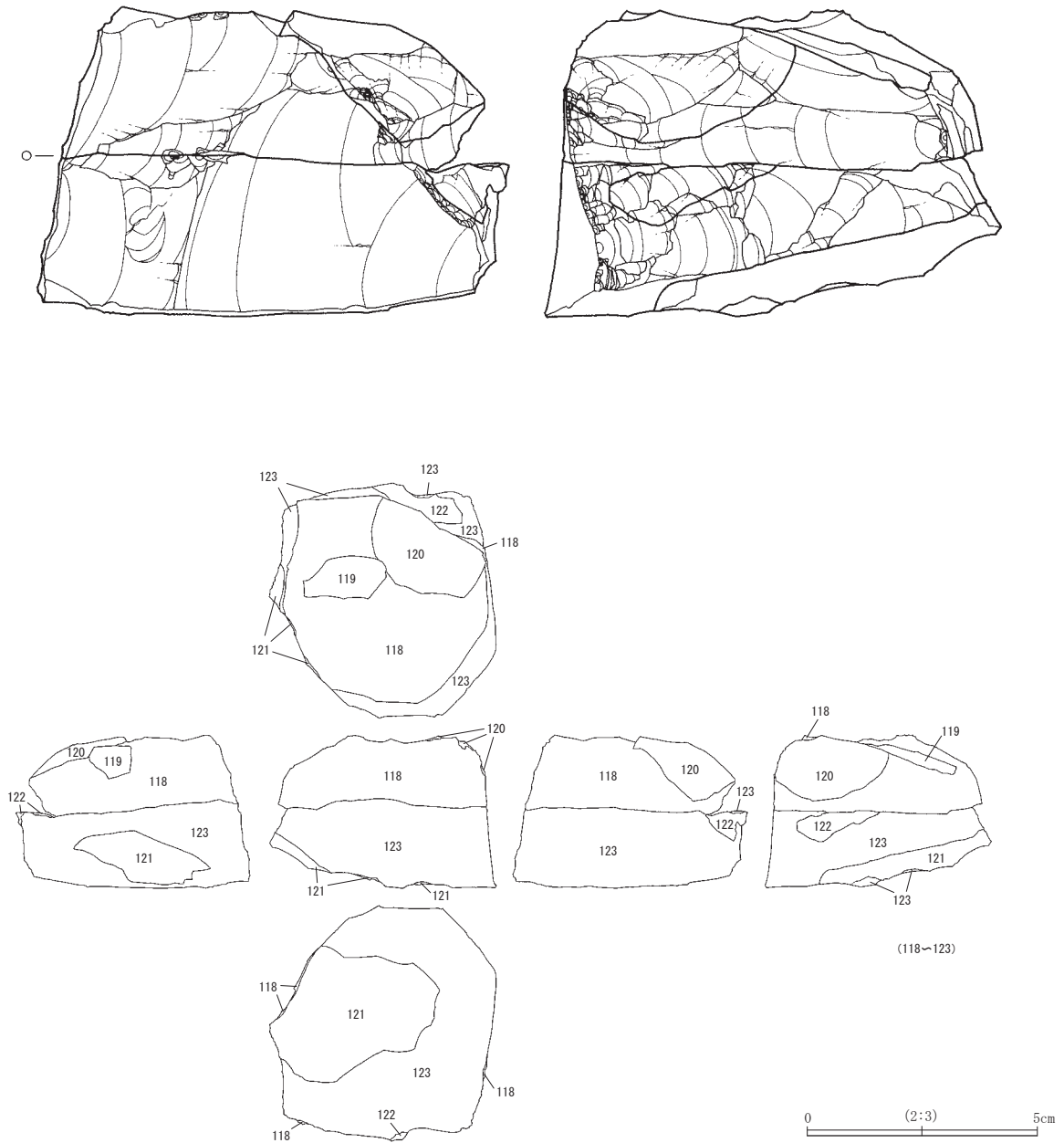
第48図 石器集中区7出土遺物 (14)

sh11

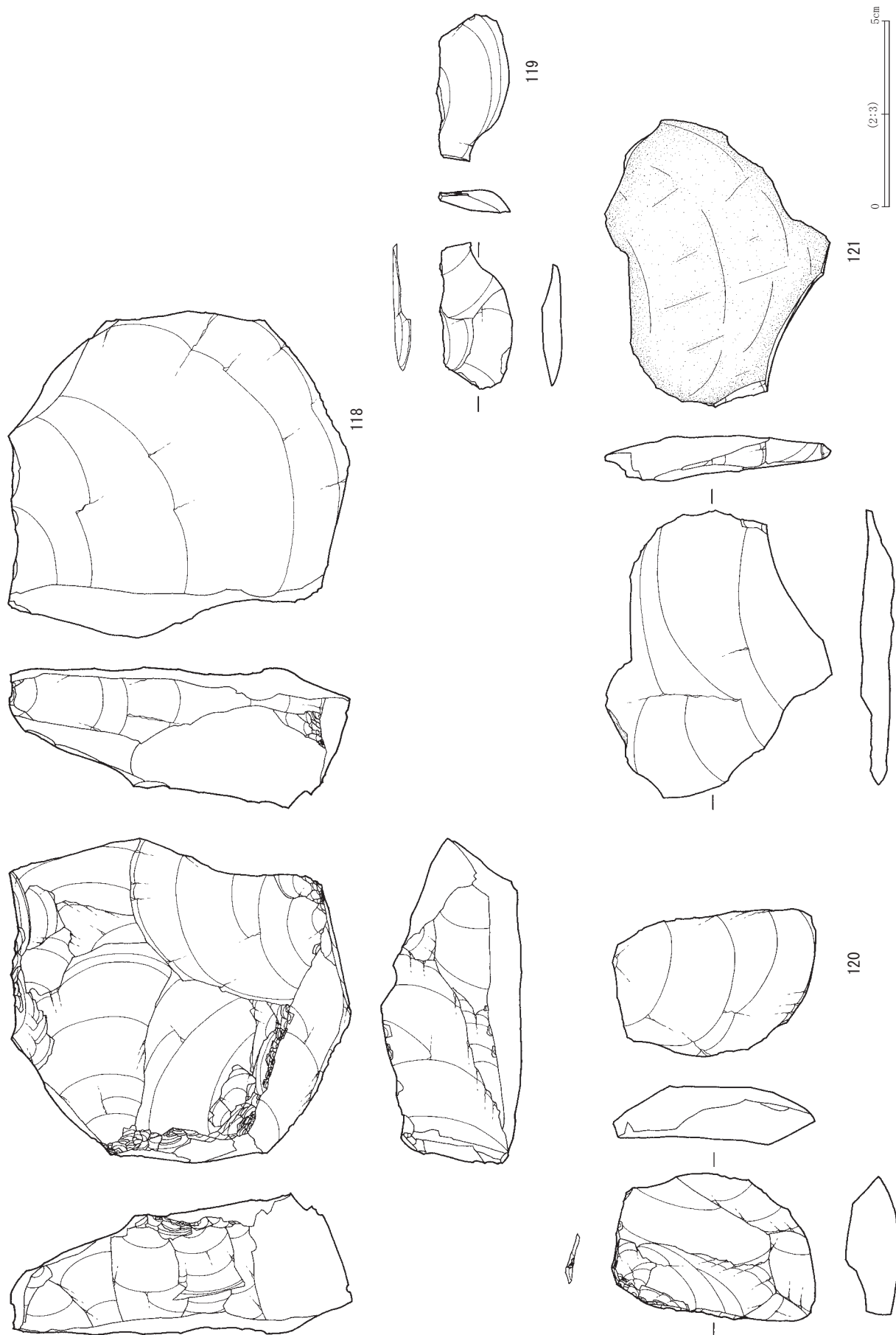


0 (2:3) 5cm

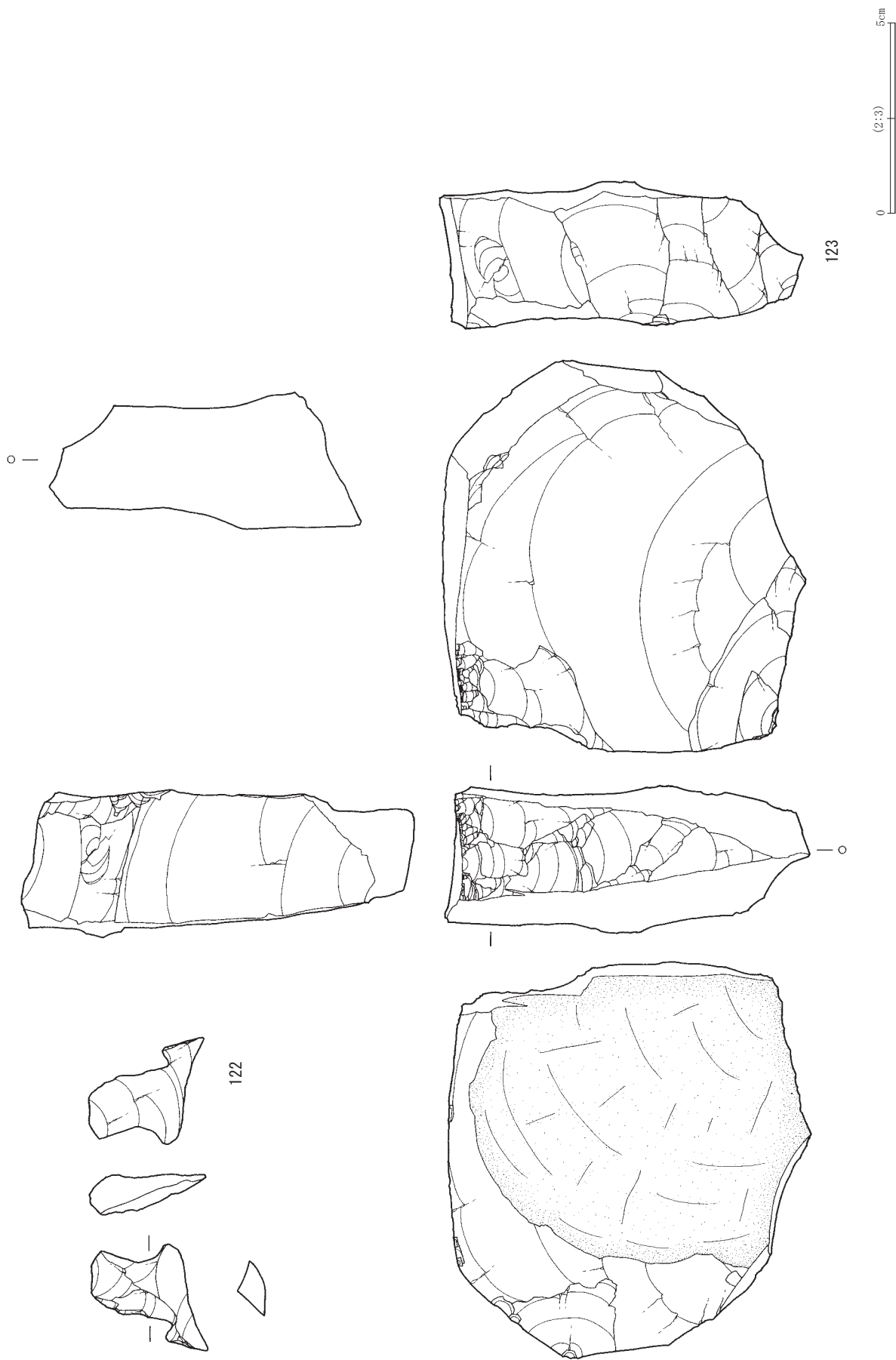
第49図 石器集中区7出土遺物 (15)



第50図 石器集中区7出土遺物 (16)



第51図 石器集中区7出土遺物(17)



第52図 石器集中区7出土遺物(18)

sh11：総点数7点、総重量834.32g。二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、褐灰色や浅黄橙が斑に入る。石質は緻密だが、僅かにざらつく。また摂理が線状に発達している。

接合点数は6点、剥片と石核からなる。剥離工程は119→120→118→122→123→121である。本個体は打面再生から剥片剥離の過程に伴う資料である。打面再生は石刃技法が認められる大型の石核に伴うものであり、摂理面を境に剥離されている。この剥離により石核は作業面高を大きく減じている。剥離された打面再生剥片は石核に転用し、それぞれで剥片剥離が行われている。しかし、意図した剥離が展開できずに停止している。接合個体の背面剥離面構成からは上下に打面を設定し、周縁方向から打面再生・調整と打面転位を介させながら、石刃を剥離していたことが捉えられる。接合個体の規模からすると、再生作業が行われる以前の石刃核は大型の規模を有していたと想定される。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh13：総点数2点、総重量21.97g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は黒褐色を基調とし、礫面は褐灰色を呈する。石質は粗粒であり、ややざらつく。

剥離工程は66→65である。本個体は礫面除去に伴う資料である。背面に礫面を有する剥片を単設方向から剥離している。

本母岩は石核の状態では搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh16：総点数2点、総重量8.89g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色と基調とし、礫面は黄灰色である。石質は緻密でなめらかである。

剥離工程は78→77である。本個体は石核整形に伴う資料である。90打面転位しながら剥片を剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは90度・180度打面転位をしていることが捉えられる。

本母岩は石核の状態では搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] IV層で検出された集中区は本集中区のみである。

東壁面においてテフラ分析を行っており、IV層上位からAs-YP、IV層下位からATが検出されている。また、石器の出土ピークと同じIV層下位出土の炭化材を年代測定した結果、19210±80yrBP 19130±70yrBPと年代値が得られている。これらの詳細は第2分冊附編に記載している。

石器集中区 8

[位置・出土状況] Ⅲ B53・54・55・63・64グリッド付近に位置しており、8.5×6mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部付近に形成された緩やかに下る標高約347.1～347.3mの自然堤防上で検出している。

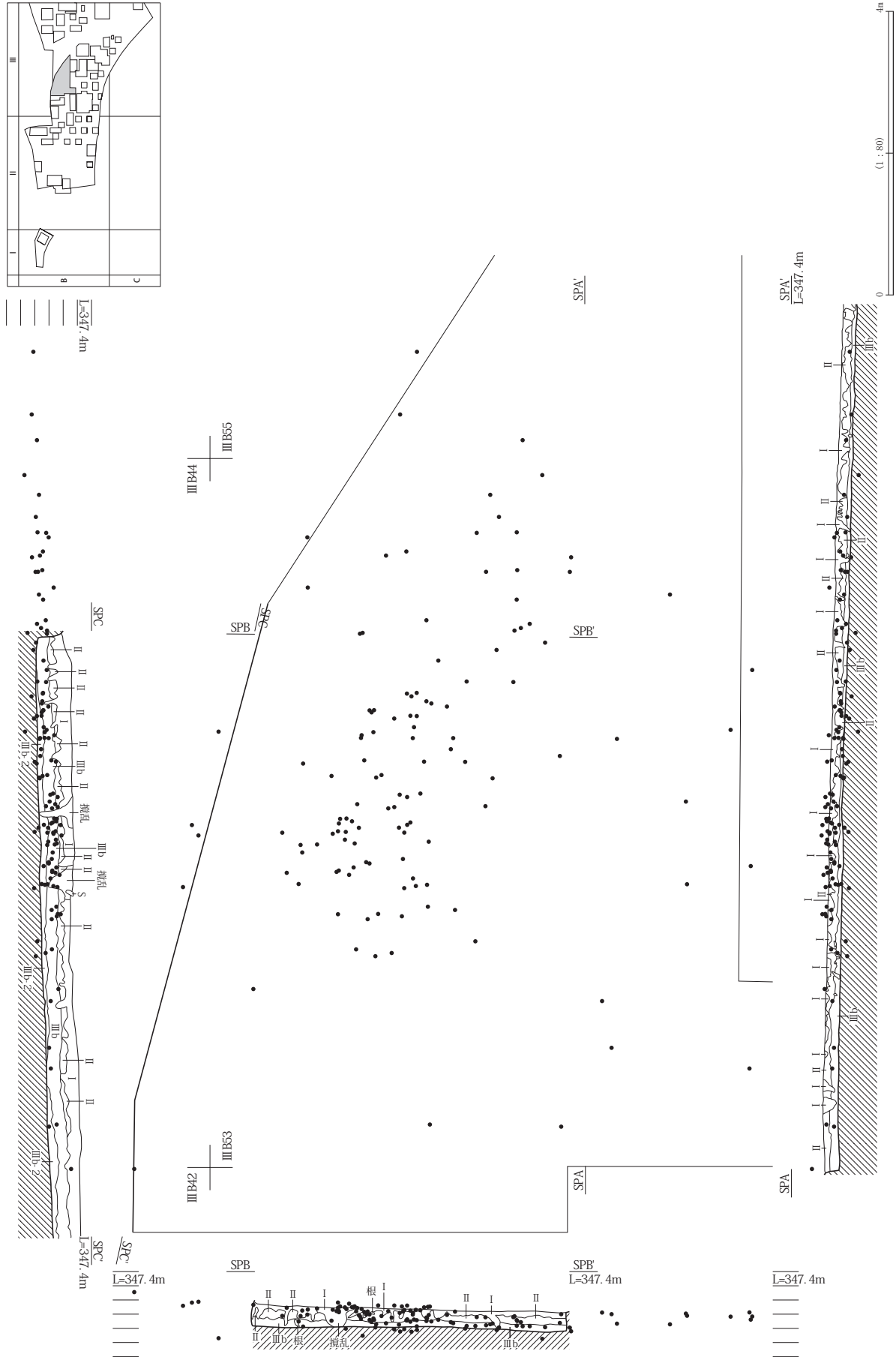
[分布状況] Ⅲ B53・54の跨る範囲を中心に分布しており、南東方向へ広がる。

[出土層位] Ⅱ層からⅢb-2層で出土しており、Ⅲb層下部(標高約347.0m)に出土ピークがある。最大で約50cmの高低差を有する。台石など重量のある石器はⅢb層下位から出土している。各断面図からは出土層位が異なるように見受けられるが、北壁中央が出土状況を最も反映している。それから判断するとⅢb層堆積中に形成されたものと考えられる。

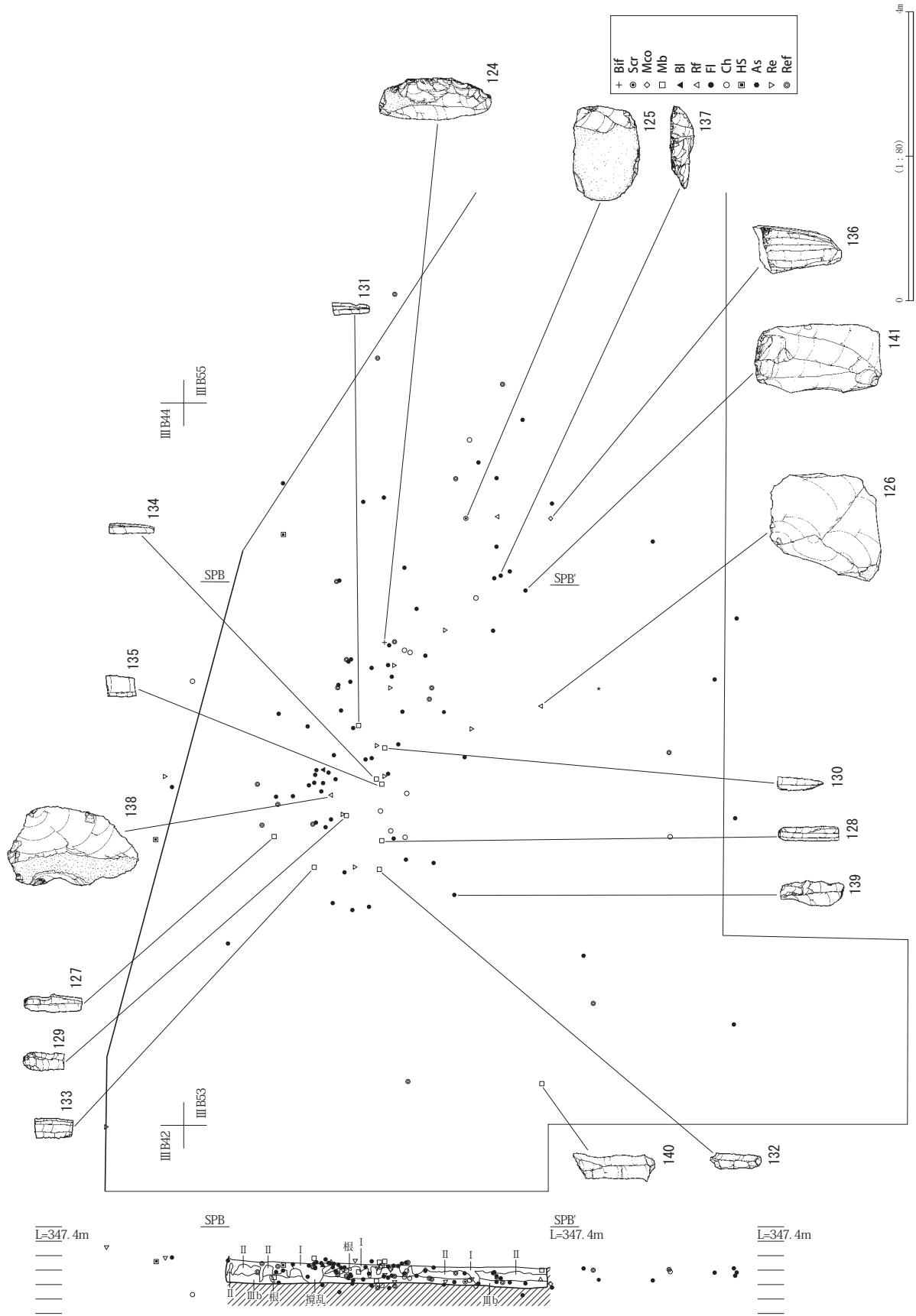
[石器組成・石器材料組成] 総点数は122点である。

石器組成は両面調整石器1点、スクレイパー1点、細石刃核1点、細石刃9点、二次加工を有する剥片4点、石刃1点、剥片66点、チップ10点、台石2点、敲石2点、磨石1点などからなる。

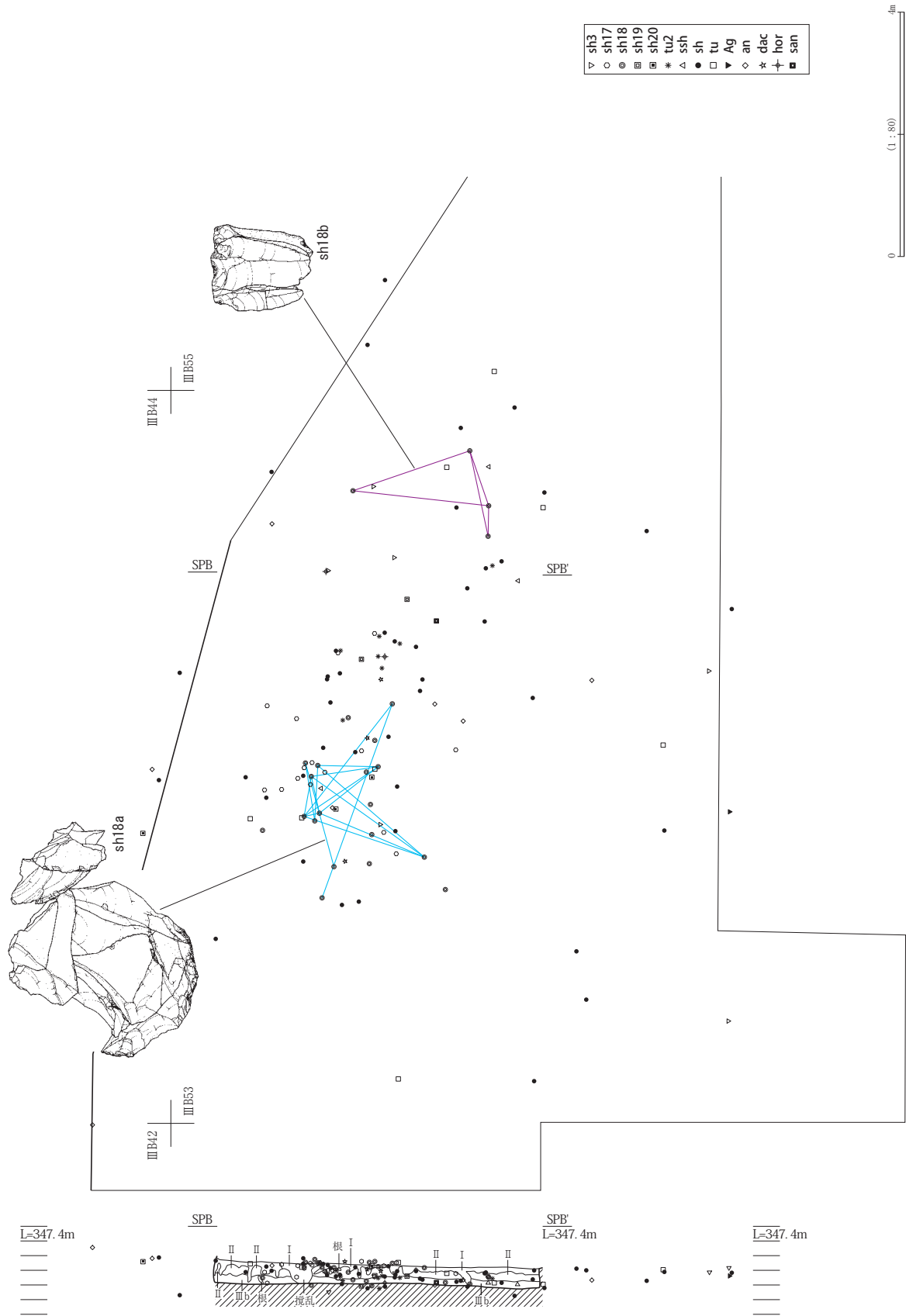
石器材料組成は頁岩を主体に、凝灰岩、珪質頁岩、安山岩、デイサイトからなる。剥片石器は頁岩、礫石器は安山岩やデイサイトが、それぞれ主体を成す。



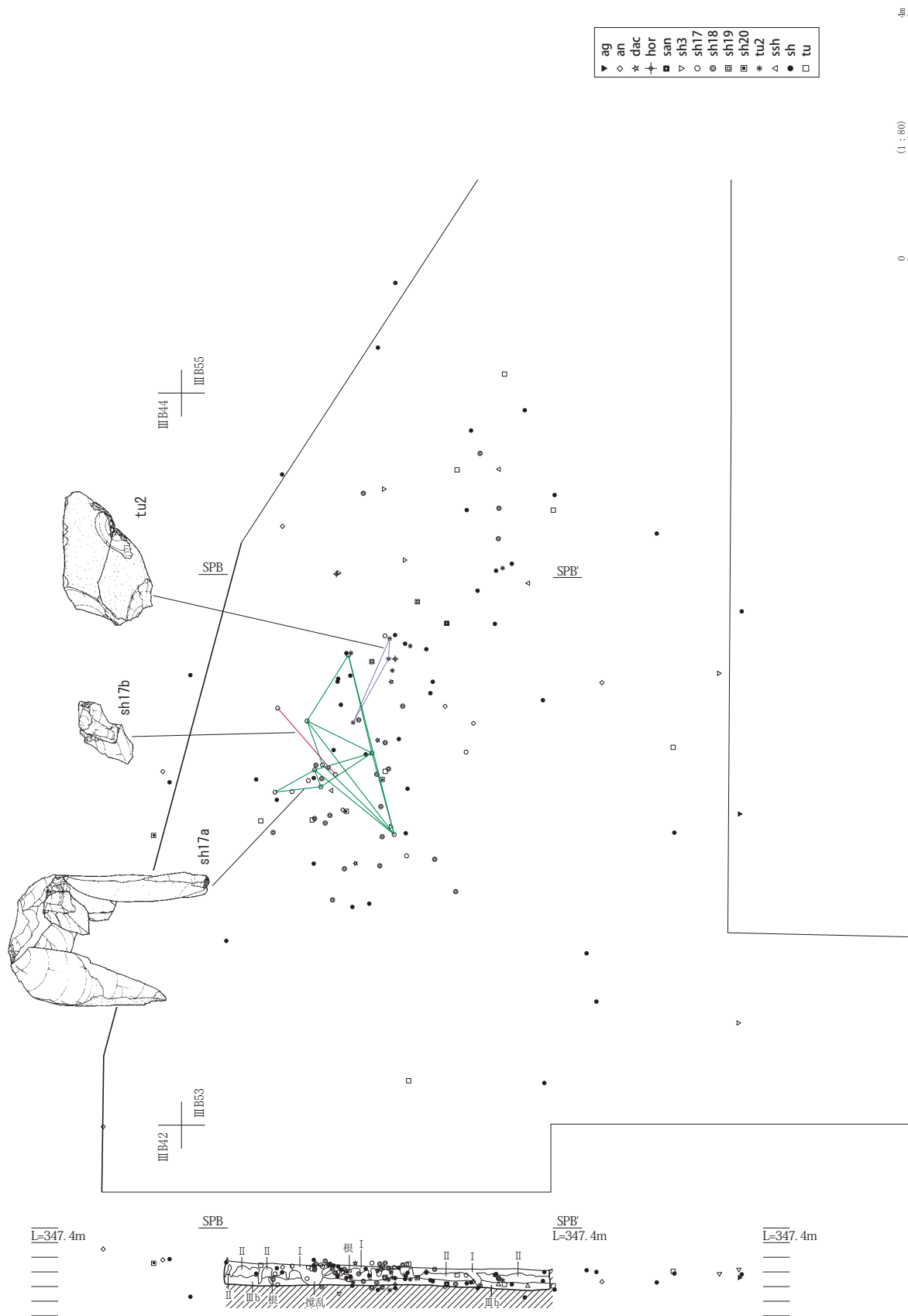
第53図 石器集中区8 石器出土状況図



第54図 石器集中区8器種別出土状況図



第55図 石器集中区 8 母岩別出土状況図 (1)



第56図 石器集中区8 母岩別出土状況図 (2)

[出土遺物] 124は両面調整石器。sh17に属する。剥片に両面加工を施している。器種はスクレイパーに両面加工の形態が認められないことから判断している。ただし、各縁辺だけを観察していくとスクレイパーの刃部とも捉えられる。125はスクレイパー。剥片の末端部に加工を施している。127～135は細石刃。129・131はsh20、それ以外はsh18に属する。長さ12.8～29.3cm、幅4.2～9.1mm、厚さ1.1～3.7mmの範囲にある。136は「荒川台技法」に伴う細石刃核。厚手の剥片素材であり、左側面には素材腹面と思われる面を残している。正面から裏面にかけて細石刃を剥離しており、裏面から左側面にかけて側縁・下縁部調整が認められる。また、細石刃剥離中に打面再生や下縁部調整を介在させている。作業面の残存高は3.6cmである。138は二次加工を有する剥片。側縁から下縁部にかけて加工が認められる。このような加工は「荒川台技法」の母型作出過程に類似することから、細石刃核母型の可能性もある。137・139～141は剥片。137は細石刃核の打面再生剥片である。141は作業面再生剥片であるが、同技法の工程中に認められるものである。142・143は敲石。144・145は台石。石器材料は124～135、139・140は頁岩、136・137は凝灰岩、138・141は珪質頁岩、143はデイサイト、142・144・145は安山岩である。

上記の石器から7母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

sh3：総点数21点、総重量152.59g。二次加工を有す剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐色が点状に入る。石質は緻密でやや粗粒な箇所もあり、僅かにざらつく。また、部分的になめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh17：総点数16点、総重量321.08g。両面調整石器、二次加工を有する剥片、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、灰白色や赤褐色が斑に入る。礫面も灰黄色～にぶい黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、摂理が部分的に入りざらつく。

接合点数は10点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは8点、個体bは2点あり、どちらも剥片からなる。

個体aの剥離工程は146→<<151>><<149><147>→150→148>>→152→153である(<○>、<<○>>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。最初に正面上部において礫面除去を行うことで、上面に打面が設定される。その後、上設打面の再生を介在させながら、上下方向から目的剥片である縦長剥片を剥離している。本母岩の接合状況は中が空洞である。接合個体の背面剥離面構成からは、下設打面からも連続的な剥離が捉えられる。また、本個体の上設打面とは異なり自然面を伴わない打面再生剥片が非接合資料に認められることから、本個体が石核下半側の剥離工程であった可能性が高い。

個体bの剥離工程は154→155である。本個体は調整剥片剥離の過程に伴う資料であり、個体aの打面調整に伴う剥離工程に伴うものと考えられる。

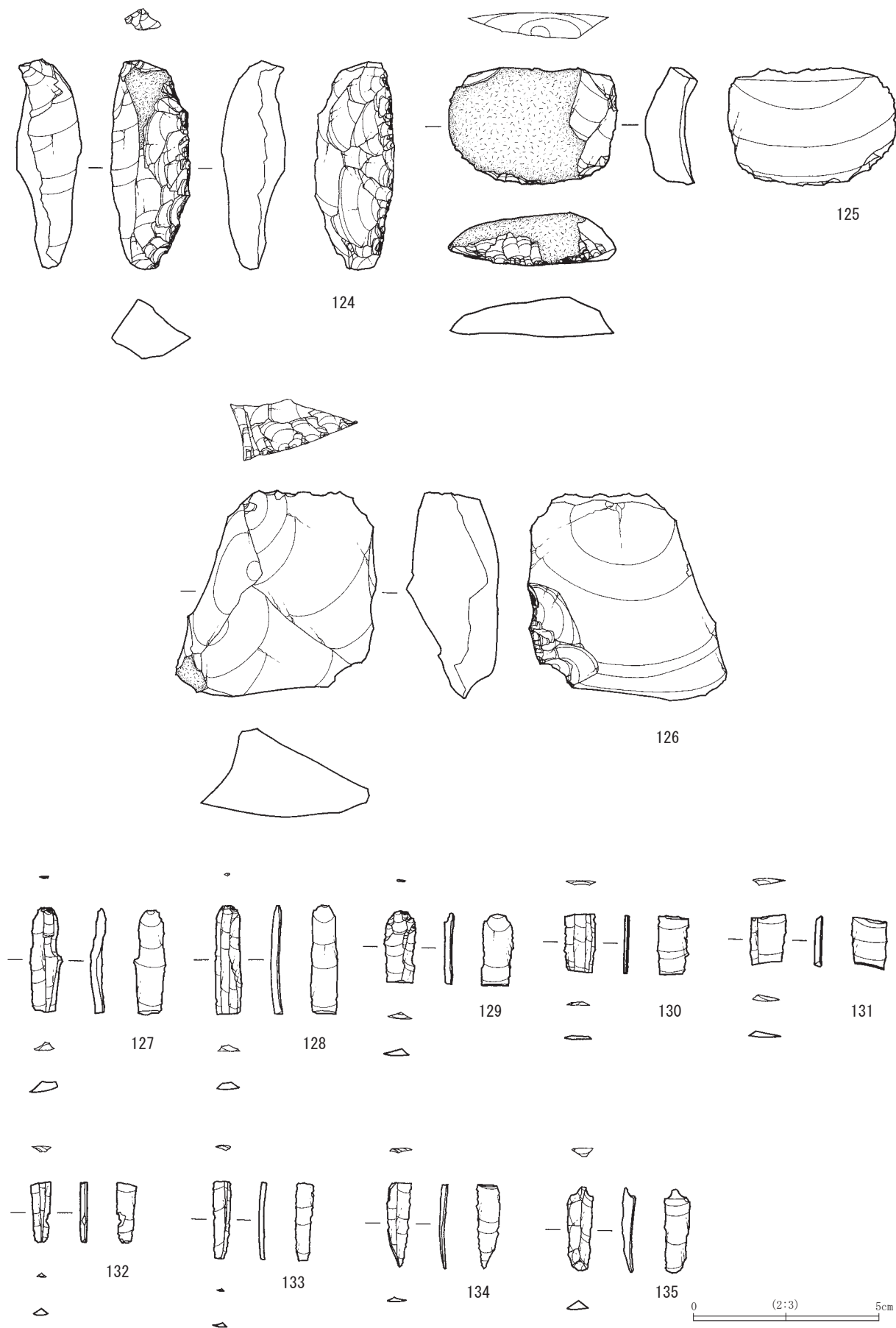
両面調整石器(124)については出土遺物に記載している。

本母岩は亜円礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh18：総点数27点、総重量373.67g。二次加工を有する剥片、剥片、チップ、細石刃、石核で構成される資料である。剥離面は灰白色ないし浅黄色を基調とし、礫面付近及び礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、摂理が線状に入り部分的にざらつく。

接合点数は16点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは12点あり、剥片と細石刃核からなる。個体bは4点あり、剥片からなる。

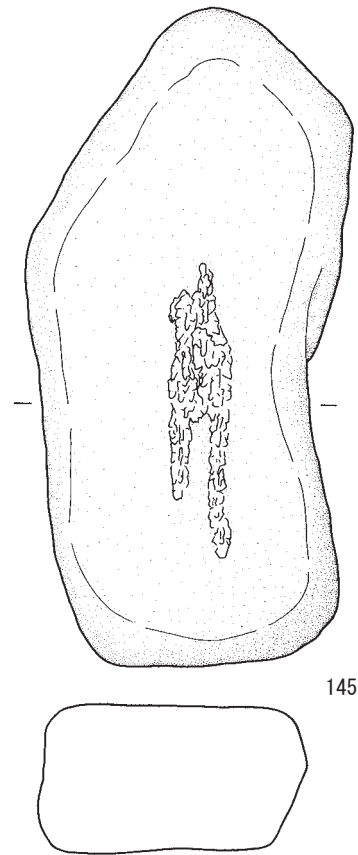
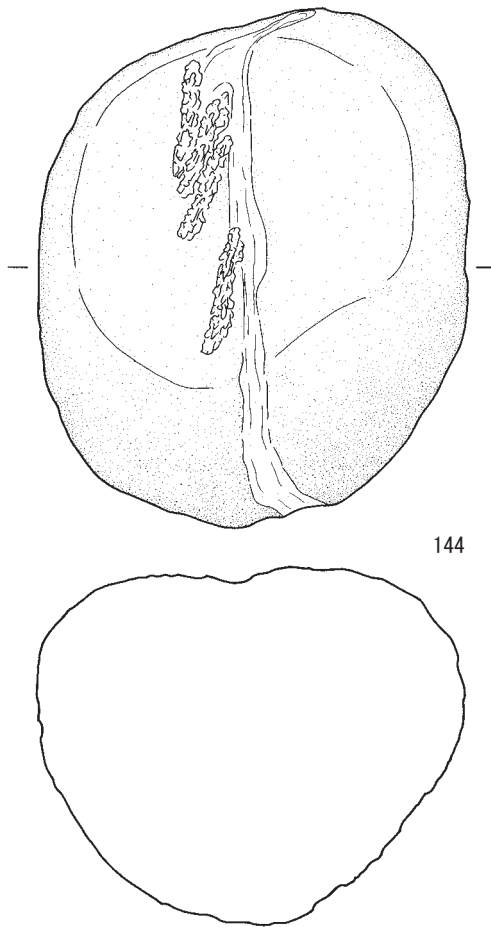
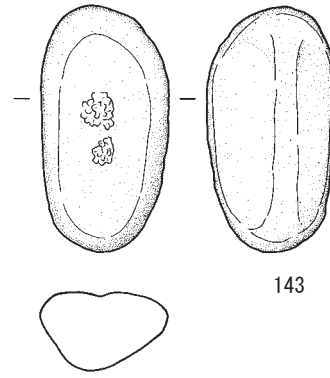
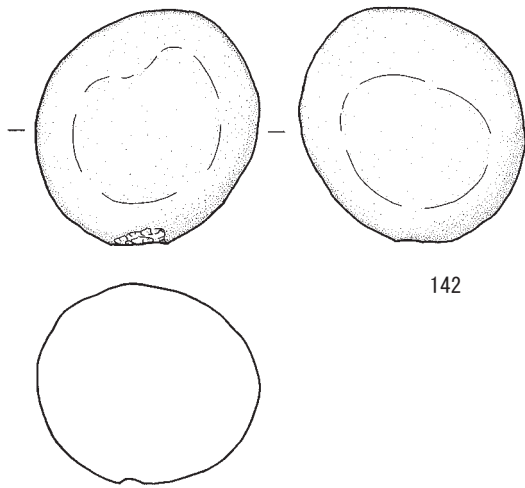
個体aの剥離工程は160→162→161→164→165→163→167→166→(169a+b)→168→170である。本



第57図 石器集中区8出土遺物(1)



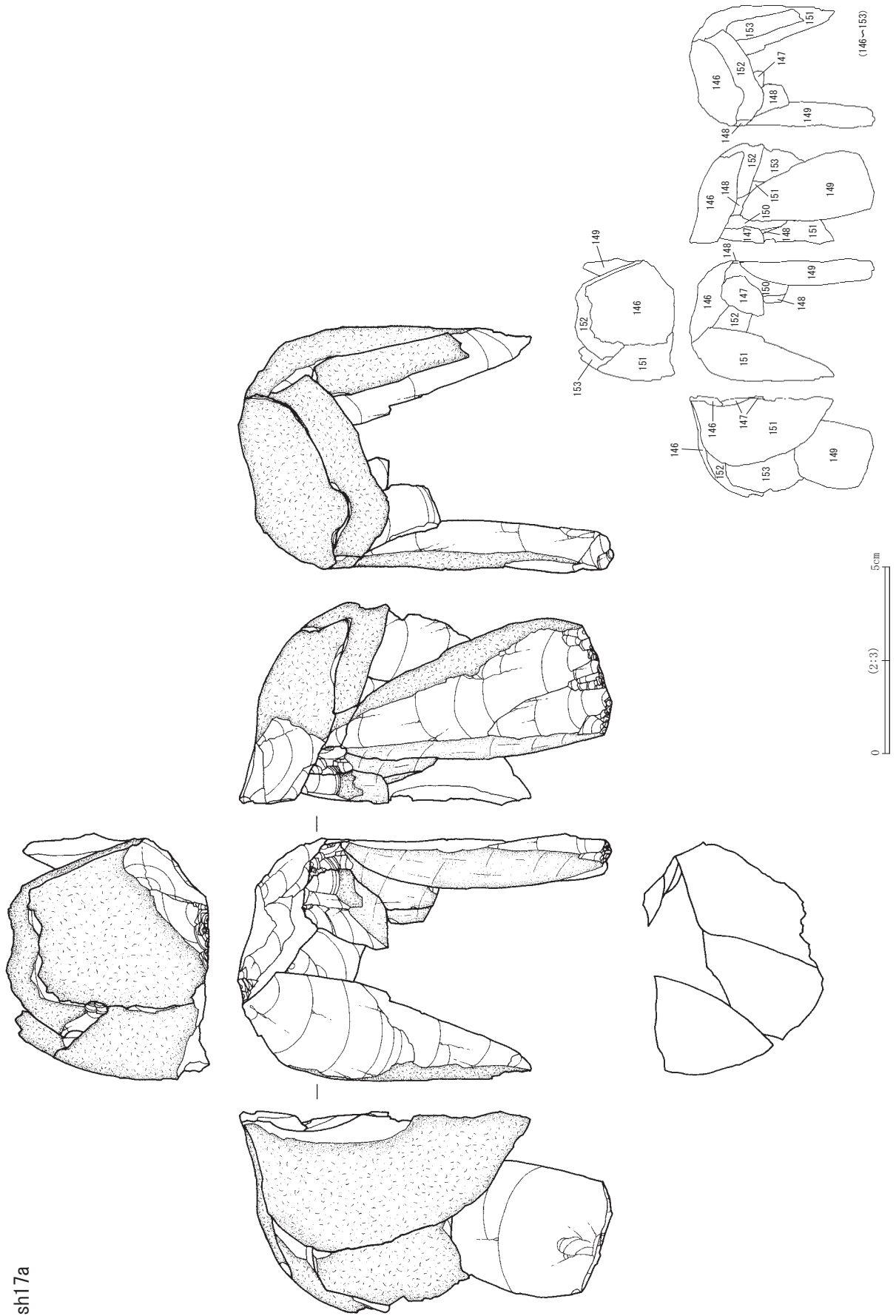
第58図 石器集中区8出土遺物(2)



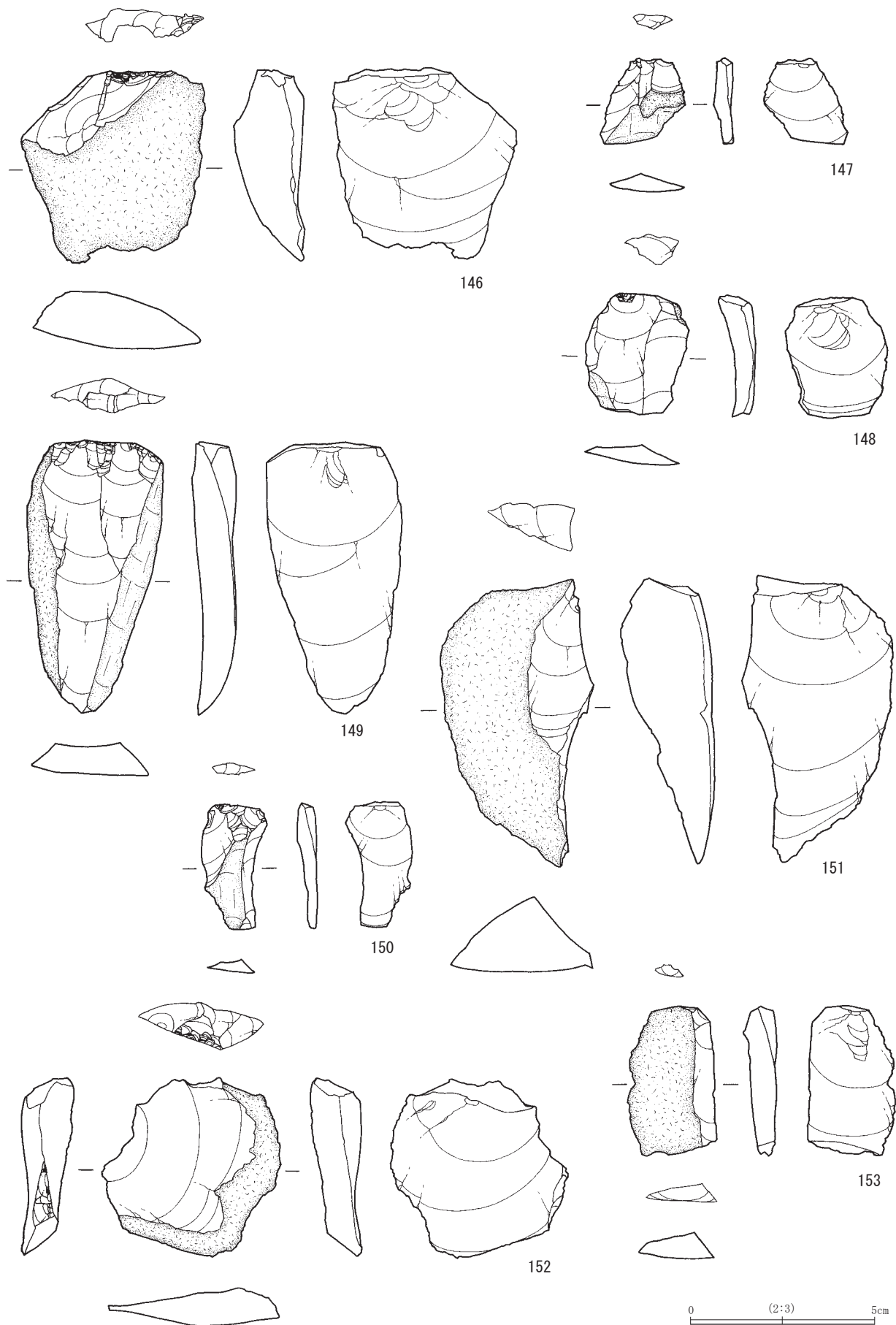
(144・145)
0 (1:4) 10cm
(142・143)
0 (1:3) 10cm

第59図 石器集中区8出土遺物(3)

sh17a

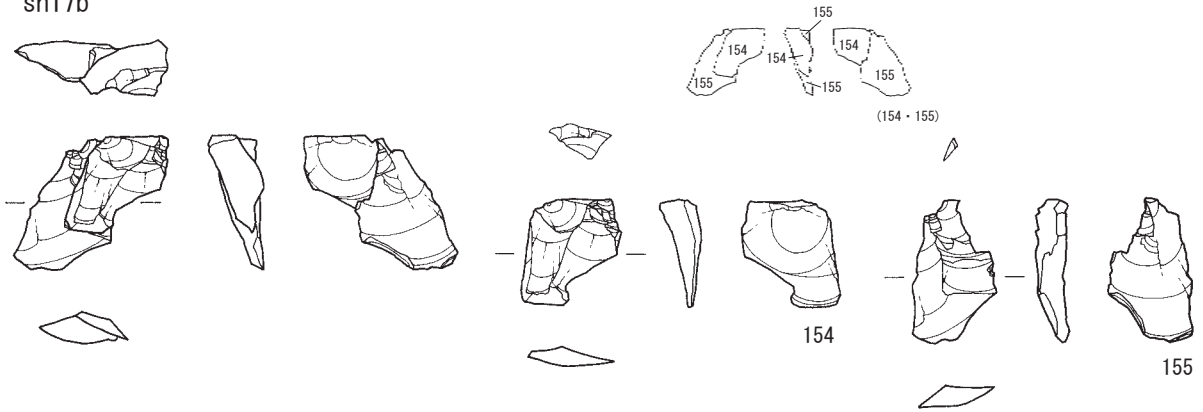


第60図 石器集中区8出土遺物(4)

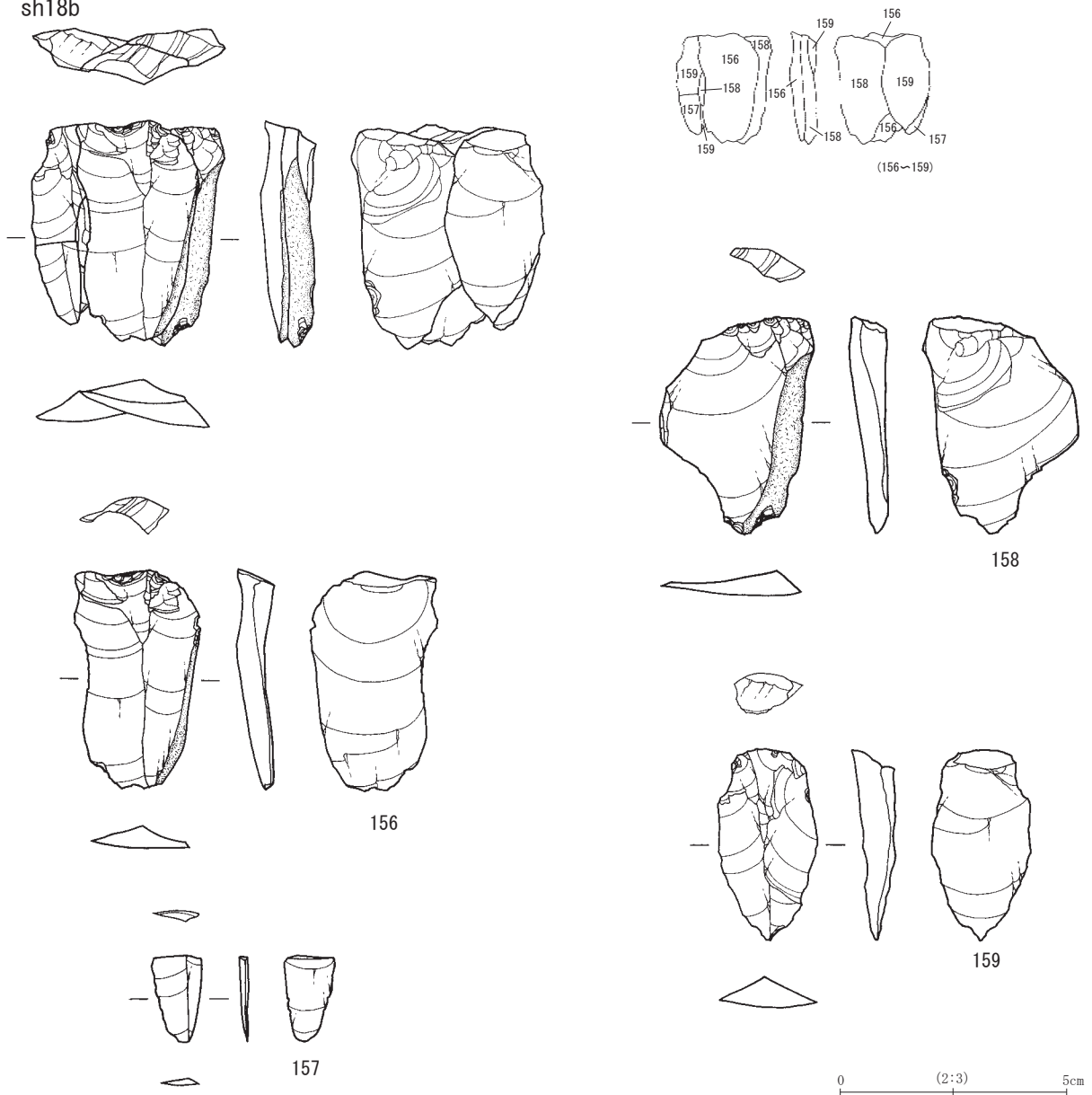


第61図 石器集中区8出土遺物(5)

sh17b

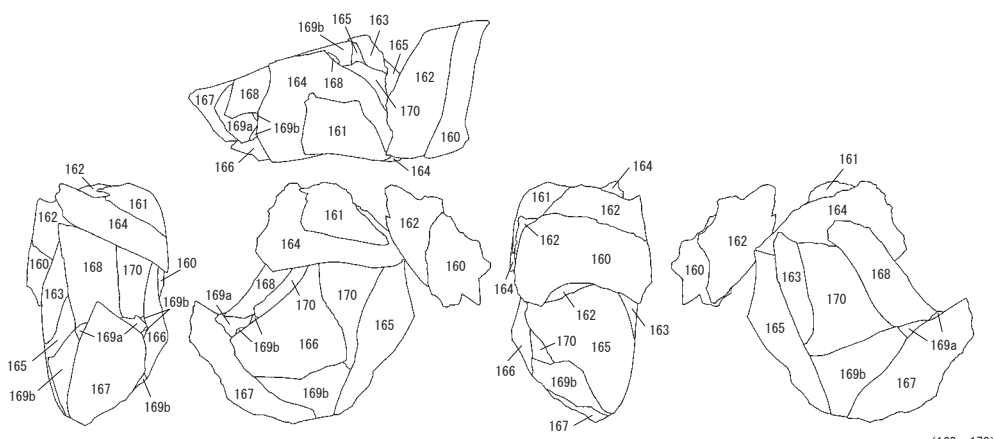
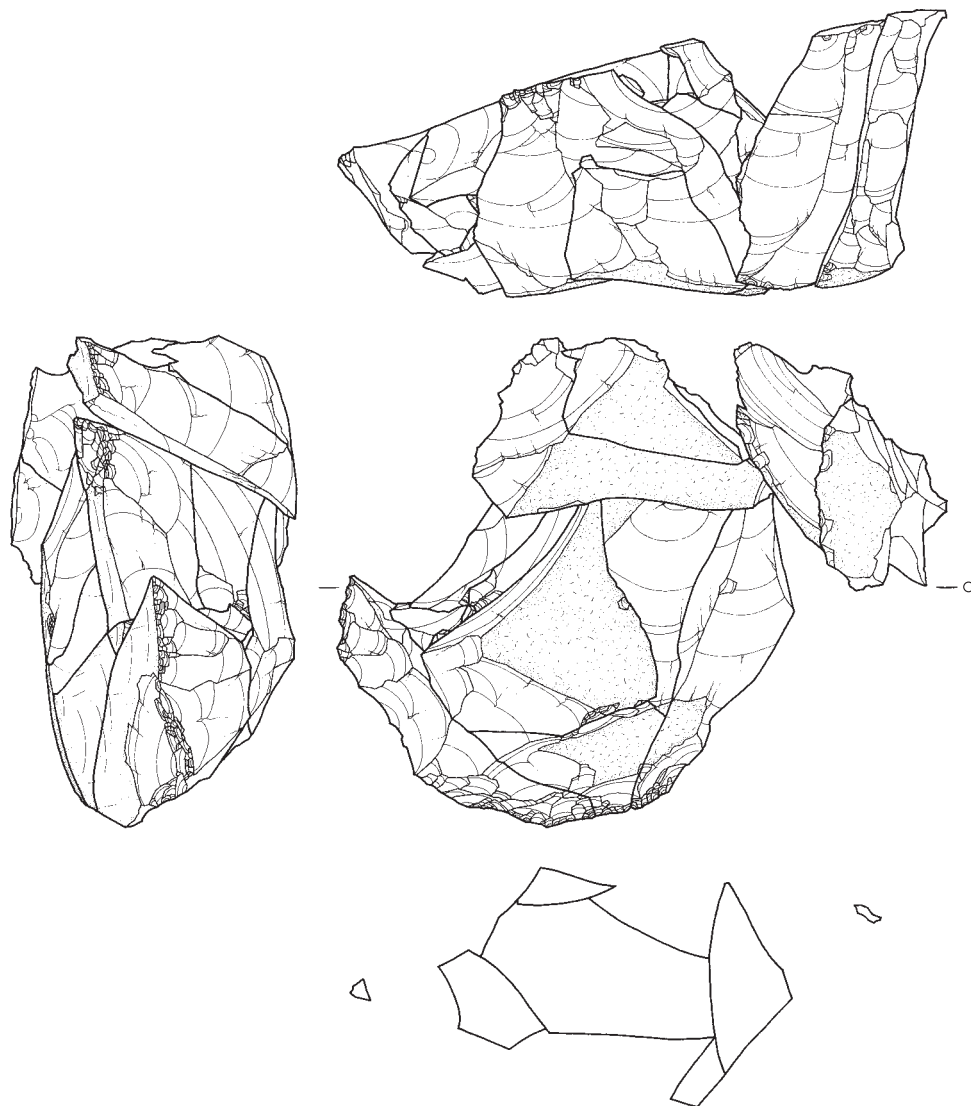


sh18b

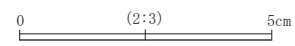


第62図 石器集中区8出土遺物(6)

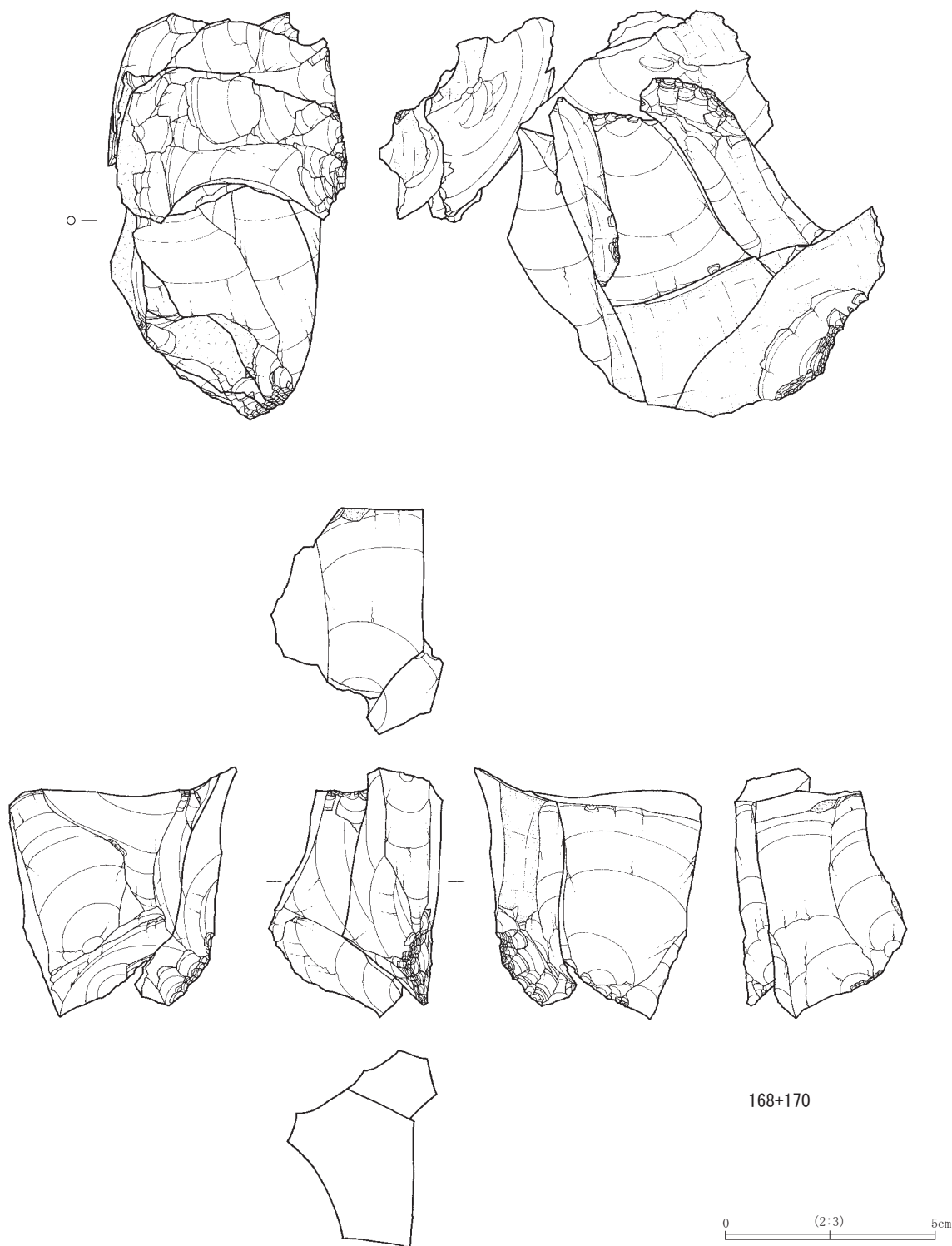
sh18a



(160~170)



第63図 石器集中区8出土遺物(7)



168+170

第64図 石器集中区8出土遺物(8)

個体は縦長剥片剥離から細石刃剥離の過程に伴う資料である。大型の剥片を素材としており、まず正面上部においてを腹面側から連続的に剥離を行い、上面に打面を設定する(①)。素材下縁部を中心に腹面側から細かな調整を施し、平面形がU字形の母型を作出している(②)。その後、素材剥片右側縁から縦長剥片(165)を剥離している(③)。その剥離が停止すると90度打面転位させ素材左側縁側から下縁部を剥離している(④)。この剥離された169のネガ面を打面に据え、その下縁部に調整を施すことにより、平面形がU字形の母型を作出している(⑤)。細石刃剥離を行うものの、厚手の剥片が剥離される。さらに、稜を中心に細石刃剥離を試みるが、剥離できず停止する(⑥)。

本個体の剥離工程は、細石刃母型となる素材獲得のための剥片剥離工程が①～③、細石刃核母型作出～細石刃剥離工程が④～⑥に区分される。③において母型の素材を獲得できなかったことから、④以降は細石刃核母型の作出へと展開していることが捉えられる。この中で縦長剥片剥離と細石刃剥離は、打面形成、下縁部調整など同様の過程を経ている。

個体bの剥離工程は156→157→158→159である。本個体は小型剥片剥離の過程に伴う資料である。同一打面から小型の縦長剥片を連続的に剥離している。この剥離工程に伴う石核は認められない。

この個体a・bは接合関係に無いことから両者の前後関係は判然としない。これらからは大小異なる規模の縦長剥片及び細石刃を剥離していることが窺える。また、非接合資料には細石刃が認められていることから、異なる個体において細石刃剥離が行われていたことも確認できる。

細石刃(127・128・130～134)については出土遺物に記載している。上記とは異なる個体から剥離されたものである。

本母岩は剥片で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。しかし、個体bを剥離した石核と細石刃を剥離した細石刃核などは剥離後にそれぞれを搬出している。

sh19：総点数2点、総重量55.45g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黒褐色を基調とし、褐灰色が斑に入る。礫面付近は灰黄褐色、礫面は黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh20：総点数2点、総重量0.6g。細石刃で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、灰オリーブ色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。sh18と類似した外観である。

細石刃(129・135)については出土遺物に記載している。

本母岩は細石刃核で搬入、細石刃剥離後に細石刃核を搬出している。

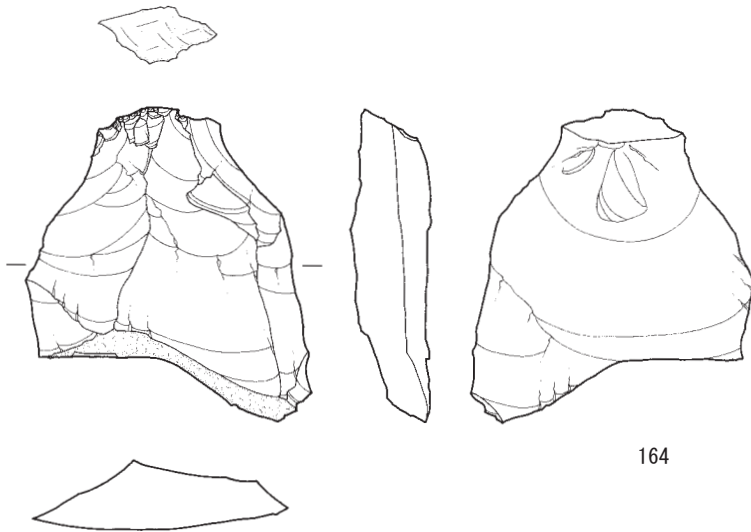
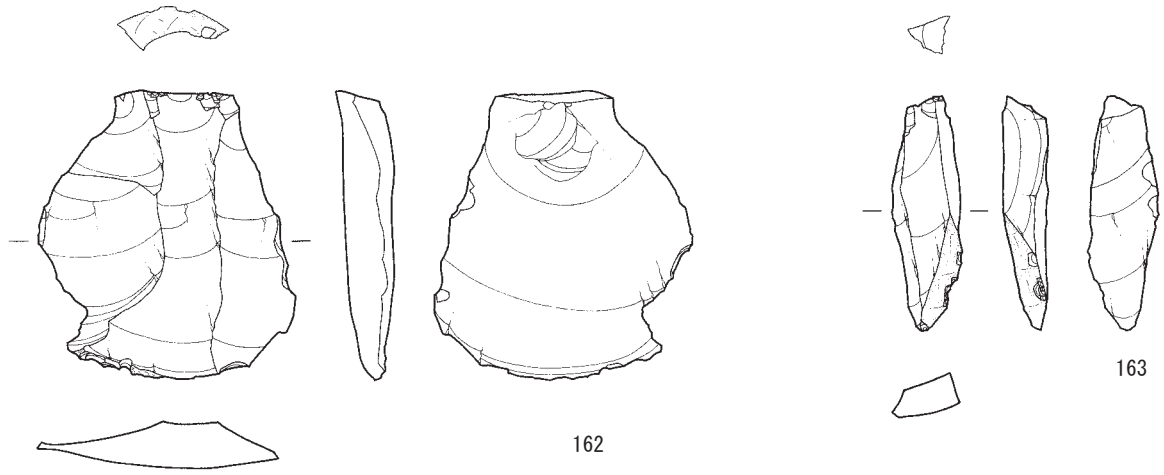
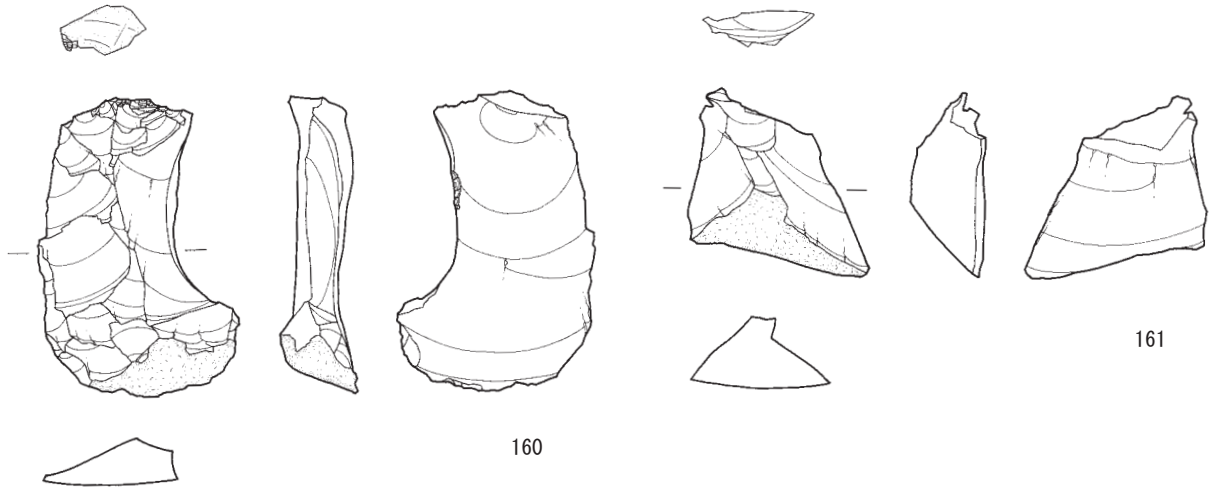
tu2：総点数7点、総重量52.01g。剥片とチップで構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、浅黄色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は3点あり、剥片からなる。剥離工程は173→171→172である。本個体は礫面除去から石核整形の過程に伴う資料である。打面転位を繰り返しながら背面に礫面を有する剥片を剥離している。また、非接合資料には細石刃核の打面再生剥片(137)が確認されることから、sh18・20と同様、細石刃剥離に伴う母岩と考えられる。

打面再生剥片(137)については出土遺物に記載している。

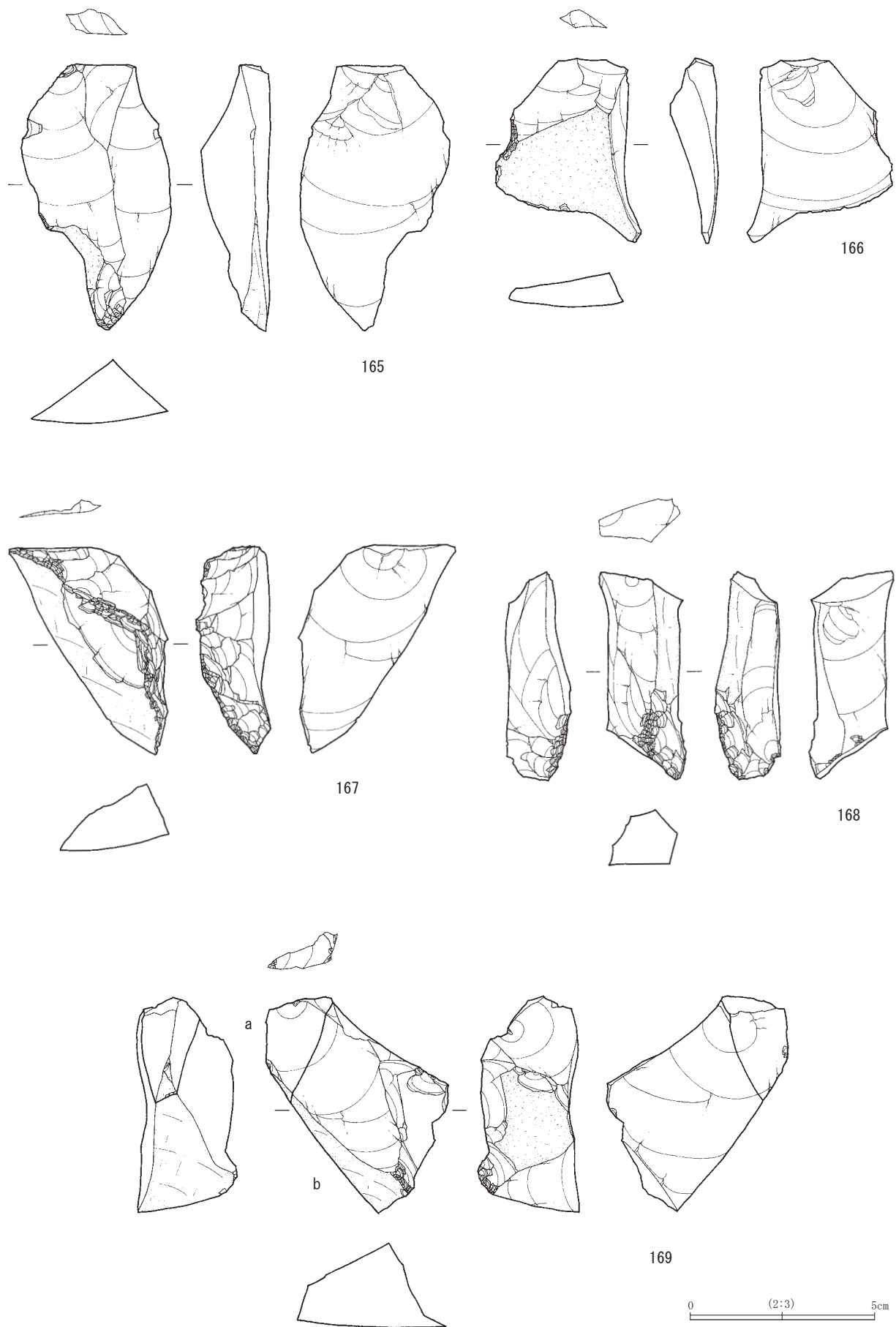
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。また細石刃核は打面再生後に搬出している。

[備考] 本集中区と同じ荒川台技法を確認できる石器集中区4が西に約25m離れた位置にある。また、出土炭化材の年代測定を行っているが、帰属年代を示すような結果は得られていない。これらの詳細は第2分冊附編に記載している。

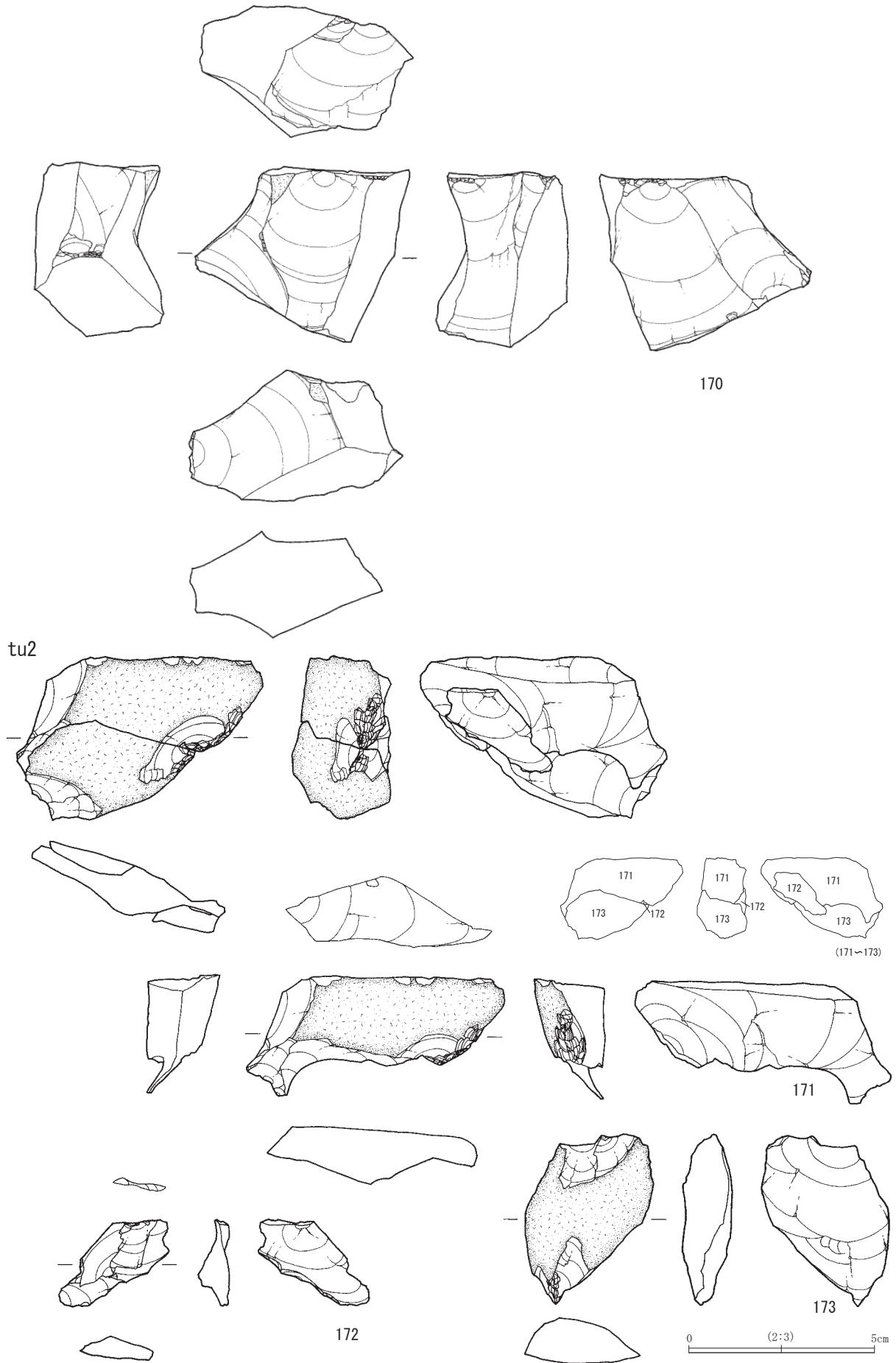


0 (2:3) 5cm

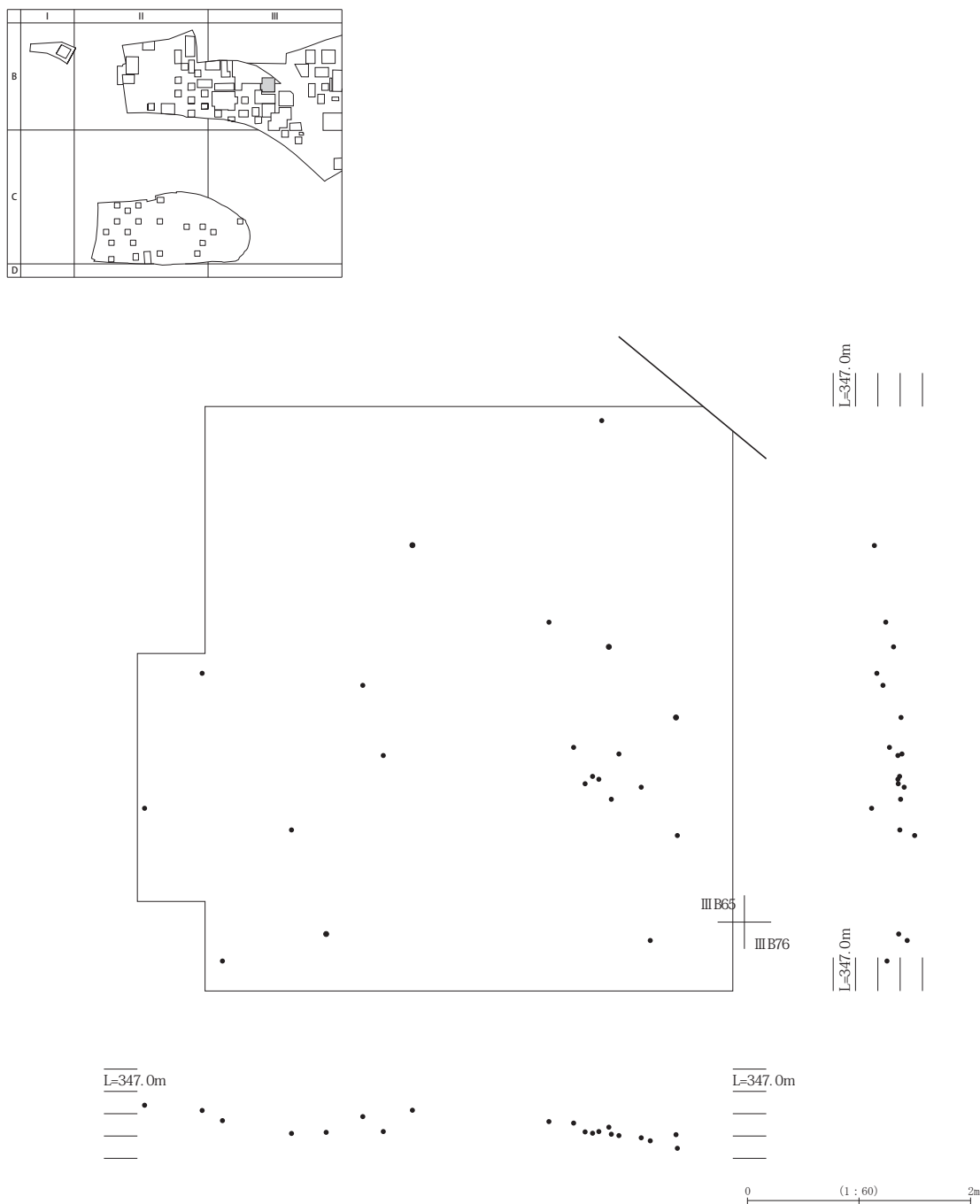
第65図 石器集中区8出土遺物(9)



第66図 石器集中区8出土遺物 (10)



第67図 石器集中区8出土遺物 (11)



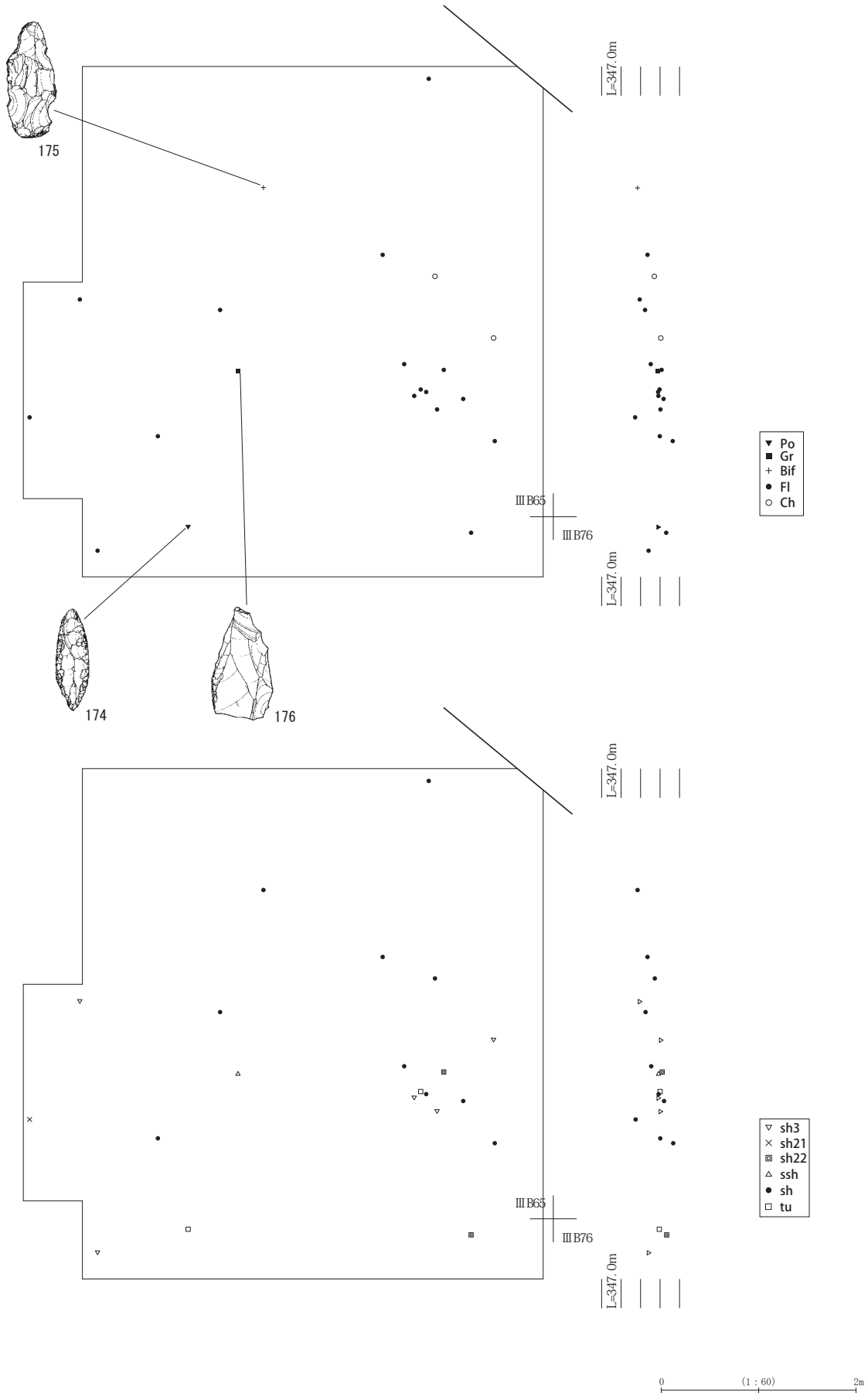
第68図 石器集中区9 石器出土状況図

石器集中区9

[位置・出土状況] Ⅲ B65・75グリッド付近に位置しており、5×5mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部に形成された自然堤防へと緩やかに上る標高約346.6～346.8mの斜面上で検出している。

[分布状況] Ⅲ B65グリッド南東部を中心に散漫的に分布しており、東西方向へ広がる。

[出土層位] Ⅱ層からⅢb層で出土しており、Ⅲb層中部(標高約346.4m)に出土ピークがある。最大で約40cmの高低差を有する。Ⅲb層堆積中に形成されたものと考えられる。



第69図 石器集中区9器種・母岩別出土状況図

[石器組成・石器材料組成] 総点数は20点である。

石器組成は槍先形尖頭器1点、彫刻刀形石器1点、両面調整石器1点、剥片16点、チップ1点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩と凝灰岩からなる。

[出土遺物] 174は周縁加工尖頭器。縦長剥片を素材とし、背面と腹面の周縁部に細かな加工がほぼ全周に施している。基部左側縁にはやや浅い抉りが入る。175は両面加工石器。縦長剥片を素材とし、断面が三角形状となるように加工を施している。176は彫刻刀形石器。左肩に彫刻刀面が2面作出され、彫刻刀面の先端部及び末端部の背面側には細かな剥離が認められる。石器材料は174は凝灰岩、175は頁岩、176は珪質頁岩である。また、本集中区からの出土ではないが、下記の母岩に含まれる尖頭器(996)がある。174と同様、周縁加工で、縦長剥片を素材としている。

上記の石器から1母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

sh22：総点数4点、総重量20.14g。尖頭器と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、黒褐色や灰白色が斑に入る。礫面は灰黄色や黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

尖頭器(996)は集中区外から出土しているため、400頁に記載している。剥片素材であり、周縁加工が施されている。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 上記のような石器組成は遺跡の中で本集中区のみである。

石器集中区10

[位置・出土状況] ⅢC7・8グリッドに位置しており、1.5×1mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部に形成された自然堤防へと緩やかに上る標高約345.2～345.4mの斜面上で検出している。

[分布状況] ⅢC7・8グリッドの境を中心とした狭い範囲に分布しており、東西方向へ広がる。

[出土層位] Ⅱ層からⅢb層で出土しており、Ⅲb層上面(標高約345.2m)に出土ピークがある。最大で約20cmの高低差を有する。Ⅲb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は23点である。

石器組成は彫刻刀形石器1点、二次加工を有する剥片2点、剥片17点、チップ2点、台石1点である。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、安山岩からなる。

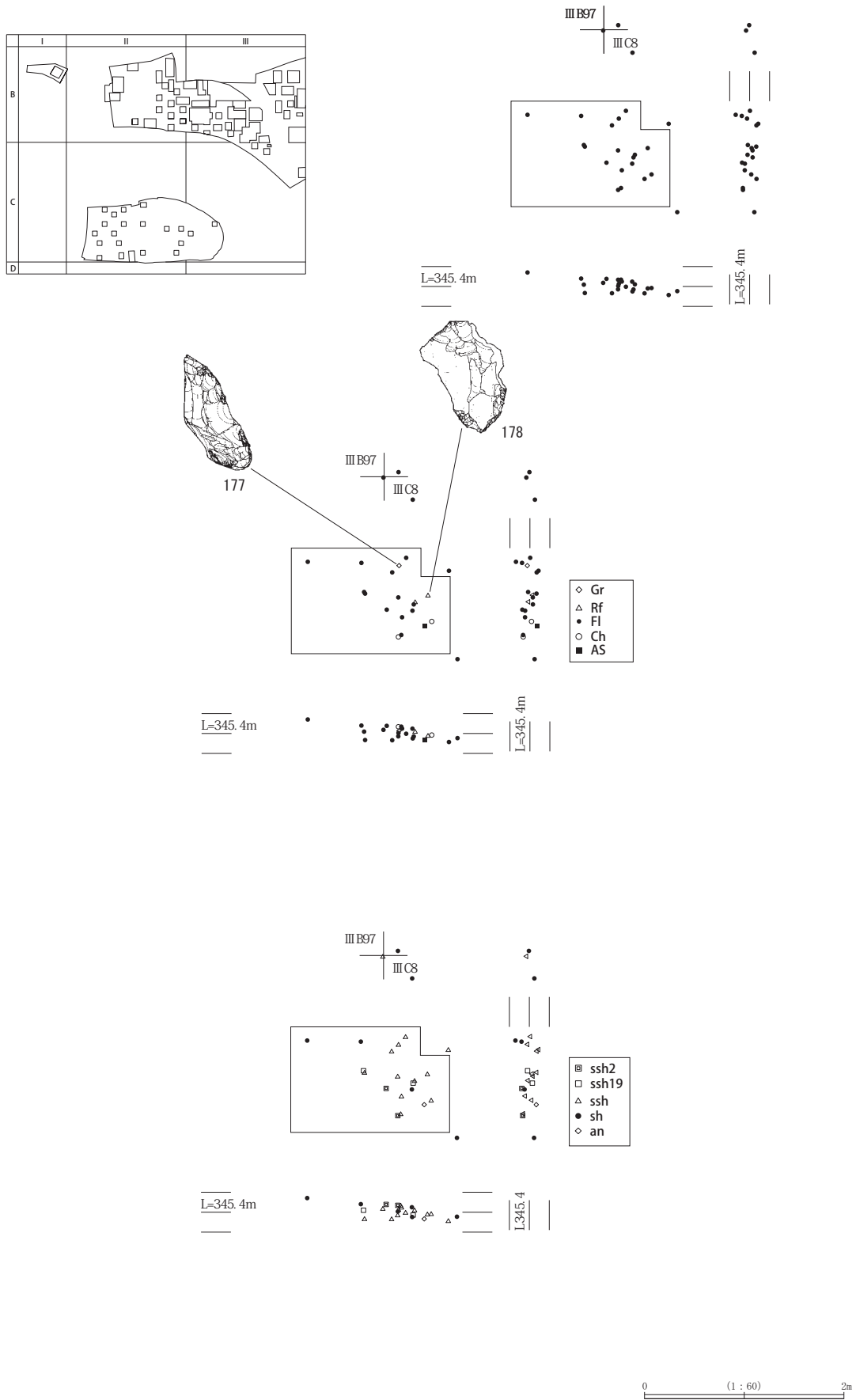
[出土遺物] 197は彫刻刀形石器。複数面の彫刻刀面が上端部に認められる。また末端部には加工が施されスクレイパーとして用いられたと考えられる。腹面の素材腹面に直交する細かな剥離や彫刻刀面の打面部作出からその剥離に至る工程は峠下型細石刃核に類似するが、上端部に形成された剥離が細石刃とは判断しがたいことからこのような器種認定をしている。178は二次加工を有する剥片。179は台石。石器材料は177・178は珪質頁岩、179は安山岩である。

上記の石器から2母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

ssh2：総点数3点、総重量36.26g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が線状に発達している。

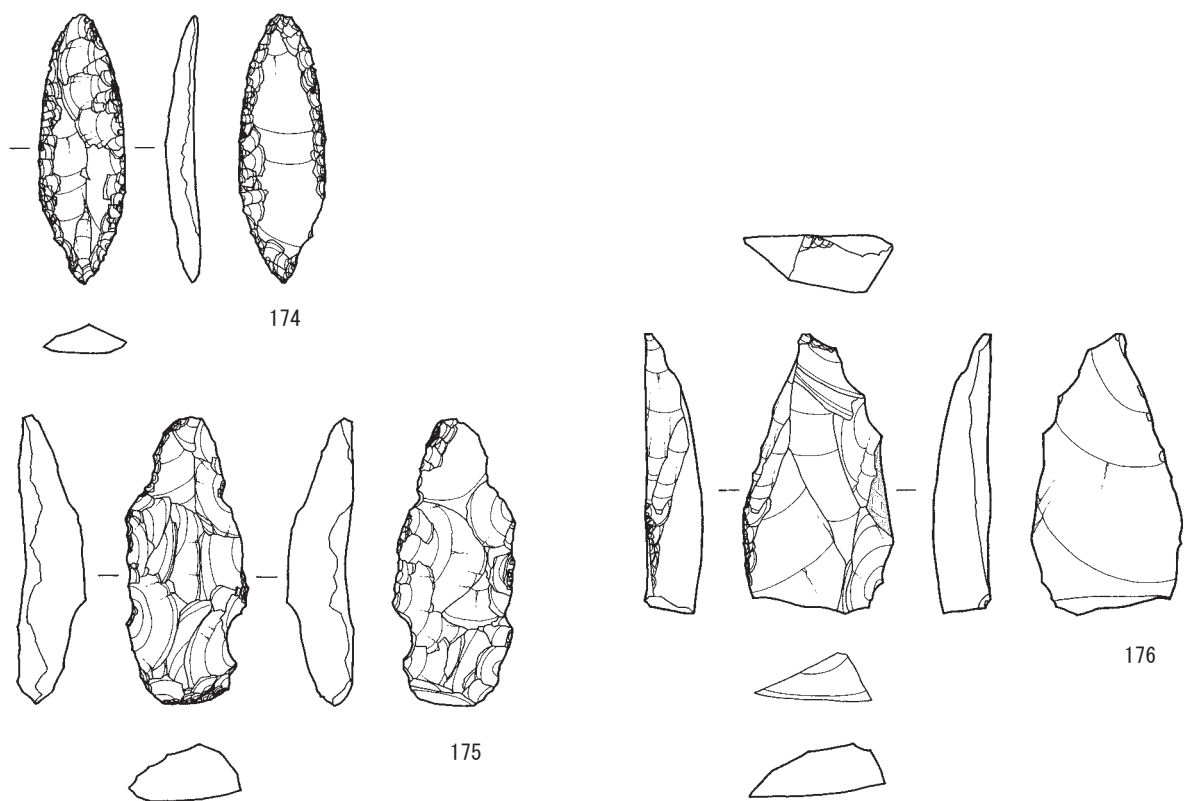
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh19：総点数2点、総重量3.03g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黒褐色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

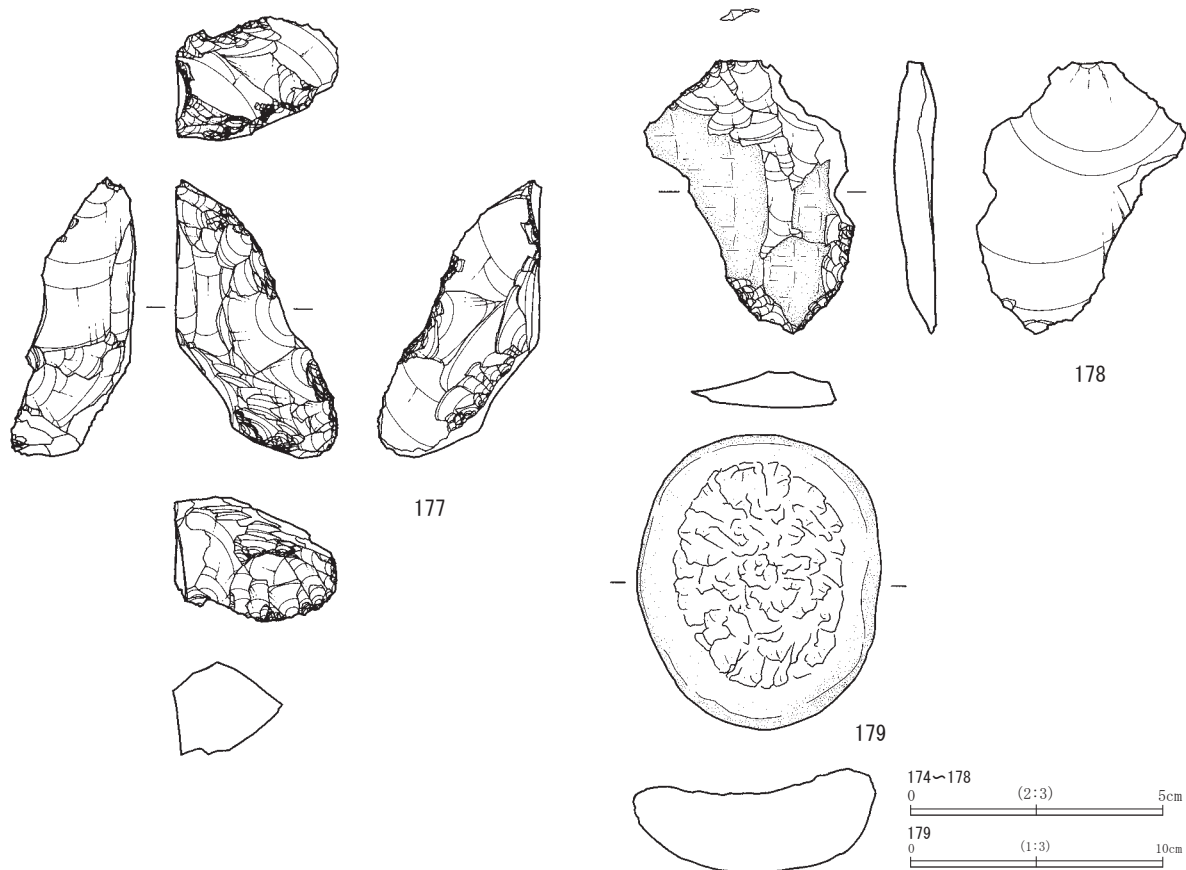


第70図 石器集中区10石器・器種・母岩別出土状況図

石器集中区 9



石器集中区 10



第71図 石器集中区 9・10出土遺物

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 出土点数も少ないうえにその内容も不明な点が多いことから、本集中区の位置付けについては判然としない。

石器集中区11

[位置・出土状況] III B 85～87・95～97グリッドに位置しており、8.5×7.5mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部に形成された自然堤防へと緩やかに上る標高約345.8～346.1mの斜面上で検出している。

[分布状況] III B 96グリッドを中心に散漫的に分布しており、南北方向へ広がる。

[出土層位] II層からIV層で出土しており、IIIb層中部から下部(標高約345.5～345.7m)に出土ピークがある。最大で50cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は42点である。

石器組成は彫刻刀形石器1点、スクレイパー4点、二次加工を有する剥片4点、石刃7点、剥片18点、チップ1点、礫2点、礫片5点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩や凝灰岩からなる。

[出土遺物] 180は荒屋型彫刻刀形石器。周縁に加工が施され、左肩に彫刻刀面を複数面作出している。181～185はスクレイパー。181～183は石刃を素材とし、一側縁ないし両側縁に加工が施されている。184・185はsh24に属する。素材剥片の腹面剥離方向から見ると両側縁に加工が施されていたと思われる。186は二次加工を有する剥片。188～191は石刃。背面と腹面の剥離方向は188以外は同じである。このようにスクレイパーの素材となる石刃を含めて多くの石刃が認められるものの、これらを剥離した石核は確認できていない。石器材料は181・183～190・192は頁岩、180・182は珪質頁岩、191は凝灰岩である。

上記の石器から5母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめておく。下記の3母岩以外は母岩の主体は他集中区にある。

sh21：総点数28点、総重量577.22g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、黄灰色が斑に入る。礫面は黄灰色と呈する。石質は緻密だが、やや粗粒であることからざらつく。

接合個体は点数が6点、剥片からなる。剥離工程は194→(193a+b)→(195a+b)→196である。本個体は石核整形の過程に伴う資料である。剥片を単設方向から連続的に剥離しており、打面再生を介在させた後、再度剥片を剥離している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh24：総点数2点、総重量9.54g。スクレイパーで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、灰オリーブ色が点・層状に入る。礫面はにぶい黄褐色でる。石質は緻密でややなめらかである。

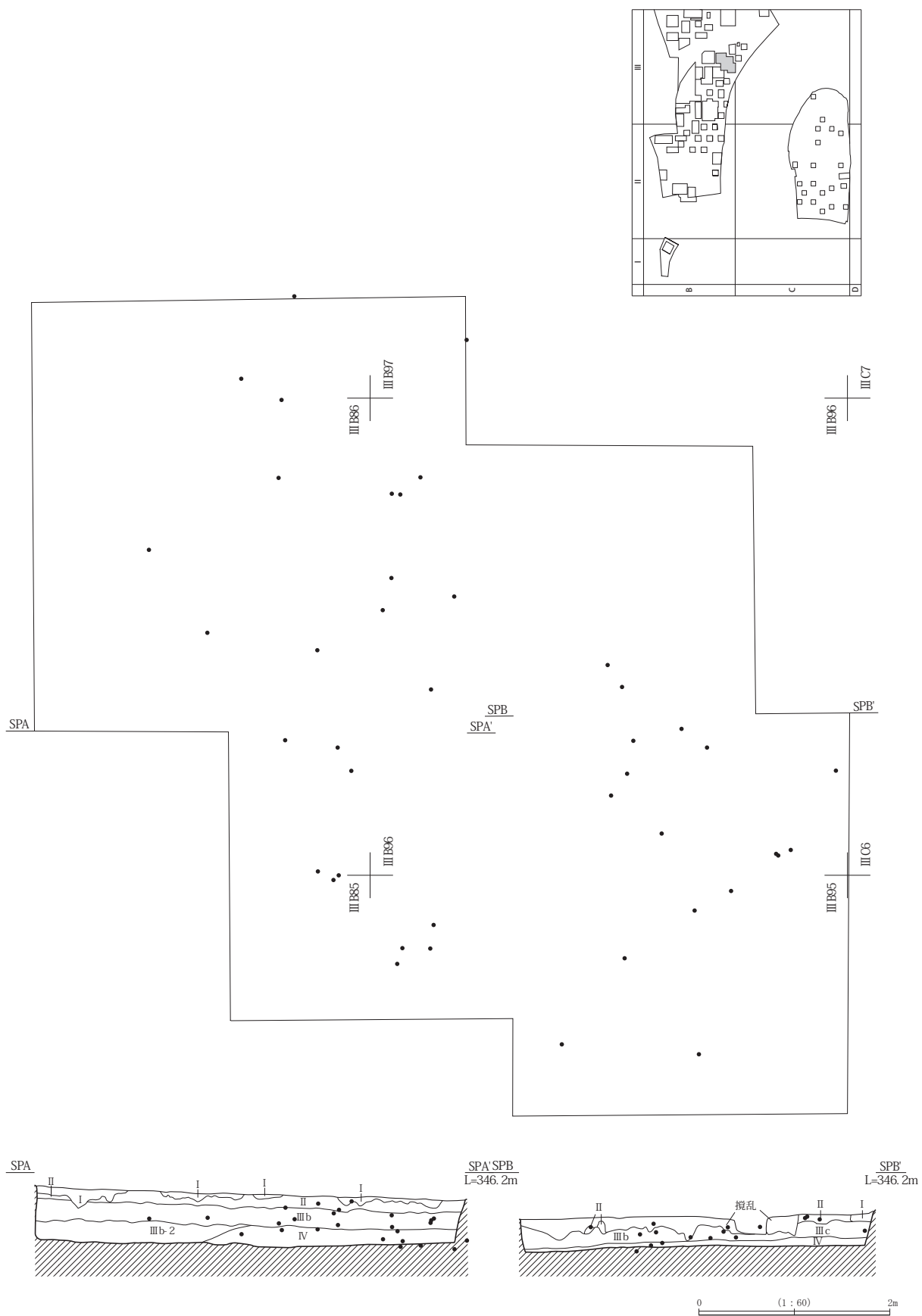
スクレイパー(184・185)については出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、欠損後に本体を搬出している。

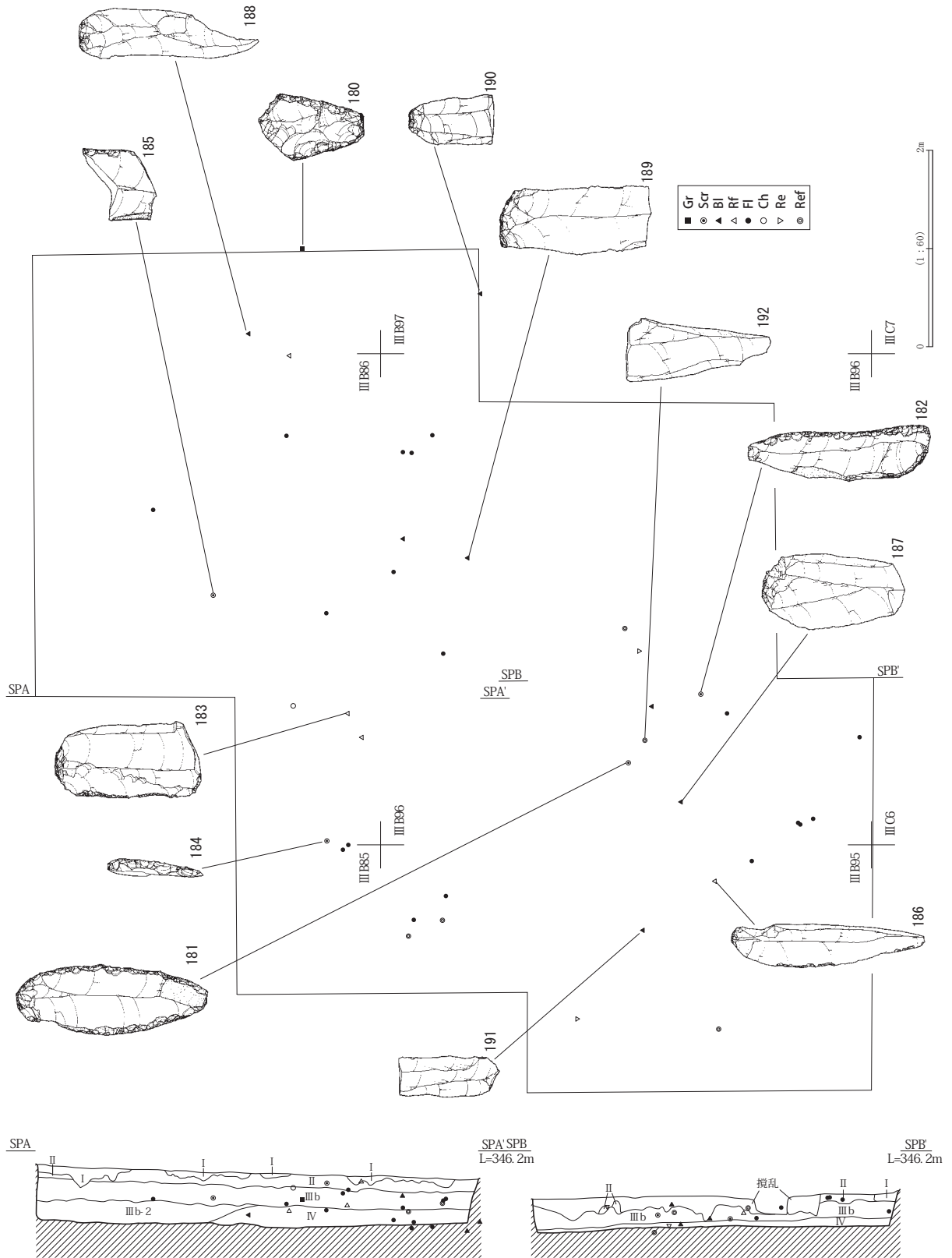
sh25：総点数2点、総重量2.29g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰を基調とし、礫面付近はにぶい褐色が層状に入る。石質は緻密だが、被熱しているためややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

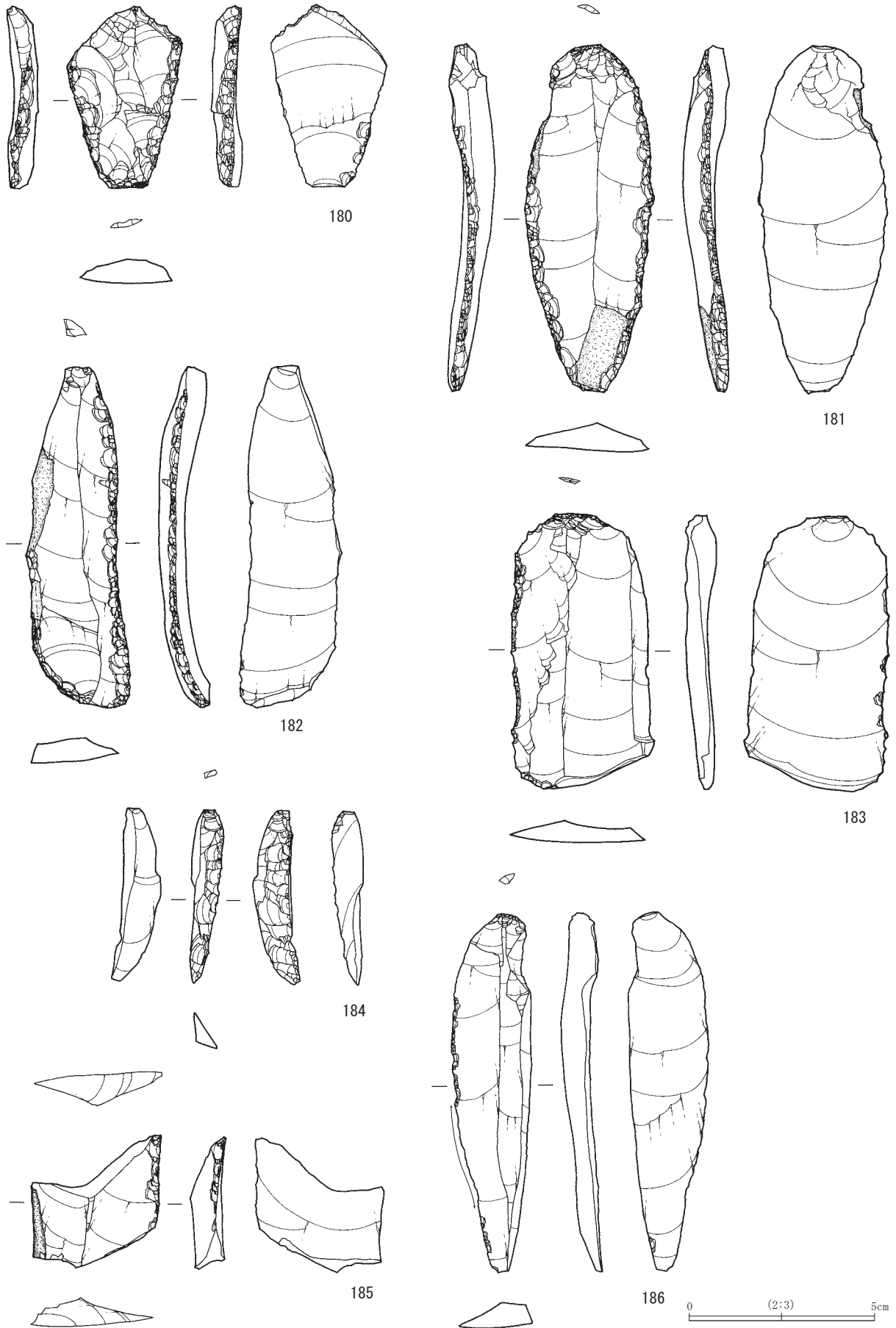
[備考] 本集中区と同じく荒屋型彫刻刀形石器を組成する石器集中区25は約30m西に位置している。



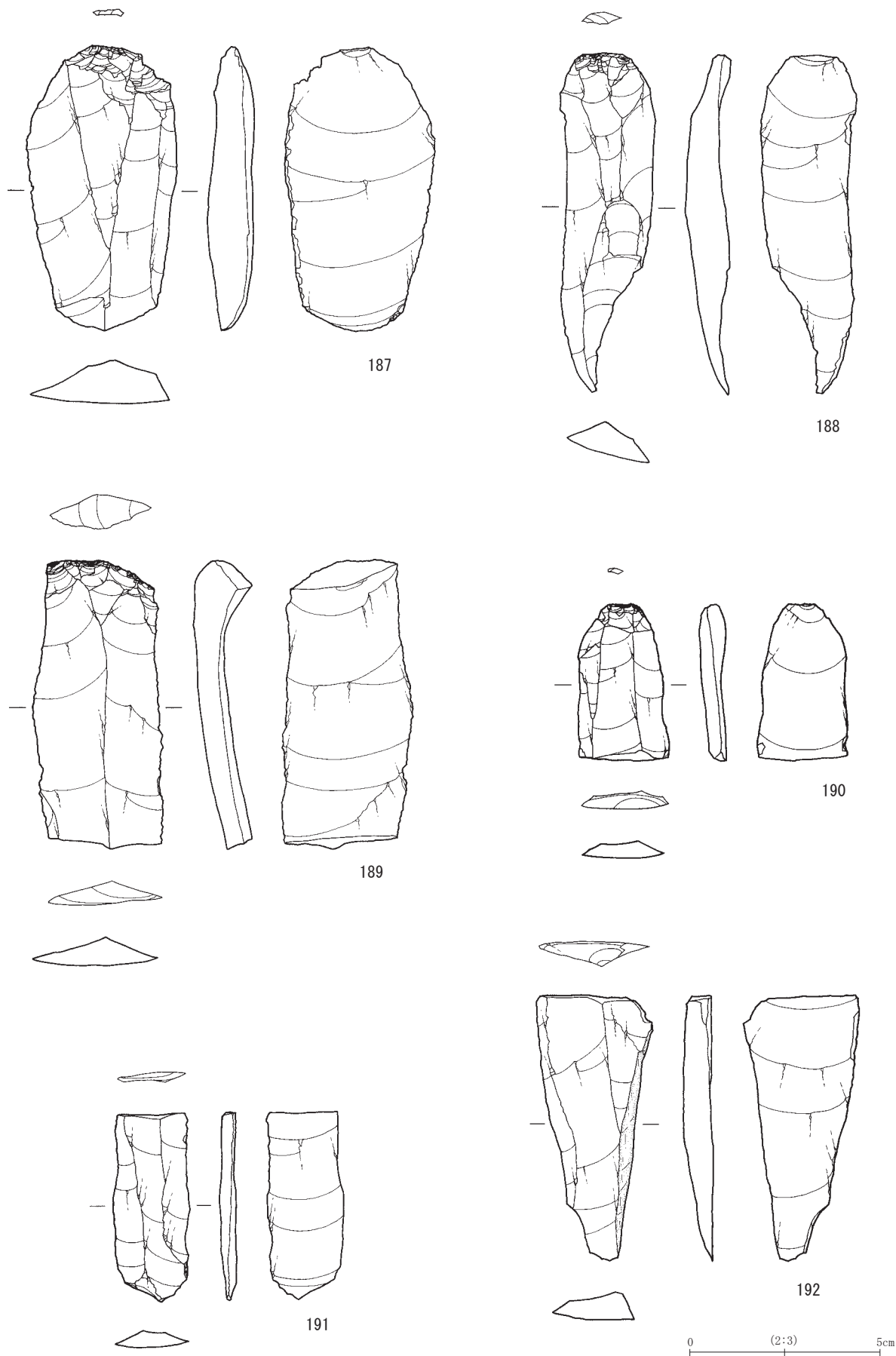
第72図 石器集中区11石器出土状況図



第73図 石器集中区11器種別出土状況図

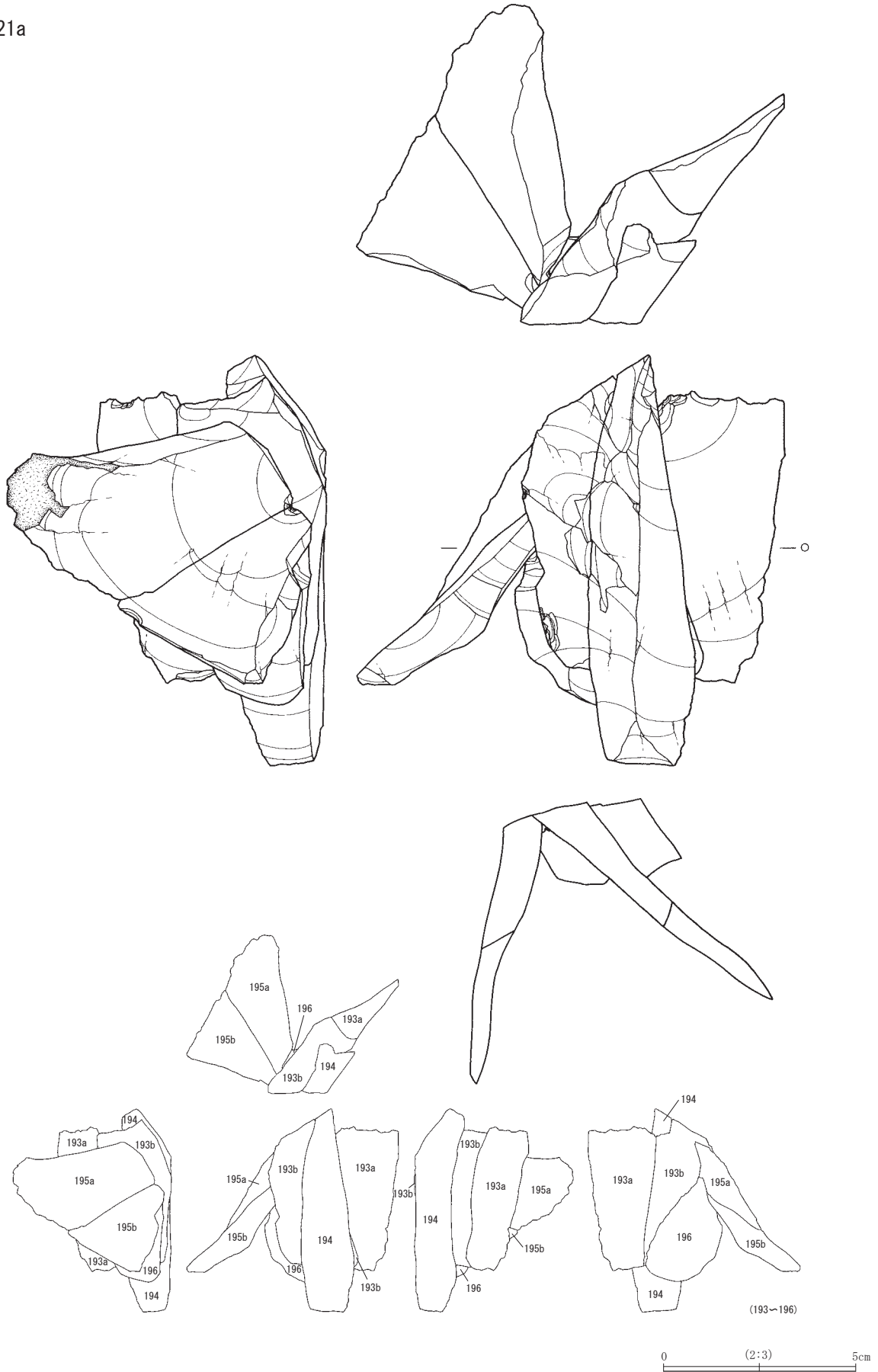


第75図 石器集中区11出土遺物 (1)



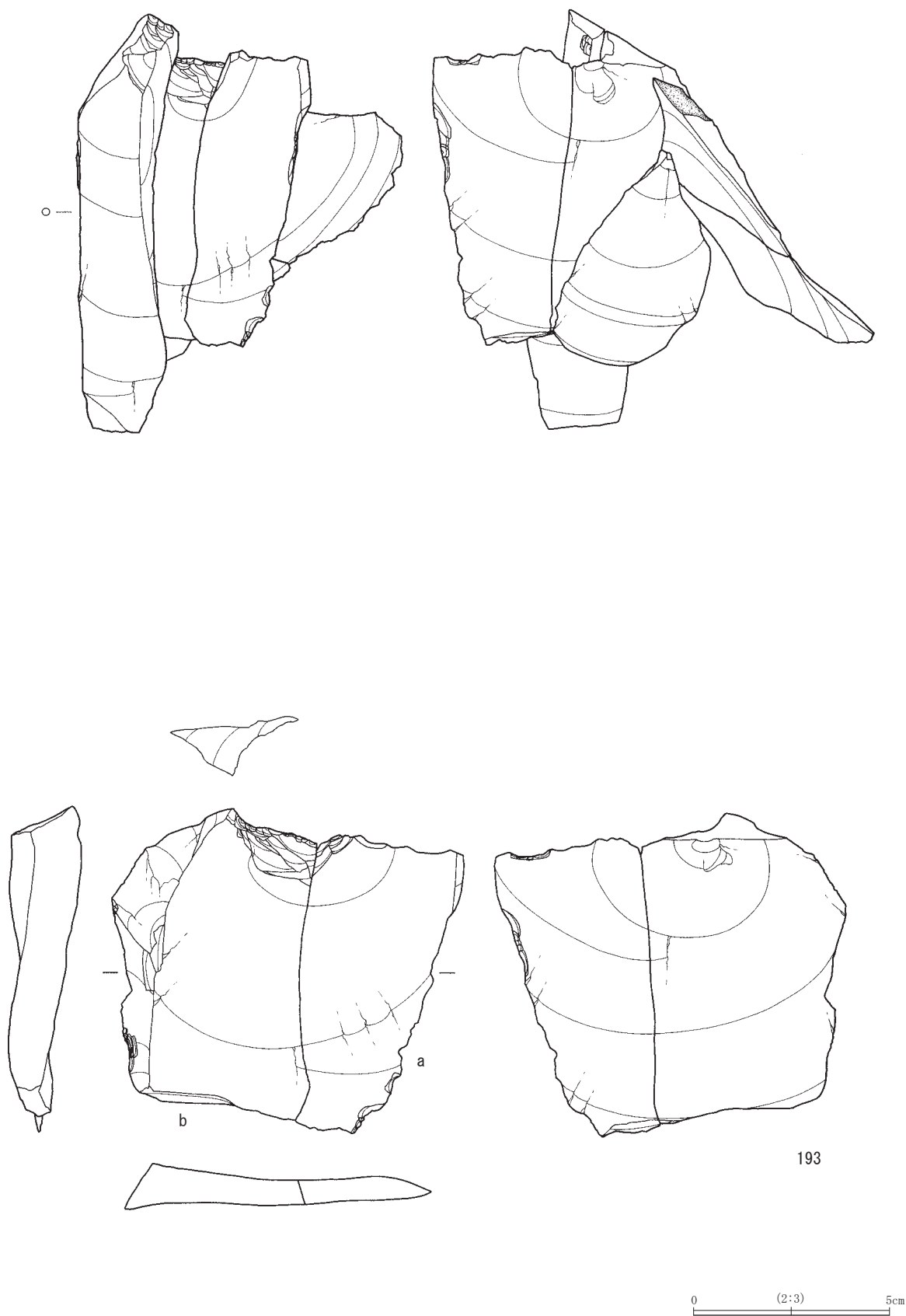
第76図 石器集中区11出土遺物 (2)

sh21a

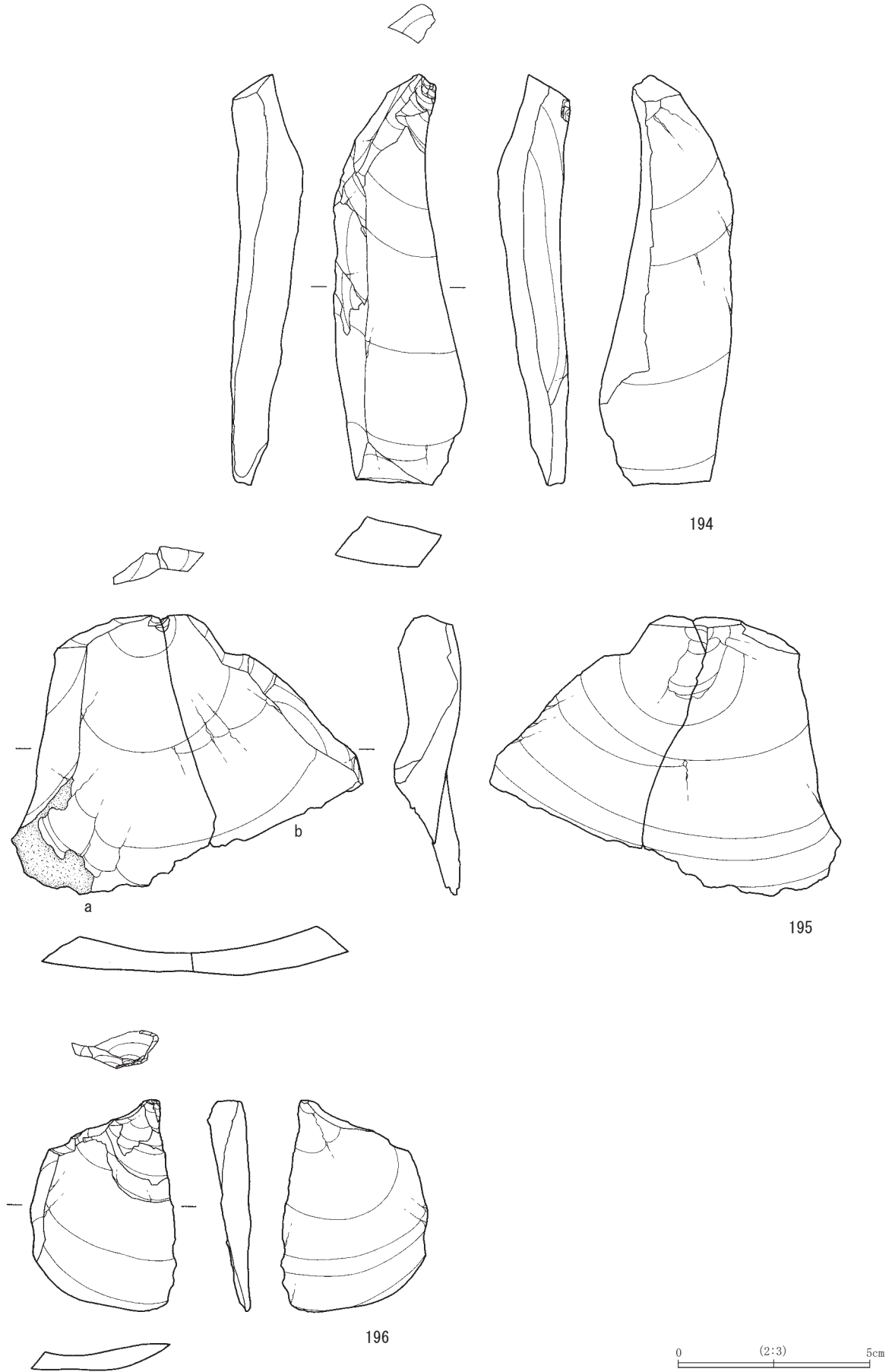


第77図 石器集中区11出土遺物 (3)

(sh21a)



第78図 石器集中区11出土遺物 (4)



第79図 石器集中区11出土遺物 (5)

石器集中区12

[位置・出土状況] ⅢC30、ⅣC21グリッドに位置しており、4.5×4mの範囲に収まる。段丘南側の縁辺部へと緩やかに下る標高約344.3mの斜面上で検出している。

[分布状況] ⅢC30とⅣC21グリッドに跨る範囲を中心に分布しており、東西方向へ広がる。僅かながら斜面下の南東方向へ流出しているものも認められる。

[出土層位] Ⅲb層からⅢb-2層で出土しており、Ⅲb-2層上面(標高約344.1m)に出土ピークがある。最大で約35cmの高低差を有する。調査時にはⅢb層として取り上げていものが多いものの、断面図に投影させた結果から石器は、層界に堆積していることが捉えられる。このことからⅢb-2層上面に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は263点である。

石器組成はナイフ形石器8点、彫刻刀形石器4点、尖頭器1点、スクレイパー5点、二次加工を有する剥片21点、石刃7点、剥片179点、チップ19点、削片1点、石核5点、敲石3点などからなる。

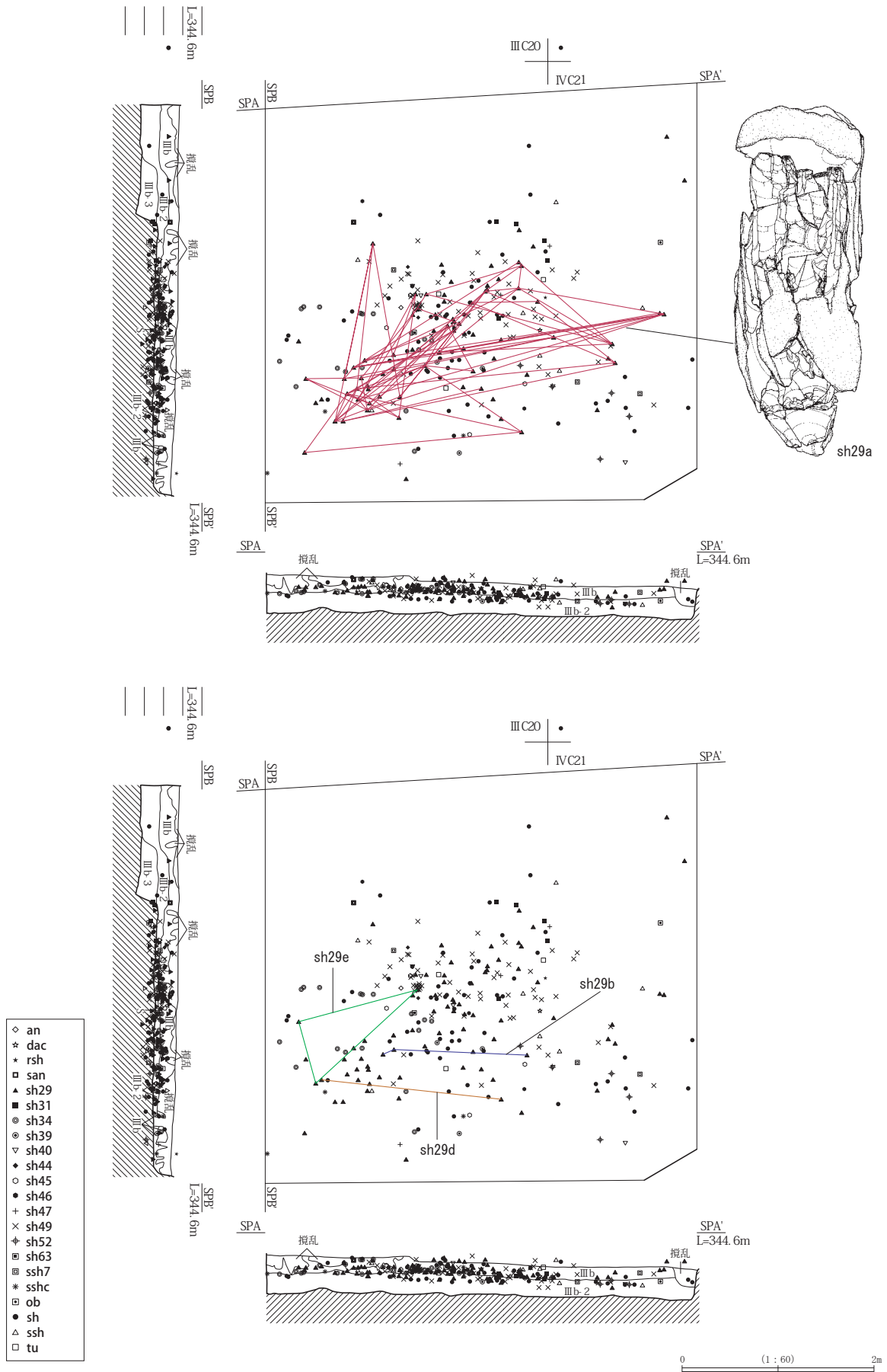
石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、凝灰岩、黒曜石からなる。

[出土遺物] 197～200・212・297はナイフ形石器。197・198は二側縁加工。素材縁辺を左側縁に残し、それ以外の縁辺に加工を施している。ただし198は素材を大きく断ち切っている。これらは素材打面の配置が異なり、198は基部側、197は刃部側に据えられ、いずれも素材打面を除去している。基部加工は裏面にまで及び、斜行した剥離が認められる。199は基部+先端部加工。石刃を素材とし、素材打面を基部側に据えている。基部加工は裏面にまで及び、斜行した剥離が認められる。200は一側縁加工。この石器は297が本来の平面形状であり、欠損に伴う刃部再生により規模が縮小している。当初の調整加工は緩やかに湾曲していたが、欠損したため直線的になりやや鋭角気味に左側縁に接している。この197と200はsh49に属する。212は左側縁を中心に加工を施している。201は黒曜石製の周縁加工尖頭器。裏面には素材腹面が認められ、縦長剥片を素材としていたと考えられる。基部裏面加工がナイフ形石器と類似しており、やや斜行した剥離が認められる。202～204・307は彫刻刀形石器。202・307は腹面側に調整が施され、彫刻刀面を左側縁や左肩に作出している神山型である。これらは共に素材剥片の打面側を大きく除去した後、彫刻刀面を作出している。203・204は側縁や裏面に彫刻刀面を作出しているが、型式は不明である。205は彫刻刀形石器の削片。背面には複数の彫刻刀面が認められる。206・218・306はスクレイパー。218は縦長剥片を分割した後、末端部と側縁に加工を施している。206は大型の横長剥片の縁辺に加工が施されている。刃部形成と素材末端部の欠損との前後関係は不明である。306は石刃の末端部に刃部を作出している。207は石核。上設打面を設定し、作業面稜調整を施した後に石刃を剥離している。作業面と対となる裏面側には礫面を残置しているが、剥離が展開できなかったためそれを大きく残している。中型の亜円礫を素材としており、同一個体が確認できないことから石核で持ち込まれたと思われる。208～210は敲石。石器材料は197～200・202・204・207すべて頁岩、203・205・206は珪質頁岩、201は黒曜石、208・209は凝灰岩、210は安山岩である。黒曜石の産地は男鹿産である。

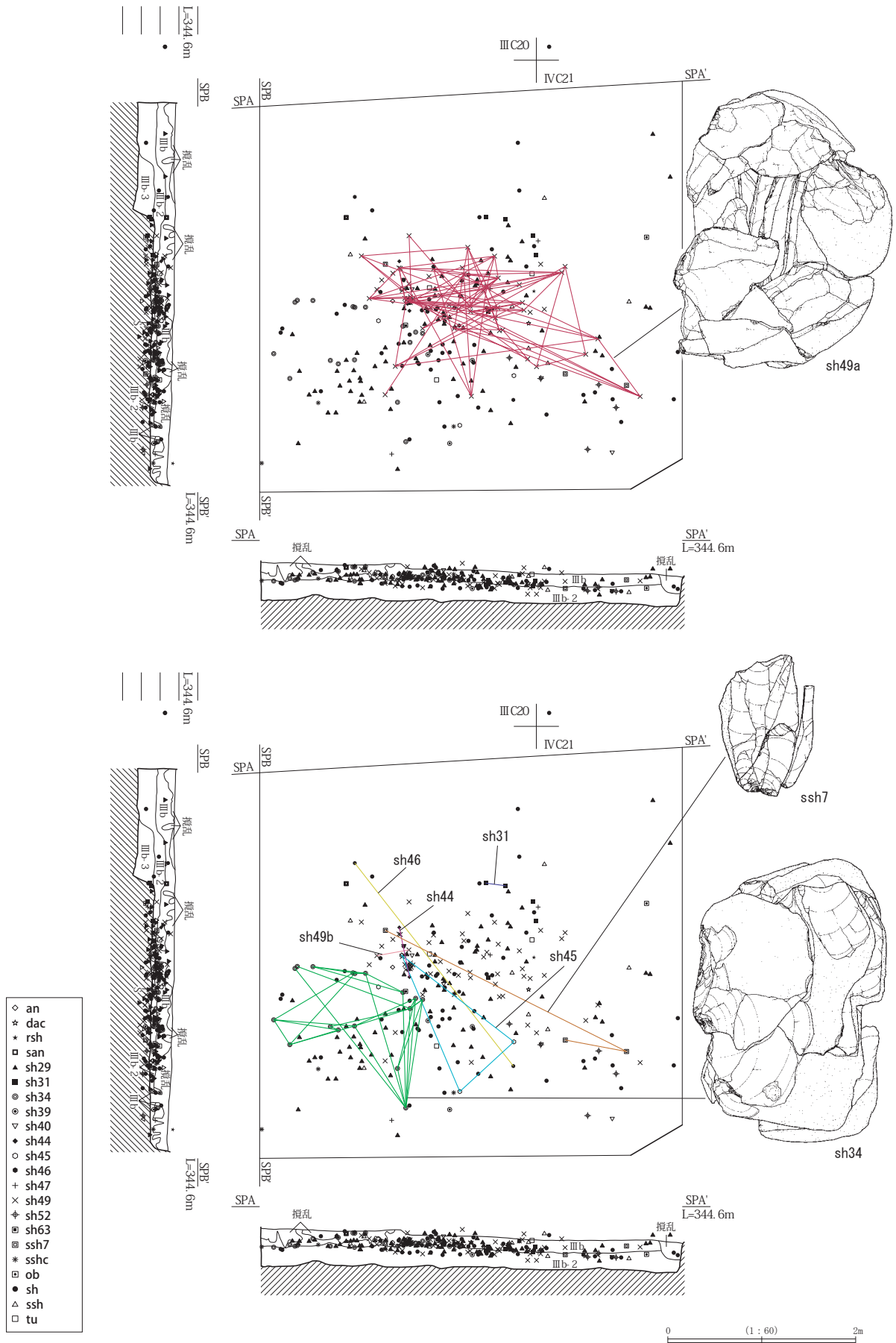
上記の石器から13母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

sh29：総点数79点、総重量2274.17g。ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は灰黄を基調とし、部分的に暗灰黄色が認められる。礫面は灰黄～浅黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、礫面付近はややざらつく。

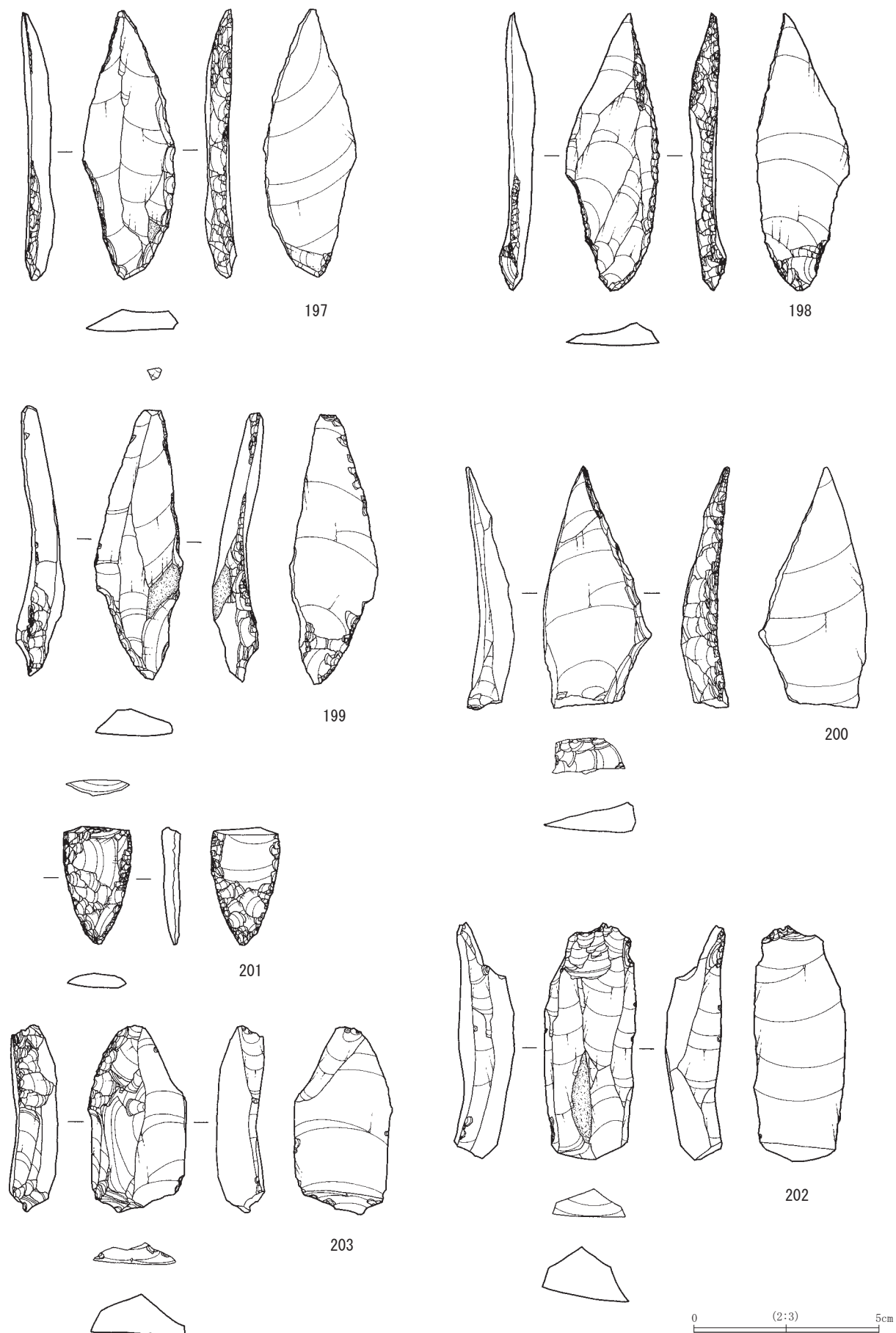
接合点数は51点あり、4個体(a～d)に分かれる。各個体の点数は個体aが43点あり、上記のチップ以外の器種からなる。個体bが3点、個体cが3点、個体dが2点あり、b～dは剥片からなる。



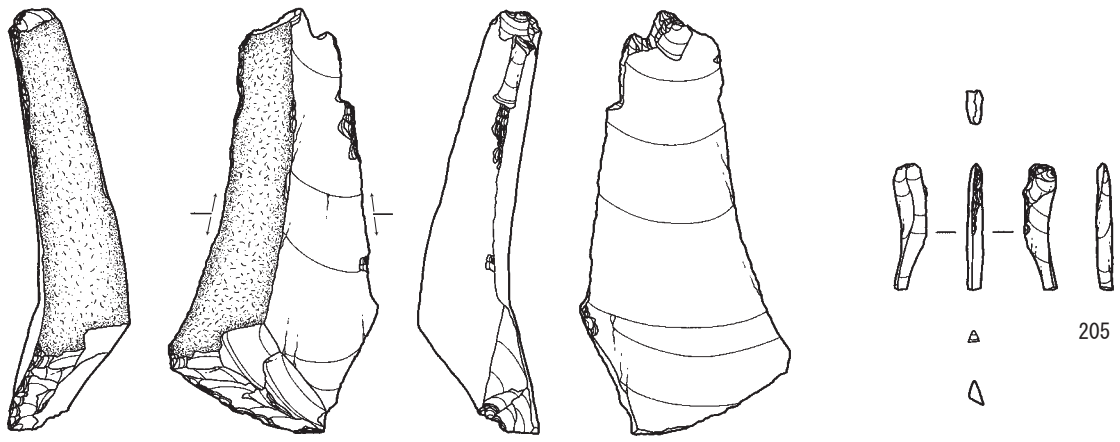
第81図 石器集中区12母岩別出土状況図 (1-1)



第82図 石器集中区12母岩別出土状況図 (1-2)

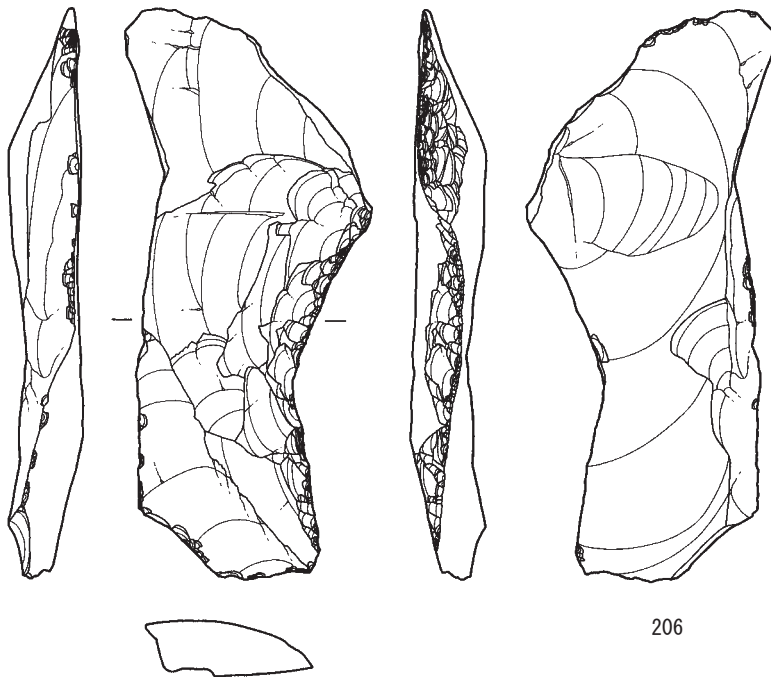
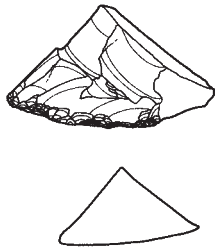


第83図 石器集中区12出土遺物 (1)

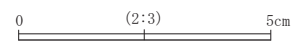


204

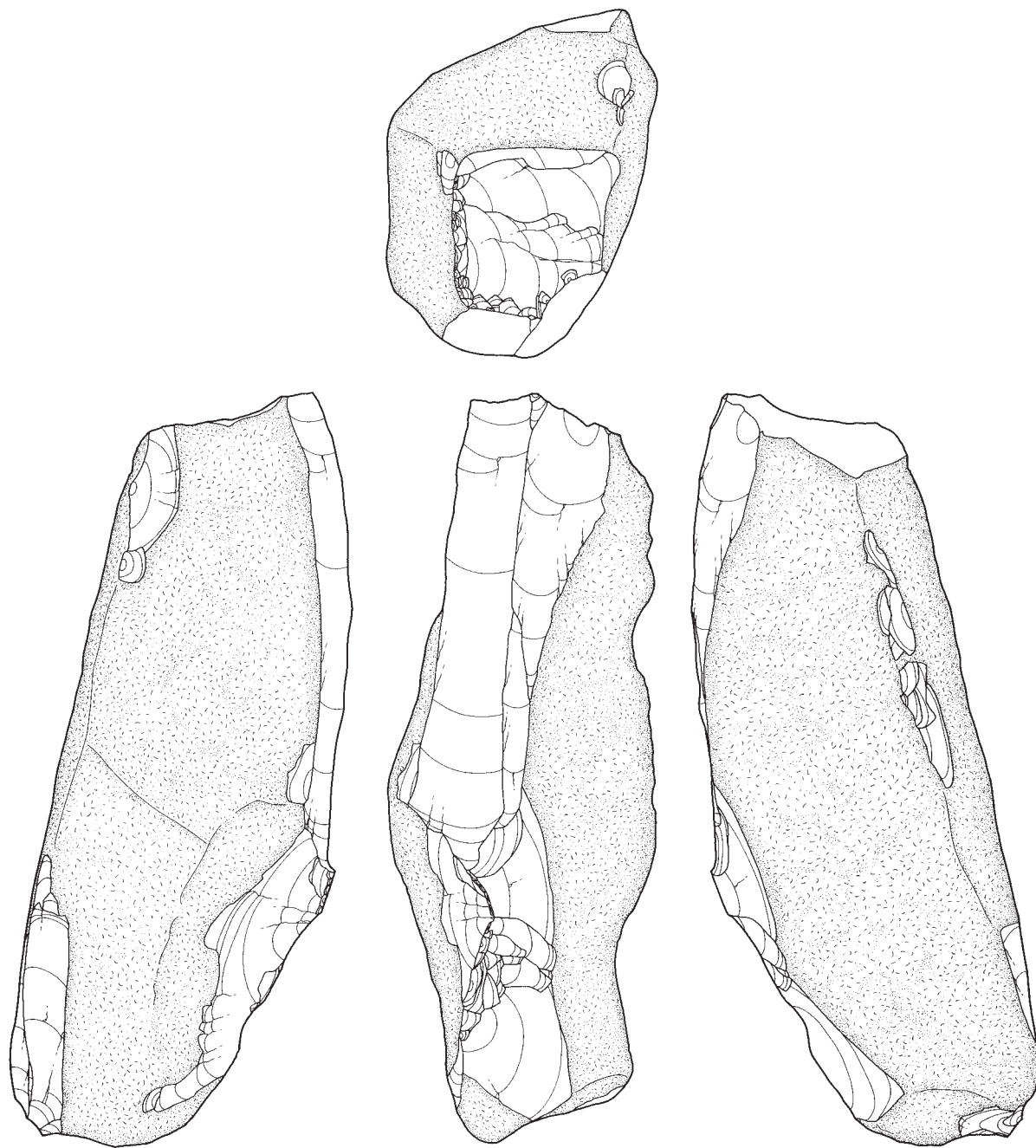
205



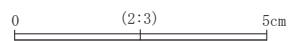
206



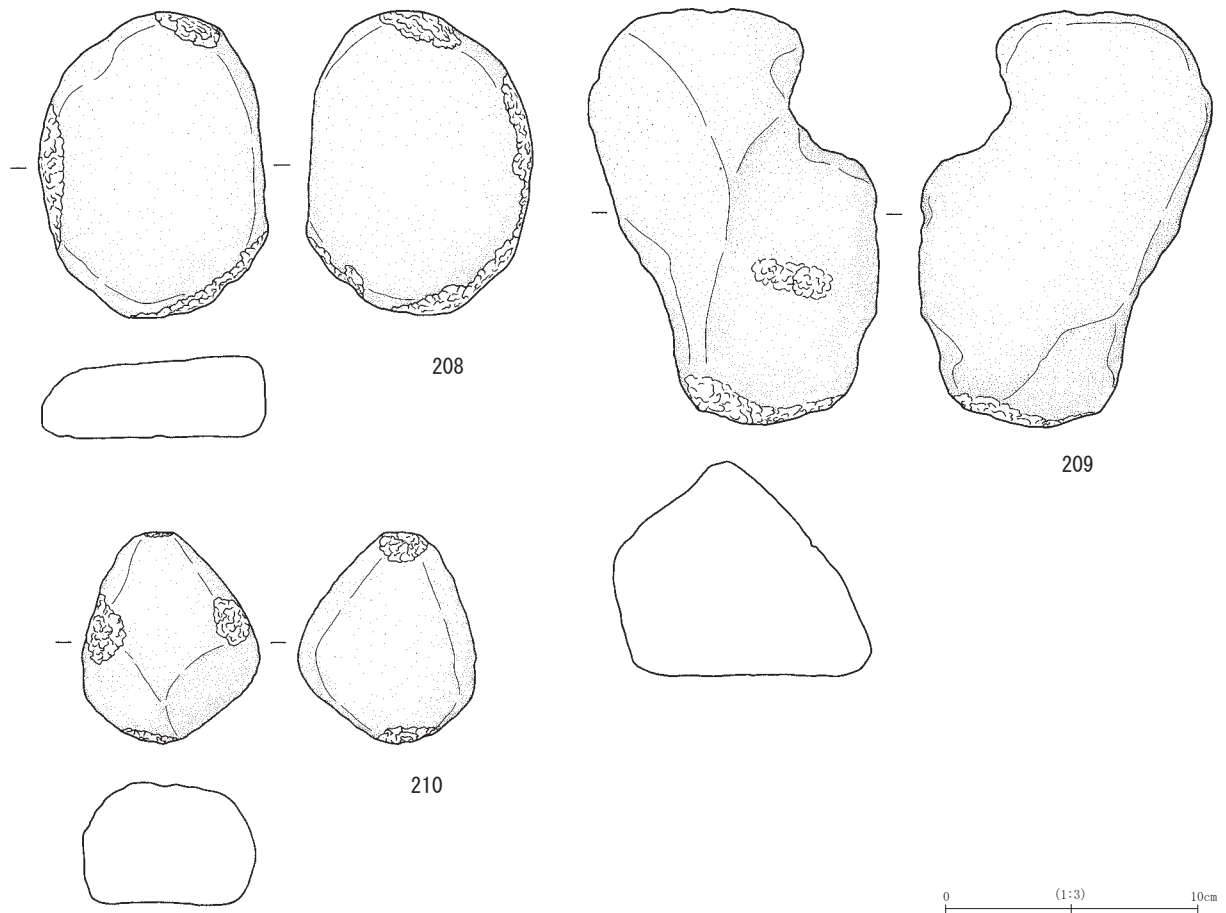
第84図 石器集中区12出土遺物 (2)



207



第85図 石器集中区12出土遺物 (3)

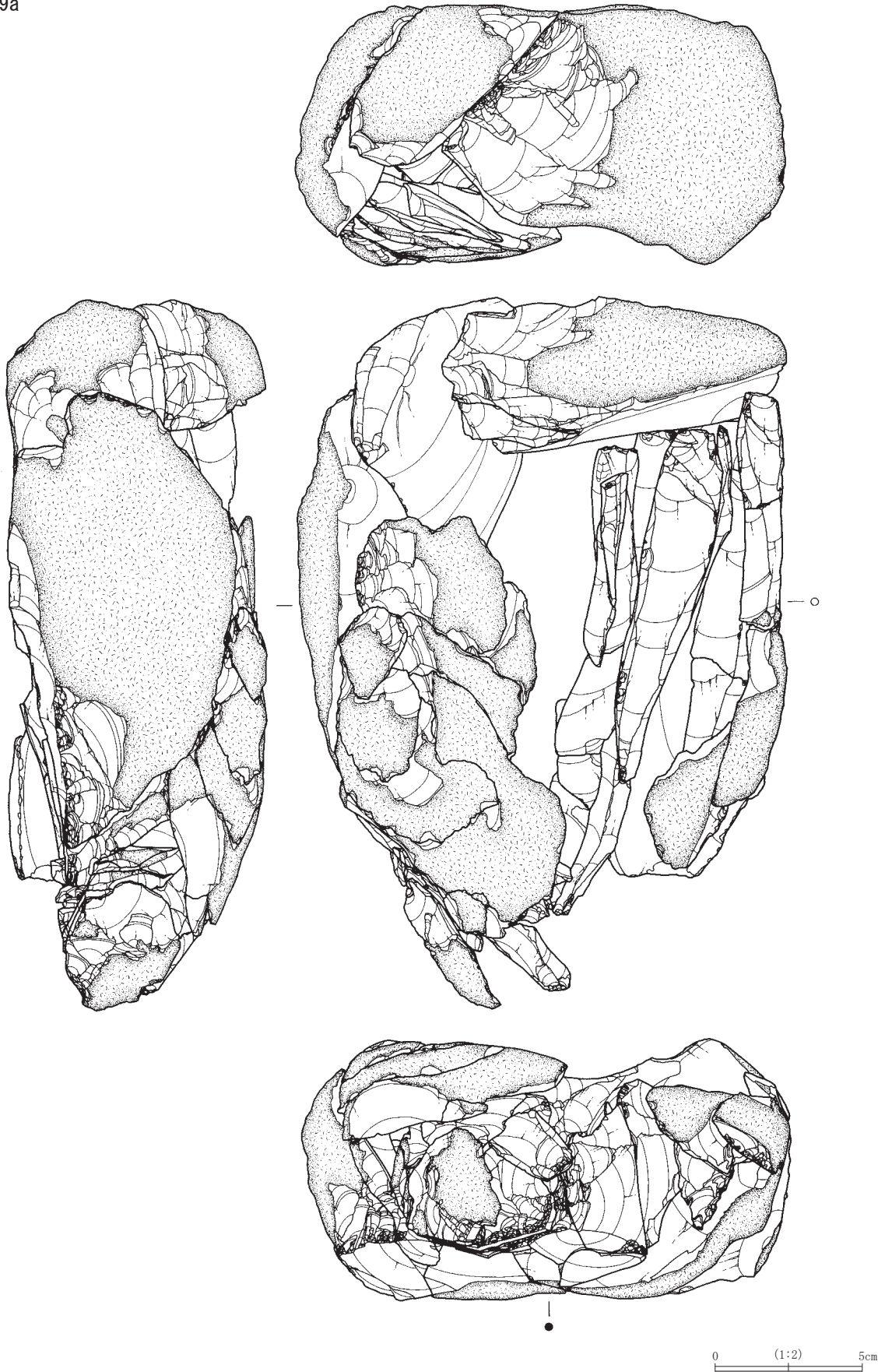


第86図 石器集中区12出土遺物(4)

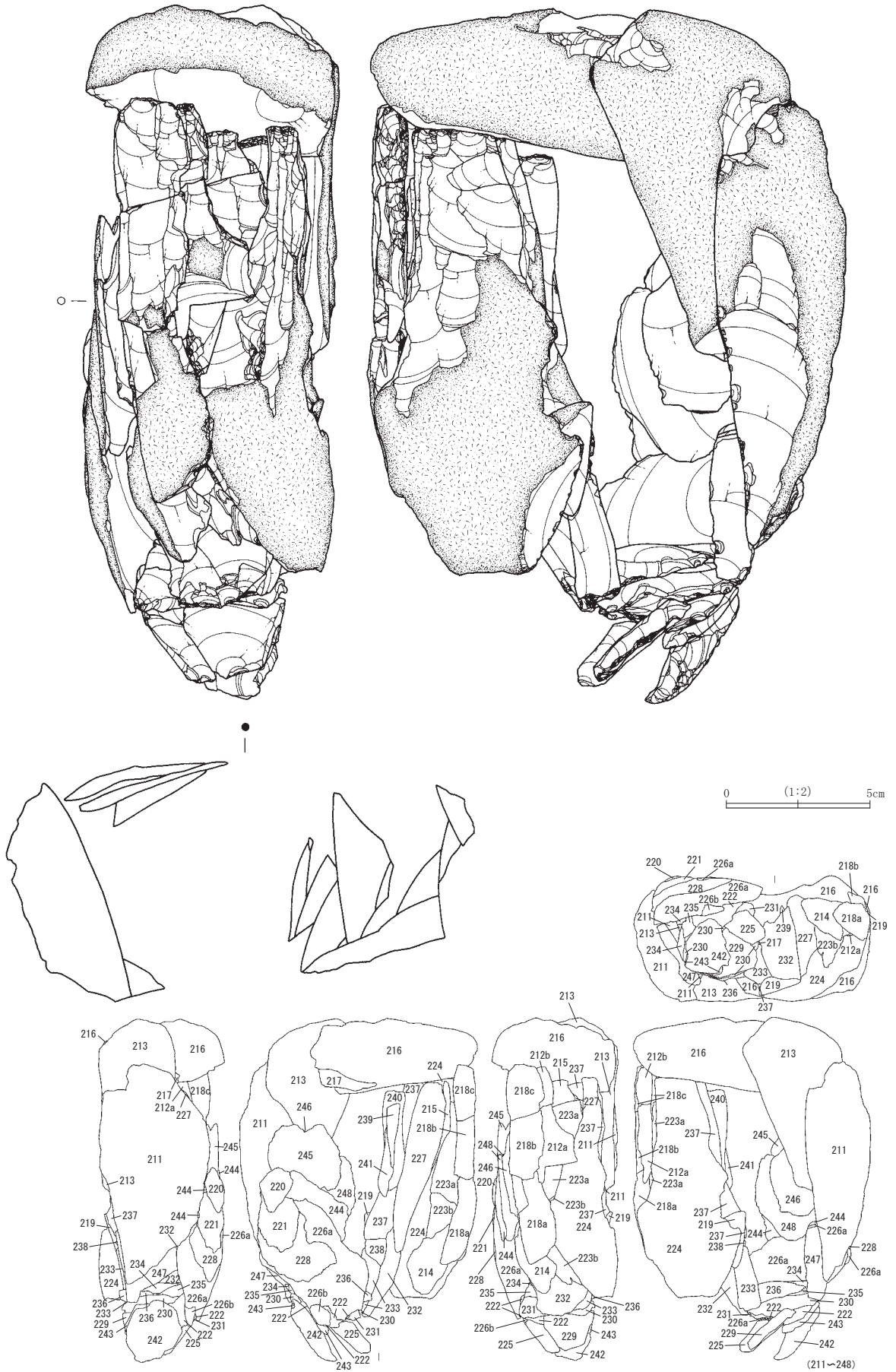
個体 a の剥離工程は、211→<<213→216→<217><(218a+b+c)>→<214><(212a+b)>→224→(223a+b)→215→227→219>><<220→221→228→(226a+b)→(①・②)→222→225→229→230→231>>→232→233→<235→236→234><(237+238)→240→239→241> 242→243①→222 ②<244→245→248→246><247>である(<○>、<<○>>や・の前後関係は不明。また、①・②は接合関係にないことから、このような記載をしている)。本個体は礫面除去・石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。最初に正面左側で礫面除去を行った後、上面において大型剥片(216)を剥離することで打面を設定している。そして右側面を中心に上設打面からは作業面稜調整を介在させながら、目的剥片である大型の石刃や縦長剥片を剥離している。この剥離工程に伴い上設打面で打面再生・調整、また下半で石核整形を施すたびに、作業面高は減少する。さらに剥離が進行するにつれて意図した規模の石刃や縦長剥片が剥離できなくなると180度打面転位し、下設打面を設定している。このように剥離工程を捉えられるが正面左側における稜調整(上記工程②以降)は、剥離工程当初の礫面除去後か石核下半整形時に施されたかについては判然としない。また、最初に剥離した大型剥片(216)は石核の素材に用いられているが、意図した剥片剥離には至らず廃棄している。本工程では下設打面を設定すると剥離は停止しており、接合状況は中は空洞である。

個体 b～d は、b・d が礫面除去、c が背面に作業面稜調整剥片剥離に伴う資料である。いずれも上記の過程に含まれるものである。

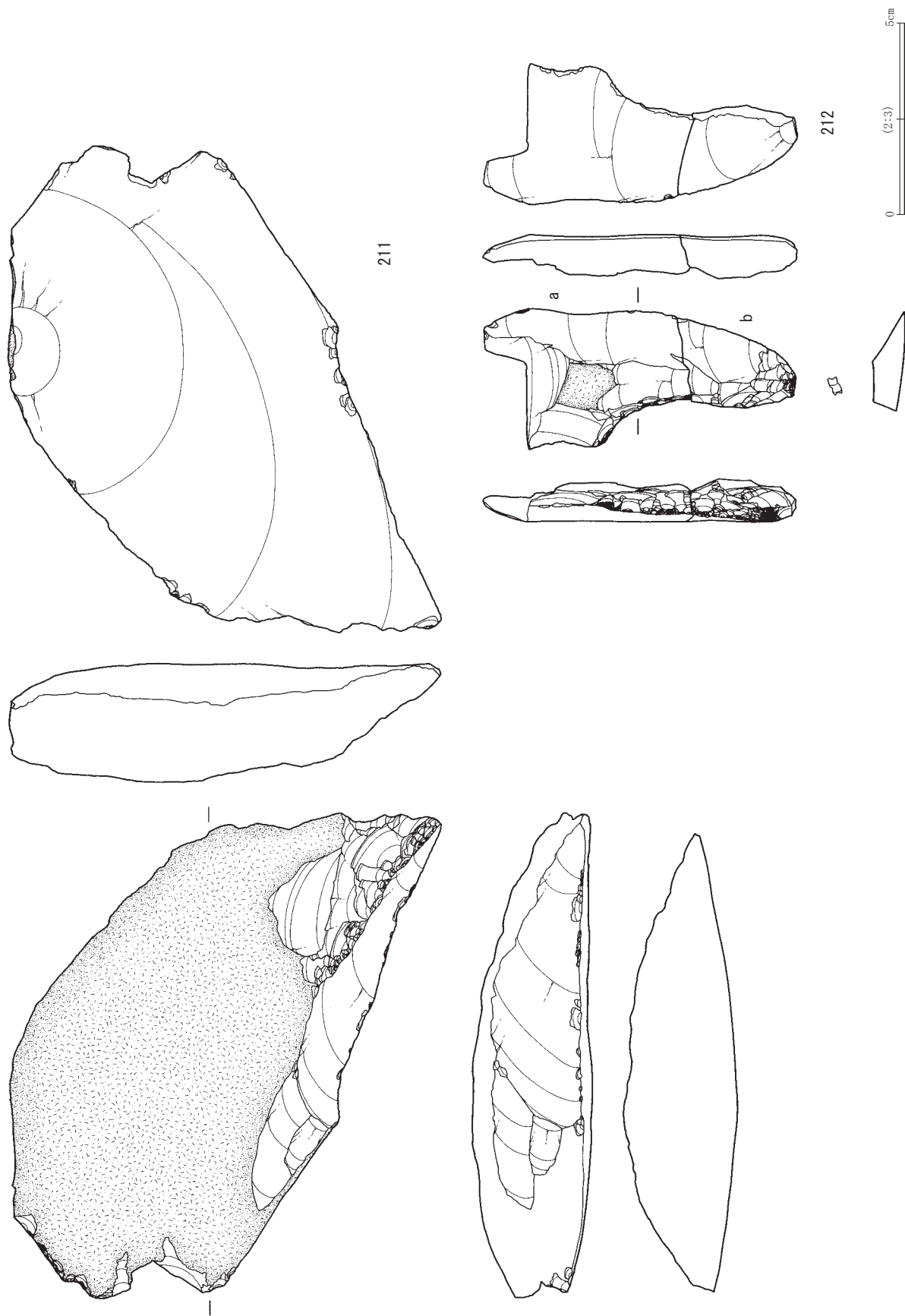
sh29a



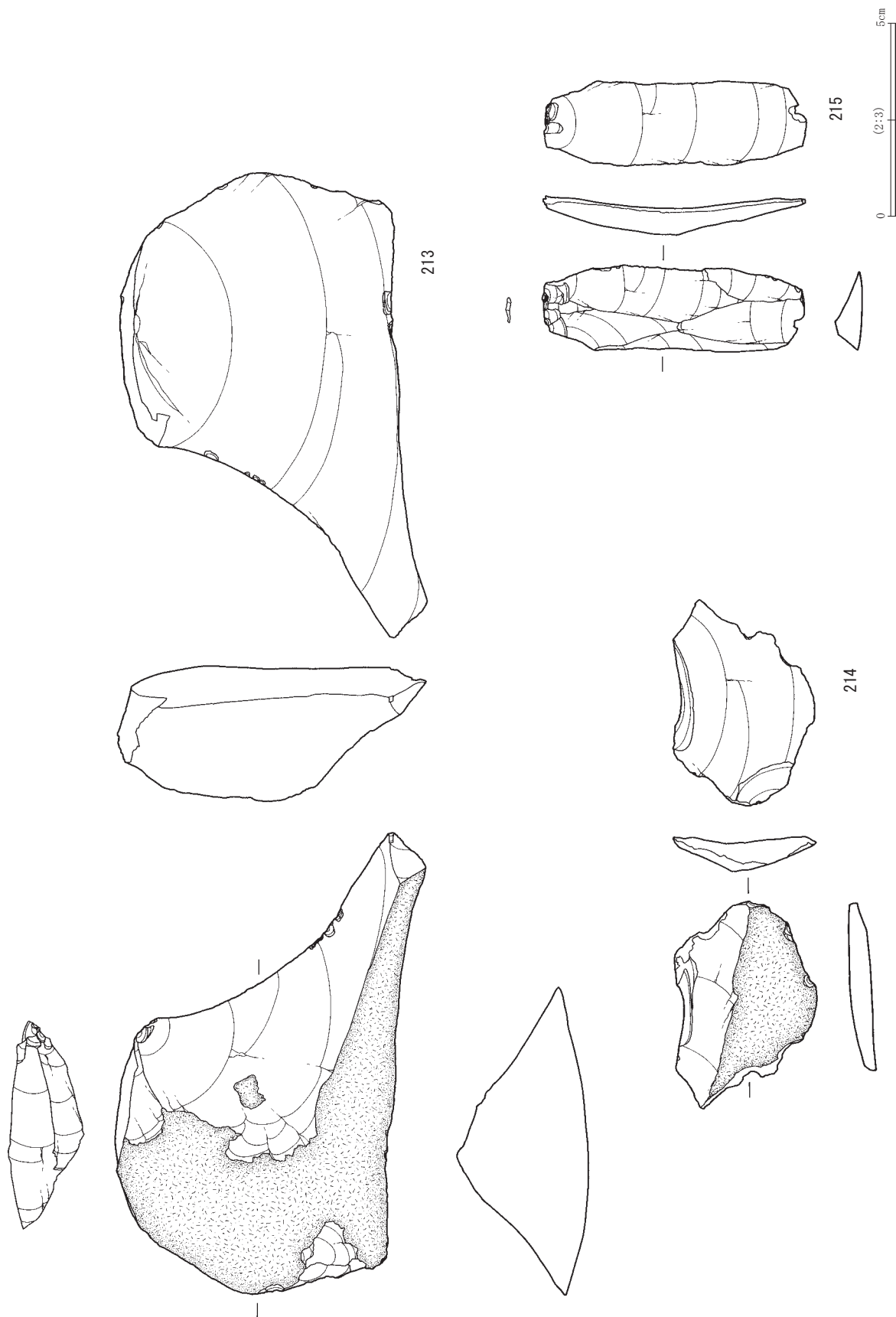
第87図 石器集中区12出土遺物 (5)



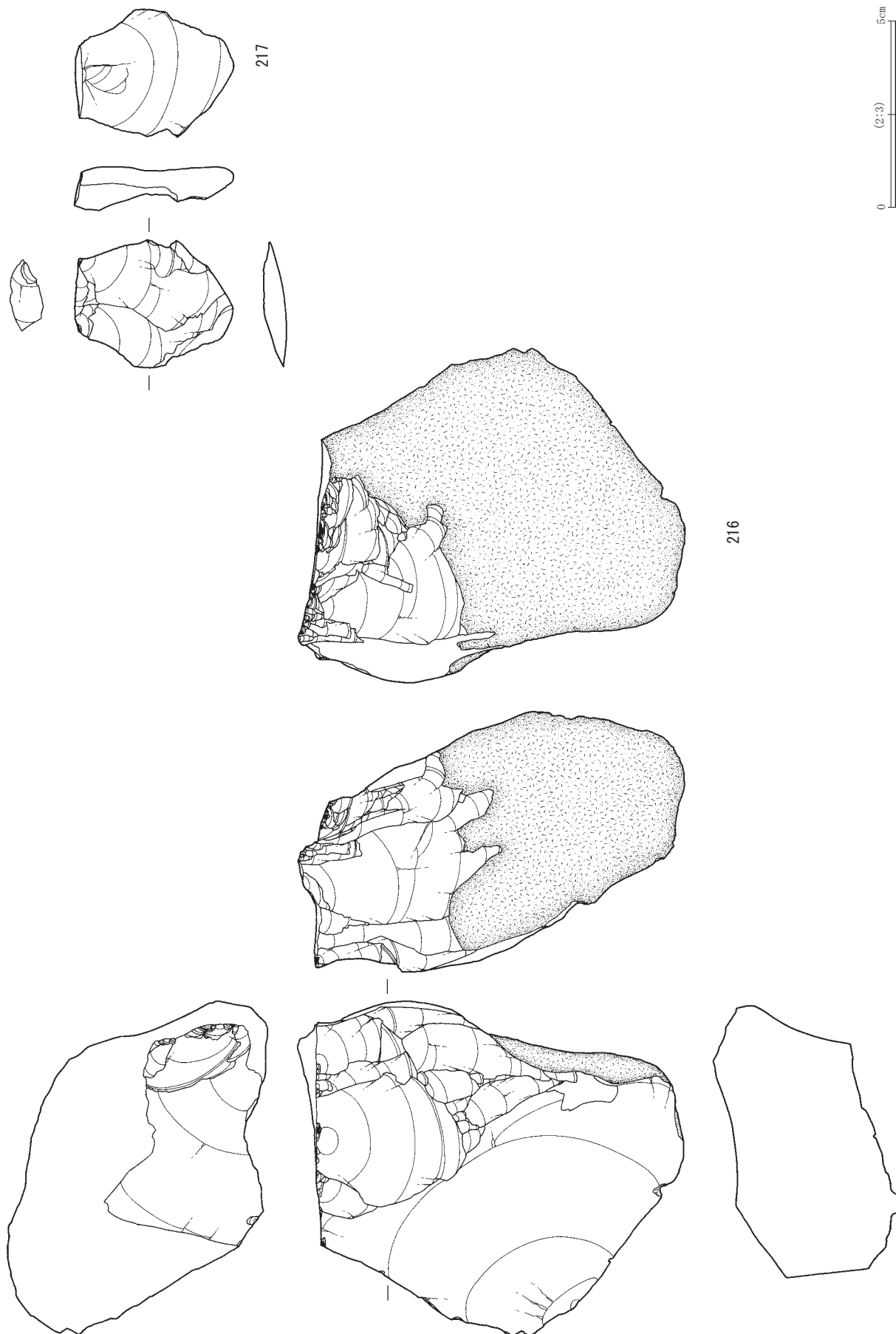
第88図 石器集中区12出土遺物 (6)



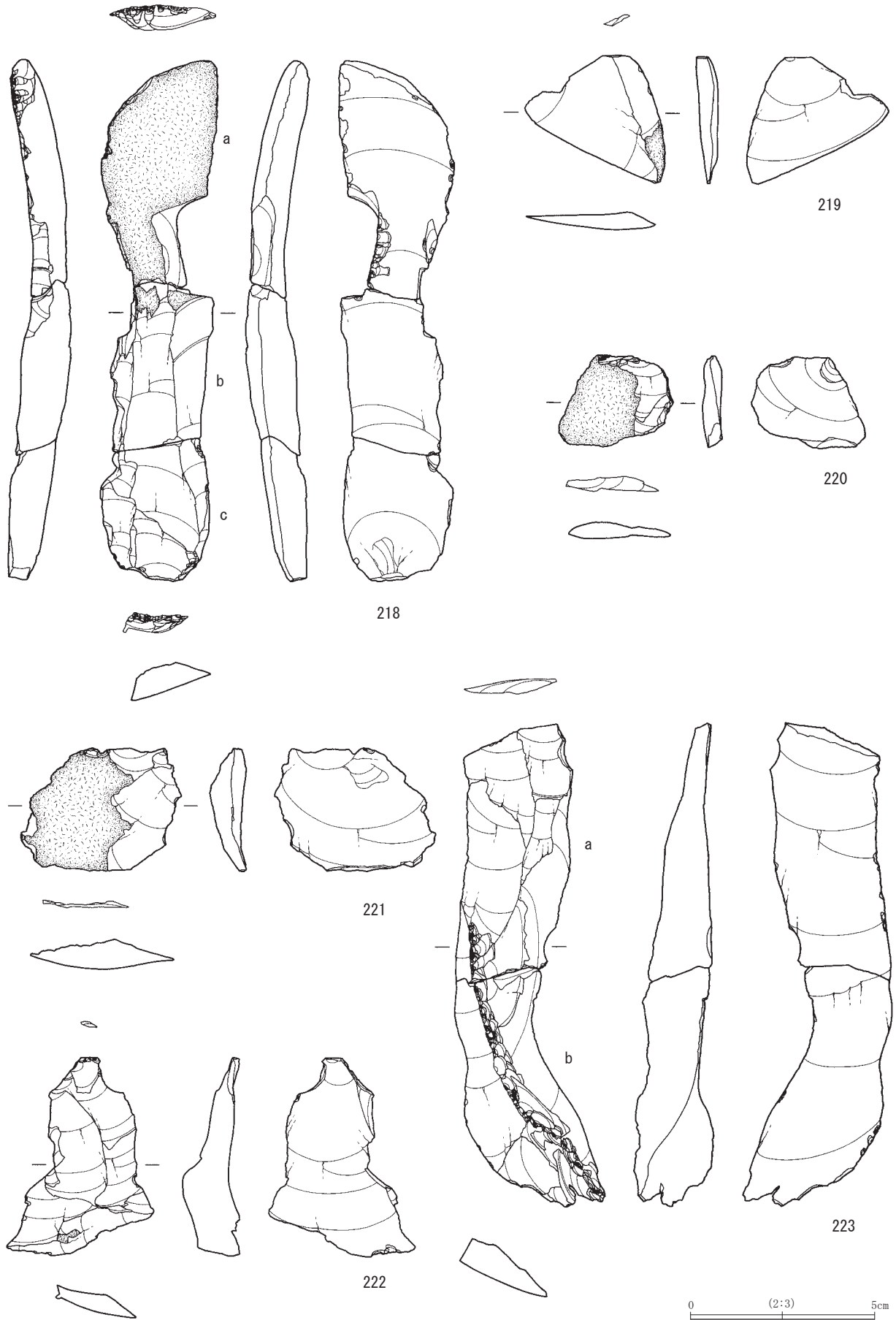
第89図 石器集中区12出土遺物 (7)



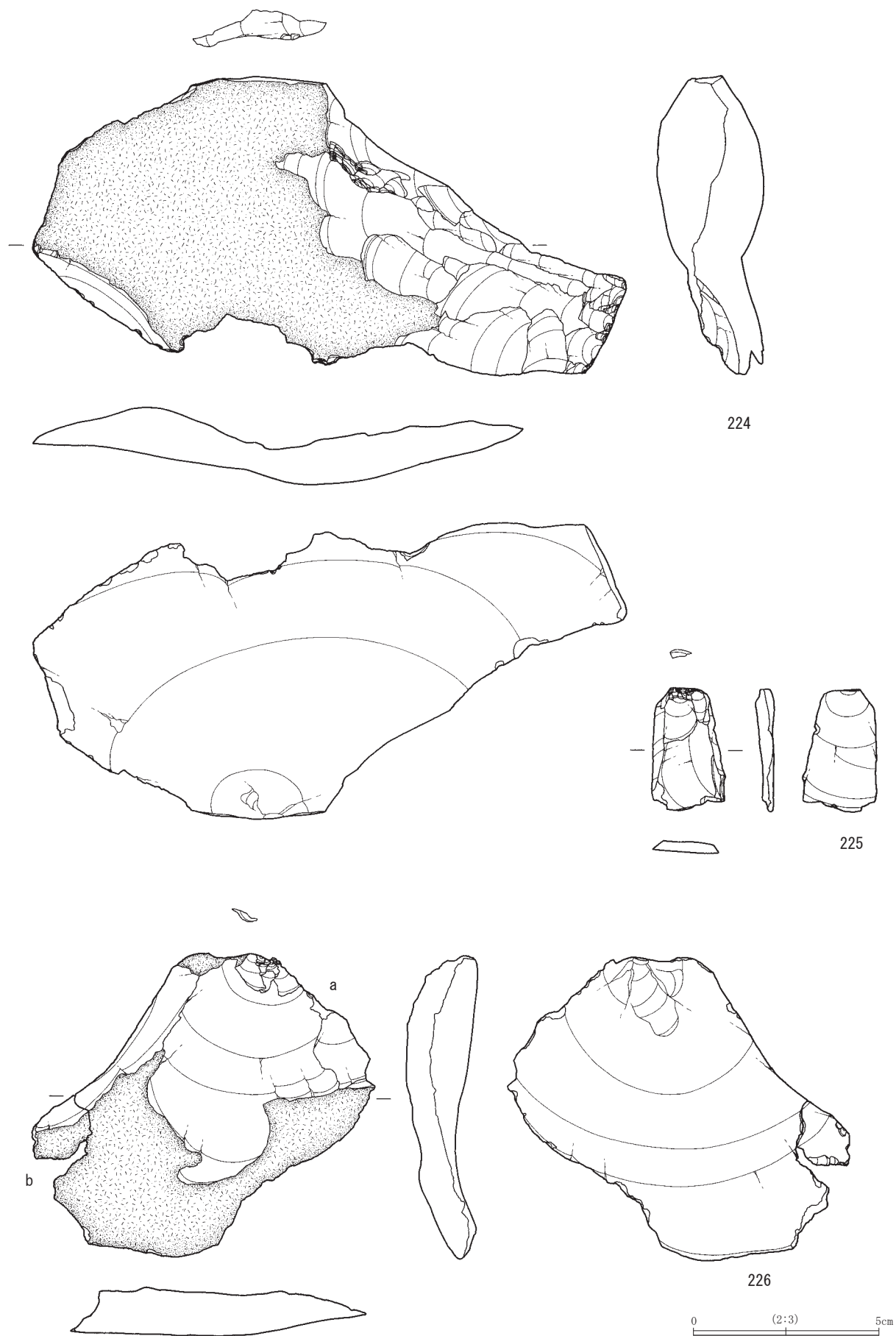
第90図 石器集中区12出土遺物 (8)



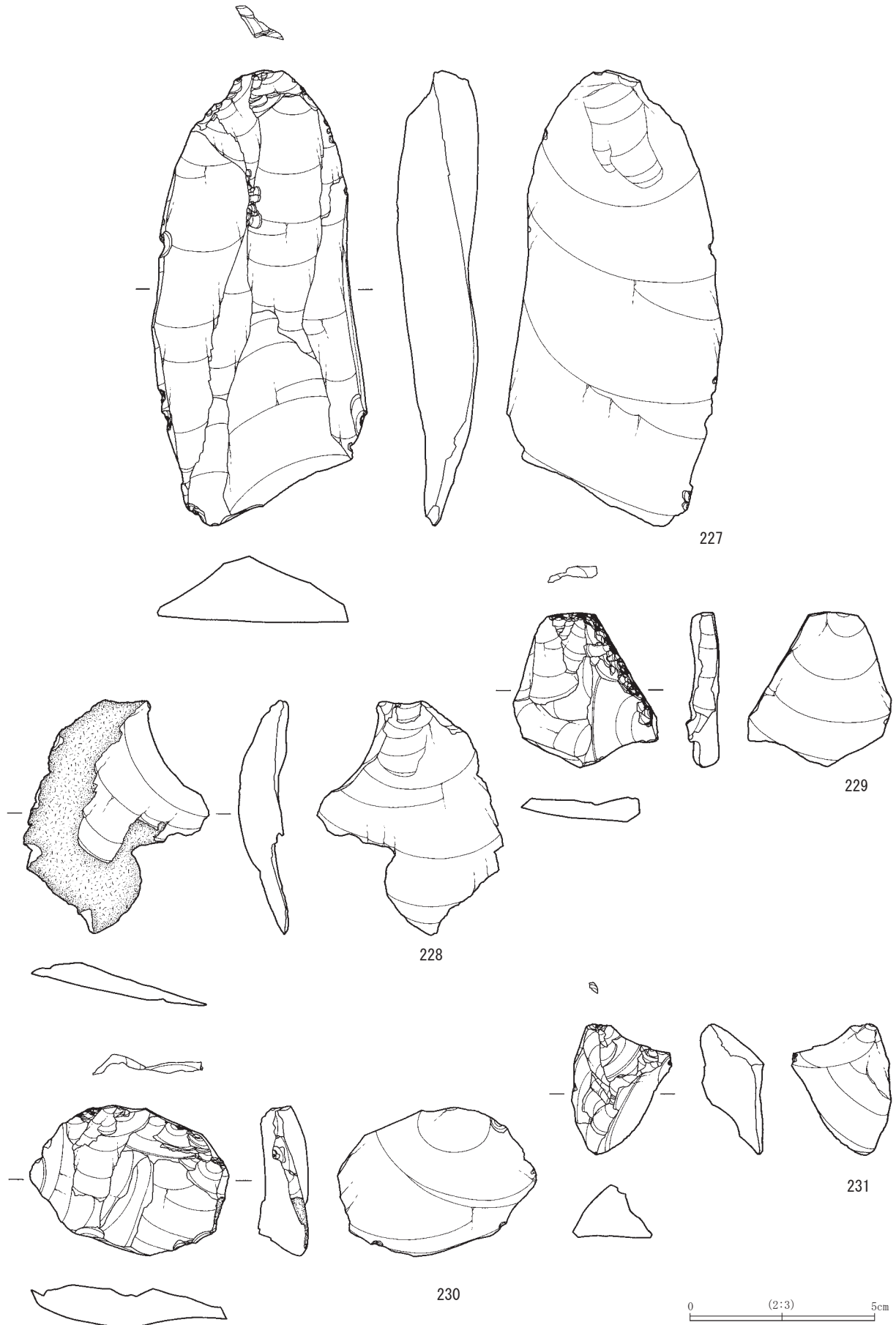
第91図 石器集中区12出土遺物 (9)



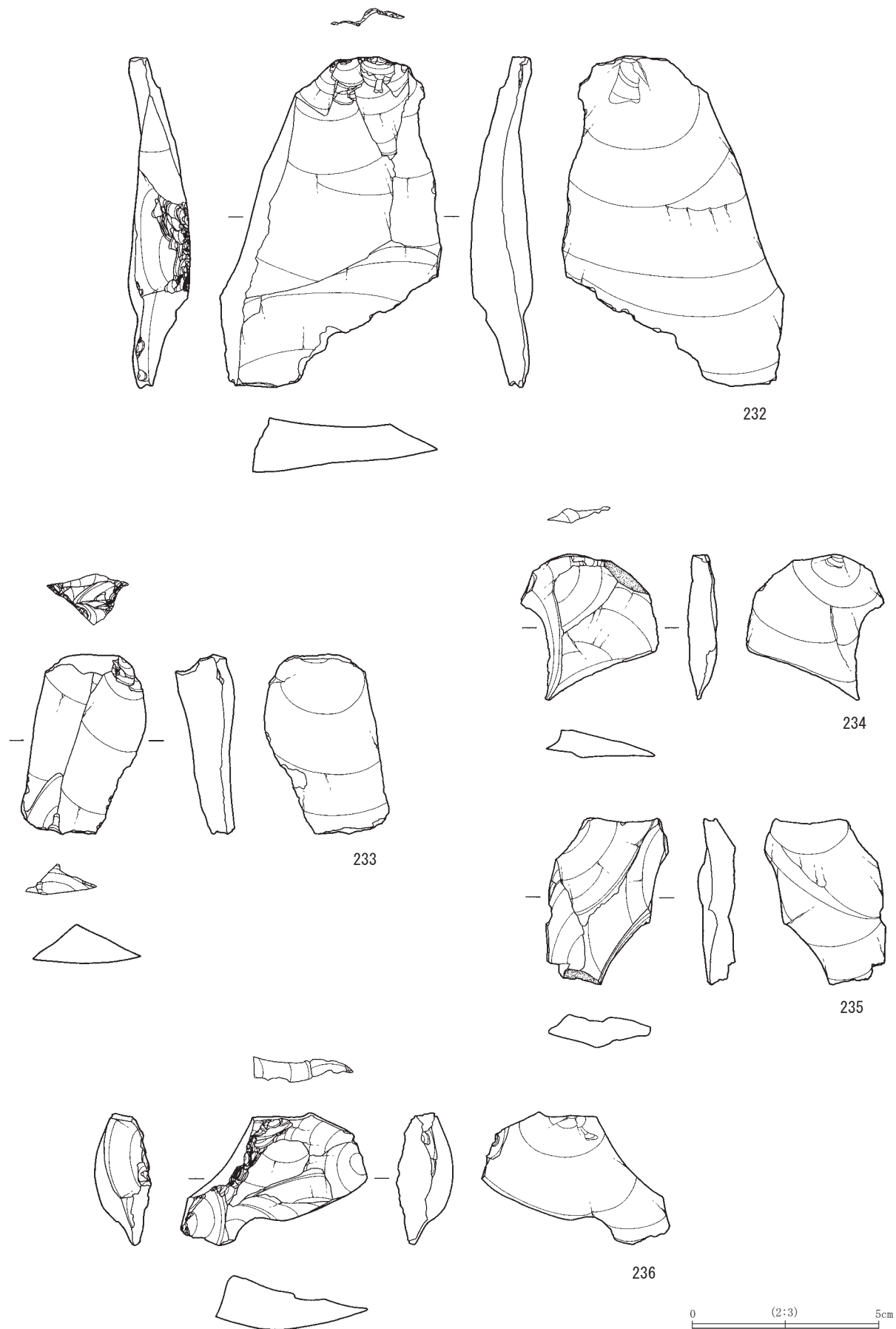
第92図 石器集中区12出土遺物 (10)



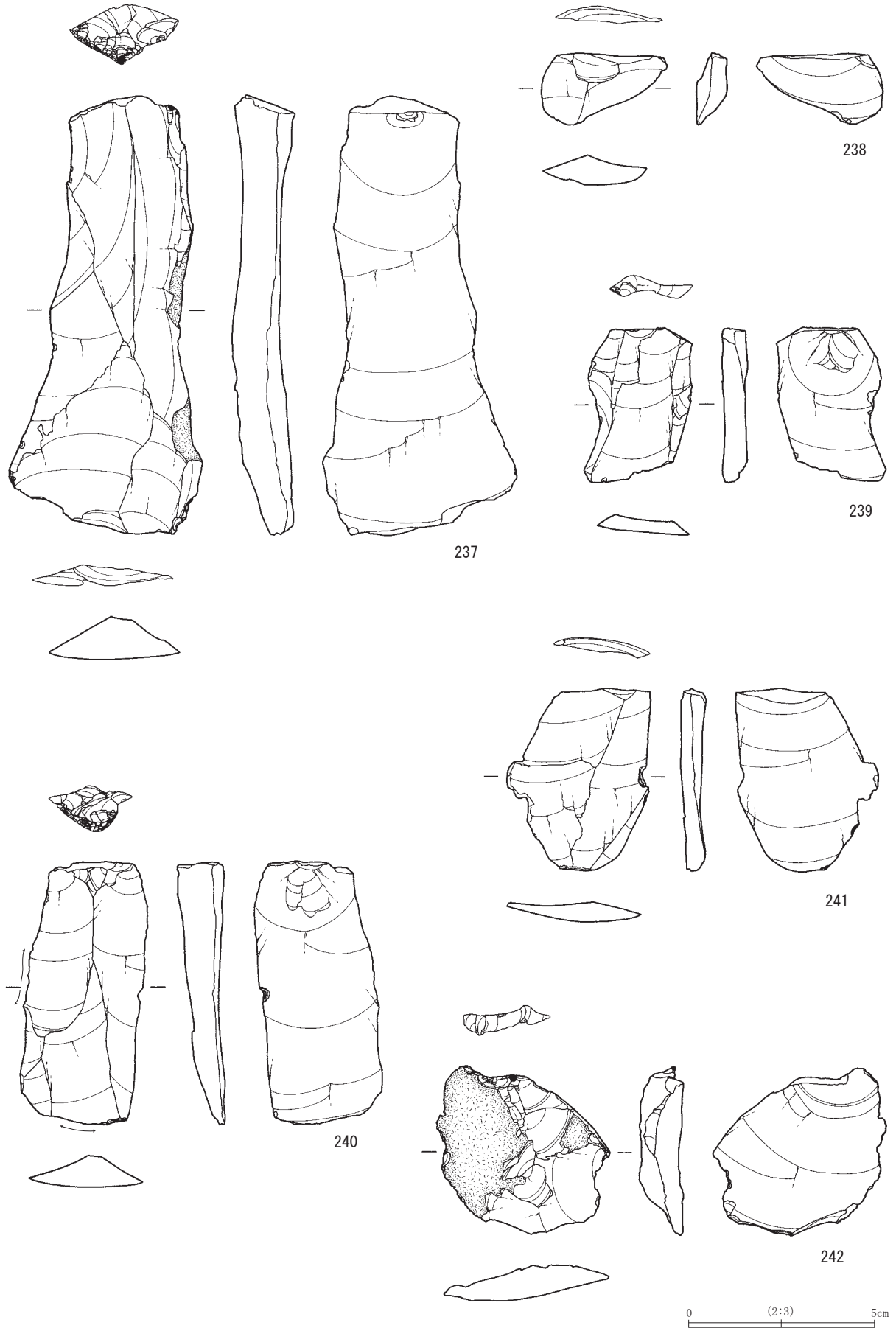
第93図 石器集中区12出土遺物 (11)



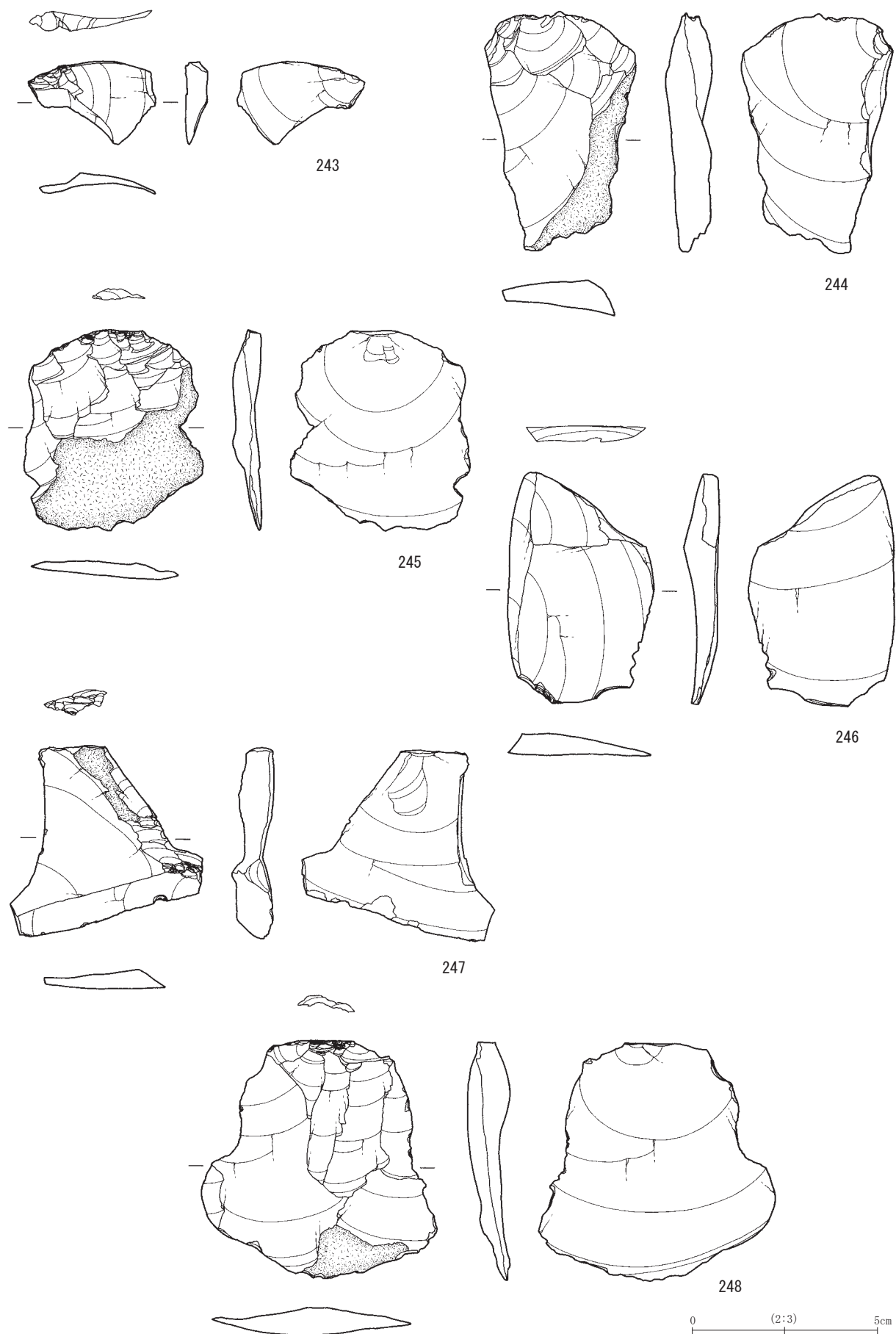
第94図 石器集中区12出土遺物 (12)



第95図 石器集中区12出土遺物 (13)



第96図 石器集中区12出土遺物 (14)



第97図 石器集中区12出土遺物 (15)

個体 a から剥離された石刃や縦長剥片をナイフ形石器(212・218)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。

本母岩は大型の亜円礫を素材としており、原石で搬入、剥片剥離後に石核やtoolを搬出している。

sh31：総点数6点、総重量127.77g。剥片で構成される資料である。剥離面は明オリーブ灰を基調とする。礫面は灰白色を呈する。石質はやや粗粒でざらつく。摂理が層状に発達している。

接合点数は2点あり、剥片の器体中央で2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh34：総点数17点、総重量1143.47g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片で構成される接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は灰黄褐色が層状に入る。礫面は灰オリーブ色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。

剥離工程は、250→249→<251→252><254→255>→253→256→257→260→<(264a+b)><258→263→259→261→262>である(<○>の前後関係は不明)。本個体は礫面除去から石核整形の過程に伴う資料である。正面と上面において礫面を除去することで、打面設定と石核整形が行われている。そして、正面及び左側面において90度打面転位を繰り返しながら剥片を剥離することにより、作業面稜調整が施される。その後は目的剥片剥離を行わず、裏面下面側において石核整形を行っている。本工程はそこで剥離が停止しており、接合状況は中は空洞である。

本母岩は大型の亜角礫を素材としており、原石で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh39：総点数3点、総重量3g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は灰黄褐色が層状に入る。礫面は灰色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh40：総点数5点、総重量134.37g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片で構成される非接合資料である。剥離面は明オリーブ灰色を基調とし、暗オリーブ灰色の斑点が入る。礫面はにぶい黄褐色を呈する。石質はやや粗粒で僅かにざらつく。摂理が面的に発達している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh44：総点数3点、総重量29.34g。剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は灰色が層状に入る。礫面は淡黄色を呈する。石質は緻密でなめらかである。sh47と石質は類似するものの、本母岩の方が色調が黒味帯びるため区分している。

接合点数は2点あり、剥片の末端で2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh45：総点数5点、総重量153.77g。彫刻刀形石器と剥片で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面付近は灰白色が層状に入る。礫面は灰白色を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が層状に発達している。

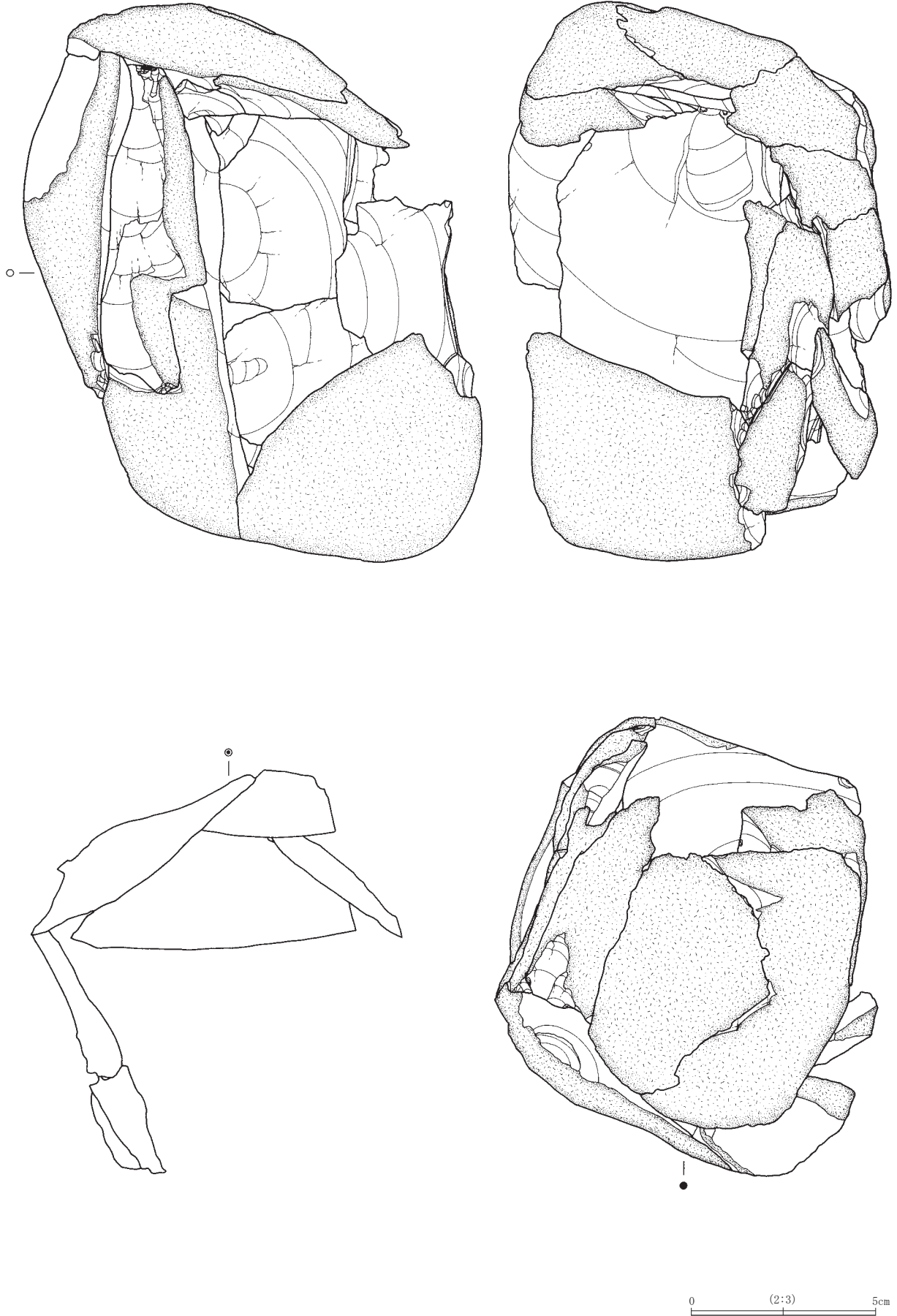
接合点数は3点であり、上記の器種からなる。石核整形から作業面稜調整剥片剥離の過程に伴う資料である。剥離された作業面稜調整剥片を彫刻刀形石器(204)の素材としており、それについては出土遺物に記載している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

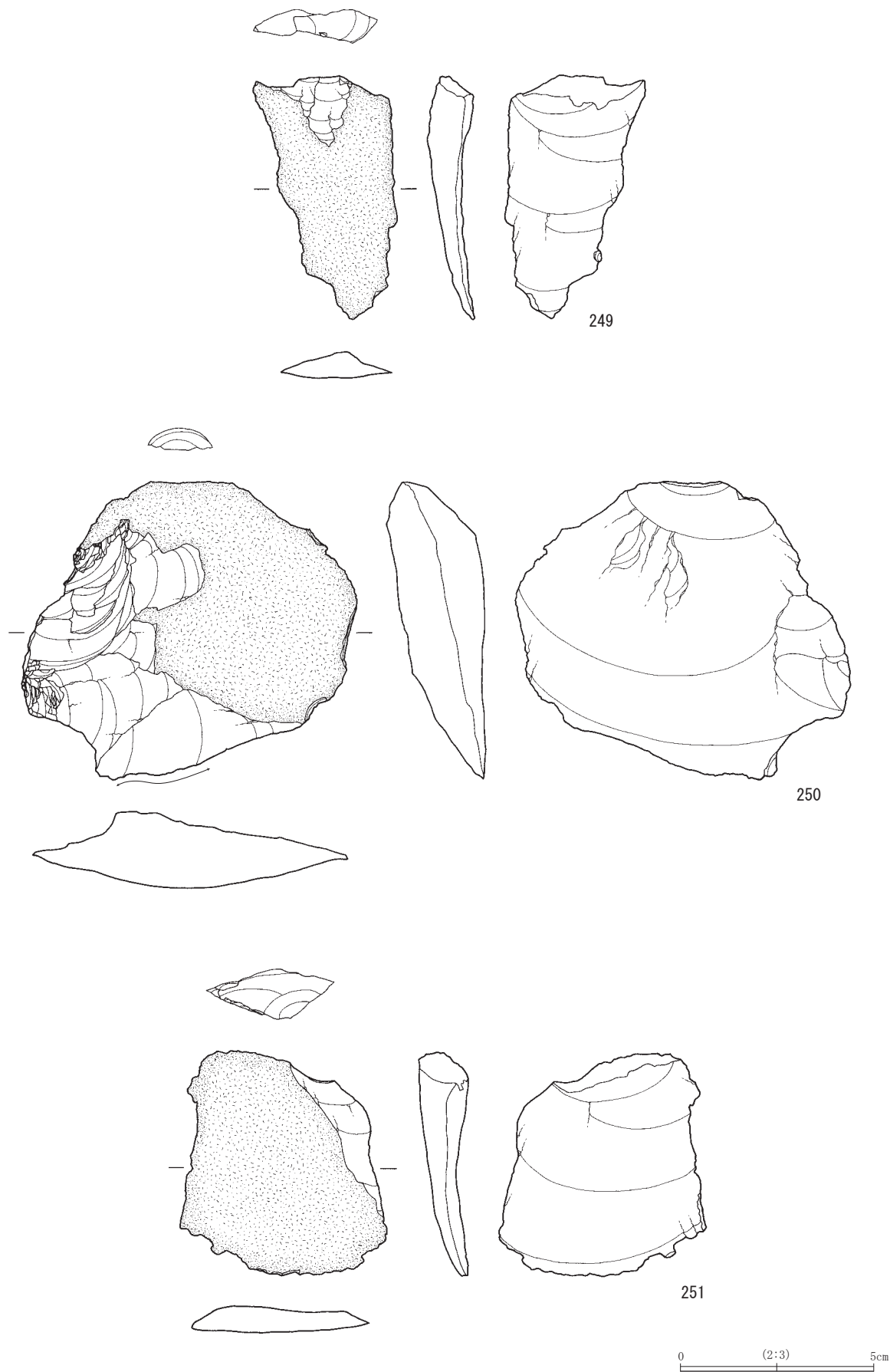
sh46：総点数6点、総重量255.81g。剥片で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面付近は灰白色が層状に入る。礫面は灰白～灰色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は2点あり、作業面稜調整剥片剥離の過程に伴う資料である。

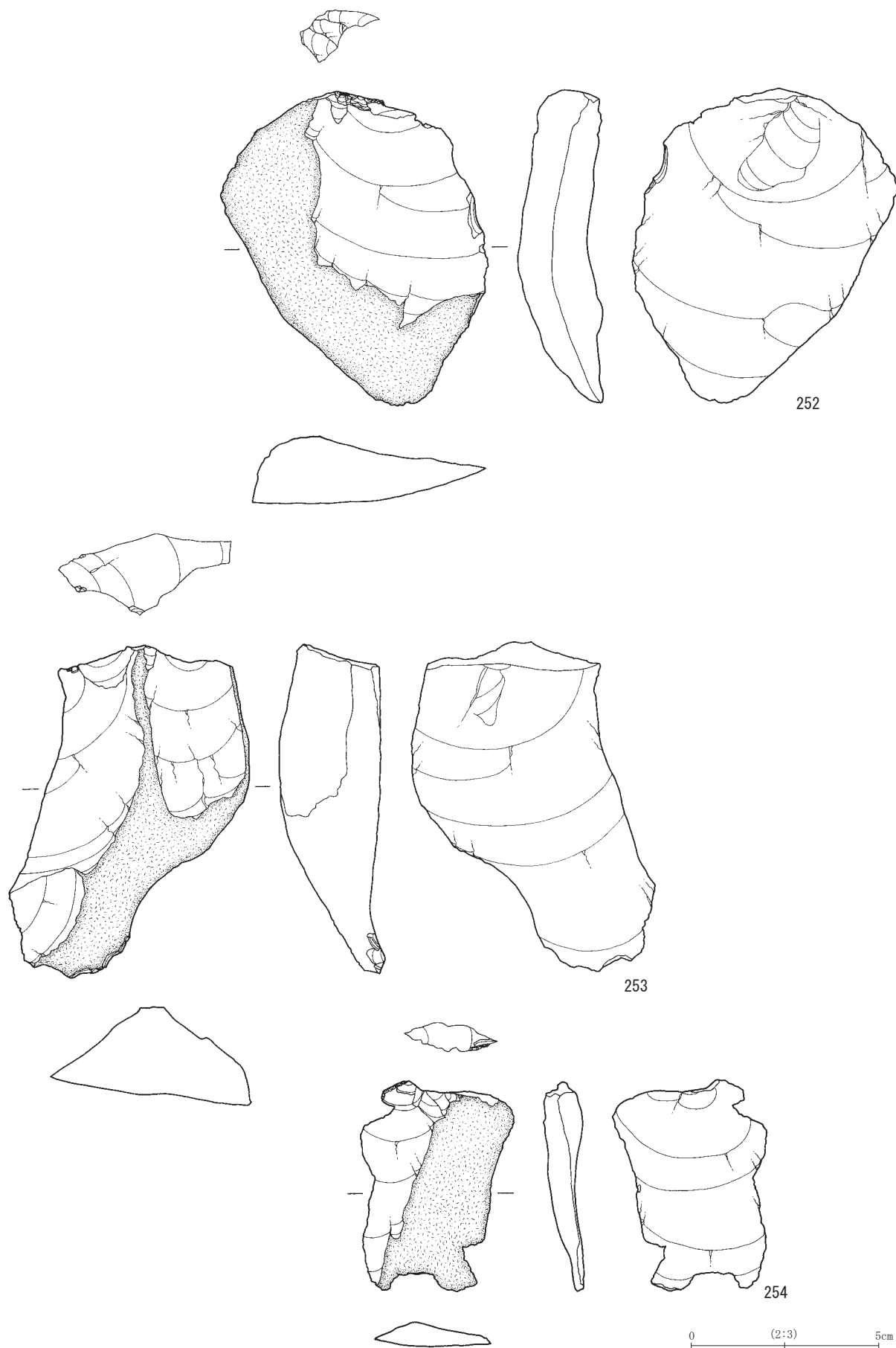
本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。



第99図 石器集中区12出土遺物 (17)



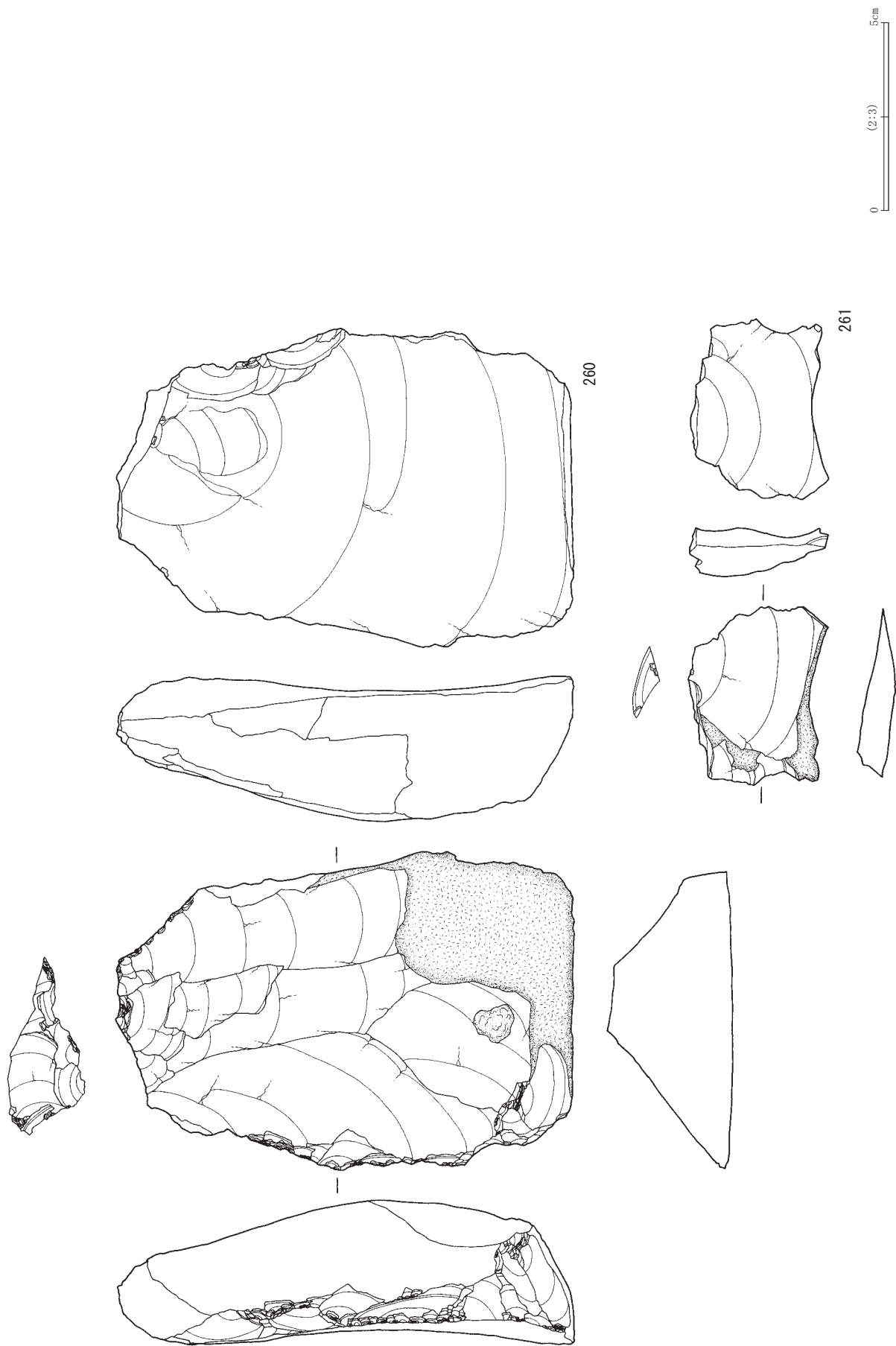
第100図 石器集中区12出土遺物 (18)



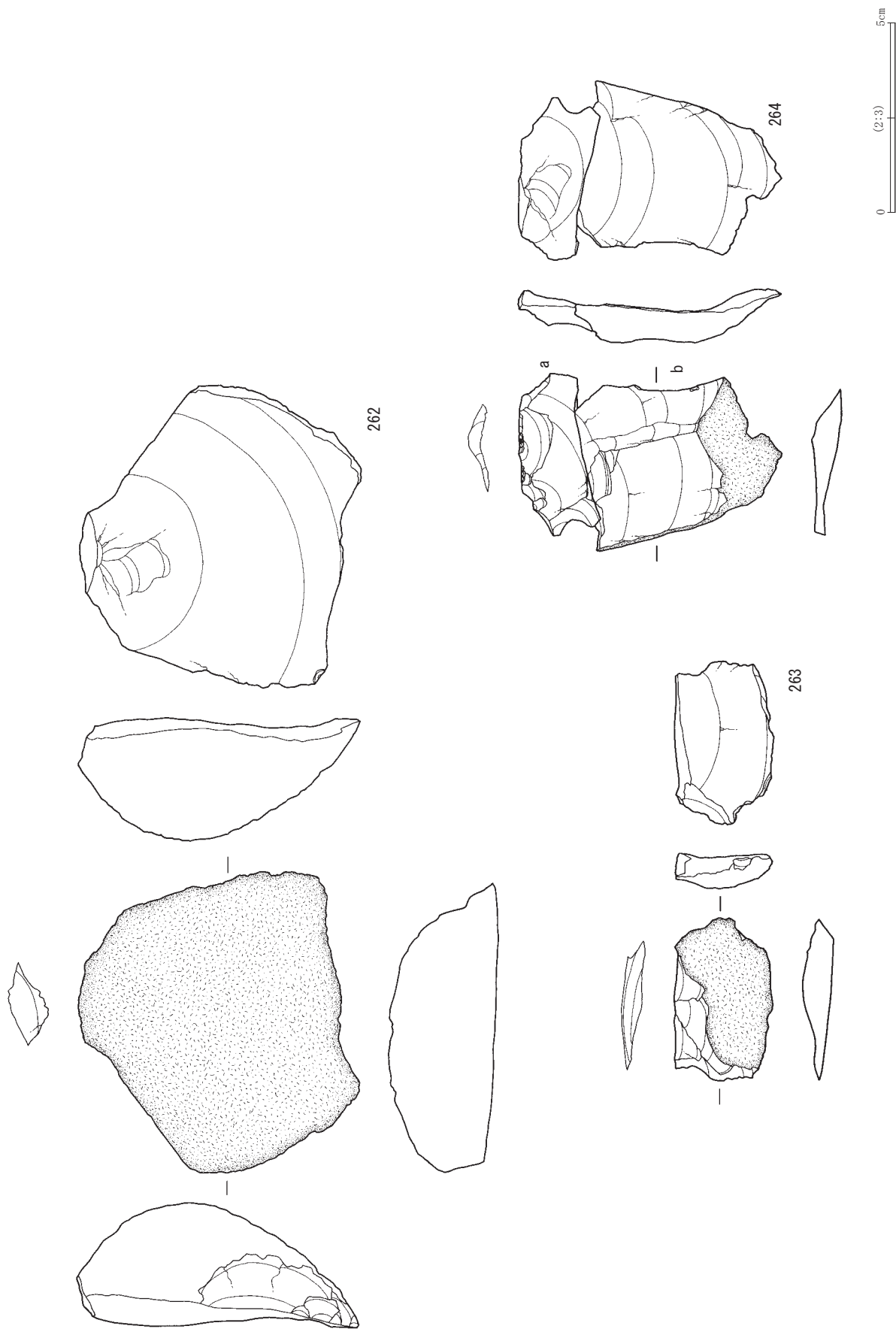
第101図 石器集中区12出土遺物 (19)



第102図 石器集中区12出土遺物 (20)



第103図 石器集中区12出土遺物 (21)



第104図 石器集中区12出土遺物 (22)

sh47：総点数3点、総重量125.48g。二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、礫面付近は灰白色が層状に入る。礫面は灰白色を呈する。石質は緻密でなめらかである。sh44と石質は類似するものの、本母岩の色調の方が明味帯びることから区分している。石核からは単設方向からの剥片剥離と捉えられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh49：総点数62点、総重量698.25g。ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップで構成される資料である。剥離面はを灰色基調とし、オリーブ黒が斑に入る。礫面も同様の色調である。石質は緻密でなめらかだが、鉱物が多い箇所では僅かにざらつく。摂理が部分的に発達している。

接合点数は47点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは45点あり、上記の器種からなる。個体bは2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は265→268→<267><266>→270→269①→290 (271a+b+272②)→(275+273)→274→(276+277)→<(278+279)><281><285>・①→290③・288→289→(291a+b)→292→293→294→295→(200+296)→197→298→(301a+b)→299→300→302→<304><303>305> ②→284→280→282・290③→286→287→283の順である(<○>や・の前後関係は不明)。本個体は礫面除去・石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。最初に上面・下面側において礫面除去を行うことで、打面が上下に設定される。そして、正面左側において作業面稜調整を施した後、下設打面から稜を中心に目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。それが停止すると180度打面転位させながら、剥離は右側面側へと展開していく。この目的剥片剥離工程に伴い打面調整は認められるが、再生作業が施されないことから、作業面高は変わらずほぼ同じ規模の目的剥片を剥離している。また、右側面に展開していく際には、上下方向から礫面を除去しながら、石核整形が行われている。本母岩は空洞が多く、toolや石核は遺跡外へと持ち出されている。

個体bは剥片の器体中央部で2つに折れた資料であり、上記の工程で剥離されたものである。

個体aから剥離された縦長剥片をナイフ形石器(197・200)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。

本母岩は円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出してしている。

sh52：総点数5点、総重量188.11g。剥片と石核で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色が層状に入る。礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

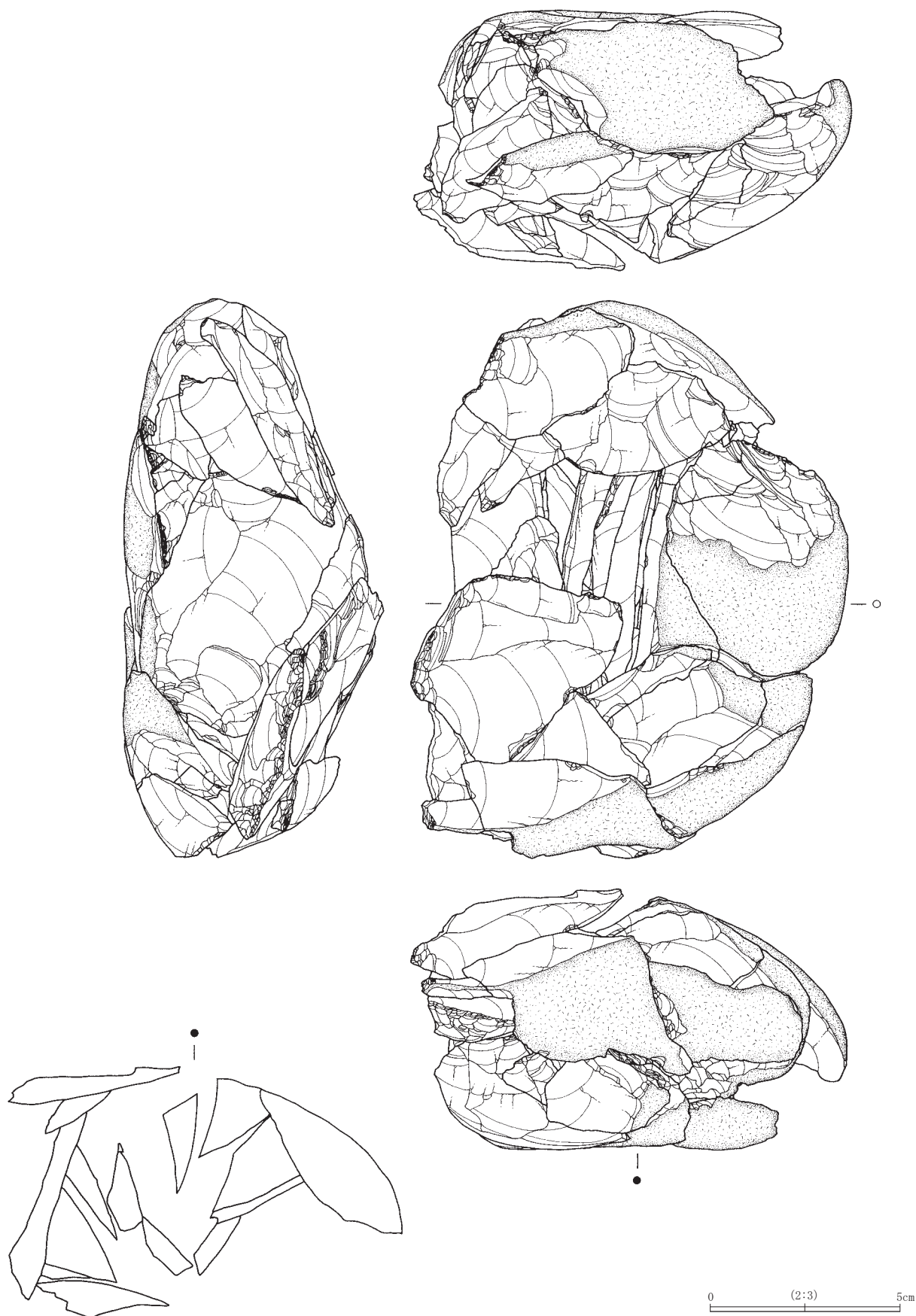
石核は90度打面転位を繰り返しながら剥片剥離が行われている。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

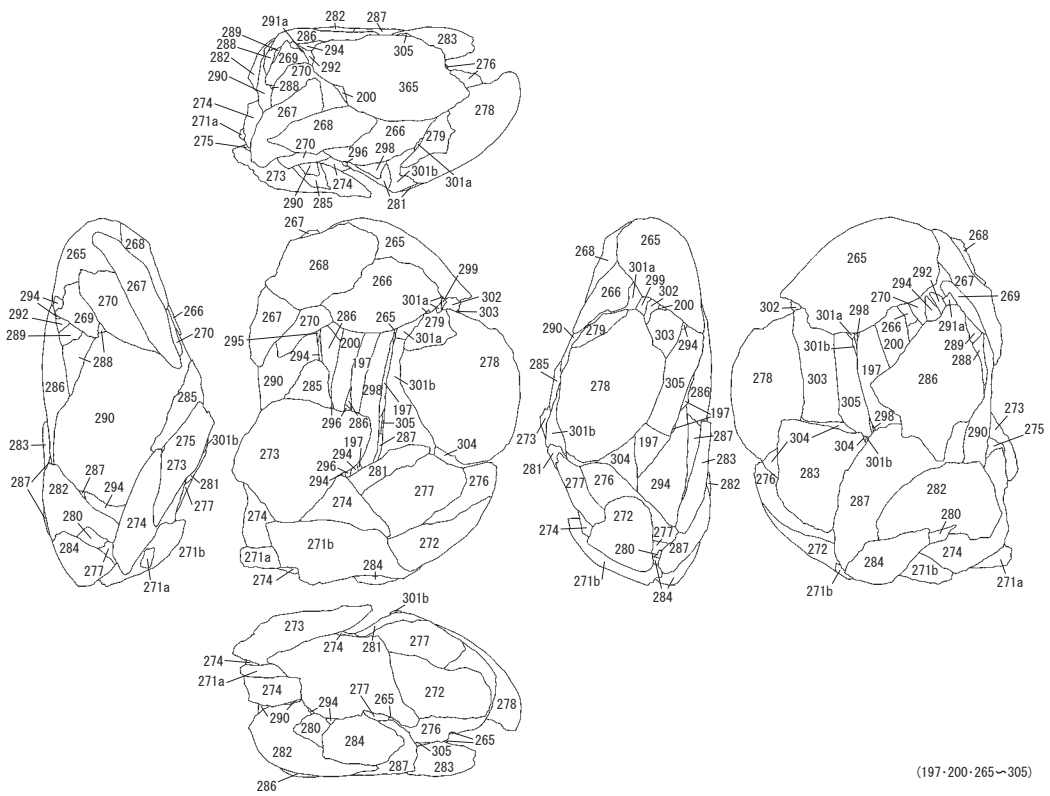
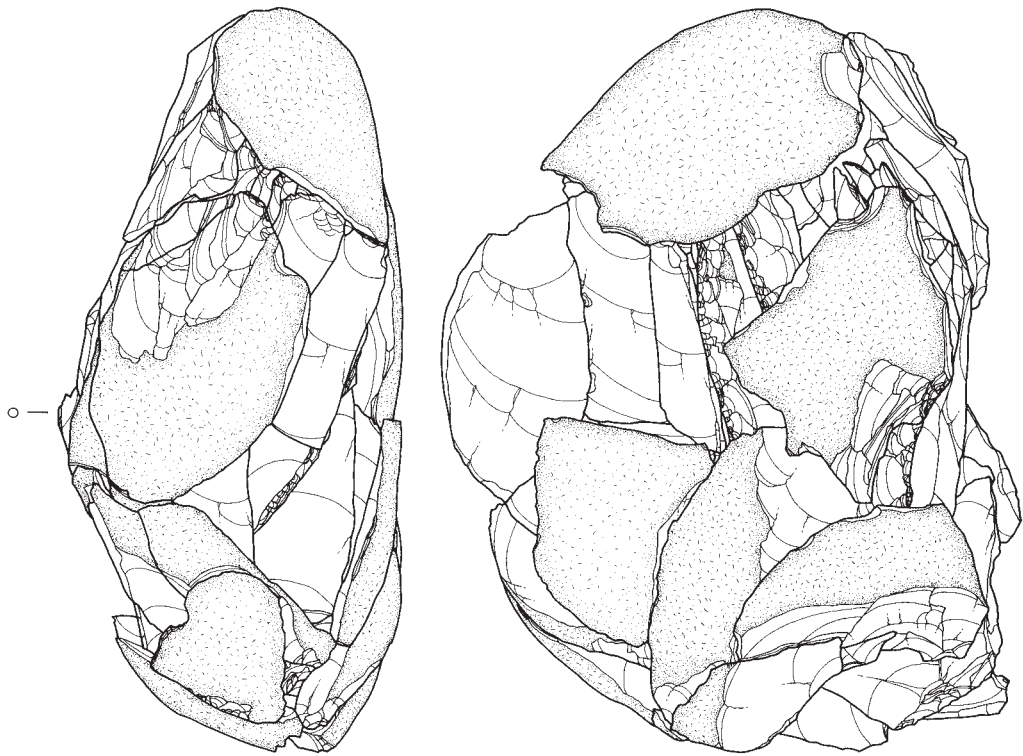
ssh7：総点数4点、総重量70.2g。彫刻刀形石器、スクレイパー、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は黒色を基調とし、礫面付近は灰黄褐色が層状に入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

接合点数は3点あり、彫刻刀形石器、スクレイパー、石核からなる。剥離工程は306→307→308である。本個体は石刃剥離の過程に伴う資料である。正面から右側面にかけて作業面が形成され、その対となる裏面下半と左側面には礫面が残置している。基本的には右側面を中心に上設打面から目的剥片である石刃や縦長剥片を連続的に剥離している。307がウートラパッセの剥離となった結果、石核下半の作業面形状を大きく変形させている。その後も上設打面から剥離を行うが、意図した剥離ができず停止している。接合個体の背面剥離面構成からは、180度打面転位を繰り返しながら剥離していることが捉えられる。

sh49a



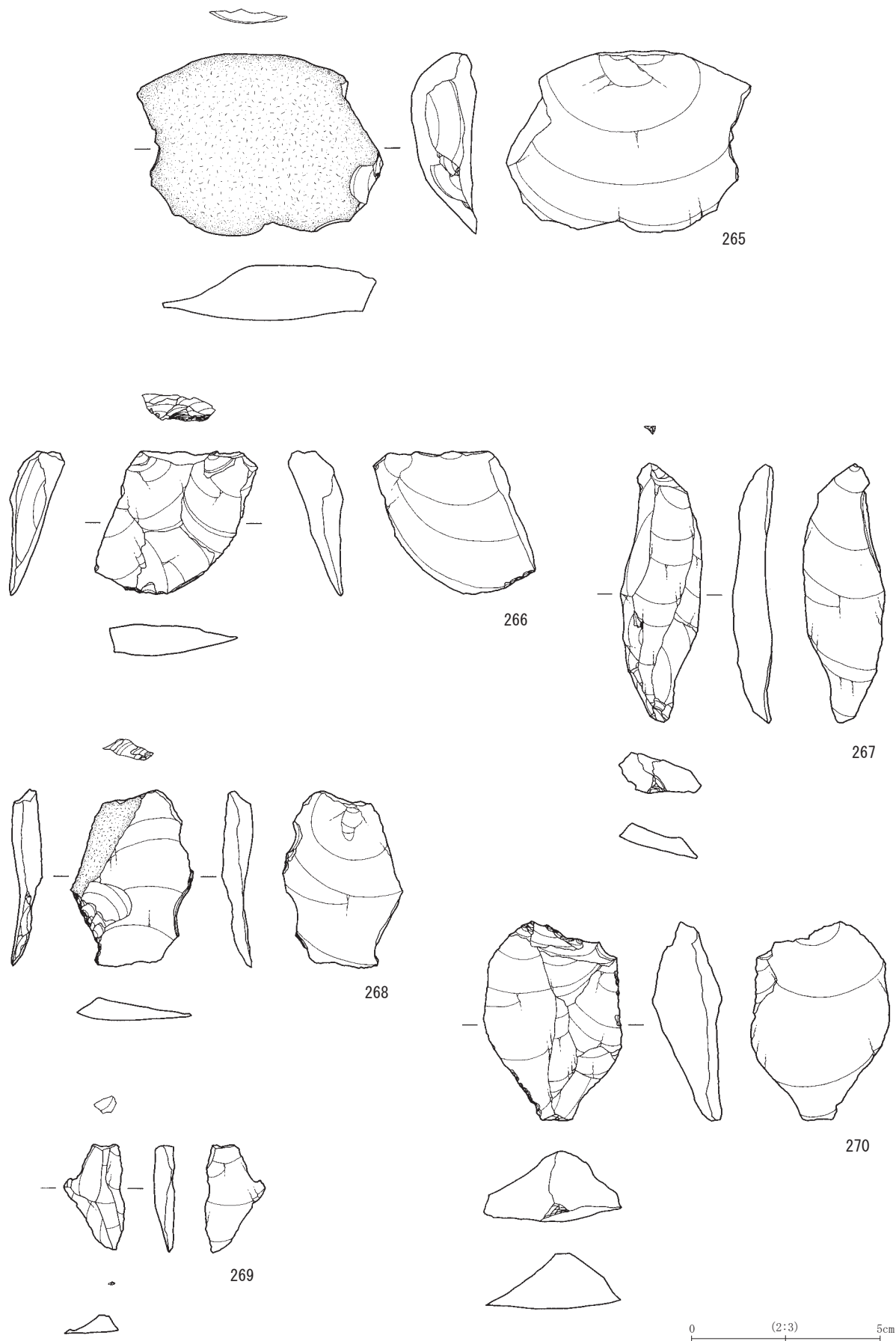
第105図 石器集中区12出土遺物 (23)



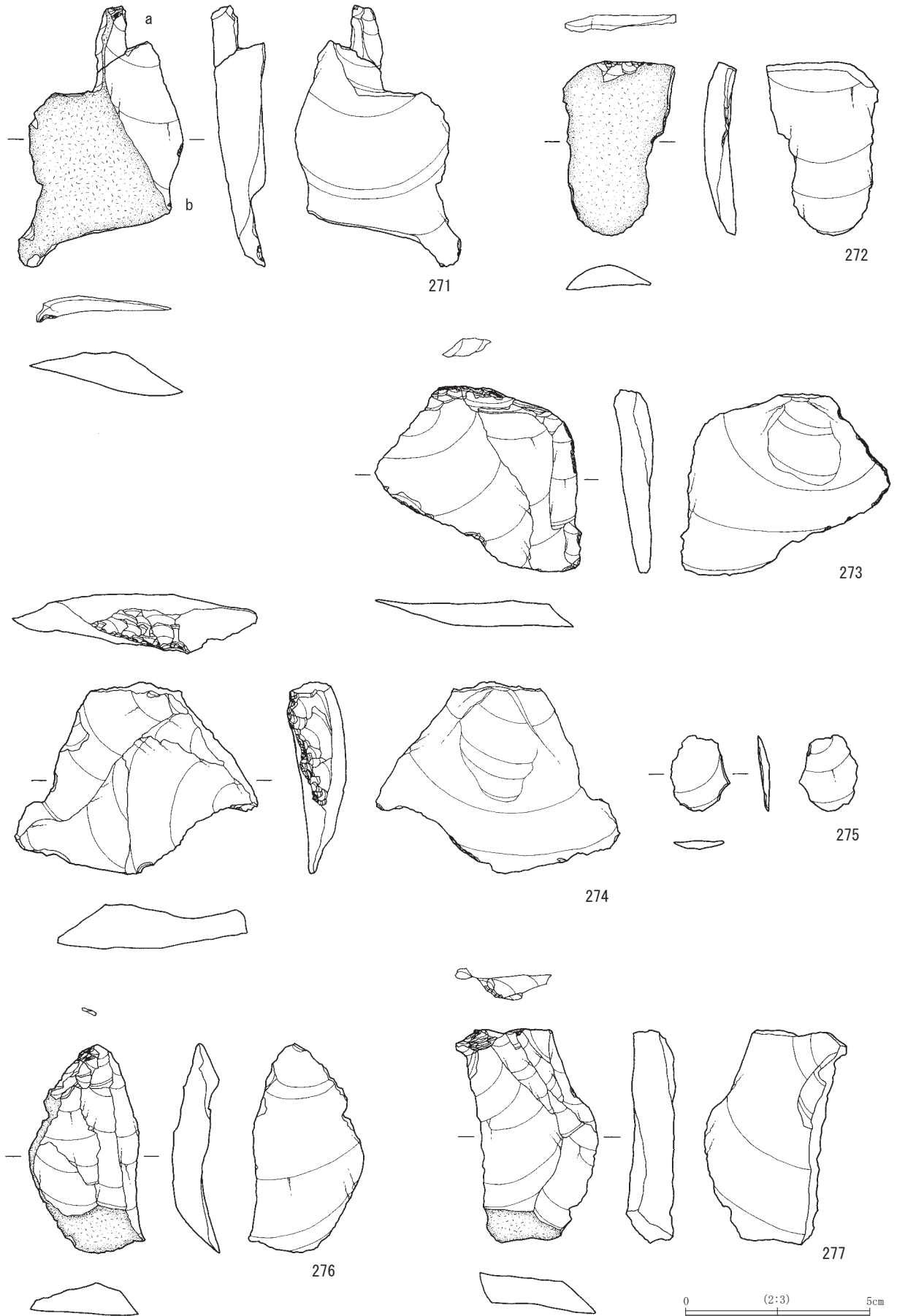
(197・200・265～305)

0 (2:3) 5cm

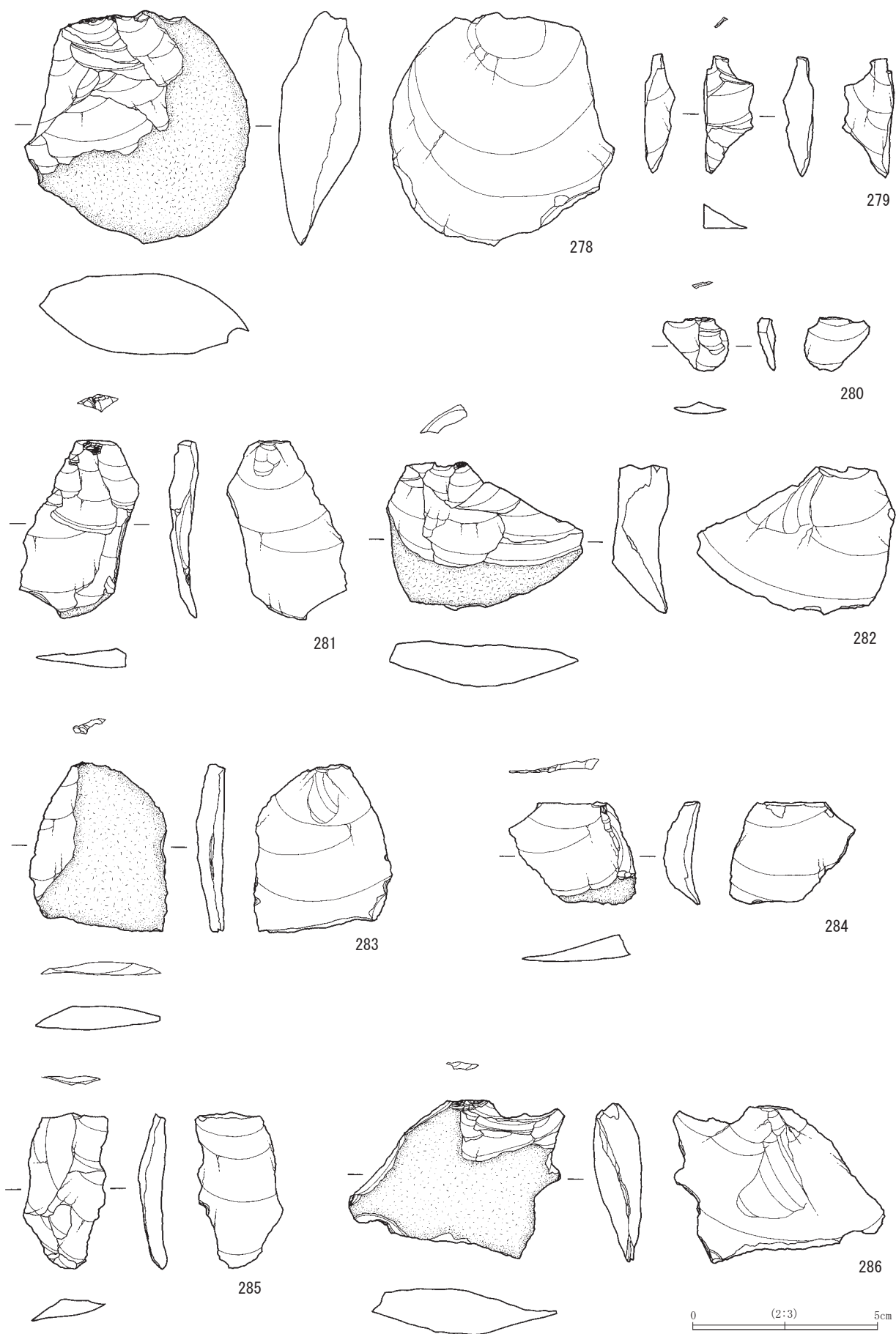
第106図 石器集中区12出土遺物 (24)



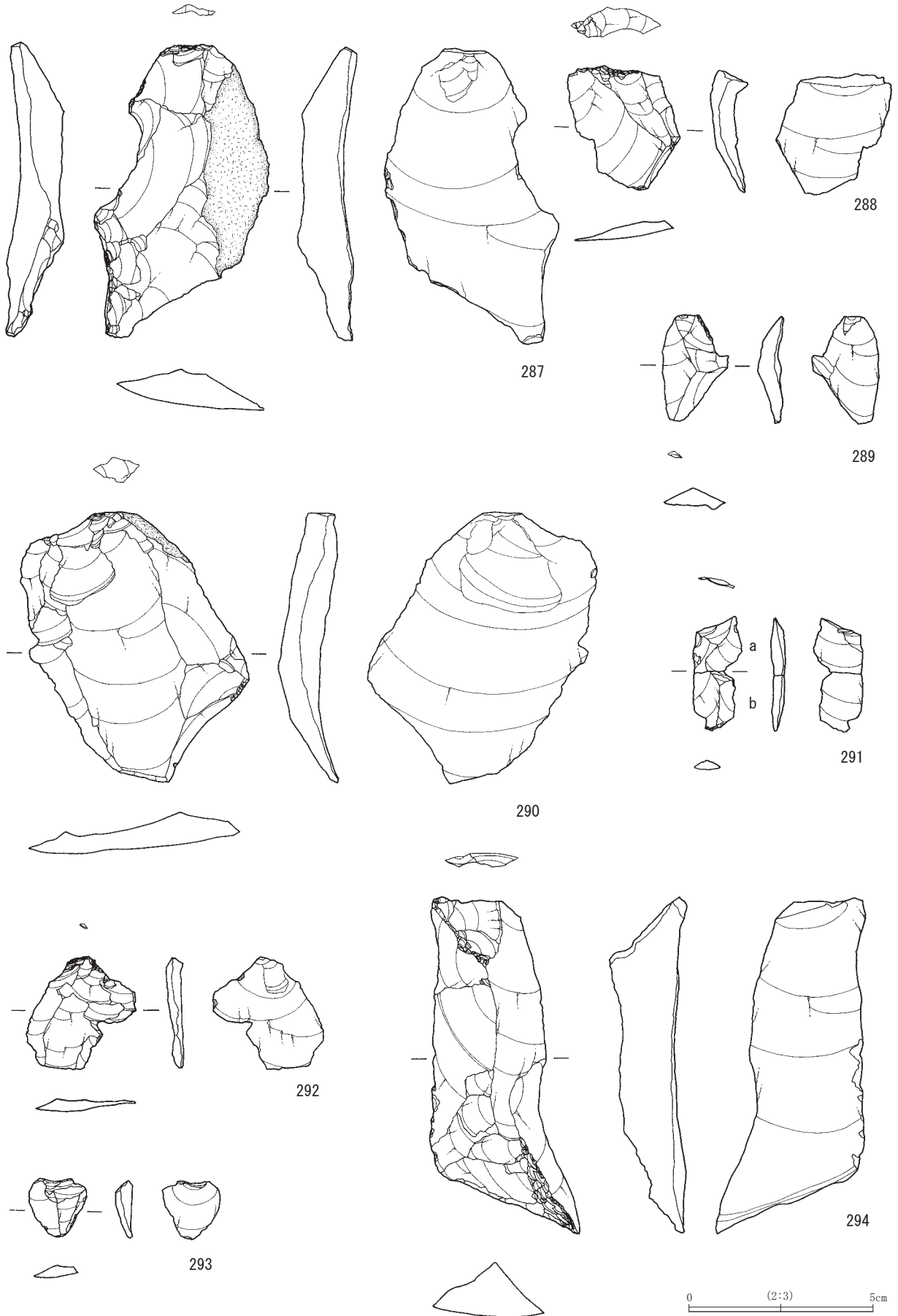
第107図 石器集中区12出土遺物 (25)



第108図 石器集中区12出土遺物 (26)



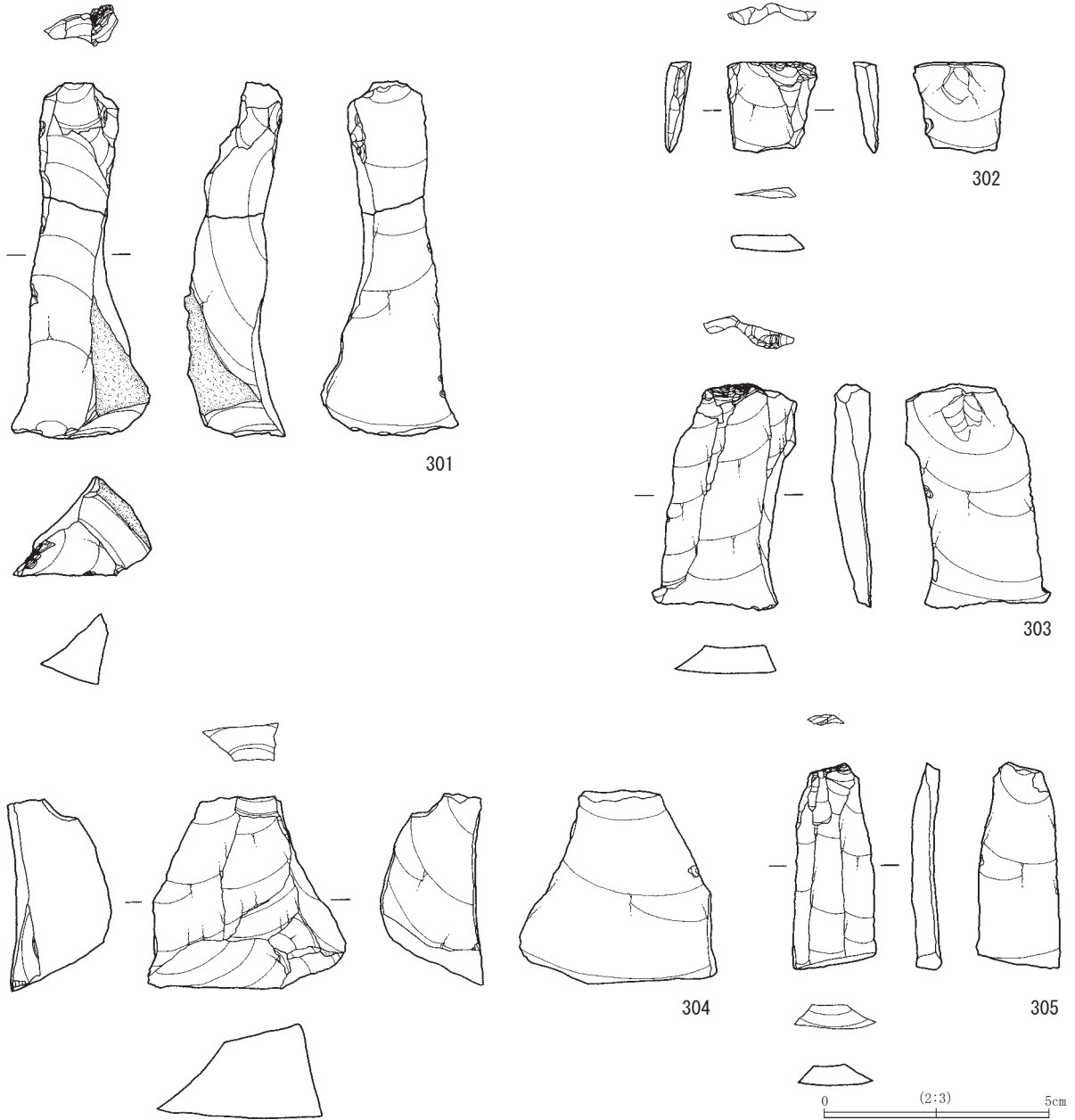
第109図 石器集中区12出土遺物 (27)



第110図 石器集中区12出土遺物 (28)

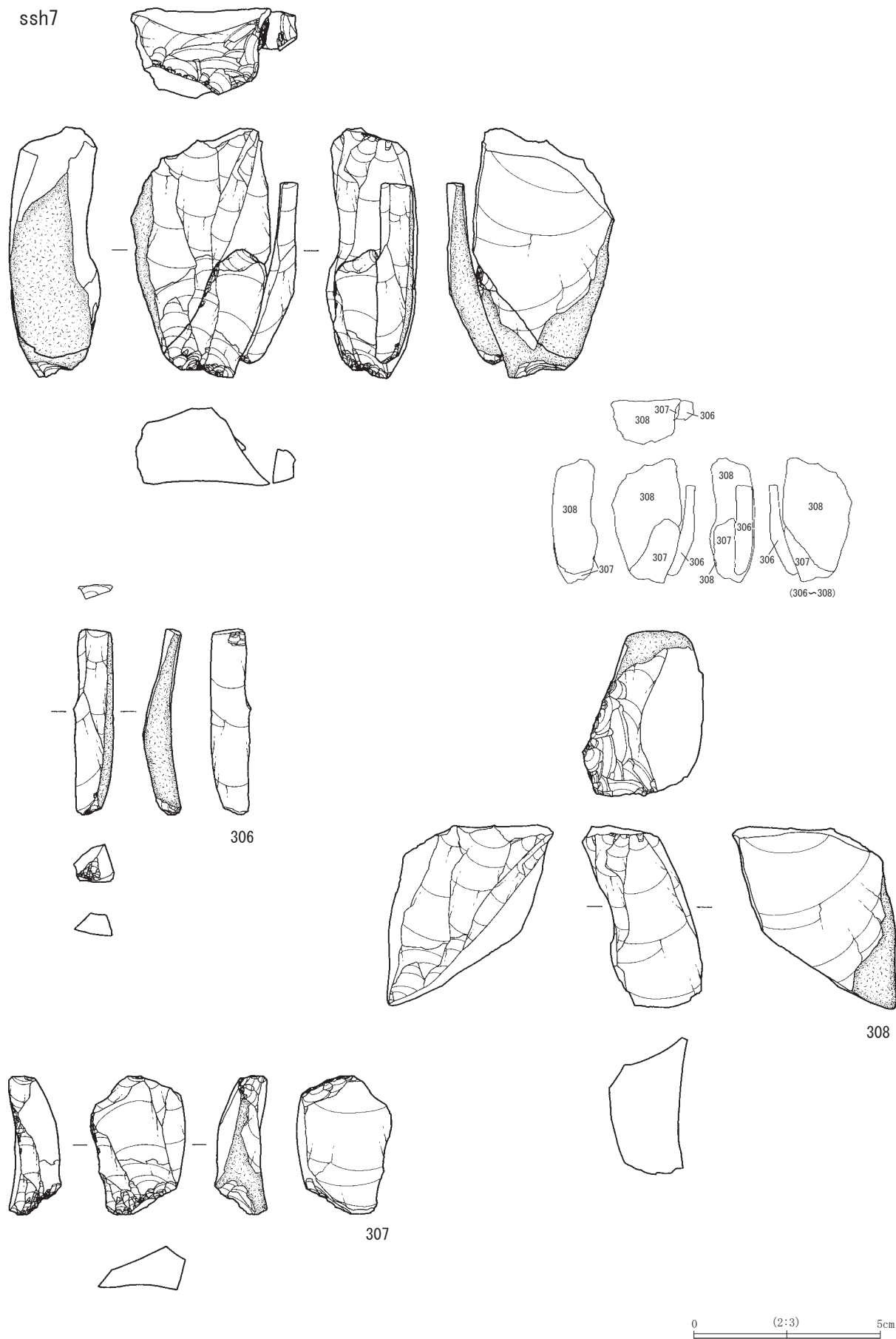


第111図 石器集中区12出土遺物 (29)



第112図 石器集中区12出土遺物 (30)

ssh7



第113図 石器集中区12出土遺物 (31)

剥離された石刃や剥片はスクレイパー(306)や彫刻刀形石器(307)の素材としており、これらについては出土遺物に記載している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

[備考] 神山型彫刻刀形石器を伴う集中区は同一文化層において他にも認められるが、二側縁加工ナイフ形石器を組成している集中区は本集中区のみである。

北壁面においてテフラ分析を行っており、Ⅲb層からAs-YPが検出されている。また出土炭化材の年代測定を行っているが、帰属年代を示すような結果は得られていない。黒曜石については産地同定を行っており、男鹿産との成果が得られている。これらの詳細は第2分冊に記載している。

石器集中区13

[位置・出土状況] ⅢB90・100、ⅣB81・91グリッドに位置しており、7×6.5mの範囲に収まる。自然堤防の南側に形成された段丘縁辺部へと緩やかに下る標高約344.9mの斜面上で検出している。

[分布状況] ⅢB100グリッド北東部を中心に散漫的に分布しており、南北方向へ広がる。

[出土層位] Ⅲb層からⅣ層で出土しており、Ⅲb層上面(標高約344.8m)に出土ピークがある。最大で約35cmの高低差を有する。Ⅲb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は48点である。

石器組成は二次加工を有する剥片2点、剥片34点、チップ7点、細石刃1点、敲石2点、礫2点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髄質頁岩、凝灰岩、安山岩からなる。

[出土遺物] 309は細石刃。打面及び末端部が欠損しており、残存幅は6.8mmである。310・311は敲石。石器材料は309が珪質頁岩、310・311が凝灰岩である。

上記の石器から4母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

sh123: 総点数11点、総重量226.17g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・褐色が部分的に認められる。礫面は灰黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく箇所もある。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh143: 総点数3点、総重量16.55g。剥片と石核で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色の斑点が入る。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

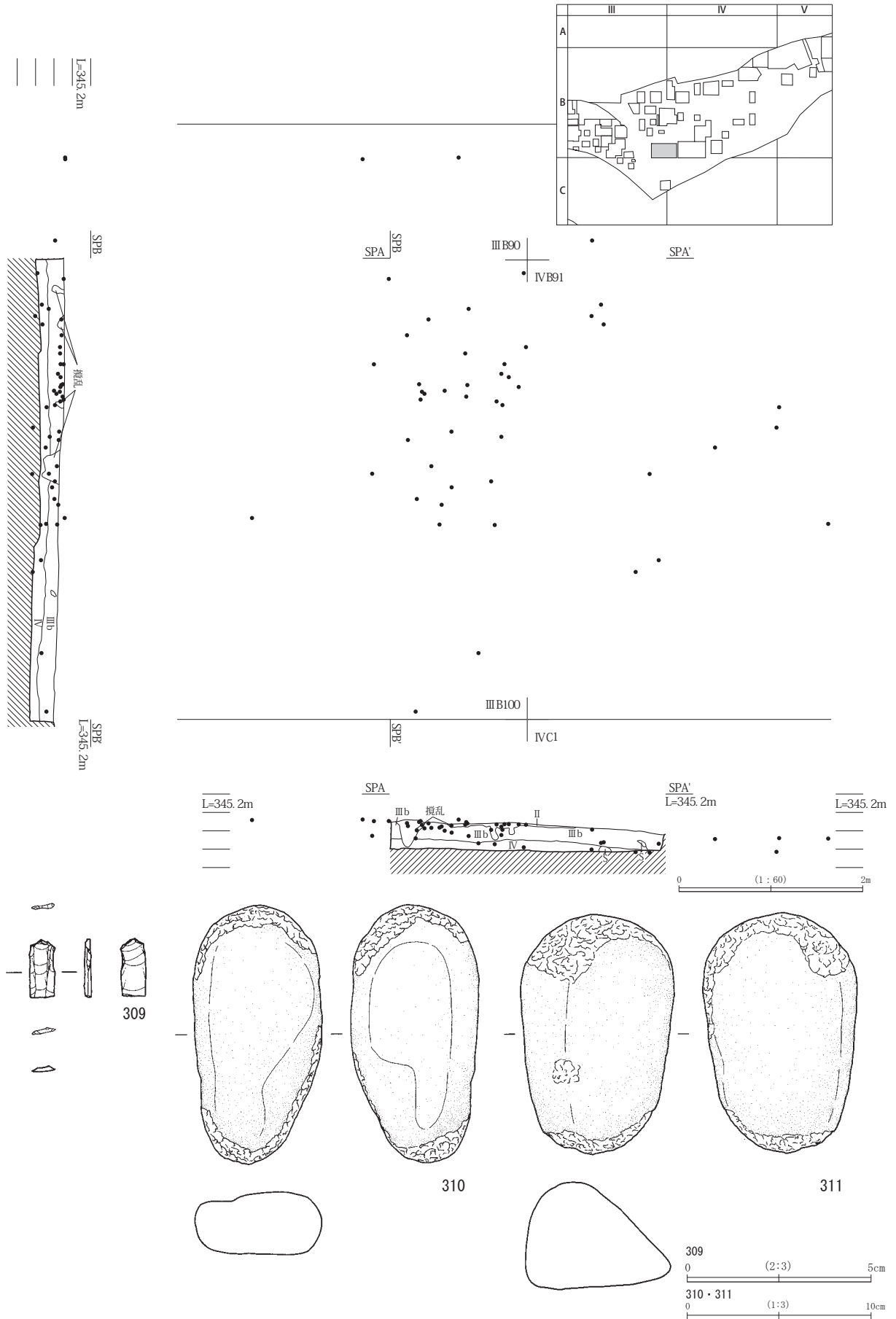
sh145: 総点数2点、総重量11.91g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

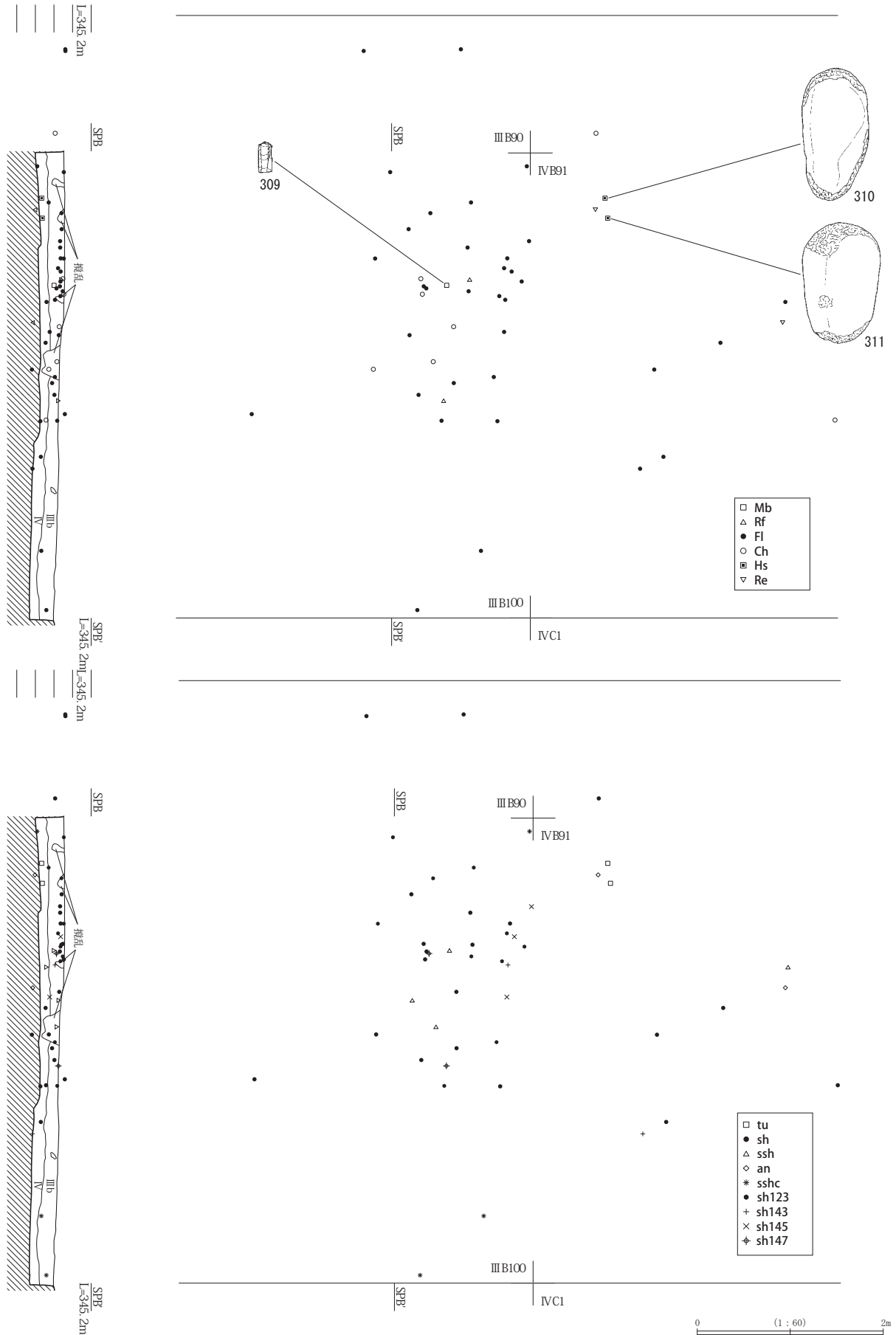
sh147: 総点数2点、総重量9.72g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、褐色が部分的に入る。礫面はにぶい黄褐を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 本集中区において細石刃を剥離していたと思われるが、その剥離技術が捉えられないことからその内容は判然としない。



第114図 石器集中区13石器出土状況図・出土遺物



第115図 石器集中区13器種・母岩別出土状況図

石器集中区14

[位置・出土状況] Ⅲ B82~84・92~94グリッドに位置しており、11×7.5mの範囲に収まる。自然堤防の南側に形成された段丘縁辺部へと緩やかに下る標高約344.2~344.6mの斜面上で検出している。

[分布状況] Ⅲ B83・93グリッドを中心に分布しており、東西方向へ広がる。僅かながら斜面下の南方向へ流出しているものも認められる。集中区の中心部に見られる幾つかの空白部分は、近世の遺構による削平が原因である。

[出土層位] Ⅲb層からⅣ-2層で出土しており、Ⅲb層下部(標高約344.1m)に出土ピークがある。最大で約70cmの高低差を有する。石器は斜面下の東から南東方向へ流出しているため、西端で取得した南北断面図では出土状況を反映していない。本集中区の出土状況については、出土範囲の中心に近い東西断面図を用いて把握している。

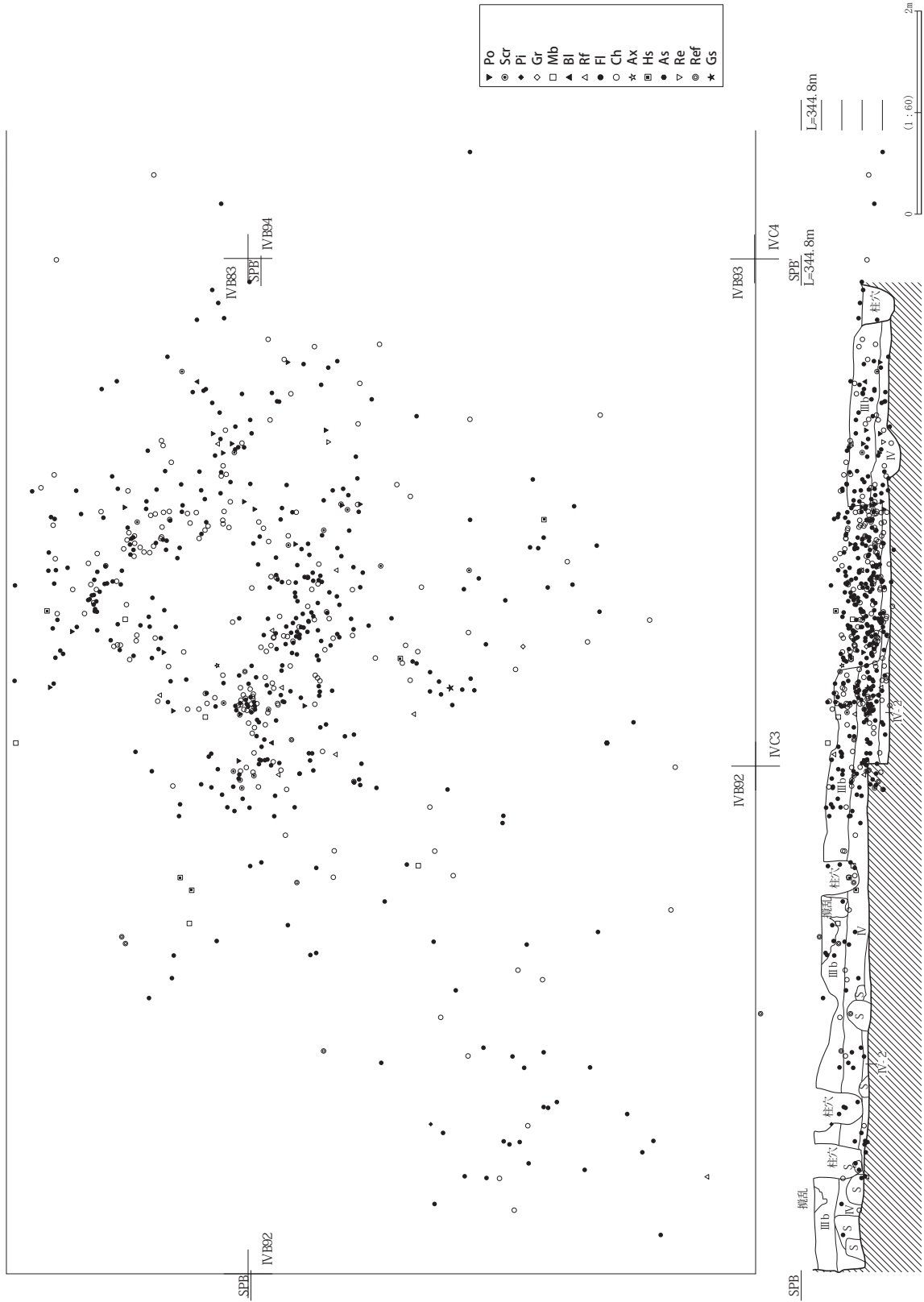
石器の出土ピークはⅢb層とⅣ層の層界とも捉えられるが、石器は集中区の南端で確認できる礫層の下に潜り込まずに全てⅢb層中からの出土であることから、Ⅲb層堆積中に形成されたと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は600点である。

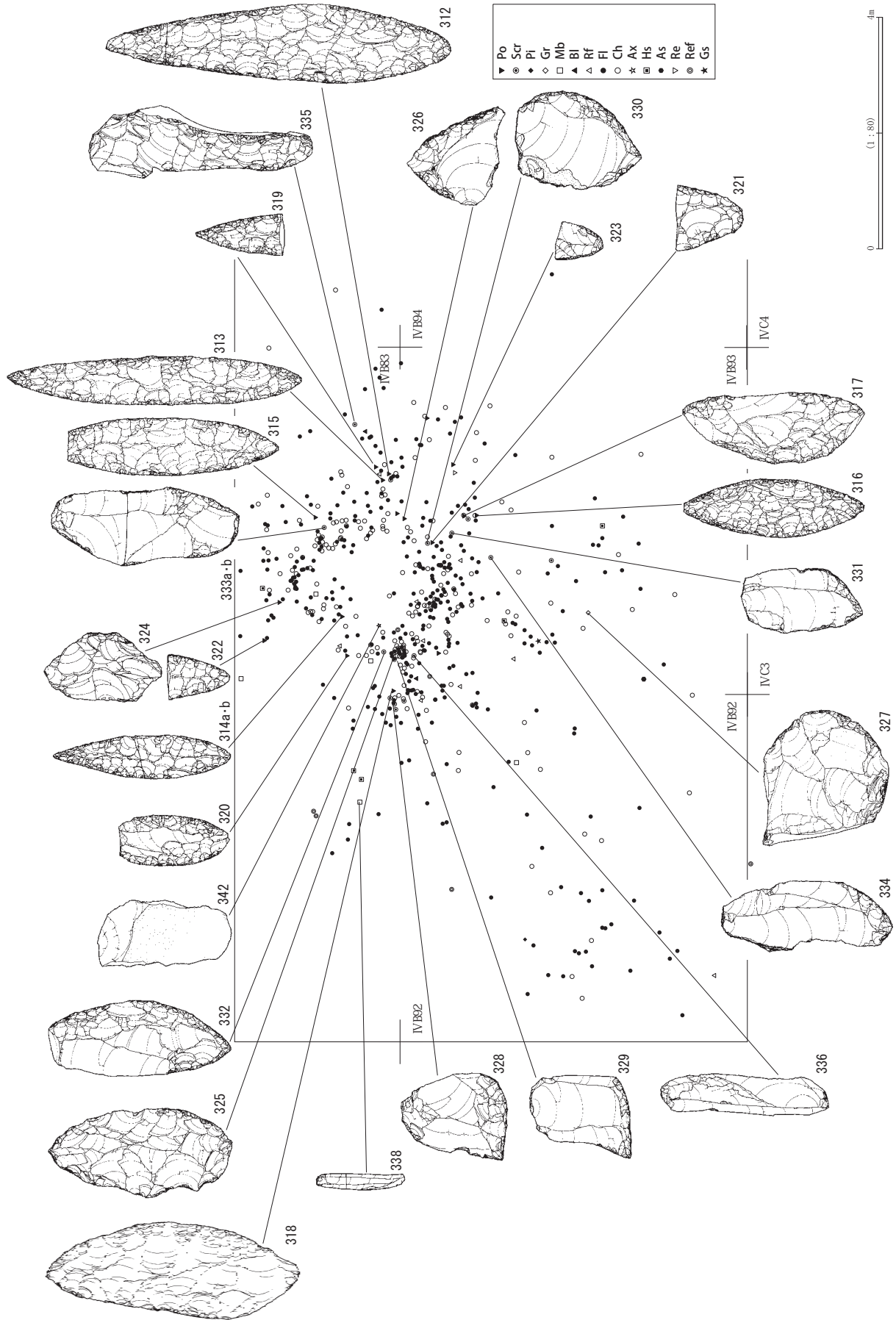
石器組成は尖頭器18点、彫刻刀形石器1点、スクレイパー16点、楔形石器1点、二次加工を有する剥片9点、石刃2点、剥片347点、チップ184点、細石刃5点、石斧1点、敲石5点、磨石1点、礫2点、礫片8点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、凝灰岩、デイサイト、安山岩などからなる。

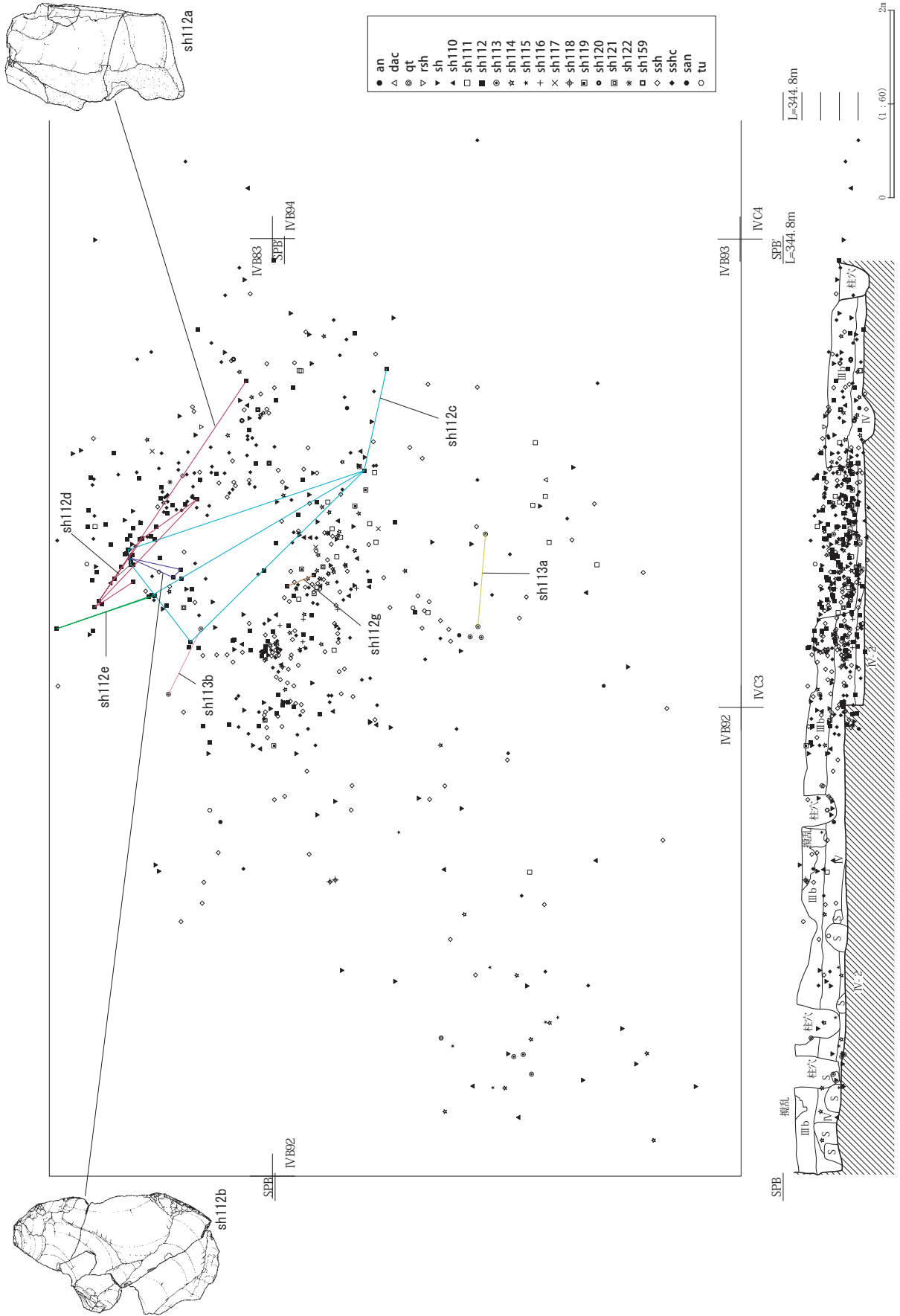
[出土遺物] 312~323は柳葉形を呈した尖頭器。312~319・322は両面加工、320・321・323は半両面加工である。312は先端部で折れたものが接合した資料であり、sh159に属する。左右対称形で最大幅が中央より基部側にある。断面は凸レンズ状である。先端には槌状剥離のような剥離面が認められる。313は他の尖頭器とは平面形状が異なりやや細身の形状で、左右対称形で最大幅が概ね中央にある。断面は凸レンズ状である。314は中央で折れたものが接合した資料であり、さらに調整剥片2点が接合する。左右対称形で最大幅が中央より基部側にある。ssh10に属する。315・316は同一母岩(sshc46)であり、共に先端部が欠損している。左右対称形で最大幅が中央より基部側にある。316は他と比べるとやや幅広の平面形状である。317・318は上記のような尖頭器を製作する段階で廃棄されたと考えられるものである。317の裏面には素材剥片の腹面を大きく残しているが、その剥離面からは大型の横長剥片を用いていたと思われる。318は基部側の厚みを除去できないことから剥離が停止したものと考えられる。319~323は基部や先端部が欠損している。320・321・323は縦長剥片が素材である。石器材料は312~313、317~319、321・322が頁岩、314・320が珪質頁岩、315・316が玉髓質頁岩である。324~326は木葉形を呈した尖頭器。これらは柳葉形と異なり、かなりの厚さを有するものである。324は左右非対称形で最大幅が基部側にあり、基部には挟りが認められる。断面は三角形である。調整剥片4点が接合しており、sh110に属する。325は左右対称形で最大幅が中央部にある。断面は凸レンズ状である。調整剥片5点が接合しており、sh114に属する。326は基部側が欠損していることから、縁辺の調整段階で大きく剥離した結果、欠損したものと考えられる。基部側は持ち出されているため全体形状は判然としないが、324や325と同様の平面形状を呈していたと思われる。調整剥片1点が接合しており、ssh112に分類される。石器材料は324・325が頁岩、326が珪質頁岩である。327は彫刻刀形石器。彫刻刀面を直交させて作出している。また、彫刻刀面以外の縁辺には細かな加工を施している。328~336・365・381・387はスクレイパー。刃部形状により3分類できる。330~332・365は刃部がV字形を呈するように加工を施している。328・329・333・387は縦長剥片の直線的な縁辺とやや弧



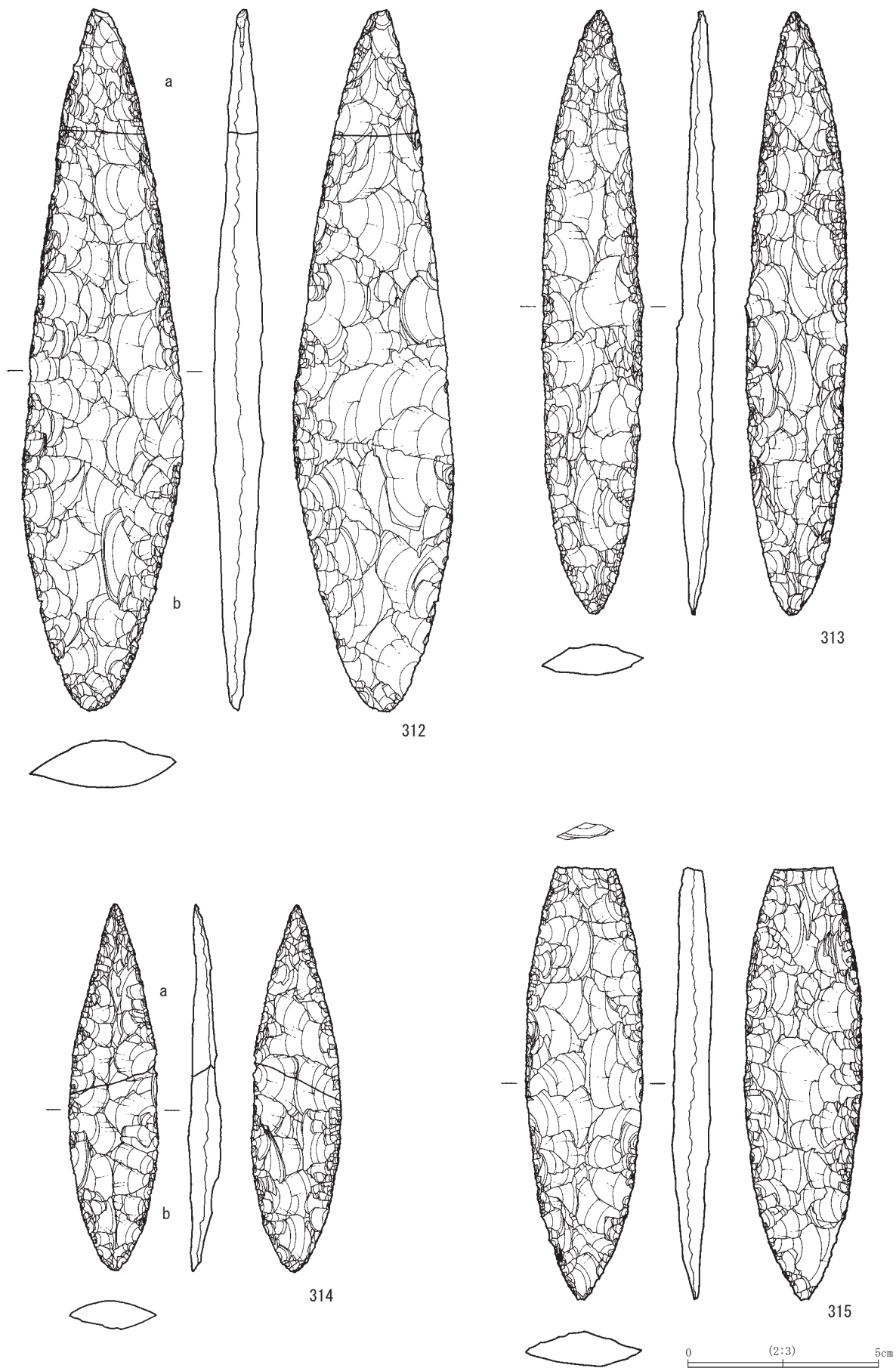
第117図 石器集中区14器種別出土状況図(1)



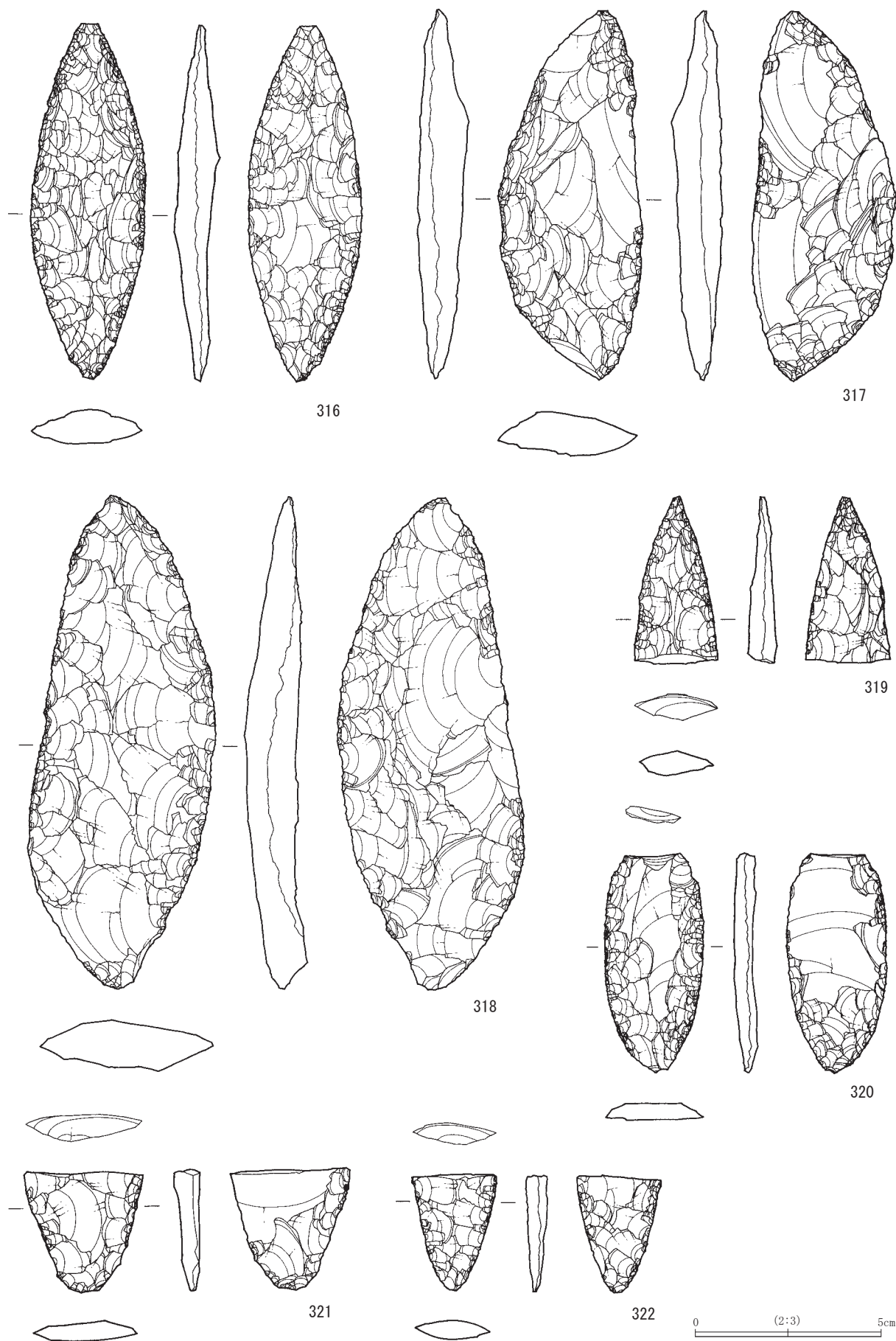
第118図 石器集中区14器種別出土状況図 (2)



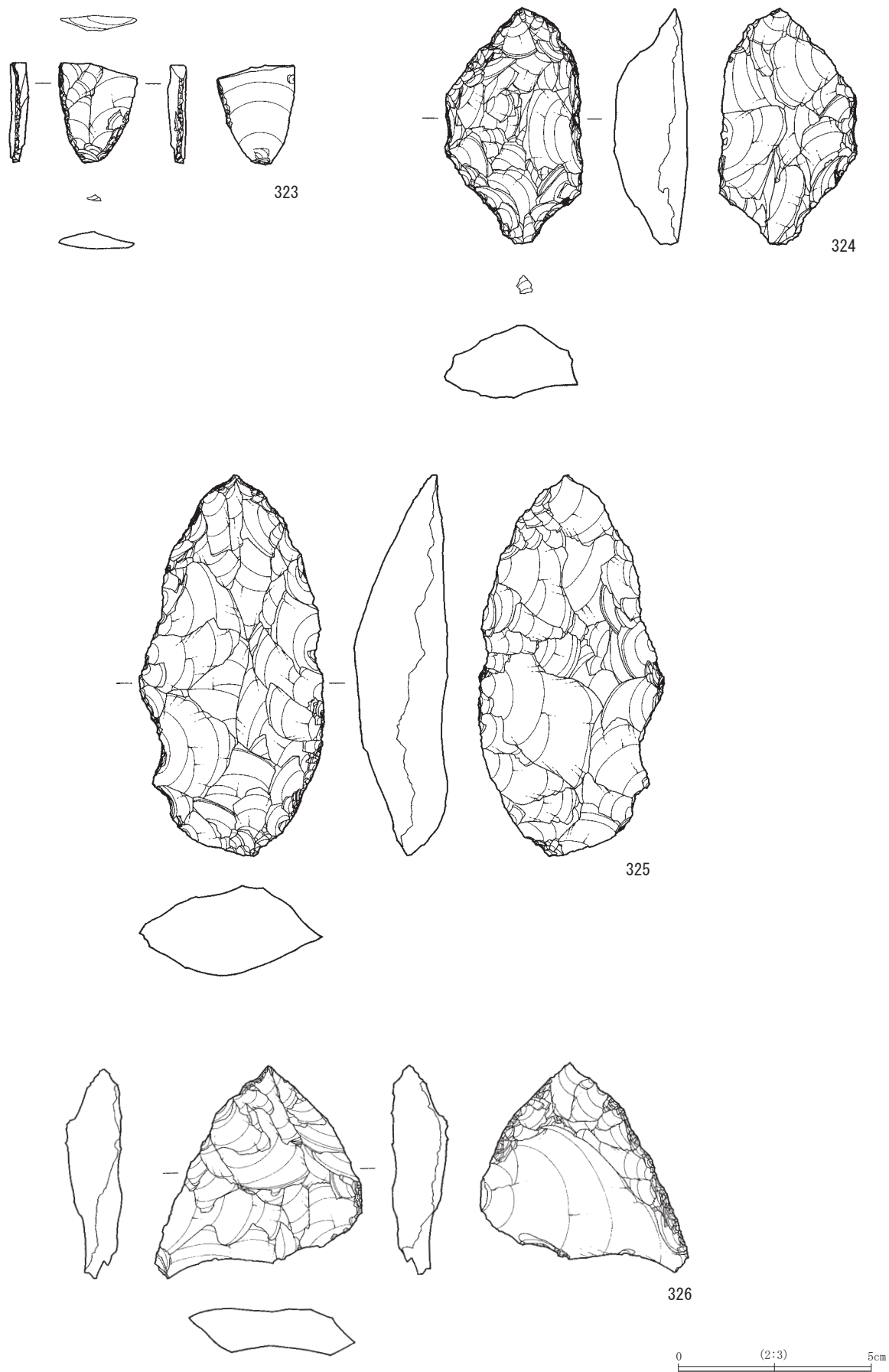
第121図 石器集中区14母岩別出土状況図 (2-2)



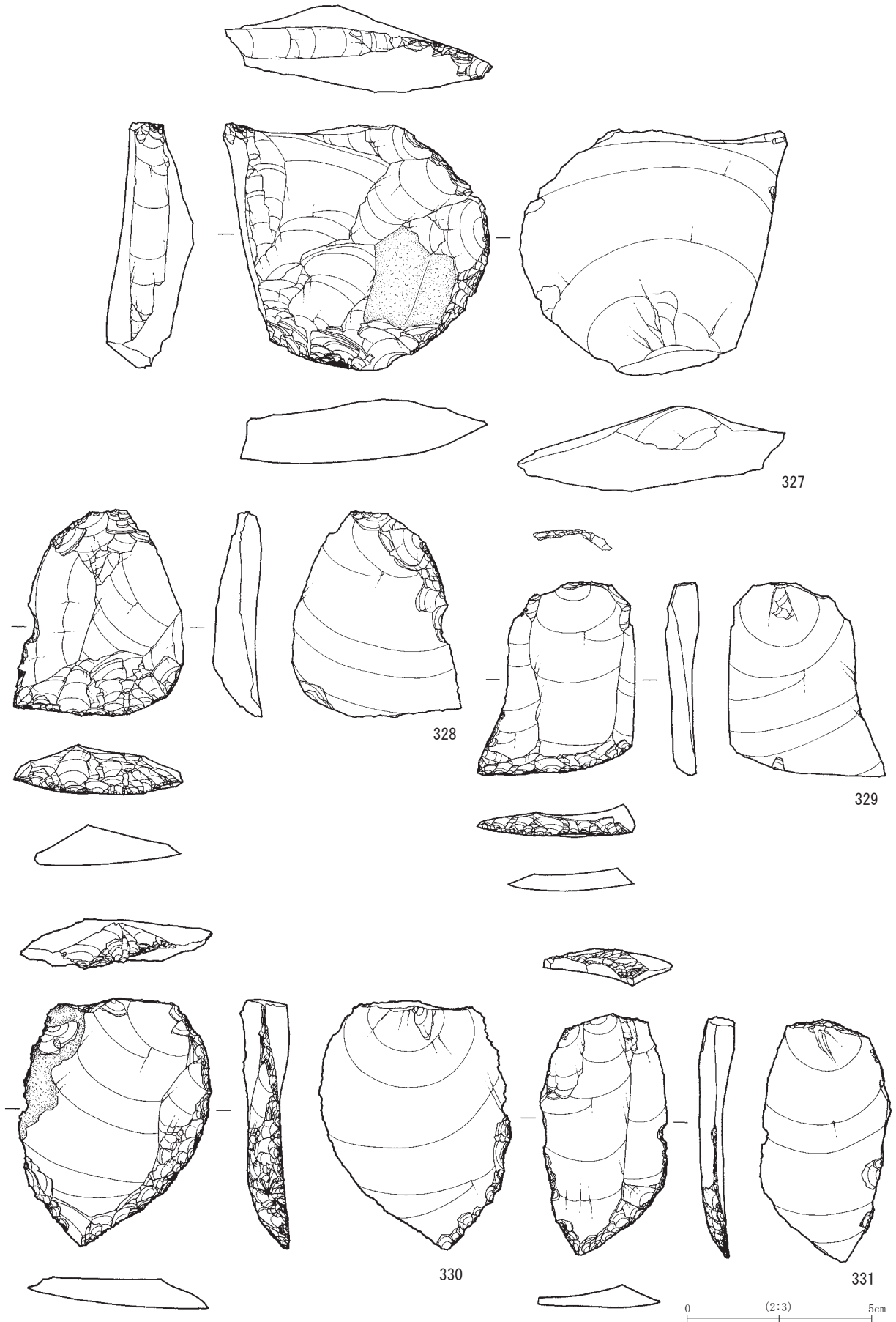
第125図 石器集中区14出土遺物 (1)



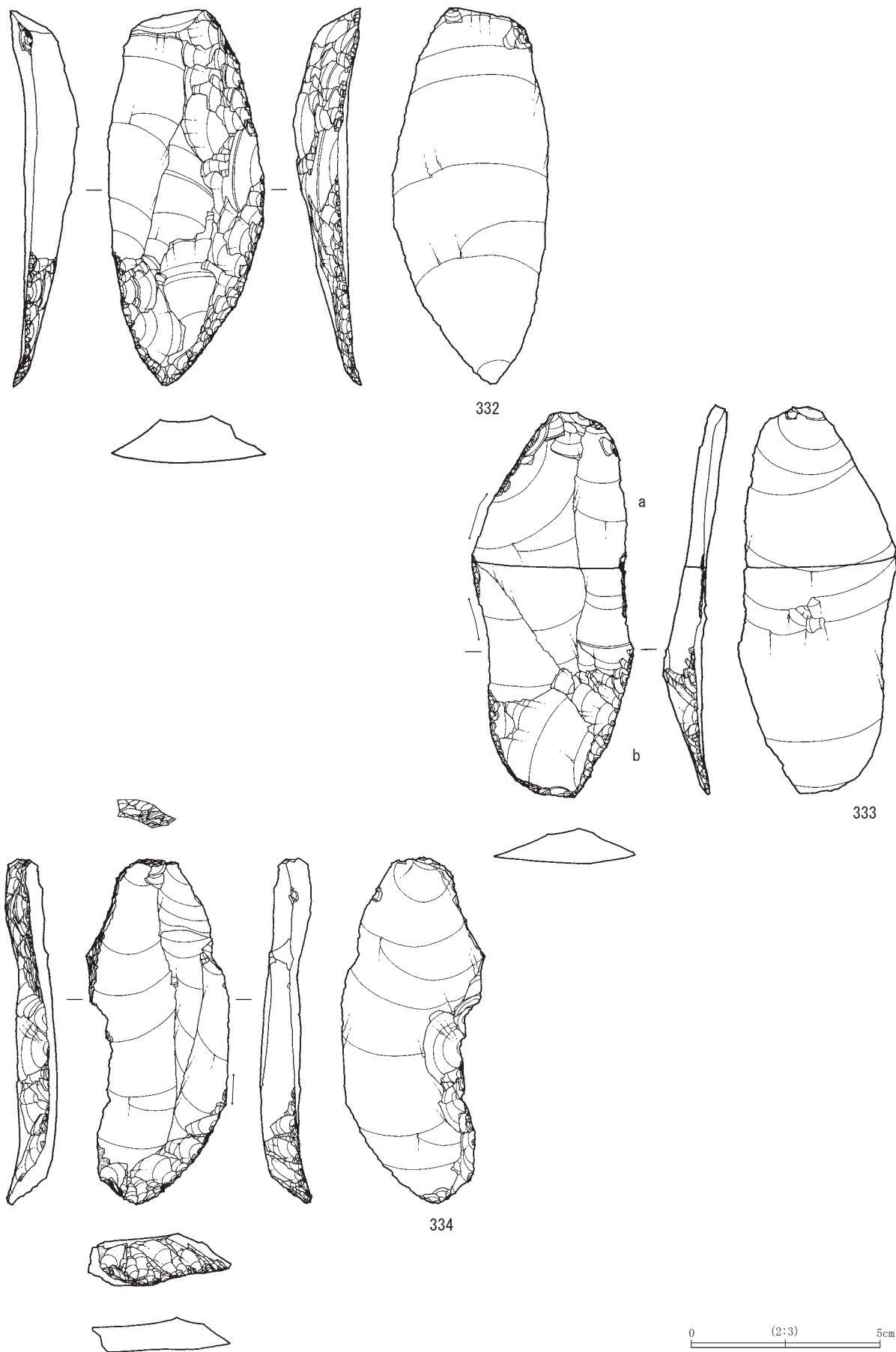
第126図 石器集中区14出土遺物 (2)



第127図 石器集中区14出土遺物 (3)



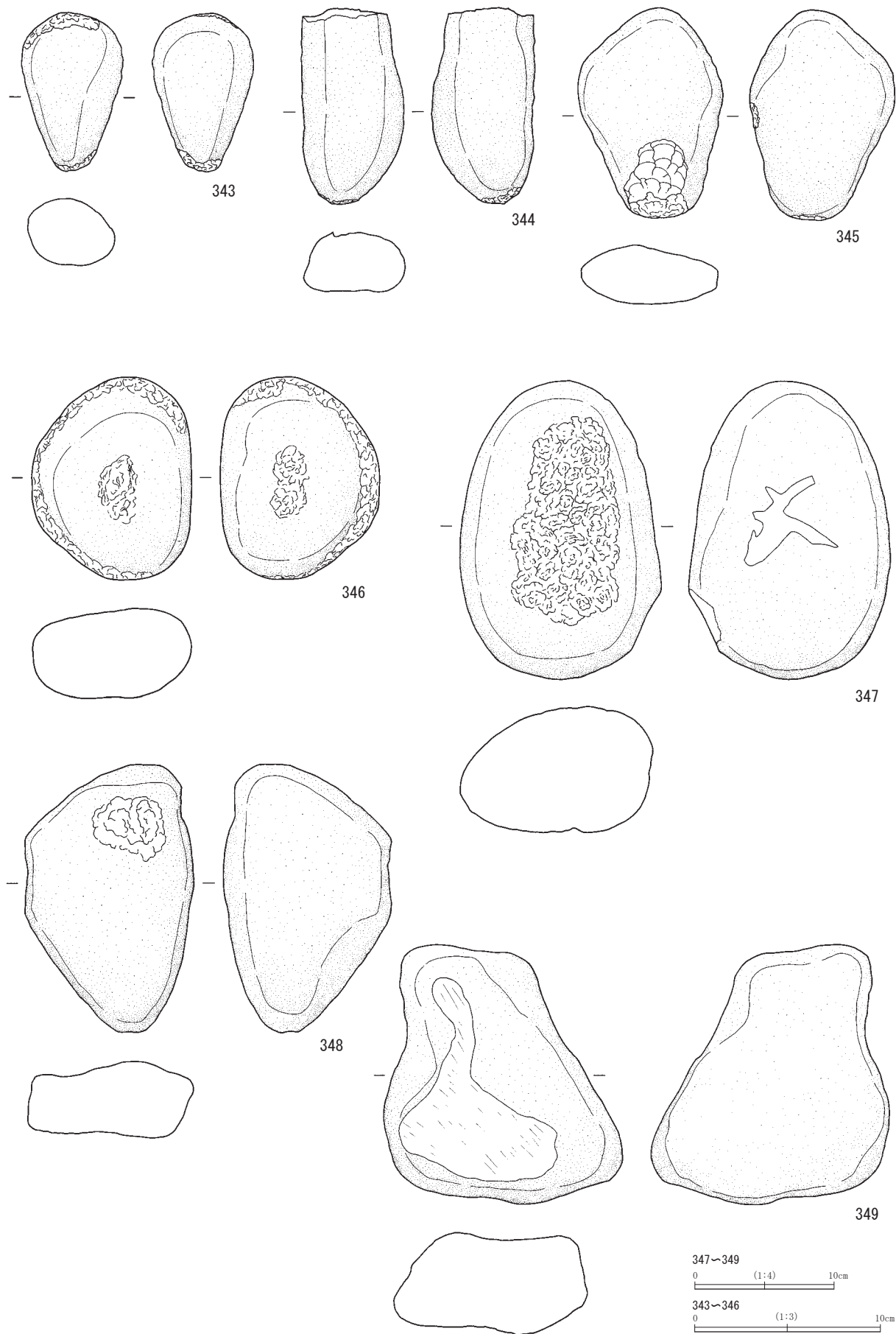
第128図 石器集中区14出土遺物 (4)



第129図 石器集中区14出土遺物 (5)



第130図 石器集中区14出土遺物 (6)



第131図 石器集中区14出土遺物 (7)

状を呈する下縁が接するように加工を施し、交わる端部を尖らせている。それ以外は側縁や末端に加工を施している。石器材料は332～334が頁岩、327～330・336が珪質頁岩、331・335玉髓質頁岩である。337は石刃。338～341は細石刃。338は2点の接合資料であり、他と比べても倍以上の長さを有する。背面剥離構成からは連続した細石刃剥離が捉えられる。342は磨製石斧。刃部のみ残存しており、基部形状は不明である。刃部には光沢面が僅かに認められる。343～346・348は敲石。347は台石。349は磨石。石器材料は337・342は頁岩、338～341は珪質頁岩、343・345・346は凝灰岩、344はデイサイト、347は砂岩、348、349は安山岩である。

上記の石器から24母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。全ての母岩別資料は他の集中区と共有することなく、本集中区内で収束している。

sh110：総点数23点、総重量50.72g。尖頭器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、灰白色が部分的に入る。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は7点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは5点あり、尖頭器と調整剥片からなる。個体bは2点あり、調整剥片からなる。

個体aの剥離工程は<358→357><359→360>→324である(<○>の前後関係は不明)。本個体は尖頭器製作の過程に伴う資料である。背面側を中心に剥離しながら器体の厚みを減じているが、器体長軸を越えるような剥離は認められない。剥離作業は背面側の厚みを除去するまでには至らなかったため停止している。

個体bは、背面側の調整剥片剥離に伴う資料である。また、非接合資料も同様に背面側の調整剥片が主体を成している。

尖頭器(324)については出土遺物に記載している。

本母岩は未成品の搬入、製作を行うが厚みを除去できず廃棄している。

sh111：総点数22点、総重量223.24g。剥片とチップで構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色が部分的に入る。礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は16点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体aは12点、個体b・cは各2点あり、すべて剥片からなる。

個体aの剥離工程は<(350a+b+c+d)→352><351→(355a+b)→356>→<353><(354a+b)>である(<○>の前後関係は不明)。本個体は礫面除去から石核整形の過程に伴う資料である。正面左方向から礫面除去した後90度打面転位をし、裏面側から礫面除去及び石核整形を施したものと想定される。

個体bは作業面稜調整剥片剥離に伴う資料、個体cは礫面除去の過程に伴う資料である。

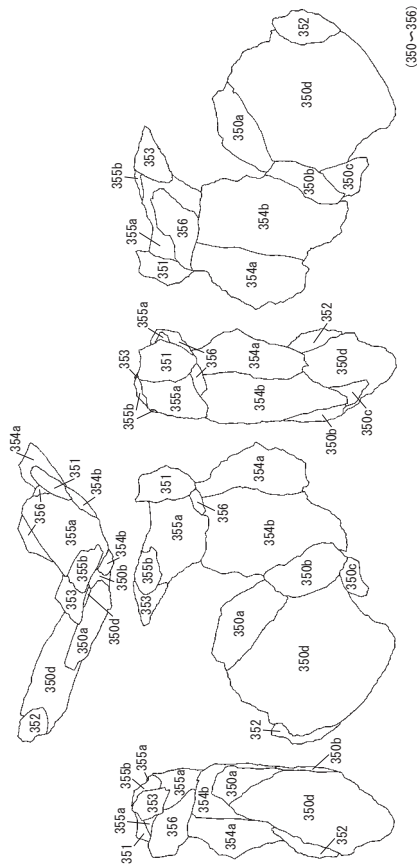
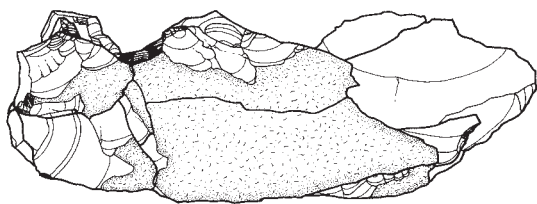
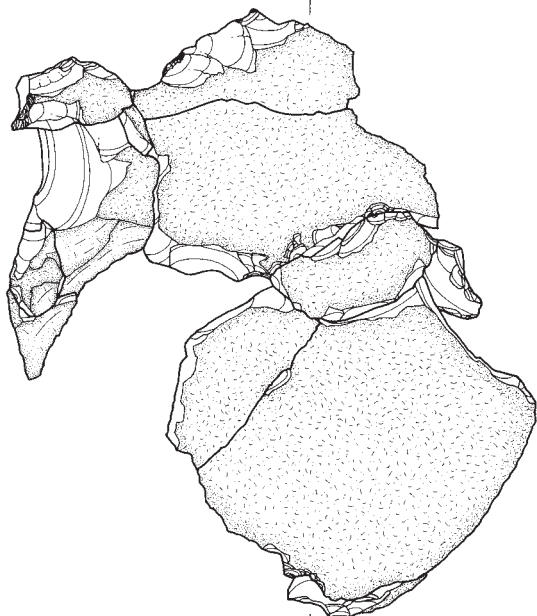
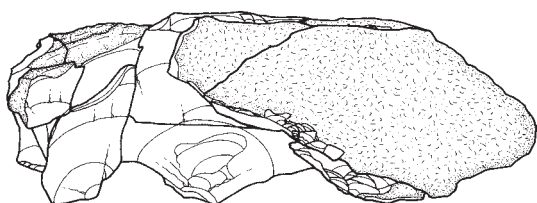
本母岩は中型の垂角礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出してしている。

sh112：総点数104点、総重量315.92g。尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は暗褐色を基調とし、礫面付近は黄灰・黒褐色が部分的に入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、礫面付近はややざらつく。

接合点数は25点あり、8個体(a～h)に分かれる。個体aは5点、個体b・dは3点、個体f・gは2点あり、これらは剥片からなる。個体cは5点あり、スクレイパーと二次加工を有する剥片、剥片からなる。個体eは3点あり、剥片とチップからなる。個体hは2点あり、チップからなる。

個体aの剥離工程は361→(362a+b)→363→364である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。目的剥片である縦長剥片を単設方向から連続的に剥離している。接合個体の背面剥離構成からも同様の剥離過程が捉えられる。

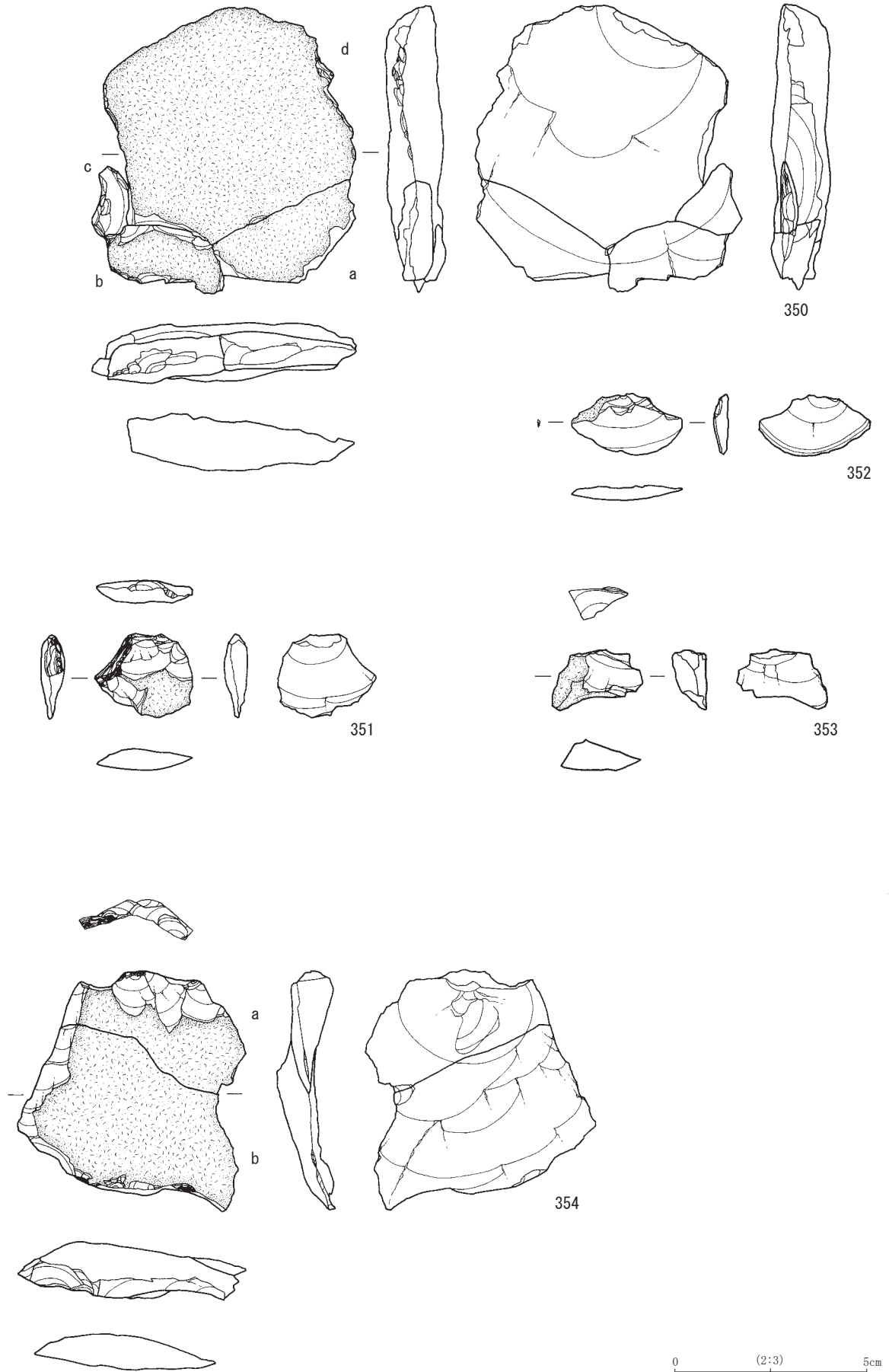
sh111



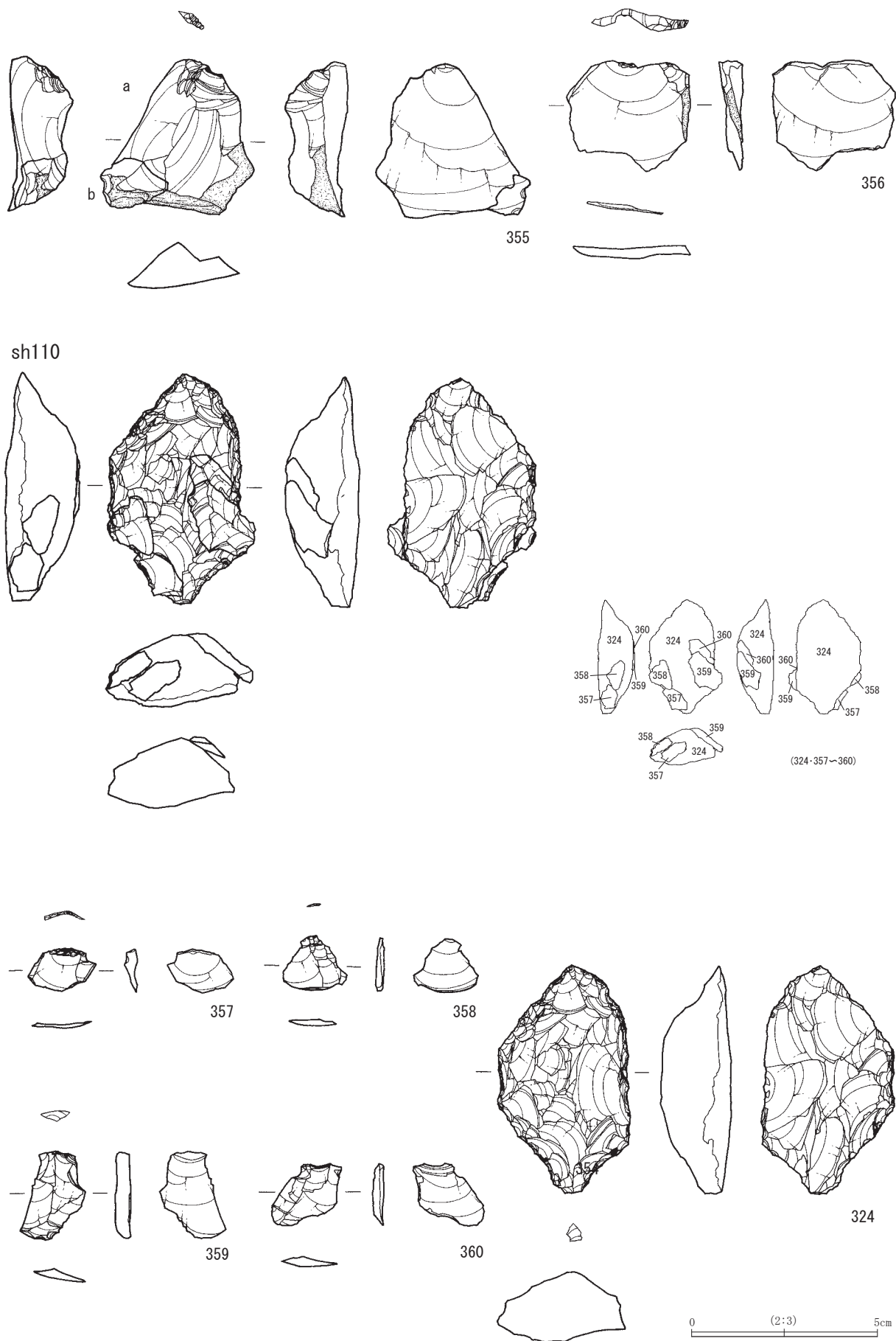
0 (2:3) 5cm

第132図 石器集中区14出土遺物 (8)

(350-356)

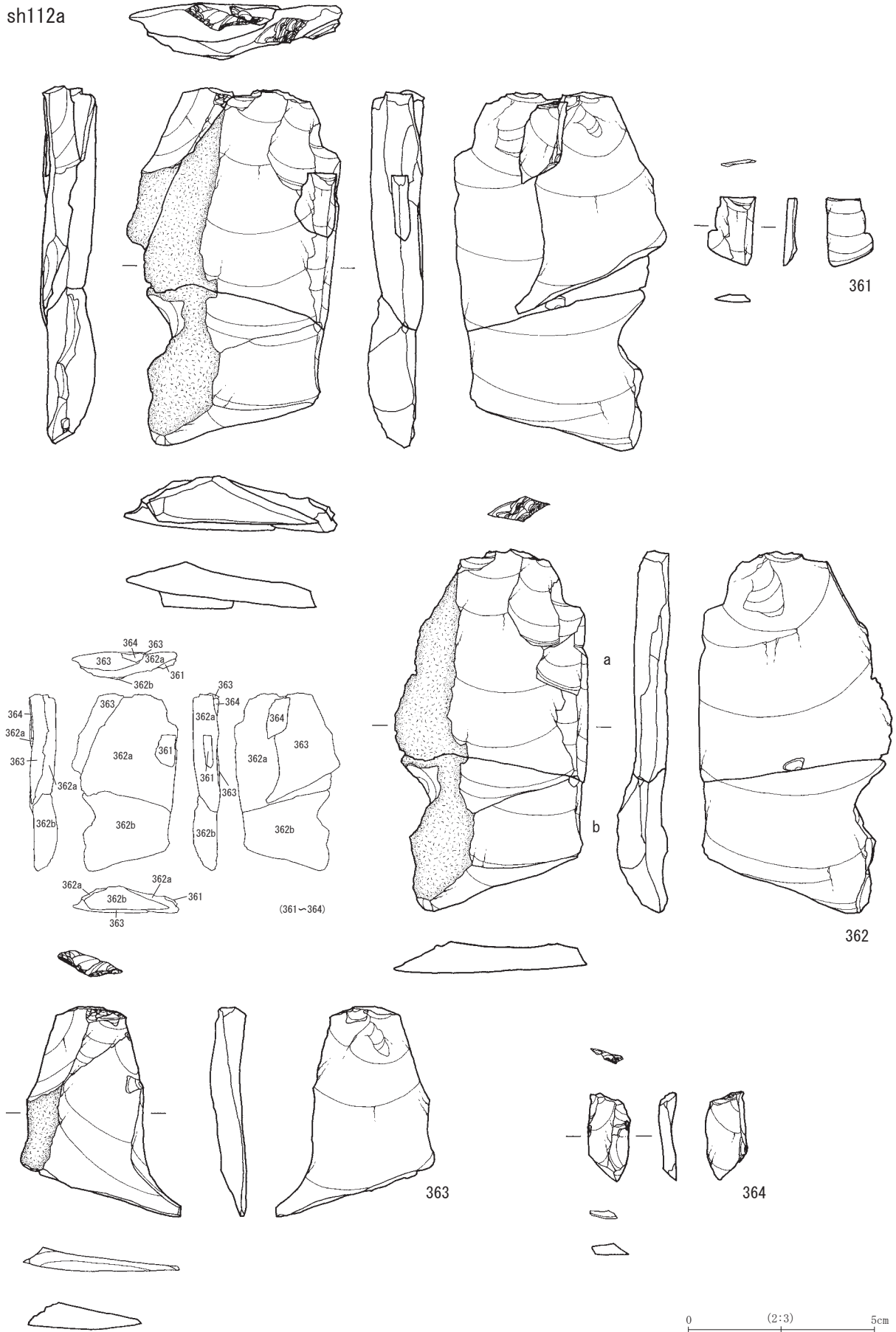


第133図 石器集中区14出土遺物 (9)



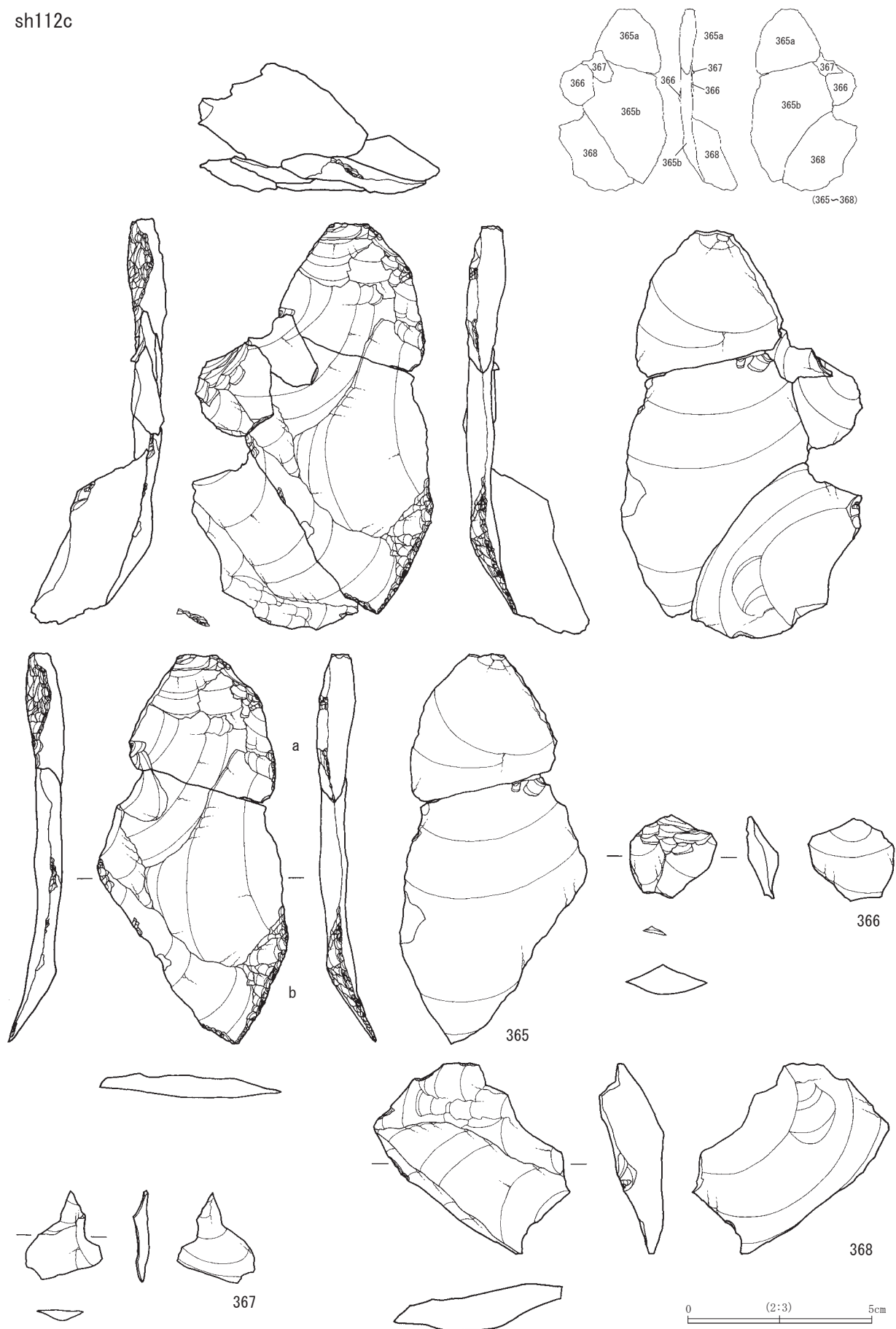
第134図 石器集中区14出土遺物 (10)

sh112a



第135図 石器集中区14出土遺物 (11)

sh112c



第136図 石器集中区14出土遺物 (12)

個体 c の剥離工程は366→367→(365a+b)→368である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。目的剥片である縦長剥片を周縁方向から剥離している資料である。接合個体の背面剥離面構成からも同様に求心的な剥離が捉えられる。ここで剥離された縦長剥片はスクレイパー(365a、b)の素材としており、それについては出土遺物に記載している。

個体 b・g は上記と違い、小型の不定形剥片剥離過程に伴う資料である。また、個体 d は縦長剥片、個体 e・f・h が小型剥片が2つもしくは3つに折れたものが接合した資料である。

非接合資料には、欠損しているものの縦長剥片を素材とした尖頭器(321)やそれに伴う調整剥片が認められていることから、尖頭器を製作していたと考えられる。この素材となる縦長剥片が上記のどの個体から剥離されたかは不明である。

このように見ていくと、個体 a・c からは同じ縦長剥片であっても異なる剥離技術が用いられていることが窺える。この点については、同一個体において剥離工程ごとに前後関係を示しているのか、目的剥片剥離に伴い異なる個体を用いているかについては、両者が接合関係にないため判然としない。少なくとも、これらから剥離された縦長剥片は異なる tool の素材に用いられていることが判明している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh113：総点数9点、総重量160.54g。剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は灰白色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、鉤物の多い箇所はややざらつく。摂理が部分的に発達している。

接合点数は4点あり、2個体に分けられる。共に剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh114：総点数47点、総重量143.87g。尖頭器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、ややざらつく。

接合点数は12点あり、4個体(a～d)に分かれる。個体 a・b・d は2点あり、a・d は剥片、b は剥片とチップからなる。個体 c は6点あり、尖頭器と剥片からなる。

個体 c の剥離工程は373→371→369→372→370→325である。本個体は尖頭器製作に伴う資料である。右側縁において背面と腹面側を剥離しながら器体の厚みを減じているが、器体長軸を越えるような剥離は少ない。その厚みを除去しきれずに作業が停止している。

残りの個体は上記の過程に伴う調整剥片が2つに折れたものが接合した資料である。また非接合資料は裏面側を剥離したと思われる調整剥片が主体を成している。

尖頭器(325)については出土遺物に記載している。

本母岩は未成品の状態状態で搬入、製作後に厚みを除去できず廃棄している。

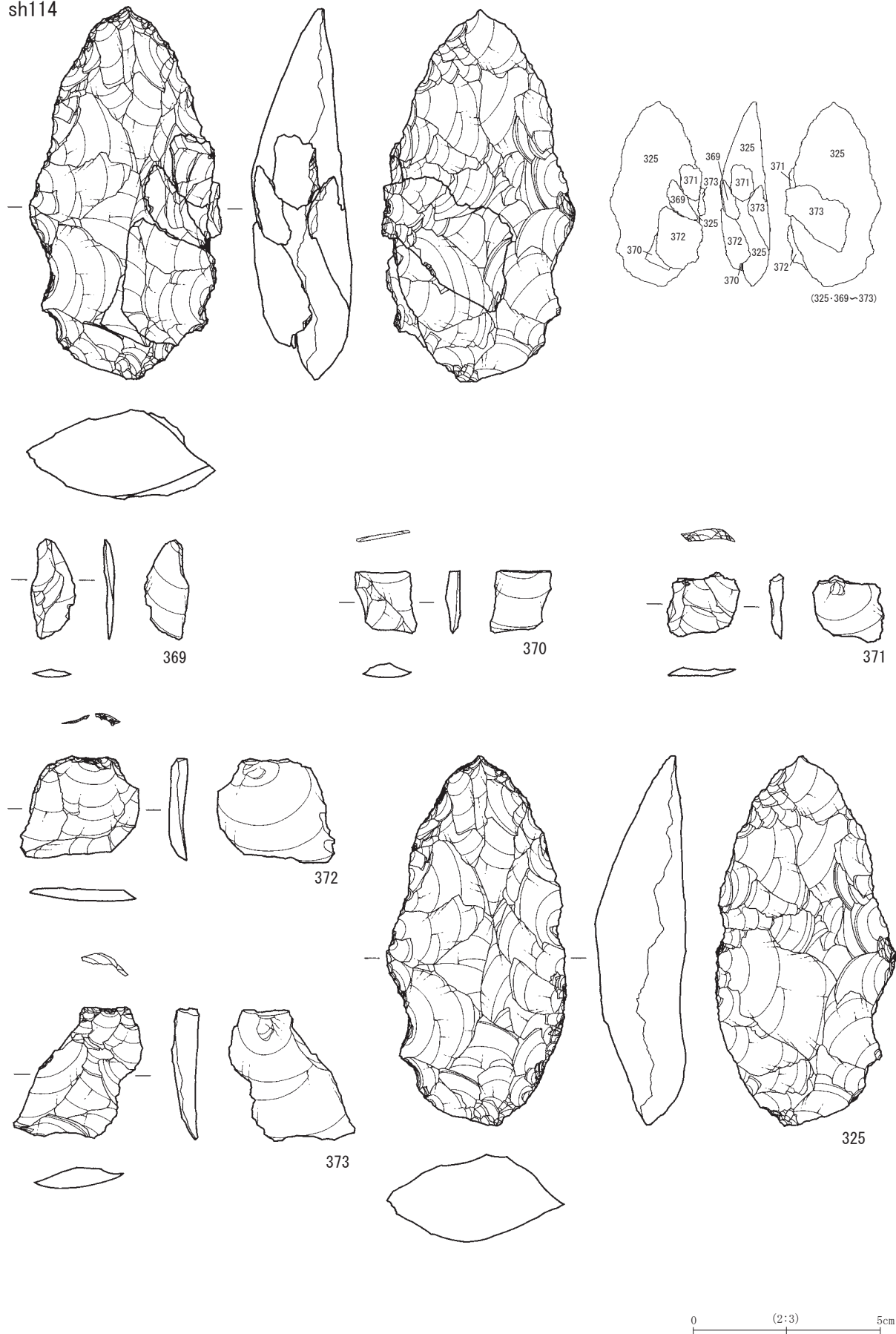
sh115：総点数11点、総重量69.37g。剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色が斑に入る。石質は緻密でなめらかだが、鉤物の多い箇所ではややざらつく。

接合点数は5点あり、上記の器種からなる。剥離工程は374→376→377→378→375である。本個体は尖頭器製作に伴う資料である。小型の調整剥片を単設方向から連続的に剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは、これとは異なり上下方向からの剥離工程が捉えられる。また、非接合資料では接合個体よりも厚手の調整剥片が主体を成している。これらの資料からは形態不明だが中型の尖頭器製作を行っていたものと想定される。

本母岩は未成品の状態状態で搬入、製作後に本体は搬出している。

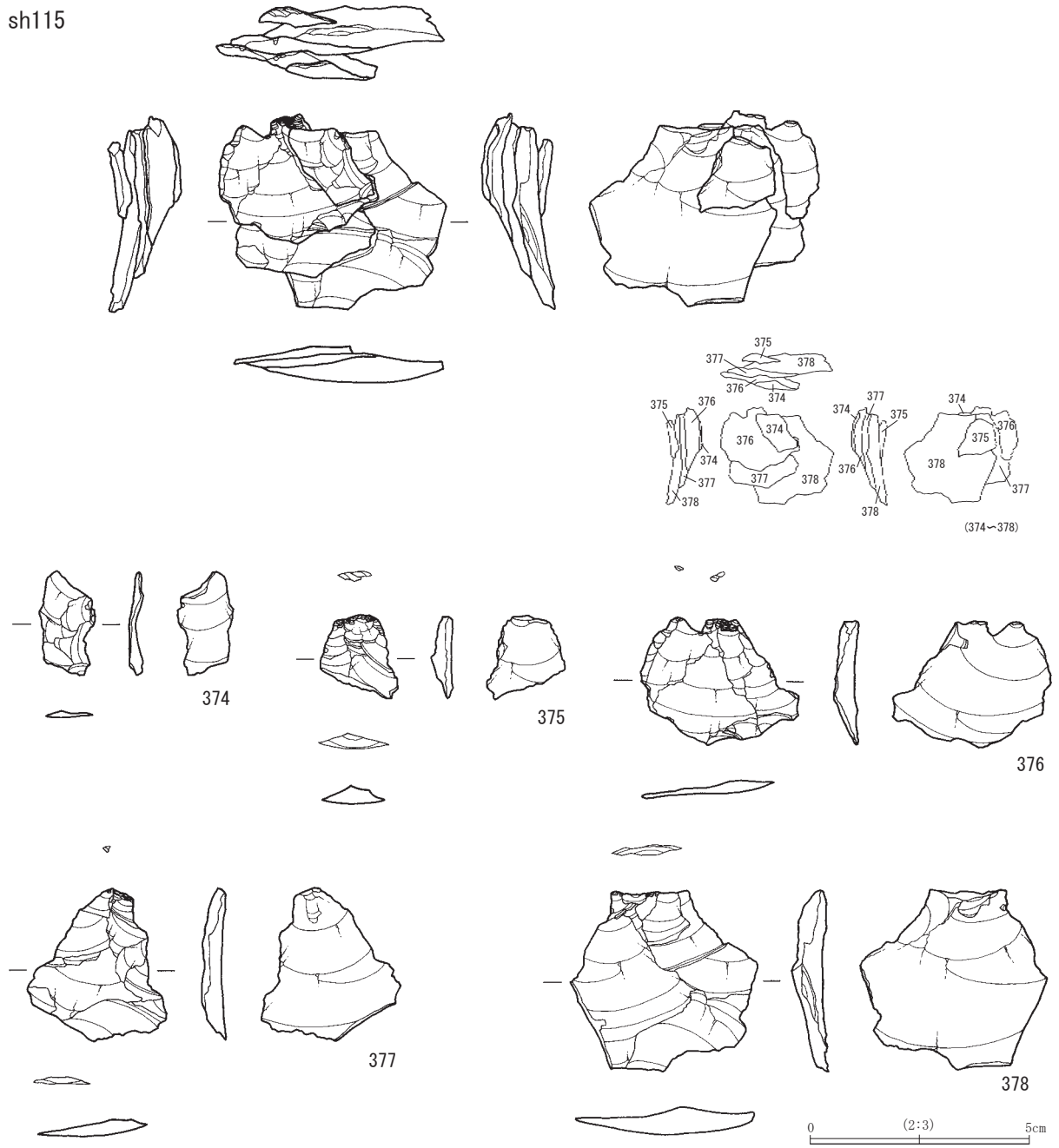
sh116：総点数7点、総重量5.83g。剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とする。石

sh114



第137図 石器集中区14出土遺物 (13)

sh115



第138図 石器集中区14出土遺物 (14)

2 旧石器時代

質は緻密でなめらかである。

接合点数は4点あり、2個体(a・b)に分かれる。接合点数は共に2点あり、どちらも尖頭器製作に伴う調整剥片が2つに折れたものが接合した資料である。また非接合資料も尖頭器製作に伴う調整剥片が主体を成している。

本母岩は未成品の状態で搬入、製作後に本体を搬出している。

sh117：総点数3点、総重量12.77g。剥片で構成される資料である。剥離面は暗灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は2点あり、剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh118：総点数3点、総重量4.16g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は暗灰黄色を基調とする。灰白と黒褐色の点状が入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh119：総点数5点、総重量7.16g。スクレイパー、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、暗灰黄色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh120：総点数2点、総重量1.57g。尖頭器製作に伴う調整剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

本母岩は未成品の状態で搬入、製作後に本体を搬出している。

sh121：総点数3点、総重量22.82g。スクレイパーと剥片で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

剥離工程は379→381→380である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。目的剥片である縦長剥片を単設方向から剥離している。剥離された縦長剥片はスクレイパーの素材としている。

スクレイパー(381)については出土遺物に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh122：総点数2点、総重量31.82g。スクレイパーで構成される接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。部分的に光沢を有する。

スクレイパーが2つに折れたものが接合した資料(333a、b)であり、出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、欠損したため廃棄している。

sh159：総点数2点、総重量72.76g。尖頭器で構成される接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色の縞が部分的に入る。石質は緻密でなめらかである。

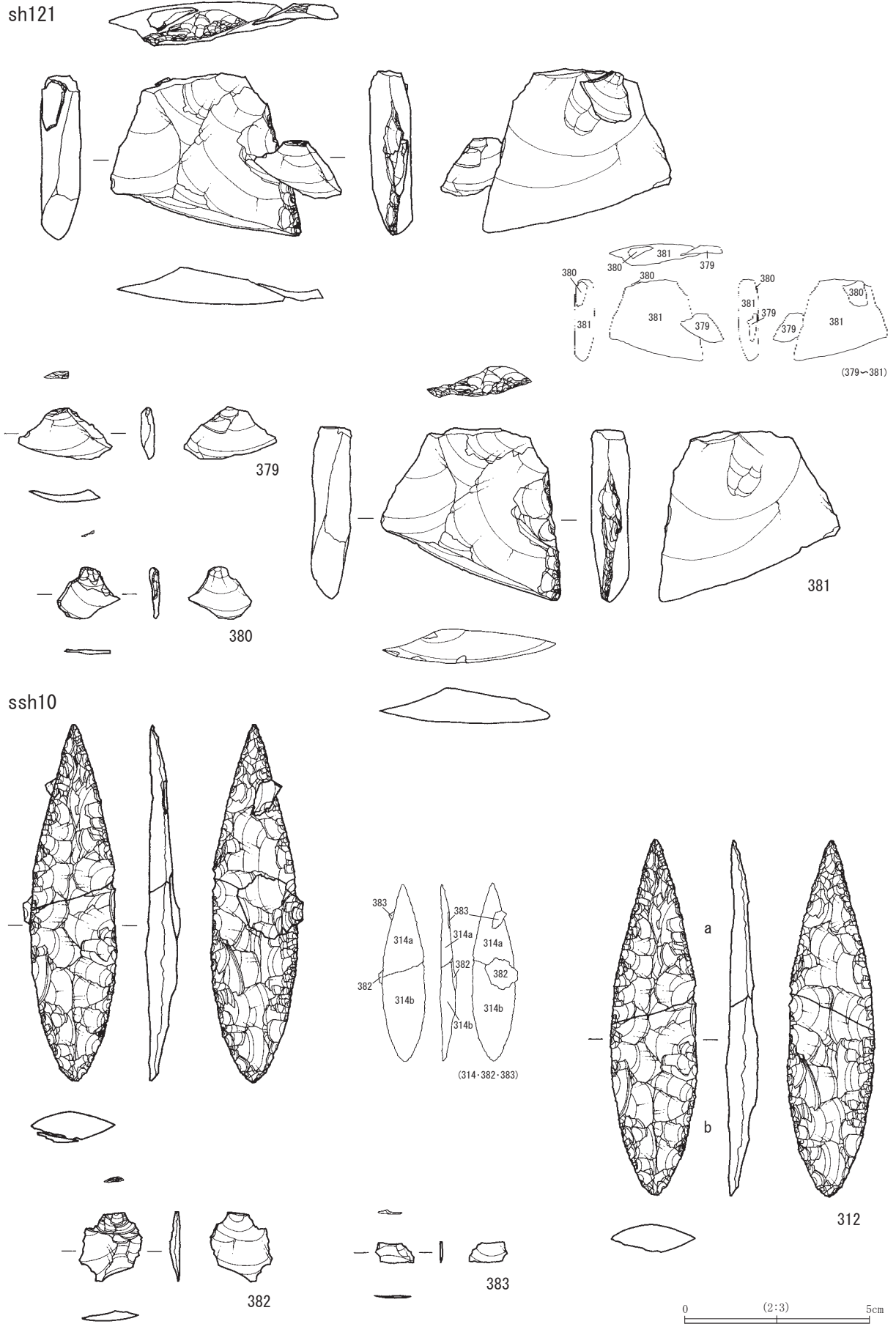
尖頭器が2つに折れたものが接合した資料(312)であり、出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、欠損したため廃棄している。

ssh10：総点数25点、総重量19.72g。尖頭器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合資料は4点あり、上記の器種からなる。接合個体は<382><383>→(314a+b)である(<○>の前後関係は不明)。本個体は尖頭器製作に伴う資料である。尖頭器は裏面側を中心に剥離が施されている。器体中央における欠損は、縁辺部にその要因となるような剥離が認められないことから、偶発的に折損したものと考えられる。

尖頭器(314a+b)については出土遺物に記載している。



第139図 石器集中区14出土遺物 (15)

本母岩は未製品の状態で搬入、製作後に欠損したため廃棄している。

ssh11：総点数13点、総重量13.43g。尖頭器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は2点あり、調整剥片が2つに折れたものが接合した資料である。また、非接合資料も尖頭器製作に伴う調整剥片が認められる。

尖頭器(320)については出土遺物に記載している。

本母岩は未製品の状態で搬入、製作に失敗し廃棄している。

ssh12：総点数12点、総重量44.7g。尖頭器、二次加工を有する剥片、剥片で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は8点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体aは3点あり、尖頭器と剥片からなる。個体bは3点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体cは2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は384→385→326である。本個体は尖頭器製作に伴う資料である。尖頭器の裏面側を中心に剥離している。裏面右側からの剥離が先端部を欠損する大きな剥離となったため、それ以降の剥離作業は停止している。

個体b・cは上記の尖頭器製作に伴う調整剥片が剥離された資料である。

尖頭器については出土遺物(326)に記載している。

本母岩は未製品の状態で搬入、製作に失敗したため廃棄している。ただし基部側は認められないことから搬出された可能性がある。

ssh13：総点数9点、総重量33.31g。スクレイパー、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面付近はやや明るくなる。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は6点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体a～cは各2点あり、aは剥片とチップ、bはスクレイパーとチップ、cはスクレイパーと剥片からなる。

個体bの剥離工程は386→387である。本個体はスクレイパーの刃部再生に伴う資料である。

個体aは剥片、個体cはスクレイパーの縁辺部が2つに折れたものが接合した資料である。スクレイパーはいずれも縦長剥片を素材としており、個体bのスクレイパー(387)については出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、製作に失敗したため廃棄している。ただし、スクレイパー(387)の基部側は認められないことから、搬出した可能性がある。

ssh14：総点数4点、総重量30.7g。スクレイパーと剥片で構成される資料である。剥離面は褐灰・灰黄褐色を基調とし、黒褐色の斑点が入る。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

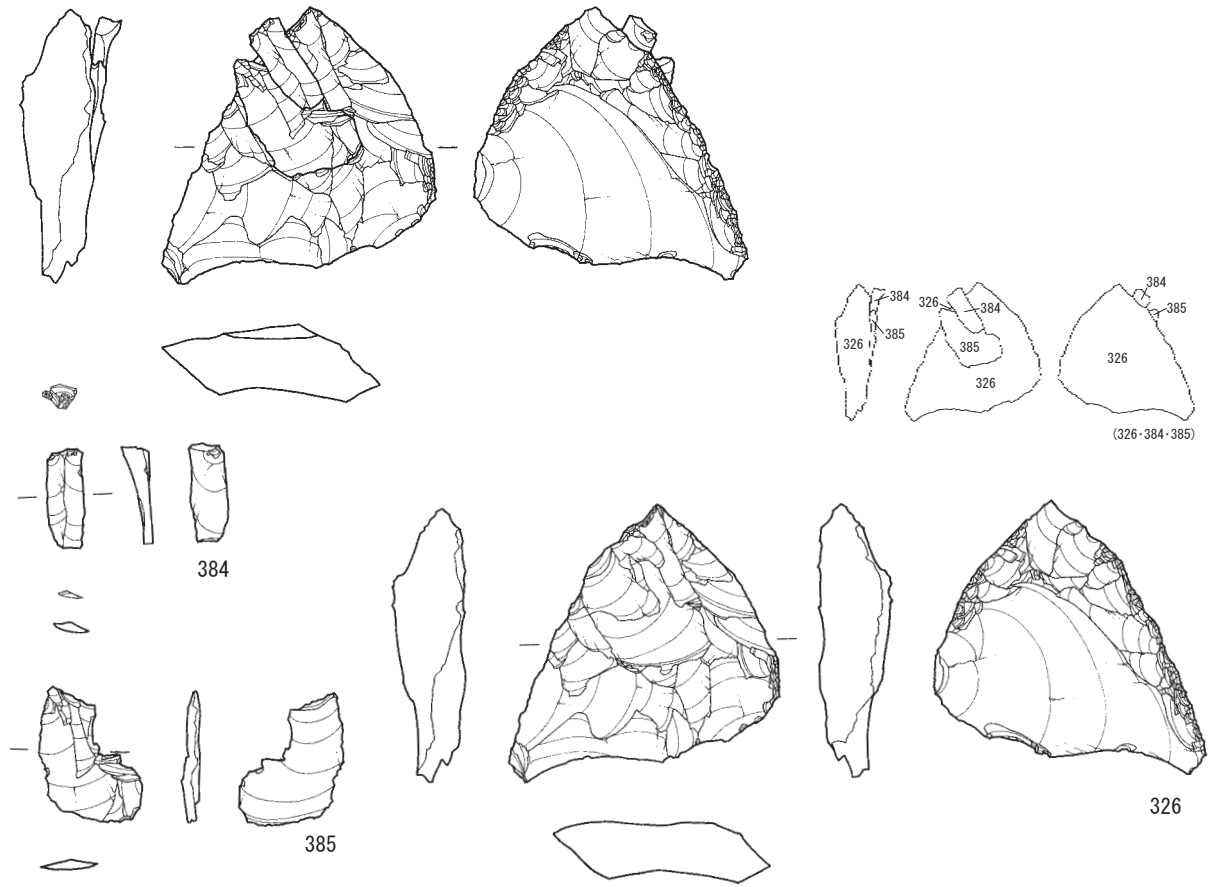
接合点数は2点あり、剥片が2つに折れたものが接合した資料である。スクレイパー(1029)については集中区外から出土しているため405頁に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

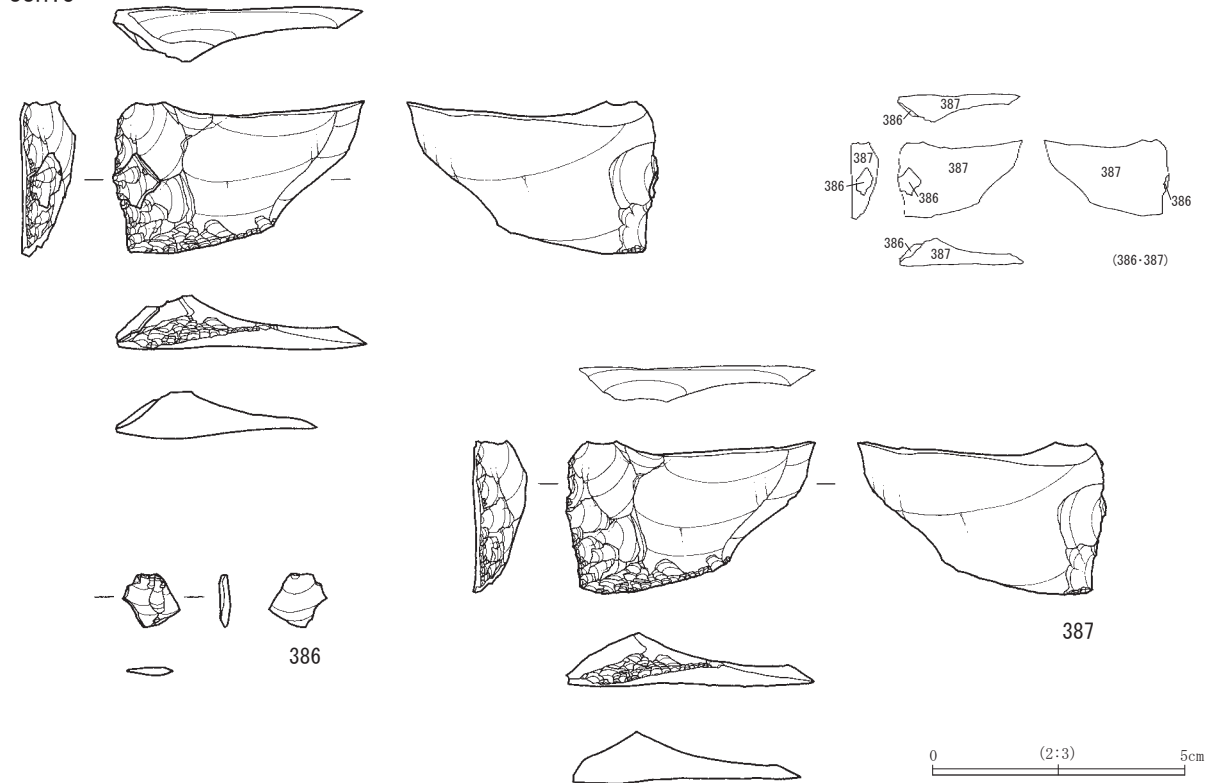
ssh15：総点数7点、総重量73.39g。スクレイパー、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は3点あり、石刃と剥片からなる。剥離工程は388→389→390である。本個体は目的剥片剥離から石核整形の過程に伴う資料である。石刃を剥離した後、90度打面転位し小型剥片を剥離している。この石刃剥離後の工程は、石核整形ないし作業面稜形成を行ったものと考えられる。接合個体の背面剥離面構成からは石核の打面は上下に設定されていたことが捉えられる。剥離された石刃はスクレイパー(336)の素材としており、それについては出土遺物に記載している。

ssh12

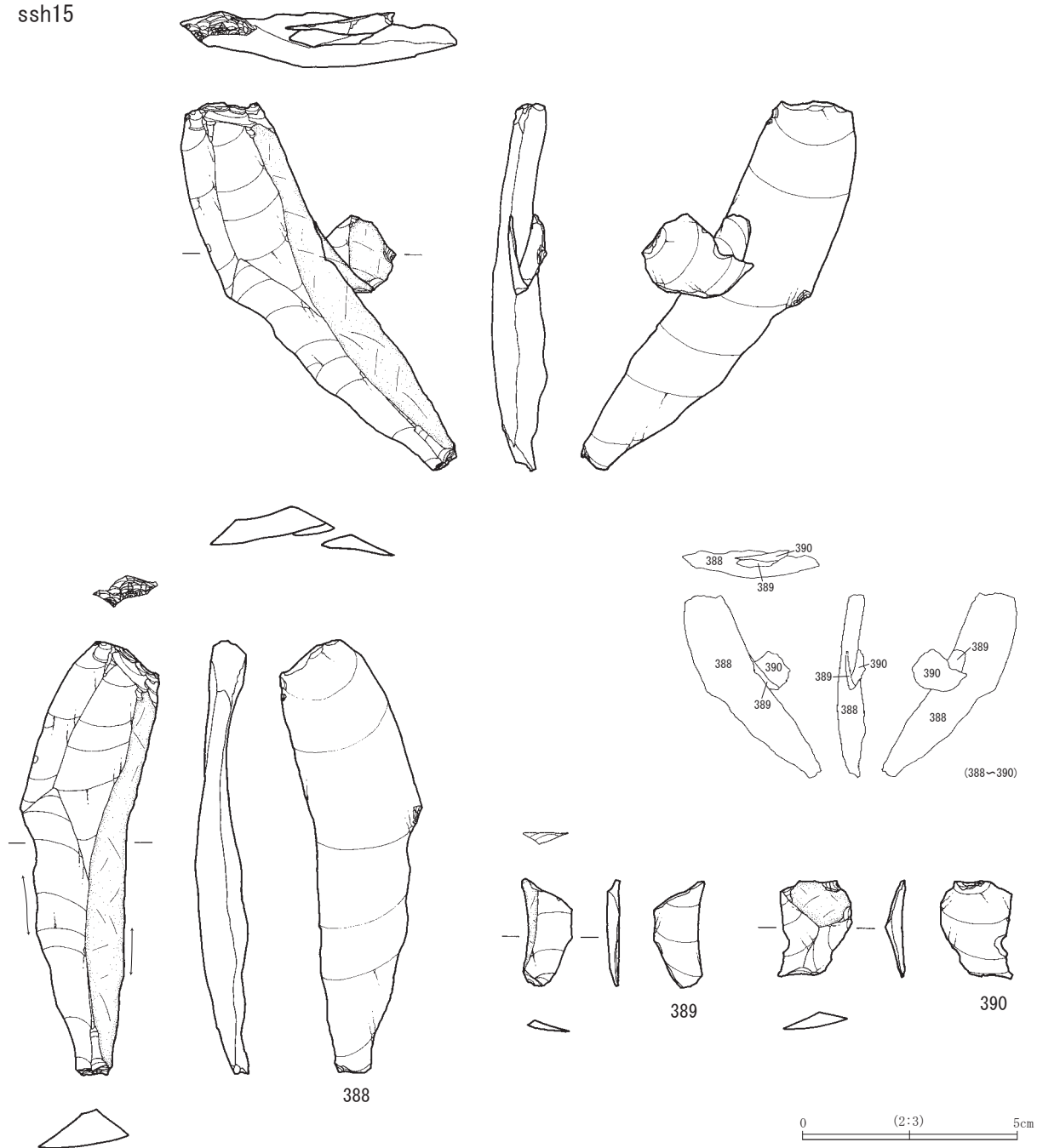


ssh13



第140図 石器集中区14出土遺物 (16)

ssh15



第141図 石器集中区14出土遺物 (17)

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc40：総点数77点、総重量359.79g。尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白色が斑に入る。礫面は黒褐・暗褐色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達しており、その箇所ではざらつく。

接合点数は23点あり、8個体(a～h)に分かれる。個体aは5点、個体gは3点、個体d・e・fは2点あり、これらは剥片からなる。個体bは5点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体c・hは2点あり、前者はチップ、後者は剥片とチップからなる。

個体bの剥離工程は391→392→393→(394a+b)である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。目的剥片である縦長剥片を単設方向から連続的に剥離しており、この工程の中には打面再生を介在させるため作業面高が減少している。接合個体の背面剥離面構成からは右側面を中心に作業面稜調整が行われていたことが捉えられる。

個体gの剥離工程は<395><397>→396である(<○>の前後関係は不明)。本個体は打面再生の過程に伴う資料である。90度打面転位しながら打面再生を施している。

個体a・fは礫面除去から石核整形に伴う資料である。個体c・d・hは剥片やチップが2つに折れたものが接合した資料である。個体eは目的剥片剥離の過程に伴う資料である。

このようにみていくと本母岩は礫面除去や石核整形を行った後に、目的剥片である縦長剥片を90度打面転位を繰り返しながら剥離している。これらから剥離された縦長剥片は尖頭器(323)やスクレイパー(331・335)の素材としている。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc41：総点数16点、総重量51.2g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰黄褐色を基調とし、灰白色が点や斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は6点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体a～cの接合点数は各2点あり、剥片からなる。石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。すべての個体は欠損しているため全容は不明だが、基本的に縦長剥片を剥離していたと考えられる。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc42：総点数7点、総重量12.28g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、褐灰・灰黄褐が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc46：総点数2点、総重量61.77g。尖頭器で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白色が部分的に認められる。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。縁辺部は僅かに透ける。

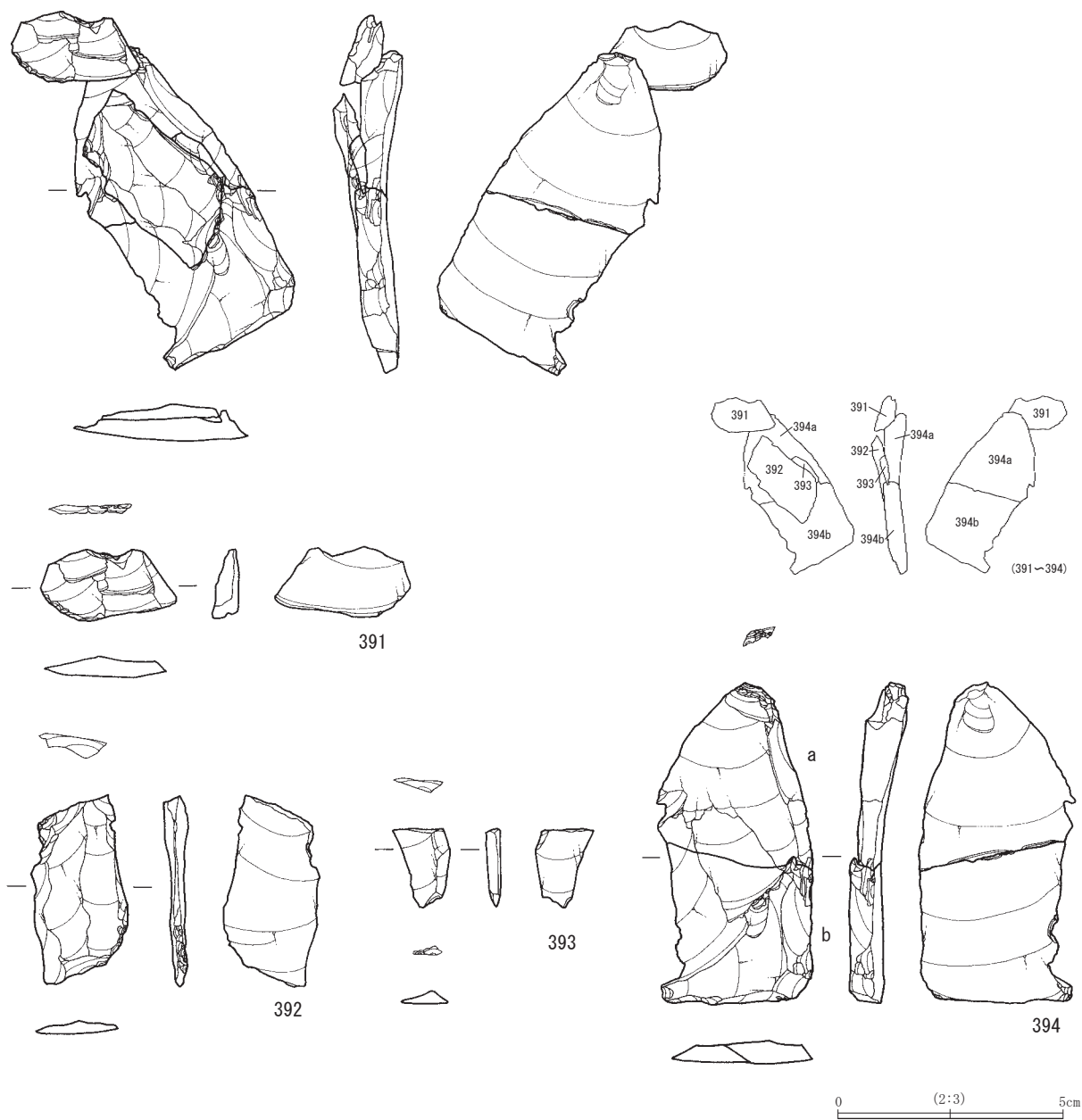
尖頭器(315、316)については出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、欠損したため廃棄されている。

[備考] 本集中区と類似した石器集中区1が約100m西に存在しているが、その様相は大きく異なり本集中区のようにtool類は出土せず、製作のみが行われている。

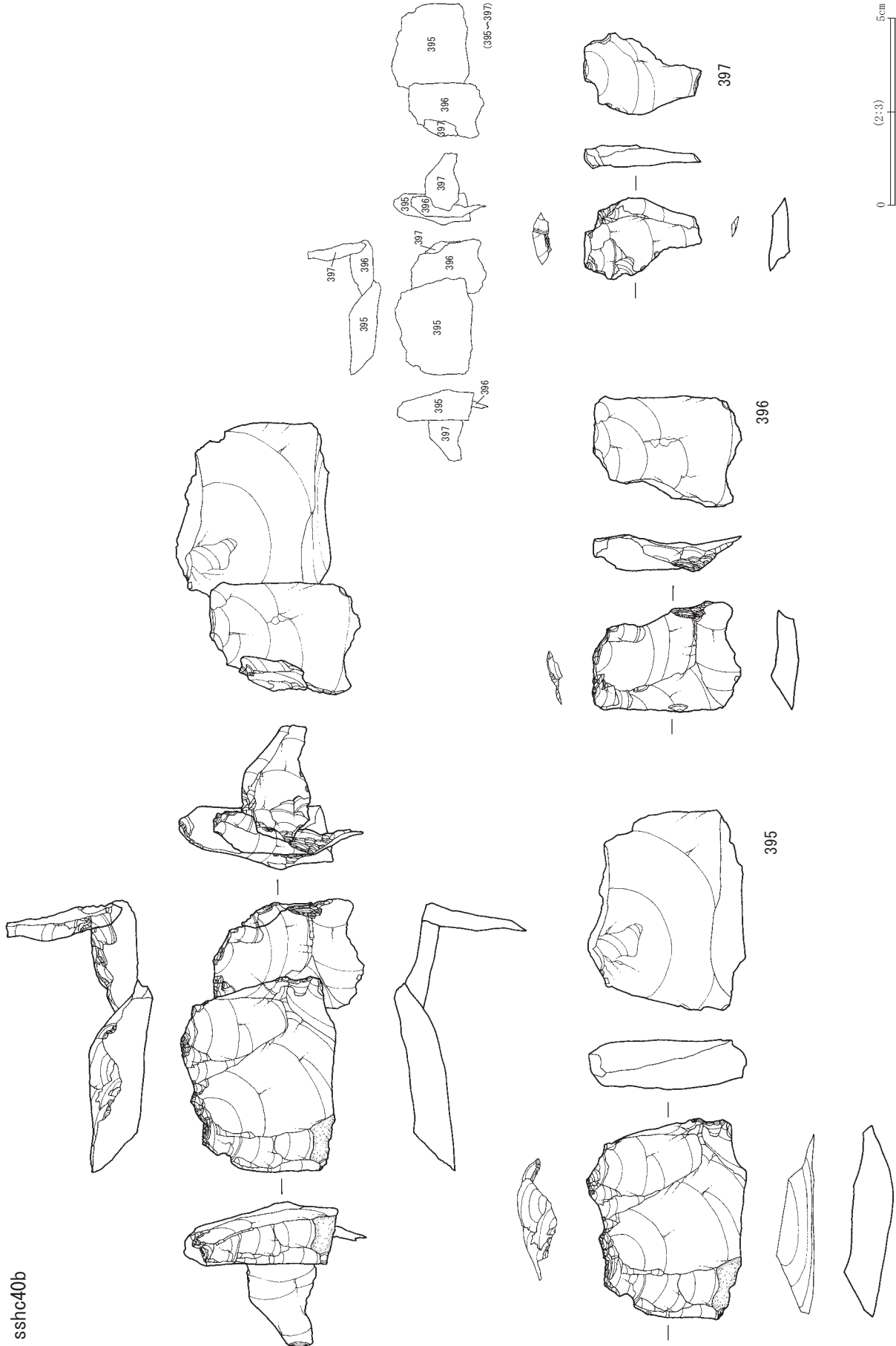
北壁面においてテフラ分析を行っており、Ⅲb層からAs-YPが検出されている。また出土炭化材の年代測定を行っているが、帰属年代を示すような結果は得られていない。詳細は第2分冊に記載している。

sshc40b



第142図 石器集中区14出土遺物 (18)

sshc40b



第143図 石器集中区14出土遺物 (19)

石器集中区15

[位置・出土状況] IV B 35・45グリッドに位置しており、7×4mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部付近に形成された標高約345.2mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] IV B 35グリッド南東部を中心に散漫的に分布しており、南北方向へ広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層上面(標高約345.1m)に出土ピークがある。最大で約25cmの高低差を有する。IIIb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は31点である。

石器組成は有舌尖頭器1点、二次加工を有する剥片2点、剥片24点、チップ4点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩からなる。

[出土遺物] 398は頁岩製有舌尖頭器。舌部は尖り逆三角形である。

上記の石器から3母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。

sh125：総点数8点、総重量63.2g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質はやや粗粒であり、ややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh127：総点数5点、総重量52.77g。剥片とチップで構成される非接合資料である。褐灰色を基調とし、黒褐色の点が入る。石質は緻密だが、ややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh144：総点数5点、総重量5.16g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

剥片には尖頭器製作に伴う調整剥片が認められる。本母岩は尖頭器製作後に本体を搬出している。

[備考] 上記のような有舌尖頭器を伴う石器組成が認められるのは本集中区のみである。ただし点数が少ないことから、その様相は判然としない。

石器集中区16

[位置・出土状況] IV B 28・29グリッドに位置しており、8×7.5mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部付近に形成された標高約344.7mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] IV B 28グリッドを中心に散漫的に分布しており、東西方向へ広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層上面(標高約344.6m)に出土ピークがある。最大で約40cmの高低差を有する。IIIb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は103点である。

石器組成はスクレイパー1点、楔形石器3点、二次加工を有する剥片5点、剥片42点、チップ50点、礫片2点からなる。

石器材料組成は頁岩と珪質頁岩を主体に、赤色頁岩、瑪瑙からなる。

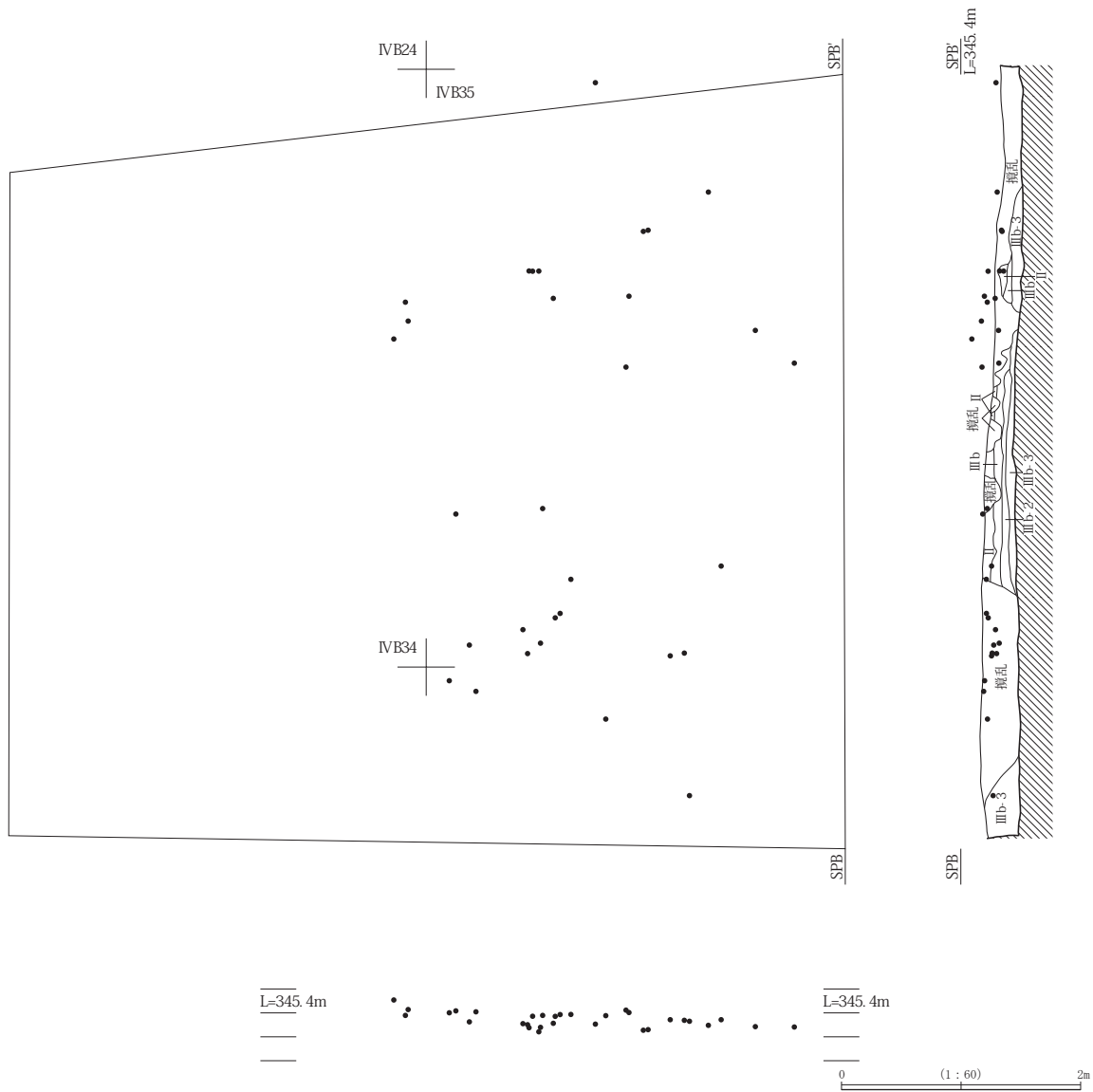
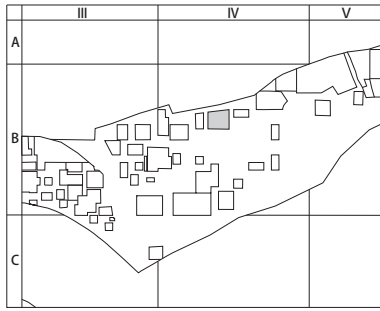
[出土遺物] 399は頁岩製スクレイパー。剥片が欠損した後に、欠損部分と縁辺部に加工を施している。

上記の石器から6母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。5母岩は本集中区に主体をなしているが、残り1母岩は集中区17に主体をなすsh28である。

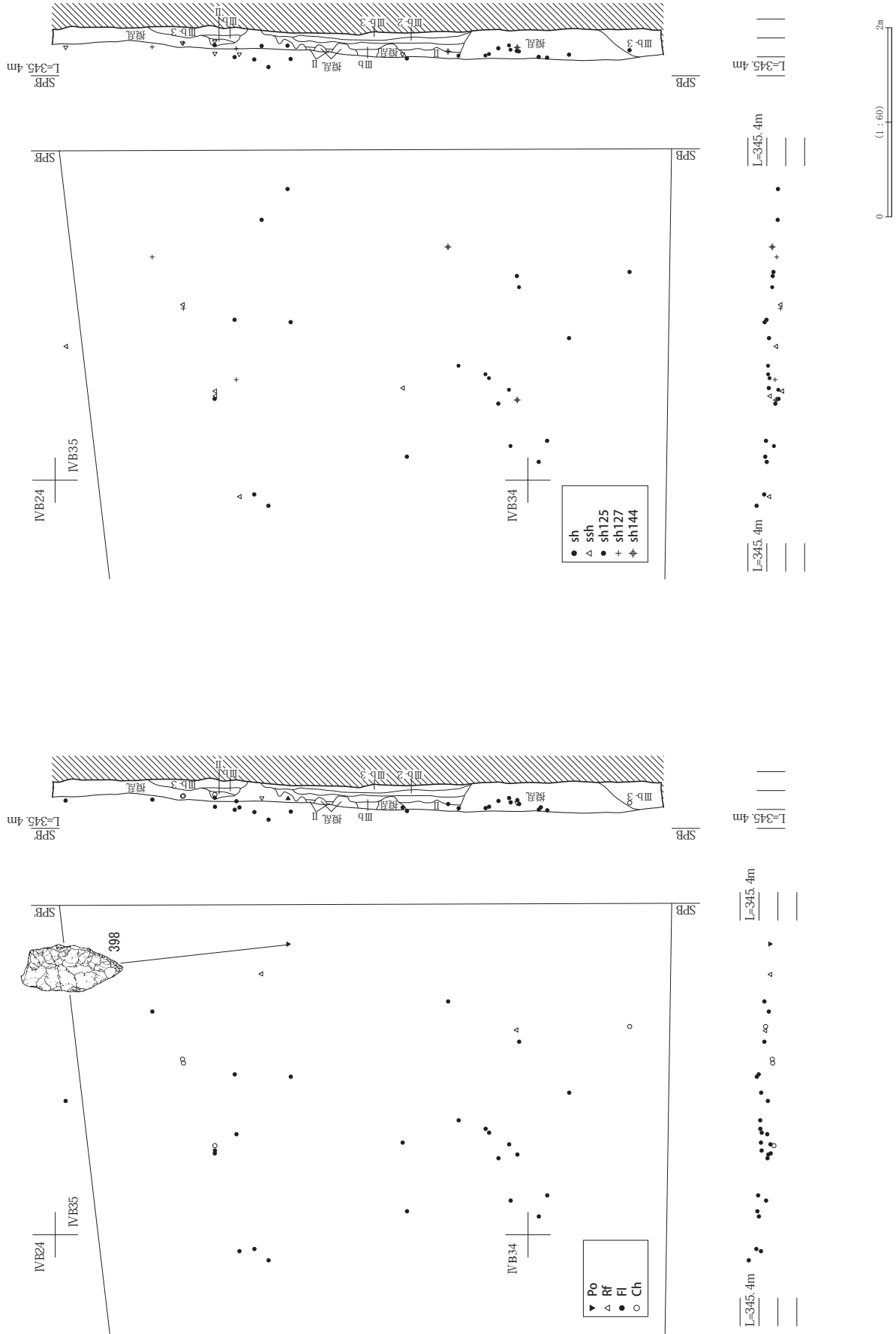
sh146：総点数2点、総重量3.04g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

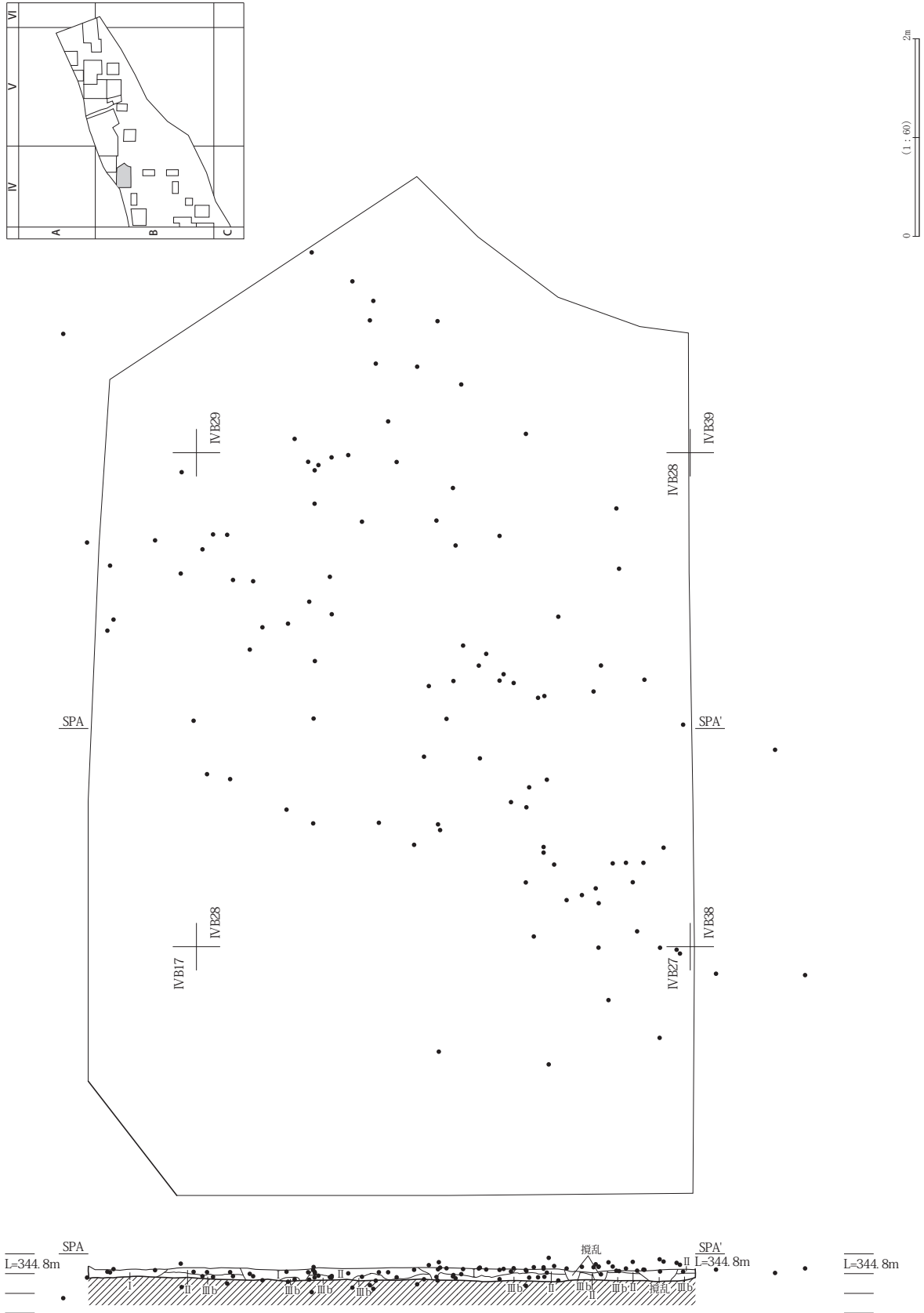
sh149：総点数2点、総重量19.21g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白を基調とし、



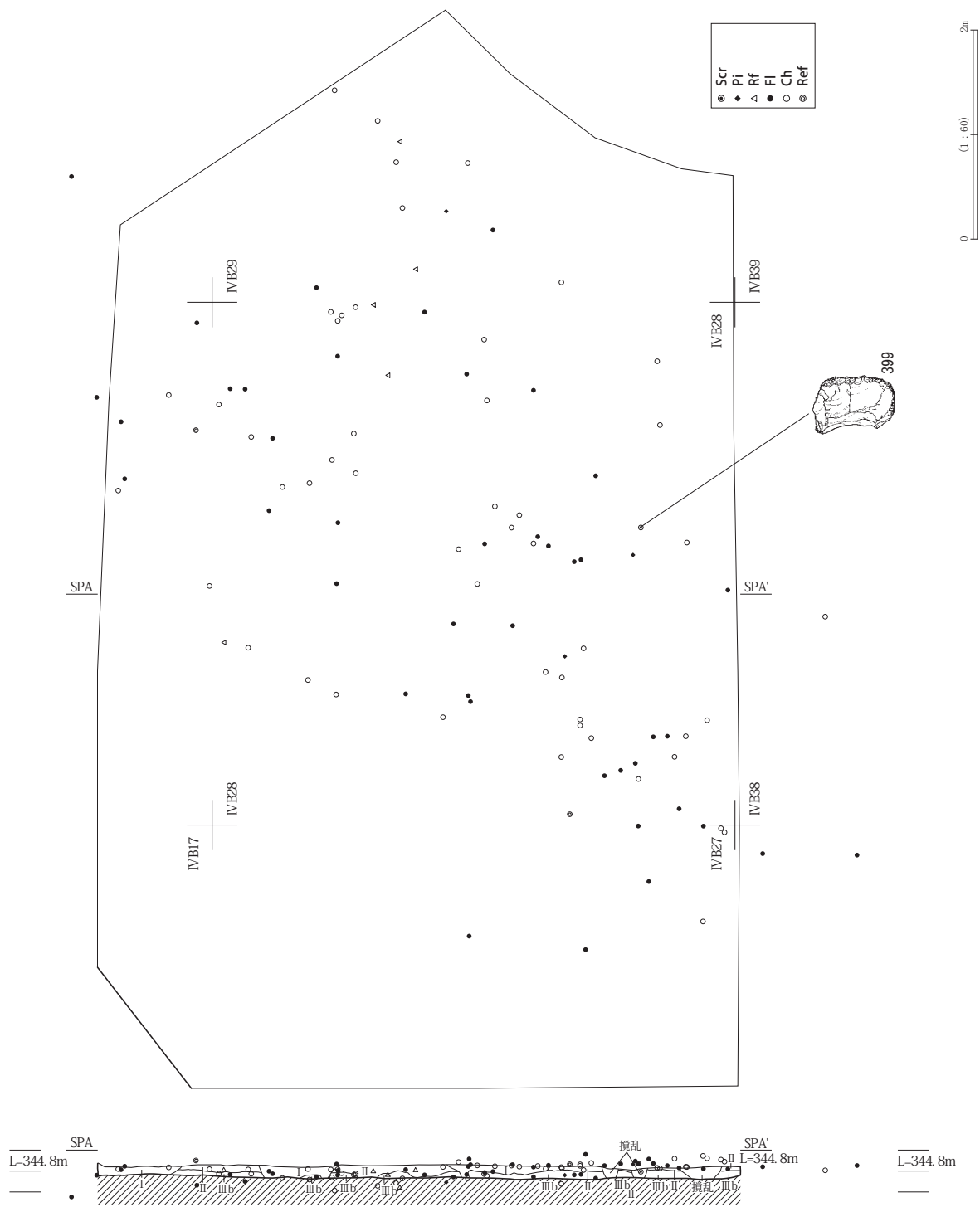
第144図 石器集中区15石器出土状況図



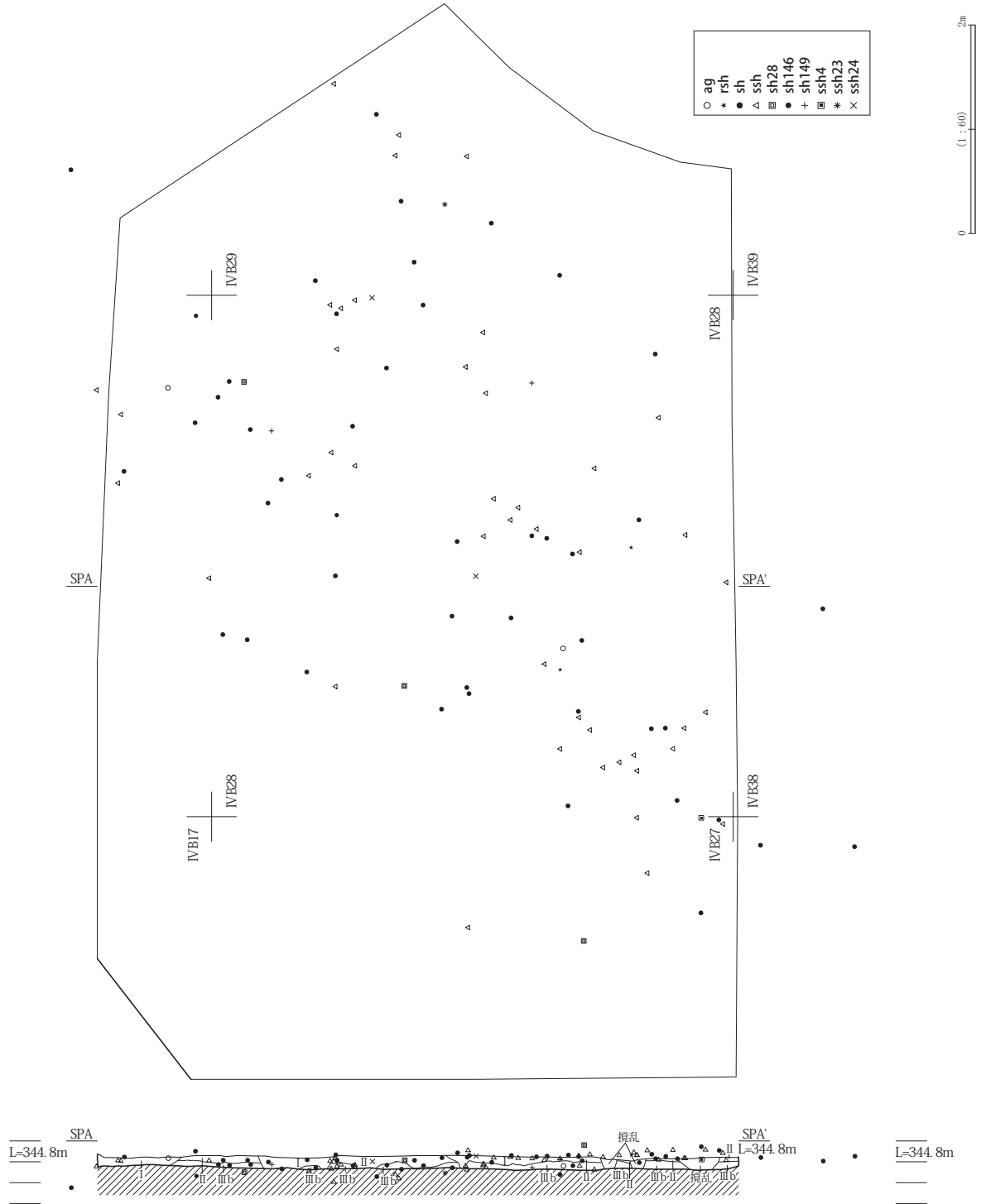
第145図 石器集中区15器種・母岩別出土状況図



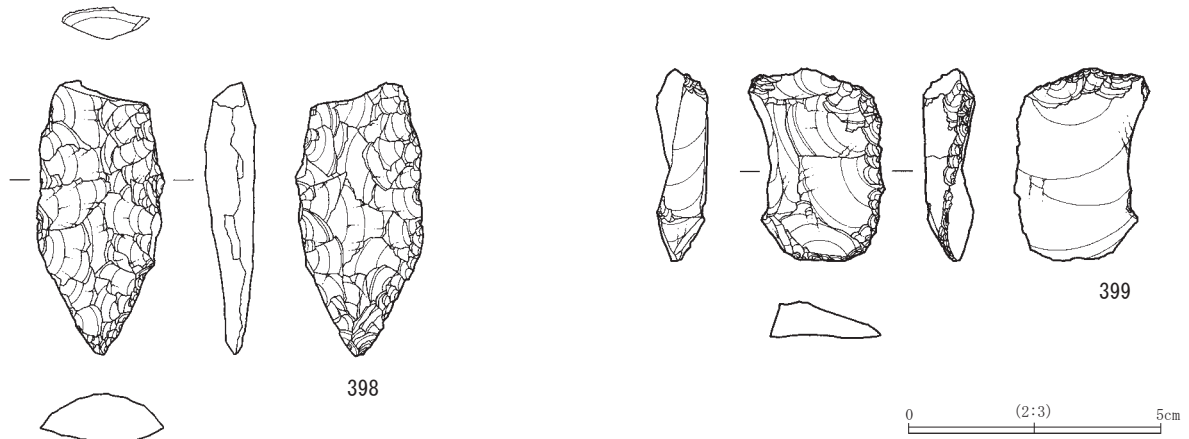
第146図 石器集中区16石器出土状況図



第147図 石器集中区16器種別出土状況図



第148図 石器集中区16母岩別出土状況図



第149図 石器集中区16出土遺物

礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が線状に入っている。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh4：総点数2点、総重量2.9g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面付近は灰黄褐が層状に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh23：総点数2点、総重量3.09g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、オリーブ褐色の縞が入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh24：総点数2点、総重量1.43g。楔形石器とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 本集中区の様相は石器組成から判断できないことから判然としない。ただし、形成時期からは本遺跡の中でも新しい時期に位置付けられる。

石器集中区17

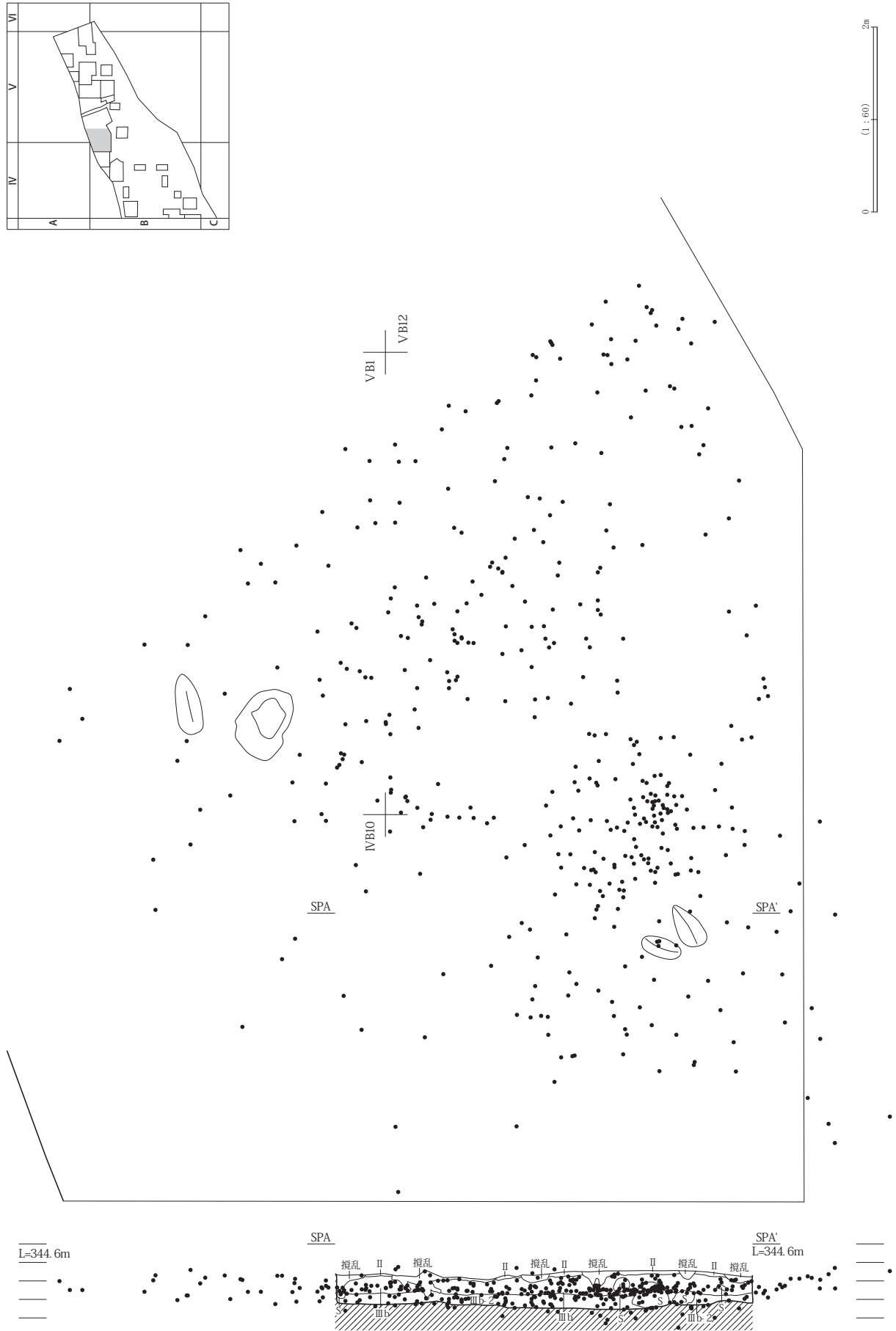
[位置・出土状況] IV B10・20、V B1・11・12グリッドに位置しており、9.5×8.5mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部付近に形成された標高約344.4mの自然堤防上で検出している。本来であれば石器集中区18と重複していたと考えられるが、県教委の試掘によって削平されていたため、その関係については把握できていない。

[分布状況] IV B20グリッドとV B11グリッドの境を中心に分布しており、北東方向へ広がる。集中区には2箇所のみまとまりが認められ、それらの間に若干の無遺物空間を挟む。

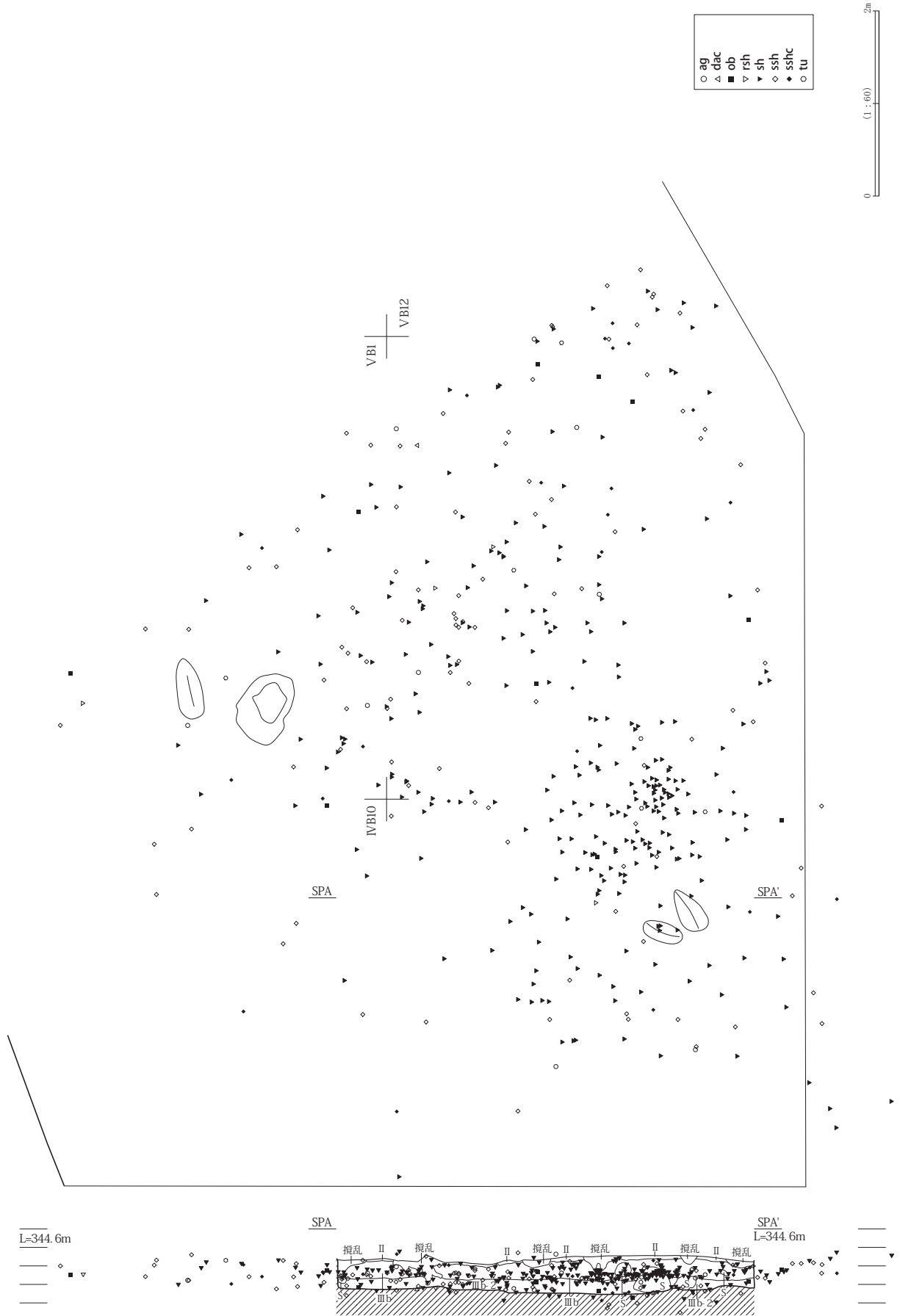
[出土層位] II層からIIIb-2層で出土しており、IIIb-2層上面(標高約344.1m)に出土ピークがある。最大で約65cmの高低差を有する。調査時にはIIIb層として取り上げていものが多いが、断面図に投影させた結果から層界に堆積していることが捉えられる。このことからIIIb-2層上面に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は433点である。

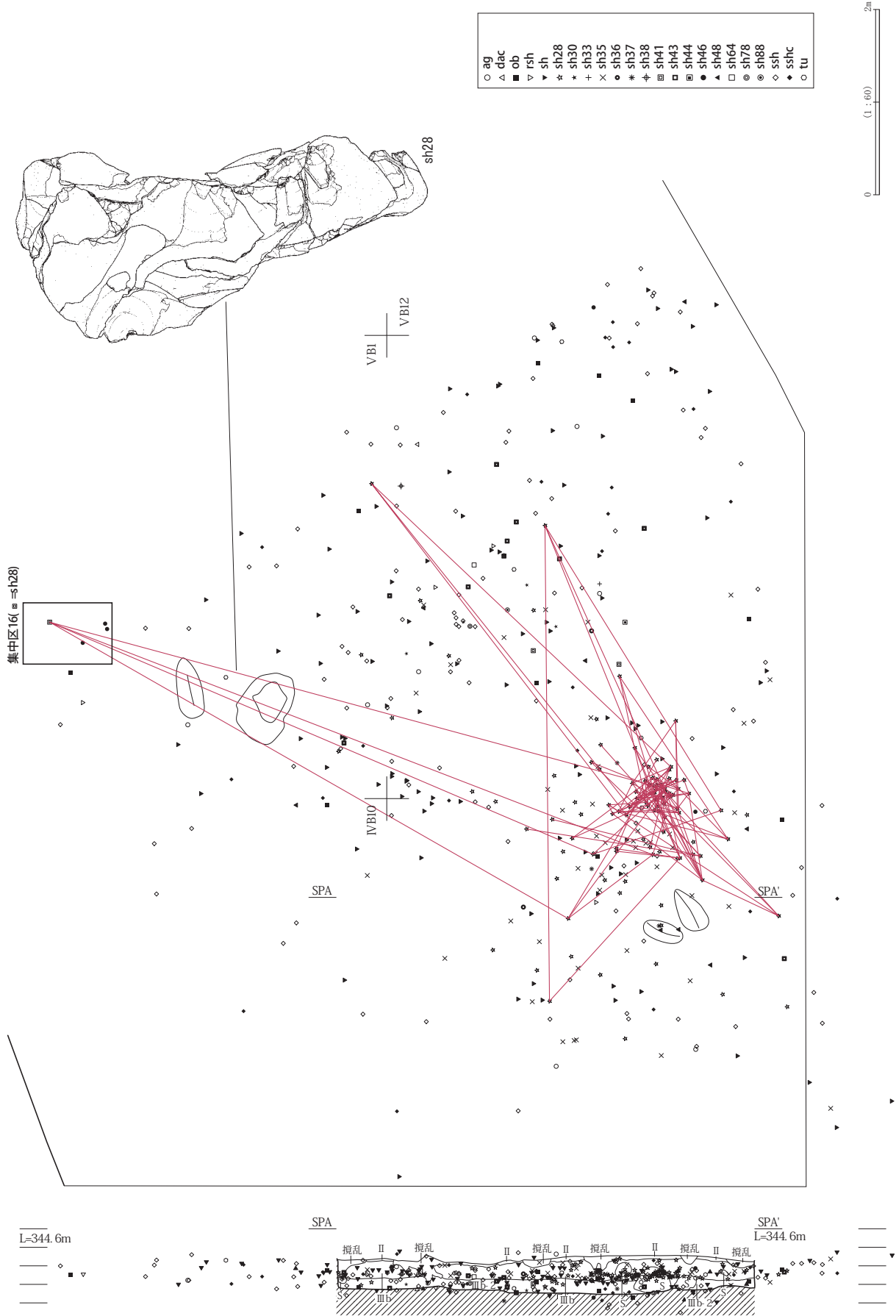
石器組成は尖頭器1点、彫刻刀形石器11点、スクレイパー11点、両面調整石器2点、楔形石器1点、二次加工を有する剥片21点、石刃17点、剥片263点、チップ91点、削片2点、石核6点、敲石3点、



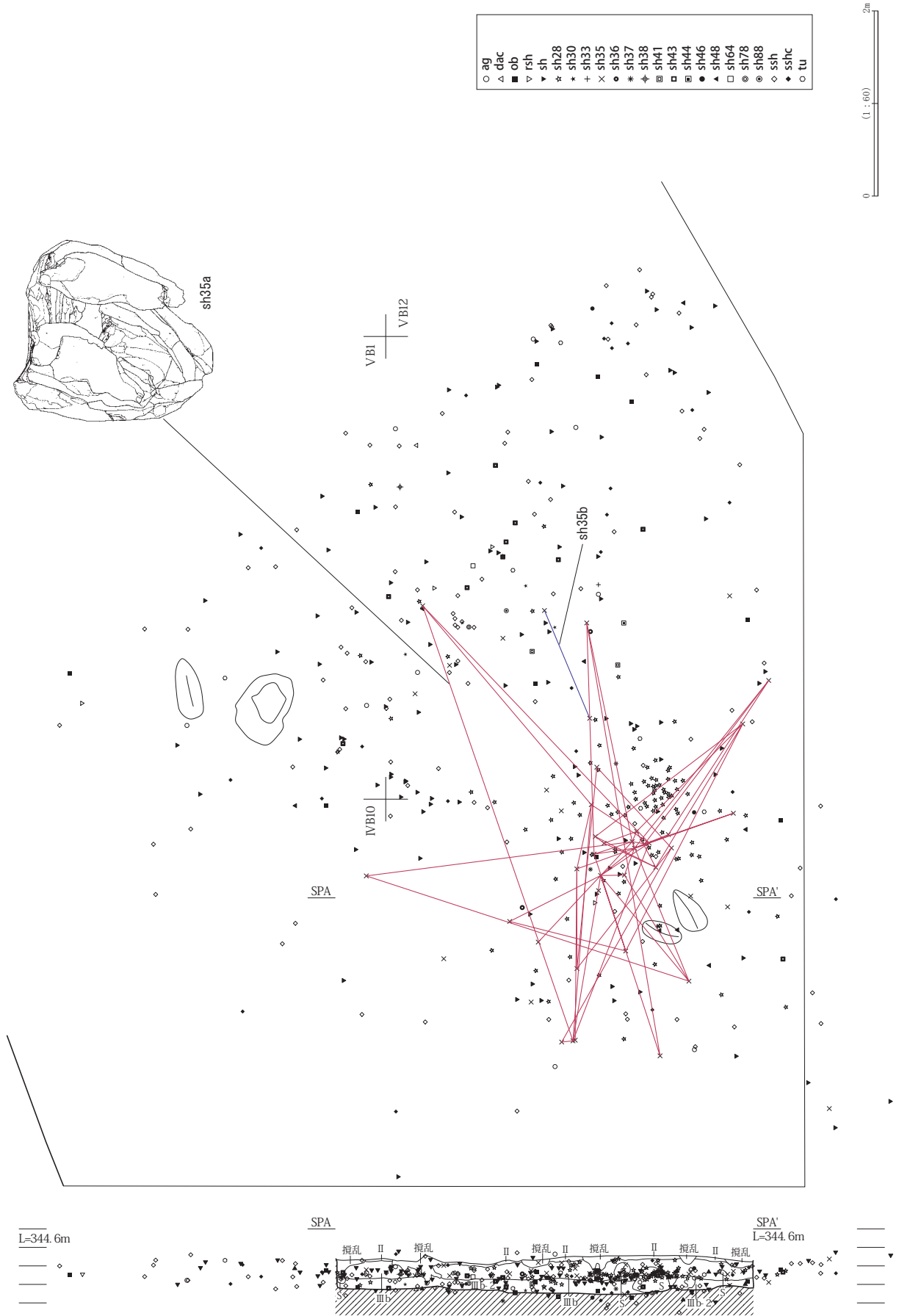
第150図 石器集中区17石器出土状況図



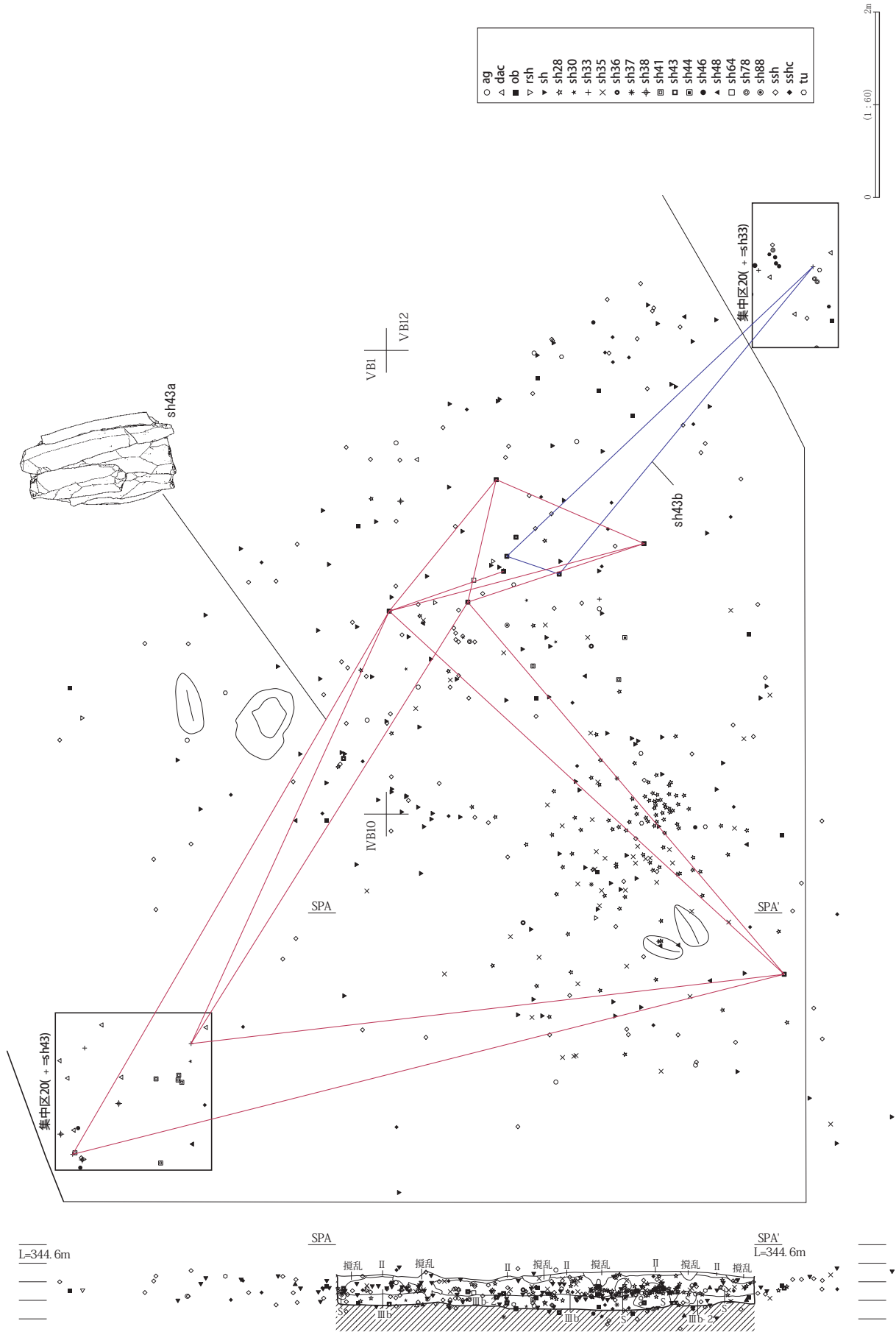
第152図 石器集中区17母岩別出土状況図 (1)



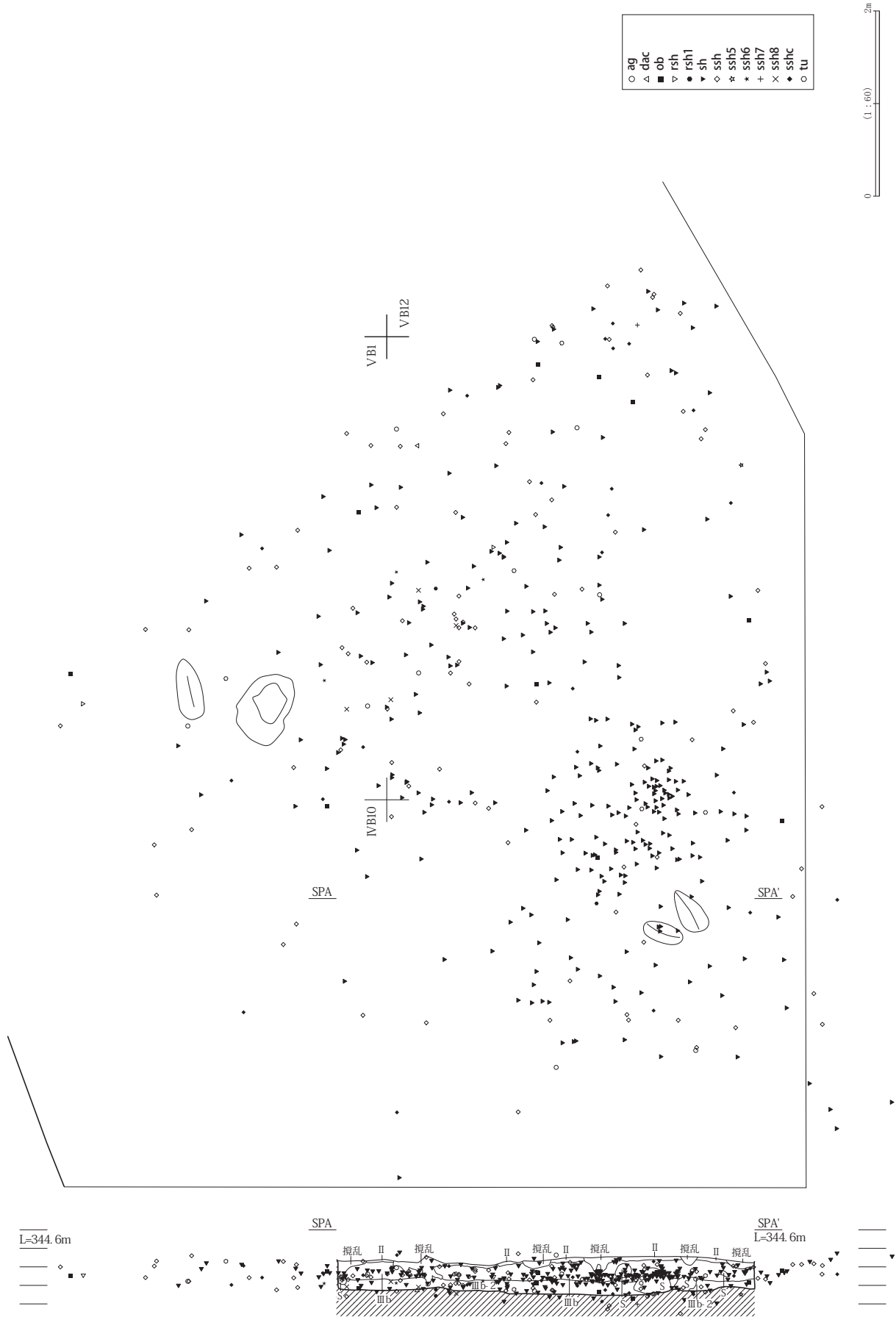
第153図 石器集中区17母岩別出土状況図 (2-1)



第154図 石器集中区17母岩別出土状況図 (2-2)



第155図 石器集中区17母岩別出土状況図 (2-3)



第156図 石器集中区17母岩別出土状況図 (3)

礫 1 点、礫片 3 点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、凝灰岩、黒曜石、瑪瑙、デイスaitからなる。

[出土遺物] 400は尖頭器。先端付近と右側縁裏面側に細かな加工を施している。腹面剥離方向から素材は縦長剥片の可能性ある。401～407・480・506は彫刻刀形石器。これらの中の402と403、506以外は、腹面に調整が施され、左肩に彫刻刀面を作出している神山型である。これらは石刃や縦長剥片を素材としている。基部側は欠損しているものが多いものの、残存している基部は素材を大きく切断するような加工が認められず素材形状を概ね残している。彫刻刀面は左肩に複数面以上を作出しており、使用頻度の高さが窺える。また、402や403のように彫刻刀面作出後に二次加工を施しているものも認められる。408・409は両面調整石器。410～418・512・513はスクレイパー。基本的に石刃や縦長剥片の縁辺部か末端部に加工を施している。410は左側縁に認められる剥離が彫刻刀面のようにも見受けられるが、その他の加工とは区別できないことからスクレイパーと捉えている。ただし、基部加工が認められた上に402と類似した形態であることから、彫刻刀形石器から転用されたとも考えられる。418・419は彫刻刀形石器の削片。どちらの背面にも彫刻刀面が認められる。421～423は敲石。石器材料は400～405・412・413・415～417は頁岩、402・406～411・414・419・420珪質頁岩、421～423は凝灰岩である。

上記の石器から20母岩を確認できており、各母岩の概要を以下にまとめていく。このうち8母岩は本集中区に主体が認められ、それ以外は主に集中区20に跨っている。

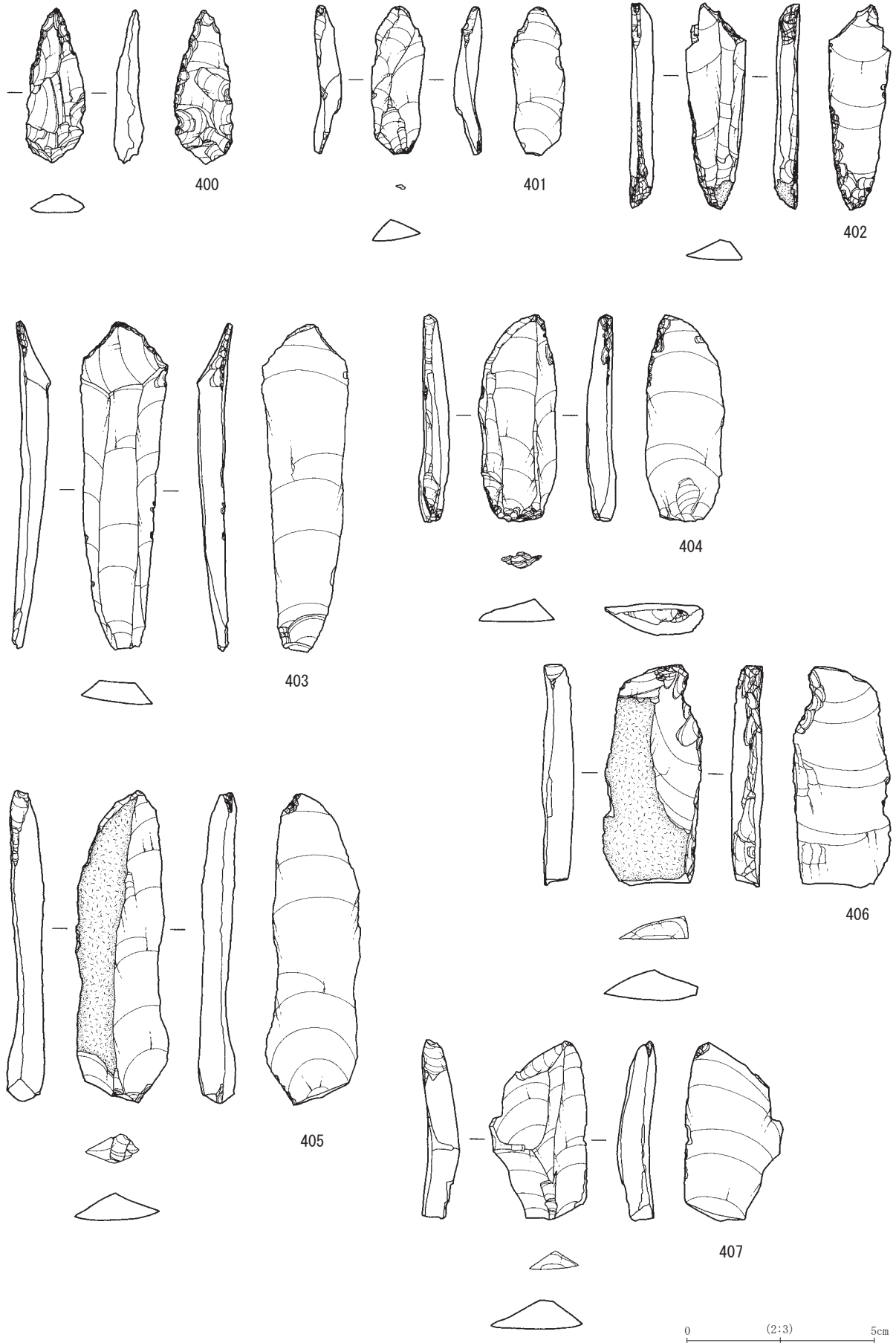
sh28：総点数112点、総重量3699.31g。彫刻刀形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は暗黄灰色が層状に入る。礫面は黄灰～褐色を呈する。石質はやや粗粒でややざらつく。摂理が線状に発達している。

接合個体は点数が65点、上記のスクレイパー以外の器種からなる。個体の剥離工程は、424→427→426→425→431→①・②・③ ①430→433→⑤429→(434a+b)→435→428→436⑥→461②441→442→(456+457)→455→458・⑥→461→463→464→465→467→462→468→459→460→(469+470)→466→(471a+b)→<<479→481→482→483→484>><<474→476>><477→475→(472a+b)・480→473・478>> ③<439><432>→⑦・⑧ ⑦437→440→438→⑤429 ⑧443→<444→445><447→448→446→451→449→450>→452→454→453⑥→461である(<○><<○>>や・の前後関係は不明)。本個体は礫面除去・石核整形から石刃剥離の過程に伴う資料である。まず正面図や右側面の上半部を中心に礫面除去を行う。上設打面が設定され作業面稜調整を施した後、大型石刃や剥片を連続的に剥離している。停止すると打面再生を介在させながら、石刃を上設打面から剥離している。この打面再生により作業面高は大幅に縮小され、剥離当初に比べ石刃の規模は半分近くになる。この工程を複数回繰り返された後に、石核は遺跡外へと搬出している。また、正面末端部において分割するように厚手の剥片を剥離しており、それを石核(484)に用いている。しかし、それからは意図とした剥離ができずに廃棄される。この接合個体から剥離された中～大型石刃は彫刻刀形石器(480)やスクレイパー(418)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。

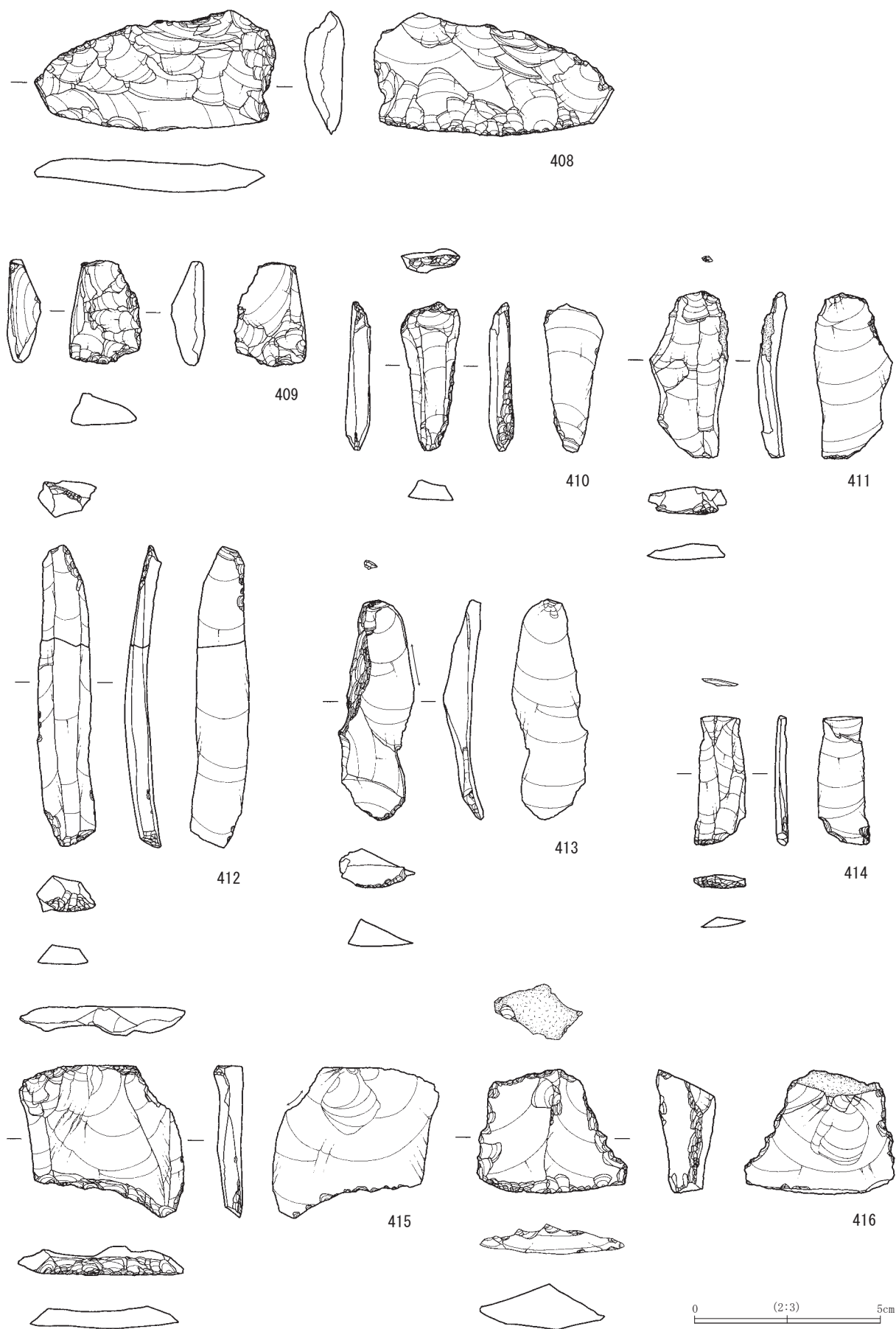
本母岩は大型の垂角礫を素材としており、原石で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh30：総点数7点、総重量58.91g。石刃と剥片で構成される資料である。剥離面は浅黄色を基調とし、灰黄色や黄灰色が点・層状に入る。石質は緻密だが、ややざらつく。摂理が線状に発達している。

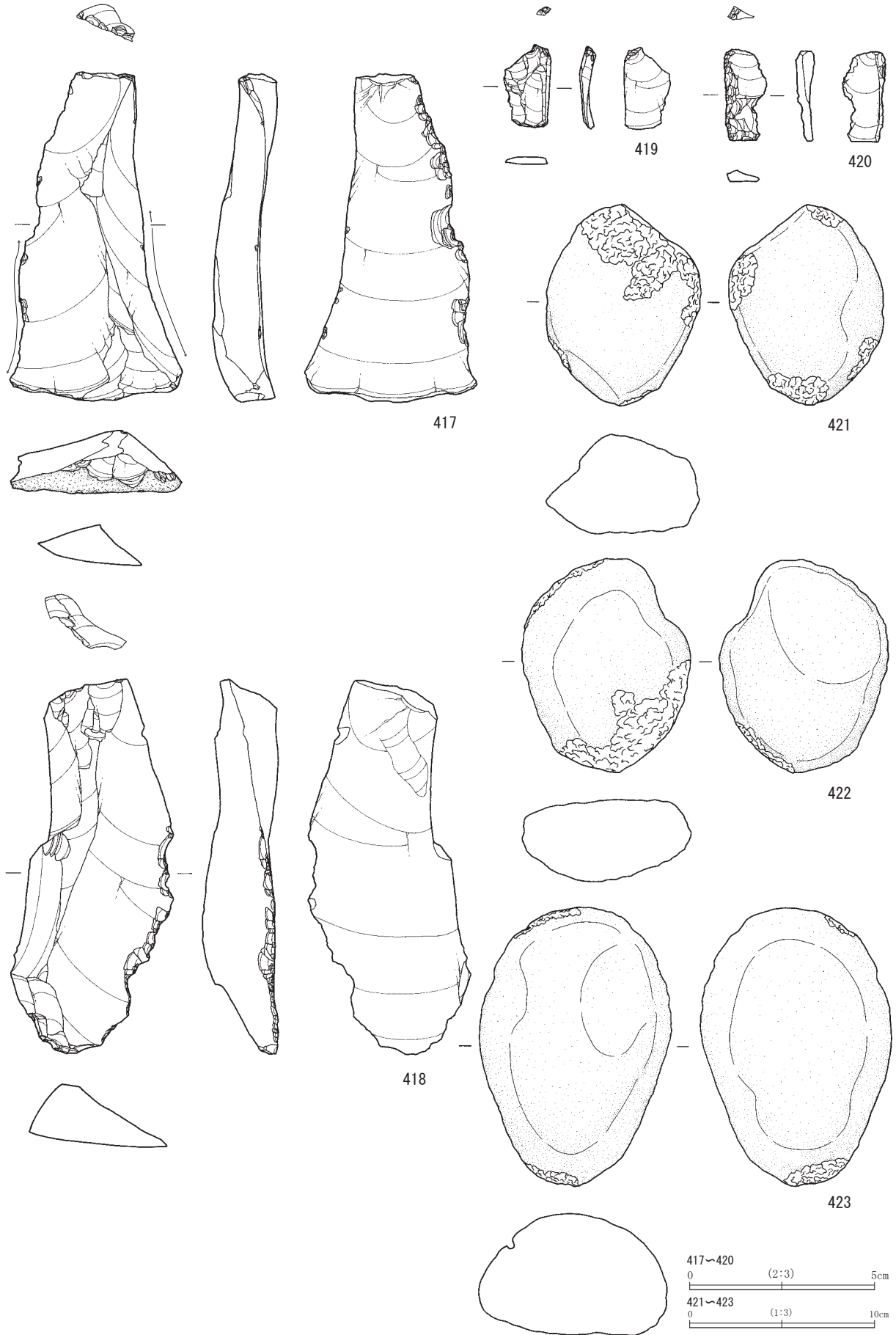
接合点数は3点あり、上記の器種で構成される。石刃剥離の過程に伴う資料であり、作業面稜調整剥片から目的剥片である石刃を連続的に剥離している。



第157図 石器集中区17出土遺物 (1)

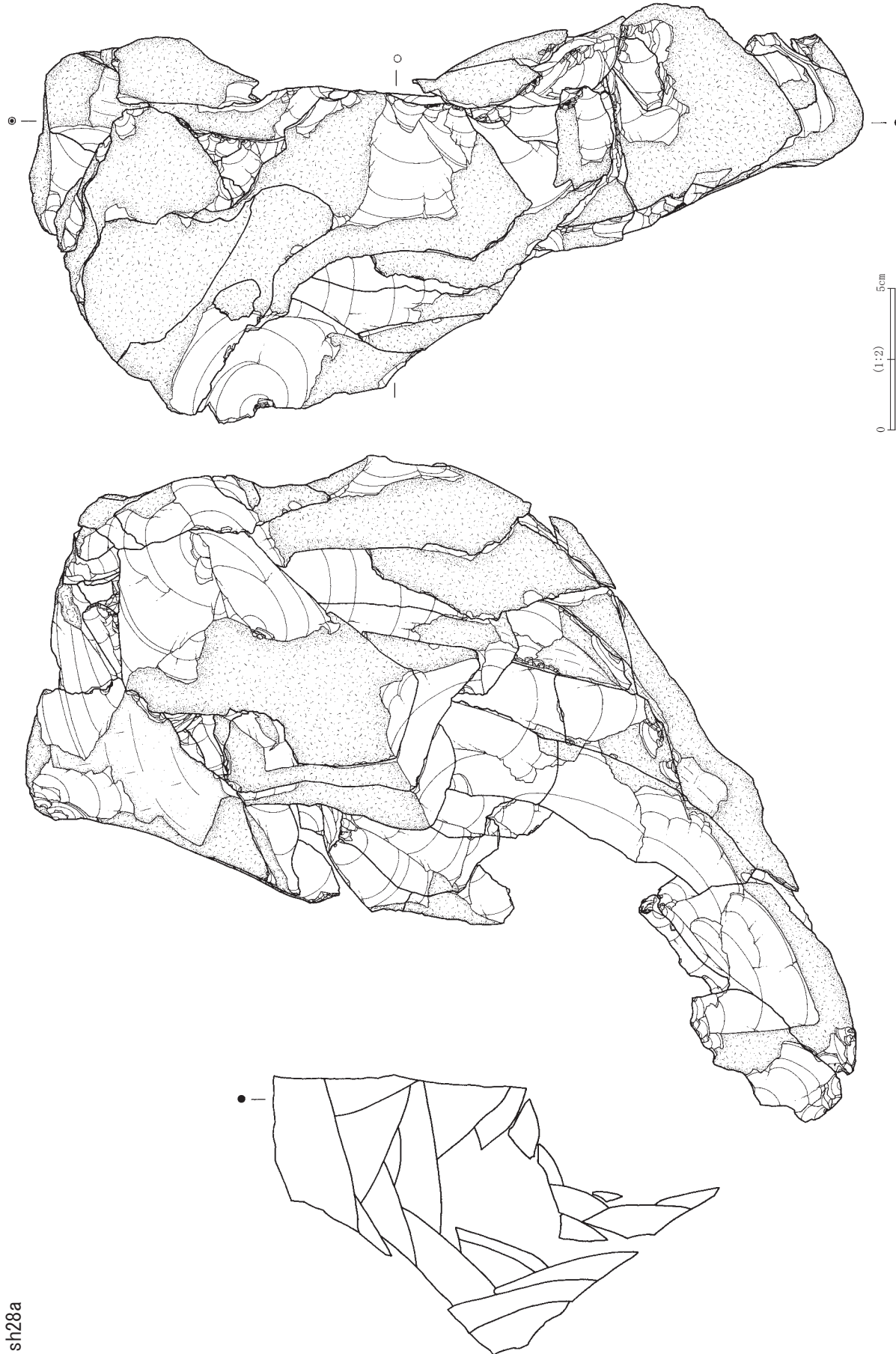


第158図 石器集中区17出土遺物 (2)



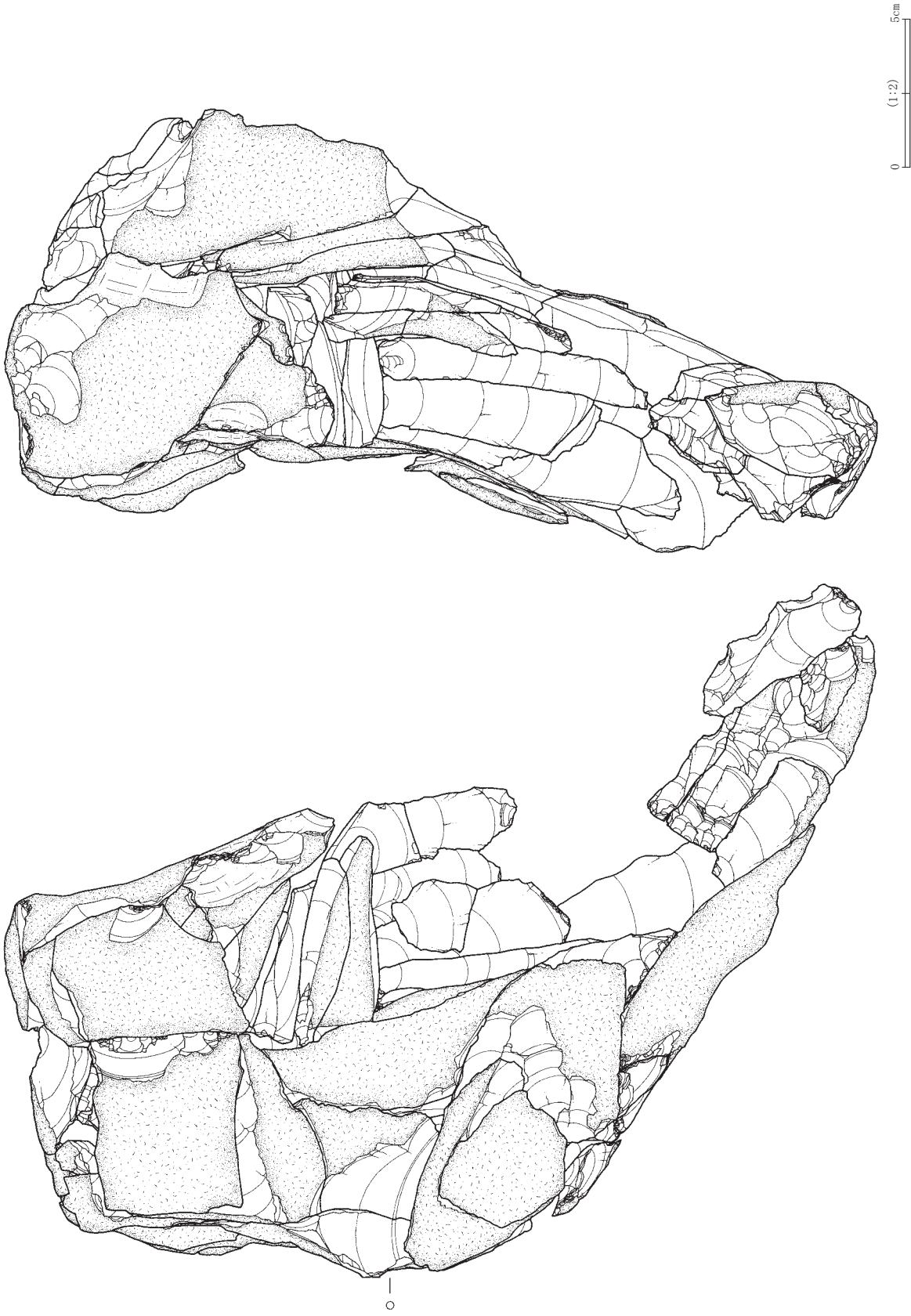
第159図 石器集中区17出土遺物 (3)

sh28a



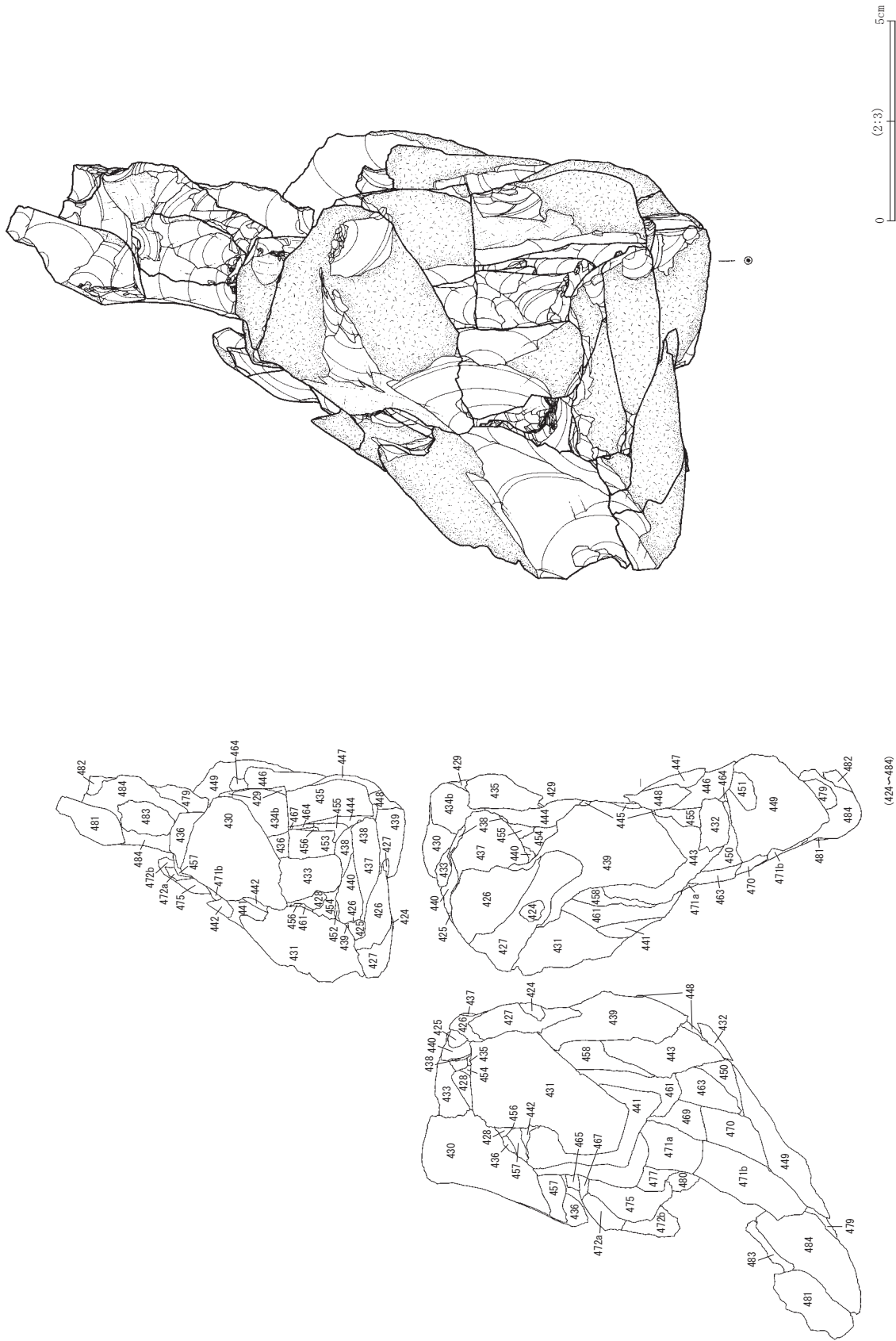
第160図 石器集中区17出土遺物 (4)

(sh28a)



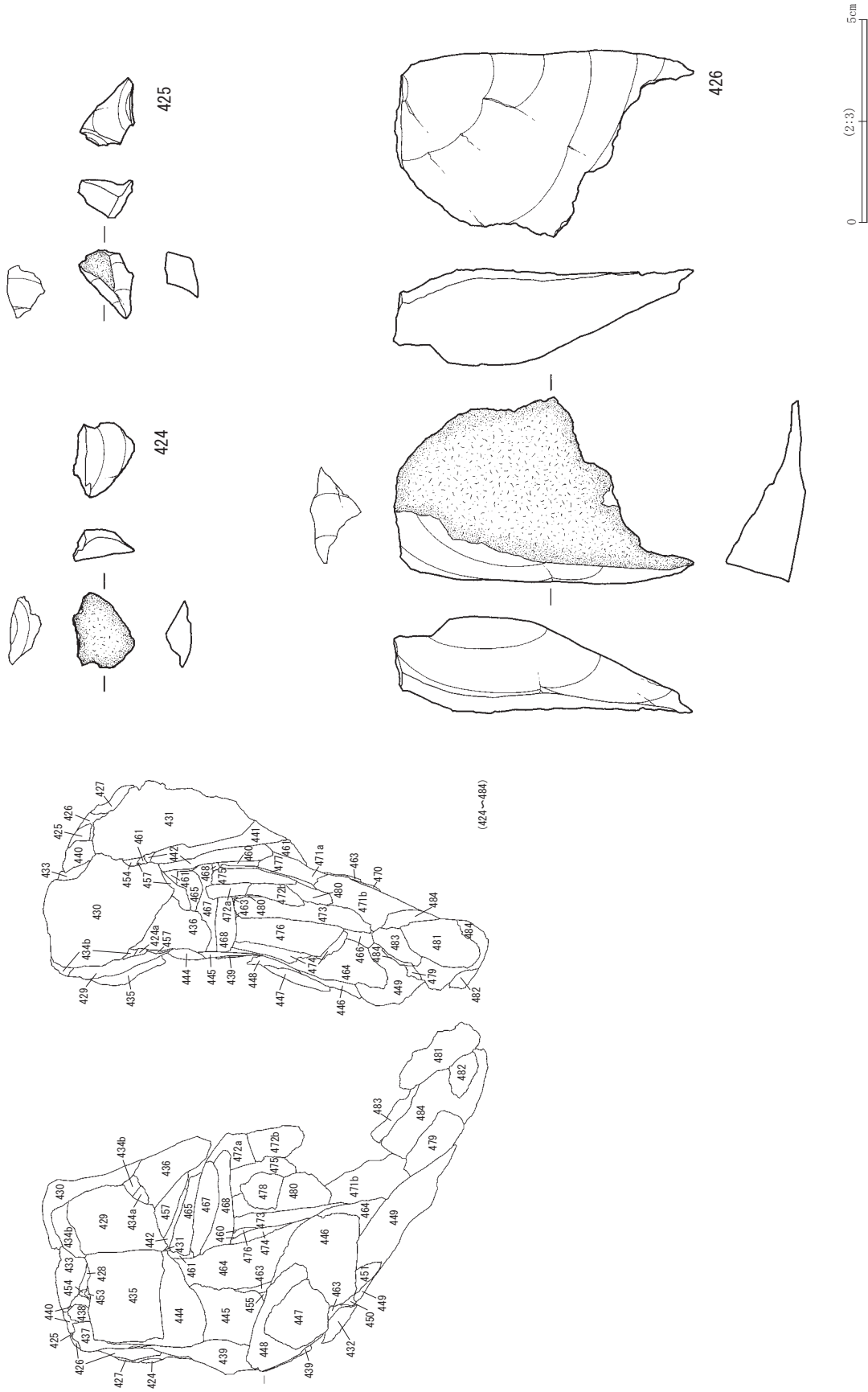
第161図 石器集中区17出土遺物 (5)

(sh28a)

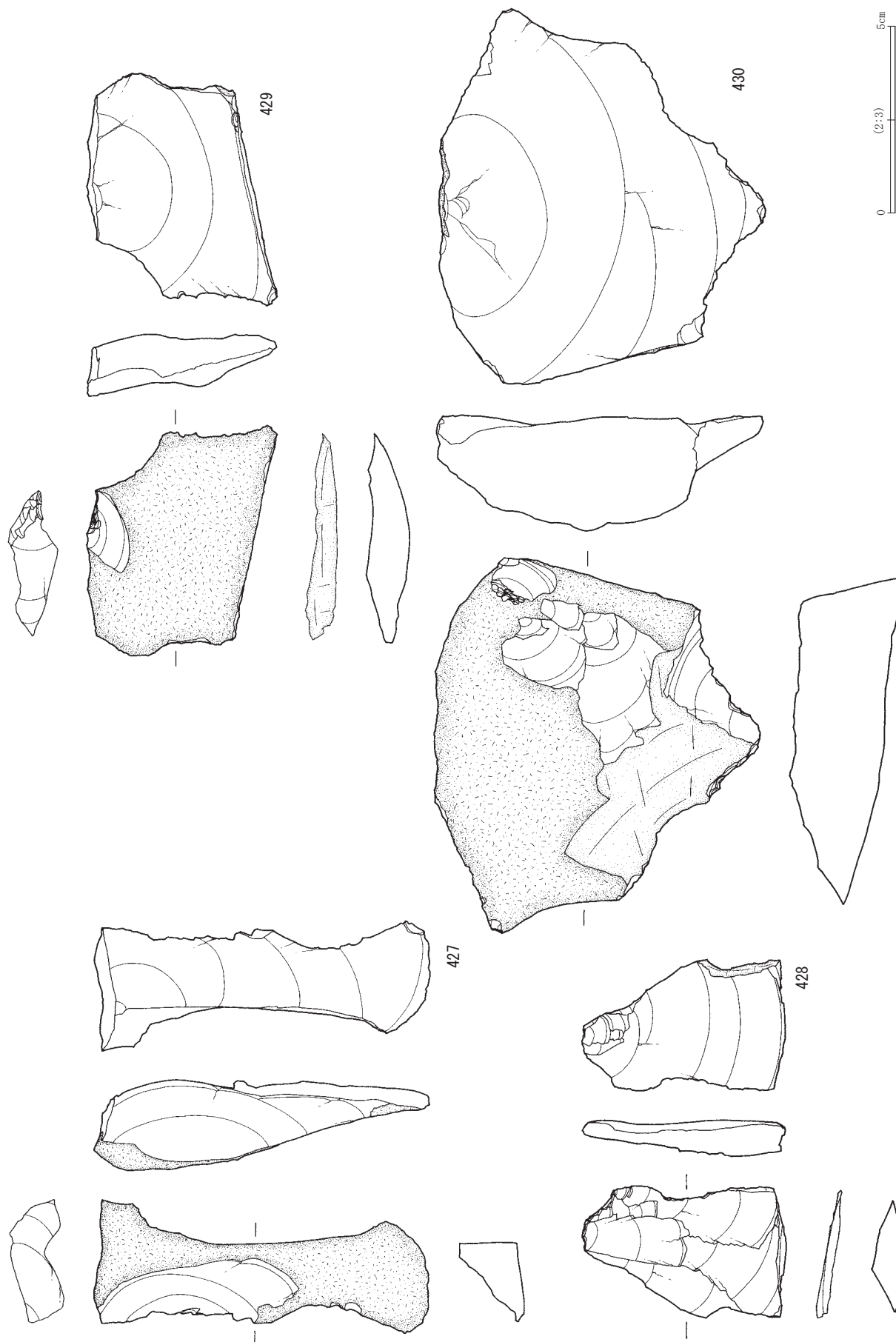


第162図 石器集中区17出土遺物 (6)

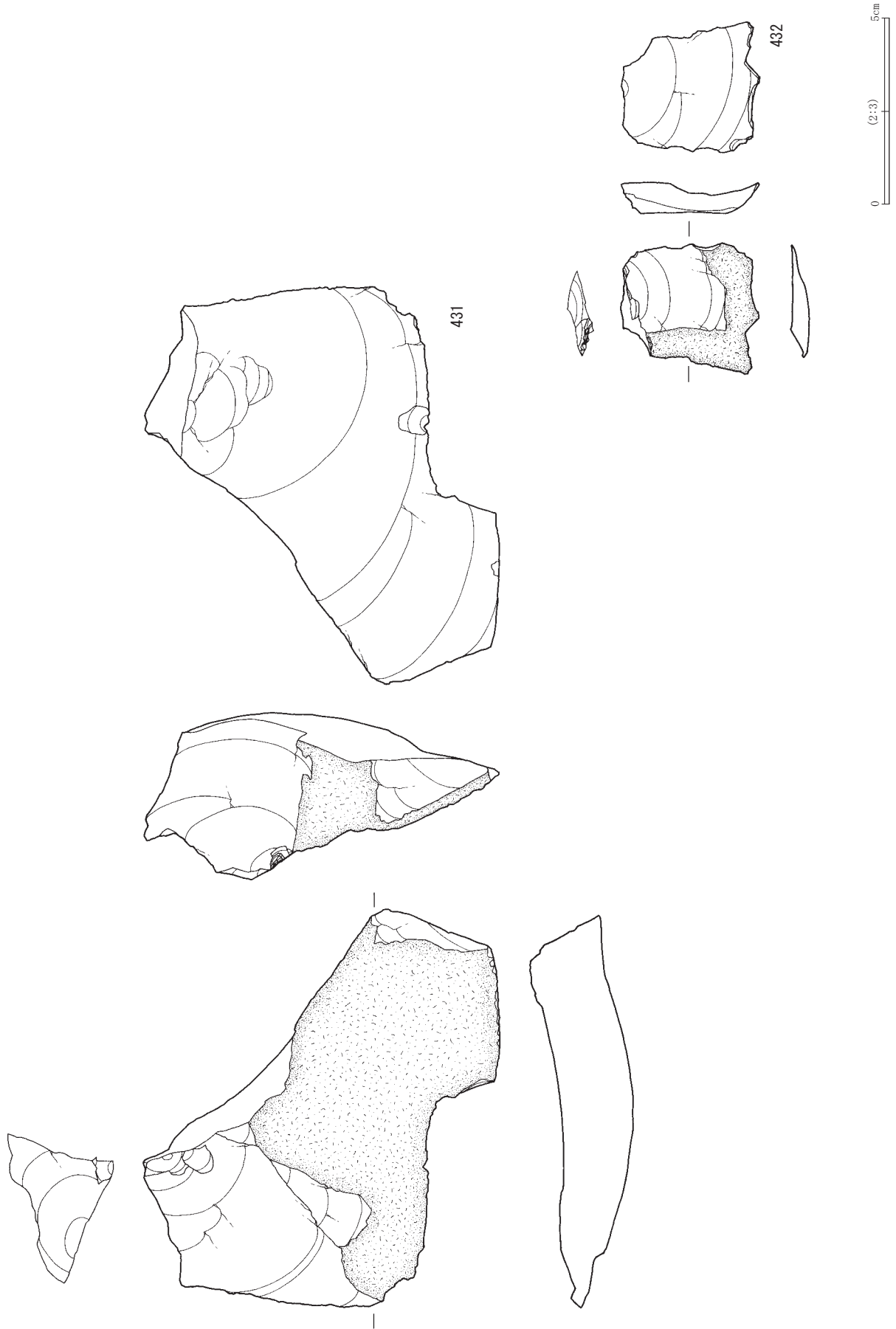
(sh28a)



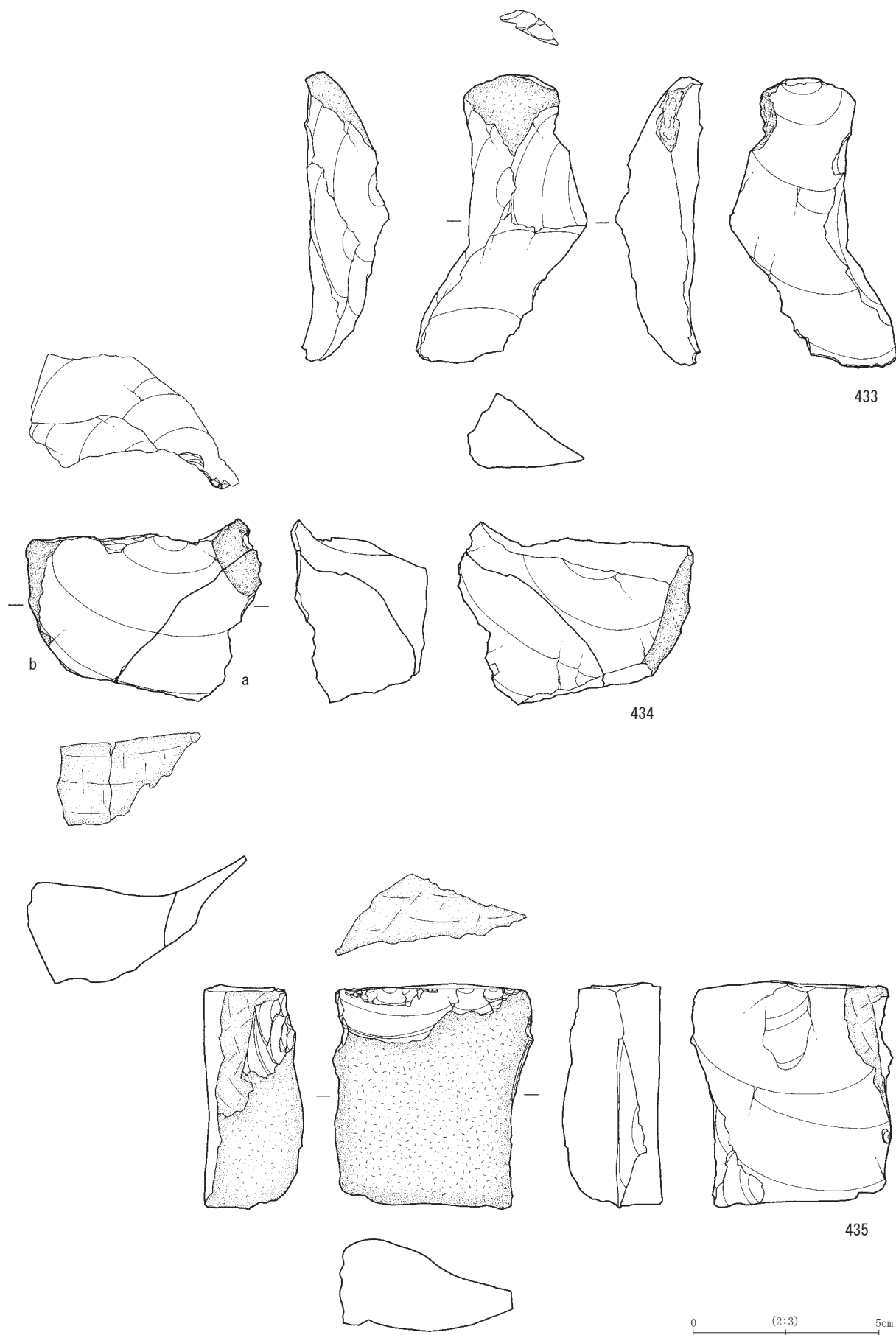
第163図 石器集中区17出土遺物 (7)



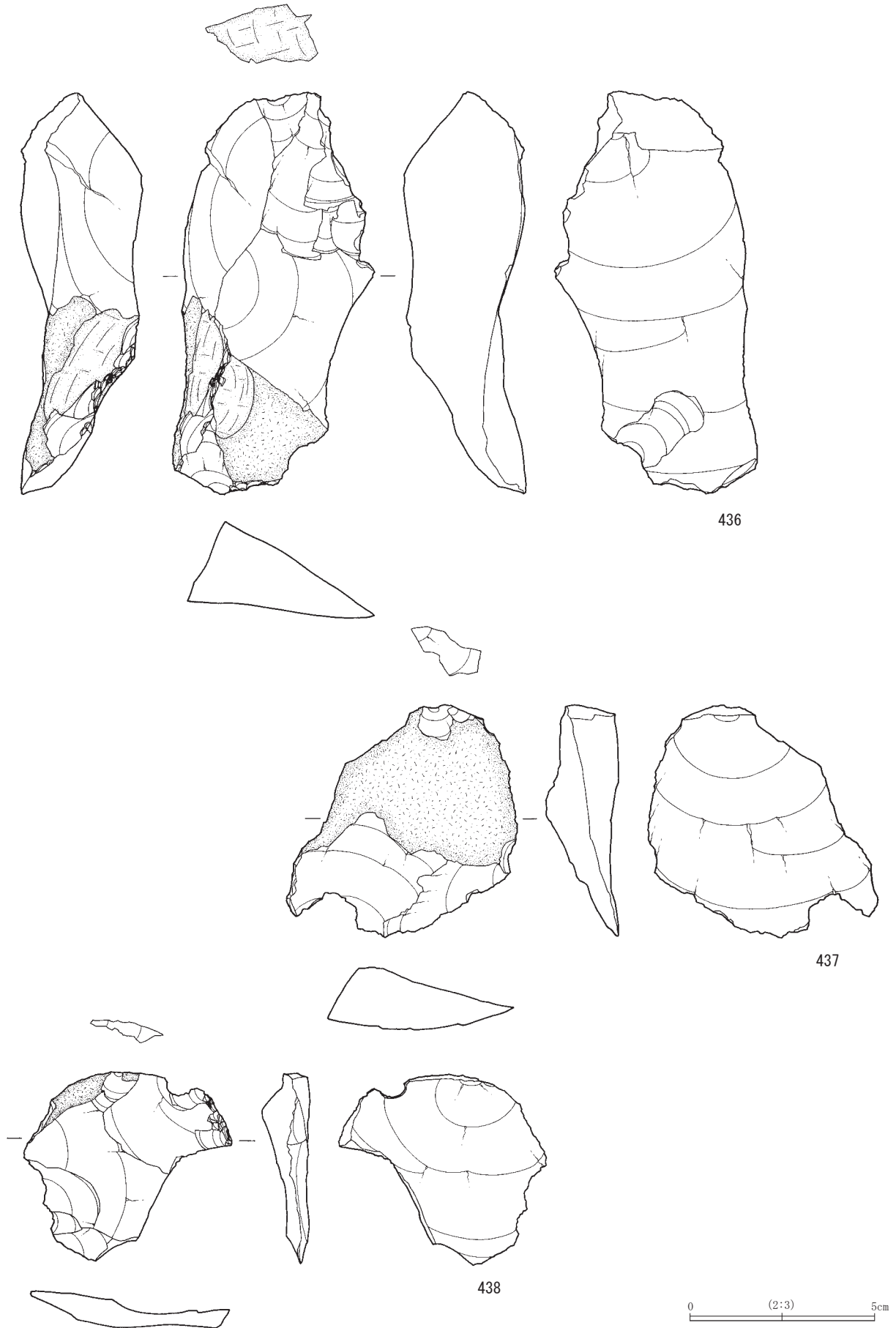
第164図 石器集中区17出土遺物 (8)



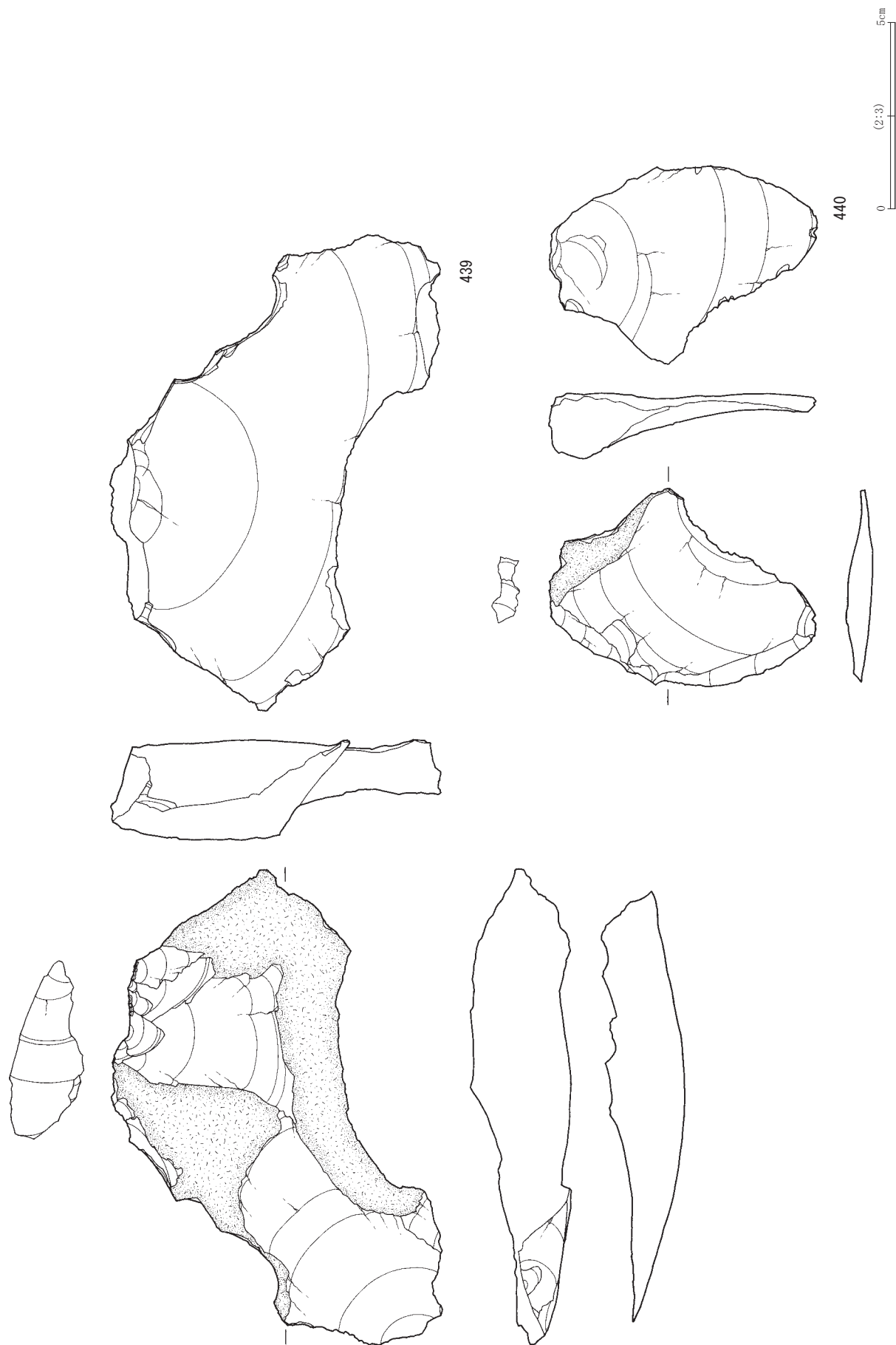
第165図 石器集中区17出土遺物 (9)



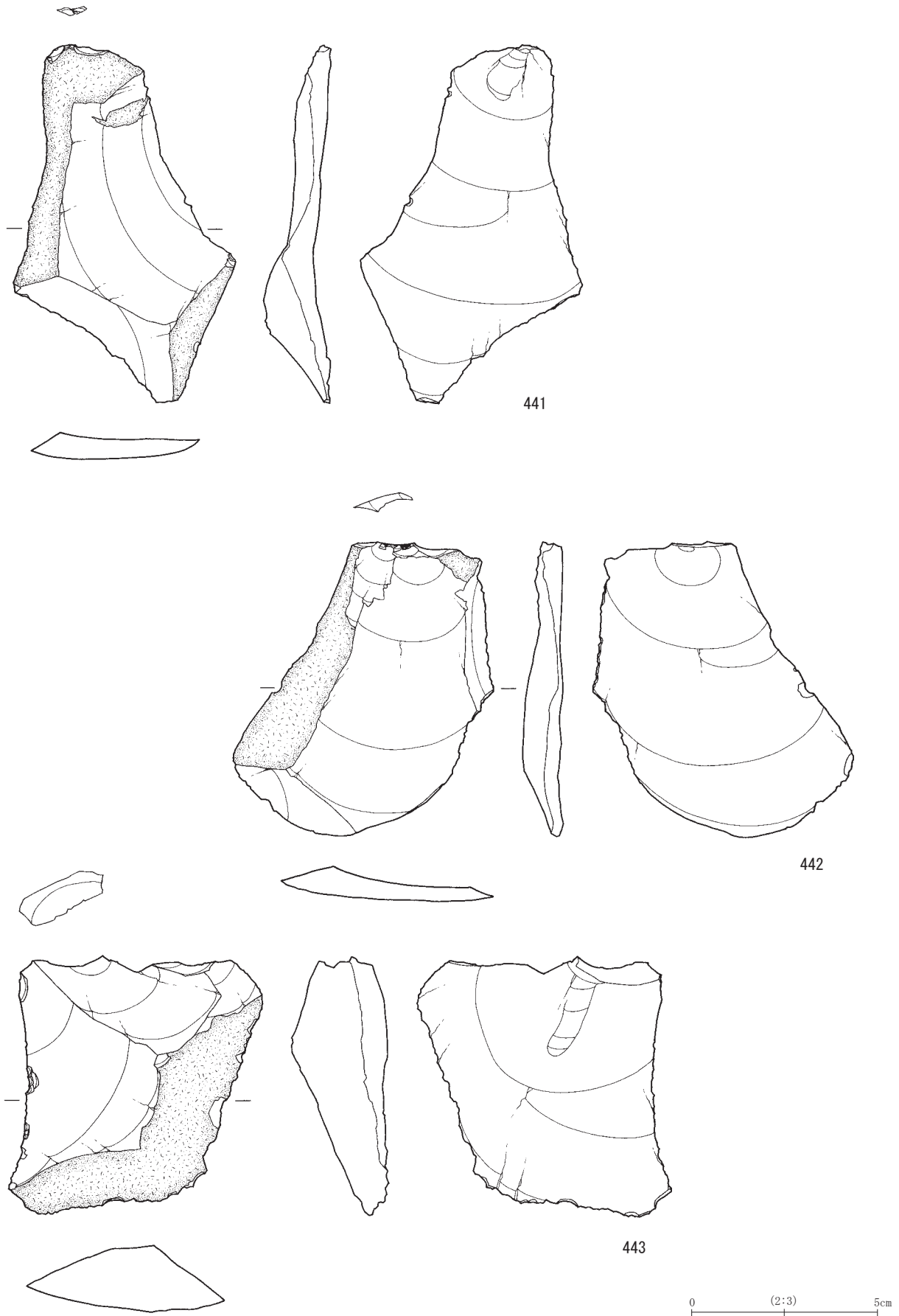
第166図 石器集中区17出土遺物 (10)



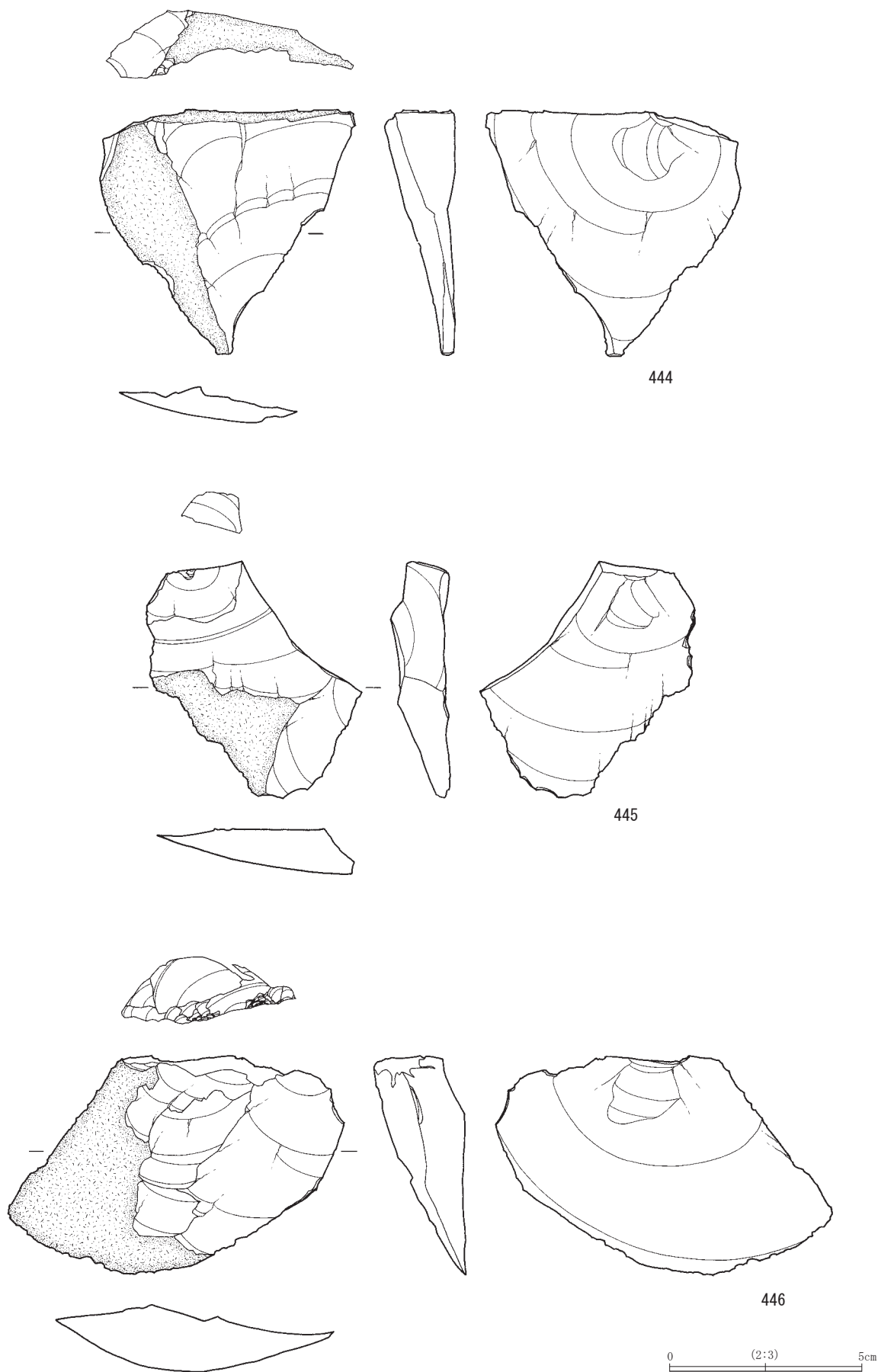
第167図 石器集中区17出土遺物 (11)



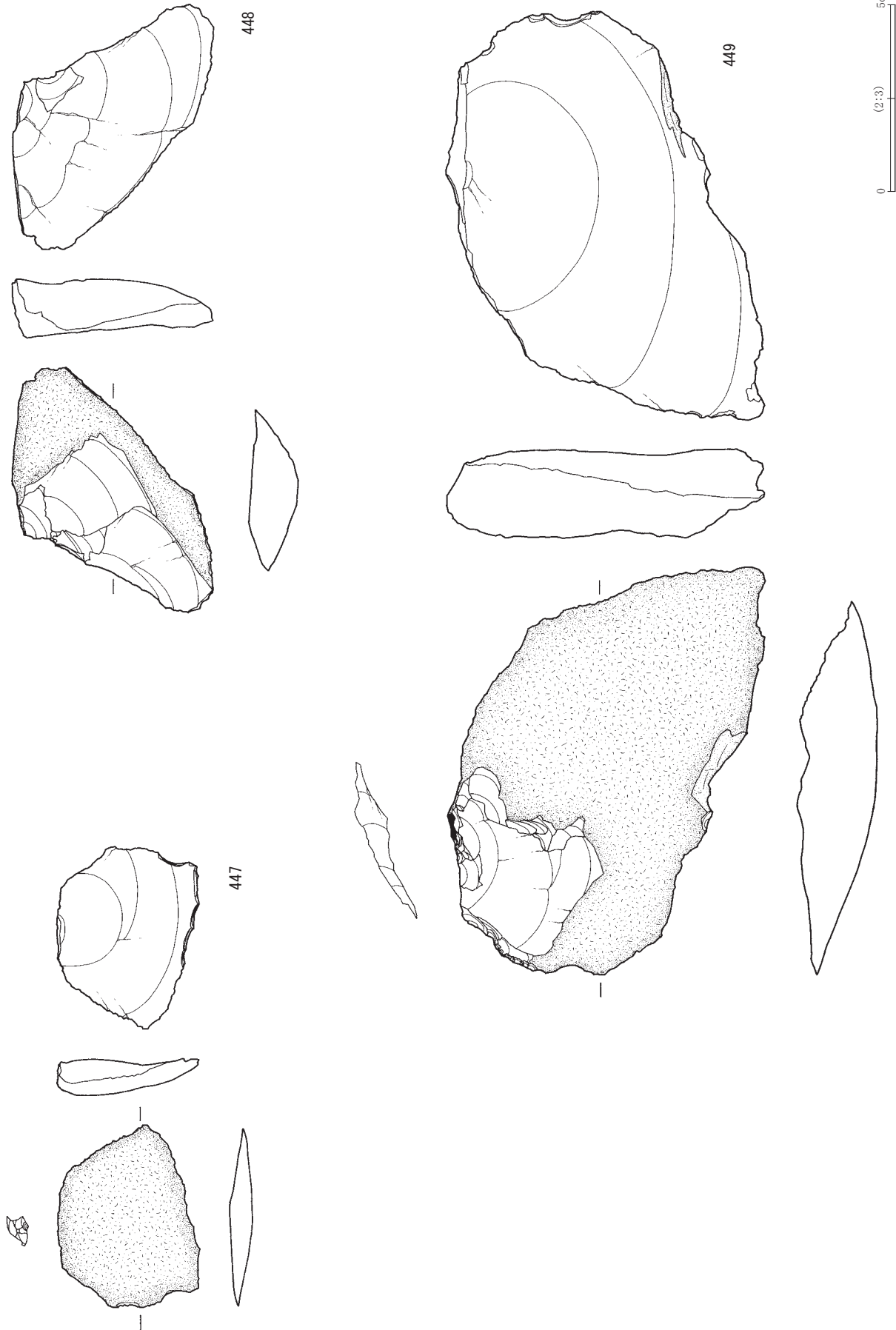
第168図 石器集中区17出土遺物 (12)



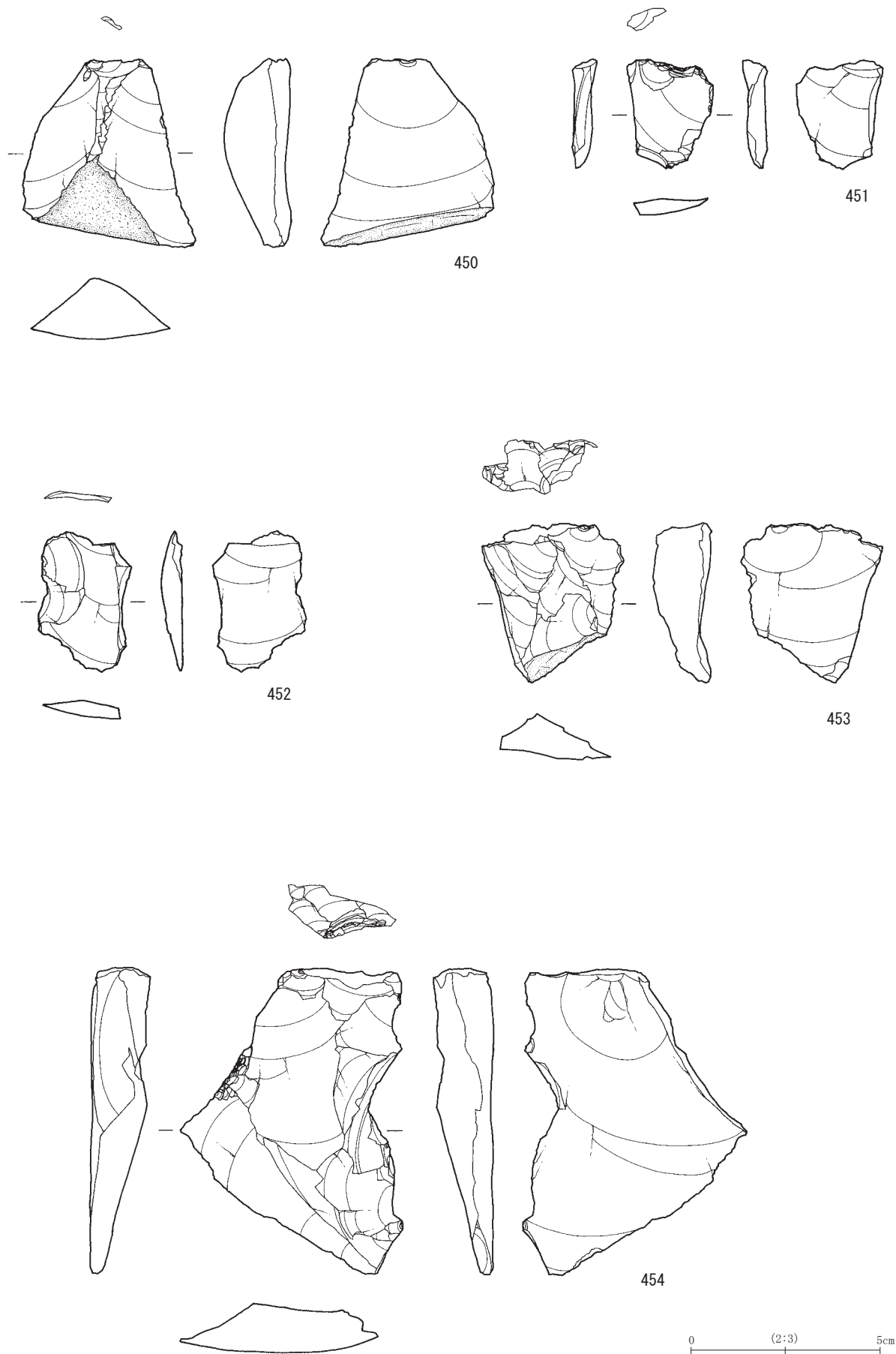
第169図 石器集中区17出土遺物 (13)



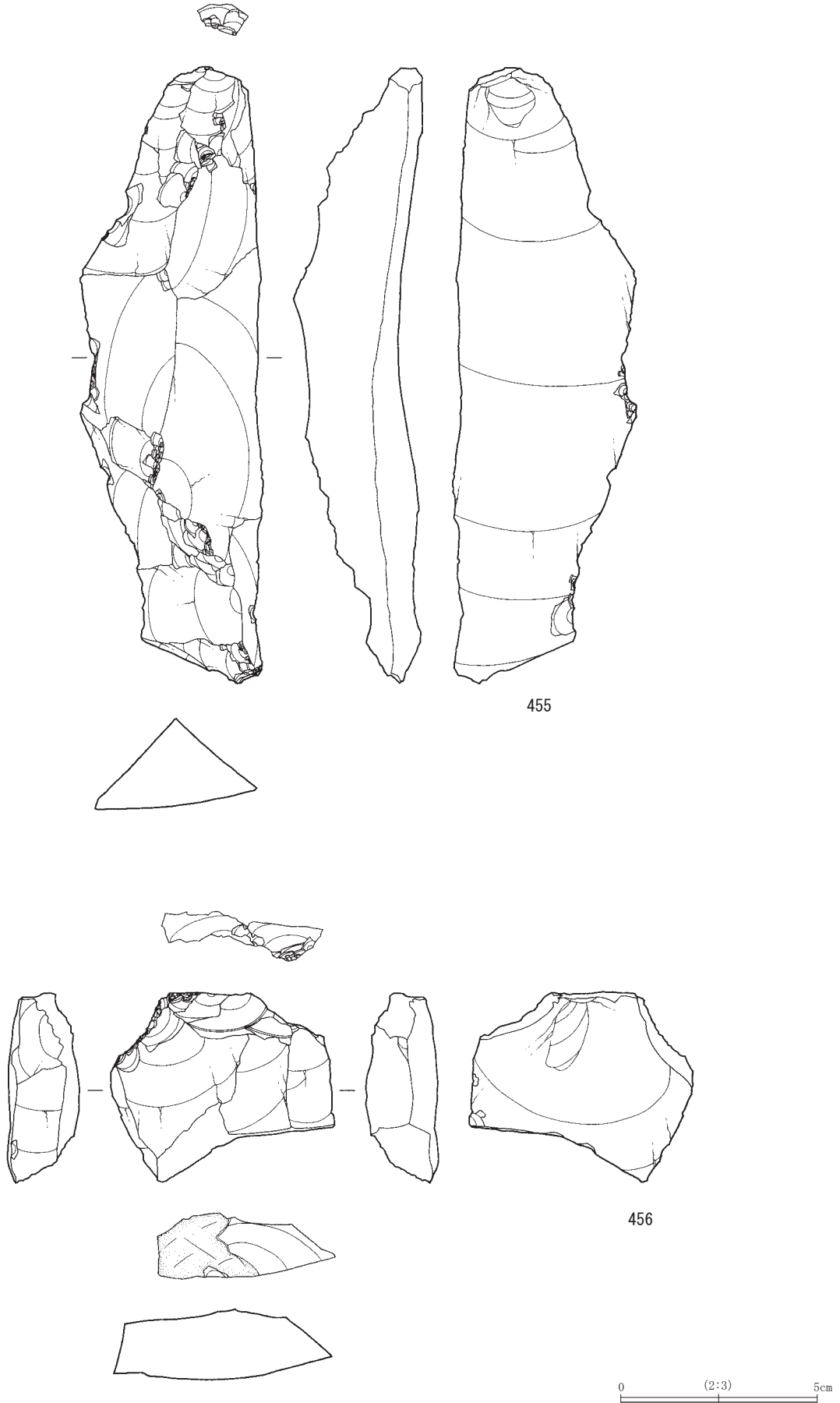
第170図 石器集中区17出土遺物 (14)



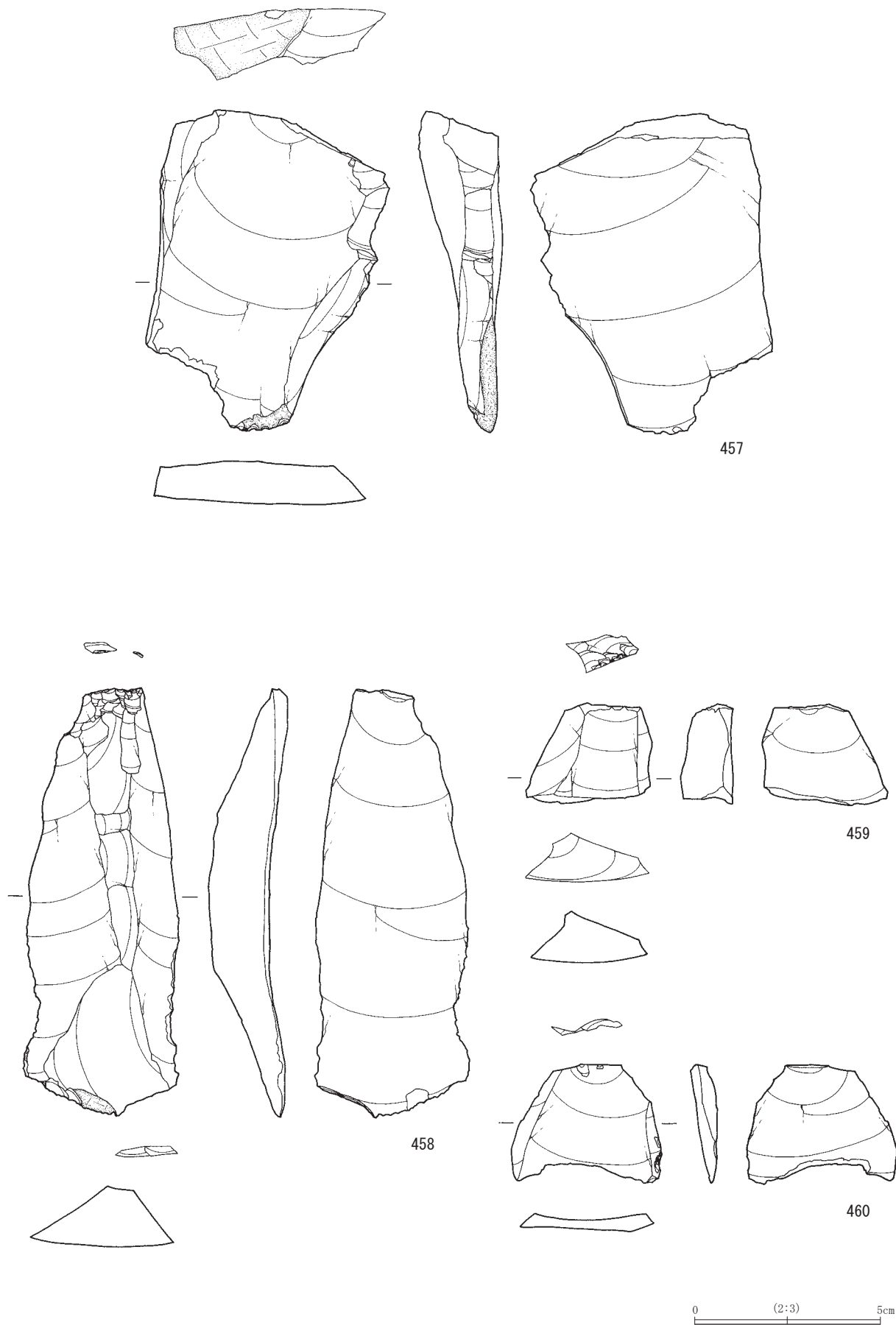
第171図 石器集中区17出土遺物 (15)



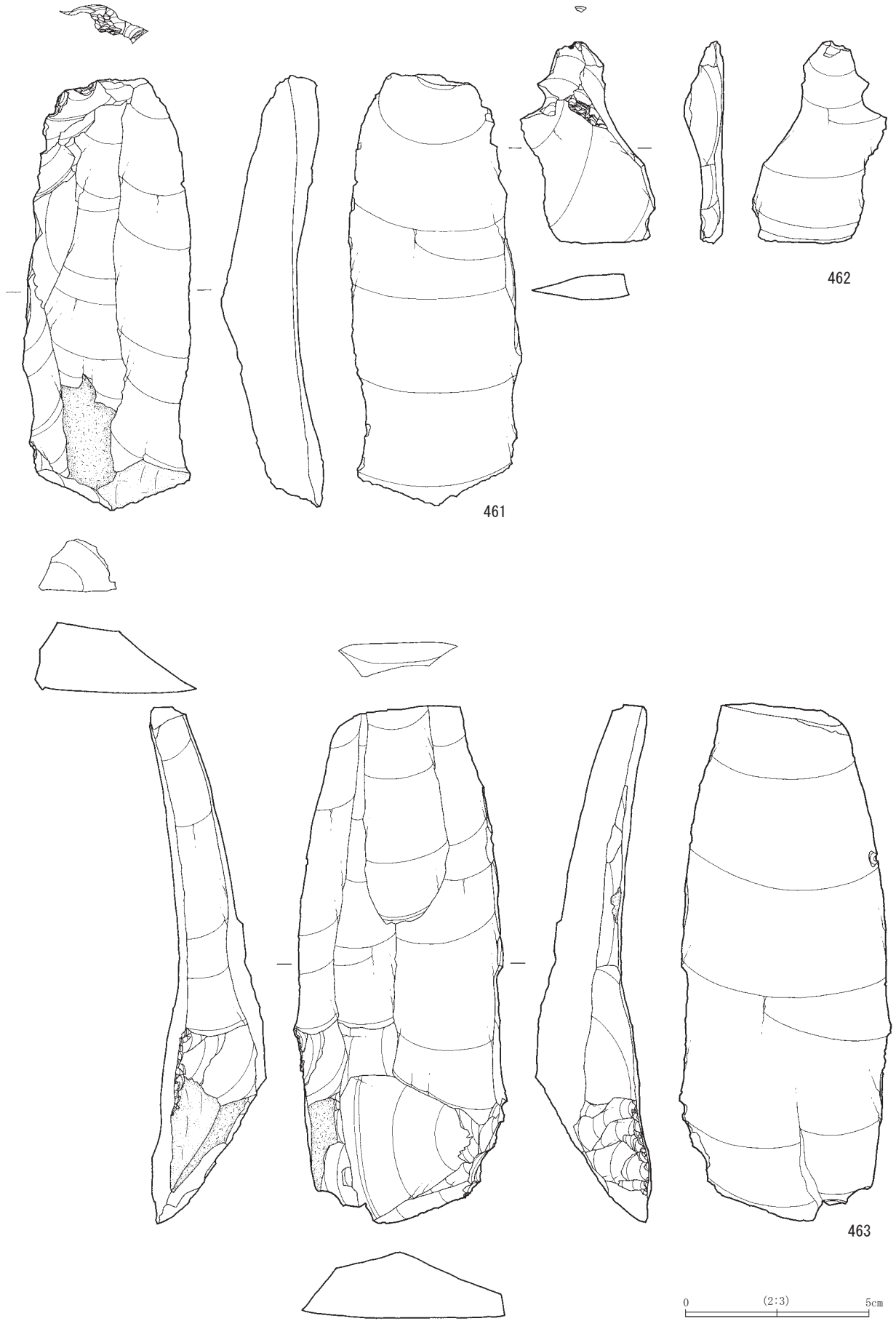
第172図 石器集中区17出土遺物 (16)



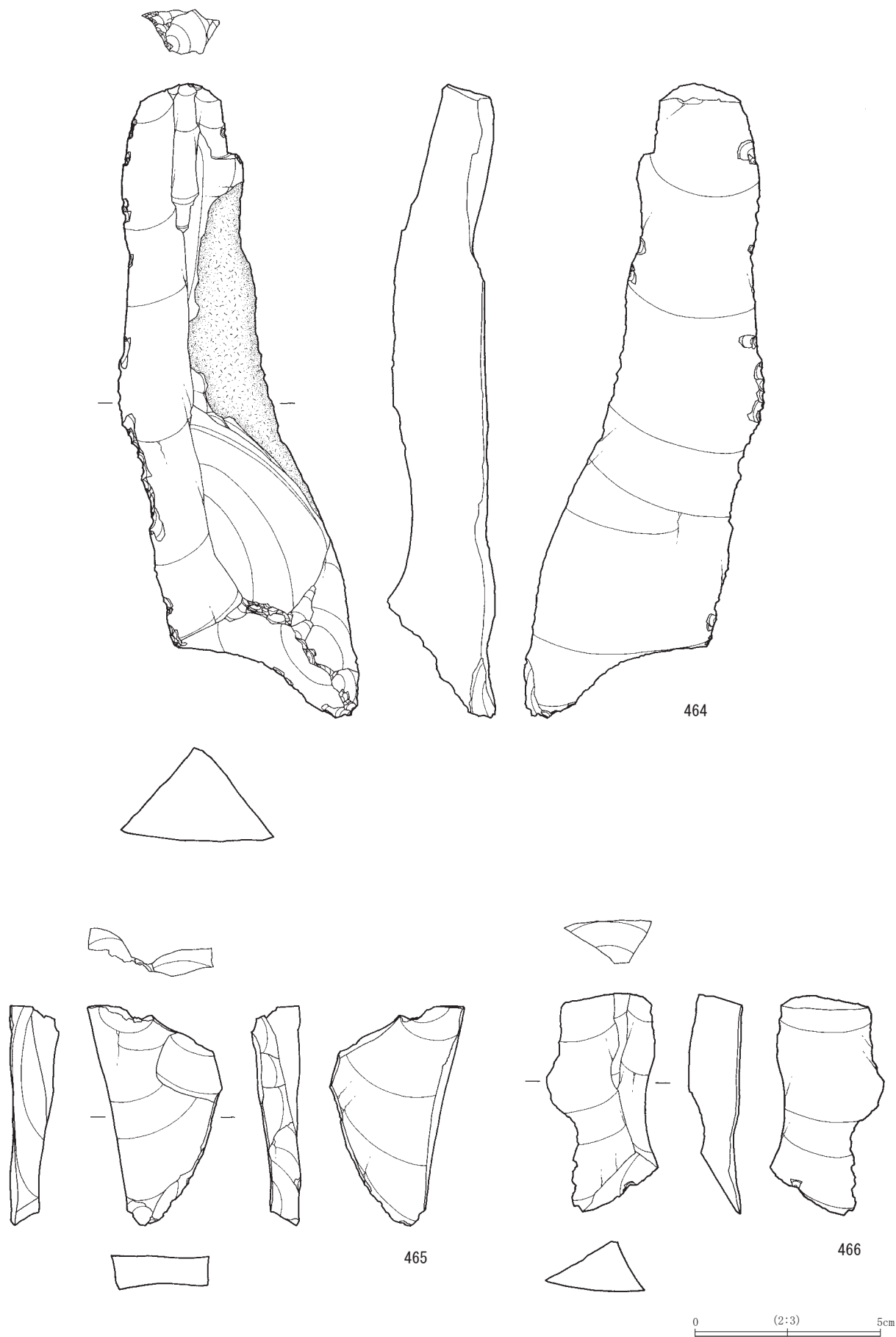
第173図 石器集中区17出土遺物 (17)



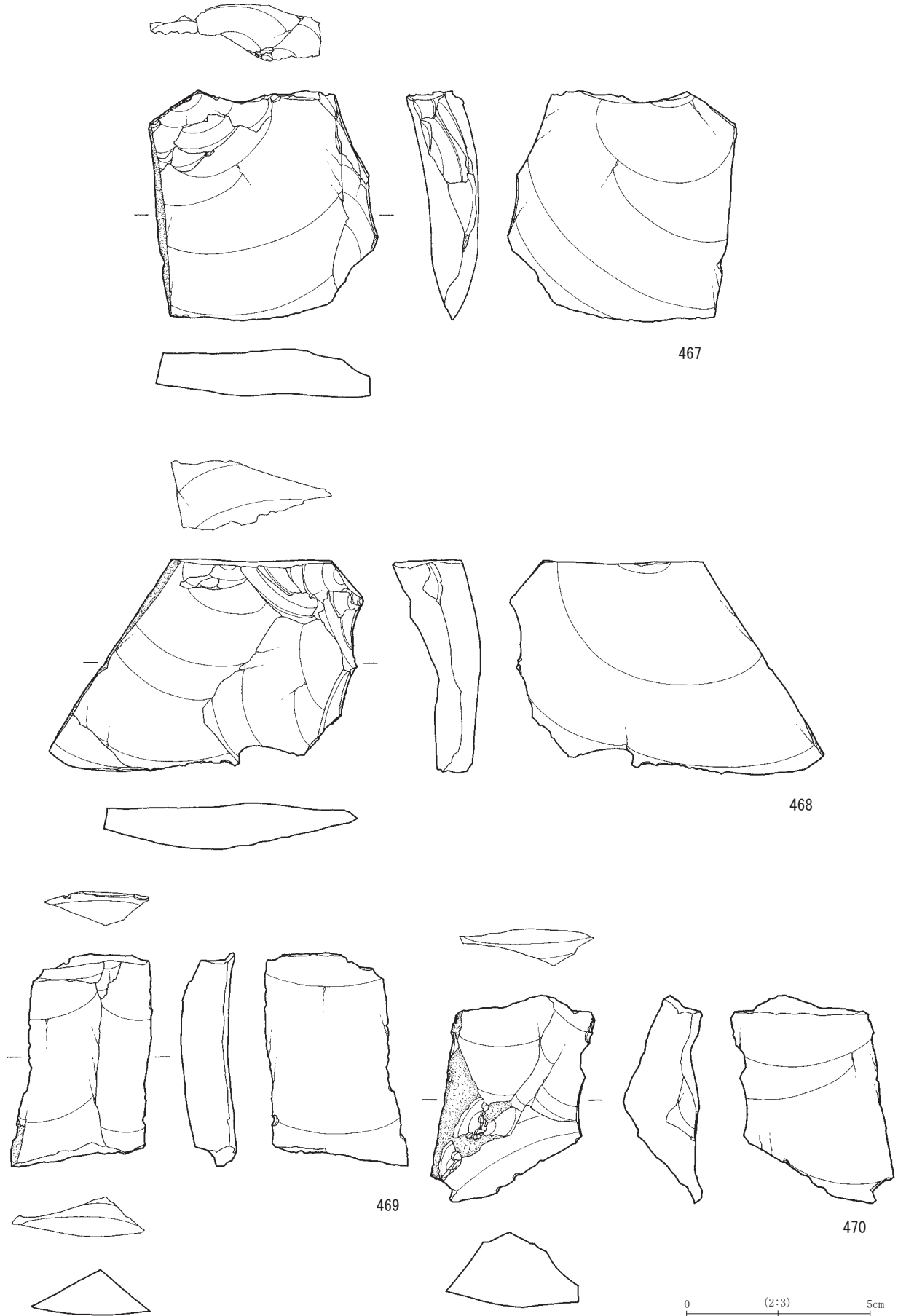
第174図 石器集中区17出土遺物 (18)



第175図 石器集中区17出土遺物 (19)



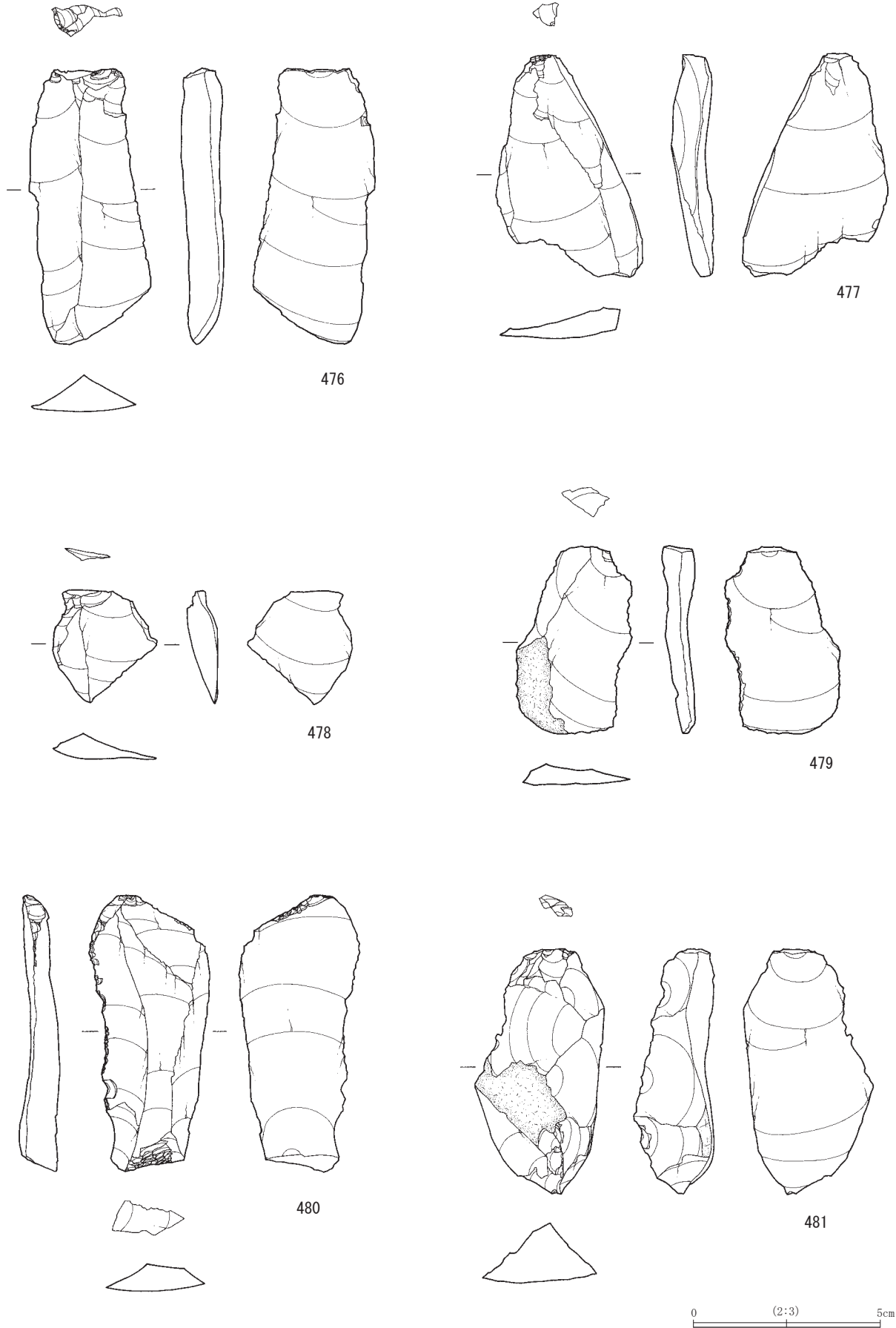
第176図 石器集中区17出土遺物 (20)



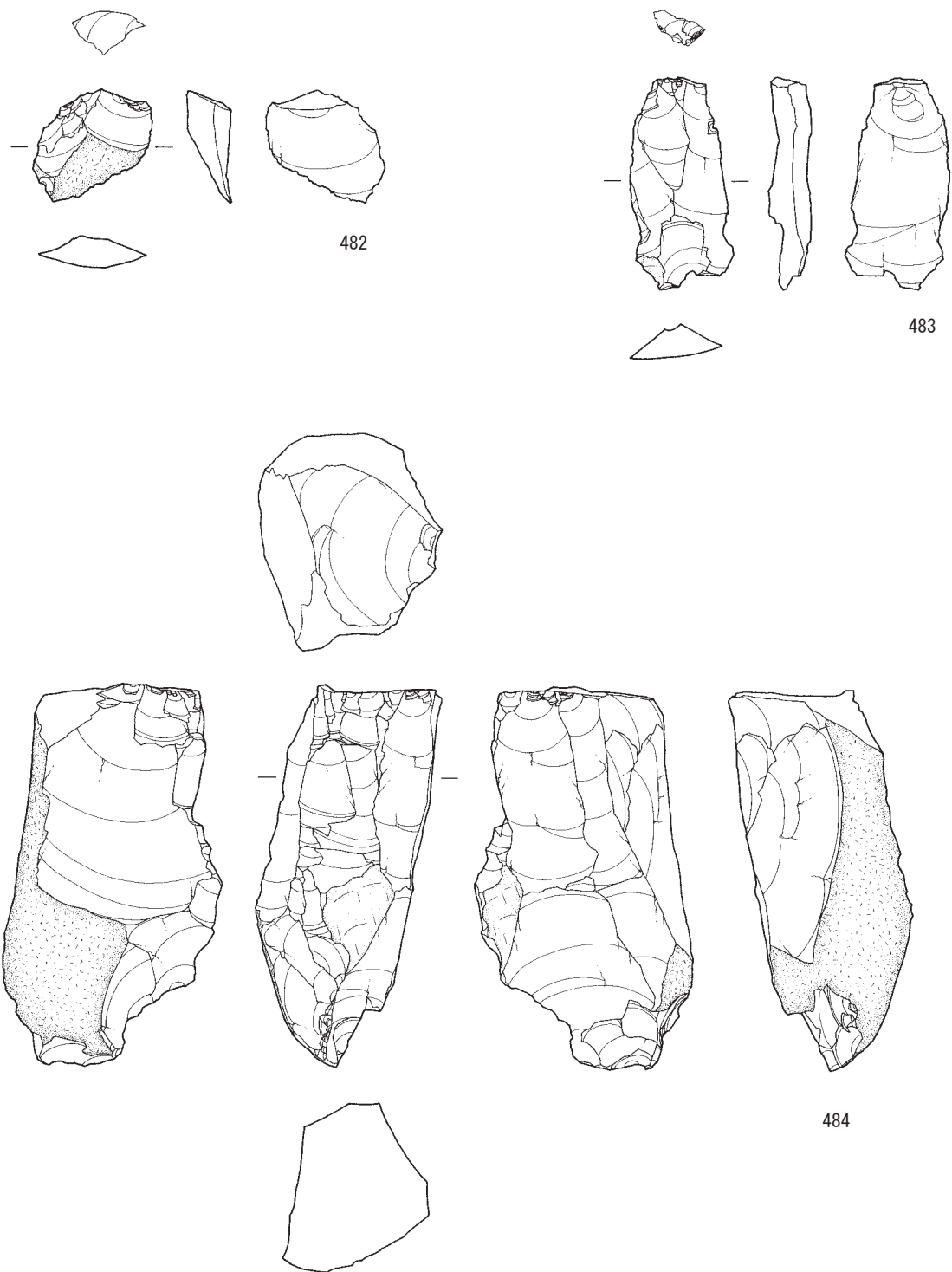
第177図 石器集中区17出土遺物 (21)



第178図 石器集中区17出土遺物 (22)



第179図 石器集中区17出土遺物 (23)



0 (2:3) 5cm

第180図 石器集中区17出土遺物 (24)

本母岩は石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh35：総点数45点、総重量828.18g。彫刻刀形石器、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、灰白・黄褐色が斑に入る。礫面は黄灰色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、部分的にざらつく。

接合点数は33点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは31点あり、上記の器種からなる。個体bは2点あり、石刃からなる。

個体aの剥離工程は、<485><487>→489→488→486→490→<(492a+b)><491>→<493><494>→495→498→(496a+b)→497→501→<499><(500a+b)>→502→(504+505)→503→<506→(507a+b)→509><508>→(510a+b)である(<○>の前後関係は不明)。本個体は礫面除去・石核整形から石刃剥離の過程に伴う資料である。上設打面から正面左右に認められる礫面を除去した後、打面再生を介在させながら石刃と縦長剥片を連続的に剥離している。作業面は正面を中心にして弧状に形成され、対となる裏面には礫面が残置している。剥離が進行すると作業面は裏面側へと展開していく。また、打面再生を作業面側から頻繁に施しているが、打面と作業面の配置は変更されないまま剥離が進行する。接合個体には作業面側に多くの空間が認められている。また、非接合資料にも縦長剥片や石刃は存在していない。このことから剥離された石刃などは、素材やtoolとして搬出されたものと考えられる。

個体bは縦長剥片を連続的に剥離した資料である。剥片の規模から、上記の過程に伴う資料と考えられる。

本母岩は中型の垂角礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh38：総点数3点、総重量16.19g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰オリーブ色を基調とし、礫面は灰白色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh41：総点数2点、総重量22.95g。彫刻刀形石器で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

彫刻刀形石器(403・404)については出土遺物に記載している。

本母岩は単体で搬入、使用後に廃棄している。

sh43：総点数25点、総重量424.17g。彫刻刀形石器、スクレイパー、石刃、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面は灰黄褐色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。総点数の半数以上は石器集中区20から出土しているものの、石器製作の主体が本集中区に認められることから本集中区で扱っている。

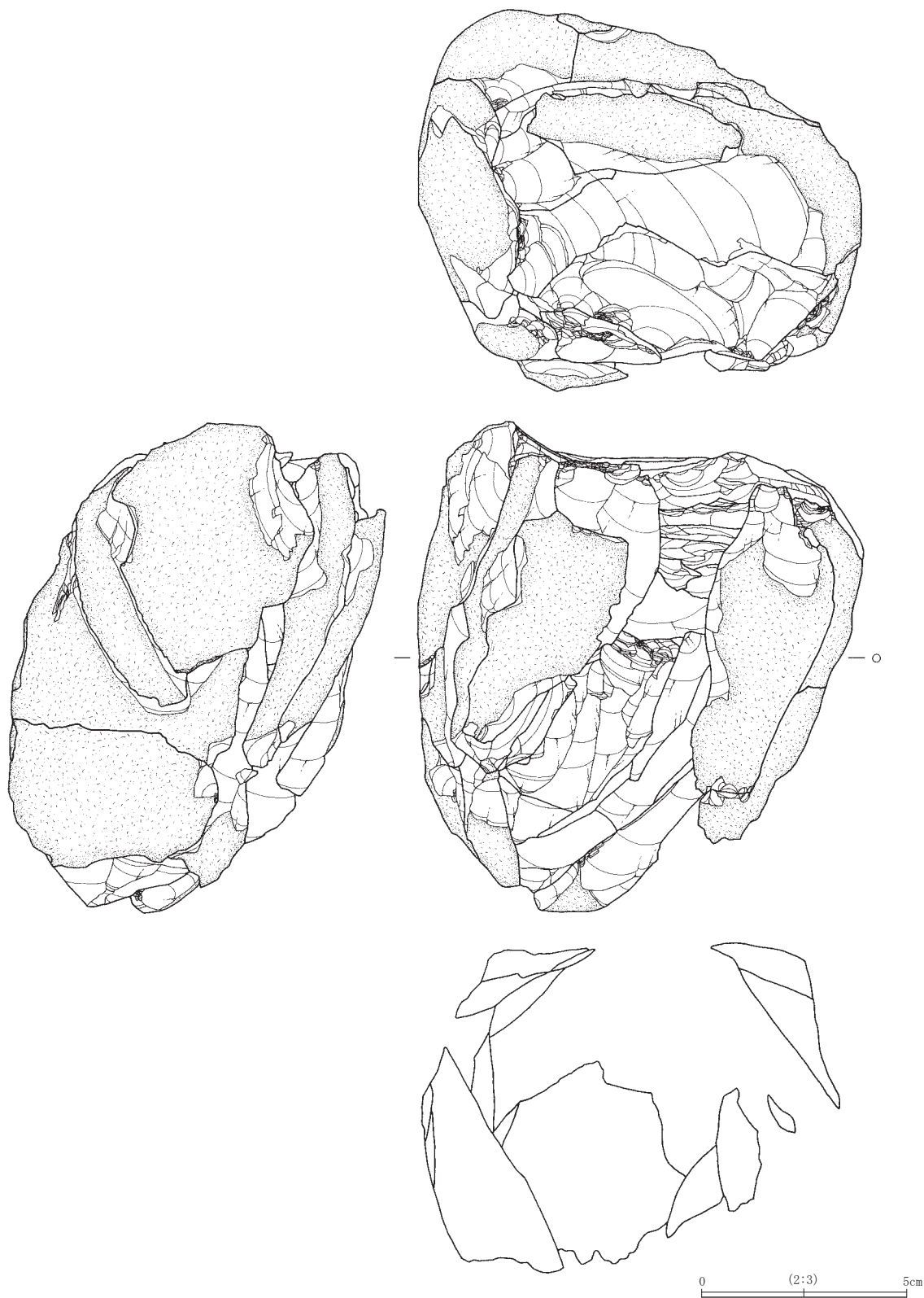
接合点数は11点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは8点あり、スクレイパー、石刃、剥片、石核からなる。個体bは3点あり、彫刻刀形石器、石刃、剥片からなる。

個体aの剥離工程は、511→(513a+b)→512→514→515→516→517である。本個体は石刃剥離の過程に伴う資料である。作業面は正面を中心にして弧状に形成され、対となる裏面には礫面が残置している。打面は上下に設定しており、180度打面転位させながら石刃を連続的に剥離している。最終的に上設打面から数回剥離を試みるものの、剥離ができずに停止する。接合個体の背面剥離面構成からもこれと同様の工程が捉えられる。打面転位は剥離が停止する度に行われていたと考えられる。

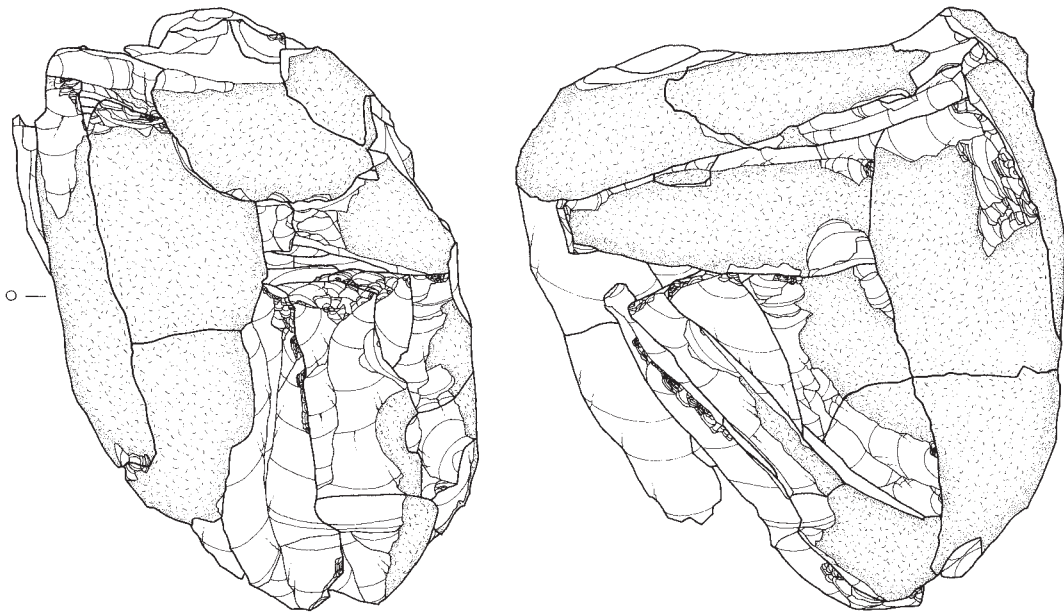
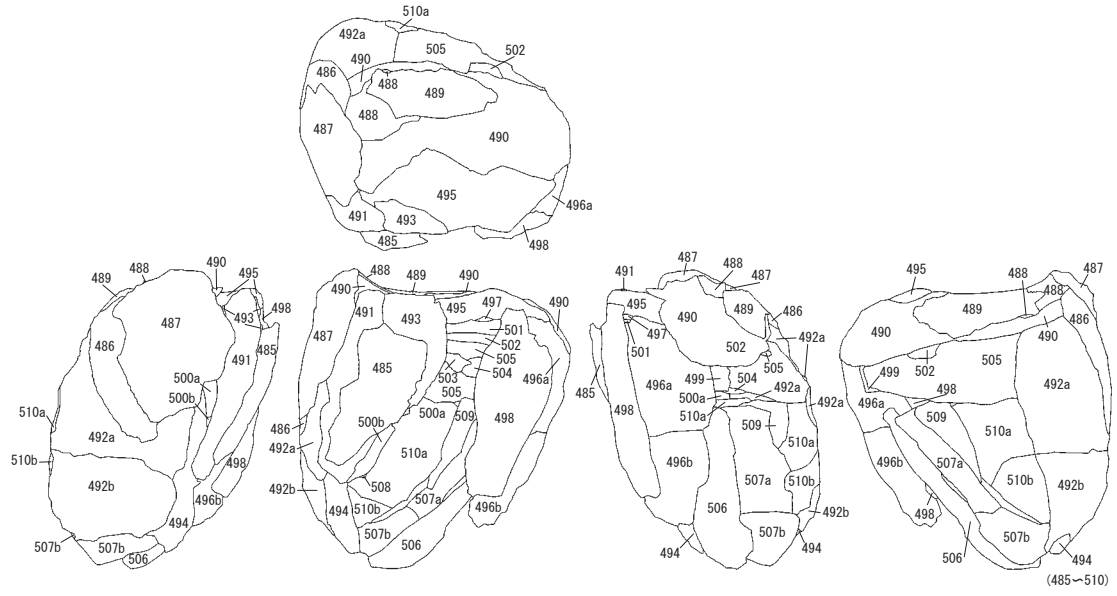
個体bは縦長剥片や石刃を単設方向からの連続的な剥離した資料である。本個体は個体aと同様の過程に伴う資料である。これらの背面には個体aの右側面に見られる礫面に類似していることから、個体aの前段階に剥離されたものと想定される。

このように接合個体b→aの工程を想定される。これに石器集中区を合わせて見ていくと、石核は

sh35

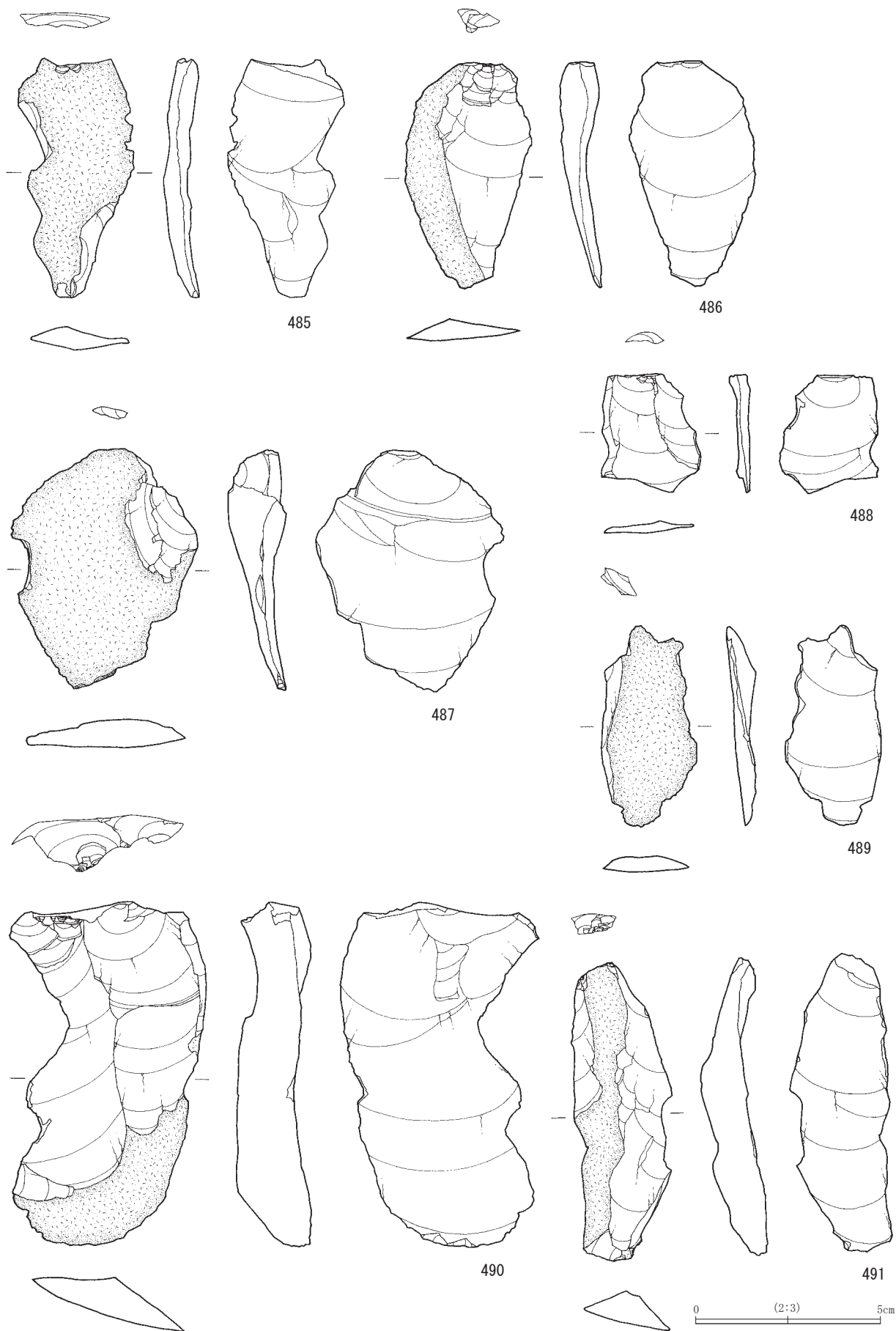


第181図 石器集中区17出土遺物 (25)

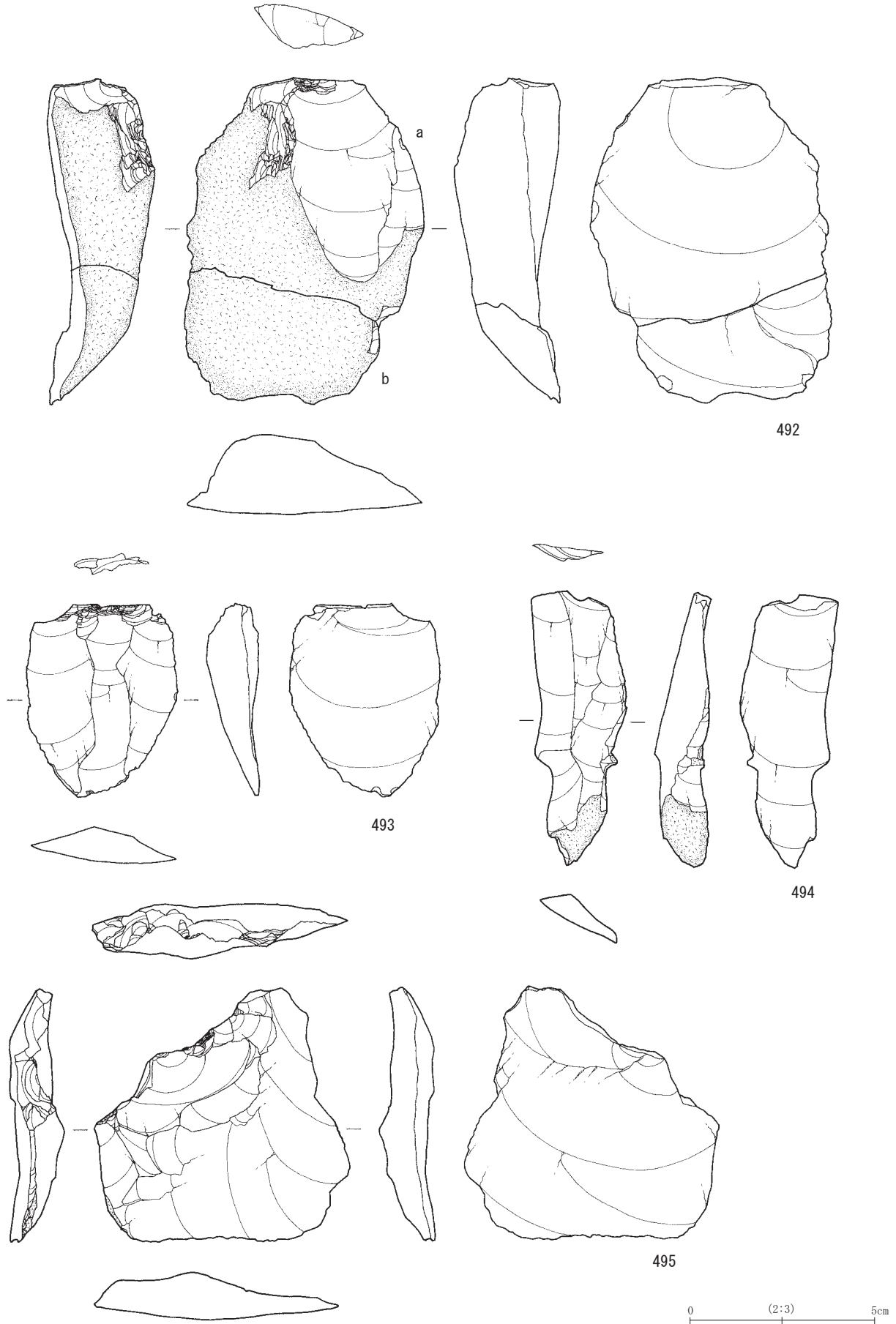


0 (2:3) 5cm

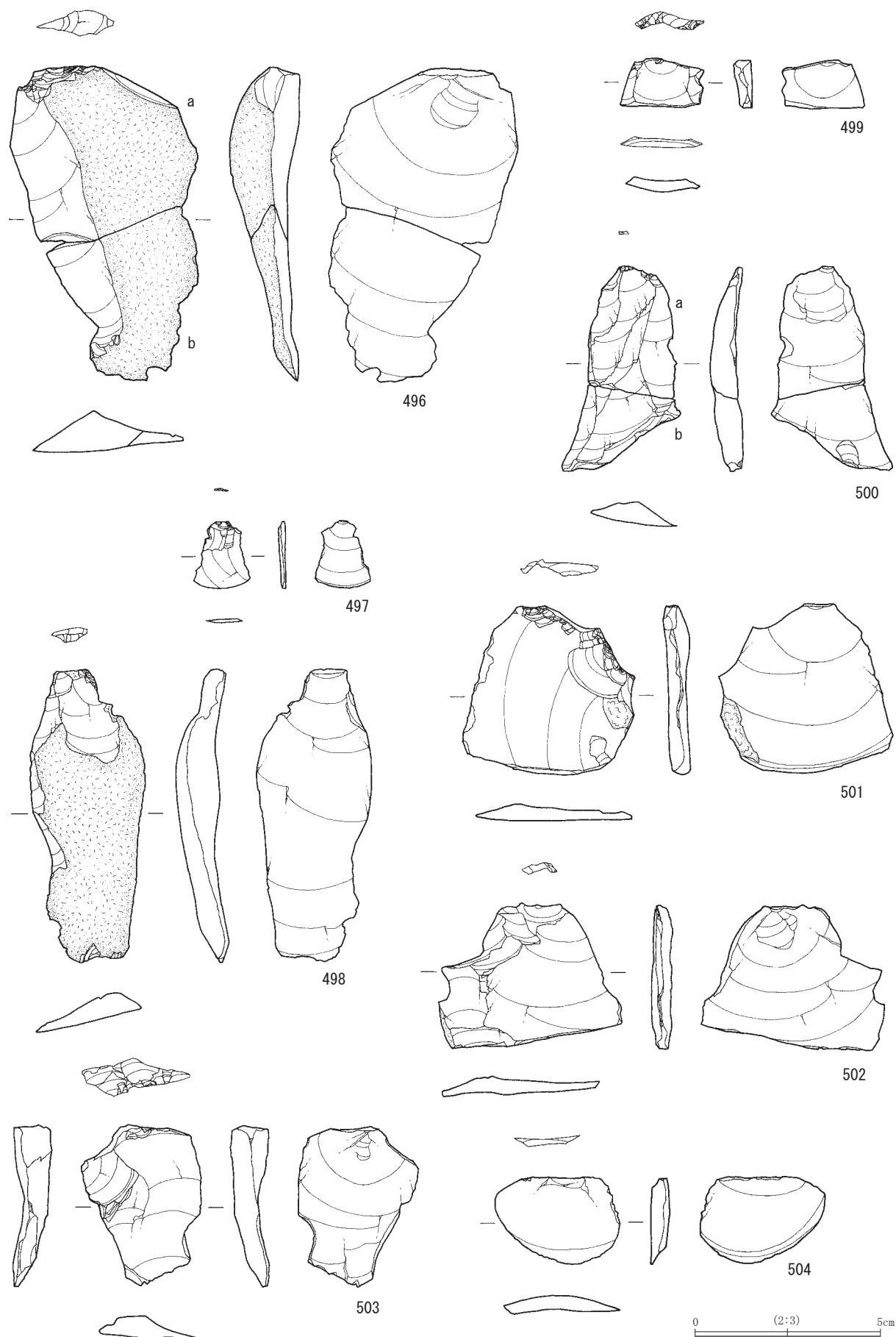
第182図 石器集中区17出土遺物 (26)



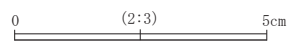
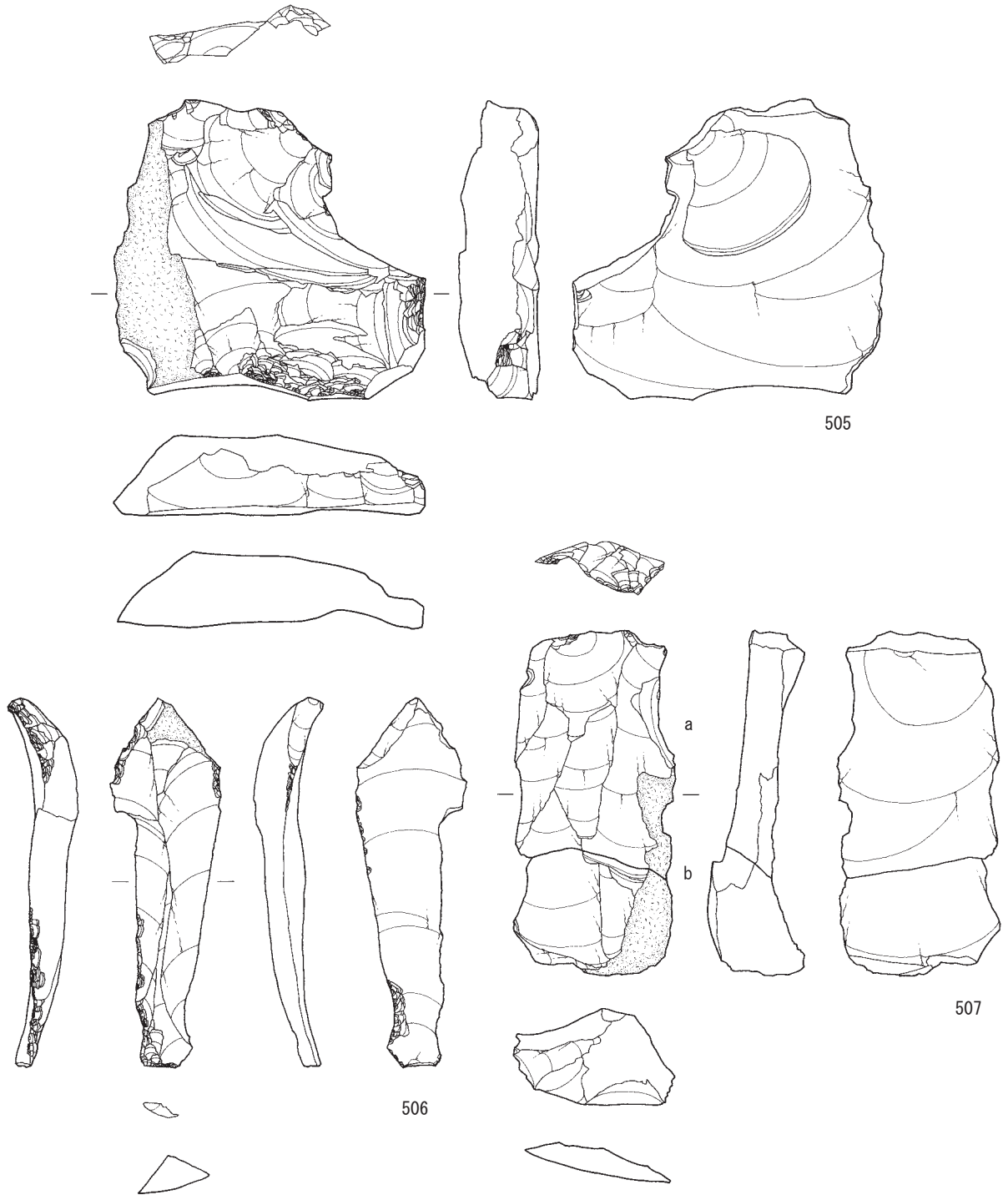
第183図 石器集中区17出土遺物 (27)



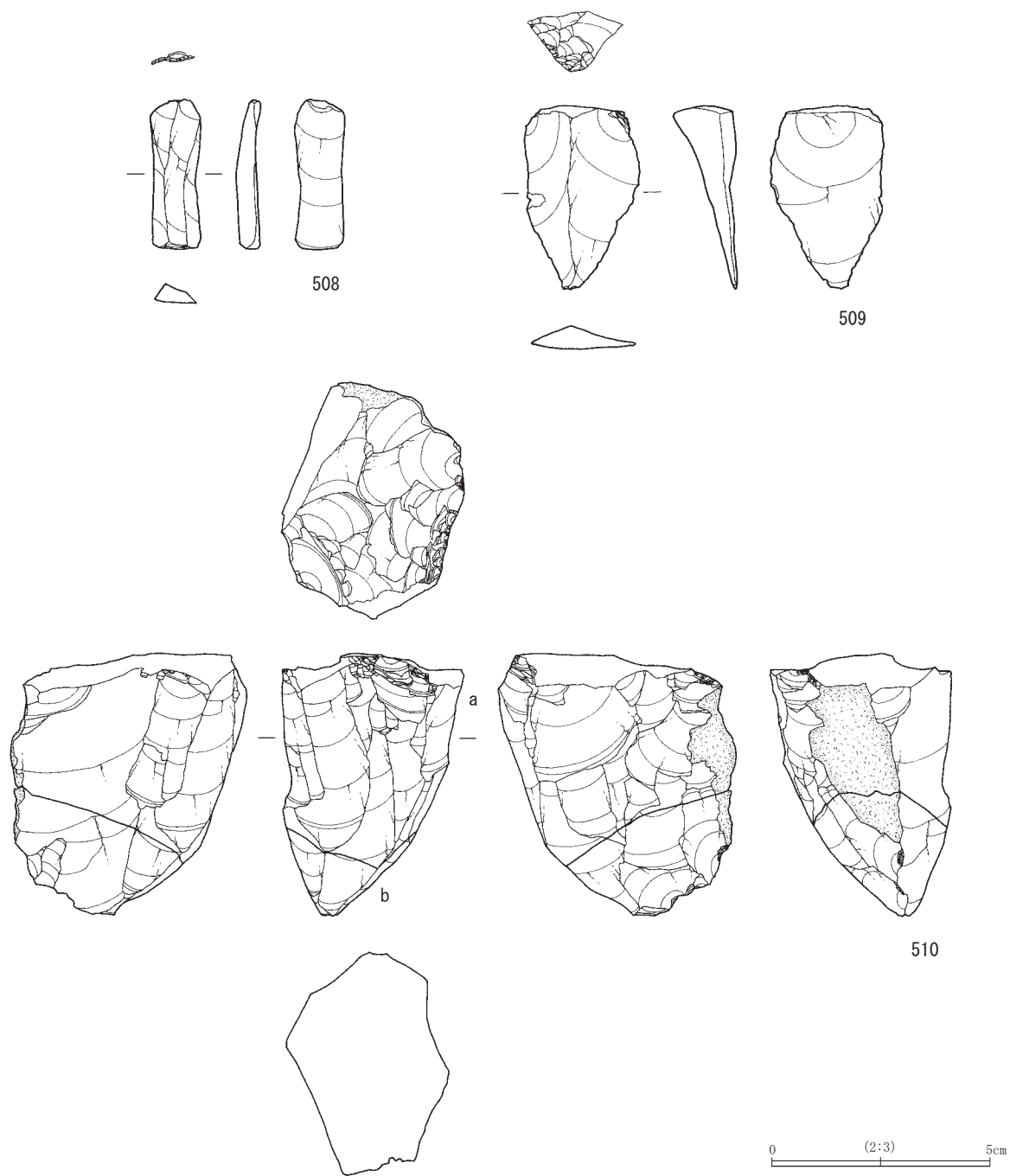
第184図 石器集中区17出土遺物 (28)



第185図 石器集中区17出土遺物 (29)

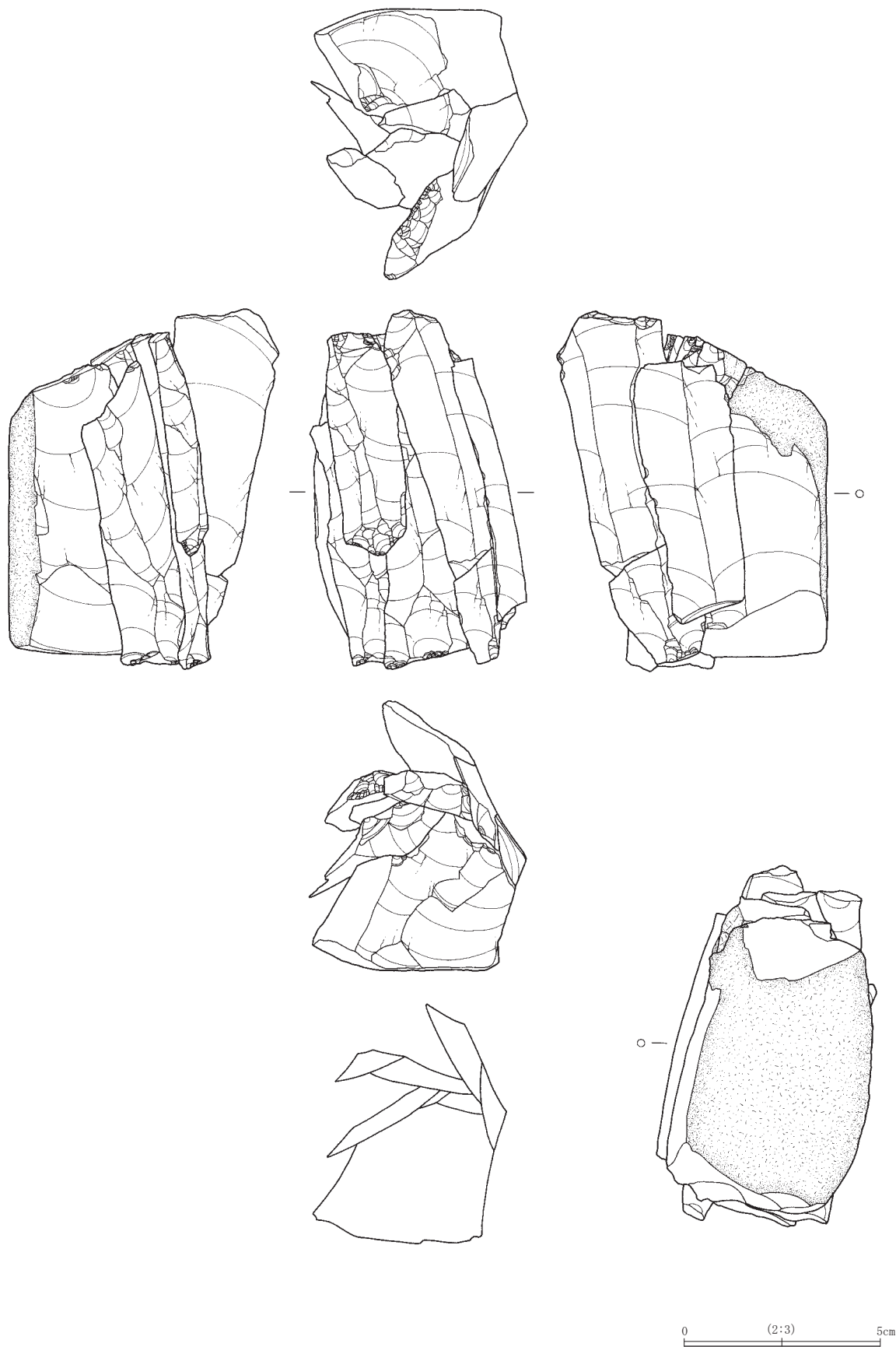


第186図 石器集中区17出土遺物 (30)



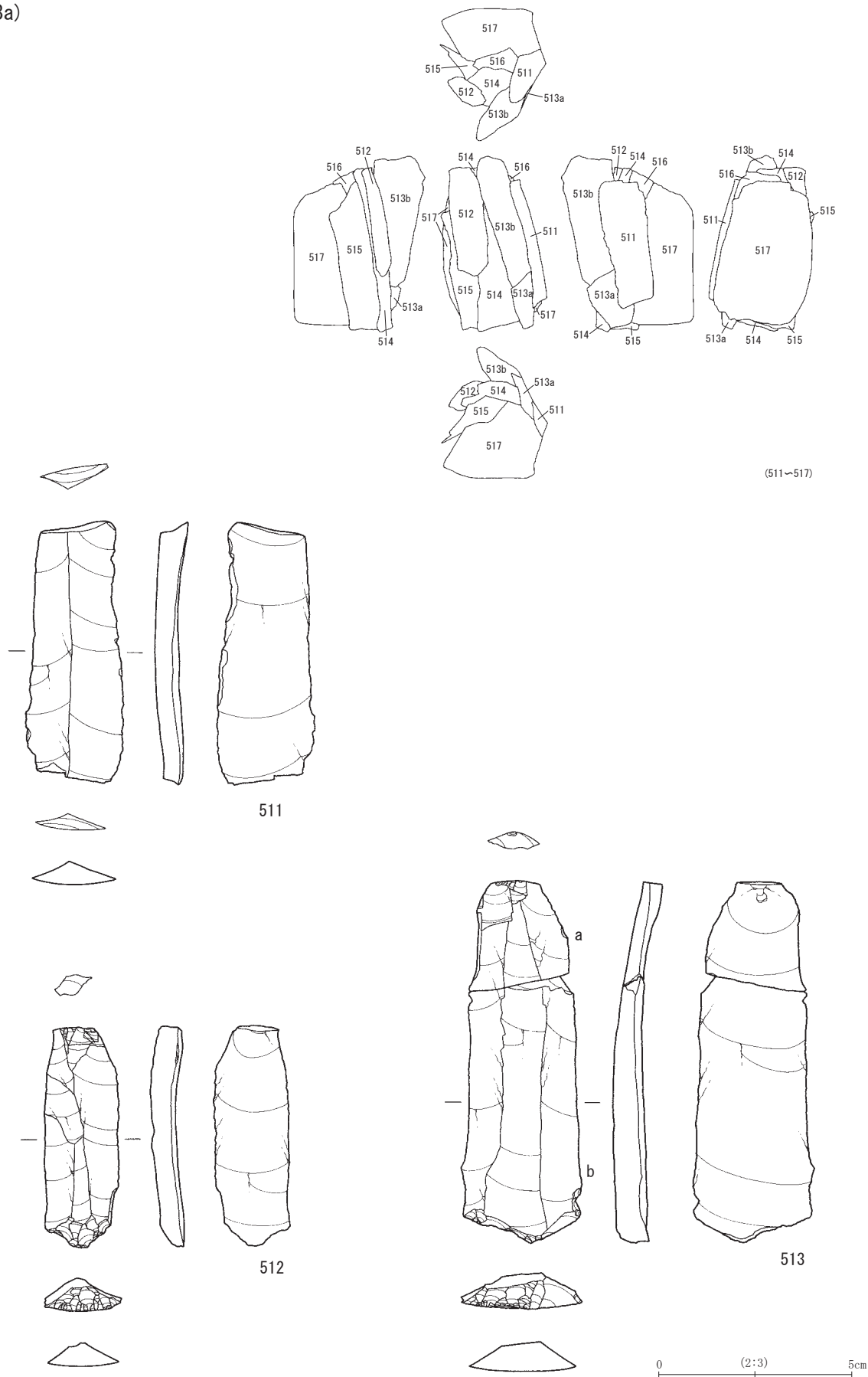
第187図 石器集中区17出土遺物 (31)

sh43a

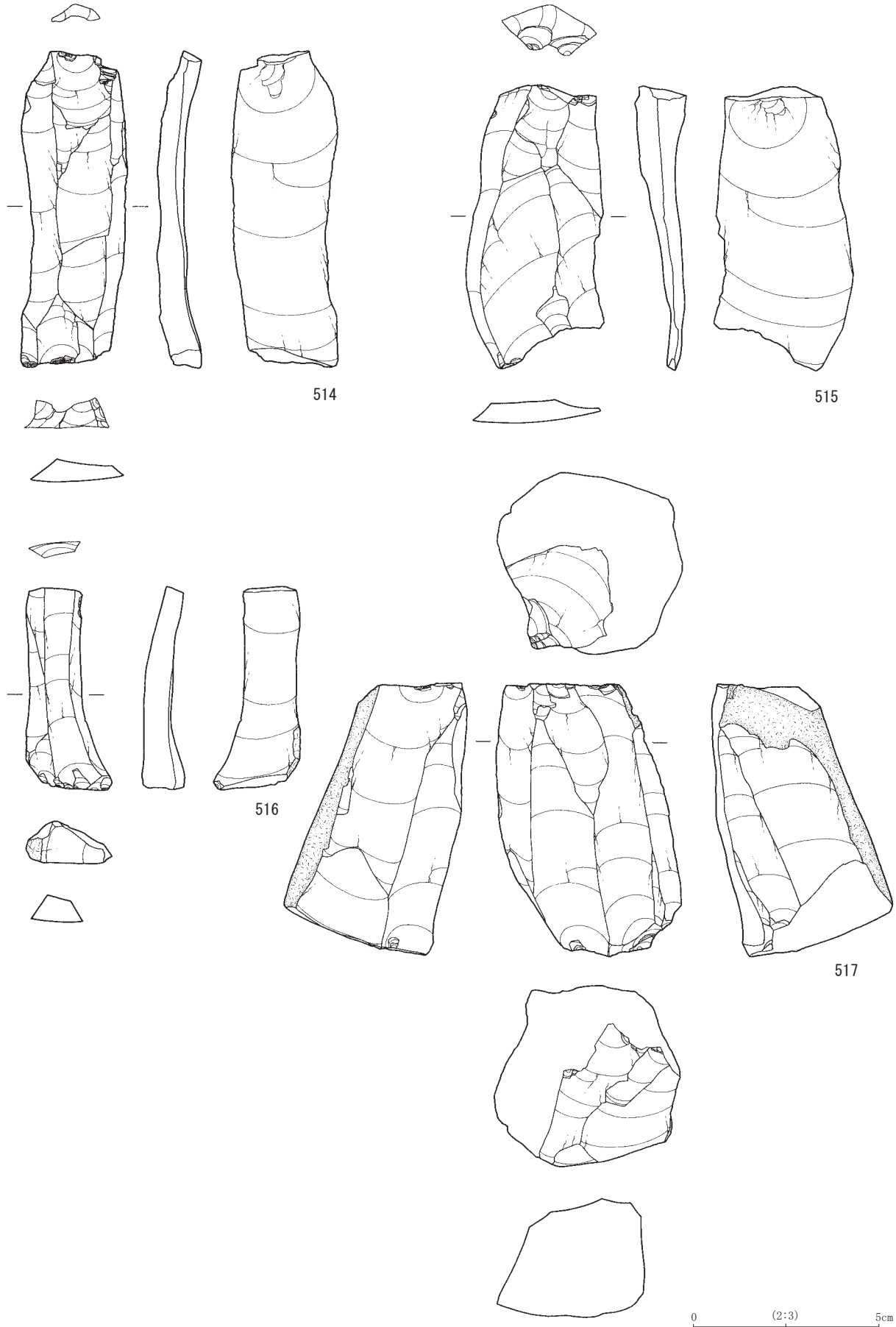


第188図 石器集中区17出土遺物 (32)

(sh43a)



第189図 石器集中区17出土遺物 (33)



第190図 石器集中区17出土遺物 (34)

最後の段階で集中区20で廃棄されていることから、石器集中区17→20へと石器の移動が認められる。剥離された石刃は彫刻刀形石器(405・857)やスクレイパー(512・513)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。また、接合個体には空間を有することから、剥離された石刃は素材やtoolとして遺跡外へと持ち出されたものと考えられる。

本母岩は亜角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

ssh5：総点数2点、総重量43.8g。剥片と石核で構成される非接合資料である。剥離面は黒色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。ただし被熱が認められることから、色調は本来のものと異なる可能性がある。

本母岩は石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

ssh6：総点数3点、総重量24.38g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰を基調とする。礫面は黄褐色を呈する。石質は緻密でやや光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

本母岩は石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出してしている。

[備考] 本集中区と同様に神山型彫刻刀形石器を主体に組成し、母岩別資料において接合関係にある石器集中区20は約30m東に位置する。

テフラ分析からは、Ⅲb層からAs-YPが検出されている。また、Ⅲb～Ⅲb-2層出土の炭化材を年代測定した結果、 $17,380 \pm 70$ yrBPと年代値が得られている。黒曜石については、産地同定を行っており、男鹿産との成果が得られている。これらの詳細については第2分冊附編に記載している。

石器集中区18

[位置・出土状況] VB2・3・12・13グリッドに位置しており、10×10mの範囲に収まる。段丘北側の縁辺部付近に形成された緩やかに下る標高約343.6～344.0mの自然堤防上で検出している。本来であれば石器集中区17・19と重複していたが、前者については石器集中区17で述べた通りであり、後者は近世以降の攪乱によって、それぞれとの関係を把握できていない。また集中区の南側に認められる空白域は、攪乱によって生じたものである。

[分布状況] VB2・3・12・13グリッドの境を中心に分布しており、北から南東方向へ広がる。斜面の下位にあたる北から南東かけてに流出しているものと思われる。遺跡の中で最も大きな集中域を形成している。

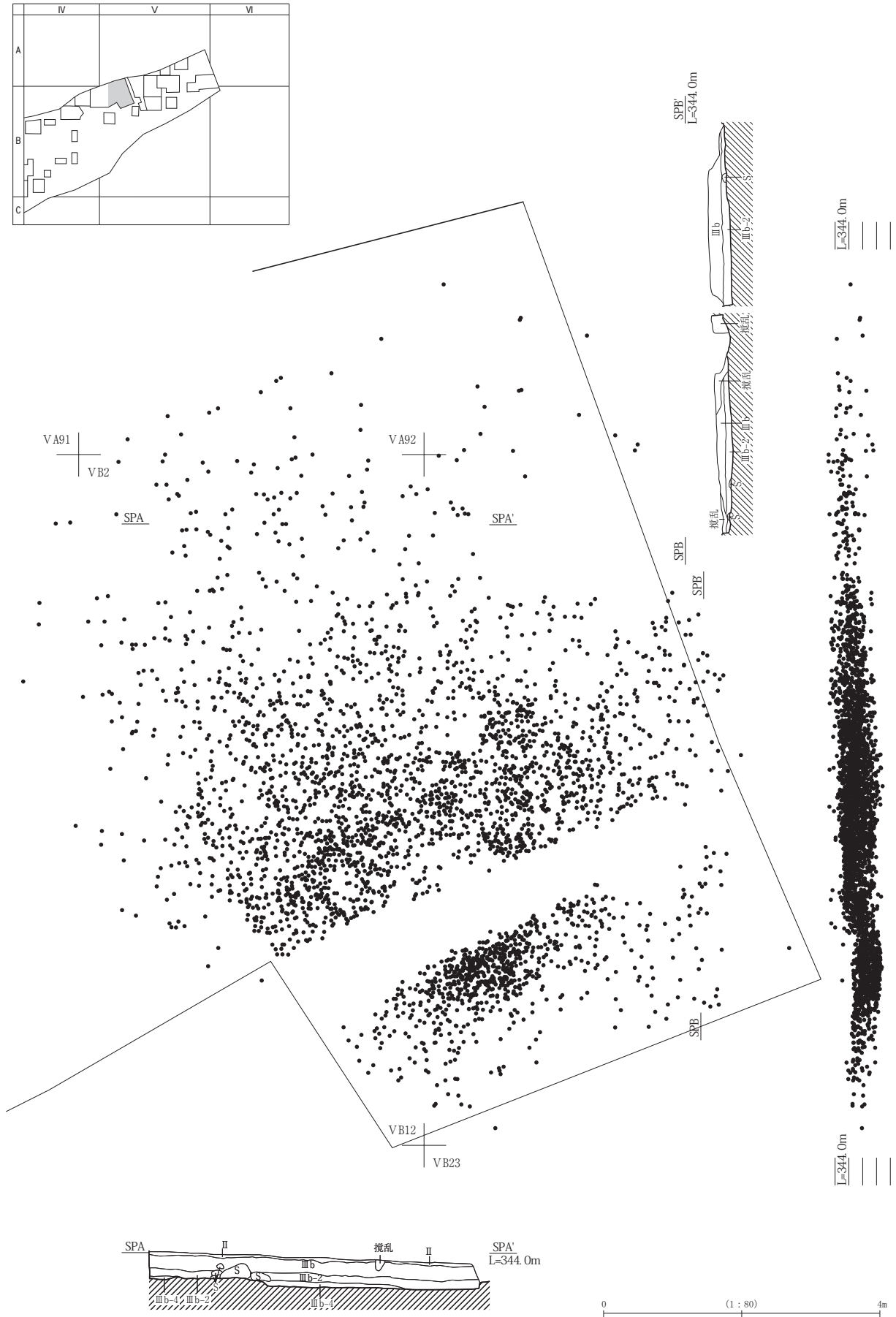
[出土層位] Ⅱ層からⅢb-4層で出土しており、Ⅲb-2層上面(標高343.6～8m)に出土ピークがある。最大で約80cmの高低差を有する。石器はⅢb層として取り上げたものが多いものの、形成層位はⅢb-2層と捉えている。これについては集中区中央のBV1の南側ラインに対してⅢ層とⅢb-2層の層界となる推定線を作成しており、その推定線を垂直分布図に重ね、出土ピークがそれより下位にあることから判断している。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は3320点である。

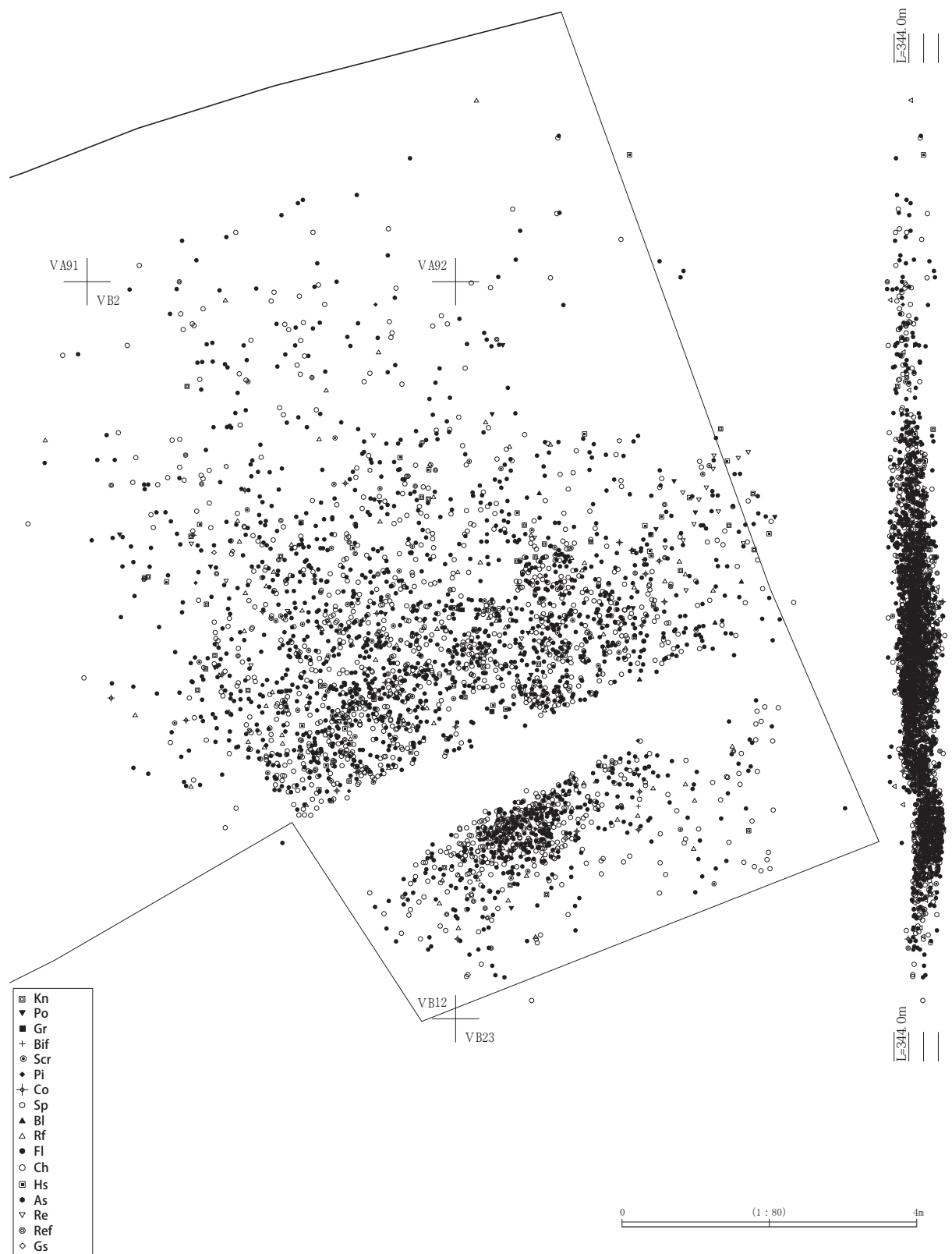
石器組成はナイフ形石器48点、彫刻刀形石器3点、尖頭器29点、スクレイパー71点、楔形石器6点、二次加工を有する剥片119点、石刃8点、剥片1646点、チップ1242点、削片4点、石核35点、敲石29点、台石2点、礫24点、礫片52点からなる。

石器材料組成は頁岩と玉髄質頁岩を主体に、珪質頁岩、黒曜石、赤色頁岩、凝灰岩、瑪瑙、流紋岩、デイサイト、安山岩などからなる。

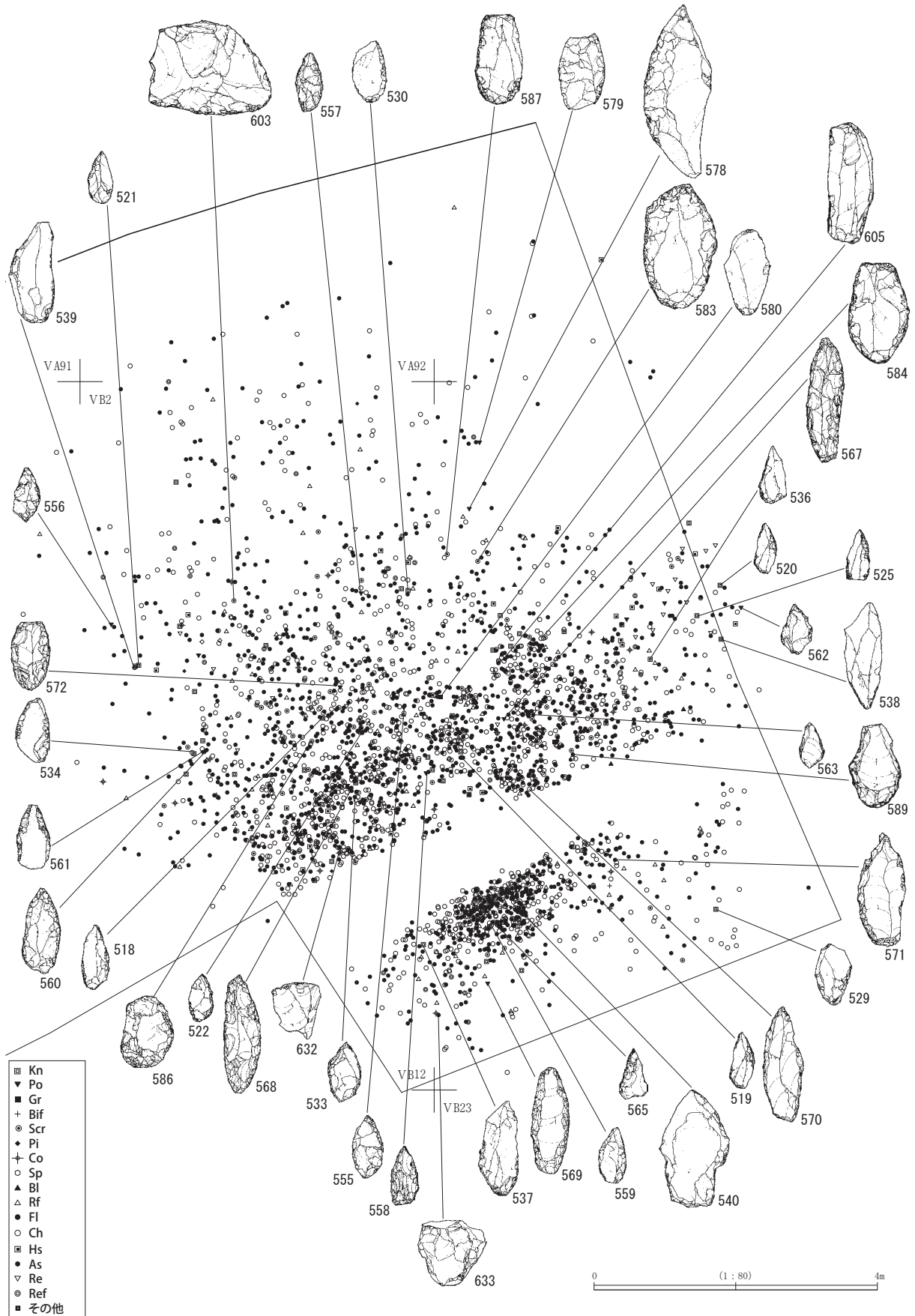
[出土遺物] 518～554はナイフ形石器。二側縁加工、一側縁加工、基部加工、基部+先端部に分類され、



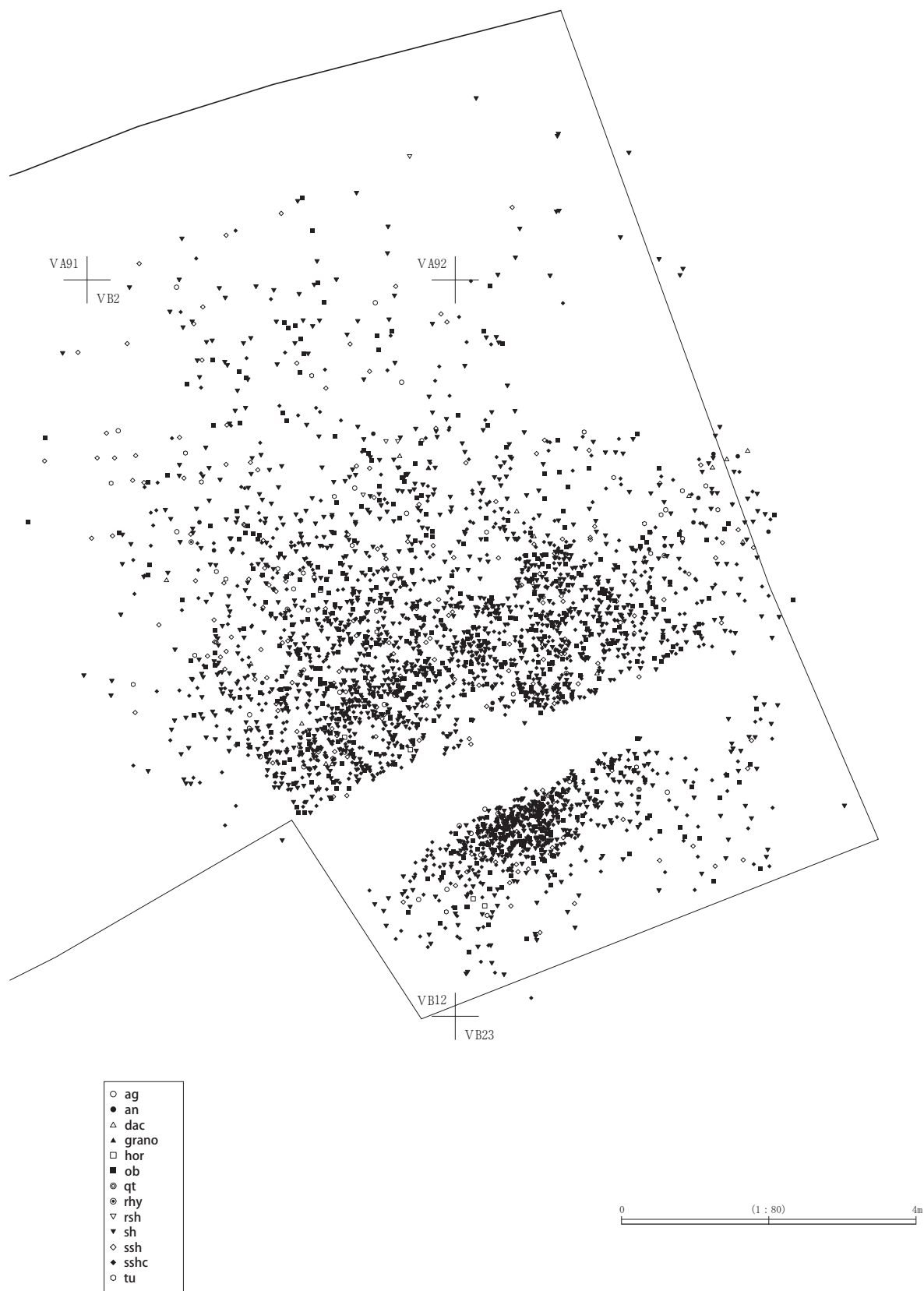
第191図 石器集中区18石器出土状況図



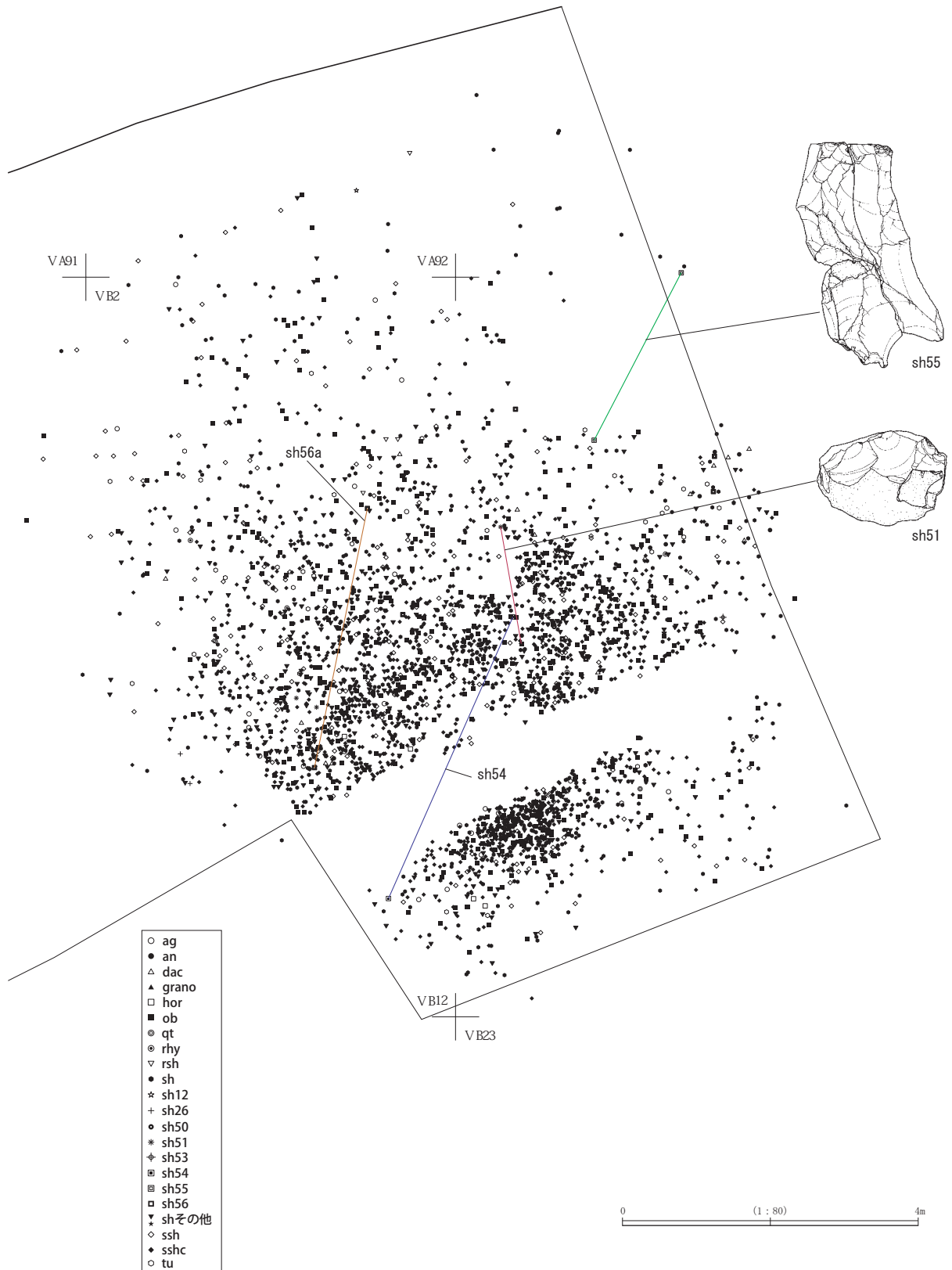
第192図 石器集中区18器種別出土状況図 (1)



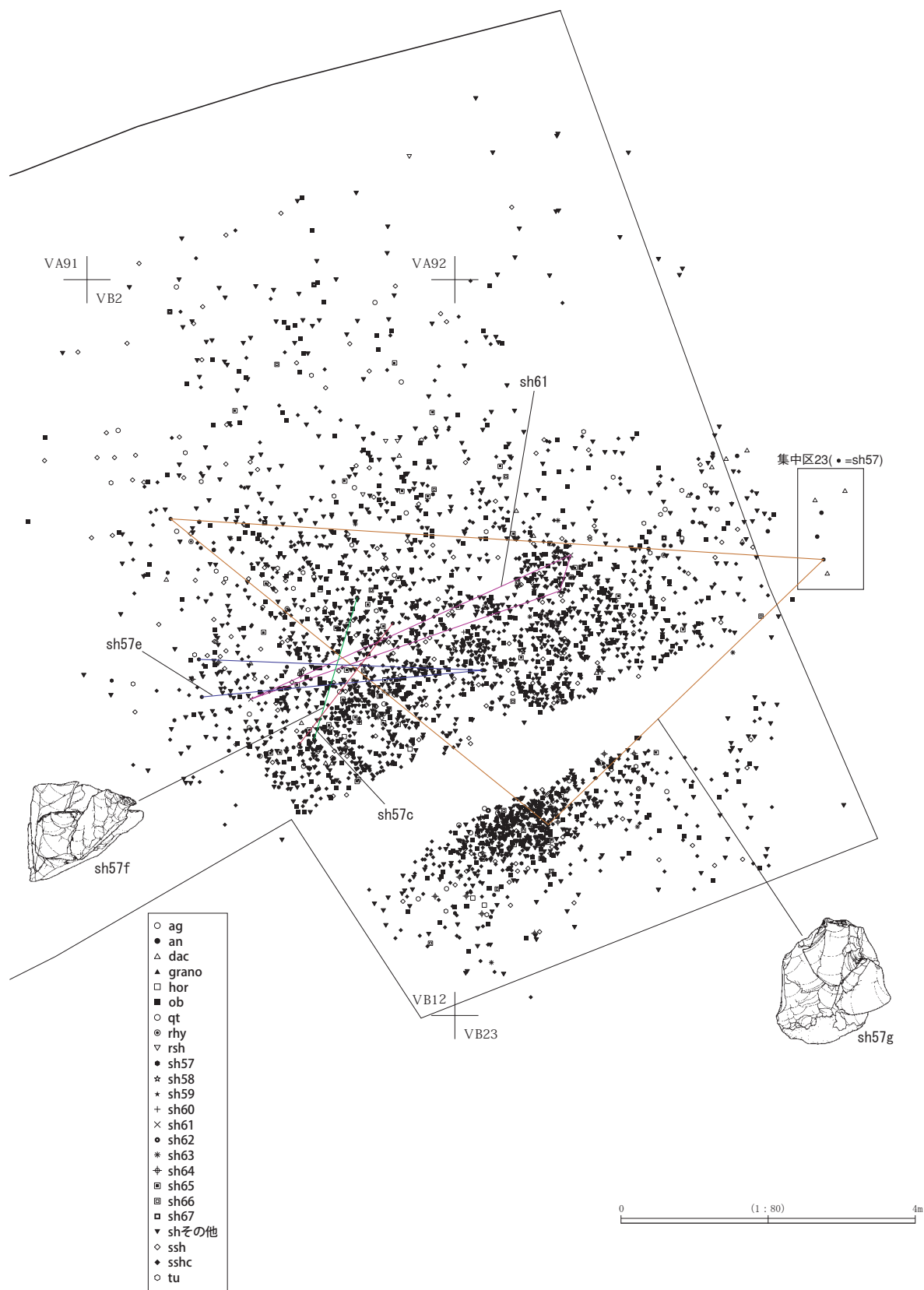
第193図 石器集中区18器種別出土状況図 (2)



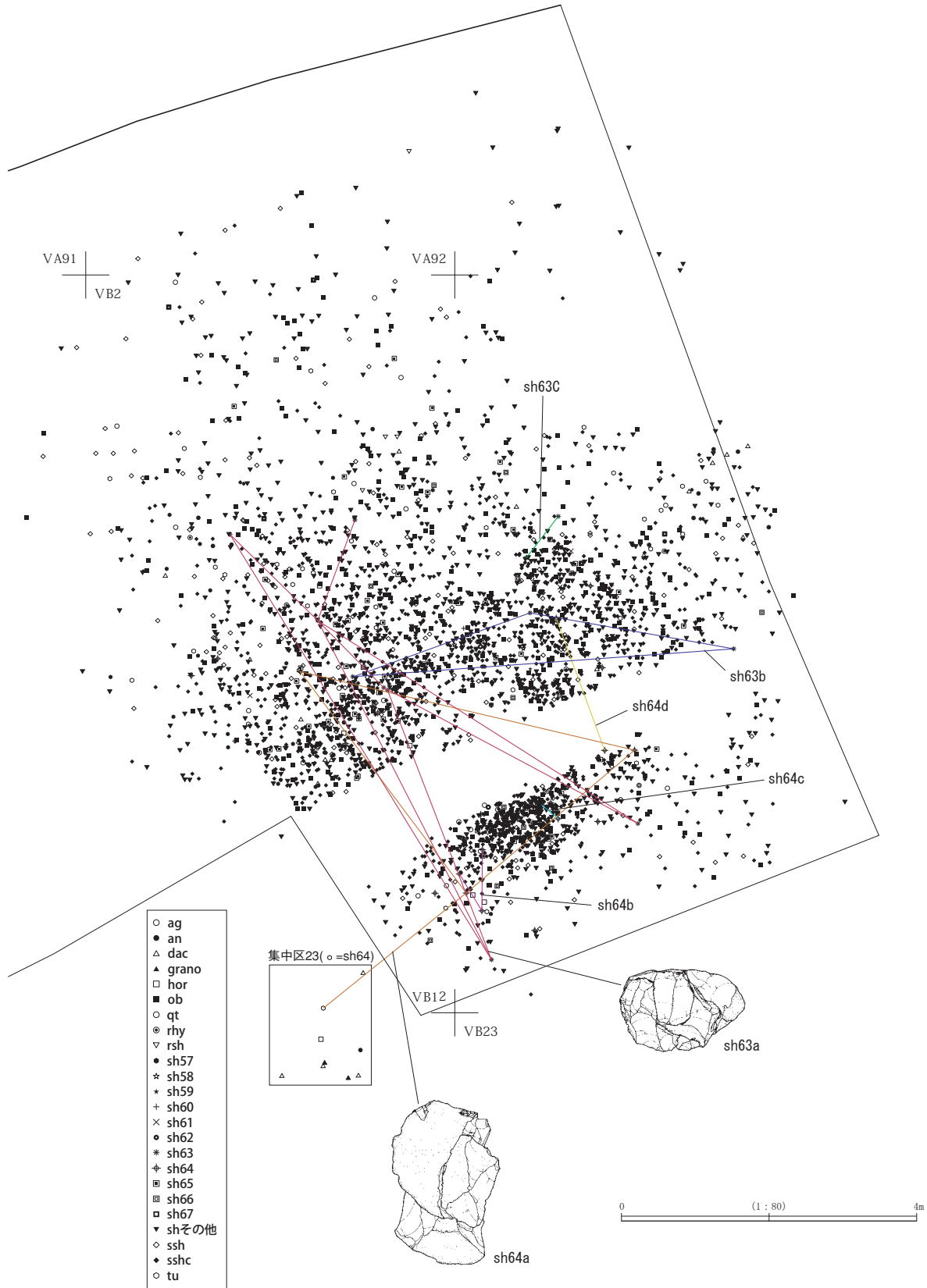
第194図 石器集中区18母岩別出土状況図 (1)



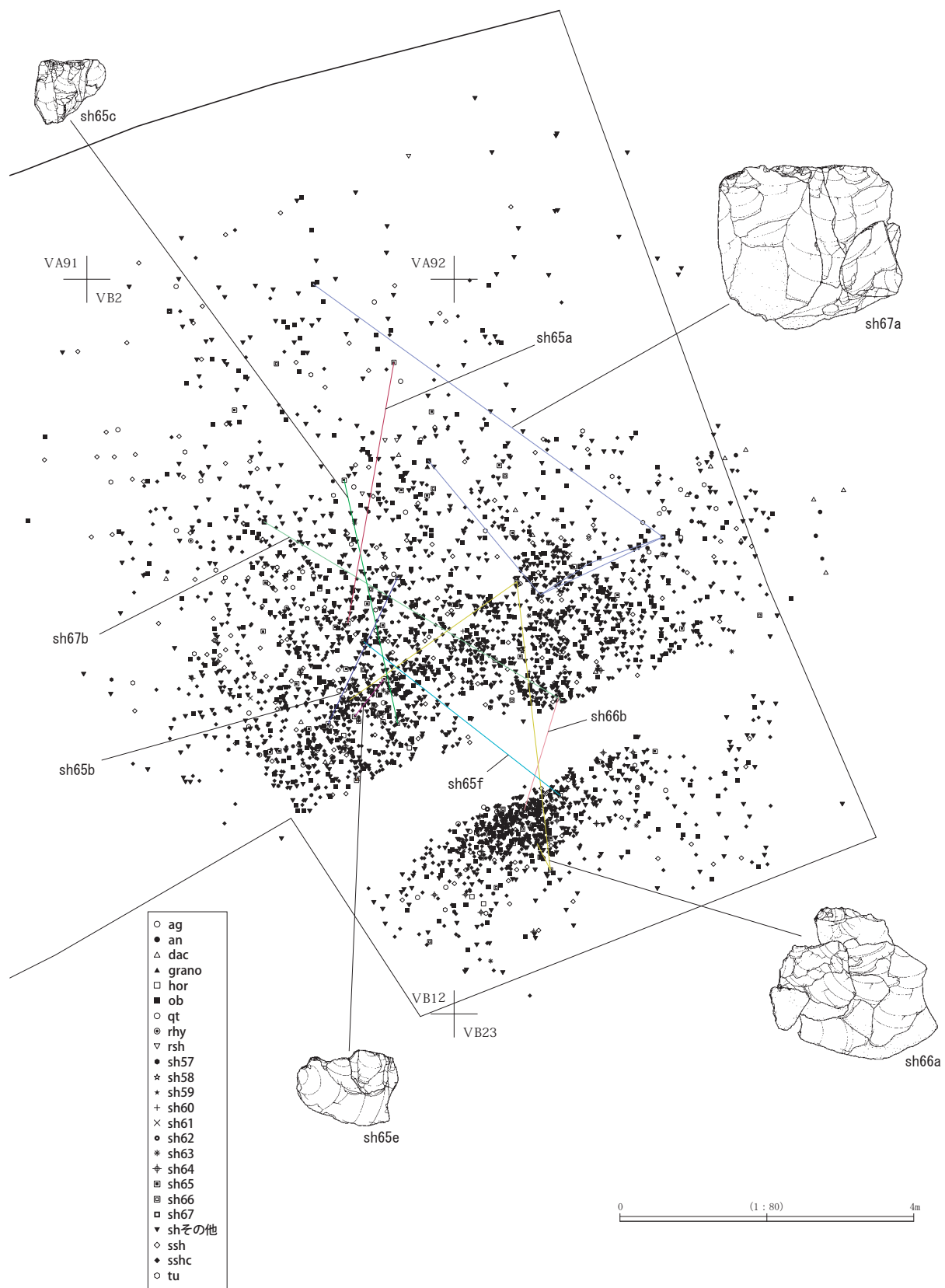
第195図 石器集中区18母岩別出土状況図 (2)



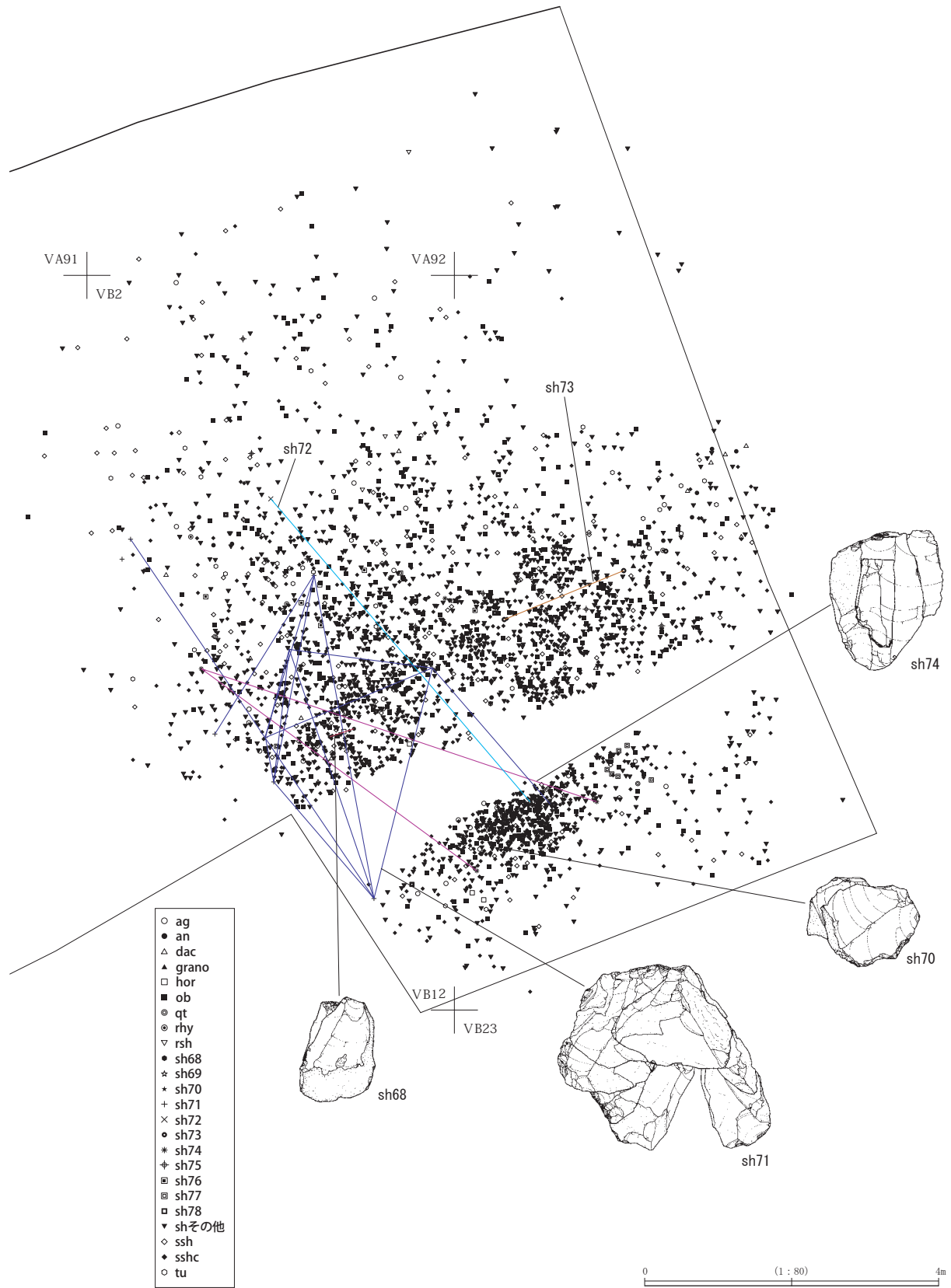
第196図 石器集中区18母岩別出土状況図 (3-1)



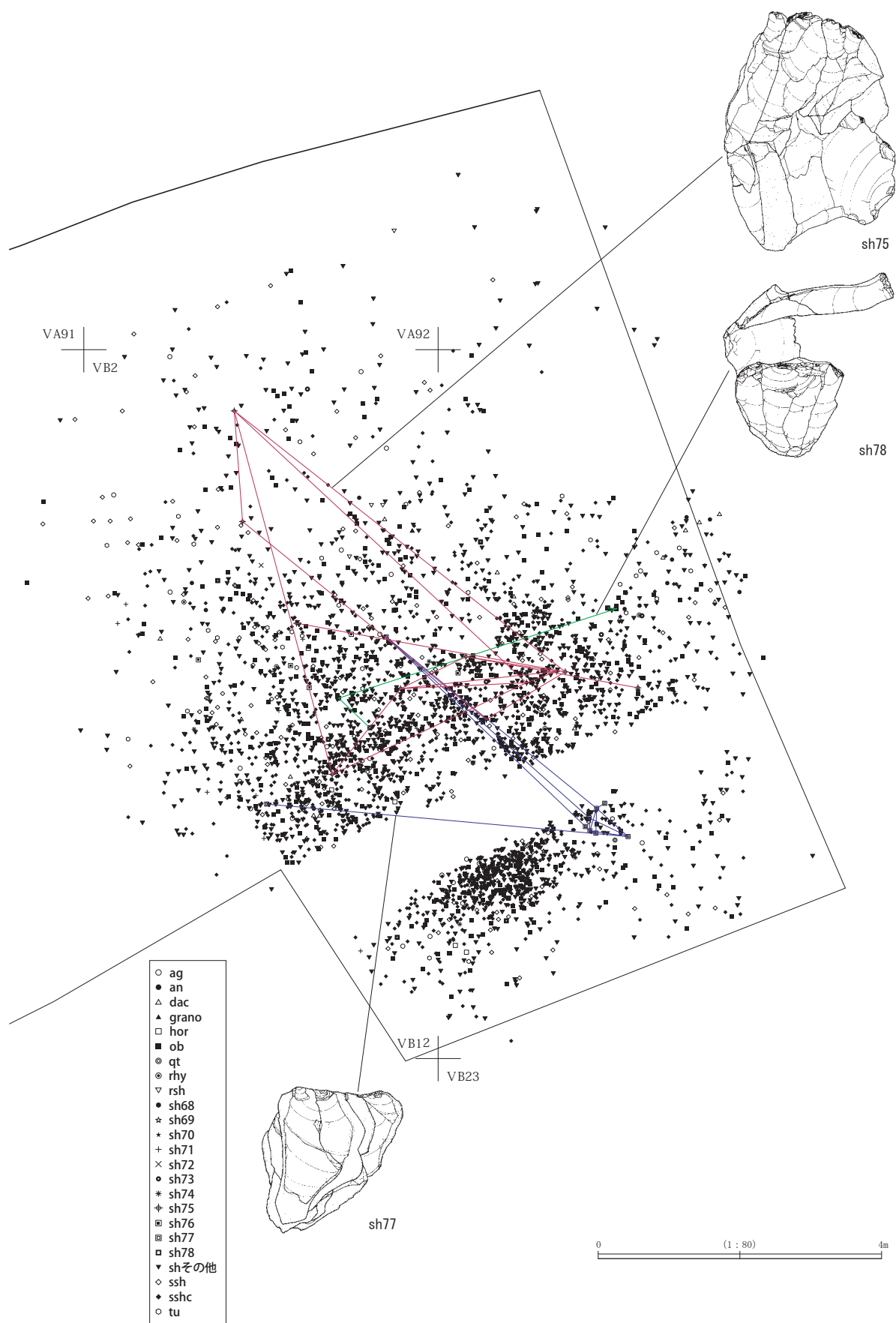
第197図 石器集中区18母岩別出土状況図 (3-2)



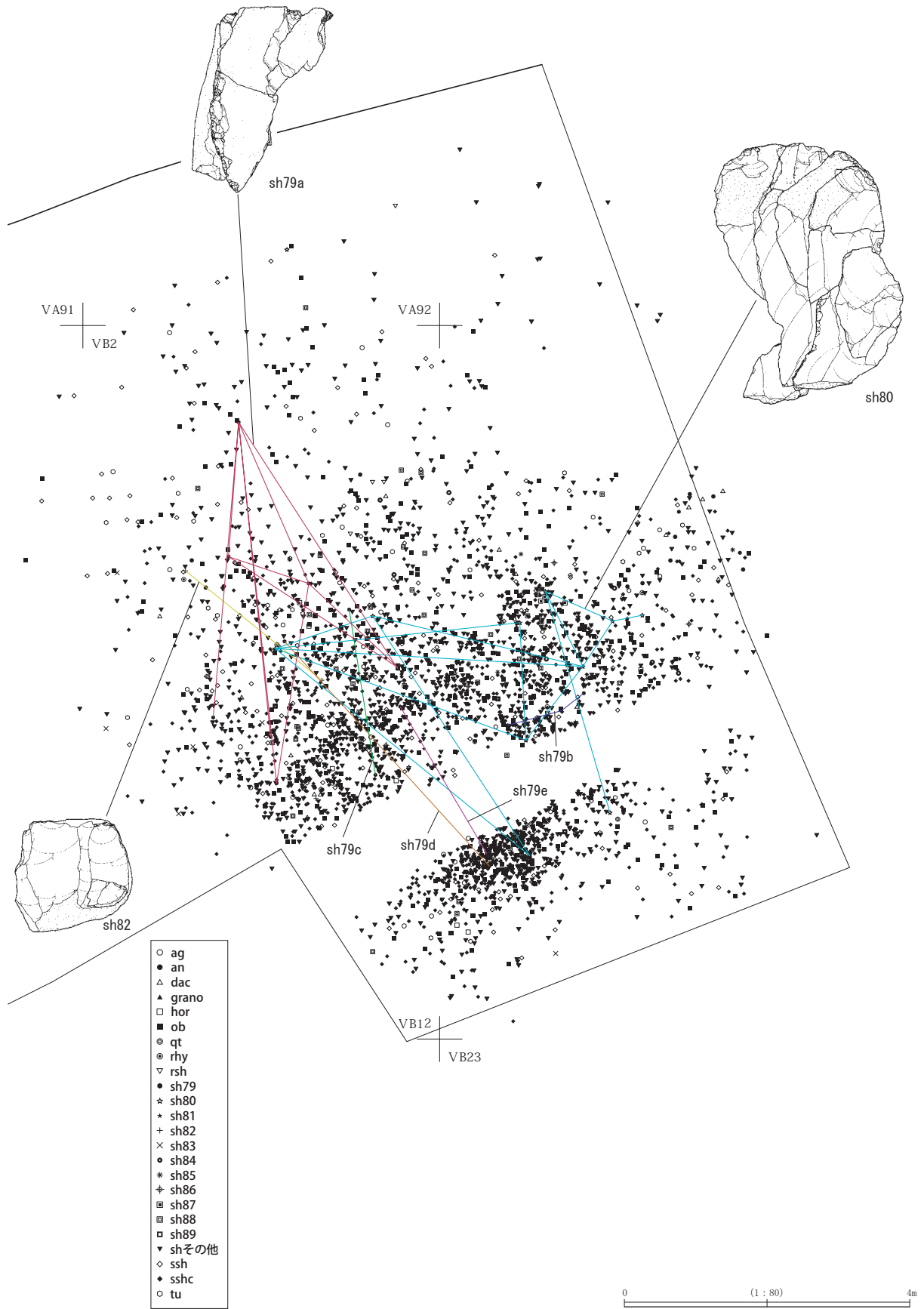
第198図 石器集中区18母岩別出土状況図 (3-3)



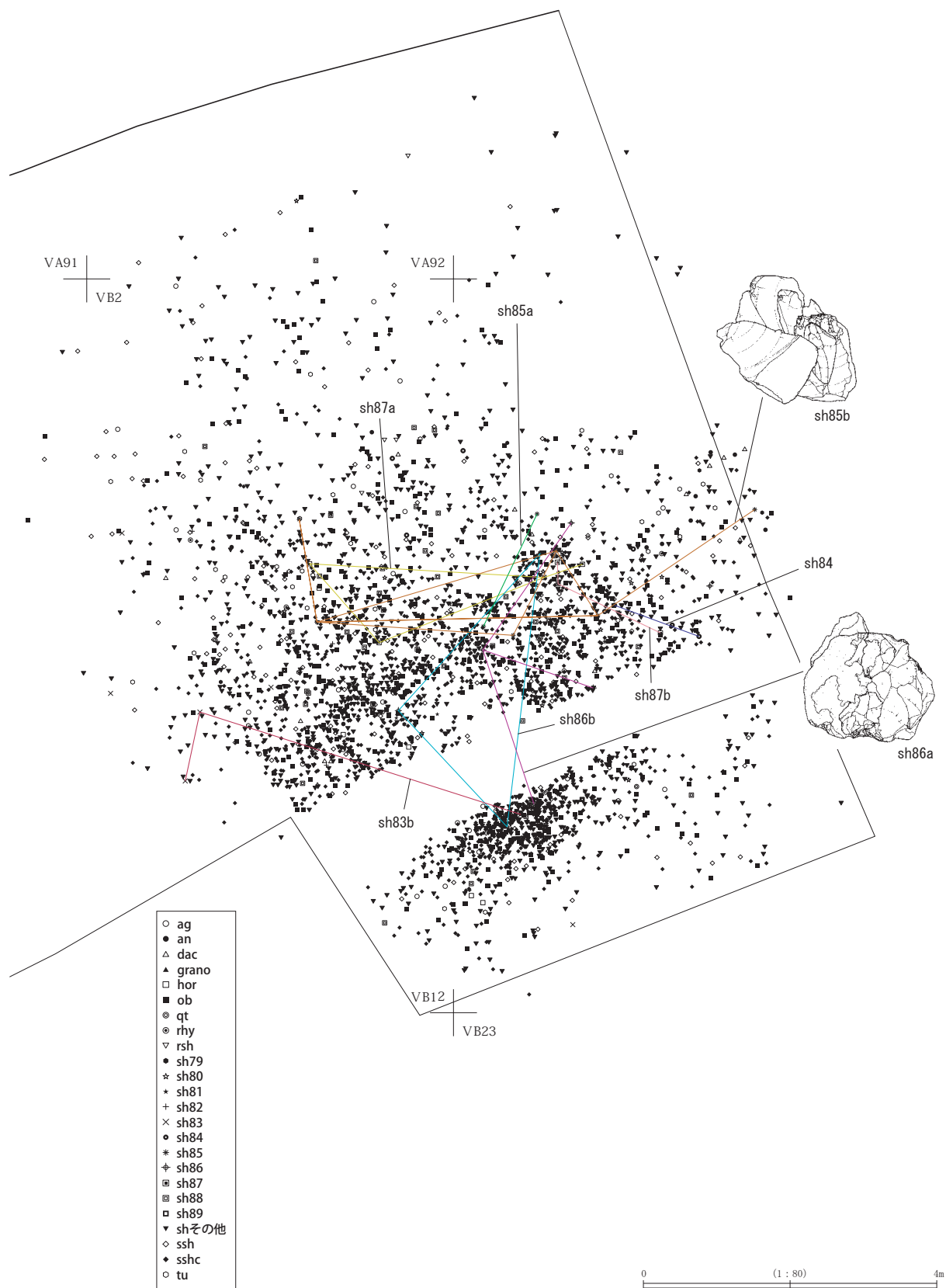
第199図 石器集中区18母岩別出土状況図 (4-1)



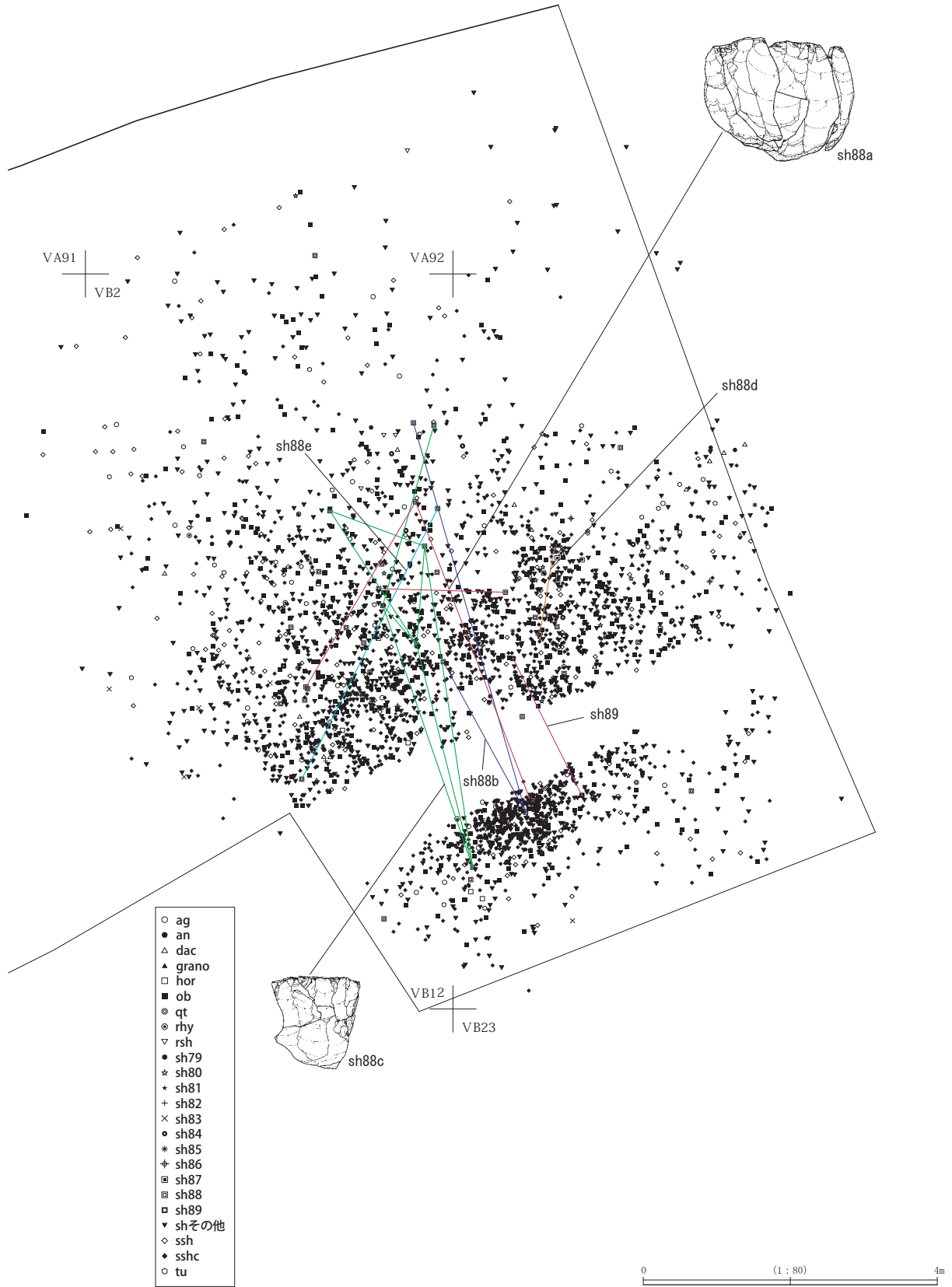
第200図 石器集中区18母岩別出土状況図 (4-2)



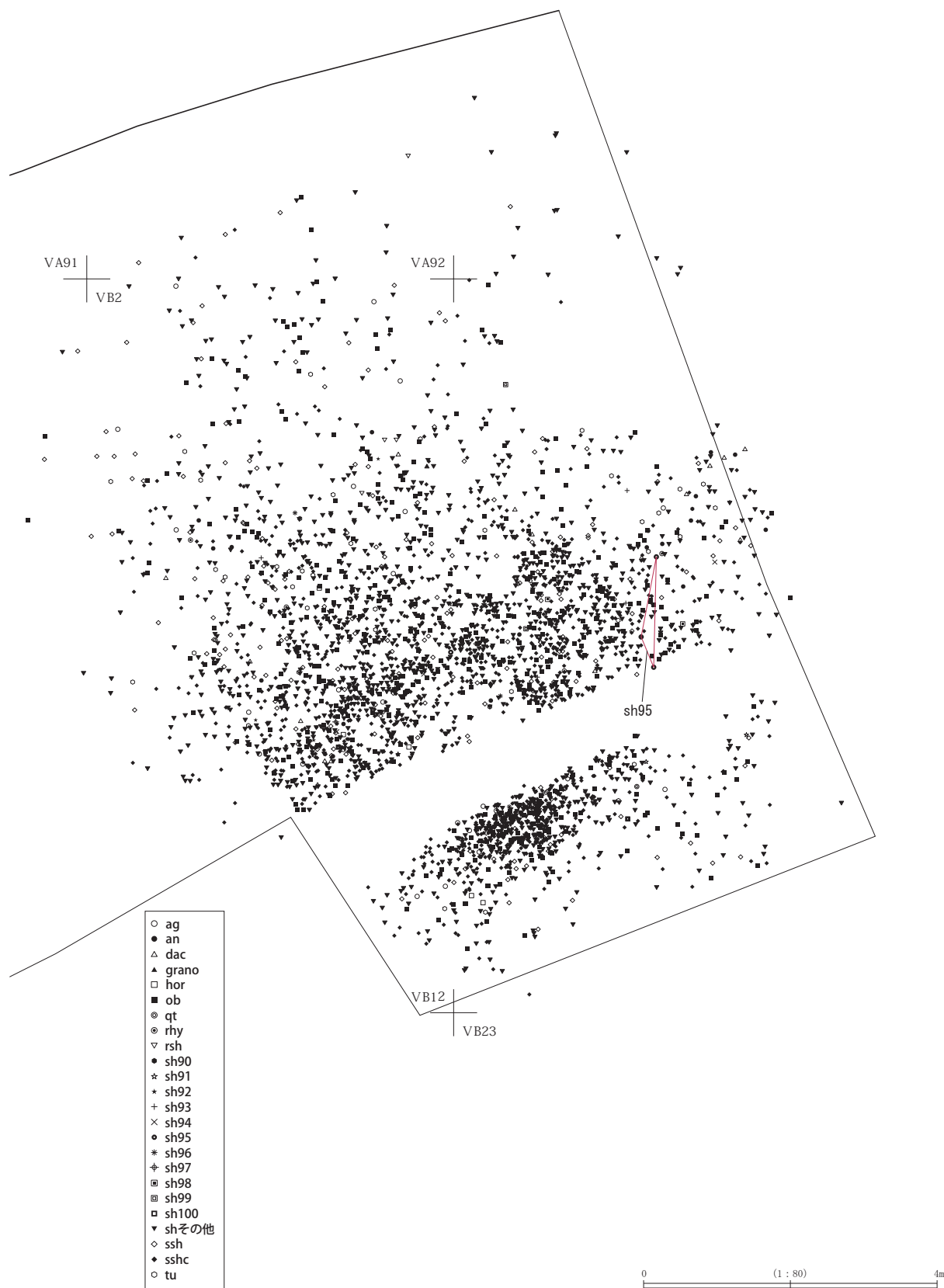
第201図 石器集中区18母岩別出土状況図 (5-1)



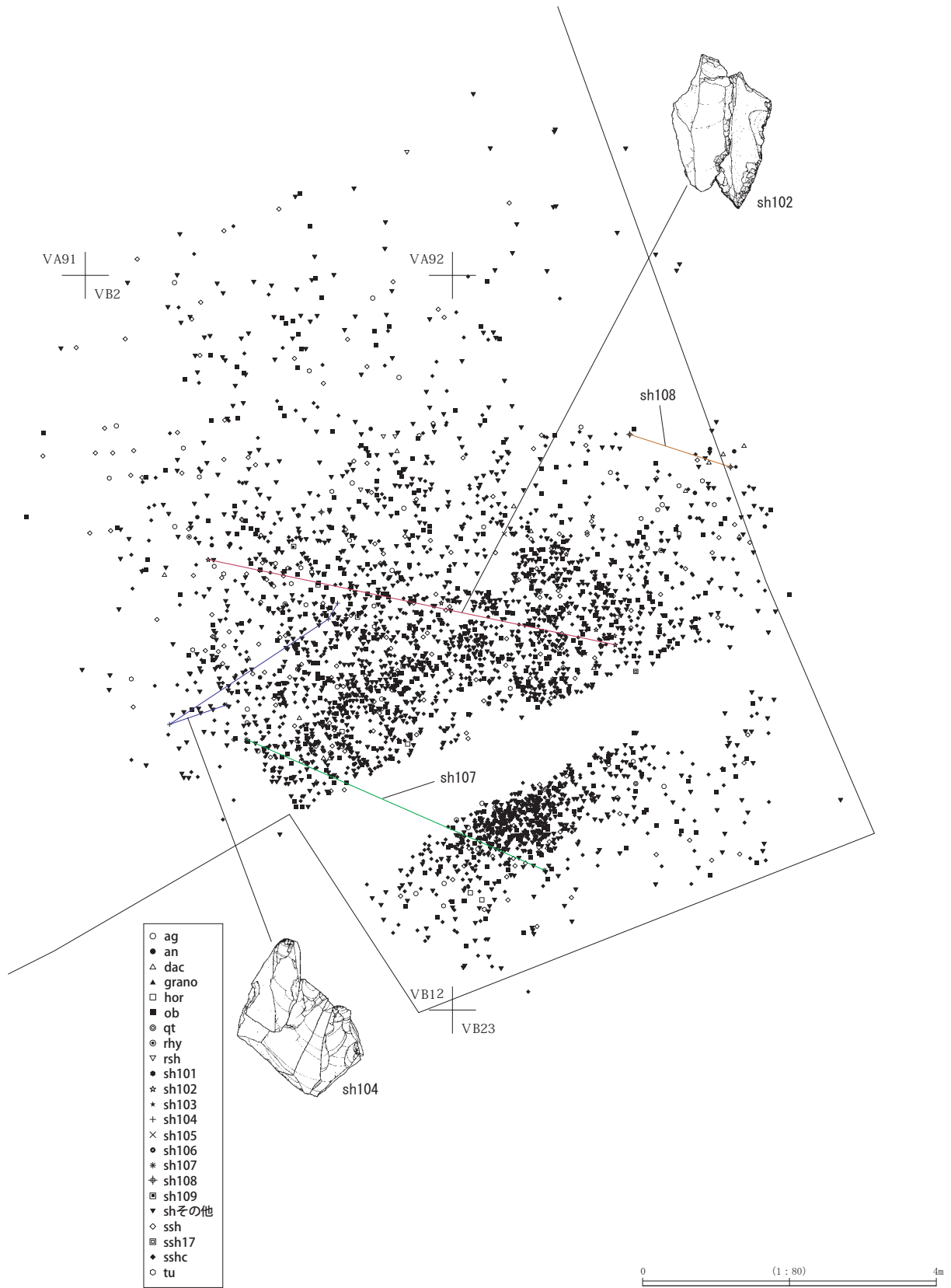
第202図 石器集中区18母岩別出土状況図 (5-2)



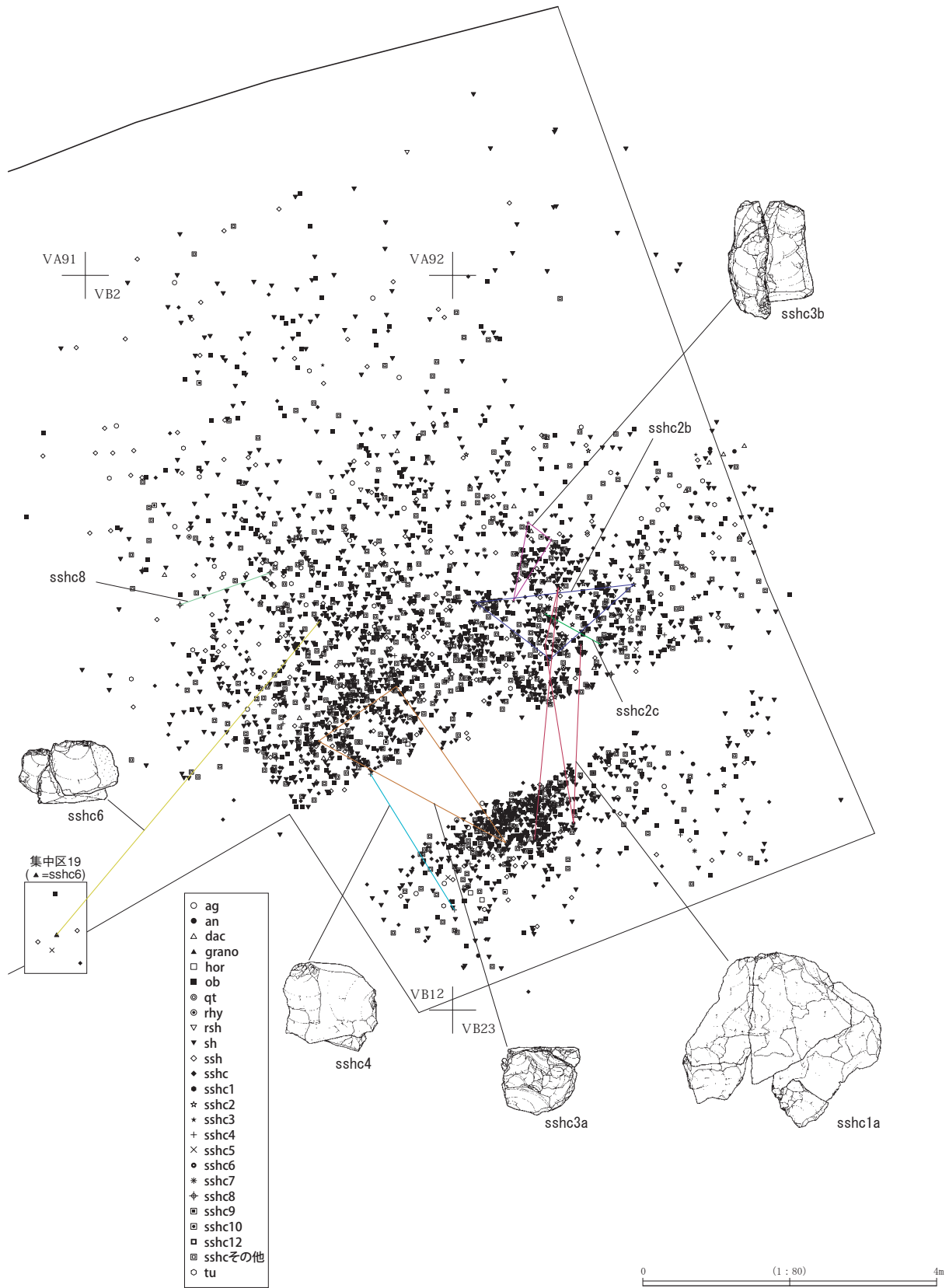
第203図 石器集中区18母岩別出土状況図 (5-3)



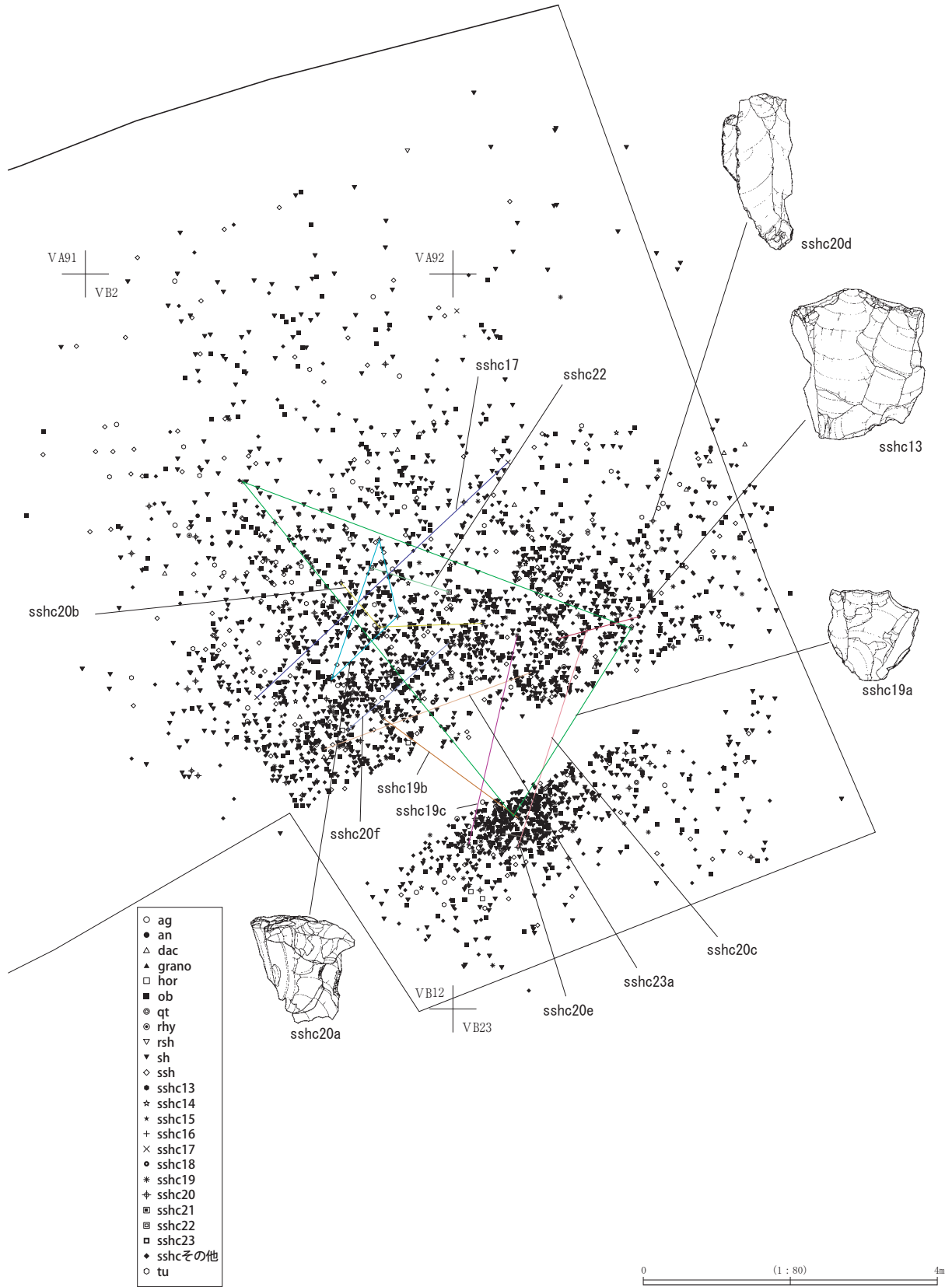
第204図 石器集中区18母岩別出土状況図 (6)



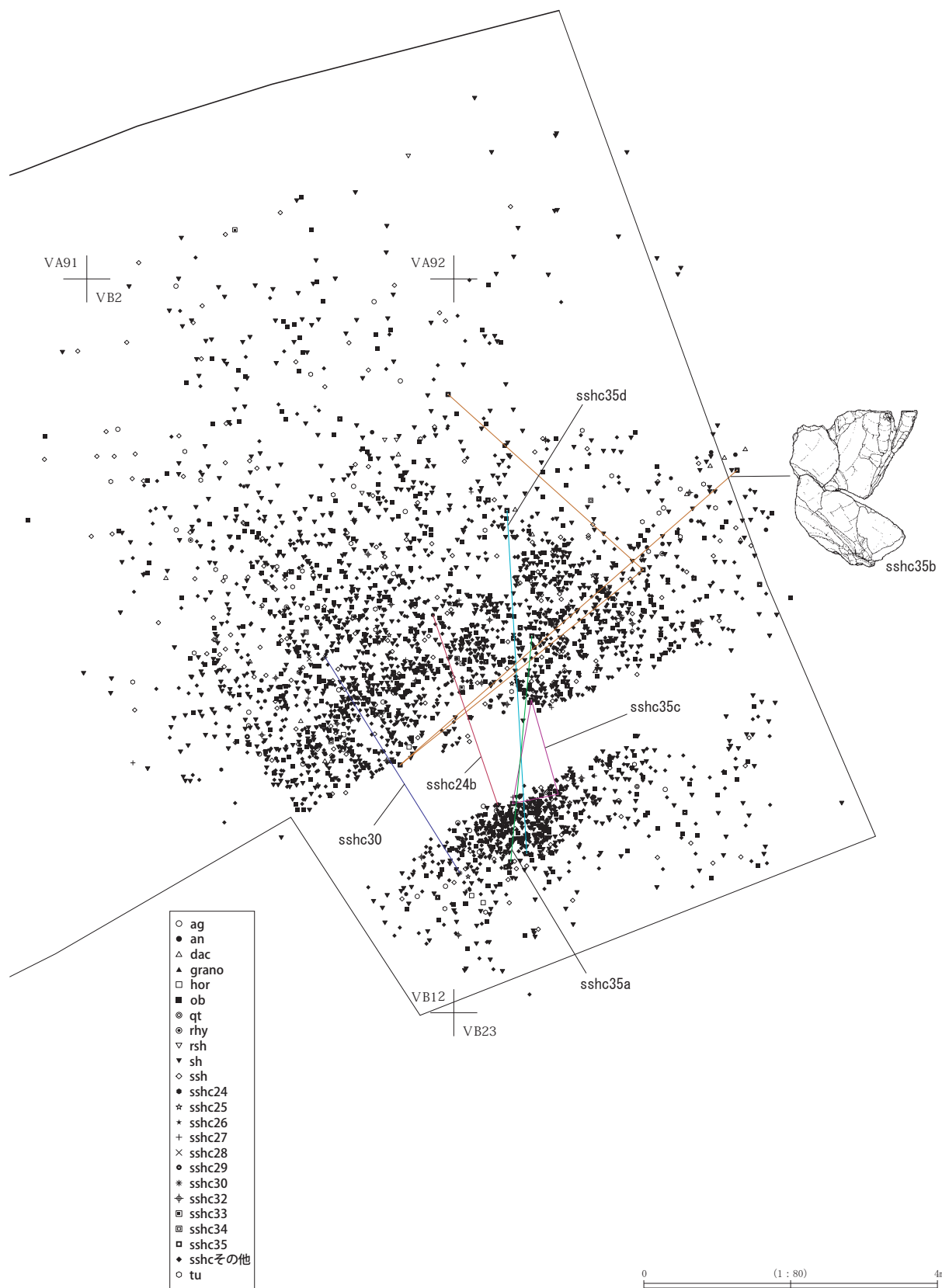
第205図 石器集中区18母岩別出土状況図 (7)



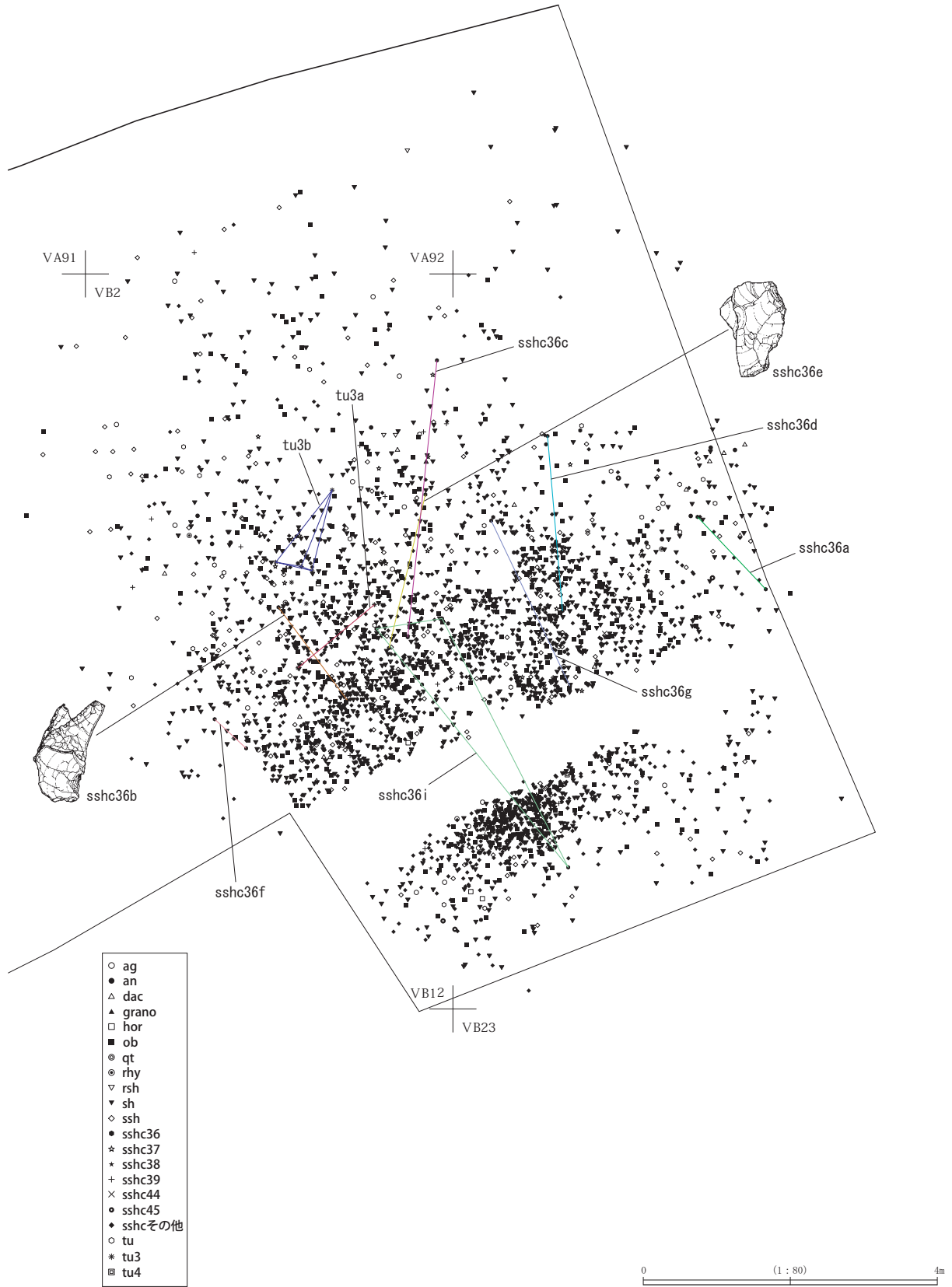
第206図 石器集中区18母岩別出土状況図 (8)



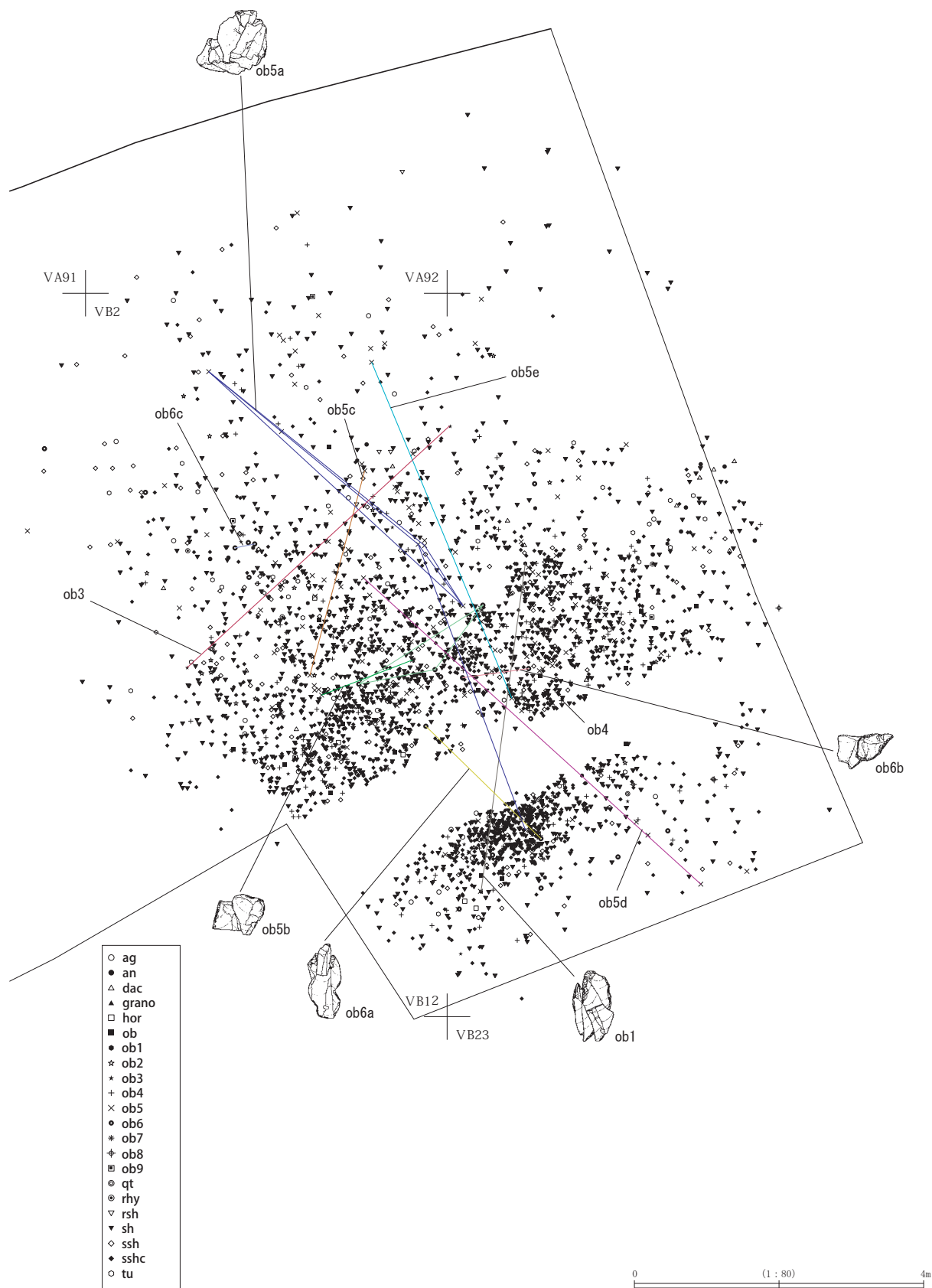
第207図 石器集中区18母岩別出土状況図 (9)



第208図 石器集中区18母岩別出土状況図 (10)



第209図 石器集中区18母岩別出土状況図 (11)

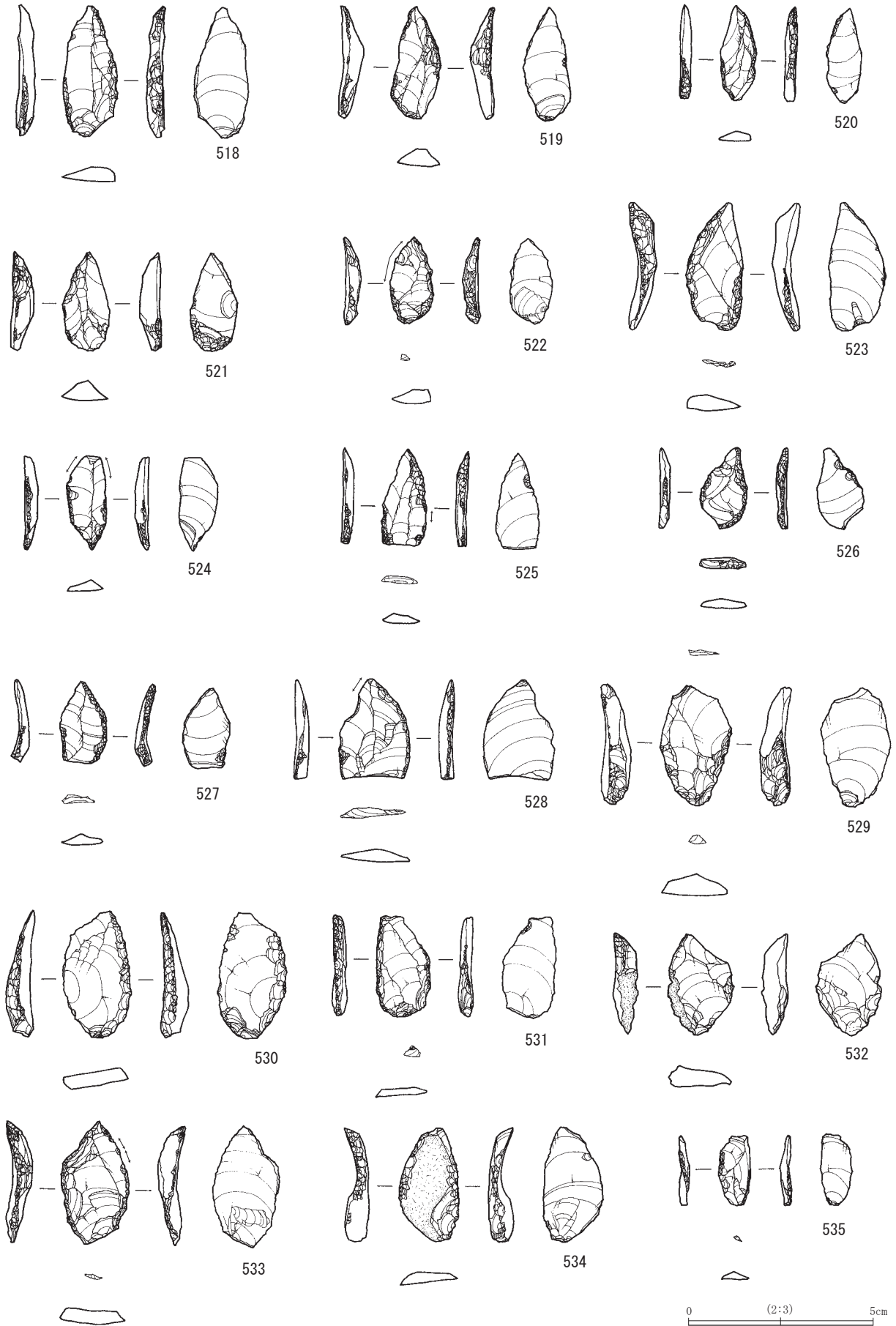


第210図 石器集中区18母岩別出土状況図 (12)

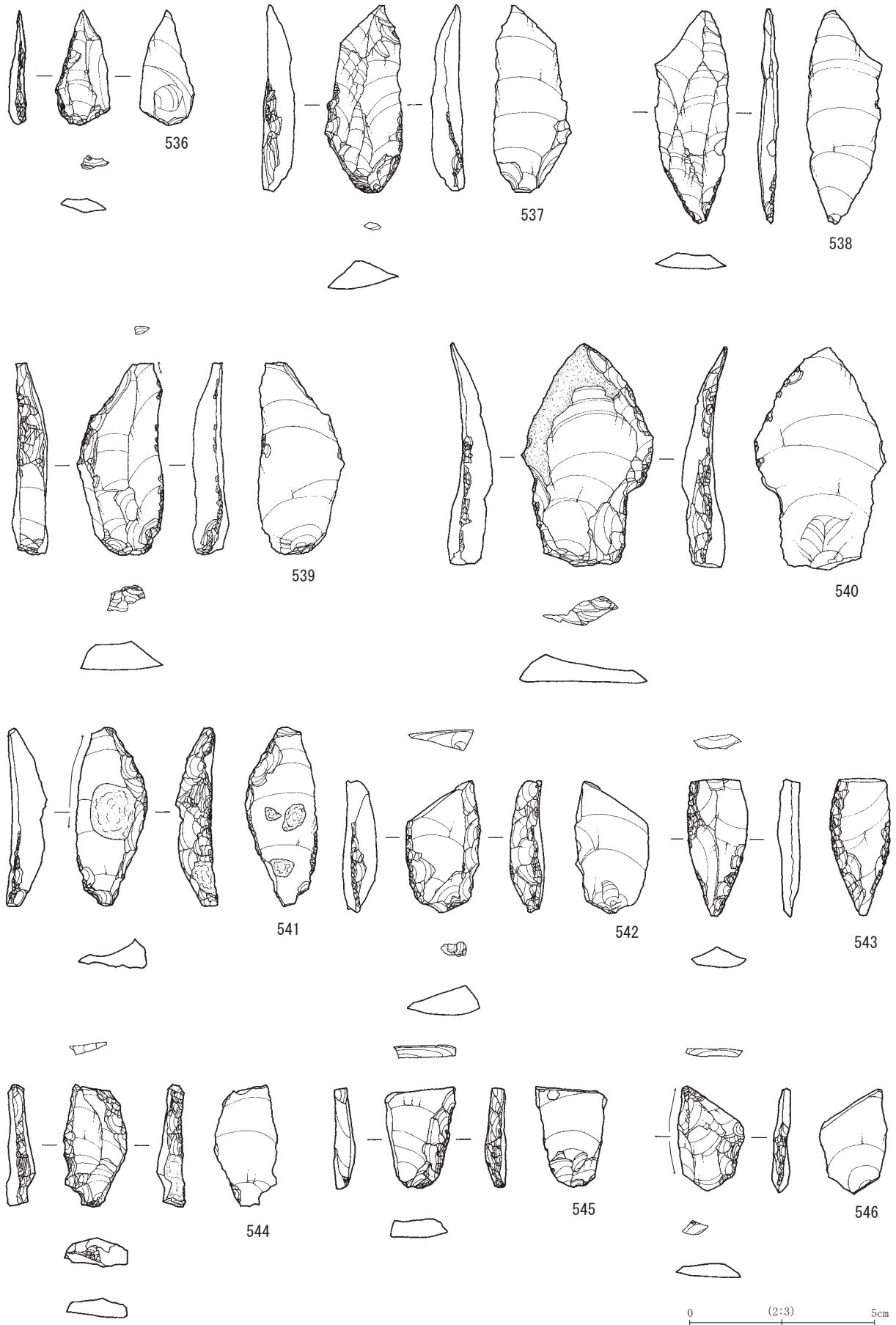
二側縁加工が主体を成している。これらは4 cm以下の小型が主体であり、中型が少量含まれる。518～528・530～535・542～544・546～549が二側縁加工であり、縦長剥片の側縁を切断するような加工を施す例と、横長剥片を横位に用い素材打点と下縁側に加工を施す例がある。前者が二側縁加工の主体を成しており、後者に該当するのは530・532のみである。この素材となる縦長剥片は背面と腹面剥離構成は同じである。この他には536の側縁加工、538の基部加工、529・540の基部+先端部などがある。541～554は刃部や基部が欠損している資料である。これらの中には周縁加工の尖頭器と判別できないものも含まれるが、区分できないことから一括して扱っている。石器材料は530・531・535・537・542～544・553は頁岩、538・540・541・545・549は珪質頁岩、519・520・522・529・532・533・536・539・546・547・551は玉髄質頁岩、518・521・524～528・534・548・550・552・554が黒曜石である。555～579・784は尖頭器。片面・両面周縁加工、片面・両面加工に分類され、片面周縁加工と片面加工が主体を成している。これらは4 cm以下の小型が主体であり、中型が少量含まれる。559～566・569～574・576・577が片面周縁加工で、断面は台形状を呈する。これらには縦長剥片を素材とし、素材打面を基部側か先端部側に据え周縁に加工する例と、横長剥片を横位に用い素材打面側と下縁に加工を施し先端部を作出している例がある。前者が片面周縁加工の主体を成しており、後者に該当するのは562・563・566のみである。この素材となる縦長剥片は背面と腹面の剥離方向が概ね同じである。556～558・567・568は片面加工で、断面は三角形を呈する。縦長剥片を素材とし、打面を基部側に据えている。567や568のように素材打面が残存しているものも認められる。555・579は両面加工、578は両面周縁加工で1点ずつ確認されている。784は欠損しているため全容不明だが、中型で先端部を作出しているものと思われる。石器材料は564・567・568・570・571・573・578・784は頁岩、569は珪質頁岩、558～560・563・565・566・572・574は玉髄質頁岩、555～557・561・562・575～577・579は黒曜石である。580～582は彫刻刀形石器で、型式不明である。580は神山型に類似した彫刻刀面を作出しているものの、腹面側に調整が認められない。580・581が頁岩、582が黒曜石である。583～622はスクレイパー。本集中区においてtool類の中で最も出土量が多い器種である。形態は多様でエンドやラウンド、サイドに分類され、エンドスクレイパーが主体を成している。これらの素材にはナイフ形石器や尖頭器と異なり、やや厚手の縦長剥片が用いられている。エンドやラウンドスクレイパーの刃部はU字形となるが、599・604・620のように先端部を作り出す刃部も認められる。また、605の左側面には彫刻刀面と思われる剥離面が認められることから、彫刻刀形石器から転用された可能性がある。石器材料は頁岩が主体で、玉髄質頁岩、珪質頁岩、黒曜石が用いられている。623は両面加工石器。624・625・628は二次加工を有する剥片である。624・625などは小型ナイフ形石器の形態及び二次加工が類似している。626・627は彫刻刀形石器の削片。629は剥片、630は石刃であるが、どちらも石刃技法の存在を窺える資料である。また、本集中区では、石刃を素材としているtoolが少なからず認められていることから、その存在を十分に裏付けられる。632・633は石核で、小型剥片を目的剥片として剥離していたものである。石器材料は623・626・629・630は頁岩、627・633は珪質頁岩、624・625・632・633は玉髄質頁岩、628・631は黒曜石である。634～661・665は敲石。なかには磨面が認められるものがある。石材はデイサイトや安山岩が主体である。662～664は台石。石器材料は662は安山岩、664はデイサイト、663は凝灰岩である。

また、集中区外からの出土である984～987などのナイフ形石器、997・999などの尖頭器については400・401頁に記載している。概ね上記に形態に含まれる。また、下記の母岩に属するものである。

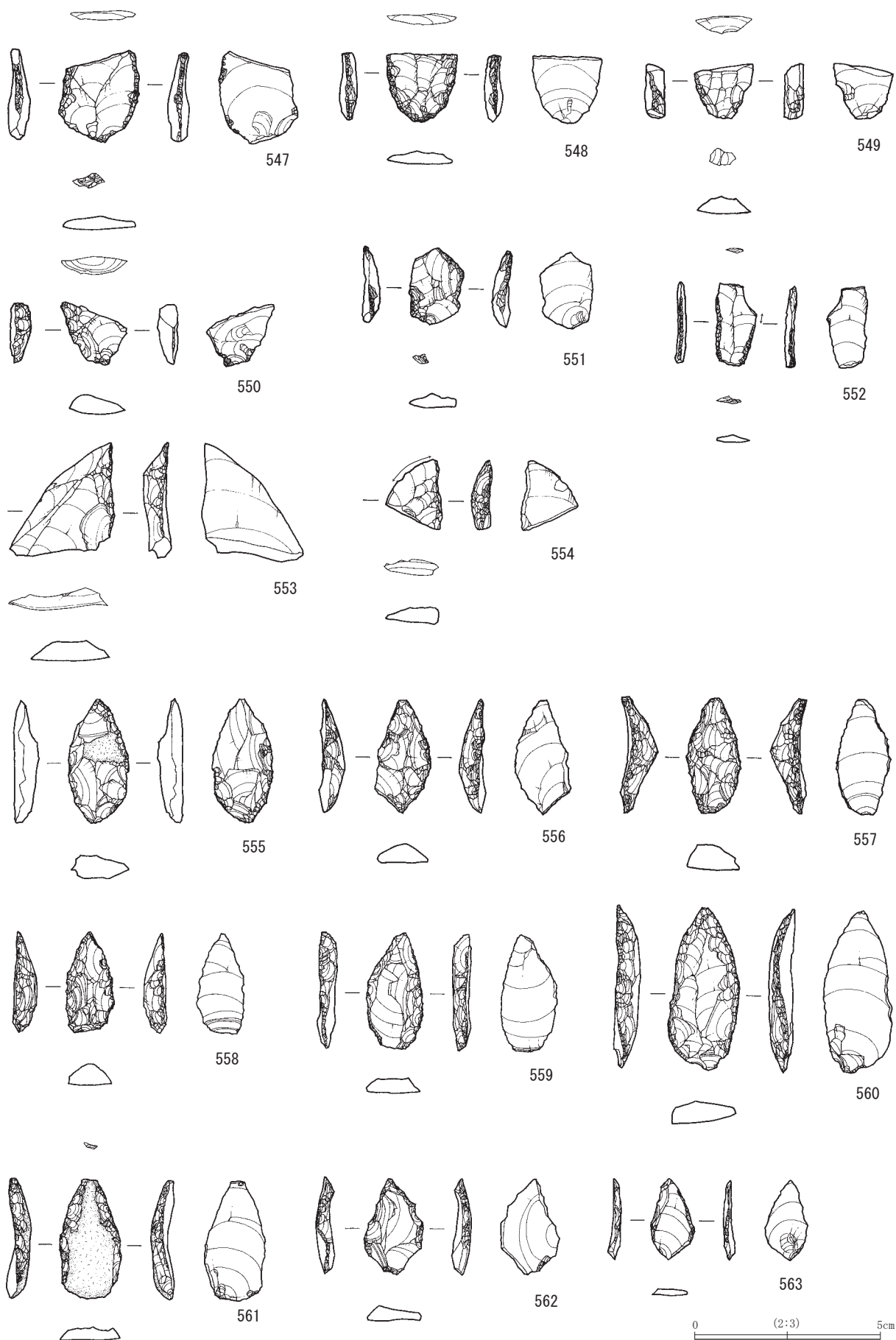
上記の石器から113母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。これらは概ね本集中区に主体を有しているが、21母岩が集中区19、7母岩が集中区23、3母岩が集中区17、1母岩が集



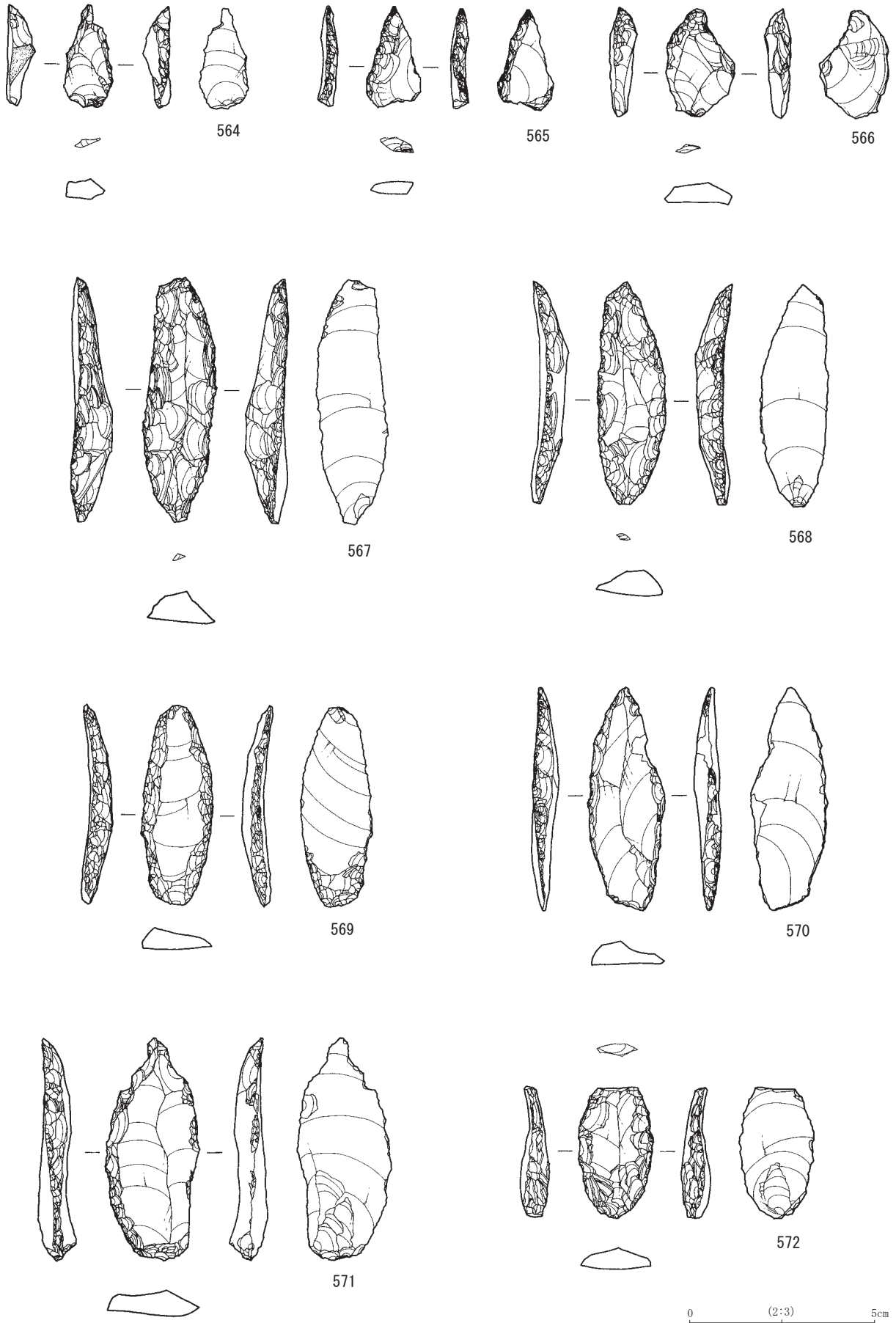
第211図 石器集中区18出土遺物 (1)



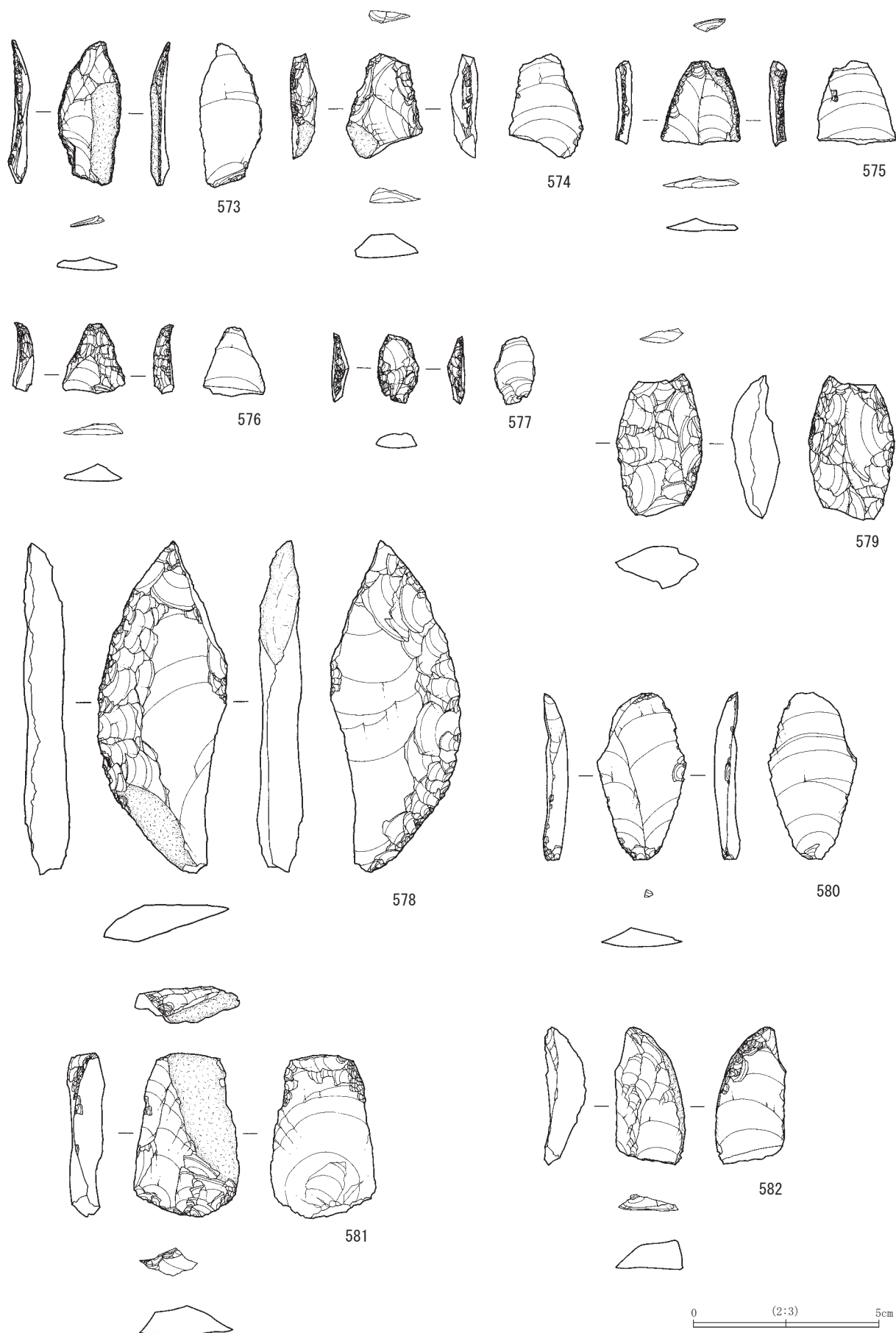
第212図 石器集中区18出土遺物 (2)



第213図 石器集中区18出土遺物 (3)



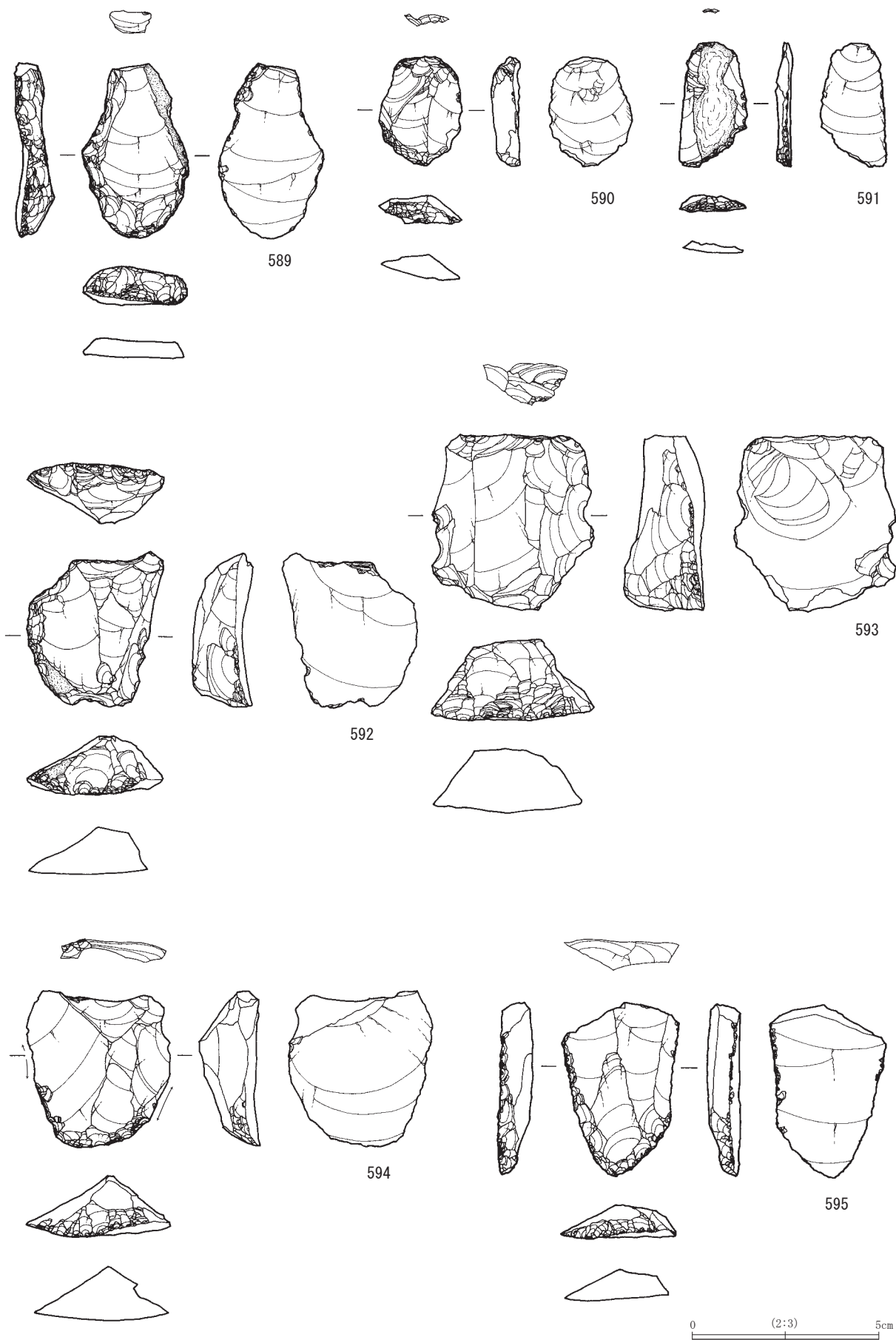
第214図 石器集中区18出土遺物 (4)



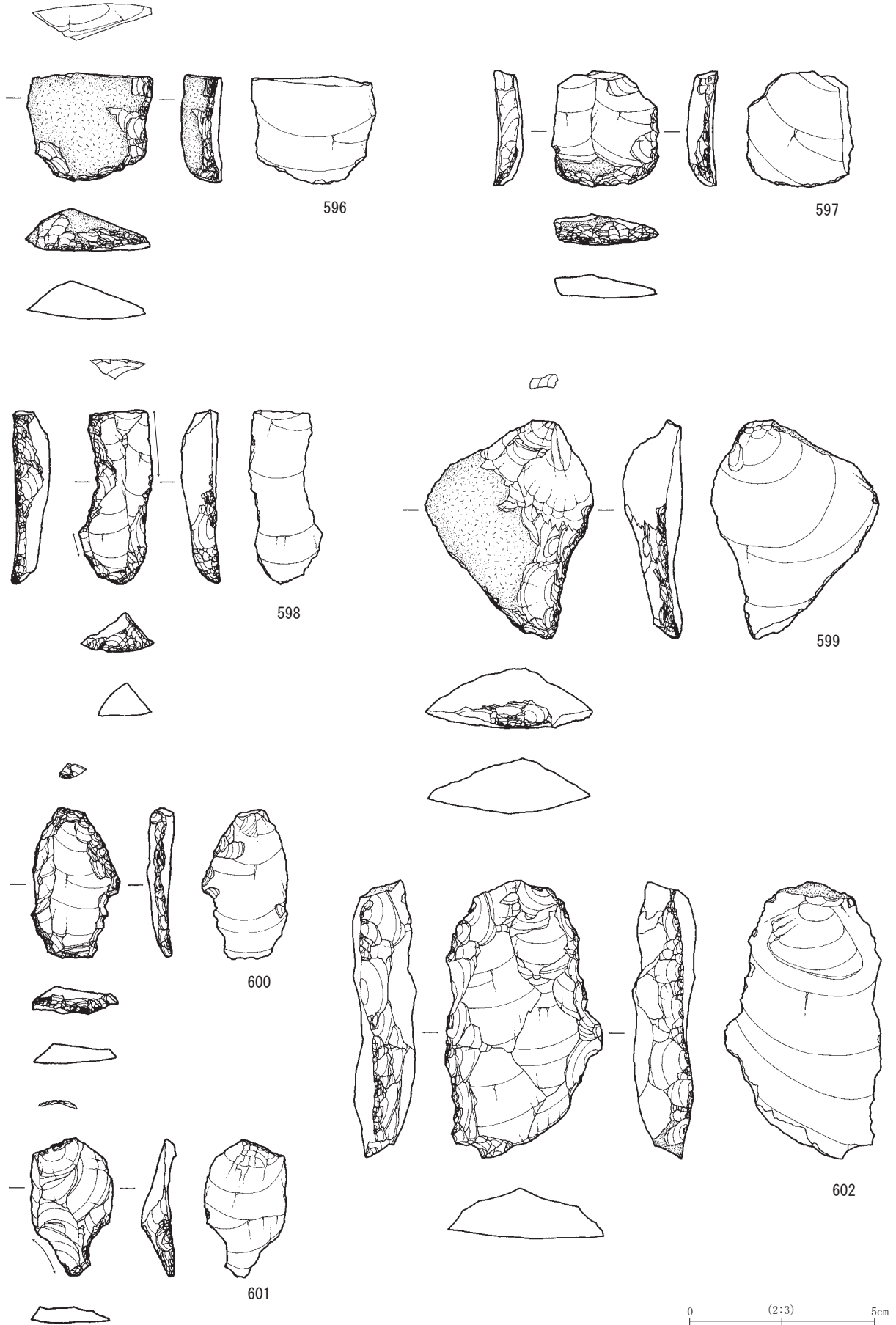
第215図 石器集中区18出土遺物 (5)



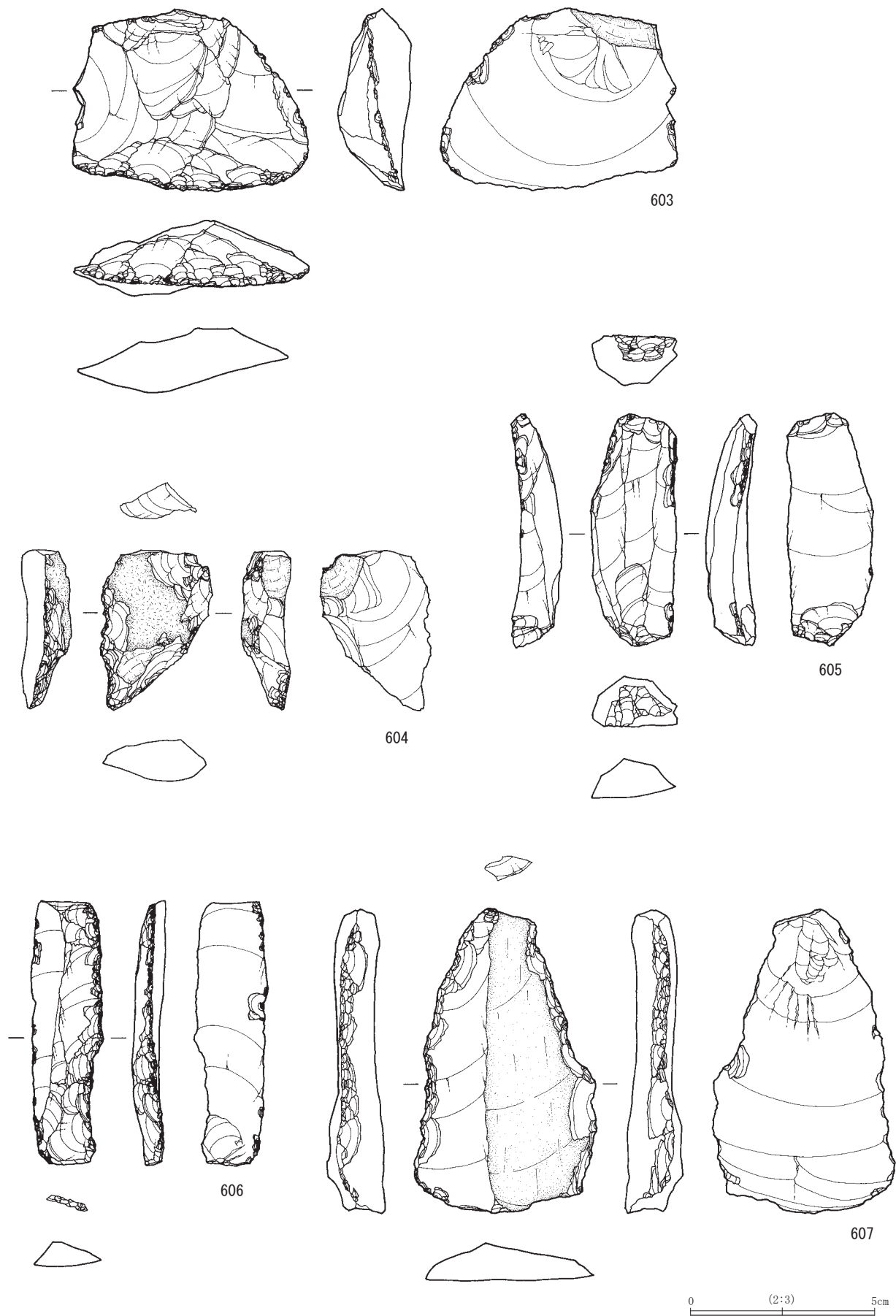
第216図 石器集中区18出土遺物 (6)



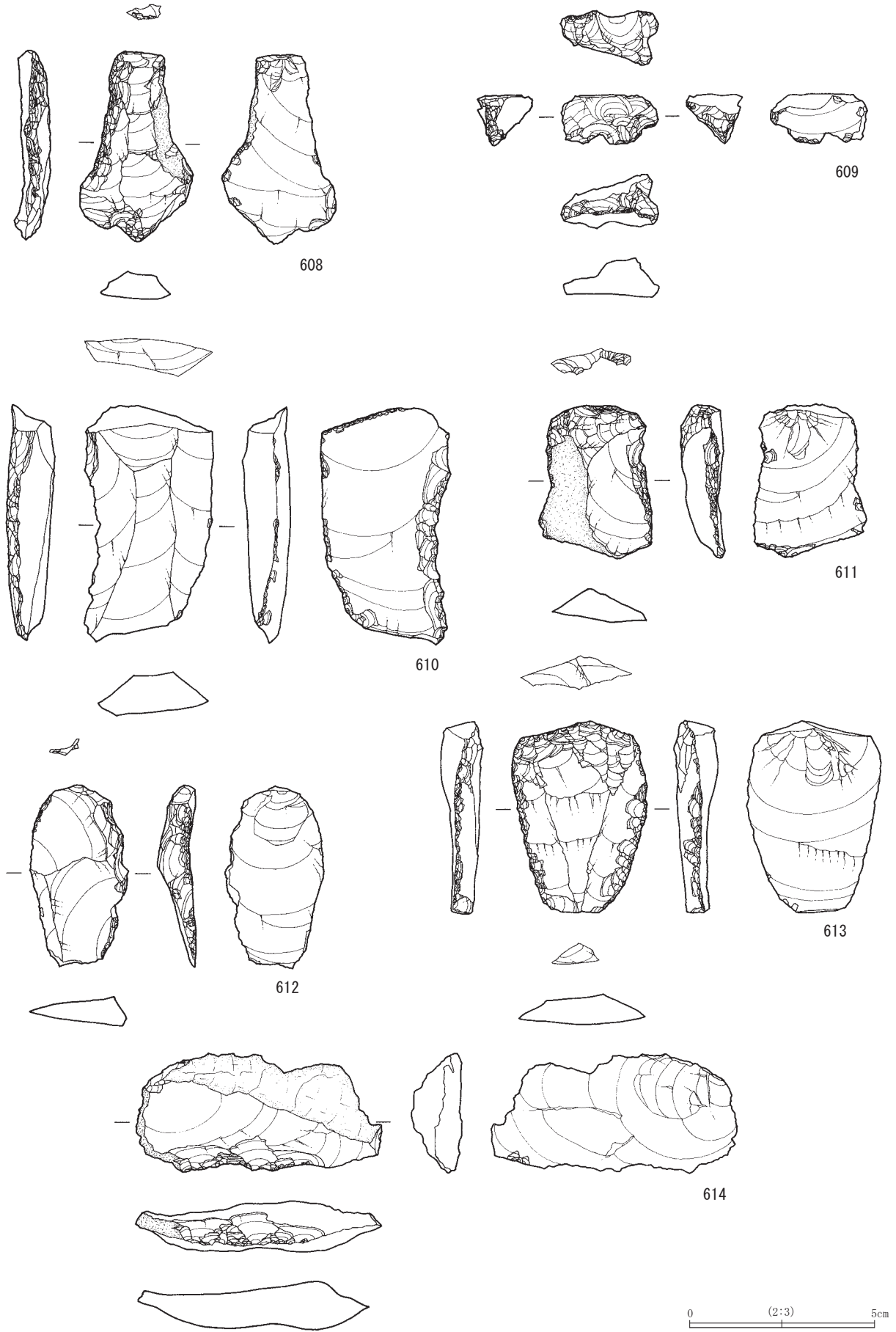
第217図 石器集中区18出土遺物 (7)



第218図 石器集中区18出土遺物 (8)



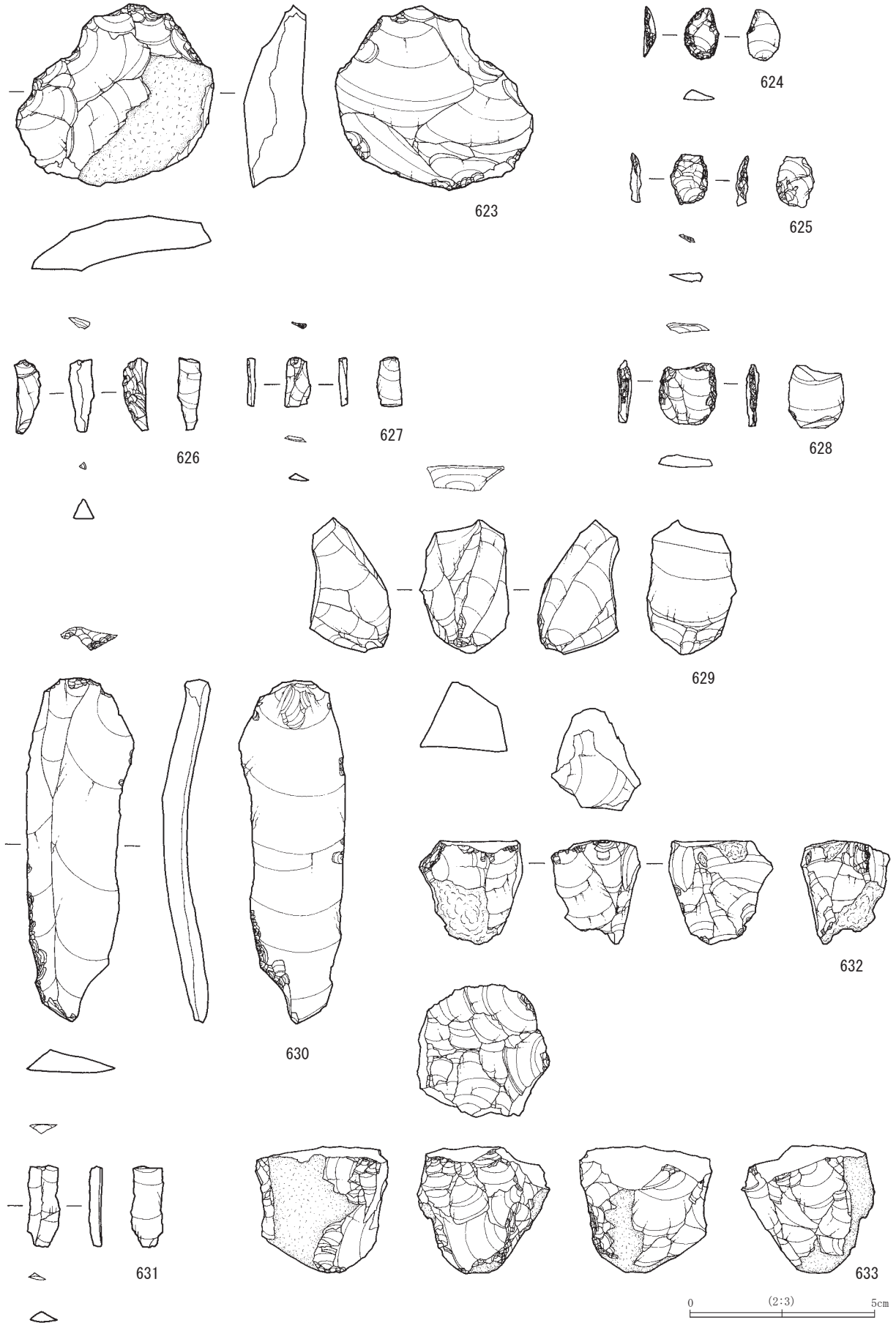
第219図 石器集中区18出土遺物 (9)



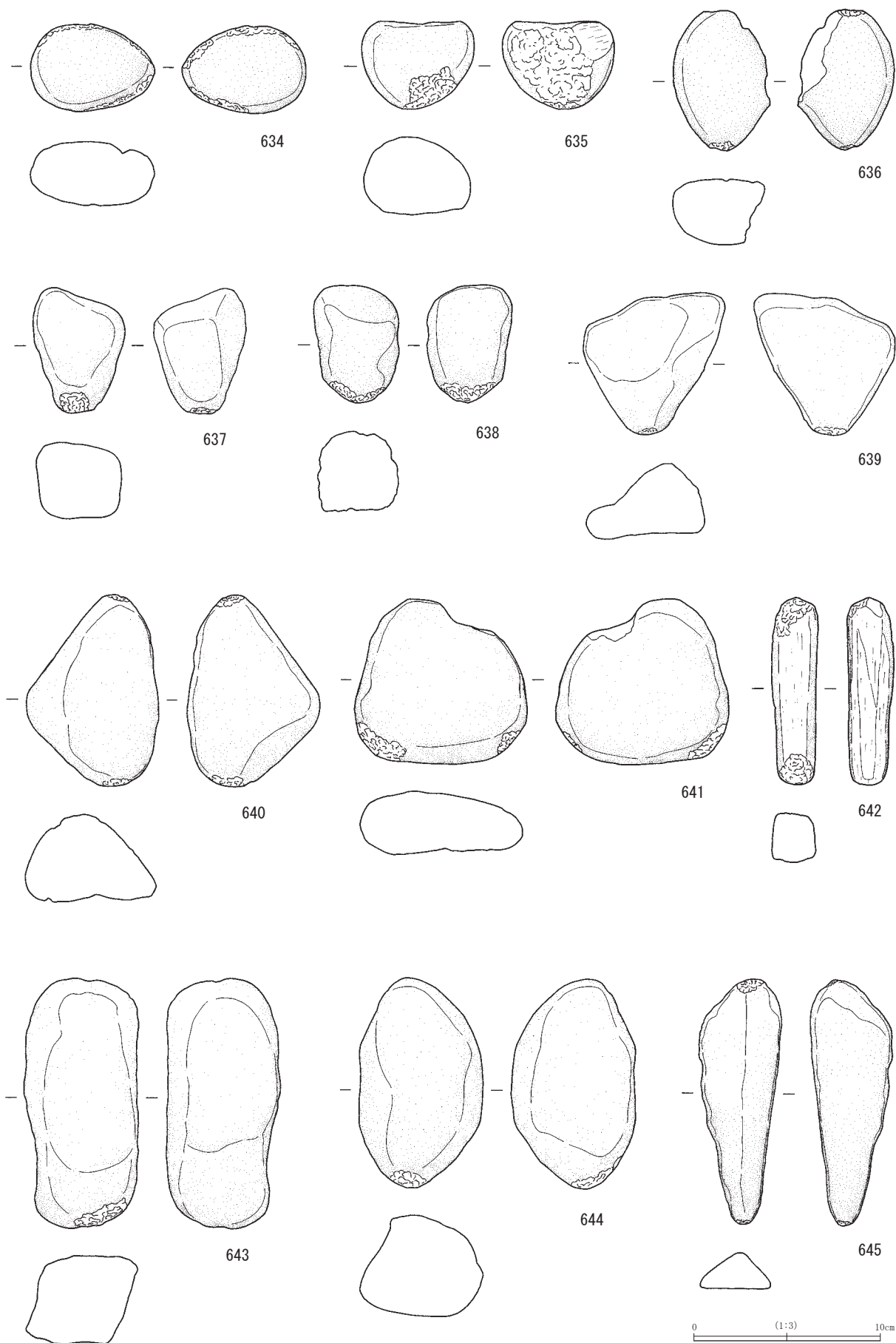
第220図 石器集中区18出土遺物 (10)



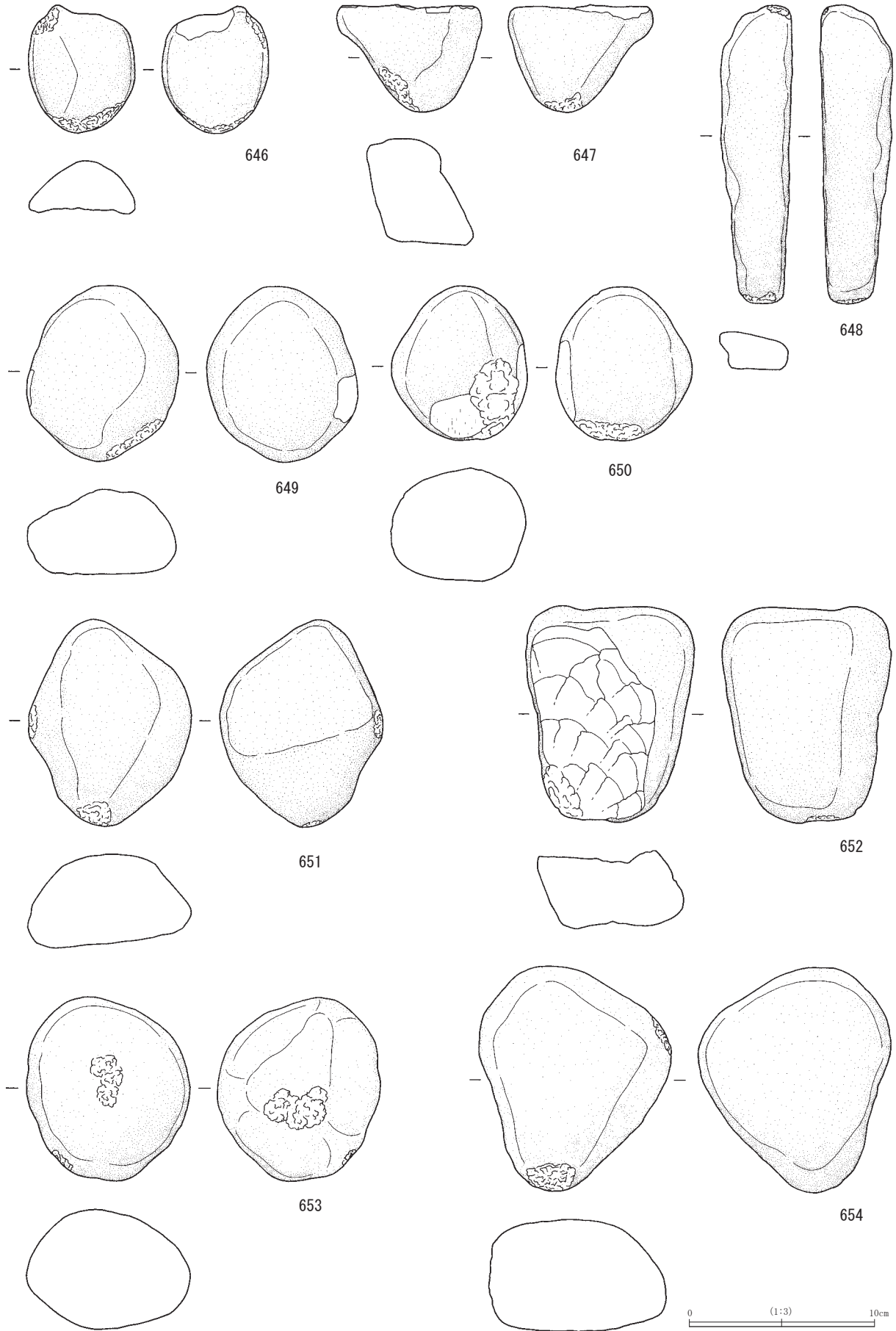
第221図 石器集中区18出土遺物 (11)



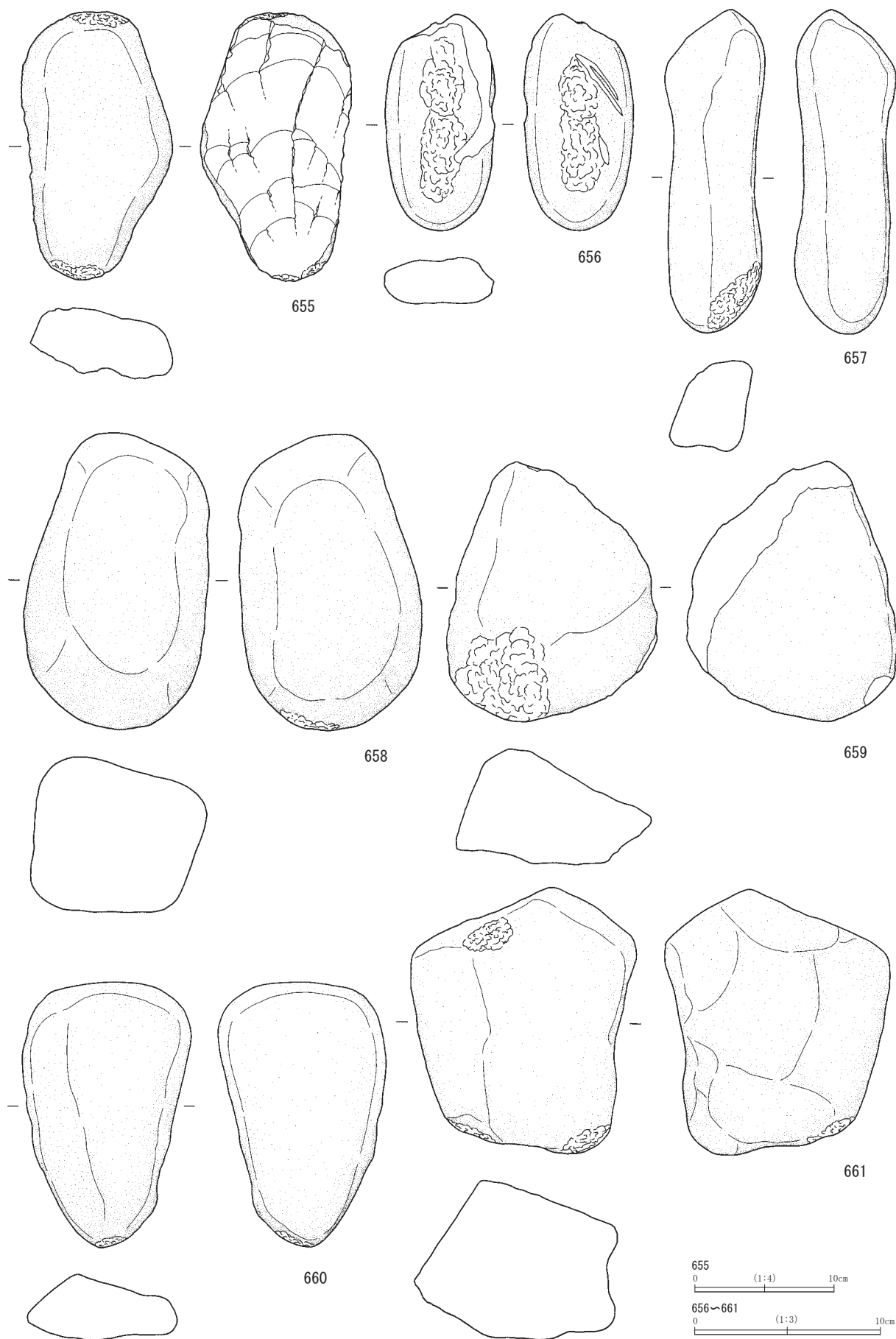
第222図 石器集中区18出土遺物 (12)



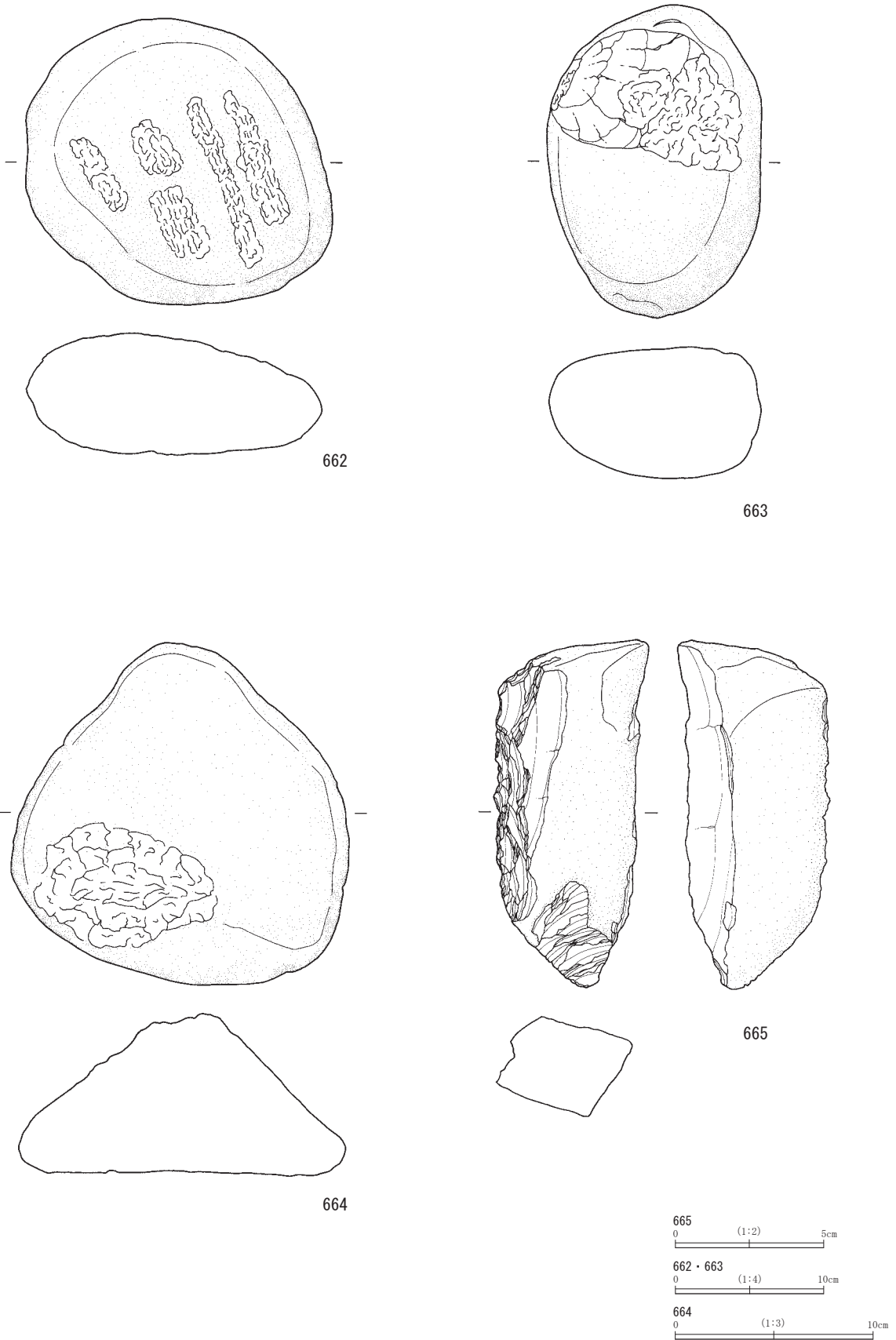
第223図 石器集中区18出土遺物 (13)



第224図 石器集中区18出土遺物 (14)



第225図 石器集中区18出土遺物 (15)



第226図 石器集中区18出土遺物 (16)

中区12・24に跨っている。

sh26：総点数2点、総重量90.34g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。礫面は黄灰～灰白色を呈する。石質は緻密でややなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh50：総点数9点、総重量145.46g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、灰白色が層状に入る。礫面は黄灰～淡黄色を呈する。石質は緻密でやや光沢をもち、なめらかである。

接合点数は3点あり、上記の器種からなる。剥離工程は667→668→666である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。作業面は弧状に形成されており、対となる裏面には礫面が残置している。上設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離した後に、正面図右側において最終的に複数回剥離を試みるものの剥離は停止している。打面形成・再生に伴い90度打面転位をしているが、目的剥片剥離作業は基本的に単設打面で行われている。

本母岩は中型の亜角礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh51：総点数5点、総重量127.08g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は褐灰を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

接合点数は2点あり、上記の器種からなる。剥離工程は669→670である。本個体は打面形成の過程に伴う資料である。接合図正面が打面、上面が作業面にあたる。打面形成した後に、90度打面転位させ上設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。本来の作業面は石核正面にあたり弧状に形成されており、対となる裏面には礫面が残置している。打面形成・再生に伴い打面転位をしているが、目的剥片剥離作業は基本的に単設打面で行われている。

本母岩は中型の亜円礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh53：総点数8点、総重量253.37g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・黒褐色が斑に入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。摂理が部分的に発達している。

接合点数は2点あり、石核整形の過程に伴う資料である。90度打面転位させながら剥片を剥離している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh54：総点数4点、総重量85.17g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は灰黄褐色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。直径1mmの化石が混入している。

石核整形の過程に伴う資料である。180度打面転位させながら剥片を剥離している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

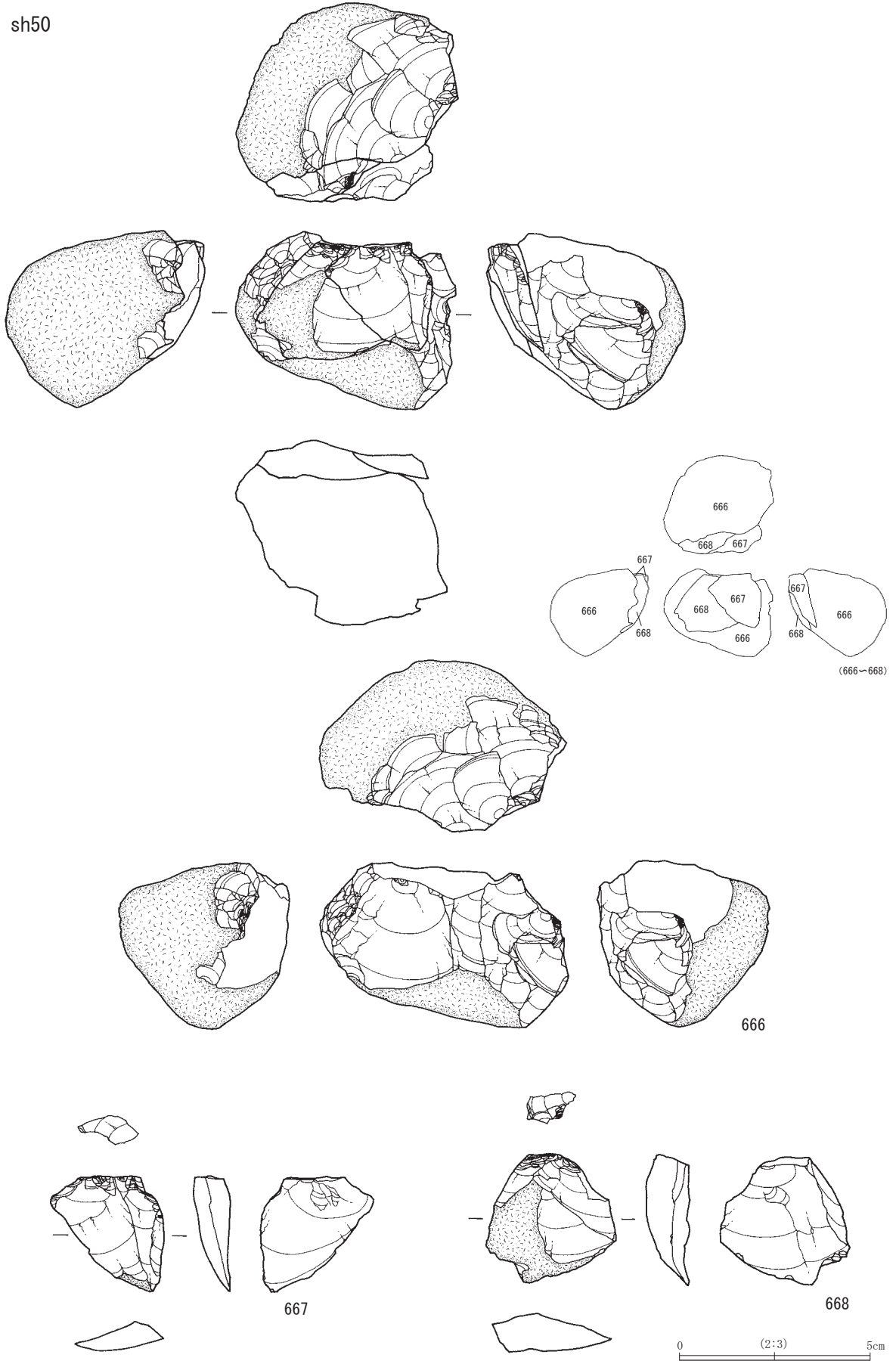
sh55：総点数3点、総重量91.19g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐・灰白色が斑に入る。礫面は褐色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。

剥離工程は671→672→673である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。180度打面転位させながら目的剥片である縦長剥片を剥離している。接合個体の背面剥離面構成からも同様のことが捉えられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。また、接合図の側面観では3点が接する器体中央に厚みを持つことから、接合個体の石核形状はsh75のような菱形の側面観であったと考えられる。

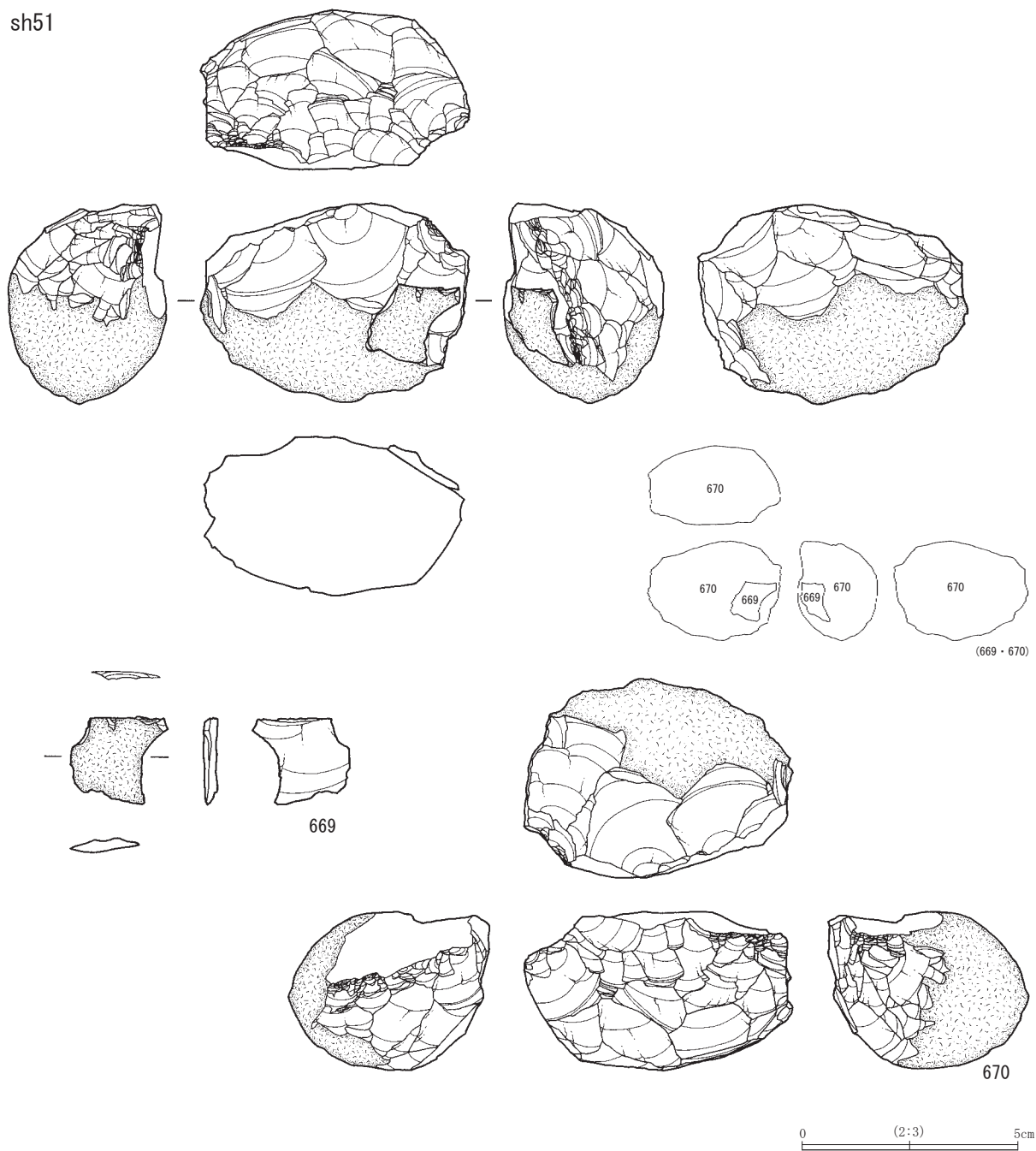
sh56：総点数16点、総重量448.81g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白・黒褐色が点状に入る。礫面は灰黄褐色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。

sh50



第227図 石器集中区18出土遺物 (17)

sh51



第228図 石器集中区18出土遺物 (18)

sh55a



第229図 石器集中区18出土遺物 (19)

接合点数は7点あり、3個体(a・b・c)に分かれる。個体aは3点あり、スクレイパーと剥片からなる。個体b・cは2点あり、前者は二次加工を有する剥片と剥片、後者は剥片からなる。個体a・bは打面再生の過程、個体cは石核整形の過程に伴う資料である。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh57：総点数は79点、総重量459.04g。尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、黒褐・灰白色が斑に入る。礫面も灰黄色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は20点あり、7個体(a～g)に分かれる。個体aは3点、個体bは2点、個体dは3点あり、これらは剥片からなる。個体cは2点、個体eは3点あり、スクレイパーと剥片からなる。個体fは4点あり、尖頭器と剥片からなる。個体gは3点あり、剥片と石核からなる。

個体fの剥離工程は674→675→676→677である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは、180度打面転位させた後に、上述したことと同じような剥片剥離が捉えられる。

個体gの剥離工程は678→679→680である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。上設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。また、接合個体の背面剥離面構成からは、打面転位を繰り返しながら剥片剥離をしていることが捉えられる。石核の規模が縮小していく過程では、打面及び作業面が確保された時点で剥片剥離を連続的に行い、停止する度に打面転位を繰り返していたと考えられる。

それ以外の個体a・bは剥片が2つに折れたものが接合した資料、残りは縦長剥片剥離の過程に伴う資料である。いずれも個体f・gで剥離されている剥片よりも規模が大きい。

このように本母岩は各個体が接合関係にないものの、下記のような剥離工程が想定される。剥離当初には単設打面から縦長剥片を連続的に剥離しており、石核が縮小していく過程で打面転位を繰り返しながら小型剥片を剥離している。縦長剥片はスクレイパー、小型剥片は尖頭器などの素材としていくことから、石核の規模に応じて目的剥片が異なっていたことが想定される。尖頭器(675)やスクレイパー(597)については出土遺物に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核は廃棄され、toolのみ持ち出されたと考えられる。

sh58：総点数3点、総重量4.3g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh59：総点数3点、総重量31.78g。尖頭器、スクレイパー、剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調としている。石質は緻密でなめらかである。

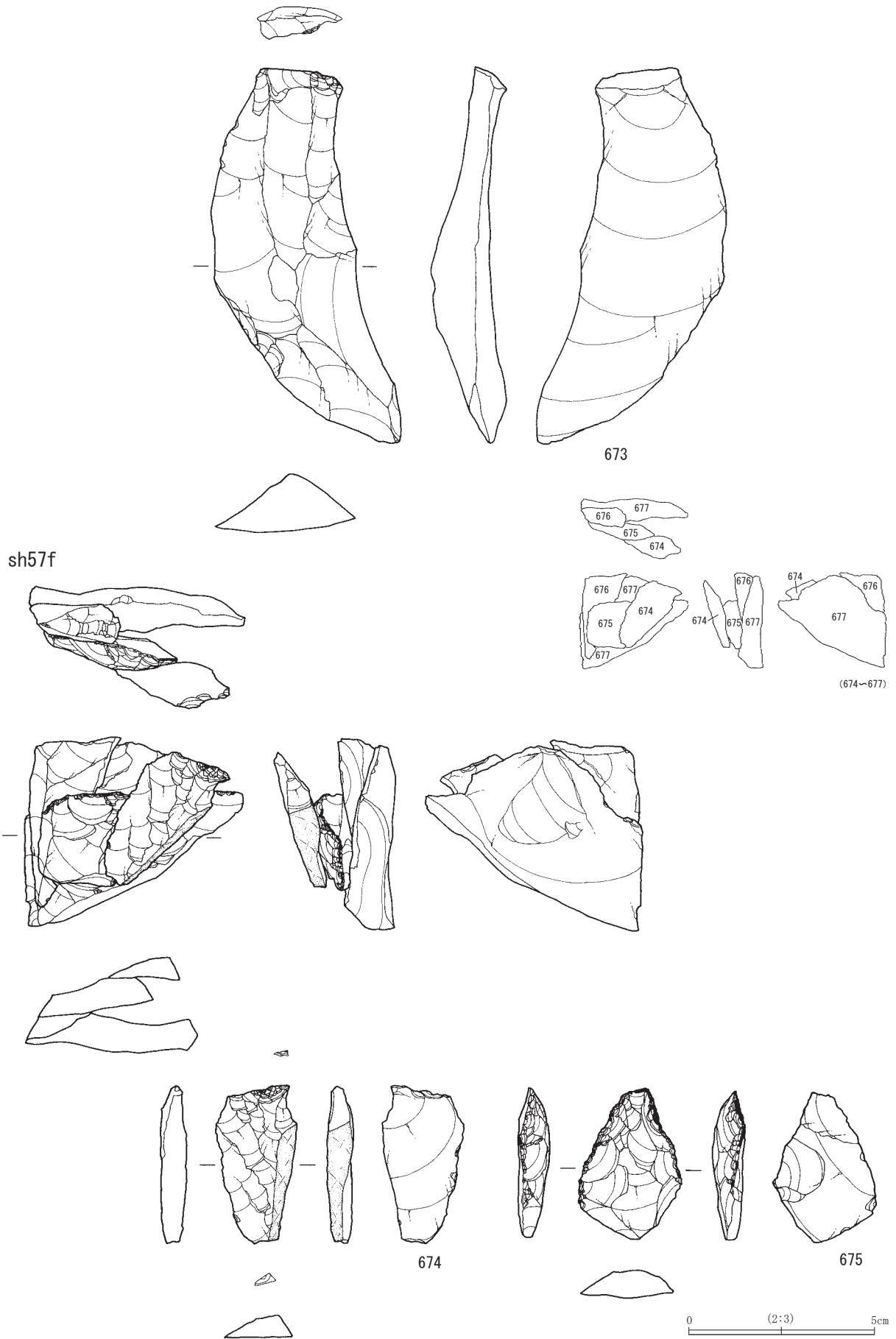
尖頭器(570)とスクレイパー(584)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh60：総点数5点、総重量35.33g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は浅黄色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

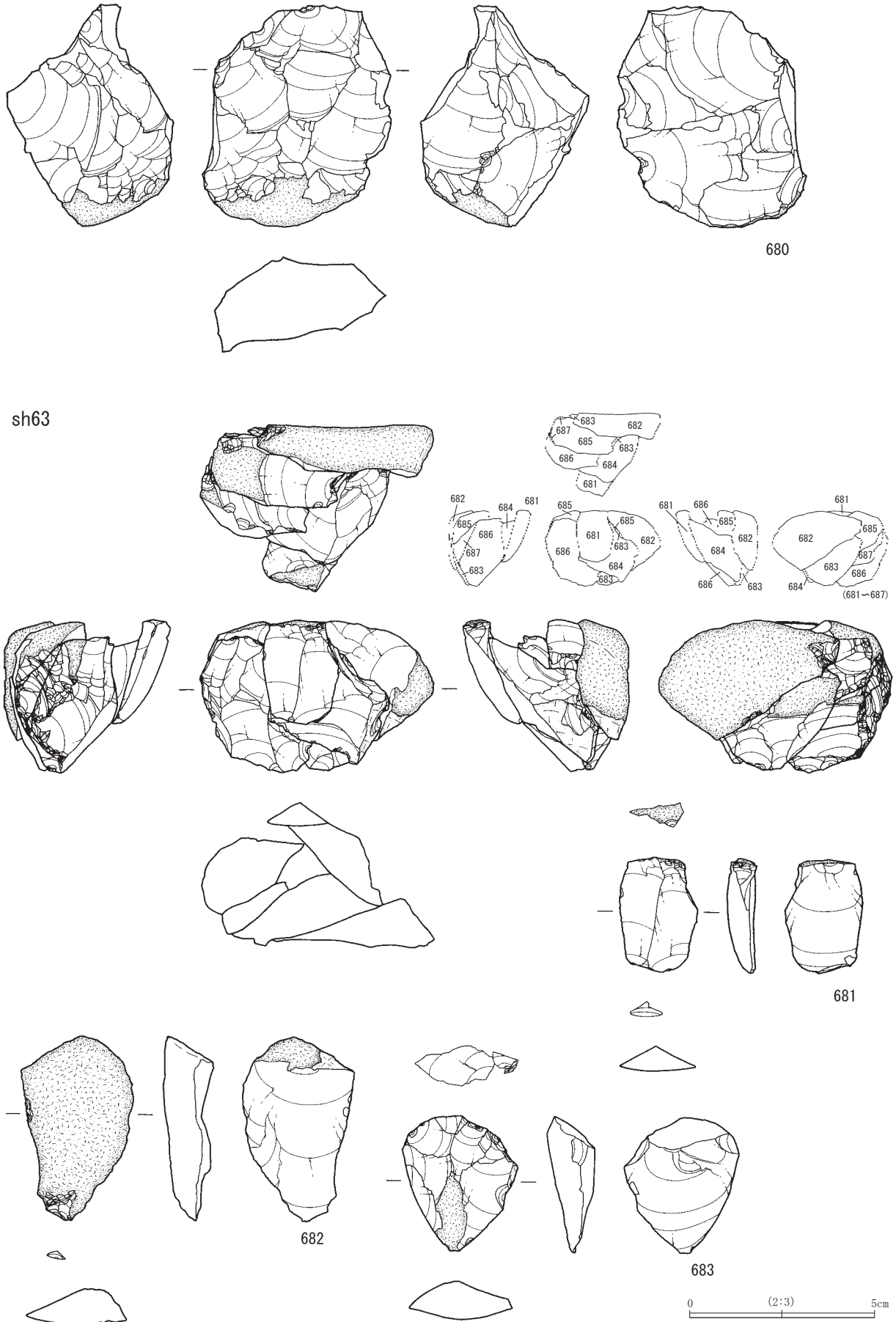
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh61：総点数3点、総重量55.17g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面は黄灰色を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

摂理面除去から石核整形の過程に伴う資料である。同一打面上から剥片剥離をしている。



第230図 石器集中区18出土遺物 (20)



第232図 石器集中区18出土遺物 (22)

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh62：総点数6点、総重量122.63g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面付近では明オリーブ灰・浅黄橙色が層上に入る。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は4点あり、2個体に分かれる。個体a・bは共に2点あり、前者が剥片と石核、後者は剥片からなる。個体aは目的剥片剥離の過程に伴う資料である。作業面と打面は交互に入れ替えて剥離をしている。接合個体の剥離面構成からは打面転位を繰り返しながらの剥片剥離が捉えられる。また、個体bは礫面除去の過程に伴う資料である。両者は接合個体の規模やその工程からb→aの前後関係が考えられる。

本母岩は小型の亜角礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh63：総点数15点、総重量108.53g。スクレイパー、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面も同様の色調である。石質は緻密でなめらかである。礫面にはにおい黄色をした粗粒の鉱物が部分的にまとまりをみせる。

接合点数は13点あり、3個体に分かれる。個体aは7点あり、上記の器種からなる。個体bは4点、個体cは2点あり、共に剥片からなる。

個体aの剥離工程は<681><682>→684→683→685→687→686である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面における上設打面からの剥離と裏面における自然面の除去の前後関係は不明だが、それらを剥離した後に作業面を正面・裏面側に設けて小型剥片を剥離している。石核は縮小していくにつれて、作業面は固定されず打面と作業面を交互に入れ換えながら剥離している。

個体b・cは上記の剥離工程に伴うもので、剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh64：総点数29点、総重量207.69g。二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は灰オリーブ色を基調とし、礫面は灰オリーブ・暗灰黄色の色調を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。摺理が線状に発達している。

接合点数は11点あり、個体aは3点、個体bは3点、個体cは2点、個体dは2点あり、cがチップからなる以外はすべて剥片からなる。

個体aの剥離工程は688→690→(689a+b)である。本個体は石核整形の過程に伴う資料である。背面に礫面を有する剥片を連続的に剥離している。

他の個体は個体aと類似した工程に伴う資料と考えられる。

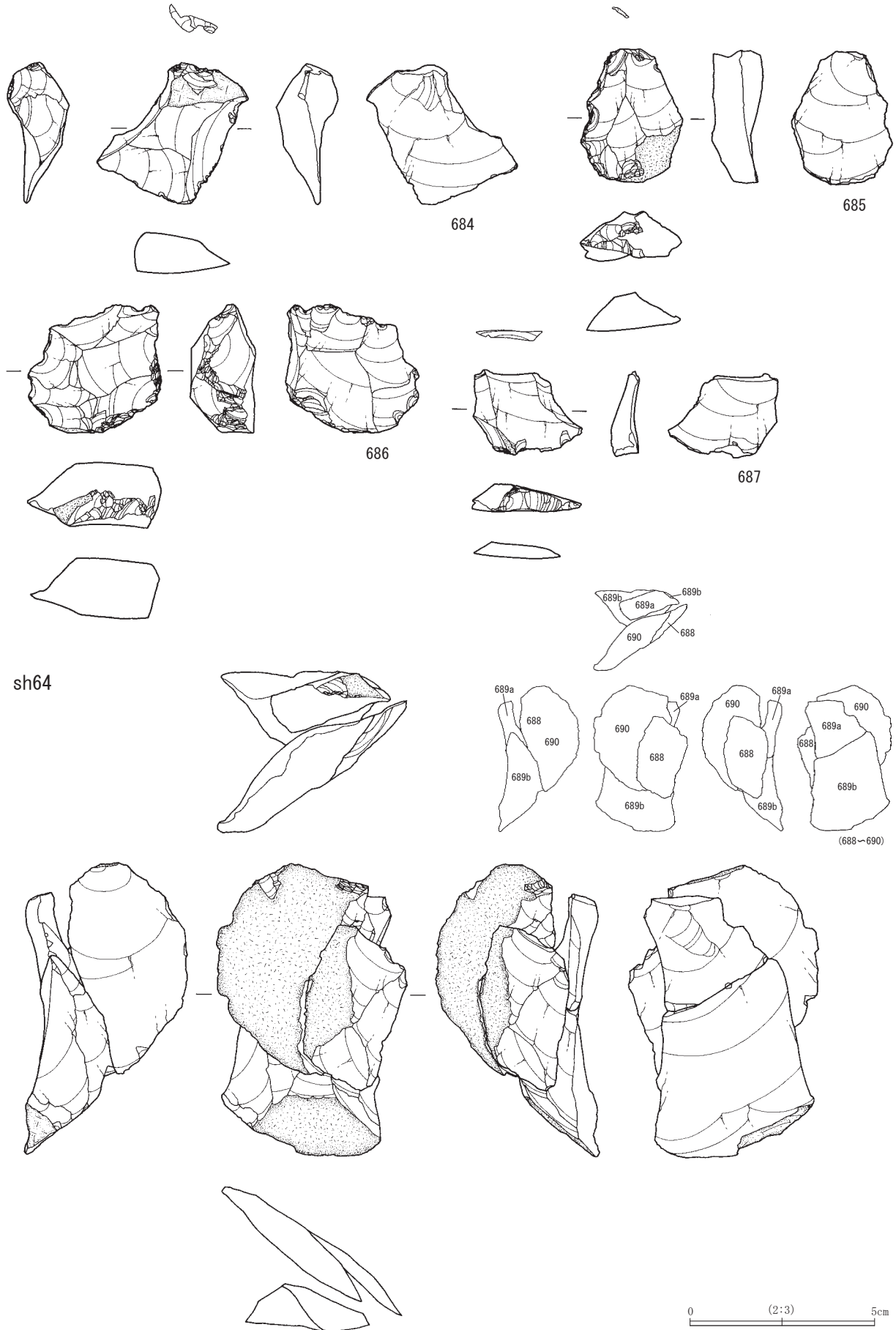
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh65：総点数60点、総重量265.11g。ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面は淡黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

接合点数は12点あり、6個体(a～f)に分かれる。それぞれ2点あり、個体c・eが剥片と石核からなる以外は剥片やチップからなる。

個体cの剥離工程は691→692である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。上設打面から目的剥片である小型剥片を剥離している。この剥離に伴い打面再生や側縁・下縁部調整を施している。左側面に認められる剥離面から石核の素材には、厚手の剥片が用いられたと想定される。

個体eの剥離工程は693→694である。本個体は打面形成から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。厚手の剥片を素材としており、その腹面側を打面、背面側を作業面に据えている。打面を形成しながら



第233図 石器集中区18出土遺物 (23)

ら目的剥片である小型剥片を単設方向から連続的に剥離している。

その他の個体については、個体 a・b・f は連続的に剥片剥離をしている資料、個体 d は剥片が2つに折れたものが接合した資料である。これらは個体の規模から個体 d が上記の剥離工程中、個体 a・b・f がそれらの前段階の剥片剥離と捉えられる。

非接合資料の中には、小型剥片が多く認められているが、石核と同じ規模の剥片も存在している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核が廃棄されている。ただし、個体 c や e の素材や非接合資料に認められる比較的規模の大きな剥片を剥離した石核は持ち出されたものと思われる。

sh66：総点数22点、総重量467.59g。二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、灰白色が斑に入る。また、この色調が入り替わる場合もある。礫面は灰・淡黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、部分的に鉱物が認められるため僅かにざらつく。

接合点数は6点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体 a は4点あり、剥片と石核からなる。個体 b は2点あり、剥片からなる。

個体 a の剥離工程は<695→696><697>→698である(<○>の前後関係は不明)。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。接合図正・裏面において剥片の接合が認められており、正面が打面、裏面が作業面にあたる。工程順は接合関係にないことからその前後関係を不明としたが、接合に伴う剥片の位置関係から縦長剥片剥離後に打面再生をしたものと想定される。基本的に上設打面から目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。この作業面と打面のなす角度は鋭角であり、剥離が停止する度に90度打面転位させ、作業面側から打面を再生している。この打面再生は打面と作業面のなす角度を鋭角に保持するために行われたと考えられる。また、接合個体の背面剥離構成からも同様の工程が捉えられる。このように打面と作業面が固定されたなかで、打面再生を介在させながら目的剥片剥離が進行している。

個体 b は石核整形の過程に伴う資料である。剥片の規模も大きく背面に礫面が認められることから、個体 a 以前に剥離されたものと捉えられる。

本母岩は垂円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh67：総点数9点、総重量415.8g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面はにぶい黄色を呈する。石質はやや粗粒でわずかにざらつく。白色の鉱物がまとまっている箇所が認められる。

接合点数は7点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体 a は5点あり、上記の器種からなる。個体 b は2点あり、剥片からなる。

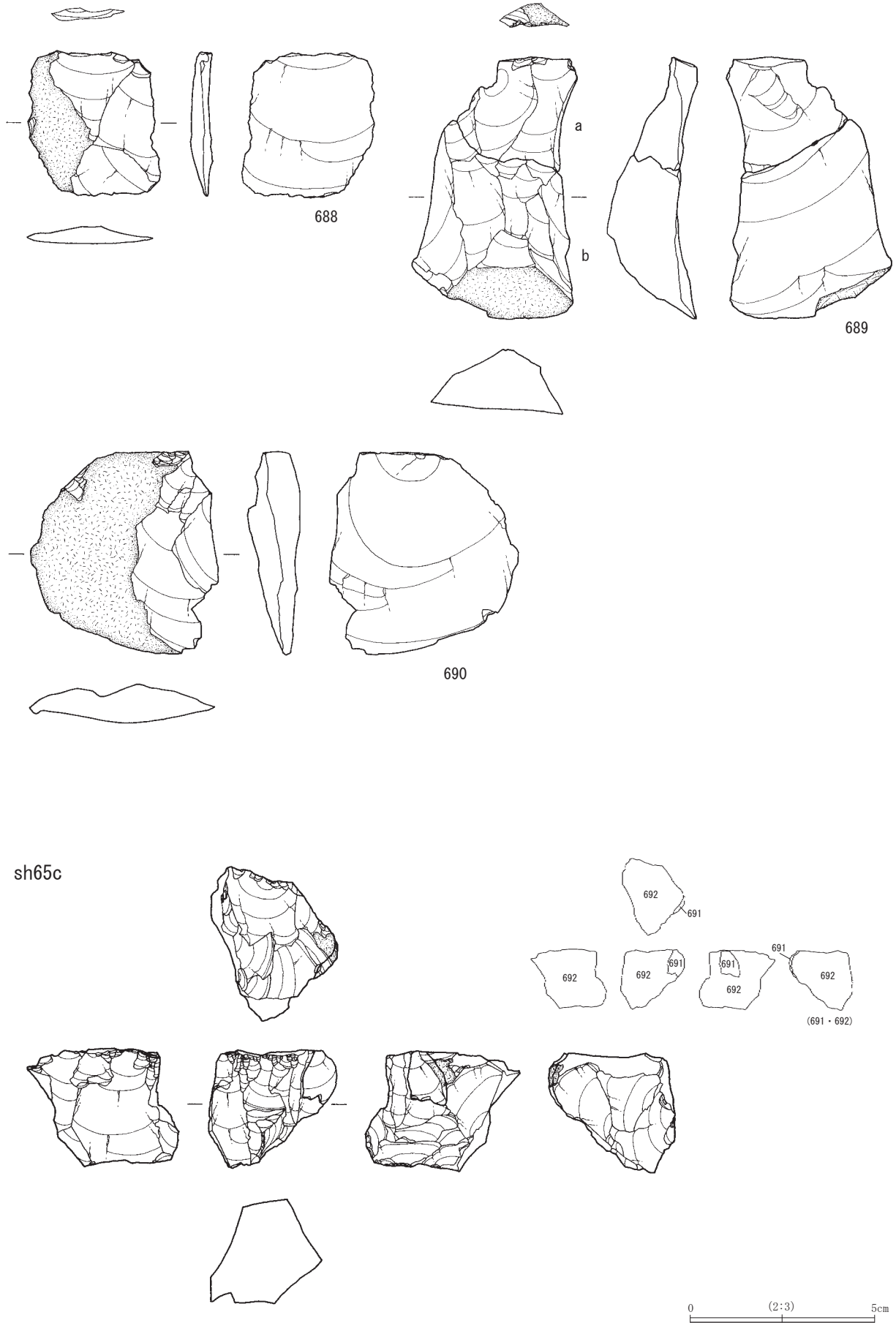
個体 a の剥離工程は<699><700>→701→702→703である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面右方向から石核整形に伴う剥離をした後に、作業面は固定したまま90度打面転位させ、上設打面から目的剥片である縦長剥片を剥離している。これらの剥片の背面と腹面剥離方向は概ね同じである。接合個体の背面構成からも上記と同様に、90度打面転位させながら剥離をしていることが捉えられる。

個体 b は石核整形の過程に伴う資料である。礫面が背面及び打面に認められており、個体 a の前段階に剥離された資料である。

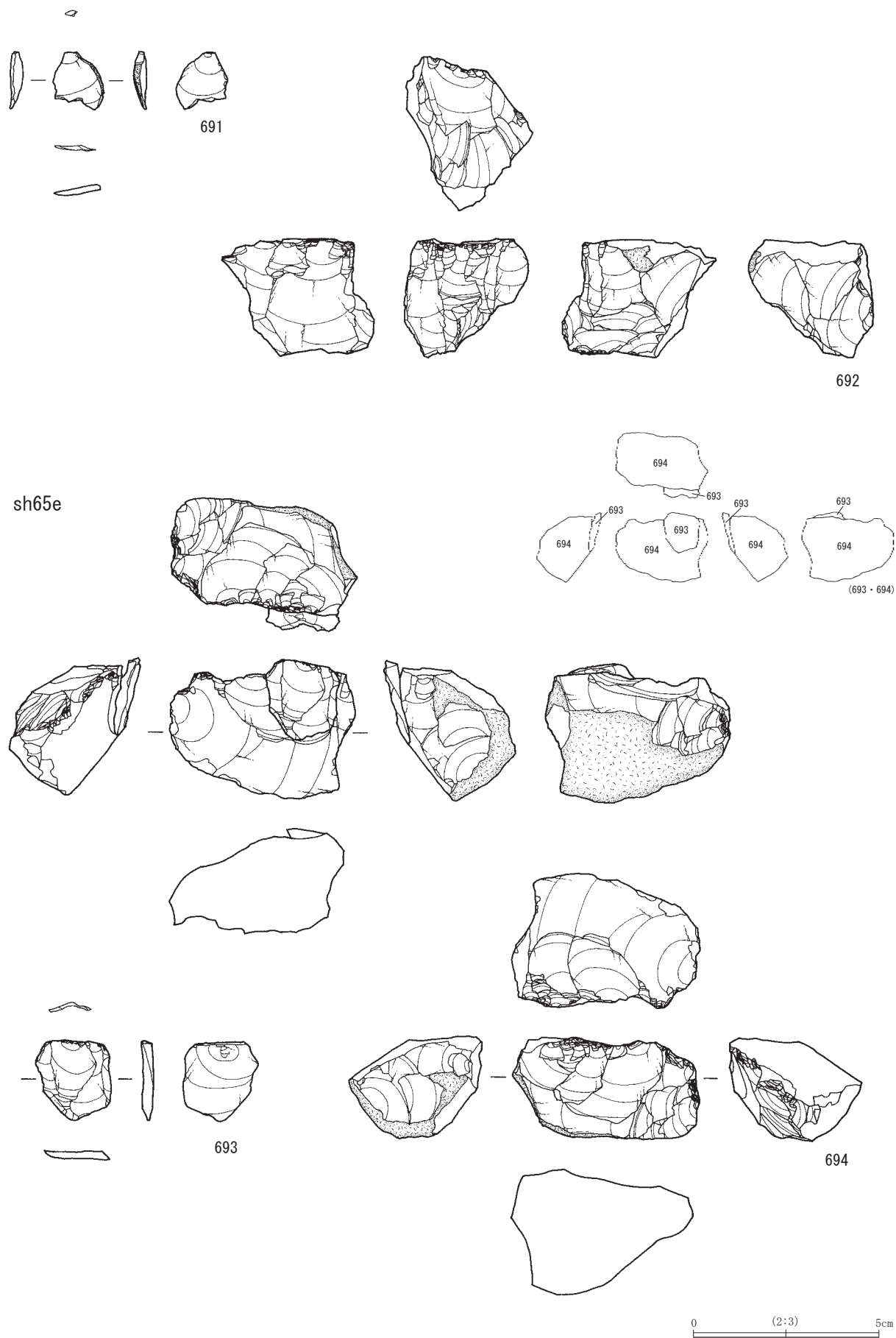
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh68：総点数2点、総重量21.1g。スクレイパーで構成される接合資料である。剥離面は灰褐色を基調とし、黒褐・灰白色が部分的に入る。礫面はにぶい褐色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

剥離工程は704→705である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から縦長剥

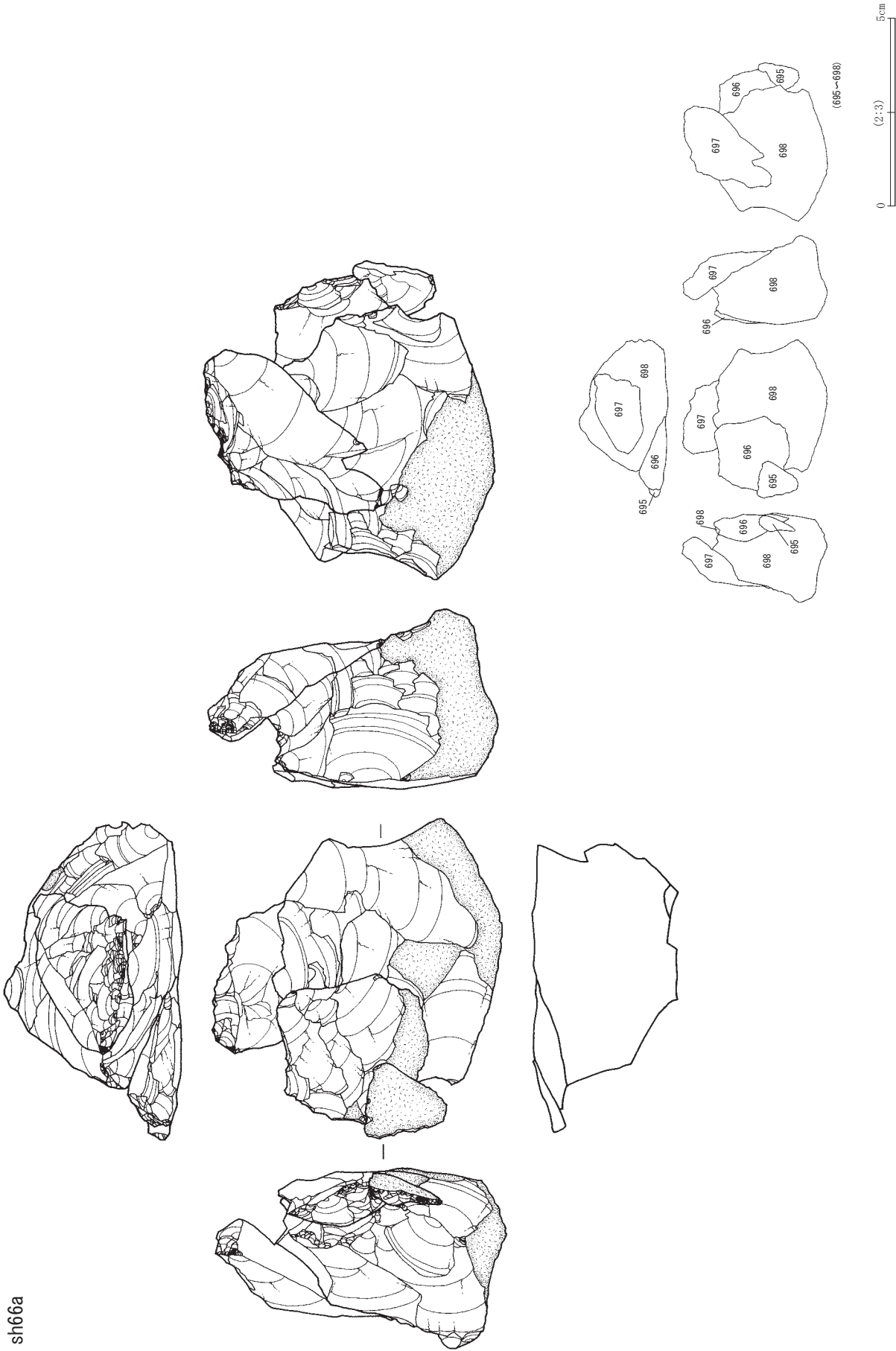


第234図 石器集中区18出土遺物 (24)

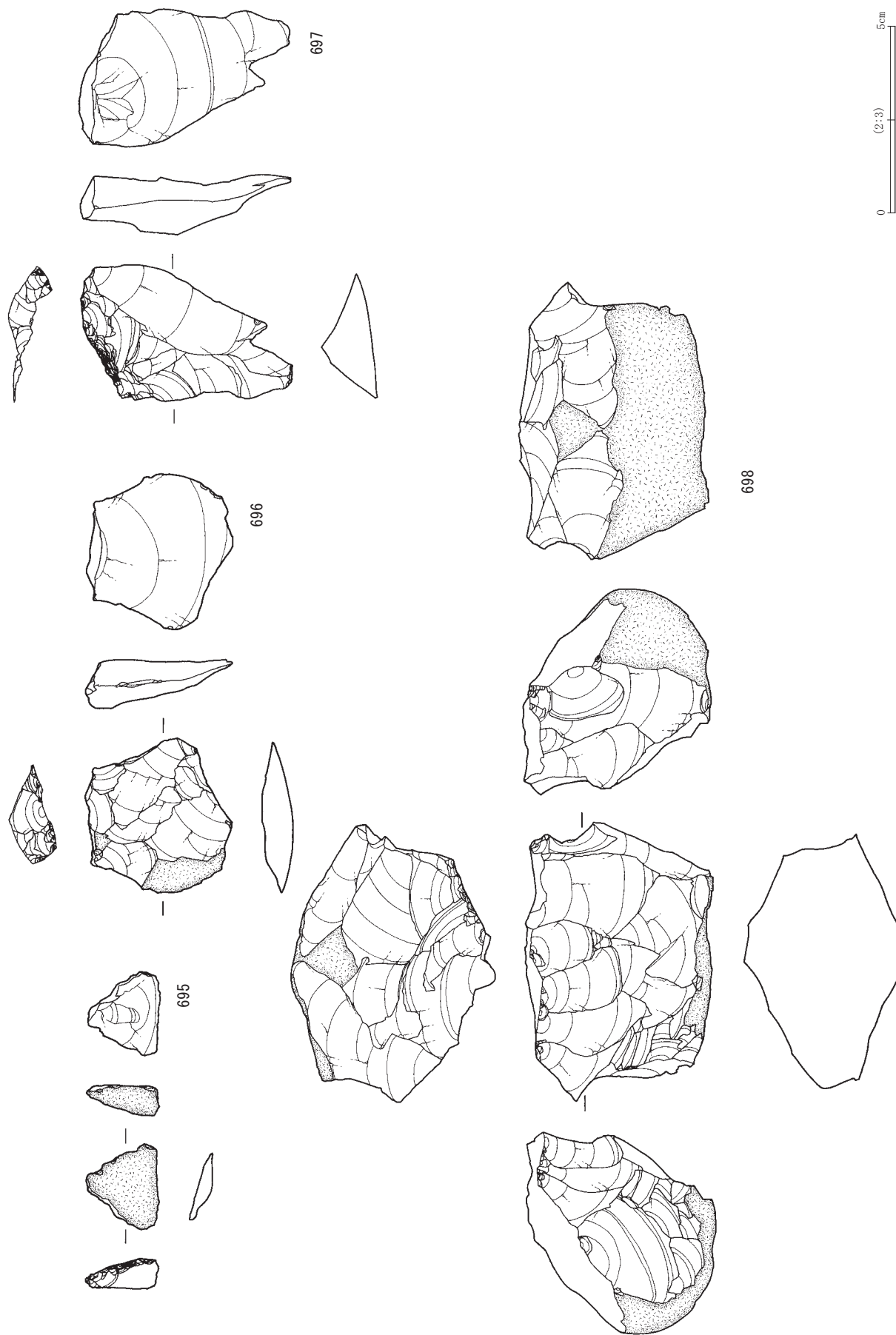


第235図 石器集中区18出土遺物 (25)

sh66a

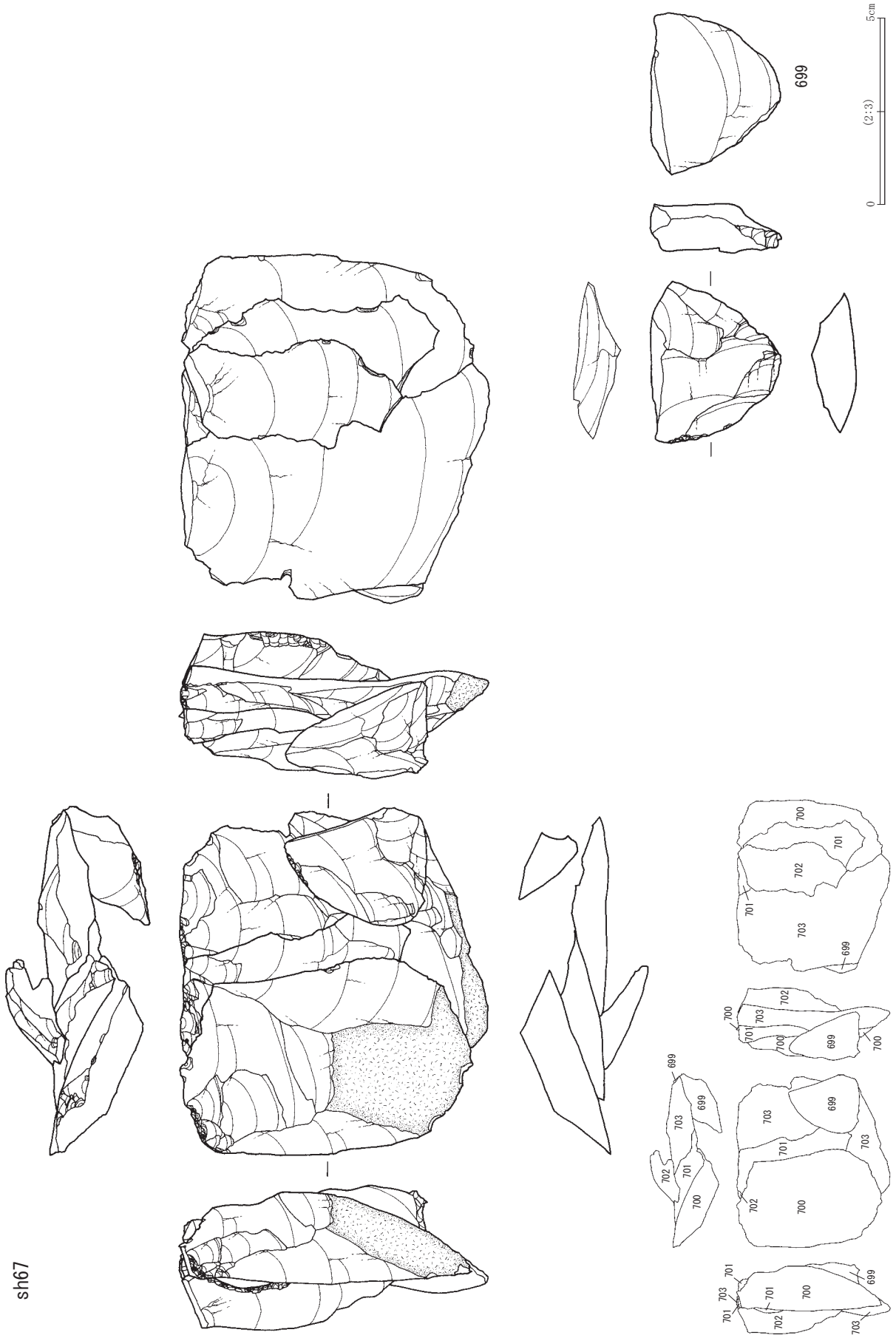


第236図 石器集中区18出土遺物 (26)

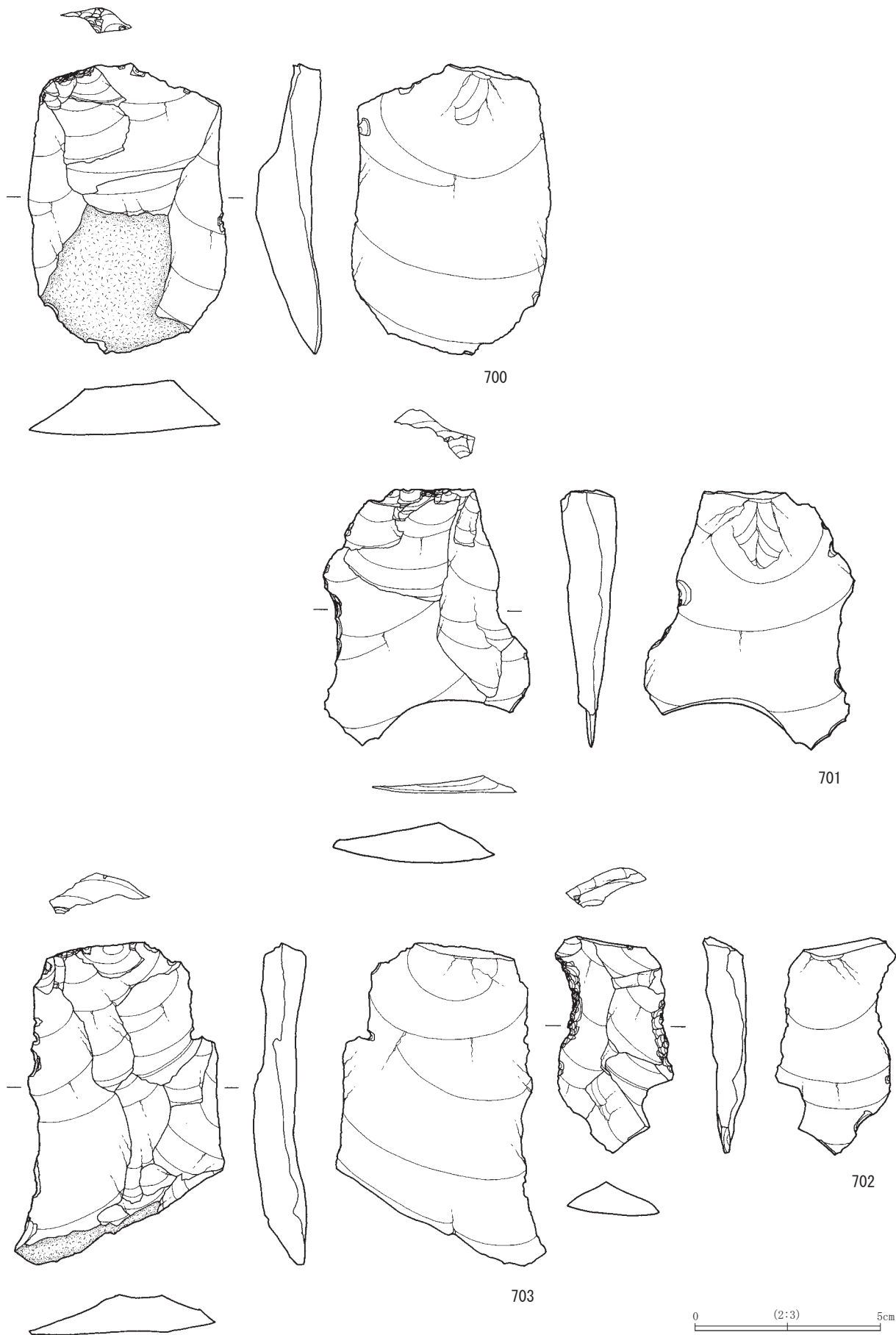


第237図 石器集中区18出土遺物 (27)

sh67



第238図 石器集中区18出土遺物 (28)



第239図 石器集中区18出土遺物 (29)

片を剥離している。剥片はスクレイパー(704・705)の素材に用いており、それらについては出土遺物に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核は搬出している。

sh69：総点数3点、総重量62.8g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面はにぶい黄橙・灰色を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が僅かに発達している。

接合点数は2点あり、石核整形の過程に伴う資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh70：総点数2点、総重量20.79g。スクレイパーと剥片で構成される接合資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。

剥離工程は706→707である。目的剥片剥離の過程に伴う資料である。作業面は正面に固定したまま、90度打面転位させながら剥片剥離をしている。剥片はスクレイパー(706)の素材に用いており、それについては出土遺物に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh71：総点数13点、総重量273.23g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面は灰白色を呈する。被熱しているため礫面及び剥離面は暗赤褐色を呈している箇所が多く認められる。石質は緻密でなめらかだが、部分的にざらつく。

接合点数は11点あり、上記の器種からなる。剥離工程は712→715→711→716→<713><717>→(741+718)→721→719→720である(<○>の前後関係は不明)。本個体は摂理面除去から石核整形の過程に伴う資料である。上設打面から連続的に剥片を剥離しており、この剥離に伴い摂理面を有する剥片や厚手の剥片が剥離されることで摂理面は大きく除去される。その後、作業面を正面に固定させ、周縁方向から背面に摂理面を有する不定形剥片を剥離しながら石核整形を施している。また、分割された剥片(715)は石核に転用され、小型剥片を剥離している。

本母岩は中型の石核の状態で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh72：総点数2点、総重量38.36g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、褐灰色が斑に入る。礫面は灰白色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。部分的に摂理が発達している。

接合個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh73：総点数5点、総重量189.67g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、黄灰色が層状に入る。礫面は淡黄色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

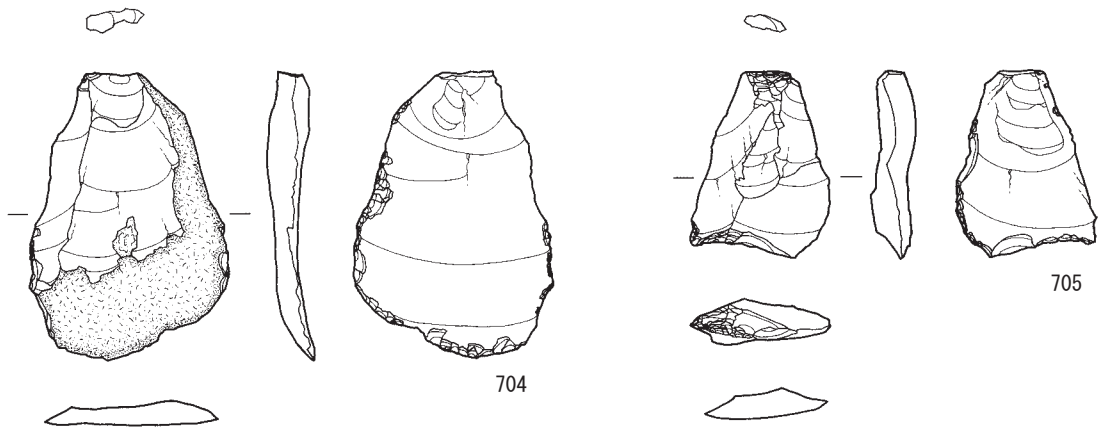
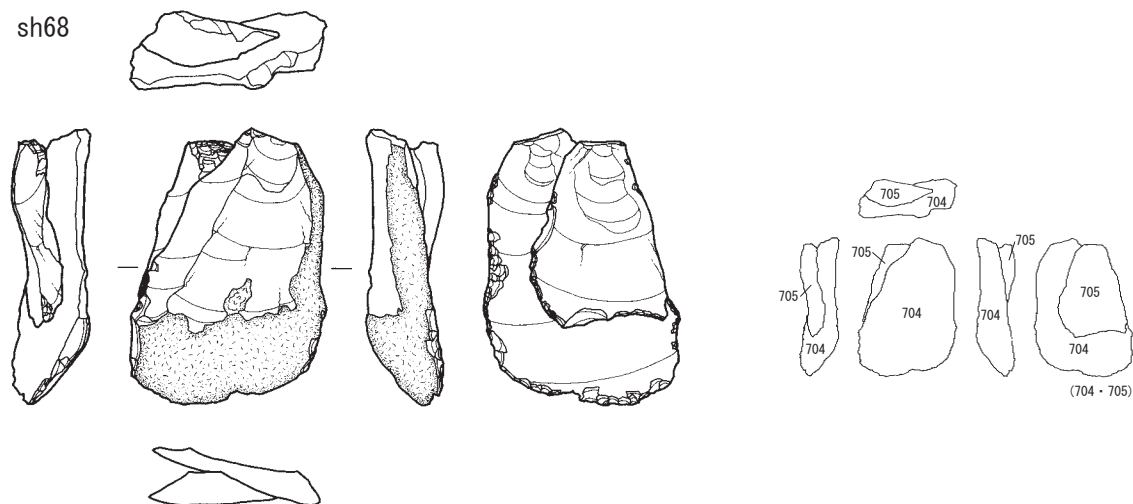
接合点数は2点あり、目的剥片剥離から石核整形の過程に伴う資料である。目的剥片である縦長剥片を剥離した後に、90度打面転位させ厚手の剥片を剥離することで石核整形を施している。また、非接合資料にはスクレイパー(596)があり、それについては出土遺物に記載している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

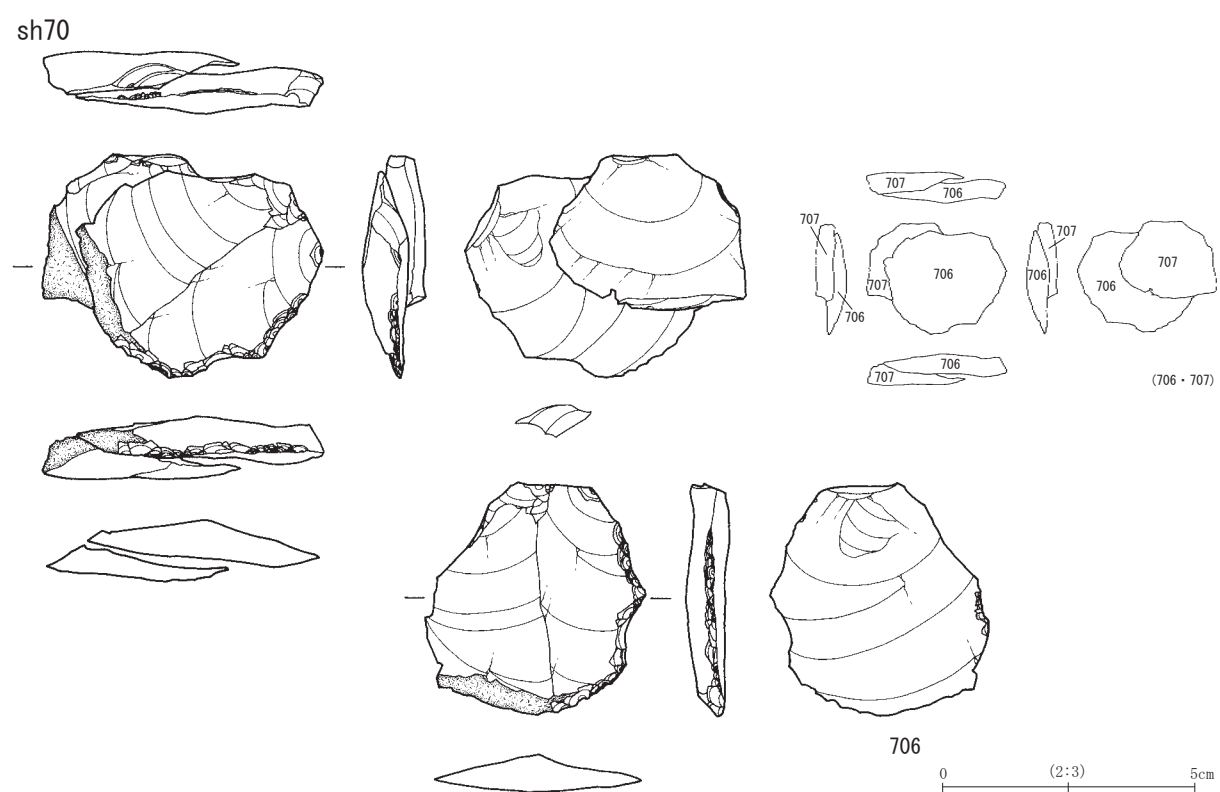
sh74：総点数4点、総重量46.61g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

接合資料は3点あり、上記の器種からなる。剥離工程は708→709→710である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。同一打面上から打面調整を介在させ、目的剥片である縦長剥片を連続

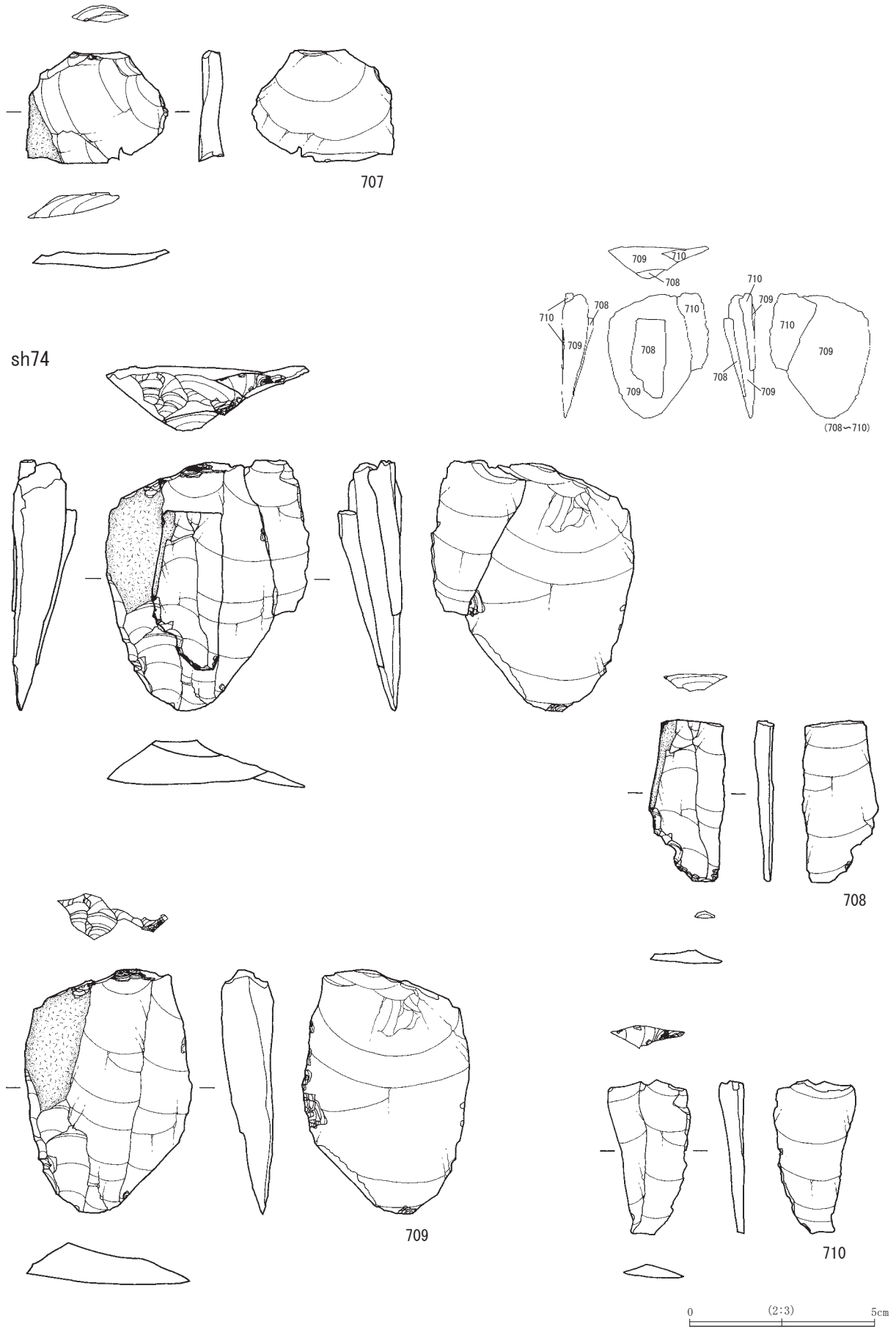
sh68



sh70

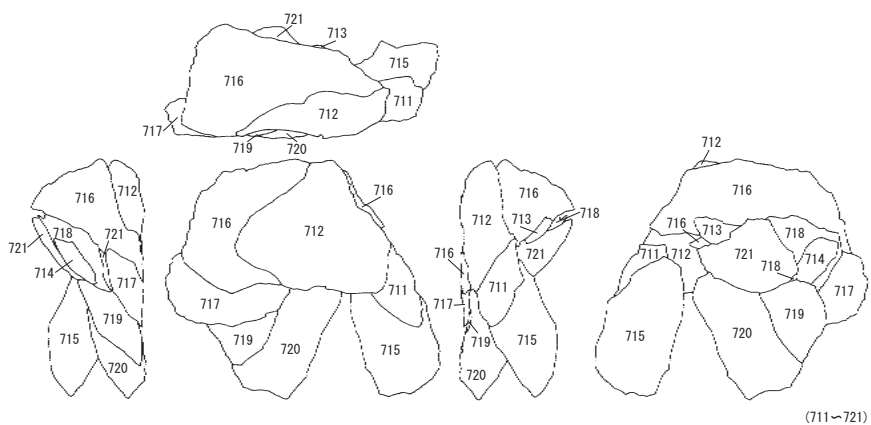
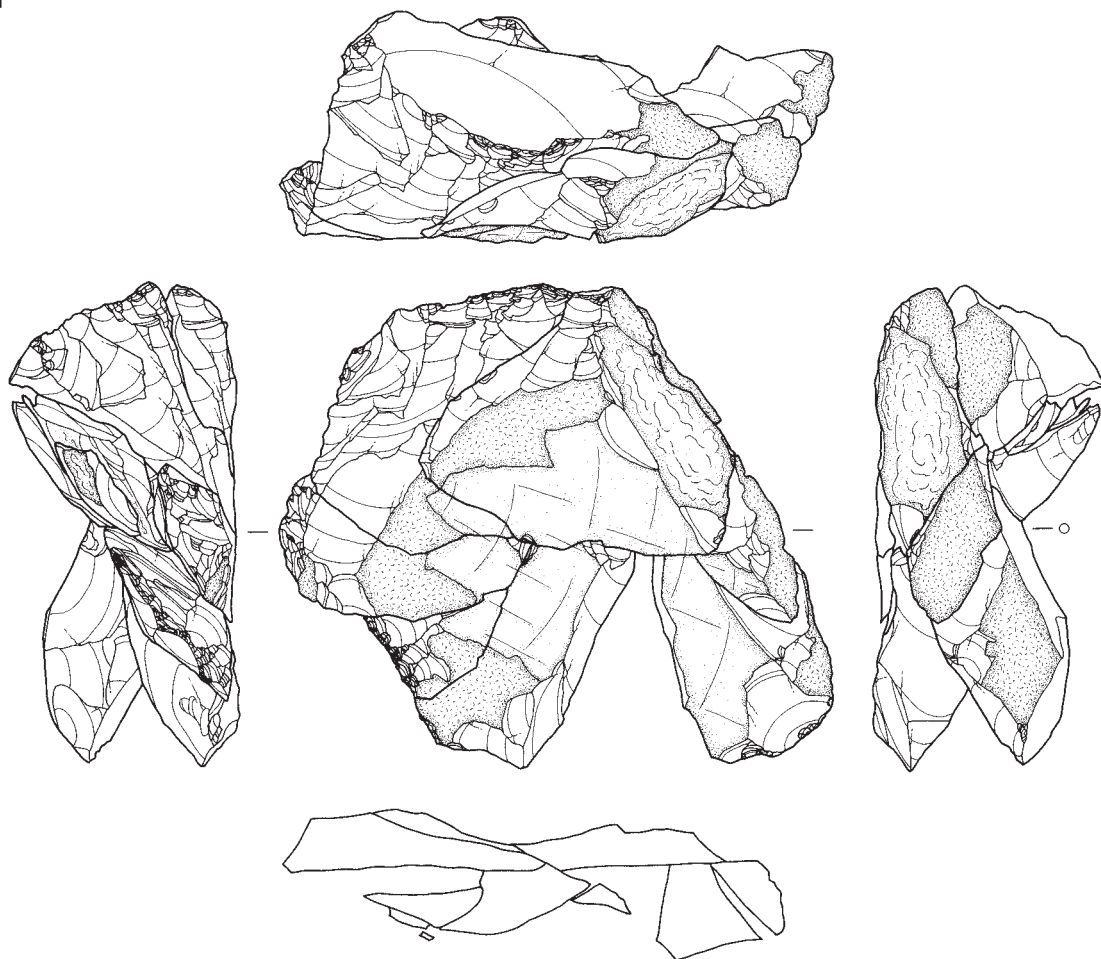


第240図 石器集中区18出土遺物 (30)



第241図 石器集中区18出土遺物 (31)

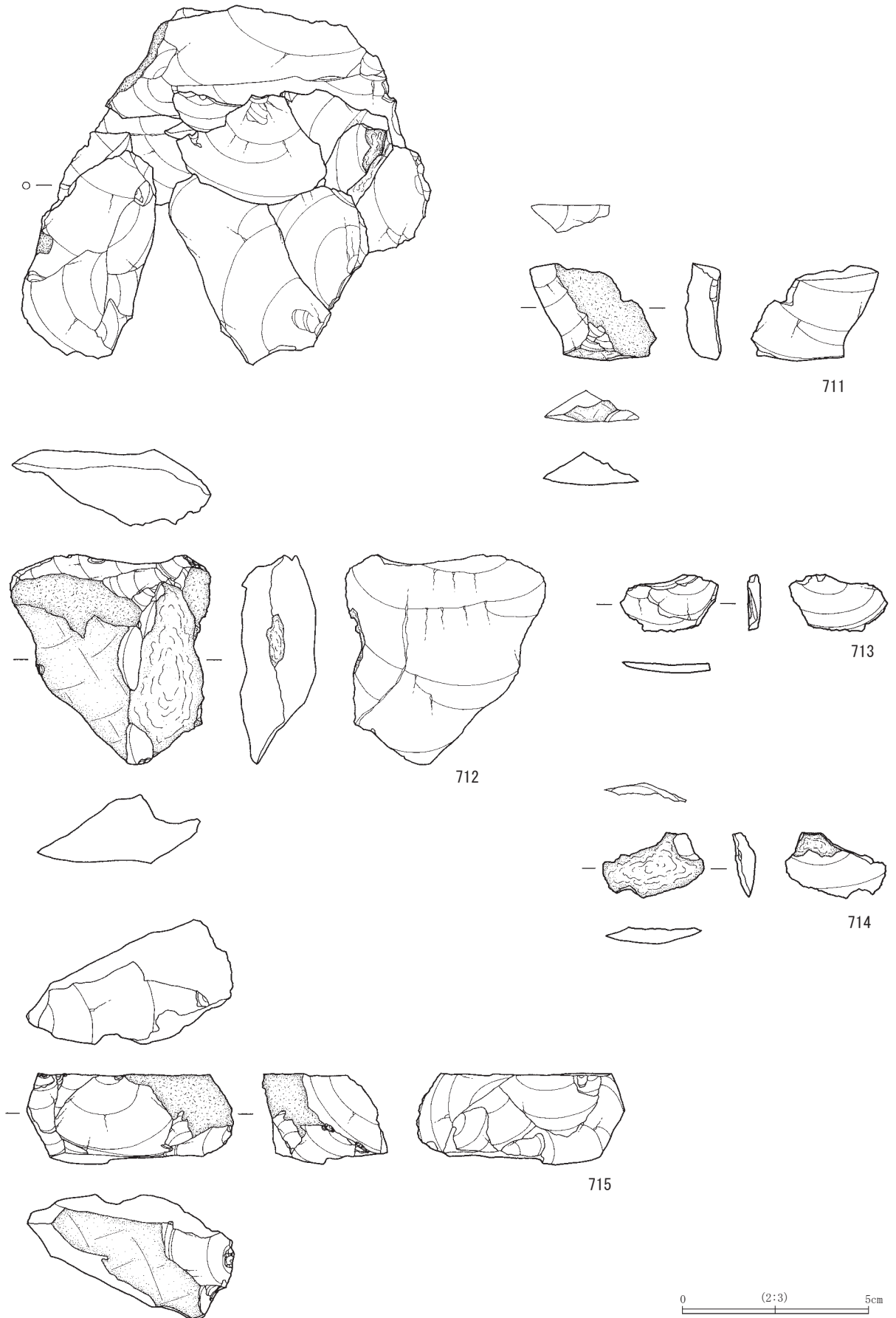
sh71



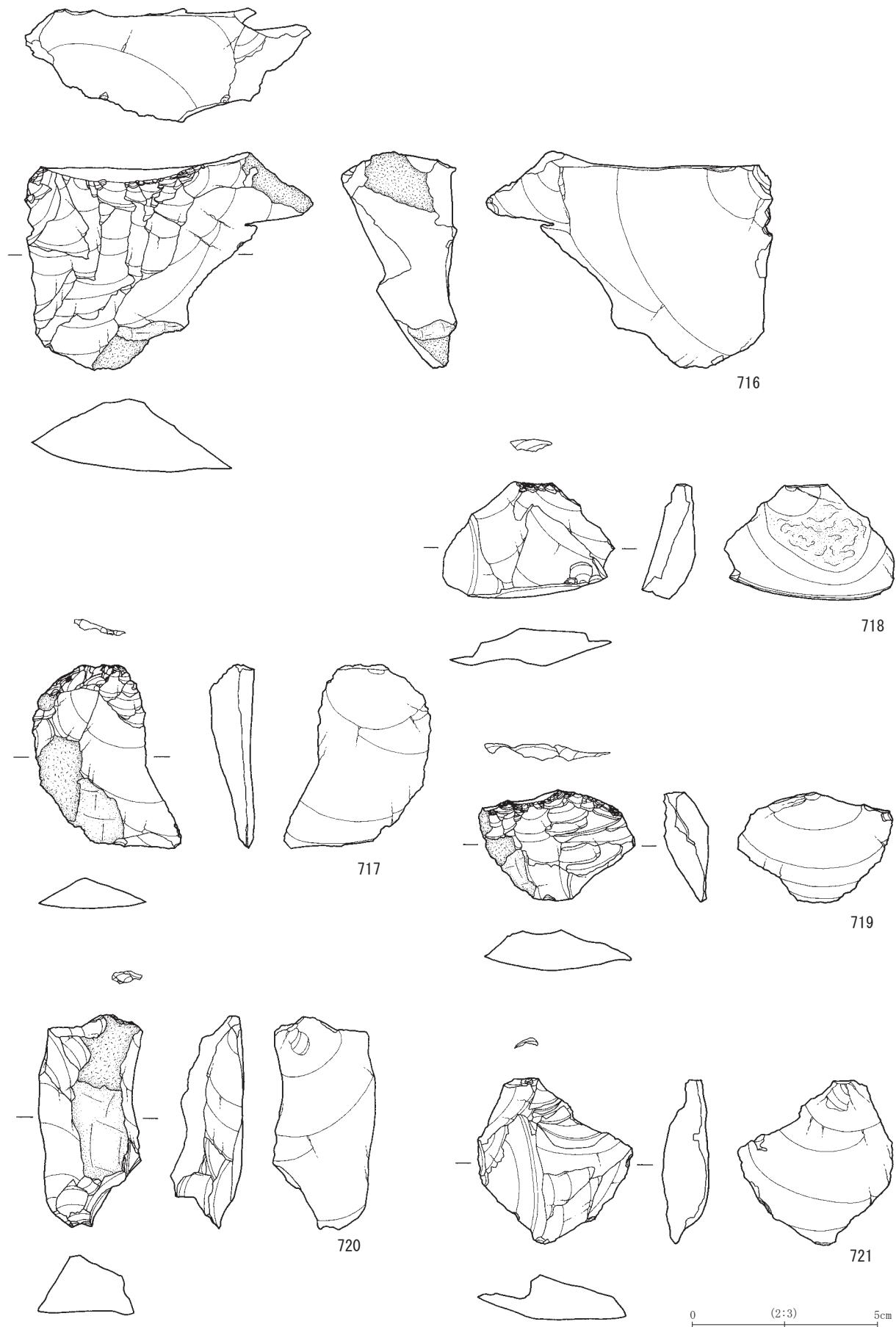
(711~721)

0 (2:3) 5cm

第242図 石器集中区18出土遺物 (32)



第243図 石器集中区18出土遺物 (33)



第244図 石器集中区18出土遺物 (34)

的に剥離している。接合個体の背面剥離方向は腹面と対になる剥離方向が認められることから、両設に打面を据え180度打面転位を繰り返しながらの剥片剥離が捉えられる。この打面転位は上記の工程へ移る際に行われたものと考えられる。

本母岩は中～小型の石核で搬入しており、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh75：総点数12点、総重量612.46g。スクレイパー、剥片、石核で構成される接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面は灰黄・浅黄色を呈する。石質は僅かに粗粒であり、ややざらつく。

剥離工程は<722><723>→724→725→<726><728>→<729>→727→730<731><732>→733である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離過程に伴う資料である。下設打面から石核整形を施した後、180度打面転位を行う。そして正面上方では接合面裏面を打面、正面を作業面に設定し、目的剥片である縦長剥片を剥離している。しかし、剥離が停止すると、打面と作業面を入れ換えて剥片剥離を展開させている。接合資料の内側には多くの空間が認められることから、同様の剥離を継続していたことが窺える。この剥離に伴う打面と作業面のなす角度は基本的に鋭角である。これは作業面と打面は頻繁に入れ替えながら剥離することで角度を保持していたと考えられる。このように本母岩では正・裏面に類似した剥離面が形成されていることから、打面と作業面は判別できない。この打面と作業面が固定されない点については、他の母岩別資料とは大きく異なる。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。また剥離された石器はtool類として搬出している。

sh76：総点数5点、総重量63.37g。ナイフ形石器、二次加工を有する剥片、剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面付近は灰黄褐・灰オリーブ色が層状に入る。礫面は褐灰色を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

ナイフ形石器(531)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh77：総点数11点、総重量144.58g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面は黄灰色を呈する。石質はやや粗粒で僅かにざらつく。部分的に摂理が発達している。

接合点数は10点あり、上記の器種からなる。剥離工程は735→736→<734><(737a+b)>→(739a+b)→(738a+b)→740である(<○>の前後関係は不明)。本個体は礫面除去・石核整形の過程に伴う資料である。背面に礫面を有する縦長剥片を単設方向から連続的に剥離することで、礫面除去もしくは石核整形を施している。打面は全て礫面であり調整等は認められない。

本母岩は中～小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

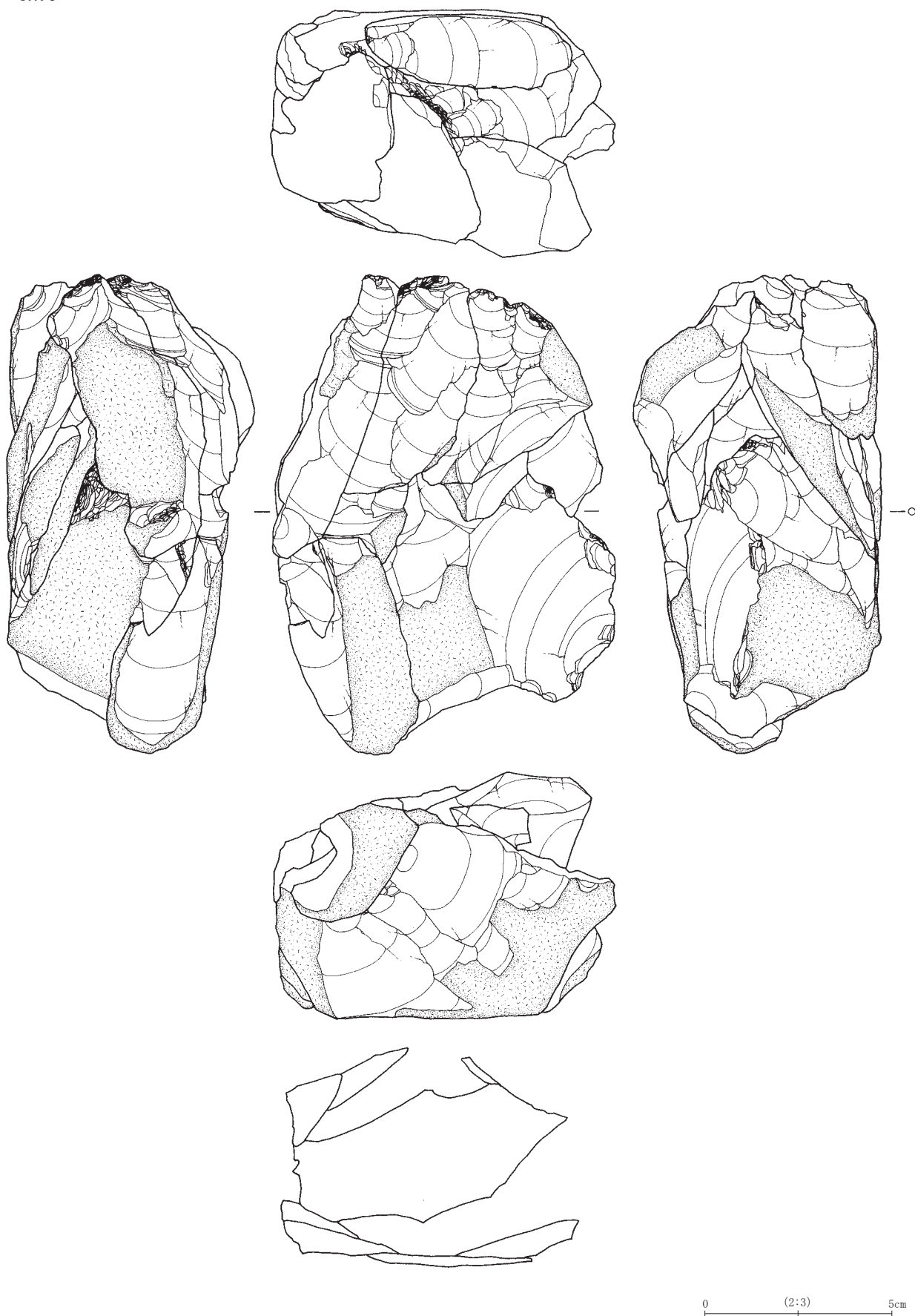
sh78：総点数21点、総重量331.02g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面は灰黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、部分的に摂理が発達しておりざらつく箇所が認められる。

接合点数は3点あり、二次加工を有する剥片、剥片、石核からなる。剥離工程は(741a+b)→742→743である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。90度打面転位を繰り返しながら目的剥片である縦長剥片や石刃を剥離している。石核(743)の段階では上設打面から連続的に石刃を剥離している。

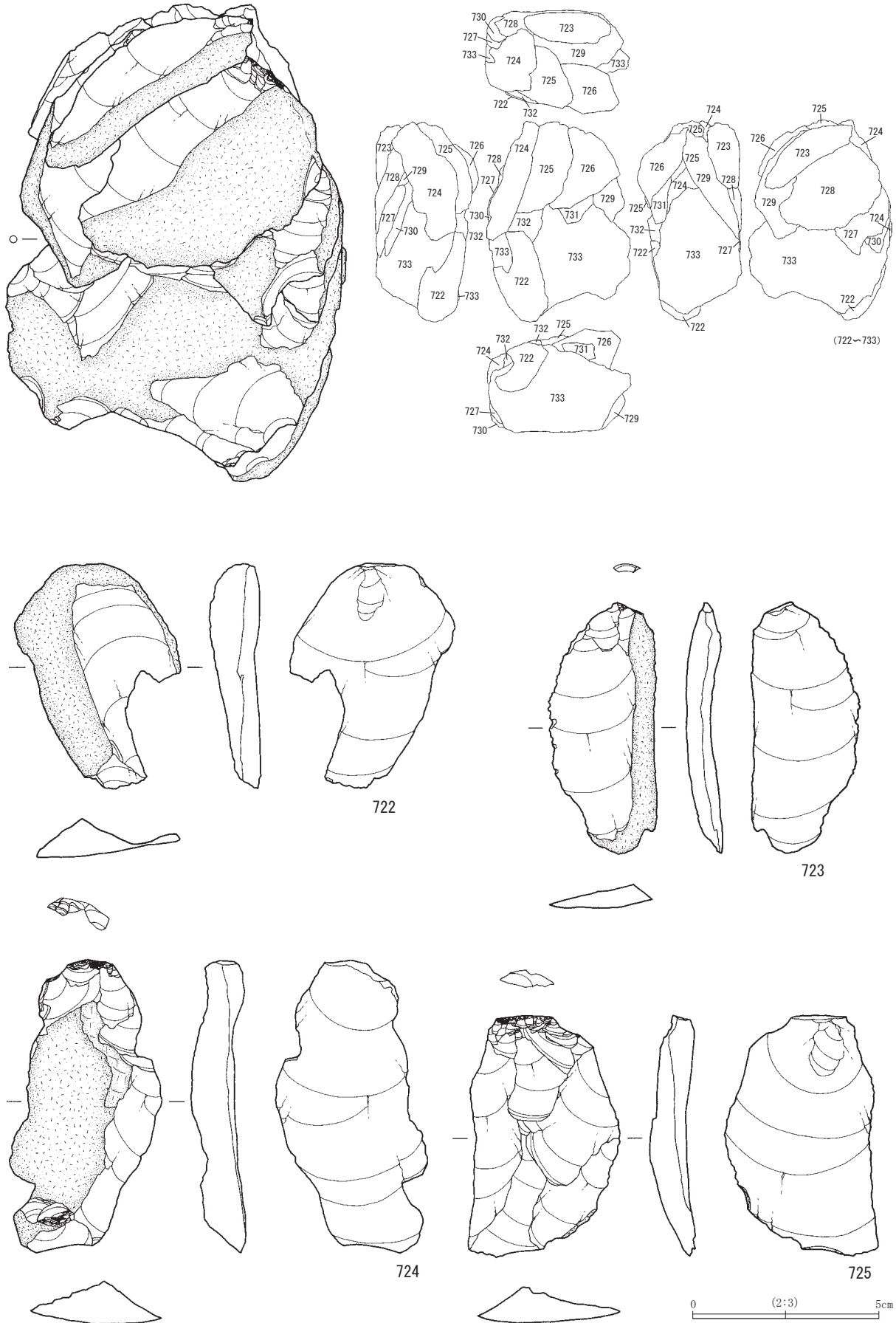
非接合資料は礫面を有する剥片か欠損している剥片であり、剥離された多くの縦長剥片や石刃などは認められない。

本母岩は中～小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。また、接合個体には多くの空

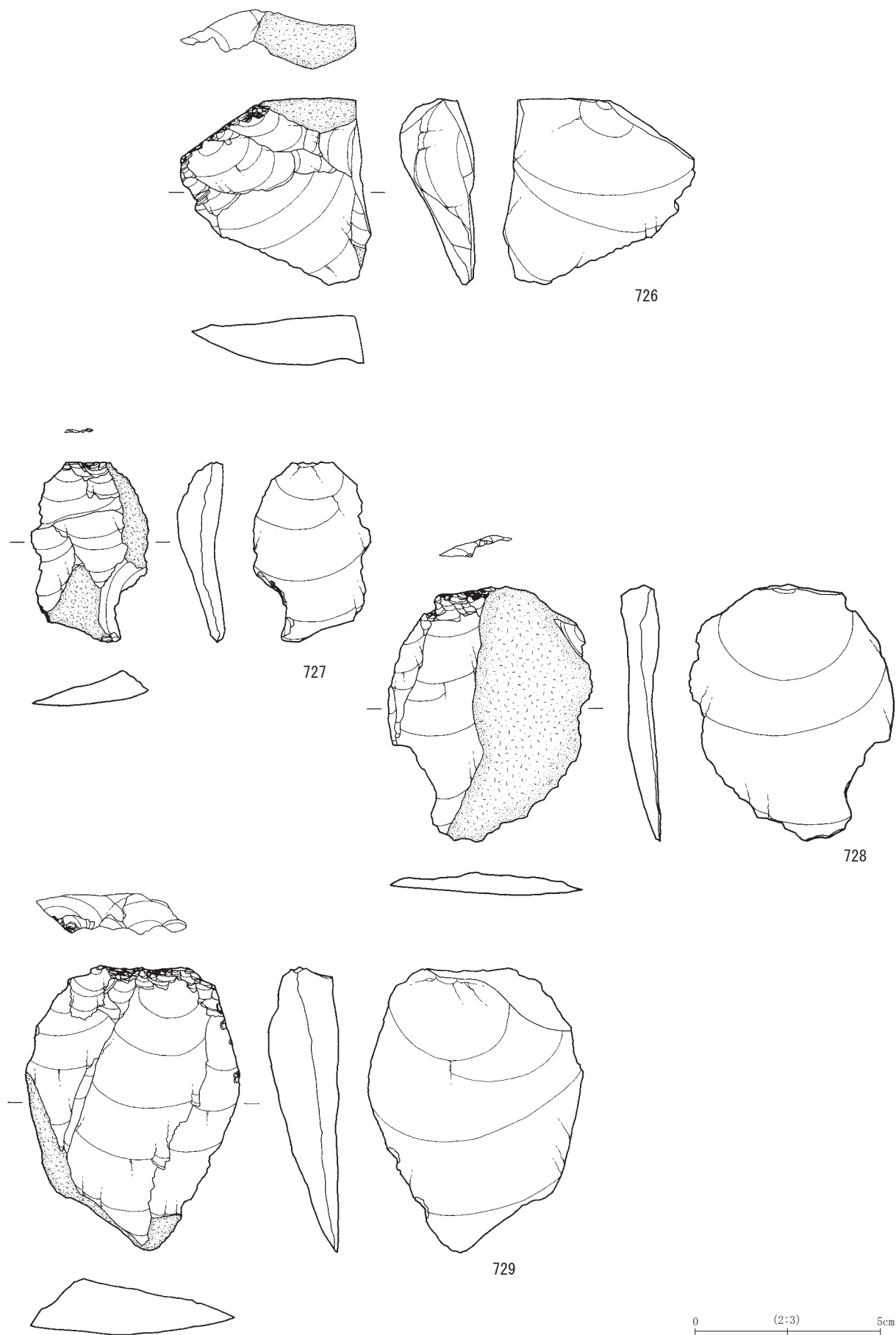
sh75



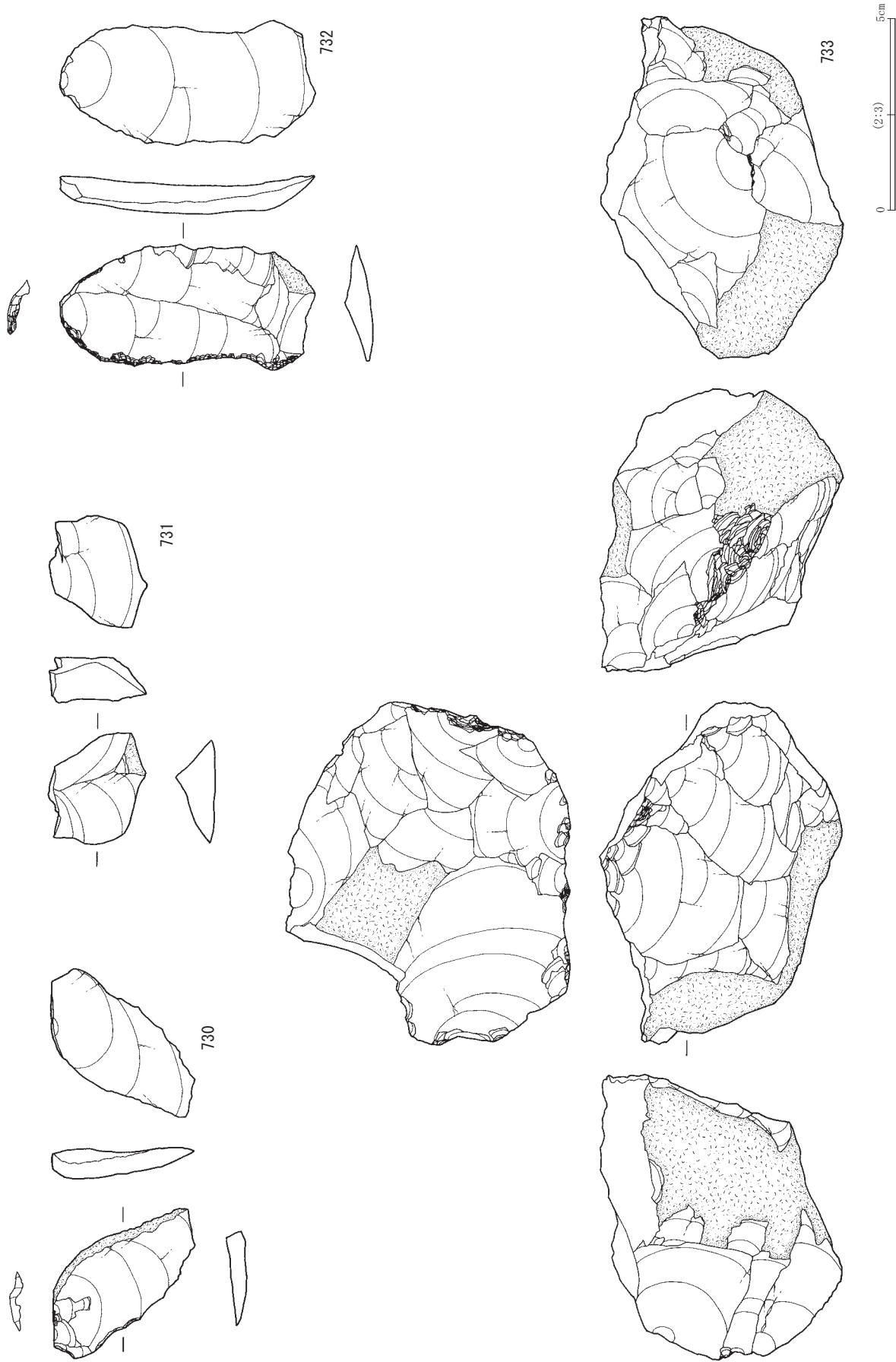
第245図 石器集中区18出土遺物 (35)



第246図 石器集中区18出土遺物 (36)

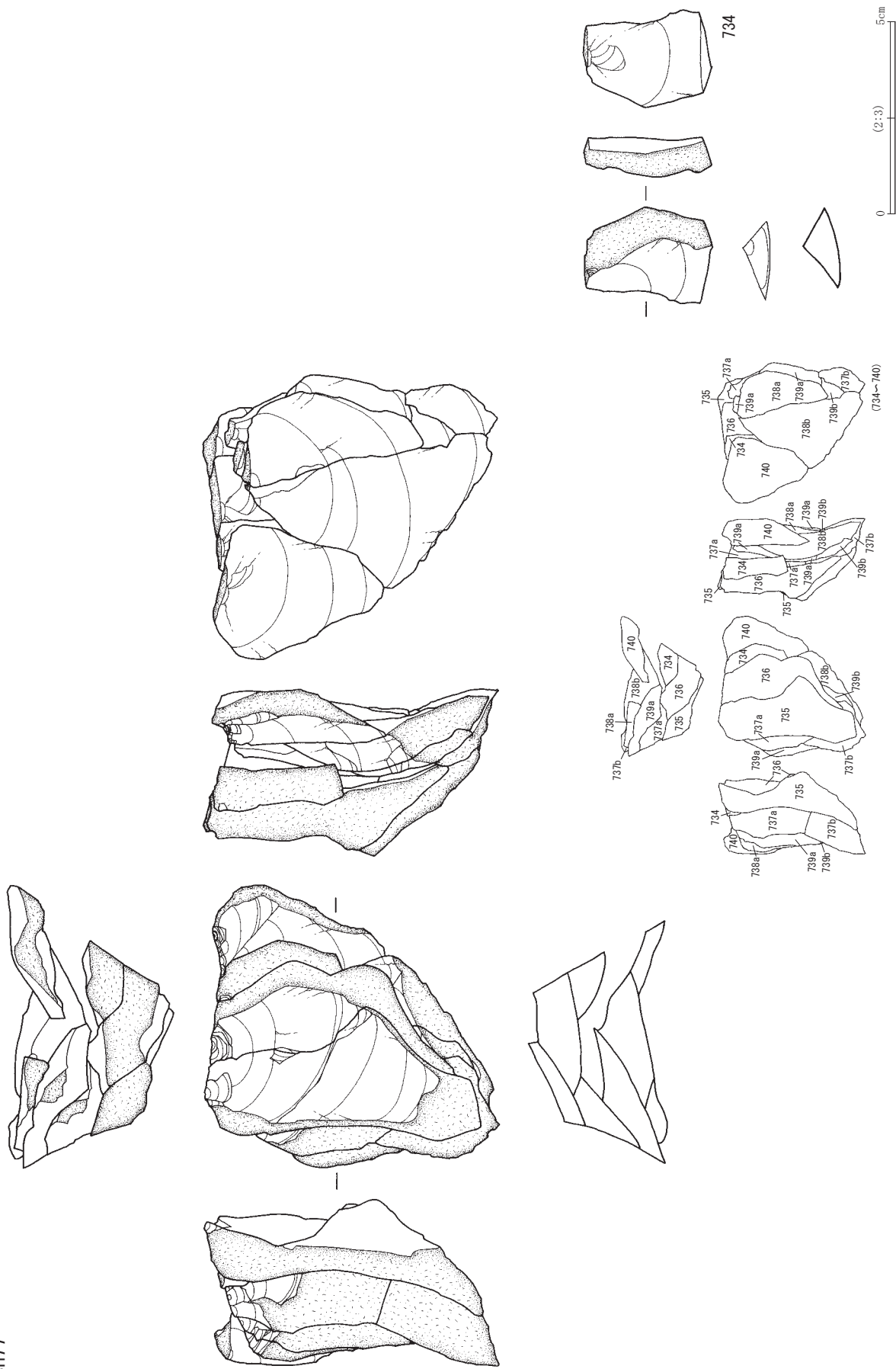


第247図 石器集中区18出土遺物 (37)

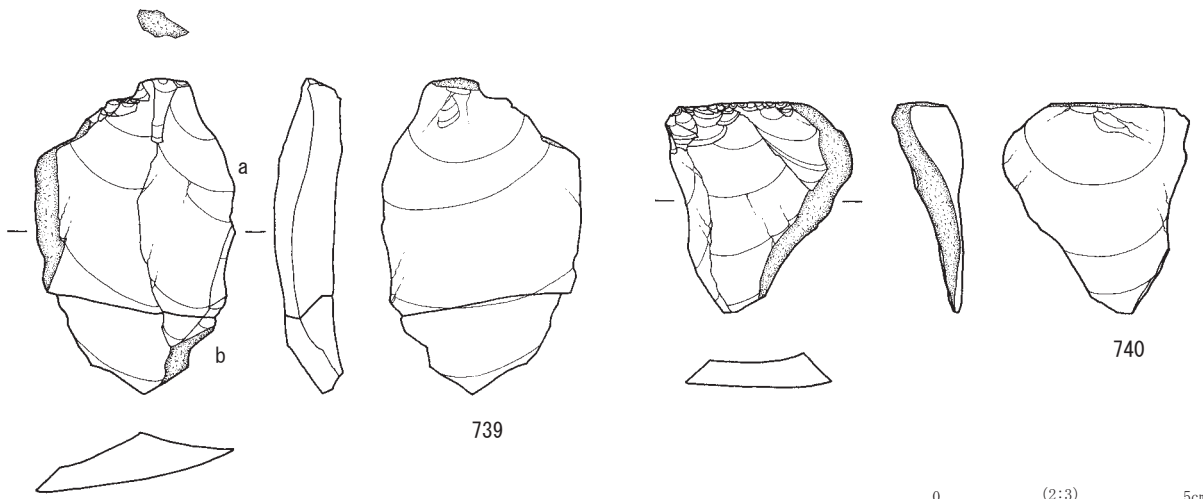
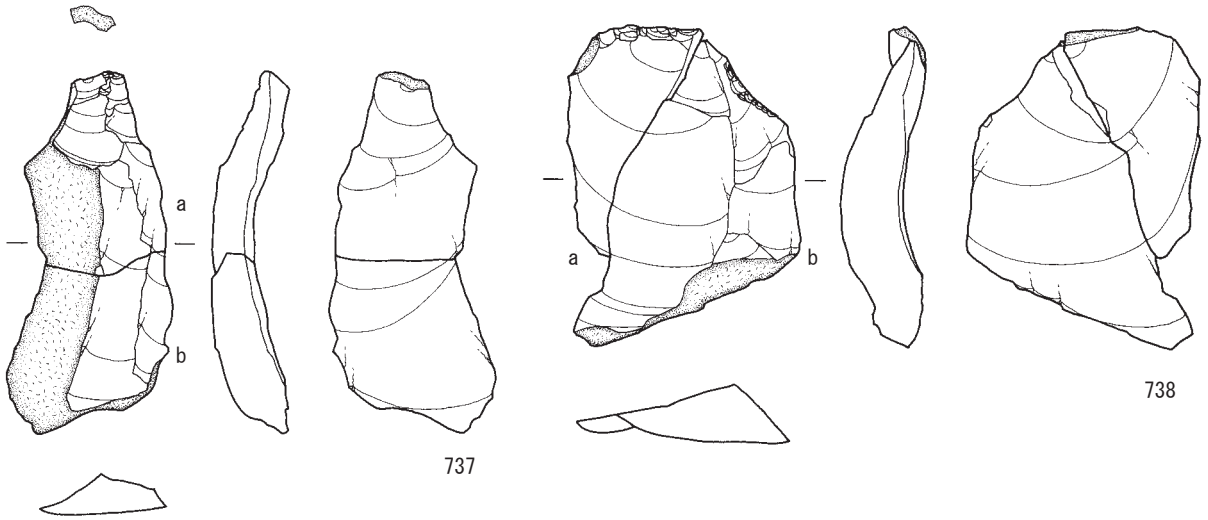
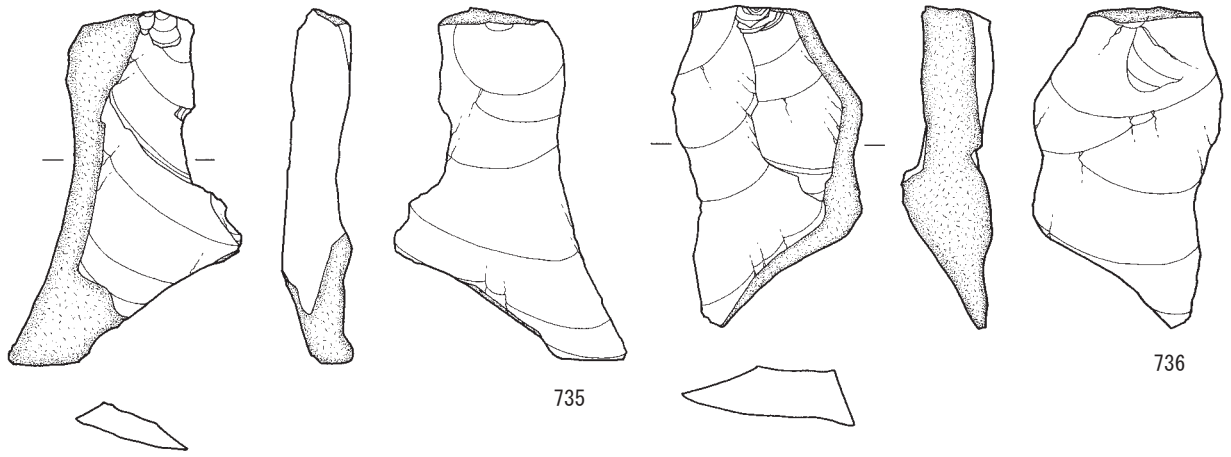


第248図 石器集中区18出土遺物 (38)

sh77

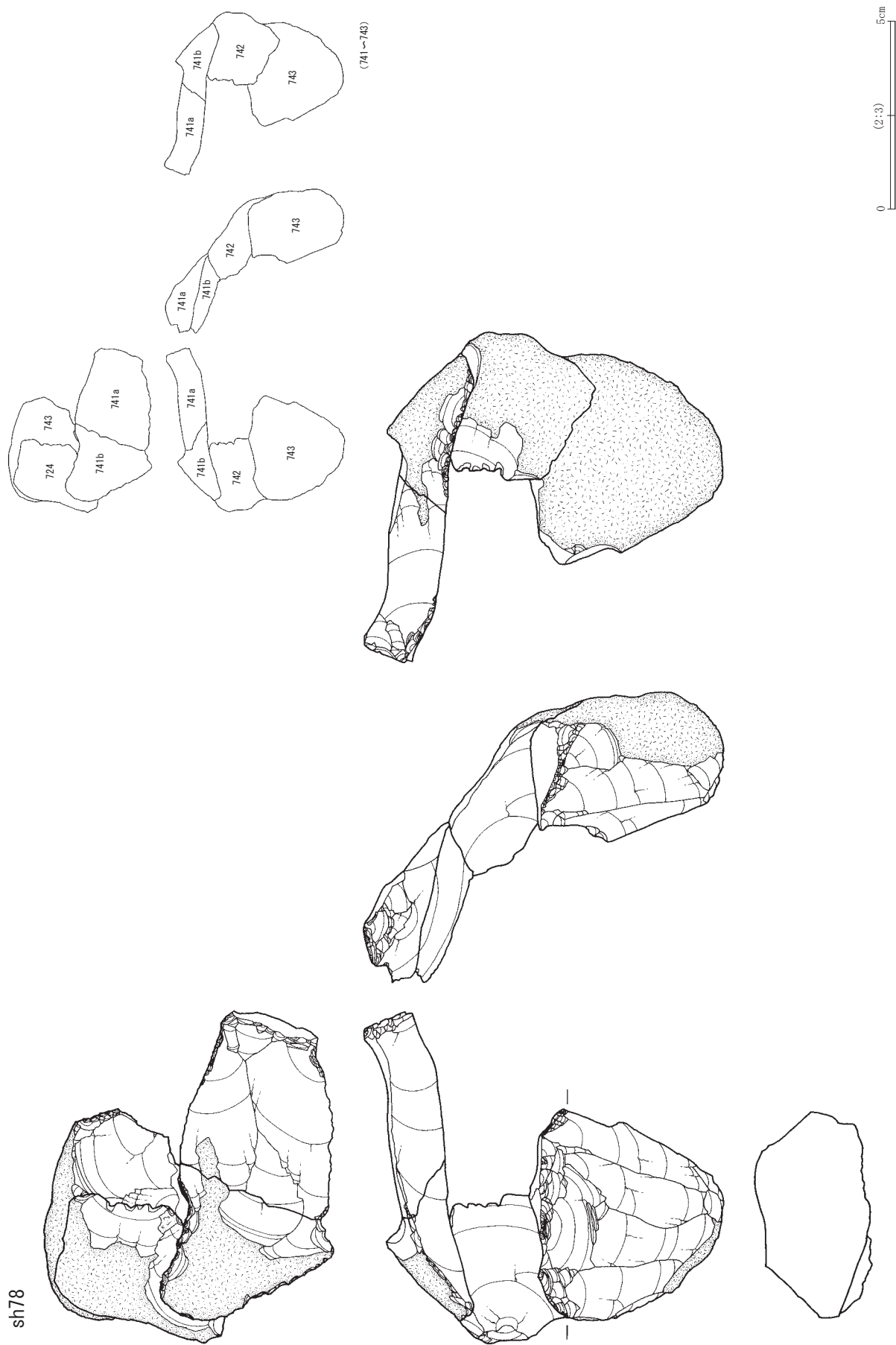


第249図 石器集中区18出土遺物 (39)

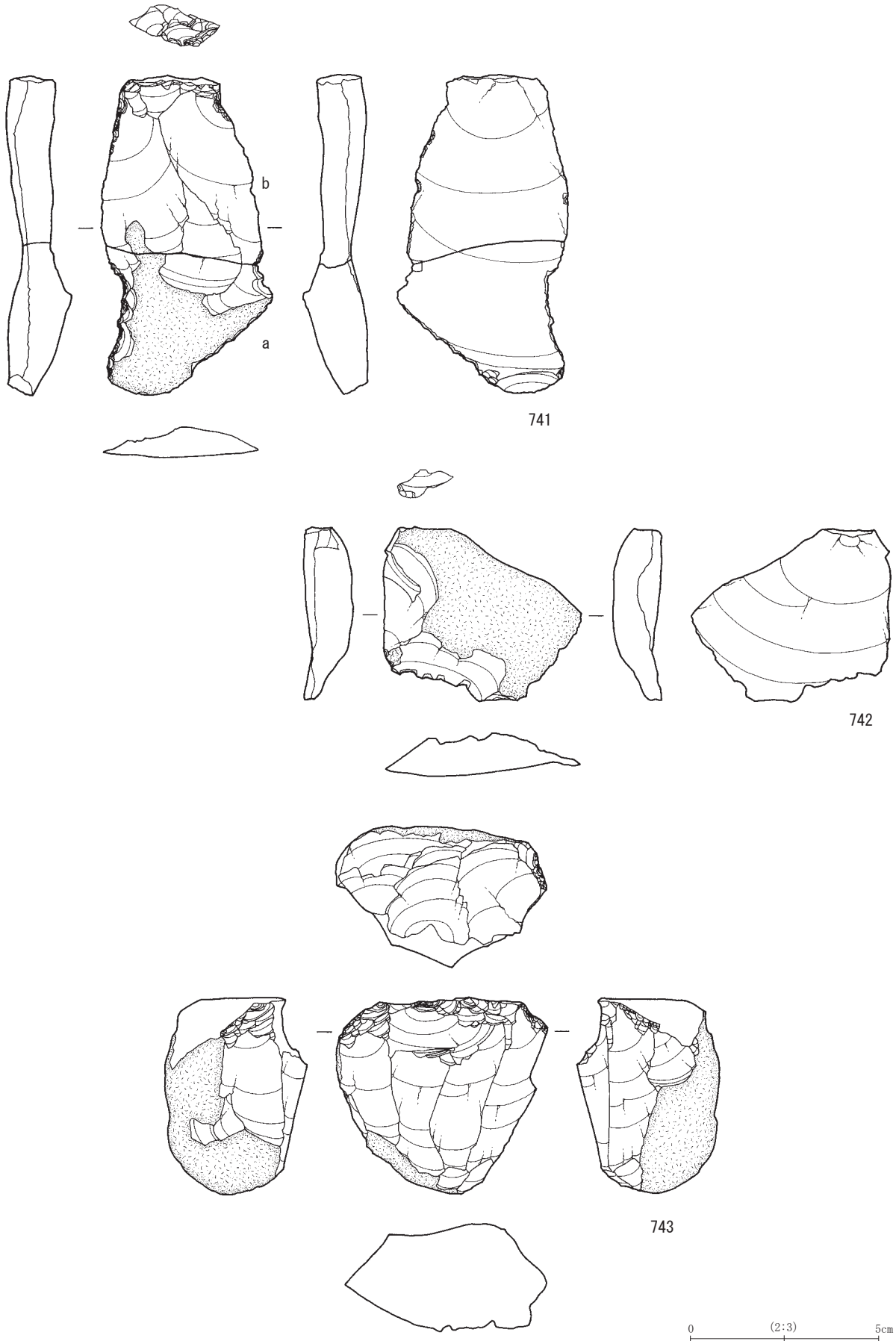


0 (2:3) 5cm

第250図 石器集中区18出土遺物 (40)



第251図 石器集中区18出土遺物 (41)



第252図 石器集中区18出土遺物 (42)

間を有することから、剥離された多くの石器はtoolとして搬出している。

sh79：総点数37点、総重量398.32。彫刻刀形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は灰白・淡黄色が層状に入る。礫面は灰白・にぶい黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、礫面付近は僅かにざらつく。

接合点数は16点あり、5個体(a～e)に分かれる。個体aは7点あり、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップからなる。個体bは3点、個体c～eは各2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は744→(747a+b)→746→745→748→749である。本個体は礫面除去と作業稜調整から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。同一打面上から礫面を有する縦長剥片及び目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。剥片(744)とそれ以降の剥離の間には、右側面に見られような作業面側から直交する大きな剥離を介在させ、作業面稜調整を施している。剥離された剥片はスクレイパーなどの素材としている。

個体bは礫面を有する剥片の連続的な剥離に伴う資料、個体dは小型剥片剥離に伴う資料、それ以外は剥片が2つに折れたものが接合する資料である。個体bは個体aと接合関係にはないものの、同一剥離面が観察されており同じ石核から剥離されたものと考えられる。また、個体c～eは個体aやbの工程の中で剥離された資料である。

彫刻刀形石器(581)やスクレイパー(747a+b)については出土遺物に記載している。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh80：総点数15点、総重量365.96g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、褐灰色が斑に入る。礫面は灰白・にぶい黄褐色を呈する。石質はやや粗粒でややざらつき、摂理が部分的に発達している。

接合点数は11点あり、上記の器種からなる。剥離工程は751→(752a+b+c)→753→755→757→<754><756→758→750>である(<O>の前後関係は不明)。本個体は作業面稜調整から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。右側面に見られる礫面を打面に据え、打面調整を施しながら作業面稜調整に伴う横長剥片を連続的に剥離している。その後、90度打面転位をして上設打面から目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。

本母岩は角～亜角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh82：総点数4点、総重量220.09g。剥片と石核で構成される。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は灰黄褐色からなる。石質は緻密でなめらかである。

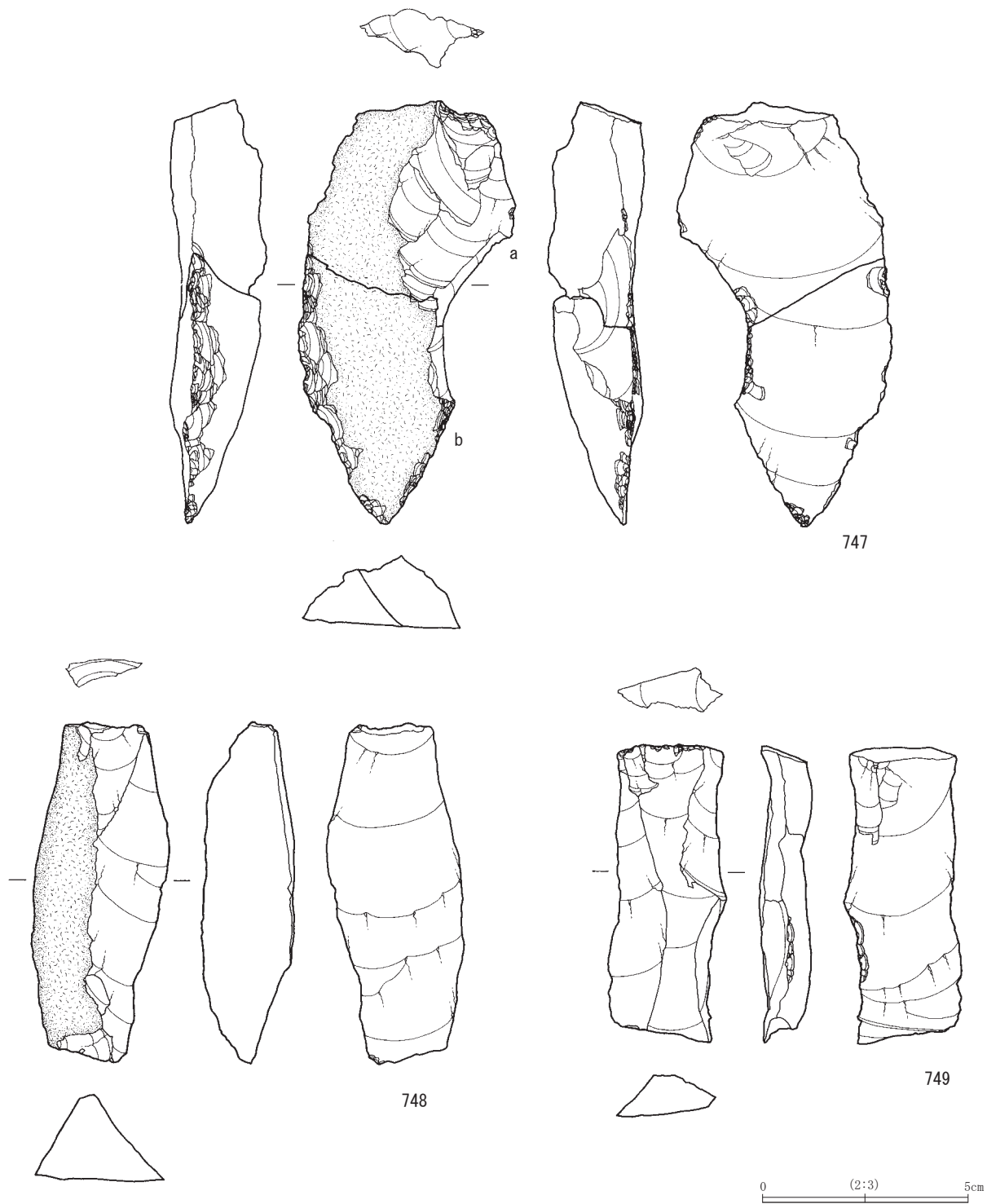
接合点数は2点あり、上記の器種からなる。剥離工程は759→760である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。作業面は弧状に形成されており、対となる裏面側には礫面が残置している。上設打面から打面再生・調整を介在させながら、目的剥片である縦長剥片を剥離している。

本母岩は亜円礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

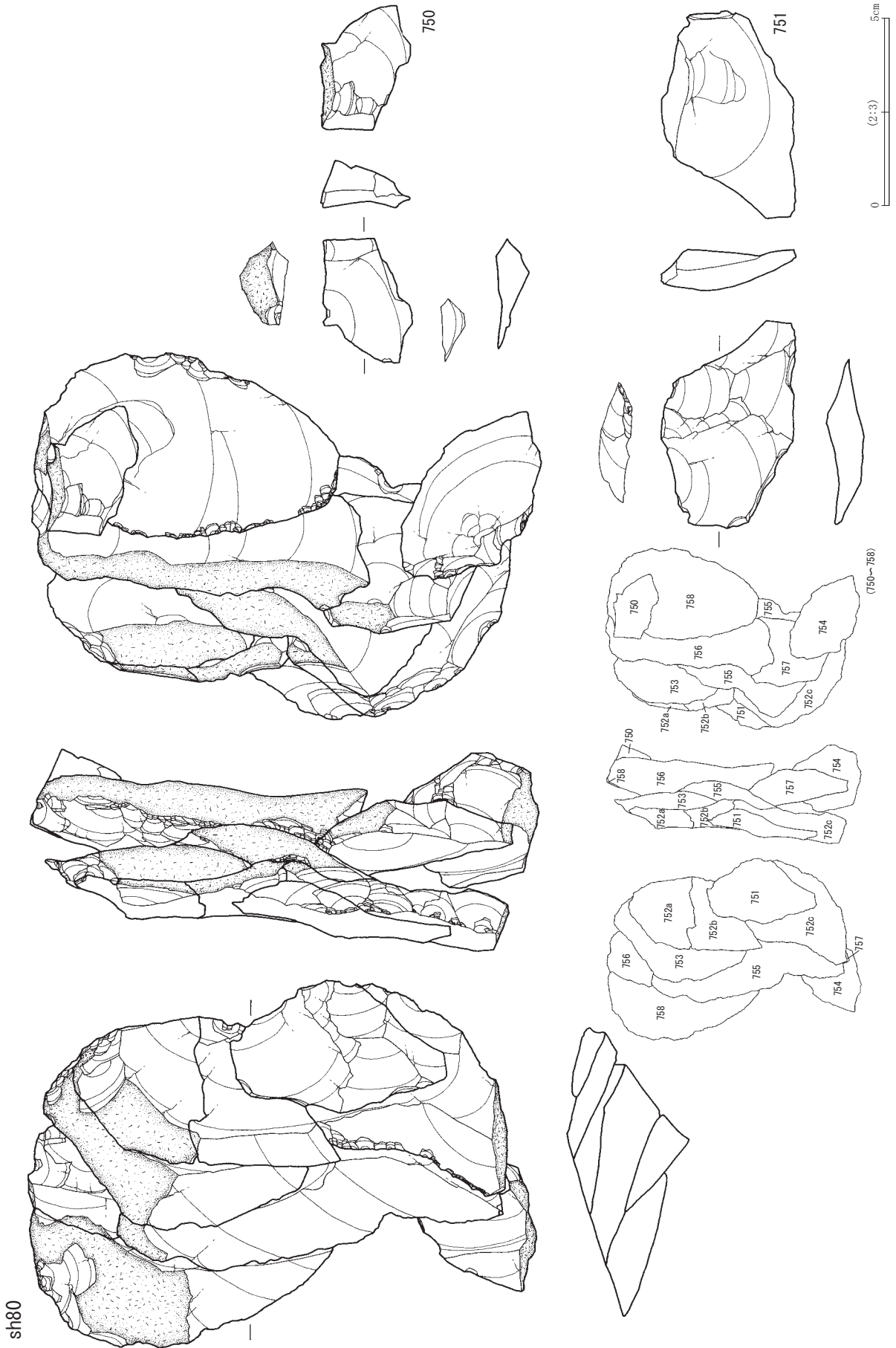
sh83：総点数12点、総重量119.28g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は淡黄色を基調とし、明黄褐色が層状に入る。礫面は灰白色である。被熱しているものにはぶい橙色を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は6点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは2点あり、石刃と剥片からなる。個体bは4点あり、剥片からなる。個体aは礫面除去の過程に伴う資料である。個体bは目的剥片剥離の過程に伴う資料である。作業面稜調整後に打面再生・調整を介在せながら、縦長剥片を連続的に剥離している。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

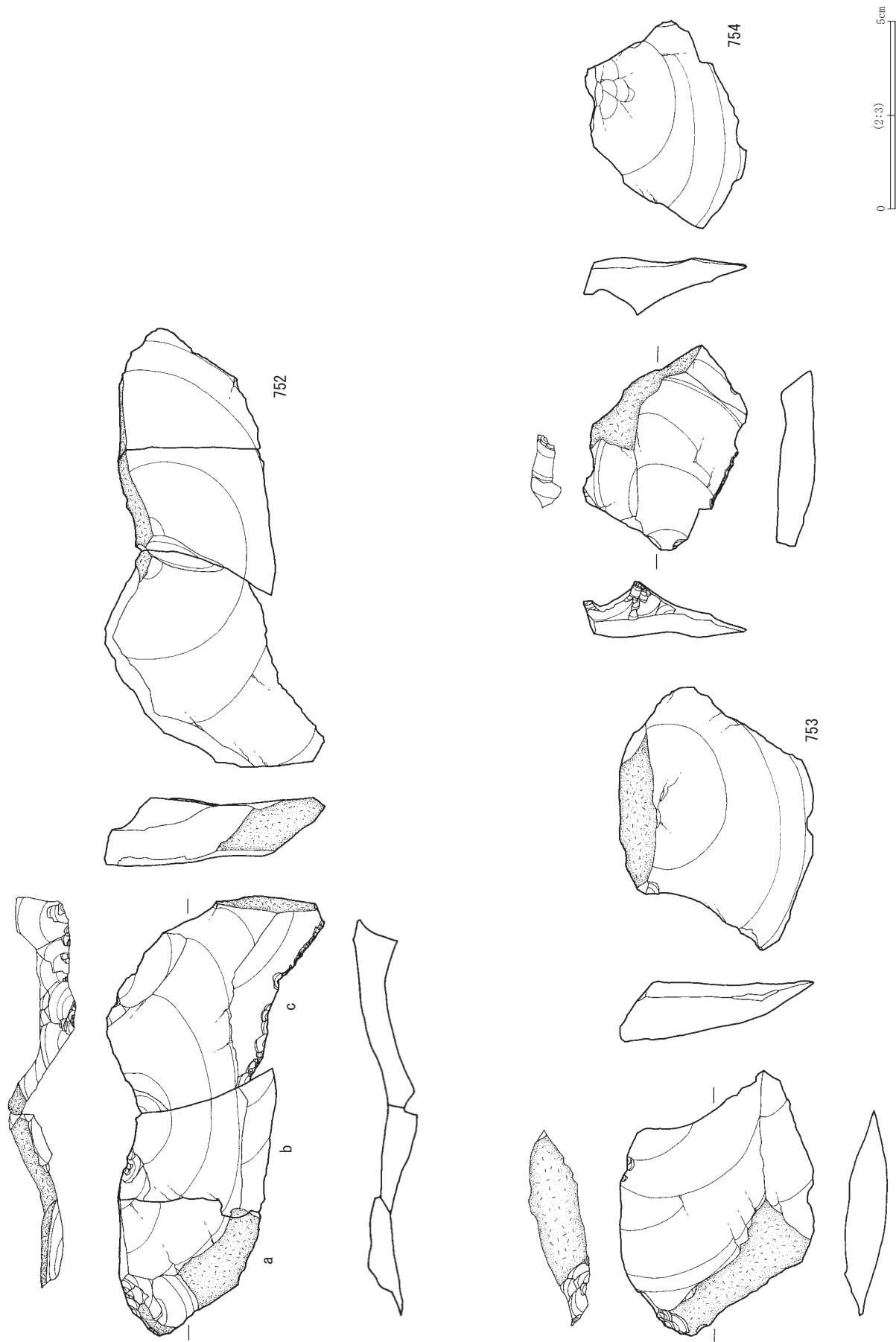


第254図 石器集中区18出土遺物 (44)

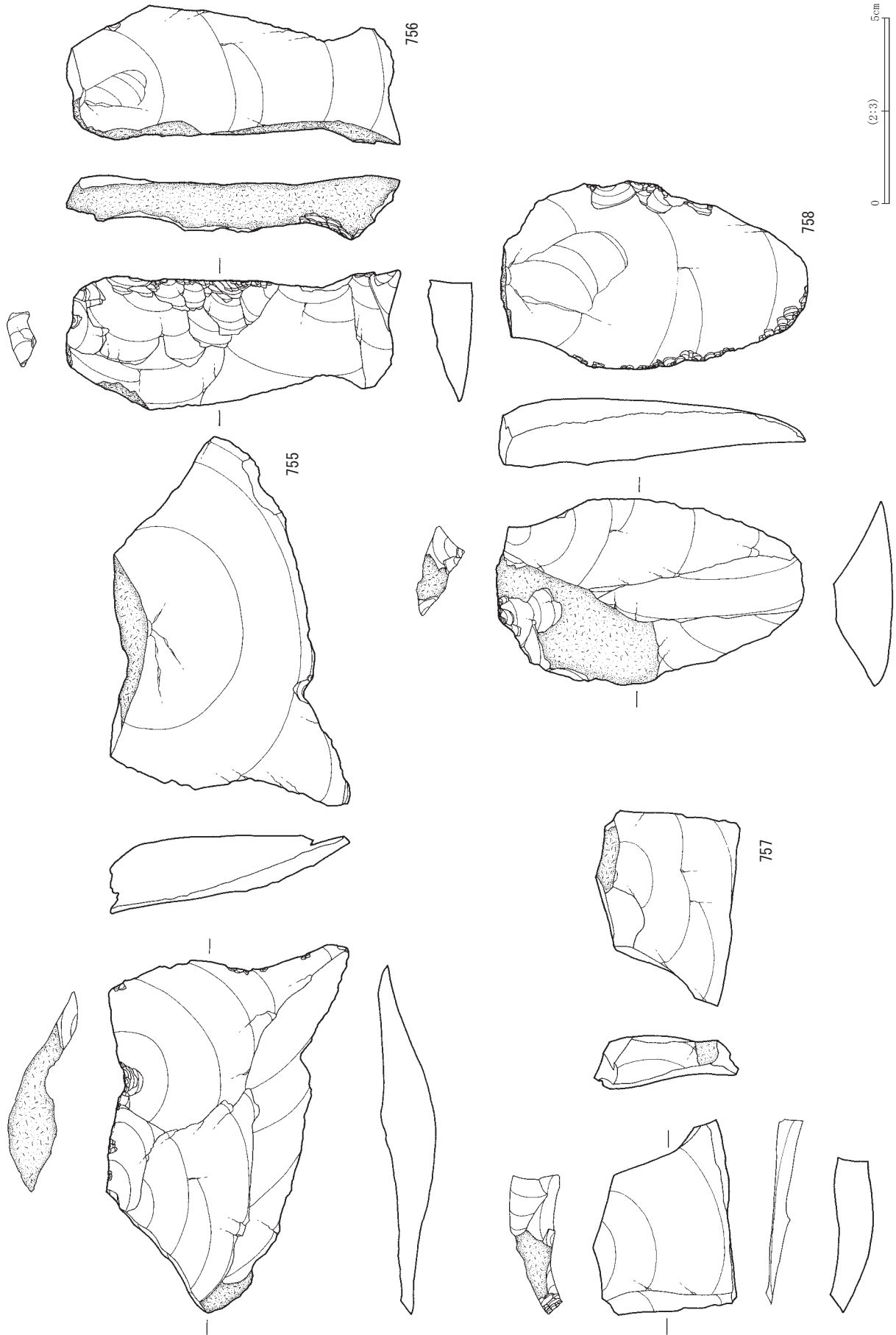


第255図 石器集中区18出土遺物 (45)

sh80

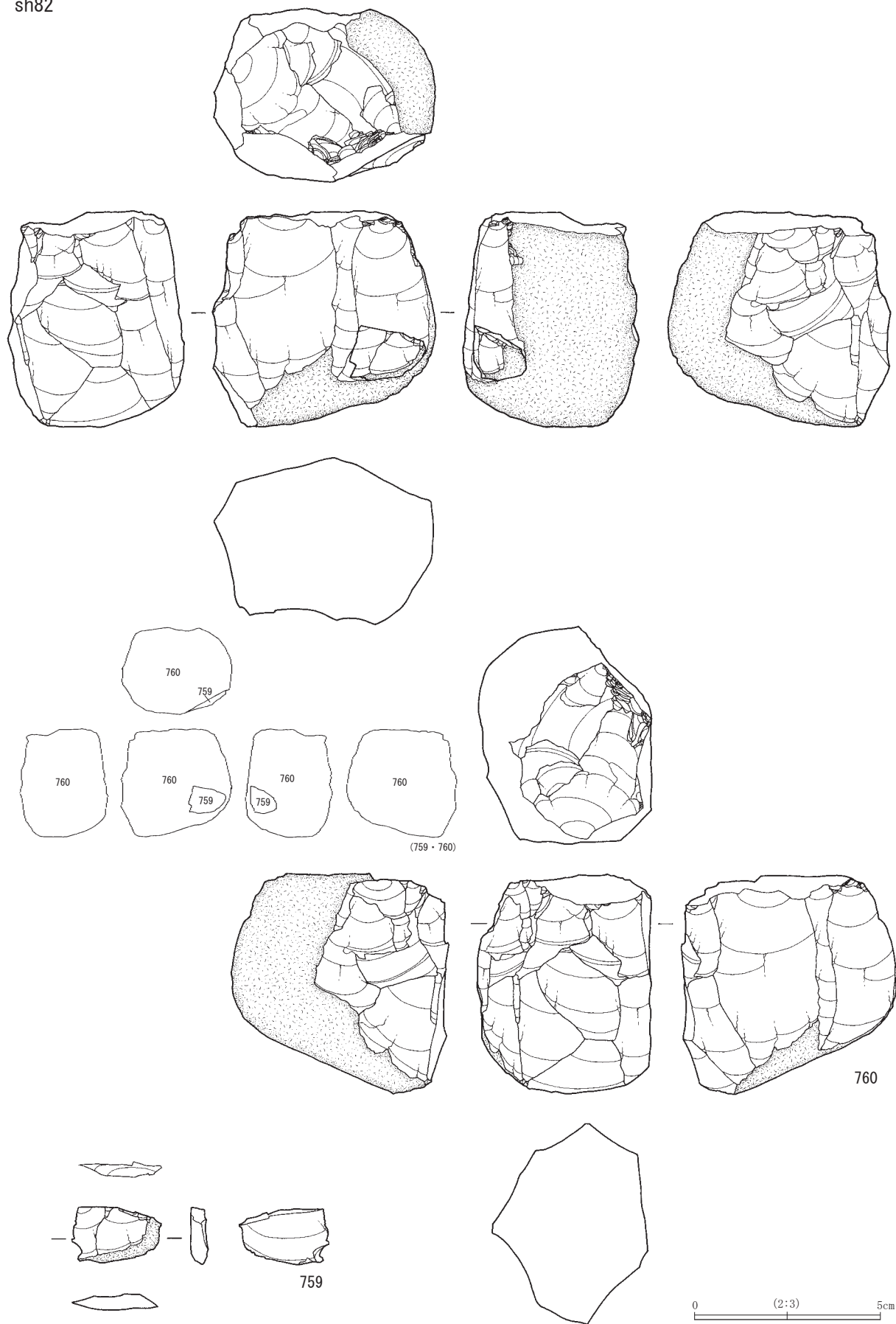


第256図 石器集中区18出土遺物 (46)



第257図 石器集中区18出土遺物 (47)

sh82



第258図 石器集中区18出土遺物 (48)

sh84：総点数12点、総重量100.36g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調としている。石質は緻密でなめらかだが、部分的にややざらつく。摂理が発達しており、鉱物の密集している箇所が複数認められる。

接合点数は2点あり、礫面除去の過程に伴う資料である。

本母岩は石核で搬入しているが、その規模は不明である。剥片剥離後に石核を搬出している。

sh85：総点数10点、総重量158.88g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、灰白色が斑に入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は8点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは2点あり、剥片からなる。個体bは6点あり上記の器種からなる。

個体bの剥離工程は761→762→765→<763><764>→766である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面左下方より剥片(761)を剥離することで打面を作出し、その剥離面から連続的に剥片剥離をしている。停止すると再度90度打面転位させながら石核整形に伴う剥片を剥離した後、上設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。また、この上設打面からの剥離において打面再生を頻繁に介在させており、剥離当初に比べると作業面高がかなり減少している。

個体aは個体bの剥離過程に伴い剥離された資料である。

本母岩は垂角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh86：総点数10点、総重量130.41g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、黄灰色が斑に入る。礫面は灰白・淡黄色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は7点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは4点あり、剥片と石核からなる。個体bは3点あり、石刃と剥片からなる。

個体aの剥離工程は768→769→770→767である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。下設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。停止すると180度打面転位をして上設打面から同様の剥離工程を経ているが、その剥離以前に裏面側を複数回剥離することで打面が設定されている。基本的に正面を作業面、裏面を打面に固定しており、作業面と打面のなす角度は鋭角である。作業面と打面では剥離面の大きさに違いが認められる。

個体bは規模が個体aより大きいことから、それ以前に剥離されたものと考えられる。

本母岩は小型の垂円礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh87：総点数8点、総重量145.1g。剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面はにぶい黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

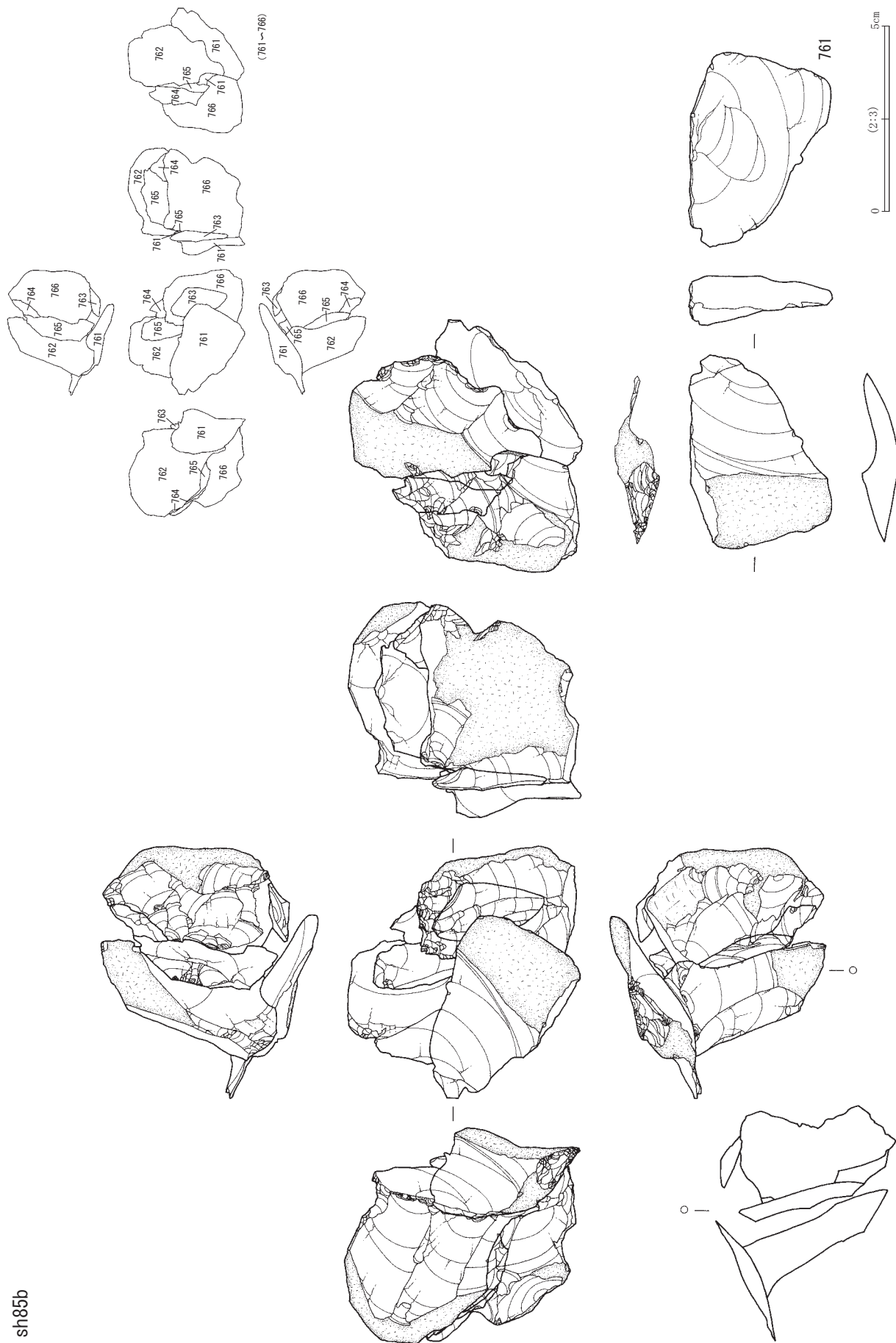
接合点数は7点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは4点、個体bは3点あり、剥片からなる。共に打面再生過程に伴い剥片剥離をしている資料である。

本母岩は垂角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

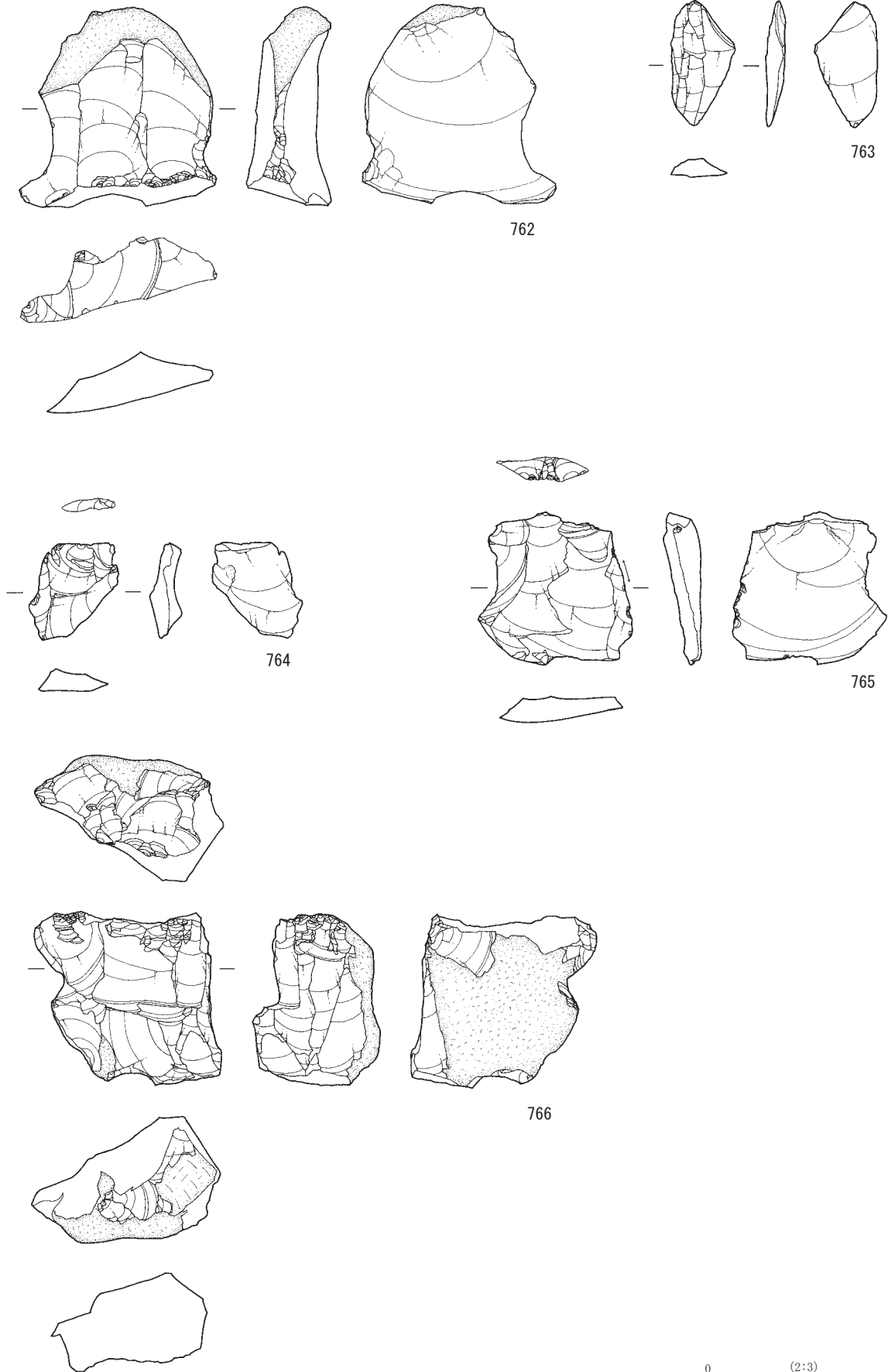
sh88：総点数52点、総重量322.79g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は暗灰黄色を基調とし、黄灰色が斑に入る。礫面はにぶい黄色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

接合点数は20点あり、5個体(a～e)に分かれる。個体aは7点、個体bは3点、個体cは6点あり、これらは二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体dは2点、個体eは2点あり、共に剥片からなる。

sh85b

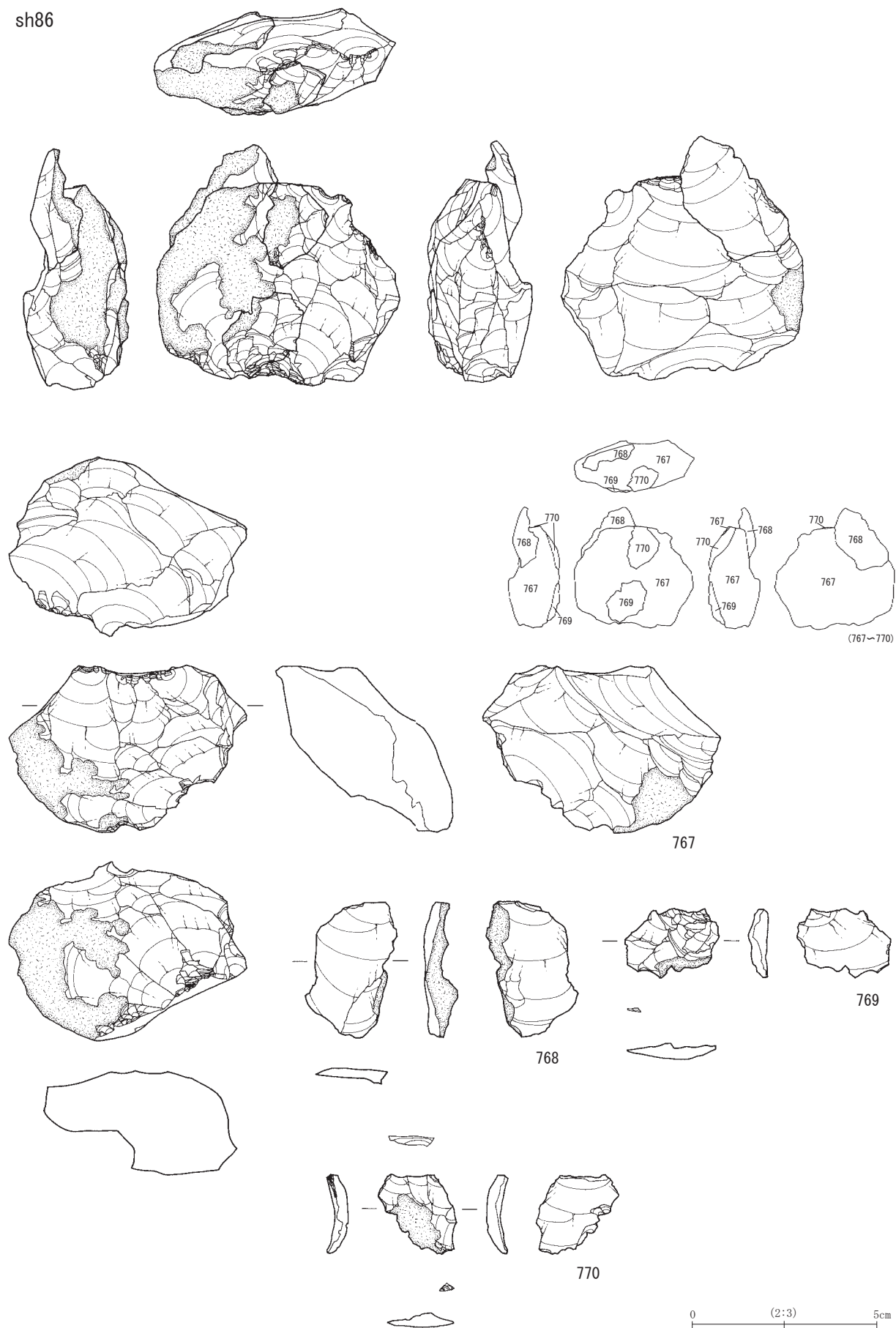


第259図 石器集中区18出土遺物 (49)



第260図 石器集中区18出土遺物 (50)

sh86



第261図 石器集中区18出土遺物 (51)

個体 a の剥離工程は771→773→(772a+b)→775→774→776である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から連続的に縦長剥片を剥離しており、幅と厚さのある剥片を剥離することで石核整形を行った後、正面右側において目的剥片である縦長剥片を剥離している。接合個体の背面剥離構成からも上設打面からの剥離工程が捉えられる。このような接合状況は、作業面の対に礫面を残置させる石核を伴う資料と類似している。

個体 c の剥離工程は<777><778>→780→(779+781+782)である(<O>の前後関係は不明)。本個体は目的剥片の過程に伴う資料である。剥片を素材とした石核の上設打面からは、目的剥片である小型の縦長剥片を連続的に剥離している。ただし、石核は被熱により3分割しており、その分割された剥片に対して二次加工を施している。

個体 b・d は上記の工程中の打面再生の過程に伴う資料、個体 e は剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

個体 a・c の規模から見ていくと a→c の前後関係を捉えられる。これらは基本的に目的剥片剥離は単設方向からであり、打面再生に限って打面転位をしているようである。各個体に伴い目的剥片が異なることから、石核の規模により目的剥片を変更したものと思われる。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh89：総点数4点、総重量112.95g。スクレイパーと剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は2点あり、作業面稜調整の過程に伴う資料である。スクレイパー(1025)については集中区外から出土しているため404頁に記載している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh90：総点数2点、総重量4.7g。尖頭器と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面付近は灰白色が層状に入る。礫面は灰白色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

尖頭器(564)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh91：総点数4点、総重量25.5g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は灰黄色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh92：総点数4点、総重量9.22g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh93：総点数12点、総重量37.51g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

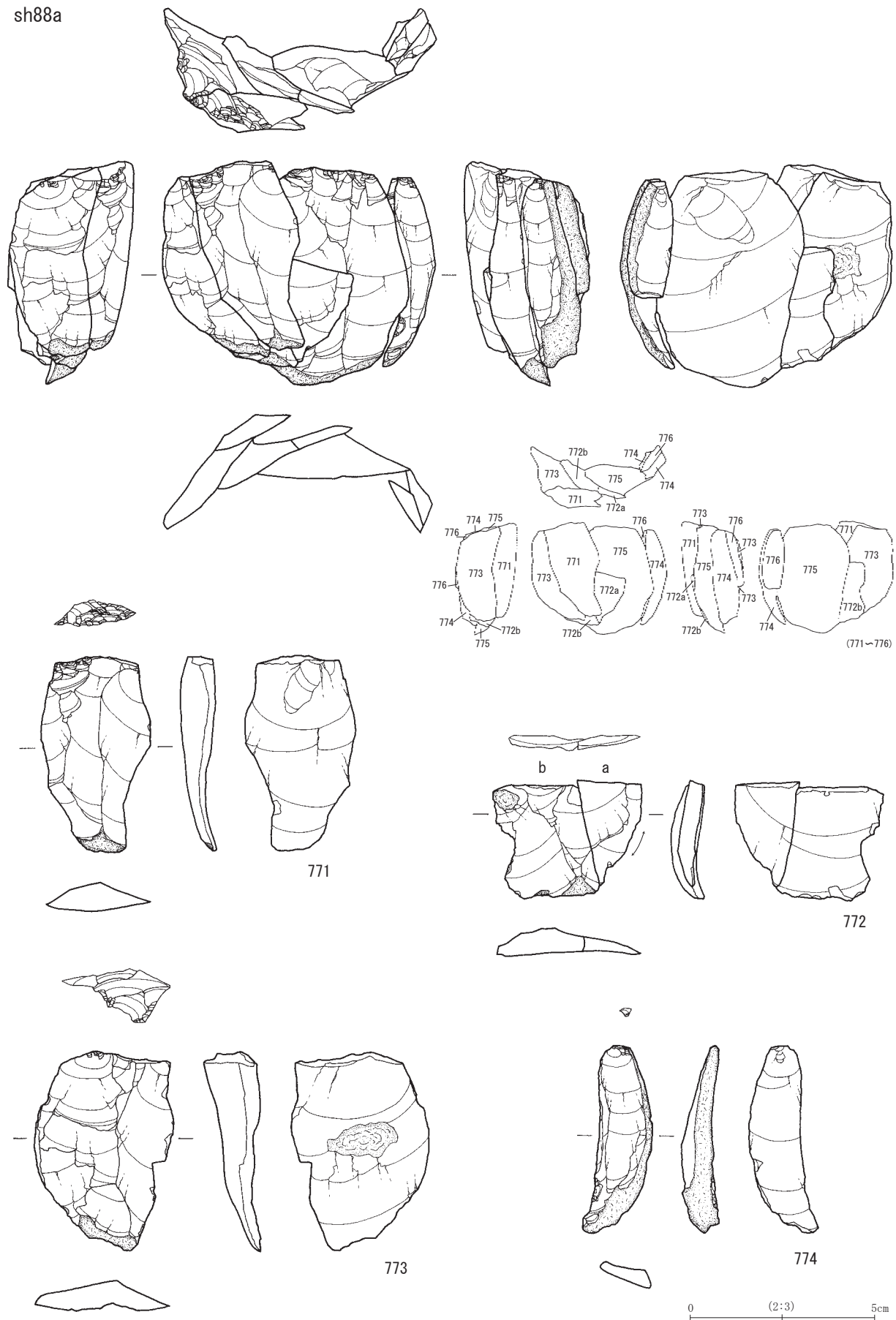
sh94：総点数5点、総重量9.03g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面は灰白色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

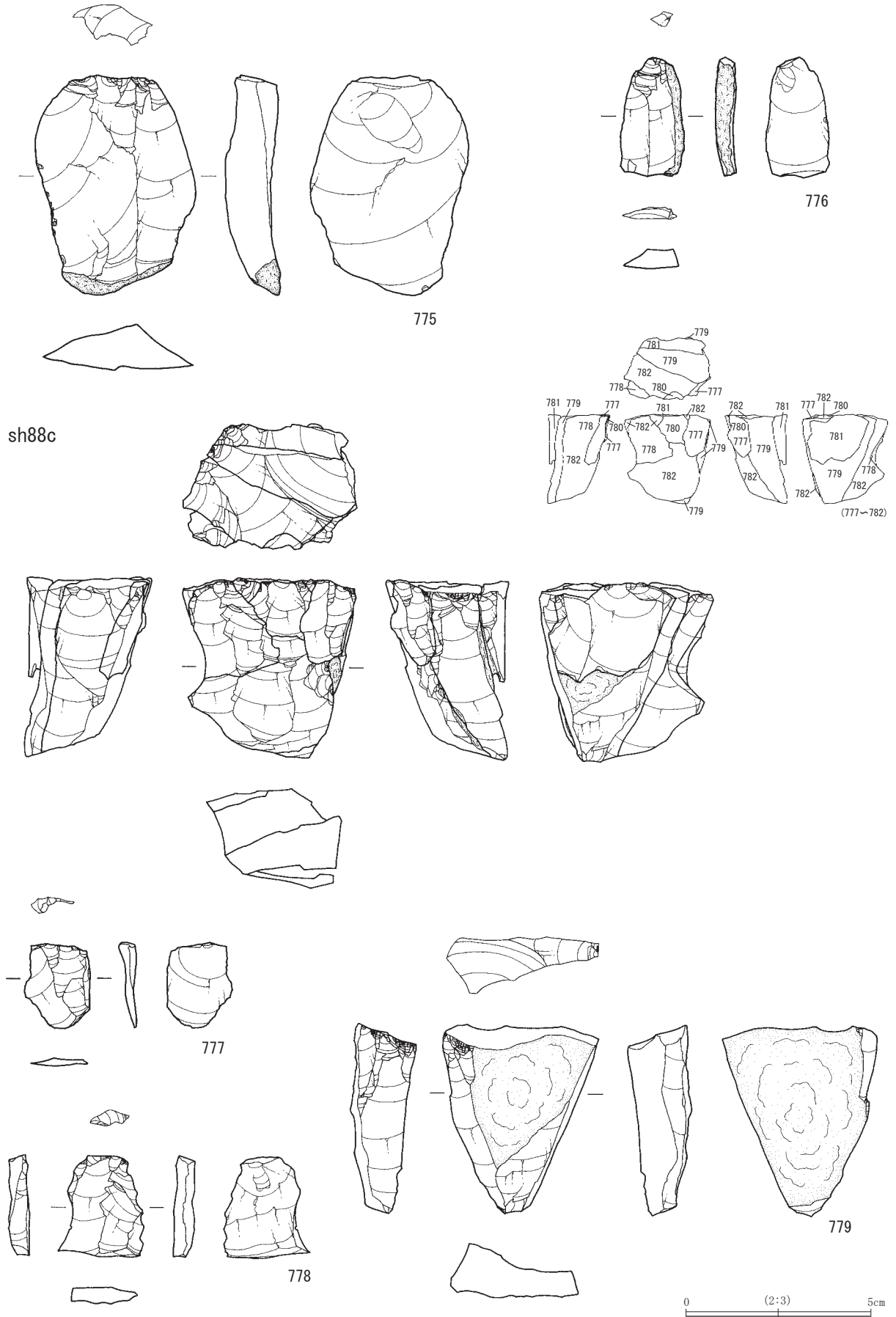
sh95：総点数5点、総重量136.93g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、礫面は黄灰色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。摂理が部分的に発達している。

接合点数は2点あり、目的剥片剥離に伴う資料である。

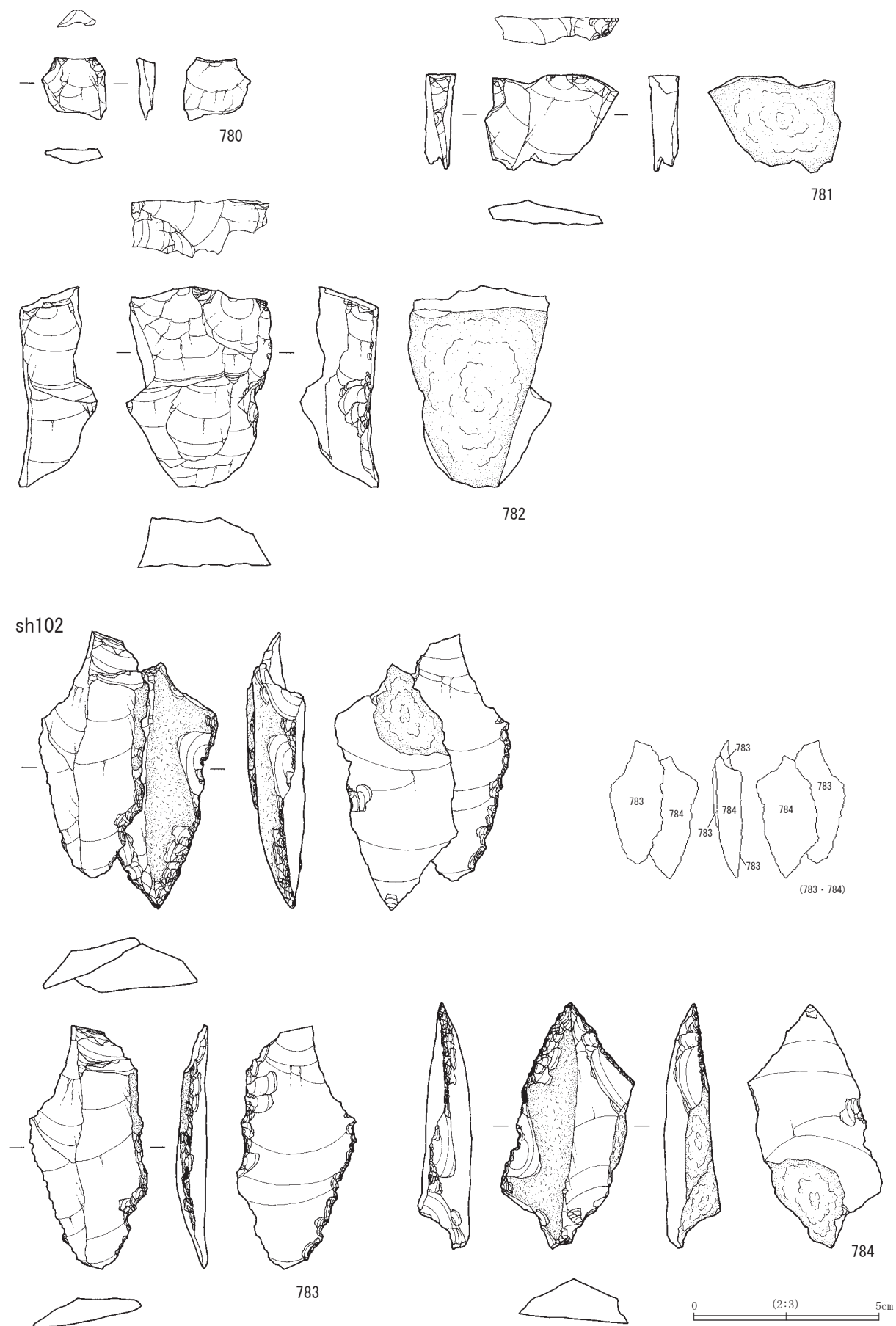
sh88a



第262図 石器集中区18出土遺物 (52)



第263図 石器集中区18出土遺物 (53)



第264図 石器集中区18出土遺物 (54)

本母岩は角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh96：総点数4点、総重量14.92g。スクレイパーと剥片で構成される非接合資料である。剥離面はにぶい黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

スクレイパー(1030)については集中区外から出土しているため406頁に記載している。

本母岩は石核の状態で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh97：総点数2点、総重量21.55g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、灰色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh98：総点数2点、総重量6.64g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh99：総点数2点、総重量31.99g。尖頭器と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰オリーブを基調とする。石質は緻密でなめらかである。

尖頭器(567)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh100：総点数3点、総重量19.84g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、灰色が層状に入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh101：総点数4点、総重量17.36g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh102：総点数10点、総重量189.39g。尖頭器、スクレイパー、剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面は灰黄褐色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は2点あり、尖頭器とスクレイパーからなる。剥離工程は783→784である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である縦長剥片を剥離している。それぞれ打面部分が被熱などで欠損しているため、全容は不明である。剥片は尖頭器(784)とスクレイパー(783)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

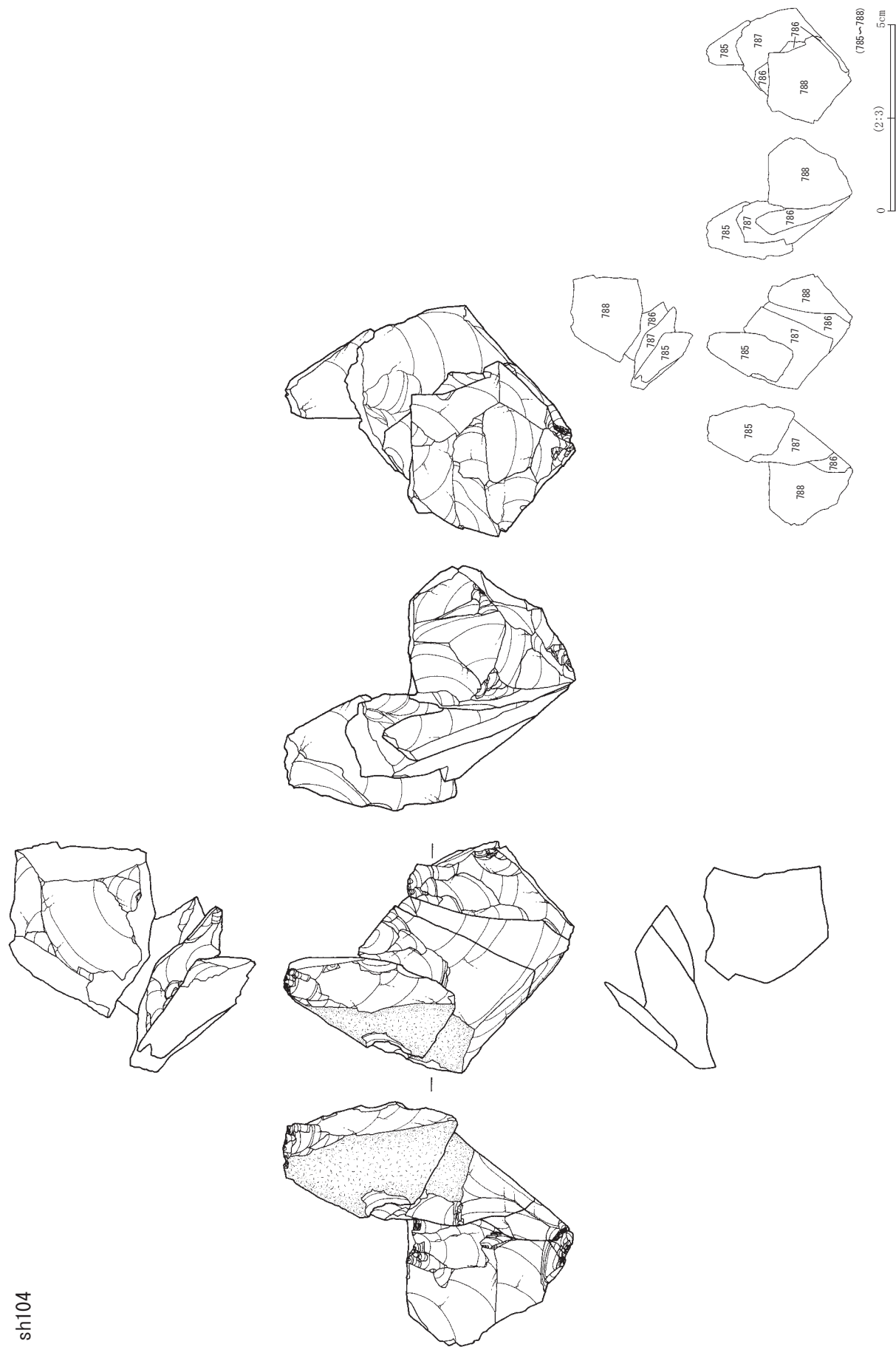
sh103：総点数6点、総重量97.85g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白を基調とし、礫面は黄褐色を呈する。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

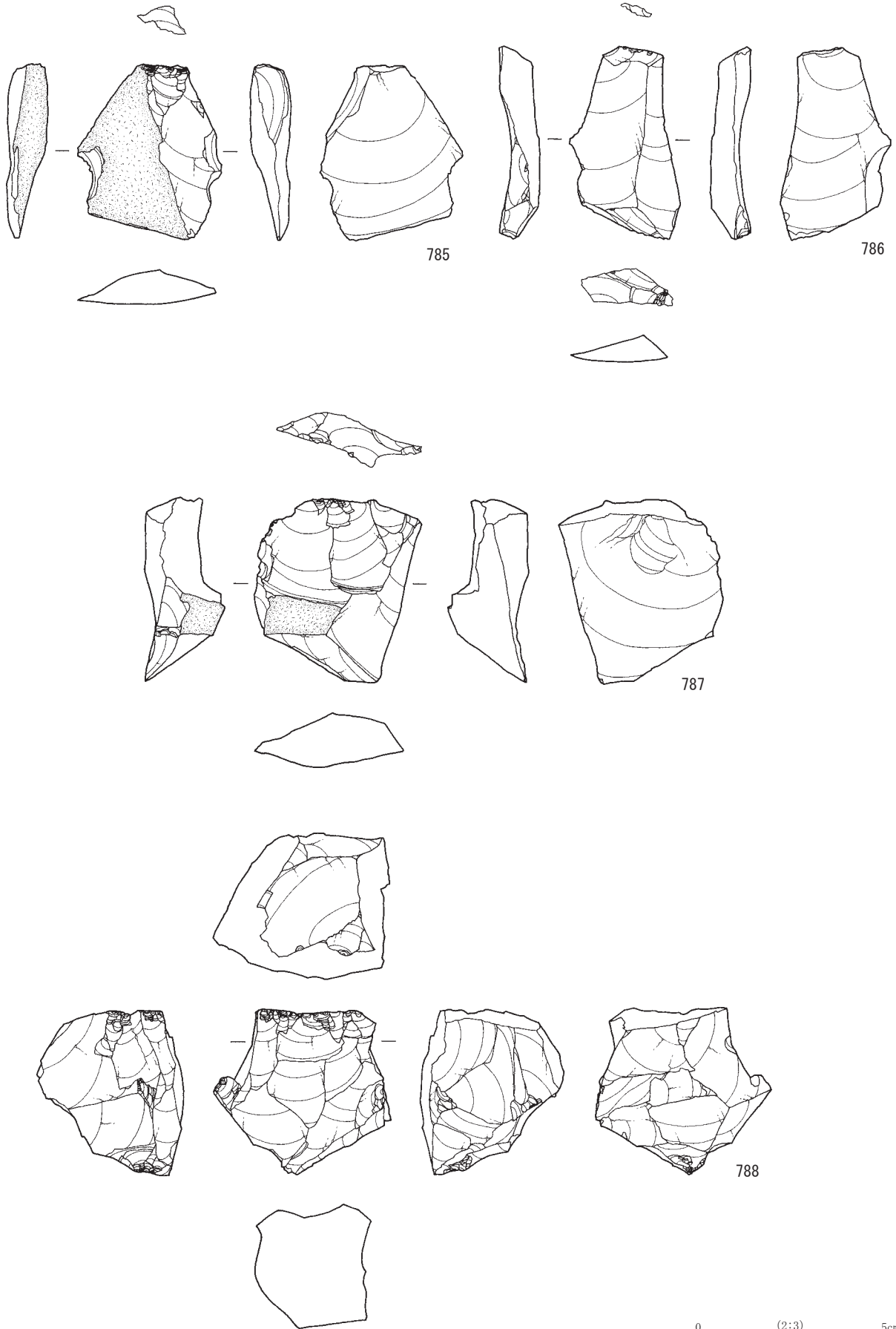
sh104：総点数4点、総重量143.24g。剥片と石核で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。灰黄褐色の鉱物が入る。

剥離工程は785→787→786→788である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。上設打面から石核整形を施しながら目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。この剥離に伴い打面再生と下縁部調整を行うため、作業面高は徐々に減少する。剥片(786)の剥離後も、石核の正面右側において作業面稜調整を行いつつ小型剥片を剥離している。接合個体の背面剥離面構成は基本的に上方向からの剥離以外には横方向からの剥離も認められることから、上記の剥離以前に作業面稜調整が行われていたことが捉えられる。また接合個体には多くの空間を有することから、厚手の

sh104



第265図 石器集中区18出土遺物 (55)



第266図 石器集中区18出土遺物 (56)

剥片はtoolとして搬出したものと思われる。

本母岩は亜角～亜円礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh105：総点数3点、総重量9.47g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密だが、ややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh106：総点数2点、総重量104.82g。尖頭器と石核で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面はにぶい赤褐色を呈する。石質は密だが、ややざらつく。

尖頭器(571)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh107：総点数2点、総重量42.86g。二次加工を有する剥片と剥片で構成される接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合個体は礫面除去・石核整形の過程に伴う資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh108：総点数3点、総重量19.24g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は灰白・黄灰色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

接合個体は剥片の器体中央で2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核の状態で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh109：総点数3点、総重量10.77g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh17：総点数2点、総重量8.16g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は黒褐色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

剥片の1点は折損した石刃の可能性がある。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc1：総点数22点、総重量341.29g。二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、灰黄褐色が斑に入る。石質は緻密でなめらかである。白色の摂理が層状に入る。その摂理に挟まれた部分が珪化しているため、各石器の両面にはその摂理を確認できるものが多い。被熱しているものもあり、それらは白色化している。

接合点数は9点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体aは5点あり、剥片と石核からなる。個体b・cはそれぞれ2点あり、剥片からなる。

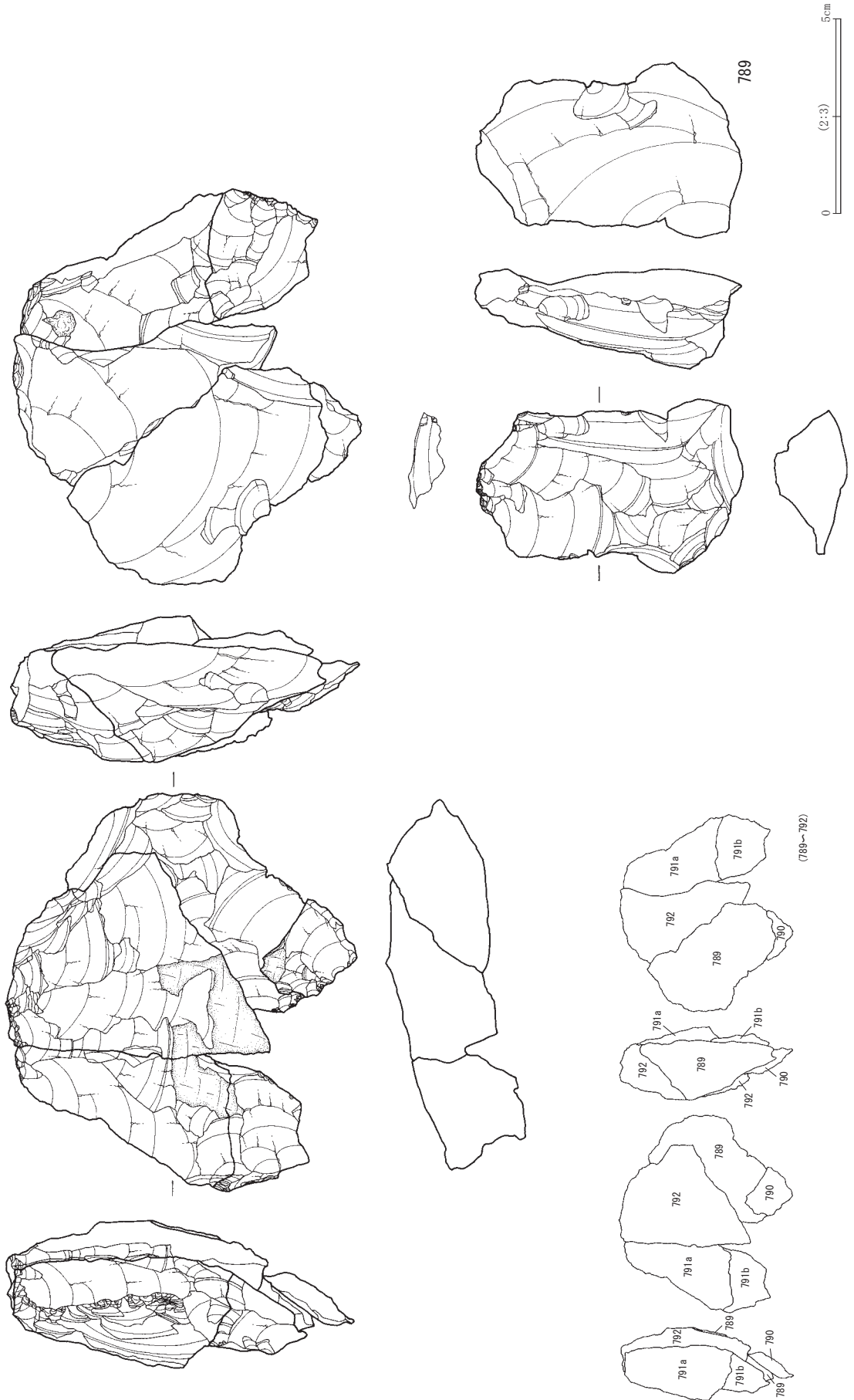
個体aの剥離工程は<789→790><792><791a→791b>である(<○>の前後関係は不明)。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。厚手の剥片が3分割された後に、それぞれを石核の素材として用い小型剥片を剥離している。本個体は白色の摂理に挟まれた珪質化した部分を使用しているため、形状は扁平である。接合個体の剥離面構成からは、摂理面除去から石核整形に伴う周縁方向からの求心的な剥片剥離が捉えられる。ここで認められた分割の原因については判然としない。

個体bは剥片の2つに折れたものが接合した資料、個体cは石核整形の過程に伴う資料である。共に摂理に覆われており、個体aに先行するものと思われる。

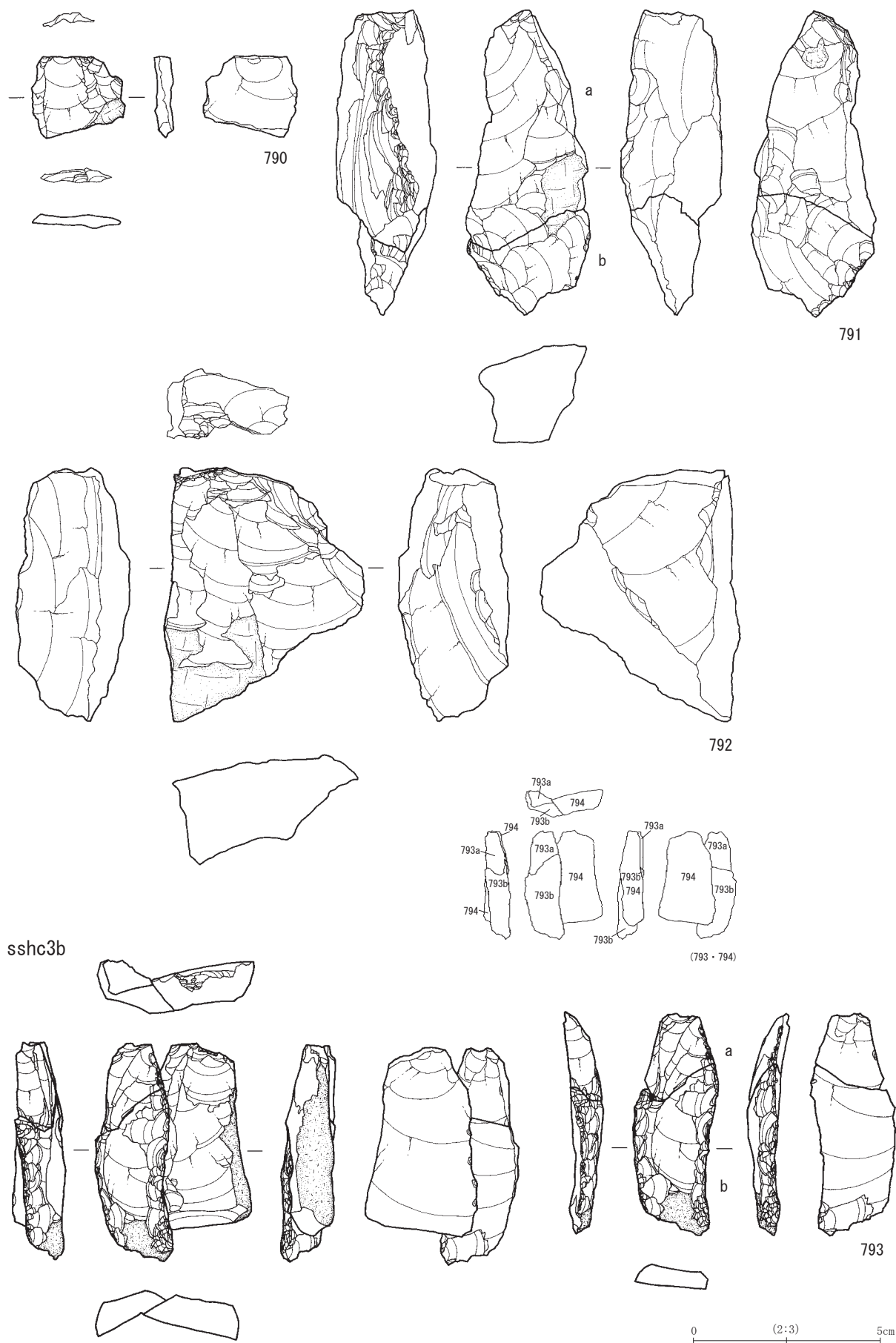
本母岩は中型の石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出したものと思われる。

sshc2：総点数28点、総重量123.69g。スクレイパー、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は青黒色を基調とし、灰色の斑点が入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、

sshc1



第267図 石器集中区18出土遺物 (57)



第268図 石器集中区18出土遺物 (58)

なめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は7点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体aは2点あり、スクレイパーと剥片からなる。個体bは3点、個体cは2点あり、それらは剥片からなる。

個体a～cは礫面除去・石核整形の過程に伴い剥片剥離された資料である。

本母岩は石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc 3：総点数10点、総重量83.44g。スクレイパー、楔形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰・青黒色が斑に入る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。石質は緻密でやや光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は6点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体a・bは3点ずつあり、前者は二次加工を有する剥片、剥片、石核、後者はスクレイパーと剥片からなる。

個体aの剥離工程は800→801→802である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面右方向から石核整形により作業面再生が行われ、石核の作業面は大きく縮小される。その後、打面調整を介在させながら上設打面から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは、180度打面転位を繰り返しながらの剥片剥離が捉えられる。

個体bの剥離工程は(793a+b)→794である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である縦長剥片を剥離している。それらはスクレイパーの素材に用いられる。793は2点からなるスクレイパーである。

両個体の前後関係は、規模から判断すれば個体b→aである。しかし、両者の間を埋めるような資料は本母岩別資料の中に認められていない。このことから個体bは本体となる石核から剥離されたもので、個体aは本体から剥離された素材剥片が石核に転用された可能性がある。このように石核の規模に応じて目的剥片剥離が変更されていったと想定される。

本母岩は亜角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核は廃棄、分割された部分は搬出している。

sshc 4：総点数22点、総重量44.04g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は白色を基調としている。石質は緻密でやや光沢をもち、なめらかである。

接合点数は2点あり、縦長剥片が2つ以上に折れた後、スクレイパーの素材としている。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc 5：総点数16点、総重量55.29g。スクレイパー、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は青黒色を基調とし、青灰色が斑に入る。礫面はにぶい黄橙色である。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

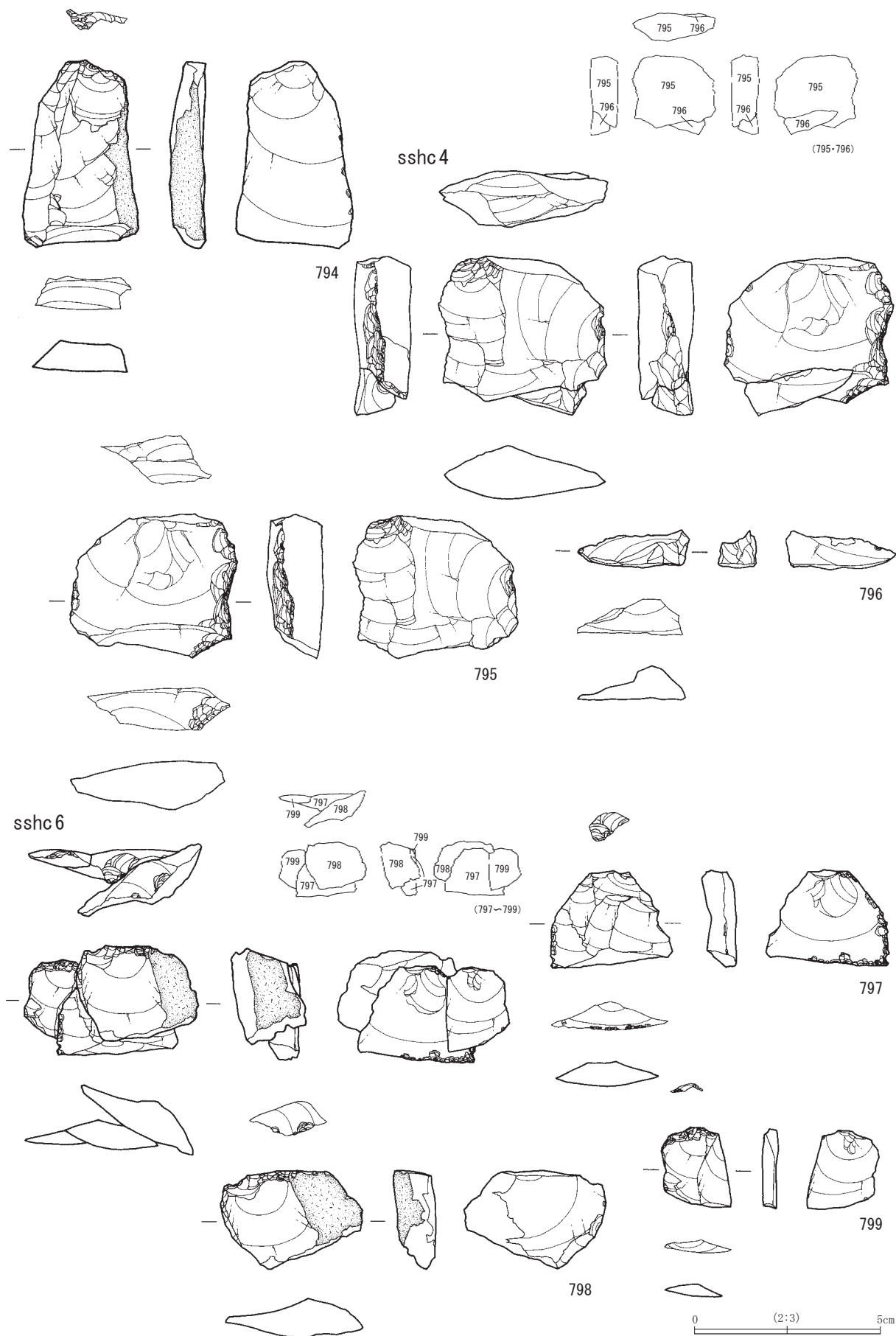
本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc 6：総点数16点、重量44.29g。ナイフ形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は白色を基調とし、灰・オリーブ黄色が斑に入る。礫面は淡黄色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は3点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。剥離工程は798→797→799である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である縦長剥片を連続的に剥離している。剥離する度に打面再生・調整を介在しており、徐々に打面が低くなっている。

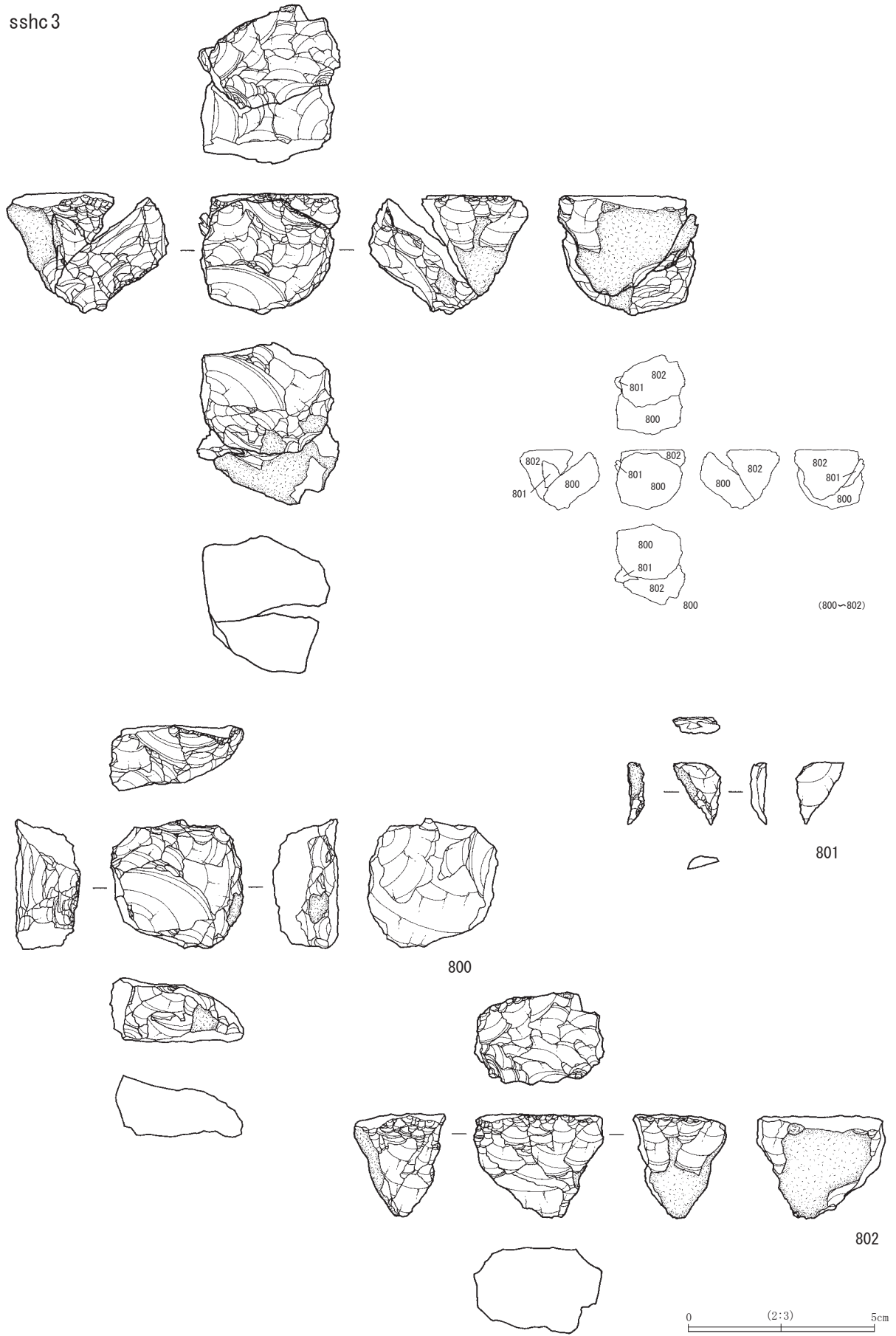
本母岩に含まれるナイフ形石器(987)は集中区外から出土しているため、399頁に記載している。素材剥片を切断することなく両縁辺に加工を施している二側縁加工である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。



第269図 石器集中区18出土遺物 (59)

sshc3



第270図 石器集中区18出土遺物 (60)

sshc7：総点数8点、総重量95.96g。二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される非接合資料である。剥離面は青灰色を基調とし、白・灰オリーブ色の縞が入る。礫面はにぶい黄橙色である。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が層状に発達している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc8：総点数8点、総重量64.23g。ナイフ形石器、スクレイパー、楔形石器、二次加工を有する剥片、剥片で構成される資料である。剥離面は白色を基調とする。礫面はにぶい黄橙色である。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が僅かに発達している。

接合点数は2点あり、石核整形の過程に伴う資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc9：総点数18点、総重量40.48g。ナイフ形石器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、白・黄灰色の縞や斑点が入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc10：総点数2点、総重量1.65g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は暗灰黄色を基調とし、灰白色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc12：総点数16点、総重量13.88g。二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は灰黄褐色を基調とし、灰白色の斑点が入る。礫面付近はにぶい黄橙色である。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。礫面付近はややざらつき、光沢は認められない。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc13：総点数2点、総重量319.5g。剥片と石核で構成される接合資料である。剥離面はにぶい黄橙色を基調とし、暗褐・灰白・黄灰色の縞が入る。礫面付近はにぶい黄橙色である。石質はやや粗粒でざらつく。礫面付近のみ僅かに光沢を有し、摂理が部分的に発達している。

剥離工程は804→803である。本個体は打面再生過程に伴う資料である。上設打面において打面再生を施している。接合個体の背面剥離面構成からは以下の剥離工程が捉えられる。石核は裏面に見られる礫面以外は作業面が形成され、90度打面転位を繰り返しながら剥片剥離をしている。さらに集中区内では正面左側において上設打面から連続的に剥離をしているが展開できず、打面再生(804)を行うも剥離は停止する。

本母岩は亜角礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sshc14：総点数15点、総重量29.07g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、削片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

スクレイパー(600)については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc15：総点数18点、総重量33.06g。尖頭器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・灰色が斑に入る。礫面は褐灰色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

尖頭器(572)については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc16：総点数34点、総重量22.23g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色

を基調とし、灰白・灰色が斑に細かく入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。淡黄色の鉱物のまとまりが複数認められる。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc17：総点数3点、総重量6.77g。剥片で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は2点あり、目的剥片剥離の過程に伴う資料である。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc18：総点数2点、総重量1.44g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色が斑に細かく入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc19：総点数83点、総重量211.11g。ナイフ形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白・オリーブ褐色の縞が入る。礫面付近にはぶい黄橙色である。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。本母岩には被熱しているため青灰・白色化しているものも含まれるが、層状に入る模様を判断基準としている。

接合点数は7点あり、3個体(a～c)に分かれる。個体aは3点あり、ナイフ形石器、剥片、石核からなる。個体b・cはそれぞれ2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は805→806→807である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。石核は厚手の剥片を素材とし、裏面左側において目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。接合個体の背面剥離面構成からは、以下の剥離工程が捉えられる。作業面は弧状に形成されており、対となる裏面側に礫面が残置している。上設打面から打面調整を介在させながら剥片剥離をしている。それが停止すると裏面側を作業面に据え小型剥片を剥離しているが、意図した剥離ができず作業は停止している。

個体bは剥片が2つに折れたものが接合した資料、個体cは石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。共に個体の規模から個体a以前の剥離によるものである。このことから各個体を剥離した基となる石核の存在が想定され、その規模に応じて異なる目的剥片を剥離していたと考えられる。

本母岩は石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出しているものと思われる。

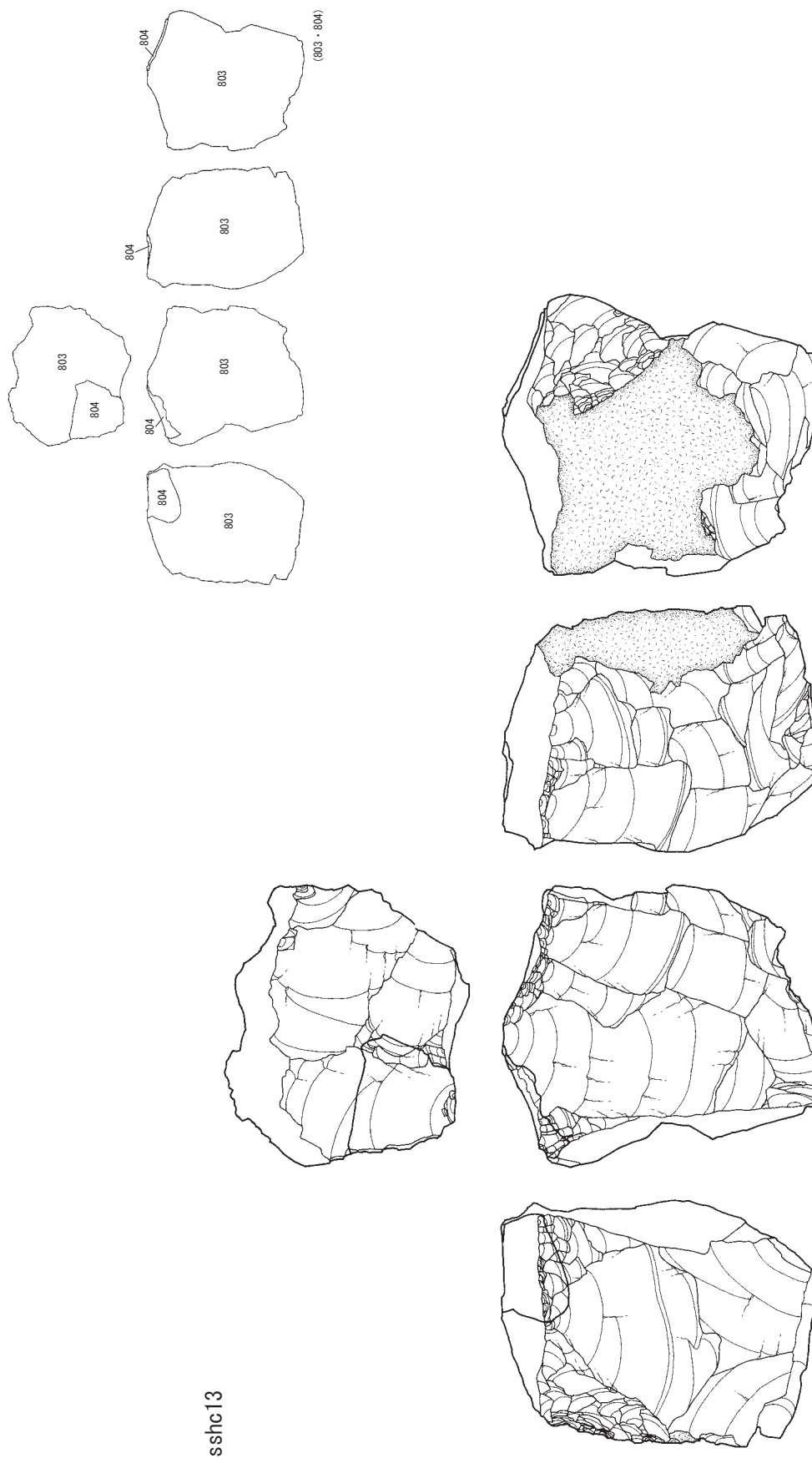
sshc20：総点数98点、総重量225.96g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は灰白・白を基調とし、褐灰色の縞が入る。礫面は浅黄橙色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は20点あり、8個体(a～h)に分かれる。個体aは4点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体b・hは3点、個体c・eは2点あり、これらは全て剥片からなる。個体dは2点あり、尖頭器と剥片からなる。個体f・gは2点あり、スクレイパーと剥片からなる。

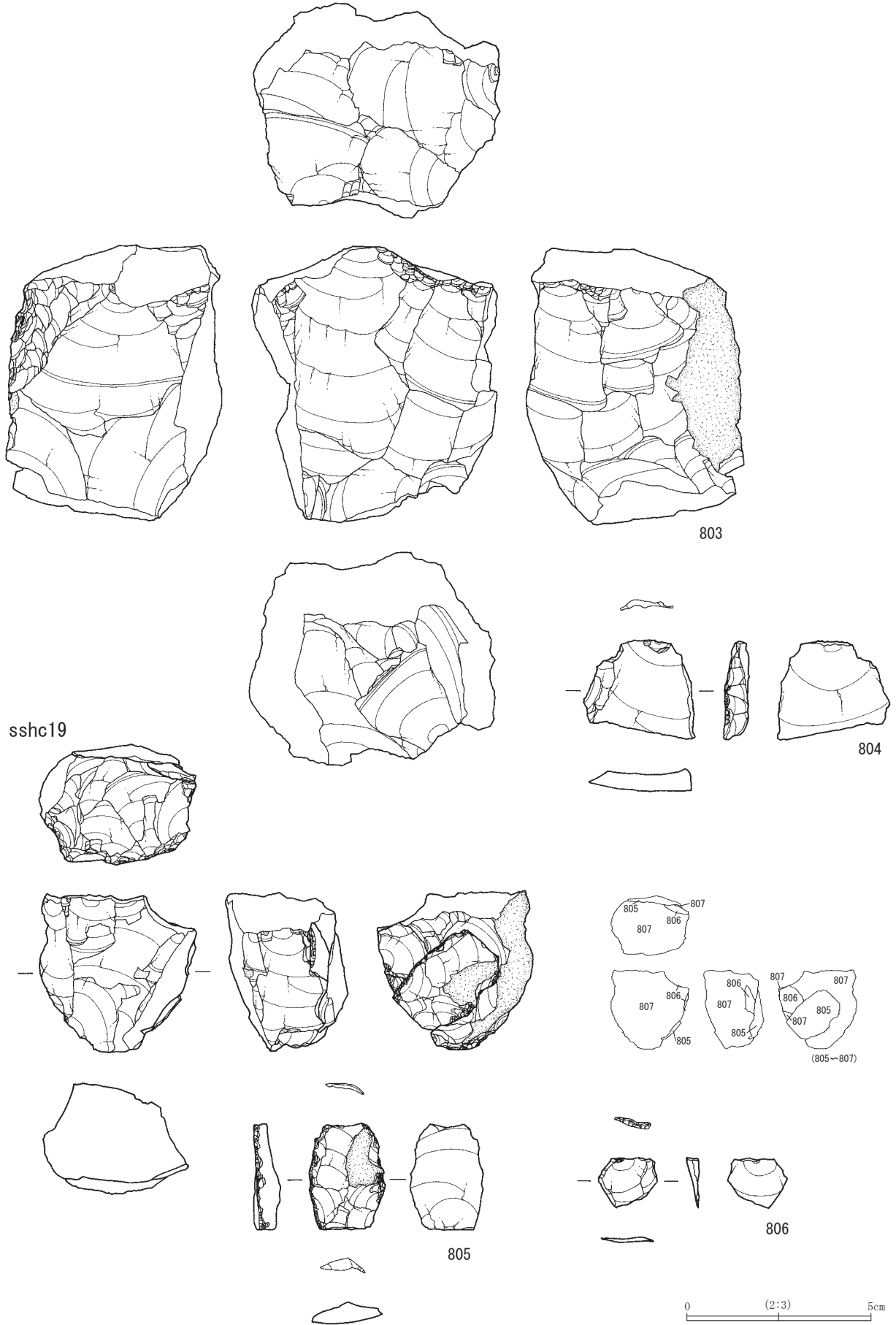
個体aの剥離工程は808→809→(810a+b)である。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面左側から剥片を剥離した後、90度打面転位をして上方向から縦長剥片を連続的に剥離している。

個体dの剥離工程は816→815である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から縦長剥片を剥離しており、その間には打面再生を介在させているため作業面高が大きく減少している。剥離された剥片はナイフ形石器の素材として用いられている。

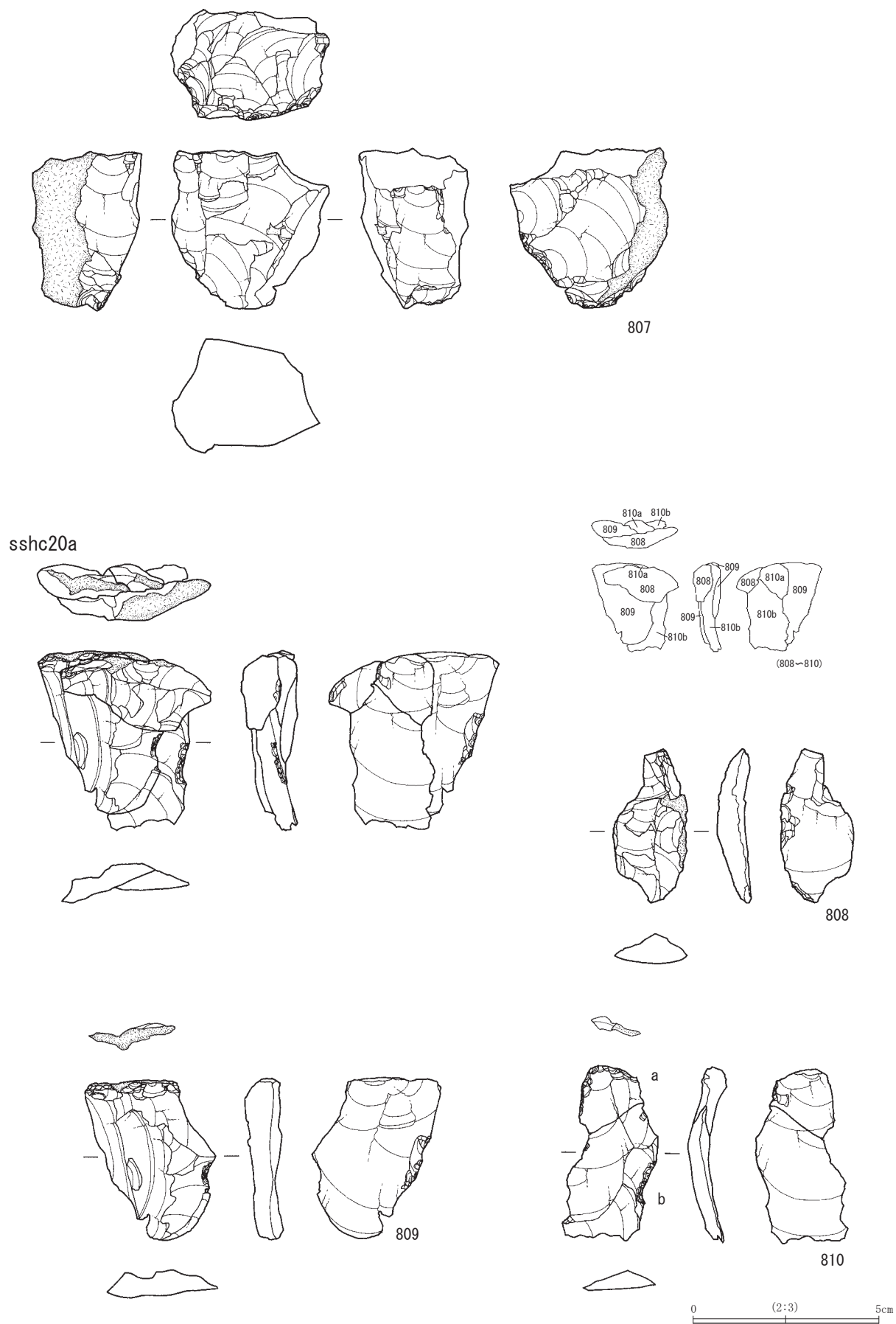
個体b・e・gは剥片が2つに折れたものが接合した資料、個体c・f・hは石核整形から目的剥



第271図 石器集中区18出土遺物 (61)



第272図 石器集中区18出土遺物 (62)



第273図 石器集中区18出土遺物 (63)

片の剥離過程に伴う資料である。

本母岩は構成する点数が多いことや個体 d のような剥片の規模の存在から、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc21：総点数 5 点、総重量 58.14g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白・オリーブ褐色が斑に入る。礫面は灰黄色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合点数は 2 点あり、上記の器種からなる。石核整形に伴い剥離された剥片が分割され、一方を石核に用い小型剥片を剥離している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc22：総点数 6 点、総重量 11.44g。ナイフ形石器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は青灰色を基調とし、黒・灰オリーブ色の縞が入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理付近は光沢は認められず、僅かにざらつく。

接合点数は 2 点あり、摂理除去の過程に伴う資料である。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc23：総点数 21 点、総重量 84.84g。スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は暗褐色を基調とし、淡黄・青灰色の縞が入る。礫面は浅黄橙・にぶい黄橙を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理付近は光沢は認められず、僅かにざらつく。

接合点数は 5 点あり、2 個体 (a・b) に分かれる。個体 a は 2 点、個体 b は 3 点あり、共に剥片からなる。これらは礫面や摂理面除去から石核整形の過程に伴う資料である。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc24：総点数 91 点、総重量 227.86g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は黒褐色を基調とし、灰白色の斑点が入る。また部分的に褐灰色を基調とする箇所もある。礫面は黒褐色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

接合点数は 5 点あり、2 個体に分かれる。個体 a は 2 点あり、剥片からなる。個体 b は 3 点あり、ナイフ形石器と剥片からなる。これらは石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。剥離された小型剥片はナイフ形石器の素材としている。

非接合資料は点数が多いうえに接合個体よりも規模が大きいことから、小型剥片剥離に用いられた石核とは異なる本体となる石核の存在が想定される。

ナイフ形石器 (533、536、546、551)、尖頭器 (558、565、566)、二次加工を有する剥片 (624)、スクレイパー (586) については出土遺物に記載している。

本母岩は亜円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc25：総点数 5 点、総重量 1.93g。二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は灰黄褐色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。sshc24 に類似しているものの、灰白色の斑点が認められないことから区分している。

二次加工を有する剥片 (625) については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc26：総点数 6 点、総重量 5.07g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、青灰・灰白色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。他の母岩別資料とは異なり、やや透けていることから区分している。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc27：総点数14点、総重量52.98g。尖頭器、剥片、チップ、石核で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、にぶい黄橙色が点状に入る。礫面は暗褐・にぶい黄褐色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

尖頭器(574)については出土遺物に記載している。本母岩は亜円礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc28：総点数4点、総重量12.95g。スクレイパー、チップ、石核で構成される非接合資料である。剥離面は暗灰色を基調とし、灰白色の斑点が入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

本母岩は小型の石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc29：総点数2点、総重量18.53g。二次加工を有する剥片と石核で構成される非接合資料である。剥離面は黒褐色を基調とし、灰白色の斑点が入る。礫面付近は灰黄褐色、礫面は明黄褐色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。しかし礫面付近は光沢は認められず、ややざらつく。

本母岩は小型の石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc30：総点数3点、総重量25.12g。ナイフ形石器と剥片で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、暗灰黄・オリーブ褐色が斑に入る。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達し、その箇所はややざらつく。

接合点数は2点あり、目的剥片剥離の過程に伴う資料である。同一打面から剥片を剥離している。また、非接合であるナイフ形石器(979)は集中区外から出土しているため、399頁に記載している。基部・先端部加工であり、集中区内でも極めて稀な例である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc32：総点数32点、総重量31.72g。ナイフ形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・暗青灰色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

ナイフ形石器(522)については出土遺物に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc33：総点数6点、総重量5.25g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、黄褐色が部分的に認められる。礫面付近は淡黄色を呈する石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。礫面付近では光沢は認められない。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc34：総点数8点、総重量7.48g。ナイフ形石器、尖頭器、剥片で構成される非接合資料である。剥離面は暗褐色を基調とし、黒・灰白色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。他の母岩別資料に比べ、全体的にやや透明である。

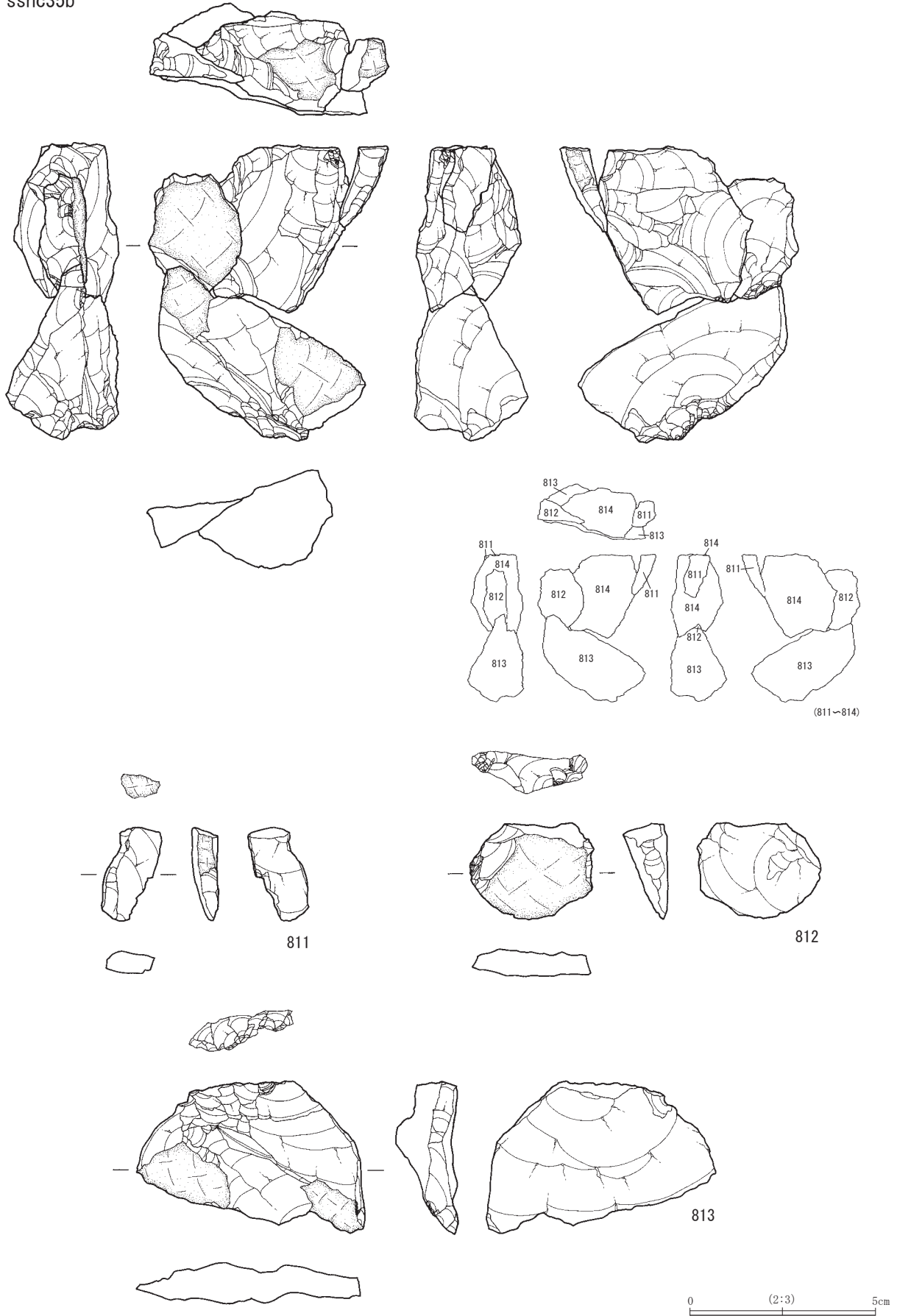
尖頭器(563)については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc35：総点数49点、総重量225.83g。二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される。剥離面は青灰色を基調とし、灰白・黒褐色の縞が入る。礫面はにぶい黄橙を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。礫面付近では光沢は認められず、ややざらつく。

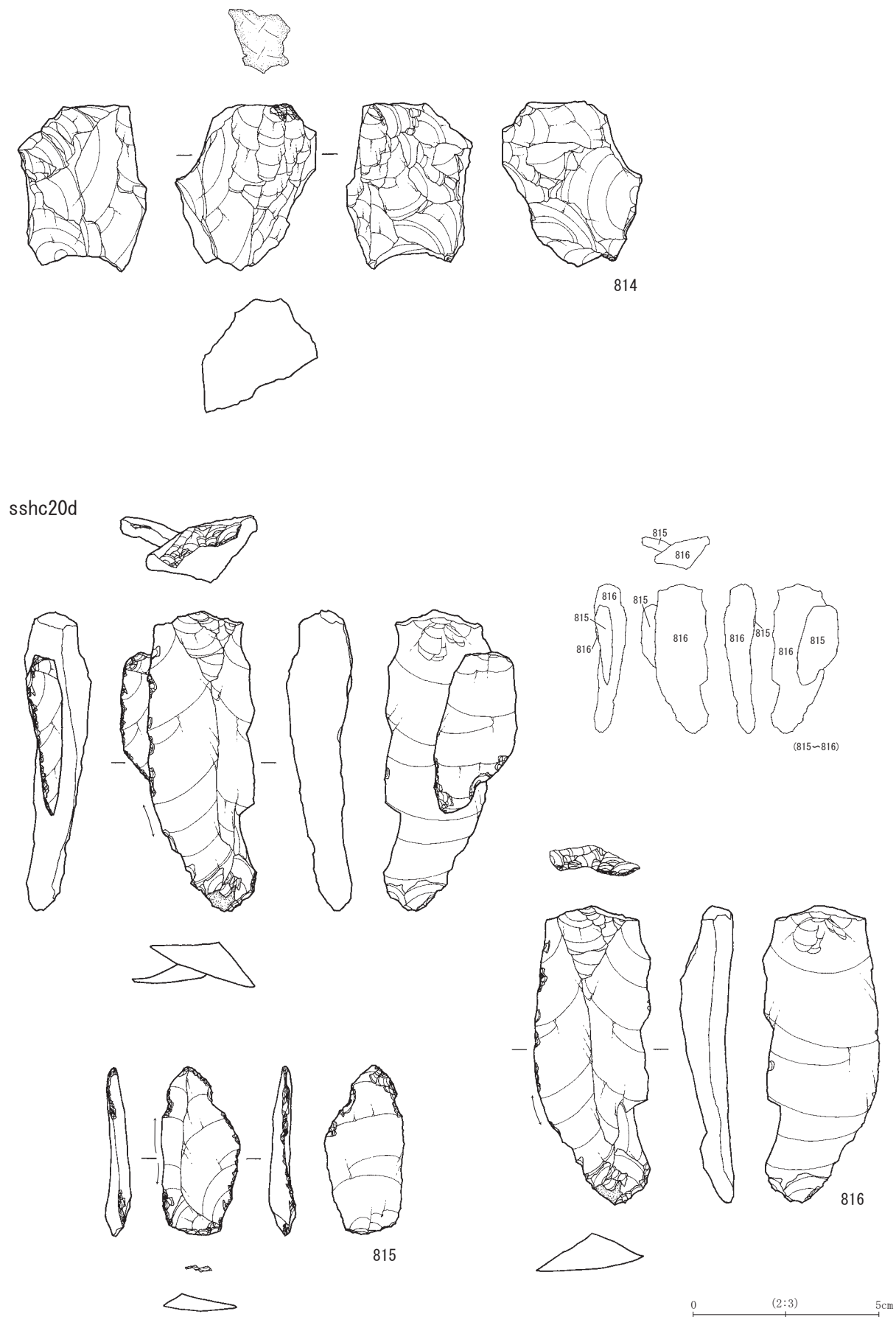
接合点数は13点あり、4個体(a～d)に分かれる。個体a・dは2点あり、共に剥片からなる。個体bは4点あり、剥片と石核からなる。個体cは5点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。

個体bの剥離工程は813→812→811→814である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から

sshc35b



第274図 石器集中区18出土遺物 (64)



第275図 石器集中区18出土遺物 (65)

目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面下方から背面に摂理面を有する剥片を剥離しながら下縁部を石核整形した後、上設打面から目的剥片である小型剥片を剥離している。

個体 a は礫面・摂理除去の過程に伴う資料、個体 c・d は小型剥片剥離の過程に伴う資料である。これらは個体 b の剥離過程に剥離されたものと思われる。

また、本母岩の非接合資料の多くは小型剥片であるが、少なからず上記の剥離工程には収まらない規模の剥片も存在しており、比較的規模の大きな状態で持ち込まれたと考えられる。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc36：総点数105点、総重量576.62g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、楔形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白色の鉱物がやや多く入る。礫面はにぶい黄橙を呈する。また被熱しているため暗青灰色しているものもある。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。礫面付近では光沢せず、ややざらつく。摂理が部分的に発達している。

接合点数は22点あり、9個体(a～i)に分かれる。個体 a・i は3点、個体 c・f・h は2点あり、これらは剥片からなる。個体 b は3点、個体 e は2点あり、共にスクレイパーと剥片からなる。個体 d は2点あり、二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体 g は2点あり、剥片とチップからなる。

個体 b の剥離工程は819→817→818である。本個体は作業面調整から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面右側において稜調整とみられる剥片を剥離した後、90度打面転位し縦長剥片を単設方向から剥離している。縦長剥片はスクレイパーの素材としている。

個体 e はスクレイパーが被熱により2つ以上に破損したものが接合した資料である。

個体 a・c・f・g・i は小型剥片剥離の過程に伴う資料、個体 d は石核整形の過程に伴う資料、個体 h は剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

非接合資料は点数が多いうえに規模が大きく、摂理で欠損したり熱を受けているもので占められている。この非接合資料の規模から見ていくと母岩の規模は比較的大きなものと想定される。

本母岩は垂円礫を素材としており、中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc37：総点数47点、総重量94.72g。ナイフ形石器、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰を基調とし、白色の線・点状が入る。礫面はにぶい黄橙を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。摂理が部分的に発達している。

ナイフ形石器(559)については出土遺物に記載している。本母岩は小～中型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc38：総点数9点、総重量19.67g。二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・黒褐色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。僅かに摂理が発達している。

本母岩は小型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc39：総点数16点、総重量13.24g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、灰白・黒褐色が斑に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

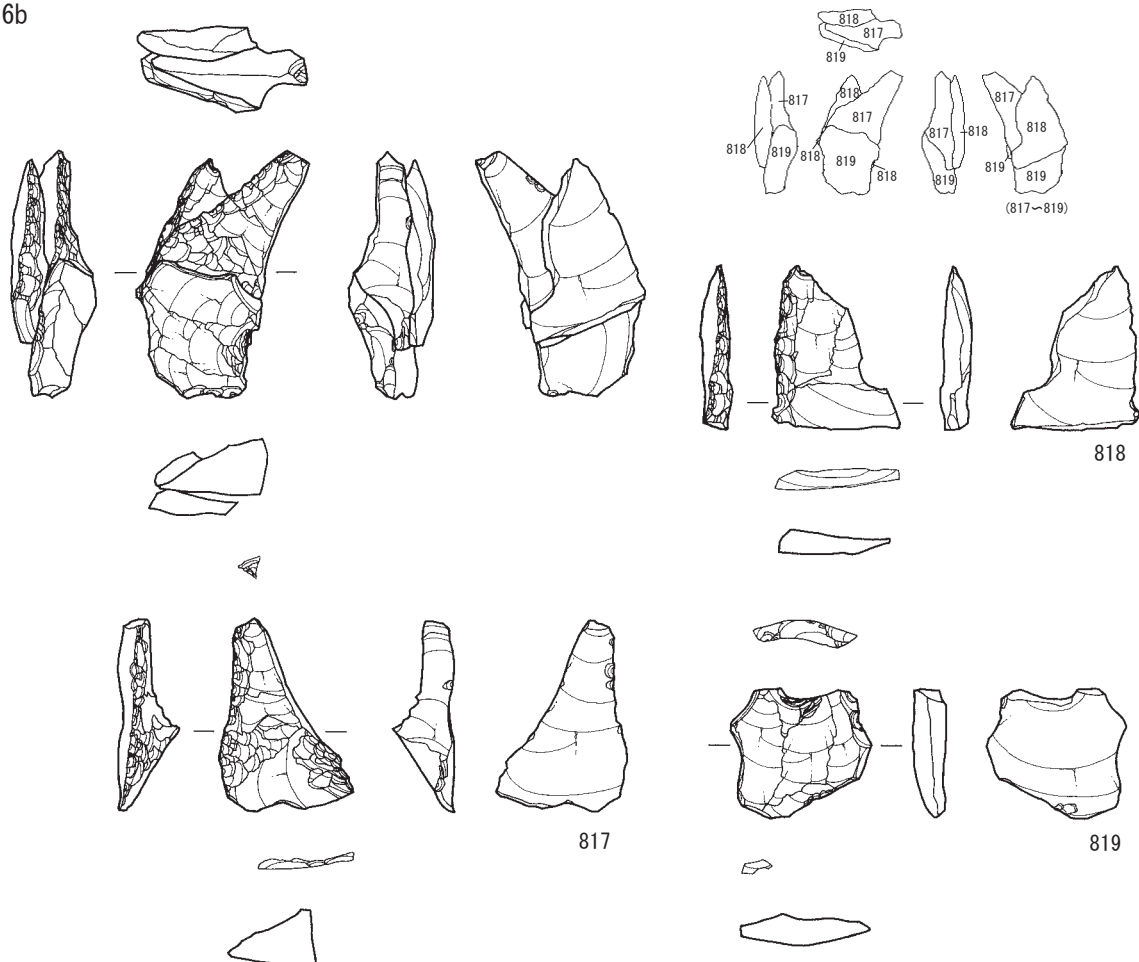
本母岩は小型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc44：総点数2点、総重量12.48g。剥片と石核で構成される非接合資料である。剥離面は暗灰色を基調とする。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

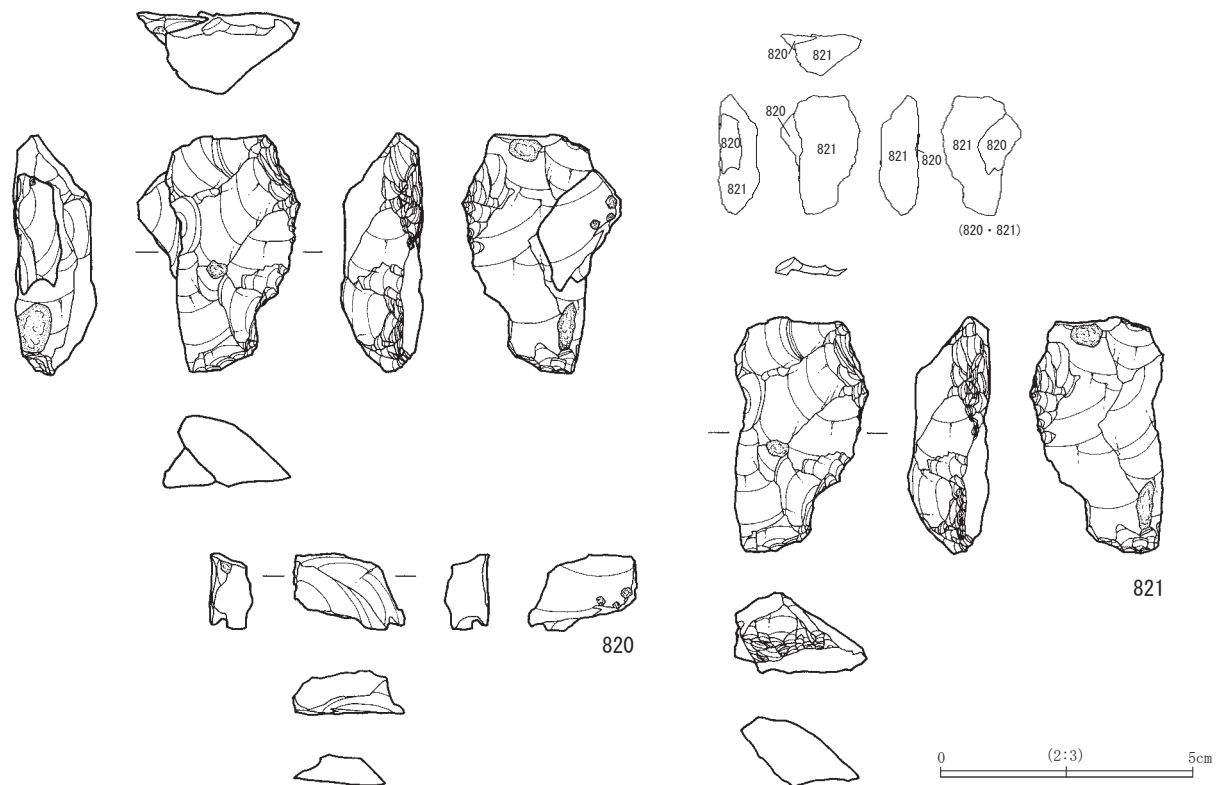
本母岩は小型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sshc45：総点数7点、総重量53.21g。剥片、チップ、石核で構成される非接合資料である。剥離面は

sshc36b



sshc36e



第276図 石器集中区18出土遺物 (66)

褐灰色を基調とし、灰白色の縞が入る。礫面は褐灰・灰白色を呈する。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

石核(633)については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

tu3：総点数9点、総重量456.18g。剥片と石核で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面は灰黄色を呈する。石質はやや粗粒であり、僅かにざらつく。摂理が非常に発達している。

接合点数は6点あり、2個体に分かれる。共に石核整形の過程に伴う資料である。単設方向から不定形剥片を剥離している。

本母岩は亜角礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob1：総点数53点、総重量32.31g。ナイフ形石器、尖頭器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は不透明で黒褐色を基調とし、光沢を有するがやや曇る。礫面はにぶい黄橙色を呈する。産地は男鹿系である。

接合点数は3点あり、ナイフ形石器と剥片からなる。剥離工程は822→523→524である。目的剥片剥離の過程に伴う資料である。単設方向から目的剥片である小型剥片を剥離している。このうち2点はナイフ形石器の素材として用いられている。接合個体の背面剥離面構成からは、作業面稜調整を経てから、連続的な剥片剥離が捉えられる。ナイフ形石器(523、524、554)、尖頭器(555)については出土遺物に記載している。

非接合資料には小型剥片やチップを多く確認できるが、原石形状までは類推できない。

本母岩は亜円礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob2：総点数32点、総重量78.19g。ナイフ形石器、尖頭器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される非接合資料である。剥離面は半透明で灰色を基調とし、光沢を有するがやや曇る。礫面は灰黄色を呈する。部分的に灰色や暗褐色の縞状構造が認められる。産地は男鹿系である。

本母岩に含まれる石器は小型の規模で占められており、小型剥片を目的とした剥片剥離が行われていたと考えられる。ナイフ形石器(528、534)、尖頭器(557、561、576、579)については出土遺物に記載している。

本母岩は亜円礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob3：総点数34点、総重量16.03g。ナイフ形石器、彫刻刀形石器、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は半透明で灰色を基調とし、光沢を有する。礫面は灰色を呈する。極細の霜降り状の構造が認められる。産地は男鹿系である。

接合点数は2点あり、小型剥片が2つに折れたものが接合した資料である。非接合資料は小型剥片やチップで占められている。

ナイフ形石器(525、552)、彫刻刀形石器(582)については出土遺物に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob4：総点数182点、総重量85.03g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、楔形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は透明で黒色を基調とし、光沢を有する。礫面はにぶい黄橙色を呈する。僅かに極細の霜降り状の構造が認められる。ob3と類似しているが、霜降り状の構造の割合が低い。産地は男鹿系である。

接合点数は2点あり、目的剥片剥離の過程に伴う資料である。目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。また、非接合資料には礫面が多く認められており、全体形状は小型の亜円礫である可能性が高い。剥片の多くは背面と腹面剥離方向と同じだが、それとは異なり反対方向のものも存在し

ている。また、これらの中には両極技法を示すような剥片も確認される。この小型剥片はナイフ形石器(518、521)、尖頭器(562、575)、スクレイパー(628)の素材としており、それらについては出土遺物に記載している。

本母岩は亜円礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob5：総点数172点、総重量103.67g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、楔形石器、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は不透明で黒色を基調とし、光沢を有する。灰色の縞状構造が認められる。礫面は灰色を呈する。産地は湯ノ倉である。

接合点数は13点あり、5個体(a～e)に分かれる。個体aは5点あり、楔形石器、剥片、チップからなる。個体b～eはそれぞれ2点あり、b・dはスクレイパーと剥片、cは剥片とチップ、eは二次加工を有する剥片と剥片からなる。

個体aの剥離工程は823→826→824→825→827である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面上方向から目的剥片である小型剥片を剥離しており、それが停止すると90度打面転位させた後に正面左側から剥離をしている。接合個体の背面剥離面構成からは基本的には上方向からの剥離が捉えられる。

個体bの剥離工程は828→829である。本個体は目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面上方向から目的剥片である小型剥片を連続的に剥離している。接合個体の背面剥離構成からは個体aと同様の剥片剥離が捉えられる。

個体c・eは剥片の2つに折れたものが接合した資料、個体dは小型剥片剥離の過程に伴う資料である。そのうちの1点はスクレイパーの素材に用いられている。

非接合資料には礫面を有するものも少なく、ほぼ同量のob4と比べても極端に礫面保有率が低い。このため原石形状は不明である。ナイフ形石器(550、556)、尖頭器(590)、スクレイパー(621、622)については出土遺物に記載している。

本母岩は小型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob6：総点数49点、総重量47.24g。ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、二次加工を有する剥片、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は透明で黒色を基調とし、光沢を有する。灰色や暗褐色の縞状構造が認められる。礫面は黄褐色を呈する。ob2と類似しているが、本母岩の方が透明度が高い。産地は男鹿系である。

接合点数は9点あり、4個体(a～d)に分かれる。個体a・cはそれぞれ2点あり、共に二次加工を有する剥片と剥片からなる。個体bは2点あり、ナイフ形石器と二次加工を有する剥片からなる。個体dは3点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は830→831、個体bの剥離工程は526→823である。いずれも目的剥片剥離の過程に伴う資料である。個体bで剥離された剥片はナイフ形石器の素材としている。

個体c・dは剥片の2つに折れたものが接合した資料である。

非接合資料から礫面が認められものも含まれており、原石形状が小型の亜円礫である点や両極技法が確認できる点などはob4と類似している。ナイフ形石器(526、527、548)、尖頭器(577)については出土遺物に記載している。

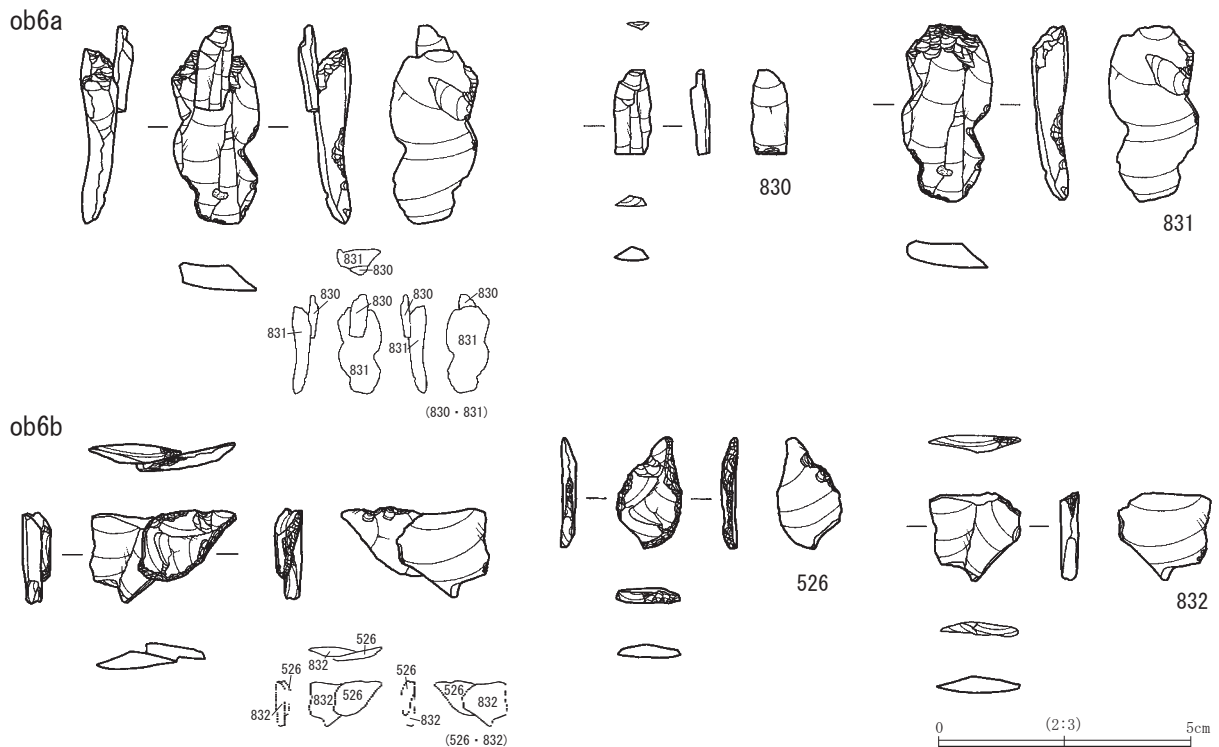
本母岩は亜円礫を素材としており、小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ob7：総点数3点、総重量1.19g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は不透明で黒色を基調とし、光沢を有する。極細の縞状構造が認められる。産地は小赤沢?である。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。



第277図 石器集中区18出土遺物 (67)



第278図 石器集中区18出土遺物 (68)

ob 8 : 総点数5点、総重量9.83g。剥片、チップ、石核で構成される非接合資料である。剥離面は不透明で黒色を基調とし、光沢を有する。班晶が認められる。産地は男鹿系?と湯ノ倉?が混在している。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

ob 9 : 総点数6点、総重量2.81g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は不透明で黒色を基調とし、光沢は失いやや曇る。ob 7は類似しているが、本母岩の方がやや曇る。産地は小赤沢?である。

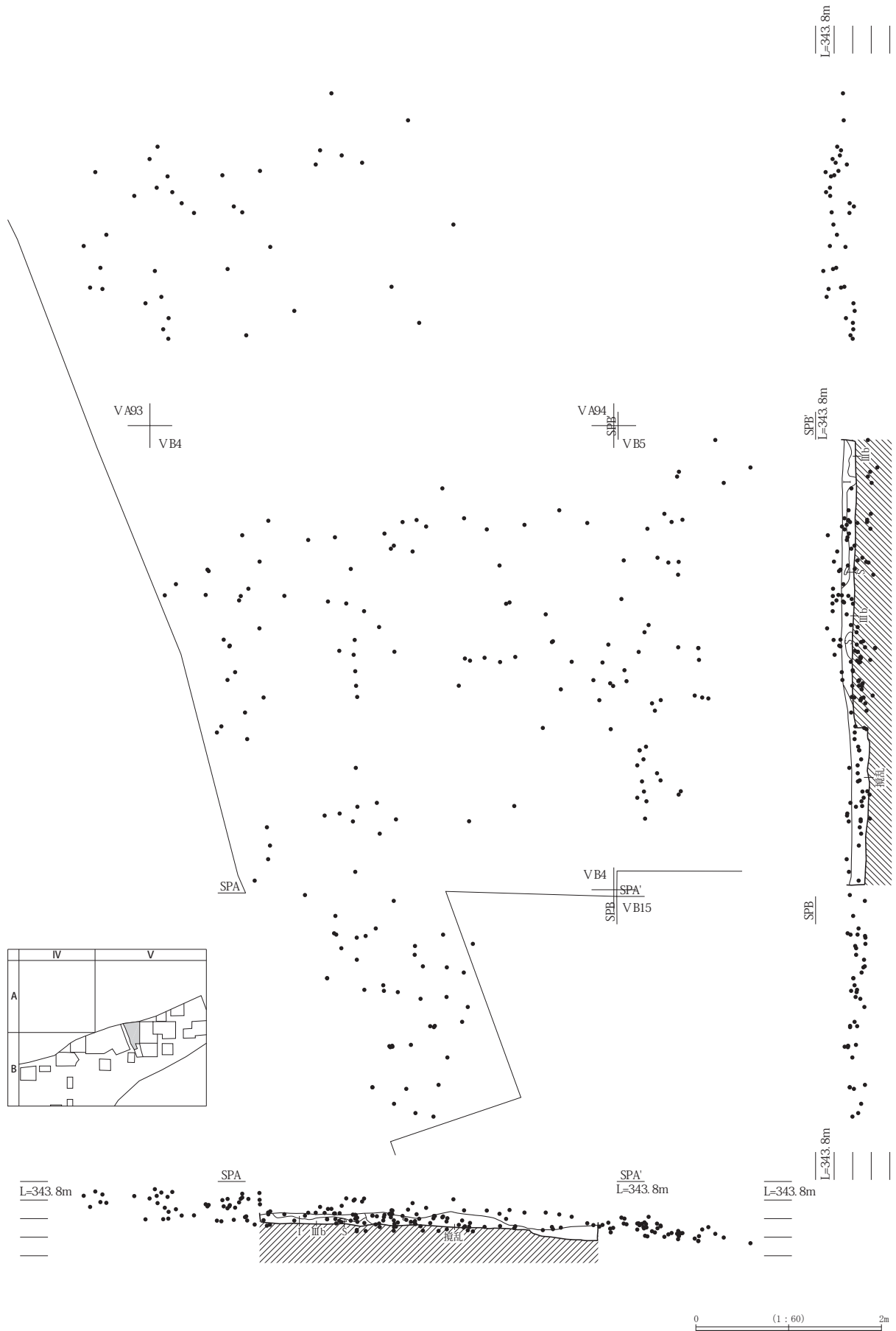
本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している

[備考] 本集中区と母岩別資料の共有関係や類似した石器組成が認められる集中区は集中区19・23・24であり、それらは隣接して形成されている。

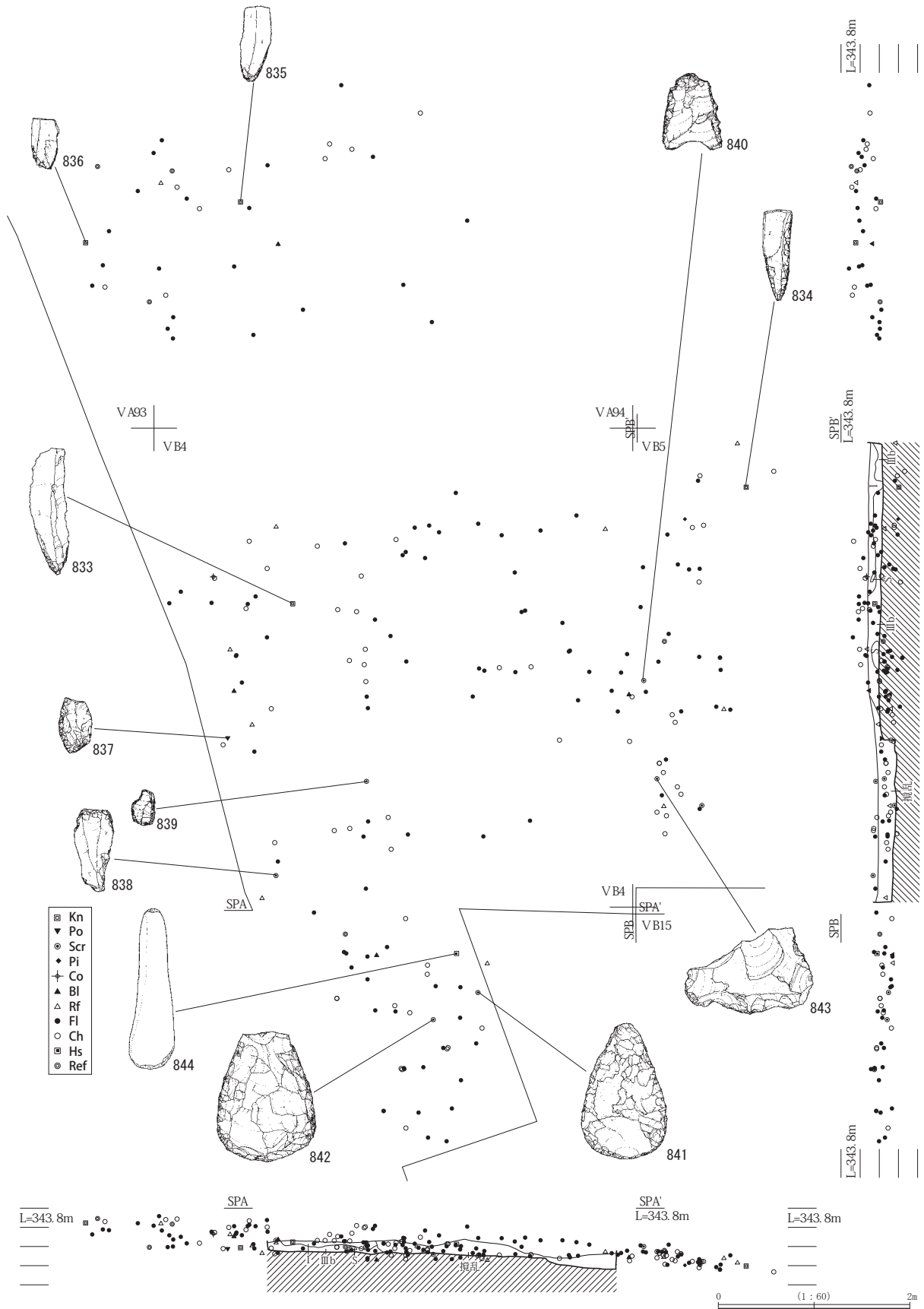
テフラ分析を西壁において行っており、Ⅲb層からAs-YPが検出されている。黒曜石産地同定から産地は、男鹿系、湯ノ倉、小赤沢?が確認されている。また出土炭化材の年代測定を行ったが、帰属年代を示すような成果は得られていない。これらについては第2分冊附編に記載している。

石器集中区19

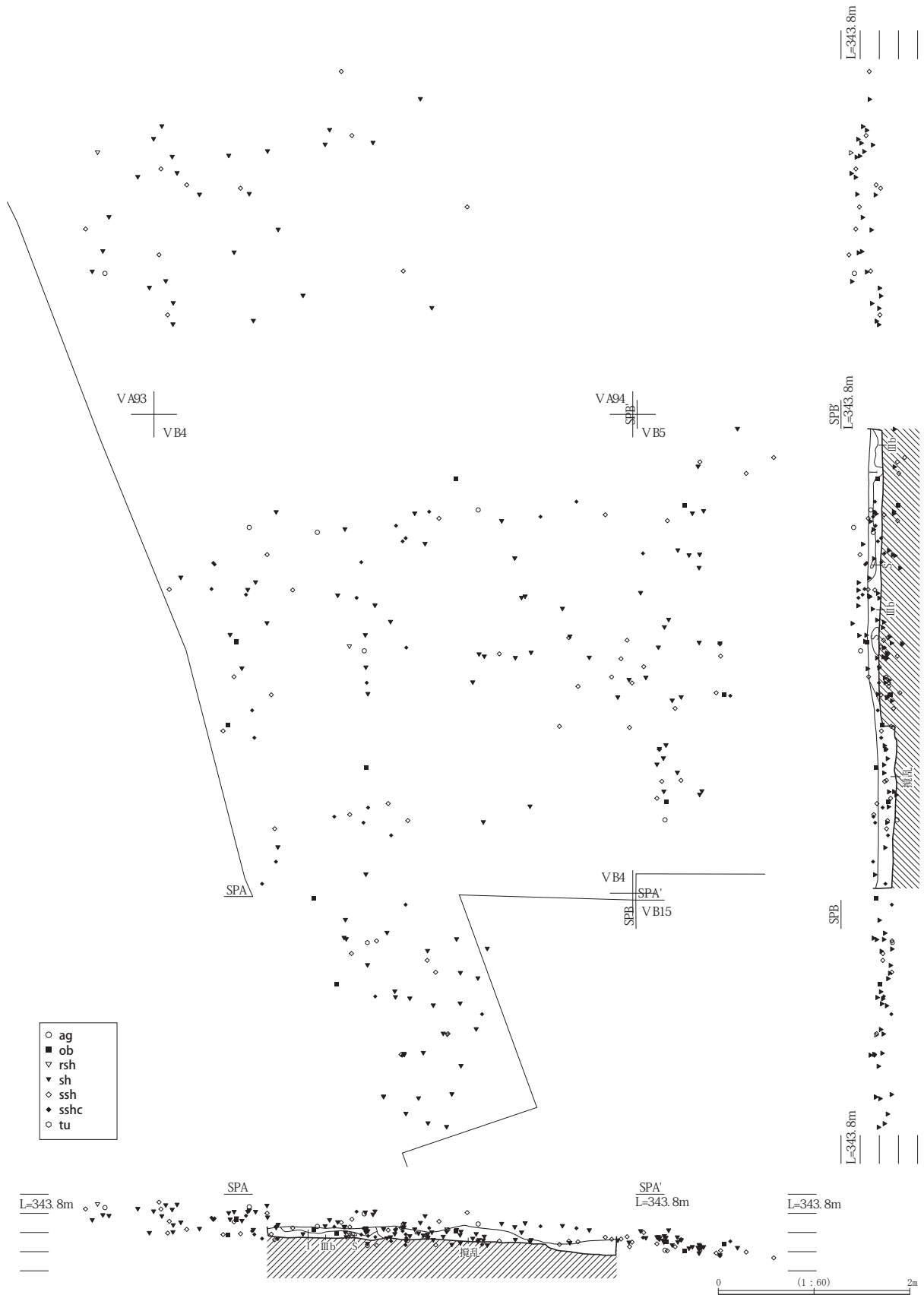
[位置・出土状況] V A93・94、IV B 4・5・14グリッドに位置しており、11×7mの範囲に収まる。段丘縁辺部へ向かって緩やかに下る標高約343.5mの自然堤防上で検出している。石器集中区18と重複しているものの、近世以降の攪乱によりその関係性は把握できない。また、V A93・IV B 4グリッドの境に認められる空白域は、平成19年度の調査時に入れた試掘トレンチによるものである。



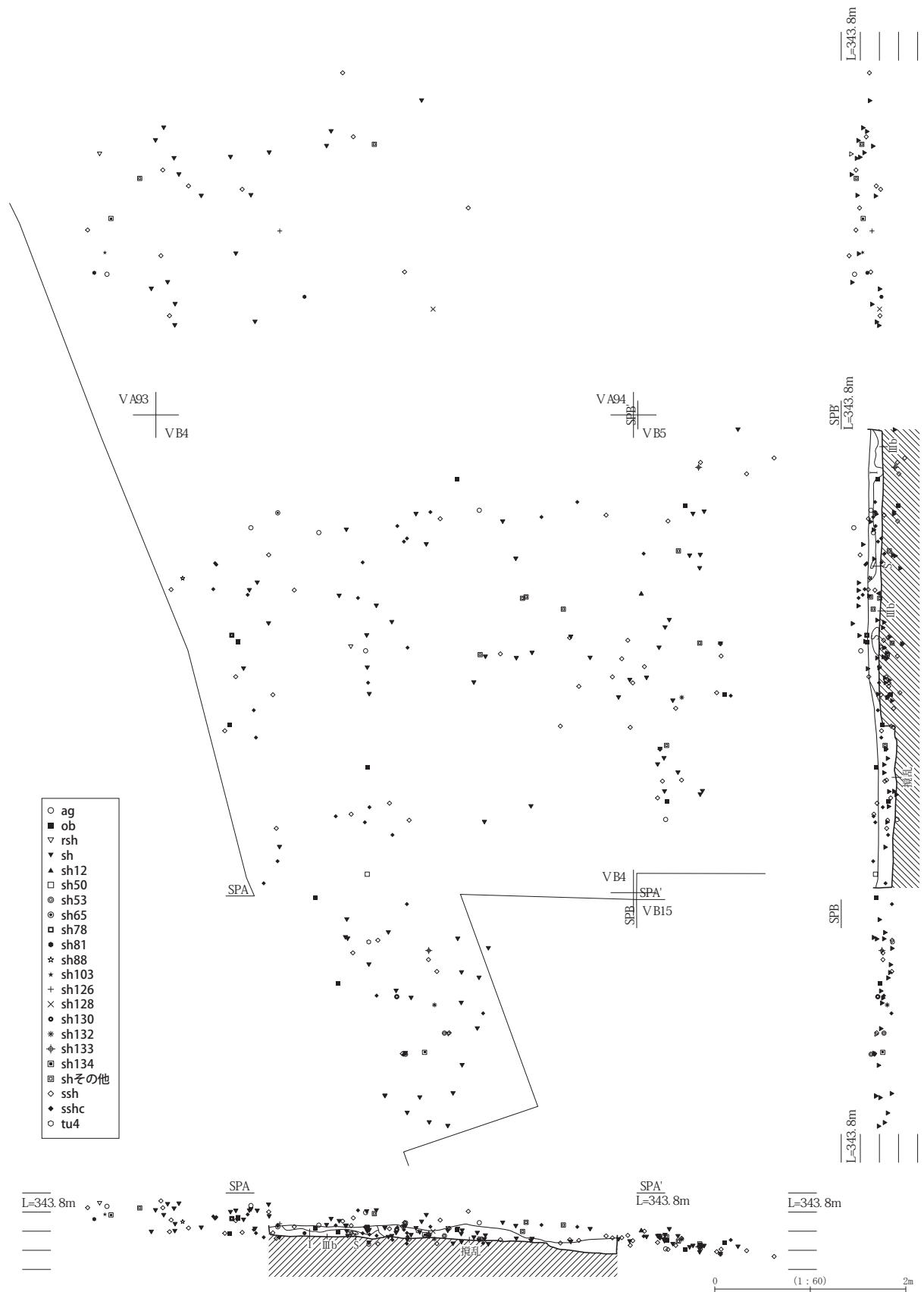
第279図 石器集中区19石器出土状況図



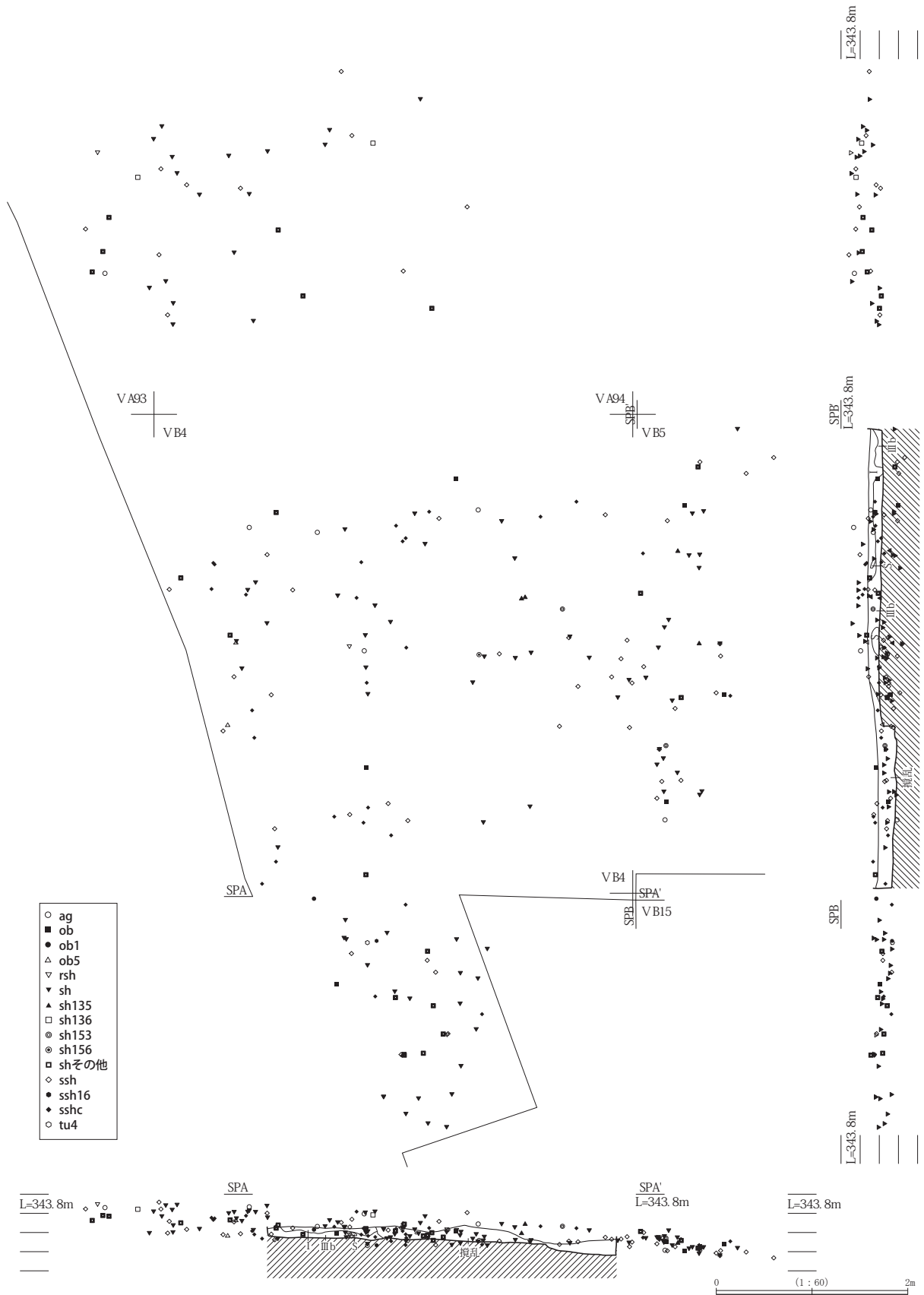
第280図 石器集中区19器種別出土状況図



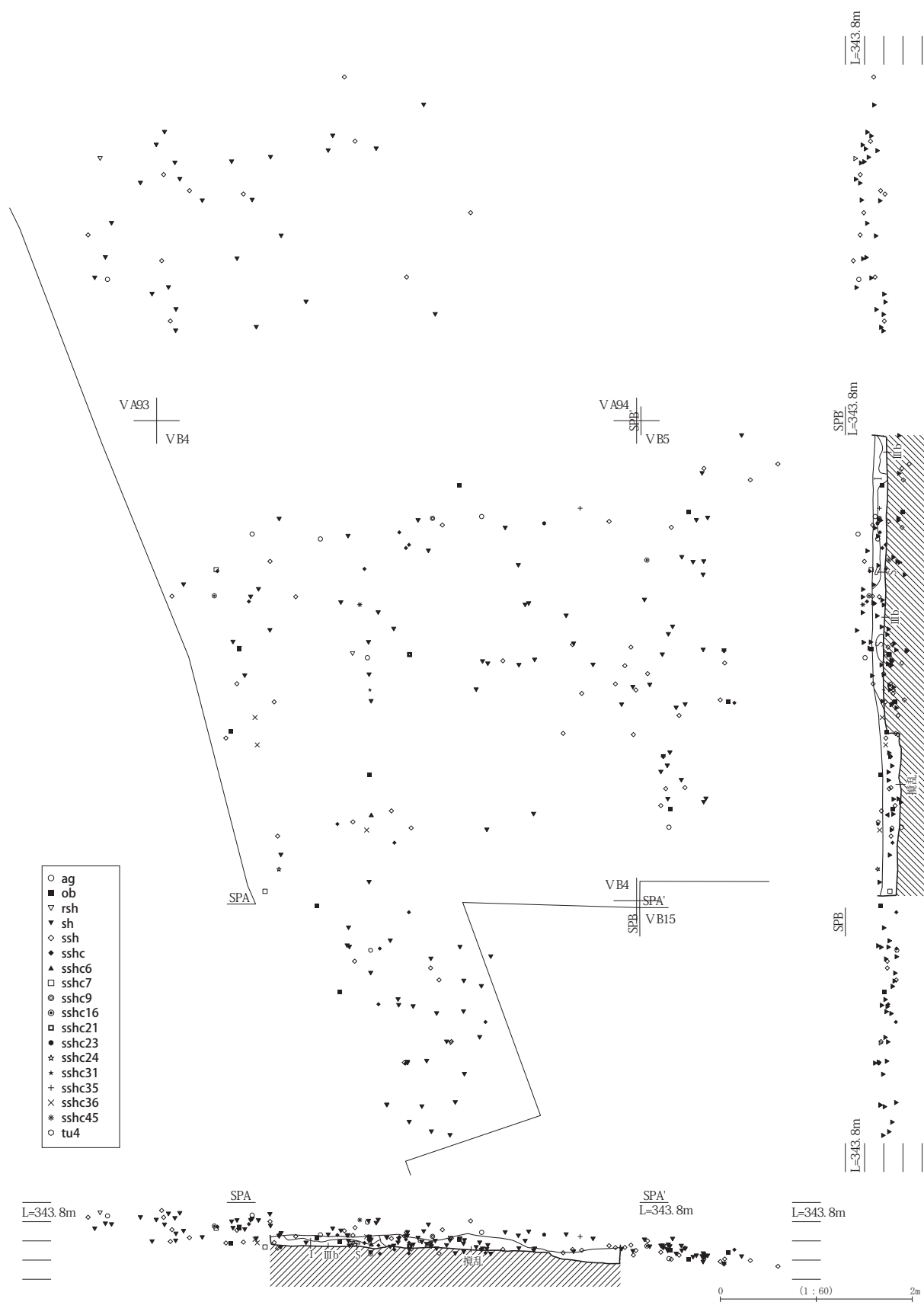
第281図 石器集中区19母岩別出土状況図 (1)



第282図 石器集中区19母岩別出土状況図(2)



第283図 石器集中区19母岩別出土状況図 (3)



第284図 石器集中区19母岩別出土状況図 (4)

[分布状況] IV B 4 グリッドを中心に散漫的に分布しており、南北方向へ広がる。

[出土層位] II層からIIIb-2層で出土している。最大で約60cmの高低差を有する。IIIb層中部に出土ピークがあることからIIIb層堆積中に形成されたと思われるが、堆積層が極めて薄く詳細は不明である。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は211点である。

石器組成はナイフ形石器4点、尖頭器1点、スクレイパー7点、楔形石器1点、二次加工を有する剥片10点、石刃4点、剥片115点、チップ62点、石核1点、敲石1点、礫片5点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、黒曜石、凝灰岩、瑪瑙からなる。

[出土遺物] 833～836はナイフ形石器。それぞれ刃部が欠損している。833・835は基部加工、834のみ二側縁加工である。837は尖頭器。腹面の一部に加工が認められるが主に背面側に加工を施す片面加工で、断面形状は台形である。ob5に属する。838～842はスクレイパー。840のような両側縁加工、841や842のようなラウンド状のものが認められる。844は敲石。石器材料は833～836・840は珪質頁岩、837・839が黒曜石、841～844が頁岩、838が玉髓質頁岩である。

上記の石器から33母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。このうち13母岩は本集中区に主体を有するが、残りは集中区18に主体がある。またsh134・156、ssh16の3母岩は集中区23に跨っている。

sh81：総点数8点、総重量69.94g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面はにぶい黄褐色を基調としている。石質はやや粗粒でややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh126：総点数2点、総重量41.34g。石刃と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とする。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh130：総点数2点、総重量10.84g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質は緻密だが、ややざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh132：総点数3点、総重量115.95g。スクレイパーと剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄褐色を基調とし、黒褐色の点が入る。礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

スクレイパー(842)については出土遺物に記載している。本母岩は小～中型の石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh133：総点数5点、総重量6.39g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調としている。石質は緻密でなめらかである。摂理が部分的に発達している。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

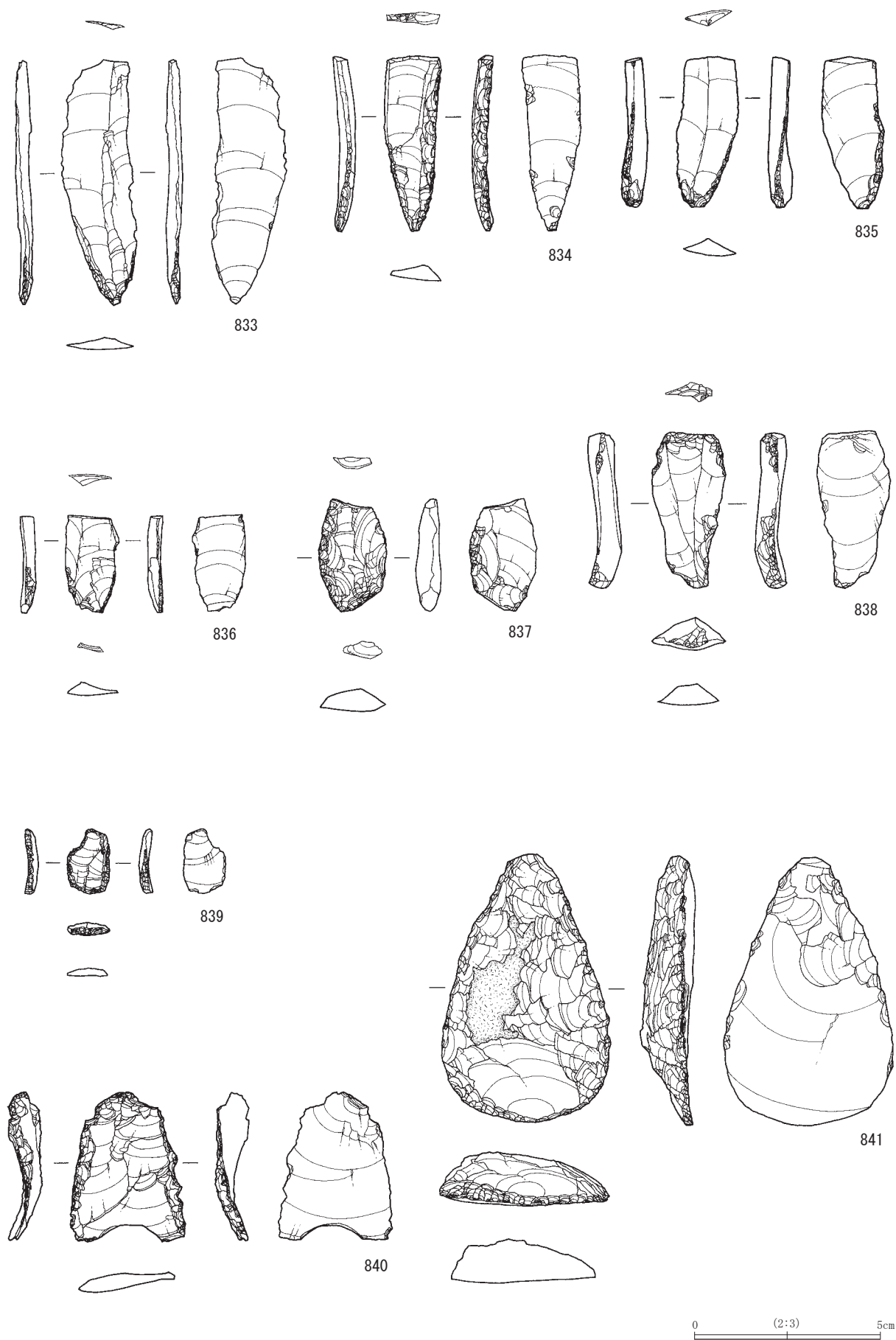
sh134：総点数3点、総重量12.11g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。集中区23と母岩を共有している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

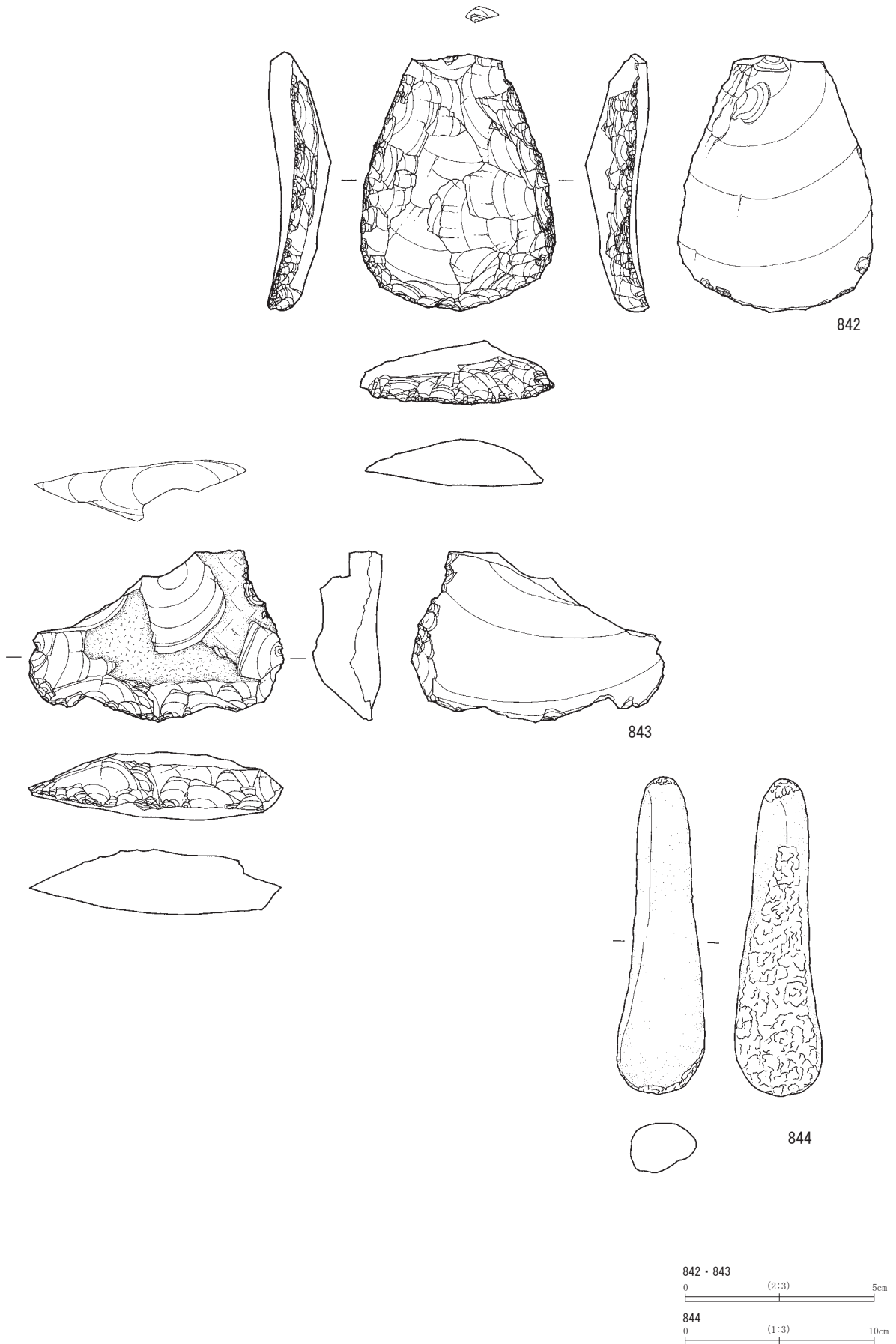
sh135：総点数8点、総重量18.83g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、ややざらつく。摂理が僅かに発達している。

剥片の半数は尖頭器製作に伴う調整剥片であり、製作後に尖頭器を搬出している。

sh136：総点数4点、総重量13.11g。彫刻刀形石器と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は淡黄色を基調とし、明黄褐の縞が入る。石質は緻密でなめらかだが、部分的にざらつく。



第285図 石器集中区19出土遺物 (1)



第286図 石器集中区19出土遺物 (2)

彫刻刀形石器(963)については出土遺物に記載している。集中区23から出土しており、392頁に記載している。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh153：総点数3点、総重量6.02g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とし、浅黄色が部分的に入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh156：総点数2点、総重量0.84g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。集中区23と母岩を共有している。

本母岩は小型の石核の状態を搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh16：総点数2点、総重量17.76g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰を基調とし、礫面は暗灰黄色を呈する。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

剥片の1点は石刃の可能性もある。集中区23と母岩を共有している。本母岩は小～中型の石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sshc31：総点数3点、総重量26.4g。スクレイパーと剥片で構成される資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色の縞が入る。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

スクレイパー(1033)については集中区外から出土しているため、406頁に記載している。本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

tu4：総点数2点、総重量46.37g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白～灰オリーブ色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質はやや粗粒であり、僅かにざらつく。摂理が非常に発達している。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 本集中区と母岩別資料の共有関係や類似した石器組成が認められる集中区18・23は隣接して形成されている。

石器集中区20

[位置・出土状況] V A96～98、V B7・8グリッドに位置しており、9×7mの範囲に収まる。段丘縁辺部へ向かって緩やかに下る標高約342.8～343.0mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] V A96・97グリッドの境を中心に分布しており、東西方向へ広がる。

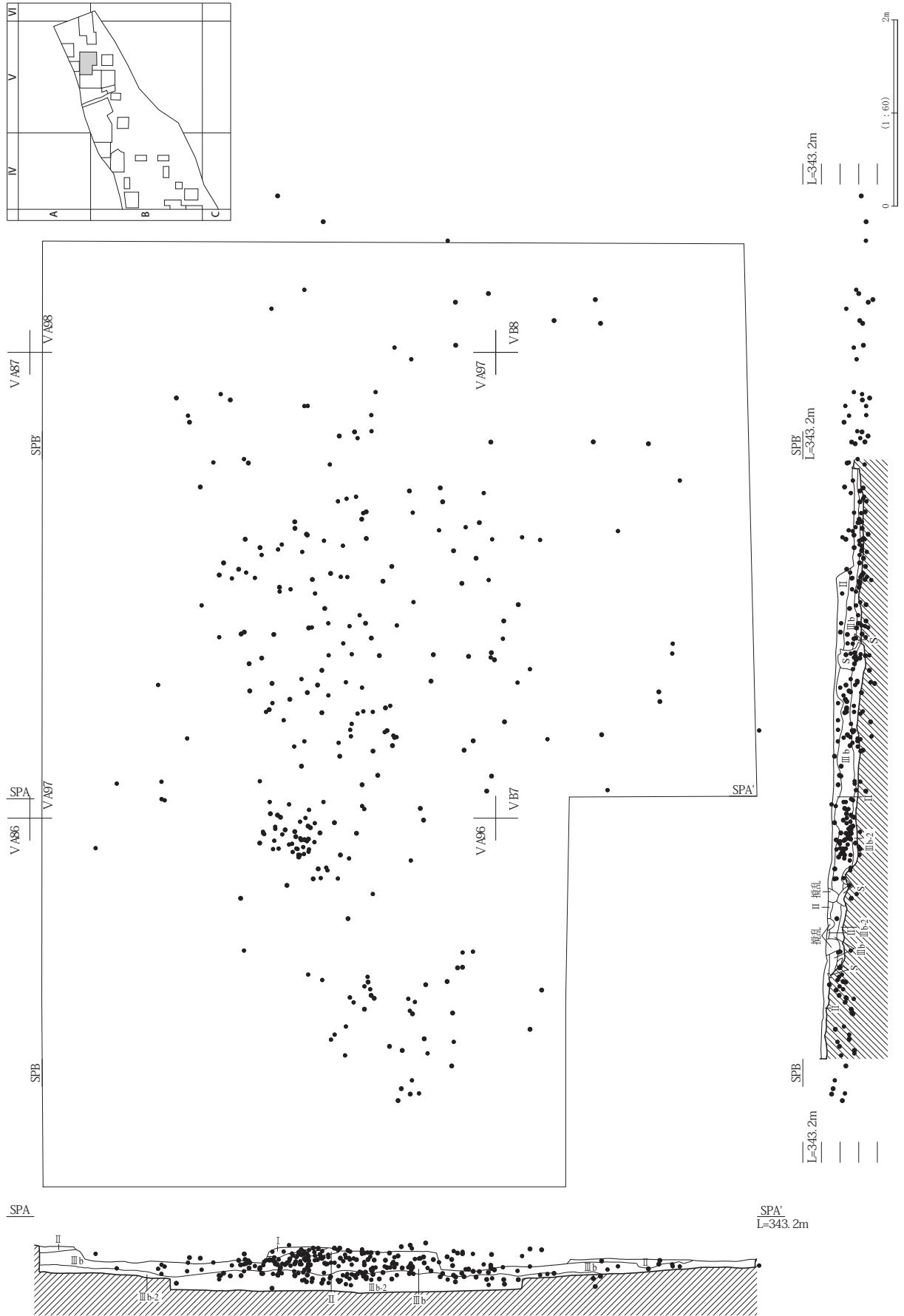
[出土層位] II層からIIIb-2層で出土しており、IIIb-2層上面(標高342.6m)に出土ピークがある。最大で約50cmの高低差を有する。調査時にはIIIb層として取り上げている石器が多いことに関しては、産状分析から水の影響を一部受けながら堆積したことが原因と考えられる。しかし、石器組成及び母岩別資料の接合関係から石器集中区17と同時期に存在していたと考えられるため、本集中区も同様にIIIb-2層上面に形成されたものと判断している。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は281点である。

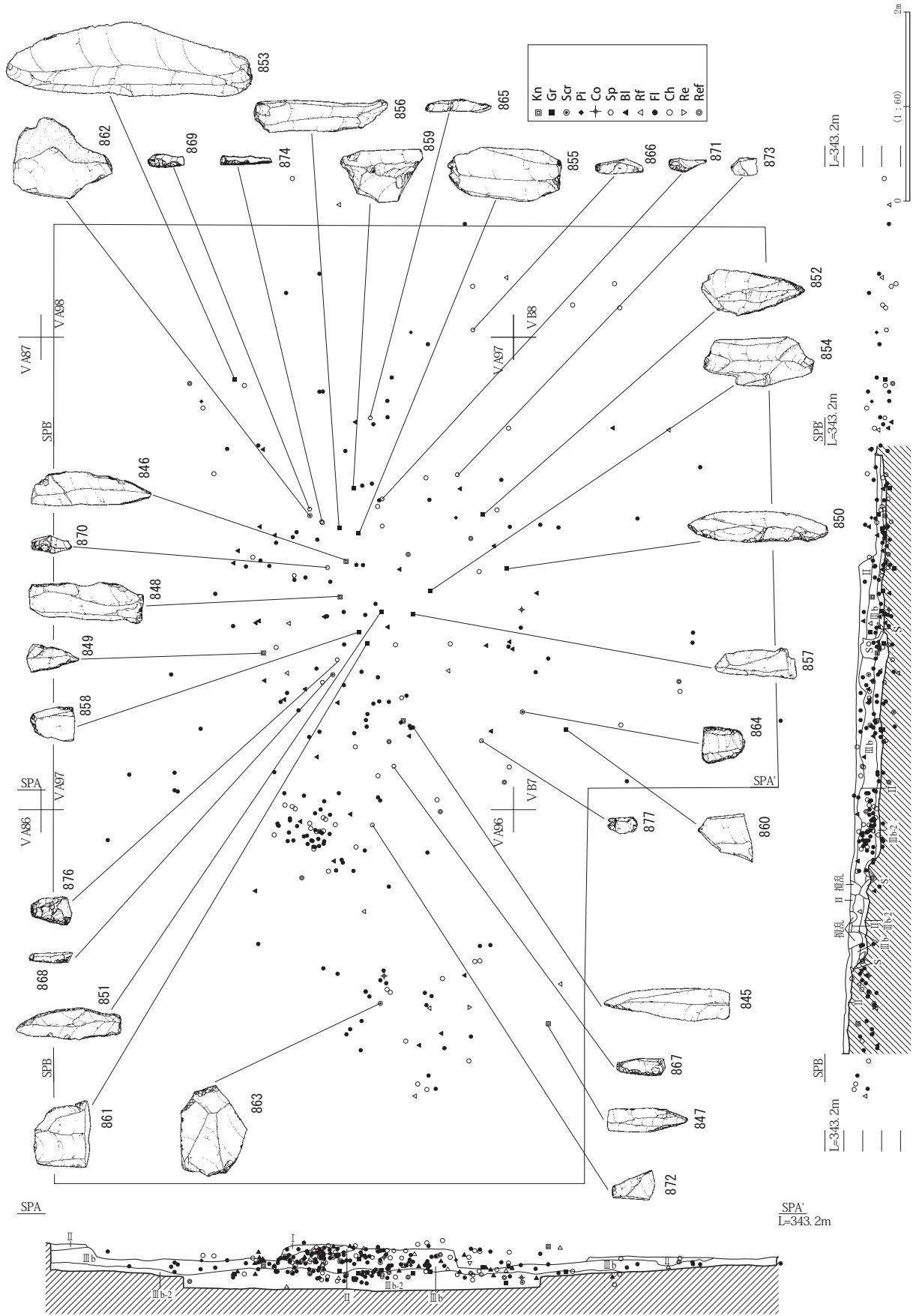
石器組成はナイフ形石器6点、彫刻刀形石器11点、スクレイパー4点、楔形石器3点、二次加工を有する剥片10点、石刃32点、剥片141点、チップ48点、削片15点、石核2点、礫1点、礫片8点からなる。

石器材料組成は頁岩や珪質頁岩を主体に、玉髄質頁岩、赤色頁岩、黒曜石、凝灰岩、瑪瑙、デイサイト、花崗閃緑岩からなる。

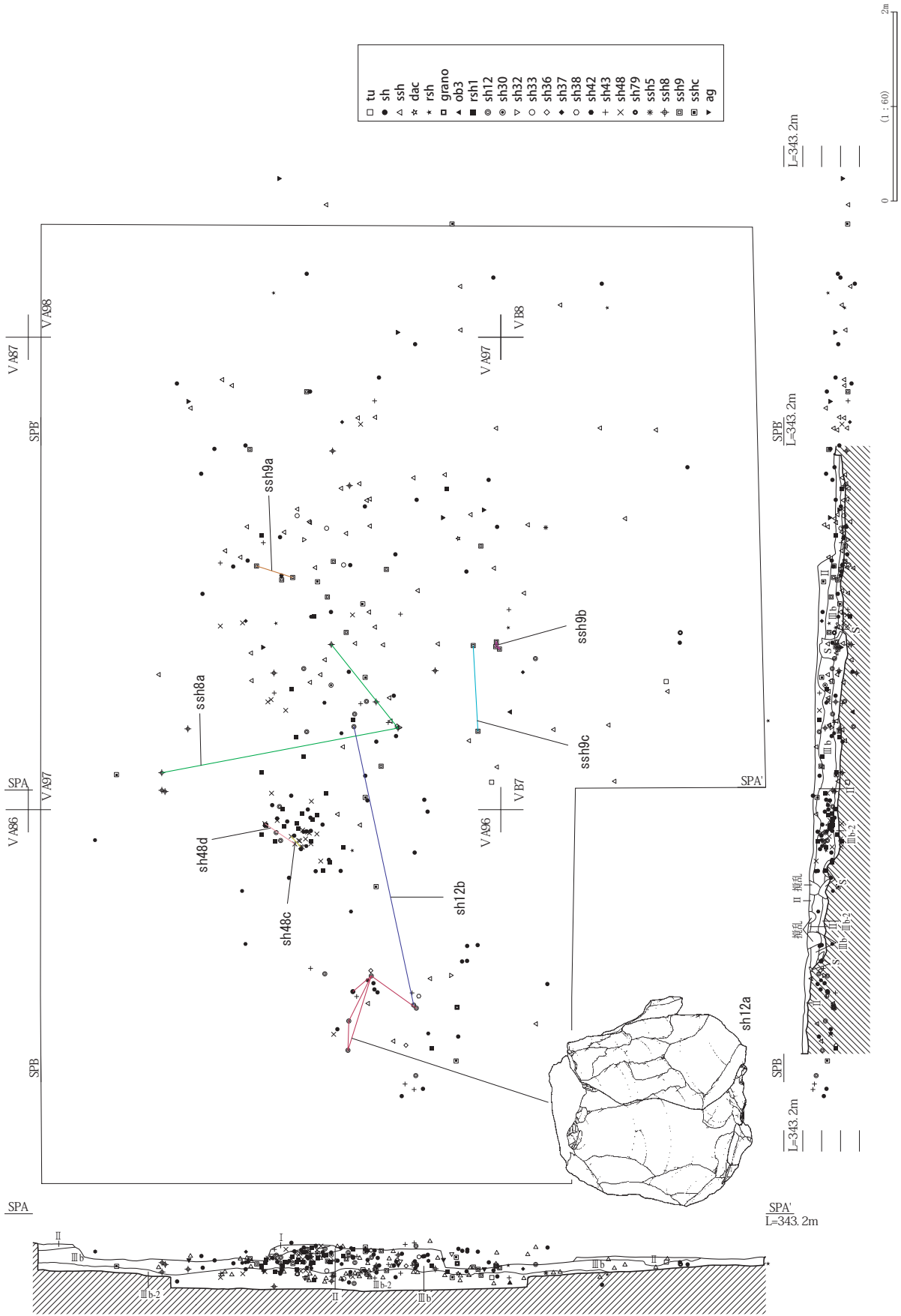
[出土遺物] 845～849はナイフ形石器。石刃や縦長剥片を素材とし、素材打面を基部側に据えている。残存している基部にはV字状のものが認められる。845は先端部のみ残存しており、刃部先端には加



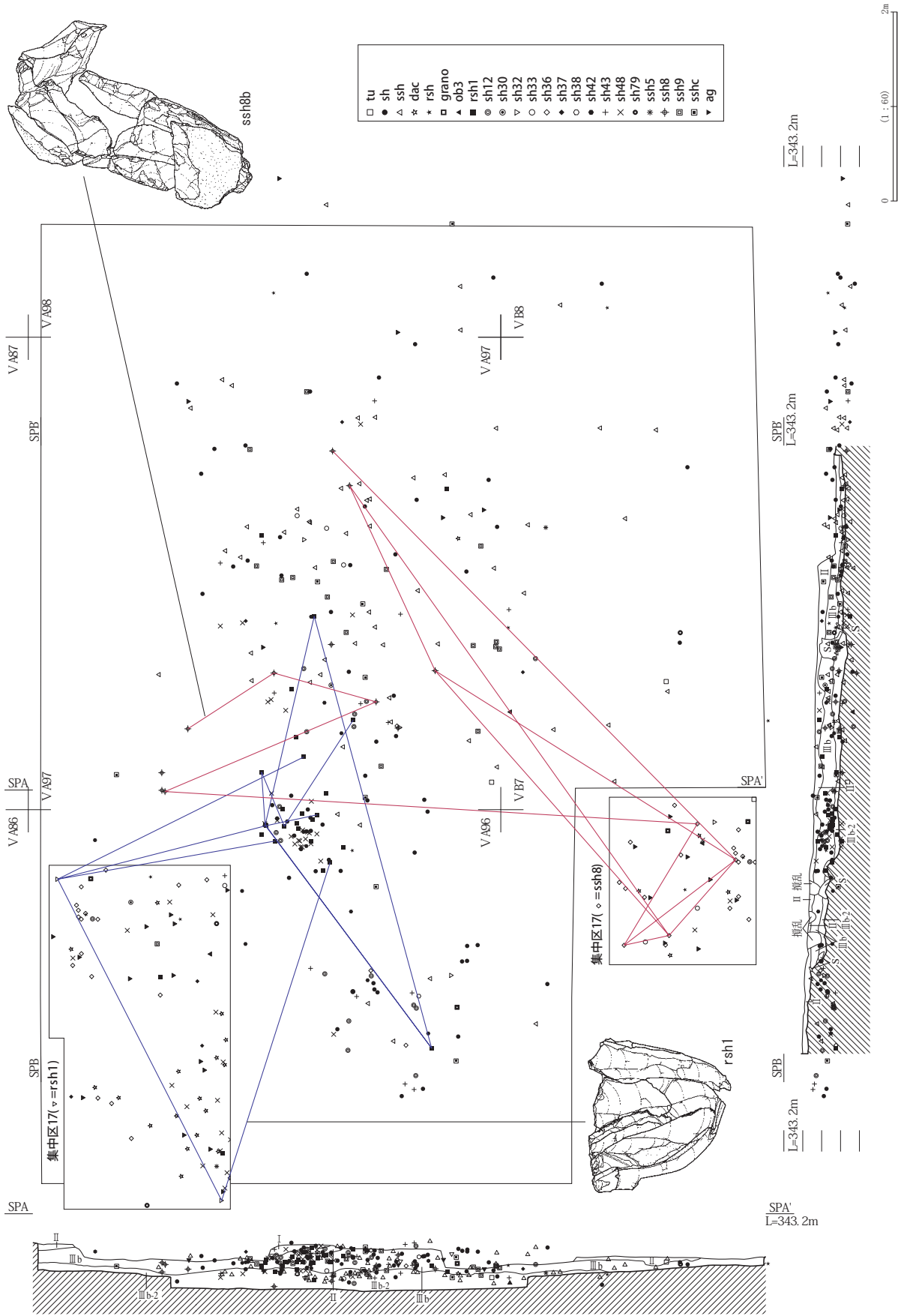
第287図 石器集中区20石器出土状況図



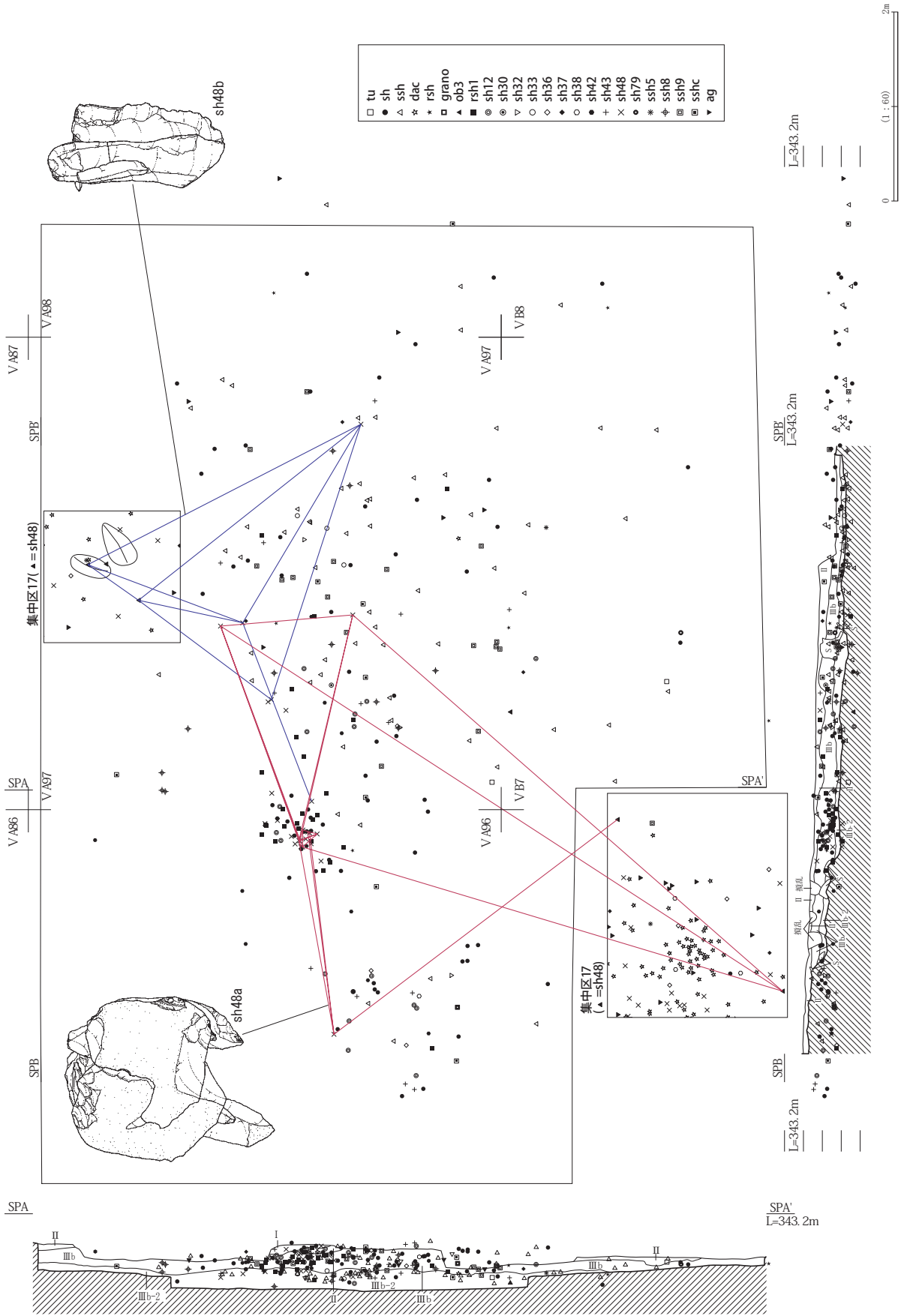
第288図 石器集中区20器種別出土状況図



第289図 石器集中区20母岩別出土状況図 (1-1)



第291図 石器集中区20母岩別出土状況図 (1-3)



第292図 石器集中区20母岩別出土状況図(1-4)

工が認められ、杉久保型の刃部加工に類似している。846・847・849の基部はV字形状を呈し、加工は裏面側にまで及ぶ。このような裏面への加工は彫刻刀形石器の基部加工には認められない。848は両側縁に加工が施されているものである。850～861・886・927は彫刻刀形石器。これらの中で850・851以外は全て神山型である。石刃や縦長剥片を素材とし、素材打面を基部側に据え、左肩を中心に彫刻刀面を作出している。ただし、857や861は右肩、856は上端に認められている。残存している基部は加工の無いものが多く、862のようなV字形状の基部は稀である。これらの他には、850の杉久保型、851の二側縁加工に類似した加工が認められ、共に先端部腹面側に彫刻刀面を作出している。これらの石器材料は、856と857が頁岩である以外は珪質頁岩である。862～864はスクレイパー。縁辺に加工を施しているものであり、定型の形状は認められない。865～877は彫刻刀形石器の削片。多くの削片の背面には彫刻刀面が確認できている。ここで認められた彫刻刀形石器とそれに伴う削片の出土点数の多さは他の石器集中区とは異なり、作業活動を大きく反映しているものと思われる。石材は彫刻刀形石器と同様である。878はssh 8に属する石刃核であり、下記で詳述する。

上記の石器から16母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。このうち10母岩は本集中区に主体を有するものである。また、10母岩が集中区17、3母岩が集中区18・19に跨っている。
sh12：総点数22点、総重量1046.42g。二次加工を有する剥片、剥片、チップ、石核で構成される資料である。剥離面は灰黄褐～にぶい黄褐色を基調とし、礫面はにぶい褐色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。また部分的に摂理が発達している。

接合点数は7点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aは5点あり、二次加工を有する剥片と剥片、石核からなる。個体bは2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は、<882→883><880→881>→879である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。上設打面より剥片を連続的に剥離しており、それが停止すると正面下半部において裏面側から下縁調整を行う。再度、正面右側において上設打面から剥離しているものの、意図した剥離に至らず停止する。

個体bは石核整形の過程に伴う資料である。背面に自然面を有する大型剥片を剥離している資料であり、個体aの前段階に位置づけられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

sh32：総点数3点、総重量4.14g。石刃と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

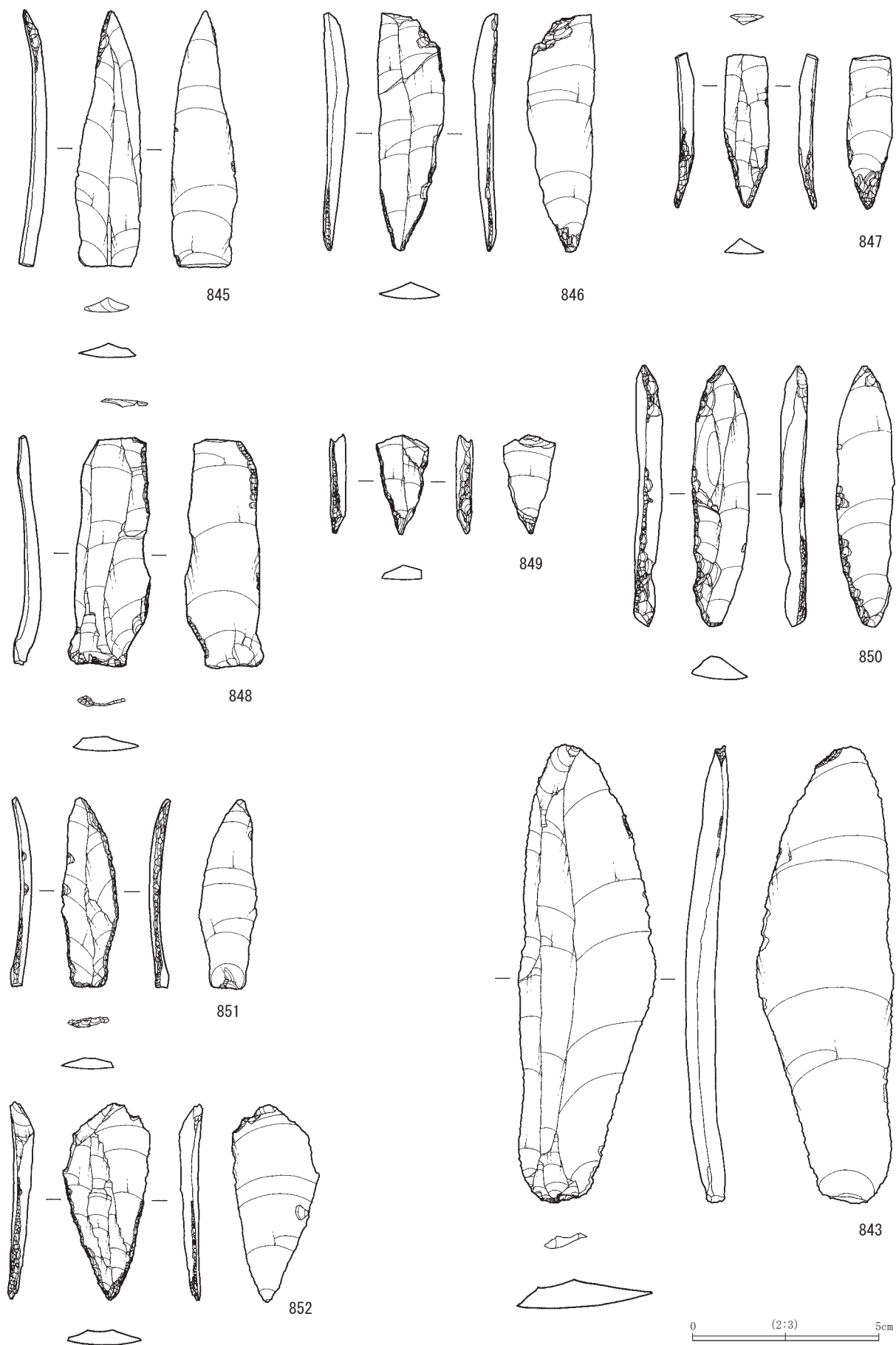
石刃剥離の過程に伴う資料である。本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh33：総点数4点、総重量38.26g。彫刻刀形石器、スクレイパー、剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近はにぶい黄褐色が層状に入る。礫面は黄褐色を呈する。石質は緻密でややざらつくが、部分的になめらかである。

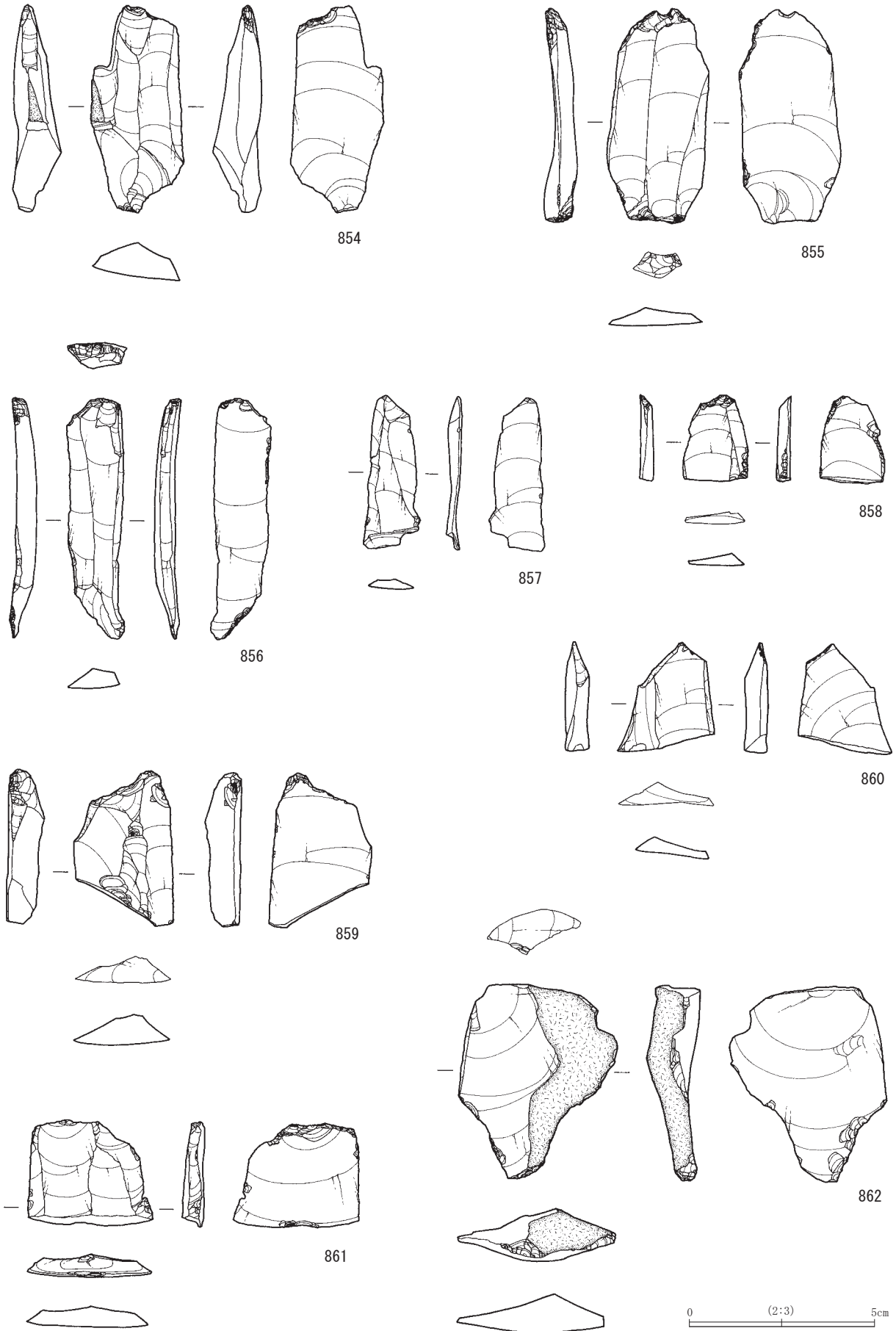
彫刻刀形石器(856)とスクレイパー(862)については出土遺物に記載する。本母岩は石核で搬入し、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh36：総点数6点、総重量99.35g。彫刻刀形石器、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は灰白色を基調とし、灰黄・黄褐色が層状に入る。礫面は浅黄色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。礫面付近に近づくにつれ石質は異なり粗粒でざらつく。

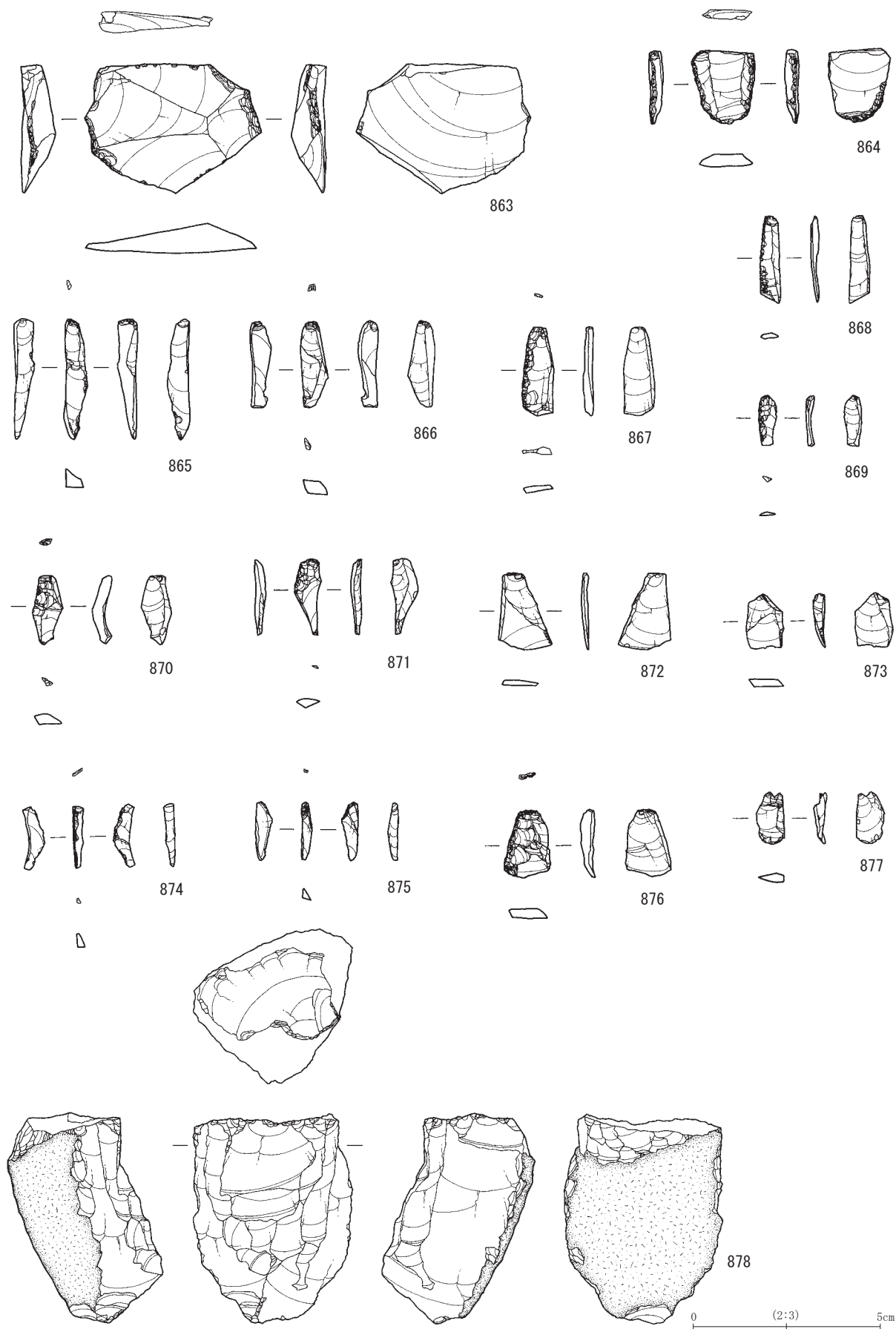
接合点数は4点あり、上記の器種からなる。剥離工程は886→884→885→887である。本個体は石刃剥離の過程に伴う資料である。石刃や縦長剥片を単設方向から連続的に剥離している。打面再生や調整を頻繁に介在させているため、作業面高が徐々に減少している。接合個体の背面剥離面構成からは



第293図 石器集中区20出土遺物 (1)

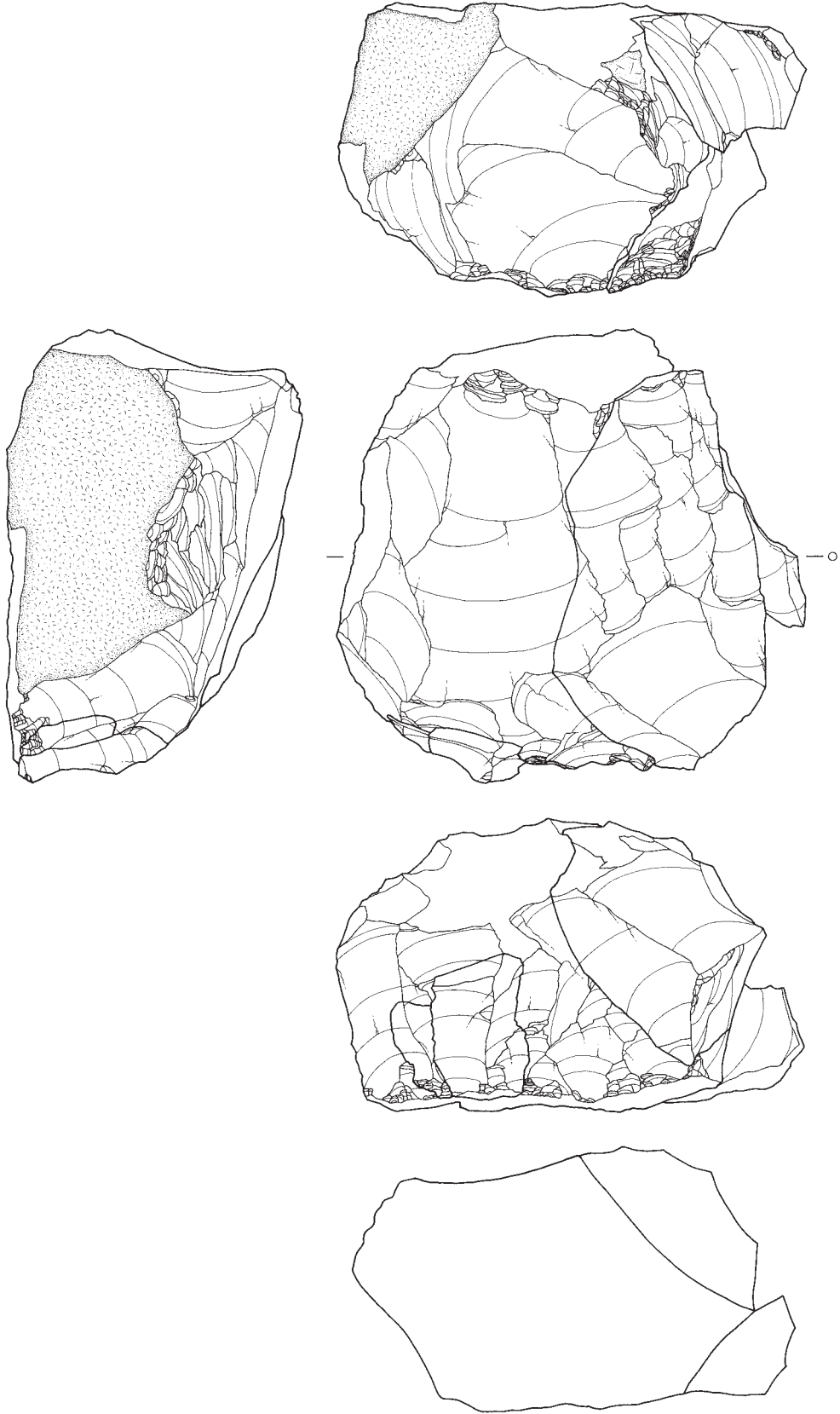


第294図 石器集中区20出土遺物 (2)



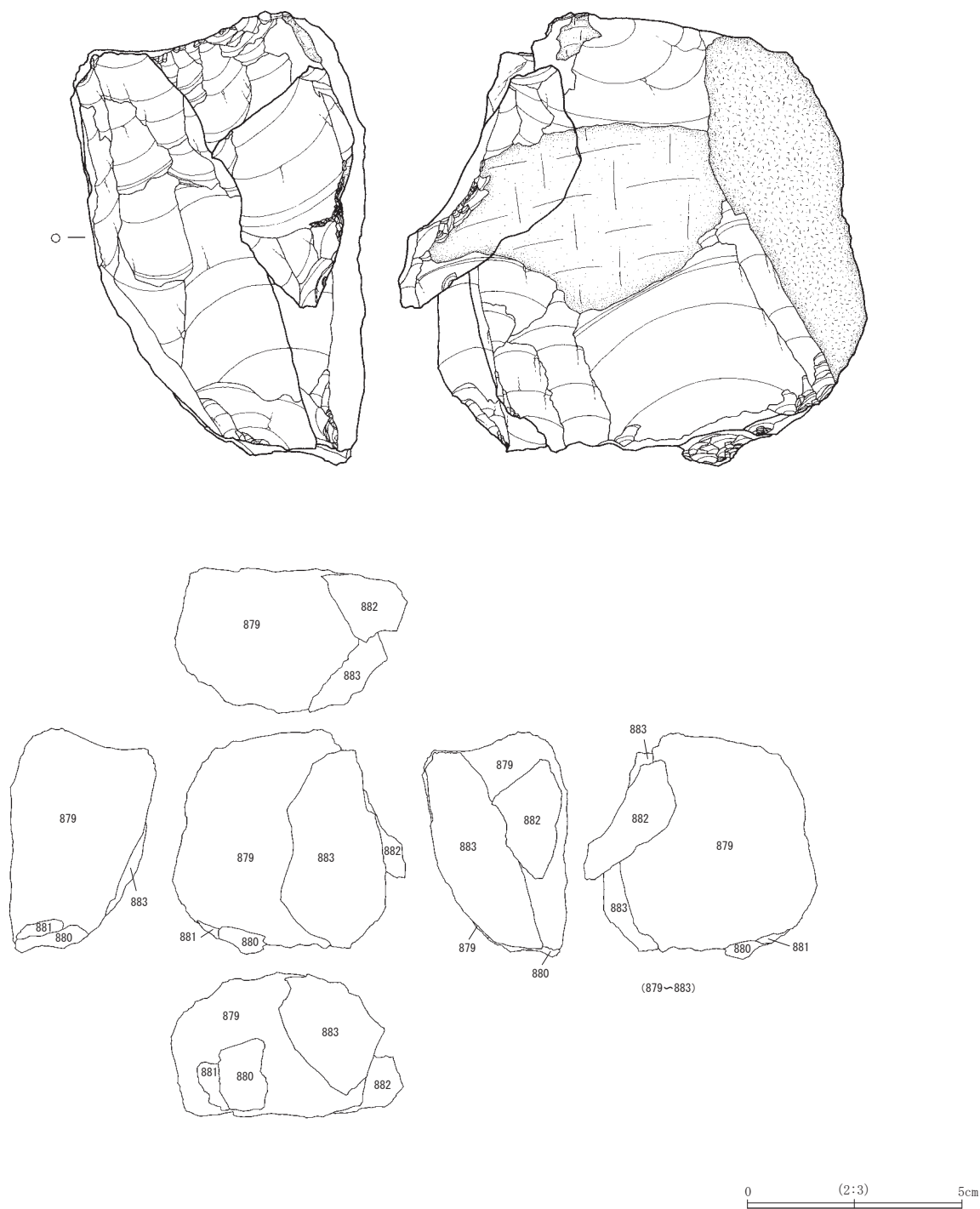
第295図 石器集中区20出土遺物 (3)

sh12a

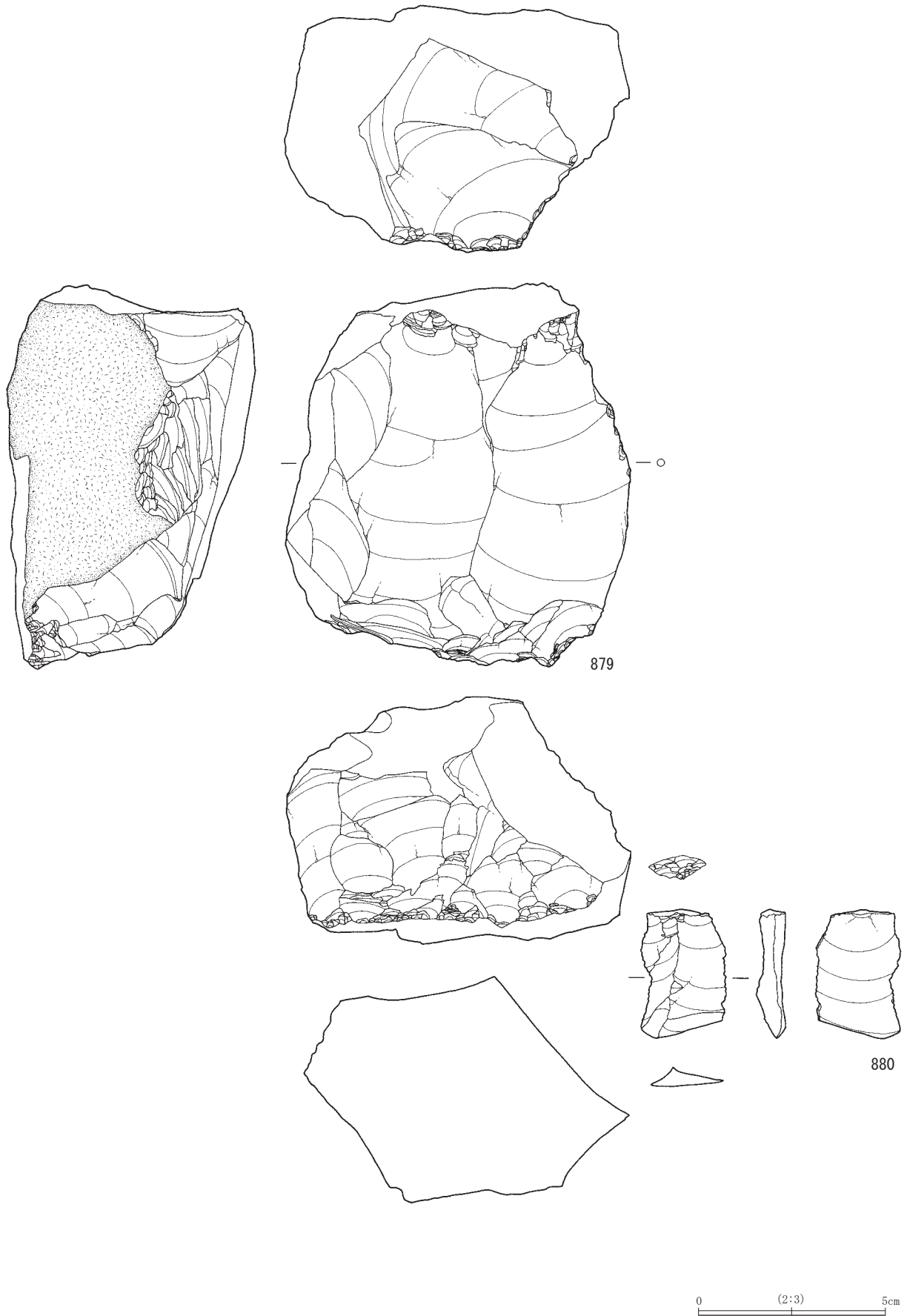


第296図 石器集中区20出土遺物 (4)

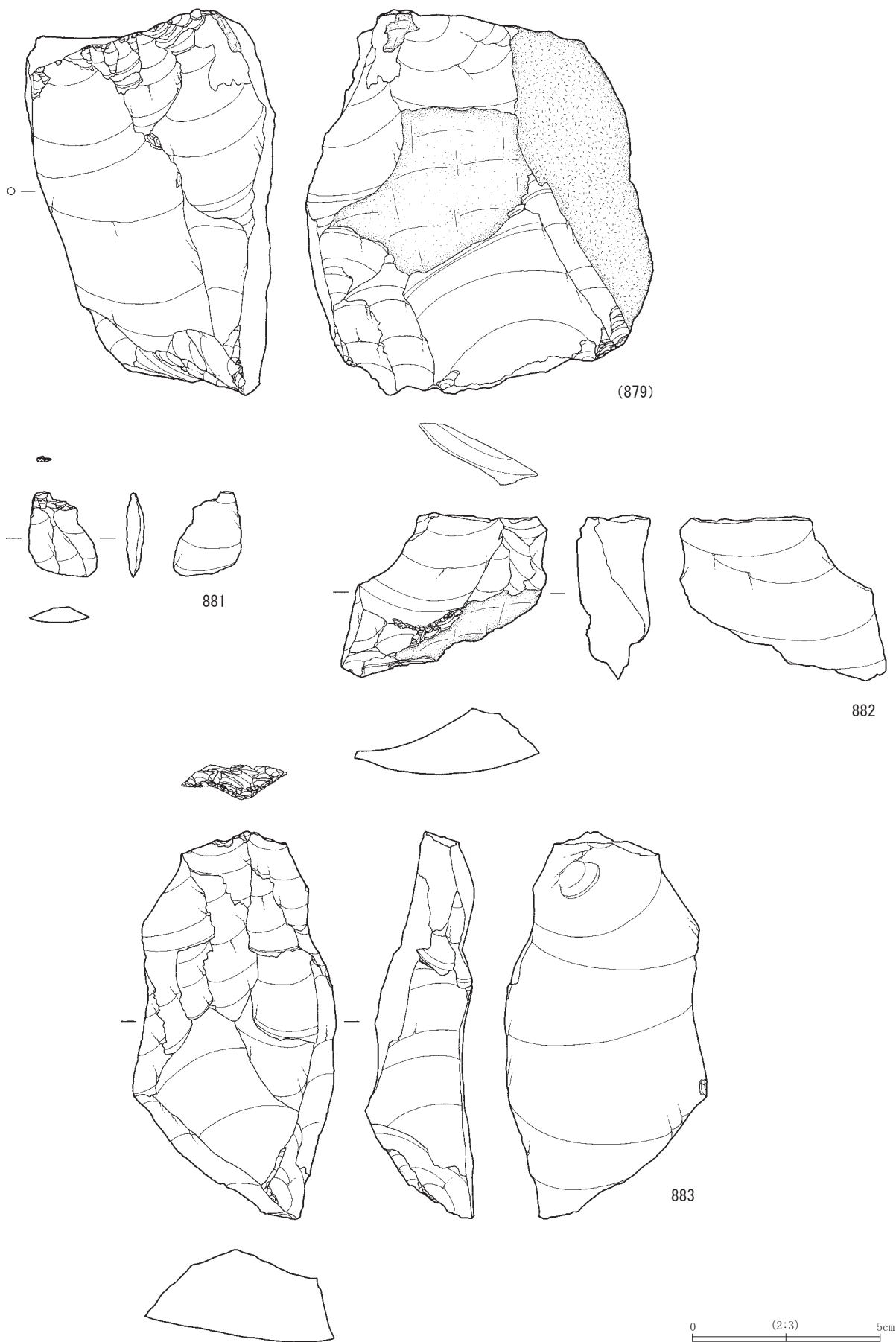
(sh12a)



第297図 石器集中区20出土遺物 (5)

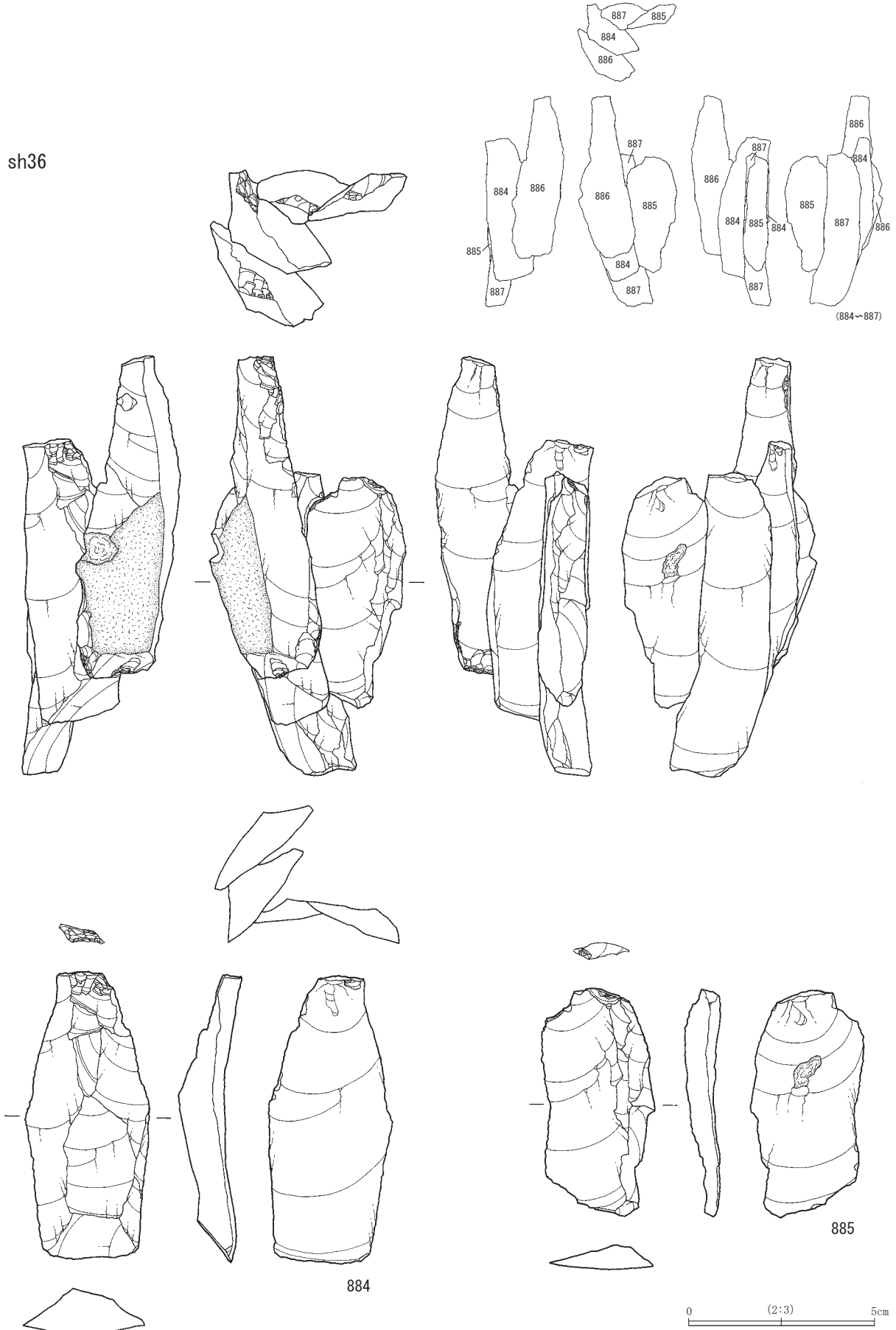


第298図 石器集中区20出土遺物 (6)

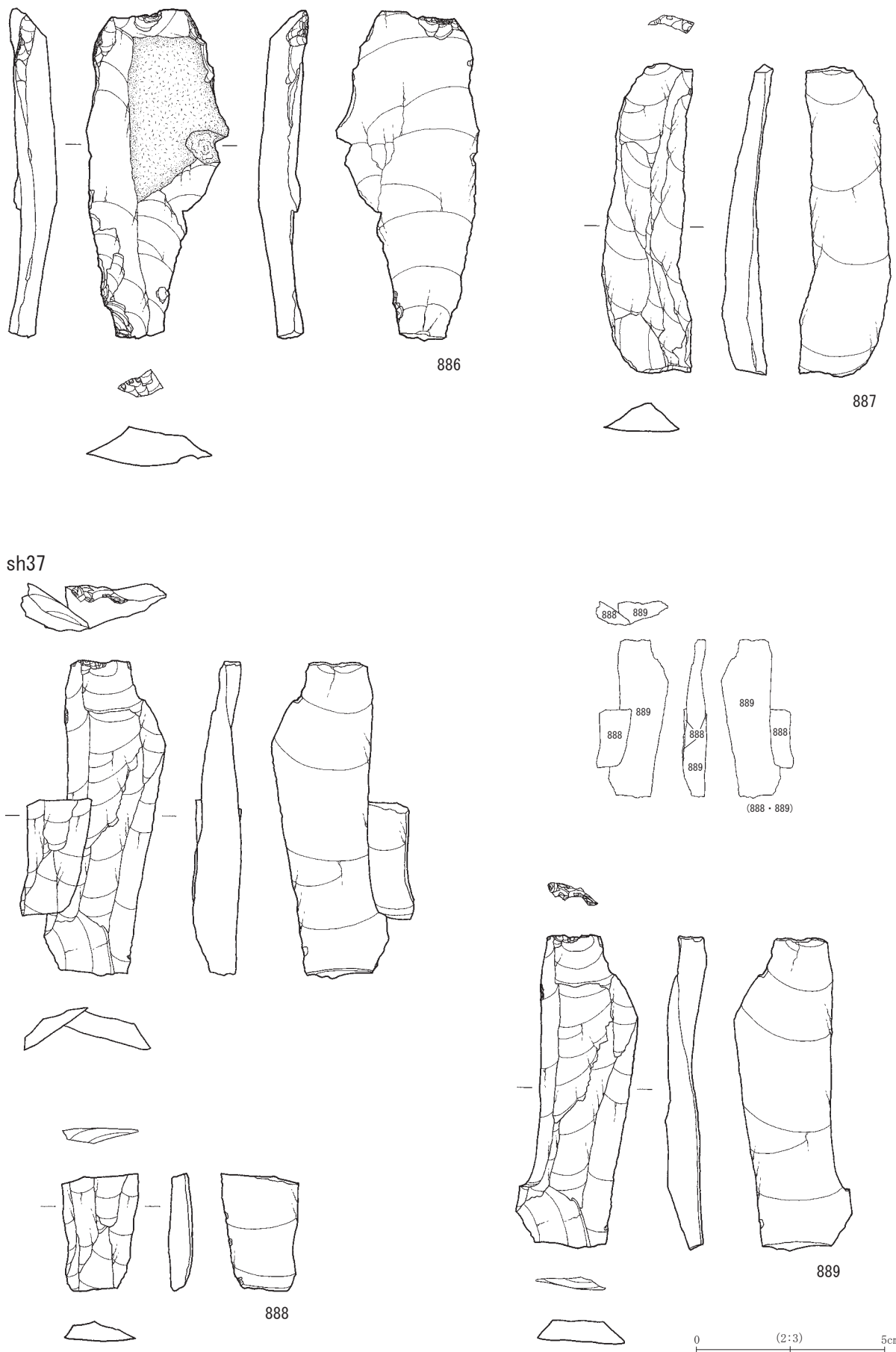


第299図 石器集中区20出土遺物 (7)

sh36



第300図 石器集中区20出土遺物 (8)



第301図 石器集中区20出土遺物 (9)

下側で大きな剥離が認められることから、上記の工程以前に石核整形が行われたと捉えられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh37：総点数7点、総重量91.56g。石刃と剥片で構成される資料である。剥離面は暗灰黄色を基調とし、灰黄色が斑に入る。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

接合点数は2点あり、石刃からなる。剥離工程は888→889である。本個体は石刃剥離の過程に伴う資料である。石刃を単設方向から連続的に剥離しており、剥離の際には打面調整を施している。

本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh42：総点数10点、総重量145.58g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は灰色を基調とし、黄灰色が層状に入る。礫面は浅黄色を呈する。石質は緻密だが、僅かにざらつく。

接合点数は8点であり、石刃と剥片からなる。剥離工程は891→892→890→<894><895→897>→893→896→898である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石刃剥離の過程に伴う資料である。下設打面から石刃を剥離した後、180度打面転位し上設打面から石刃と縦長剥片を連続的に剥離している。打面転位後の剥離の際には打面再生を頻繁に介在させているため、作業面高が徐々に減少していく。接合個体の背面剥離面構成からは、右側面で上下方向からの剥離と直交する剥離が認められることから、正面右側において作業面稜調整が施されたと捉えられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh48：総点数34点、総重量411.95g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片で構成される資料である。剥離面は灰黄褐色を基調とし、灰白色が斑に入る。礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は22点あり、4個体(a～d)に分かれる。個体aは12点、個体bは6点あり、石刃と剥片からなる。個体c・dは2点あり、剥片からなる。

個体aの剥離工程は899→900→901→903→(902a+b)→905→908→904→906→<907><910→909>である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から石刃剥離の過程に伴う資料である。上設打面から礫面を大きく除去し石核整形を行う。そして正面右側において作業面稜調整を施した後、石刃や縦長剥片を剥離している。それが停止すると打面再生を介在させながら、再び上設打面から剥離している。上設打面から剥離されている石刃と剥片は、背面と腹面の剥離方向は同じである。

個体bの剥離工程は911→(913a+b)→914→912→915である。本個体は石刃剥離から作業面稜調整の過程に伴う資料である。上設打面から石刃を剥離しており、停止すると作業面稜調整を施している。この作業面稜調整剥片の剥離は、ウートラパッセとなり作業面下半部の形状を大きく変形させている。そして打面再生を施した後に石核は遺跡外に搬出している。上設打面から剥離されている剥片は、背面と腹面の剥離方向は同じである。

個体c・dは、上記の剥片剥離工程に伴う資料である。

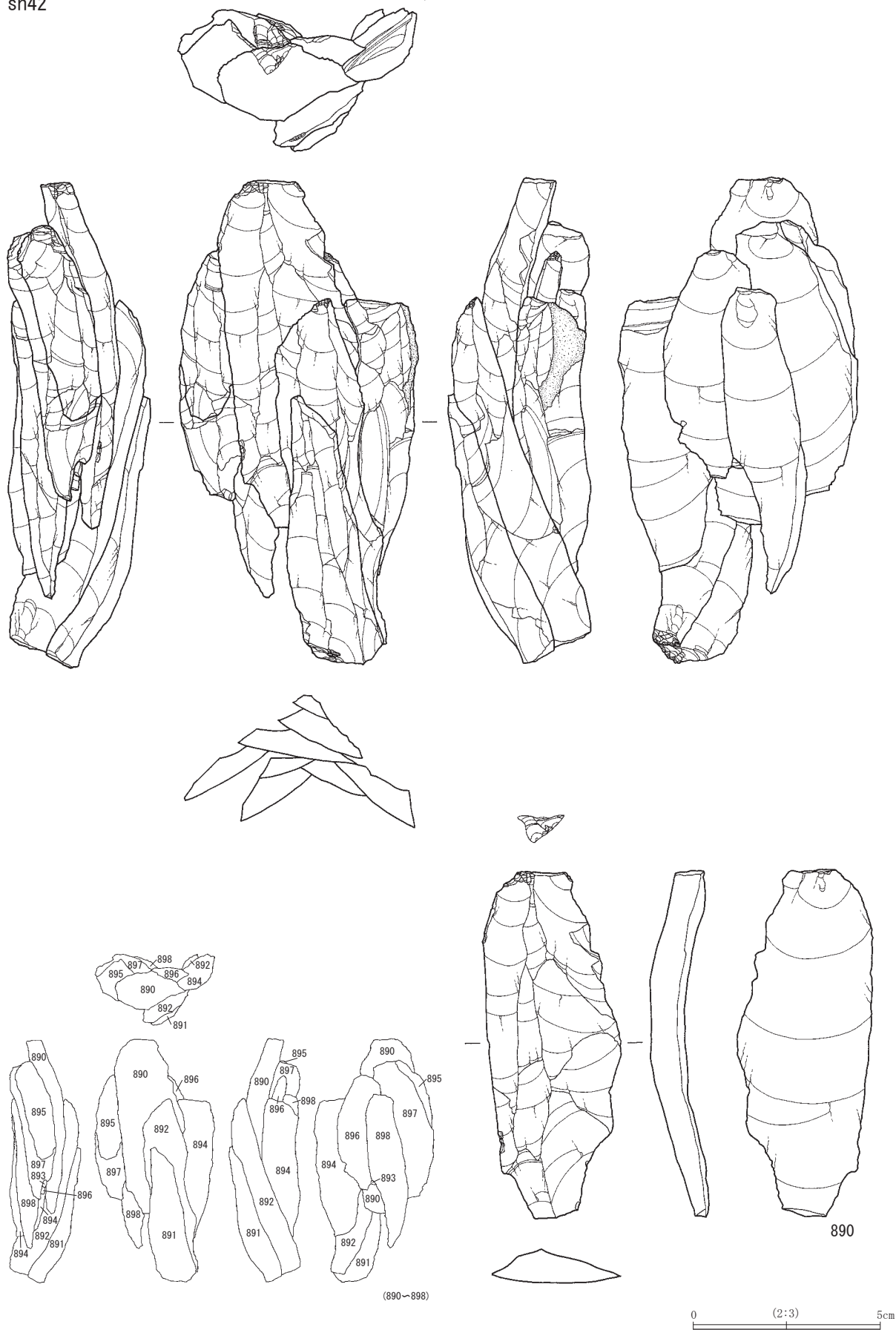
各個体の剥離工程の前後関係は判然としないものの、一連の過程とすれば、剥離工程やその規模から個体a→bと捉えられる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

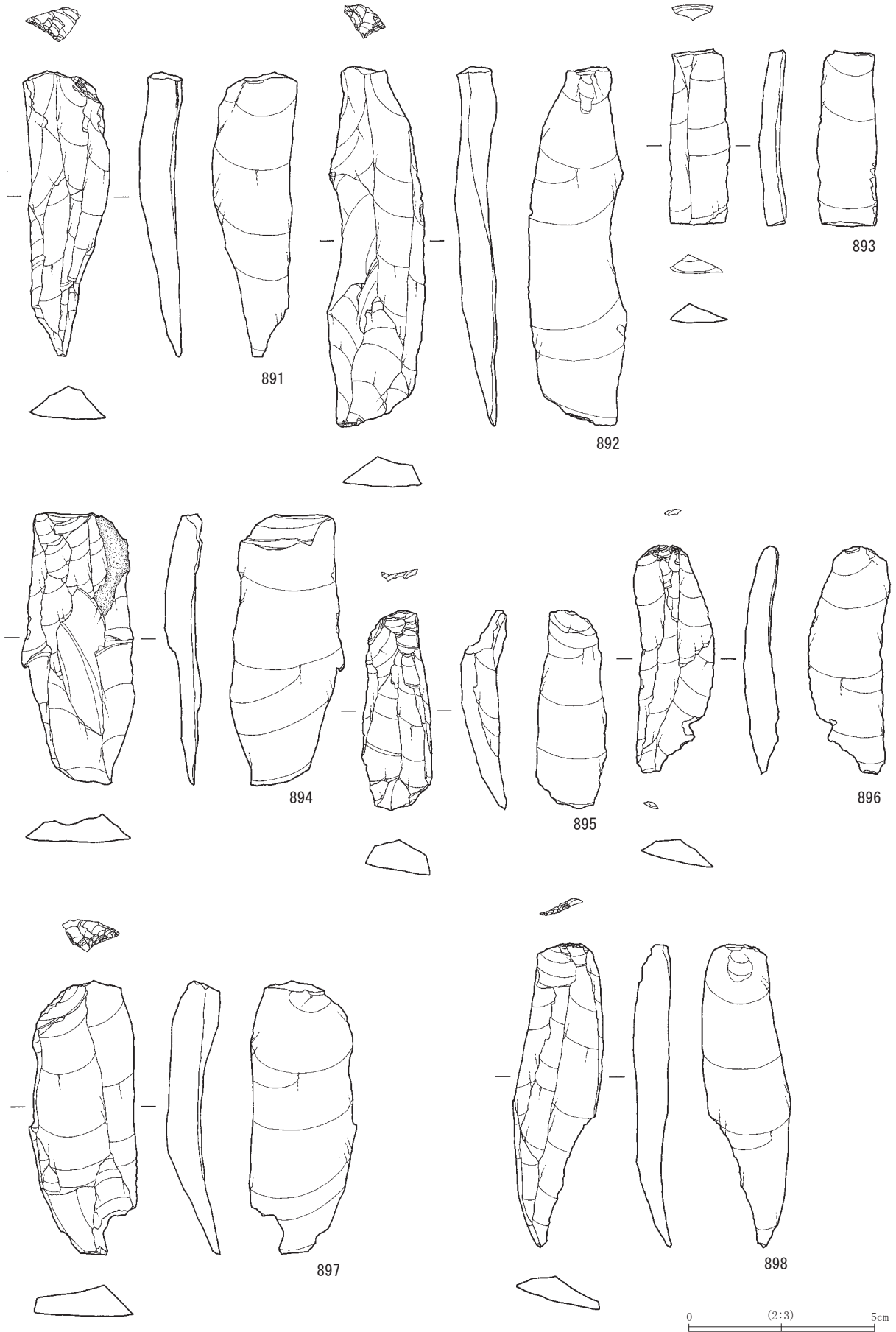
ssh8：総点数25点、総重量368.65g。彫刻刀形石器、二次加工を有する剥片、剥片、石核で構成される資料である。剥離面は明黄褐色を基調とし、黄褐色が縞状に入る。礫面はオリーブ褐色を呈する。石質は緻密でなめらかだが、礫面付近がややざらつく。摂理も層状に発達している。

接合点数は20点あり、2個体(a・b)に分かれる。個体aが5点あり、剥片からなる。個体bが15

sh42

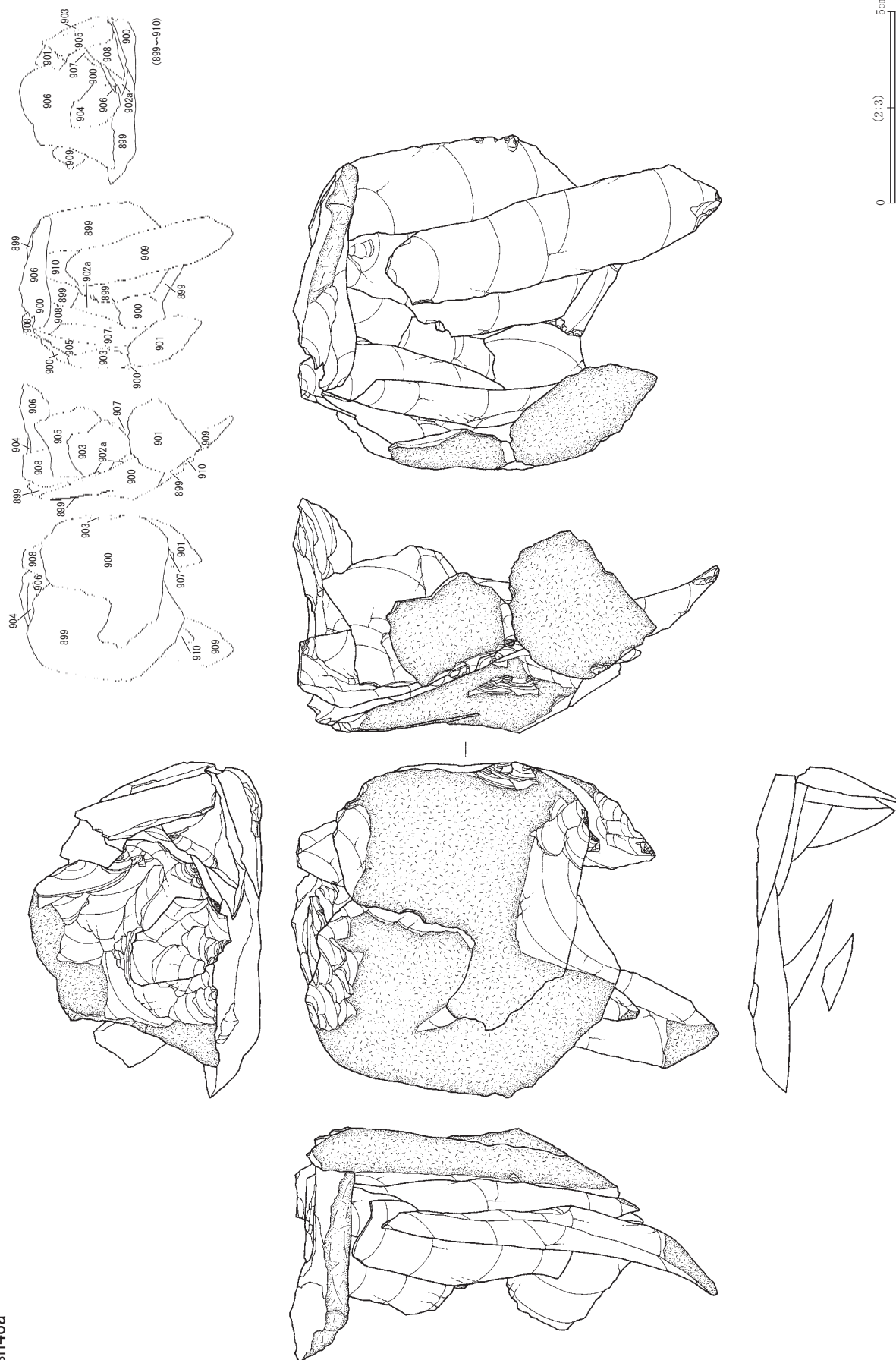


第302図 石器集中区20出土遺物 (10)

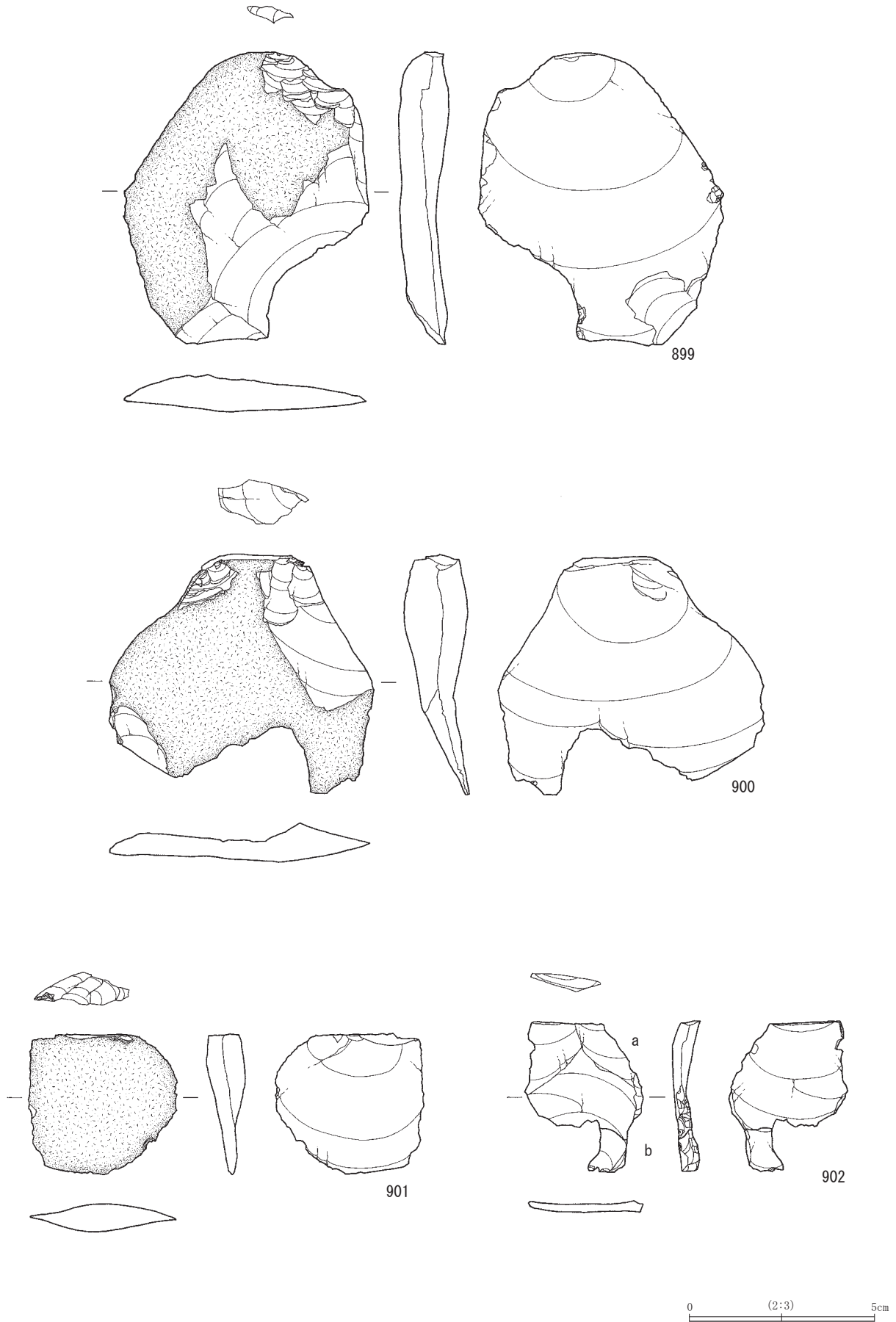


第303図 石器集中区20出土遺物 (11)

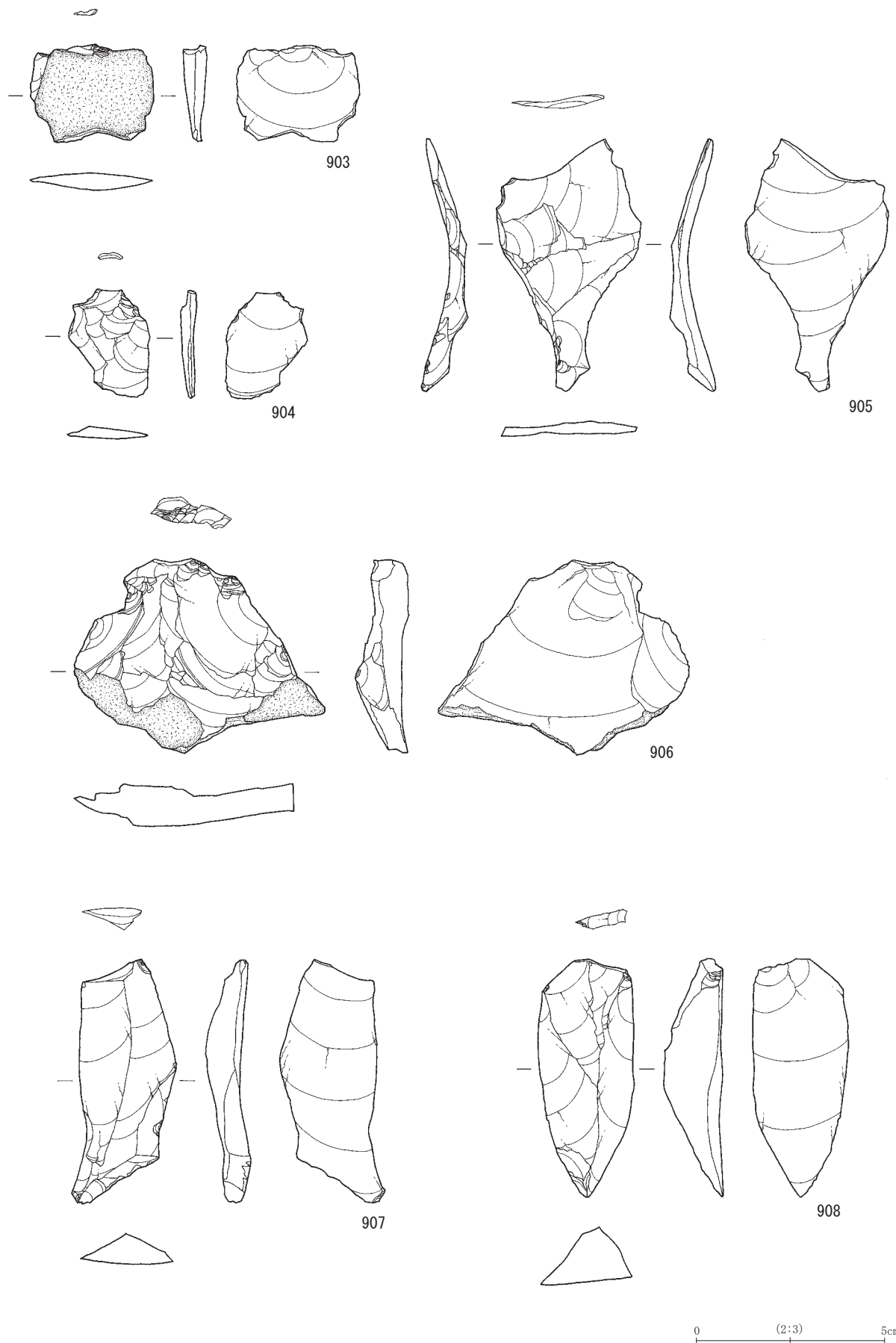
sh48a



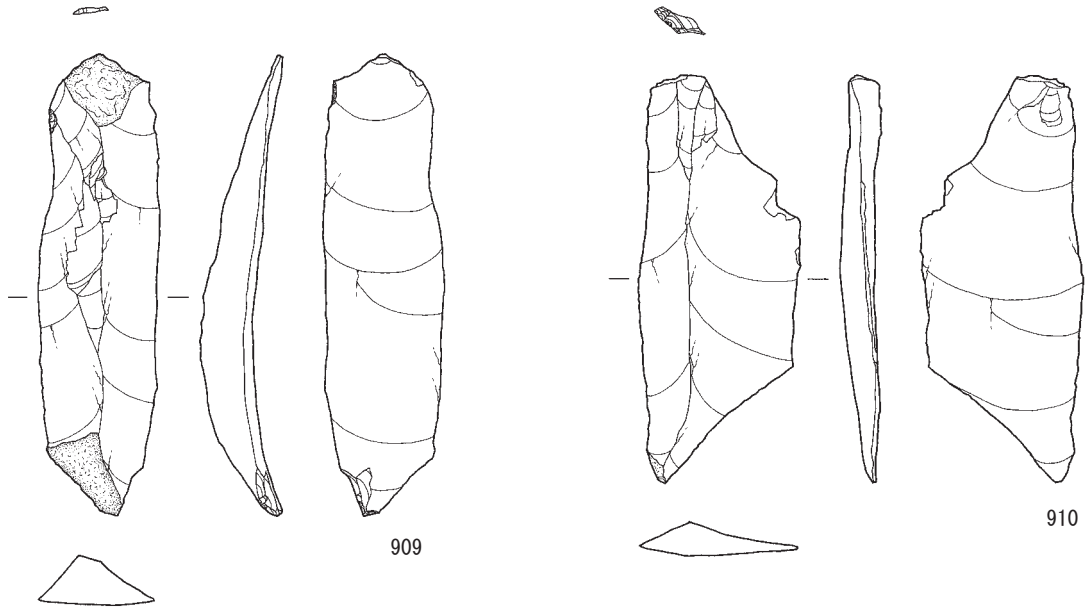
第304図 石器集中区20出土遺物 (12)



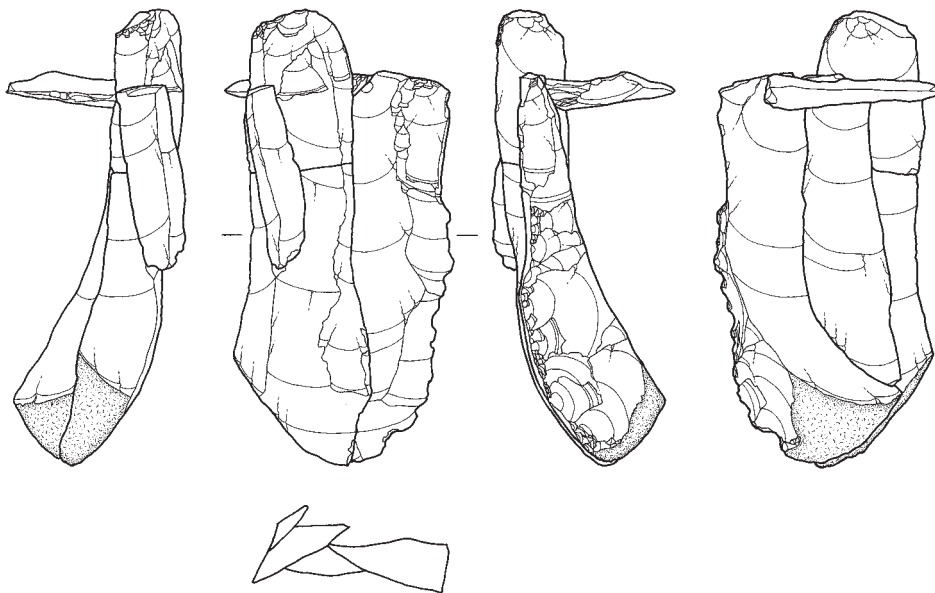
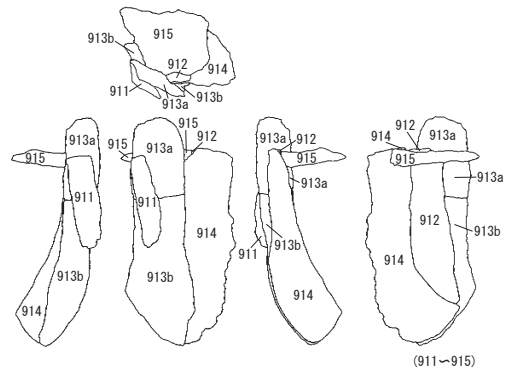
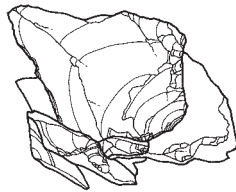
第305図 石器集中区20出土遺物 (13)



第306図 石器集中区20出土遺物 (14)

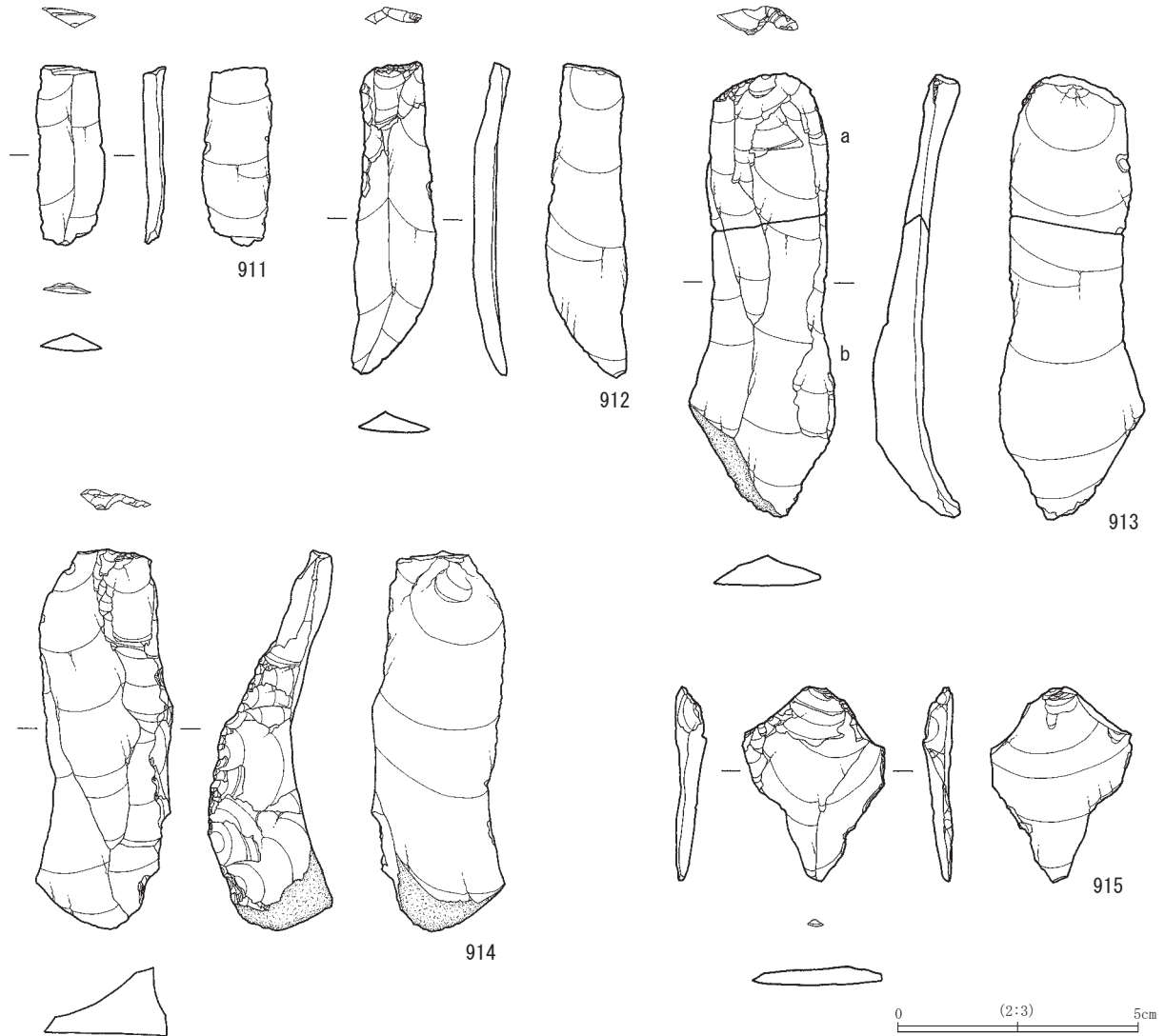


sh48b



0 (2:3) 5cm

第307図 石器集中区20出土遺物 (15)



第308図 石器集中区20出土遺物 (16)

点あり、彫刻刀形石器、二次加工を有する剥片、剥片からなる。

個体 b の剥離工程は、<917><916→918→920→923→919>→922→921→924→<927><(928a+b)>→925→929→926である(<○>の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。正面左側上方の礫面除去後に、上設打面から剥片剥離をしている。それが停止すると上設打面側の打面再生を行う。そして180度打面転位させ下設打面を形成した後、正面左下において作業面稜調整を経て、目的剥片である縦長剥片を剥離している。剥離された縦長剥片は彫刻刀形石器の素材として用いられている。

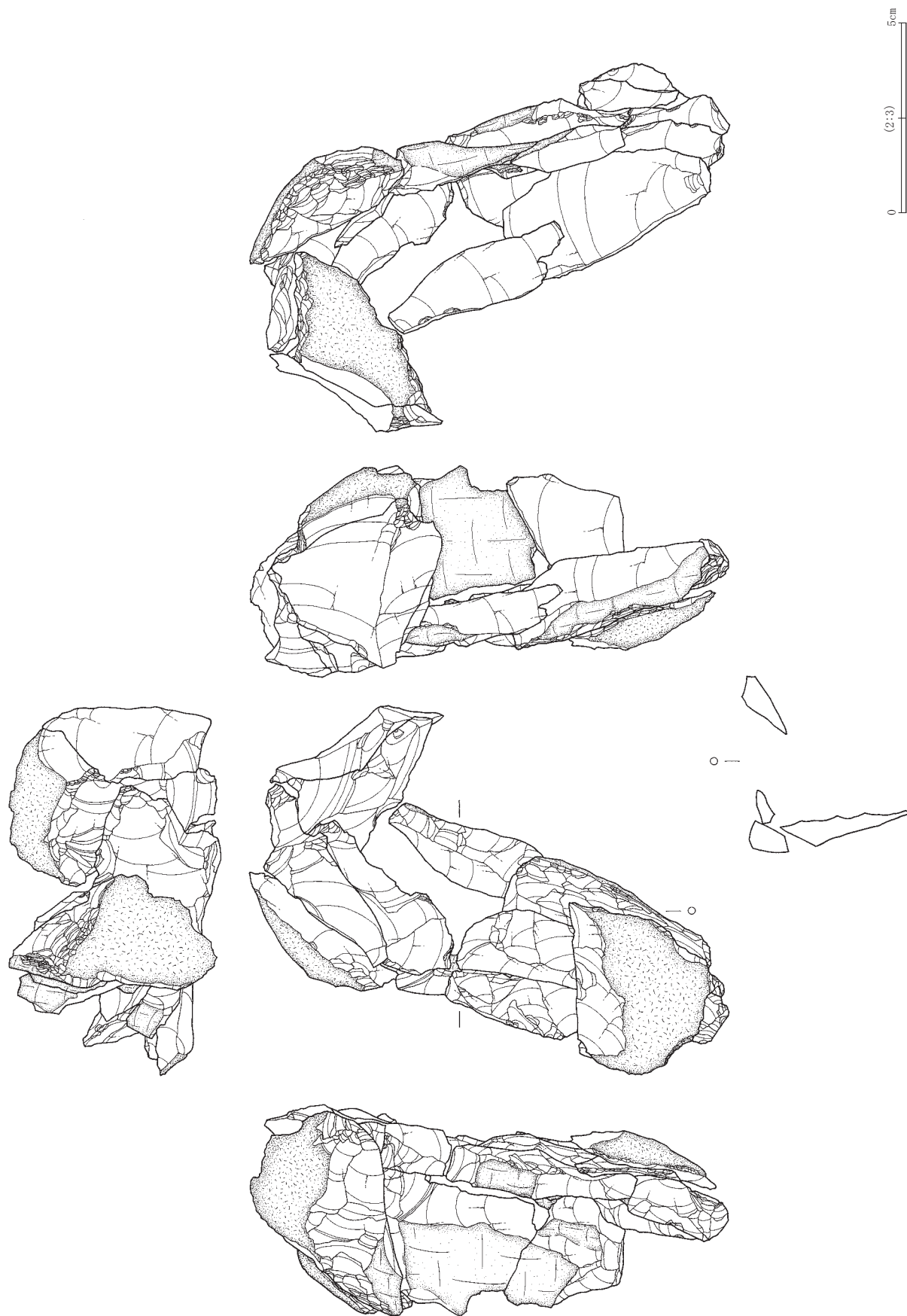
個体 a は目的剥片剥離から打面再生の過程に伴う資料である。

これらの個体は規模や剥離工程から個体 b → a の工程が辿れる。また、石核(878)は本母岩の残核となるが、上設打面からのみ目的剥片剥離を行っている。この石核と各個体との間には多くの空間が存在していることから、素材や製品として搬出されたものと思われる。

本母岩は中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を廃棄している。

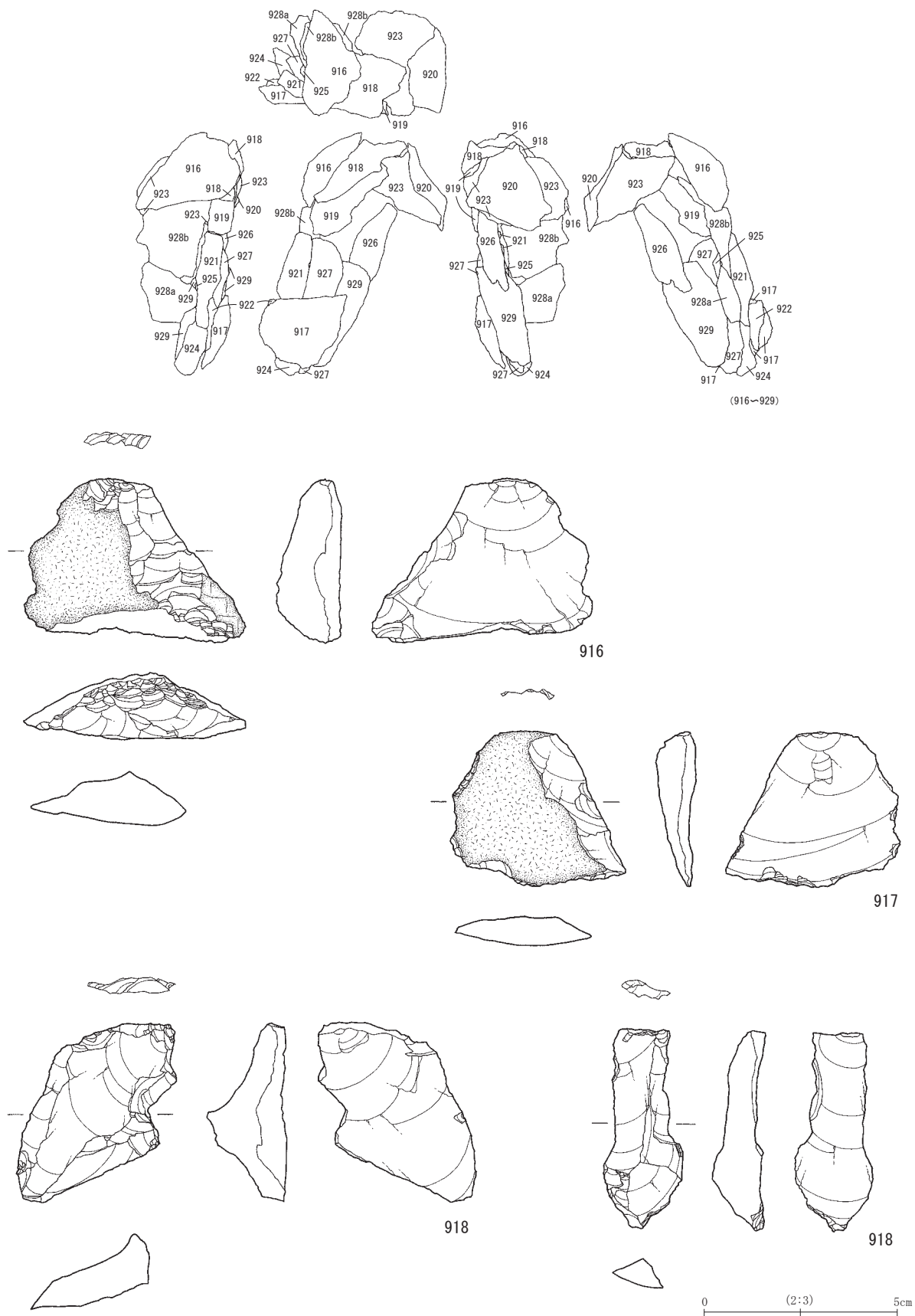
ssh 9 : 総点数16点、総重量52.6g。ナイフ形石器、彫刻刀形石器、石刃、剥片、削片で構成される資

ssh8b

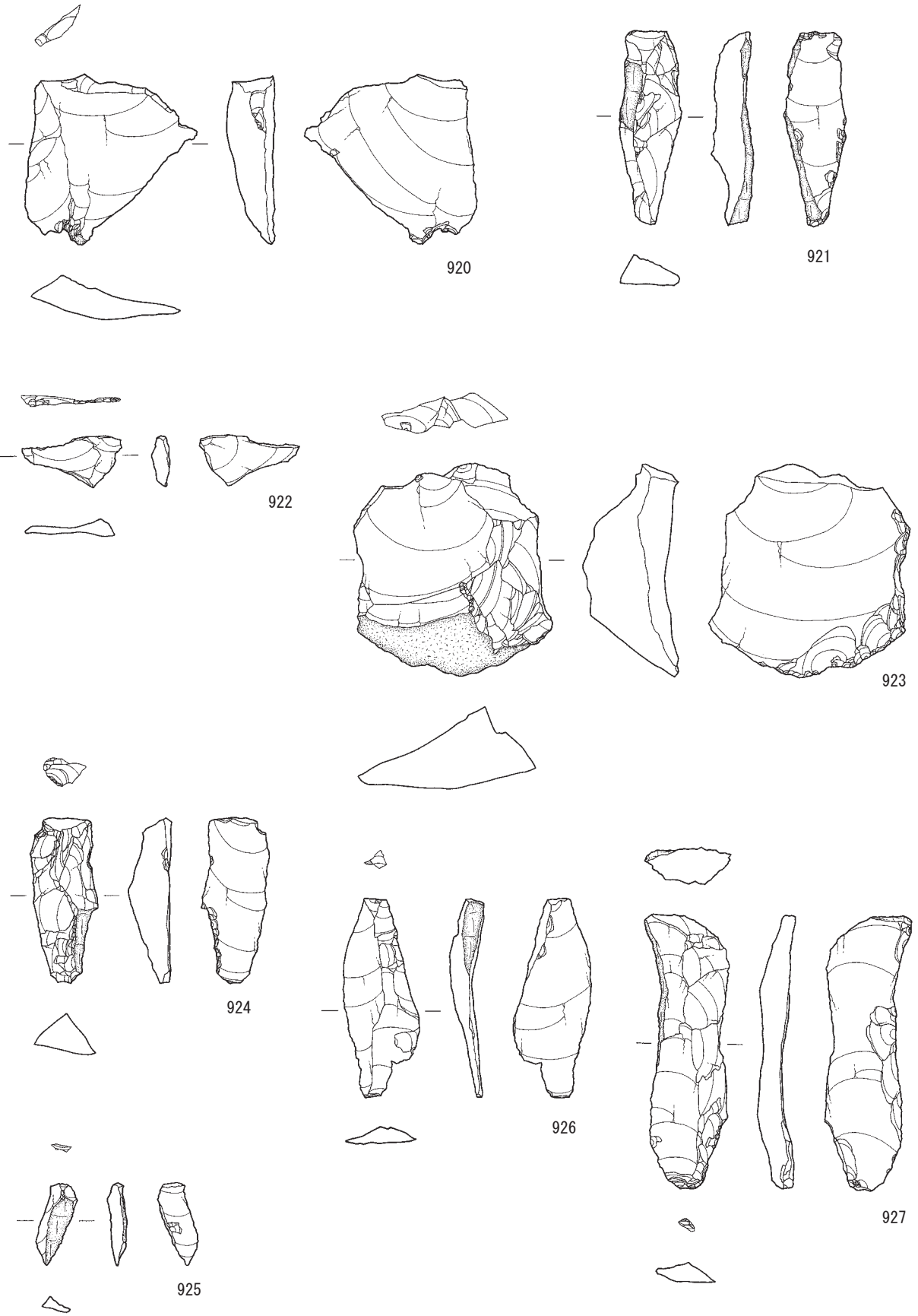


第309図 石器集中区20出土遺物 (17)

(ssh8b)

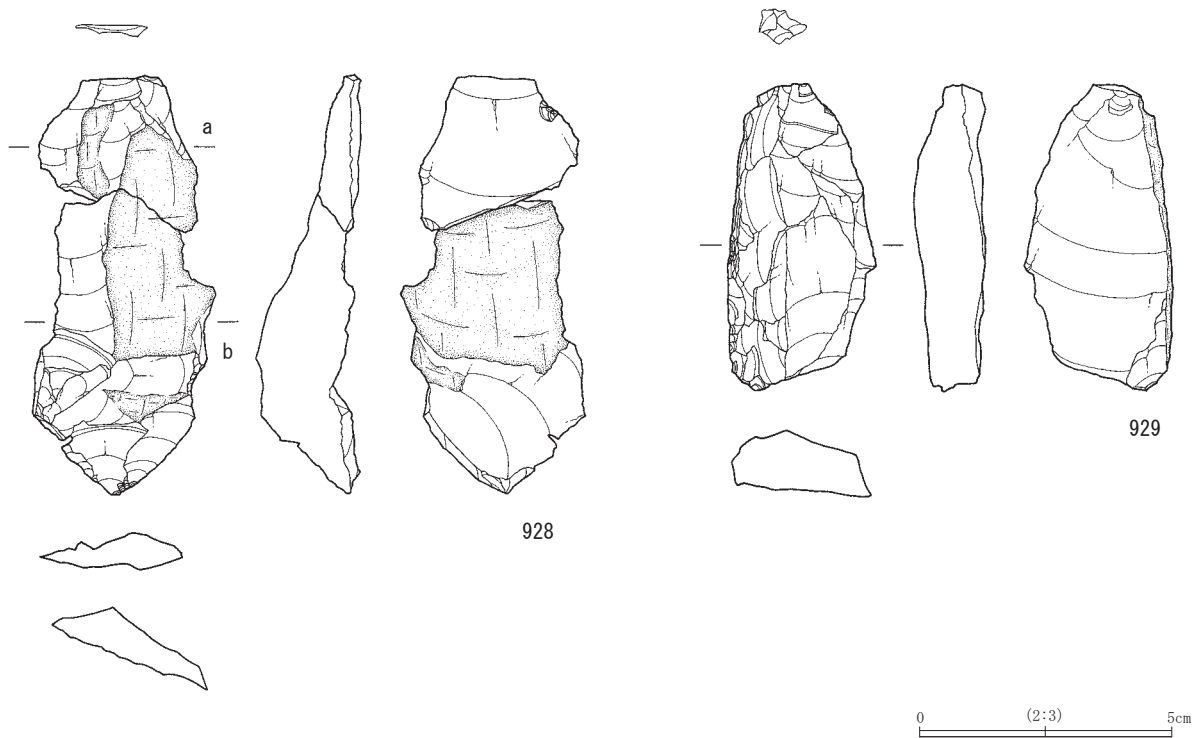


第310図 石器集中区20出土遺物 (18)



0 (2:3) 5cm

第311図 石器集中区20出土遺物 (19)



第312図 石器集中区20出土遺物 (20)

料である。剥離面は黄灰色を基調とし、礫面付近は淡黄色が層状に入る。礫面は灰白色を呈する。石質は緻密でなめらかであり、光沢を有する。

接合点数は6点、3個体に分かれる。いずれも2点であり、石刃と剥片からなる。接合個体はそれぞれ剥片の器体中央部もしくは末端で2つに折れたものが接合した資料である。

ナイフ形石器(846、848)や彫刻刀形石器(858)については出土遺物で記載している。本母岩は小～中型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

ssh26：総点数3点、総重量6.32g。彫刻刀形石器と削片で構成された非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調としている。石質は緻密でなめらかであり、光沢を有する。

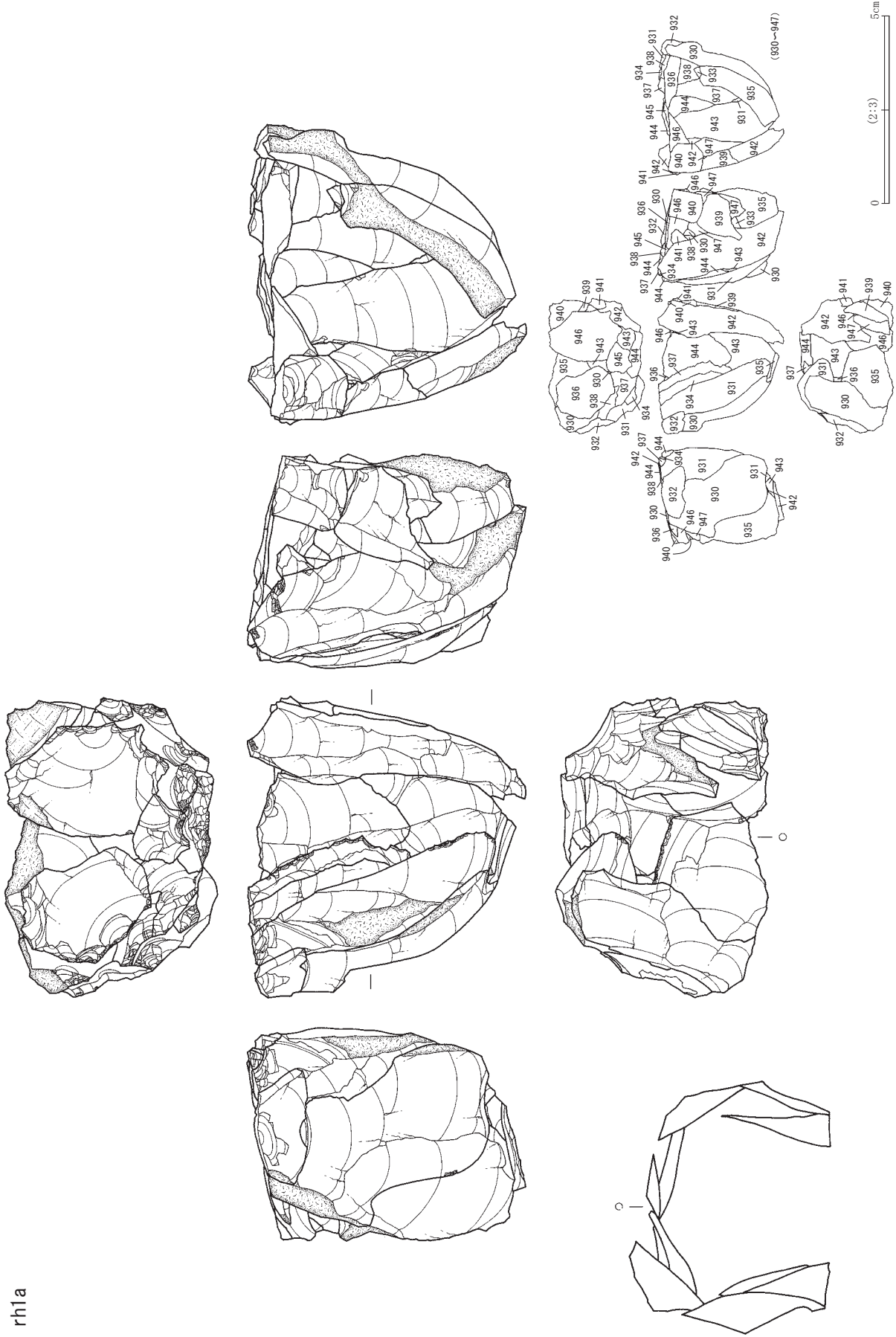
彫刻刀形石器(852)と削片(866、871)については出土遺物に記載する。本母岩は単体資料で搬入し、刃部再生を繰り返した後に廃棄している。

本母岩の出土位置については、母岩別出土状況に反映できなかったことから、器種別出土状況図で確認して頂きたい。

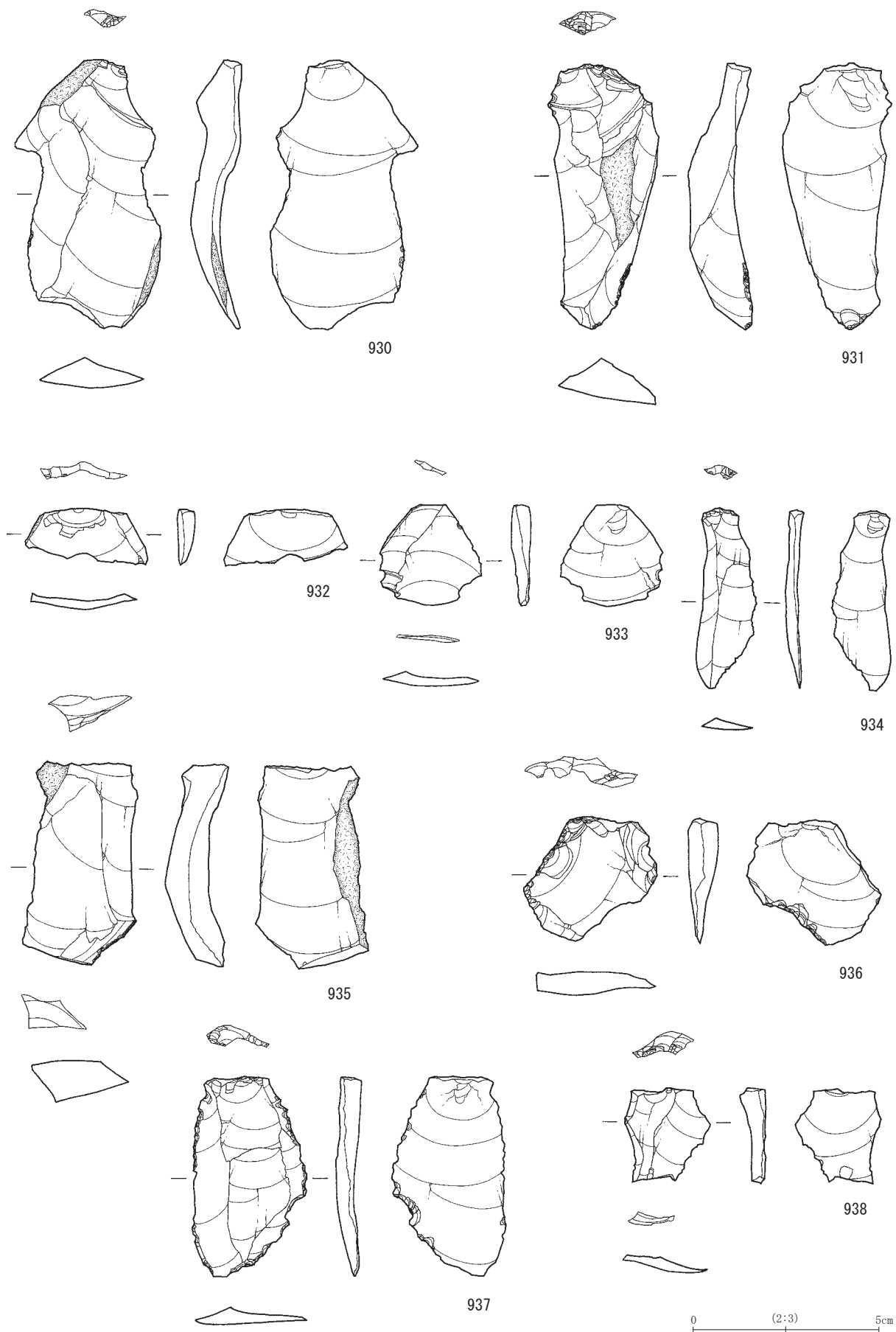
rsh1：総点数32点、総重量174.19g。二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップで構成される資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、黒褐・灰褐色が点ないし層状に入る。礫面は暗赤褐色を呈する。石質は緻密でなめらかである。

接合点数は18点あり、二次加工を有する剥片、石刃、剥片、チップからなる。剥離工程は<<932→930→<931><935→933>→934→937→938→936>><<(939+940)→942→941>>→944→<945→943><946→947>である(<○>や<<○>>同士の前後関係は不明)。本個体は石核整形から目的剥片剥離の過程に伴う資料である。打面再生を介在させながら、上設打面から石核整形と目的剥片である縦長剥片を剥離している。作業面は弧状に展開されており、対となる裏面に礫面が残置している。接合個体の背面剥離面構成からはすべて同一方向であり、本工程と同じ剥離工程を経ていたと捉えられる。

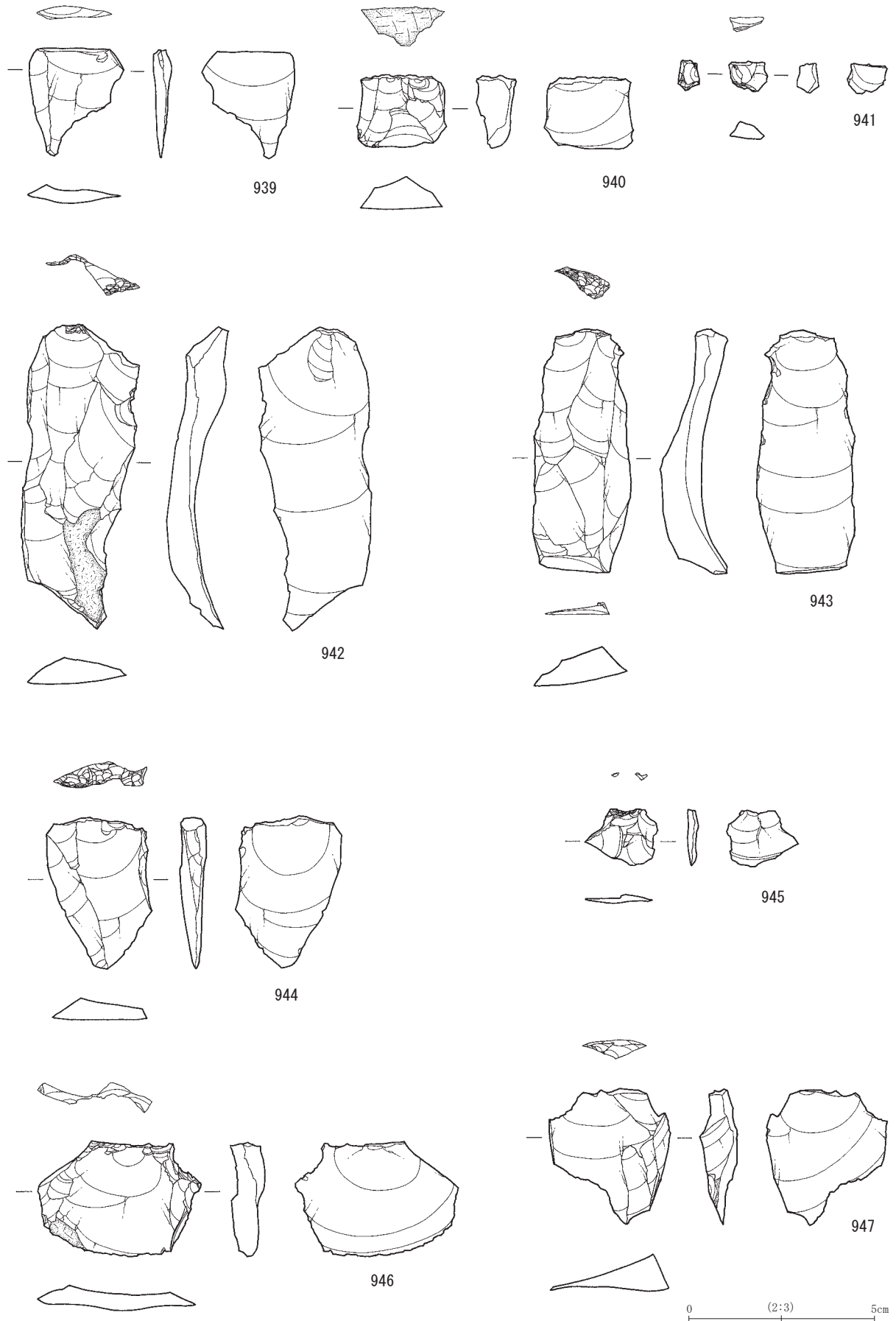
rh1a



第313図 石器集中区20出土遺物 (21)



第314図 石器集中区20出土遺物 (22)



第315図 石器集中区18出土遺物 (23)

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

[備考] 本集中区と同様の神山型彫刻刀形石器を主体に組成し、母岩別資料において接合関係にある石器集中区17は約30m西に位置する。

テフラ分析を西壁において行っており、Ⅲb層からAs-YPが検出されている。黒曜石産地同定からは、男鹿系と得られている。また出土炭化材の年代測定を行っているが、帰属年代を示すような成果は得られていない。これらについては第2分冊附編に記載している。

石器集中区21

[位置・出土状況] V A 99・100、V B 9・10グリッドに位置しており、9×8mの範囲に収まる。段丘先端へと緩やかに下る標高342.2～342.4mの斜面上で検出している。

[分布状況] V A 99とV B 9グリッドの境を中心に分布しており、東西方向へ広がる。やや斜面下の東側へ流出しているものと考えられる。集中区に見られる空白部分は後世の削平によるものである。

[出土層位] Ⅱ層からⅢb層で出土しており、Ⅲb層上面(標高約342.3m)に出土ピークがある。最大で約45cmの高低差を有する。Ⅲb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は240点である。

石器組成は尖頭器6点、スクレイパー3点、楔形石器5点、二次加工を有する剥片6点、剥片133点、チップ66点、細石刃7点、石核1点、敲石1点、磨石1点、礫1点、礫片10点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、黒曜石、瑪瑙などからなる

[出土遺物] 948～951は尖頭器。948・949は周縁加工、950は片面加工、951は半両面加工であり、加工の異なるものが認められる。これらはいずれも欠損している。948や949は素材腹面を残しており、素材は縦長剥片と思われる。縁辺には細かな調整が認められる。950は残存する基部が逆三角形に尖る。951は欠損しているが、残存状況から大型に近い規模であったと想定される。952・953はスクレイパー。953は欠損後に加工を施している。954～959は細石刃。全て欠損しており、長さは2.5cm以下である。幅は5.5～8.6mmの範囲に収まり、6～7mmが主体である。961は有舌尖頭器。本集中区とは異なる時期のものと考えられる。962は敲石。石器材料は949～951・958・961は頁岩、948・952～955・959・960は珪質頁岩、956・957は黒曜石、962は安山岩である。

上記の石器から15母岩を確認できており、各母岩の概要を以下にまとめていく。非接合資料が多く石器製作を把握し難い状況はあるが、複数の母岩において尖頭器製作に伴う剥片が認められている。sh124：総点数18点、総重量301.26g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とし、灰白色が斑に入る。礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかだが、僅かにざらつく。摂理が部分的に発達している。礫面を有する大型の剥片が多く認められる。

本母岩は小～中型の亜角礫を素材としており、石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

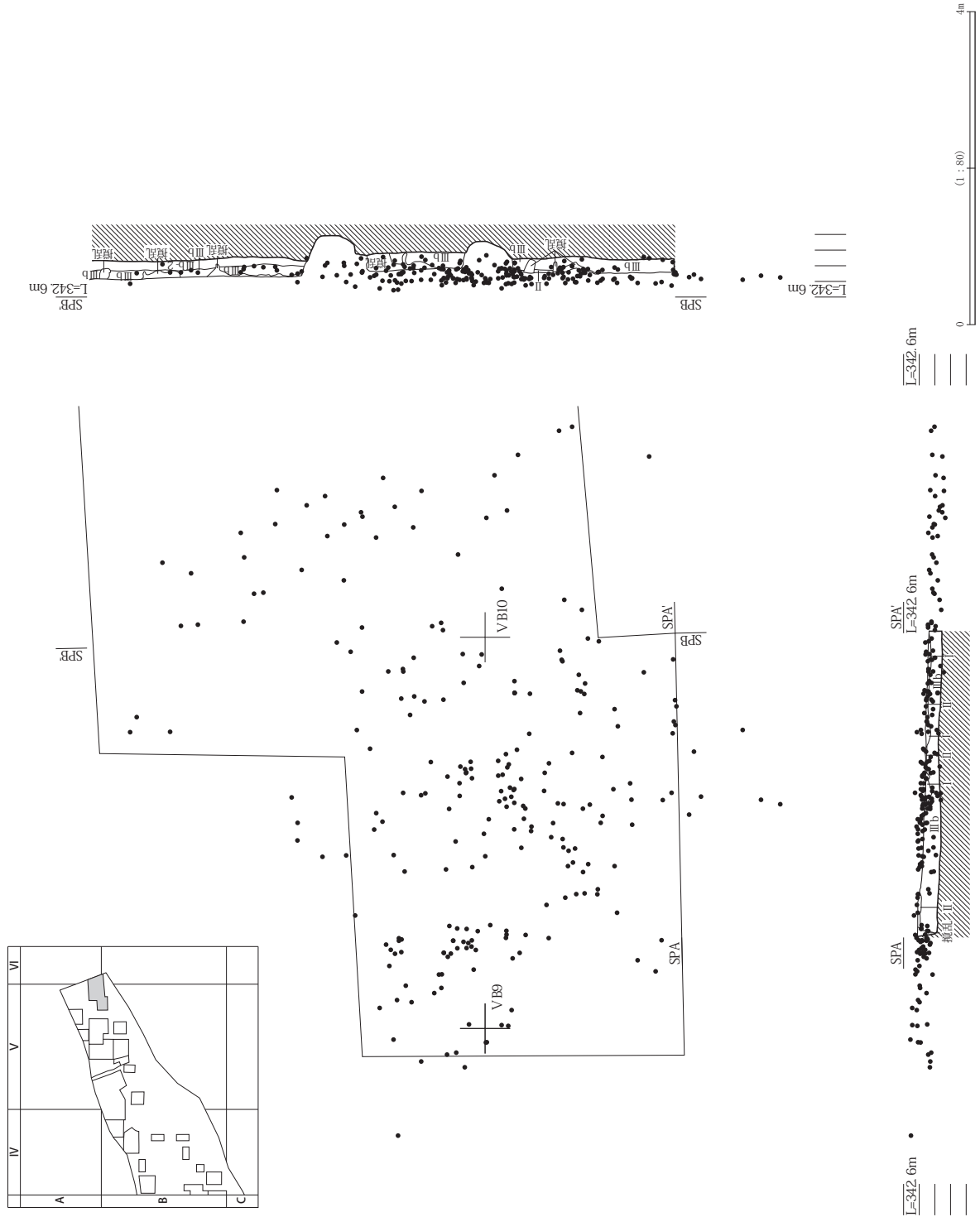
sh129：総点数2点、総重量3.96g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

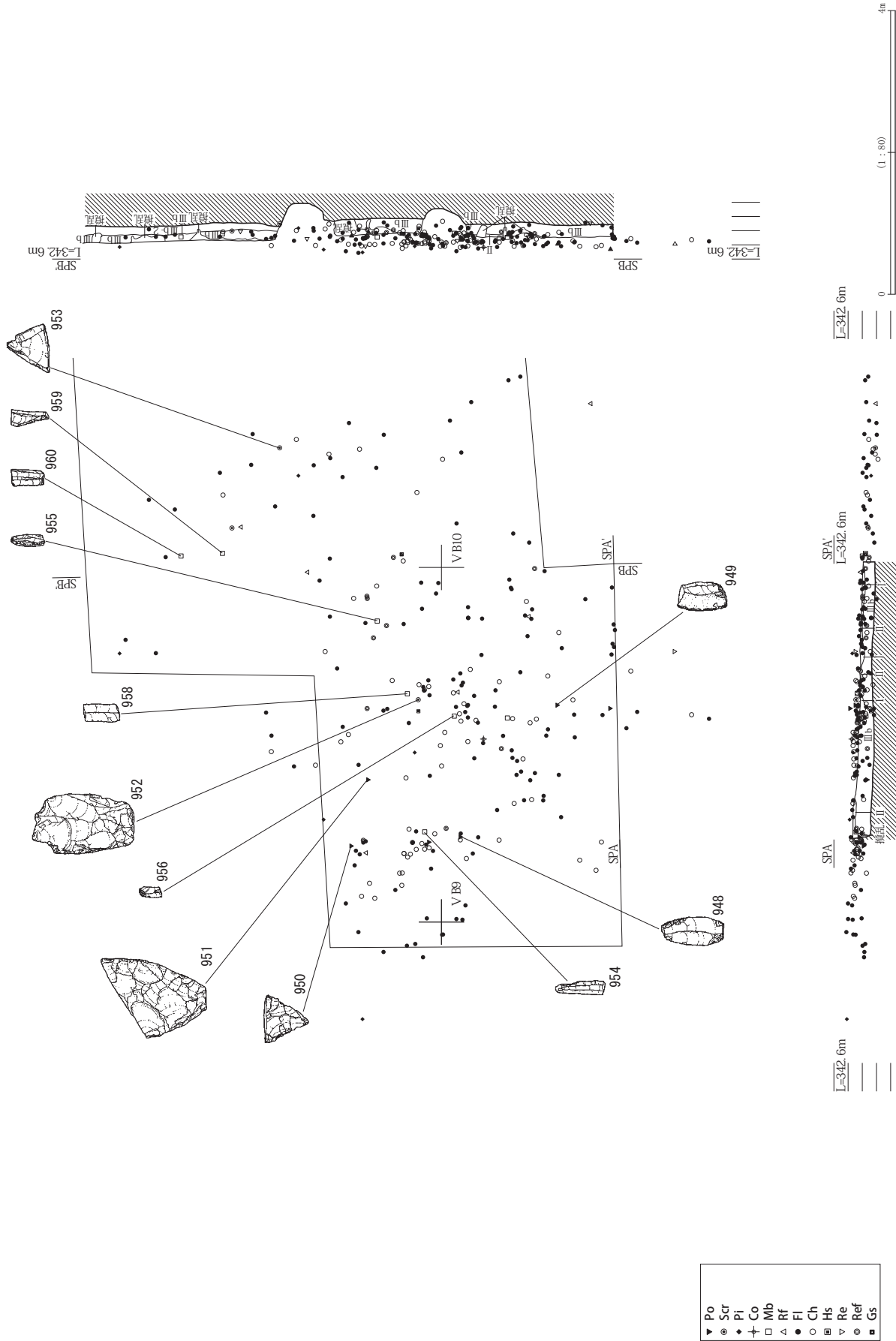
sh131：総点数4点、総重量28.48g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は暗灰黄を基調とし、黒褐色の点が入る。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

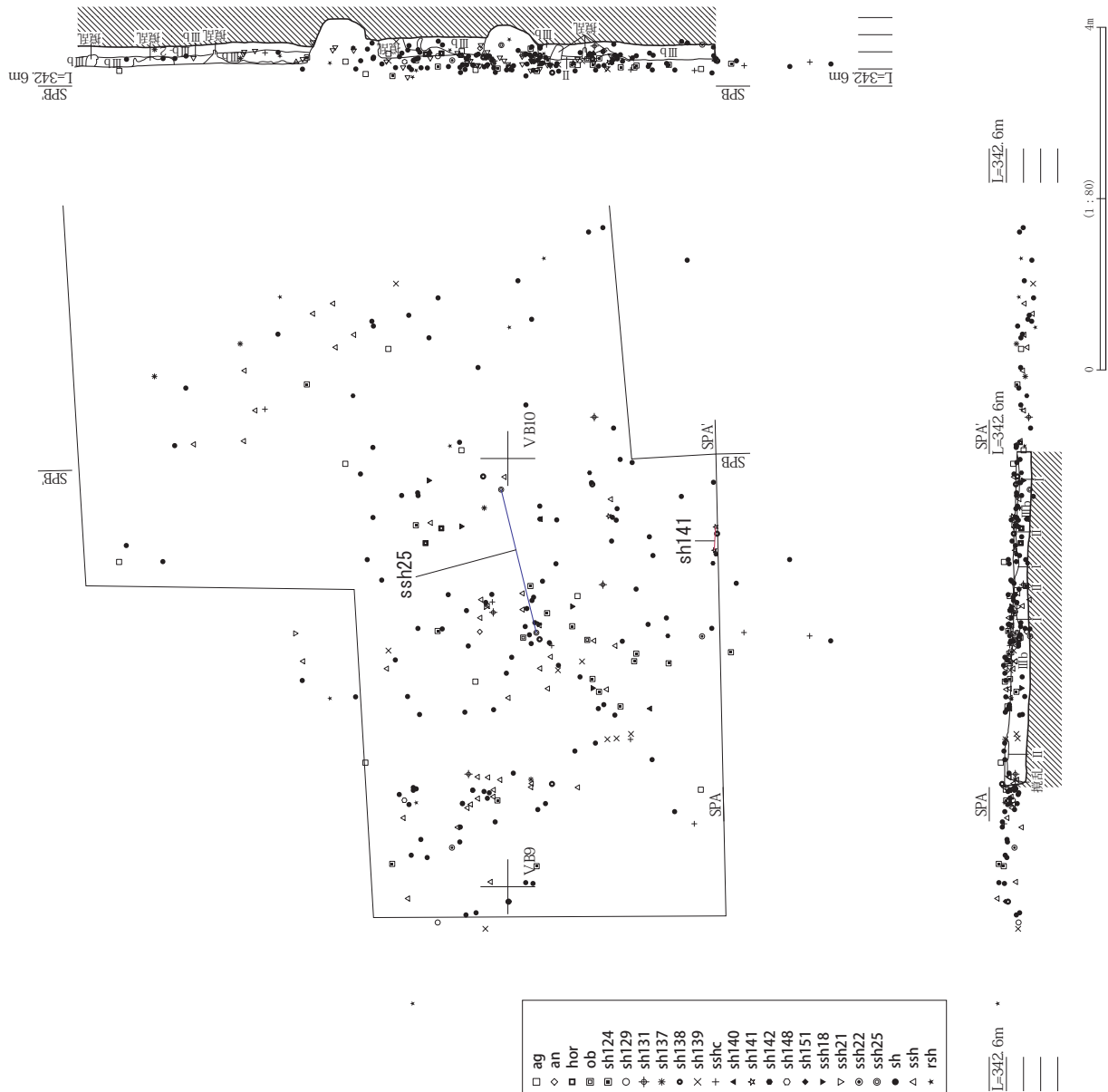
sh137：総点数5点、総重量57.41g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密だが、ややざらつく。



第316図 石器集中区21石器出土状況図



第317図 石器集中区21器種別出土状況図



第318図 石器集中区21母岩別出土状況図

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh138：総点数7点、総重量19.15g。尖頭器と剥片で構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とし、礫面にはぶい黄橙色を呈する。石質は緻密だが、ややざらつく。

尖頭器(998)は本集中区外から出土しているため、400頁に記載している。縦長剥片を素材としている。本集中区で見られる周縁加工が施された尖頭器である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh139：総点数9点、総重量9.5g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質は緻密でなめらかだが、部分的にざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh140：総点数2点、総重量12.15g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とし、礫面も同様の色調を呈する。石質は緻密でなめらかである。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh141：総点数3点、総重量12.83g。剥片で構成される資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつくが、なめらかな部分もある。

接合個体は剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh142：総点数6点、総重量21.25g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰白色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh148：総点数2点、総重量7.22g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は黒色を基調とし、部分的に灰色が入る。石質は緻密でなめらかである。

接合個体は剥片が2つに折れたものが接合した資料である。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

sh151：総点数2点、総重量6.02g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質は緻密でなめらかである。

剥片の半数は尖頭器製作に伴う調整剥片である。本母岩は尖頭器調整後に本体を搬出している。

ssh18：総点数6点、総重量4.11g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で僅かに光沢をもち、なめらかである。

剥片の半数は尖頭器製作に伴う調整剥片である。本母岩は尖頭器調整後に本体を搬出している。

ssh21：総点数3点、総重量2.64g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黒色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

剥片の半数は尖頭器製作に伴う調整剥片である。本母岩は尖頭器調整後に本体を搬出している。

ssh22：総点数2点、総重量0.93g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は黄灰色を基調とし、灰白色が部分的に入る。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

剥片は尖頭器製作に伴う調整剥片である。本母岩は尖頭器調整後に本体を搬出している。

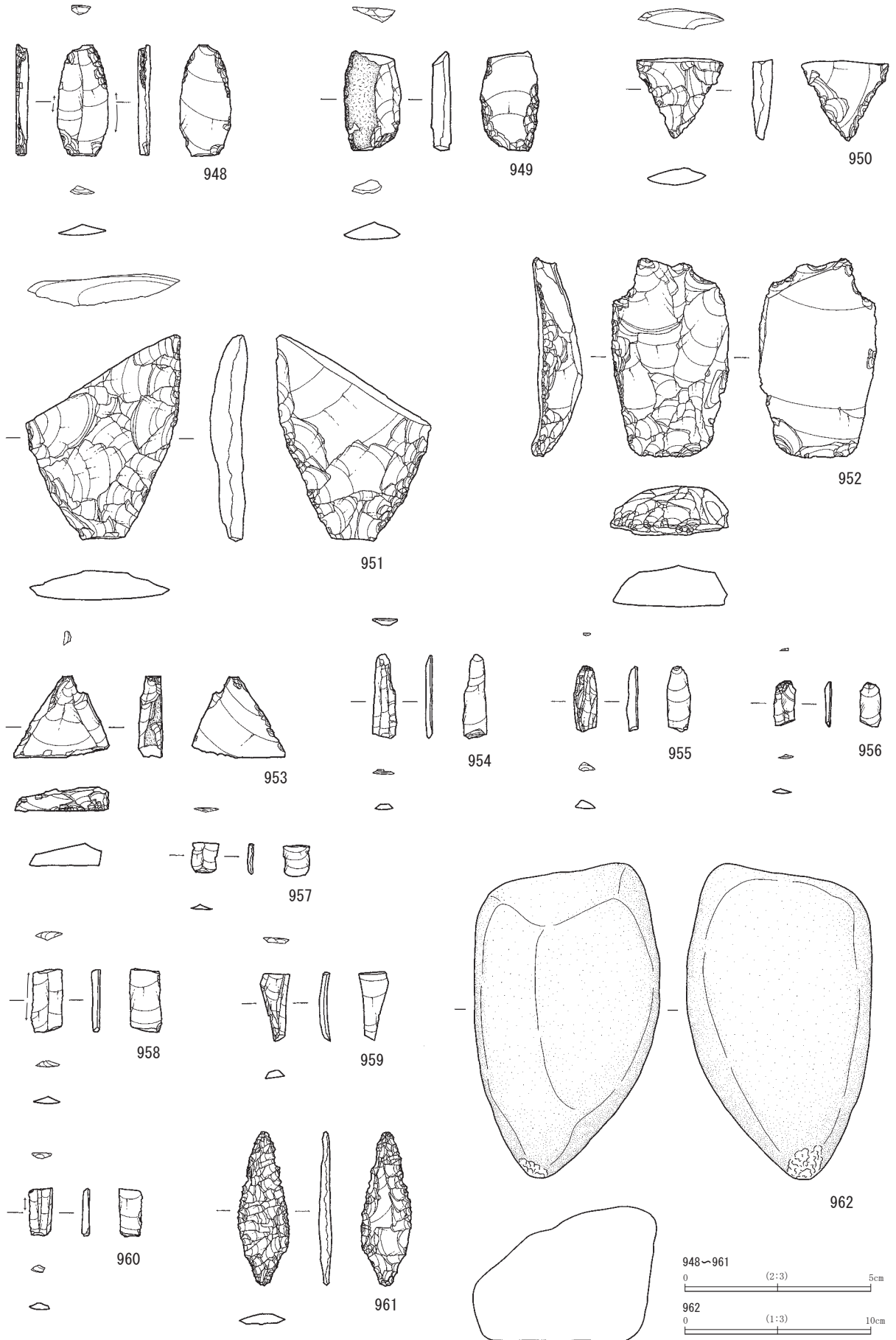
ssh25：総点数2点、総重量12.62g。剥片で構成される接合資料である。剥離面は褐灰色を基調とする。石質は緻密で光沢をもち、なめらかである。

接合個体は石核整形から小型剥片剥離の過程に伴う資料である。

本母岩は小型の石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

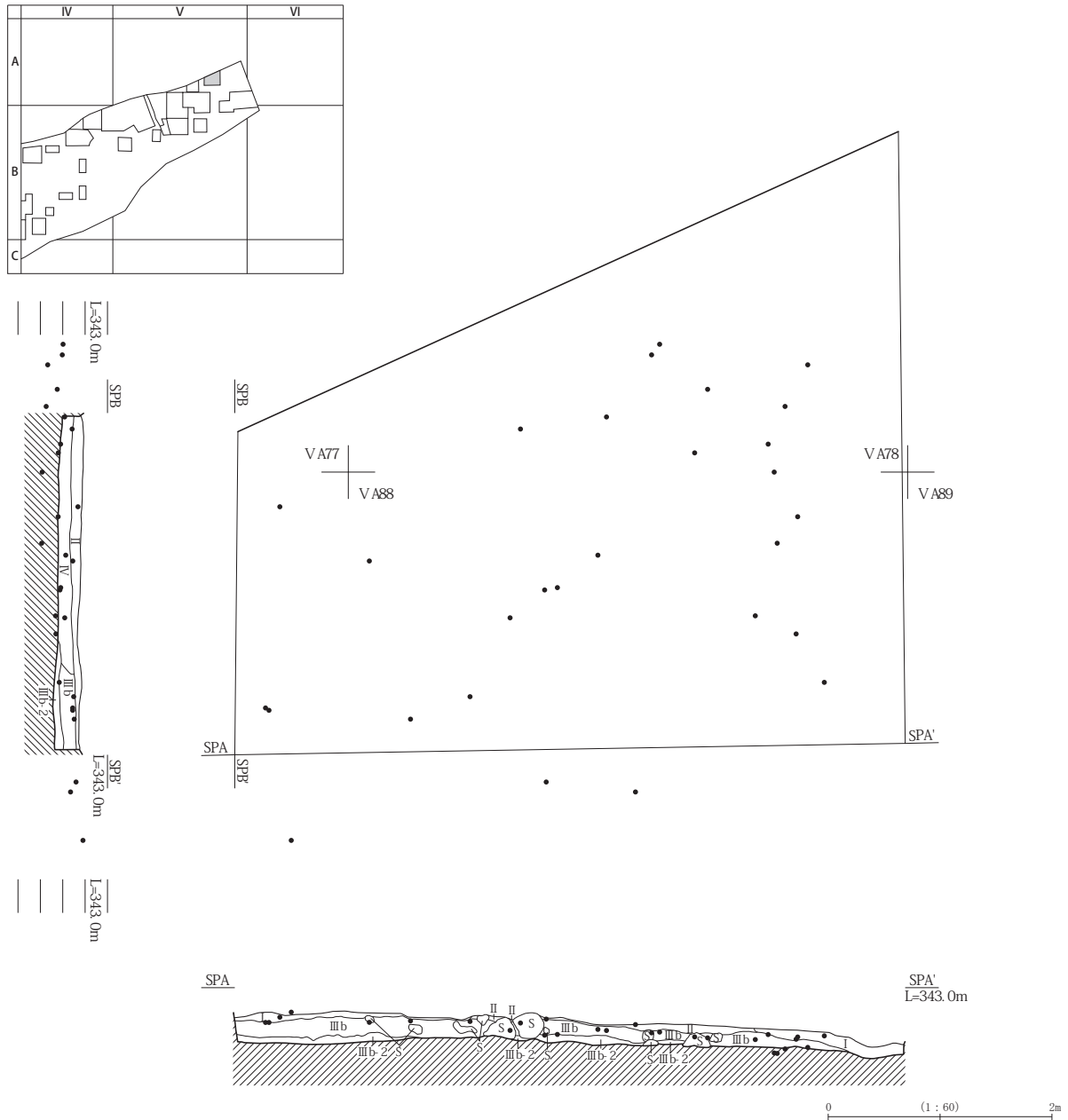
[備考] 本集中区のように尖頭器と細石刃が伴出する石器組成は他に認められない。このことについては、平面及び断面において分離できないことから、ここでは一括りにして扱っている。

テフラ分析をⅢb層からAs-YPが検出されている。これらについては第2分冊附編に記載している。



第319図 石器集中区21出土遺物

2 旧石器時代



第320図 石器集中区22石器出土状況図

石器集中区22

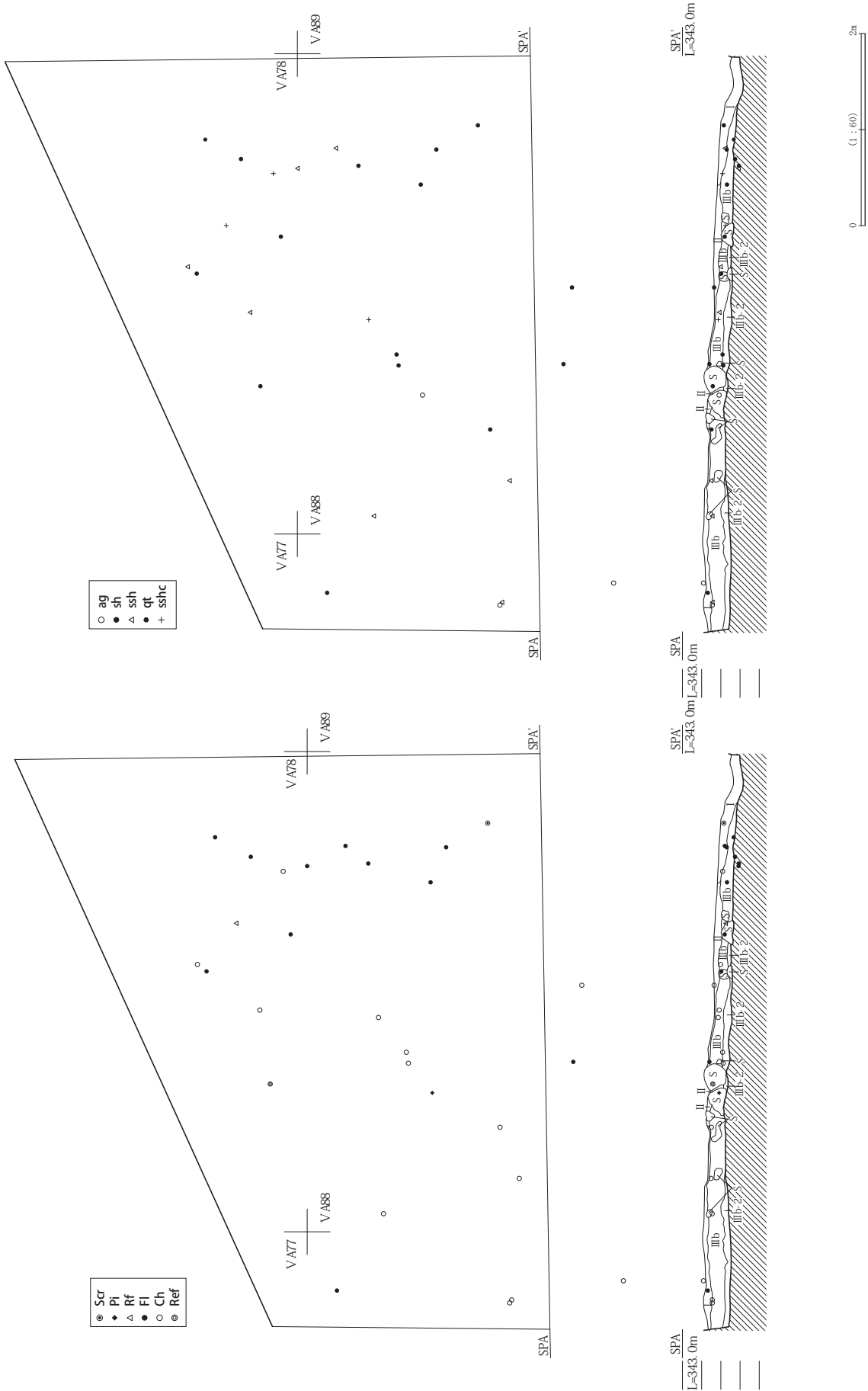
[位置・出土状況] V A78・88グリッドに位置しており、6×4 mの範囲に収まる。段丘北側に形成された標高342.6～342.8mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] V A78・88グリッドの境を中心に散漫的に分布しており、北東方向へ広がる。やや斜面下の北側へ流出しているものと考えられる。

[出土層位] II層からIII b層で出土しており、III b層上面付近に出土ピークがある。最大で約35cmの高低差を有する。III b層堆積以降に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は28点である。

石器組成はスクレイパー 1 点、楔形石器 1 点、二次加工を有する剥片 1 点、剥片11点、チップ13点、礫片 1 点からなる。



第321図 石器集中区22器種・母岩別出土状況図

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、瑪瑙、石英からなる。

[備考] 石器組成からは石器群を判別できないことからその様相は判然としないが、形成時期から本遺跡の中でも新しい時期に位置付けられる。

石器集中区23

[位置・出土状況] VB5・6・15・16グリッドに位置しており、10×7mの範囲に収まる。段丘北側に形成された緩やかに下る標高約343.1～343.4mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] VB5・15グリッドを中心に散漫的に分布しており、南北方向へ広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層中部(標高約343.0m)に出土ピークがある。最大で約55cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 総点数は173点である。

石器組成は彫刻刀形石器1点、尖頭器1点、スクレイパー2点、楔形石器3点、二次加工を有する剥片4点、石刃2点、剥片81点、チップ73点、石核2点、台石1点、礫片3点からなる。

石器材料組成は頁岩を主体に、珪質頁岩、玉髓質頁岩、赤色頁岩、黒曜石、瑪瑙、凝灰岩、石英、デイスaitからなる。

[出土遺物] 963は彫刻刀形石器。右側縁に調整が施された後に、左肩に彫刻刀面を2面作出している。964はスクレイパー。折損した剥片の左側縁に加工を施している。965は台石。石器材料は963・964は頁岩、965はデイスaitである。

上記の石器から14母岩を確認しており、各母岩の概要を以下にまとめていく。このうち3母岩は本集中区に主体を有するが、残りの11母岩は石器集中区18・19に跨っている。

sh154：総点数2点、総重量0.9g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

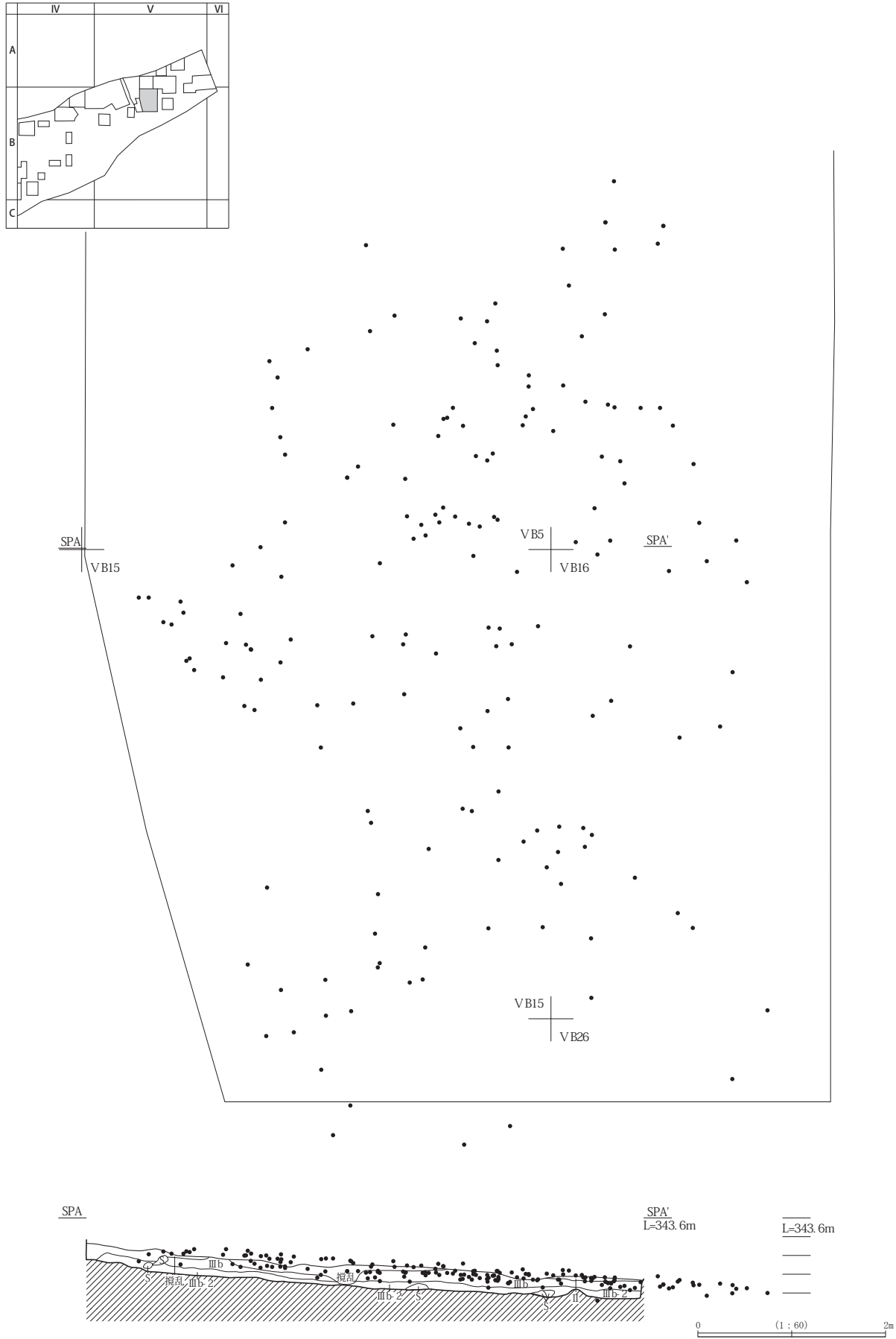
sh155：総点数2点、総重量2.43g。剥片とチップで構成される非接合資料である。剥離面は灰色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

本母岩は石核で搬入、剥片剥離後に石核を搬出している。

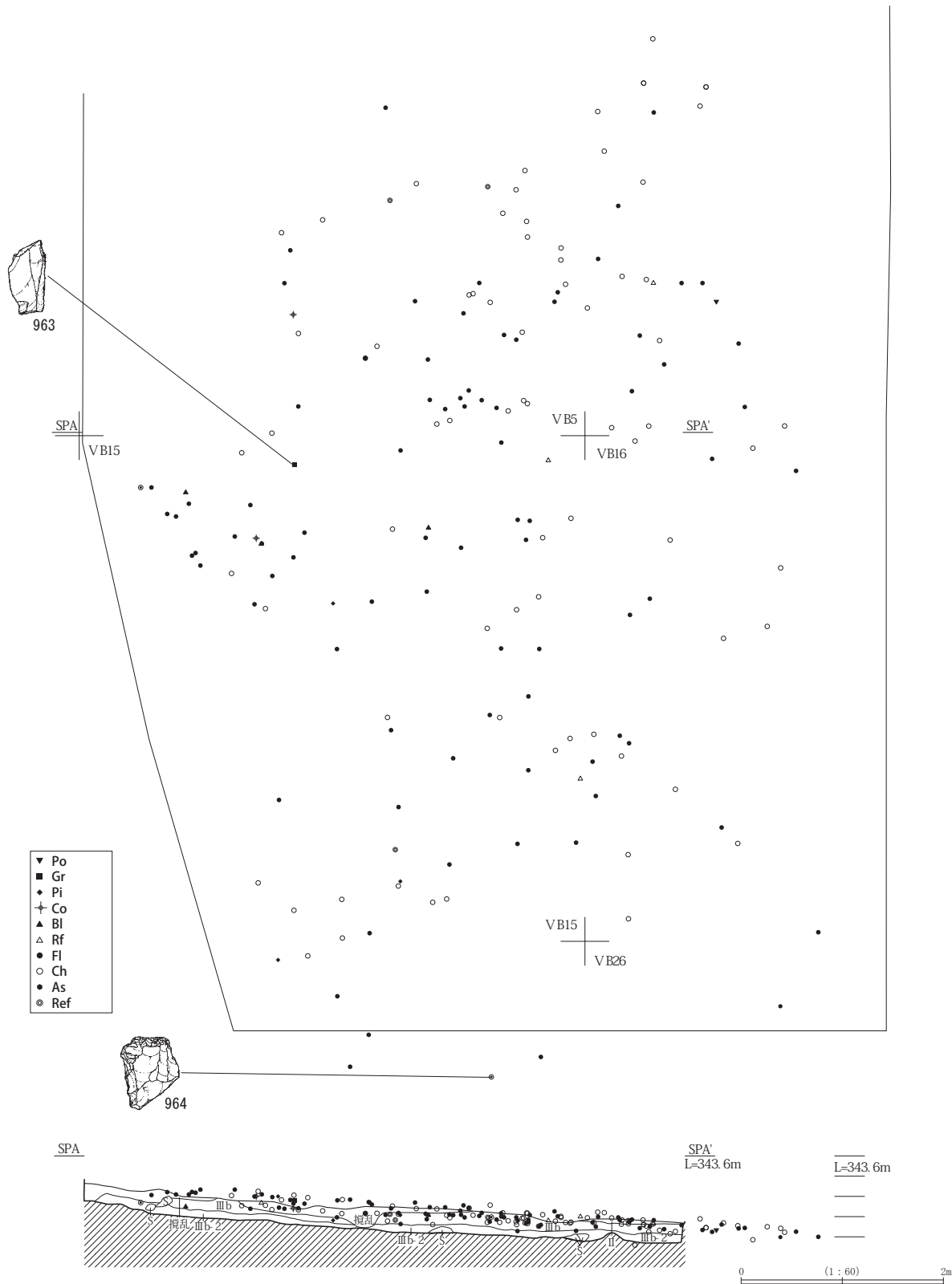
sh158：総点数4点、総重量4.76g。剥片で構成される非接合資料である。剥離面は灰黄色を基調とする。石質はやや粗粒でざらつく。

剥片の半数は尖頭器製作に伴う調整剥片である。本母岩は尖頭器調整後に本体を搬出している。

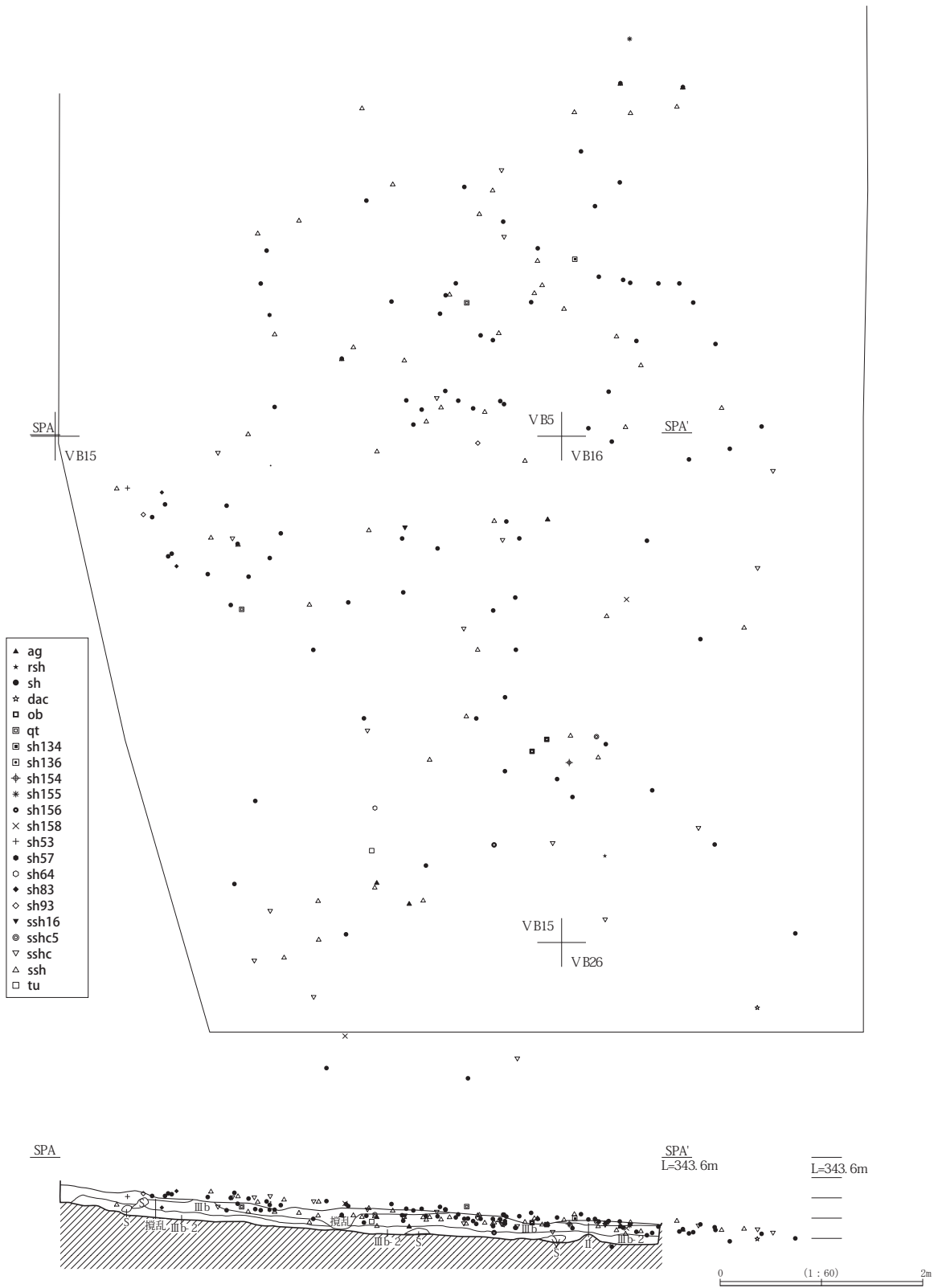
[備考] 本集中区は、母岩の共有及び接合関係が認められる石器集中区18・19に隣接して形成されている。



第322図 石器集中区23石器出土状況図



第323図 石器集中区23器種別出土状況図



第324図 石器集中区23母岩別出土状況図

石器集中区24

[位置・出土状況] V A95グリッドに位置しており、6×2 mの範囲に収まる。段丘北側に形成された標高約343.2～6mの自然堤防上で検出している。

[分布状況] V A95グリッドを中心に散漫的に分布しており、東西方向に広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層中に出土ピークがある。最大で約40cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 出土総点数は23点である。

石器組成はナイフ形石器1点、石刃1点、剥片13点、チップ7点、礫片1点からなる。

石器材料組成は頁岩、珪質頁岩、玉髓質頁岩からなる。

[出土遺物] 966は二側縁加工ナイフ形石器。右側縁を大きく加工しているため、素材形状は不明である。石器材料は珪質頁岩である。

確認できた母岩別資料は石器集中区18に主体があることから、概要はそちらに記載している。

[備考] 本集中区は、母岩の共有が認められる石器集中区18に隣接して形成されている。

石器集中区25

[位置・出土状況] III B70・IV B61グリッドに位置しており、7.5×4 mの範囲に収まる。自然堤防の南側に形成された緩やかに下る標高約345.5～345.7mの斜面上で検出している。

[分布状況] III B70・IV B61グリッドの境を中心に散漫的に分布しており、東西方向に広がる。

[出土層位] II層からIIIb層で出土しており、IIIb層中部(標高約344.3m)に出土ピークがある。最大で40cmの高低差を有する。IIIb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 出土総点数は19点である。

石器組成は彫刻刀形石器2点、尖頭器1点、スクレイパー4点、二次加工を有する剥片2点、剥片9点、細石刃1点からなる

石器材料組成は珪質頁岩を主体に、頁岩からなる。

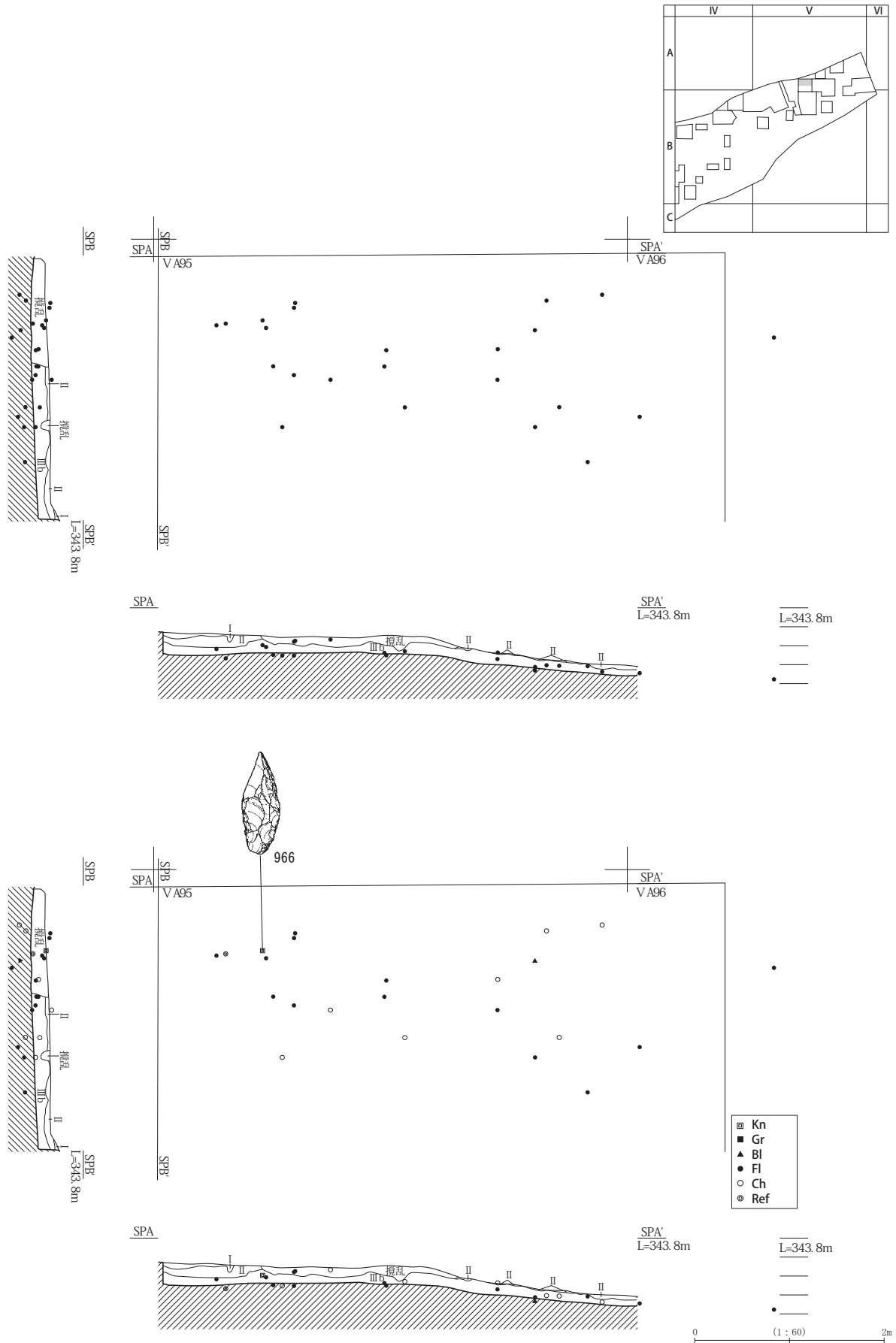
[出土遺物] 967・968は荒屋型彫刻刀形石器。967は、加工が周縁と基部裏面にまで及んでいる。左右の両肩に彫刻刀面を作出し、背面側には彫刻刀面からの細かい剥離が認められる。968は基部のみが残存しており、形状はやや尖る三角形である。基部には967と比べるとやや粗いが、裏面加工を伴う。969～972はスクレイパー。969～971は縦長剥片や石刃を素材とし、縁辺もしくは末端に加工を施している。973は細石刃。974は有舌尖頭器。身部のみが残存しており、斜行剥離が認められる。出土層位は他の石器と同じであるが、所属時期は大きく異なる。石器材料はすべて珪質頁岩である。968・970・971はssh3に属する。

上記の石器から1母岩を確認できており、各母岩の概要を以下にまとめておく。

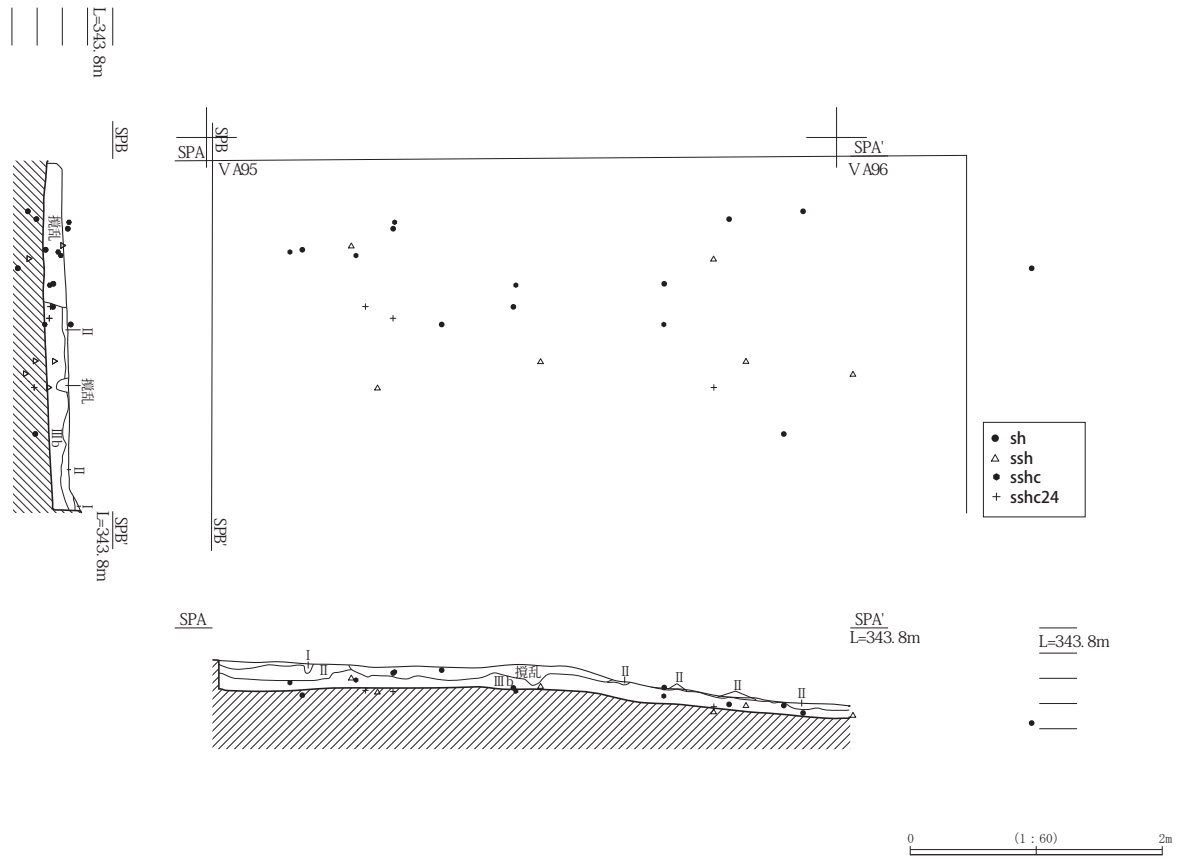
ssh3：総点数3点、総重量41.3g。彫刻刀形石器とスクレイパーで構成される非接合資料である。剥離面は黒褐～灰褐色を基調とする。石質は緻密で光沢をもちなめらかである。

彫刻刀形石器(968)とスクレイパー(970・971)については出土遺物に記載している。本母岩は単体で搬入、使用後に廃棄されたと考えられる。

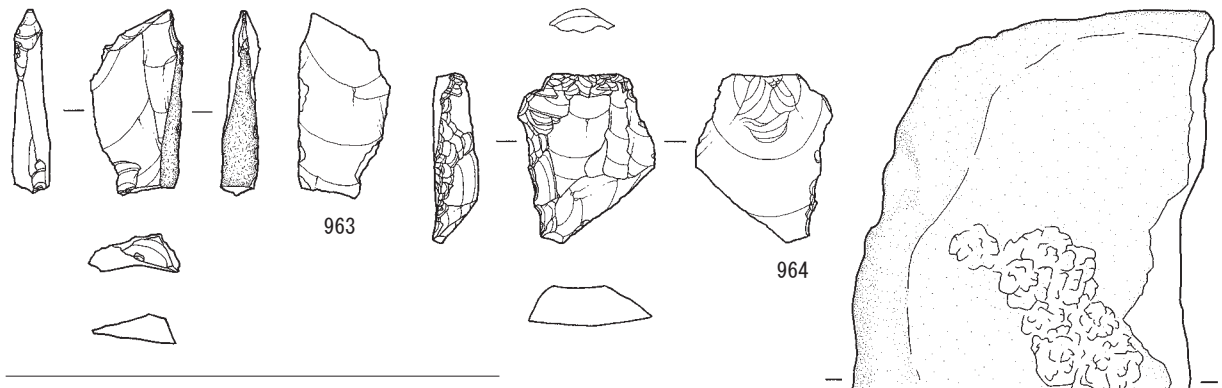
[備考] 本集中区は荒屋型彫刻刀形石器を組成する石器集中区であるが、同様の石器組成を示す石器集中区11は約30m西に位置している。



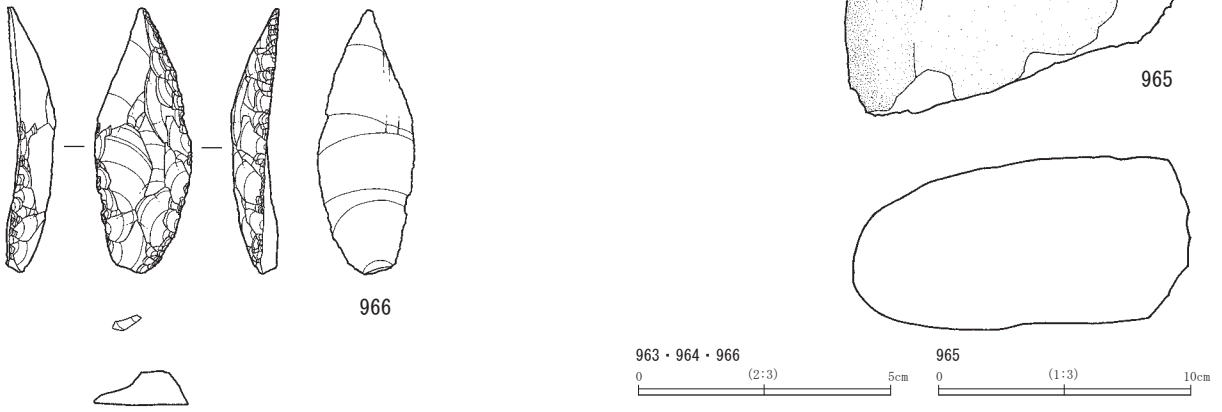
第325図 石器集中区24石器・器種別出土状況図



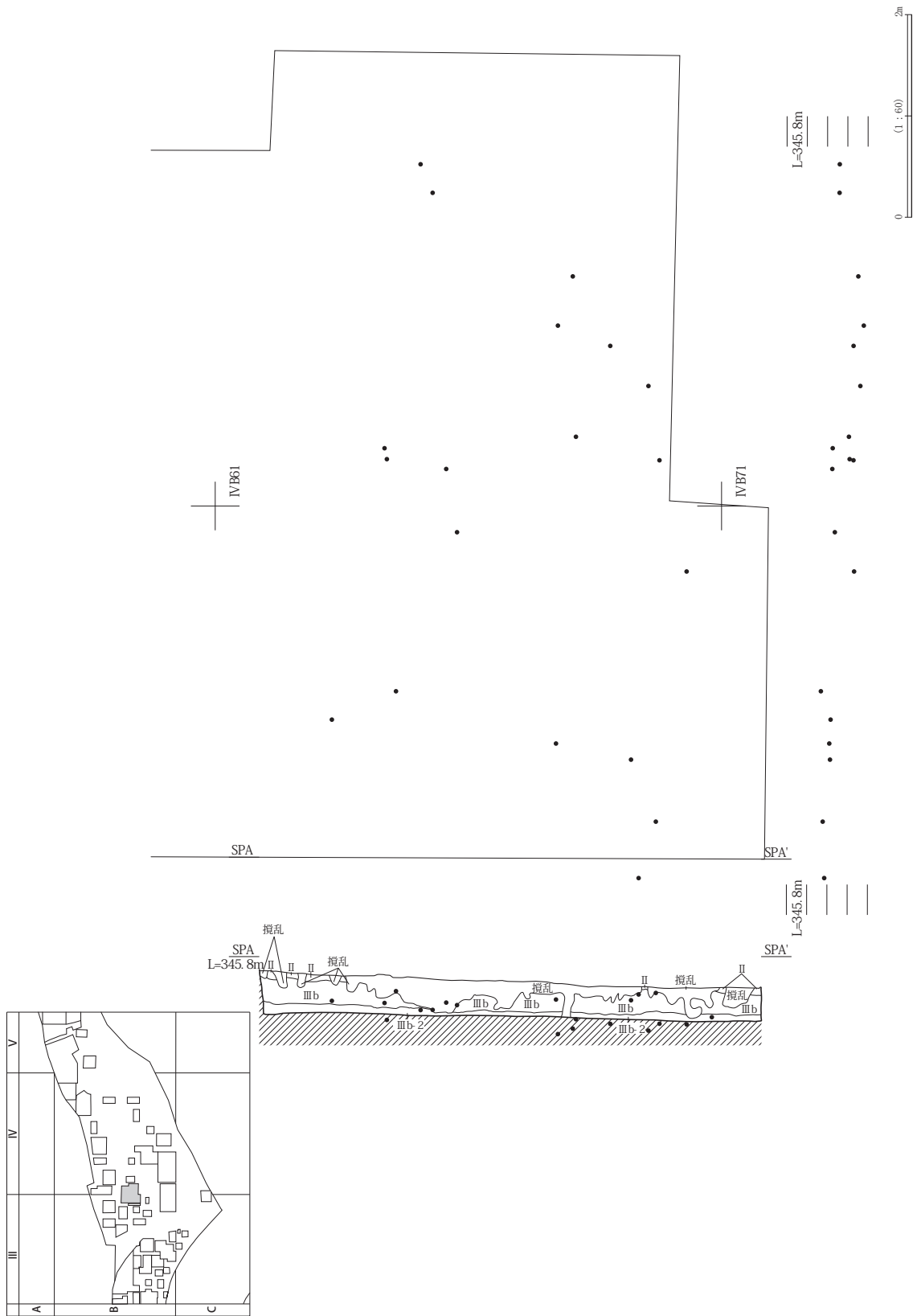
石器集中区 23



石器集中区 24

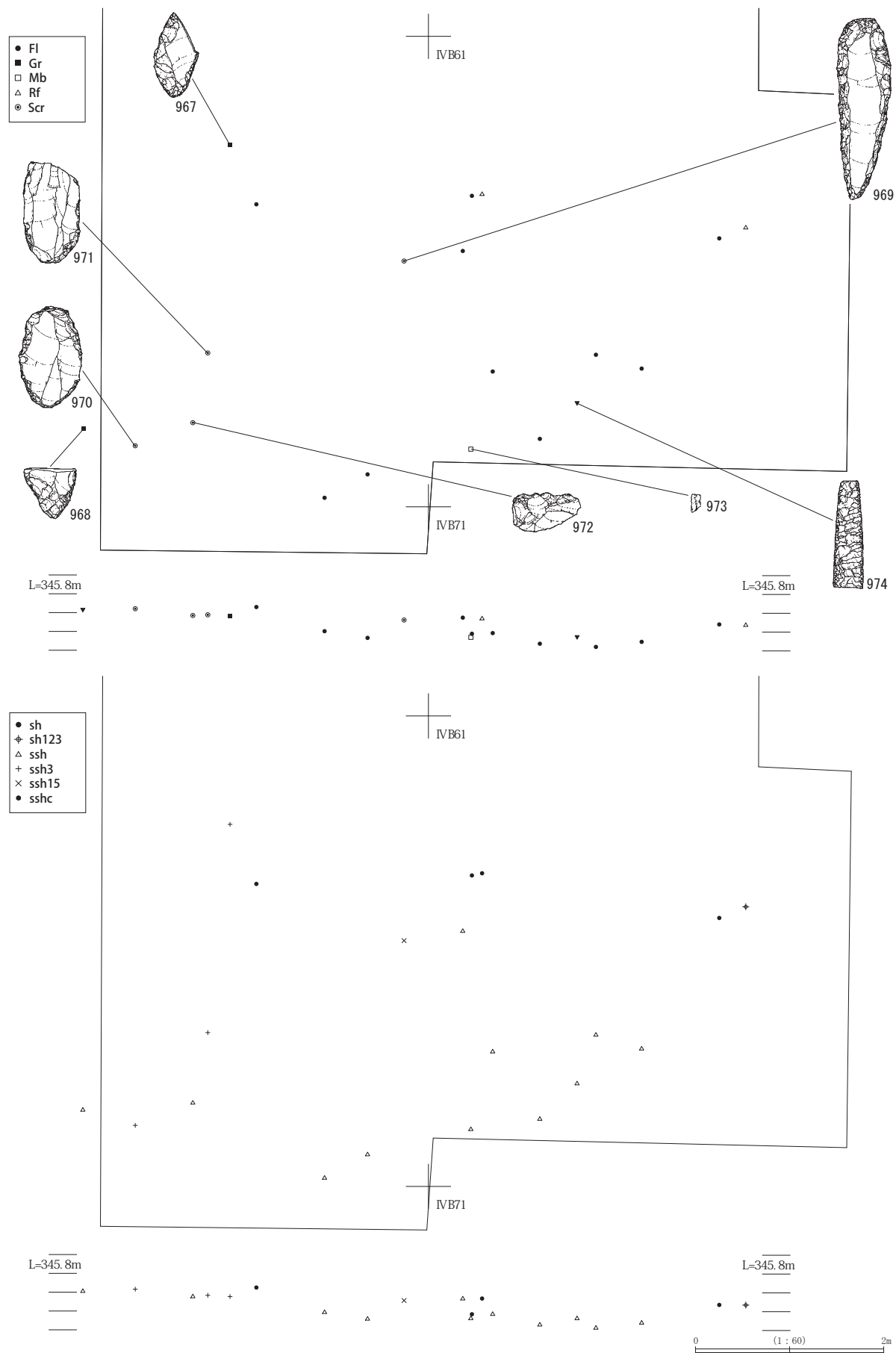


第326図 石器集中区24母岩別出土状況図・石器集中区23・24出土遺物

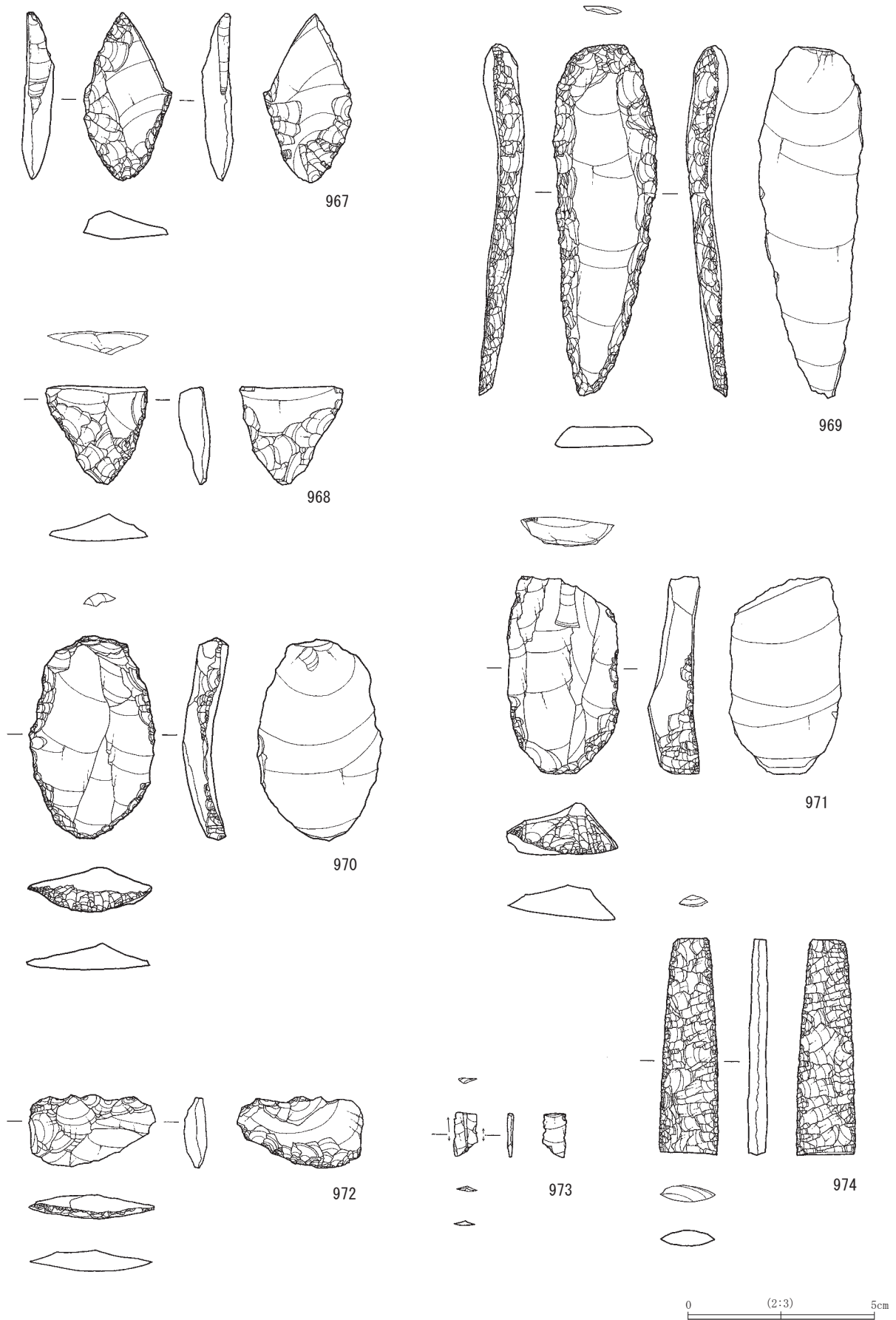


第327図 石器集中区25石器出土状況図

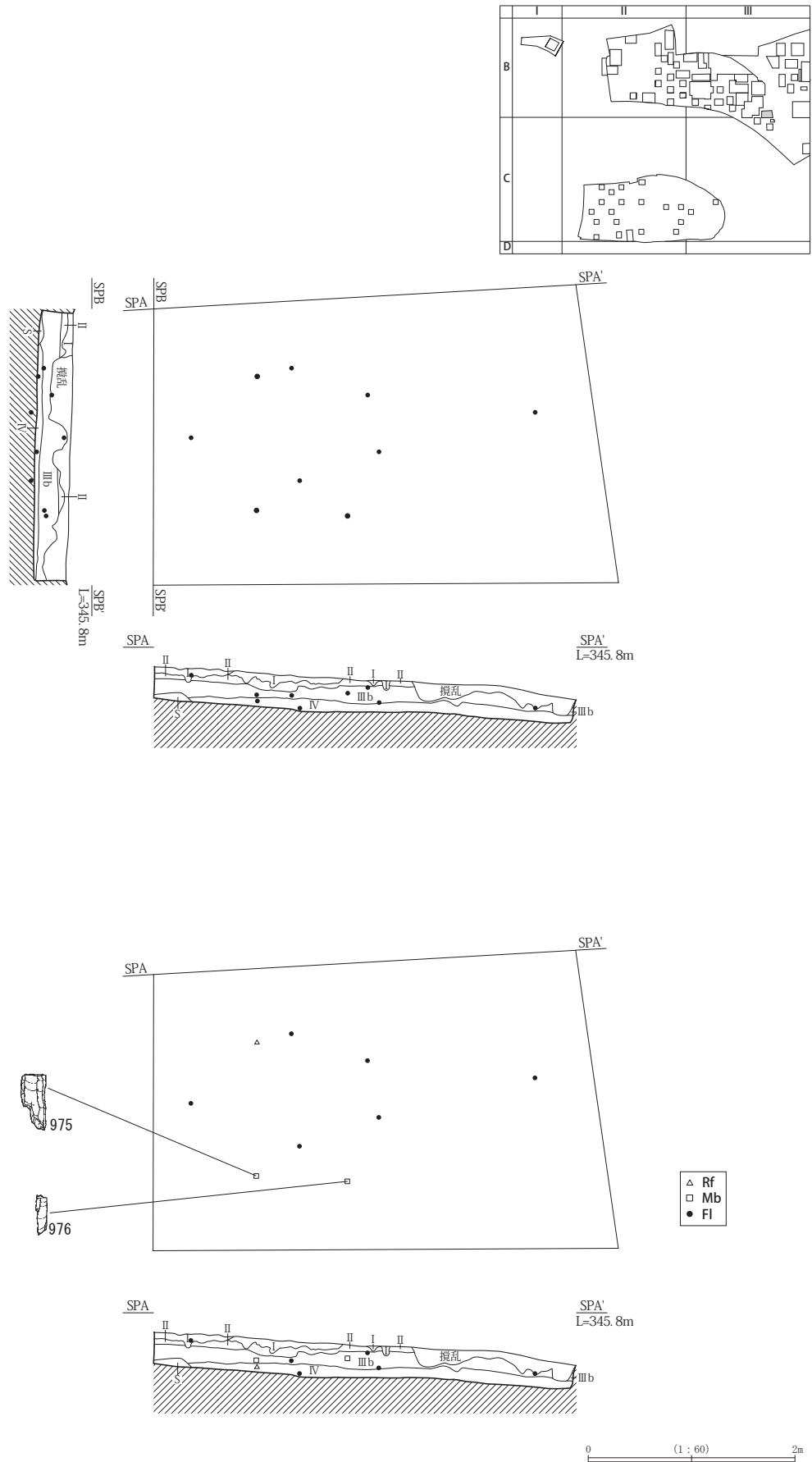
2 旧石器時代



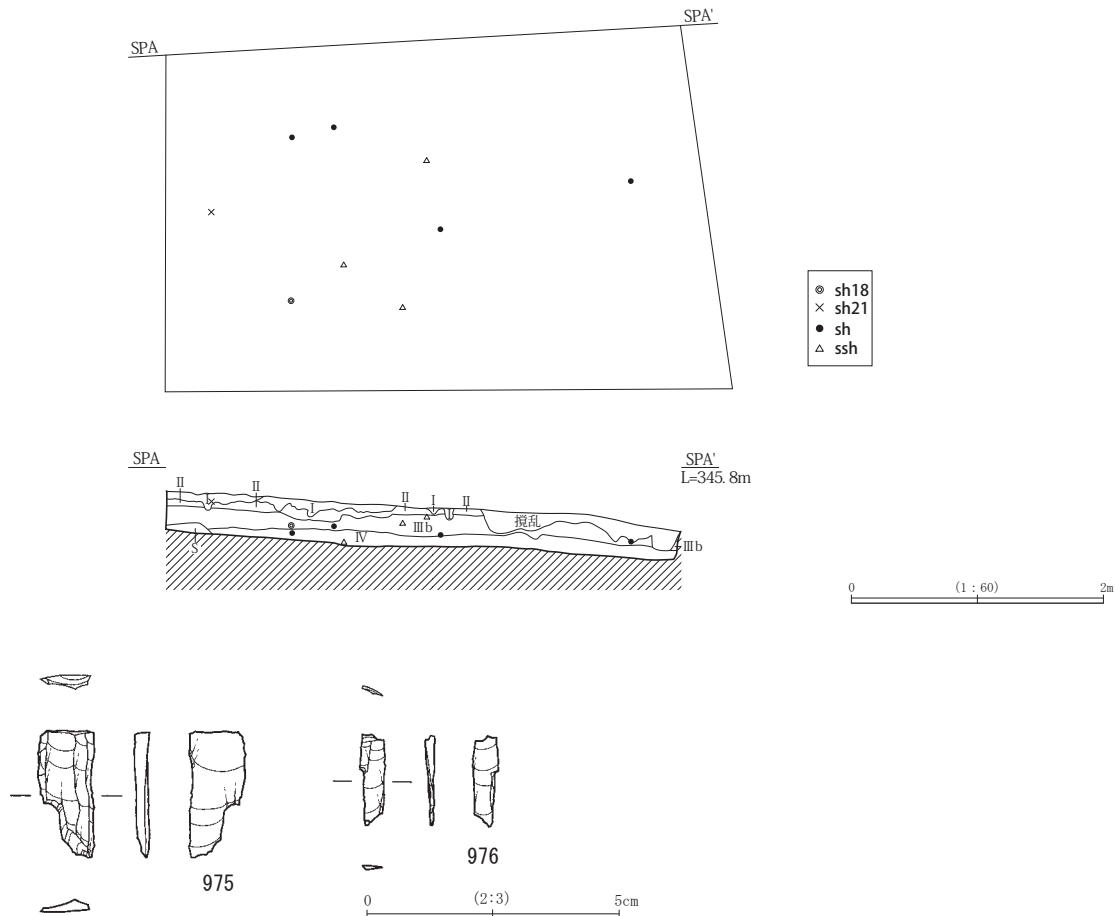
第328図 石器集中区25器種・母岩別出土状況図



第329図 石器集中区25出土遺物



第330図 石器集中区26石器・器種別出土状況図



第331図 石器集中区26母岩別出土状況図・出土遺物

石器集中区26

[位置・出土状況] Ⅲ B97グリッドに位置しており、3.5×3mの範囲に収まる。段丘内陸部から段丘縁辺部へと緩やかに上る標高約345.3～6mの斜面上で検出している。

[分布状況] Ⅲ B97グリッドを中心に散漫的に分布している。

[出土層位] Ⅱ層からⅢb層で出土しており、Ⅲb層中部(標高約345.3m)に出土ピークがある。最大で30cmの高低差を有する。Ⅲb層堆積中に形成されたものと考えられる。

[石器組成・石器材料組成] 出土総点数は9点である。

石器組成は二次加工を有する剥片1点、剥片6点、チップ1点、細石刃1点からなる。

石器材料組成は頁岩と珪質頁岩からなる。

[出土遺物] 975は剥片、976は細石刃である。975はsh18から剥離されている小型剥片である。この母岩別資料の主体は石器集中区8にある。石器材料は975は珪質頁岩、976は頁岩である。

[備考] 本集中区は細石刃や母岩別資料の存在から、石器集中区8などと同時期に形成された可能性がある。

石器集中区外出土石器

石器集中区外や攪乱からは数多くの石器が出土している。下記にはそれらを器種毎にまとめ、特筆すべき事項のみ記載していく。

977～988はナイフ形石器。二側縁加工、基部加工などが認められる。979・984～987などは石器集中区18に主体を有する母岩別資料に属するものである。この集中区では二側縁加工が多いなか基部+先端部加工である979は稀な例である。また、これらの石器材料は集中区において主体をなす黒曜石や玉髓質頁岩である。

989～1077は尖頭器。両面加工が主体で、半両面加工や周縁加工などが認められる。990は正面左上に槓状剥離のような剥離面が形成されている。この面は調整によって切られている。991・997の石器材料は黒曜石で、産地は男鹿系である。992・993は出土した柱穴の位置から、石器集中区14に属する可能性が高い。996は石器集中区9に主体を有するsh22に属する。997・999は石器集中区18に主体を有する母岩別資料に属するものである。

1002～1007は有茎尖頭器である。1002や1005は基部が尖り逆三角形形状である。1003は平面形状は類似するが、小型化している。前者が「中林型」、後者が「小瀬が沢型」に比定されるものと思われる。

1008～1011は彫刻刀形石器。1008・1009は「神山型」であり、前者には基部加工が認められている。1010・1011は「荒屋型」である。どちらも周縁に加工が施されているが、1010のみ基部裏面にまで加工が及んでいる。また、形状も異なり、前者はやや縦長であるのに対し、後者はやや丸み帯びている。素材腹面と背面の剥離方向は共に同じである。

1012～1013は両面加工石器。1012は末端部に細かな加工を施していることから、スクレイパーとして用いられたとも考えられる。1013は正面に細石刃剥離が認められていることから、細石刃核の作業面再生をした剥片を素材としたものと思われる。しかし、その剥片の両面に加工をしているが用途は不明である。

1014は石錐。本遺跡で1点のみの確認されている。細かい加工が施され、断面形状が菱形である。

1015～1033はスクレイパー。周縁に加工が施されたものが主体であり、石刃や縦長剥片を素材としている。1016のような形態のスクレイパーは荒屋型彫刻刀形石器を組成する集中区に認められる形態であるが、その他については所属不明と言わざるを得ない。ただし、この中でも、1018・1019・1026・1027などのように基部が尖る形状のものが含まれる。石器集中区2を参考にすると有舌尖頭器に組成する可能性がある。特に、1026・1027は規模が異なるものの、平面形・刃部形状・素材の用い方まで類似している。刃部再生の際にはステップフラクチャーを起こしつつも、頻繁に繰り返されていることが窺える。これらは他に比べやや新しい時期に位置づけられる。

1034～1037は二次加工を有する剥片。

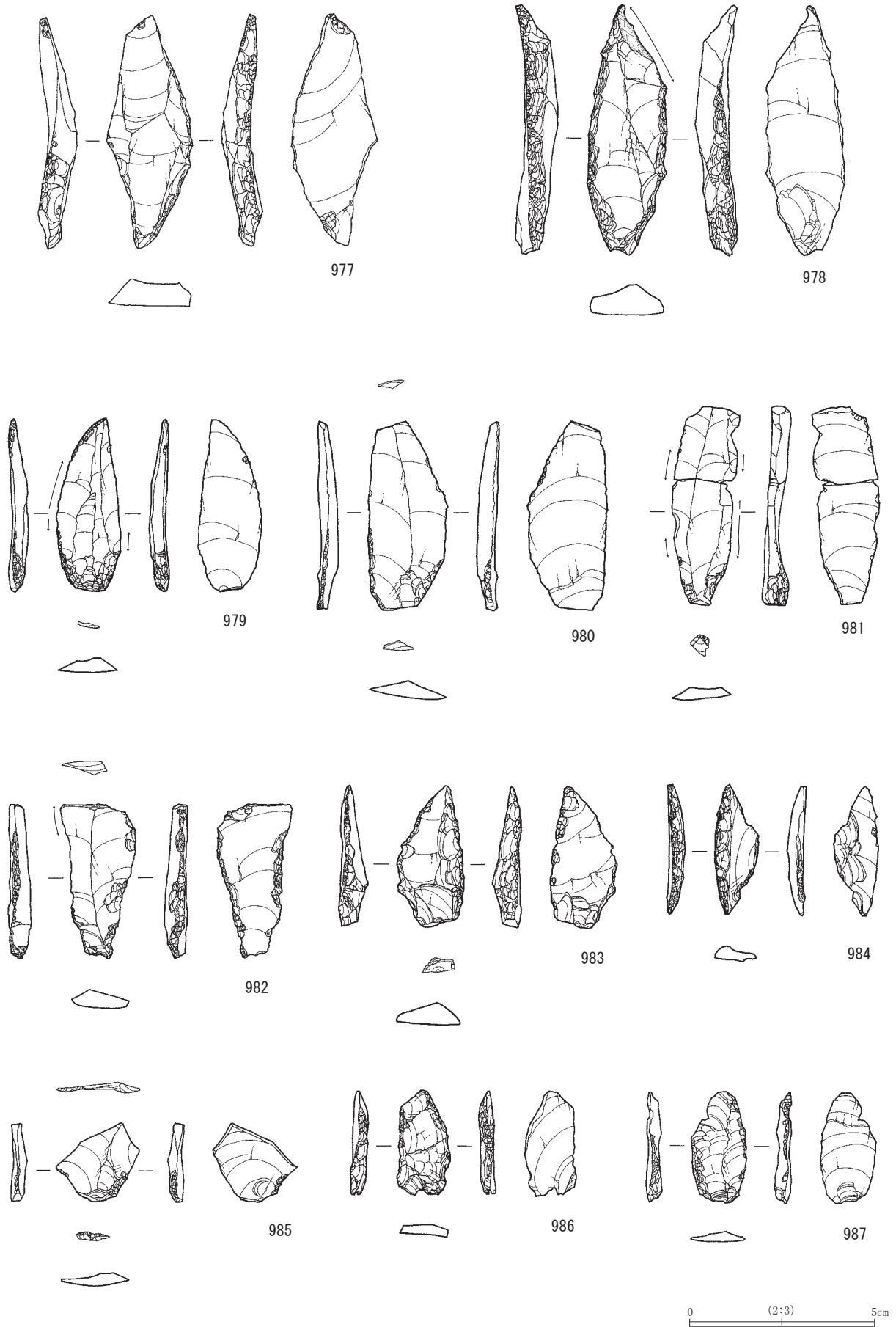
1038～1041は削片。1038は両面加工に伴うもので、縁辺が直線的であることから、尖頭器の槓状剥離によって作出されたものと考えられる。1040は彫刻刀形石器の削片。それ以外は不明である。

1042・1043は楔形石器。1044～1050は石刃。

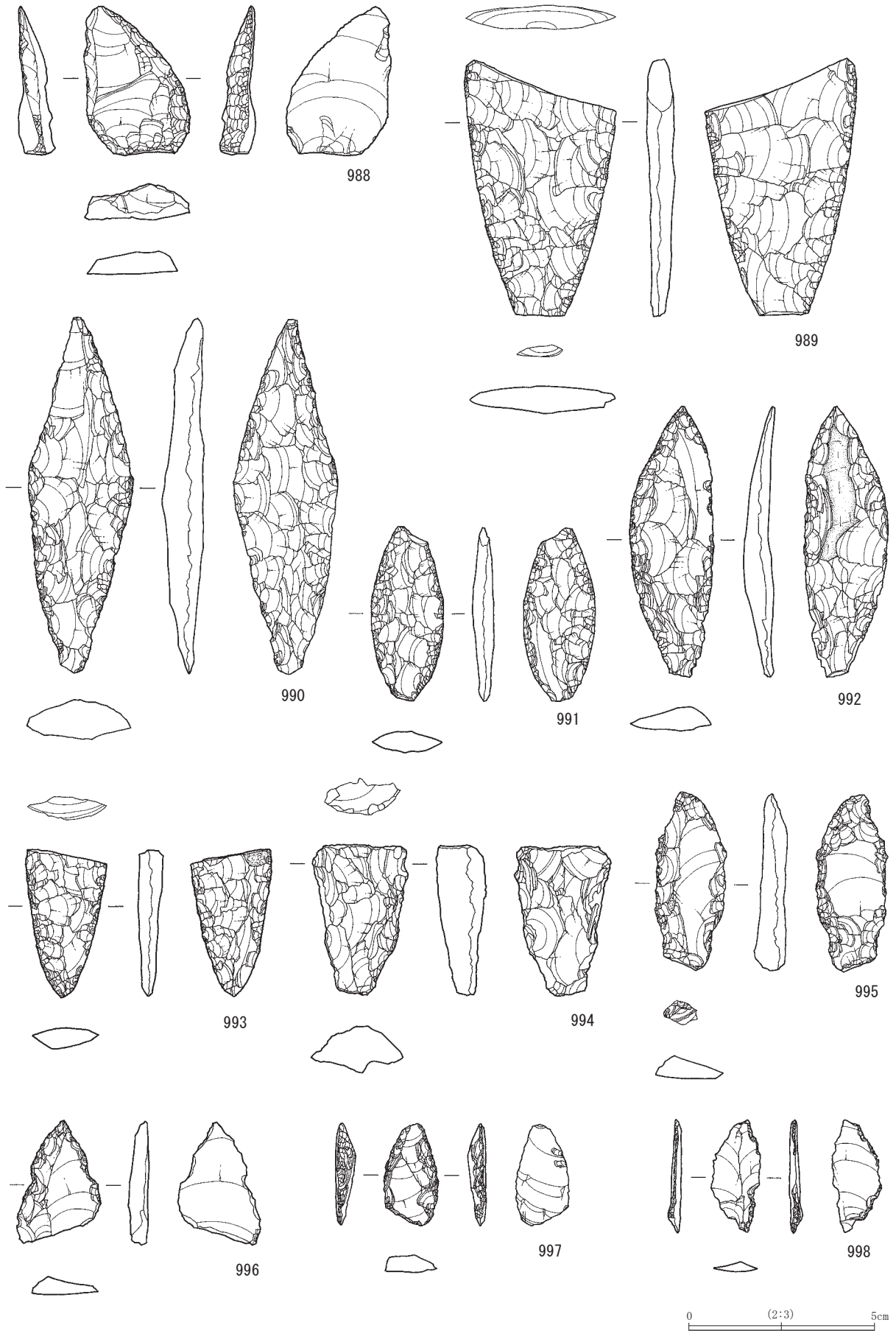
1051～1059は細石刃。1051は細石刃核(1063)と同一個体である。その他は母岩別資料を形成するようなものは確認できていない。

1060～1062は剥片。1061は細石刃核の打面再生剥片。1062は尖頭器製作に伴う調整剥片である。

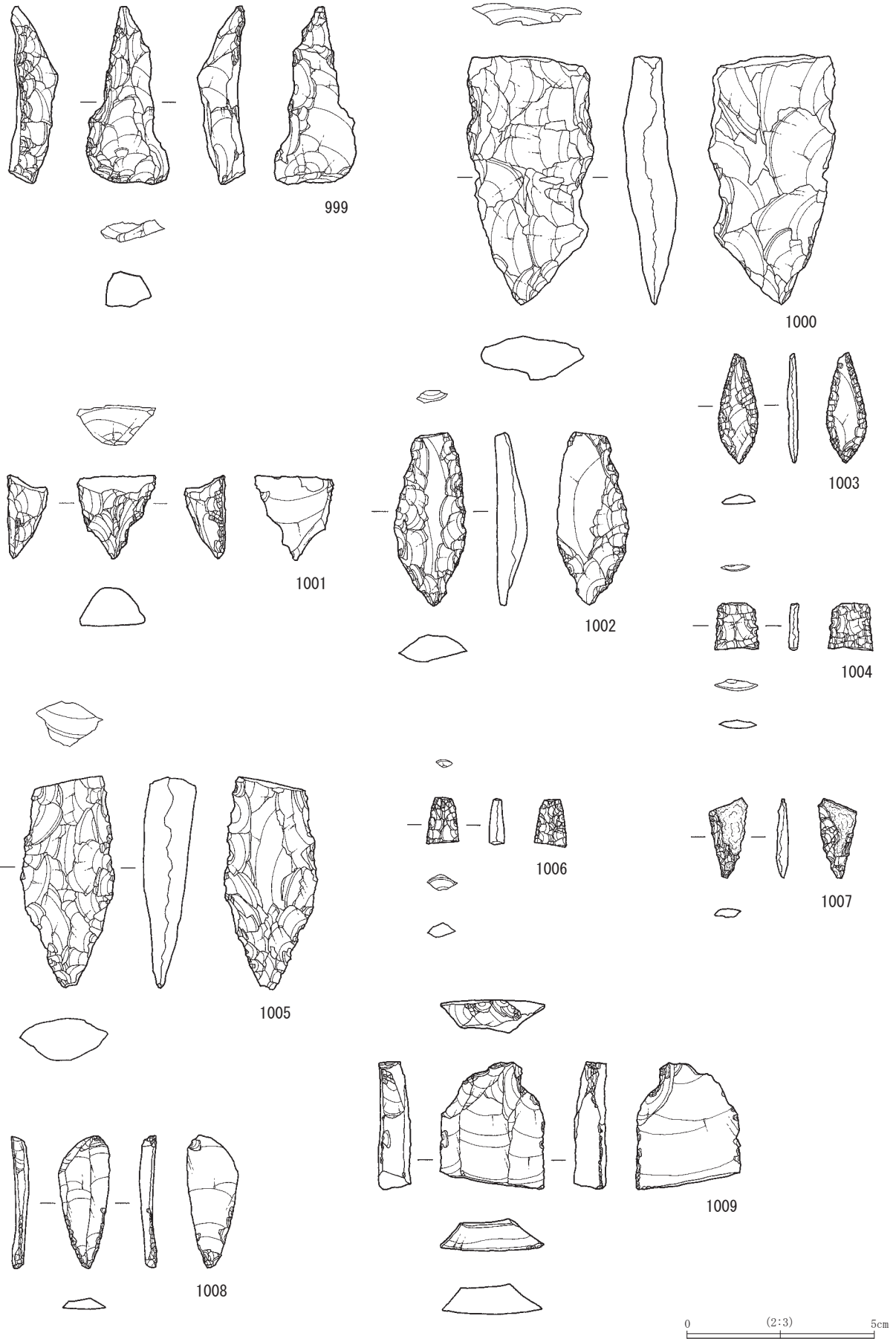
1063～1065は細石刃核。1063はホロカ型細石刃核。正面と裏面において細石刃を剥離している。作業面高は3.2cmである。この1063の細石刃核と1051が同一母岩である。1064は被熱により全体形状は不明であるが、おそらく円錐形を呈していたと思われる。裏面には側縁・下縁部調整が僅かに認めら



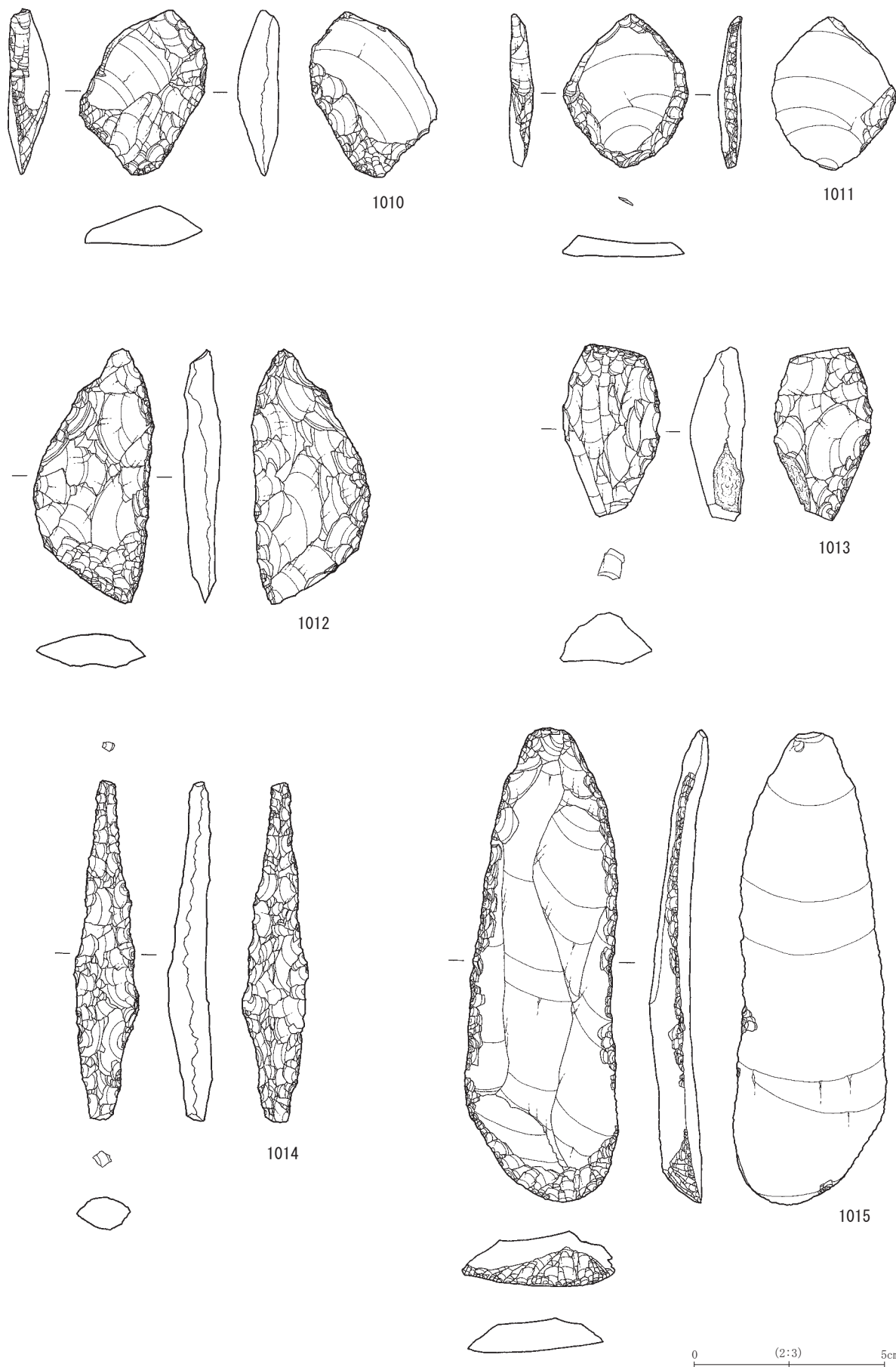
第332図 石器集中区外出土遺物 (1)



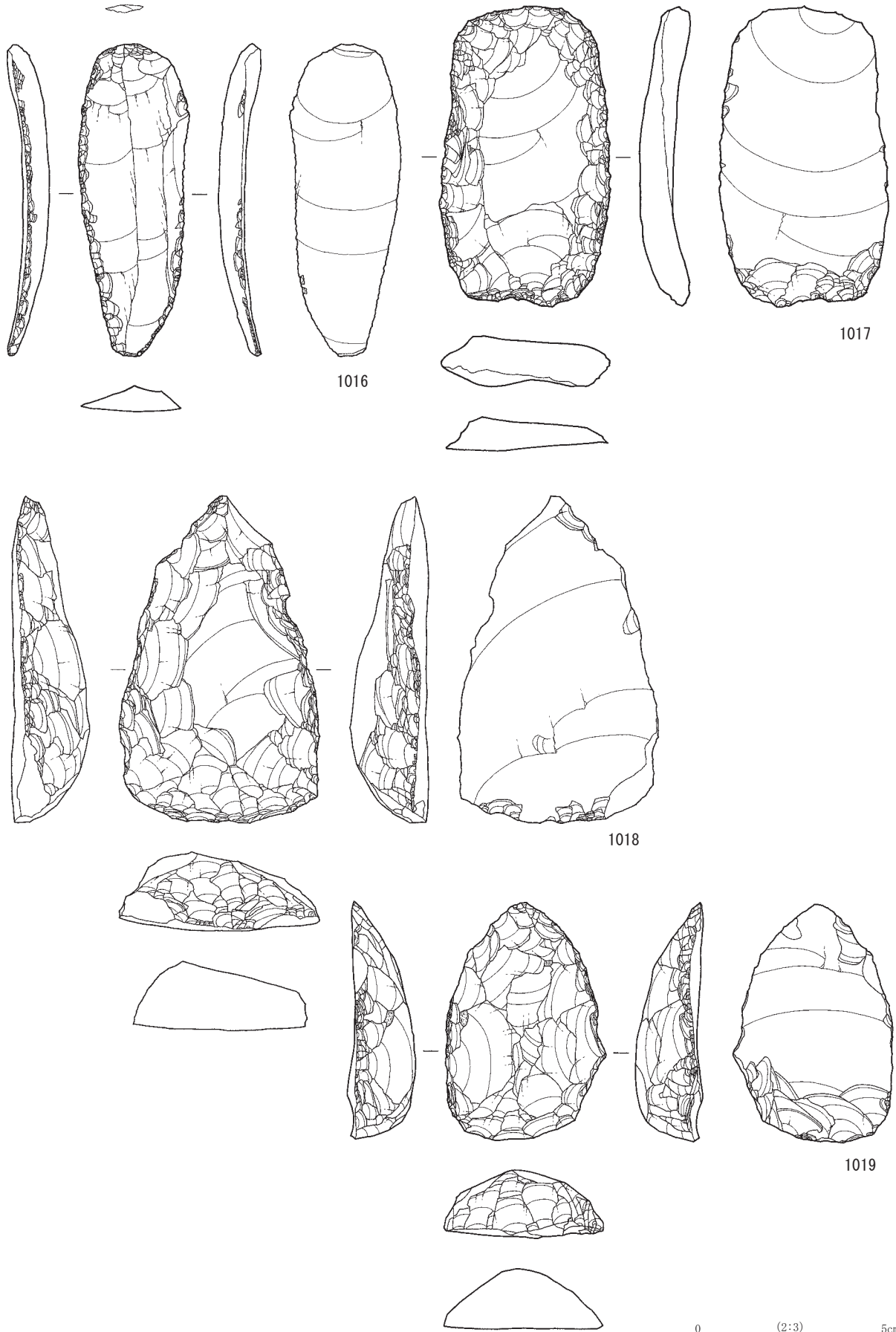
第333図 石器集中区外出土遺物 (2)



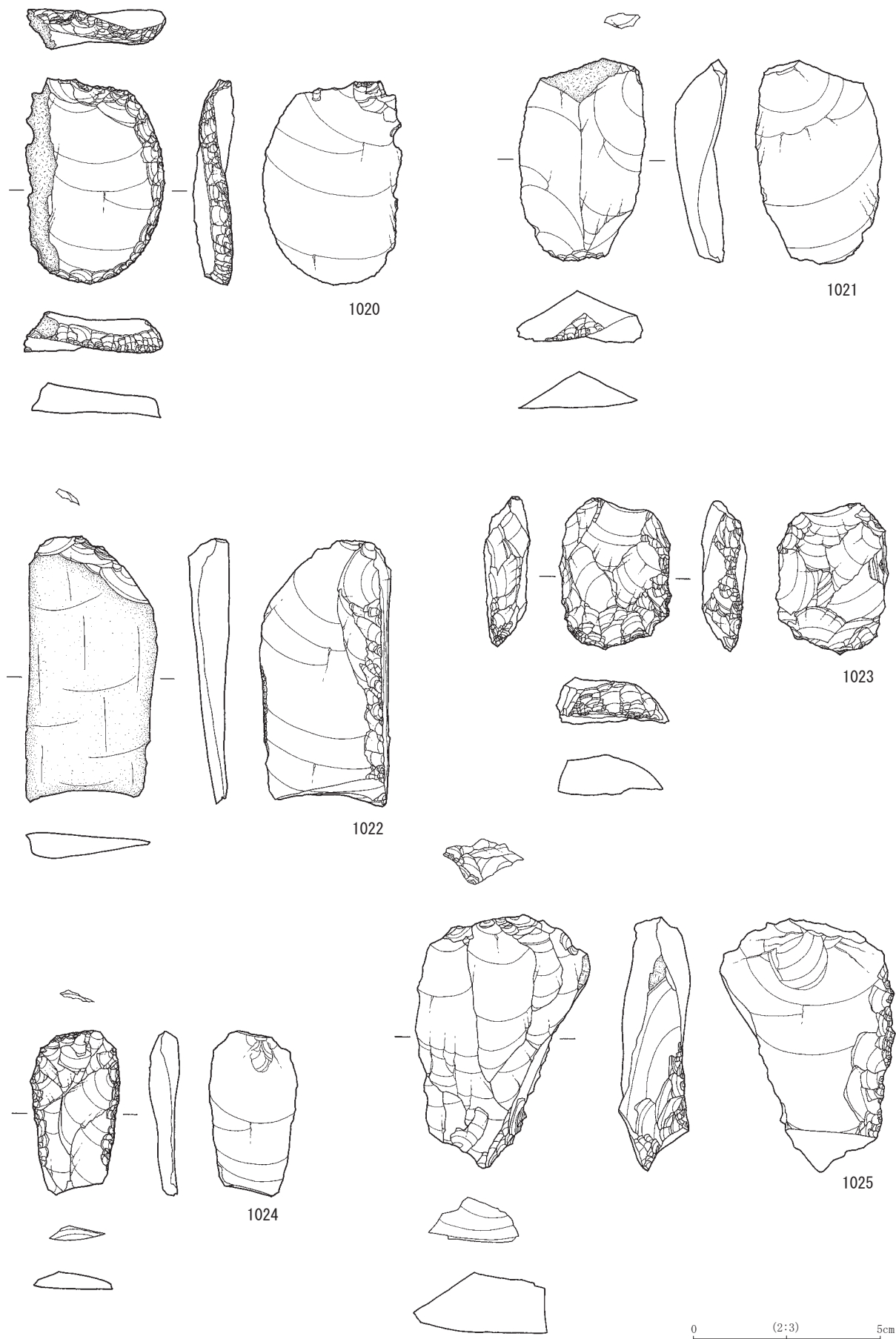
第334図 石器集中区外出土遺物 (3)



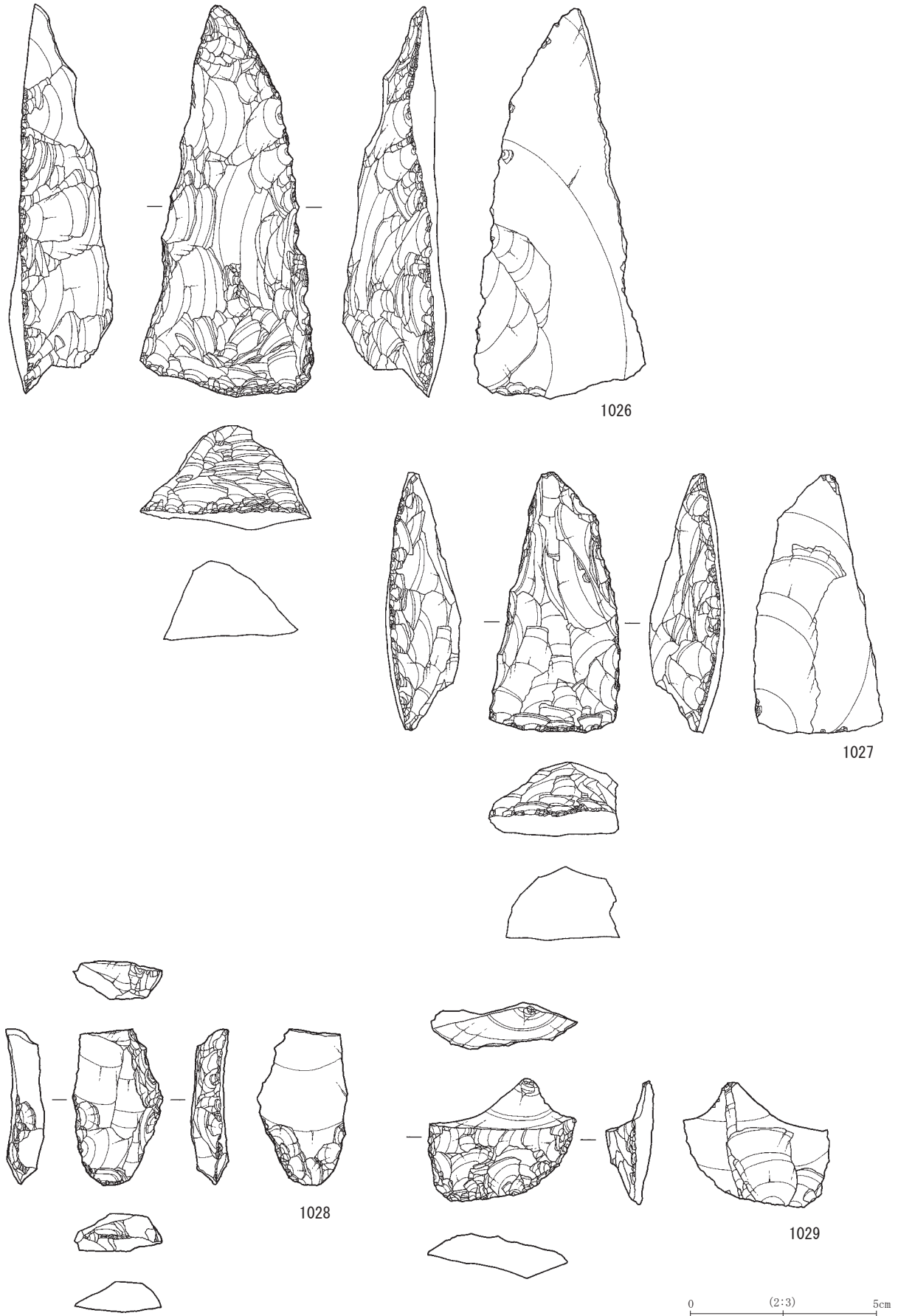
第335図 石器集中区外出土遺物 (4)



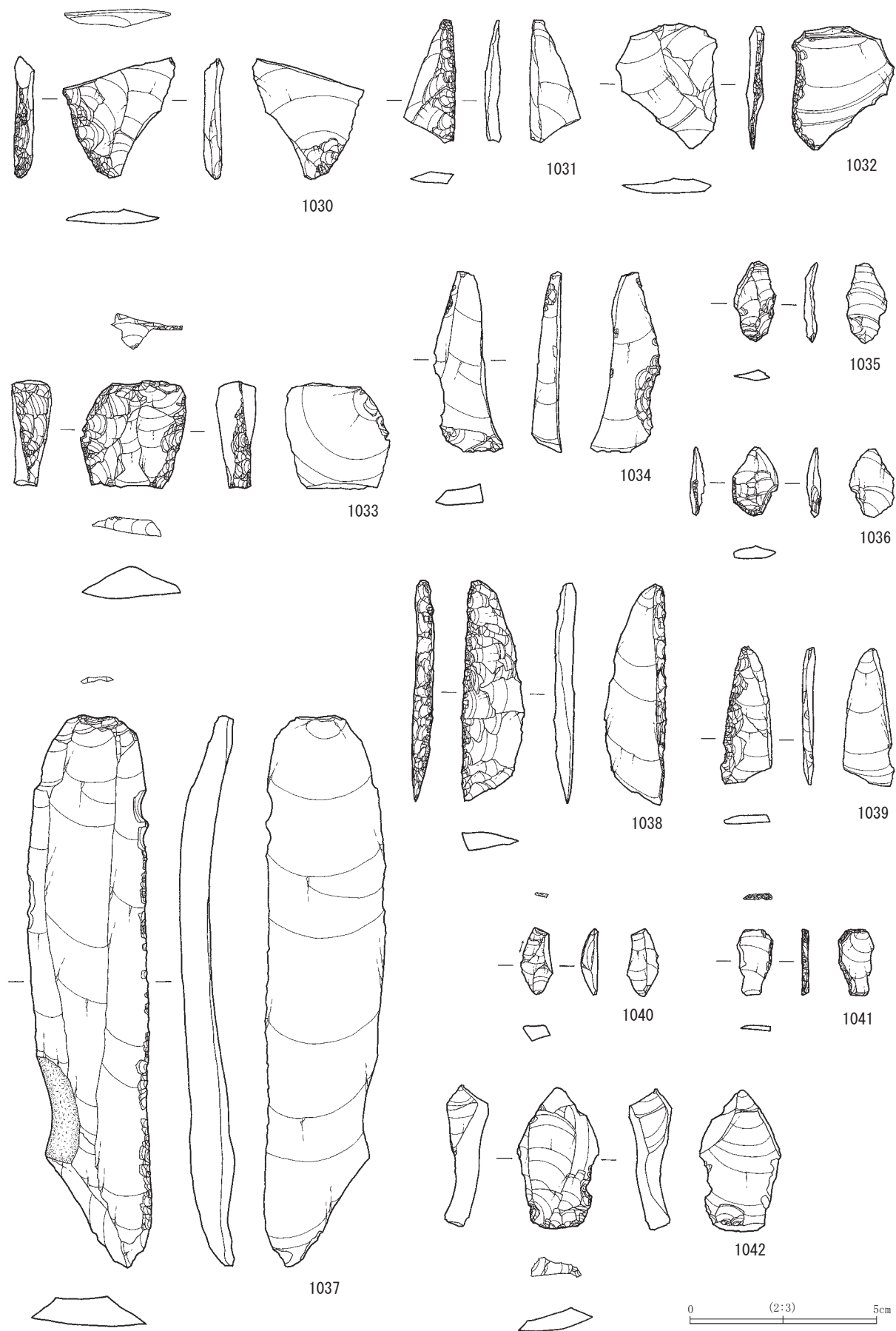
第336図 石器集中区外出土遺物 (5)



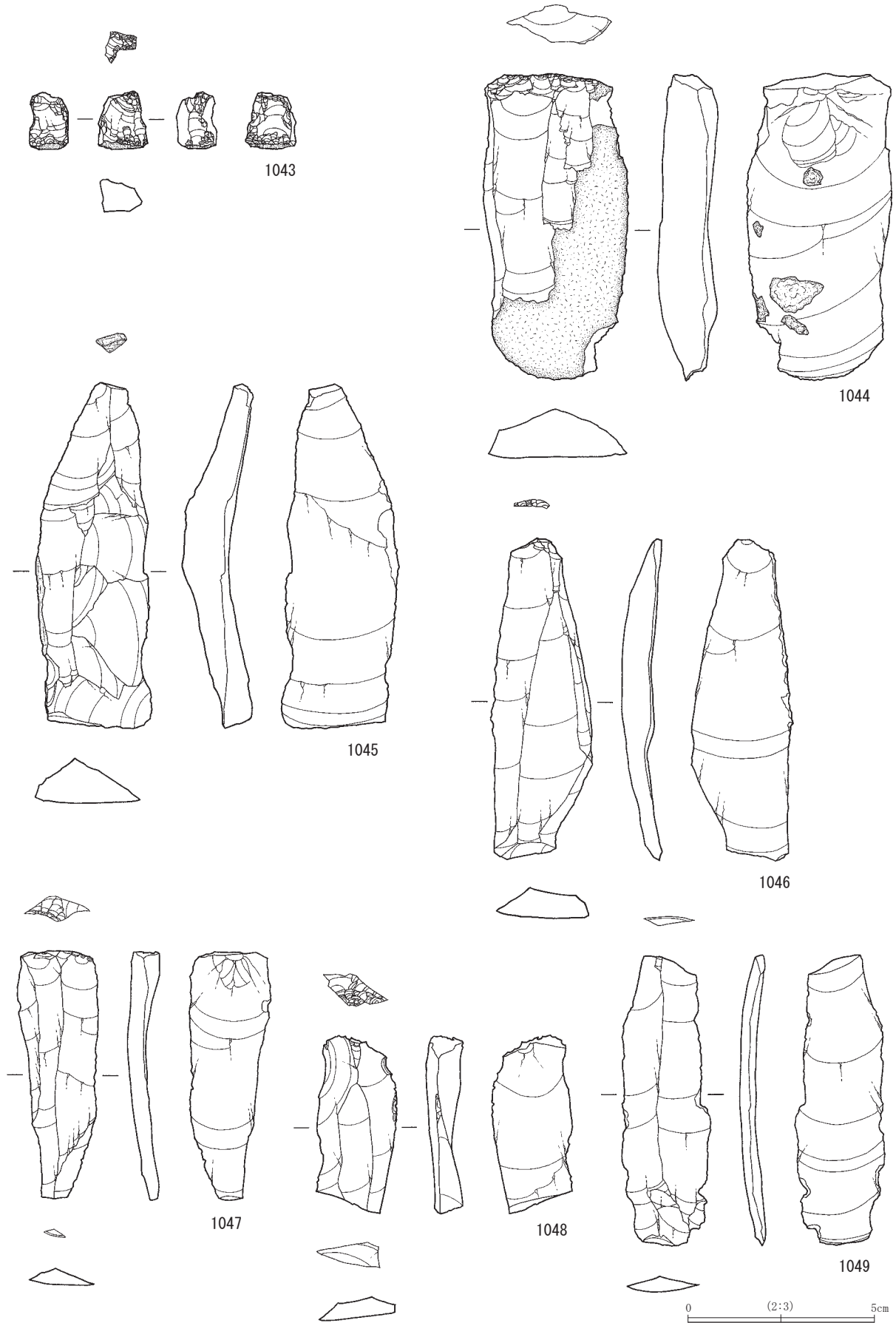
第337図 石器集中区外出土遺物 (6)



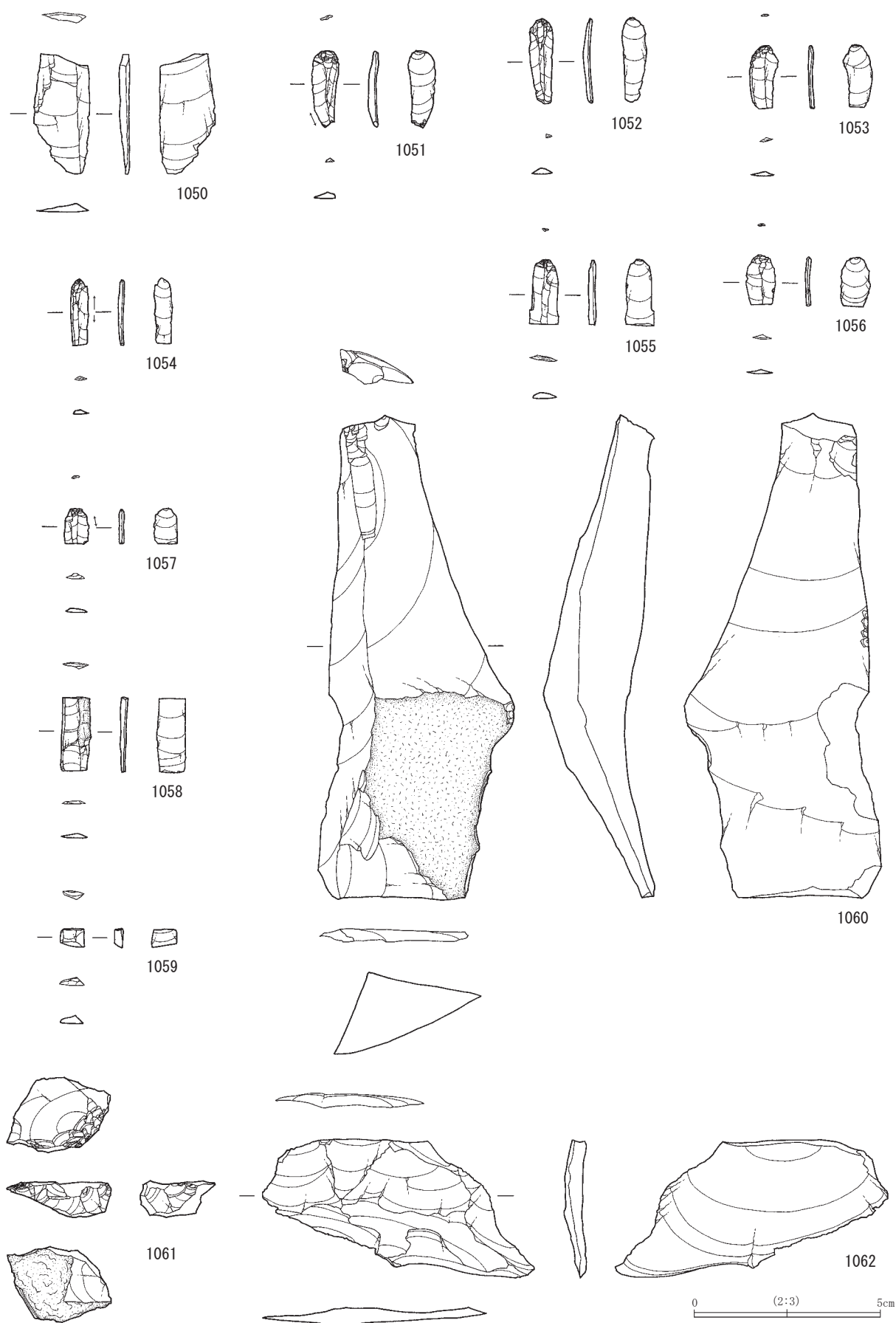
第338図 石器集中区外出土遺物 (7)



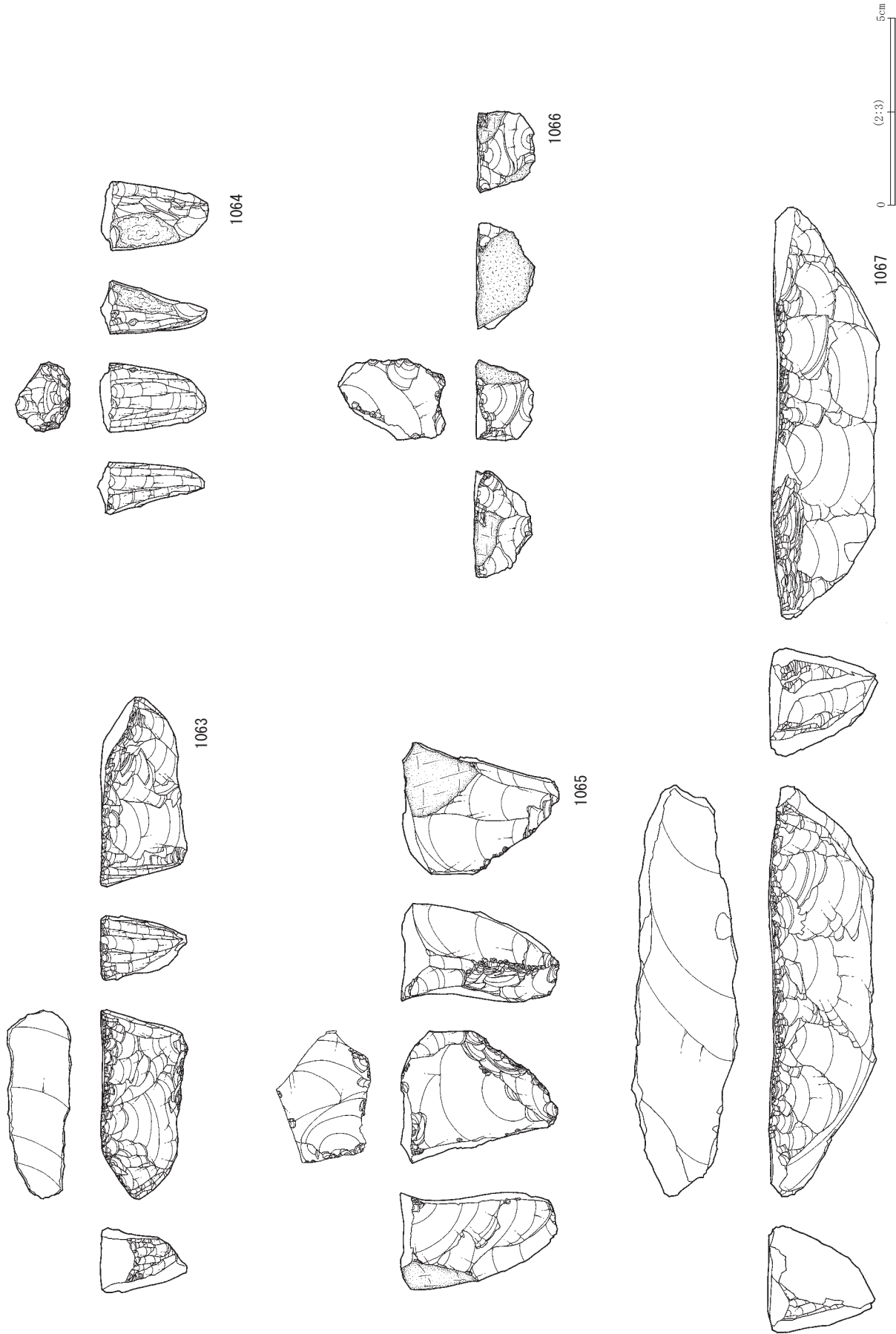
第339図 石器集中区外出土遺物 (8)



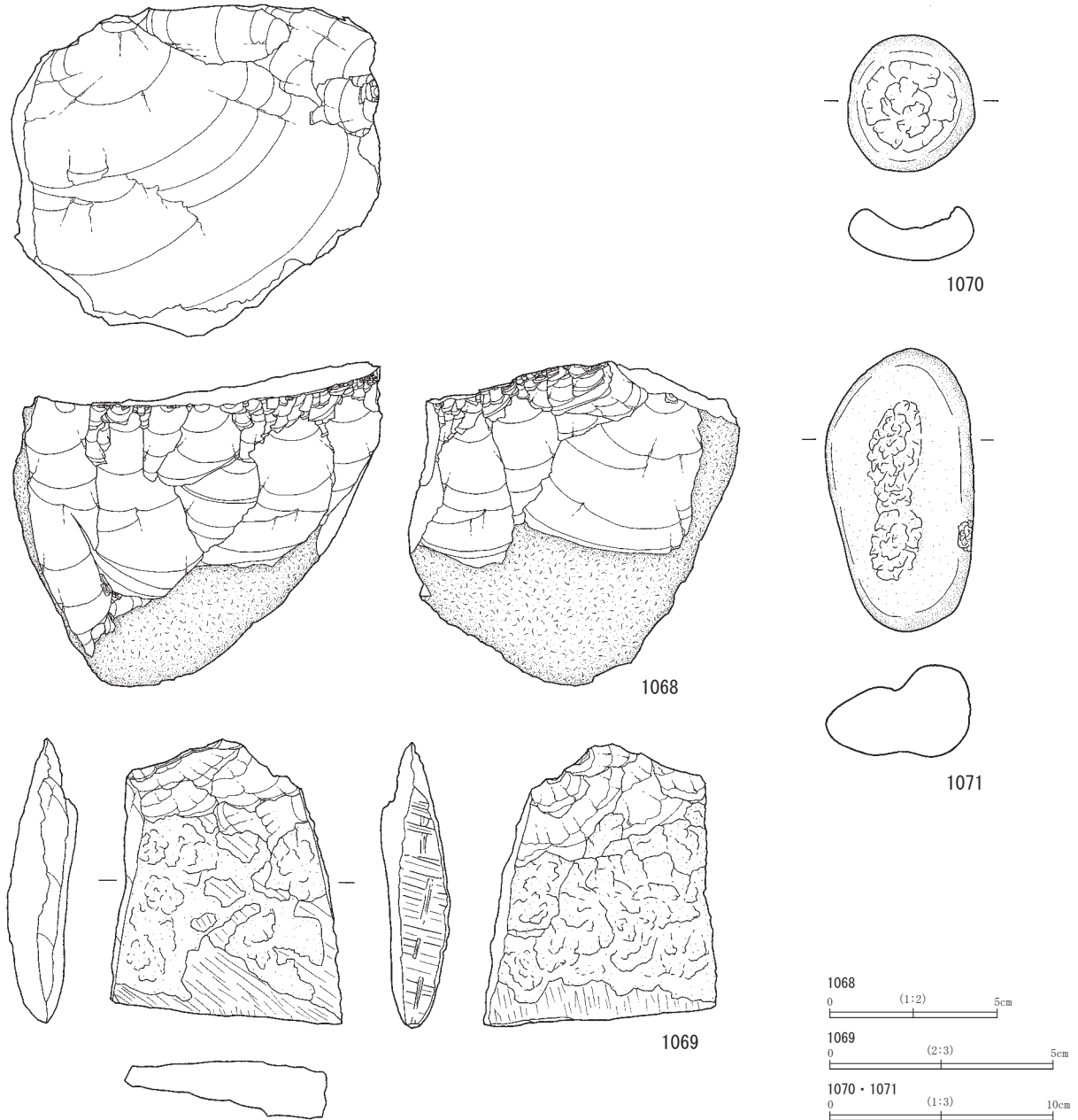
第340図 石器集中区外出土遺物 (9)



第341図 石器集中区外出土遺物 (10)



第342図 石器集中区外出土遺物 (11)



第343図 石器集中区外出土遺物 (12)

れている。この形状と調整は集中区8の細石刃核と類似しており、荒川台技法を伴うもので工程の最終形態と思われる。1065は剥片を素材とし、側縁と下縁部に調整が施されている。細石刃を剥離するものの意図した剥離ができないことからブランク形状を大きく残している。この素材の用い方や調整方法は荒川台技法に伴うものと考えられる。この2点は石器集中区21の周辺から出土していることから、同集中区では荒川台技法を用いて細石刃が剥離された可能性がある。ただし、これらと同一母岩となる石器を確認できないため、先述した関係性については判然としない。

1066・1068は石核。小型剥片を剥離しており、集中区18で認められるような形態である。

1067は舟底形石器である。厚手の縦長剥片を素材とし、甲板面からの剥離で構成されている。

1069は磨製石斧。両面に擦痕が認められ、刃部には使用痕が認められる。

1070・1071は礫石器。小型の石皿と敲石である。

3 縄文時代

当該期の遺構は、竪穴住居2棟、掘立柱建物1軒、土坑3基、柱穴13個を検出している。これらからは少量ながら土器や石器が出土している。遺構の所属時期は後期初頭から前葉に限定される。また遺構外からは早期に属する土器を確認している。

(1) 竪穴住居

SI1

[位置・検出層位] II C86・87グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[重複] SI2と重複しており本遺構が新しい。

[平面形] 方形を基調としている。北壁の両端には楕円形の張り出しを伴う。

[規模] 南北2.63～3.20×東西2.68mである。各壁の長さは張り出し部分を除くと概ね同じである。

[壁] 外傾して立ち上がる。南壁は斜面上方にあたることから残存しており、壁高は22cmである。南壁の西側には立石を伴い、崩落した礫が床面に散乱している。これらの立石はSI2の床面に接しており、本遺構の形成時に新たに壁に沿って置かれたものと考えられる。

[床面] 暗褐色土をSI2の床面の10cm上位に貼り付けて構築しており、平坦に形成されている。床面は全体的にやや締まりが無く軟化していることから、精査当初には床面と認識しがたい状況であった。

[堆積土] 黒褐色土主体に5層に細分した。

[炉] 石囲い炉が床面中央付近よりやや東壁側に位置する。平面形は不整楕円形、規模は62×55cmである。石囲い炉の内部の焼成は非常に弱く、その厚さは2cmと薄い。また、炉石もあまり熱を受けていない。炉石は自然石の垂円礫を利用しており、炉石を据えるための大きな掘り込み等は認められない。床面形成時に合わせて作られたものと考えられる。

[土坑・柱穴] 土坑2基、柱穴3個を検出している。土坑は南壁の楕円形を呈した張り出し部分のことを示しており、これらは左右非対称である。規模は99×74cmと54×41cm、深さは共に約10cmである。底面はどちらも床面より僅かに下がった位置に形成されている。北西隅に位置する土坑の底面では、長軸が52cmの板状の礫が認められる。これらの土坑は、柱穴と同じように四隅に位置していることから、支柱穴の役割を果たしていたとも考えられる。

柱穴2個は南東・南西隅に配置されている。いずれも30～40cmの規模であり、深さは約20cmである。

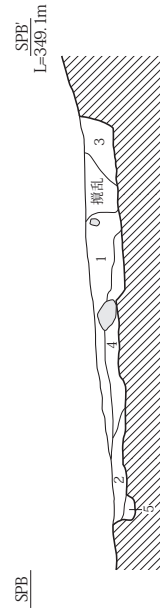
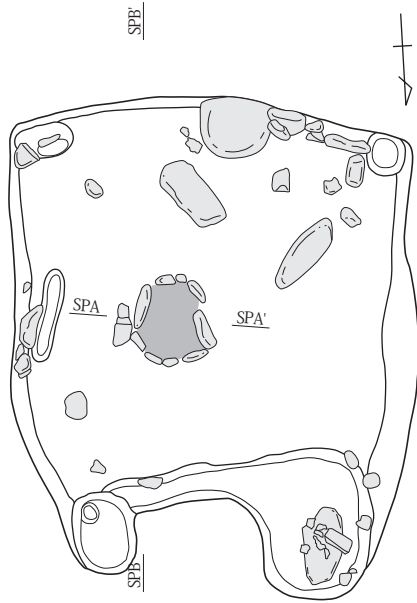
[遺物] 土器150点、剥片石器24点、礫石器3点が出土している。これらは主に堆積土中からの出土である。

口縁部に円形の刺突(1072)や沈線文(1073)、磨消縄文(1074～1076)が認められる。1075や1077などの体部には撚糸文が施文されている。これら土器は後期初頭から前葉に属するものと考えられる。1078・1079は磨石、1080は石皿である。剥片石器の大半は剥片である。

[遺構時期] 縄文時代後期初頭から前葉に属する。

[備考] 斜面地形と北壁の両端にある張り出しの位置から、入り口に伴う施設はこれらの間にあったと想定される。北壁部分で認められている礫は、前年度の試掘調査の段階において、墓壙と判断され多くが除去されていることから、本来であれば北壁に沿って置かれていたものと思われる。

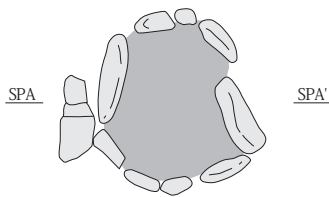
3 縄文時代



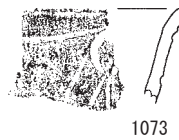
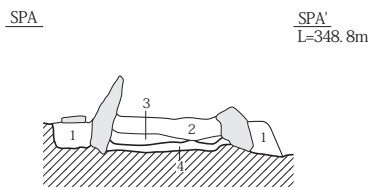
SI 1

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強く、しまり強い。φ 3mmの炭化粒を若干含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土を少量含む。
- 3 2層に類似しているが、若干明る味が増す。
- 4 1層に類似しているが、地山と炭化粒が少量多くなる。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまり共にやや弱い。

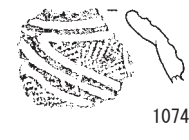
0 (1:50) 2m



1072



1073



1074



1075

SI 1 石囲い炉

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。張り床で焼土や炭化粒を多く含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまり共に強い。
- 3 褐色土 (7.5Y4/3) 粘性・しまり共にやや強い。φ 5mmの炭化粒と焼土を少量含む。
- 4 褐色土 (7.5Y4/4) 焼成は弱い。粘性・しまり共にやや強い。

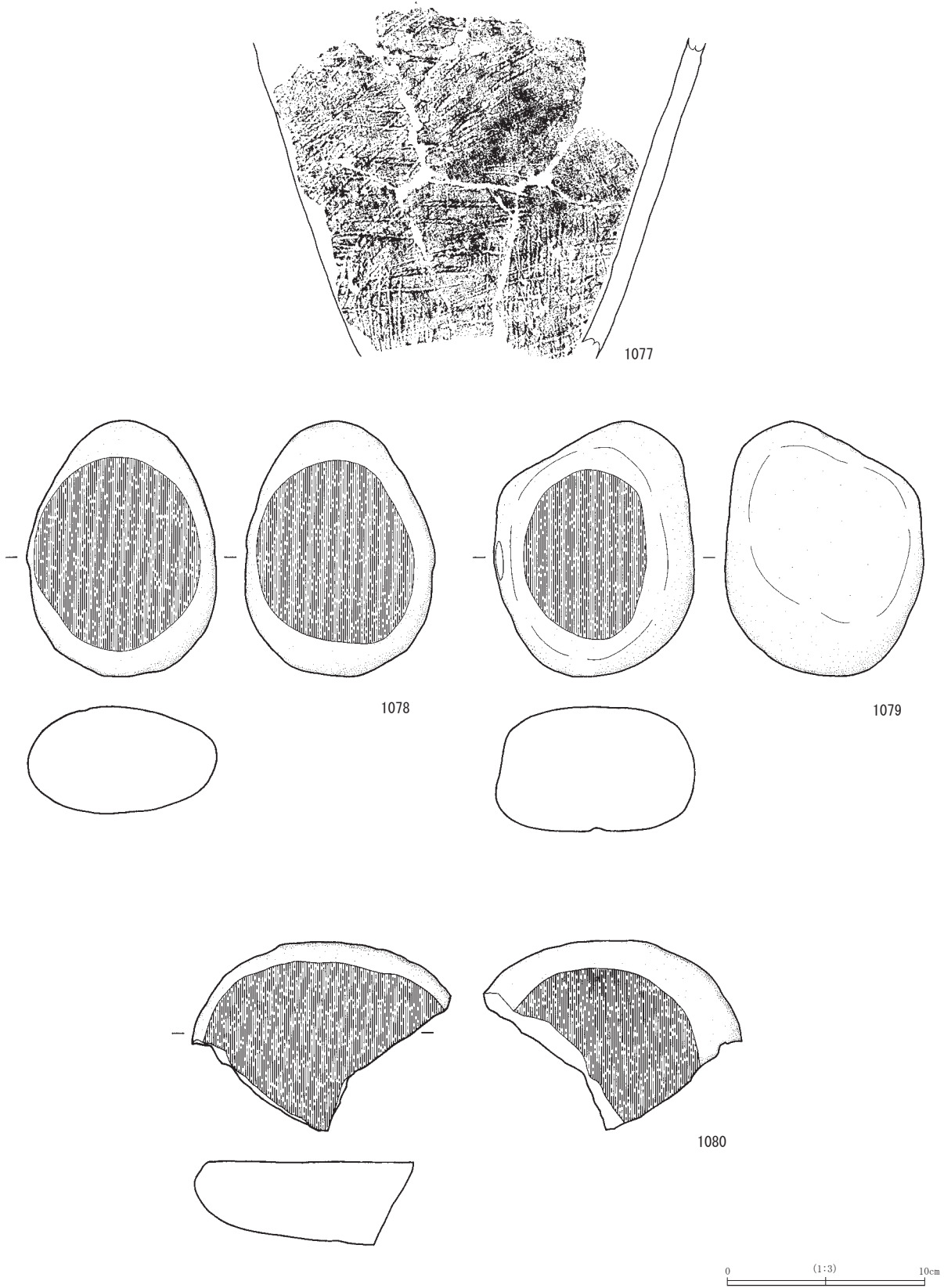
0 (1:25) 1m



1076

0 (1:3) 10cm

第344図 SI 1・出土遺物 (1)



第345図 SI1・出土遺物(2)

SI2

[位置・検出層位] SI1と同様である。検出層位はⅢ層である。

[重複] SI1と重複しており本遺構が古い。

[平面形] SI1と同一形状の方形である。

[規模] 南北2.84～3.22×東西2.82mである。SI1よりやや大きい。各壁が同規模であることには変りない。張り出し部分を含めなければ壁面の長さはほぼ同じである。

[壁] 外傾して立ち上がる。南壁は斜面上方にあたることから最も残存しており、壁高は32cmである。

[床面] Ⅳ層を掘り込んで形成され、若干凹凸が認められるものの概ね平坦であり、堅く締まる。壁際には周溝を巡らしている。

[堆積土] 暗褐色土であり、SI1の貼り床として形成されていたものである。

[炉] 焼土と複数の小穴を確認している。炉石の抜き取り痕と考えられる小穴は燃焼部を囲むように検出されており、本来は石囲い炉を形成していたと想定される。炉はSI1と概ね同じ位置にあるが、燃焼部はやや北壁寄りである。平面形は方形基調を呈し、規模は96×76cmである。平面形状及び規模は共にSI1より僅かに大きい。地山は強く焼成されており、その厚さ5cmを測る。

[土坑・柱穴] 土坑3基、柱穴6個を検出した。土坑1基は石囲い炉の南側に位置している。平面形は円形、規模が径58cm、深さ6cmと浅い掘り込みである。位置関係から炉の前庭部であった可能性が高い。残りの2基はSI1同様、北壁の張り出し部分を示しているが、これらは左右非対称である。本遺構はSI1とは異なり明確な掘り込みを持つ。規模は84×77cmと60×53cmで、どちらも床面より20cm前後下がった位置に底面を有する。北西隅に位置する土坑の底面からは、SI1と同様に多くの礫が検出されている。

柱穴は西壁中央に配置されている柱穴を除くと、概ね左右対称となる。これらは30～40cmの規模であり、南壁の深さは30～40cm、それ以外は10～20cmと浅い。

[遺物] 土器20点、礫石器1点が出土している。これらは堆積土中のものであり、床面から出土したものは極めて少ない。

土器は磨消縄文が主体である。1082・1083は同一個体であり、体部に撚糸文が認められる。これらの土器は後期初頭から前葉に属するものと考えられる。1084は磨石である。

[遺構時期] 縄文時代後期初頭から前葉に属する。

[備考] 建物内の構造はSI1と同一であったと考えられる。ただし、立石を伴う構造であったかは判然としない。

(2) 掘立柱建物

SB1

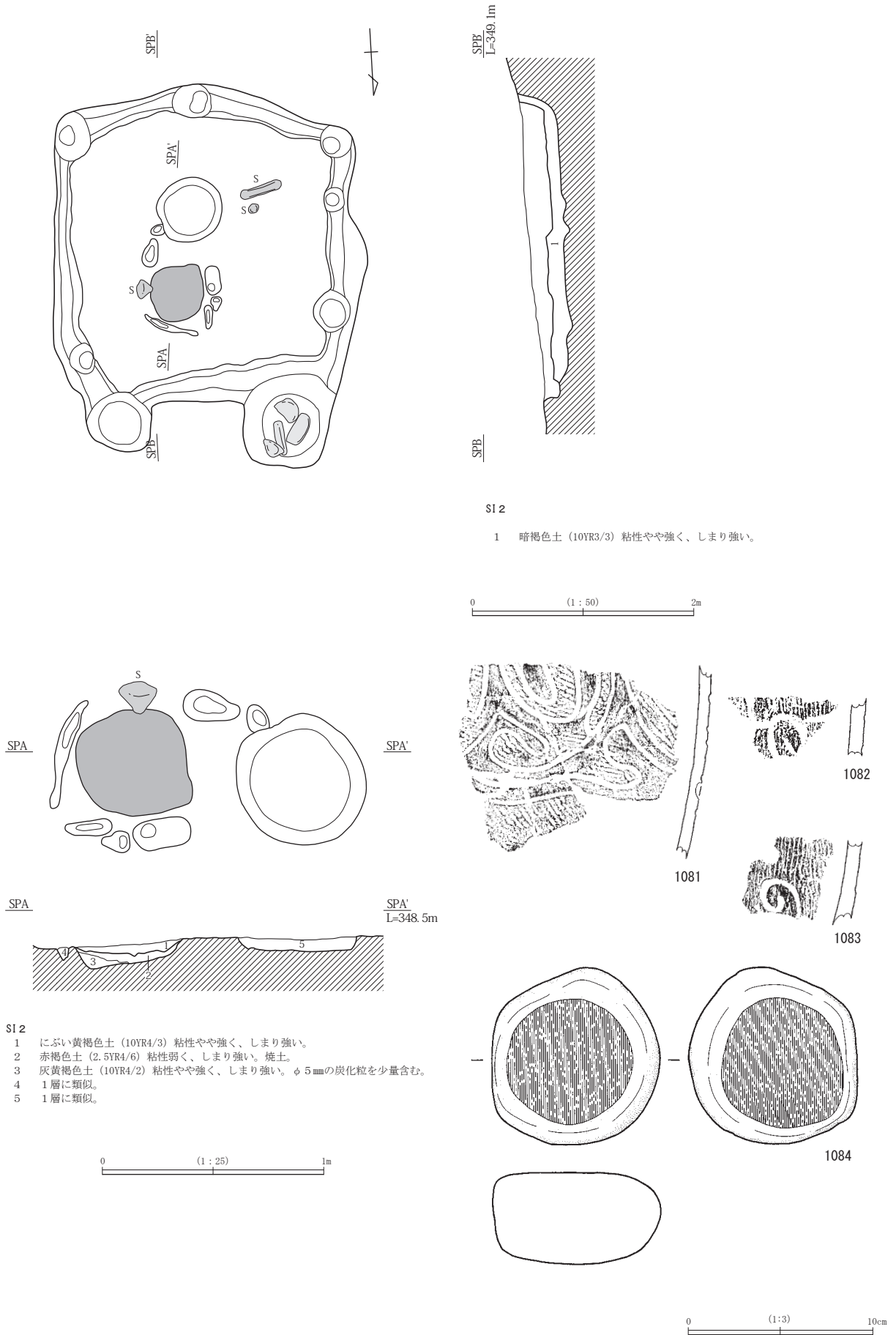
[位置・検出層位] IIC87・88グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は方形で、4本柱である。中央にSK2が位置しているが、本遺構に付随する遺構かは不明である。

[堆積土] 灰黄褐色土主体である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土及び周辺の遺構との関係から竪穴住居と同じ縄文時代後期初頭から前葉に属すると思われる。



第346図 SI2・出土遺物(1)

(3) 土 坑

SK1

[位置・検出層位] II B54グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は径75cm、深さは28cmである。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 当該期の周辺に位置する住居や土坑などと堆積土が類似することから縄文時代後期初頭から前葉と判断している。

SK2

[位置・検出層位] II C88グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は1.12×0.56～0.79m、深さは9～24cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面の南側は一段低く、皿状に凹む。底面の南端に礫が扁平な礫を配置している。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。主体層はSK3と同じである。

[遺物] 縄文土器10点、台石1点、礫2点が出土している。縄文土器は小片のため図化していない。1086は凝灰岩製の台石。底面に配置されていた礫に使用痕跡は認められない。

[遺構時期] 出土土器は小片であるため、遺構時期の特定は難しい。しかし、周辺に存在している遺構の時期も限定されていることから、本遺構はそれらと同じ縄文時代後期初頭から前葉に属する可能性が高い。

[備考] SB1の中央に配置されているものの、その付随施設とする根拠がないため、ここでは別々に記載しておく。

SK3

[位置・検出層位] II C88グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.34×1.19m、深さは12～23cmである。

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分した。主体層はSK2と同じである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。底面北側には複数の礫が認められる。

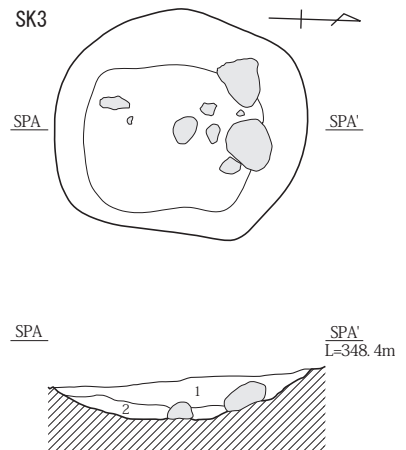
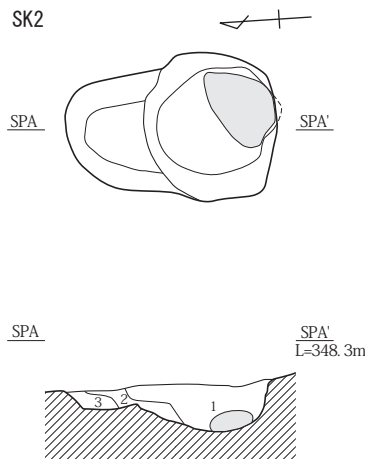
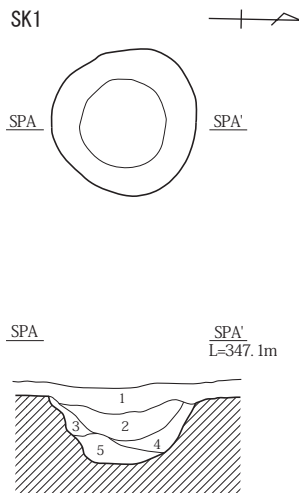
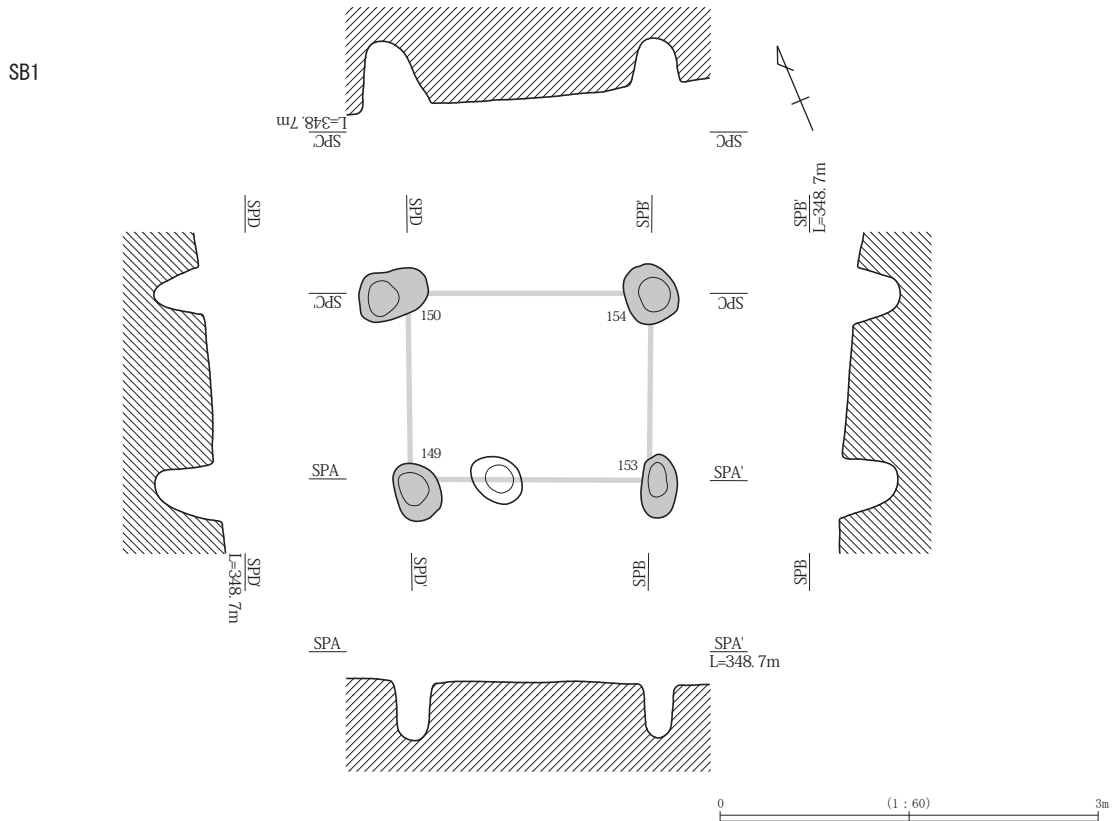
[遺物] 凝灰岩製耳飾1点が底面から出土している。1085は欠損しているが、残存する穿孔の状況から器種を判断している。また、底面から出土した礫には、使用痕跡は認められない。

[遺構時期] SK2と同様の理由により、縄文時代後期初頭から前葉に属する可能性がある。

[備考] SK2と類似した底面の状況から、本遺構と性格が同じ遺構の可能性がある。

(4) 柱 穴

柱穴は建物を構成するものを含めて13個確認している。いずれもII Cグリッドの南側、標高の高い斜面地に位置している。これらは周辺で検出されている近世の建物に伴う柱穴とは色調が異なる。



SK1

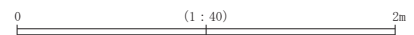
- 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり並。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり並。地山ブロックを僅かに含む。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性並、しまりやや強い。地山崩落土。
- 4 2層に類似。地山ブロックが多くなる。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性並、しまりやや強い。

SK2

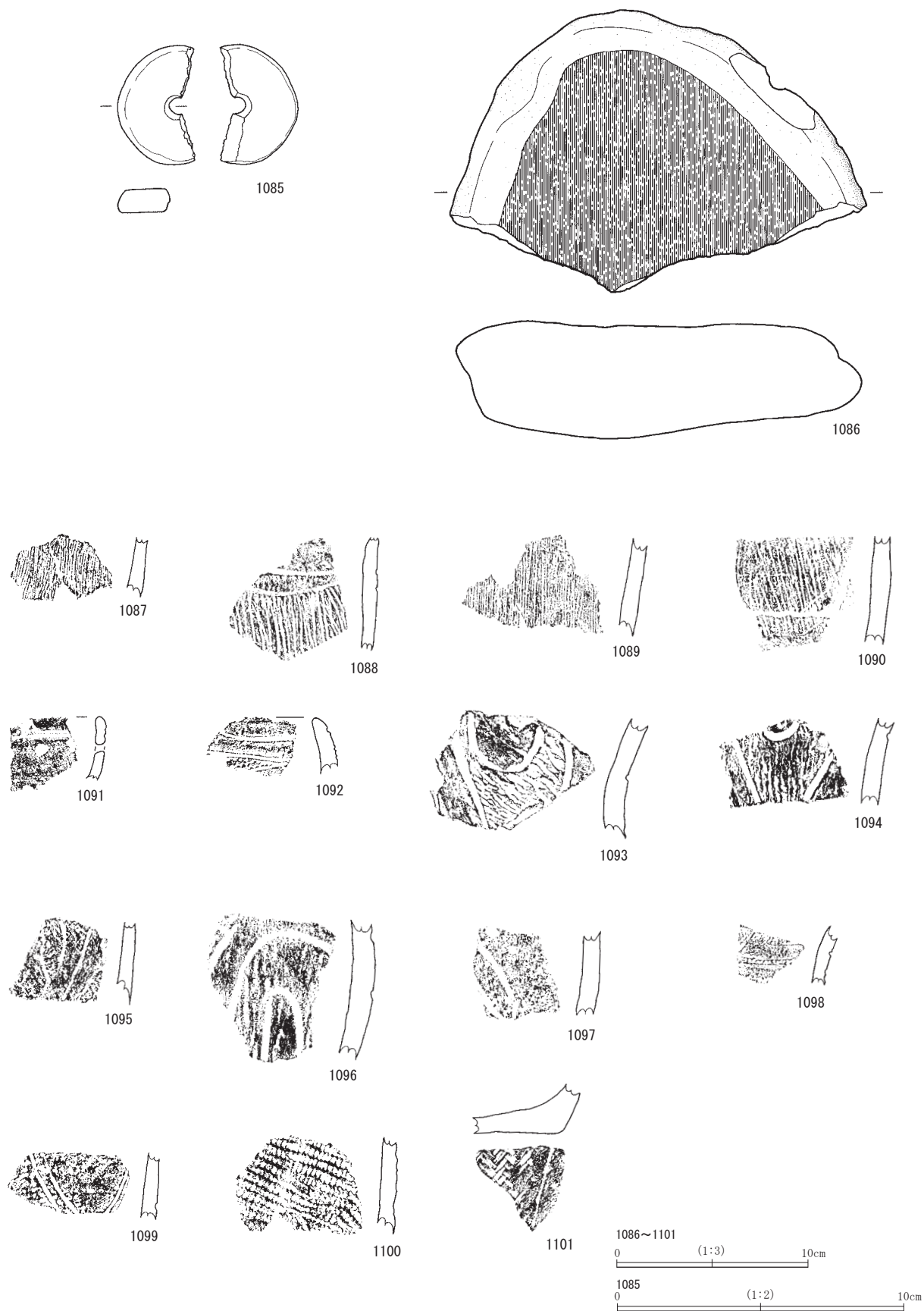
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや弱い。地山ブロック少量、炭化粒若干含む。
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強く、しまりやや弱い。
- 3 褐色土 (7.5YR5/4) 粘性強く、しまり並。焼土。

SK3

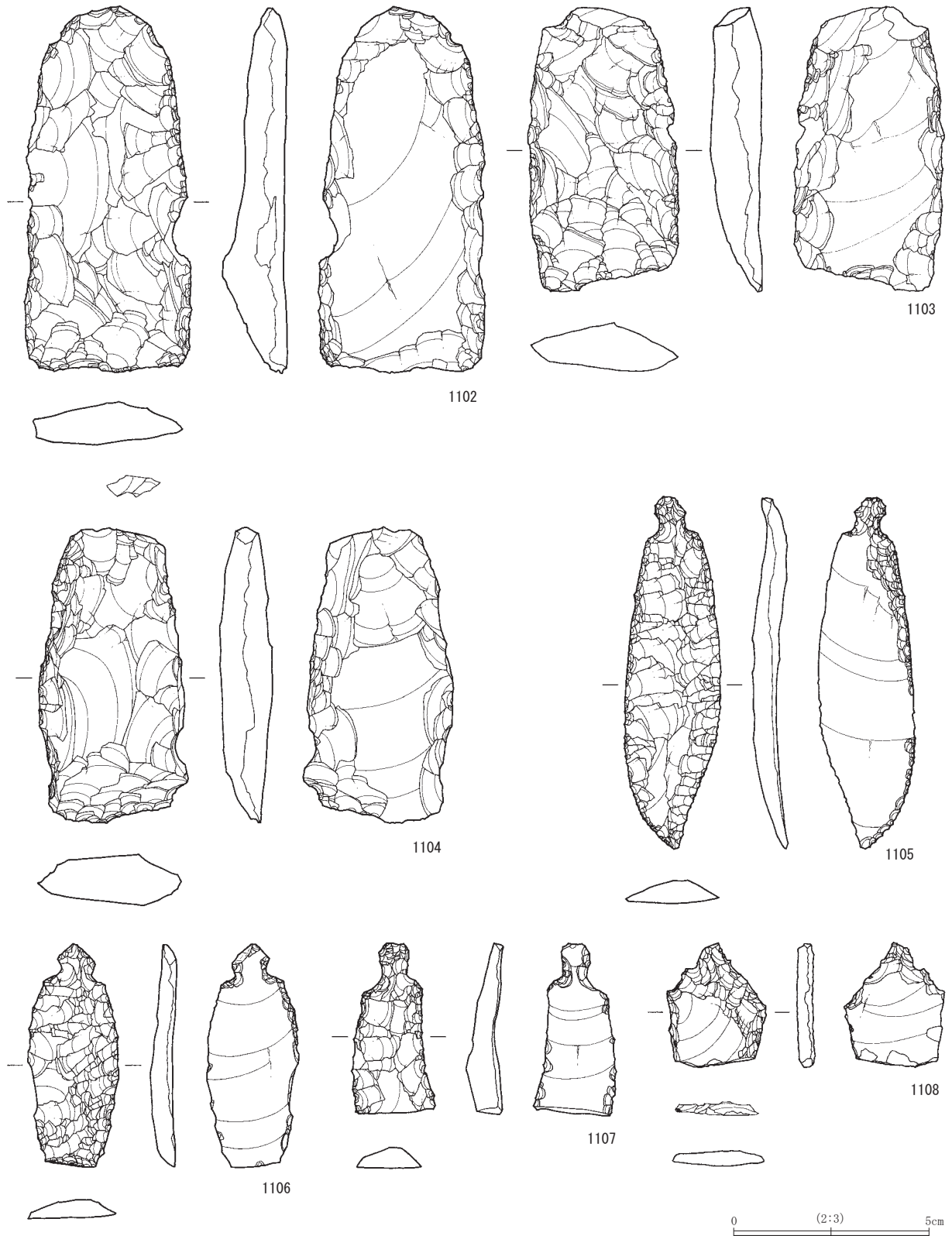
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや弱い。地山ブロック少量、炭化粒若干含む。
- 2 1層と類似しているが、地山ブロックを含むことで若干明る味が増す。



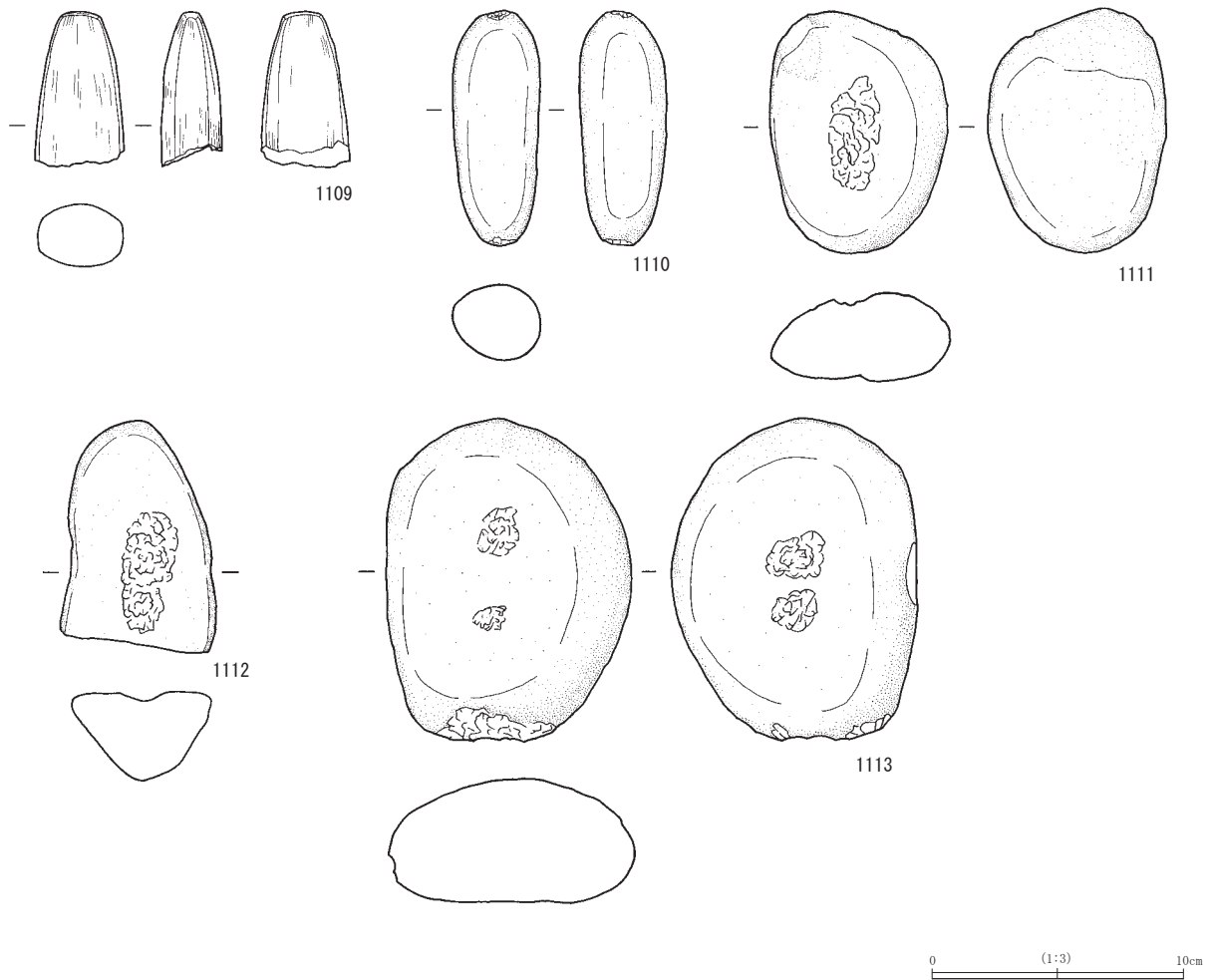
第347図 SB1・SK1・2・3



第348図 遺構内出土遺物・遺構外出土遺物 (1)



第349図 遺構外出土遺物 (2)



第350図 遺構外出土遺物 (3)

(5) 遺構外出土遺物

遺構外からは遺構形成時期である後期初頭から前葉に属する土器と石器が出土しているほかに、早期に属する土器も僅かながら確認できている。ただし、縄文時代全般の遺物量は他の時期に比べ極めて少ないうえに、近世期に削平を受けていることからその様相は不明な点が多い。

1087～1101は縄文時代早期から後期にかけての土器である。これらは主にⅡからⅢ層の検出面で確認されたものである。1087～1090は早期に属し、貝殻沈線文が認められる。1091～1096はSI1・2などの竪穴住居などで認められる磨消縄文であり、後期初頭から前葉に属するものと考えられる。

1102～1108は縄文時代に属する石器である。1102～1104は石篋であり、1105・1106は頁岩製、1104は凝灰岩製である。1105～1108は頁岩製石匙である。1109は凝灰岩製磨製石斧であり、刃部が欠損している。1111～1113は敲石である。これらの所属時期については不明である。

4 近 世 以 降

当該期の遺構は、掘立柱建物跡30軒、井戸跡2基、土坑20基、溝跡2条、柱穴1113個を検出している。それらの遺構及び表土からは陶磁器や鉄製品などが多数出土している。

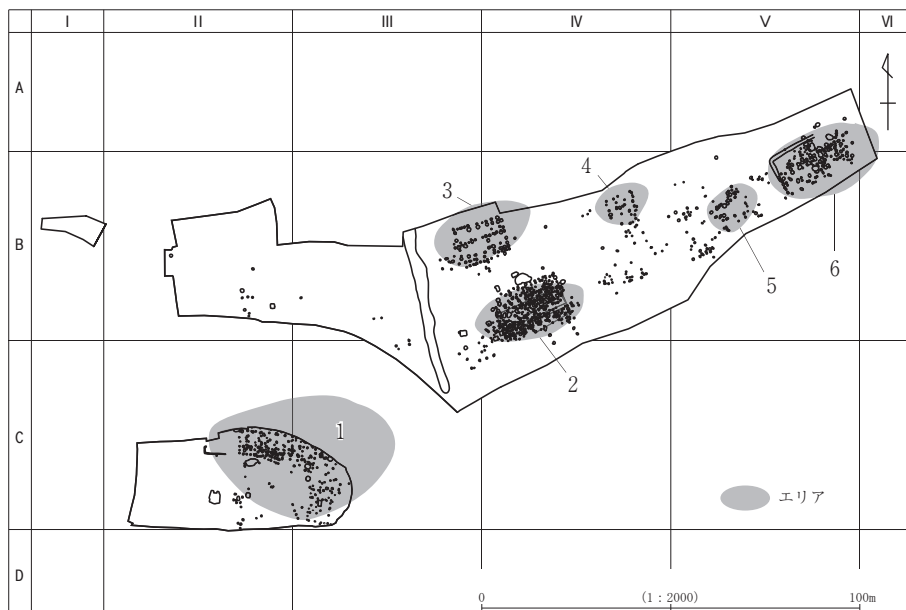
(1) 掘 立 柱 建 物

近世に属する柱穴は1113個を検出しており、それらからなる掘立柱建物跡は30軒ある。調査の都合上、作業中に建物を把握することは適わず、494個の柱穴を用いた建物はすべて整理結果による復元案である。

これらの建物は複数が重複して確認されており、それらは大きく6箇所(エリア1～6)に分かれる。エリア1は調査区外に延びるため全容は判然としないが、それ以外では各エリアにおける全体像を概ね捉えられている。全てのエリアにおいて、建物はほぼ同じ場所に重複しており、建てられる位置に大きな変更は認められない。その中でもエリア2にはより多くの建物が重複して認められている。

建物は、桁行が3～8間、梁間が1～5間の規模に収まる。このように桁行・梁間の幅が認められるが、その中でも桁行が4～7間が多く、比較的類似した規模の建物が形成されている。これらには庇が1面か2面に持つものが主体を成している。軸線方向は概ね段丘に平行した東西方向であり、僅かながら南北方向のものがある。

これらの建物を構成する柱穴及び周辺の遺構からは陶磁器や鉄製品が出土している。それらの詳細については出土遺物の項に記載しているが、陶磁器の年代は17世紀前後から19世紀前半まで継続して認められている。このことから集落の存続期間は概ねこの期間幅と捉えても差し支えないものと思われる。さらに、この中でも特にエリア2は遺構数と遺物出土量が他のエリアと比べ突出していることから、集落において中心的な役割を果たしていた可能性が極めて高い。



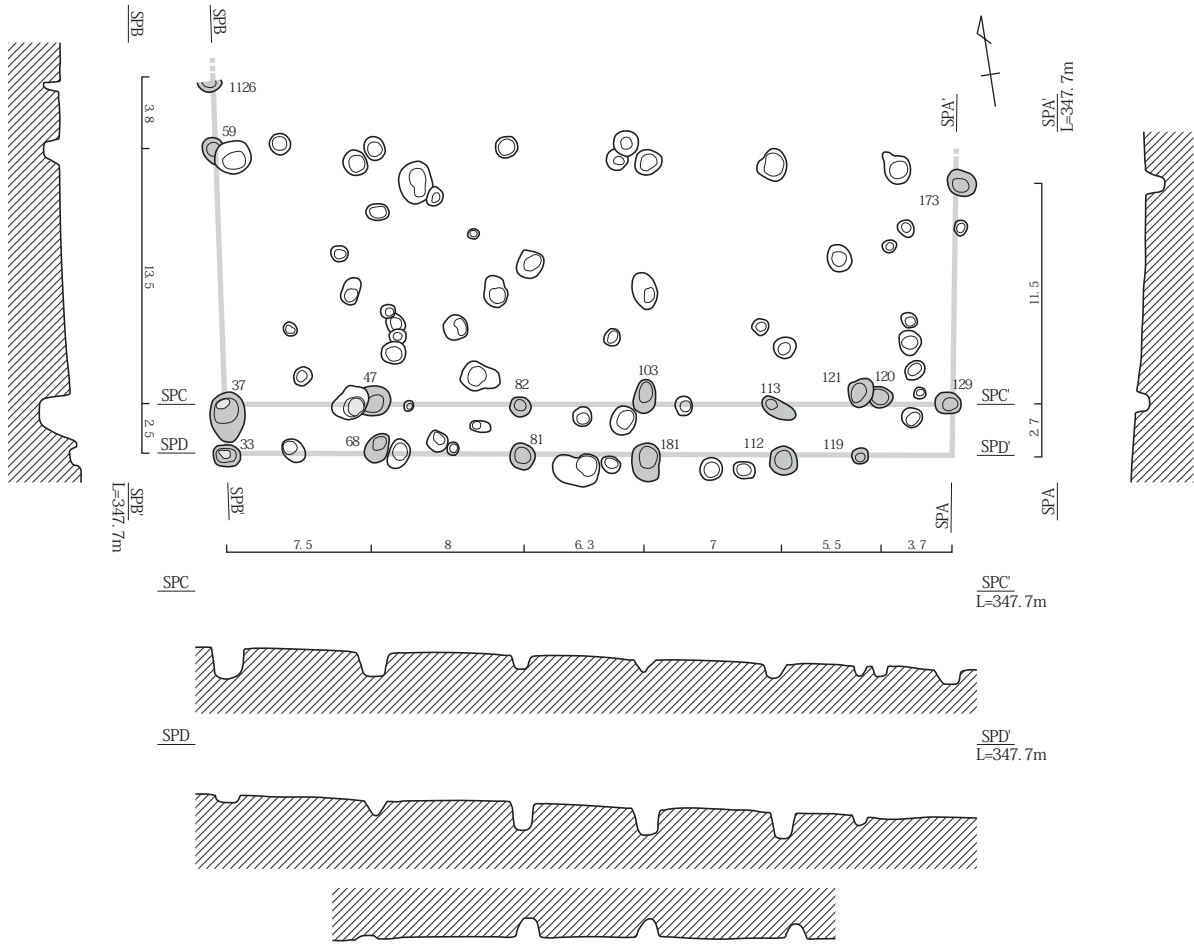
第351図 掘立柱建物跡エリア配置図

第6表 掘立建物跡一覧表

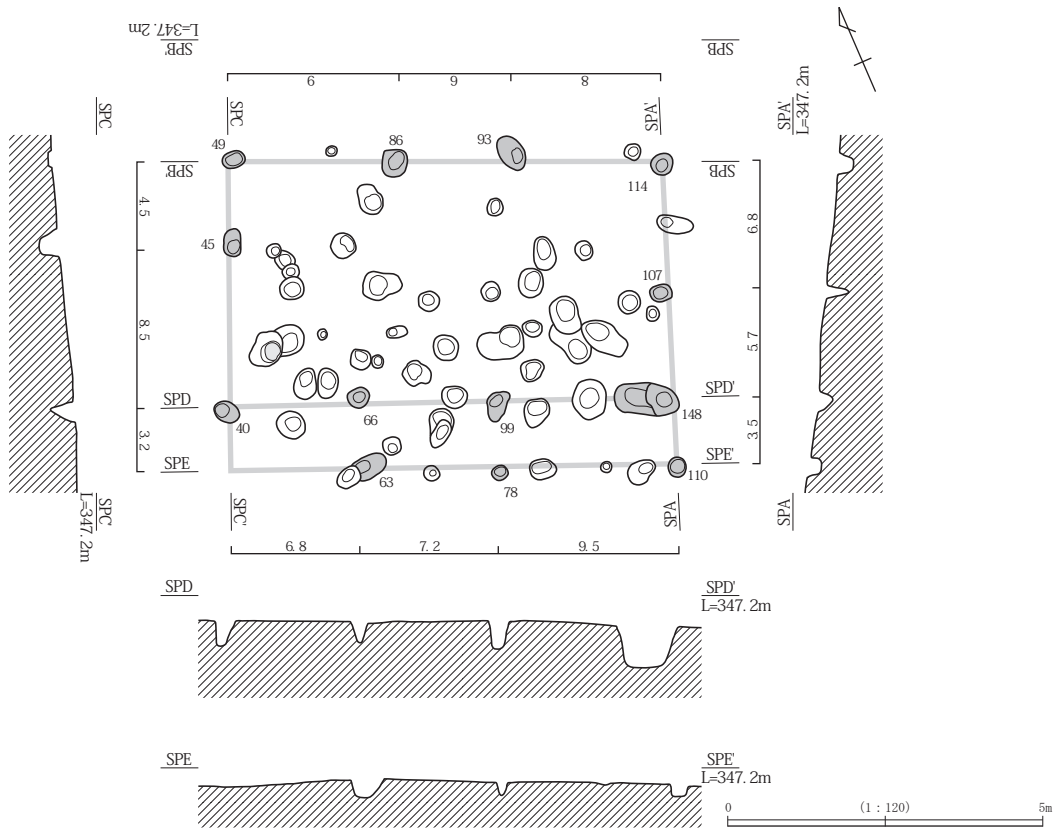
遺構名	検出 エリア	重 複	桁 行	桁 行 (尺)		梁 間
				全 長	柱 間	
S B 2	1	重複しているが前後関係は不明	4	30.5 27.1	7・6.5・6.5・7・3.5 7・6.8・6.5・6.8	3
S B 3	1	重複しているが前後関係は不明	3	20.8 21	5・7.5・8.3 8.5・12.5	2
S B 4	1	SB5より新しい	8	55 54.8	10・6.5・6.5・7.5・7・5・7・5.5 3.5・6.5・6・7.5・8・6.3・7・10	3
S B 5	1	SB4より古い	6	38	7.5・8・6.3・7・5.5・3.7	2
S B 6	1	重複しているが前後関係は不明	2	14.5 14.5	7.5・7 7・7.5	2
S B 7	1	重複しているが前後関係は不明	3	23 23.5	8・6・9 6.8・7.2・9.5	2
S B 8	1	重複しているが前後関係は不明	2	17 17	9・8 5・12	3
S B 9	1	重複しているが前後関係は不明	3	23 22.5	13.8・9.2 8・6.5・8	2
S B 10	2	SB11より新しい	7	61.5 60.5	5.5・7.5・7・8・11・9・13.5 9・12・13・26.5	1
S B 11	2	SB10より古く、SB18より新しい	7	56 54	5・5・10.5・9.5・7・8.5・10.5 9・9・8・9・19	1
S B 12	2	SB10・11より古く、SB14・16・18より新しい	6	44 44	6・8・7.5・7・7.5・8 8・7・7.5・7.5・8・6	3
S B 13	2	SB12・14より古く、SB20より新しい	8	51 51	8.5・6・6.5・7・11・12 7・5.5・5・7.5・6.5・6.5・6・7	1
S B 14	2	SB12より古く、SB13より新しい	6	38 38	7・6・7・4.5・8.5・5 5・8.5・4.5・8・7.5・4.5	1
S B 15	2	重複しているが前後関係は不明	7	59 59.5	8・6・5・9・10・11.5・9.5 10・10.5・6・3.3	1
S B 16	2	SB10・11より古い	7	41 42	12・7・13.5・4・4.5 3.5・5.5・8.5・5.5・7・4.5・7.5	1
S B 17	2	SB10・12より古い	5	42 41.5	9・17・16 6・11.5・6.5・8.5・9	2
S B 18	2	SB11・12より古い	4	29 29	7・8・7・7 7.5・7.5・7・7	1
S B 19	2	重複しているが前後関係は不明	5	36.5 36.5	5.5・4・7.5・6・13.5 8.5・11・7・10	1
S B 20	2	SB13・14より古い	4	34.5 34	8・3.5・7.5・15.5 9・16・9	1
S B 21	3	SB22より新しい	6	35 35.2	6.5・6.5・6.5・6.5・6・3 6.5・3・3.5・6・4・5.7・6.5	2
S B 22	3	SB21より古い	7	42.5 42	3・5.5・5・8・8・13 6.5・6.5・8・8.5・5.5・4・3	5
S B 23	3	重複しているが前後関係は不明	7	41.5 42.5	5・8・12.5・6.5・9.5 6・4・5.5・7.5・9・7・3.5	1
S B 24	4	-	3	24.5 23	8・7.5・9 9.5・7.5・6	3
S B 25	5	重複しているが前後関係は不明	3	26 25.5	8・9・9 22・3.5	2
S B 26	5	重複しているが前後関係は不明	4	25.5 27.5	6.5・5・7・7 12.5・7・8	3
S B 27	6	SB28より新しい	7	61 60	6・13.5・6.5・6.5・9・7.5・12 9・7・7・18	2
S B 28	6	SB27より古い	5	54.5 54	9・11・15.5・19 8・9・7.5・9・20.5	3
S B 29	6	重複しているが前後関係は不明	4	38.5 38.5	7・14・10.5・7 16.5・8.5・13.5	1
S B 30	6	重複しているが前後関係は不明	5	49 49	11・7.5・10.5・10・10 22・8・19	1
S B 31	6	重複しているが前後関係は不明	2	12.5 11.5	6.5・6 6・5.5	1

梁 間 (尺)		棟方向	軸線方向	柱形式	出 土 遺 物
全 長	柱 間				
18 18.5	7.5・3・5.5・2 5.5・5.5・6・1.5	南北棟	N-8°-E	側柱	陶磁器・銭貨・礫石器出土
16.5 15	7・9.5 8・7	東西棟	N-106°-W	側柱	
20 19.5	3.5・4.3・3.5・6・2.7 9.5・4・3.5・2.5	東西棟	N-79°-W	側柱	陶磁器・銭貨・石器・礫石器出土
14.2 19.8	11.5・2.7 3.8・13.5・2.5	東西棟	N-81°-W	側柱	陶磁器・鉄製品・銭貨・石器・礫石器出土
12.5 12.5	4.5・8 8.5・4	東西棟	N-80°-W	側柱	土器・石器出土
16 16.2	3.5・5.7・6.8 4.5・8.5・3.2	東西棟	N-67°-W	側柱	陶磁器・銭貨・石器出土
15.5 15.8	4.3・5.7・5.5 -	南北棟	N-22°-E	側柱	陶磁器出土
20 20	10.7・9.3 8.8・11.2	東西棟	N-96°-E	側柱	陶磁器・石器出土
21.5 21	18.5・3 18・3	東西棟	N-65°-E	側柱	陶磁器・土器・銭貨出土
23 22.5	3・18・2 2・17.5・3	東西棟	N-65°-E	側柱	陶磁器・土器・鉄製品・煙管・銭貨出土
21 21	4・14・3 4・13・4	東西棟	N-67°-E	側柱	陶磁器・土器・銭貨出土
23 24.5	3・17・3 4・17・3.5	東西棟	N-64°-E	側柱	陶磁器・鉄製品・銭貨出土
24.5 24	4.5・16・3.5 4・16.5・4	東西棟	N-66°-E	側柱	陶磁器・土器出土
18 18	14・4 15・3	東西棟	N-66°-E	側柱	陶磁器・土器・銭貨・石器出土
19.5 19.5	5.5・10・4 14・5.5	東西棟	N-67°-E	側柱	陶磁器出土
20.5 19.5	4・3.5・8・5 4.5・7・3.5・4.5	東西棟	N-67°-E	側柱	陶磁器・鉄製品出土
19	-	東西棟	N-64°-E	側柱	鉄製品・銭貨・土器出土
16.5	-	東西棟	N-60°-E	側柱	
14.5 15	-	東西棟	N-68°-E	側柱	陶磁器・土器出土
20	10・10 -	東西棟	N-70°-E	側柱	鉄製品出土
26.5 26	3・4.5・6.5・3・6・3.5 3・7・6・3・5・2	東西棟	N-75°-E	側柱	陶磁器・銭貨出土
15 16	-	東西棟	N-72°-E	側柱	陶磁器・煙管・土器出土
16 15	4・4.5・3.5・4 3・5.5・4・2.5	東西棟	N-74°-E	側柱	陶磁器出土
18	5.5・12.5 18	東西棟	N-54°-E	側柱	
19.5	7・4.5・8 19.5	東西棟	N-57°-E	側柱	陶磁器・銭貨・土器出土
15.5 15.5	7・5・3.5 8・4・3.5	東西棟	N-60°-E	側柱	陶磁器・土器・銭貨出土
21.5 19.5	8・3.5・10 4.5・4・11	東西棟	N-61°-E	側柱	陶磁器・銭貨出土
10.5	-	東西棟	N-56°-E	側柱	鉄製品出土
17	-	東西棟	N-58°-E	側柱	銭貨出土
11	-	東西棟	N-50°-E	側柱	銭貨出土

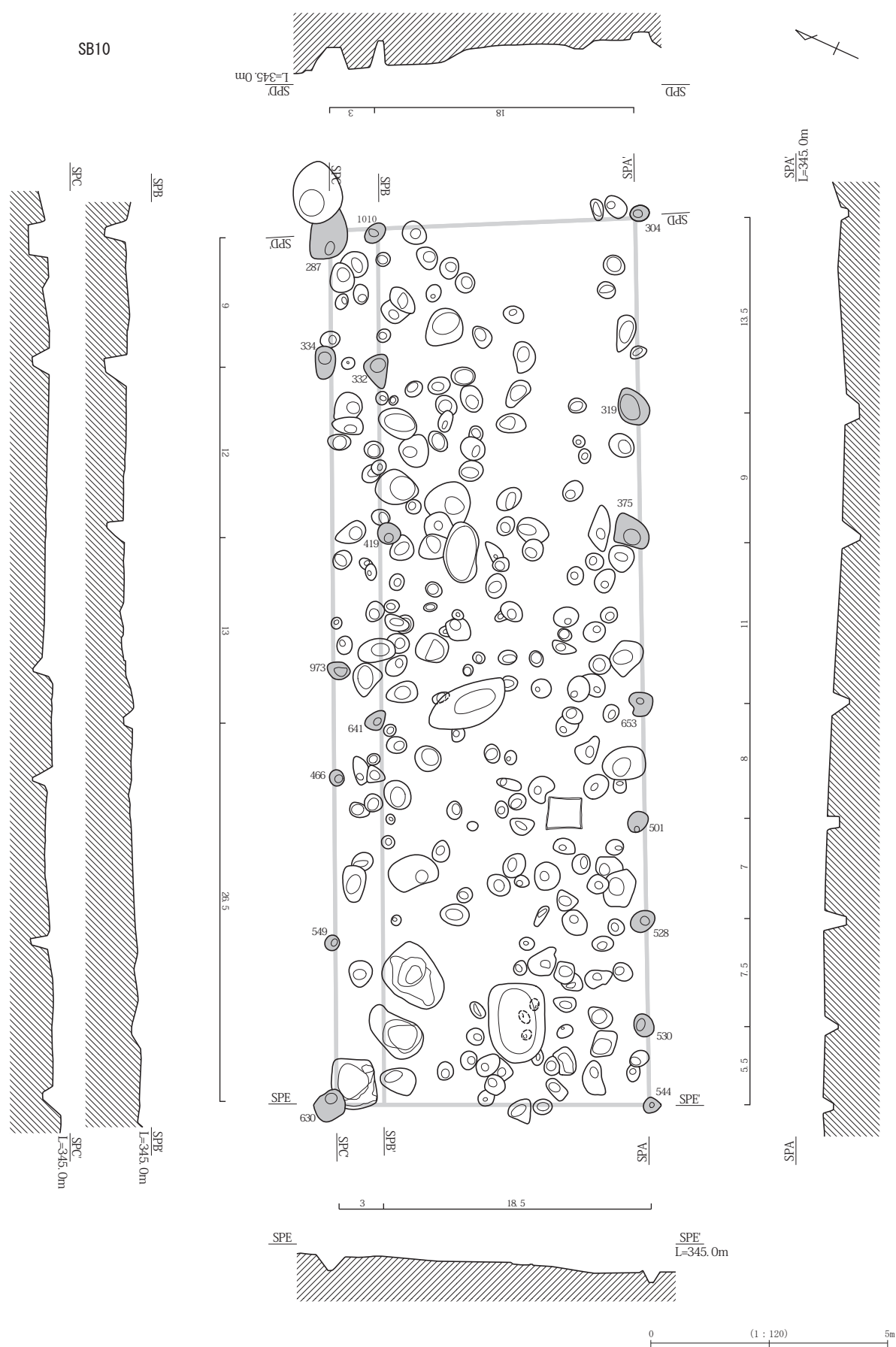
SB5



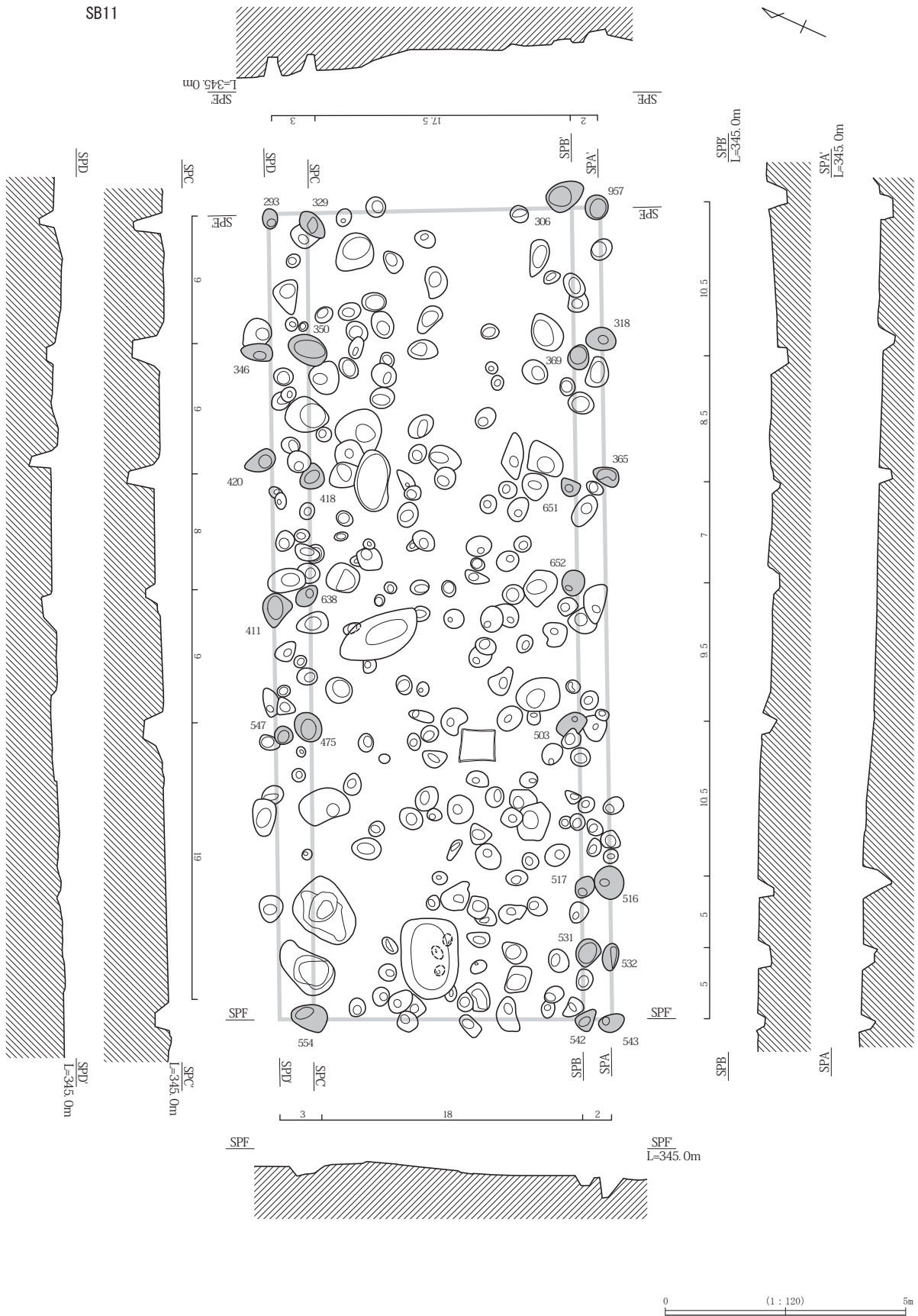
SB7



第354図 SB5・7

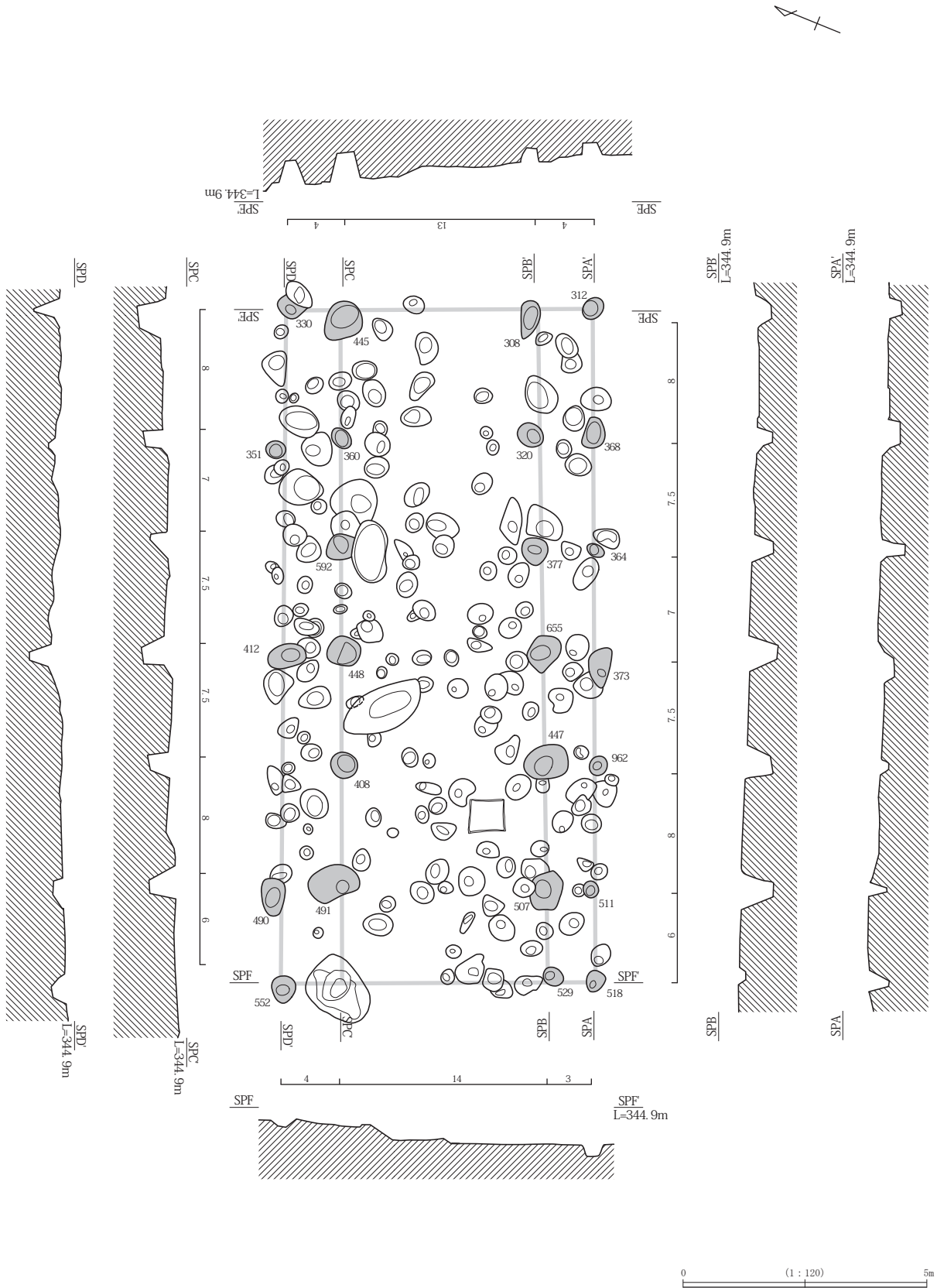


第356図 SB10

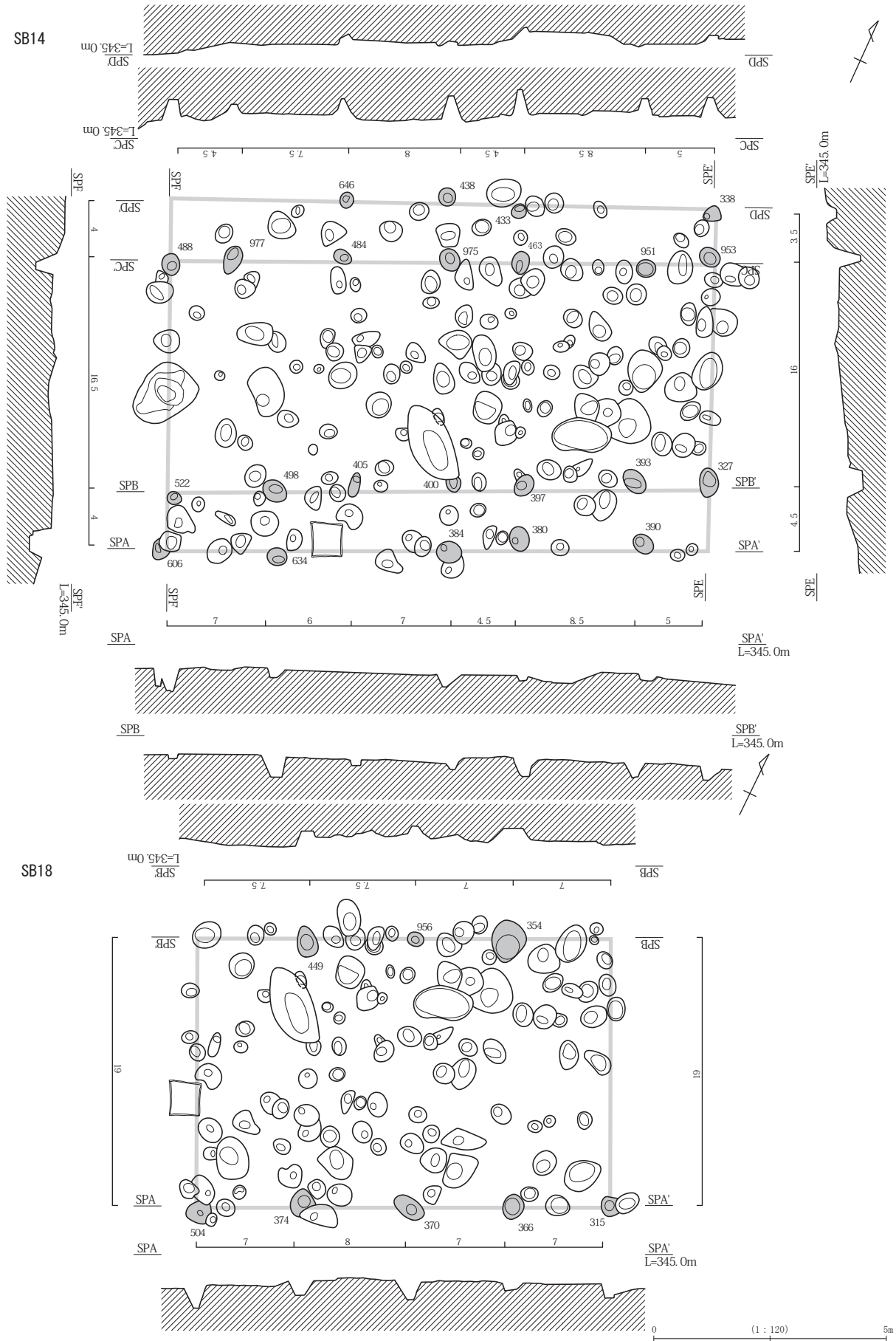


第357図 SB11

SB12

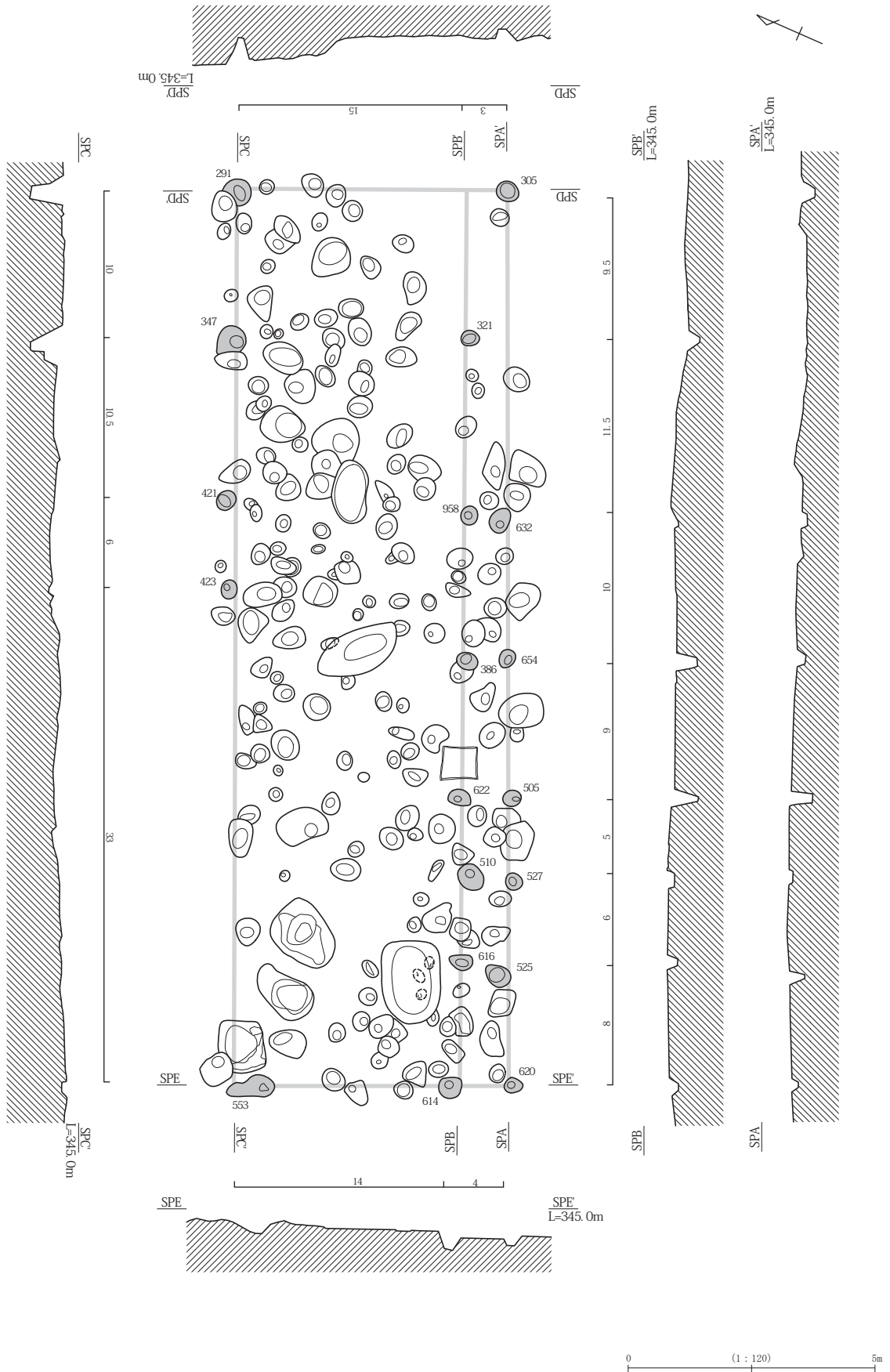


第358図 SB12

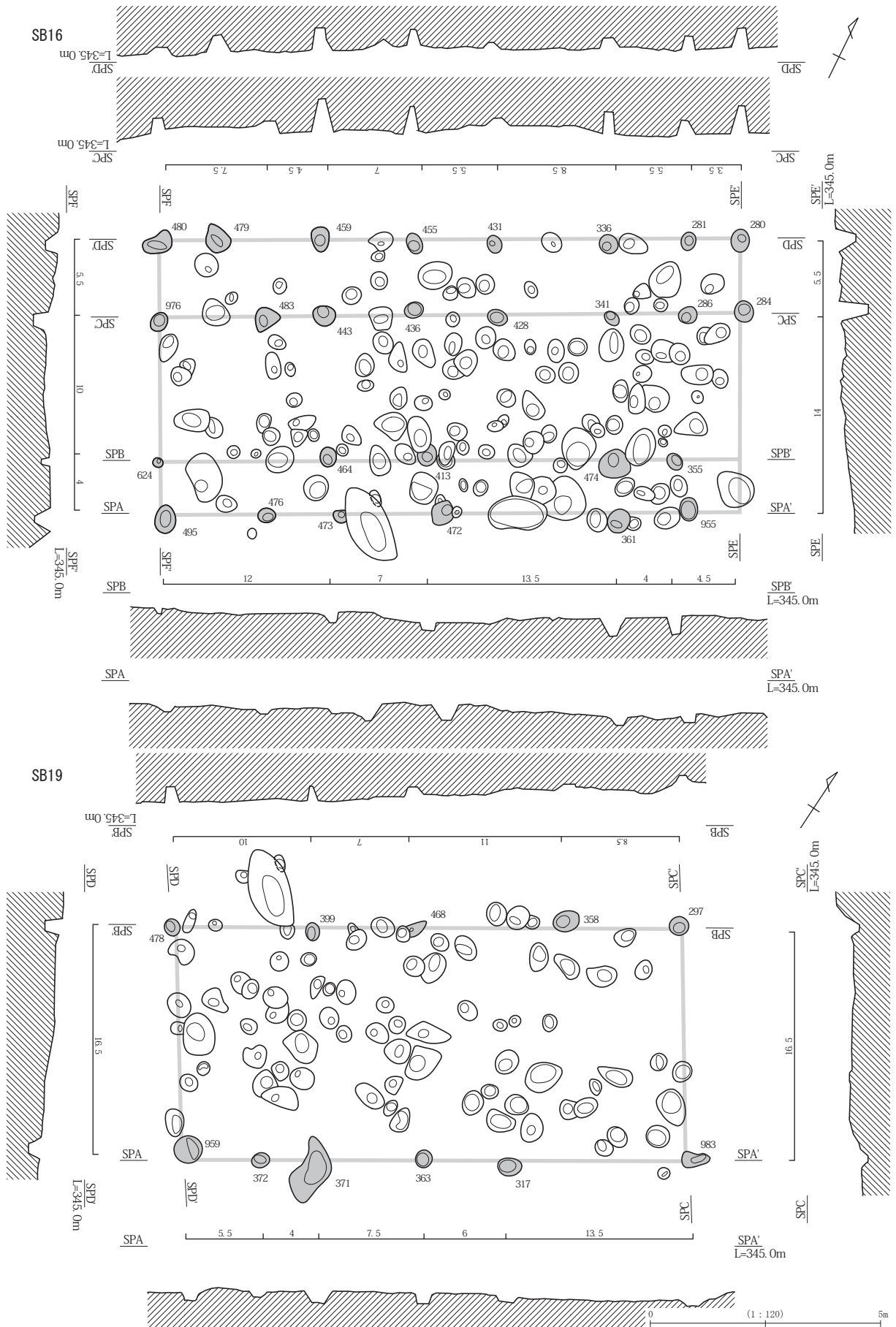


第360図 SB14・18

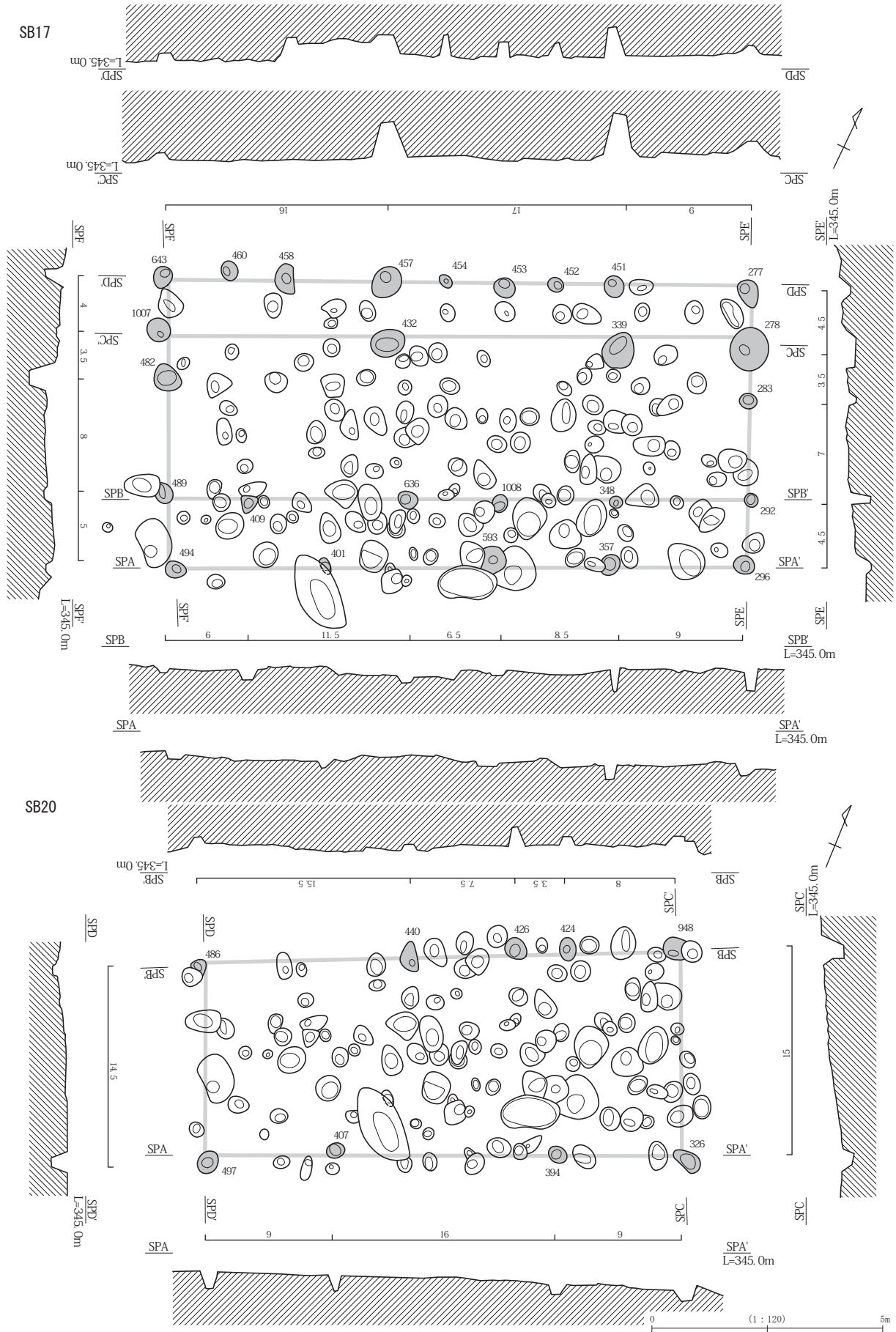
SB15



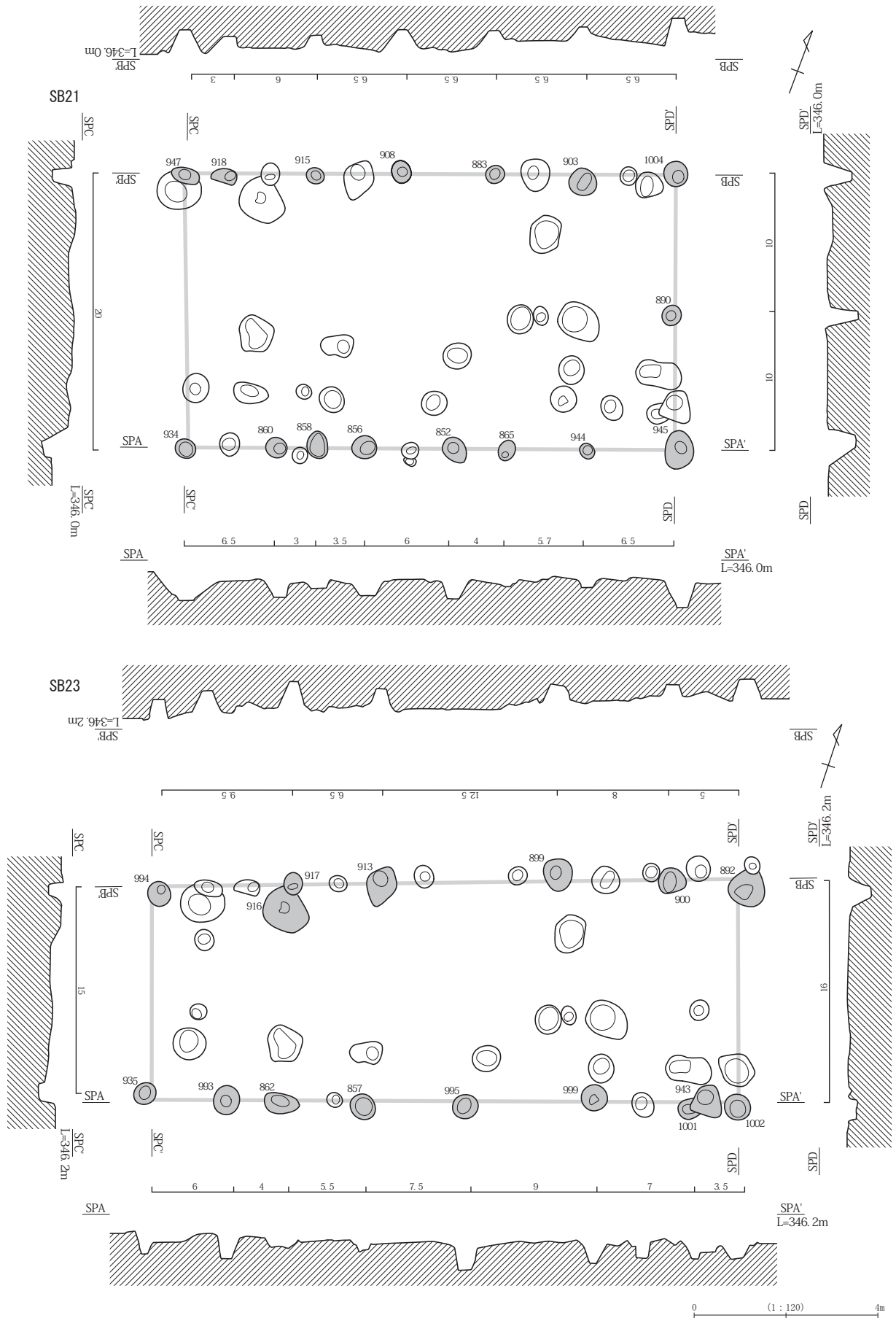
第361図 SB15



第362図 SB16・19

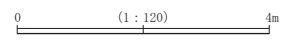
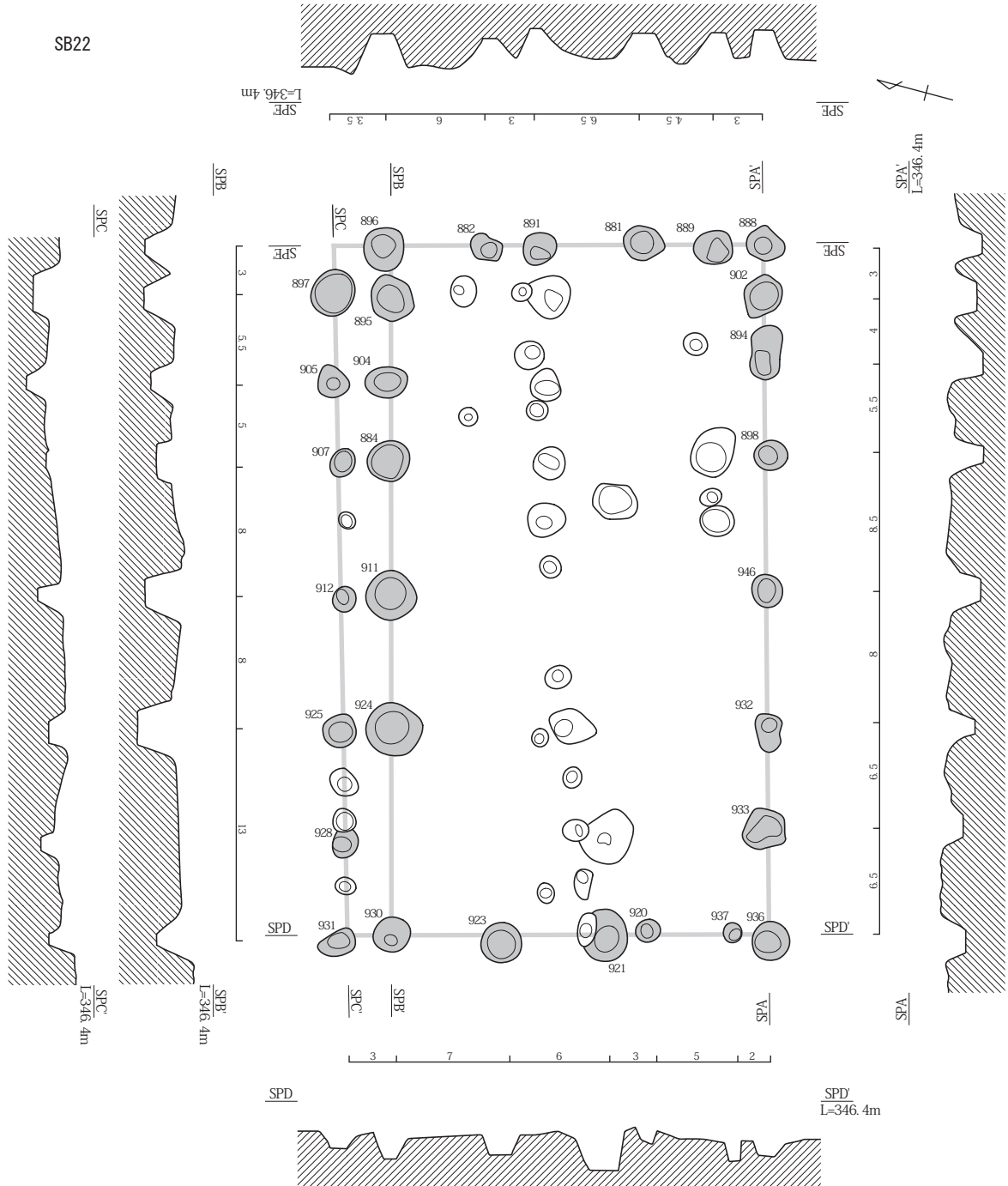


第363図 SB17・20

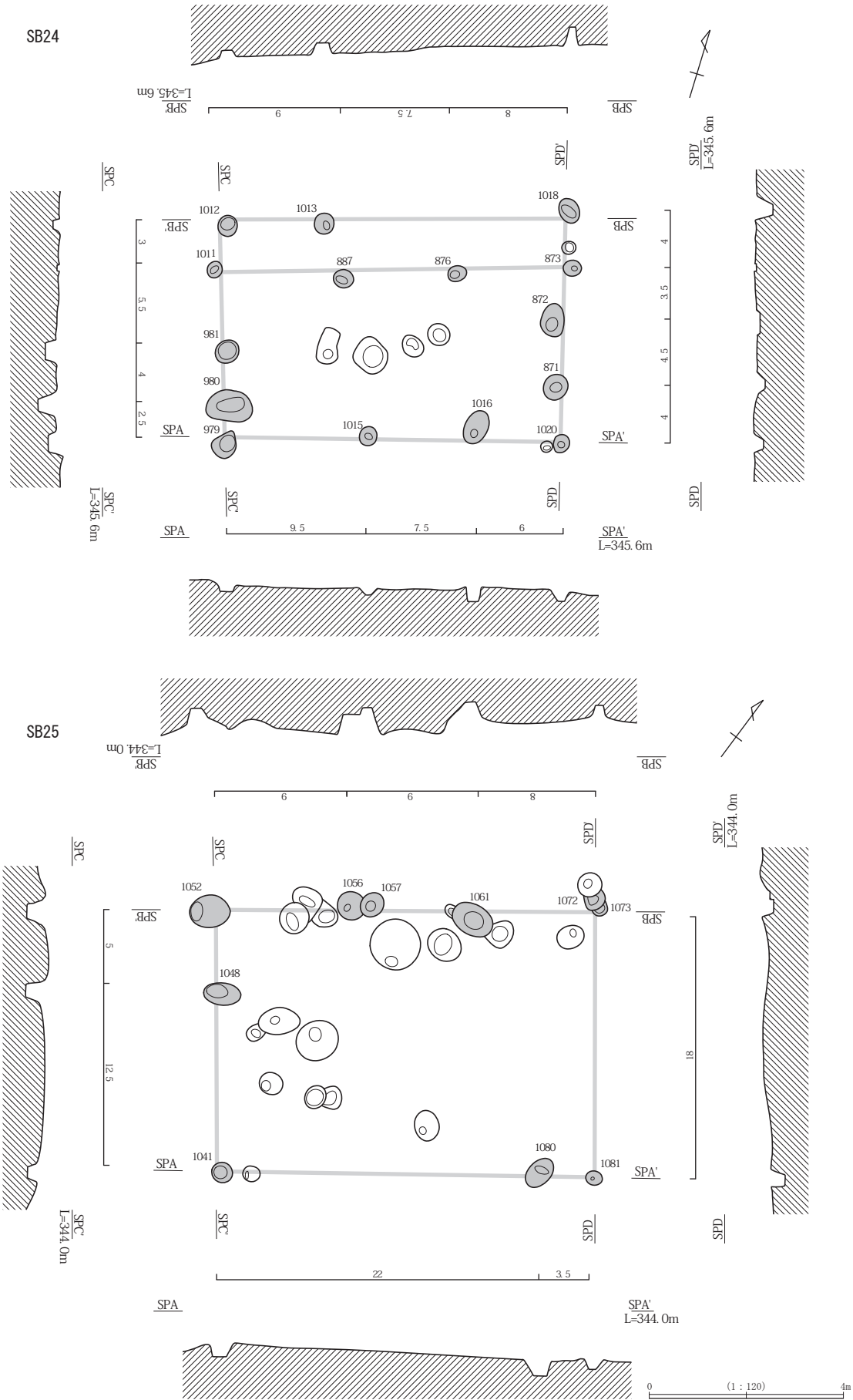


第364図 SB21・23

SB22

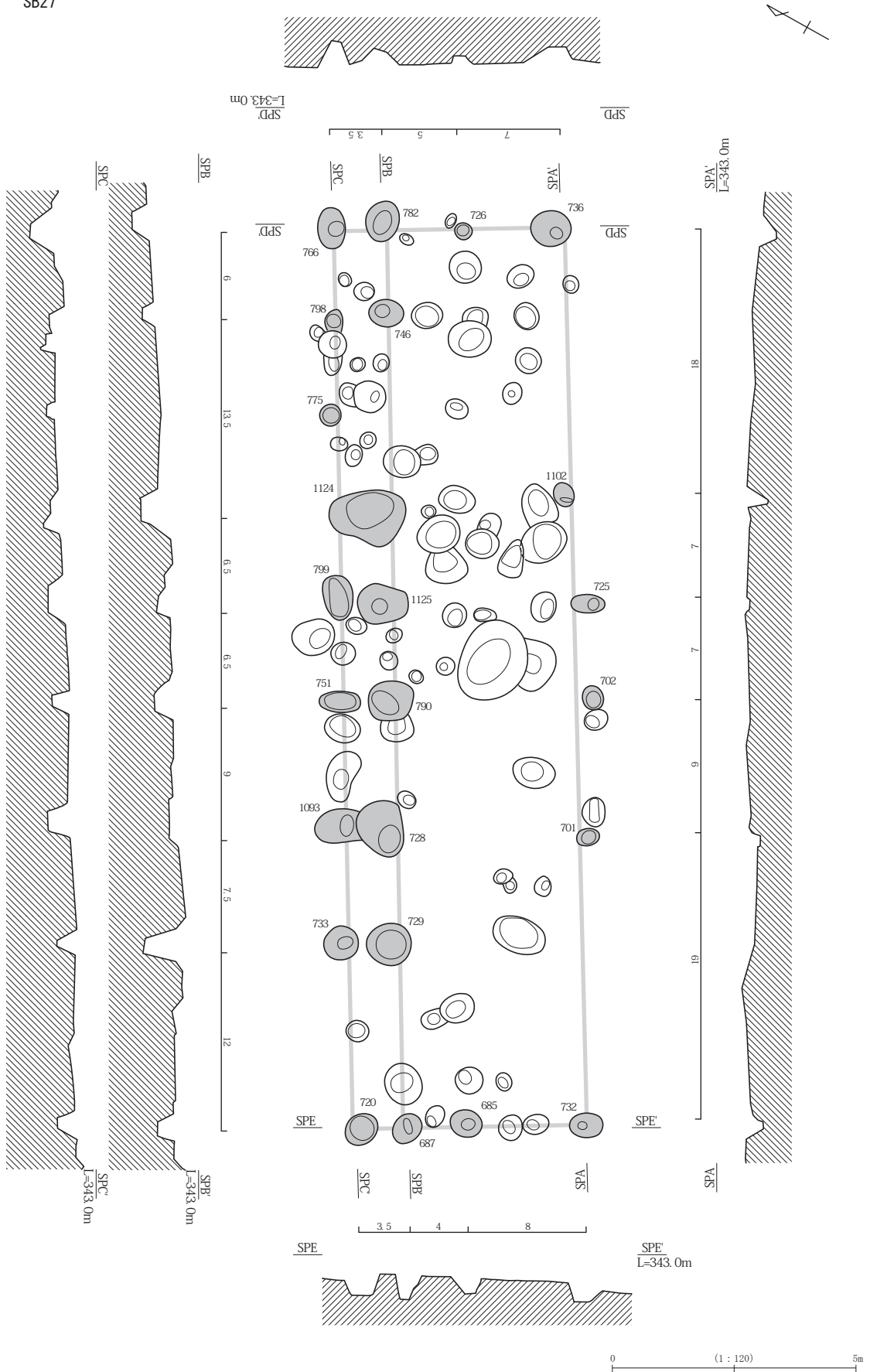


第365図 SB22



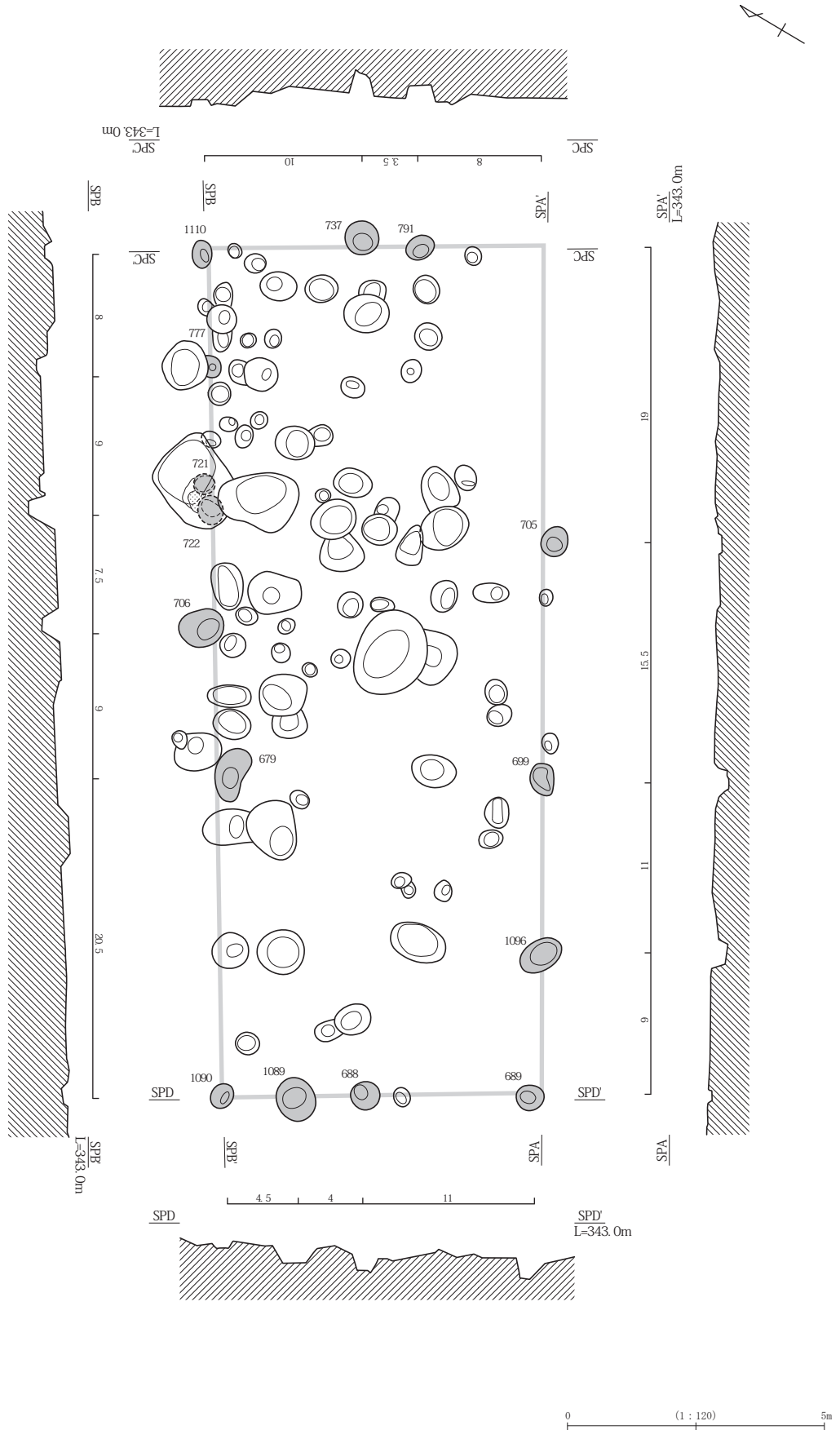
第366図 SB24・25

SB27

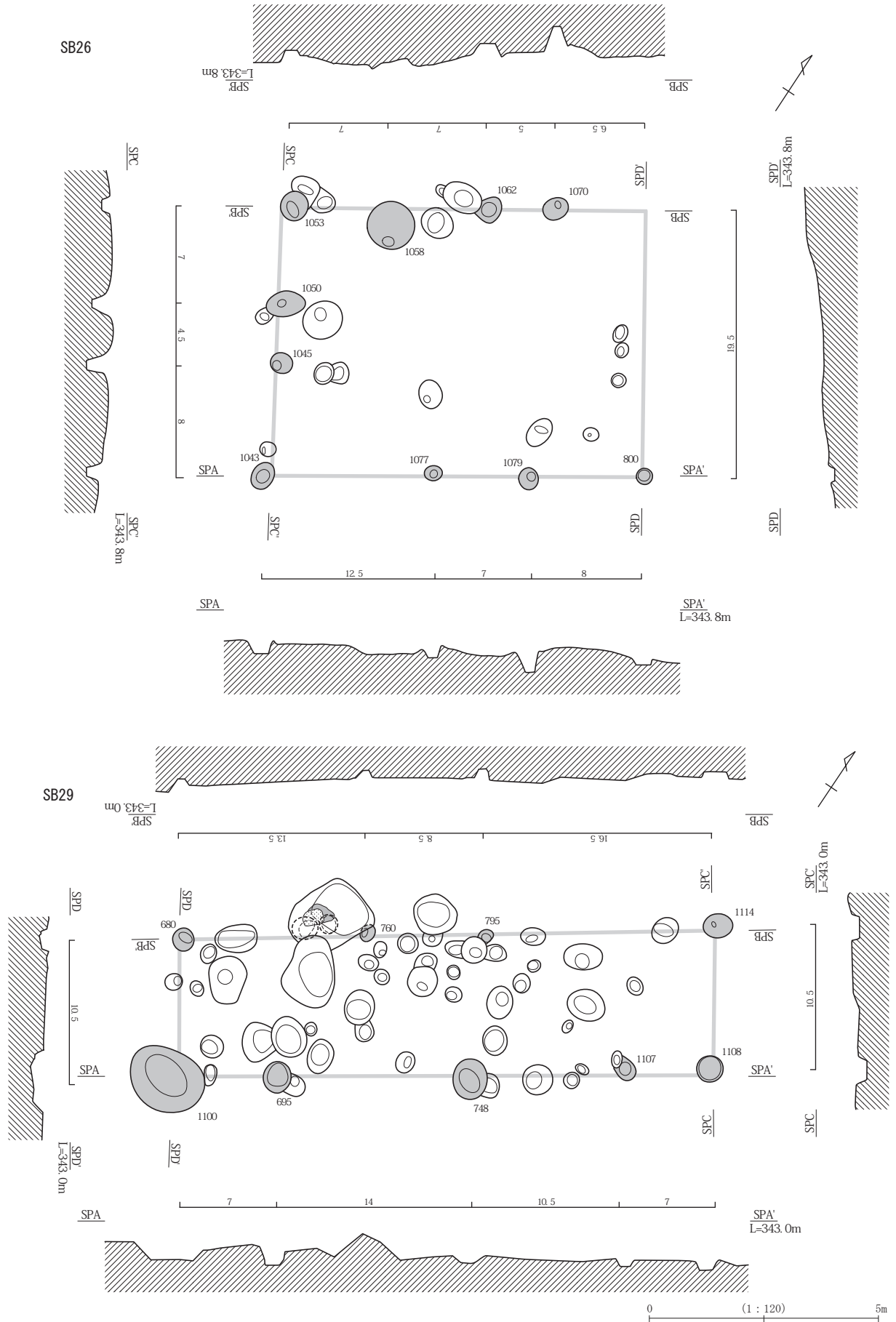


第367図 SB27

SB28



第368図 SB28

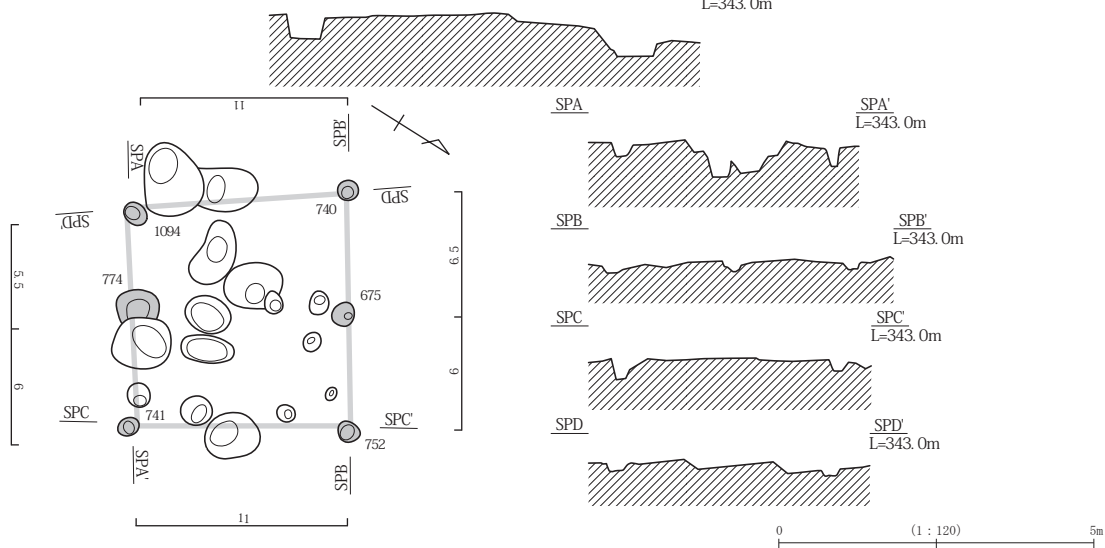


第369図 SB26・29

SB30



SB31



第370図 SB30・31

(2) 井戸跡

SE 1

[位置・検出層位] ⅢC61グリッドに位置する。検出面はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.47×1.21m、深さは90cmである。深さは半截時に確認できたものであり、上層において大型の礫が出土したため、それ以上掘り下げられなかったことが原因である。

[壁・底面] 壁は概ね垂直に立ち上がる。底面は上記の理由から確認できていない。

[堆積土] 黒色～暗褐色土主体である。3層下位には、廃棄された多くの礫を確認できている。

[遺物] 縄文土器1点、剥片石器5点、陶磁器3点、銭貨1点が出土している。図化していないが陶磁器は肥前産陶磁器の小片である。縄文土器及び石器は流れ込みに拠るものである。

[遺構時期] 堆積土と出土遺物から近世に比定され、周辺に形成された掘立柱建物に付随するものと思われる。

SE 2

[位置・検出層位] ⅢC71グリッドに位置する。検出面はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は開口部径1.26m、深さは70cmである。深さは半截時に確認できたものである。これはSE1同様、上層で大型礫が出土したため、それ以上掘り下げられなかったことが原因である。

[壁・底面] 壁は概ね垂直に立ち上がる。

[堆積土] 黒色土主体である。2層中には、廃棄された多くの礫を確認できている。

[遺物] 陶磁器4点、剥片石器3点が出土している。陶磁器は小片のため図化していないが、いずれも在地産陶器である。石器は流れ込みに拠るものと思われる。

[遺構時期] 堆積土と出土遺物から近世に比定され、周辺に形成された掘立柱建物に付随するものと思われる。

(3) 土坑

SK 4

[位置・検出層位] ⅡB89・90グリッドに位置する。検出面はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は1.25×1.11m、深さは53cmである。

[壁・底面] 壁は概ね垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で11層に分けられる。

[遺物] 陶磁器5点、銭貨2点が出土している。銭貨は寛永通寶(1360)である。

[遺構時期] 出土遺物と堆積土から近世以降に比定される。

SK 5

[位置・検出層位] ⅡB78グリッドに位置する。検出面はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.05×0.94m、深さは32cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はやや中央が凹むものの、概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に分けられる。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土から近世に比定される。

SK6

[位置・検出層位] ⅢC62・63グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.31×1.15m、深さは12cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや中央が凹むものの、概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] 縄文土器1点、陶磁器3点、石器1点、銭貨2点が出土している。陶磁器は小片のため図化していないが、肥前産が主体である。銭貨は永楽通宝が1点出土している。縄文土器及び石器は流れ込みに拠るものである。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK7

[位置・検出層位] ⅢC82グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[重複関係] PP276と重複しており、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は長方形である。規模は1.51×0.85m、深さは20cmである。

[壁・底面] 壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土主体で3層に細分される。1層には大量の炭化粒を含むが、焼土は認められない。

[遺物] 陶磁器1点、石器3点が出土している。陶磁器は時期不明の在地産である

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK8

[位置・検出層位] ⅣB84グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] SK14とPP592・593と重複しており、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.28×0.72m、深さは6cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] にぶい黄褐色土主体で2層に細分される。

[遺物] なし。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK9

[位置・検出層位] ⅣB83グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP400・401・473と重複しており。本遺構が新しい。

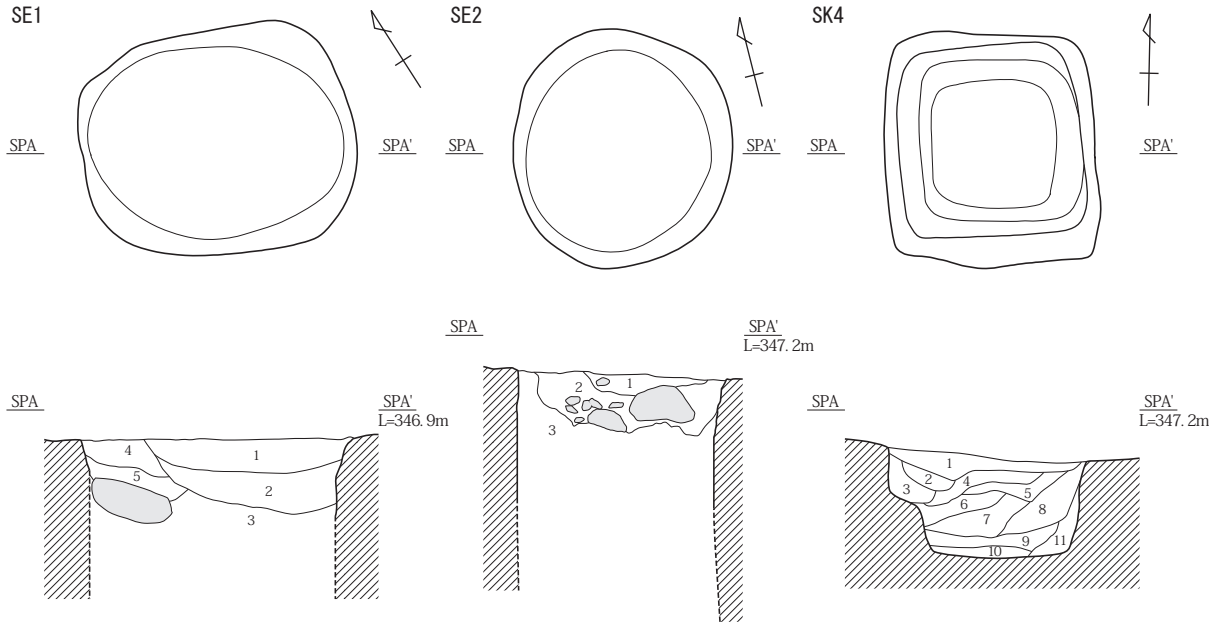
[平面形・規模] 平面形は楕円である。規模は1.81×0.91m、深さは40cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分される。

[遺物] なし。

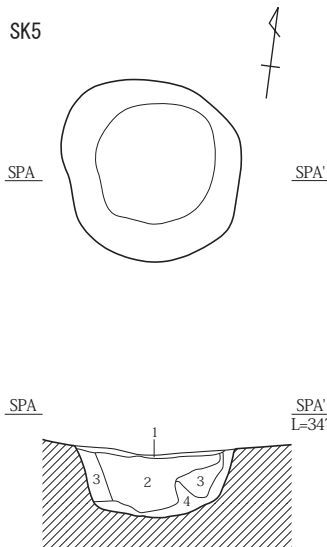
[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。



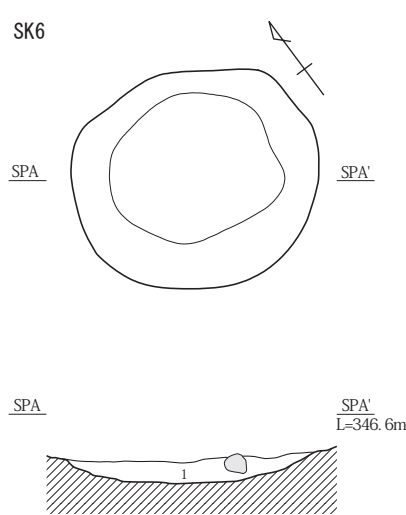
- SE1
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性弱く、しまり並。砂質味が強い。φ 5~10mmの炭化粒を含む。
 - 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり並。
 - 3 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱く、しまりやや弱い。地山ブロック少量含む。
 - 4 3層に類似。
 - 5 褐灰色土 (10YR4/1) 砂質。粘性弱く、しまり弱い。

- SE2
- 1 褐色土 (10YR4/4) 粘性強く、しまりやや強い。地山ブロックと礫をやや多く含む。
 - 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性並、しまりやや弱い。礫を多く含む。
 - 3 2層と類似しているが、礫は認められない。

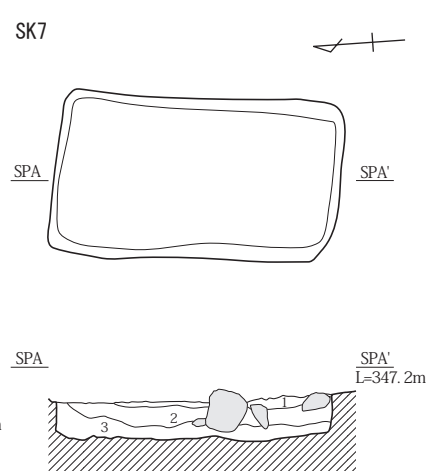
- SK4
- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり並。地山ブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。
 - 3 1層に類似。地山ブロックをやや多く含む。
 - 4 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまり共に強い。地山ブロックは1層と同じ。
 - 5 1層に類似。
 - 6 2層主体。地山ブロックをやや多く含む。
 - 7 6層に類似。地山ブロックを多く含む。
 - 8 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまり共にやや強い。地山ブロック・炭化粒を僅かに含む。
 - 9 7層に類似。さらに地山ブロックが多くなる。
 - 10 8層に類似。地山ブロックを少量含む。
 - 11 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまり共に強い。地山崩落土。



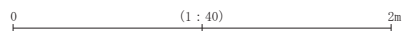
- SK5
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまり共に弱い。
 - 2 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強く、しまり並。
 - 3 2層主体に地山ブロックをやや多く含む。
 - 4 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまり共に強い。地山崩落土。上層の黒褐色土を少量ブロック状に混入する。



- SK6
- 1 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性・しまり共に並。



- SK7
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性・しまり共に弱い。炭化粒を多量に含む。
 - 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまり共に弱い。
 - 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや強く、しまり並。地山ブロックを多く含む。



第371図 SE1・2、SK4~7

SK10

[位置・検出層位] IV B74・84グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] SK8とPP592・593と重複しており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円である。規模は95×93cm、深さは21cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は東側のみ一段低くなり、皿状に凹む。

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分される。

[遺物] なし。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK11

[位置・検出層位] IV B71グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は1.45×0.84m、深さは25cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、北側がやや低くなる。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK12

[位置・検出層位] IV B83・93グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP622と重複しており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は74×64cm、深さは32cmである。

[壁・底面] 木枠を据えていた壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。掘り方の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 木枠内は黒褐色土である。2層の暗褐色土は木枠を固定した際の埋土である。

[遺物] 陶磁器2点、石器1点が出土している。陶磁器は中国産漳州窯碗(1293)、現代の小杯(1299)である。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

[備考] 遺構の性格は水溜に用いられてものと考えられる。

SK13

[位置・検出層位] IV B82・92グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP599～602と重複しており、本遺構が新しい。

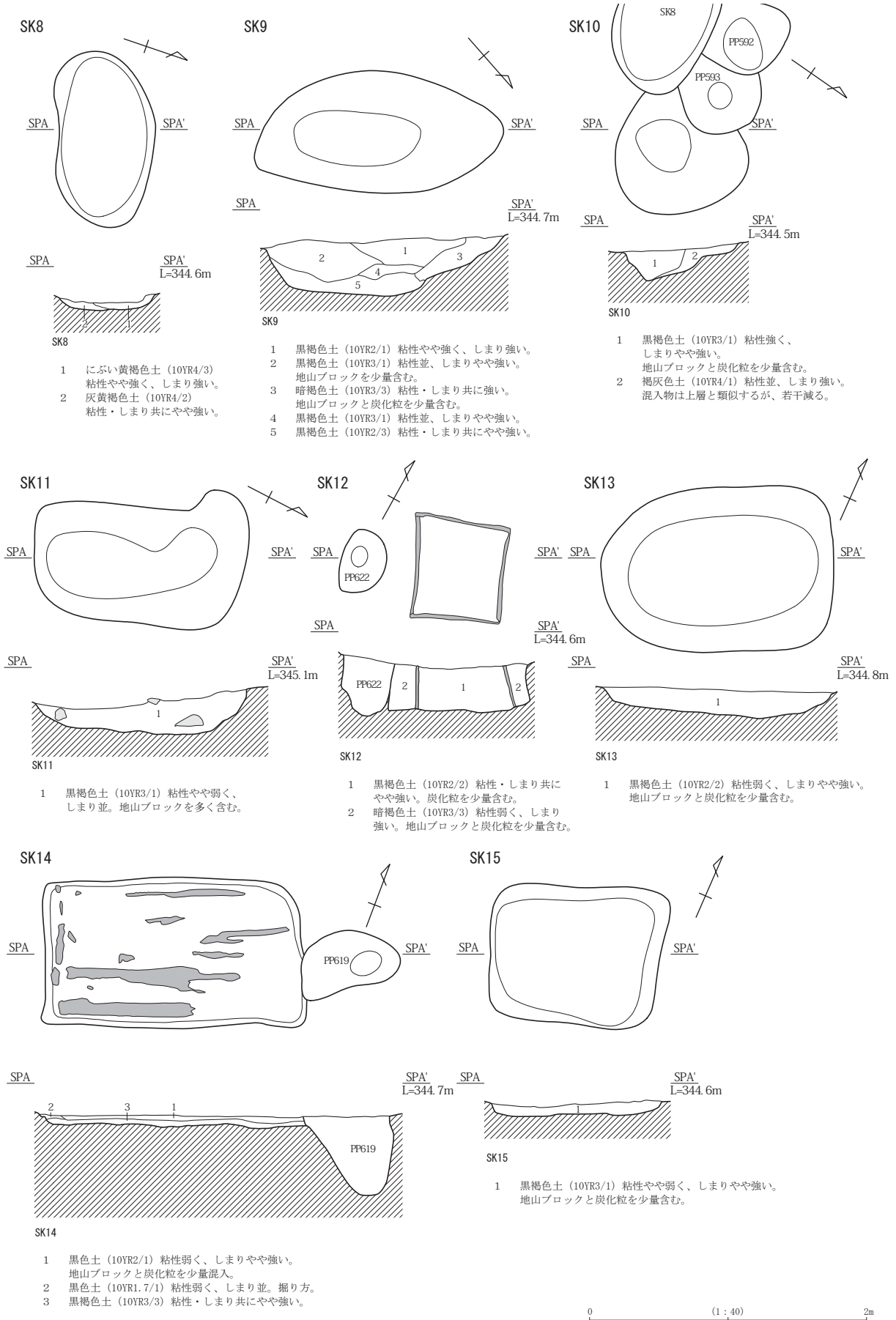
[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は1.68×1.19m、深さは19cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] 陶磁器1点が出土しているが、小片のため詳細は不明である。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。



第372図 SK8～15

SK14

- [位置・検出層位] IV B 91・92グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。
- [重複関係] 複数の柱穴と重複しており、PP619より古く、それ以外よりは新しい。
- [平面形・規模] 平面形は長方形である。規模は1.85×1.09m、深さは9cmである。
- [壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦であり、板材が敷かれている。
- [堆積土] 黒色土主体で3層に細分される。
- [遺物] 陶磁器1点が出土している。18世紀代の肥前産鉢(1174)である。
- [遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。
- [備考] 遺構の性格は水溜などに用いられてものと考えられる。

SK15

- [位置・検出層位] IV B 91グリッドに位置する。検出層位はⅢ層である。
- [平面形・規模] 平面形は隅丸方形である。規模は1.29×0.99m、深さは10cmである。
- [壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。
- [堆積土] 黒褐色土である。
- [遺物] 陶磁器1点が出土しているが、小片のため詳細は不明である。
- [遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK16

- [位置・検出層位] Ⅲ B 99・100グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。
- [重複関係] PP596と重複しており、本遺構が古い。
- [平面形・規模] 平面形は隅丸方形である。規模は1.74×1.45m、深さは6cmである。
- [壁・底面] 残存している壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。
- [堆積土] 黒褐色土である。
- [遺物] 陶磁器3点が出土しているが、小片のため詳細は不明である。
- [遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK17

- [位置・検出層位] Ⅲ C 10グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。
- [平面形・規模] 平面形は円形である。規模は97×94cm、深さは8cmである。
- [壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は皿状であり、南側が低くなる。
- [堆積土] 黒色土である。
- [遺物] 陶磁器3点が出土しているが、小片のため詳細は不明である。
- [遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK18

- [位置・検出層位] IV B 81・91グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。
- [重複関係] PP612・613と重複しているが、本遺構が新しい
- [平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.43×1.31m、深さは22cmである。
- [壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は若干凹凸が認められるものの概ね平坦である。

[堆積土] 黒色土主体で2層に細分される。

[遺物] 陶磁器2点が出土している。18世紀代の肥前産皿(1226)である

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK19

[位置・検出層位] IV B81・82グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP630と重複しており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形である。規模は1.09×0.93m、深さは34cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分される。

[遺物] 陶磁器3点、煙管1点が出土している。陶磁器については小片のため詳細は不明である。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK20

[位置・検出層位] IV B71グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.00×0.99m、深さは14cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの中央が皿状に凹む。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] 陶磁器2点が出土しているが、小片のため詳細は不明である。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK21

[位置・検出層位] IV B62グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.82×1.02m、深さは28cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分される。

[遺物] なし。

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK22

[位置・検出層位] V A99グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.95×1.38m、深さは28cmである。

[壁・底面] 壁は概ね外傾しているが、西壁のみ緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分される。

[遺物] 陶磁器・煙管1点が出土している。陶磁器は18世紀代の瀬戸・美濃産皿(1235)、煙管は吸い口(1341)である

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

SK23

[位置・検出層位] V A98グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] 複数の柱穴と重複しており、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形である。規模は1.67×1.49m、深さは29cmである。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦だが、西壁のみ一段低くなる。

[堆積土] 黒褐色土主体で6層に細分される。

[遺物] 陶磁器36点、煙管5点が出土している。陶磁器は18世紀代の肥前産皿(1229)以外は在地産が多く詳細は判然としない。煙管は、雁首(1331・1332)、吸い口(1337・1338・1340)がある

[遺構時期] 掘立柱建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

(4) 性格不明遺構

SX1

[位置・検出層位] II C47・48グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[重複関係] SB4と重複しており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は2.01×0.69m、深さ51cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[堆積土] 黒色土主体で3層に細分される。

[遺物] 陶磁器6点、剥片1点が出土している。陶磁器には16世紀代の中国産青磁碗(1272)が認められる以外にも、中国産・肥前産磁器などの小片が含まれる。

[遺構時期] 堆積土及び出土遺物から、近世に比定される。

SX2

[位置・検出層位] II C68・69に位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は3.35×1.12～1.83m、深さは6cmである。

[壁・底面] 壁を僅かに残す南壁は外傾するが、北壁は概ね削平されている。底面は若干の凹凸が認められるものの概ね平坦である。

[堆積土] 暗褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土から近世に比定されるものと思われるが、詳細は不明である。

SX3

[位置・検出層位] IV B62・63グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。

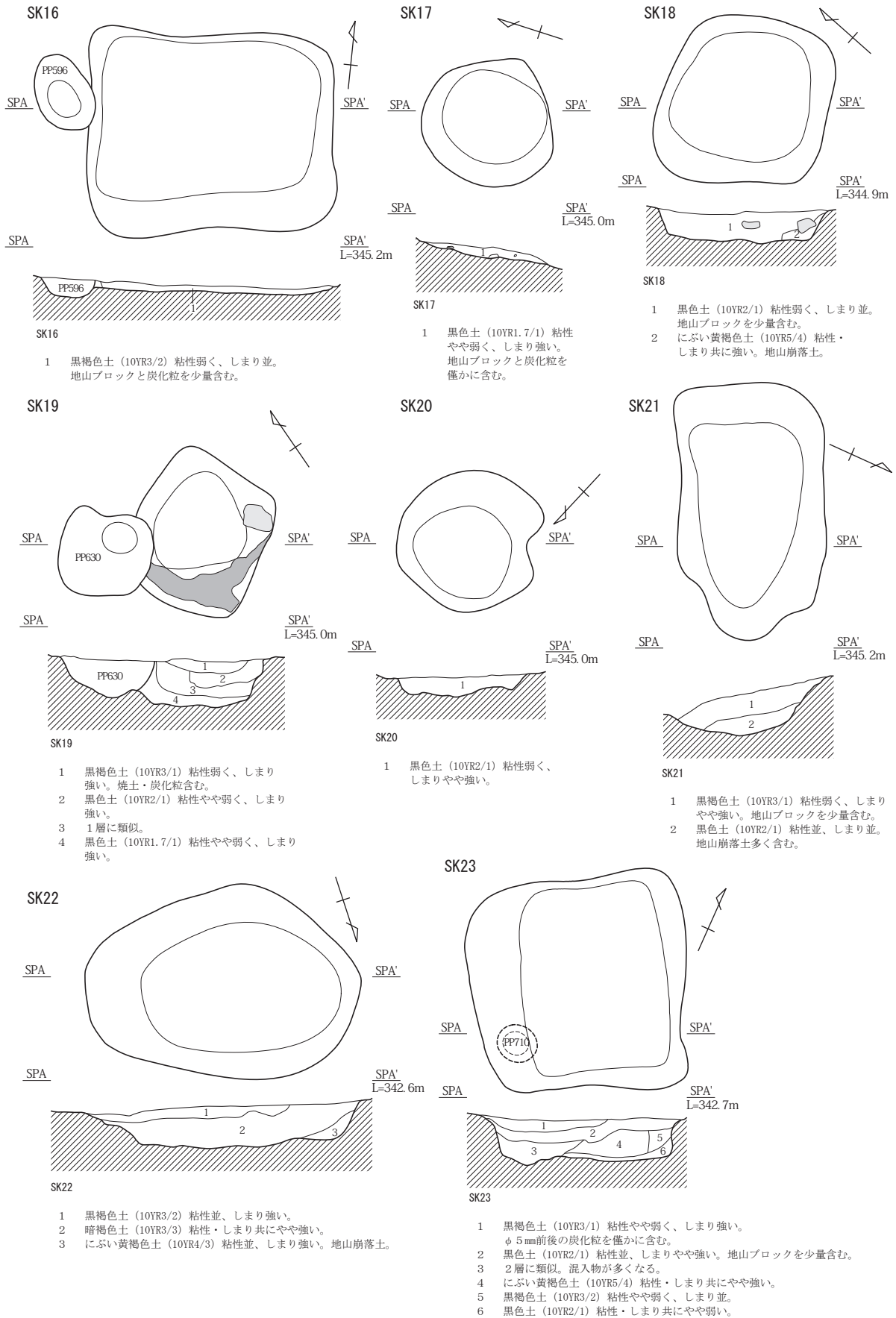
[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は4.39×2.51m、深さは10cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] 陶磁器8点が出土している。陶磁器には18世紀代の肥前産磁器の皿(1228・1244)が認められる。

[遺構時期] 堆積土及び周辺の遺構配置から近世に比定される。



第373図 SK16~23

SX4

[位置・検出層位] IV B82グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 遺構の中央に焼土が広がる。平面形はいずれも楕円形である。焼土の規模は83×62cm、厚さは8cmである。掘り方の規模は1.21×0.82m、深さは43cmである。

[壁・底面] 壁は外傾ないし垂直に立ち上がる。底面は凹凸があり、南側が低く皿状に凹む。

[堆積土] 焼土以下の堆積は、黒褐色土主体である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 建物の堆積土と類似していることから近世に比定される。

[備考] 遺物を伴わないことから遺構の性格は不明であるが、地下構造を有することと強い焼成が認められることから鍛冶炉の可能性はある。形状や地下構造が類似するSX5～7は同様の性格を有するものと思われる。また、本遺構は、建物の周辺に形成されていることから、それらに付随する施設と考えられる。

SX5

[位置・検出層位] IV B82グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 遺構の中央に灰が認められ、その外側には焼土が広がる。平面形はいずれも楕円形である。灰の規模は40×28cm、厚さは2cmである。焼土の規模は54×34cm、厚さは3cmである。掘り方の規模は1.42×1.08m、深さは40cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸があり、南側が低く皿状に凹む。

[堆積土] 焼土以下の堆積は、黒褐色土主体である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土から近世に比定される。

[備考] 遺構の性格はSX4で述べたような理由から鍛冶炉の可能性はある。本遺構も建物に付随する施設と考えられる。

SX6

[位置・検出層位] IV B81・82グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP647と重複しており、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 遺構の中央に灰が認められ、その外側には焼土が広がる。平面形はいずれも楕円形である。灰の規模は82×41cm、深さは6cmである。焼土の規模は102×82cm、厚さは7cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は皿状に凹む。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土から近世に比定される。

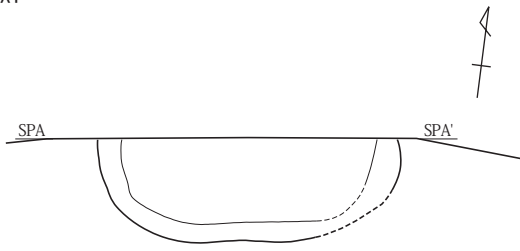
[備考] SX4・5のように地下構造は認められないものの、焼土と灰の堆積状況は類似している。このことから単なる焼土遺構ではなく、鍛冶炉の可能性はある。本遺構も建物に付随する施設と考えられる。

SX7

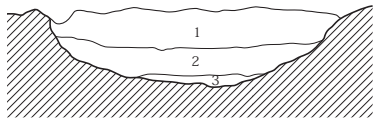
[位置・検出層位] V A98グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[重複関係] PP1124と重複しており、本遺構が古い。

SX1



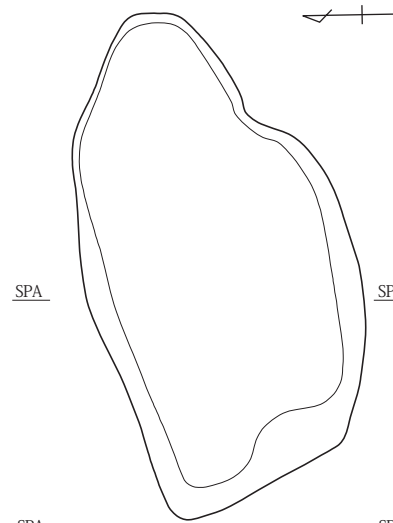
SPA SPA'
L=347.5m



SX1

- 1 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
- 2 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性やや弱く、しまりやや弱い。砂質味強い。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまり共にやや弱い。地山崩落土少量含む。

SX2



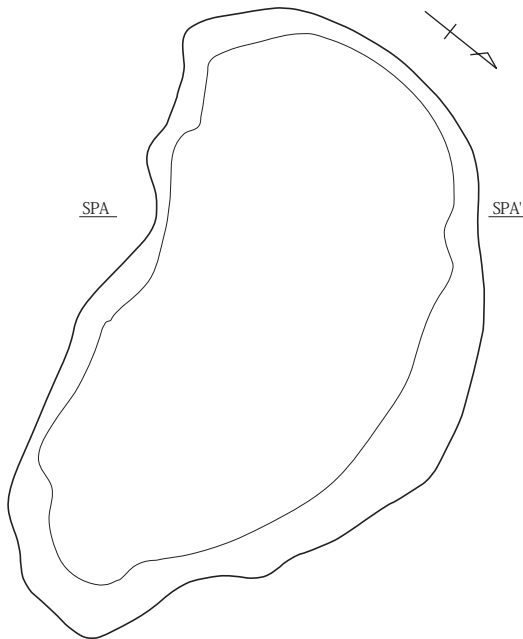
SPA SPA'
L=347.6m



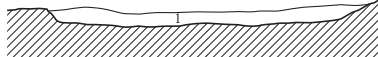
SX2

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまり共にやや弱い。

SX3



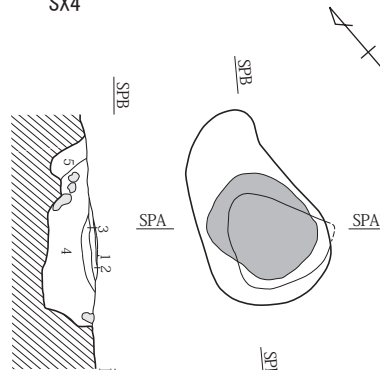
SPA SPA'
L=344.9m



SX3

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまりやや強い。地山ブロック・炭化粒を少量含む。

SX4



SPB SPA SPA'
L=344.9m



SX4

- 1 橙色土 (2.5YR6/6) 粘性弱く、しまり強い。焼土。
- 2 灰褐色土 (5YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。焼土。
- 3 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。焼土を少量混入。
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。地山ブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5~10mmの炭化粒と焼土をやや多く含む。

0 (1:50) 2m

第374図 SX1~4

[平面形・規模] 遺構の中央に灰と焼土が広がる。平面形はいずれも不整形である。灰の規模は45×33cm、深さは2cmである。焼土の規模は59×33cm、厚さは5cmである。掘り方の規模は1.72×1.21m、深さは25cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦であるものの、東側のみ一段低くなる。

[堆積土] 焼土以下は、焼土や灰まじりの土層が主体となる。

[遺物] 陶磁器4点が出土している。陶磁器は肥前産猪口(1262)、仏飯器(1258)、蓋(1264)や相馬産火入(1186)である。

[遺構時期] 堆積土から近世に比定される。

[備考] 遺構の性格は、SX4・5と類似した形状や地下構造を有することから、それらと同様の性格が考えられる。本遺構も建物に付随する施設と考えられる。

(5) 焼 土 遺 構

SN 1

[位置・検出層位] V A99グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は67×63cm、厚さは5cmである。

[堆積土] にぶい赤褐色土とにぶい黄褐色土が主体である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 遺構配置から近世に比定される。

SN 2

[位置・検出層位] V A99グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は98×89cm、深さは8cmである。

[堆積土] 炭の上のにぶい赤褐色が形成されている。

[遺物] 陶磁器1点が出土している。

[遺構時期] 遺構配置から近世に比定される。

SN 3

[位置・検出層位] IV B59・60グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は58×44cm、厚さは7cmである。

[堆積土] にぶい赤褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 遺構配置から近世に比定される。

SN 4

[位置・検出層位] V B 9グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

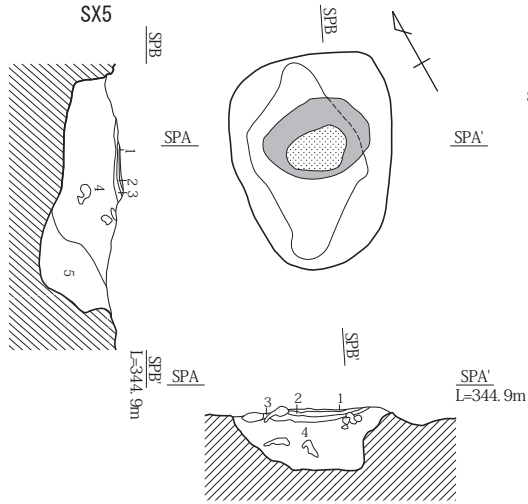
[平面形・規模] 平面形は不整形円形である。規模は80×51cm、厚さは5～14cmである。

[堆積土] にぶい赤褐色土である。

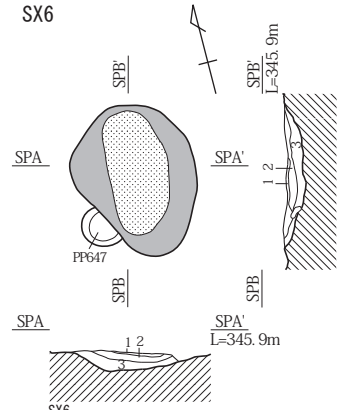
[遺物] なし。

[遺構時期] 遺構配置から近世に比定される。

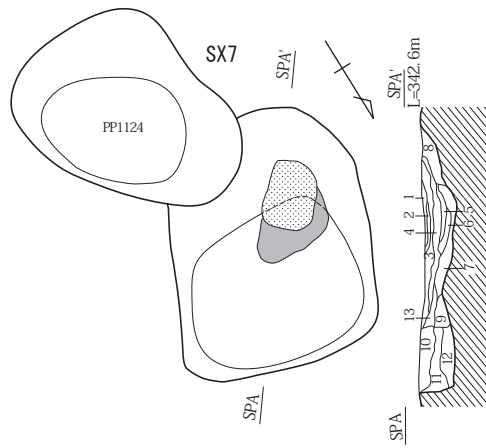
V 検出された遺構と遺物



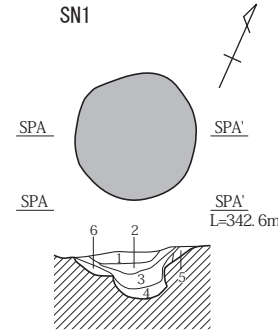
- SX5
- 1 灰色土 (10YR8/1) 粘性・しまり共に弱い。
 - 2 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 焼土。粘性弱く、しまり強い。
 - 3 暗赤褐色土 (5YR3/2) 焼土。粘性弱く、しまり強い。
 - 4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
 - 5 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性並、しまりやや強い。



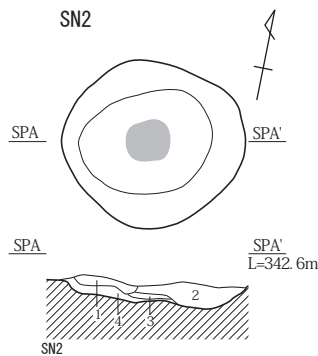
- SX6
- 1 赤灰色土 (2.5Y5/1) 粘性・しまり共に弱い。炭化粒をやや多く含む。灰。
 - 2 灰赤色土 (2.5Y6/2) 粘性・しまり共に弱い。灰。
 - 3 暗赤褐色土 (5YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。焼土。



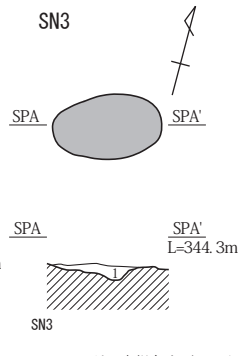
- SX7
- 1 灰白色土 (10YR8/2) 粘性なし、しまり強い。灰。
 - 2 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 粘性なし、しまり強い。焼土。
 - 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性やや弱く、しまりやや強い。φ 5mmの炭化粒を少量含む。
 - 4 褐灰色土 (5Y5/1) 粘性なし、しまり強い。砂質強い。
 - 5 明赤褐色土 (5YR5/6) 粘性なし、しまり強い。
 - 6 灰褐色土 (5Y4/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
 - 7 灰赤色土 (2.5Y4/2) 粘性弱く、しまりやや強い。φ 5mmの炭化粒を少量含む。
 - 8 灰赤褐色土 (10YR4/2) 粘性やや弱く、しまり並。
 - 9 赤灰色土 (2.5Y4/1) 粘性弱く、しまりやや強い。
 - 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまり共に強い。
 - 11 灰赤色土 (2.5Y4/2) 粘性なし、しまり強い。
 - 12 9層に類似。
 - 13 3層に類似。



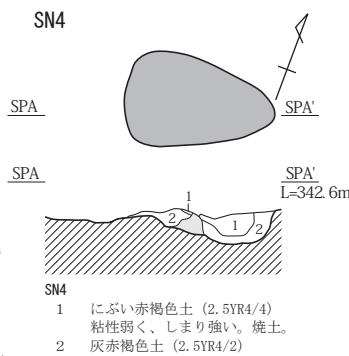
- SN1
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性並、しまり強い。φ 5~10mmの焼土を少量含む。
 - 2 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4) 粘性なし、しまり強い。焼土。
 - 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまり共にやや強い。
 - 4 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性・しまり弱い。炭。
 - 5 にぶい赤褐色土 (5YR4/4) 粘性なし、しまり強い。焼土。
 - 6 暗赤褐色土 (5YR3/2) 粘性なし、しまり強い。焼土。



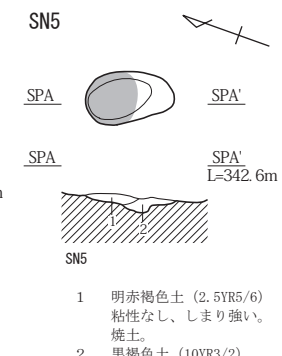
- SN2
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性・しまり共にやや強い。
 - 2 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性並、しまりやや強い。
 - 3 にぶい赤褐色土 (5YR4/4) しまり強く、粘性弱い。焼土。
 - 4 黒色土 (10YR1.7/1) 炭。



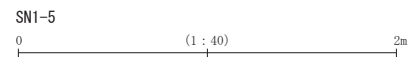
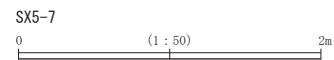
- SN3
- 1 にぶい赤褐色土 (5YR5/4) 粘性なし、しまり強い。



- SN4
- 1 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4) 粘性弱く、しまり強い。焼土。
 - 2 灰赤褐色土 (2.5YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。焼土。



- SN5
- 1 明赤褐色土 (2.5YR5/6) 粘性なし、しまり強い。焼土。
 - 2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。



第375図 SX5、SN1~5

SN5

[位置・検出層位] V B 8 グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。北側に焼土が広がる長軸28cm、厚さは5cmである。

[堆積土] 明赤褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 近世もしくはそれ以降に比定される。

(6) 溝 跡

SD1

[位置・検出層位] Ⅲ B47～Ⅲ C29グリッドに跨って位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] 概ね上端は平行している。軸線は南北方向である。段丘の先端部と内陸部を分断するように配置されている。規模は全長43.95m、幅は2.18～3.95m、深さは北端部から中央部付近までは66～90cmと深く、南端部へ向かうにつれ浅くなる。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は基盤の礫層まで掘り下げられており、概ね平坦である。

[堆積土] 暗・黒褐色主体に10層に細分される。

[遺物] 縄文土器1点、石器36点、国産・中国産陶磁器24点、銭貨1点が出土している。陶磁器11点を図化しており、1129・1134は大窯Ⅱ～Ⅲ期の瀬戸・美濃産皿、1142・1143、1148・1152・1153は肥前・唐津産皿、1281・1283・1285・1294は漳州窯の碗である。これらの所属年代は、いずれも16世紀後半～17世紀初に限定されている。また、図化していない陶磁器についても概ね同時期のものが主体となり、それより新しい時期は少ない。銭貨は永楽通宝(1450)である。出土遺物には石器が多い理由として、旧石器時代の集中区に隣接しているため流れ込んだものと考えられる。

[遺構時期] 堆積土及び陶磁器などの出土遺物から、近世初頭のものと思われる。

[備考] 周辺には近世初頭の掘立柱建物が存在することから、それらの形成時期と同じくして段丘を区画するために配置されたものと考えられる。

SD2

[位置・検出層位] Ⅱ C56・66・67グリッドに位置する。検出層位はⅢa層である。

[平面形・規模] L字状である。規模は全長6.9m、幅は15～33cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 堆積土及び遺構配置から近世に比定される。

[備考] エリア1の建物群の区画溝と考えられる

SD3

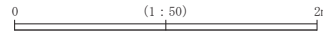
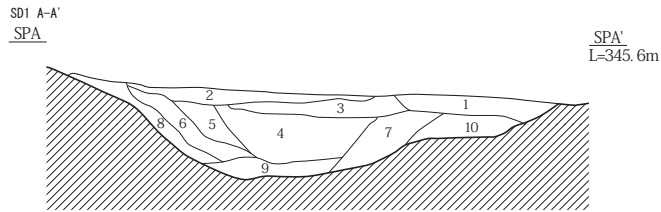
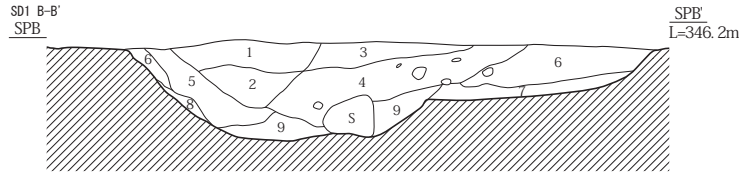
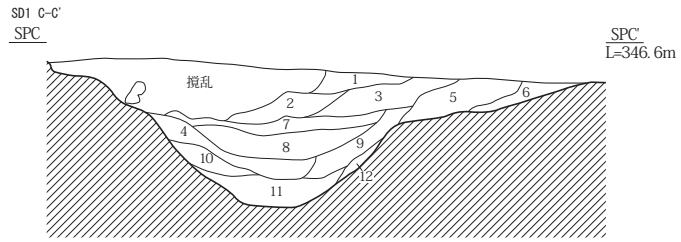
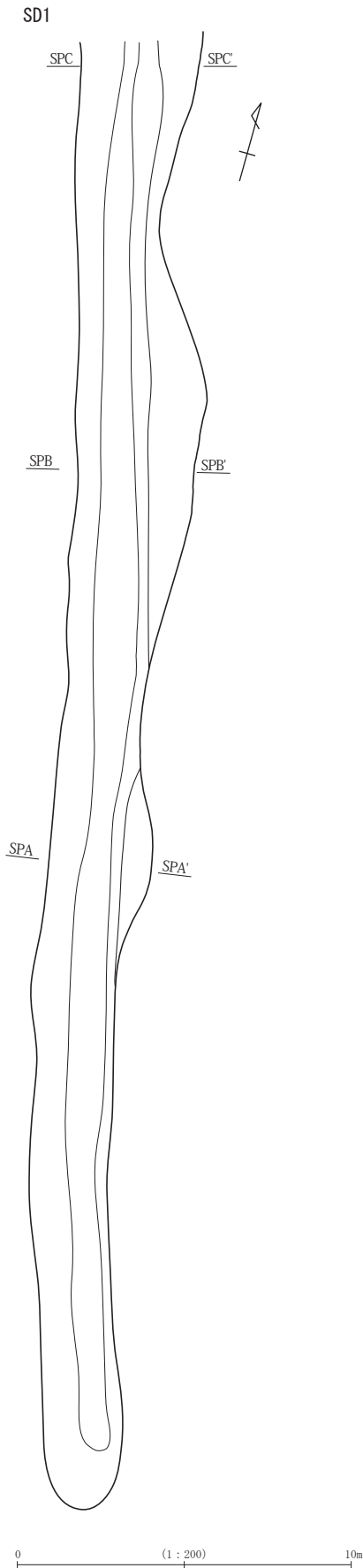
[位置・検出層位] V A97・98、V B6・16グリッドに位置する。検出層位はⅢb層である。

[平面形・規模] L字状である。規模は全長18.8m、幅は0.47～1.09mである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] 陶磁器24点、石器76点が出土している。陶磁器は小片が多いため図示していない。石器集中



SD1 A-A'

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや強い。地山ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱く、しまり強い。炭化粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性並、しまりやや強い。地山ブロックと炭化粒を少量含む。
- 4 3層と類似、やや暗みを帯びる。混入物も同じだが、僅かに焼土を含む。
- 5 2層に類似、地山ブロックを少量含む。
- 6 5層と同じ。
- 7 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや弱く、しまり強い。地山ブロックを僅かに含む。
- 8 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。地山ブロックをやや多く含む。
- 9 8層に類似するが、やや明るみが増す。混入物の量が減る。
- 10 7層に類似するが、地山崩落土が入る。

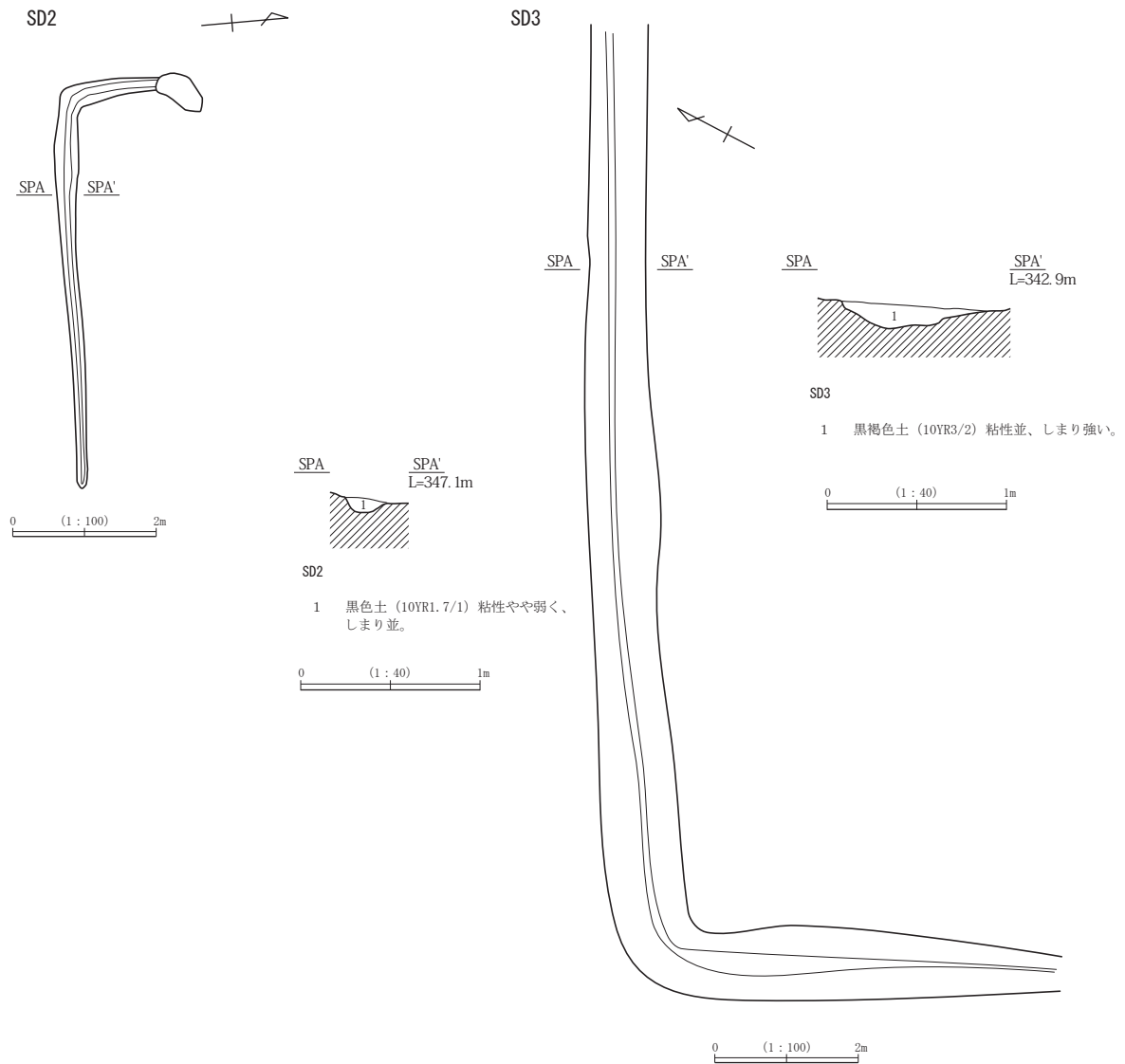
SD1 B-B'

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり並。φ1mmの炭化粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり並。φ5mmの炭化粒を微量含む。
- 3 1層に類似するが、やや明味があります。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強く、しまりやや強い。
- 5 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性強く、しまり共にやや強い。地山ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性並、しまりやや強い。
- 7 6層に類似、地山ブロックを少量含むため明味ます
- 8 5層に類似、地山崩落土をやや多く含む。
- 9 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり並。地山ブロック、炭化粒を少量含む。

SD1 C-C'

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり並。φ1mmの炭化粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり並。φ5mmの炭化粒を微量含む。
- 3 1層に類似するが、やや明味があります。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性並、しまりやや弱い。
- 5 5層に類似、地山崩落土をやや多く含む
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱く、しまり並。地山ブロック少量含む。
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまり共に並。
- 8 7層に類似するが、やや明る味と粘性が増す。
- 9 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまり共にやや強い。地山ブロックと炭化粒少量含む。
- 10 9層と同じ。
- 11 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまり共にやや強い。地山崩落土含む。
- 12 11層に類似、地山ブロック含む。

第376図 SD1



第377図 SD2・3

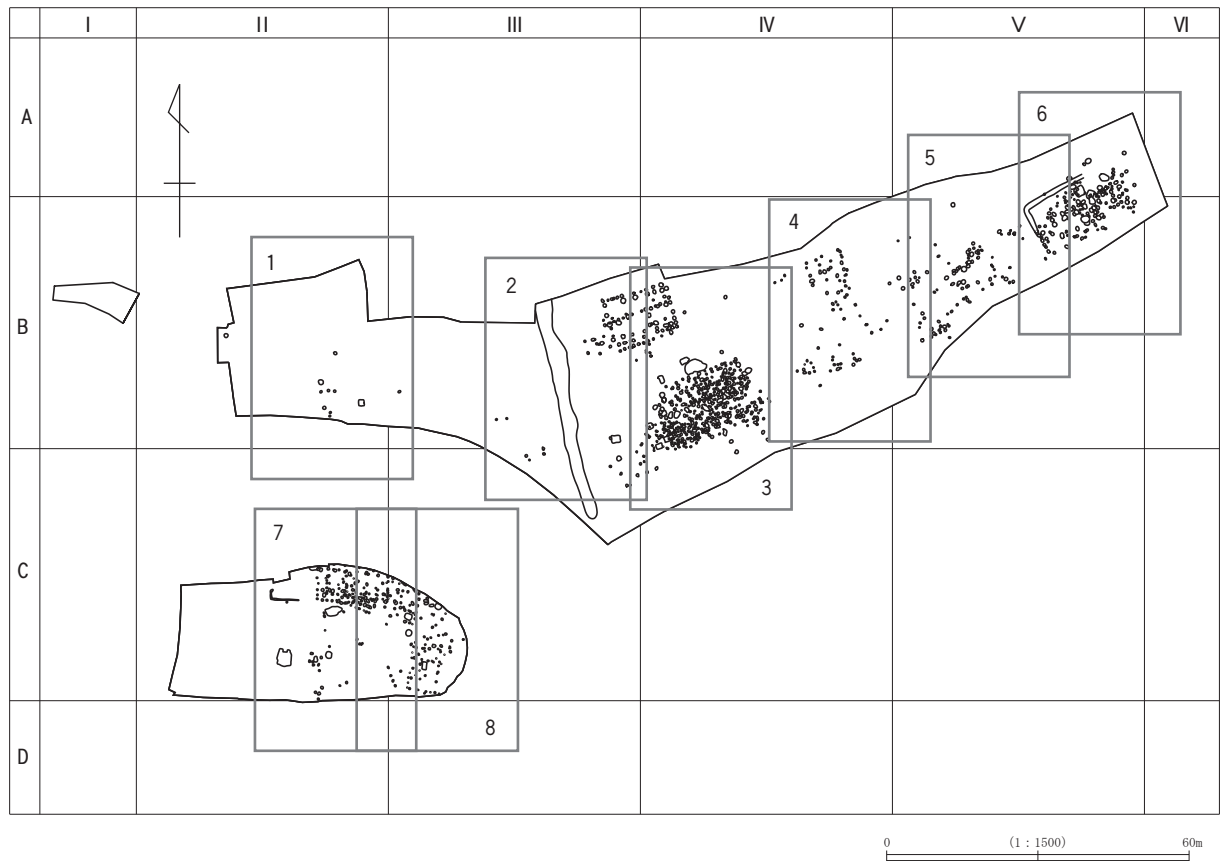
区21・22に隣接していることから、これらから流れ込んだと考えられる石器が多く出土している。

[遺構時期] 堆積土及び遺構配置から近世に比定される。

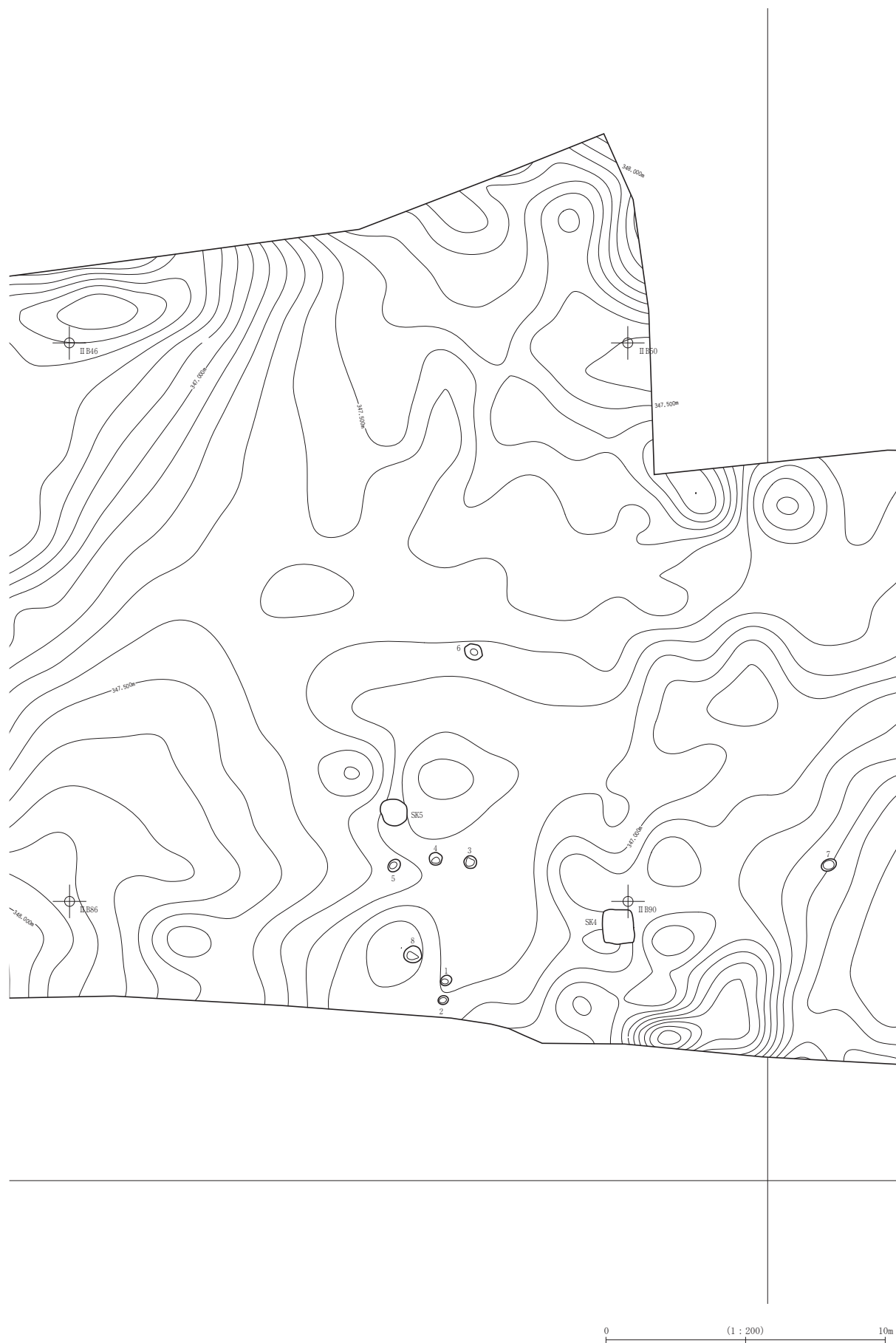
[備考] エリア6の建物群の区画溝と思われる。

(7) 柱 穴

柱穴は1113個確認されている。掘柱建物跡に伴うものが多いため、その分布も建物跡の項で示したようにエリア1～6と重なる。それから外れて存在する柱穴の個数は極めて少ない。これらからは近世陶磁器、銭貨、鉄製品などが出土しており、概ね近世に形成されたものと判断できる。旧石器時代の集中区と重なるエリア2・6などの柱穴からは石器が出土している。



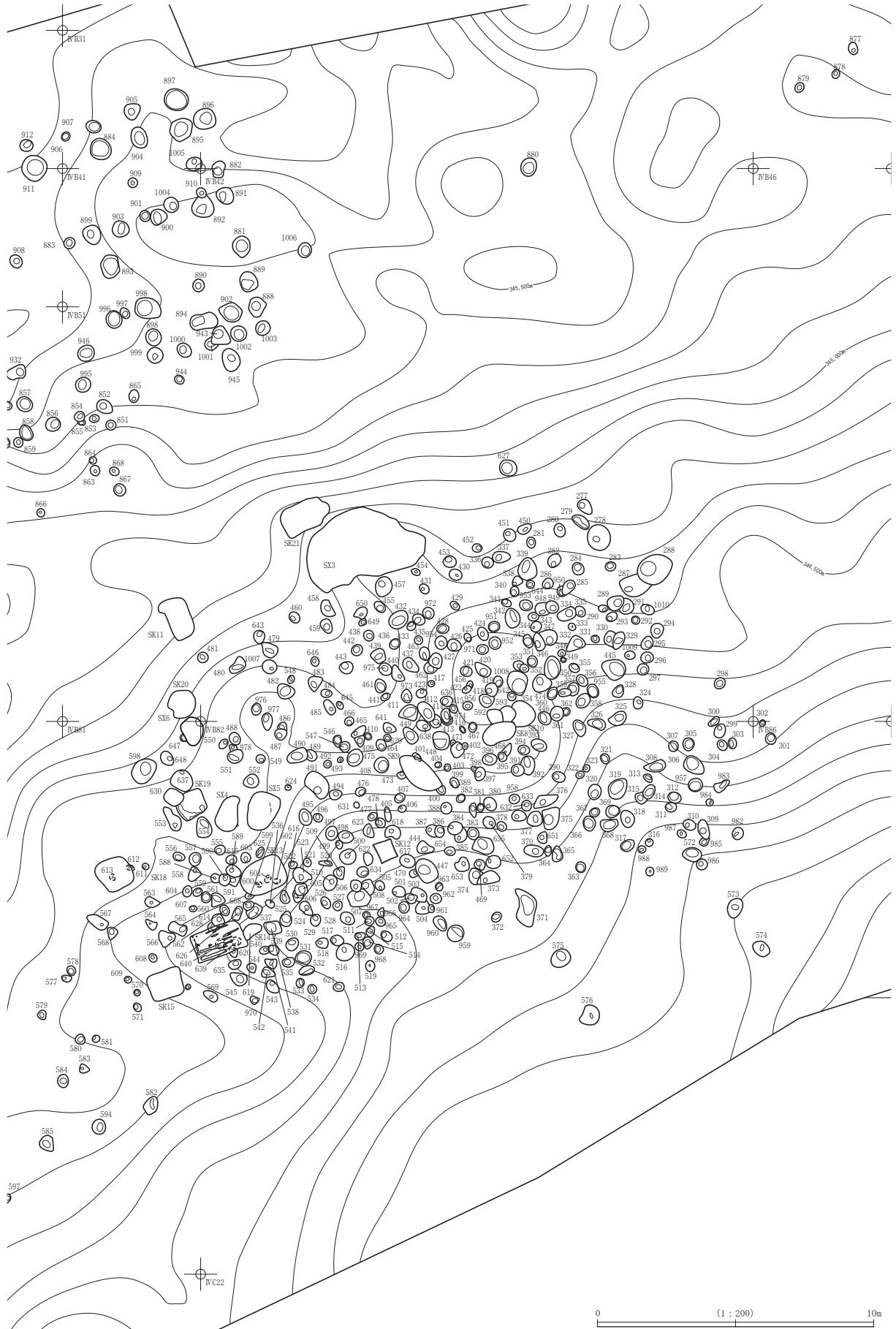
第378図 柱穴分割設定図



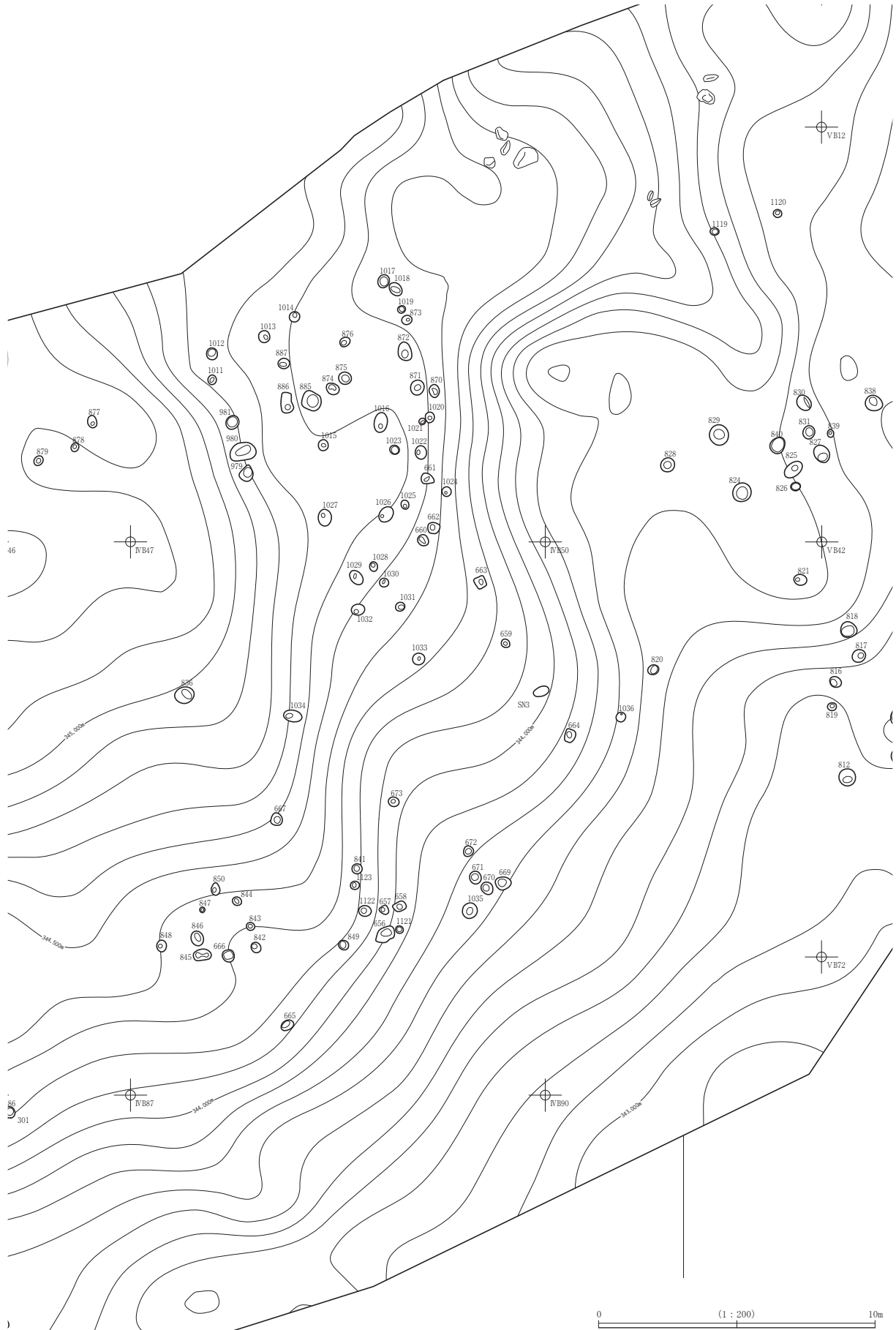
第379図 柱穴分割図 (1)



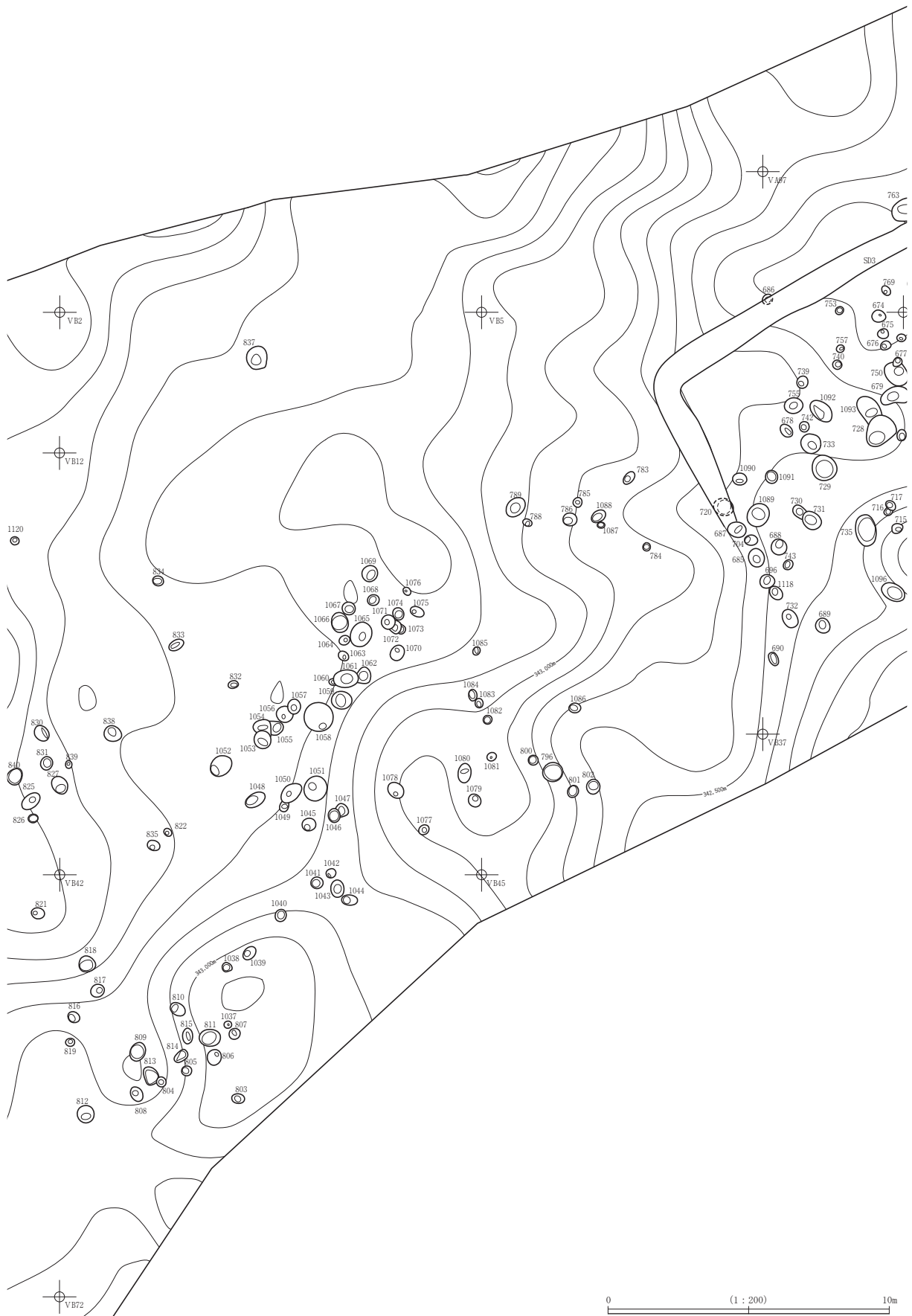
第380図 柱穴分割図 (2)



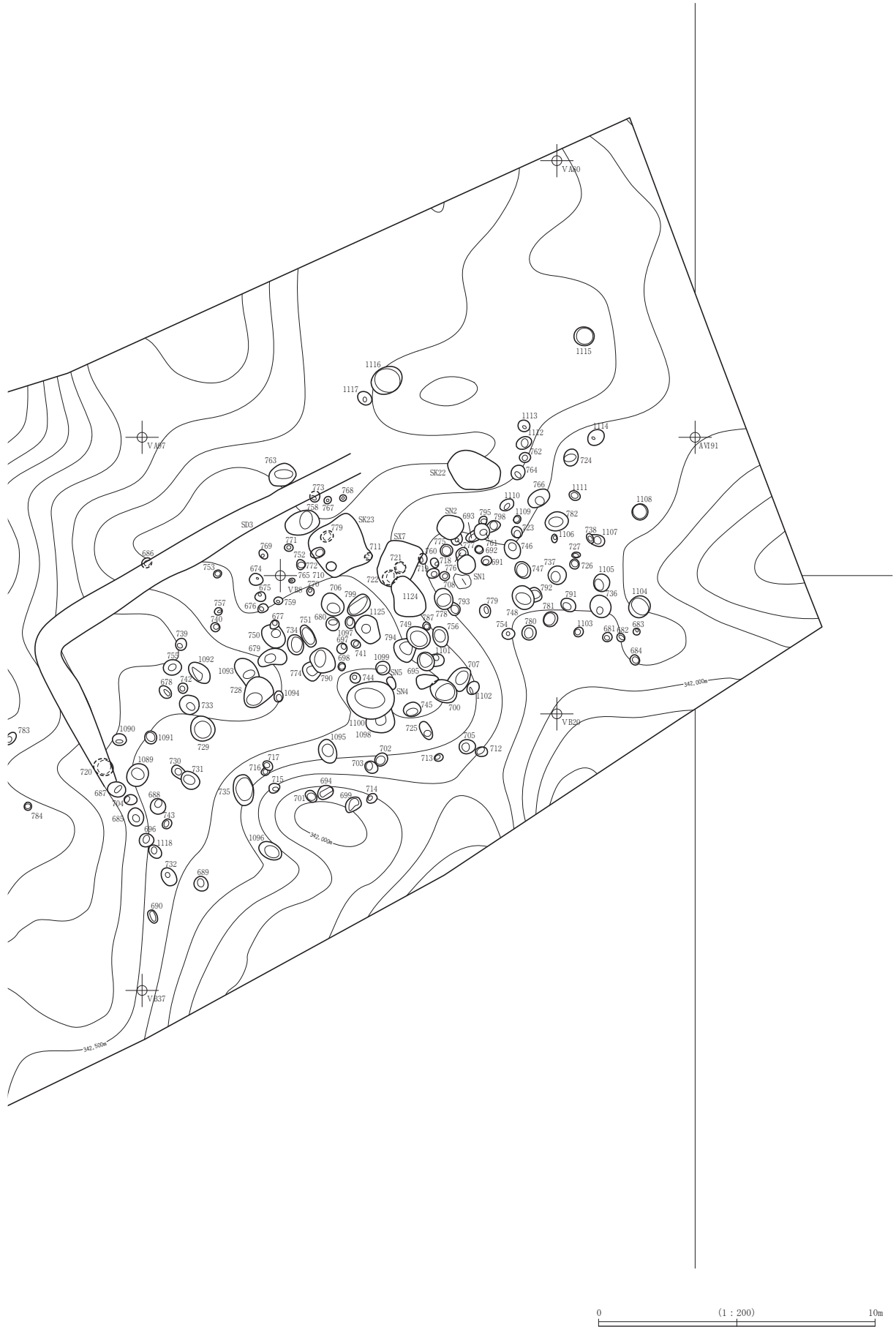
第381图 柱穴分割图 (3)



第382図 柱穴分割図 (4)



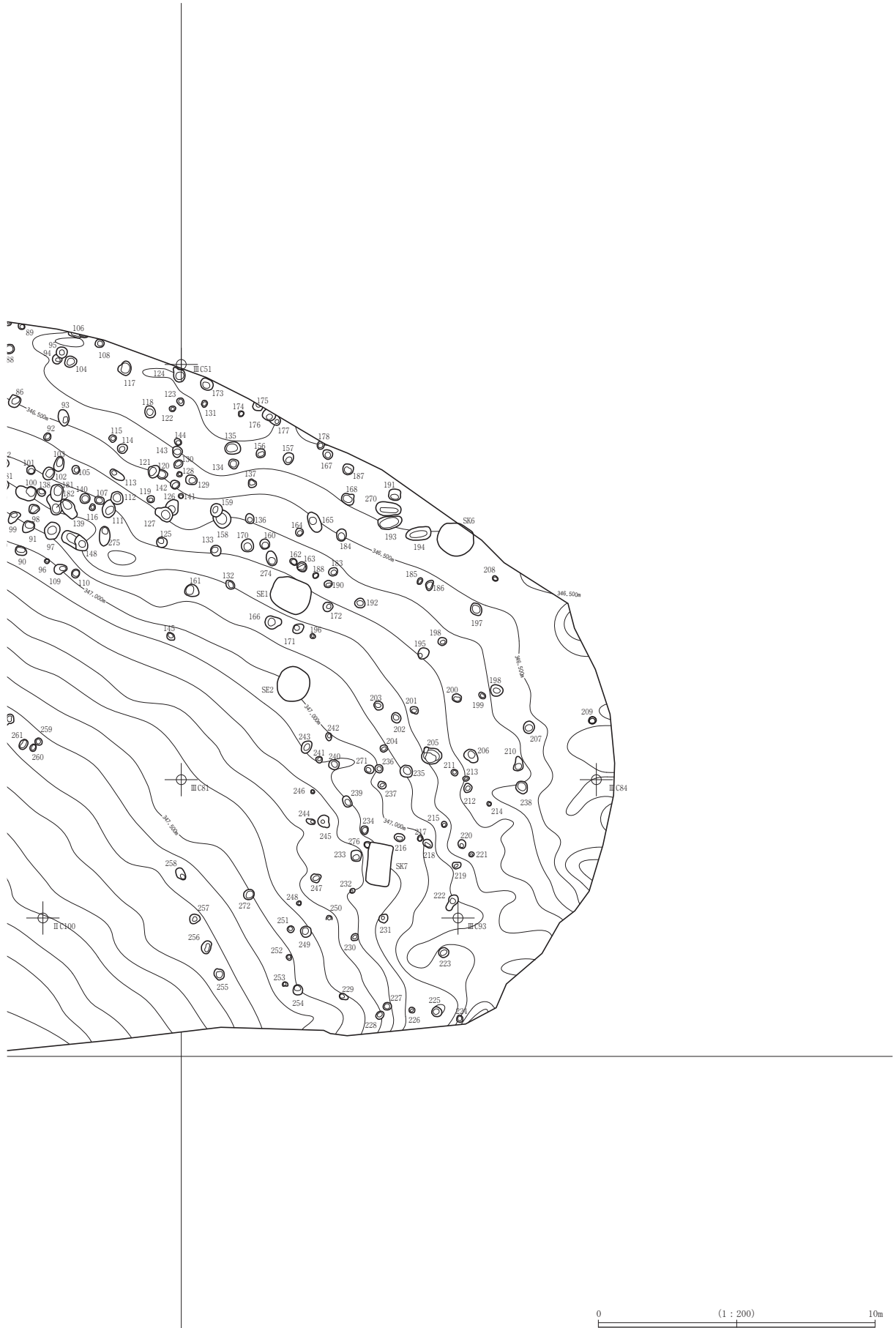
第383図 柱穴分割図 (5)



第384図 柱穴分割図 (6)



第385図 柱穴分割図 (7)



第386図 柱穴分割図 (8)

(8) 出土遺物

遺構や検出面、攪乱からは、陶磁器、鉄製品、銭貨、石製品、土製品などが出土している。ここでは種別ごとに概説していく。

織豊期～近世陶器

織豊期～近世陶器は、エリア1・2・5に構成される掘立柱建物やIV Bグリッドから主に出土している。グリッド一括資料を含めると遺物は、エリア2に構成される建物付近に集中している。

器種ごとにまとめているが、各時期により流通される産地に偏りが認められる。古い所属時期から、16世紀中葉から後葉は瀬戸・美濃産大窯の小皿、16世紀末葉から17世紀初頭は肥前・唐津産灰釉皿、17世紀後半から18世紀前半は肥前産灰・銅緑釉皿、18世紀代は肥前産、瀬戸・美濃産、在地産の播鉢、19世紀代は相馬産と在地産に概ね分かれる。このように集落形成の前半期には一般的な集落とは異なり、多様な種類の陶磁器が認められている。

[碗] 1114・1115は瀬戸・美濃産、1116～1123は相馬産、1124は肥前産の呉器手碗である。これらの所属時期は、瀬戸・美濃産と肥前産は18世紀後半、相馬産は19世紀前半を主体としている。

[小皿] 1125～1136は瀬戸・美濃産大窯期の小皿である。瀬戸・美濃産大窯は大窯Ⅱ～Ⅲ期(16世紀中葉から後葉)が主体となるが、1125・1131の大窯Ⅰ～Ⅱ期、1129の大窯Ⅲ期となるものも僅かに含まれる。1125の内面には輪花が認められる。

[皿] 1137は志野産、1138は瀬戸・美濃産、1140～1161肥前産、1162～1167は相馬産、1168・1169は在地産の皿である。この中でも肥前産が多く確認されており、肥前・唐津産灰釉皿(1140～1155)と肥前産灰・銅緑釉皿(1156～1161)の2種類ある。所属時期については、前者がⅠ期(16世紀末～17世紀初頭)、後者がⅢ期に属する。相馬産は19世紀前半代が主体である。1167の底面には文字は解読できないが墨書が認められる。1169は釉薬がやや相馬産に類似するものの、胎土は非常に粗い。

[鉢] 1170～1172は瀬戸・美濃産、1173～1176は肥前産、1177は相馬産、1178～1181は在地産の鉢である。瀬戸・美濃産と肥前産は17世紀後半から18世紀代が主体であり、相馬産と在地産は19世紀以降に所属する。

[その他] 1182～1183は猪口、1184は小杯、1185は蓋、1186は火入、1187・1188は焙烙、1189・1190は德利、1191～1193は甕である。これらの所属年代は19世紀以降が多いが、1182の肥前・唐津産の猪口のみ灰釉皿と同様の所属時期である。

[播鉢] 1194～1200は瀬戸・美濃産、1201～1203は在地産、1204は肥前産である。1201以外は、いずれも18世紀代に所属する。

近世磁器

近世磁器はIV BグリッドからV Bグリッドのエリア2・6に構成される建物付近から主に出土している。以下には器種ごとでまとめているが、上述した陶器とは異なり、所属時期が18世紀後半から19世紀前半の肥前産が主体となる。

[碗] 1205～1219は肥前産である。1208がⅡ期、1214・1219がⅢ期となる以外は、Ⅳ～Ⅴ期に属する。

[小皿] 1224・1225は肥前産の小皿である。前者がⅡ期、後者がⅣ～Ⅴ期に属する。

[皿] 1226～1234、1236～1252は肥前産の皿である。1235は瀬戸・美濃産の皿である。肥前産の皿は、1231、1245、1246などのようにⅡ～Ⅲ期は僅かであり、大半がⅣ～Ⅴ期に属する。これらには蛇の目釉はぎやコンニャク印判が認められる。

[鉢] 1252は肥前鉢でⅡ期に属する

[その他] 1253～1257は小杯、1258は仏飯器、1259～1262、1267は猪口、1263・1264は蓋、1265はレンゲ、1266は瓶、1268は火鉢である。小杯以外の器種は肥前産である。それらの所属年代は1260と1262がⅢ～Ⅳ期である以外は、これらは概ねⅤ期以降のものである。小杯は東北産であり、19世紀代に属する。

中国産磁器

中国産磁器は、掘立柱建物が密集するエリア2、それに隣接するSD1から主に出土している。小片が多いことから器形を把握しがたい状況にあるが、白磁皿以外は碗と思われる。

1269・1270は白磁皿、1271～1273は青磁碗、1274～1297は漳州窯の碗である。1273は14世紀代の可能性がある。それ以外は16世紀末～17世紀初が主体となる。この主体時期は、瀬戸・美濃産大窯の小皿や肥前・唐津産灰釉の皿などの所属時期と一致している。

近・現代磁器

ここで掲載した近現代陶器は調査区で表採できたものであり、石淵ダム移転時に廃棄されたものと思われる。

1298～1315は小杯、1316は猪口である。これらは所謂「除隊記念盃」や「軍隊盆」など呼称されるもので、各部隊の除隊記念、朝鮮演習記念などの際に作られたものである。これらは20世紀前葉に属する。所属部隊と思われる「一三步」(1298～1300、1303、1305)、「満州独立守備隊」(1308)、「第八大隊」(1311、1315)などが記されている。また、「若柳村 婦人会」(1312)、「物取山 月山 羽黒山」(1301)、「秋田 安倍」(1302)など下嵐江集落の歴史や物流を示すような銘も認められている。

1317～1323は「統制陶器」の碗であり、1319は「岐104」、1317と1318は「瀬307」、1320と1321は「岐455」の銘が底部に認められる。

鉄製品

近世に属する遺構及び表土から、下記のような鉄製品が確認されている。

[鍋] 柱穴から1点出土している。1324は口縁部付近が認められているが、規模や形状は不明である。把手を通すための穴や器体には補修した箇所が認められる。

[碗] 表採資料である。1325は底部付近であり、やや丸底である。

[煙管] 柱穴埋土及び表採から23点が確認されている。1326～1344の雁首と吸い口19点を掲載している。1335・1342以外は近世に属するものと思われる。

[その他] 1345・1346は刀装具、1347は簪、1348は毛抜き、1349は薬莖である。刀装具は近世の柱穴跡から出土しているが、それ以外はいずれも表採資料である。1345・1346は刀装具。槽金物にあたり2個一対となることから、同一の刀に装飾されていたものと思われる。近世に属すると考えられる。これ以外は近代以降のものである。1349には「記念」と彫られていることから、近・現代磁器にも記しているように除隊に伴うものと思われる。

この他には密教具が表採されていることから、写真掲載(1512～1515)している。これらは近現代陶器と同様、石淵ダム建設に伴う移転の際に廃棄されたものと思われる。

銭貨

近世以前の銭貨が176点確認されており、内訳は銅銭が165点、鉄銭が11点である。銭貨は主に寛永通宝であり、建物を構成する柱穴から出土している。しかし、それ以外は遺構外からである。

銭貨の出土点数の大半は、寛永通寶(1350～1443)で占められており、文久永宝(1444～1448)、仙臺通寶(1449)、永樂通寶(1450～1461)などは複数枚認められる。また、これらの他に多様な種類の中国銭が確認され、咸淳元寶(1464)、開元通寶(1476・1477)、祥符元寶(1465)、元祐通寶(1473)、洪武通寶(1470～1472)、政和通寶(1462・1463)、景祐元寶(1467)、皇宋通寶(1468)、淳化元寶(1479)、紹聖元寶(1469)、正隆元寶(1475)、大觀通寶(1466)、熙寧元寶(1474)、嘉定通寶(1478)などがある。

石製品

近世に属する遺構などから、下記のような石製品が確認されている。

[硯] 1474～1488の5点を確認できているが、全て欠損している。1485・1486は赤間産であるが、その他は産地不明である。

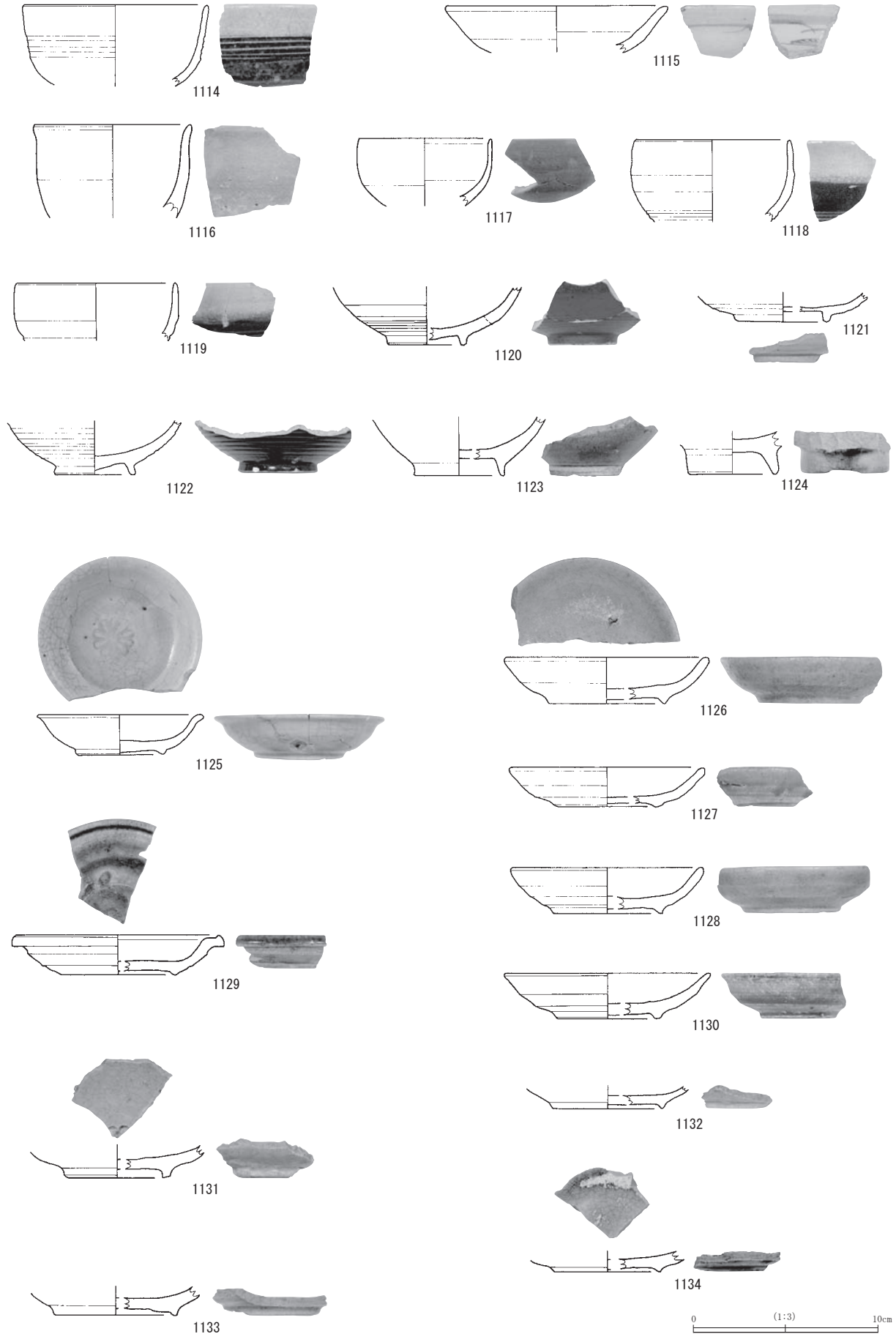
[砥石] 1489～1498の10点を掲載している。全て凝灰岩である。規模は様々であるが、1489のように長さが約30cmものもある。また、1498は特定の道具に使用したものと思われる。

[その他] 1499は鑄型である。製品は不明の鑄型であるが、使用されないまま砥石に転用している。1501～1505は円盤状石製品。1506は石臼。

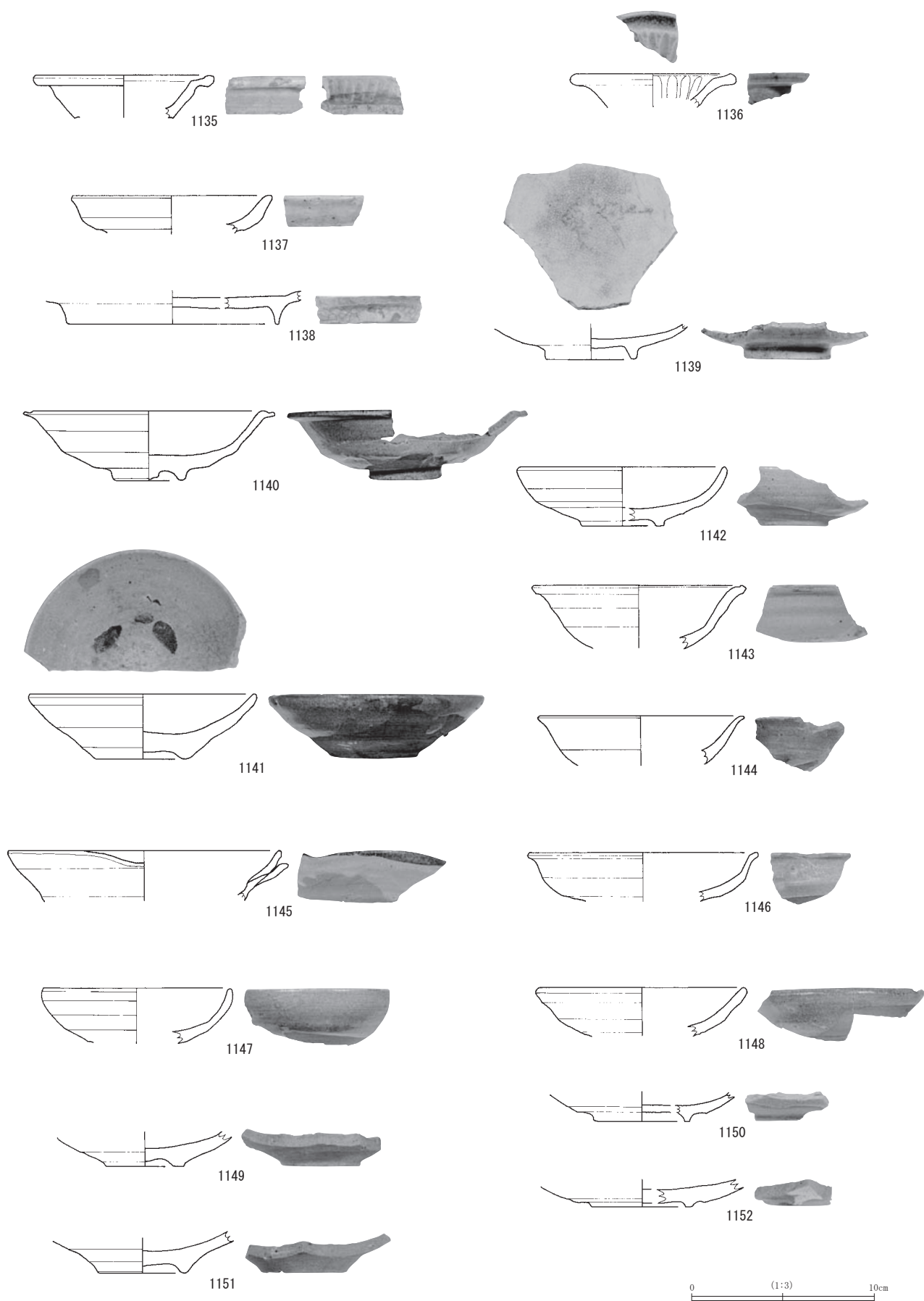
土製品

下記のような土製品が調査区から表採されている。

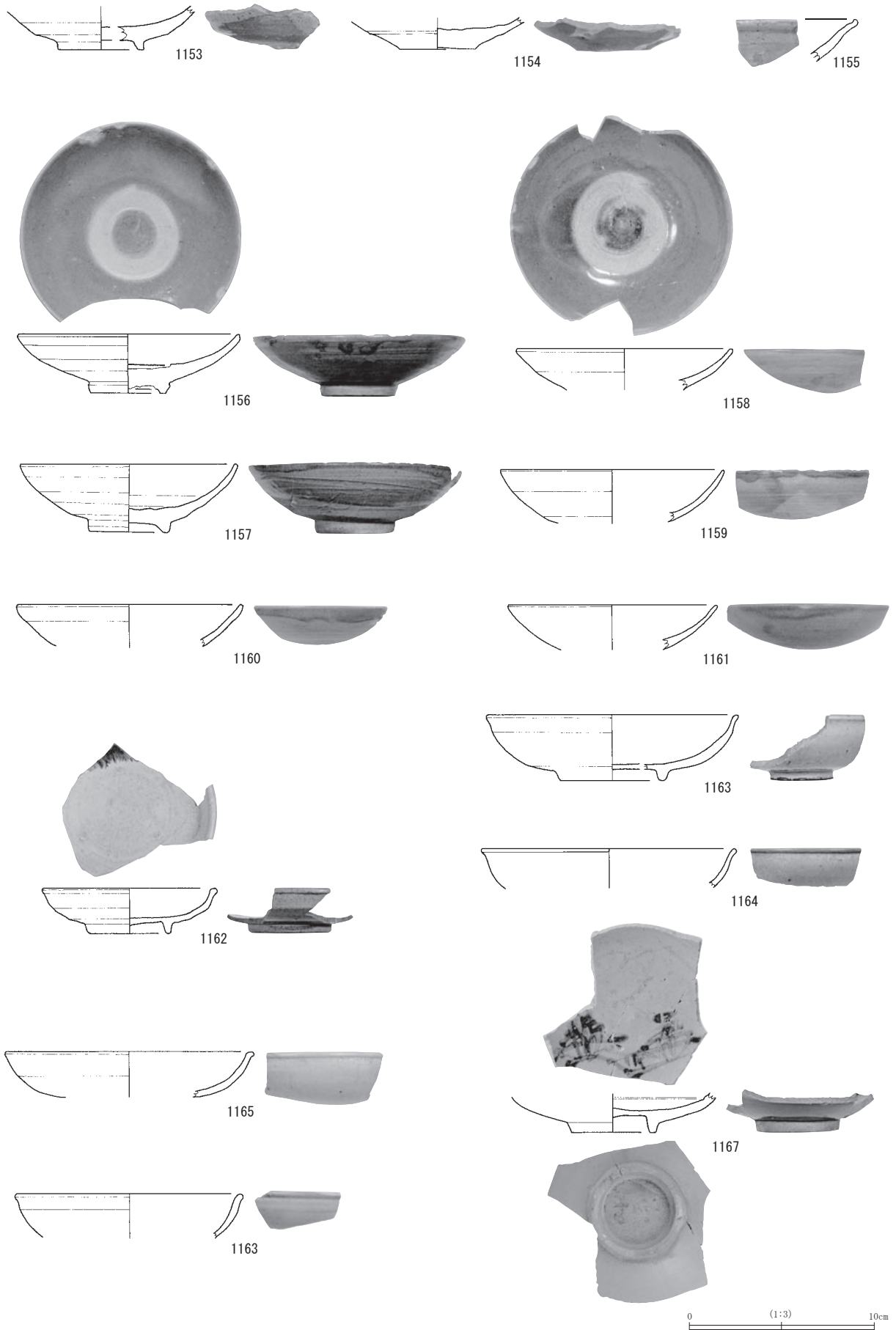
1507・1508は焼台。目的は不明であるが、2点のみ確認されている。1509は筒状土製品、1510・1511は土人形と思われるものである。



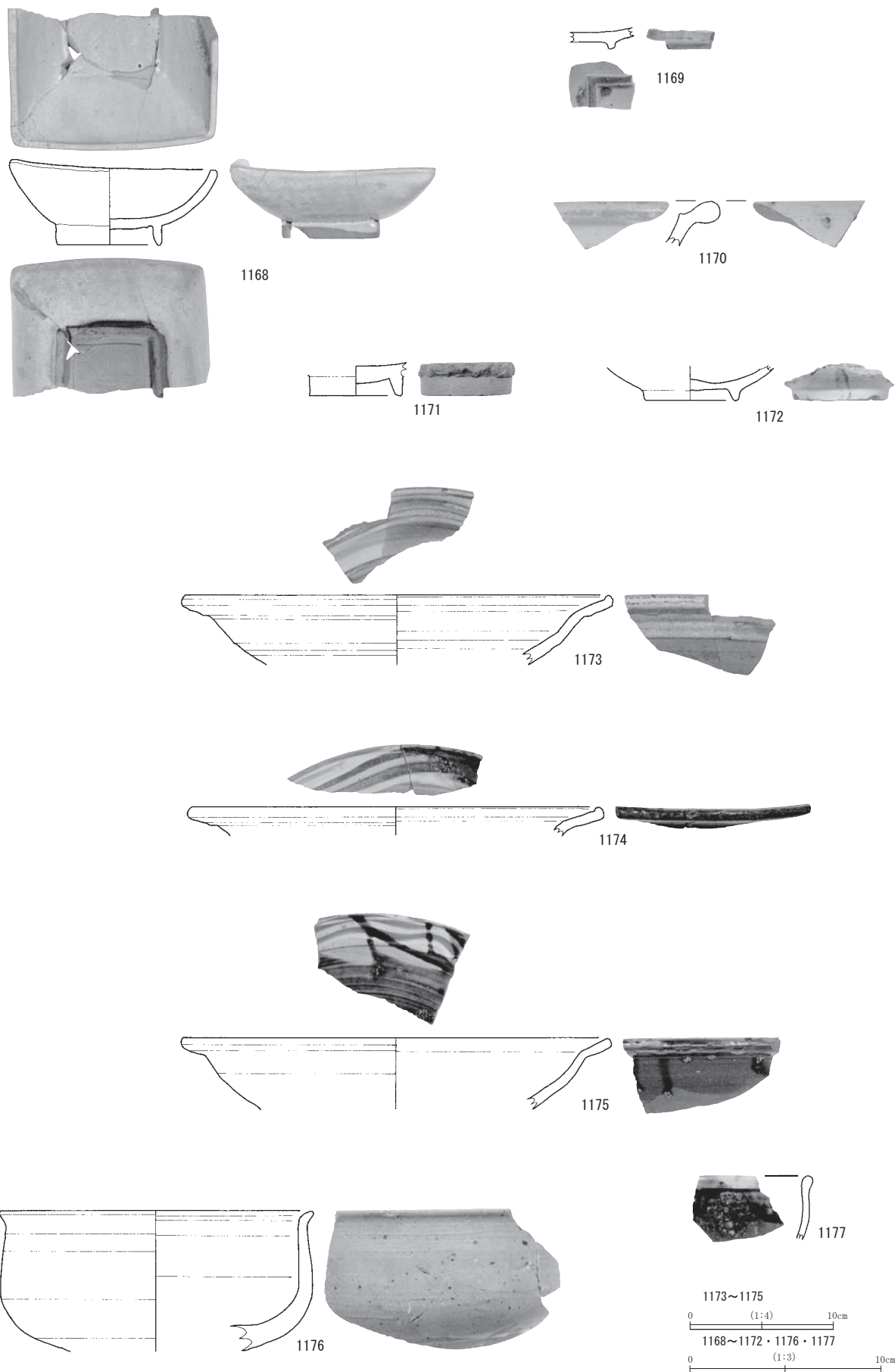
第387図 出土遺物 (1)



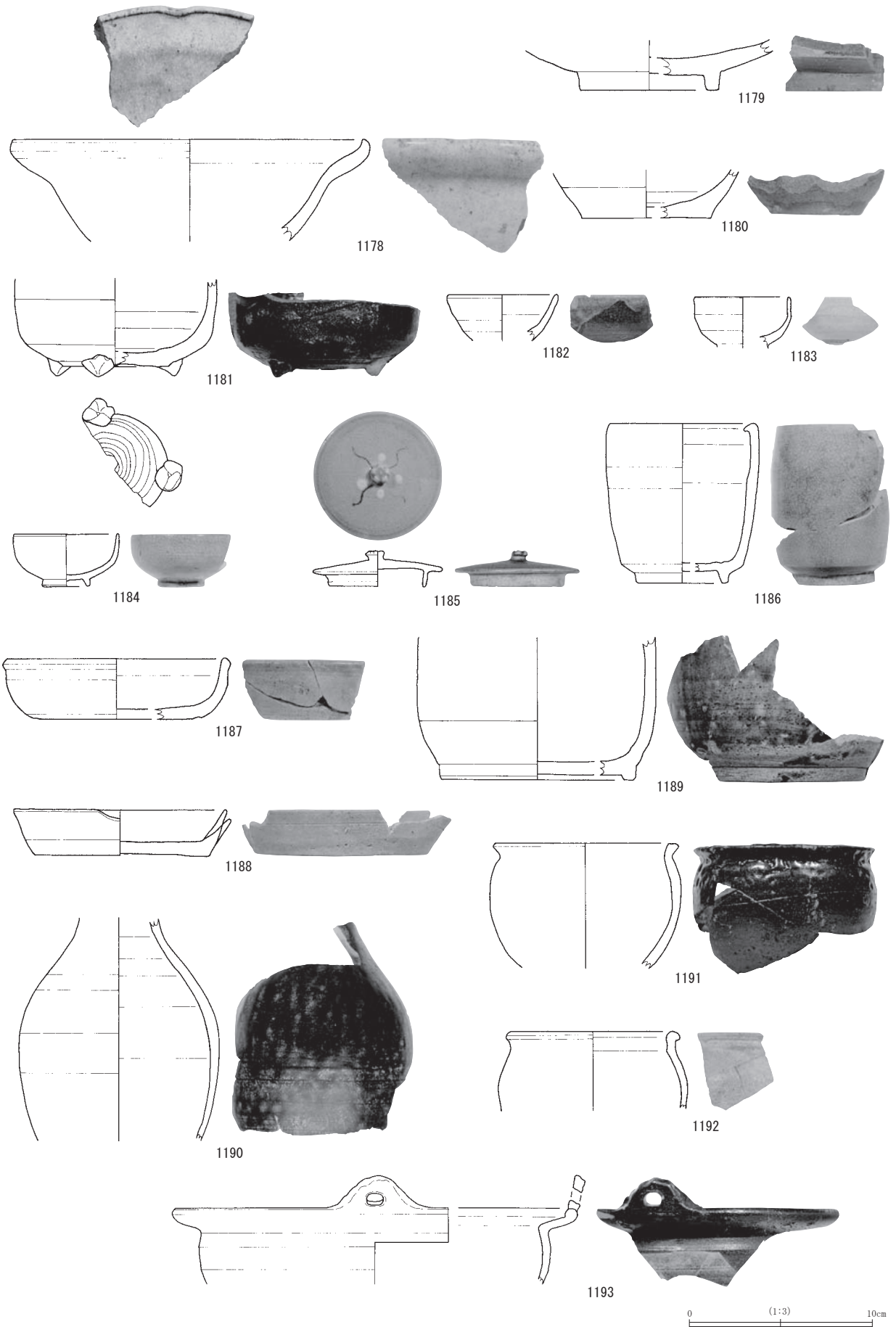
第388図 出土遺物 (2)



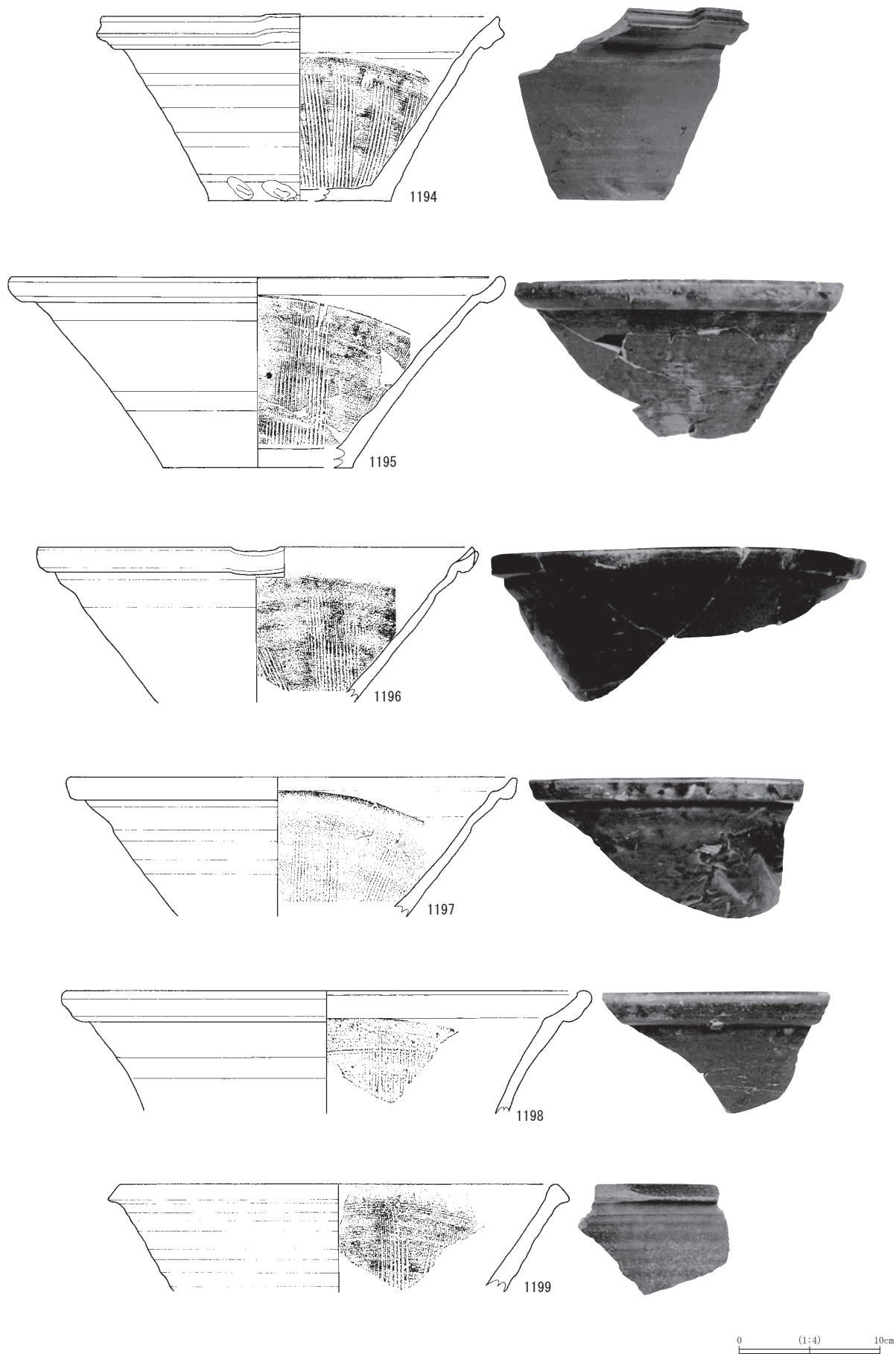
第389図 出土遺物 (3)



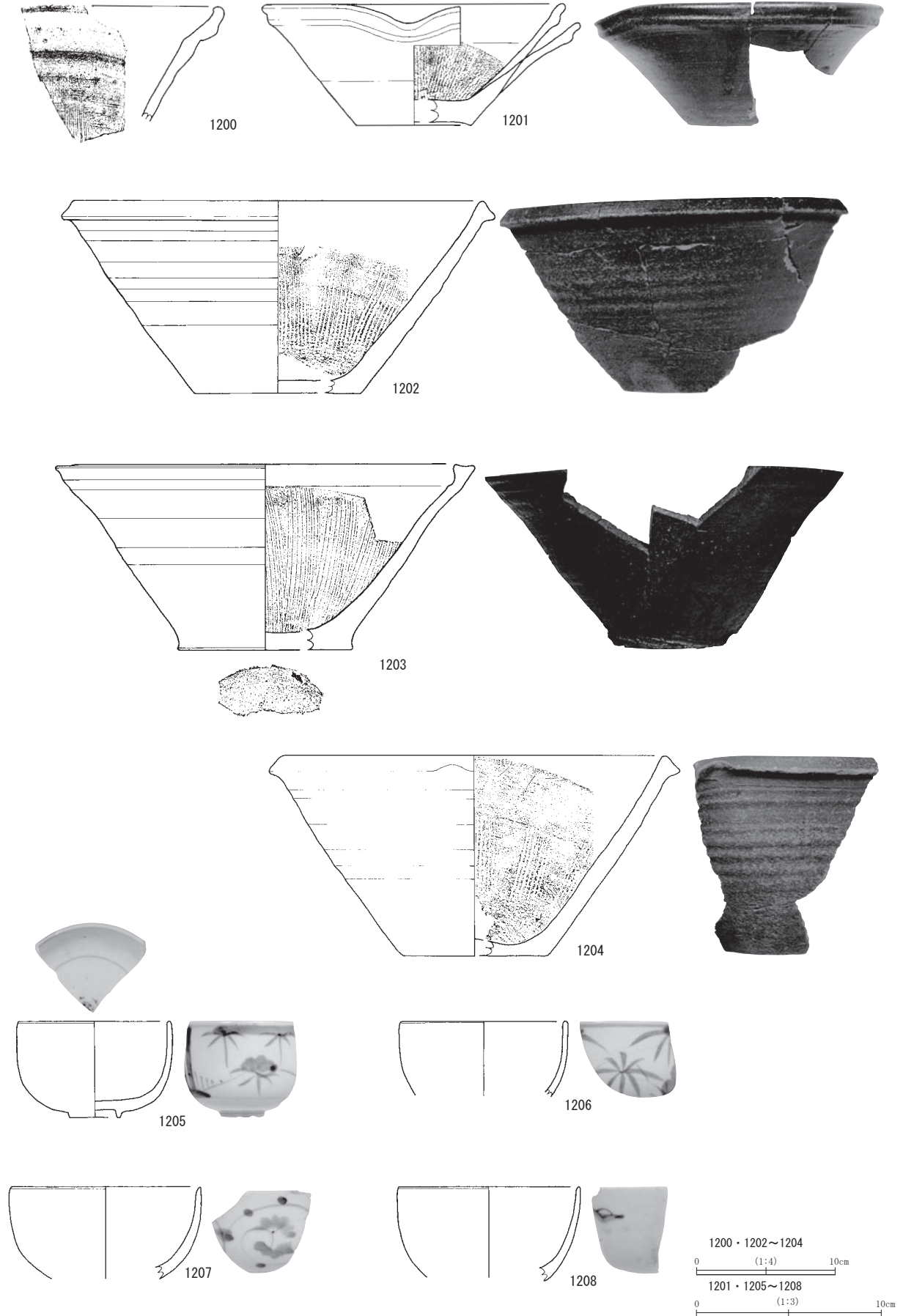
第390図 出土遺物 (4)



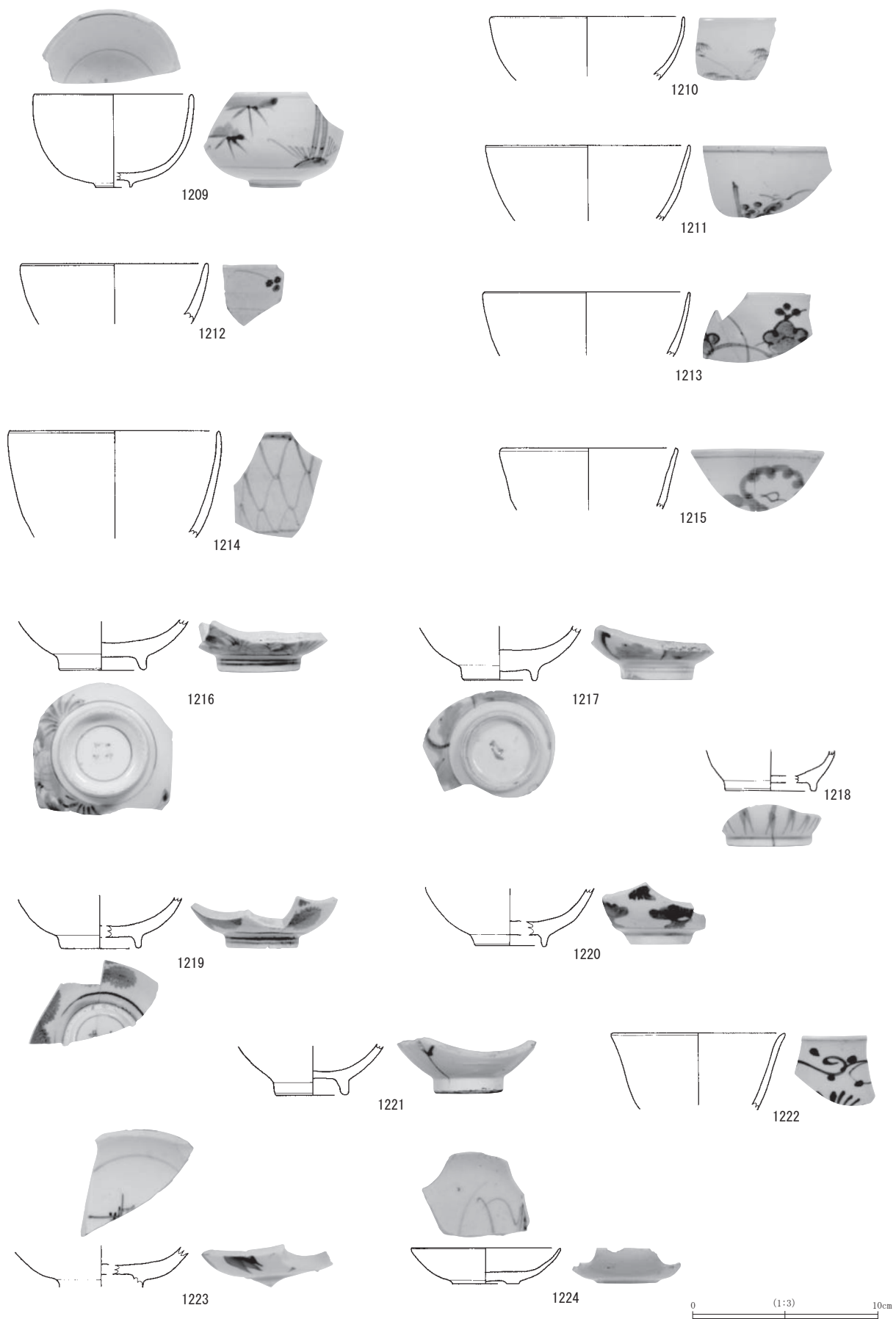
第391図 出土遺物 (5)



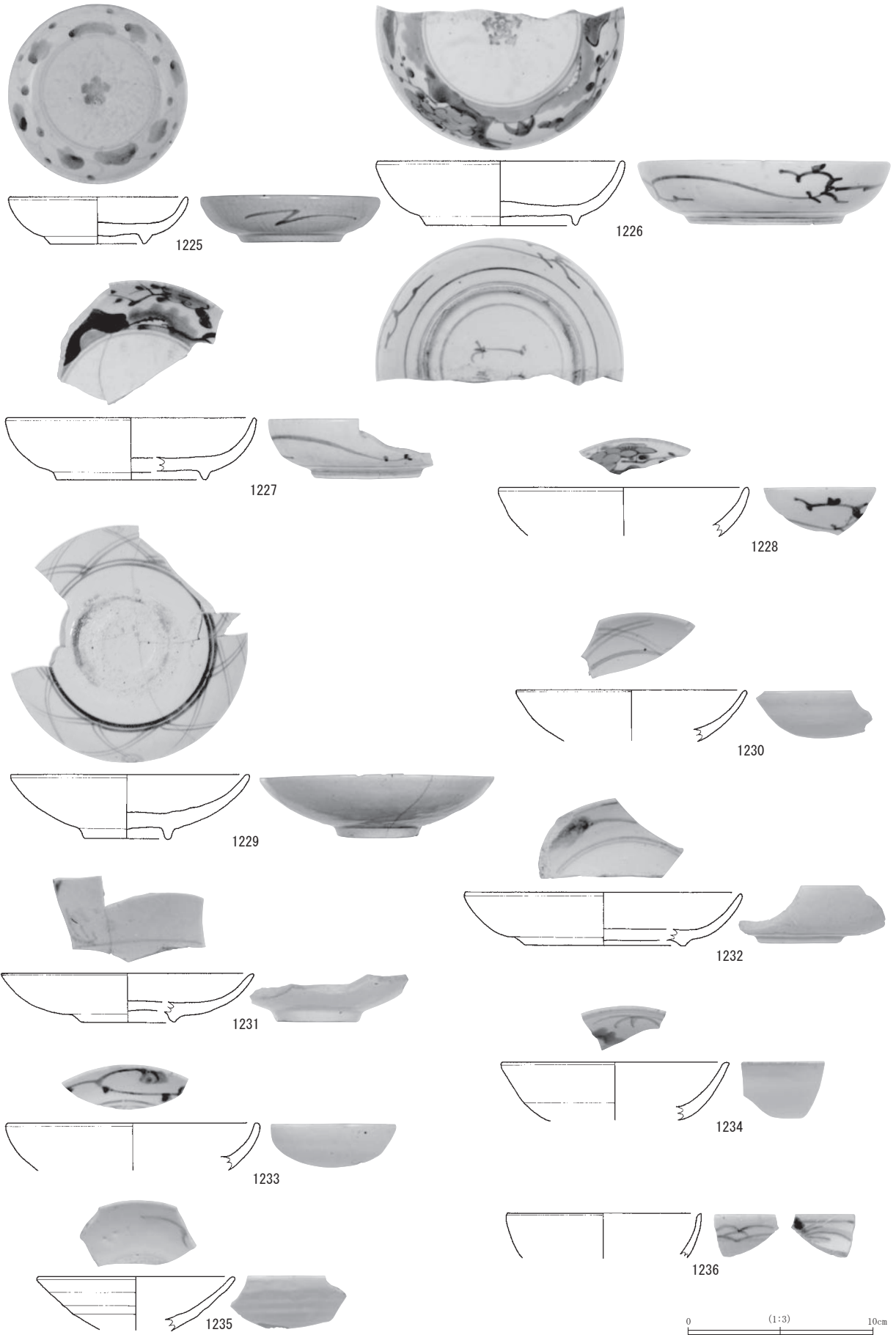
第392図 出土遺物 (6)



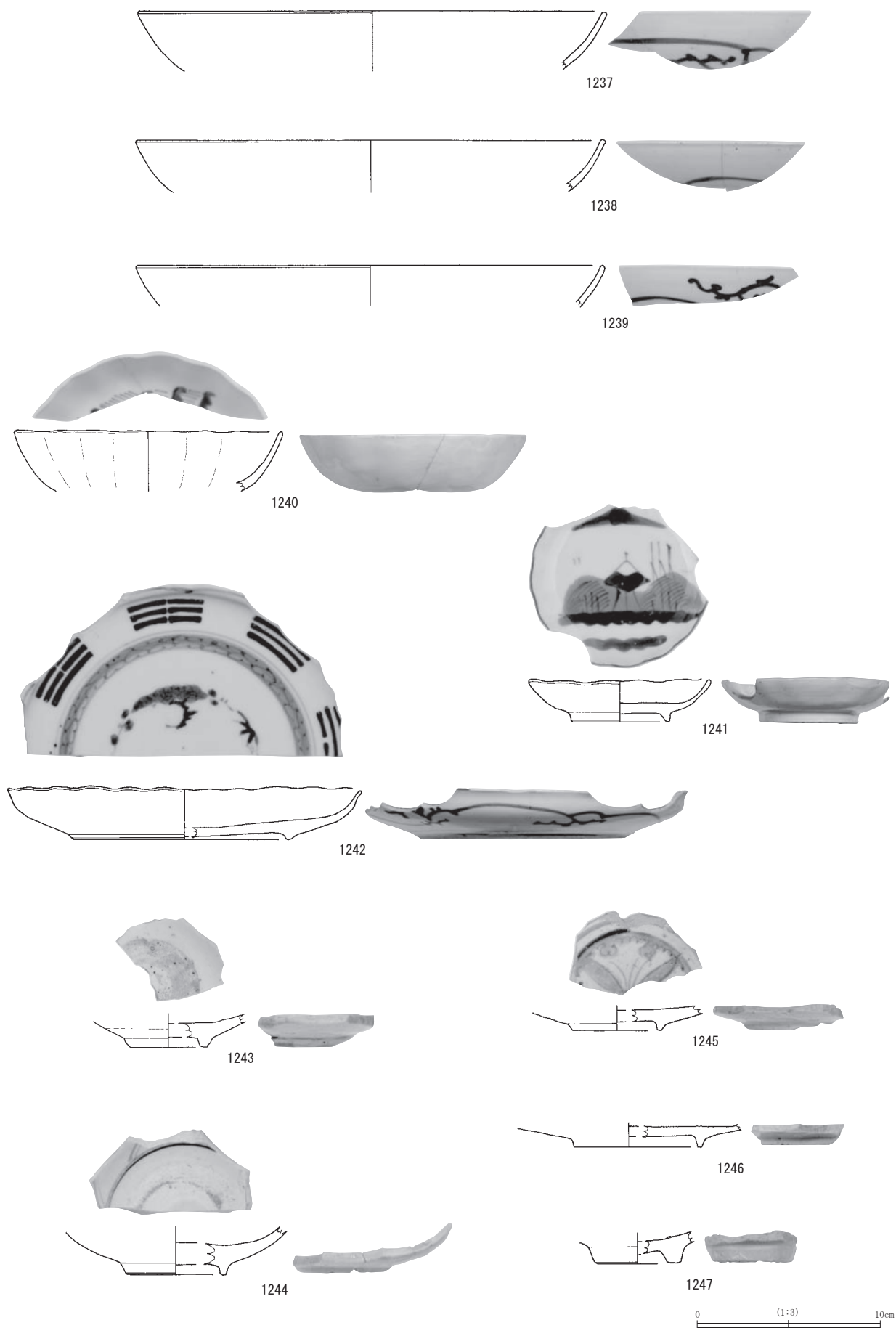
第393図 出土遺物 (7)



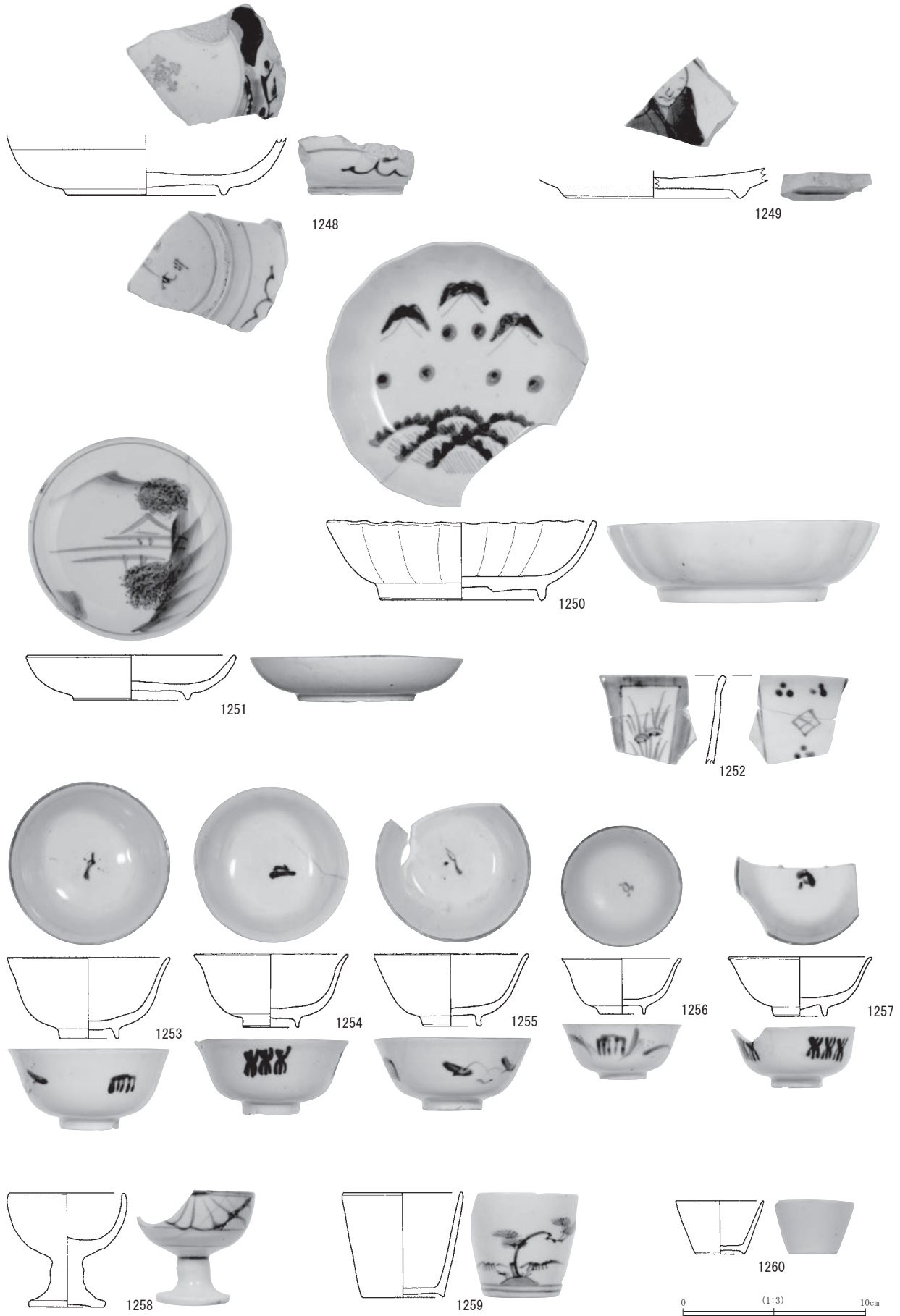
第394図 出土遺物 (8)



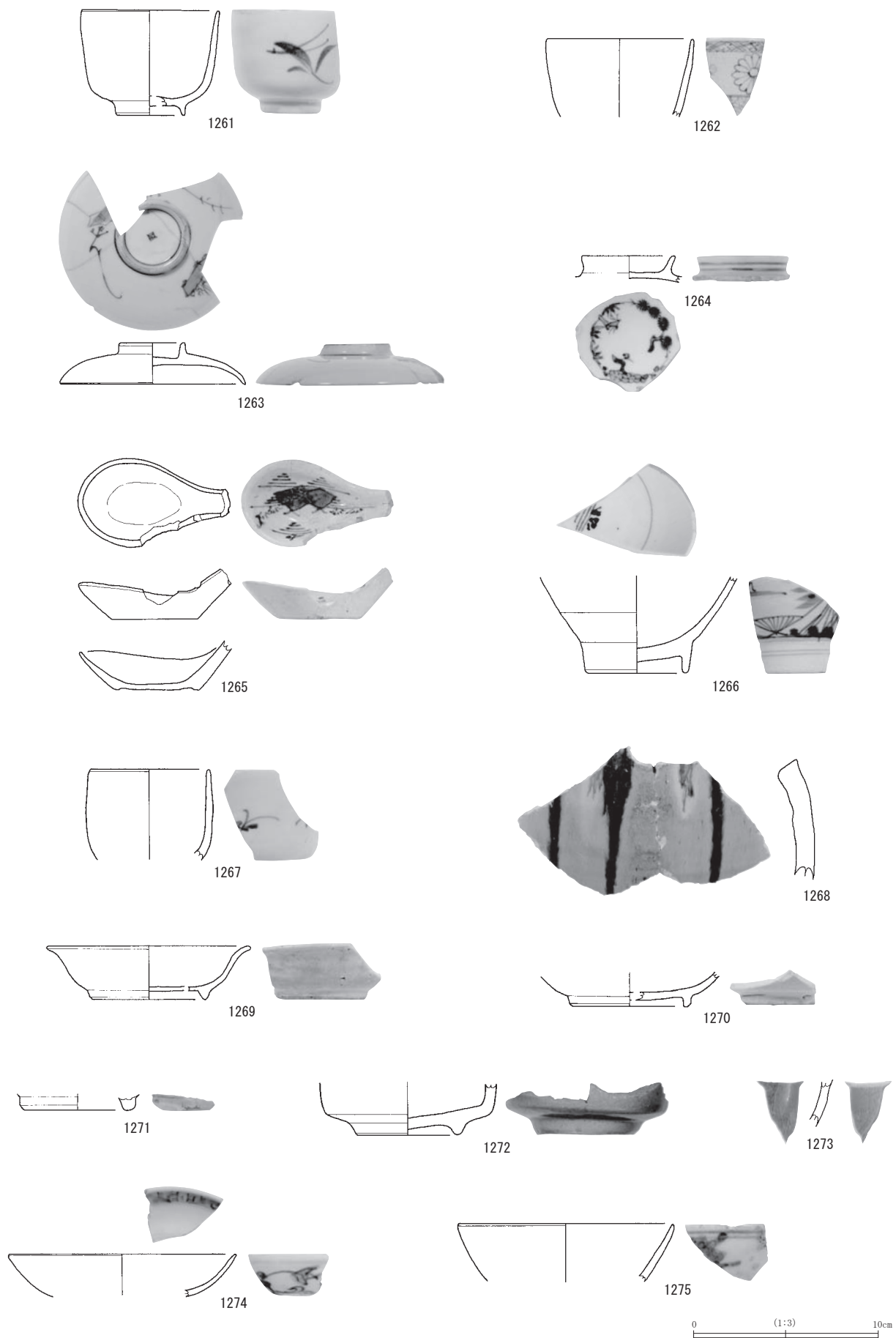
第395図 出土遺物 (9)



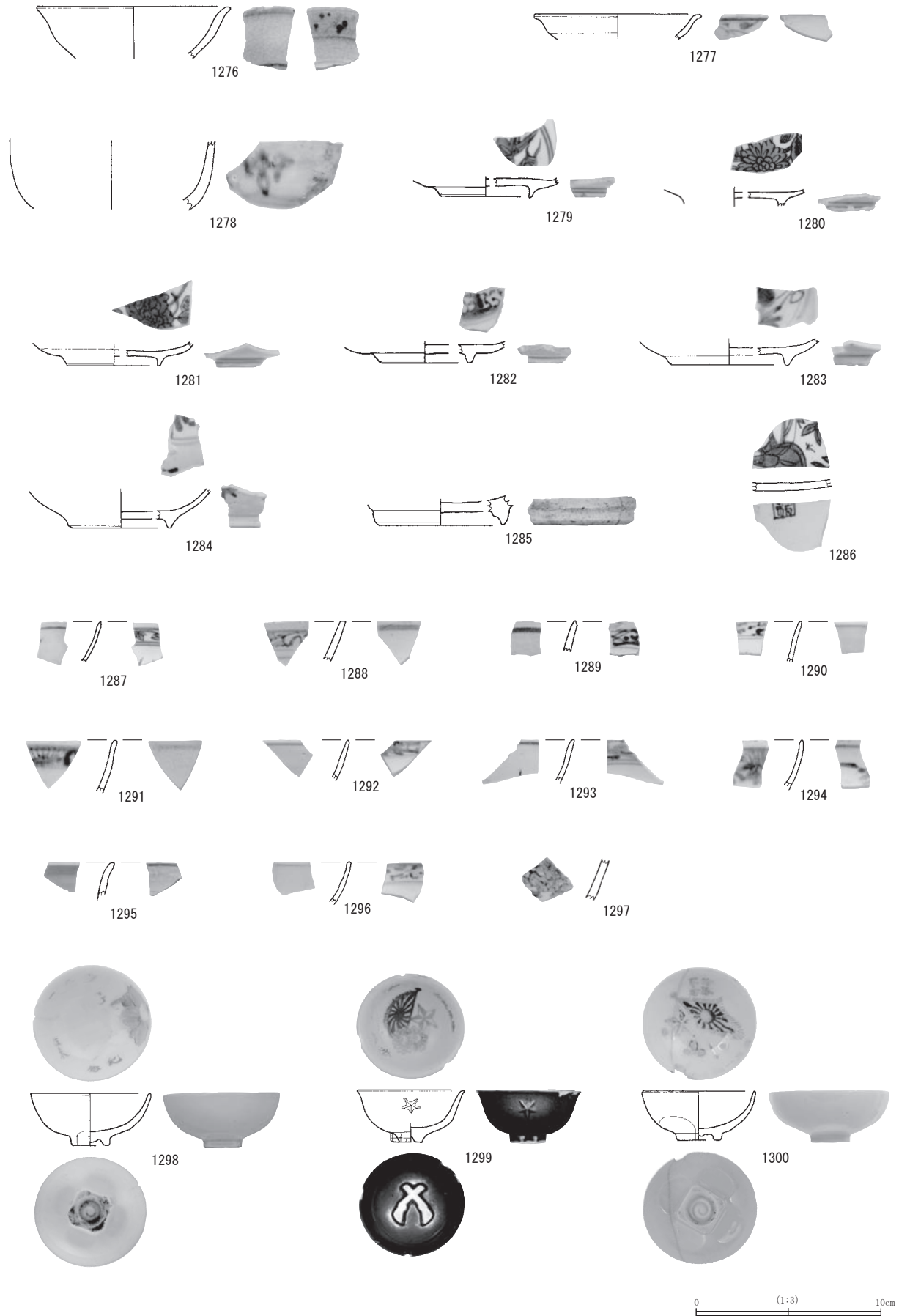
第396図 出土遺物 (10)



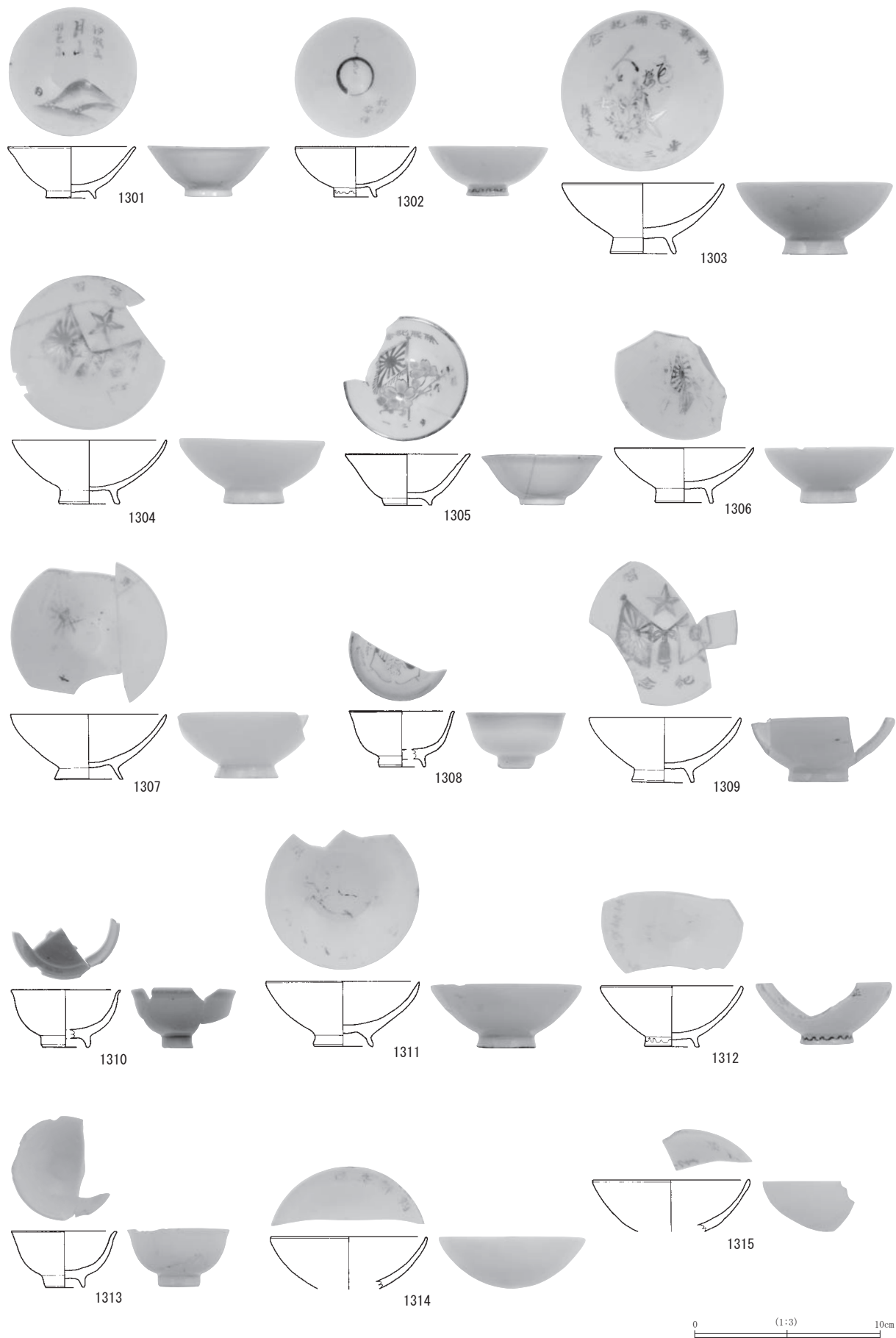
第397図 出土遺物 (11)



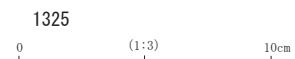
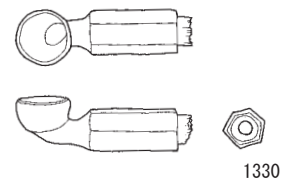
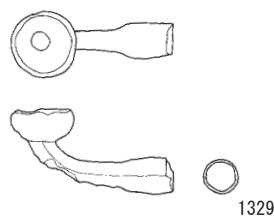
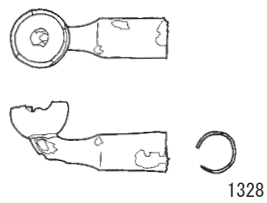
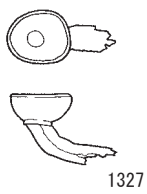
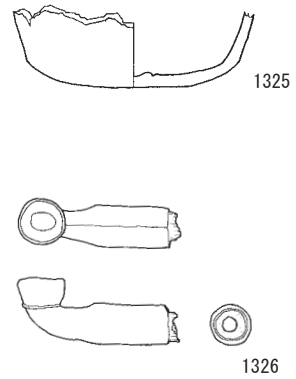
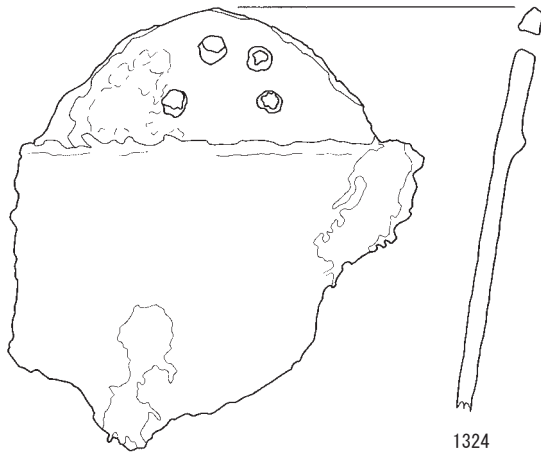
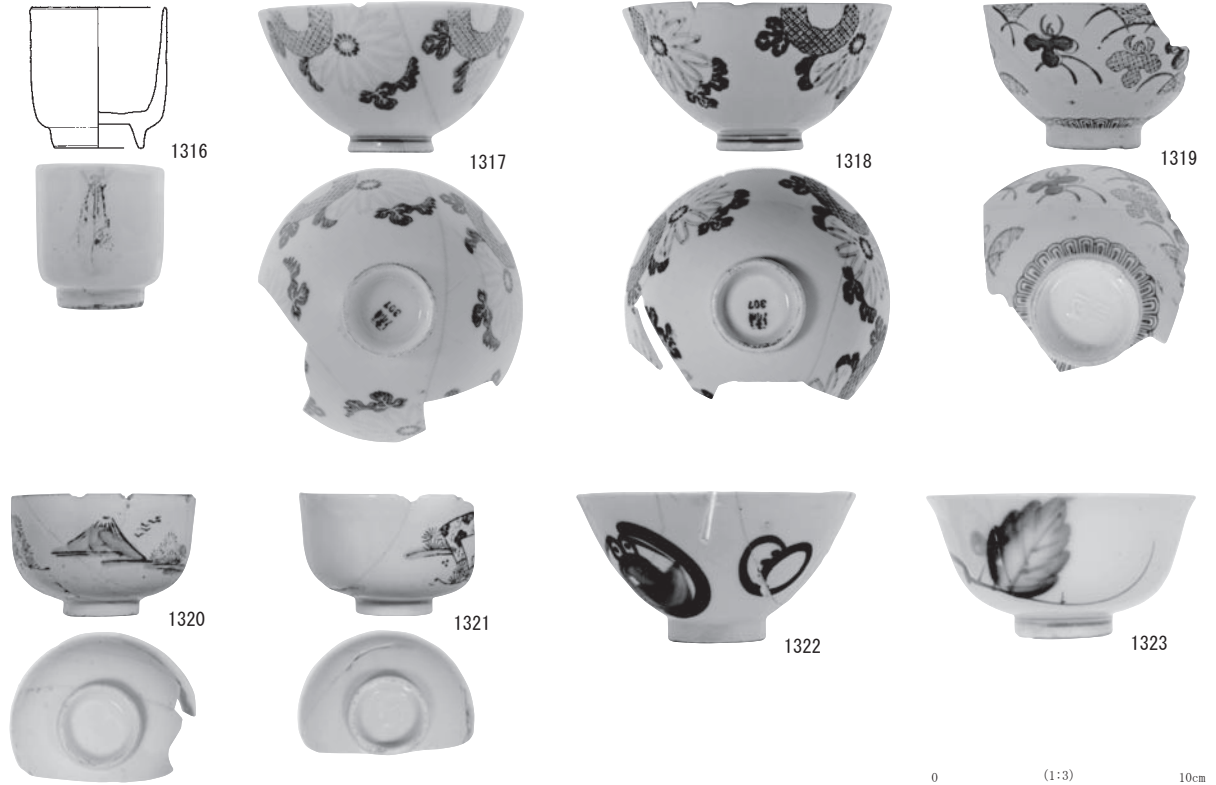
第398図 出土遺物 (12)



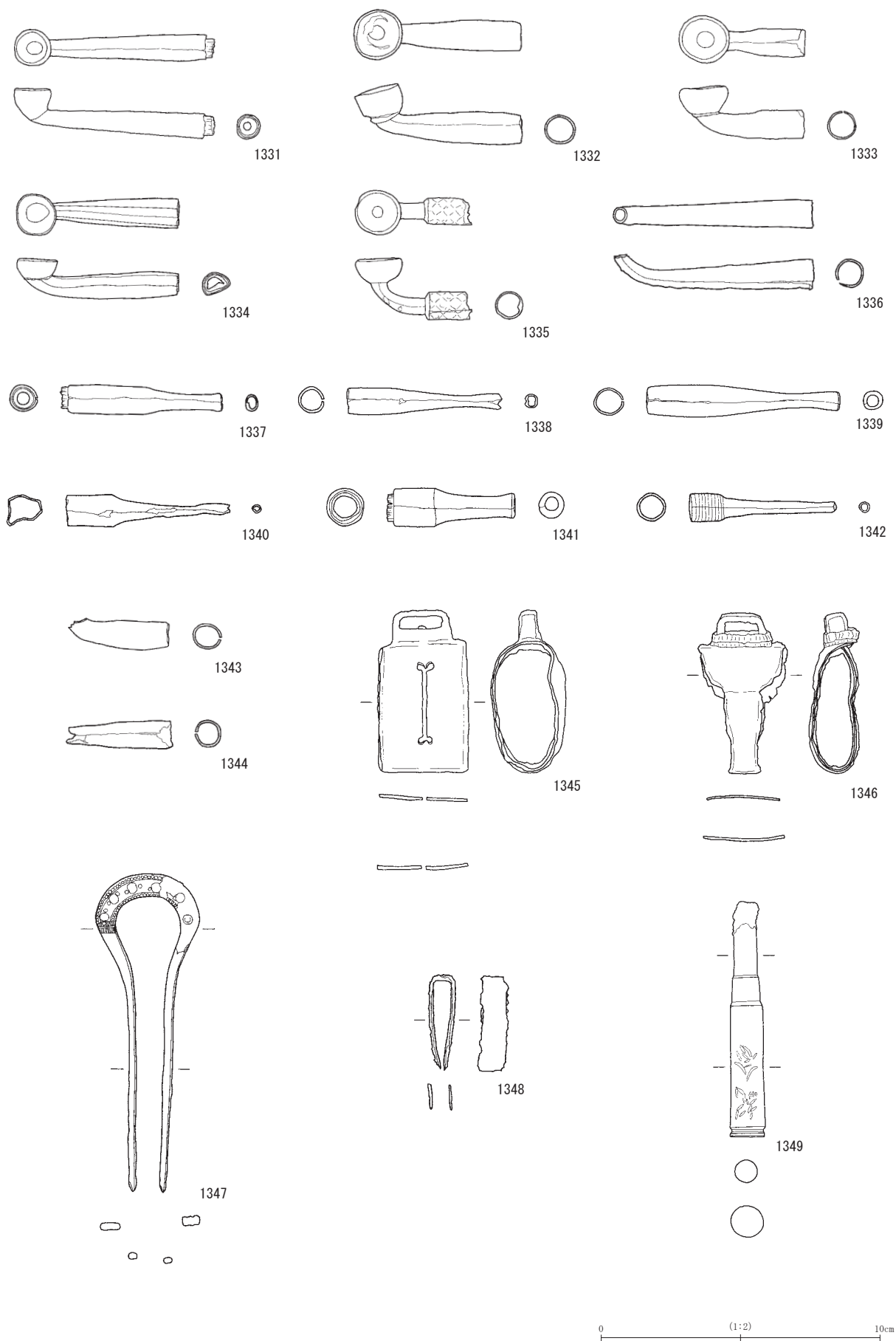
第399図 出土遺物 (13)



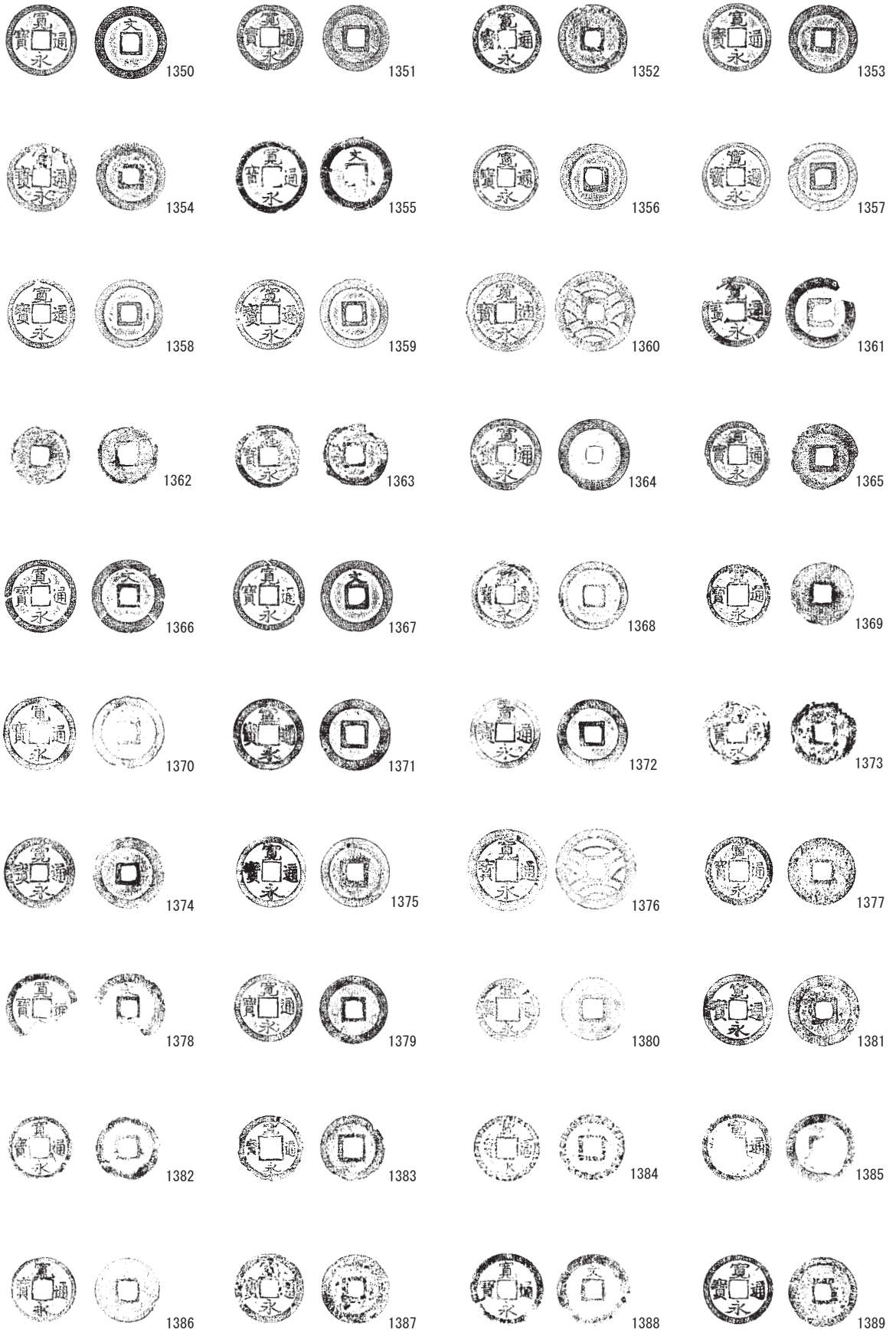
第400図 出土遺物 (14)



第401図 出土遺物 (15)

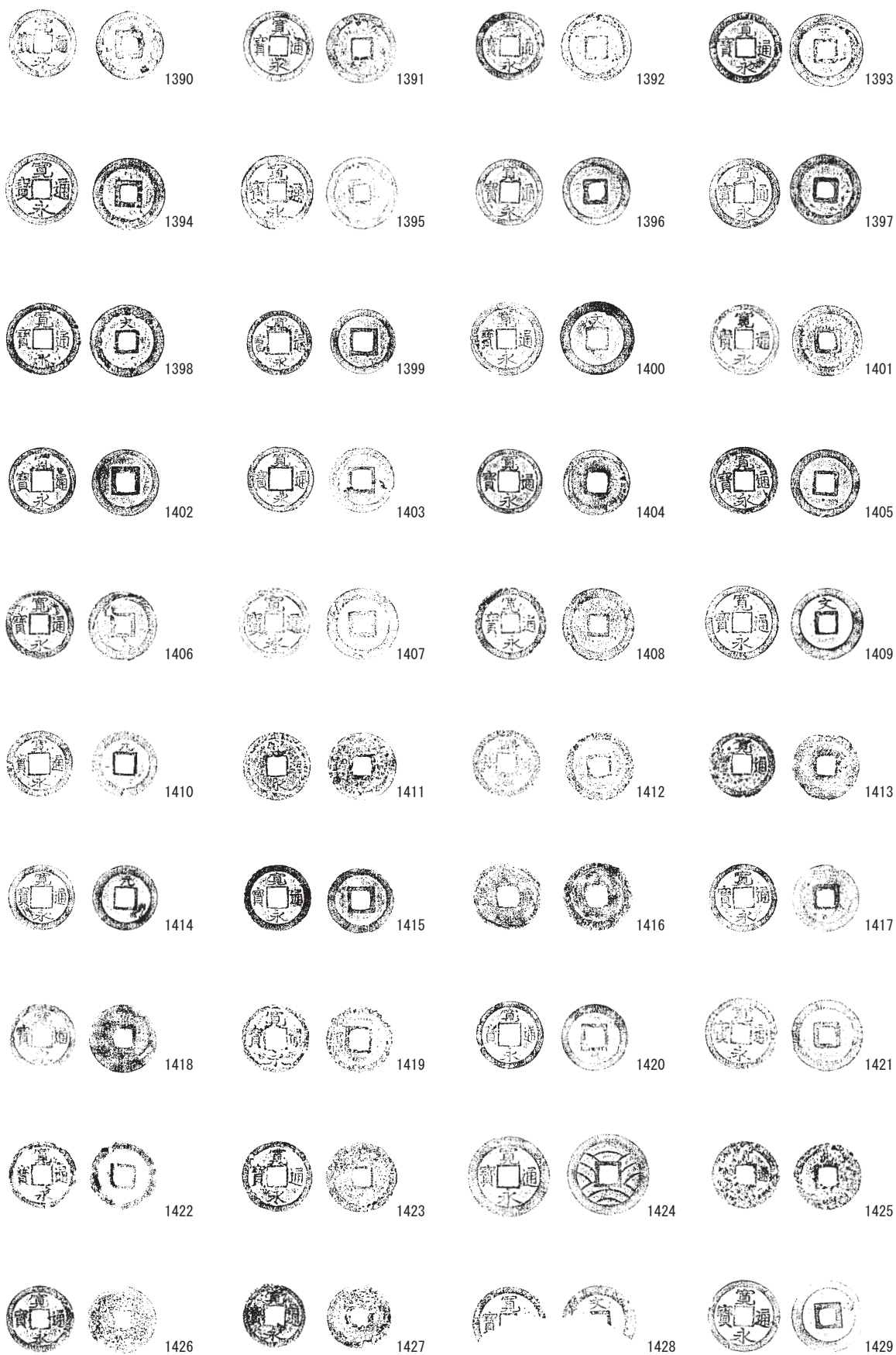


第402図 出土遺物 (16)



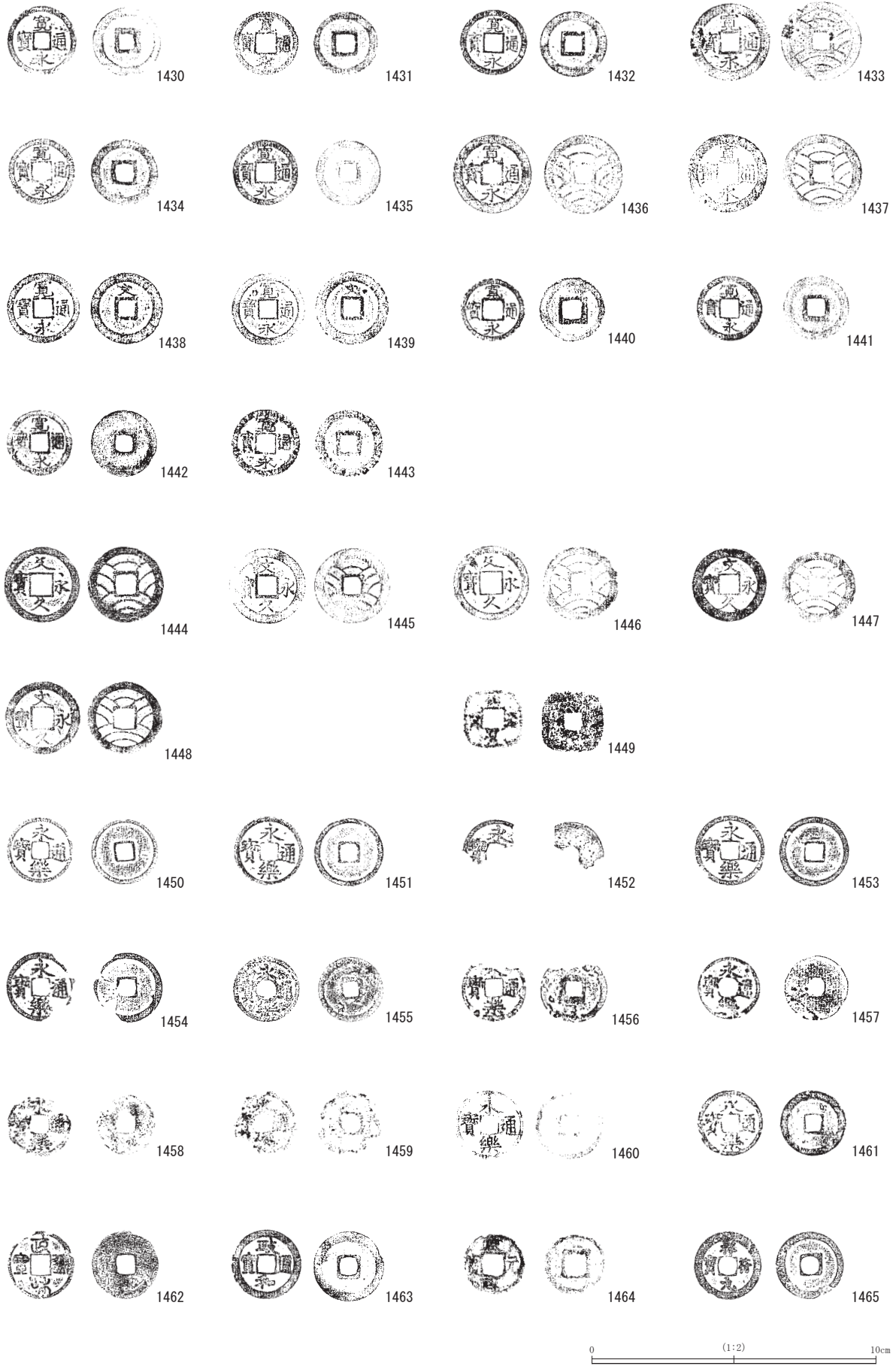
0 (1:2) 10cm

第403図 出土遺物 (17)

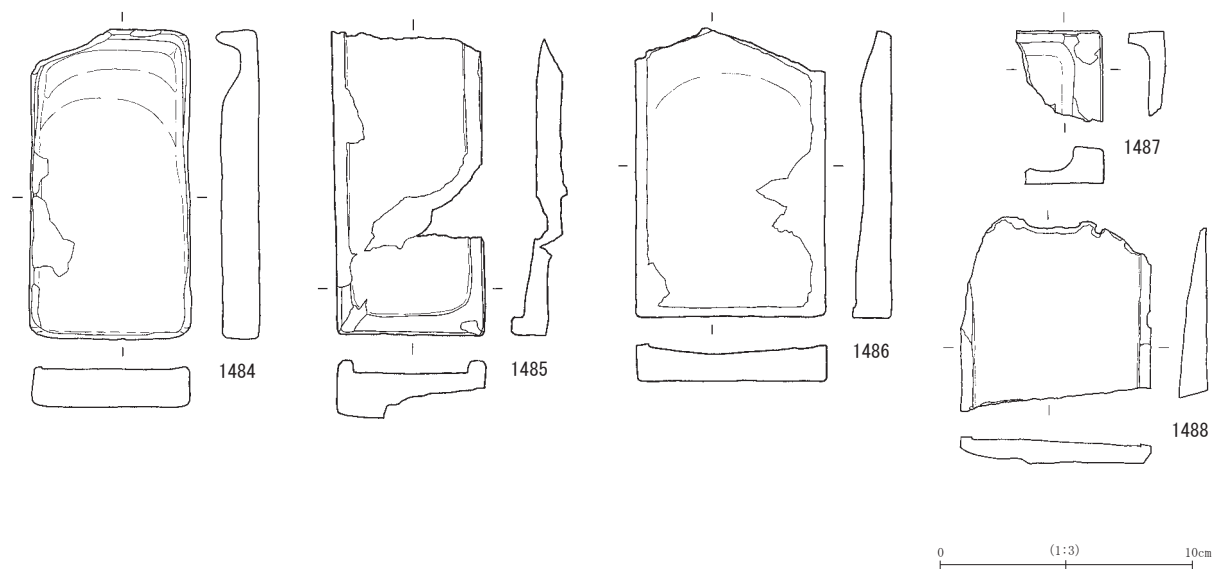
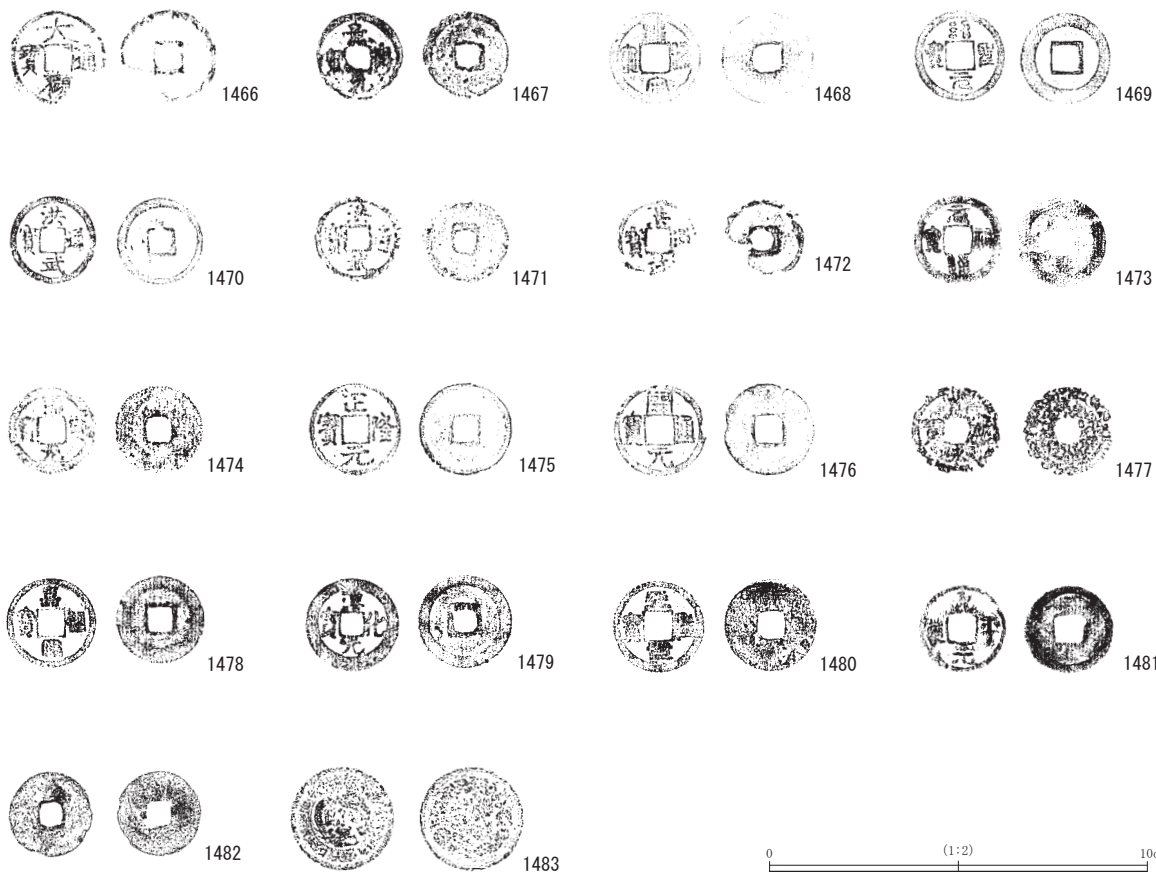


0 (1:2) 10cm

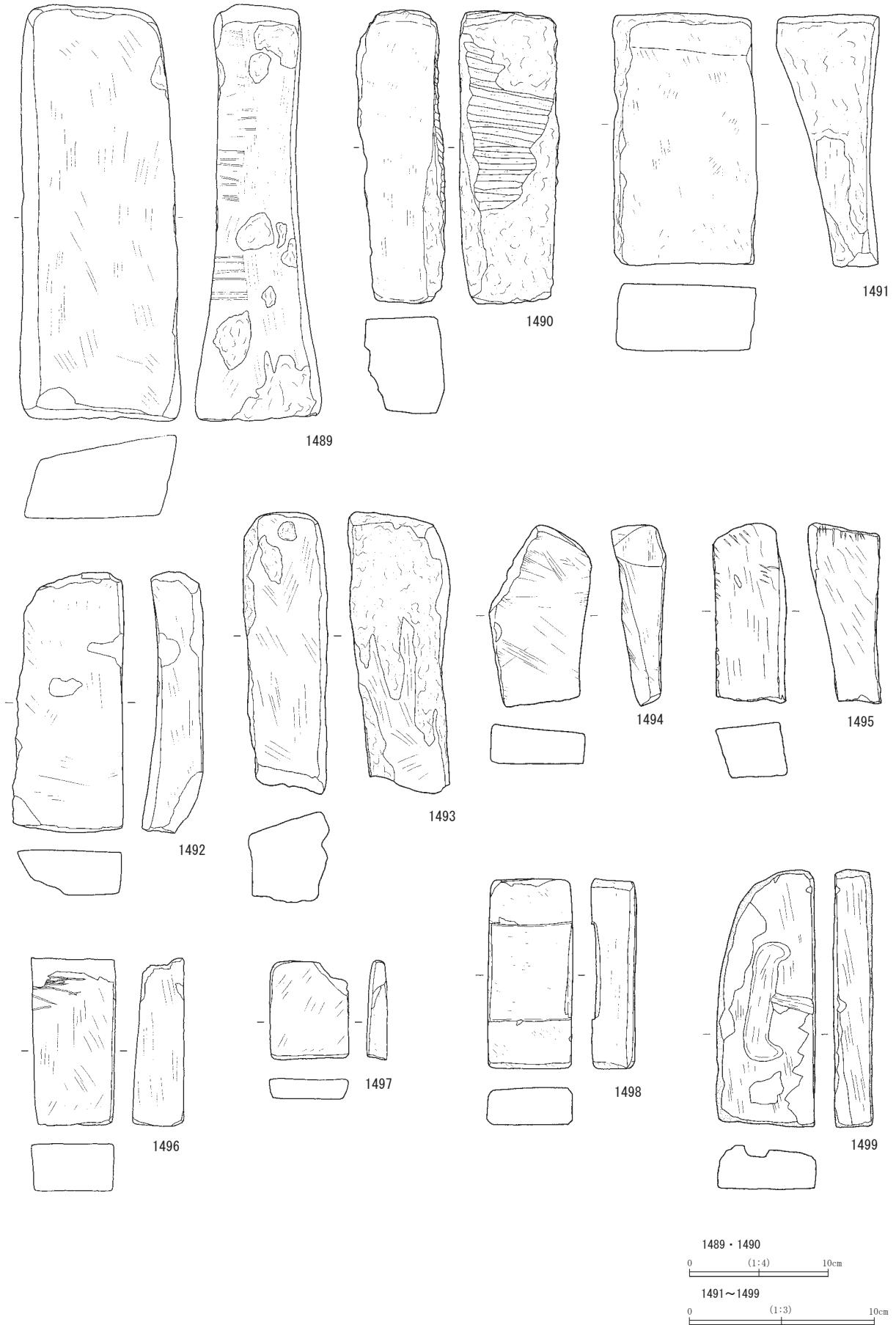
第404図 出土遺物 (18)



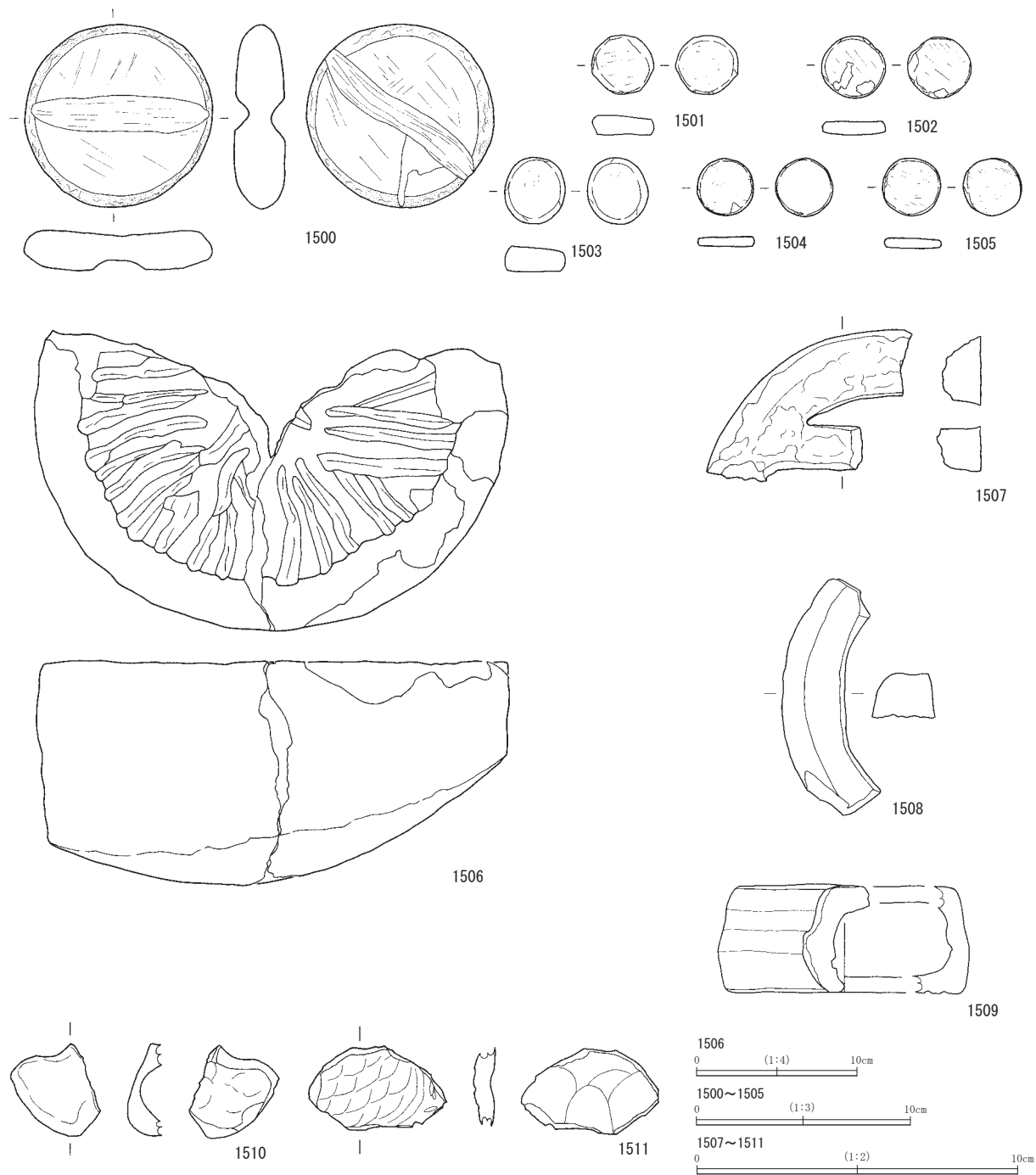
第405図 出土遺物 (19)



第406図 出土遺物 (20)



第407図 出土遺物 (21)



第408図 出土遺物 (22)

5 自然科学分析成果

自然科学分析の目的及び成果についてまとめておく。各分析結果については第2分冊附編にまとめて掲載している。

【テフラ分析】石器集中区の形成年代の把握を目的としている。サンプリングは分析担当者が現地に行っている。分析からはIV層下部にAT、Ⅲb層下部にAs-YPを確認できており、それらを基に各石器群の変遷を把握している。また地理的環境でも示したようにテフラを指標とした段丘形成過程が捉えられている。これらは本遺跡だけでなく岩手県の旧石器研究を進めて行くうえで重要な成果である。

【植物珪酸体分析】【花粉分析】古環境の復元を目的としており、テフラ分析を行った試料を用いて分析を試みている。層ごとに植生や花粉の様相が捉えられ、少なからず各時期の環境変化が窺える。

【放射性炭素年代測定】複数の石器集中区が確認できたことから、それらの帰属年代の把握を目的としている。分析にかけた炭化物の出土位置は第14表の通りであり、サンプリングについては調査担当者が行っている。Ⅲb層中の炭化物の多くは汚染されていたため、石器集中区の年代を示すような成果は得られていない。そのなかでも石器集中区7(IV層下部)では、 $19,210 \pm 80\text{yrBP}$ 、 $19,130 \pm 70\text{yrBP}$ と近似した年代値が得られている。また、石器集中区17(Ⅲb～Ⅲb-2層)では、 $17,400 \pm 70\text{yrBP}$ と得られている。これらの年代値はテフラ降下年代及び段丘形成過程と整合しており、石器集中区の帰属年代を明らかにできたことから非常に大きな成果である。

【黒曜石産地同定分析】旧石器時代の石器材料である黒曜石は、石器集中区7箇所及び遺構外から出しており、その数は608点に上る。分析は全ての集中区における各母岩別資料から複数点を抽出しており、計150点(約25%)を試みている。このような黒曜石の出土例は県内だけでなく東北地方の中でも類を見ないことから、各石器群の行動復元を目的とするため、より多くの点数を分析にかけている。その結果、石刃石器群や尖頭器石器群I群に伴う黒曜石の産地は概ね男鹿系であり、さらに後者の石器群では男鹿系の他に湯ノ倉や小赤沢?などの産地を確認している。特に尖頭器石器群I群では、各産地別に黒曜石の消費状況が大きく異なることが捉えられている。

【鉄滓化学分析】遺跡周辺では仙台藩の鉾山が操業されているが、時代により金、銀、鉛と採掘される鉾物が異なるようである。遺跡で確認できた鉄滓を分析することにより、鉾物・鉾山の内容を明らかにすることを目的としている。その結果、鉄滓には鉛を多く含み、周辺において鉛鉾山が操業されていたことを想定させる。

Ⅶ 総 括

1 旧石器時代の遺構・遺物

旧石器時代の石器は舌状を呈した段丘の全域から出土しており、それらからなる石器集中区26箇所が自然堤防上を中心に形成されている。これらは複数の石器群に分類できたことから、各石器群の成果及び様相を以下にまとめていく。

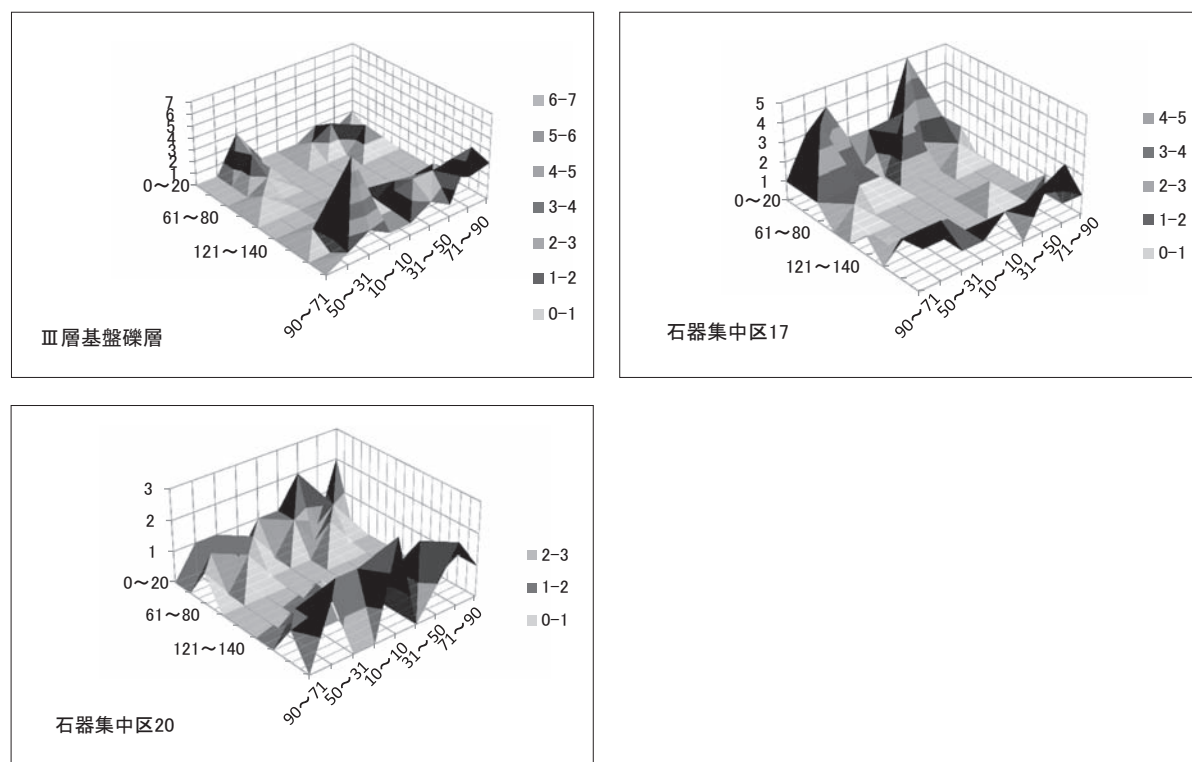
(1) 産状分析結果

本遺跡では石器173点(Ⅲ層基盤、石器集中区17、20)の産状分析を行っている。この分析を試みた動機は、石刃石器群と細石刃石器群が近接した層位で出土していることから、石刃石器群が自然堆積であることを証明するためである。その分析結果は以下の通りであり、計測値は第13表に掲載している(この値は現場で計測したものである)。また、それらの計測値である長軸方向と傾斜角を抽出して示したものが第409図である。これにより基盤礫層と石器集中区の堆積傾向が概ね把握できたと思われる。

Ⅲ層基盤の礫層は、北西から西方向の覆瓦構造を確認している。このことは地理的環境でも述べたように主に遺跡の北側を流れる胆沢川によって段丘が形成されていることを裏付けている。

石器集中区17は、段丘構成する礫層とは異なる産状を示しており、基本的には胆沢川の影響を受けずに堆積していることが捉えられる。

石器集中区20に関しては、基盤礫層の産状とやや類似した傾向が認められることから、少なからず胆沢川の影響を受け堆積したものと想定される。



第409図 産状計測分布図

(2) 各石器群の様相について

石器集中区1～26及び遺構外出土石器は、石刃石器群、尖頭器石器群、細石刃石器群、これらに含まれないその他に分類される。石器群はテフラを挟んで形成されており、前後関係を把握できている。以下に、各石器群の様相をまとめていく。

石刃石器群

当該石器群はⅢb-2層とⅣ層で検出しており、石器集中区4箇所を確認している。これらの集中区では神山型彫刻刀形石器が共通して認められるが、伴出するナイフ形石器は二側縁加工か基部加工と異なる。このナイフ形石器を基に二側縁加工を主体とする一群をⅠ群、基部加工を主体とする一群をⅡ群に区分しており、Ⅰ群のみ層位的前後関係を把握している。

[Ⅰ群古段階] 二側縁加工ナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区7。

立地：3面に形成され、段丘内陸部に位置している。

検出層位：ATとAs-YPに挟まれたⅣ層下位で検出しており、ATに近い層準である。

石器組成：ナイフ形石器、彫刻刀形石器などからなる。

ナイフ形石器は二側縁加工であり、縁辺の一方を残し対となる縁辺を大きく切断して加工を施している。素材は石刃ないし縦長剥片である。

彫刻刀形石器は全て神山型であり、左肩に彫刻刀面を作出している。いずれも素材末端部に彫刻刀面を有する。素材は石刃である。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、凝灰岩などからなり、組成比は頁岩92%、残りが他の石器材料である。剥片剥離技術：石刃技法が主体である。打面は単・両設であり、打面転位を繰り返しながら剥離している。剥離工程に伴い作業面稜調整や打面再生・調整が認められる。

石器消費工程：単体で搬入されたナイフ形石器や彫刻刀形石器は、使用後に廃棄している。また、石核は剥片剥離後に搬出している。石核を廃棄する例や原石による搬入される例は認められない。剥離された剥片は二次加工を有する剥片などに用いられ、使用後に廃棄している。

[Ⅰ群新段階] 二側縁加工ナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器、尖頭器を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区12。

立地：2面に形成され、段丘南側の縁辺部に位置している。

検出層位：As-YP直下のⅢb-2上面で検出している。

石器組成：ナイフ形石器、尖頭器、彫刻刀形石器などからなる。

ナイフ形石器は二側縁加工と共に、基部+先端加工と一側縁加工が含まれる。これらは素材剥片の使い方が異なり、縦長剥片を斜位と縦位にする例がある。前者は剥片の縁辺の一方を残し対となる縁辺を大きく切断して加工を施している。後者は素材の石刃や縦長剥片を縦位に用いて加工を施している。両者は素材打面を共に除去している。V字形状の基部は加工が裏面にまで及び、斜行した剥離が認められる。素材は石刃や縦長剥片である。

彫刻刀形石器は神山型と型式不明なものがある。前者は左肩に彫刻刀面を複数面作出している。基部加工は認めらず、彫刻刀面は素材打面側に作出している。素材は石刃や縦長剥片である。

尖頭器は残存状況から半両面加工と思われる。素材は縦長剥片である。

剥片剥離技術：石刃技法が主体である。打面は単・両設であり、90度・180度打面転位を繰り返しながら剥離している。剥離工程に伴い作業面稜調整や打面再生・調整が認められる。

石器消費工程：ナイフ形石器や彫刻刀形石器の一部、尖頭器は単体で搬入、廃棄している。搬入形態は原石と石核があり、いずれも剥片剥離後に石核を概ね搬出している。ただし石核を廃棄する例は僅かながら認められる。原石で搬入された石器材料は頁岩のみである。剥離された剥片はナイフ形石器や彫刻刀形石器、スクレイパーに加工され、使用後に廃棄または搬出している。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩、赤色頁岩、黒曜石などからなり、組成比は頁岩91%、珪質頁岩3%、残りがその他の石器材料である。黒曜石の産地は男鹿系である。

〔Ⅱ群〕先端部加工・基部加工ナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器、尖頭器を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区17・20。両者の距離は直線距離で約30mを測り、接合関係にある。

立地：2面に形成され、段丘東側の自然堤防上に位置している。

検出層位：As-YP直下のⅢb-2層上面で検出している。

石器組成：ナイフ形石器、彫刻刀形石器、尖頭器などからなる。

ナイフ形石器は、先端部加工と基部加工などがあるが、いずれも欠損しているため全体形状は判断としない。刃部は先端部のみ細かな加工が認められる。また、基部はV字形状であり、裏面にまで加工が及んでいる。これらの素材は石刃である。平面形状はⅠ群のナイフ形石器に比べ細身の傾向にあることから、杉久保型の可能性がある。さらに、これらは本群の彫刻刀形石器の平面形状や基部裏面加工とも異なる。

彫刻刀形石器は、神山型が主体を成し、型式不明が僅かに認められる。神山型の基部には加工の無いものが大半を占め、V字形状も稀に認められる。この基部加工は裏面にまで加工が及ばないため、ナイフ形石器とは異なるものである。一方、神山型に含まれないものには、杉久保型ナイフ形石器の加工に類似したものが認められている。これらの素材は石刃もしくは縦長剥片である。また、これらに伴う削片を17点確認しており、背面には彫刻刀面と二次加工、細かな剥離が認められる。両者を合わせて見ていくと、同一個体に属する割合より、異なる割合が高いことが窺える。このことから、刃部再生したものは遺跡外へ搬出、再生されていないものは廃棄されたと捉えられ、搬出と廃棄との間に段階的な差が看取される。さらに、これらの出土量は石器集中区20に偏ることから作業形態の違いを想定させる。

尖頭器は半両面加工である。先端部に細かい剥離が施されている。素材は縦長剥片である。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩、赤色頁岩、黒曜石などからなり、組成比は頁岩59%、珪質頁岩25%、玉髄質頁岩4%、赤色頁岩4%、黒曜石1%、残りが他の石器材料である。黒曜石の産地は男鹿系である。

剥片剥離技術：石刃技法が主体である。打面は単・両設であり、90度・180度打面転位を繰り返しながら剥離している。ただし最終的には単設方向からの剥離工程が多い。剥離工程に伴い作業面稜調整や打面再生・調整が認められる。

石器消費工程：単体で搬入されたナイフ形石器、彫刻刀形石器、スクレイパーは、使用後に廃棄している。特に彫刻刀形石器が搬入される例が多い。原石と石核が搬入され、石核は概ね搬出されている。原石の搬入や石核を廃棄する例は少ない。原石で搬入された石器材料は在地産頁岩である。剥離された剥片は彫刻刀形石器やスクレイパーなどに加工され、使用後に廃棄・搬出している。

当該石器群の様相：上記のように、神山型彫刻刀形石器に異なるナイフ形石器の伴出が捉えられたうえに、二側縁加工ナイフ形石器の一群における前後関係の把握や、同一文化層において異なるナイフ形石器群を確認できた意義は大きい。さらに、各石器群の生産活動は次のような差を見出せる。Ⅰ群古段階は石核のリダクションを中心とした作業、Ⅰ群新段階はナイフ形石器を中心とした石器製作が

行われている。また、Ⅱ群は彫刻刀形石器を中心とした石器製作が行われ、特に石器集中区20ではそれを用いた作業を展開していたものと思われる。

当該石器群の編年的位置づけ：石器群の帰属年代はテフラ分析及び放射性炭素年代測定により捉えられている。Ⅰ群古段階はATとAs-YPのテフラに挟まれ、ATに近い層準に形成されている。石器出土ピーク付近から検出された炭化材の年代値は $19,210 \pm 80\text{yrBP}$ 、 $19,130 \pm 70\text{yrBP}$ である。また、Ⅰ群新段階とⅡ群はAs-YPの直下に形成され、Ⅱ群の石器出土ピークから検出された炭化材の年代値は $17,400 \pm 70\text{yrBP}$ である。以下には、これらのことを県内外で得られている成果と対比させながら、当該石器群の位置づけを検討していきたい。

当該石器群は、二側縁加工ナイフ形石器や神山型彫刻刀形石器の存在から、所謂砂川期に相当する。Ⅰ群は、関東地方を中心に認められるものの、神山型彫刻刀形石器を伴うとなるとその類例数は極端に少なくなる。一方、Ⅱ群は、東北地方南部日本海側を中心として広く認められている。それぞれに類似石器群が存在しており、代表的な遺跡を挙げると以下の通りである。Ⅰ群古段階には神奈川県福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層、新潟県荒沢遺跡がある。Ⅰ群新段階には岩手県柏山館跡第Ⅱa文化層、和賀仙人遺跡、峠山牧場Ⅰ遺跡A地区、大台野遺跡などがある。Ⅱ群には岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡B地区、長野県貫ノ木遺跡H2Ⅲb文化層、長野県上ノ原遺跡町道地点上Ⅱ上部文化層、新潟県上の平遺跡A地点、吉ヶ沢遺跡B地点など多数存在している。ただし、新潟県上の平遺跡A地点、吉ヶ沢遺跡B地点については、層位的事例が参考となることからここに含めている。

上記の通り各石器群に対して比較される遺跡が挙げられるものの、位置づけに必要なテフラを伴う層位的事例や年代値が把握されている事例は極めて少ない。まずテフラについて見ていくと、ATとAs-YPの両テフラを確認できる遺跡は東北地方において殆ど認められない。しかし、As-YPと同一火山とされるAs-Kで見れば、類似した堆積状況は新潟県上の平遺跡A地点や新潟県吉ヶ沢遺跡B地点で窺える。両遺跡では石器出土ピークがAs-Kに近い層準にあることが確認されており、Ⅰ群新段階やⅡ群と類似した状況にある。次に年代値について見ていくと、対象文化層において年代値が得られている遺跡は神奈川県福田丙二ノ区遺跡と岩手県柏山館跡のみである。神奈川県福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層の礫群の年代値が $18770 \pm 330 \sim 19660 \pm 440\text{yrBP}$ 、岩手県柏山館跡第Ⅱa(下)文化層が形成されるⅡa層下部からⅡb層上部の年代値が $17,010 \pm 1,210\text{yrBP}$ と得られている。本遺跡の年代値と対比すると、神奈川県福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層がⅠ群古段階、岩手県柏山館跡第Ⅱa(下)文化層がⅡ群と近似した年代値である。よって、今回得られた成果は、概ね当該石器群の形成年代として位置づけることができよう。

このように、本遺跡で認められた異なる層準での出土例は、この約19~17,000yrBPの年代幅によって形成されたものと考えられる。また、時代が下るに連れて石器群に尖頭器を組成するようになる。この有無を基準に前後関係を把握していくことについては、相対的な尺度として用いるのであれば現時点では有効と思われる。しかし、本遺跡や上記の遺跡においても尖頭器を組成しない例も認められることから、この点については今後の課題と考えられる。さらに、上述したⅠ群新段階やⅡ群の年代値は、本来後続する尖頭器石器群Ⅰ群の年代値と近似しており、それらと併行関係にあることが想定される。この見解は谷(2006)が言及しており、両者の併行関係を示唆している。しかし、この両石器群の関係性については、石器包含層の薄さやそこから看取される堆積速度が遅さに起因していることも十分予想されることから、今後の課題としておきたい(このことは(4)遺跡の立地環境及び形成過程についてでまとめているので参照されたい)。よって、今回示した変遷図(第412図)では、従来の成果を反映し前後関係を持たせて提示しておく。

さらに、ここでは、I群を二側縁加工石器群、II群を杉久保系石器群と捉え、神山型彫刻刀形石器を伴出する石器群について検討してみたい。検討にあたっては上記の成果及び後者の年代値が把握されている津南町向原A遺跡を参考にしていく。両石器群は、年代値から約19000yrBPには形成されており、概ね同時期に存在していたと捉えることができる。神山型彫刻刀形石器を伴う石器群の上限年代を見ていくと、早坂平遺跡第I文化層において上記の年代よりさらに古い時期には成立していたことが明らかにされている。このことから神山型彫刻刀形石器を伴う石器群は、形成後の約19000yrBP頃に何らかの要因によって両石器群に分かれ、それ以降併存しながら東北地方に展開していったと想定される。両者は石器材料組成を見ても差が認められず、後述しているように石材環境も概ね共通しているため、これが単なる日本海・太平洋側といった現在確認されている分布差の問題だけで片付けられるものではないと考えられる。今後これらが成立した背景や展開の要因を検討していきたい。

尖頭器石器群

当該石器群はⅢb層とⅢb-2層で検出しており、石器集中区10箇所を確認している。これらは尖頭器の形態や石器組成の差からI～V群に区分している。

[I群] 小型のナイフ形石器と尖頭器を組成する一群である。他の石器群とは異なりtoolの形態及び石器組成に特徴が認められる。

石器集中区：石器集中区18・19・23・24。

立地：2面に形成され、すべて段丘東側の自然堤防上に位置している。石器集中区18は頭頂部にあり、他の集中区が斜面下方に隣接している。

検出層位：集中区18はAs-YP直下のⅢb-2層上面、その他の集中区はそれより上位のⅢb層中に形成されている。堆積層は集中区18が最も安定しており、それ以外は薄い堆積状況にある。このように形成層位が異なるものの、集中区18を中心に多くの母岩を共有し、かつ接合関係が認められることから、これらを同一石器群と把握している。集中区19・23・24は集中区18の斜面下に位置しているため、石器が流出した結果によって形成されたものと考えられる。

石器組成：ナイフ形石器、尖頭器、彫刻刀形石器、スクレイパーなどからなる。ナイフ形石器と尖頭器では、前者を組成する割合が多い。

ナイフ形石器は二側加工、基部加工、基部+先端部が認められ、二側加工が主体を成している。二側縁加工は小型が多く基本的に寸詰り、加工がやや粗雑になる。また、基部加工には中型も存在している。小型の素材は縦長・横長剥片や石刃、中型の素材は石刃である。

尖頭器は片面・両面周縁加工、片面・両面加工が認められ、小型の片面周縁加工と片面加工が主体を成している。また片面加工には中型も存在する。小型の素材はナイフ形石器と同じだが、縁辺に平行した稜を伴わない厚手のものが多い。中型の素材は縦長剥片である。

彫刻刀形石器は出土点数も少なく、いずれも型式不明である。

スクレイパーは刃部がエンドやラウンド状に形成され、小型から中型の規模が多い。素材は分厚い縦長剥片である。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩、黒曜石からなり、組成比は頁岩43%、珪質頁岩8%、玉髄質頁岩30%、黒曜石13%、残りが他の石器材料である。他の石器群とは異なり、玉髄質頁岩と黒曜石が占める割合が高い。黒曜石の産地は男鹿系、湯ノ倉、小赤沢?などがある。

剥片剥離技術：目的剥片に伴い多様な剥離技術が認められている。

小型剥片を目的とした剥離技術は、素材の断面が三角形や楕円形をした礫を用いている。稜から剥

離を行い片面に打面設定した後、作業面を固定させ単設方向から剥離している例(sh50など)や、同様の工程で180度打面転位させながら剥離している例(sh63)が認められる。これらの打面は単設・両設であっても作業面を固定させているため、対となる裏面には礫面が残置している。この剥離技術では厚手の剥片を素材としている例(sh65c)もある。また、これらとは異なり、作業面と打面の配置に関係無く90度打面転位させながら連続的に剥離する例(sh85)がある。さらに、石核が縮小していくと、その規模は細石刃核より小型化するものも確認されている(sh65c、sshc3a)。上述した剥離技術以外には、黒曜石に限って両極技法と捉えられるような剥片が認められるが、石核が存在しないため全容は判然としない。

中型縦長剥片を目的とした剥片剥離技術は、打面や作業面の在り方などは小型剥片剥離と同じである。この他には稜調整を行い比較的大きな縦長剥片を連続的に剥離している例(sh79、sh80)や横断面形状が菱形をした石核の上下方向から中央に向かって厚みのある剥片を剥離している例(sh66、sh75)、周縁方向から求心状に剥離している例(sh71、sshc1)がある。また、作業面と打面の配置に関係無く90度打面転位させながら連続的に剥離している例(sh57)も認められる。

上記以外には石刃技法と思われる資料が存在している(sh78、82、88など)。これについては剥片(629)からも同様のことを捉えられるが、石刃を伴う接合資料が存在していないため、それについては判然としない。

石器消費工程：単体で搬入された中型のナイフ形石器・尖頭器は、廃棄されている。また、多くの石核が搬入され、剥片剥離後に廃棄または搬出している。原石で搬入される例は殆ど見受けられないが、黒曜石のみその可能性がある。剥離された剥片は主に小型のナイフ形石器や尖頭器、スクレイパーに加工され、使用後に廃棄または搬出している。

石器製作工程：当該石器群の器種は石器材料を選択する傾向があり、小型のナイフ形石器と尖頭器には黒曜石や玉髄質頁岩、中型の尖頭器とナイフ形石器、スクレイパーには頁岩、玉髄質頁岩を用いている。ここでは母岩別資料を基に、獲得された素材から各器種へと至る過程を捉えていきたい。

まず、ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパーを組成する母岩別資料から見ていく。これらの資料には接合資料は少ないことから、母岩別資料の非接合資料を中心に関係を把握していく。同一母岩別資料における石器素材は、ナイフ形石器と尖頭器は小型の剥片、スクレイパー類は厚手の剥片である。ナイフ形石器と尖頭器は類似した素材を用いているが、背面構成に差を見出すことができる。縦長剥片の場合、ナイフ形石器は刃部となる縁辺と併行する稜が背面に認められるが、尖頭器は確認できるものについてはそのような稜が認められるものは少ない。一方、横長剥片の場合、尖頭器の方がナイフ形石器より背面に認められる剥離の数が多い。ナイフ形石器の素材は尖頭器に比べ定形的な剥片を必要とするため、これらの前後に剥離された剥片が尖頭器の素材となったと考えられる。スクレイパーの素材剥片は小型剥片より厚手で規模を有するため、それらより前に剥離されたと思われる。このように各器種に用いられる素材剥片には違いが認められることから、ナイフ形石器のみ規格的な剥片が素材に用いている。これらの剥離順序は各器種の規模から判断すると、スクレイパーの素材剥片→ナイフ形石器・尖頭器の素材剥片と捉えられる。つまり、石核の規模に応じて各器種の素材を選択したものと考えられる。

次に小型のナイフ形石器か尖頭器のどちらかがスクレイパーを組成する母岩別資料においても上記と概ね同じ状況にある。しかし、中型の規模については、ナイフ形石器や尖頭器がスクレイパーと同じ母岩を形成しないことから全容は判然としない。

以上、主要な器種を伴う母岩別資料を概観したように、各素材は石器材料の規模に応じて生産して

いることが窺える。これを具体的に石器材料にあてはめていくと、黒曜石と玉髄質頁岩は石核の規模が縮小傾向にあるためナイフ形石器や尖頭器の素材剥片を生産しているのに対し、頁岩はそれらとは反対に規模が大きい傾向にあるためスクレイパーの素材剥片を生産している。つまり、このような結果は、石器材料の規模が石器製作に大きく反映していることから、生じたものと想定される。

石器材料(黒曜石)の検討：当該石器群は多くの種類の石器材料が組成している。中でも他の石器群に比べ黒曜石を組成する割合が高い。この黒曜石については、東北地方日本海側を中心とした産地が把握されており、旧石器時代における利用の在り方が少しづつ明らかになっている(吉川2009)。ここでは産地同定の結果を踏まえ、各母岩別資料(ob1~9)における原産地及びその消費状況についてまとめておく。

当該石器群からは黒曜石497点が出土しており、遺構外を含めると570点を数える。今回の整理では、これらの約1/4に対して産地同定を試みている。各母岩別資料における産地の結果は第7表の通りであり、ob1~4・6が男鹿系、ob5が湯ノ倉、ob7・9が小赤沢?、ob8が不明(男鹿系?と湯ノ倉?)に分けられる。これらの中でob3・4とob2・6は似たような特徴を有していることから同一母岩とも捉えられたが、質感及び混入物に若干の差が認められるために区分している。また、ob8は分析結果が分かれたものの、外観において差が認められないことから一括りにしている。ここではob8以外の結果が安定している母岩別資料の産地をみていく。

これらを産地ごとにまとめると、男鹿系が5母岩、総点数350点、総重量257.88g、礫面保有率26%、湯ノ倉が1母岩、総点数172点、総重量65.88g、礫面保有率8%、小赤沢?が2母岩、総点数8点、総重量4.00g、礫面保有率0%となる。各項目において産地は男鹿系が上回り、湯ノ倉、小赤沢?の順に減少しており、産地別における消費過程の差が窺える。これを単に石材消費と移動距離との関係だけで捉えるのであれば、上記の順を獲得の新しい順と見なすことができる。さらに、他の石器材料との関係を捉えていくと、頁岩や玉髄質頁岩が主体を成していることから、それらを獲得していく過程で黒曜石は補完的に獲得されたと想定される。

第7表 黒曜石産地同定結果一覧

	母岩名	総点数	総重量	礫面保有	分析点数	男鹿系	男鹿系?	湯ノ倉	湯ノ倉?	小赤沢?	被熱	不明
18	ob	26	25.82	5	7	1	3	1			2	
	ob1	52	31.92	15	19	9					10	
	ob2	32	77.64	14	20	11	4				4	1
	ob3	34	16.03	5	11	6	3				4	
	ob4	182	85.03	50	33	19	5				8	1
	ob5	170	60.05	15	10			6	3		5	
	ob6	49	46.87	10	17	13	1				3	
	ob7	3	1.19		1					1		
	ob8	5	9.83	1	2		1		1			
	ob9	6	2.81		1					1		
19	ob	6	7.47	1	5	3	1				1	
	ob1	1	0.39									
	ob5	2	5.83		2				2			
23	ob	2			1				1			

上記のような結果が得られたことは、当該石器群の石器材料の獲得に伴う移動領域論を検討して行く上で貴重な成果である。特に、男鹿系以外に湯ノ倉や小赤沢?などの産地を確認できたことは、後期旧石器時代における資源開発といった点においても重要な成果となろう。これらの点については類例の増加を待ちいずれ検討していきたい。

編年的位置づけ：テフラ分析からはAs-YP降灰以前であることを確認できたものの、放射性炭素年代測定による年代値は得られていないため帰属年代については特定できていない。ここでは県外で確認されている当該石器群及びそこで得られた自然科学分析成果と対比させながら、位置づけていきたい。

本群は南関東を中心に類似石器群が多数確認できており、神奈川県下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層、東京都仙川遺跡などが挙げられる。これらは基本的に砂川期に後続する石器群であり、ナイフ形石器群から尖頭器石器群への移行期に位置づけられるものである。また、東北地方や信州では山形県平林遺跡、長野県西岡Ⅲa文化層などと対比されるが、東北地方を中心に見ていくとその数は極端に少なくなる。これらの帰属年代は、遺跡数に比べ得られている成果は少なく、神奈川県福田丙二ノ区遺跡第Ⅰ文化層や田名塩田遺跡群A地区(向原遺跡No4地点)でのみ良好な成果が得られている。前者の年代値は 17880 ± 220 yrBP、 18100 ± 210 yrBP、 17920 ± 320 yrBP、後者の年代値は 17650 ± 60 yrBP、 17630 ± 50 yrBPである。これらを基に本群の帰属年代を捉えていくと、現時点で2通りの年代観が想定される。まず、上記に示した2遺跡の年代値は、石刃石器群Ⅱ群新段階($17,400 \pm 70$ yrBP)と近似していることから異なる石器群が併行関係にある。一方、南関東などの層位的成果を軸に見ていくと、当然その年代以降からAs-YP降灰以前の間に取り、南関東と比べると年代がさらに下ることが予想される。

このように本群の位置づけについては、石刃石器群の項でも述べた通り層位の堆積問題が存在していることから、両者を併行関係と捉えるのではなく、南関東の層位的成果を重視し石刃石器群に後続するように現時点では配置しておく。この本群の位置づけ及び石刃石器群との関係については今後の資料の増加を待ち検討課題としておきたい。

〔Ⅱ群〕 中型の縦長剥片を素材とする周縁加工の尖頭器を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区9。

立地：2面に形成され、段丘北側の縁辺部手前の緩斜面上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層中で検出している。

器種組成：尖頭器、彫刻刀形石器、両面調整石器からなる。

尖頭器は周縁に加工が施され、縦長剥片を素材としている。この素材の用い方と加工方法は石刃石器群Ⅰ群新段階の尖頭器に類似している。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、凝灰岩からなり、組成比は頁岩80%、珪質頁岩10%、凝灰岩10%である。

剥片剥離技術：集中区で剥片剥離をしているものの、点数が少ないため剥離技術については判然としない。ただし、上記の器種の素材獲得には、縦長剥片剥離技術を用いていることが窺える。

石器消費工程：尖頭器などは基本的に単体で搬入し、廃棄している。また母岩別資料が少ないものの石核を搬入し、剥片剥離後で搬出していることが窺える。

編年的位置づけ：本群は検出層位からAs-YP降灰以降であることが位置づけられる。さらに、本群のような周縁加工尖頭器は石刃石器群Ⅰ群新段階においても確認できたことから、As-YPを挟んで存在していることが捉えられる。

本群に伴う尖頭器は、新潟県を中心に長野県や山形県でその存在が認められているが、出土例は少ないことから、その様相は判然としない。この一群を岩瀬(2011)は部分調整尖頭器石器群として捉え、真人原遺跡などの成果によりAT降灰以降からAs-YPk降灰以前の時間幅に収め、細石刃石器群の前段階で捉えている。この位置づけについては、本群の成果とは異なることから、当該石器群の時間幅

は岩瀬が示した下限年代より更に下るものと考えの方が妥当であろう。

以上のように周縁加工の尖頭器は、石刃石器群以降から細石刃石器群併行期まで存続していたと考えられる。その中でも主体となる時期は、おそらくAs-YP前後と想定される。このことについては、依然として対比資料及び自然科学分析に伴う成果も少ないことから、改めて検討が必要となろう。

【Ⅲ群】中～大型の両面加工尖頭器が認められる所謂「神子柴・長者久保」系の一群である。

石器集中区：石器集中区1・14。前者は小規模、後者は大規模な集中区を形成している。ただし、後者は近世の柱穴により削平を受けているため全容は判然としない。ここでは両者の様相が大きく異なることから分けて報告する。

－石器集中区1－

立地：2面に形成され、段丘西端の自然堤防から下る緩斜面上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層中位で検出している。

器種組成：剥片とチップからなる。いずれも尖頭器製作に伴う剥片である。

石器材料組成：頁岩・珪質頁岩からなり、組成比は頁岩35%、珪質頁岩65%である。

剥片剥離技術：中～大型の尖頭器のみ製作されており、それ以外の剥片剥離は認められない。

石器消費工程：尖頭器の未成品で搬入し、製作後に搬出している。剥離された剥片は二次加工を有する剥片などに用いられている。

－石器集中区14－

立地：3面に形成され、段丘東側の自然堤防より南側の緩斜面上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層下位で検出している。

器種組成：尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、細石刃などからなる。

尖頭器は平面形状や加工により、3分類できる。柳葉形を呈した両面加工：中～大型の細身の左右対称形であり、最大幅が中央より基部側にある。長幅比は、完形が4：1前後、失敗品が2.5：1である。概ね単体資料で搬入しており、未成品で搬入され製作しているものは少ない。素材は横長の大型剥片を用いていることが廃棄された資料から窺える。柳葉形を呈した半両面加工：中型の左右対称形であり、すべて欠損していることから全容は判然としない。素材は縦長剥片が用いられている。木葉形を呈した両面加工：中型の左右非対称であり、最大幅が中央にある、断面が三角形ないし凸レンズ状となり、柳葉形とは異なり厚みがある。長幅比は2：1前後である。すべて未成品で搬入され、製作している。

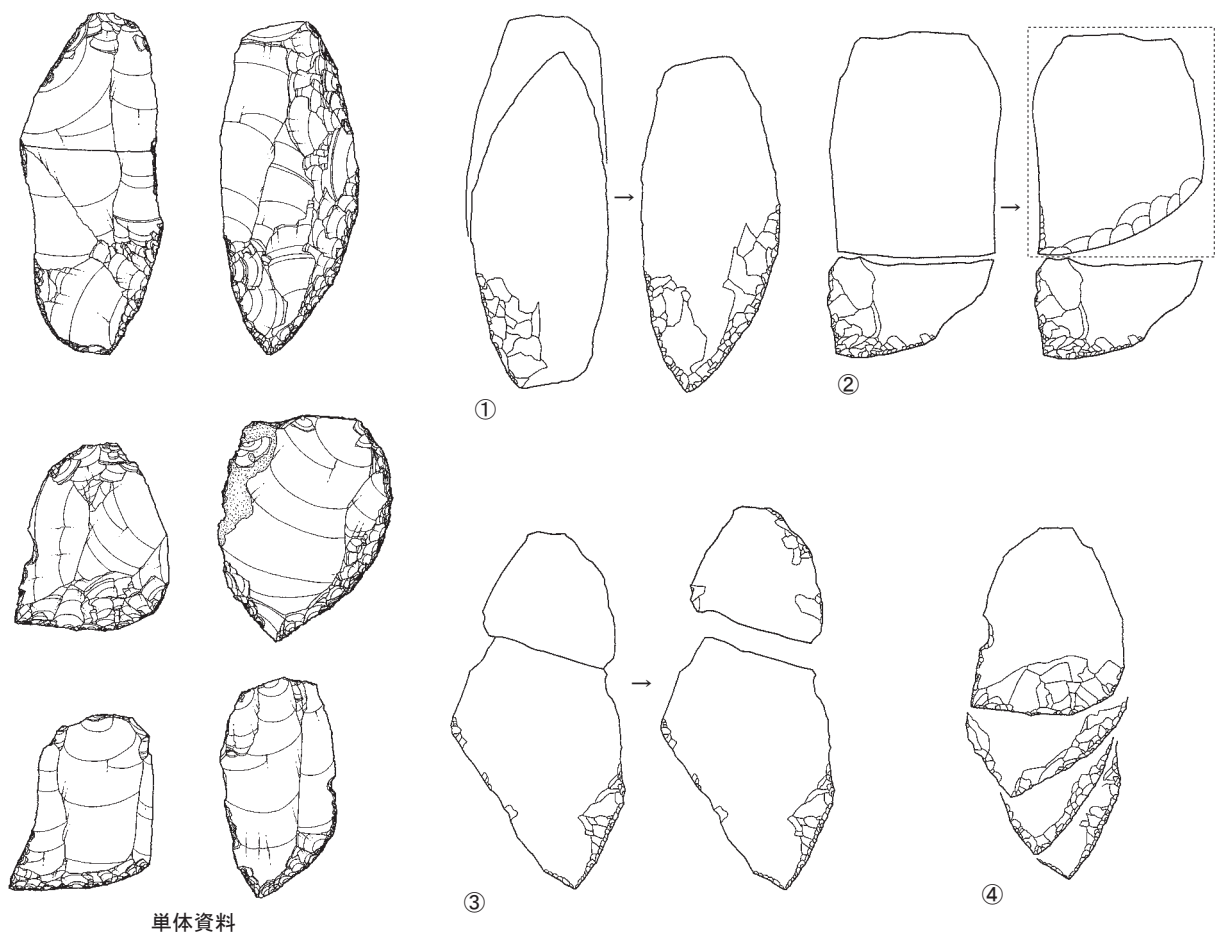
このように、尖頭器は完成品の規模や形状だけでなく、素材選択にも差が認められている。この素材選択は製作工程と完成形状を反映していると思われることから、柳葉形状での半両面から両面への変化や木葉形を柳葉形の未成品や失敗品とは捉えずに、ここでは尖頭器の形態として成立していたものと考えておきたい。しかし、当該期の資料は少なく不明な点が多いことから、上記の解釈については今後の課題である。

スクレイパーは、刃部形状が縁辺が交わるように加工を施すV字形状と、直線的な縁辺とやや弧状を呈する下縁が接するように加工を施し、交わる端部を尖らせる形状がある(第410図)。それぞれに大小異なる規模が存在している。このような平面形状の形態的特徴から器種差とも捉えられるものの、両者には以下の共通点も認められている。(1)素材は縦長剥片であり、剥片の末端部に刃部を施し、先端部を作出している。(2)刃部は先端部を中心にと、加工には小さい(浅い)剥離と大きい(深い)剥離で構成され、剥離の幅は前者が短く、後者が長く施されている。(3)刃部の位置は概ね前者が左側縁、後者が右側縁に位置している。その際には素材剥片の厚さも考慮しており、厚さを有する縁辺が右側

縁であることが多い。しかし、厚さが満たない場合はこの逆も有り得る。

上記のような共通点を見出せたことから、ここでは両者を同一器種として捉え各資料(①~④)を基に変形過程について検討していきたい。①はまず剥片末端部に加工を施し使用しているが、基部側が欠損すると上下を変え基部側に刃部加工を施したものである。②は刃部の再生ないし欠損により大きく分割した結果、基部側を持ち出している。持ち出された側は、おそらく同じ器種として用いられたものと思われる。これらは初期段階における欠損に伴い大幅な刃部変化が予想されるものである。③は使用段階で刃部を欠損しているが、欠損した基部側右側縁に再度刃部を施し使用しているものである。①~③の資料からは使用を継続していく過程で、刃部は大きく変形していくことが捉えられる。さらに、出土した各石器の刃部を並べ連続的な使用に伴い変形過程を想定したものが④である。これは刃部再生や偶発的な欠損が繰り返されることで、その先端部が縁辺に沿って下縁側から上方へと移動していくことが予想される。この過程は、榊(1999)が示したDibbleのモデルと整合しており、少なからず刃部の変形していく段階を反映しているものと思われる。

以上のように、刃部は再生ないし欠損に伴い大きく変形していくことが考えられる。これらのスクレイパーは、異なる器種と捉えるより同一器種における変形として解釈した方がより蓋然性が高いものと思われる。今後は使用痕分析と合わせた検討が必要であろう。また、これらの刃部形状を有するスクレイパーは、新潟県正面中島遺跡でも確認されることから当該期に伴う型的な形態として視野に入れておく必要がある。これらのことについては類例の増加を待ち、再検討していきたい。



第410図 スクレイパー刃部変形過程

細石刃は5点出土している。基本的に欠損しているため全体形状は判然としないが、規模の小さなものが主体である。その中に長さ4.6cmを測る338が確認されている。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩などからなり、組成比は頁岩51%、珪質頁岩24%、玉髄質頁岩22%、残りが他の石器材料である。

剥片剥離技術：周縁や単設方向から縦長剥片を剥離している接合個体を確認しているが、資料が少ないため剥片剥離技術については判然としない。このような中で周縁方向からの求心状剥離技術から剥離された縦長剥片はスクレイパーの素材としていることは母岩別資料から窺える。また、石刃技法や細石刃剥離技術、尖頭器の素材となる大型の横長剥片を目的とした剥離技術などの存在が想定されるものの、それらについて接合個体が存在しないため把握できていない。

石器消費工程：単体で搬入された尖頭器やスクレイパーは廃棄している。尖頭器の未成品や石核は単体で搬入し、共に剥離後に搬出している。原石での搬入は認められない。

編年的位置づけ：テフラ分析からはAs-YP降灰以降であることを確認できたものの、放射性炭素年代測定による年代値は得られていないため帰属年代については特定できていない。ただし、県内における調査成果が少ないことから、層位的に把握できた点では貴重な成果と考えられる。本群では両集中区の検出層位に差を認められたが、尖頭器の規模から両者を概ね同時期と判断しておきたい。

ここでは、層的事例により尖頭器の形態的推移や組成差などが把握されている南関東の成果を中心に検討していく。本遺跡のような特徴を有する尖頭器は、神奈川県吉岡遺跡群C区の石器群と類似している。これらは神子柴・長者久保期の中でも新しく、土器出現後で有舌尖頭器出現の前段階に位置づけられている(白石・笠井ほか1999、白石2001)。したがって、本群も同様の時期で捉えておきたい。しかし、本来組成しない細石刃が認められるため、先述した時期よりもやや古くなることが予測される。ただし、細石刃の組成率は低くその技術的様相が判然としないことから、この点については今後の課題である。

このように本群の位置づけについては、若干の時間差を伴うことも予想されるが、尖頭器の形態的特徴を優先的に判断し、神子柴・長者久保期の中でも新しい時期としておきたい。

【IV群】尖頭器を主体に細石刃やスクレイパーを組成する一群である。

石器集中区：石器集中区21

立地：2面に形成され、段丘の東端に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層上面で検出している。

器種組成：尖頭器、細石刃、スクレイパーなどからなる。

尖頭器は小型の周縁加工と中～大型と思われる両面加工が認められる。これらの中には基部が尖る形状を含む。

細石刃は7点確認されており、すべて欠損している。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩、黒曜石などからなり、組成比は頁岩66%、珪質頁岩22%、玉髄質頁岩2%、残りが他の石器材料である。黒曜石の産地は不明である。

剥片剥離技術：尖頭器製作に伴う剥離や細石刃剥離が行われているが、同一母岩別資料が少ないため判然としない。また、同様の理由から剥片剥離技術についても把握できていない。

細石刃剥離技術は不明としたものの、本集中区中央の攪乱及び周辺から確認できて細石刃核(1064、1065)が伴うのであれば、荒川台技法を伴う細石刃剥離技術が存在する可能性がある。ただし、これらは細石刃と同一母岩別資料を構成しない。

石器消費工程：尖頭器、尖頭器未成品、細石刃核、石核は単体で搬入している。尖頭器は廃棄される

が、尖頭器未成品、細石刃核、石核は剥離後に搬出している。

編年的位置づけ：検出層位からはⅠ～Ⅲ群より新しく、Ⅴ群と近い時期が想定される。ただし、細石刃が組成することから、それよりはやや古く位置づけられる可能性がある。本群は有茎尖頭器成立期かそれよりやや古い時期に想定される。

【Ⅴ群】尖頭器や有茎尖頭器を組成する一群である。主体となる有茎尖頭器により、a・b群に区分している。

Va群：小瀬が沢型が認められる一群である。

石器集中区：集中区は形成せず、単体資料(961、971、1004)である。

立地：2・3面の東側で出土している。

器種組成：単体資料であるため不明である。

石器材料組成：珪質頁岩、頁岩からなる。

石器消費行程：単体で搬入され、廃棄している。

Vb群：中林型が認められる一群である。

石器集中区：石器集中区2・15

立地：2面に形成され、遺跡西端の緩斜面上や段丘東側の自然堤防上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層上面で検出している。

器種組成：尖頭器、スクレイパー、剥片、チップからなる。

有茎尖頭器は石器集中区15から出土しており、中林型が認められている。

スクレイパーは基部形状が尖る特徴を有しているもので、石器集中区2から出土している。このような形状は当該期に比定される弓張平B遺跡に類似資料が認められることから本群で扱っている。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩からなり、頁岩が主体である。

剥片剥離技術：母岩別資料及び接合資料が少ないため剥片剥離技術は判然としないが、縦長剥片と小型剥片剥離技術が認められている

石器消費工程：単体で搬入された尖頭器類やスクレイパーは廃棄している。石核は剥片剥離後に搬出している。

編年的位置づけ：検出層位からはⅠ～Ⅲ群より新しく、Ⅳ群と近い時期が想定される。ただし、細石刃が組成しないことから、それよりはやや新しく位置づけられる可能性がある。本群は有茎尖頭器成立期と想定される。

細石刃石器群

当該石器群は全てⅢb層中で検出しており、石器集中区7箇所を確認している。これらは細石刃剥離技術の特徴からⅠ～Ⅲ群に区分している。

【Ⅰ群】荒川台技法が認められる一群である。

石器集中区：石器集中区4・5・8・26、及び単体資料(1064、1065)である。

立地：2面に形成され、段丘北側の自然堤防上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層中～下位で検出している。

器種組成：細石刃、細石刃核、両面調整石器、スクレイパーなどからなる。

細石刃核は稜柱形とU字形を呈しており、これらには打面再生・調整、下縁部調整が認められる。細石刃核の形状は後者から前者へと変形する工程が捉えられていることから、後者は細石刃剥離を展開できずに廃棄されたものと考えられる。

細石刃は全て欠損している。幅は4.2～9.1mm、厚さは1.1～3.7mmの範囲にある。残存している打面は主に複数面で構成されている。

石器材料組成：頁岩、珪質頁岩、凝灰岩などからなり、組成比は頁岩66%、珪質頁岩10%、凝灰岩10%、残りが他の石器材料である。

剥片剥離技術：荒川台技法を伴う細石刃剥離技術や縦長剥片剥離技術が認められる。この荒川台技法に伴う剥離技術は、詳細は後述するが細石刃剥離だけではなく、母型の素材となる縦長剥片の剥離に対しても用いることが窺えている。また、同一母岩において小型縦長剥片剥離も存在することから、これらが一連の工程に組み込まれていた可能性がある。

縦長剥片剥離技術は両設打面で、90度・180度打面転位を繰り返しながらの剥離である。これらは石刃技法のようにも見受けられるが、石刃や連続した剥離痕跡を背面に伴う剥片が認められないため判然としない。

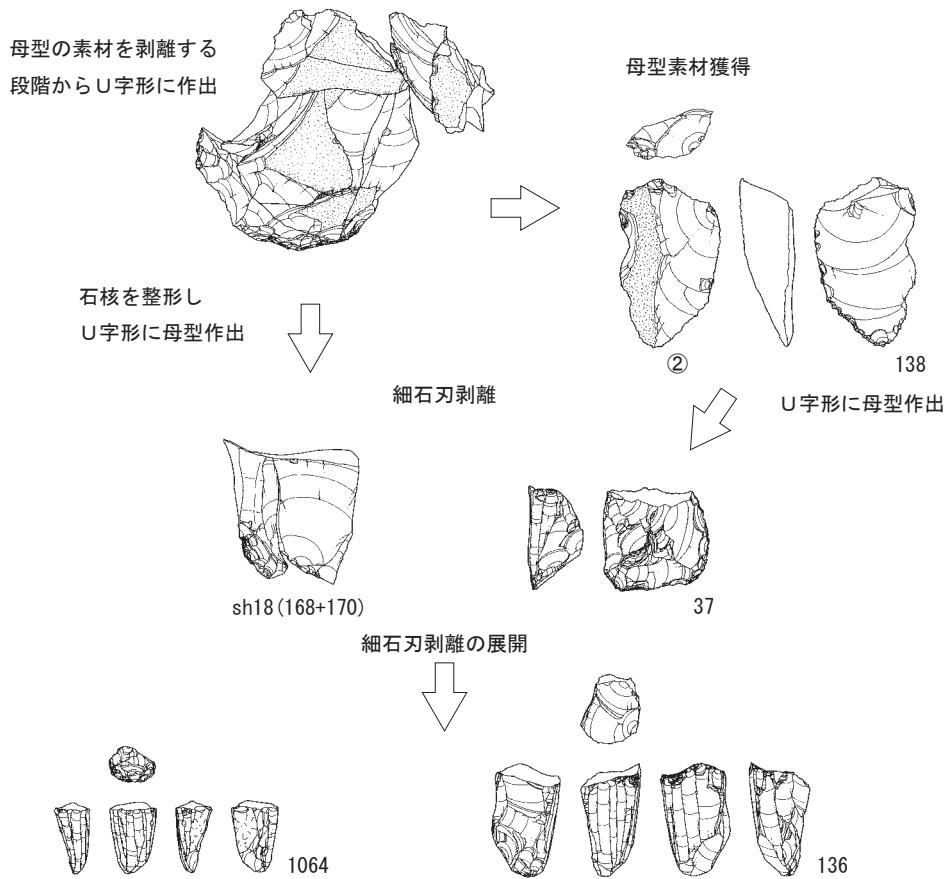
石器消費工程：単体で搬入された細石刃核は、細石刃剥離後に廃棄・搬出している。また搬入された石核は剥片剥離後に、搬出・廃棄している。原石で搬入される例は認められない。剥離された剥片は両面調整石器や二次加工を有する剥片の素材として用いられている。

荒川台技法の検討：荒川台技法は、母型作出から細石刃剥離工程に至る一連の工程を捉えたものである(阿部 1993、2002)。また、この工程中で判然としなかった母型作出段階Ⅲ・Ⅳ類の工程が、近年報告された五川目(6)遺跡において確認されている。これらの資料によって阿部が提示した剥離工程は出揃い、概ねその全体像を把握できたものと思われる。ここでは、本遺跡で認められた荒川台技法の新たな側面について、各資料を概観したうえでまとめていきたい。

まず、細石刃核(37、136、1064、1065)と二次加工を有する剥片(138)を見ていく。37は剥片を素材とし、剥片の側縁と下縁部に調整が施され、U字形の母型を作出している。細石刃剥離は両側縁部において行われるが、剥離が展開できず母型の形状を大きく残している。136はほぼ全周にわたって細石刃剥離が進行した結果、稜柱形を呈している。ただし、裏面から左側面にかけては細石刃剥離が行われておらず、側縁・下縁部調整が認められる。この調整は細石刃剥離過程中に施されたものと思われる。1064は円錐形を呈し、細石刃剥離が進行した結果かなり小型化している。裏面は被熱で判然としないが、残存部には側縁・下縁部調整が認められる。1065は剥片を素材とし、剥片の側縁と下縁部に調整が施されている。左側縁側で細石刃剥離を行うが、剥離は展開できず母型の形状を大きく残している。また、138は二次加工を有する剥片に分類したものである。厚手の縦長剥片の側縁と下縁部に加工が施されており、母型作出時の形状に類似するため提示しておく。仮に細石刃剥離が進むと、37のような細石刃核へと形状が変化していくことが予想される。また、これらとは異なる石材においても細石刃や打面再生剥片が認められることから、細石刃核の存在が窺えている。

次に、母岩別資料(sh18)を見ていく。接合資料は厚手の剥片を素材とし、下縁部と側縁に調整が施され、U字形の平面形状を作出している。右側面で縦長剥片を連続的に剥離し、さらに左側面でも同様に剥離を行うものの、母型の素材を目的とした厚手の縦長剥片を剥離できずに停止している。その後、石核整形に伴い下縁部側を剥離しながら下設側に打面を設定し、180度転位させ再度下縁側に調整を加え、U字形の細石刃核母型(168+170)を作出している。この母型から細石刃を剥離するが、意図した剥離ができずに停止している。つまり、この接合資料からは、母型素材獲得に伴う剥片剥離と細石刃剥離の下縁・側縁部調整が共通しており、「入れ子」状態になっていることが捉えられている。

これらのことをまとめると荒川台技法の工程は第411図のようになる。基本的に阿部(2002)が提示している母型作出から稜柱形を呈した残核へと至る工程が捉えられた。一方、これまでに示されていない



第411図 荒川台技法に伴う剥離工程

い工程も把握できた。それは母型の素材剥片を剥離するための石核に細石刃核母型と同じ側縁・下縁部調整を行いU字形に整形する点と、母型素材を剥離していた石核から石核整形を経て、そのまま細石刃核へと展開していく点である。つまり、剥片剥離と細石刃剥離が入れ子の状態にあり、包括的な技術形態にあると言えよう。このことは従来より技術的にも幅が認められたことになるが、この母型素材獲得に伴う剥離技術は、類例が少ないことから全容は判然としない。この点については継続的に調査されている荒川台遺跡の成果次第では、さらに技術的バリエーションが存在することも予想される。

今後は同技法の解明が課題となり、技術的系統も視野に入れていく必要がある。このことについては、阿部(2002)も指摘しているところであり、本遺跡においても石刃石器群や尖頭器石器群Ⅰ群の中に剥離に伴い下縁部調整を施す母岩別資料(sh12、sh65c)を確認できる。このように石刃技法や小型剥片剥離技術の中に共通点を見出せるものの、事例が極端に少ないため系統については依然として判然としない。この課題に対しては、類例の増加を待って再度検討してみたい。

編年的位置づけ：テフラ分析からはAs-YP降灰以降の石器群として捉えられたものの、放射性炭素年代測定による年代値は得られていないため帰属年代については特定できていない。また、出土層位から判断すると石刃石器群との検出面及び層位が異なり、どちらかと言えば神子柴系石器群と併行するような出土状況を示している。このことは、石刃石器群との共伴関係が示唆される荒川台遺跡の見解とは異なるものである。ただし、この成果はあくまでも本遺跡に限定されるものであって、荒川台遺跡における石刃石器群との共伴関係を否定するものではない。

上記の点を踏まえ当該石器群の位置づけについては、該当する石器が出土している新潟県荒川台遺

跡や青森県五川目(6)遺跡と対比させながら検討していきたい。荒川台遺跡ではテフラ分析が行われており、石器包含層はAT降灰以降、約1.1万年前までの間におさまるとしているが、帰属年代は特定できていない。また、青森県五川目(6)遺跡でも放射性炭素年代測定が行われており、石器集中区1・2はそれぞれ年代値が得られている。前者から採取した炭化物の年代値は $13600 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $13670 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $14670 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $18030 \pm 40\text{yrBP}$ 、その周辺に位置する炭化物集中区1の年代値は $13680 \pm 30\text{yrBP}$ と得られている。一方、後者から採取した炭化物の年代値は $14710 \pm 40\text{yrBP}$ 、 $15,010 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $15740 \pm 40\text{yrBP}$ 、 $15930 \pm 40\text{yrBP}$ と得られている。このように見ていくと現時点で本遺跡と対比できる成果は、青森県五川目(6)遺跡の石器集中区1や炭化物集中区1である。これらの年代値は、本遺跡での上限年代の目安となるAs-YP降灰年代と大きく乖離せず妥当な年代観として捉えられる。このことから現時点において本群は、それらと併行する時期を想定できよう。

次に、これらの成果を基に当該石器群の時間幅について検討していく。上限年代は青森県五川目(6)遺跡石器集中区2の年代値が相当する。また仮に荒川台遺跡のように石刃石器群と共伴するのであればさらに古くなることも予想される。これについては佐藤(2011)が石刃石器群との共伴関係を支持したうえで当該石器群の形成過程についてまとめており、細石刃石器群の中でも古い時期に位置づけている。一方、下限年代は本遺跡の成果や青森県五川目(6)遺跡石器集中区1の年代値や本遺跡のAs-YP降灰以降に形成されている層位的事例が相当する。つまり、当該石器群はAs-YPを挟んで形成していたと捉えることができる。さらに、時代が下る可能性を示唆できる状況が認められている。それは今回の調査における神子柴形石器群と併行関係にあるような出土状況にある点や、鈴木(2008)が提示しているロシアにおける10000-12000年前の資料に同技法の細石刃核を確認できる点である。これらの点については資料数の少なさをゆえ言及しがたいが、今後の検討課題として行く必要がある。このように当該石器群はAs-YPを挟んだ時間幅が想定され、長い期間にわたって存続していたことが十分に考えられる。

このように当該石器群の位置づけについては、自然科学分析結果と出土状況から検討すると、従来の成果とは大きく異なるものである。つまり、これは稜柱系細石刃石器群の中で把握されている当該石器群が一概に古く捉えられないことを意味する。さらに、現時点で捉えられている北方系細石刃石器群より後続する時期に位置づけられたことを把握できた意義は大きい。ただし、今回の調査では後述しているように細石刃石器群Ⅱ群(北方系細石刃石器群)とは併行関係にあることを把握している。これらのことから本群は、上述したような時間幅の中で形成された石器群として十分考えられるものであり、細石刃石器群における位置づけを再考していく必要がある。今後は資料の増加を待って荒川台技法を伴う細石刃石器群について検討していきたい。

【Ⅱ群】 荒屋型彫刻刀形石器やホロカ型細石刃核などを組成する所謂「北方系細石刃石器群」の一群であり、組成する石器によりa・b群に区分している。

Ⅱa群：荒屋型彫刻刀形石器を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区11・25、及び単体資料(1010、1011)である。

立地：2面に形成されており、段丘東側の自然堤防より南側の緩斜面上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層中で検出している。

器種組成：荒屋型彫刻刀形石器、スクレイパーなどからなる。

彫刻刀形石器は荒屋型を4点確認している。いずれも加工が全周して施され、左肩に彫刻刀面を作出している。これらの平面形状には縦長と丸い形状が認められ、縦長のみ基部裏面に加工を有するものがある。素材は縦長剥片である。

スクレイパーは両側縁と末端に加工が施されている例がある。素材は石刃か縦長剥片である。
 石器材料組成：頁岩、珪質頁岩などからなり、組成比は頁岩55%、珪質頁岩32%、残りが他の石器材料である。彫刻刀形石器とスクレイパーの石器材料は珪質頁岩の割合が高い。

剥片剥離技術：スクレイパーなどは縦長剥片や石刃を素材としていることから、石刃技法の存在が窺える。しかし、石刃や石刃核は存在しないため、剥離技術については判然としない。また、接合個体が伴う母岩別資料は存在するものの目的剥片に伴う剥離技術の把握までには至っていない。

石器消費工程：単体で搬入した彫刻刀形石器やスクレイパーは、使用後に廃棄している。また、石核が搬入されており、剥片剥離後に搬出している。

Ⅱb群：ホロカ型細石刃核を組成する一群である。

石器集中区：単体資料(1051、1063)である。

立地：攪乱から出土しているため判然としないが、2面の東側で確認している。

検出層位：石器集中区を形成することなく、すべて攪乱から出土している。

器種組成：細石刃核(1063)、細石刃(1051)からなり、同一母岩別資料である。その他の組成については、攪乱からの出土であるため判然としない。

石器材料組成：珪質頁岩からなる。

剥片剥離技術：細石刃剥離をしている。

石器消費工程：単体で搬入された細石刃核は、細石刃剥離後に廃棄している。

編年的位置づけ：当該石器群の位置づけにあたっては、出土層位が把握されているⅡa群の成果を基に進めていく。テフラ分析からはAs-YP降灰以降であることを確認しているが、放射性炭素年代測定による年代値は得られていないため帰属年代については特定できていない。本県では、類例も少なく上記のような結果が得られていなかったことから貴重な成果である。従来の成果は、As-YP降灰以前に位置付けられる事例が群馬県を中心に確認されていることから、今回の成果はそれよりさらに下り、形成時期の下限として捉えられるものである。つまり、当該石器群の位置づけはAs-YPを挟んだ時間幅を想定できる。このようにAs-YPを挟んで形成されている点では細石刃石器群Ⅰ群と同様であり、それらと併行関係にあることが十分に予想される。

〔Ⅲ群〕Ⅰ・Ⅱ群のような特徴が認められないものの細石刃を組成する一群である。

石器集中区：石器集中区13。

立地：2面に形成しており、段丘東側の自然堤防より南側の緩斜面上に位置している。

検出層位：As-YP降灰以降のⅢb層上位で検出している。

器種組成：細石刃、二次加工を有する剥片、剥片などからなる。

細石刃は点数が少ない上に欠損しているため、全容は不明である。

石器材料組成：頁岩や珪質頁岩などからなる。

剥片剥離技術：点数が少ない上に剥片が多いことから把握できていない。

石器消費工程：単体で搬入された細石刃核は、細石刃剥離後に搬出している。また石核も同様である。

編年的位置づけ：検出層位からⅠ・Ⅱ群よりは新しい時期に位置づけられる。

不明石器群

当該石器群は基本的に出土石器に特徴が認められないものであり、石器集中区3・6・10・16・22が該当する。検出層位はいずれの石器集中区もⅢb層堆積以降に形成されたものと考えられる。

(2) 各石器群の変遷

本遺跡では上記のように複数の石器群を確認しており、それらは形成層位とテフラにおいて前後関係を把握できたことから変遷図(第412図)に示しておく。ここでは前後関係を把握できていない石器群に関しては点線で区切り、従来の研究成果を反映させた形で提示しておきたい。この中でⅢb層中においては多様な石器群を確認したものの、その多くは前後関係を把握できていないことから併行関係にあることが十分に予想される。

この変遷図からは、後期旧石器時代後半期から草創期にかけて多様な石器群の変遷が捉えられる。このような様相は、岩手県だけでなく東北地方においても類例が少ないことから、指標となる貴重な成果となろう。また、これにより東北地方以外の地域との対比が可能となり、今後時空間的に検討していくうえで有効になるものと思われる。

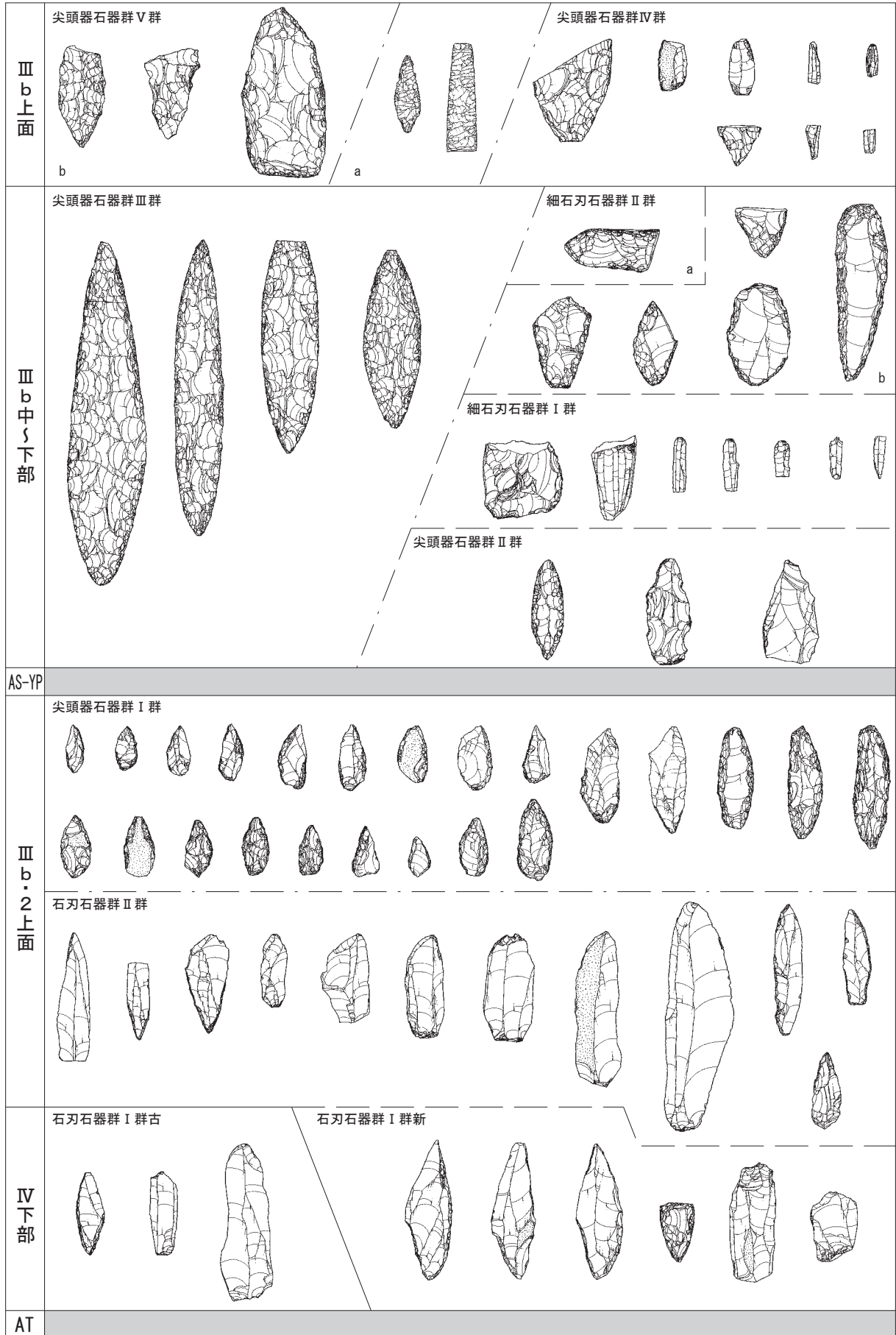
(3) 石器材料環境

ここでは各石器群に伴う石器材料について概観したうえで、石器材料環境についてまとめていく。各石器群の石器材料組成は剥片石器と礫石器では異なり、剥片石器は頁岩や珪質頁岩を主体に玉髄質頁岩、黒曜石、凝灰岩など、礫石器はデイサイト、安山岩、砂岩、ホルンフェルスなどからなる。

まず、遺跡周辺及び段丘構成礫の状況について記載しておく。遺跡周辺については脇を流れる胆沢川河川敷と前川の段丘構成礫を観察している。また、当時の供給されている礫を把握するために遺跡が形成されている段丘構成礫についても観察している。その結果、胆沢川河川敷では安山岩、花崗岩、砂岩、泥岩などを確認できたが、剥片石器の石器材料となりうる良質な石材は存在していない。また、前川の段丘構成礫では胆沢川と変わらないが、規模の小さい良質な頁岩がごく稀に含まれる。遺跡が形成される段丘構成礫は基本的に胆沢川と同じである。いずれの河川でも礫石器に用いられるような石器材料は認められたが、剥片石器に用いられている良質な石器材料は前川でのみ認められている。

これらのことを前提とすると、遺跡に原石で搬入された頁岩は胆沢川ではなく前川方面から供給された在地産と考えられる。それ以外の頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩、黒曜石、凝灰岩などの石器材料産地は、基本的に県外に求めていく必要がある。遺跡と東北の各石器材料の産地との関係については第413図に示しているように、後期旧石器時代は日本海側を中心に原産地が形成されていることが窺える。このような中で遺跡は山形南部の頁岩産出地と秋田県男鹿の黒曜石産出地のほぼ中間に位置している。

次に、県外に求められる石器材料の産地をまとめ、それらを用いる石器群と合わせてみていく。灰色を呈した頁岩や珪質頁岩は、山形南部を中心とした日本海側が産地であることが明らかとなっている(阿部2010、秦2010)。これは各石器群に共通して認められるものである。また、黒・暗褐色を呈した珪質頁岩は、上記と同様の産地が想定され、細石刃石器群Ⅱ群で主体を成している。県内にも頁岩の産地を確認できているものの、本遺跡のものとは大きく異なる。黒曜石の産地は、男鹿系、湯ノ倉、小赤沢?である。男鹿系は各石器群に共通しているが、湯ノ倉、小赤沢?は尖頭器石器群Ⅰ群にのみ認められる。玉髄質頁岩は外観と質感から各石器群によって異なることから、複数の産地の存在が予想される。凝灰岩は緻密で細粒のものが細石刃石器群Ⅰ群で確認されている。ただし、これらの石器材料の中で玉髄質頁岩と凝灰岩の産地は、依然として不明なままである。前者については阿部や秦、佐川などにより産地が報告されているが、その全容は判然としていない(阿部2010、秦2010、東北学院佐川ゼミナール2004)。ただし、尖頭器石器群Ⅰ群に用いられるものは、上述している阿部が報告し

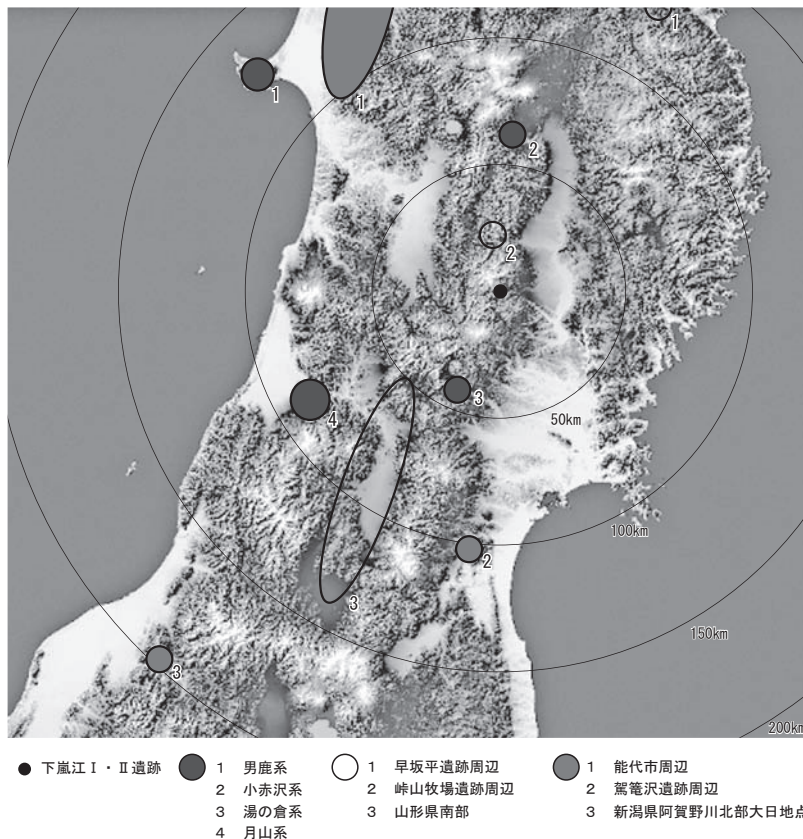


第412図 石器群変遷図

----- 併行関係
 - - - - - 前後関係

ている産地のものと酷似している。しかし、その他の石器群で用いられているものについては、秦や佐川らの報告との比較が今後必要となる。一方、後者は日本海側において広範囲に認められていることから特定は難しいものと思われる。

このように見ていくと、各石器群の石器材料産地は南端に山形南部ないし新潟県北部、北端に男鹿が位置していることが看取される。この点から移動領域を考えていくのであれば、両産地を軸とするような領域が想定され、その範囲内においてそれ以外の石器材料を獲得していたと思われる。当然、産地不明の玉髓質頁岩次第ではこの様相の変化が予想される。また、石刃石器群 I 群新段階や II 群に併行する峠山牧場 I 遺跡 A 地区第 5 文化層において深浦産の黒曜石が認められていることから、北限域は深浦となる可能性がある。いずれにせよ基本的に各石器群の移動経路は、秋田県北部から新潟県・山形県北部の範囲の日本海側を中心に移動し、その中で奥羽山脈を越え太平洋側へとさらに展開したものと捉えられる。さらに、時期が新しくなると黒曜石の産地に深浦や男鹿に湯ノ倉などが加わり、その領域や資源開発の変化が窺える。今後は、東北地方の当該期の石器群と対比させながら、各石器群の移動領域などを行動論的観点などから検討して行きたい。



第413図 石器材料産地分布図

第8表 石器群別石器材料産地表

	石刃石器群			尖頭器石器群					細石刃石器群		
	I 古	I 新	II	I	II	III	IV	V	I	II	III
頁岩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
山形遺跡周辺											
珪質頁岩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新潟県大日不明	○	○		○							○
男鹿		○	○	○							
湯ノ倉				○							
黒曜石				○							
小赤沢?				○							
不明								○			
凝灰岩		○	○		○	○		○	○		

(4) 遺跡の立地環境及び形成過程について

遺跡が立地する段丘は、胆沢川と前川に挟まれ、前方が開け見通しの利く地である。また、緩やかな斜面が続き、周囲に遮るものもなく日当たり良好な場所である。この段丘は地理的環境でも述べたように土層中に軽微な不整合が認められる箇所において段丘面を4区分している。それらは下位から1面がⅡ層、2面がⅢ層、3面がⅣ層、4面がⅤ層堆積以前と捉えられ、それぞれ基盤となる洪水堆積層が異なる。当然、これらは形成時期も違い、テフラ分析から2面はAs-YP降灰以前、3面はAT降灰以前、4面はTo-Of降灰以前と把握できている。各段丘面の発達過程を第414図に示しているように、段丘は北東方向に自然堤防を形成しながら発達していることが捉えられる。この段丘発達は産状計測から胆沢川の氾濫が要因であることが判明している。

以下には、段丘面の形成過程に自然科学分析結果と旧石器時代の石器集中区を合わせながら、古環境と遺跡形成を古い時期から辿っていきたい。

4面：丘陵から僅かに迫り出し、段丘の発達は殆ど認められない。本段丘の基盤を成しており、To-Of降灰以前に形成されていたものである。寒冷で積雪量の少ない比較的乾燥した環境である。花粉密度は低いものの、イネ科やシダ植物、キク亜科などの花粉が認められる。また植生はササ属ミヤコザサ節を主体としたイネ科である。この範囲は現状保存のため調査できなかったが、胆沢扇状地には後期旧石器時代前半期の遺跡が多いことから、3面と同様に段丘先端部に石器集中区が形成されていた可能性がある。

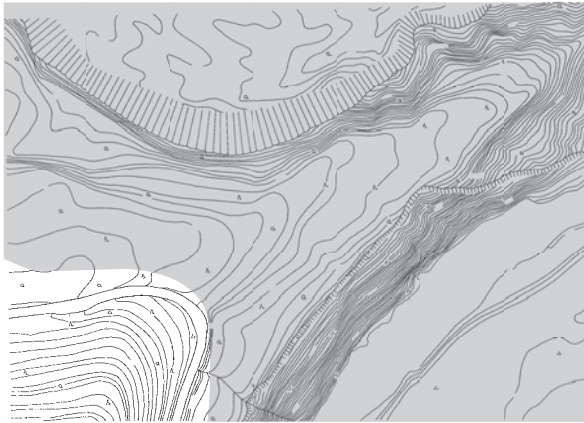
3面：AT降灰以前の洪水により北東方向に発達している。この洪水堆積後にⅣ層が堆積していく段階でATが降灰している。洪水堆積の層厚は確認できていないことから、その様相は不明である。寒冷で積雪の少ない比較的乾燥した環境である。花粉密度は低く、ハンノキ属、ウコギ科、イネ科、キク亜科などの花粉が認められる。植生はササ属ミヤコザサ節を主体としたイネ科であったが、堆積環境の変化などによるササ属の減少が捉えられている。本面には段丘先端部付近に石刃石器群Ⅰ群古段階が形成されている。

2面：As-YP降灰以前の度重なる洪水により、段丘は現況に近づくように大きく発達する。段丘中央部では洪水堆積に伴う礫層が厚く堆積し、現況に近い自然堤防を形成している。この頃は冷温帯落葉広葉樹林が分布し、近隣にクリの生育する乾燥地やトチノキなどが生息する湿地が近接している。植生はミヤコザサ節・チマキザサ節型が優勢で、シダ類やモクレン属型の樹木も認められる。本面には自然堤防上及びその後背湿地にあたる斜面上に石器集中区が2列形成されている。石刃石器群Ⅰ群新段階・Ⅱ群、尖頭器石器群Ⅰ群は洪水堆積後の土壌化(Ⅲb-2層)した段丘縁辺部を選地している。それ以降はAs-YPを介在させながら土壌化(Ⅲb層)の過程で細石刃石器群や尖頭器石器群が段丘縁辺部に集中区を形成していく。

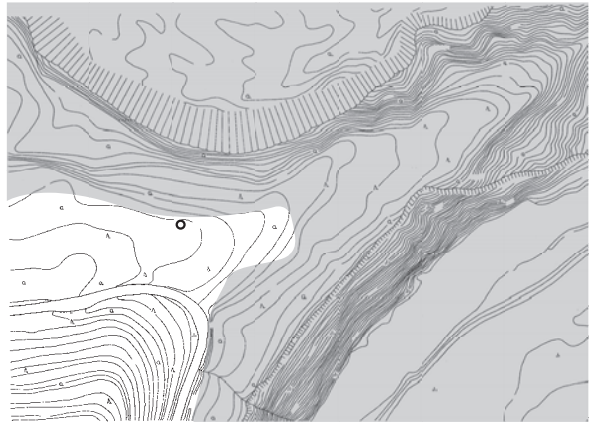
1面はⅢb層形成以降の洪水により、さらに段丘は発達していく。おそらく縄文時代に形成されたと考えられるが、詳細な時期については不明である。この頃は冷温帯落葉広葉樹林が分布し、乾燥したクリ林とトチノキ湿地林が近接している。植生はミヤコザサ節・チマキザサ節型の増加、キビ族型、ススキ族型なども出現している。これらが2面より増加していることから、積雪量(降水量)の増加の可能性が捉えられている。本面には少なからず遺物などを確認できたが、生活痕跡までは確認できていない。

上記のように段丘形成及びそれに伴う古環境・植生の変化を把握できたことは大きな成果である。さらに、この過程において石器群形成に関わる興味深い点が認められている。それは2面におけるⅢ

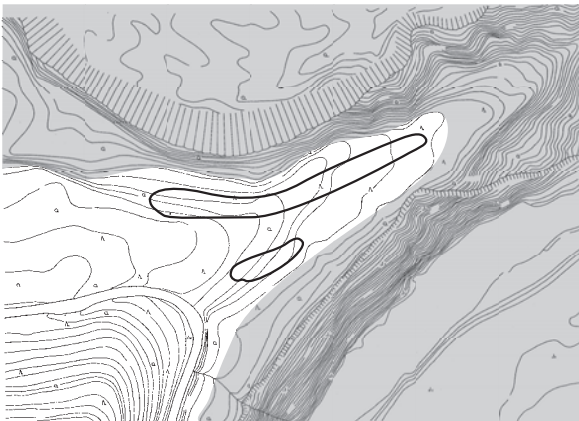
4面



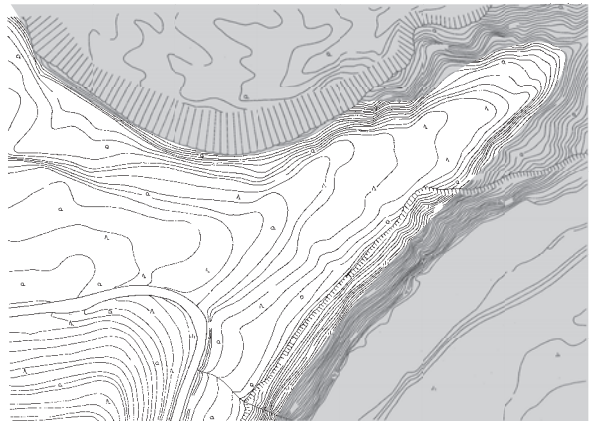
3面



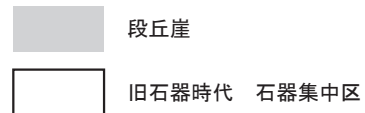
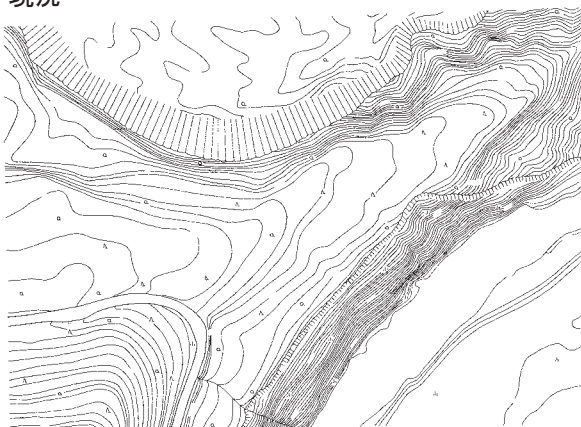
2面



1面



現況



第414図 段丘変遷図

b-2層からⅢb層までの堆積時間の問題であり、Ⅲb-2層に形成された石刃石器群Ⅰ群新段階(17,400yrbp)からⅢ層下部に降灰するAs-YP形成までの数千年間、殆ど堆積が認められない点である。このため本来前後関係にある石刃石器群Ⅰ群新段階・Ⅱ群と尖頭器石器群Ⅰ群が同一面に形成されたと考えられるのではないだろうか。上記の石器群だけでなくこれと類似した現象は、東北地方の遺跡

においても認められている。このようなことが起こる原因については判然としないが、自然・立地環境などが大きく関係していることが予想される。おそらく期間幅及び自然環境などの条件が揃った時にのみ局所的に起こるものと思われる。当然、異なる石器群が同一面に形成される現象をこのような理由だけで整理できるものではないが、これらを解釈するうえで自然環境を中心に上記の要因を十分考えていく必要がある。この要因については今後十分に検証を積み重ね、地理学、地質学的な見地からも解明していく必要がある。

以上のような環境下において旧石器時代の集団は、下嵐江の地に何を求めて訪れたのだろうか。先述したように石材を求めて来た可能性は極めて低いことから、今でも自然豊かな土地柄から中・小動物や河川資源など季節的狩猟を目的に訪れたと考えられようか。また、秋田や宮城から胆沢扇状地への移動経路にあたることから一時的な滞在のため利用したとも考えられる。各時期を通じて様々な石器群の集団が利用し続けた土地であることから、条件が揃っていたに違いない。今後はこのことについて生態論などの視野を踏まえたうえで検討していきたい。

(5) 県内における各石器群の位置づけ

ここでは整理担当者(村木2010、2011)がまとめた本県における年代及び層位的な成果が得られているAT降灰以降の石器群の変遷図に今回の調査成果を加え、位置づけておく。それらを第9表に示しているように、今回の成果は県内において後期旧石器時代後半期の指標となるであろう。今後はこれを基に周辺地域との関係を捉えながら、本県における当該期の様相を明らかにしていきたい。

第9表 岩手県における石器群編年表

	石刃石器群	細石刃石器群	尖頭器・石斧石器群
To-H			下嵐江Ⅴ 下嵐江Ⅳ 早坂平第2
As-YP		早坂平第Ⅱ 下嵐江Ⅰ・Ⅱ	下嵐江Ⅲ 小石川 泥這 下嵐江Ⅱ
17~18,000 yrBP	下嵐江Ⅰ新・Ⅱ 柏山館第Ⅱa(下)文		下嵐江Ⅰ
19~22,000 yrBP	下嵐江Ⅰ古 大渡第3文 早坂平第Ⅰ文		
22~26,000 yrBP	大渡第2文		
AT			

2 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代は、草創期の石器及び早期から後期までの土器が少量ながら出土している。しかし、土器の所属時期は多岐にわたるものの、竪穴住居を中心とした遺構は後期初頭から前葉に限定されている。以下には時期ごとで成果をまとめておく。ただし、草創期に該当とする有茎尖頭器などの石器群については、旧石器時代終末からの流れを把握するために、前項で扱っている。

早期は土器が僅かに出土しているが、住居等は検出されていない。ただし、周辺の遺跡においても当該期の資料が確認されることから、本段丘も周辺と同様に少なからず生産活動の範囲であったと考えられる。

後期は竪穴住居と掘立柱建物、土坑などの遺構を確認している。これらから土器や石器などは少量ながら出土している。これらが形成されている範囲は、遺跡の南西部、標高の高い段丘内陸部に限定されている。竪穴住居は平面形が方形、長軸が約3mであり、同一箇所における建て替えが認められ

る。床面には中央よりやや東壁寄りに石囲い炉を伴い、建て替え以前においても同様に伴うことを確認している。北壁の両端には、斜面下方に張り出しを有している。この張り出しに挟まれた箇所が地山であることから入り口施設と考えられる。この特徴的な平面形状からは、所謂「柄鏡式」住居の範疇で捉えられるものである(山本 2002)。この住居を確認できた以外に遺構が少ないため、当該期の集落の様相については判然としない。ただし、大平野Ⅱ遺跡において当該期の集落を確認できていることから、広範囲での集落を捉えていく必要がある。

3 近世の遺構・遺物

近世は掘立柱建物群に伴う土坑や溝などを検出した。これらは大きく6箇所(エリア1～6)にまとまりをみせ、下嵐江集落の様相を把握する上では貴重な成果が得られている。

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物は494個の柱穴を用い30棟を復元できており、それらは6箇所にまとまる。建物の規模は桁行が3～8間、梁間が1～5間に収まる。これらの中で桁行が4～7間、梁間が1～3間の規模が多く、庇が1面ないし2面に付く例が認められる。軸線方向は概ね東西方向で安定している。この軸線方向が一致している要因としては、細長い段丘に建てるという立地の制限と、奥羽山脈から吹き下ろす強風が物凄く、建物が耐久できないという構造上の問題が挙げられる。つまり、建物の構造は立地と自然環境が大きく制限していたと考えられる。このことから復元案は、下嵐江村における建物の在り方を的確に映し出しているものと思われる。しかし、このような構造を有する建物の把握に至ったが、その一部を復元したに過ぎないことは言うまでもない。

これらの建物は、エリア1・2・6に重複頻度が高く、継続して建て替えられていたことが窺える。また、構成されない柱穴も同様のエリアに多く認められる。特に、エリア2はどちらの数量も多いことから、この集落の中心であったことが想定される。

(2) 陶磁器

近世陶磁器は出土量は多くないものの、それらの所属時期が16世紀後半から19世紀以降までと多岐にわたる。これらは時期により産地に偏りが認められたことから、以下では時期毎にその種類をまとめておく。

古い時期から、16世紀中葉～後葉は瀬戸・美濃産大窯の小皿、16世紀末葉～17世紀初頭は肥前・唐津産灰釉皿と中国漳州窯の碗、17世紀前半～後半は肥前磁器皿、17世紀後半～18世紀前半は肥前産灰・銅緑釉皿、18世紀代は肥前産、瀬戸・美濃産、在地産の播鉢、18世紀後半～19世紀代は肥前産磁器、相馬産・在地産陶器となる。これらをまとめたのが第415図である。このように17世紀前後を初めに19世紀までの変遷を辿ることができる。17世紀前後には瀬戸美濃産・肥前産陶器、中国産磁器が認め

所属時期	陶 器								磁 器	
	瀬戸・美濃産		肥前産			相馬産	在地産		肥前産	中国産
	大釜小皿	播鉢	唐津皿	灰・銅緑釉皿	播鉢	碗・皿	碗皿	播り鉢	碗・皿	漳州窯碗
16	┆									┆
17			┆						⋮	┆
18		┆		┆	┆	⋮		┆	┆	
19						┆	┆		┆	

第415図 近世陶磁器変遷図

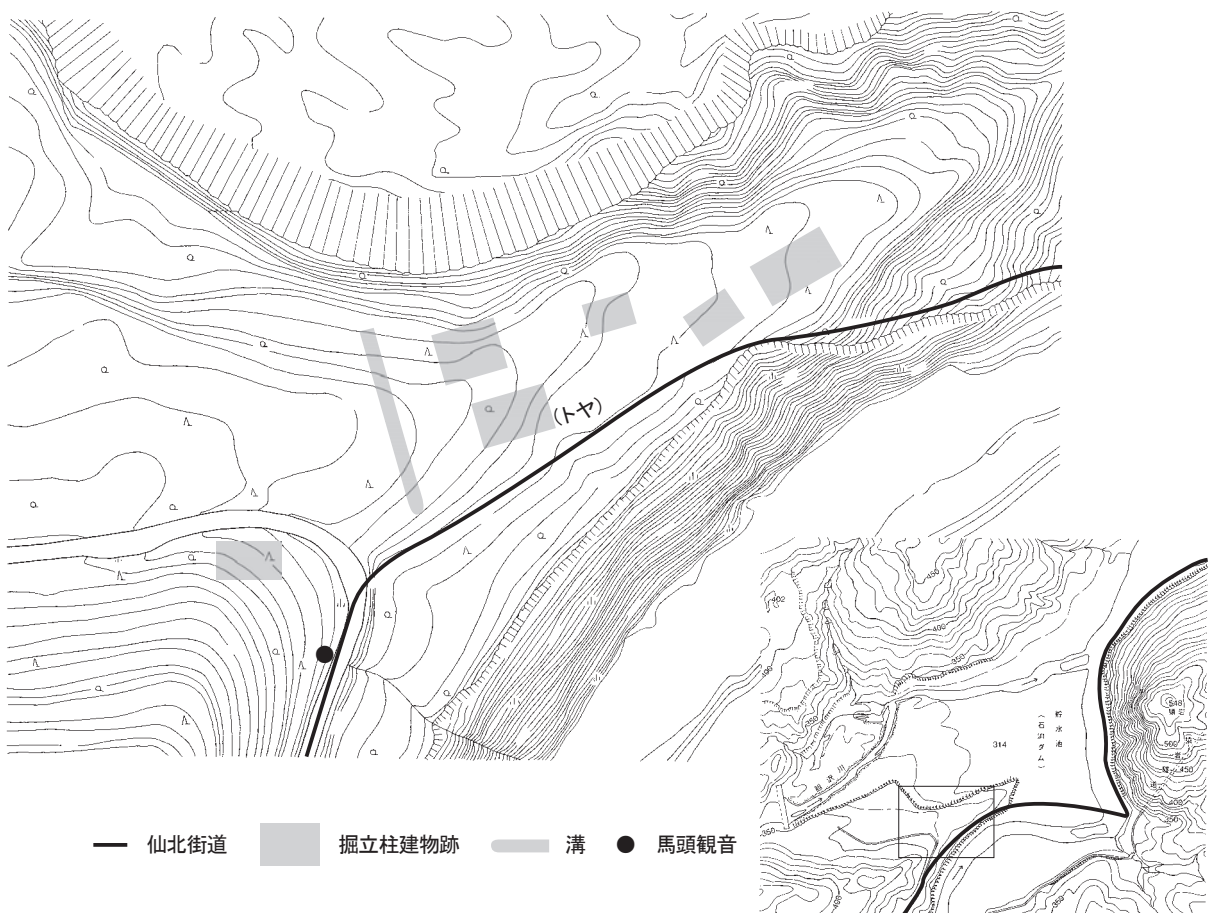
られるようになるが、それ以降は概ね肥前産が主体となる。その中で18世紀代には瀬戸美濃産や在地産の播鉢、19世紀には相馬産・在地産陶器が客体的に含まれるようになる。

(3) 下嵐江集落の様相

本遺跡を中心とする下嵐江集落は『風土記御用書出』にも記されているように、寛文3年(1663年)以前には御境番所が設置されていた藩境の集落である。この番所が市野々へ移転した以降も、集落が街道筋の宿駅として栄えていたことは、歴史的環境でも述べた通りである。本遺跡周辺には、聞き取り調査(胆沢町教育委員会1993、1997年)により、広範囲に集落を形成していたことが確認されている。その規模は、坪瀨Ⅱ遺跡へ抜ける追分地区まで及んでいたようであるが、今回の調査では明らかにできなかつたため判然としない。ここでは調査成果をもとに本遺跡に限定して下嵐江集落の様相を把握していきたい。

まず、集落の形成時期についてであるが、概ね陶磁器の主要器種の上限年代である16世紀末葉～17世紀初頭と考えられる。それ以降、胆沢ダム移転に伴う昭和中頃まで集落は存続していく。この開始時期に形成された建物は、出土遺物の年代からエリア1・2・5・6と考えられ、それ以降他のエリアに展開していったと思われる。

次に、集落の中心である高橋家(トヤ)の位置を検討してみたい。これについては、エリアの柱穴の数量とそれから捉えられる建物の建て替え頻度の多さ、出土遺物の種類やその数量から判断していく。これらの条件を満たし、他のエリアにおいても数量が突出しているのはエリア2である。このことから当該区域に高橋家(トヤ)が存在していたと考えられる。



第416図 近世下嵐江村変遷図

このように見えてくと、高橋家(トヤ)を中心とした建物は、江戸時代開始前後には第416図のように集落を形成されたと想定される。仙北街道はエリア1の手前で南下していくことから、SD1が途切れる南側が街道にあたり区画溝のような役割を果たしていた可能性がある。それ以降は他のエリアにも展開していくが、概ね開始時期に集落の在り方は定まっていたものと考えられる。また、寺屋敷と呼ばれる場所に位置する坪瀨Ⅱ遺跡の調査からは多くの墓壙が検出されており、これらは本集落に伴うものと考えられる。このことから集落は下嵐江遺跡から坪瀨Ⅱ遺跡一帯まで含めて形成されていたと捉えられる。

4 まとめ

今回の調査では、旧石器時代から近世までの多くの遺構や遺物を確認できた。それらが段丘形成など環境との関わりのなかで捉えられたことは大きな成果である。各時代で特筆すべき成果を挙げれば、後期旧石器時代後半期から草創期までの石器群の変遷、縄文時代後期初頭の竪穴住居、仙北街道筋の近世集落などがある。特に旧石器時代の成果は県内においても稀有であることから、今後は指標資料となり貴重な役割を担えよう。これらの多くの成果に対して検討事項が存在したものの、筆者の力不足ゆえに資料を理解するために多くの時間を費やした結果、十分な検討までには至らず多くの課題を残してしまった。しかし、このような中でも僅かながら問題提起はできたものと思われ、山積している問題については今後の課題として取り組んでいきたい。

遺跡が立地する段丘は、胆沢扇状地の付け根に位置し、胆沢扇状地から秋田県へ、また前川に沿って一関や宮城県へ、逆に秋田や宮城から胆沢扇状地へと行き来に利用される土地である。その姿が現在まで変わらずに残されていたことが調査により捉えることができた。現在から見れば辺境な地も豊富な資源に囲まれ、当時の人々が生活をする上では格好の環境であったに違いない。遺跡の一部はダムに沈むが、完成される橋の上からはその情景に思いをはせることが幾ばくかはできよう。本書がその一助となることを願うばかりである。

引用文献

- 阿部朝衛 1996 「新潟県北部における旧石器時代研究の現状と課題」『北越考古学』第7号北越考古学会
- 阿部朝衛 2002 『荒川台遺跡-1989年度調査-』帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛・井上 巖 2003 「荒川台人の行動領域-黒曜石化学分析結果をもとに-」『帝京史学』第18号帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 2010 「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』第25号帝京大学文学部史学科
- 胆沢町教育委員会 1993 『胆沢ダム建設に伴う緊急民俗調査報告書』胆沢町文化財調査報告書14集
- 胆沢町教育委員会 1997 『『安永風土記』百姓調べ』胆沢町文化財調査報告書19集
- 胆沢町教育委員会 2005 『胆沢町名・屋号調査報告書』胆沢町文化財調査報告書32集
- 岩手県教育委員会 1980 『岩手県「歴史の道」調査報告 仙北街道』岩手県文化財調査報告書第43集
- 大橋康二 2001 「肥前陶磁の流通(東日本)」『国内出土の肥前陶器』九州近世陶磁学会
- 大場正善 2003 「東北南部地域の細石刃文化」『日本の細石刃文化Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 加藤 学 2009 「中部地方北半における細石刃石器群」『旧石器考古学』72旧石器文化談話会
- 加藤 稔・会田 容弘 1995 『山形県小国町平林遺跡の研究』『東北芸術工科大学 紀要』第2号
- 鹿又喜隆 2008 「総論 神子柴・長者久保石器群とその後の時代」第22回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集
- 川口 潤 2003 「東北北部地域の細石刃文化」『日本の細石刃文化Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 菊池強一 2006 「岩手県の更新世火山灰層とおもな旧石器時代遺跡」『年代測定と日本文化研究』予稿集
- 北村忠昭ほか 2004 『早坂平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第437集

- 木戸口俊子^{ほか} 2010 『坪淵Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第554集
- 工藤雄一郎 2005 「本州島東半部における更新世終末期の考古学的編年と環境史との時間的対応関係」『第四紀研究』44日本第四紀学会
- 工藤雄一郎 2010 「三 旧石器時代における年代・古環境論」『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(上)』青木書店
- 栗原伸好^{ほか} 2002 『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告128
(財)千葉県文化財センター 2002 『研究紀要』22
- 佐久間公平 2009 「北海道・東北地方の細石刃文化研究」『旧石器考古学』72旧石器文化談話会
- 佐藤宏之 2011 「荒川台型細石刃石器群の形成と展開-稜柱系細石刃石器群の生成プロセスを展望として-」『考古学研究』第58巻3号
- 佐藤雅一^{ほか} 2002 『正面中島遺跡』津南町教育委員会第37輯
- 佐藤雅一 2004 「杉久保系石器群研究の視点」『新潟考古』第15号新潟考古学会
- 沢田 敦^{ほか} 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集
- 白石浩之 2001 『石槍の研究-旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて-』ミュゼ
- 白石浩之^{ほか} 1999 『吉岡遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告48
- 菅沼 亘 1995 「「神山型彫刻刀」の再検討」『考古学と遺跡の保護』甘粕健退官記念論集
- 杉山真二 2010 「四 更新世の植生と環境」『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(上)』青木書店
- 鈴木建治 2008 「炉周辺の人間活動」『古代』第121号
- 須藤隆司 2008 「細石刃技術」『旧石器研究』第5号日本旧石器学会
- 諏訪問順 2003 「南関東地方における旧石器編年」『野尻湖遺跡群の旧石器時代編年』第15回長野県旧石器文化研究交流会
- 関口博之 2003 「群馬県太田市八ヶ入遺跡出土の削片系細石刃石器群」『旧石器研究』第6号日本旧石器学会
- 早田 勉 2010 「一 更新世堆積物とテフラ」『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(上)』青木書店
- 谷和 隆^{ほか} 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『野尻湖遺跡群の旧石器時代編年』第15回長野県旧石器文化研究交流会
- 谷和 隆 2005 「長野県域のナイフ形石器文化終末期の石器群」『石器文化研究』11石器文化研究会
- 谷和 隆 2005 「長野県域のナイフ形石器文化終末期の石器群(その2)」『石器文化研究』12石器文化研究会
- 田村 隆 2010 「五 石器石材の需給と集団関係」『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(下)』青木書店
- 立木宏明^{ほか} 1996 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』朝日村文化財報告書第11集
- 東北学院佐川ゼミナール 2004 「駕籠沢遺跡2004年度発掘調査の成果」第18回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集
- 東北学院佐川ゼミナール^{ほか} 2006 『山形県東置賜郡高島町 日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究1』
- 東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会 2003 『荒屋遺跡 第2・3次発掘調査報告書』
- 東北大学大学院文学研究科考古学研究室 2004 『最上川流域の後期旧石器文化の研究Ⅰ 上ミ野A遺跡第1・2次発掘調査報告書』
- 長塚俊司 1997 「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物3』発掘者談話会
- 長沼正樹 2008 「両面石器リダクションの事例(1)」『論集忍路子』Ⅱ忍路子研究会
- 萩原博文 2001 「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号日本考古学協会
- 秦 昭繁 2010 「秋田県の珪質頁岩石材環境」第24回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集
- 濱田 宏^{ほか} 2011 『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第576集
- 藤野次文 2004 『日本列島の槍先形尖頭器』同成社
- 峰 治^{ほか} 1999 『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告68
- 宮 城 県 1970 『宮城県史32(資料編9) 宮城県史刊行会』
- 村木 敬 2010 「岩手県における旧石器時代終末期から縄文時代草創期の石器群について」『紀要XⅩⅨ』
- 村木 敬 2011 「岩手県における後期旧石器時代後半期の石器群について」『紀要XⅩⅩ』
- 森先一貴 2004 「杉久保型尖頭型石器の成立とその背景」『考古学』Ⅱ
- 山本輝久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房
- 山本 克 2003 「中魚沼郡津南町旧石器時代遺跡の編年と対比」『野尻湖遺跡群の旧石器時代編年』第15回長野県旧石器文化研究交流会
- 吉川耕太郎 2009 「東日本の小規模黒曜石原産地の利用と拡散」『黒曜石が開く人類社会の交流』公開シンポジウム予稿集

後 記

胆沢ダム建設に伴う発掘は、岩手県に2000年に来て以来今までにない苦労を強いられた。とにかく現場が始まってから発刊まで6年と長い年月を要した。その間に岩手宮城内陸地震、東日本東大震災が起こり、それ以降様々な経験をした。岩手宮城内陸地震では日々通勤していた市道が斜断され、遺跡が立地する段丘崖の崩落や地割れが起きた。また、調査再会後には1時間以上かけて工事用道路を走り、胆沢川を車で渡り、50 t ダンプと併走し現場へ向かった。このような環境下で最後まで協力いただいた野外作業員さんには感謝。

整理期間中には東北関東大震災を体験した。いつ来るか分からない余震に怯えながら、3日後には通常通り作業をしていた。無事に平成23年度4月1日より整理作業が着手でき、室内整理を支え続けてくれた整理員には本当に感謝。

最後になりましたが、現場並びに石器についてご指導頂いた菊池強一先生、阿部朝衛先生に感謝申し上げます。刊行までに多くの方々に支えられ、この報告書の発刊に至っていることを付記し、擲筆したい。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第608集

下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊)

印刷 平成25年2月26日

発行 平成25年2月28日

発行 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
〒023-0403 岩手県奥州市胆沢区若柳字下松原77
電話 (0197) 46-4717

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 (株)杜陵印刷
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ二丁目22番地50号
電話 (019) 641-8000